UNIVERSITY OF ILLINOIS-URBANA
3 0112 083687068



LIBRARY OF THE
UNIVERSITY OF ILLINOIS
AT URBANA-CHAMPAIGN

LEE WONSIK
COLLECTION

ASIAN LIBRARY



國譯漢文大成

文學部
第二卷

文選

上卷

Asian
PL
2658
.J1
K64
1920
v.2

例言

一本書は文選を國譯し、脚註を施し、特に大意を加へたる者にして、分ちて上中下三卷となし、各卷の末に原文を附載して參考に資す。

一文選の註には李善註、五臣註、六臣註等あり。大意竝に脚註は、此等諸註の中、最も穩妥なる者に從ひて記述せり。

一國譯文は務めて漢文の風趣を損せざらんことを期し、今人に耳遠き往時の讀方卽ち所謂文選讀を改めたり。

一李善本、五臣本、六臣本を比較するに、文字語句の異同少からず、本書は主として六臣本に據り、務めて他本との異同を註記せり。

一國譯文中、「其」「此」の字に「の」の送假名を附けたる者と然らざる者とあり。「其」「此」の字が一句中の主格たる場合には送假名を附け、所有格たる場合には之を附けざるを例とす。

一上卷に載する所は悉く是れ賦なるが、賦は韻文の一種にして、古音と今音と相異なるが爲め、又、韻を協ふるが爲めに、卷中用ふる所の音の、今日慣用の音と相異なるもの少からず、例へば開卷第

一の西都の賦中の獲の音クワ、胙の音サク、旗の音キウ、老の音ポの如き是れなり。脚註欄内に餘白あるときは之を註記したれども、餘白無くして之を註記するを得ざりしもの亦無きにあらず。中巻に載する所の賦の殘部、詩及び騷亦然り。

目 次

文選解題

緒言

『文選爛、秀才半。』
『文は文集、文選、はかせの申文。』

前者は宋代の諺にして、文選の一部に精熟すれば、秀才の試驗に及第すべき學力の半をなすとの意なり。後者は淸少納言が枕草紙に述べし言にして、當時に於て詩文と云へば、白氏文集と文選と博士の上申の文章とに限られたるとの意なり。此の二語は宋代に於ける將た我が王朝時代に於ける文選の流行の盛を語れるものなるが、文選の流行は彼に在りては宋代に限らず、我に於ては王朝時代に止まらず、支那の詩文集の中に古今東西に行はれて最も長き生命を有せるものは、文選に及ぶものあらざるべし。是豈に文選の作品と選著とが優越なるに由るにあらずや。聊選者の小傳と內容の一斑と流傳の梗概とを述べん。

第一章　選者の小傳

名字生卒　選者の昭明太子は梁の武帝の長子にして、姓は蕭氏、名は統、幼名を維摩といひ、字を德施といふ。昭明は其の諡なり。齊の和帝の中興元年即ち我武烈帝の三年（一一六一）に生れ、翌年武帝の齊に代りて國を建て帝位に卽くに及び、立てられて太子となる。武帝の中大通三年即ち我繼體帝の二十五年（一一九一）に薨ぜり、時に年僅に三十一なりき。

帝室の文學　六朝時代は、群雄の分爭、人種の衝突等にて戰亂斷ゆることなく、社會の秩序亂れ、名教も地を拂ひ、全く暗黑時代とも謂ふべき時なるが、文化の上より觀察すれば、文學宗教工藝は駸駸乎として進闡向上の勢を示し、殊に帝室貴族の學を嗜み文を好むものの多きは驚くべきものあり。之が代表をなせるものは、實に昭明太子の一門なり。父の武帝は篤學にして才藻あり、萬機の多務なるも手卷を釋かず、天性睿敏にして筆を下せば章を成す。故に文集は一百卷あり、其の他の著書の夥しきことは、古來の帝王中匹敵するものなしといふ。太子の同母弟なる簡文帝も九流百氏に通じ、詩賦は筆を操りて立ちどころに成り、宮體と稱せる一種の詩體をも開きぬ。異母弟の元帝も學を好み博く群書を極め、簡文帝と共に著書甚多し。其の他武帝の子弟の諸王に博學多才のもの尠からず。斯く文學を一門に集めたるは一奇蹟ともいふべし。

選者の才學　昭明太子の篤學は、遺傳と家庭訓とに因れることは、論を待たず。三歲にして孝經論

語を受け、五歳にして遍く五經を讀み、長ずるに及び書を讀みて數行竝び下り、目を過ぐるものは記憶せざるなし。遊宴祖餞に詩を賦する毎に輙ち十數韻を賦し、或は險韻を作るも皆思を屬して便ち成り更易する所なし。性寛和にして衆を容れ、喜怒色に形はさず。才學の士を延き、賞愛して倦むなく、恆に自ら編籍を講論し、或は學士と古今を商榷し、閒あれば文章著述をなせり。東宮に書を藏すること三萬に及び、名才竝び集り、文學の盛なるは、晉宋以來あらざりしといふ。性山水を愛し、庭中に山を築き池を鑿ち亭館を立て名士と其の中に遊ぶ。嘗て舟を後池に泛べしとき、或人勸むるに女樂を奏すべきことを以てせしが、太子は答へずして左思の招隱の詩の『何必絲與竹、山水有清音。』の句を誦せしとぞ。其の如何に自然美に對して趣味の深かりしかを思ふべし。

著述　太子の著す所の書としては、文集二十卷、文選三十卷、古今詩苑英華二十卷、正序十卷あり。正序は古今の典誥文言を選びしもの、古今詩苑英華は五言の詩の善きものを選びしものなり。今は文選の一部の存するのみ。其の餘の書は皆亡びて傳はらざりき。

第二章　文選の編次

選者の文章觀　古來支那學者の文章の目的を論ずるものは、二派に分つことを得べし。一は道義を

明にし、世用に供するに在りとなすもの、一は辭を修め句を飾りて文章其の物を善くするに在りとなすものなり。前者の主張する所は實用的の文章にして、後者の本領とする所は美的の文章なり。故に前者は達意の文ともいふべく、單行の語を以て縱橫自在に揮灑するに在り。後者は修辭の文ともいふべく、對偶を善くし、字句を整へ、人の心目を怡ばしむるに在り。太子の文章は全く後者に在り。故に文選の自序に文章觀と編次の方針とを宣言して曰く、『姬公の籍、孔父の書は、日月と倶に懸かり、鬼神と奧を爭ふ。孝敬の準式、人倫の師友なり。豈重ぬるに芟夷を以てして之に剪截を加ふべけんや。老莊の作、管孟の流は、蓋し意を立つるを宗となし、文を能くするを以て本となさず。今の選する所は又亦諸を略せり。賢人の美辭、忠臣の抗直、謀夫の話、辯士の端の若きは、冰釋泉涌、金相玉振、所謂狙丘に坐し、稷下に議するなり。仲連の秦軍を却け、食其の齊の國を下し、留侯の八難を發し、曲逆の六奇を吐けるは、蓋し乃ち事は一時に美くしく、語は千載に流れ、墳籍に概見して、子史に旁出す。斯の如きの流は又亦繁く博く、之を簡牘に傳ふと雖も、事は篇章に異る。今の集むる所は、亦取らざる所なり。記事の史繫年の書に至りては、是非を褒貶し、異同を紀別する所以なり。之を篇翰に方ぶるに亦已に同じからず。其の讚論の辭采を綜緝し、序述の文華を錯比する若きは、事は沈思より出でて、義は翰藻に歸す。故に夫の篇什と雜へて之を集む』と。觀るべし太子が文章を經

子史の外に獨立せしめ、専ら美的修辭の文を以て文章の本分とし、其の主義に因りて文選の文を選びたりしことを。

沈思翰藻　昭明太子の所謂沈思とは深沈の思をいひ、翰藻とは文辭の華麗なるをいふ。即ち意匠を凝らして文辭を飾るを沈思翰藻と稱せしなり。此の四字は太子が文章觀の標語にして、六朝學者の文章に對する信條なり。最も簡明に一部の文選を説き盡くしたるは、此の四字に在るべし。清の阮元も『昭明の選ぶ所は之を名けて文といふ。蓋し必ず文にして後に選ばる。文にあらざれば選ばれざるなり。經なり、子なり、史なりは皆専ら名けて文となすべからざるなり。専ら名けて文となすは、必ず沈思翰藻にして後に可なり』と云へるは選者の精神を得たるものなり。

第三章　内容の一斑

作家　文選は上は周より下は梁に至る作家の詩賦文章を集めたるものなり。如何なる作家が其の選に當れるか、試に時代分けに之を掲げん。

〔周〕卜子夏　屈原　宋玉　荊軻　四人

〔秦〕李斯　一人

〔漢〕高祖　武帝　淮南小山　賈誼　鄒陽　司馬相如　枚乘　東方朔　王褒　李陵　蘇武　司馬遷
孔安國　揚雄　楊惲　劉歆　班倢伃　十七人
〔後漢〕班彪　班固　張衡　韋孟　孔融　禰衡　傅毅　楊脩　馬融　崔瑗　朱浮　王延壽　蔡邕　史
岑　潘勗　曹昭　十六人
無名氏
〔蜀漢〕諸葛亮　一人
〔魏〕武帝　文帝　曹植　王粲　陳琳　阮瑀　劉楨　應瑒　應璩　吳質　曹冏　何晏　繁欽　鍾會
繆襲　李康　十六人
〔吳〕韋昭　一人
〔晉〕羊祜　杜預　張華　傅咸　嵇康　阮籍　向秀　劉伶　皇甫謐　束皙　陸機　陸雲　庾亮　李密
成公綏　潘岳　潘尼　張載　張協　孫楚　何劭　孫綽　郭璞　劉琨　盧諶　干寶　左思　張翰
曹攄　趙至　袁宏　石崇　桓溫　傅玄　歐陽建　木華　夏侯湛　應貞　張悛　棗據　郭泰機　司
馬彪　王瓚　陶潛　王康琚　殷仲文　四十六人
〔宋〕謝靈運　謝惠連　謝混　謝莊　謝瞻　鮑照　范曄　顏延之　袁淑　王徽　王僧達　傅亮　劉

鑠　十三人

〔齊〕謝朓　王儉　王融　孔稚珪　韓厥　王巾　六人

〔梁〕任昉　江淹　邱遲　范雲　徐悱　劉峻　沈約　虞羲　陸倕　九人

前後通じて一百三十八人なり。外に古詩古詞古樂府の無名氏のものあり。此の一百三十八人中尤も多きを占めたるものは晉にして四十六人の多數に上れり。其の次は頗る降り、前漢の十七人とす。魏は享國の年代短きにも拘はらず後漢と其の數を同じくして十六人あり。宋の十三人も尠しとすべからず。女流文學者の其の選に入りしものは、班婕妤と曹昭との二人なりき。

●文體　文選は文體別に編纂せられたるものなるが、其の分類に就きては、議すべきものなきにあらざるも、姑く其の諸體の名目を擧げ、並に其の體に屬せる作品の數を示さん。

(一) 賦　五六

京都	八	郊祀	一	耕籍	一	畋獵	五	紀行	四
遊覽	三	宮殿	二	江海	二	物色	四	鳥獸	五
志	四	哀傷	七	論文	一	音樂	六	情	四

(二) 詩　四四三

補亡 六
述德 二
勸勵 二
獻詩 三
公讌 一四
祖餞 八
詠史 二一
百一 一
遊仙 八
招隱 三
反招隱 一
遊覽 二三
詠懷 一九
臨終 一三
贈答 七二
行旅 三四
軍戎 五
郊廟 二
樂府 四一
挽歌 五
雜歌 四
雜詩 九三
雜擬 六三

(三)騷 一七
(四)七 二四
(五)詔 二
(六)冊 一
(七)令 一
(八)教 二
(九)策 一三
(一〇)表 一九
(一一)上書 七
(一二)啓 三
(一三)彈事 三
(一四)牋 九
(一五)奏記 一
(一六)書 二一
(一七)移 二
(一八)檄 四
(一九)難 一
(二〇)對問 一
(二一)設論 三
(二二)辭 二
(二三)序 九
(二四)頌 五
(二五)贊 二
(二六)符命 三
(二七)史論 九
(二八)史述贊 四
(二九)論 一四
(三〇)連珠 五〇
(三一)箴 一
(三二)銘 五
(三三)誄 八
(三四)哀 三
(三五)碑文 五
(三六)墓誌 一
(三七)行狀 一
(三八)弔文 二

（三九）祭文　三

辭賦　文選に分類せられたる文體は三十九種にして、其の中詩は四百四十三首を取り、賦騷より祭文に至る作品は三百十七篇を收め、而して賦の數は尤も多し。蓋し前漢以來文人學士の多大なる趣味を以て才を逞くし奇を競はんとするものは辭賦に在り。故に辭賦の隆盛なることは、支那の古今に於て、兩漢魏晉を第一となせり。昭明太子の重んずる所も亦此に在り。是れ賦を開卷の劈頭に置き收錄の數も最も多きを占めたる所以なり。

詩形　先秦以前の詩形は四言を本體とせり。前漢以來語音の變化と楚國文學の影響とに因りて新體詩形起れり、之を五言となす。五言は漢魏六朝を通じて盛に行はれたるものなり。試に文選の詩形を統計すれば左表の如し。

五言	三百九十六首
四言	三十八首
七言	八首
雜言	一首
計	四百四十三首

詩の全部は五言にして、四言は其の數甚少く、纔に餘喘を保つの概あり。七言に至りては僅僅八首に過ぎず。我懷風藻が全詩百十六首中五言は百九首にして、七言は僅に七首なる如きも、文選の風に承くる所ありしに由るべし。

第四章　選學の來歷

文選學の始　文選の世に著れしは、隋に在り、其の書を修めしは蕭該に創まり、其の學を弘めしは曹憲に起れり。蕭該は昭明太子の叔父に當る鄱陽王恢の孫なり。篤學にして經史を究め、隋の國子博士たり。該の文選を修めし動機は、文選の名著なるに出づるも、一は同族の編なるを以て早く其の書に接したりしにも因れるなるべし。著す所の文選音義十卷は、當時の尙ぶ所となれり。曹憲は揚州の人なり。隋に仕へて秘書學士となり、諸生數百人を聚め、授くるに文選を以てし、著す所に文選音義あり、學者の重んずる所となる。是より文選の學大に興る。

唐の選學　曹憲の業を授けてより、唐に入りて南方江淮の間文選大に行はれ、李善及び魏模、公孫羅、許淹等は皆其の門に出で諸生を敎授し、各音義を註せり。李善は高宗の顯慶三年(一三一八)に稿を卒へて上りしに賜賚頗る渥かりき。善の子邕は汴鄭の閒に居り、父の業を繼ぎて諸生に講授す。

四方其の學を傳へ、文選學の名稱は是より起れり。魏模の子景倩も亦其の學を世業とせり。

李善註　古來文選の註として尤も精核を以て稱せられしものは李善註なり。李善は學問該博にして古今に貫通す。唐の李匡乂の資暇錄に據れば、李善の文選を註する、初註あり、覆註あり、三註四註のものありしと云へば、李善の如何に精力を注ぎしかを見るべし。唐書の李邕の本傳に李邕が善の註に滿たざる所あるを以て補益せし所ありしとの事を敍せしが、其の事實の謬れることは、四庫全書總目にも既に辯ずる所なり。李匡乂は李善の註釋の態度を記して『李氏は人の功を竊むことを欲せず、舊註あるものは必ず每篇を逐うて之を存し、仍ほ元註人の姓氏を題す。苟も舊註未だ備はらずして或は新意を興すときは、必ず舊註中に於て臣善と稱して以て分別す』と云へり。其の公正深切なること此の如し。故に蘇東坡も『李善の文選を註する本末詳備、極めて喜ぶべし』と稱揚せり。李善註に尊ぶべき所以は、獨り文選の音義を明にするの功あるのみにあらず、引用せられたる古書の傳はらざるもの多く、僅に李善註に由りて知ることを得るを以てなり。此の點に於ては宋の裴松之の三國志註、後魏の酈道元の水經註、梁の劉孝標の世說新語註と共に考證家の珍重する所なり。

五臣註　李善の後に衢州常山縣尉の呂延濟、都水使者劉承祖の子良、處士の張銑、呂向、李周翰の五人は各文選を註せり。工部侍郎の呂延祚は五人の註を集めて一書となし、開元六年（一三七八）

に表進したり。之を五臣註といふ。呂延祚の上表に李善の短を詆りて五臣の長を述ぶ。唐の李匡乂、丘光庭、宋の姚寛は五臣の疎謬を毀り、東坡の如きは『五臣の文選を註するは蓋し荒陋の愚儒なり』と謂ふに至る。呂延祚の李善を貶し、東坡等の五臣を排撃するは、並に平正を失する憾なき能はざるなり。

李善註と五臣註とは固より別本なりしが、北宋の頃より兩註合刊し名けて六臣註文選といふ。

六經に比す　文選は詞學の一大權威なるを以て、學士大夫の文辭を善くせんとするものは、取りて資材とせざるべからず。夫の文豪韓愈が文辭の絢爛なるものあるは、文選に得るもの多く、詩聖杜甫の如きも文選を其の子に課し『熟㆓精文選理㆒』と詠み、我梁川星巖をして『一部杜詩君試閲、盡從㆓文選理中㆒來』と賦せしむ。殊に唐の士を取るは專ら詞賦に在りしを以て一層文選學の熾盛を致し、文選尊重の極、六經に比するに至る。

宋元明淸　宋の國初も唐と同じく文選を尙び、太宗は呂文仲をして文選を讀ましめ、士大夫は意を此の書に專にして科擧の用に應ぜんとす。是れ『文選爛、秀才半』の諺ある所以なり。然るに慶曆以後は歐陽修、蘇洵父子の出でゝ古文を唱へ、且つ王安石の宰となるに及び新義を以て士を試みしに因り、文選の學は漸く衰へたり。

元明の際にも文選に關せる書世に出て、殊に明の士人は翰藻を競ふ風ありしを以て、文選愛讀の勢を促進せしめたるものあり。

清に至りては文選の研究は更に盛なるものありて、巨多の大家と有益の著書とを續出せり。張之洞は清朝に於ける文選學家として、錢陸燦、潘耒、何焯、陳景雲、余蕭客、汪師韓、嚴長明、孫志祖、葉樹藩、彭兆蓀、張雲璈、張惠言、陳壽祺、朱珔、薛傳均の十五人を擧げて曰く、『國朝の漢學・小學・駢文家は皆選學に深邃なり。此に其の論著校勘あるものを擧ぐ』と。以て清の文選學の隆盛を觀るべし。

第五章　文選の流傳

推古御宇　文選の我邦に傳來せしこと極めて古く、既に推古帝の御宇に在り。即ち聖德太子の憲法十七條に『財ある者の訟は石を水に投ずる如く、乏しき者の訴は水を石に投ずるに似たり』とあるは、李蕭遠の運命論の『其の言や水を以て石に投ずる如し、之を受くること莫ければなり。……其の言や石を以て水に投ずる如し、之に逆ふこと莫ければなり』とあるに取らせたまひたるものなれば、明に文選の來りしことを證するものなり。

近江奈良朝　近江朝を歴て奈良朝に至りては、文選漸く廣く行はれ、近江令に本づきて刊修せられたる養老二年の令には、『凡そ進士は時務策二條を試みよ、帖して讀む所は文選の上秩に七帖、爾雅に三帖』とあり。即ち進士を試みられし時には文選を試みられしなり。天平七年（一三九五）に遣唐使に從ひて來れる袁晉卿は、爾雅文選の音に通ぜるに因りて、大學の音博士を授けられたる事あり。正倉院文書の中には、文選の音に通じたるものの事も見え、文選を寫したる事の文書もあり。實際に於ても當時の學者が文選を應用してゐたりし事は、萬葉集に見えたる山上憶良大伴家持等の歌の序文に徵して明なり。

平安朝　平安朝に入りては文選愈盛に行はれ、延曆十七年（一四五八）に太政官は大學生の十六歲以下のものに史學者に就き先づ爾雅文選の音を習はしむることとせられ、列聖の儒臣を召して進講せしめられし事は史傳に絕えず。文選竟宴の詩は菅家文草扶桑集に見え、朝紳の文選を諳誦したるものもあり。本朝文粹續文粹に收められたる詩賦文章は文選愛讀の賜に由らざるはあらず。從ひて文選の音義の書の種種傳はりし事は、藤原佐世の現在書目を見て知るべし。

鎌倉室町時代　鎌倉室町時代には文選の流行は大に衰へたり。然れども聖主高僧の間に閱讀せられ、花園帝は文選を讀みて班彪の王命論の謬を指摘したまふものあり。後柏原帝は朝紳をして文選を講釋

せしめたまひし事あり。虎關師錬は菅原在輔に就きて文選の說を聞き、玄慧は文選進覽の事を遊學往來に載せ、義堂周信は六臣註文選を細川賴之に贈りしことは日工集に述べたり。殊に北朝の應安四年（二〇三一）に京都の嵯峨に於て、宋の淳熙の時刊行したる六臣註本を本として李善註本六十卷を上梓したり、其の雕刻に四年を費したりといふ。夫の有名なる正平版の論語と共に我邦に於ける版本として尙ぶべきものなり。

江戶時代　德川幕府の初は室町の餘風を受け、三體詩・古文眞寶を讀み文選を習ふもの少し。獨り林羅山鵞峰の父子は文選を修めしが、文學の復興と共に文選の講讀も漸く盛んになり、慶長十二年（二二六七）に上杉景勝の臣直江兼續が銅版活字を以て六臣註文選を印行したり。世に之を直江版といふ。寬永中には直江版に依りて活字本を重刊したるものあり、其の後慶安五年（二三一二）にも、寬文二年（二三二二）にも六臣註本を出版し、貞享四年（二三四七）と嘉永五年（二五一二）とには正文のみの文選を刊行せり。此の外にも或は出版せられたるものあるべし。斯の如く印行の熾なるは、需用の多きを證明するものにして、當時文選の講讀にのみに用ひたる字書さへ出づる至れり。享保十九年（二三九四）に成れる文選字引は卽ち是なり。以上は明治以前に於ける文選の行はれし梗概なり。

大正十年五月

岡田正之識

國譯文選 上巻

梁　昭明太子蕭統撰

日本　岡田正之
　　　佐久節　譯竝註

卷の第一

賦甲

京都上

(一)兩都の賦の序

(二)班孟堅

或る人曰く、賦は(三)古詩の流なり。昔、(四)成康沒して頌聲寢み、王澤竭きて詩作

【一】兩都。西都長安、東都洛陽をいふ。賦は韻文の一體也。

【二】班孟堅。名は固、後漢の人、漢書の著者なり。

【三】古詩の流。毛詩の序に「詩に六義あり、一に曰く風、二に曰く賦、三に曰く比、四に曰く興、五に曰く雅、六に曰く頌」とあり。古詩の一流派也との意。

【四】成康云云。成王康王は共に周初の天子なり。成康二王崩じてより德澤流れず、詩頌すべてやみしをいふ。孟子に「王者の跡やみて詩亡ぶ」とあるに同じ。

らず。(五)大漢初めて定めて(六)日給するに暇あらず、(七)武宣の世に至りて、乃ち(八)禮官を崇び文章を考へ、内には(九)金馬石渠の署を設け、外には(一〇)樂府協律の事を興し、以て廢れたるを興し絶えたるを繼ぎ(一一)鴻業を潤色す。是を以て(一二)衆庶說豫して、(一三)福應尤も盛に、(一四)白麟赤雁芝房寶鼎の歌、(一五)郊廟に薦め、(一六)神雀五鳳甘露黃龍の瑞以て(一七)年紀となす。故に言語侍從の臣には司馬相如、虞丘壽王、東方朔、枚皐、王褒、劉向の屬の若き、朝夕に論思して日月に獻納し、公卿大臣には御史大夫倪寬、(一八)太常孔臧、太中大夫董仲舒、(一九)宗正劉德、太子太傅蕭望之等、時時まま作り、或は以て下

【五】大漢。劉邦立ちて漢王となり、項羽を滅して皇帝の位に卽く、是を高祖皇帝となす。班固は後漢の人なり、故に之を尊んで大漢といふ。

【六】日給する云云。高祖の時纔に天下を平定したるのみにて、未だ文化を盛にするに暇あらずとなり。

【七】武宣。漢の武帝および宣帝。

【八】禮官。禮儀を掌る官。

【九】金馬。石渠。金馬門と石渠閣。ともに役所の名。

【一〇】樂府。協律。樂府は音樂を掌る役所の名、協律は協律都尉とて、樂律を取調ぶる官名。

【一一】鴻業。鴻は大なり、天子の大業。潤色。粧飾といふが如し。

【一二】衆庶は萬民。說豫は悅樂。

【一三】福應。祥瑞なり。

【一四】白麟。漢書武帝紀に雍に行幸して白麟を獲、白麟歌を作る、東海に行幸して赤雁を獲、朱雁歌を作る、甘泉宮内に芝を產し九莖連葉なり、芝房歌を作る、寶鼎を后土祠の傍に得、寶鼎歌をつくるとあり。

【一五】郊廟。天の祭、及び祖先の廟。

【一六】神雀。神雀長樂宮に集る、故に年號を改む。鳳凰五たび至る、因つて五鳳と改元す。甘露降る、故に甘露と改元す。黃龍新豐に見ゆ、因つて黃龍と改元す。

【一七】年紀。年號といふが如し。

【一八】太常。官名。

【一九】宗正。官名。

情を抒べて諷諭を通じ、或は以て（二〇）上德を宣べて忠孝を盡し、（二一）雍容揄揚して、後嗣に著せり。抑亦（二二）雅頌の亞なり。故に（二三）孝成の世、論じて之を錄す。蓋し奏御せるもの千有餘篇なり。而る後大漢の文章炳焉として（二四）三代と風を同うせり。且夫れ道に（二五）夷隆あり、學に（二六）麤密あり。時に因りて德を建つる者は、遠近を以て則を易へず。故に（二七）皐陶の虞に歌ひ、（二八）奚斯の魯を頌せる、同じく（二九）孔氏に采られて詩書に列せり。其義一なり。之を上古に稽ふるに、則ち彼の如く、之を（三〇）漢室に考ふるに又此の如し。（三一）この事細なりと雖も、然も先臣の舊式、國家の遺美にして、闕くべからざるなり。臣竊に見る、海內清平、朝廷無事、（三二）京師に宮室を修め、城隍を浚くし、（三三）苑囿を起し、以て制度を備へ

【二〇】上德。君主の德。

【二一】雍容は和樂なり、揄揚は引擧なり。

【二二】雅頌。毛詩の序に天下ノ事ヲ言ヒ四方ノ風ヲ形スル、之ヲ雅トイフとあり、又頌ハ其成功ヲ以テ神明ニ告グルモノナリとあり。亞は次なり。

【二三】孝成。漢の成帝。

【二四】三代。夏殷周をいふ。支那の最盛時代なり。

【二五】夷隆。盛衰といふが如し。

【二六】麤密。麤は粗に同じ。

【二七】皐陶。堯舜時代の賢臣なり。虞舜の廷に歌ひて曰く、元首明ナル哉、股肱良キ哉、庶事康キ哉と。

【二八】奚斯。魯の公子なり、詩經魯頌閟宮篇に、新廟奕奕タリ、奚斯ノ作ル所とあり、新廟奕奕として盛なりとは、奚斯の作りし詩なりとの意。

【二九】孔氏。孔子なり、孔子の詩經書經を删定する時、此等の詩をも採り入れたりとなり。

【三〇】漢室。漢代なり。

【三一】この事云云。賦を作る事は固より細微なりと雖、然も先臣皐陶の舊法、國家歌頌の遺美なりとなり。

【三二】京師。洛陽を指して言ふ。

【三三】苑囿。樹を植うるを苑といひ、獸を畜ふを囿といふ。

しに、(三四)西土の耆老咸怨思を懷きて(三五)上の睠顧を冀ひ、而して盛に長安の舊制を稱し、(三六)洛邑を陋とするの議あるを。故に臣兩都の賦を作り、以て衆人の(三七)眩曜する所を極め、(三八)折むるに今の法度を以てす。辭に曰く、

西都の賦

西都の(一)賓あり、東都の主人に問ひて曰く、蓋し聞く(二)皇漢の初めて(三)經營するや、嘗て(四)河洛に都するに意ありしも、輟めて康かるまじとし、寔を用て西に遷り、我が(五)上都を作れりと。主人其故を聞き其制を視たるかと。主人曰く、未しなり。願くは賓、舊を懷ふの蓄念を攄べ、古を思ふの幽情を發し、我を博うするに(六)皇道を以てし、我を弘うするに(七)漢京を以てせよと。賓曰く(八)唯唯。

【三四】西土。長安は洛陽の西に在り、故に西土といふ。耆老は長老なり。前漢には長安に都せしを、後漢の光武帝以來遷りて洛陽に都せしかば、長安の父老之を怨み、遷都を冀ふ者あり、班固和帝の洛陽を去らんことを恐れ、此賦を奉りしに和帝大に悅びたりといふ。

【三五】上。時の天子、後漢の明帝なり。

【三六】洛邑。洛陽なり。

【三七】眩曜。長安の人人の誇稱する所。極。極言する也。

【三八】折むるに云云。洛陽の法度節制を以て折むること。

【一】賓。客なり、賓主の問答を借りて文を行る。

【二】皇漢。皇は大なり、序に大漢とあるに同じ。

【三】經營。都を建つること。

【四】河洛。東都に河南洛陽の二縣あり、故に東都のことをいふ。

【五】上都。西都卽ち長安を指す。

【六】皇道。皇帝の道。

【七】漢京。長安を指す。

【八】唯唯。承諾の意を表する詞。

【大意】西都長安より來りし客あり、東都洛陽の主人に問ひて曰く、吾れ聞く漢の高祖初め洛陽に都せんとの意ありしも、後之を陋とし、遂に西に遷りて都を長安に奠めぬと。足下は嘗て其故を聞き其制を見しかと。主人乃ち答へて曰く、吾れ未だ嘗て之を見聞せず。請ふ吾が爲に之を述べよと。客曰く諾せるかなと。因て其の語る所下の如し。

漢の西都は、(九)雍州に在り、寔を長安といふ。左は(一〇)函谷二崤の阻に據り、(一一)表するに太華・終南の山を以てし、右は(一二)褒斜・隴首の險に界し、帶らすに(一三)洪河・涇・渭の川を以てし、(一四)衆流の隈、(一五)汧其西に涌く。華實の(一六)毛は則ち九州の(一七)上腴にして、防禦の阻は則ち天地の(一八)隩區なり。是故に(一九)六合に横被し(二〇)三たび帝畿と成り、周以て(二一)龍興し、秦以て(二二)虎視す。大漢(二三)命を受けて之に都するに至るに及びて、仰いで

【九】雍州。禹貢の九州の一。
【一〇】函谷二崤。山の名、關所の在りし處、左傳に崤ニ二陵アリ云云とあり、故に二崤といふ。阻は險なり。
【一一】表。標なり、前方の目標とすること。太華終南は山の名。
【一二】褒斜は谷の名。隴首は山の名。
【一三】洪河。洪は大なり、即ち黄河なり。涇渭は共に川の名。
【一四】衆流。漆水沮水灃水皆長安に入る。隈。水曲なり。
【一五】汧。河の名。涌。溢れ湧くこと。
【一六】毛。草木などの繁茂せるをいふ。
【一七】上腴。膏腴に同じ、土地の肥えたること。
【一八】隩區。深險の地をいふ。
【一九】六合は上下四方をいふ。横被は德の廣く及ぶこと。
【二〇】三たび云云。周秦漢三代の帝都たりしこと。
【二一】龍興。龍の如く興ること、德の盛なるに喩ふ。
【二二】虎視。虎のごとく睨むこと、暴逆なるに喩ふ。
【二三】命を受く。天命を受けて天子となること。

(二四)東井の精を悟り、俯して(二五)河圖の靈に協ひ、(二六)奉春策を建てて(二七)留侯演成し、(二八)天人合應して以て(二九)皇明を發す。乃ち眷みて西顧し、寔に惟れ京を作れり。是に於て(三〇)秦嶺を睎み(三一)北阜を、(三二)澧灞を挾んで(三三)龍首に據り、皇基を(三四)億載に圖り、(三五)宏規を度りて大に起し、(三六)高より肇めて平に終り、世ゝ飾を増して以て麗を崇し、十二の(三七)延祚を歷たり。故に奢を窮めて侈を極む。

【大意】漢の西都は雍州に在りて長安といふ。東に函谷關・南北二崤の險あり、南に太華・終南の山あり、西に褒斜隴首の阻あり。衆水此を繞りて西に流れ、土地肥沃にして天然の要害なり。されば一たび此地に據る者は、其威遠近に震ひ、終に天下を統御するに至る。

【二四】東井。星の名、秦の分野に在り。漢書に高祖ノ秦ニ入ルヤ、五星東井ニ聚ルとあり。是れ高祖の天命を受くるシルシなり。精とは星の精靈なり。

【二五】河圖。昔伏犧の天下に王たるや龍馬、圖を負ひて河より出でたりといふ。天命を受くる瑞祥なり。

【二六】奉春。漢の高祖の洛陽に都せんとするや、婁敬高祖に說いて曰く、陛下洛陽に都するは不可なり、關に入りて秦の固に據るに如かずと。高祖因つて張良に問ふ、良亦婁敬の說に賛す、高祖乃ち西に遷りて長安に都し、婁敬を拜して奉春君となす。

【二七】留侯。高祖張良を封じて留侯となす。演成は賛成といふが如し。

【二八】天人合應。天意と人事と一致すること。

【二九】皇明。漢皇の明德。

【三〇】秦嶺。南山なり。

【三一】北阜。北方の山。

【三二】澧灞。ともに川の名。

【三三】龍首。山の名。

【三四】億載。載は年なり、億年に同じ。

【三五】宏規。宏大なる規模。

【三六】高平。高は高祖なり、平は平帝なり、高祖より平帝まで十二代。

【三七】延祚。祚は帝位なり、永き年代の位。

宜なるかな周秦の此地に都せるや。わが漢の高祖の天命を受けて天下を一統するや亦此に都し、天意人事克く應和し、明德四方に光被しぬ。乃ち山に據り水に臨みて帝都を構へ、高祖より平帝に至るまで十二世、世々其の規模を擴張し、遂に壯麗を極むるに至れり。

金城の（三八）萬雉なるを建て、周池を呀にして淵を成し、三條の廣路を披いて、十二の通門を立て、内には則ち街衢洞達し（三九）閭閻且に千ならんとす。（四〇）九市、場を開いて（四一）貨別れ（四二）隧分れ、人は顧るを得ず車は旋るを得ず。城に闐ち郭に溢れて（四三）旁く百廛に流る。紅塵四に合ひて煙雲相連る。是に於て既に（四四）庶にして且つ富み、娛樂すること疆なく、都人士女は（四五）五方に殊異にして、遊士は公侯に擬し、（四六）列肆は（四七）姬姜よりも侈り、（四八）郷曲の豪擧、遊俠の雄、節は（四九）原嘗を慕ひ、名は（五〇）春陵に亞ぎ、交を連ね衆を合せて、其中に（五一）騁騖す。

【三八】萬雉。長さ三丈、高さ一丈を一雉といふ。
【三九】閭閻。里門なり。
【四〇】九市。漢の宮闕疏に長安ニ九市ヲ立ツ、其六市ハ道ノ西ニアリ、三市ハ道ノ東ニアリとあり。
【四一】貨。貨物商品なり。
【四二】隧。列肆の道なり。肆は商店をいふ。
【四三】百廛。多くの商店。
【四四】庶。衆也、人口の多きこと。
【四五】五方。漢書に秦地五方雜錯云云とあり。
【四六】列肆。商家の婦女をいふ。
【四七】姬姜。姬は周の姓、姜は齊の姓、因つて王侯の女子をいふ。
【四八】郷曲。村里の人をいふ。豪擧は豪奢なる遊興ぶり。
【四九】原嘗。趙の平原君、齊の孟嘗君、ともに食客數千人を養ひ豪奢を極めたり。
【五〇】春陵。楚の春申君、魏の信陵君、並に食客數千人を養ひ、豪奢を極めたり。
【五一】騁騖。馳逐に同じ、走りまはること。

【大意】乃ち大城を構へ池溝を環らし、三條の大道を開き十二の通門を立て、街衢縱橫に通じ、商賈軒を聯ね、人馬絡繹として紅塵萬丈なり。庶民殷富にして互に娛樂を競ひ、士人の驕奢は王侯にまがひ、商婦の華美は貴嬪に異らず、俠客は名節を礪きて原嘗春陵を凌ぎ、隊を成し羣を合せて東西に奔走し、其盛言ふばかりなし。

若し乃ち其(五二)四郊を觀、近縣に浮遊すれば、則ち南に(五三)杜霸を望み、北に(五四)五陵を眺め、(五五)名都、郭に對し、邑居相承け、英俊の域、(五六)紱冕の興る所、(五七)冠蓋雲の如く、(五八)七相五公あり、州郡の豪傑と(五九)五都の(六〇)貨殖と、(六一)三選七遷して陵邑に充奉す。蓋し以て(六二)幹を彊くし枝を弱くし、上都を隆にして萬國に觀すなり。

【五二】四郊。四方の郊外。

【五三】杜霸。杜陵(宣帝の陵)及び霸陵(文帝の陵)。

【五四】五陵。長陵(高祖の陵)安陵(惠帝の陵)陽陵(景帝の陵)茂陵(武帝の陵)平陵(昭帝の陵)。

【五五】名都。都に近き縣をいふ。郭に對すとは長安と相對するをいふ、士人多く此に宅す、故に英俊の域といふ。

【五六】紱冕。紱は印の紐、即ち綬なり。冕は大夫以上の冠。因つて高位高官の人をいふ。

【五七】冠蓋。冠はカンムリ、蓋は車上に立つる日オホヒ。雲の如しとは多きをいふ。

【五八】七相。車千秋、黃霸、王商、王嘉、韋賢、平當、魏相の七宰相をいふ、五公は張湯、蕭望之、馮奉世、史丹、張安世の五公をいふ。

【五九】五都。洛陽、邯鄲、臨淄、宛、成都の五都市をいふ。

【六〇】貨殖。富豪をいふ。

【六一】三選。三等の人を選ぶこと、七相五公、豪傑、貨殖是れなり。七遷は七陵に徙り住みて陵墓に奉仕するをいふ。

【六二】幹は皇室を指し、枝は諸侯を指す。

【大意】若し夫れ一たび郊外に遊ばんか、南に杜霸の二陵を望むべく、北に五陵を望むべし。邸舍參差として遙に都城と相接し、王公貴人の居を徙して帝陵に奉仕する者あり、州縣の豪傑、都邑の豪賈、亦遷されて居を此に卜するあり。蓋し國礎を固くし諸侯を弱くし、以て萬國を威壓せんが爲なり。

(六三)封畿の內、厥土千里、(六四)諸夏に卓犖して、其の有する所を兼ぬ。其陽は則ち崇山天を隱ひ、幽林穹谷、(六五)陸海の珍藏、(六六)藍田の美玉あり。(六七)商洛其隈を緣り、(六八)鄠杜其足に濱し、源泉灌注して(六九)陂池交屬き、竹林果園芳草甘木、郊野の富、號して(七〇)蜀に近しとなす。其陰は則ち冠するに(七一)九嵕を以てし、陪するに(七二)甘泉を以てし、乃ち(七三)靈宮ありて其中に起り、秦漢の觀を極めし所、(七四)淵雲の頌歎せし所、是に於てか存す。下には(七五)鄭白の沃せる衣食の源あり、(七六)提封五

【六三】封畿。天子の畿內をいふ。

【六四】諸夏。中國なり、支那全土の稱。卓犖は卓越といふが如し。

【六五】陸海。水陸なり。

【六六】藍田。山の名、美玉を產するを以て名あり。

【六七】商洛。川の名。

【六八】鄠杜。鄠は縣の名、杜は杜陵。

【六九】陂池。陂は堤なり。

【七〇】蜀に近し。蜀は地味肥沃にして竹木蔬果極めて豐富なり。

【七一】九嵕。山の名。

【七二】甘泉。山の名。

【七三】靈宮。漢書に、公孫卿曰ク、仙人ハ樓居ヲ好ムト、是ニ於テ武帝甘泉ニ延壽館通天臺ヲ作ルとあり。

【七四】淵雲。漢の王子淵甘泉頌を作り、漢の揚子雲甘泉賦を作る。

【七五】鄭白。鄭は鄭國渠、白は白渠、この二渠田地を漑すること數百頃、京師の民皆其恩惠を被る。

【七六】提封。天子の領土。

萬、(七七)疆場綺のごとく紛はり、溝塍刻鏤せるがごとく、(七八)原隰龍鱗のごとく、渠を決すれば雨を降らし、挿を荷ふもの雲を成し、五穀頴を垂れ、桑麻(七九)棻を鋪く。

【大意】帝畿の內、廣袤千里、物資極めて豐富にして各地の產物一として之れなきはなし、其南には高山深谷ありて水陸の珍を藏し、藍田の美玉を產し、林麓を繞りて竹林あり果園あり、芳草は萋萋として甘木は鬱鬱たり。蔬果の產、蜀地の豐饒なるに讓らず。其北には九嵕・甘泉の諸山あり、靈宮其中に聳え立ち、秦漢の美觀を極め、文士の嘆稱せし所なり。下には鄭白の二渠を中心として溝渠交錯し田畝平に敷き、渠水を決すれば雨の注ぐが如く、鍬を荷ふの農夫は雲の屯するが如く、五穀豐熟して桑麻繁榮す。

東郊には則ち通溝(八〇)大漕あり、渭に(八一)潰り河に洞り、舟を山東に泛べて淮湖を控引し、海と波を通ず。西郊には則ち(八二)上囿禁苑林麓藪澤陂池あり、(八三)蜀漢に連なり、繚らすに周牆を以てすること、四百餘里、離宮別館三十六所、神池靈沼往往に在り。其中には則ち(八四)九眞の麟、(八五)大宛の馬、(八六)黃

【七七】疆場。境界なり、田畔なり。
【七八】原隰。高く平なる地を原といひ、低くして濕へる地を隰といふ。
【七九】棻。紛に通ず、盛なる貌。
【八〇】大漕。漕は水運なり、運河をいふ。
【八一】潰。洞。通ずること。
【八二】上囿。禁苑。天子の御庭なり。
【八三】蜀漢。蜀郡漢中郡。
【八四】九眞。安南の地名。
【八五】大宛。西國の名、北は康居に接し、南は大月氏に接し、葡萄及び馬を產す。
【八六】黃支。國名、南海の中に在り。

支の犀、(八七)條枝の鳥あり。(八八)崑崙を踰え巨海を越え、殊方の異類、三萬里より至る。

【大意】東郊には溝渠ありて黄河及び渭水に通じ、舟を泛べて以て山東の運漕に供すべく、亦淮湖を歴て東海に通ずべし。西郊には御料の林苑ありて遠く蜀漢に連り、之を繞らすに牆垣を以てすること四百餘里に及び、其間に離宮あり別館あり、其數正に三十六。池沼また其間に散在す。其中には遠く高山を踰え大海を渡りて外國より貢せる珍禽奇獸を飼へり。

其宮室は(八九)天地に體象り、陰陽を(九〇)經緯し、(九一)坤靈の正位に據り(九二)太紫の圓方に放ひ、(九三)中天の華闕を樹て、(九四)冠山の(九五)朱堂を豐にし、(九六)瓌材に因りて奇を究め、(九七)應龍の(九八)虹梁を抗げ、棼橑を列ねて以て翼を布き、棟桴を荷ひて高く驤り、玉碵を雕りて以て楹を居ゑ、金壁を裁ちて以て(九九)璫を飾り、五色の渥彩を發して、光爛朗にして以て景彰かなり。

【大意】其宮室を建つるや、方圓は象を天地に取り、東西南北みな陰陽の法に合ひ、大地中正の位

【八七】條枝。夷國の名、今のシリアの地ならんといふ。
【八八】崑崙。支那の西方を限れる山脈の名。
【八九】天地。天の形は圓く、地の形は方なり。
【九〇】經緯。南北を經といひ、東西を緯といふ。
【九一】坤靈。地なり。
【九二】太紫。天帝の宮なり。
【九三】中天。高さ天半に及ぶこと。
【九四】冠山。蕭何未央宮を作る、宮は龍首山上に在り、故に冠山といふ。
【九五】朱堂。朱塗りの殿堂。
【九六】瓌材。よき材木。
【九七】應龍。形龍に似たるをいふ。
【九八】虹梁。虹の如く曲れる梁。
【九九】璫。椽頭の飾なり。

を得、太紫宮に象りて以て規矩となす。中天に聳ゆるの門闕を設け、山頭に據りて朱堂を建て、美材を用ひて奇巧を極め、梁は曲りて虹の如く、翼は張りて龍の如く、玉を刻んで礎石となし、金玉を以て椽端を飾り、粉飾するに五色を以てし光彩爛然たり。

是に於て、左は（一〇〇）墄、右は（一〇一）平、（一〇二）重軒（一〇三）三階、（一〇四）閨房周く通じ、（一〇五）門闥洞に開け、（一〇六）鐘虡を中庭に列ね、（一〇七）金人を（一〇八）端闈に立つ。增崖に仍りて閾を衡へ、峻路に臨んで扉を啓き、徇らすに離宮（一〇九）別寢を以てし、承るに崇臺閒館を以てし、煥として（一一〇）列宿の（一一一）紫宮を是れ環るが若く、（一一二）淸涼、宣溫、神仙、（一一三）長年、金華、玉堂、白虎、麒麟、（一一四）區宇玆の若く、殫く論ずべからず。（一一五）增盤崔嵬、登降（一一六）炤爛、殊形詭制、每に各觀を異にし、乘茵步輦、

【一〇〇】墄。階段なり。人の登る道とす。

【一〇一】平。瓦を敷きて坂路を作ること、車の登る道とす。

【一〇二】重軒。二重に欄干を設けたること。

【一〇三】三階。南面の階三あるなり。周禮に夏后氏ノ世室九階アリとあり、鄭玄の註に南面三、三面各二とあり。

【一〇四】閨房。小室なり。

【一〇五】門闥。門は大門、闥は中門。

【一〇六】鐘虡。虡は鐘を置く臺。

【一〇七】金人。黃金にて鑄たる像。

【一〇八】端闈。正門なり。

【一〇九】別寢。寢は正殿なり。

【一一〇】列宿。列星なり。

【一一一】紫宮。紫微宮、天帝の宮。

【一一二】淸涼。三輔黃圖に未央宮ニ淸涼殿アリ、宣室殿ノ中ニ溫室殿、金華殿アリ、太玉堂殿ノ中ニ白虎殿、麒麟殿アリ、長樂宮ニ神仙殿アリとあり。

【一一三】長年。以下皆殿の名。

【一一四】區宇。殿堂の在る場所。

【一一五】增盤。增は層、盤は屈なり、重りて屈曲すること。崔嵬は高き貌。

【一一六】炤爛。光明なる貌。

ただ（二一七）息宴する所のままなり。

【大意】左を人道とし右を車道とし、樓閣房室四方に通じ、諸門を洞開し、中庭に鐘虡を列ね、正門に金人を置き、龍首山の層崖を門限となし、大路に對して門扉を開き、離宮別殿之を繞り、高臺閑室其間を綴り、煥然として列星の紫微宮を環るが如く、その布置按排の妙、一一述べ盡すべくもあらず。重疊屈曲して高く聳え、登降ともに光明にして奇形妙構各趣を成し、後宮美人の茵蓆に坐し歩輦に乘りて來り遊ぶ者、到る處その休息に適せざるはなし。

後宮には、則ち（二一八）掖庭椒房、后妃の室あり。（二一九）合歡、增城、安處、常寧、茝若、椒風、披香、發越、蘭林、蕙草、鴛鸞、飛翔之れ列り、（二二〇）昭陽特に盛にして（二二一）孝成に隆に、屋は材を呈にせず、牆は形を露さず、裛むに（二二二）藻繡を以てし、絡ふに（二二三）綸連を以てし、（二二四）隨侯の明月、其間に（二二五）錯落し、（二二六）金釭璧を銜み、是を（二二七）列錢となす。翡翠の（二二八）火齊、耀を流し英を含み、（二二九）懸黎垂棘夜光在

【二一七】息宴。休息すること。
【二一八】掖庭は宮女の居る宮。椒房は山椒を壁に塗り込めたる室にて、后妃の居る所なり。
【二一九】合歡より以下飛翔に至るまで、皆殿の名。
【二二〇】昭陽。殿の名、成帝の時之を作る。成帝の趙皇后の妹寵幸せられて昭儀となり、昭陽殿に居たり。
【二二一】孝成。漢の成帝。
【二二二】藻繡。唐草模樣の飾。
【二二三】綸連。青絲の綬なり、金モールの如きもの。
【二二四】隨侯。隨侯大珠を得、其光明月の如し。
【二二五】錯落。入り亂ろること。
【二二六】金釭。黃金のカナグ。
【二二七】列錢。行列せる錢の如きなり。
【二二八】火齊。珠なり。
【二二九】懸黎。以下皆明玉の名。

り。是に於て（二三〇）玄墀釦砌、玉階（二三一）彤庭あり。（二三二）碝磩は綵緻にして、（二三三）琳珉は青熒、珊瑚碧樹、阿を周りて生じ、（二三四）紅羅颯纚として（二三五）綺組繽紛たり。（二三六）精曜華爥俯仰すること神の如く、後宮の（二三七）號十有四位あり。窈窕繁華更に盛に迭に貴し。斯列に處る者蓋し百を以て數ふ。

【大意】後宮には掖庭椒房あり、皆后妃の室にして合歡殿以下屋を列ね、特に昭陽殿は其最も華麗なるものにして、成帝の御宇に成る。その屋牆みな藻繡を以て飾り、土木を露出せず。金玉を以て雕飾し、光彩燦然たり。庭前は塗るに漆喰を以てし、敷くに美石を以てし、華樹其上に生じ、美人長袖を翳して、紛然として來往し、俯仰の態神人の如し。其名號に十四等あり、寵を恃み貴を爭ひ、其數實に百を以て數ふべし。

左には（二三八）庭中朝堂百寮の位あり。（二三九）蕭曹魏邴其上に（二四〇）謀謨し、（二四一）命を佐けては則ち統を垂れ、

【二三〇】玄墀。黒き漆喰にて塗りかためし庭。釦砌は玉を以て飾りし砌。
【二三一】彤庭。朱色の漆喰にて塗りかためし庭。
【二三二】碝磩。石の玉に次ぐもの。
【二三三】琳珉。美石なり。
【二三四】紅羅。紅色の薄絹。颯纚は長袖の飜る貌。
【二三五】綺組。アヤギヌの衣。
【二三六】精曜華爥。美しき光。
【二三七】號。稱號なり。後宮に十四等あり、昭儀、婕妤、娙娥、容華、美人、八子、充衣、七子、良人、長使、少使、五官、順常、無涓、是れなり。
【二三八】庭中。庭は廷に同じ。百寮は百官なり。
【二三九】蕭は蕭何、曹は曹參、共に高祖の時の宰相。魏は魏相、邴は邴吉、共に宣帝の時の宰相。
【二四〇】謀謨。謀議に同じ。
【二四一】命を佐け。天命を受けて天子となりし人を輔佐すること。

輔翼しては則ち化を成し、大漢の（一四二）愷悌を流きて、亡秦の（一四三）毒螫を蕩す。故に斯人をして樂和の聲を揚げ、（一四四）畫一の歌を作らしめ、功德祖宗に著れ（一四五）膏澤黎庶に洽し。右には（一四六）天祿、石渠、典籍の府あり。夫の惇く誨へし故老、名儒、師傅に命じて、（一四七）六藝を講論し、同異を稽へ合せしむ。又（一四八）承明、金馬、著作の庭あり。（一四九）大雅宏達茲に於て羣を爲し、元を元ね本を本ね、殫く見洽く聞き、篇章を啓發し、祕文を校理す。

【大意】左には朝廷百官の位次あり。卽ち丞相蕭何、曹參、魏相、邴吉等ここに國政を議し、天子を輔佐して治化を成し、漢室和樂の美德を布きて亡秦の苛政を一掃し、遂に人民をして樂和の聲を揚げ頌德の歌を作らしむるに至り、功德祖先にまさり恩澤衆民に洽し。右には天祿石渠等の秘書を藏する閣あり。碩學大儒此に於て六藝を講じ圖書を校讐す。又承明、金馬等の著作所あり。博宏通達の學士羣を成して事理を探求し篇章を作る。

【一四二】愷悌。和樂なり。
【一四三】毒螫。毒蟲の刺すこと、虐政に喩ふ。
【一四四】畫一の歌。蕭何薨じて曹參之れに代る、百姓之れを歌つて曰く、蕭何ノ法ヲ爲ル、較トシテ畫一ノ若シ、曹參之ニ代リ、守ッテ失フナシ、載ソレ淸淨、人以テ寧一ナリと。
【一四五】膏澤は皇恩なり。黎庶は衆民なり。
【一四六】天祿。石渠。閣の名。祕書を藏する處。
【一四七】六藝。六經。卽ち易經、書經、詩經、春秋、禮記、樂記。
【一四八】承明は承明廬。金馬は金馬門。
【一四九】大雅宏達。學識ある人。

周すに（二五〇）鉤陳の位を以てし、衞るに（二五一）嚴更の署を以てし、禮官の（二五二）甲科を總べ百郡の（二五三）廉孝を羣む。（二五四）虎賁、贅衣、（二五五）閹尹閽寺、陛戟百重、各典司あり。（二五六）周廬千列し（二五七）徼道綺錯し、（二五八）輦路經營、（二五九）修除飛閣あり。（二六〇）未央より桂宮に連り、北のかた（二六一）明光を彌りて（二六二）長樂に亙り、磴道を陵いで（二六三）西墉を超え、（二六四）建章に掍うして外に連りて屬き、（二六五）壁門の鳳闕を設け、上は（二六六）觚稜して（二六七）金爵を棲ましむ。內には則ち（二六八）別風、嶕嶢にして眇麗、巧にして聳え擢で、千門を張りて萬戸を立て、（二六九）陰陽に順つて開闔す。爾して乃ち正殿崔嵬として層構し、厥高きこと未央に臨み、（二七〇）駘盪を經て馺娑を出で、枍詣に洞りて以て天梁と與

【二五〇】鉤陳。紫微宮を衞る星の名。因つて禁衞をいふ。

【二五一】嚴更。夜を警むること。

【二五二】甲科。考試中最高の科目なり。受驗者中の優等生といふが如し。

【二五三】廉孝。廉直にして純孝なる人。

【二五四】虎賁は勇士なり。贅衣は綴衣なり、帷幄に侍する臣なり。

【二五五】閹尹閽寺。宦官なり、宮中の雜務を掌る。

【二五六】周廬。宿直處を廬といふ。

【二五七】徼道は警備者の巡行する道。綺錯は入り交ること。

【二五八】輦路。閣道なり。

【二五九】修除は長き樓陛。飛閣は高き樓閣。

【二六〇】未央。宮の名。

【二六一】明光。三輔舊事に桂宮ノ內ニ明光殿アリとあり。

【二六二】長樂。宮の名。

【二六三】西墉。墉は城なり。

【二六四】建章。宮の名。

【二六五】壁門。門の名。

【二六六】觚稜。かどだつてゐること。

【二六七】金爵。爵は雀なり、金の鳳凰のこと。

【二六八】別風は闕の名、一名は折風。嶕嶢は高き貌。

【二六九】陰陽に云云。朝に開き夕に閉づること。夕を陰となし、朝を陽となす。

【二七〇】駘盪、馺娑、枍詣、天梁は皆宮の名。

にし、(一七一)反宇を上げて以て(一七二)蓋戴し、日景を激して光を納る。

【大意】警手衞卒の屯所其周圍に在り。中科孝廉の人を聚めて警衞の任に當らしめ、武士宦官、陛階の下に於て戟を執りて陳列すること百重、各〻分職あり。又宿直處あり。周列すること千處。巡邏の道筋縱横に交錯し、閣道長く續き、階樓あり高閣あり。未央宮より桂宮に連り、北、明光殿を經て長樂宮に及び、磴道を超えて西城に跨り、終に建章宮に達す。壁門鳳闕あり。上尖りて先端に金鳳あり。其内には別風闕あり、高峻にして巧麗なり。千門萬戸朝に開き夕に閉づ。建章の正殿たる、其高きこと未央宮にまさり、駘盪、馺娑の二殿も亦及ばず、枍詣天梁二殿と相若く。屋端高くそり返りて鳥の啄むが如く、其の光、日景と相激射す。

(一七三)神明鬱として其れ特り起ち、遂に(一七四)偃蹇して上躋し、雲雨を(一七五)太半に軼ぎ、虹霓棼楣に廻帶す。輕迅と(一七六)僄狡と雖も、猶ほ(一七七)愕眙して階ること能はず。(一七八)井幹を攀ぢて未だ半ならざるに、目眩轉して意迷ひ、(一七九)櫺檻を捨てて郤き倚り、顚墜するが若くにして復た稽る。魂(一八〇)怳怳として以て度を失ひ、廻途を

【一七一】反宇。そり返れるノキ。
【一七二】蓋戴。掩ひ葺くこと。
【一七三】神明。臺の名。
【一七四】偃蹇。高き貌。
【一七五】太半。物の半以上、即ち三分の二ぐらゐなるをいふ。
【一七六】僄狡。僄は輕、狡は疾なり、身の輕捷なること。
【一七七】愕眙。驚く貌。
【一七八】井幹。樓の名、漢書に武帝井幹樓ヲ作ル、高サ五十丈、輦道相屬スとあり。
【一七九】櫺檻。欄干なり。
【一八〇】怳怳。茫然として自失する貌。

巡りて下低す。既に登望に懲懼し、降りて（一八一）周流して以て徬徨し、（一八二）甬道を歩して以て（一八三）縈紆し、又（一八四）杳篠として陽を見ず。（一八五）飛闥を排いて上り出づれば、目を天表に遊ばしむる若く、依るなくして（一八六）洋洋たるに似たり。

【大意】神明臺あり特立して高く聳え、雲雨却つて下に在り、虹霓その棟梁を繞る。されば如何なる輕迅捷疾の人と雖も驚懼して登る能はず。また井幹樓あり。之を登ること未だ半ならざるに、目眩き意迷ひ、欄を捨てて倚立てば、已に墜落するが如くにして復た留り、心魂爲に失はるるが如くにして、始めて低處に下り就くを得。因つて恐懼して敢て復た登望せず。降りて彷徨し閣道を歩めば、回曲深邃にして陽光を見る能はず。乃ち閣道より高門を排いて出でて望めば、目に天外を見るが如く、茫茫然として盡くる所を知らず。

（一八七）唐中を前にして（一八八）太液を後にし、（一八九）滄海の（一九〇）湯湯たるを覽る。波濤を（一九一）碣石に揚げ、（一九二）神

【一八一】周流。周遊といふがごとし。
【一八二】甬道。飛閣の複道なり。
【一八三】縈紆。回曲すること。
【一八四】杳篠。深き貌。
【一八五】飛闥。高き門。
【一八六】洋洋。廣くして端なき貌。
【一八七】唐中。池の名、建章宮の西に在り。
【一八八】太液。池の名、建章宮の北に在り。
【一八九】滄海。大海なり。
【一九〇】湯湯。水の盛なる貌。
【一九一】碣石。山の名、黄河の河口に在り。
【一九二】神岳。碣石山を指して言ふ。

岳の(一九三)嶈嶈たるに激し、(一九四)瀛洲と方壺とを濫べて蓬萊中央に起る。是に於て靈草冬榮え、神木叢生し、巖峻(一九五)嶆崪として金石(一九六)崢嶸たり。(一九七)仙掌を抗げて以て露を承け、雙立せる(一九八)金莖を擢き、(一九九)埃壒の混濁を軼ぎ、(二〇〇)顥氣の淸英を鮮しとす。(二〇一)文成の(二〇二)丕誕を騁せ、(二〇三)五利の刑とする所を馳す。庶はくは(二〇四)松喬の羣類、時に斯庭に遊從せん。實に列仙の館する攸にして、吾人の寧ずる所にあらず。

【大意】前には唐中池あり、後には太液池あり。大海の湯湯然として波濤を碣石山下に揚ぐるが如く、池中に三山を築き、瀛洲、方壺、蓬萊の三仙山に象れり。靈草神木其中に繁榮し、巖石高く聳ゆ。また銅柱仙人掌等を立て、高く塵界を超逸して潔白淸英の露氣を承く。これ皆少翁欒大等の怪誕の詐術によりて設けし所なり。實に羣仙の遊館すべき所にして、常人の安息すべき所にはあらず。

【一九三】嶈嶈。山の高き貌。
【一九四】瀛洲、方壺、蓬萊。東海中に在る仙山の名。
【一九五】嶆崪。高き貌。
【一九六】崢嶸。高き貌。
【一九七】仙掌。仙人掌なり、史記武帝紀に柏梁銅柱承露仙人掌ノ屬ヲ作ルとあり。仙人の手掌を以て盤を擎げ、甘露を承くるやうに作り成したるもの。其甘露を玉屑に和して服用すれば不老不死なるを得べしとの方士の言を信じて、武帝之を作りしなり。
【一九八】金莖。卽ち銅柱なり。
【一九九】埃壒。塵埃なり。
【二〇〇】顥氣。天邊の氣なり。
【二〇一】文成。齊人李少翁、方術を以て武帝に見ゆ、武帝拜して文成將軍となし、其言に從つて仙術を修め、神仙と通ぜんと欲す。
【二〇二】丕誕。怪妄不稽の言。
【二〇三】五利。武帝欒大を拜して五利將軍となし、不死の藥を得んと欲す。
【二〇四】松喬。赤松子及び王子喬、共に仙人なり。

爾して乃ち娯遊の壯觀を盛にし、(二〇五)太武を上囿に奮ひ、茲に因つて以て戎を威し狄に夸り、威靈を耀かして武事を講じ、(二〇六)荆州に命じて鳥を起てしめ、(二〇七)梁野に詔して獸を驅らしむ。(二〇八)毛羣内に闐ち、(二〇九)飛羽上に覆ひ、翼を接し足を側て、(二一〇)禁林に集りて屯聚す。(二一一)水衡虞人其(二一二)營表を修め、(二一三)種別れ羣分れて(二一四)部曲署あり。(二一五)罘網紘を連ね、山を籠め野を絡り、列卒周匝し、星のごとく羅り雲のごとく布く。是に於て(二一六)鑾輿に乘り(二一七)法駕を備へ、羣臣を帥ゐ(二一八)飛廉を披き苑門に入り、遂に(二一九)酆鄗を繞り(二二〇)上蘭を歷、(二二一)六師發逐して、百獸駭殫し、(二二二)震震爚爚として、雷のごとく奔り電のごとく激し、草木地に塗れ、山淵反覆し、其十の二三を蹂躙し、乃ち怒を拗へて少く息ふ。

【二〇五】太武。武事なり。
【二〇六】荆州。南方の州の名、其地鳥多し、故に其人よく鳥を知る。
【二〇七】梁野。梁州の野、其地獸多し、故に其人よく獸を知る。
【二〇八】毛羣。獸類をいふ。
【二〇九】飛羽。鳥類をいふ。
【二一〇】禁林。天子の御庭。
【二一一】水衡、虞人。獵場を掌る官。
【二一二】營表。隊伍、行列といふが如し。
【二一三】種、羣。各部隊をいふ。
【二一四】部曲。組なり、漢書に將軍皆部アリ、部ノ下ニ曲アリとあり。
【二一五】罘網。罘は獸を捕ふる網。紘は網の綱。
【二一六】鑾輿。天子の御車。
【二一七】法駕。六匹の馬を駕す。
【二一八】飛廉。館の名。
【二一九】酆鄗。長安附近の地名。
【二二〇】上蘭。樓觀の名、三輔黃圖に上林ニ上蘭觀アリとあり。
【二二一】六師。天子の軍をいふ。
【二二二】震震爚爚。光明の貌。

【大意】乃ち遊獵に兼ぬるに演武を以てし、此に因つて威靈を誇耀し、夷狄を威服せんとし、荆人

に命じて鳥を追起てしめ、梁人に命じて獸を驅出さしめ、鳥獸の林苑（獵場）に集ること雲の如く山の如し。狩獵官あり、其部隊を齊整し、各部隊また各〻職司を定む。網を山野に張り、列卒之を繞り、守るもの雲の如く星の如し。是に於て天子鑾輿に乘り六馬を駕し、羣臣を率ゐ、飛廉館を開いて獵場の門に入り、遂に酆鄗を繞りて上蘭に到る。乃ち六軍を發して百獸を逐はしむ。百獸駭き走ること雷の如く、草木爲に靡き、山淵爲に顚覆せんとす。因つて獸を獲ること十に二三なり。是に於て士卒勇を抑へて少憇す。爾して乃ち（二三）期門佽飛、刄を列ね鏃を攢め、跌るを要へ蹤るを追へば、鳥は驚いて絲に觸れ、獸は駭いて鋒に値ひ、（二四）機は虛しく掎かず弦は、再び控かず、矢は單を殺さず、中れば必ず雙を疊ぬ。（二五）颮颮紛紛として（二六）矰繳相纏ひ、風毛雨血野に灑ぎ天を蔽ひ、平原赤くして勇士厲しく、（二七）猨狖は木を失ひ豺狼は懾れ竄る。爾して乃ち師を移し險に趨き、潛穢を竝び蹈めば、窮虎奔り突き（二八）狂兕觸れ蹶む。（二九）許少巧を施し、（三〇）秦成力をもて折き（三一）僄狡を掎り（三二）猛噬を扼り、角を脫し脰を挫き、（三三）徒搏して獨り殺す。（三四）師豹を挾み、熊螭を

【二三】期門、佽飛。共に武官の名。
【二四】機。弩のヒキガネ。
【二五】颮颮紛紛。衆多なる貌。
【二六】矰繳。イグルミ、箭の上に絲を加へたるもの。
【二七】猨狖。猿なり。
【二八】狂兕。狂へる野牛。
【二九】許少。古の敏捷なる人の名。
【三〇】秦成。古の壯士なり。
【三一】僄狡。獸の敏捷なるもの。
【三二】猛噬。猛くして噬みつく獸。
【三三】徒搏。徒手にて打つ。
【三四】師豹。師は獅子なり。

拖き、犀犛を曳き、象羆を頓し、洞窟を超え、峻崖を越え、嶄巖を蹶めば、巨石頽れ、松柏仆れ、叢林摧け、草木餘なく、禽獸殄く夷さる。

【大意】乃ち期門佽飛の諸官、刃を列ね鏃を集めて、逃げ惑へる鳥獸を追擊すれば、鳥は驚いて網に罹り、獸は駭いて鋒に觸れ、弩機發すれば必ず中り、中れば必ず二匹を斃す。鳥獸を獲ること算なく、毛血相雜りて下ること風雨の如く、平原も爲に血に染み、士卒益〻勇む。是に於てか猿も木を失ひ豺狼も懾れ伏す。乃ち衆士を移して潛叢を探らしむれば、虎兕窮迫して自ら相觸突して倒る。因つて許少は巧技を演じ、秦成は全力を揮ひ、狂捷なるを捕へ猛噬なるを扼し、或は骨を折り、或は頸を挫きて之を殺し、獅豹熊犀等の猛獸を獲、峻巖を越ゆれば、巨石墜ち松柏仆れ、草木盡きて禽獸悉く殺さる。

是に於て天子、(二三五)屬玉の館に登り、(二三六)長楊の榭を歷へ、山川の體勢を覽、(二三七)三軍の殺獲を觀る。原野(二三八)蕭條として、目四裔を極む、禽は相鎮壓し、獸は相(二三九)枕藉す。然る後(二四〇)禽を收め衆を會し、功を論じ、(二四一)胙を賜ひ、輕騎を陳ねて以

【二三五】屬玉。館の名。
【二三六】長楊。宮の名。榭は爾雅に闍、之ヲ臺トイフ、木アル之ヲ榭トイフとあり。
【二三七】三軍。前の六師に同じ。天子の軍勢をいふ。獲は音クワ、榭裔（音ヤ）藉と叶韻。
【二三八】蕭條。淋しき貌。鳥獸なきをいふ。
【二三九】枕藉。相枕して臥すこと。
【二四〇】禽。擒に同じ。獲物をいふ。
【二四一】胙。祭に供へたる肉。ここは單に獲物の肉と見るべし。音サク。

て（二四二）炰を行り、（二四三）酒車を騰げて以て（二四四）斟酌し、（二四五）鮮を割きて野に食はしめ、烽を擧げて（二四六）爵を命ず。饗賜畢りて（二四七）勞逸齊しく、（二四八）大輅鑾を鳴らし、（二四九）容與として徘徊す。（二五〇）豫章の宇に集り（二五一）昆明の池に臨めば、（二五二）牽牛を左にし織女を右にし、雲漢の涯なきに似たり。茂樹蔭蔚として、芳草隄を被ひ、（二五三）蘭茝色を發し、（二五四）曄曄猗猗として、錦を摛ぶると繡を布くとの若く、其陂に爤燿く。鳥には則ち玄鶴、白鷺、黄鵠、鵁鶄、鶬鴰、鴇鶂、鳧鷖、鴻雁あり。朝に河海を發し、夕に（二五五）江漢に宿し、沈浮往來して、雲のごとく集り霧のごとく散ず。

【大意】 是に於て天子臺榭に登りて山川の形勢、士卒の殺獲を觀れば、原野寂寥にして唯禽獸の相枕して死せるを見るのみ。乃ち獲物を收め徒卒を會し、功を論じ饗宴を賜ふ。因つて輕騎を馳せて炙肉をはこび、車を以て酒を載せ、烽火を擧げて飲を促す。饗宴終り、勞者も逸者も均しく恩賞に浴するや、天子大輅に乗り鑾を鳴らして徘徊

【二四二】炰。まるやき、毛のまま獸肉を燒きたるをいふ。
【二四三】酒車。酒を載せたる車。
【二四四】斟酌。酒を酌むこと。
【二四五】鮮。新鮮なる肉。
【二四六】爵。酒杯なり。
【二四七】勞逸齊し。逸は勞の反對にて安樂なること、勞者も逸者も、それ〴〵適當なる恩賞にあづかること。
【二四八】大輅。天子の車をいふ。
【二四九】容與。ゆつたりとしたる貌。
【二五〇】豫章。上林の中に在る館の名。
【二五一】昆明。池の名。
【二五二】牽牛、織女。星の名。昆明池に二石人あり、牽牛織女に象る。
【二五三】蘭茝。香草の名。
【二五四】曄曄は白花の貌。猗猗は美なる貌。
【二五五】江漢。長江及び漢水。

逍遙し、豫章館に集り昆明池に臨めば、左右に牽牛織女二石人あり。池水廣闊にして天河の際なきが如く、草樹の美盛なること錦繡を敷きたるが如く、塘陂に映帶し、水禽また羣を成して浮沈往來す。

是に於て、(二五六)後宮輚輅に乘り (二五七)龍舟に登り、
(二五八)鳳蓋を張り (二五九)華旗を建て、(二六〇)黼帷を袪げ
清流に鏡み、微風に靡き (二六一)澹淡として浮ぶ。
(二六二)櫂女謳ひて (二六三)鼓吹震ひ、聲激越し (二六四)謍
として天に厲り、鳥は羣り翔り、魚は淵を窺ふ。
(二六五)白鷴を招げて雙鵠を下し、(二六六)文竿を揄いて
比目を出し、鴻罿を撫り矰繳を御し、舟を方べ
て竝び鶩せ、俛仰して樂を極む。遂に乃ち風のごとく擧り雲のごとく搖き、浮遊して溥く覽、前は秦嶺に乘り後は九嵕を越え、東は (二六七)河華に薄り西は (二六八)岐雍を涉る。宮館の歷る所百有餘區、行の朝夕する所、儲、供を改めず。(二六九)上下を禮して山川に接し、(二七〇)休佑の用ふる所を究め、遊童の歡謠を采り、從臣の (二七一)嘉頌を第づ。

【二五六】後宮は宮中に仕ふる婦人をいふ。輚輅は臥車なり。
【二五七】龍舟。龍を畫きし舟。
【二五八】鳳蓋。蓋は車の上に建つるヒオホヒ。
【二五九】華旗。彩旗旗は音キウ。
【二六〇】黼帷。繡帷なり。
【二六一】澹淡。浮ぶ貌。
【二六二】櫂女。楫取りの女。
【二六三】鼓吹。鼓をならしたり笛を吹いたりすること。
【二六四】謍。聲の大なる貌。
【二六五】白鷴。後漢書註に弩に黃間の名あれば、白鷴も亦弩の類ならんといへり。今此說に從ふ。
【二六六】文竿。飾を施せる釣竿。
【二六七】河華。黃河及び華山。
【二六八】岐雍。岐州及び雍州。
【二六九】上下。天地をいふ。
【二七〇】休佑。休は美なり、佑は福なり。
【二七一】嘉頌。嘉は美なり、頌は功德をほむる歌なり。

【大意】后妃宮人は或は臥車に乘るあり、或は龍舟に乘るあり。車には鳳蓋を張り舟には彩旗を建て、帷幔を掲げて清流を渡り、微風に送られて泛遊す。舟女の謳、鼓吹の聲と齊しく發し、其聲殷殷として天に至り、鳥は驚きて飛翔し、魚は懼れて淵に潜む。弩を發しては雙鵠を射落し、釣竿を引いては比目を取り、或は網を撒ち繒を發し、俯仰して其樂を極む。其衆多なること風雲の搖擧するが如く、秦嶺九嵕等の山を越え、東は河華に至り西は岐雍を渉り、其中宮館百餘個所あり。朝夕に行遊して其儲蓄供給を絶たず。かくて天神地祇と山川の神とを祭りて、美福の用を盡し、遊童の歡謠を採り、從臣の獻ずる頌歌を收めて之を次第す。

斯時に於て都都相望み、邑邑相屬き、國は十世の基に藉り、家は百年の業を承け、士は(二七二)舊德の名氏に食み、農は(二七三)先疇の畎畝に服き、商は族世の鬻ぐ所を修め、工は(二七四)高曾の(二七五)規矩を用ひ、(二七六)粲乎隱隱として、各〻其所を得たり。臣の若き者は、徒に迹を舊墟に觀、之を(二七七)故老に聞けるのみ。十分にして未だ其一端をも得ず。故に徧く擧ぐる能はざるなりと。

【大意】この時に至り都邑繁多にして相連續し、國家は十世百年の基礎を繼ぎ、士は祖先の德蔭に

【二七二】舊德の名氏。先祖の庇蔭によりて官職に就くこと。漢の盛時には官職を世襲したるを以て官職を以て姓とする者ありきといふ。
【二七三】先疇。先祖よりの田地。
【二七四】高曾。高祖及び曾祖。
【二七五】規。ブンマハシ。矩。定木。
【二七六】粲乎隱隱。明盛の貌。
【二七七】故老の老は音ボ。

よりて衣食し、農は父祖傳來の田地を耕し、商は父祖の世業に服し、工は父祖の道具を用ひ、各、其の業を失はず。臣（西都の賓自ら謂ふ）の如きは、ただ故迹を觀、故老の言を聞きて之を知れるのみ。されば十が一をも知ること能はざるなり。故に悉く擧げ述ぶる能はざるなりと。西都の賓の語る所かくの如し。

東都の賦

東都の主人、（一）喟然として歎じて曰く、（二）痛ましいかな風俗の人を移すや。子は實に秦人なり、（三）館室を矜夸し、河山を保界す。信に昭襄を識り始皇を知るも、烏んぞ大漢の云爲を覩んや。夫れ大漢の元を開くや（四）布衣より奮りて以て皇位に登り、（五）數朞に由りて萬代を創む。蓋し（六）六籍も談ずる能はず、（七）前聖も得て言ふなき所なり。此時に當り（八）功橫なるも天に當るあり。討逆へども

【一】喟然。歎ずる聲、主人まさに賓に答へんとし、先づ歎ずるなり。

【二】痛ましいかな云云。子（賓を指して言ふ）は漢代に生れたれば淳和の性あるべき筈なるに、久しく長安（長安は昔の秦の地に在り）に居り、奢侈の風俗に感染し宮館の壯麗と河山の雄大とを誇る。子は、昭襄王始皇帝の奢侈を極めたるを知るのみ、焉ぞ我が漢代の言論動作を知らんやとの意。

【三】館室。一に宮室に作り、又宮館に作る。

【四】布衣。庶人をいふ漢書に高祖曰ク吾布衣ヲ以テ三尺ノ劍ヲ提ゲ天下ヲ取ルとあり。

【五】數朞。一周年を朞といふ、數年に同じ、僅に數年にして項羽を滅し萬世の帝業を建てたるをいふ。

【六】六籍。詩書易春秋禮樂の六經をいふ。

【七】前聖。昔の聖人なり。六經聖人と雖、能く記述するなきをいふ。

【八】功橫云云、高祖の功業討伐橫逆なるが如しと雖、よく天人に順應したるを以て遂に天下を平定するを得たり。功は一に攻に作り、討は一に計に作る。

民に順なるあり。故に(九)婁敬勢を度りて其說を獻じ、(一〇)蕭公宜しきを權りて其制を拓けり。時豈に(一一)泰にして安ならんや。計以て已むを得ざればなり。(一二)吾子嘗て是を睹ず。顧つて後嗣の(一三)末造を曜すは、亦暗からずや。今將に子に語るに(一四)建武の治、永平の事を以てし、(一五)太淸に監みて、以て子の惑志を變せんとす。

【大意】東都の主人、西都の賓の語る所を聞き、喟然として歎じて曰く、風俗の人心を移易すること實に痛嘆すべきものあり。足下は漢代に生れたれば、當に淳和の性あるべきに、長く秦地長安に居住せる故、秦の奢侈の風俗に移易せられ、徒に宮室の壯と河山の廣とに誇り、昭襄始皇の豪奢を知るのみにして、我が大漢の功業を知るに及ばざるのみ。抑〻我が高祖の帝業を開くや、布衣より起りて皇位に登り、僅に數年にして子孫萬世の基を建てたり。是れ六經も記述せず、先聖も言はざる所の偉業なり。此時に當り高祖の功討橫逆なるに似たりと雖も、よく天人に順應せしかば、遂に天下を平定するを得、

【九】婁敬云云。西都賦の二六を見よ。

【一〇】蕭公。漢の高祖の臣蕭何なり。漢書に蕭何未央宮ヲ修ム、高祖ソノ壯麗ナルヲ見テ甚ダ怒ル、何曰ク、天下未ダ定ラズ、故ニ因ツテ以テ宮室ヲ就スベシ、且ツ夫レ天子ハ四海ヲ以テ家トナス、壯麗ニアラズバ以テ威ヲ重クスルナシ云云ト、高祖之ヲ悅ブとあり。

【一一】泰にして云云。時の泰平にして安らかなるに由るにあらず、創業の際已むを得ざるに出でしのみ。

【一二】吾子、人を親愛して呼ぶ詞、西都の賓を指して言ふ。

【一三】末造。季世をいふ。

【一四】建武。後漢の光武帝の年號。永平。後漢の明帝の年號。

【一五】太淸。無爲の化をいふ。

婁敬西長安の要害に就きて都を奠めんことを說き、蕭何權に宮殿を壯麗にして皇威を尊嚴にせんとしたりしは、時の太平にして安らかなるに由るにあらず。創業の際已むを得ざりしに出でしのみ。足下の此理を識らずして、後世の奢侈を誇り、以て美となすは、事理に暗き者と謂はざるべからず。因つて吾今語るに光武明帝の政事と無爲の治化とを以てし、以て足下の惑を解かん。

往昔王莽逆を作して、(一六)漢祚中ごろ缺け、天人誅を致して、(一七)六合相滅す。時の亂に于て生民幾んど亡し、鬼神泯絕し、壑には(一八)完柩なく郛には遺室なく、原野は人の肉に厭せられ、川谷は人の血を流し、(一九)秦項の災も猶ほ半なる克はず。(二〇)書契より以來、未だ之を紀するあらず。故に下人號いて(二一)上訴し、(二二)上帝懷ひて降監し、乃ち命を(二三)聖皇に致せり。

【大意】昔王莽の大逆を爲し漢の皇位を簒ふや、天人相共に之を誅滅せんとし、遂に天下の大亂とはなりぬ。是が爲に生民殆んど死し、鬼神盡く絕え、壑には傷創を被りし死骸横はり、民居は燒かれて村に人家なく、尸屍原野に積み流血川谷に滿ち、秦皇項羽の災害と雖も猶ほ此半にも及ばず。文字ありてより以來、未だ曾て記錄せざる慘

(一六) 漢祚。祚は皇位をいふ。
(一七) 六合。西都賦に見ゆ。
(一八) 完柩。完全なる死骸をいふ。釋名に牀ニ在ルヲ尸トイヒ、棺ニ在ルヲ柩トイフとあり。
(一九) 秦項。秦及び項羽なり。
(二〇) 書契。文字をいふ。
(二一) 上訴。天に訴ふること。
(二二) 上帝。天帝即ち天の神なり。
(二三) 聖皇。後漢の光武帝をいふ。

害なりき。されば天下の民號泣して上天に訴へ、天亦下民を愍みて降監し、遂に光武に命じて天子たらしめぬ。

是に於て、聖皇乃ち(二四)乾符を握り(二五)坤珍を闡き、(二六)皇圖を披き(二七)帝文を稽へ、赫然として憤を發す。應ずること(二八)興雲の若く、(二九)昆陽を霆撃し、(三〇)憑怒して雷震す。遂に(三一)大河を超え(三二)北嶽に跨り、(三三)號を(三四)高邑に立て都を(三五)河洛に建て、百王の(三六)荒屯を紹ぎ、(三七)造化の盪滌に因り、(三八)元を體し制を立て、天に繼いで作り、(三九)唐統を系ぎて(四〇)漢緒を接け、羣生を茂育し(四一)疆宇を恢復す。勳(四二)在昔を兼ね、事(四三)三五よりも勤めたり。豈特(四四)紛綸たる(四五)后辟に(四六)軌を方べ跡を並べ、近古の務め

【二四】乾符。天符に同じ、上天より降せる祥瑞なり。
【二五】坤珍。洛書なり、禹の水を治むる時、龜文列を背に負ひて出づ。禹之に因りて洪範九疇を作るといふ。
【二六】皇圖。河圖なり、伏犧氏の天下に王たるや、龍馬あり圖を負ひて河より出づ、之に因りて八卦を作るといふ。
【二七】帝文。天文なり。
【二八】興雲。湧き起る雲。
【二九】昆陽。城の名、光武王莽を此に破れり。
【三〇】憑怒。憑は盛なり。
【三一】大河。黄河なり。
【三二】北嶽。恆山をいふ。
【三三】號。天子の稱號。
【三四】高邑。地名、東觀漢記に皇帝位ニ卽キ鄗ヲ改メテ高邑トナスとあり。
【三五】河洛。洛陽なり。
【三六】荒屯。艱難なり。
【三七】造化。天地をいふ。盪滌。除き去ること。滌は音タク。
【三八】元。善なり。
【三九】唐統。唐堯の統、漢は堯の後裔なり。
【四〇】漢緒。漢室の事業。
【四一】疆宇。領土なり。
【四二】在昔。祖先なり。
【四三】三五。三皇五帝。伏犧、神農、黄帝を三皇といひ、少昊、顓頊、帝嚳、堯、舜を五帝といふ。
【四四】紛綸。衆多なる貌。
【四五】后辟。君主をいふ。
【四六】軌を方べ云云。趣を同うすること。

たる所を治め、一聖の（四七）險易を蹈むと云爾んや。

【大意】光武皇帝乃ち天意を奉じて四海を平定せんとし、赫怒して義兵を擧ぐれば、天下之に應ずる者雲の如く、王莽の兵を昆陽城に破る。其勢雷霆の震ふが如し。遂に河北恆山の地方に到り百姓を安集し、高邑に於て帝位に卽き、洛陽に入りて都を奠め、百王艱難の後を承け天意が王莽の亂虐を除くに乘じ、善道を體得して制度を定め、茲に繼天の君主となり、唐堯の統を嗣ぎ前漢の遺業を繼ぎ、衆民を滋養して國土を恢復せり。其勳功遠く祖先にまさり、三皇五帝も及ぶ能はざる所なり。豈特世の常の君主と趣を同うし、近古一聖治亂の法を蹈襲せるのみならんや。

且夫れ建武の元、天地。命を革め、四海の內、更に夫婦を造し、肇めて父子あり、君臣初めて建ち、人倫寔に始まる。斯れ乃ち、伏羲氏の（四八）皇德を基せる所以なり。州土を分ち市朝を立て舟輿を作り器械を造る。斯れ乃ち（四九）軒轅氏の帝功を開ける所以なり。龔んで天罰を行ひ、天に應じ人に順ふ。斯れ乃ち（五〇）湯武の王業を昭にせる所以なり。都を遷し邑を改めしは、（五一）殷宗中興の則あり。（五二）土の中に卽けるは、（五三）周成隆

【四七】險易。治亂といふが如し。
【四八】皇德。皇は大なり。
【四九】軒轅氏。黃帝なり。
【五〇】湯武。殷の湯王、周の武王。
【五一】殷宗中興。殷王盤庚、河北に都せしが後河南に渡りて湯の故都に都し殷道復た興りぬ。
【五二】土の中。中央の土地、卽ち洛陽を指す。
【五三】周成隆平。周成は周の成王、隆平は太平といふが如し。成王は中土に就きて洛陽に都せり。

平の制あり。(五四)尺土一人の柄に階らざるは、符を高祖に同うし、己に克ち禮を復み、以て終始に奉せしは、允に(五五)孝文より恭み、(五六)憲章稽古し(五七)岱を封じ(五八)成を勒せしは、儀(五九)世宗より炳き、(六〇)六經を按じて德を校へ、古昔を眇にして功を論せしは、仁聖の事既に該はり、帝王の道備れり。

【大意】建武元年、天地命を改め、夫婦父子君臣等人倫の道、皆初めて立ちしは、太古の世、伏犧氏出でて父子君臣の道を成し、以て大德を立てたるが如く、國土を分ち市朝を立て、舟車を作り禮器を作りしは、黃帝と其功を同うし、愼んで天罰を行ひ、天意人心に應じて王莽を誅せしは、湯武の桀紂を放伐せると其事を同うし、遷都を決行せしは、殷の中興の主盤庚と功を同うし、國土の中央を擇びしは、成王太平の法度に叶ひ、尺土の封なく天子の權勢に據らずして、終に天下を一統せるは、高祖と事を同うし、私慾に克ちて禮儀を履行し、以て始終を全うせしは、文帝と其德を同うし、古制に準據して泰山を封じ、成功を石に刻せるは、其儀武帝にまさり、遠く六經古聖人の功德を考察せしは、仁聖の德、帝王の道、盡く一身に備はれりといふべし。

【五四】尺土。僅なる領土。一人。一人の臣民。
【五五】孝文。漢の文帝。
【五六】憲章稽古。古人の法度に則り、古事を考ふること。
【五七】岱は泰山なり。封は壇を築きて祭ること。
【五八】成を勒す。成功を石に刻すること。
【五九】世宗。漢の武帝をいふ。
【六〇】六經。前の六籍に同じ。

（六一）永平の際に至りて、（六二）重熙累洽し、（六三）三雍の上儀を盛にし、（六四）袞龍の（六五）法服を修め、（六六）鴻藻を鋪き（六七）景鑠を信べ、（六八）世廟を揚げ（六九）雅樂を正し、神人の和允に洽く、羣臣の（七〇）序既に肅む。乃ち大輅を動かして（七一）皇衢に遵ひ、（七二）方を省みて巡狩し、萬國の有無を窮覽し、聲敎の被る所を考へ、皇明を散じて以て幽を燭し、然る後、周の舊を增して、洛邑を修め、（七三）巍巍たるを扇して（七四）翼翼たるを顯し、漢京を（七五）諸夏に光かし、八方を總て之が極となす。

【大意】明帝光武の後を承け、光輝德澤更に加はり、禮儀を講明し、法服を定め、宗廟を建て善美を盡し、雅樂を正す。是に於て神人和合し羣臣秩序あり。乃ち巡狩の事を行ひ、萬國の有無を觀、治化の及ぶ所を考へ、明德を幽遠の地に明かにし、周の舊制に增して洛邑を修め、漢京を中華に輝かし、以て八極を統ぶ。

【六一】永平。後漢の明帝（光武帝の子）の年號。
【六二】重熙。熙は光明なり。更に光明を重ぬること。累洽は恩澤の更に洽く及ぶこと。
【六三】三雍。禮を講習する處。
【六四】袞龍。龍を畫きし天子の服。
【六五】法服。先王の法度にかなひし服。
【六六】鴻藻。鴻は大、藻はアヤカザリなり。
【六七】景鑠。景は大、鑠は美なり。
【六八】世廟。光武帝の廟。
【六九】雅樂。正しき音樂。
【七〇】序。秩序。
【七一】皇衢。天子の御通路。
【七二】方を省み。地方を巡回すること、巡狩に同じ。
【七三】巍巍。廣大なる貌。
【七四】翼翼。法度にかなへる貌。
【七五】諸夏。中華に同じ。

是を以て皇城の內、宮室光明にして、闕庭神麗、奢も踰ゆべからず、儉も侈る能はず。外は則ち原野

に因りて以て苑と作し、流泉に(七六)塡つて沼となし、(七七)蘋藻を發して以て魚を潛め、圃草を豐にして以て獸を毓ふ。制(七八)梁鄒に同じく(七九)誼靈囿に合へり。

【大意】皇城の內、宮闕修麗にして正に禮度に合ひ、奢者も以て踰ゆべからず、儉者も更に侈る能はず。皇城の外は、原野に因つて苑を開き、流泉を引きて沼となし、水草繁茂して以て魚を潛ましむべく、圃草は萋萋として以て獸を養ふべし。其制度梁鄒靈囿に述ぶる所と相符す。(儉を美するなり)。

若し乃ち時節に順つて(八〇)蒐狩し、車徒を簡んで、以て武を講ずれば、則ち必ず之に臨むに王制を以てし、之を考ふるに風雅を以てす。(八一)騶虞を歷へ、(八二)駟驖を覽、(八三)車攻を嘉し、(八四)吉日を采る。禮官儀を整へ、乘輿乃ち出づ。

【大意】乃ち時節に順つて(皆農業の隙の時に行ふものとす。故に時節に順ふといふ)狩獵をなし、

【七六】塡。昭明太子諱は順、故に順の字を避けて塡となせり。

【七七】蘋藻。共に水草の名。

【七八】梁鄒。詩の篇の名、毛詩傳に梁鄒ハ王者ノ田ナリとあり。

【七九】誼。義に同じ。靈囿は詩篇の名、詩經に王靈囿ニ在ス麀鹿ノ伏スル攸云云とあり。

【八〇】蒐狩。獵すること。

【八一】騶虞。詩經召南の篇名。序に蒐田スルニ時ヲ以テス。仁アリテ騶虞ノ如シとあり。

【八二】駟驖。詩經秦風の篇名。序に襄公ヲ美スルナリ、始メテ命ゼラレテ田狩ノ事アリとあり。

【八三】車攻。詩經小雅の篇名。序に宣王諸侯ヲ東都ニ會シ、田獵ニ因ツテ車徒ヲ選ブとあり。

【八四】吉日。小雅の篇名。序に宣王ヲ美スルナリ云云とあり。

大に車馬徒卒を閲し、以て武を講ず。其制必ず王制（禮記の篇名）の定むる所に據り、風雅（詩經の國風及び大小雅）に記述する所に從ふ。禮儀の官先づ儀法を整へ、天子乃ち出でて狩獵す。

是に於て(八五)鯨魚を發げ(八六)華鐘を鏗き、玉輅に登り(八七)時龍に乗る。(八八)鳳蓋棽麗にして、(八九)和鑾玲瓏たり。(九〇)天官景のごとく從ひ、威を寢にし容を盛にす。山靈野を護り、(九一)屬御に(九二)方神あり、雨師泛灑し風伯塵を清め、千乘雷のごとく起り、萬騎(九三)紛紜として、(九四)元戎野に竟り、(九五)戈鋋雲を彗ひ、(九六)羽旄霓を掃ひ、旌旗天を拂ひ、(九七)焱焱炎炎として、光を揚げ文を飛ばし、爛を吐き風を生じ、野を欱ひ山を歕き、日月も之が爲に明を奪はれ、丘陵も之が爲に搖震す。

【大意】　先づ出御の合圖として、大鐘を打てば、天子玉輅に乗り、鳳蓋を張り和鑾を鳴らし、百官之に扈從し威儀堂堂たり。神靈之を擁護し雨師風伯道路を掃ひ清め、千乘萬騎陸續として大軍野に

【八五】鯨魚。撞木、鐘を打つ木なり。尚書大傳に天子將ニ出デントスレバ黄鐘ヲ撞ツとあり。

【八六】華鐘。篆刻の文飾ある故華といふ。

【八七】時龍。漢書注に馬八尺以上ヲ龍トイフとあり。各四時の色（春は青、夏は赤、秋は白、冬は黒）に隨ふ故、時龍といふ。

【八八】鳳蓋。西都賦に見ゆ。棽麗は美しき貌。

【八九】和鑾。共に鈴なり、鑾は衡に在り、和は軾に在り。玲瓏は玉の音なり。

【九〇】天官。天子の官吏。景は影なり。

【九一】屬御。屬車の御者。

【九二】方神。四方の神。

【九三】紛紜。衆多の貌。

【九四】元戎。大兵なり。

【九五】戈鋋。鋋は小矛なり、ホコ。

【九六】羽旄。羽をつけたる指揮旗。

【九七】焱焱炎炎。旗のひらひらする貌。

滿ち、戈は雲を掃ひ旌旗は天を壓し、山野を吸吹し日月を掩蔽し、丘陵も之が爲に震動す。遂に(九八)中囿に集り、(九九)師を陳ね屯を案じ、部曲を駢べ、(一〇〇)校隊を列ね、三軍を勒して將帥に誓ひ、然る後烽を擧げ鼓を伐ち、令を申ねて三驅す。輕車は霆のごとく激し、驍騎は電のごとく騖せ、(一〇一)由基射を發し(一〇二)范氏御を施す。弦は(一〇三)踶禽せず轡は(一〇四)詭遇せず、飛ぶ者は翔るに及ばず、走る者は去るに及ばず。指顧倏忽、獲車已に實ち、樂むも盤を極めず。殺すも物を盡さず。馬は餘足を蹻いて士の怒未だ泄きざるに、先驅路に復り、(一〇五)屬車(一〇六)節を按ず。

【大意】遂に御獵地に到り、衆兵を列ね隊伍を整へ、將帥に誓ひ、烽火を擧げ、太鼓を伐ちて號令を申嚴し、乃ち三驅すれば、輕車は飛び駿馬は馳せ、射者御者いづれも輕捷にして鳥獸遁れ去るに暇あらず。指顧の間にして、獲物已に車に滿つ。因つて其樂を極めず、盡く鳥獸を殺すことをなさず。馬の足力猶ほ餘あり、士の勇氣尙ほ未だ盡きざるに、君の前驅早くも歸路に就く。是に於て從屬の士馬足を節し徐行して歸る。

【九八】中囿。御獵場なり。
【九九】師。軍勢なり。
【一〇〇】校隊。隊伍といふがごとし。
【一〇一】由基。養由基とて射術の名人なり。
【一〇二】范氏。禹の時の御者。
【一〇三】踶禽。踶は迎へ視ることなり。
【一〇四】詭遇。御者の法を曲げて射者の都合のよきやうにすること、孟子に出づ。
【一〇五】屬車。從者の乘る車。
【一〇六】節を按ず。馬足を節して徐行すること。

是に於て（一〇七）三犧を薦め（一〇八）五牲を效して、神祇を禮し、百靈を懷け、（一〇九）明堂に覲し、（一一〇）辟雍に臨み、（一一一）緝熙を揚げ皇風を宣べ、（一一二）靈臺に登りて（一一三）休徵を考へ、乾坤を俯仰して（一一四）聖躬を（一一五）參象し、（一一六）中夏を目て德を布き、（一一七）四裔を瞰て（一一八）稜を抗げ、西のかた（一一九）河源を盪し、東のかた（一二〇）海濱に澹はし、北のかた（一二一）幽崖を動かし、南のかた（一二二）朱垠に曜かす。（一二三）殊方別區、界絕えて鄰からず。（一二四）孝武の征せざりし所、（一二五）孝宣の未だ臣とせざりし所より、陸に讋き水に慄れ、奔走して來賓せざるはなし。遂に（一二六）哀牢を綏んじて永昌を開く。春王（一二七）三朝、漢京に（一二八）會同す。

【大意】天子乃ち犧牲を薦めて羣神を祭り、

【一〇七】三犧。天地宗廟の三者を祭る犧牲。
【一〇八】五牲。麋、鹿、麏、狼、兎なり。
【一〇九】明堂。周書に明堂ハ諸侯ノ尊卑ヲ明ニスルナリ。故ニ周公之ヲ建テ諸侯ヲ明堂ノ位ニ朝セシメ、禮樂ヲ制シ度量ヲ頒ツとあり。
【一一〇】辟雍。天子の設くる大學なり。
【一一一】緝熙。熙は光明なり、光明の德を揚ぐること。
【一一二】靈臺。天の祥瑞を觀る臺。
【一一三】休徵。休は美なり、祥瑞なり。
【一一四】聖躬。天子の御身。
【一一五】參象。象は比なり。
【一一六】中夏。中國といふに同じ。
【一一七】四裔。四方のはて、邊陬の地。
【一一八】稜。稜威なり、御威光。
【一一九】河源。黃河の源。
【一二〇】海濱。海濱なり。
【一二一】幽崖。書經堯典の幽都なり。
【一二二】朱垠。南方の地なり。
【一二三】殊方別區。異國なり。
【一二四】孝武。前漢の武帝。
【一二五】孝宣。前漢の宣帝。
【一二六】哀牢。東觀漢記に益州徼外ノ哀牢王衆ヲ率ヰテ化ヲ慕フ、地曠遠ナルヲ以テ永昌郡ヲ置ケリとあり。
【一二七】三朝。元旦に諸侯の天子に拜賀すること、元旦は歲・月、日の朝なれば三朝とはいふなり。
【一二八】會同。參朝すること。

羣臣を明堂に見て德光を輝かし、辟雍に臨んで禮儀を講明し、靈臺に登りて祥瑞を考へ、俯仰して天地の象を觀て、以て其身に比し、此と德を合せんことを思ひ、乃ち威德を四方僻遠の地に輝かす。されば絕界無鄰の外國にして、武帝宣帝極盛の世に於ても、未だ臣服せしむるを得ざりしものも、皆恐懼して來り服せざるはなく、歲旦には圖籍珍寶を持ちて來り朝するに至れり。

是日や、天子四海の圖籍を受け、萬國の貢珍を膺け、內には諸夏を撫で外には百蠻を綏んず。爾して乃ち禮を盛にし樂を興し(一二九)供帳して(一三〇)雲龍の庭に置き、(一三一)百寮を陳ねて(一三二)羣后を賛け、皇儀を究めて帝容を展ぶ。是に於て(一三三)庭實千品あり、(一三四)旨酒萬鍾あり。(一三五)金罍を列ね玉觴を班ち、(一三六)嘉珍御めて(一三七)太牢饗く。爾して乃ち(一三八)食擧雍徹、(一三九)太師樂を奏し、金石を陳ね絲竹を布く。鐘鼓(一四〇)鏗鎗として管絃(一四一)曄煜たり。(一四二)五聲を抗げ(一四三)六律を極め、(一四四)九功を歌ひ、

【一二九】供帳。幕を張りわたして假殿を作り宴席となすこと。
【一三〇】雲龍。門の名。
【一三一】百寮。百官なり。
【一三二】羣后。諸國の君侯。
【一三三】庭實。庭上に陳列せられたる貢獻の物。
【一三四】旨酒。美酒なり。鍾は酒器なり。
【一三五】金罍。金の杯。
【一三六】嘉珍。珍味佳肴。
【一三七】太牢。牛肉料理。
【一三八】食擧雍徹。食を進むるとき、又取り下ぐる時に奏する音樂。
【一三九】太師。樂官なり。
【一四〇】鏗鎗。聲の盛なる貌。
【一四一】曄煜。聲の盛なる貌。
【一四二】五聲。宮商角徵羽なり。
【一四三】六律。黃鐘、太簇、姑洗、蕤賓、夷則、無射なり、陽を律といひ陰を呂といふ。
【一四四】九功。書經禹貢篇に九功惟レ叙デ九叙惟レ歌フとあり。

（二四五）八佾を舞ひ、（二四六）韶武備りて（二四七）泰古畢る。（二四八）四夷間に奏す、德廣の及ぶ所（二四九）僸佅兜離、具に集らざるなし。萬樂備りて百禮暨り、皇歡浹くして羣臣醉ひ、（二五〇）烟熅を降して元氣を調へ、然る後鐘を撞いて罷めんことを告げ、百寮遂に退く。

【大意】この日天子は諸侯外藩の圖籍珍寶を納れ、酒饌を賜ひ禮樂を設けて之を安撫し、百官をして諸侯を助けしめ、以て皇帝の威容を張る。八珍の美味筵に溢れ、絲竹管絃の聲天地に轟く。先づ中夏の樂を奏し、次に四夷藩國の樂に及ぶ。是れ實に皇德の廣く四方に及べる結果なり。天子の歡既に浹くして、羣臣皆醉ふに至り、天その和樂に感じて元氣を降す。然る後鐘を撞きて終を告ぐれば、百官初めて退散す。

是に於て聖上（二五一）萬方の歡娛し、又膏澤に沐浴するを覩、その侈心の將に萌し（二五二）東作を怠らんとするを懼れ、乃ち（二五三）舊章を申べて明詔を下し、有司に命じて（二五四）憲度を班ち、節儉を昭にして（二五五）太

【二四五】八佾。佾は列なり、八八六十四人の舞なり。
【二四六】韶武。韶は舜の樂、武は武王の樂。
【二四七】泰古。上古の音樂。
【二四八】四夷。四方異國の音樂。
【二四九】僸佅兜離。北夷の音樂を僸といひ、東夷のを佅といひ西夷のを朱離といふ、兜も夷國の樂なり。
【二五〇】烟熅。元氣なり。
【二五一】萬方。萬國といふがごとし。
【二五二】東作。農耕なり。
【二五三】舊章。先王の法度。
【二五四】憲度。法度なり。
【二五五】太素。儉約なり。

素を示し、後宮の麗飾を去て、乘輿の服御を損し、工商の淫業を抑へ、農桑の盛務を興し、遂に海內に令して（一五六）末を棄て（一五七）本に反り、僞に背きて眞に歸せしむ。女は織紝を修め男は（一五八）耕耘を務め、器は（一五九）陶匏を用ひ服は（一六〇）素玄を尙び、纎美を恥ぢて服せず、奇麗を賤んで珍とせず。金を山に捐て珠を淵に沈む。

【大意】天子萬國の歡樂し、咸く恩澤に沐浴せるを觀、自ら奢侈の心を生じて農務を怠らんことを懼れ、勸農の詔を下し、法度を布きて節儉の風を明にし、後宮の美麗を除き、乘輿の服飾を減じ、工商淫巧の物を止め、農桑の事を盛にし、陶匏を以て器となし、奇麗を珍とせず。人皆貨財を利とせず、富貴を尙ばざるに至れり。

是に於て百姓瑕を滌ぎ穢を盪かして、至清に鏡み、（一六一）形神寂寞として耳目營まず。嗜欲の源滅え、廉恥の心生じ、優游して（一六二）自得し、玉のごとく潤うて金のごとく聲らざるはなし。是を以て四海の內、學校林の如く、（一六三）庠序門に盈ち、（一六四）獻酬交錯して（一六五）俎豆（一六六）莘莘たり。下に舞ひ上に歌ひ、德を蹈み仁を詠じ、（一六七）登降飫宴の禮既に畢る。因て相與に玄德を嗟歎し、讜言弘說し、咸く和を含み

【一五六】末。商賈なり。
【一五七】本。農なり。
【一五八】耕耘。耕は田を耕すこと耘は草を除くこと。
【一五九】陶匏。陶器及びフクベ。
【一六〇】素玄。白と黑。
【一六一】形神寂寞。肉體精神共に清淨にして念慮なきこと。
【一六二】自得。其境遇に安んずること。
【一六三】庠序。學校なり。
【一六四】獻酬。酒杯をやりとりする禮。
【一六五】俎豆。供物を盛る器。
【一六六】莘莘。衆多なる貌。
【一六七】登降。登降は揖讓の禮なり。飫宴は飲食の禮なり。

て氣を吐き、頌して曰く盛なるかな斯世と。

【大意】百姓淳樸の化を受けて汙穢を一洗し、恬然として嗜慾の念なく、耳目の慾を肆にせず。廉恥の心即ち生じ、優游自得して金玉の温潤なるが如し。四海の內學校既に多く、皆手舞ひ足蹈みて仁德を詠歌す。揖讓飮食の禮已に終り、因つて天子の高德を嘆美し、相和樂して昭代の隆盛を頌す。

今論者は、ただ（一六八）虞夏の書を誦し、殷周の詩を詠じ、（一六九）羲文の易を講じ、（一七〇）孔氏の春秋を論ずるを知るのみ。能く古今の（一七一）淸濁を精くし、漢德の由る所を究むること罕なり。唯子は頗る舊典を識るも、又徒に（一七二）末流に馳騁す。故を温ねて新しきを知ること已に難く、而して德を知る者鮮し。且夫れ（一七三）西戎に僻界し、險阻四塞し、其防禦を修むるは、土の中に處て（一七四）平夷洞達し萬方輻湊するに孰與ぞや。秦嶺九嵕涇渭の川は、曷ぞ（一七五）四瀆五嶽、河を帶び洛に泝り、（一七六）圖書の淵なるに若かんや。建章甘泉、列仙を館御するも、靈臺明堂、天人を統和するに孰與ぞや。太液昆明、鳥獸の囿は、曷ぞ辟雍海のごとく流れ、道德の富めるに若かんや。游俠踰侈、義を犯し禮を侵すは、同じく法度を履み翼翼濟濟た

【一六八】虞夏。虞夏は虞舜及び夏の禹王書經に虞書夏書あり。
【一六九】羲文。伏羲及び文王。
【一七〇】孔氏。孔子なり。
【一七一】淸濁。善惡なり。
【一七二】末流。奢侈をいふ。
【一七三】西戎。西方のえびす。長安は西戎の地に近し。
【一七四】平夷。平坦なり。
【一七五】四瀆。四瀆は江河淮濟の四大川をいふ。五嶽は泰山衡山華山恒山嵩山をいふ。
【一七六】圖書の淵。河圖洛書を出したる處。

るに孰與ぞや。子は徒に秦の阿房の天に造るに習ひて、京洛の制あるを知らず。函谷の關すべきを識りて、王者の外なきを知らざるなりと。

【大意】今足下（西都の賓を指す）徒に古書を論說するを知りて、精しく善惡を辨じ、我が大漢の由る所を盡す能はず。さればただ舊典を識り徒に奢侈の事に馳するのみ。故事を尋ねて其新を知ると已に難し。且つ長安の西戎に僻在し險阻を以て防禦となすは、我が洛陽の天地の中央に位し、平坦通達、萬國をして歸服せしむるに如かず。秦嶺九嵕涇渭諸川は、我が洛陽の四瀆五嶽ありて、河圖洛書の淵を控帶するに如かず。建章甘泉の宮、列仙を館せしむるは、我が洛陽靈臺明堂の天人を統和するに如かず。太液昆明の池、鳥獸の囿苑は、我が洛陽の辟雍に於て、德化を宣布するに如かず。游俠奢侈の行は、義を犯し禮を侵すの甚しきものにして、我が洛陽の濟濟たる多士、法度を履みて翼翼たるに如かざるにあらずや。要するに足下は徒に阿房宮の壯麗なるを知りて、我が洛陽の法度あるを知らず、函谷關（秦地に在り）の四方を防ぐべきを知りて、王者の外敵なきを知らざるなりと。

主人の辭、未だ終らざるに、西都の賓、（一七七）矍然として容を失ひ、逡巡して階を降り、（一七八）慄然として意下り、手を捧げて辭せんと欲す。主人曰く、位に復れ。今將に子に五篇の詩を授けんとすと。賓既

【一七七】矍然。驚き視る貌。
【一七八】慄然。懼る貌。

に業を卒へ、乃ち稱して曰く。美いかな斯詩や。義（一七九）揚雄よりも正しく、事（一八〇）相如よりも實なり。唯主人の學を好むのみにあらず、蓋し乃ち斯時に遭遇せり。小子（一八一）狂簡にして裁する所を知らず。既に正道を聞けり。請ふ身を終るまで之を誦せんと。其辭に曰く、

【大意】 主人東都洛陽の制度を述ぶること未だ畢らざるに、賓乃ち驚き、却行して階を下り、將に辭して歸らんとす。主人之を呼びて席に復せしめ、其作る所の詩を授く。賓之を讀み畢りて曰く、此詩誠に善し。詞義は揚雄よりも正しく、事實は司馬相如よりもまされり。唯主人は學を好んで詞藻に富めるのみにあらず、又太平の時に遭ひたれば、禮文の述ぶ可きあるなり。吾れ狂簡妄進して、自ら裁制する所を知らず。今既に正道を聞くを得たり。請ふ終身之を誦せんと。

明堂の詩

於昭かなるかな明堂。明堂孔だ陽なり。（一八二）聖皇の（一八三）宗祀、（一八四）穆穆煌煌たり。（一八五）上帝宴饗し、（一八六）五位時に序づ。誰か其れ之に（一八七）配する。（一八八）世祖光武。普天率土、各其職を以てす。猗歟緝熙にして、允に多福を懷す。

【一七九】揚雄。前漢の學者。
【一八〇】相如。司馬相如なり。西都賦に見ゆ。
【一八一】狂簡。妄進すること。
【一八二】聖皇。明帝を指す。
【一八三】宗祀。尊嚴なる祭祀。
【一八四】穆穆は敬ふ貌。煌煌は美しき貌。
【一八五】上帝。天帝なり。
【一八六】五位。五方の神。
【一八七】配。配饗とて天を祭る時、あはせて祭ること。
【一八八】世祖。光武帝をいふ。

【大意】ああ此の明堂は甚だ陽明なる堂なり。聖皇（明帝）此堂に於て天帝を祭れば、其威儀恭しく盛美にして、五方の神また各次序を得。此の祭に配する者は誰ぞ。即ち我が世祖光武なり。四海の内各其職を以て來りて祭祀を助く。ああ此の明德あれば、信に多幸多福を受けんこと疑なし。

辟雍の詩

乃ち辟雍を流る。辟雍（一八九）湯湯たり。聖皇莅み、舟を造りて梁となす。（一九〇）皤皤たる國老をば、乃ち父とし乃ち兄とす。（一九一）抑抑たる威儀、（一九二）孝友光明なり。於赫たる（一九三）太上、我に（一九四）漢行を示す。（一九五）洪化唯神にして、永く厥成を觀す。

【大意】辟雍を環りて流水湯湯たり。明帝舟を作りて橋となし、以て渡りて此に臨御し、國老を尊ぶこと父兄に事ふるが如く、威儀愼密にして孝友の狀明なり。これ彼の上帝の我が漢皇に示すに當に行ふべきの道を以てせるに由る。されば漢皇の化育神明の如く、永く其成功を示すべきなり。

靈臺の詩

【一八九】湯湯。水の流るる貌。辟雍は周圍に池を繞らすを以てなり。
【一九〇】皤皤。老人の貌。
【一九一】抑抑。愼密なる貌。
【一九二】孝友。よく父母に事ふるを孝といひ、よく兄弟に事ふるを友といふ。
【一九三】太上。天なり。
【一九四】漢行。漢皇の行ふべき事。
【一九五】洪化。偉大なる德化。

乃ち靈臺を（一九六）經す。靈臺既に崇し。帝勤めて時に登り、爰に（一九七）休徵を考ふ。（一九八）三光精を宣べ、（一九九）五行布き序づ。習習たる祥風、（二〇〇）祁祁たる甘雨、百穀（二〇一）蓁蓁として、（二〇二）庶草蕃廡す。屢惟れ豐年、於に皇に樂む。

【大意】天子高大なる明堂を造り、勤めて此臺に登り以て天の祥瑞を觀測すれば、三光は其精曜を通じ、五行は善く其次序を布く。是を以て風雨時を以て到り、百穀草木皆繁茂し、連年豐稔なり。茲に於て上下皆樂む。

寶鼎の詩

（二〇三）嶽は貢を修め川は珍を效し、（二〇四）金景を吐いて浮雲を歊す。寶鼎見えて色紛紜たり。煥として其れ炳き（二〇五）龍文を被る。祖廟に登りて聖神を（二〇六）享し、靈德を昭にし億年を彌らん。

【大意】山川より寶鼎を出し、其光浮雲の如く、龍文を刻せり。宗廟に登り此鼎を陳ねて神を享祭し、以て神德を明かにし、億萬年を渡らん。

白雉の詩

【一九六】經す。經營といふに同じ、造營すること。
【一九七】休徵。めでたきしるし。
【一九八】三光。日月星なり。
【一九九】五行。水火木金土をいふ。
【二〇〇】祁祁。和する貌。
【二〇一】蓁蓁。繁る貌。
【二〇二】庶草。衆草。
【二〇三】嶽は云云。廬江の熊山より寶鼎を得、灤湖より黄金鼎を出せるをいふ。
【二〇四】金景。黄金の光。
【二〇五】龍文。龍の紋章。
【二〇六】享。饗に同じ。祭ること。

(二〇七)靈篇を啓いて瑞圖を拔き、(二〇八)白雉を獲て(二〇九)素烏を效す。嘉祥阜にして皇都に集り、皓羽を發し(二一〇)翹英を奮ふ。容潔朗にして於淳精なり。皇德を彰すこと(二一一)周成に侔し。永く延長して天慶を膺けん。

【大意】祥瑞ありて白雉と白烏とを獲、二瑞共に洛陽に至る。漢皇の德、實に周の成王に等し。皇位長く繼ぎて當に上天の慶福を受くべし。

【二〇七】靈篇。瑞圖に同じ、祥瑞なり。
【二〇八】白雉。光武の時、日南より白雉を獻じ、明帝の時、白烏を獲たり。
【二〇九】素烏。白色の烏。
【二一〇】翹英。羽なり。
【二一一】周成。周の成王。韓詩外傳に成王ノ時、越裳氏白雉ヲ周公ニ獻ズとあり。

(一)西京の賦　(二)張平子

(三)憑虛公子といふ者あり。心奓り體忲り、雅より博古を好んで、(四)舊史氏に學ぶ。是を以て多く前代の載を識る。(五)安處先生に言つて曰く、夫れ人(六)陽時に在りては則ち舒く、(七)陰時に在りては則ち慘

【一】西京。長安をいふ。
【二】張平子。張衡、字は平子、後漢の南陽西鄂の人、少くして善く文を屬す、時に太平日久しく、王侯より以下踰侈せざるはなし、乃ち班固の兩都賦に擬して二京賦を作り、以て諷諫す。十年にして乃ち成る。
【三】憑虛公子。憑は依託なり、虛は無なり、憑虛公子とは無有公子といふが如し、假に設けて人名とせるなり。
【四】舊史氏。卽ち太史なり、圖書を掌る官。
【五】安處先生。安は焉に同じ、處は居なり、焉んぞ居らんやとの意にて、假りに人名となす。
【六】陽時。春夏をいふ。
【七】陰時。秋冬をいふ。

ふ。此れ天に牽かるる者なり。(八)沃土に處れば則ち逸く、瘠土に處れば則ち勞る。此れ地に繋かるる者なり。慘ふれば則ち歡に尠く、勞るれば則ち惠に徧し。能く之に違ふ者寡し。(九)小なるは必ず之れあり、(一〇)大なるも亦宜しく然るべし。故に帝者は天地に因りて以て化を致し、(一一)兆民は上教を承けて以て俗を成す。化俗の本、與に推し移るあり。何を以てか諸を覈にする。秦は(一二)雍に據りて彊く、周は(一三)豫に卽きて弱く、高祖は西に都して泰く、光武は東に處りて(一四)約なり。政の興衰は常に此に由りて作る。先生獨り西京の事を見ずや。請ふ吾子の爲に之を陳べん。

【大意】 憑虛公子といふ者あり。富貴に生れ志侈大にして身驕泰なり。博く古事を知らんことを好み太史に就いて學び、多く前世の事に通ず。安處先生に言つて曰く、夫れ人、春夏陽氣の時には喜樂し、秋冬陰氣の時には悲憂す。是れ天に牽かるるなり。肥沃の地に住む者は逸樂し、瘠土に住む者は勞苦す。是れ地に左右せらるるなり。人として境遇に支配せられざる者蓋し少し。庶民は固より然り、王者と雖も亦此理に漏るる能はず。故に王者は時に順ひ沃土に居りて敎化を布き以て民を歡逸せしめんとし、庶民は上の敎化を受けて奢侈の俗を成す。是に由りて風俗敎化の本は

【八】 沃土。豐饒なる土地。
【九】 小。庶人をいふ。
【一〇】 大。王者をいふ。
【一一】 兆民。人民なり。
【一二】 雍。州の名。此地は沃土なり。
【一三】 豫。州の名。此地は瘠土なり。
【一四】 約。窮困すること。

天地と推移するを知るべし。何を以て之を證するかとならば、周秦漢の歴史を觀て之を知らん。それ秦は雍州の沃土に據りて彊く、周は豫州の瘠土に居りて弱く、高祖は西長安（雍州）に都して泰く、光武帝は東洛陽（豫州）に都して窮せり。政の盛衰は此より起るを知るに足らん。先生かの西京（長安）の事を知らずば、吾れ請ふ之を語らん。

漢氏の初都は、（二五）渭の涘に在り。秦その朔に里る。寔を咸陽となす。左に（二六）崤函の重險、（二七）桃林の塞あり。綴するに（二八）二華を以てし、（二九）巨靈贔屓し、掌を高くし蹠を遠くし、以て河曲を流せり。厥跡猶ほ存す。右には（三〇）隴坻の隘あり。（三一）華戎を隔て閡り、（三二）岐梁汧雍（三三）陳寶鳴雞あり。前には則ち（二四）終南太一、（二五）隆崛崔崒（二六）隱轔鬱律として、岡を（二七）幡冢に連ね、（二八）杜を抱き（二九）鄠を含み、（三〇）灃を欲ひ鎬を吐き、爰に（三一）藍田ありて、珍玉是より出づ。後には則ち高陵平原

【二五】渭。川の名。
【二六】崤函。西都賦に見ゆ。
【二七】桃林。山の名。
【二八】二華。太華少華の二山。
【二九】巨靈。河の神。贔屓は力を用ふる貌。
【三〇】隴坻。坂の名。隘は狹き路なり。
【三一】華戎。中華と戎狄。
【三二】岐梁汧雍。四山の名。
【三三】陳寶。神の名。漢書に秦ノ文公若石ヲ陳倉ノ北阪城ニ獲、之ヲ祠ル、其神光輝流星ノ如ク、東方ヨリ來リ祠城ニ集ル、雄雉ノ若ク其聲殷殷タリ、一牢ヲ以テ之ヲ祠リ、名ケテ陳寶トイフとあり。

【二四】終南太一。二山の名。
【二五】隆崛崔崒。特起する貌。
【二六】隱轔鬱律。險曲の貌。
【二七】幡冢。山の名。
【二八】杜。地名、杜陵なり。
【二九】鄠。縣の名。
【三〇】灃。川の名。鎬。川の名。
【三一】藍田。西都賦に見ゆ。

あり、渭に據り（三二）涇に踞し（三三）澶漫靡迤として近きに鎭たり。其遠きは則ち（三四）九嵕甘泉あり。涸陰沍寒にして、（三五）日北に至れども凍を含む。此れ焉に暑を凊うす。爾して乃ち廣衍なる沃野あり。（三六）厥田は上の上、寔に地の（三七）奧區神皐となす。昔者（三八）大帝秦の繆公を悅んで之を覲、饗するに（三九）鈞天の廣樂を以てす。帝醉ふあり。乃ち（四〇）金策を爲り、錫ふに此土を用てす。諸を（四一）鶉首に翦す。是時や竝に彊國なる者六あり。然れども四海同じく西秦に宅る。豈詭しからずや。

【大意】漢は初め渭水の涯に都し名づけて長安といふ。秦は渭水の北に都し名づけて咸陽といふ。東には崤關函谷關桃林等の關塞あり。續いて太少二華山あり。この二山は、もと一山なりしも河神力を用ひ手を以て之を擘らき、足を以て蹈み離し、中分して二となし、以て河流を通ず。手足の跡今に至るまで尙ほ存せり。西には隴坻坂あり。此坂は華夏戎狄の限界をなす。又岐梁諸山あり。前には終南太一諸山ありて嶓冢山に連り、杜鄠の山相含抱し灃水此に入り、鎬水此より出づ。又藍田山ありて

【三二】涇。川の名。

【三三】澶漫靡迤。寛長の貌。

【三四】九嵕。甘泉。山の名。

【三五】日北に至る。夏至をいふ。

【三六】厥田は上の上。書經禹貢篇に雍州、厥田ハ上ノ上とあり、土地最も肥沃なりとの意。

【三七】奧區。隩區に同じ、西都賦に見ゆ。神皐は神明の土地といふ意。

【三八】大帝。天帝なり。

【三九】鈞天。天上なり。廣樂は廣大なる音樂。

【四〇】金策。金泥にて書きし册書。

【四一】鶉首。星の名、秦の分野なり。

美玉を産す。後には丘陵平原ありて涇渭の間に跨り國の近鎭をなし、遠くは九嵕甘泉の諸山あり。其地寒冷にして夏尚ほ寒く皇帝或は暑を此に避く。此地沃野千里、神明の區なり。昔秦の穆公天帝に見えし時、此土を賜ふ。穆公乃ち盡く鶉首の分野を取りて己の領土となす。當時天下に强國六あり、趙魏韓燕齊楚是れなり。然も皆秦に併合せらる。豈奇ならずや。

我が高祖の始めて入りしより、(四二)五緯相汁ひて以て(四三)東井に旅り、(四四)婁敬輅を委て其議を幹し非る。天其心を啓いて人之に謀を惎ふ。帝の圖る時に及び、意亦神祇を慮るあり。宜なり其の可とし定めて以て(四五)天邑となすや。豈伊れ(四六)天衢を虔思はざらんや。豈伊れ(四七)枌楡に歸るを懷はざらんや。天命滔はず。疇か敢て以て渝へん。

【大意】我が高祖の始めて此地に入るや、五星東井に聚る。是れ天命を受くる瑞徵なり。婁敬また洛陽を棄てて此地に都せんことを勸む。これ實に天其意を啓示し人また美謀を獻せしものと謂ふべし。高祖の都を建つるや固より天地陰陽を慮り、乃ち此地を以て帝都と定む。洛陽を思ひ故鄕を思はざるにあらざれども、天命疑ふべきにあらざれば、敢て天意に反することをなさざりしなり。

【四二】五緯。五星なり。
【四三】東井。西都賦に見ゆ。
【四四】婁敬。西都賦に見ゆ。輅は漢書音義に木ヲ以テ胷ニ當テ以テ輦ヲ輓クヲイフとあり。
【四五】天邑。帝都なり。
【四六】天衢。洛陽を指す。
【四七】枌楡。高祖の故鄕を指す。

是に於て、(四八)徑輪を量り(四九)廣袤を考へ、(五〇)城洫を經り(五一)郭郛を營み、(五二)殊裁を(五三)八都に取る。豈度を往舊に稽へんや。爾して乃ち秦制を覽、(五四)周法を跨え、(五五)百堵の(五六)側陋を狹しとし、(五七)九筵の(五八)迫脅を增す。

(五九)紫宮を(六〇)未央に正し(六一)嶢闕を(六二)閶闔に表し、(六三)龍首を疏して以て殿を抗げ、狀(六四)嵬峩として以て(六五)岌嶫たり。雄虹の長梁を亙し棼橑を結んで以て相接し、(六六)倒茄を(六七)藻井に滯し、紅葩の(六八)狎獵たるを披き、(六九)華榱と(七〇)璧璫とを飾り、景曜の(七一)韡曄なるを流し、(七二)彫楹(七三)玉碣、(七四)繡栭

【四八】徑輪。徑は直經をいひ、輪は四周をいふ。
【四九】廣袤。東西を廣といふ。說文に南北ヲ袤トイフとあり、東西南北の廣さをいふ。
【五〇】城洫。洫は城池なり。
【五一】郭郛。郛は城外の大郭。
【五二】殊裁。裁は制度なり。つくりかた。
【五三】八都。八方といふが如し。
【五四】周法。周制といふに同じ、周代の規模なり。
【五五】百堵。一丈を板といひ、五板を堵といふ。
【五六】側陋。僻賤なり。
【五七】九筵。周の制に、明堂の中、廣さ九筵、九尺を筵といふ。
【五八】迫脅。狹隘なること。
【五九】紫宮。紫微宮。天帝の座なり。
【六〇】未央。長安に在る宮殿の名。
【六一】嶢闕。高き門。
【六二】閶闔。天門なり。
【六三】龍首。山の名。
【六四】嵬峩。高き貌。
【六五】岌嶫。高き貌。
【六六】倒茄。茄は蓮莖なり。
【六七】藻井。文彩ある天井。蔕は花のうてな。
【六八】狎獵。花葉の參差たる貌。
【六九】華榱。彩色せるタルキ。
【七〇】璧璫。玉を以て飾りし椽頭。
【七一】韡曄。明盛なる貌。
【七二】彫楹。彫刻せる柱。
【七三】玉碣。玉の礎石。
【七四】繡栭。文彩を施したるマスガタ。

(七五)雲楣・(七六)三楷重軒、(七七)鏤檻文梍あり。(七八)右は平、左は城、(七九)青瑣丹墀あり。層れるを刊り堂を平げ(八〇)切を(八一)厓隒に設け、(八二)坻崿鱗眴として(八三)棧齴巉嶮なり。襄岸夷塗修路險に峻る。重門襲り固く(八四)姦宄を是れ防ぐ。仰げば(八五)帝居に福じく(八六)陽には曜り陰には藏る。洪鐘(八七)萬鈞、(八八)猛虡趪趪、(八九)筍業を負ひて餘怒し、乃ち翅を奮つて騰驤す。

【大意】因つて東西南北の廣さを測量して城池外郭を作り、八方の異制を取り以て宮室の巧を極む。復た昔日の故法を墨守せず。秦の遺制を參考し周の規模に越えんとし、百堵九筵を以て狹隘なりとし、頗る之を增し廣む。天上の紫微宮に法りて未央宮を造り、高門を構へて天門に象る。龍首山に因りて前殿を構へ、彩梁虹の如く曲り、棟椽相交り、荷莖を以て倒に

【七五】雲楣。雲を繪ける梁。
【七六】三楷。殿に三階段あるなり。西都賦に見ゆ、重軒の軒は欄干なり、二重に欄干を設くること。
【七七】鏤檻。檻も欄干なり。文梍は文彩を加へたるなり。
【七八】右は平云云。西都賦の一〇〇、一〇一を見よ。
【七九】青瑣。青色に飾りし窓。丹墀は丹漆にて塗りし階段をいふ。
【八〇】切。砌に同じ、石を敷きたる道。
【八一】厓隒。崖邊なり。
【八二】坻崿。崖なり、鱗眴は限なき貌。
【八三】棧齴巉嶮。高峻なる貌。
【八四】姦宄。寇賊の外にあるを姦といひ、内にあるを宄といふ。
【八五】帝居。天帝の居る處、即ち太微宮をいふ。
【八六】陽には云云。或は日光に曜き、或は蔽はるるなり。
【八七】萬鈞。鈞は重さ三十斤をいふ。
【八八】猛虡。猛獸の形に作れる鐘を置く臺。趪趪は力を用ふる貌。
【八九】筍業。虡の傍に木を立つ、直きを筍といひ、横木を業といふ。

藻井に植ゑ、其花下に向ひ參差として開き、榱璫礎柱より欄階に至るまで皆金碧燗燦として光彩目を奪ふ。階を設くること三、右は平坦にして車を通ずべく、左は段階を成して人の升降に便す。皆塗るに丹碧を以てす。その上道途平にして長し。又重門を設けて寇賊を防ぐ。大鐘あり重さ萬鈞、獸虡筍業を負ひ、餘力綽綽として奮飛せんとす。

朝堂東を承け、(九〇)溫調北に延び、西に(九一)玉臺あり聯ぬるに(九二)昆德を以てし、(九三)嵯峨嵲嶫として則る所を識るなし。若し夫れ(九四)長年(九五)神仙宣室玉堂麒麟朱鳥龍興含章、衆星の(九六)極を環り、(九七)叛赫戲として以て煇煌するに譬ふ。(九八)正殿路寢用て(九九)羣辟を朝せしめ、大廈(一〇〇)耽耽として(一〇一)九戶開き闢け、嘉木庭に樹ち芳草積めるが如く、高門閌きあり(一〇二)金狄を列坐す。

【大意】諸臺殿また之を環り、形勢高峻にして其法則を識る能はず。その狀恰も衆星の北極星を繞るが如く、光輝赫奕たり。正殿は深邃にして九戶皆開け、庭に嘉木芳草あり、金人を高門の左右に

【九〇】溫調。臺殿の名。
【九一】玉臺。臺殿の名。
【九二】昆德。臺殿の名。
【九三】嵯峨云云。高き貌。
【九四】長年。殿の名。
【九五】神仙云云。三輔黃圖に長樂宮ニ神仙殿アリ、未央宮ニ宣室殿、太玉殿アリとあり。以下皆殿閣の名。
【九六】極。北極なり。
【九七】叛。煥に同じ。赫戲は光輝の盛なる貌。
【九八】正殿路寢。ともに諸侯に朝見する殿なり。
【九九】羣辟。諸侯公卿をいふ。
【一〇〇】耽耽。深邃の貌。
【一〇一】九戶。大戴禮に明堂ニ九室アリ、室ごとに一戸あり、故に九戸といふ。
【一〇二】金狄。金人なり、卽ち銅像の如きもの。

置く。

内には（一〇三）常侍謁者の命を奉じて（一〇四）御に當るあり。外には（一〇五）蘭臺金馬の遞に宿し迭に居るあり。次に（一〇六）天祿石渠の文を校する處あり。重ぬるに（一〇七）虎威章溝（一〇八）嚴更の署を以てし、（一〇九）徼道外に周り（一一〇）千廬内に附き、（一一一）衞尉八どころに屯し夜を警め晝を巡り、鎩を植て瞂を懸けて用て不虞を戒む。

【大意】内には常侍謁者等の官職あり詔命に應じて進御に當り、外には蘭臺金馬等の役所あり、諸吏ここに宿居す。次に天祿石渠等の閣あり以て文書を校理す。また夜を警むる官あり晝夜巡邏し兵器を執りて不測の變に備ふ。

後宮には則ち（一一二）昭陽飛翔增成合驩蘭林披香鳳皇鴛鸞あり。窈窕の華麗を羣む。嗟内に顧みて觀る所なり。故に其館室次舍は、采飾纖縟にして、裛むに（一一三）藻繡を以てし、文るに朱綠を以てし、（一一四）翡翠火

【一〇三】常侍、謁者。ともに宮人に仕ふる宦官。
【一〇四】御。進御なり。
【一〇五】蘭臺。臺の名、書を校する處。金馬は西都賦の序に見ゆ。
【一〇六】天祿、石渠。閣の名、大殿の北にあり、秘書を藏する處。
【一〇七】虎威、章溝。ともに更署の名。
【一〇八】嚴更。西都賦の一五一を見よ。
【一〇九】徼道。西都賦の一五七を見よ。
【一一〇】千廬。西都賦の一五六を見よ。
【一一一】衞尉。官名。
【一一二】昭陽。以下皆殿の名。
【一一三】藻繡。西都賦の一二二を見よ。
【一一四】翡翠、火齊。玉なり。

齊、絡ふに美玉を以てし、(二二五)懸黎の夜光を流し、(二二六)隨珠を綴りて以て燭となし、(二二七)金阨玉階(二二八)彤庭輝輝たり。珊瑚(二二九)琳碧瓀珉(二三〇)璘彬たり。珍物(二三一)羅生し煥として(二三二)崑崙の若く、厥裁廣からずと雖も、侈靡至尊に踰ゆ。

【大意】後宮には窈窕たる美女羣を成し、一見する者孰か其美を歎美せざらん。其館舍は皆飾るに文繡を以てし、名玉を聯ねて夜燭に當て、珍寶羅列して神仙の居の如し。されば其規模廣大ならずと雖も、その華麗は却つて天子に勝れり。

是に於て(二三三)鉤陳の外、(二三四)閣道穹隆として、(二三五)長樂と(二三六)明光とに屬き、徑に北のかた(二三七)桂宮に通ず。(二三八)般爾の巧匠に命じ變態を其中に盡せり。是に於て後宮移さず。樂、(二三九)懸を徙さず、門衞(二四〇)供帳。官物を以て辨じ、意の幸ふ所を恣にして輦を下りて燕を成し、年を窮めて歸るを忘るるも猶ほ徧くする能はず、瑰異日に新にして

【二二五】懸黎。西都賦の一二九を見よ。
【二二六】隨珠。西都賦の一二四を見よ。
【二二七】金阨。金色のミギリ。
【二二八】彤庭。西都賦の一三一を見よ。輝輝は照り輝く貌。
【二二九】琳碧、瓀珉。玉石なり。
【二三〇】璘彬。玉の光の雜る貌。
【二三一】羅生。ならび居ること。
【二三二】崐崘。仙人の居る山。
【二三三】鉤陳。西都賦の一五〇を見よ。
【二三四】閣道。かけはしの如く高く作りし廊下。穹隆は長く曲れる貌。
【二三五】長樂。宮の名。
【二三六】明光。殿の名。
【二三七】桂宮。宮の名。
【二三八】般爾。般は魯般とて魯の哀公の時の名工、爾は王爾とて古の名工なり。
【二三九】懸。樂器を懸くるもの。
【二四〇】供帳。幕など張りわたして宴席を設くること。

殫く未だ見ざる所なり。

【大意】禁衞の外には閣道相連續して長樂明光の二殿を經、北のかた桂宮に達し、皆名工の技巧を窮極して作れる所なり。されば天子遊幸の處、宮人伎樂立ち所に辦せざるはなく、供帳警衞の具、官一一之を辦せざるはなし。乃ち輦を下りて宴をなし、年を窮むるまで歸らずと雖も、奇異珍怪の物日日變易するを以て、到底之を見盡すべくもあらず。

惟れ帝王の神麗なる、尊卑の殊ならざるを懼る。斯宇既に坦なりと雖も、心猶ほ憑ちて未だ攄びず。象を(二三一)紫微に比せんことを思ひ、(二三二)阿房の廬るべからざるを恨む。往昔の遺館を覩て(二三三)林光を秦餘に獲、(二三四)甘泉の爽塏に處り、乃ち隆崇にして弘敞す。既に新に(二三五)迎風を作り露寒と儲胥とを增し、喬基を山岡に託し、直に(二三六)墆霓として以て高く居る。(二三七)通天訬として以て竦峙し、(二三八)百常を徑りて莖擢んで、上は(二三九)辮華にして以て交紛し、下は(二四〇)刻陗にして其れ削れるが若し。(二四一)翔

【二三一】紫微。紫微宮。天帝の宮なり。

【二三二】阿房。秦の始皇帝の建てたる宮殿。廣大無比の大殿なり。

【二三三】林光。秦の離宮の名。

【二三四】甘泉。山の名。

【二三五】迎風、露寒、儲胥。皆宮館の名。

【二三六】墆霓。高き貌。

【二三七】通天。臺の名。訬は高き貌。

【二三八】百常。八尺を尋といひ、尋に倍するを常といふ。

【二三九】辮華、交紛。文綵の交錯するをいふ。

【二四〇】刻陗。刻削してけはしきこと。

【二四一】翔鶤。鶤は大鳥の名。

鵾仰げども逮ばず、況んや（一四二）青鳥と黃雀とをや。（一四三）櫺檻に伏りて頫して聽けば、雷霆の相激するを聞く。

【大意】抑〻帝王の尊嚴なる、人臣と宮室を異にせざるを懼る。されば宮室斯の如く壯大なりと雖も、尙ほ志未だ滿たず。因つて天帝の紫微宮に倣はんことを思ひ、阿房宮も居るに足らざるを恨む。是に於てか甘泉山の高燥なる處を擇び、廣大なる宮殿を建て、迎風露寒儲胥通天等の樓臺相次いで成り、山岡に踞して高く立ち、大鳥飛翔するも及ぶ能はず、況んや小鳥をや。頭を低れ伏して聽けば雷聲乃ち下に在り。

（一四四）柏梁既に災あり、越巫方を陳べ、（一四五）建章を是れ經り、用て（一四六）火祥を厭す。（一四七）營宇の制、事未央を兼ぬ。（一四八）圜闕竦えて以て天に造り、（一四九）雙碣の相望むが若く、鳳甍標に騫翥し、咸く風に遡つて翔らんと欲す。（一五〇）閶闔の內、（一五一）別風嶕嶢たり。何ぞ工巧の瑰瑋なる。（一五二）交綺豁にして以て（一五三）疏寮あり。

【一四二】青鳥、黃雀。ともに小鳥の名。
【一四三】櫺檻。欄干なり。
【一四四】柏梁。臺の名。
【一四五】建章。宮の名。
【一四六】火祥。火事のわざはひ、厭とはマジナヒをして防ぐこと。
【一四七】營宇。宮殿なり。
【一四八】圜闕。圜は圓なり。
【一四九】雙碣。碣は碣石山なり。西都賦の一九一を見よ。
【一五〇】閶闔。天門なり。
【一五一】別風嶕嶢。西都賦の一六八を見よ。
【一五二】交綺。交は結、綺は文繒なり、綺を結んで飾とするなり。
【一五三】疏寮。寮は窓なり、疏は刻穿するなり。

雲霧を干して上に達し、狀（二五四）亭亭として以て岧岧たり。（二五五）神明崛として其れ特り起ち、（二五六）井幹疊りて（二五七）百增あり。（二五八）遊極を浮柱に峙き、（二五九）重欒を結んで以て相承け、層構を累ねて遂に隮り、（二六〇）北辰を望んで高く興り、（二六一）雰埃を（二六二）中宸に消し、（二六三）重陽の清瀓なるに集り、宛虹の長鬐を瞰、（二六四）雲師の憑る所を察し、飛闥に上りて仰ぎ眺れば、正に（二六五）瑤光と玉繩とを覩る。將に乍ち往かんとして未だ半ならざるに、怵悼として慄れて聳兢す。（二六六）都盧の輕趫なるに非んば、孰か能く超えて究め升らん。

【大意】武帝の時、柏梁臺火災に遇ふ。越の巫帝をして建章宮を造らしめ、方を陳べて火祥を壓鎭す。その規模遙に未央宮の壯大なるにまさり、門闕高く聳えて天に達し、碣石山の相對峙するが如く、闕上に鐵鳳凰あり兩翼を張り風に逆つて飛ばんと欲す。門內に別風闕あり。高峻瑰麗にして綺窓開き雲霄を衝きて起つ。また神明臺井幹樓あり。十百層を成し北極星を望んで立ち、下土の塵穢を絕ち天上の清澄なるに至る。此樓に登れば虹霓と畢星との依る所を見るべく、瑤光玉繩の星を仰ぐべし。往きて此樓に登らんと

【二五四】亭亭、岧岧。高き貌。
【二五五】神明。臺の名。
【二五六】井幹。西都賦一七八を見よ。
【二五七】百增。增は層に同じ。
【二五八】遊極。極は梁なり。
【二五九】重欒。欒は柱上の曲木、兩頭に櫨を受くるものなり。
【二六〇】北辰。北極星。
【二六一】雰埃。塵穢なり。
【二六二】中宸。天地交會の處。
【二六三】重陽。上を陽となす。
【二六四】雲師。畢星なり。
【二六五】瑤光、玉繩。星の名。
【二六六】都盧。國名。其國人よく高きに憑る。

すれば未だ半に至らずして已に恐怖し、輕捷の人にあらずんば能く升る能はざるなり。〔一六七〕馺娑、駘盪、〔一六八〕燾奡桔桀たり。〔一六九〕枍詣承光〔一七〇〕睽罛庨豁たり。〔一七一〕增桴重棼〔一七二〕鍔鍔列列たり。〔一七三〕反宇業業として飛檐〔一七四〕轍轍たり。流景内に照り曜を日月に引く。〔一七五〕天梁の宮寔に〔一七六〕高闈を開き、旗は〔一七七〕扃を脱せず、〔一七八〕駟を結び靳を方べ輻を櫟して輕く鶩せ一扉より容る。長廊廣廡あり連閣雲のごとく蔓び、〔一七九〕閑庭詭異にして門千戸萬あり。重閨幽闥轉た相〔一八〇〕逾延し、望〔一八一〕窅窱して以て徑廷し、〔一八二〕眇として其の返る所を知らず。既に乃ち〔一八三〕珍臺蹇産として以て壯を極め、〔一八四〕墱道邐倚して以て正東にあり。〔一八五〕閶風の遐き坂に似〔一八六〕西洫を橫りて〔一八七〕金墉を絕る。〔一八八〕城尉柝を弛めずして内外潛通す。

【一六七】馺娑、駘盪。臺の名。
【一六八】燾奡桔桀。高峻の貌。
【一六九】枍詣、承光。臺の名。
【一七〇】睽罛庨豁。高峻の貌。
【一七一】增桴、重棼。かさなれる棟。
【一七二】鍔鍔列列。高き貌。
【一七三】反宇。そりかへれるノキ。業業は高き貌。
【一七四】轍轍。高き貌。
【一七五】天梁。宮の名。
【一七六】高闈。宮中の門を闈といふ。
【一七七】扃。旗を車上に建て、之をおさふる物。
【一七八】駟。一車に四匹の馬をつくること。
【一七九】閑庭。閑は垣なり。
【一八〇】逾延。延長すること。
【一八一】窅窱、徑廷。過ぎ渡ること。
【一八二】眇。遙かなる貌。
【一八三】珍臺。臺の名、城東に在り。蹇産は高大なる貌。
【一八四】墱道。閣道なり。邐倚は長遠の貌。
【一八五】閶風。崐崘山なり。
【一八六】西洫。洫は城池なり。
【一八七】金墉。墉は城なり。
【一八八】城尉。官名、警衞を掌る。柝はヒヤウシギ。

【大意】 駁娑駘盪枍詣承光の諸臺あり、高峻深邃にして、日月の光、釆飾の曜を含み、相引いて屋內に入る。また天梁宮に高門あり、車上の旗を脫せず、駟馬を竝べて門扉に入るを得。その高大なるを想ふべし。更に長廊あり廣廡あり、其中に入れば眇然として迷惑し歸路を知らず。又珍臺あり高壯を極め、閣道連續して西のかた建章宮に通ず。その閣道たるや、閬風山坂の長遠なるが如く、西池を橫りて金城を渡る。城尉の官あり警備を廢せず。故に閣道の中潛行して內外を通ず。

前には(一八九)唐中を開いて(一九〇)彌望廣潒なり。顧みて(一九一)太液に臨めば(一九二)滄池漭沆たり。(一九三)漸臺中央に立ち、赫(一九四)眄眄として以て弘敞なり。淸淵(一九五)洋洋、神山(一九六)峩峩として(一九七)瀛洲と方丈とを列ね、蓬萊を夾んで駢羅り、上は(一九八)林岑として以て壘嵬、下は嶄巖として以て嵒齬なり。長風(一九九)別隝に激し、洪濤を起して波を揚げ、(二〇〇)石菌を重涯に浸し、靈芝の朱柯を濯ぎ、(二〇一)海若玄渚に游び、鯨魚流を失つて(二〇二)蹉跎す。

【一八九】唐中。池の名、西都賦一八七を見よ。
【一九〇】彌望。見渡すかぎり。廣潒は廣きこと。
【一九一】太液。池の名、建章宮の北にあり。
【一九二】滄池は靑き池。漭沆は深く大なる貌。
【一九三】漸臺。臺の名。
【一九四】眄眄。赤き色。
【一九五】洋洋。水の盛なる貌。
【一九六】峩峩。高き貌。
【一九七】瀛洲、方丈、蓬萊。東海中に在る仙山の名。
【一九八】林岑、壘嵬、嶄巖、嵒齬。峻嶮なる貌。
【一九九】別隝。隝は島なり。
【二〇〇】石菌、靈芝。神山に生ずる草の名。
【二〇一】海若。海神なり。
【二〇二】蹉跎。足をふみはづすこと。

【大意】建章宮域內に唐中池あり。廣さ數十里。又太液池あり。池水蒼蒼として深し。池の中央に漸臺あり。塗るに赤を以てし赫然として高大なり。また蓬萊方丈瀛洲あり。海中の三神山に象る。峩峩として相對峙す。長風島嶼に激して大波を揚げ、石菌靈芝を洗ひ濯ぎ、海神深淵に游び鯨魚徘徊す。

是に於て（二〇三）少君の端信を采り、（二〇四）欒大の貞固を庶ひ、（二〇五）修莖の（二〇六）仙掌を立て、雲表の清露を承け、（二〇七）瓊蘂を屑いて以て朝に飡ひ、性命の度るべきを必とし、往昔の（二〇八）松喬を美し、（二〇九）羨門を天路に要め、（二一〇）升龍を鼎湖に想ふ。豈時俗の慕ふに足らんや。若し世を歷て長く存せば、何ぞ遽に陵墓を營まんや。

【大意】武帝乃ち李少君欒大の仙術を以て信實なりとなし、仙人掌を作り雲外の清露を取り、玉英に和して之を服用し、以て生命の世を度りて死せざらんことを冀ひ、松喬羨門等の仙人と天上に相遇はんことを欲し、黃帝の龍に鼎湖に騎りて上仙せし故事に倣はんことを想ひ、俗人の爲す所を以て慕ふに足らずとなせり。ああ若し世を歷て死せずば、何ぞ急に墳墓を營むをなさんや。

【二〇三】少君。仙術士李少君なり、武帝の信任を受けたり。
【二〇四】欒大。西都賦二〇三を見よ。
【二〇五】修莖。修は長なり。
【二〇六】仙掌。仙人掌なり、西都賦一九七を見よ。
【二〇七】瓊蘂。玉英なり。
【二〇八】松喬。古の仙人の名、西都賦二〇四に見ゆ。
【二〇九】羨門。仙人の名。
【二一〇】升龍。黃帝鼎を荊山の下に鑄る、鼎既に成る、龍髯を垂れて下り迎ふ。黃帝龍に騎りて乃ち上り去る。其處を鼎湖と名づく。

徒に其城郭の制を觀れば、則ち旁に三門を開き（二一）參塗夷に庭しく、（二二）軌を方ぶると十二、街衢相經る。（二三）廛里端直、（二四）甍宇齊平なり。（二五）北闕の甲第、道に當りて直に啓き、巧を程び功を致し（二六）陁陊せざらんことを期し、木には綈錦を衣せ、土には朱紫を被らしめ、（二七）武庫禁兵設けて（二八）蘭錡に在り。（二九）石にあらず（三〇）董にあらずんば疇か能く此に宅らん。

【大意】更に城郭の制を觀れば、一面に各〻三門を設け、門ごとに三途を通じ、皆平正にして途ごとに車四軌を容る。即ち十二車を竝べ馳すべし。其中街衢互に相經緯し、邑里の家屋正しく相竝ぶ。北闕の甲第、道に當りて門を開き、皆巧匠を擇んで其功を致し崩落の期なからしめ、土木の上には加ふるに綈錦朱紫の色を以てし、兵器を陳ねて之を護る。石顯董賢等の如き寵臣にあらずんば誰か此邸に居らんや。

【二一】參塗。塗は途なり、門ごとに三道あり、故にいふ。
【二二】軌。車轍なり。途ごとに四軌を容る。
【二三】廛里。邑里といふが如し。
【二四】甍宇。棟宇なり。家屋なり。
【二五】北闕。帝城の北にある門。甲第は甲乙の次第ある邸宅。
【二六】陁陊。陁は壞ろること、陊は落つること。
【二七】武庫。武器を藏する處。禁兵は禁中の兵器なり。
【二八】蘭錡。兵器を置く棚。
【二九】石。漢書に石顯、字ハ君房、黃門中尙書トナル、元帝疾ヲ被リ政事ヲ親ラセズ、事大小トナク、顯ニ因ツテ決スとあり。
【三〇】董。漢書に董賢、字ハ聖卿、哀帝ソノ儀貌ヲ悅ビ、拜シテ黃門郎トナシ、賢ガ爲ニ大第ヲ北闕ノ下ニ起シ、土木ノ巧、技巧ヲ窮極シ、柱檻衣スルニ綈錦ヲ以テス、武庫禁兵盡ク董氏ニ在りとあり。

爾して乃ち廓に（三二一）九市を開き、（三二二）闤を通じ闠を帶び、（三二三）旗亭五重にして、俯して（三二四）百隧を察る。周制は（三二五）大胥、今や惟れ尉なり。（三二六）瓌貨方に至り、鳥のごとく集り鱗のごとく萃り、鬻ぐ者は贏を兼ね、求むる者は匱しからず。爾して乃ち商賈百族、（三二七）裨販夫婦、良を鬻ぎ苦を雜へ、邊鄙を蚩眩す。何ぞ必しも作勞を昏めん、邪贏優にして恃むに足る。彼の肆人の男女、麗美にして、（三二八）許史より奢れり。

【大意】長安に九個所の市場を開き、市門を設けて之を隔て、五層の市樓あり、市道を俯視すべし。市場を監する官あり、周代には之を大胥といひしが、今や之を尉と稱す。珍品四方より集り至り、賣る者は利を倍し、買ふ者は缺乏するなし。されば商賈の徒輩善物を以て惡物に和し、之を賣りて野人を欺惑し、以て詐僞の利を占むるを事とし、勤勞の事を勉むるを屑とせず。是を以て市井の男女被服華美を極め、天子の外戚と雖も及ぶべからず。

若し夫れ（三二九）翁伯、濁、質、張里の家は、（三三〇）鐘

【三二一】九市。西都賦四〇を見よ。

【三二二】闤闠。市門なり。

【三二三】旗亭。市樓なり。

【三二四】百隧。隧は列肆の道なり。

【三二五】大胥。市場を掌る官。

【三二六】瓌貨。珍らしき品物。

【三二七】裨販。安く買ひて高く賣るもの。

【三二八】許史。許は宣帝の皇后許氏、史は衞太子の妃史氏。天子の外戚といふが如し。

【三二九】翁伯。脂を賣りて鉅萬の富を得し人。濁氏は胃脯を以て富を得し人。質氏は刀劍の鞘を作りて富みし人。張里は馬醫を以て富みし人。

【三三〇】鐘を撃つ。家族婢僕多き故、食事の時に鐘を撃ちて合

を撃ちて（二三一）鼎食し、騎を連ねて相過り、東京の公侯も壯なること何ぞ加へん。都邑の（二三二）遊俠、（二三三）張趙の倫、志を（二三四）無忌に齊うし跡を（二三五）田文に擬し、死を輕んじ氣を重んじ、黨を結び羣を連ね、寔に蕃くして徒あり。其從雲の如し。茂陵の（二三六）原、陽陵の（二三七）朱、（二三八）趫悍𧇊豁なること虎の如く貙の如く、（二三九）睚眦蠆芥すれば屍路隅に僵る。（二四〇）丞相以て子の罪を贖はんと欲すれば（二四一）陽石汙れて公孫誅せらる。若其れ（二四二）五縣の遊麗、辯論の士は、街に談し巷に議し、臧否を（二四三）彈射し（二四四）毫釐を（二四五）剖析し、肌を擘き理を分ち、好する所には毛羽を生じ、惡む所には瘡痏を成す。

【大意】されば鉅萬の富を積める者に至りては、日常生活の豪奢なること王侯と雖も比する能は

圖すること。

【二三一】鼎食。鼎を竝べて食ふこと、多くの美味を食ふこと。

【二三二】遊俠。卽ち俠客なり。

【二三三】張趙。張子羅及び趙君都なり。共に長安の俠客。

【二三四】無忌。魏の信陵君なり。食客數千人を養ひし人。

【二三五】田文。齊の孟嘗君、數千人の食客を養ひし人。

【二三六】原。原涉といふ俠客なり、茂陵に住す。

【二三七】朱。朱安世といふ俠客、陽陵に住す。

【二三八】趫悍𧇊豁。慓悍なること。

【二三九】睚眦蠆芥。怒る貌。

【二四〇】丞相云。漢書に公孫賀丞相タリ、子敬聲太僕トナリ、擅ニ北軍ノ錢千九百萬ヲ用ヒ獄ニ下サル、是時詔シテ陽陵ノ朱安世ヲ捕ヘントス、賀請ヒテ朱安世ヲ捕ヘ以テ敬聲ノ罪ヲ贖ハントシ、後果シテ安世ヲ得タリ、安世遂に獄中ヨリ上書シテ曰ク、敬聲ト陽石公主ト私通スト、因ツテ公孫賀父子倶ニ獄ニ下サレテ死スとあり。

【二四一】陽石。公主の名、公主とは天子の女をいふ。

【二四二】五縣。五陵をいふ、西都賦五四を見よ。

【二四三】彈射。摘發すること。

【二四四】毫釐。小事に譬ふ。

【二四五】剖析。彈射に同じ。

ず。また俠客張子羅、趙君都の輩あり、古の信陵孟嘗二君の豪俠に倣ひ、生を輕んじ義を重んじ、數多の部下を蓄ひ、相從ふ者雲の如し。原涉朱安世の如きは特に慓悍獰猛にして、一たび怒れば忽ち人を路傍に斬る。現に丞相公孫賀の其子の罪を贖はんが爲、朱安世を捕縛するや、却つて朱安世の摘發する所となり、陽石公主は私通の惡名を受け、公孫賀父子は誅殺せられぬ。若夫れ五陵の壯士論客に至りては、市井の間に謀議し人の善惡を指彈し小事と雖も假借せず、己の好む所の者は之を譽め上せ、惡む所の者は之を毀りて傷つく。

郊甸の內、鄉邑(二四六)殷賑にして、(二四七)五都の貨殖、既に遷り既に引き、商旅槅を聯ね(二四八)隱隱展展たり。冠帶交錯し、轅を方べ軫を接ふ。封畿千里、統ぶるに京尹を以てし、郡國の宮館百四十五あり。右は(二四九)盩厔を極めて(二五〇)酆鄠を幷せ巻き、左は(二五一)河華に曁びて遂に(二五二)虢土に至る。

【大意】近郊の鄉邑いづれも富饒にして五都の貨物往來甚だ繁く、商旅の車は轣轆として相連り、官吏の冠帶は陸續として相接す。帝畿の內その廣さ千里、之を統治せしむるに京兆尹を置く。郡國に散在する離宮別館百四十五所あり。西は盩厔縣より酆鄠に及び、東は河華を經て虢に至る。

【二四六】殷賑。富饒なること。
【二四七】五都。西都賦五九を見よ。
【二四八】隱隱展展。車の聲なり。
【二四九】盩厔。縣の名。
【二五〇】酆鄠。地名。
【二五一】河華。黃河及び華山。
【二五二】虢土。虢は地名。

(二五三)上林禁苑、谷を跨え阜を彌り、東のかた(二五四)鼎湖に至り、斜に(二五五)細柳に界し、(二五六)長楊を掩ひて(二五七)五柞を聯ね、(二五八)黃山を繞りて(二五九)牛首に款る。繚垣緜聯すること四百餘里、植物斯に生じ動物斯に止る。衆鳥翩翻たり、羣獸(二六〇)騄駓たり。散ずること驚波に似、聚ること(二六一)京峙に似たり。(二六二)伯益も名づくる能はず、(二六三)隷首も紀する能はず。林麓の饒なること、何に于てか有らざらん。

【大意】林苑廣大なること四百餘里、之を環らすに垣を以てし、鳥飛び獸走り、散ずること驚波の如く、聚ること山丘の如く、伯益も名づくる能はず、隷首も數ふる能はず、山林の產一として之れなきはなし。

木は則ち樅栝椶楠梓棫楩楓、嘉卉(二六四)灌叢し、(二六五)蔚たること(二六六)鄧林の若し。(二六七)鬱蓊薆

【二五三】上林禁苑。天子の御獵場なり。
【二五四】鼎湖。地名、華陰の東にあり。
【二五五】細柳。地名、長安の西北にあり。
【二五六】長楊。宮の名、盩厔にあり。
【二五七】五柞。館の名。
【二五八】黃山。宮の名、槐里縣にあり。
【二五九】牛首。山の名。
【二六〇】騄駓。行き走る貌。
【二六一】京峙。京は高なり、峙は丘なり。
【二六二】伯益。人名、列子に北海ニ魚アリ鯤ト名ク、鳥アリ鵬ト名ク、大禹行キテ之ヲ見、伯益知リテ之ニ名クとあり。
【二六三】隷首。黃帝の時の數學者なり。
【二六四】灌叢。草木の叢生するを灌といふ。
【二六五】蔚。繁ること。
【二六六】鄧林。林の名、山海經に夸父日ト競走シ、渴シテ河渭ニ飲メドモ足ラズ、北大澤ニ飲マントシテ未ダ至ラズ、道ニ渴死シ、其杖ヲ棄ツ、化シテ鄧林トナルとあり。
【二六七】鬱蓊云云。皆草木の盛なる貌。

蔚橚爽欐椮として、葩を吐き榮を颺げ、葉を布き陰を垂る。草は則ち葴莎菅蒯薇蕨荔芄王芻茵臺戎葵懷羊、(二六八)苯蓴蓬茸として皐に彌り岡に被り、篠簜敷衍りて(二六九)町を編ねて篁を成し、山谷(二七〇)原隰(二七一)泱漭として疆なし。迺ち(二七二)昆明の靈沼、(二七三)黑水の玄阯あり、周らすに(二七四)金堤を以てし、樹うるに柳杞を以てす。(二七五)豫章の珍館、(二七六)揭焉として中に峙ち、(二七七)牽牛其左に立ち織女其右に處り、日月是に於て出入し、(二七八)扶桑と(二七九)濛汜とに象る。其中には則ち黿鼉巨鼈鱣鯉鱮鮦鮪鯢鱨魦あり。修額短項、大口折鼻、詭類殊種あり。鳥は則ち鷫鷞鴰鴇駕鵞鴻鶤あり。上春には候ひ來り季秋には溫に就き、南のかた(二八〇)衡陽に翔り北のかた(二八一)雁門に棲む。奮隼歸鳧(二八二)沸卉軿訇として衆形殊聲勝げて論ずべからず。

【大意】苑中には草木の類甚だ多く、花葉を岡澤に垂れ鬱鬱蒼蒼たり。昆明黑水等の池あり、極め

【二六八】苯蓴云云。草の盛なる貌。
【二六九】町。畎畝をいふ。
【二七〇】原隰。平原及び濕地。
【二七一】泱漭、際限なき貌。
【二七二】昆明。池の名。
【二七三】黑水。池の名。阯は沚に同じ、ナギサなり。水色黑し故に玄といふ。
【二七四】金隄。隄は堤なり、金は堅きをいふ。
【二七五】豫章。木の名、此の木を以て作れる故、豫章館といふ。
【二七六】揭焉。高く聳ゆる貌。
【二七七】牽牛。西都賦二五三を見よ。
【二七八】扶桑。木の名、日の出づる處に生ず。
【二七九】濛汜。日の入る處の名。
【二八〇】衡陽。地名、南方衡山の南に在り、雁は冬季ここまで來り止り、來春になりて北に移るといふ。
【二八一】雁門。北方に在る山の名。
【二八二】沸卉軿訇。奮迅の貌。

て廣大にして日月其中より出入す。池中には魚類多く或は長額、或は短項、或は大口、或は折鼻、狀形各〻異にして族類一ならず。鳥類亦極めて多く、形狀已に異り音聲亦同じからず。一一擧げ盡すべくもあらず。

是に於て孟冬、陰を作し、寒風肅殺たり、雨雪飄飄として、氷霜慘烈たれば、百卉具に零ち、(二八三)剛蟲搏摯ふ。爾して乃ち(二八四)天維を振へ(二八五)地絡を衍べ、川瀆を蕩かし林薄を簸ぐ。鳥は畢く駭き獸は咸く作ち、草に伏し木に棲み。寓り居て穴に託き、彼に起り此に集り。(二八六)霍繹紛泊として彼の靈囿の中に在り。前も後も垠鍔あるなし。(二八七)虞人焉を掌り之が營域を爲り、萊を焚き場を平げ、木を柞り棘を翦り、罝を百里に結び、(二八八)迒杜り蹊塞り、麀鹿(二八九)麌麌として(二九〇)駢田偪仄す。

【大意】孟冬十月陰氣始めて盛にして、氷霜雨雪草木を枯すの時至れば、網を張り鷹を放ち犬を驅り、以て藪澤林野に狩す。

天子、乃ち(二九一)雕軫に駕し(二九二)駿駮を六にし、(二九三)翠帽を載せ(二九四)金較に倚り、(二九五)璿弁玉纓、

【二八三】剛蟲。蟲は禽獸なり。鷹犬の如き狩に用ふる鳥獸。

【二八四】天維。維は網、其大なること天の如きなり。

【二八五】地絡。絡は網、其廣きこと地の如きなり。

【二八六】霍繹紛泊。飛走する貌。

【二八七】虞人。禽獸を掌る官。

【二八八】迒・蹊。鳥獸の逃ぐる道。

【二八九】麌麌。あつまり立つ貌。

【二九〇】駢田偪仄。聚會する貌。

【二九一】雕軫。雕飾を加へし車。

【二九二】駿駮。駮は白毛にして黒き斑點ある馬、駿馬なり。天子の車には六匹の馬をつく。

【二九三】翠帽。カハセミの羽にて飾りし車蓋。

【二九四】金較。金にて飾りしヨコギ。較は軾の上に在り、古は車には皆立乘せり、故に較に

(二九六)遺光儵爚たり。(二九七)玄弋を建て(二九八)招搖を樹て、(二九九)鳴鳶を棲ましめ(三〇〇)雲梢を曳き、(三〇一)弧旌枉矢(三〇二)虹旃蜺旄あり。(三〇三)華蓋辰に承け(三〇四)天畢前驅し、千乘雷のごとく動き、萬騎龍のごとく趨り、(三〇五)屬車の簉、(三〇六)獫猲獢を載す。惟だ翫好のみにあらず、廼ち秘書あり。小說九百、本(三〇七)虞初よりす。(三〇八)從容の求寔に俟ち寔に儲ふ。

【大意】天子乃ち車に乘り六馬を駕し、馬には瓊弁を被らしめ玉纓を著け、車上に旌旗を建て、以て狩場に幸す。千乘萬騎雲の如く隨ひ、屬車には獵狗を載す。また小說秘書九百あり。もと虞初より始まる。此れただ翫好の爲にあらず。儲へて以て隨ひ天子の求問を待つなり。

是に於て(三〇九)蚩尤鉞を秉り鬣を奮ひ般を被り、(三一〇)不若を禁禦し以て神姦を知る。(三一一)魑魅蝄蜽能

憑りて立つなり。

【二九五】瓊弁。玉にて飾りし馬の冠。玉纓は玉にて飾りしムナガヒ。

【二九六】遺光。餘光といふが如し。儵爚は輝く貌。

【二九七】玄弋。北斗の第八星の名此星を畫きし旗をいふ。

【二九八】招搖。北斗の第九星の名此星を畫きし旗。

【二九九】鳴鳶。旗の名。

【三〇〇】雲梢。雲旗なり。

【三〇一】弧旌枉矢。皆星の名、之を畫きし旗なり。

【三〇二】虹旃蜺旄。虹を畫きし旗。

【三〇三】華蓋。車上のヒオホヒ。

【三〇四】天畢。網なり。

【三〇五】屬車。おともの車。

【三〇六】獫猲獢。皆獵狗なり。

【三〇七】虞初。漢の河南の人、武帝の時、方士を以て郎となる。漢書藝文志に虞初周說九百四十三篇あり、支那小說家の祖となす、今九百といふは大數を擧げたるなり。

【三〇八】從容。閑暇なり。

【三〇九】蚩尤。人名。山海經に蚩尤兵戈ヲ作ルとあり。

【三一〇】不若。若は順なり。怪物をいふ。

【三一一】魑魅は山神なり。蝄蜽は水神なり。

く旃に逢ふなし。(三一二)虎旅を(三一三)飛廉に陳ね、(三一四)壘壁を(三一五)上蘭に正し、部曲を結び行伍を整へ、(三一六)京薪を燎き雷鼓を駴し、獵徒を縱ちて長莽に赴かしむ。(三一七)迾卒清候し武士赫怒し、(三一八)緹衣韎韐、(三一九)睢盱拔扈し、光炎天庭を燭し囂聲海浦に震ひ、(三二〇)河渭之が爲に波盪き、(三二一)呉嶽之が爲に堵を陁す。百禽(三二二)㥄遽して(三二三)騤瞿奔觸し、精を喪ひ魂を亡ひ、歸を失ひ趨を忘れ、輪に投じ(三二四)輻に關りて、邀へざるに自ら遇ひ、(三二五)飛罕潚箾し流鏑(三二六)攉㩧し、矢は虛しく舍たず鋋は苟も躍げず。足に當りて蹶され輪に値ひて轢かれ、僵禽斃獸爛として積礫の若し。ただ罝羅の羂結ぶ所、竿殳の摚畢く所、(三二七)叉蔟の攙捔く所、徒搏の撞挞つ所を觀るのみ。白日未だ晷を移すに及ばざるに、已に其十の七八を獮す。

【大意】乃ち蚩尤をして斧鉞を執り其鬣を振ひ虎皮を被りて不若を止めて神鬼の姦情を知らしむ。

【三一二】虎旅。周禮に虎賁ハ下大夫、旅賁氏ハ中士ナリとあり。勇士をいふ。
【三一三】飛廉。館の名。
【三一四】壘壁。星の名。以て軍隊の名とす。
【三一五】上蘭。觀の名。上林中にあり。
【三一六】京薪。高く積みたる薪。莽は音ボ。叶韻。
【三一七】迾卒。迾は遮なり、獵徒なり。清候は道を戒むると。
【三一八】緹衣韎韐。武士の衣服。

【三一九】睢盱。目を怒らす貌。拔扈は勇壯の貌。
【三二〇】河渭。二川の名。
【三二一】呉嶽。雍州に在る山名。
【三二二】㥄遽。おそれあわてること。
【三二三】騤瞿。奔走する貌。觸は音スウ。叶韻。
【三二四】輻。車の矢。
【三二五】飛罕。罕は網なり。潚箾は物に著く貌。
【三二六】攉㩧。物にあたる音。
【三二七】叉蔟。貫穿すること。

故に獵徒山野を馳驅するも決して魑魅魍魎の害に遇ふことなし。因つて隊伍を整へ、篝火を焚き、鼓を鳴らして藪澤の間に奔馳す。其の光焔は天庭を照し其物音は海浦を震動し、川流之が爲に波動し、山岳も之が爲に崩れんとす。百獸畏怖奔走し精魂を失ひ歸向する所を知らず。皆自ら出でて車輪に觸れ車輻に當る。矢を發し戈を投ずれば必ず獲る所あり、禽獸の死する者砂石の如し。かくの如くにして日未だ暮るるに及ばざるに、禽獸を獲ること已に十の七八なり。

若夫れ遊鷸高く翬びて阬を絕り斥を踰え、(三八)㕙兎聯猭して巒に陵り壑を超ゆ。諸を(三九)東郭に比するに之を能く獲るなし。乃ち(三〇)迅羽輕足あり。景を尋ね括を追ふ。鳥は擧るに暇あらず獸は發るを得ず。(三一)青骹韝下に摰ち、(三二)韓盧緤末に噬む。其の(三三)猛毅髬髵し、(三四)隅目高眶するに及んでは、威兕虎を懾れしめ、之に敢て伉るなし。乃ち(三五)中黃の士、(三六)育獲の疇をして(三七)朱髮鬖髿し

【三八】㕙兎。狡兎なり、聯猭は走ること。
【三九】東郭。東郭㕙とて極めて遙捷なる兎の名。戰國策に東郭㕙ハ海內ノ狡兎ナリとあり。
【三〇】迅羽は鷹をいふ。輕足は犬をいふ。
【三一】青骹。骹は脛なり、鷹の名。韝はユガケ、臂に著くる武具。
【三二】韓盧。犬の名。戰國策に見ゆ。緤は犬を牽く繩なり。
【三三】猛毅。猛獸なり。髬髵は毛をさかだつること。
【三四】隅目。角眼に視ること。高眶は深瞳子なり。
【三五】中黃。國の名、其俗勇力多し。
【三六】育獲。育は夏育。獲は烏獲、古の勇者の名。
【三七】朱髮。赤帽にて鉢卷すること。鬖髿は麻を以て雜へて髻を爲ること。

植髮竿の如く、袒裼して手を戟にし（二三八）奎踽盤桓せしむ。赤象を鼻り（二三九）巨狿を圏み、（二四〇）狒猬を摣り窳狻を批り、枳落を揩り棘藩を突く。（二四一）梗林之が爲に靡拉け、樸叢之が爲に摧殘はる。輕銳僄狡趫捷の徒、洞穴に赴きて封狐を探り、重巘に陵りて（二四二）昆駼を獵り、木末を杪りて（二四三）獑猢を攫り、殊榛を超えて飛鼯を摕る。

【大意】雉高く飛び去り狡兎窟を出でて走る。其迅速なること東郭㕙の比にあらず。故に之を捕獲すること極めて難し。乃ち鷹を放ち獵犬を馳せ、之を追躡せしむれば、鷹は鞲下に飛雉を撃ち、犬は縢末に兎を噬む。其他の猛獸また猛り狂ひ其威兕虎をも懾れしむ。因つて勇士を發し、趫捷の徒を發して此を獵り立てしむ。

是時後宮の（二四四）嬖人昭儀の倫、常に乘輿に亞ぎ、（二四五）賈氏の皐に如けるを慕ひ、（二四六）北風の車を同うせんことを樂ひ、（二四七）遊畋を盤みて其れ樂む（二四八）只且。是に於て鳥獸殫き目觀窮る。（二四九）遷延邪睨して

【二三八】奎踽は足を開くなり。盤桓は進まざるなり。
【二三九】巨狿。大獸の名。
【二四〇】狒猬窳狻。皆猛獸の名。
【二四一】梗林。木に刺あるを梗といふ。
【二四二】昆駼。獸の名。
【二四三】獑猢。猿の類の獸。
【二四四】嬖人は寵愛深き婦人。昭儀は女官の官名。
【二四五】賈氏云云。左傳に賈大夫惡シ、妻ヲ取リテ三年言ハズ笑ハズ、御シテ皐ニ如ク、雉ヲ射テ之ヲ獲ル、其妻始メテ笑ヒテ言フとあり。
【二四六】北風云云。詩經北風篇に惠ニシテ我ヲ好セバ、手ヲ携ヘテ車ヲ同ウセンとあり。
【二四七】遊畋。遊獵なり。
【二四八】只且。助辭なり。
【二四九】遷延は退旋すること。邪睨は横目に視ること。

（二五〇）長楊の宮に集る。（二五一）行夫を息めて車馬を展め、禽を收め（二五二）嘗を擧げ、衆寡を數課し、（二五三）互を置き牲を擺ちて獲鹵を頒ち賜ひ、鮮を割きて野に饗ひ、勤を犒ひ功を賞す。（二五四）五軍六師千列百重、酒車もて醴を酌み駕を方べて饗を授け、觴を升るに燧を擧げ、既に釂せば鐘を鳴らす。（二五五）膳夫馳騎して、貳れるを察し空しきを廉、（二五六）炙炰夥く清酤敎し。皇恩溥く（二五七）洪德施す。（二五八）徒御悅んで士は罷を忘る。

【大意】天子の出でて獵するや、寵幸ある宮人また之に隨從し、共に其樂を極むるを常とす。狩獵既に終り鳥獸盡き目觀既に盡くるや、徘徊顧望して長楊宮に歸り、獲物の多少を較し鮮肉を分與して功勞を賞す。酒車もて酒を運び、駕を竝べて肉を授け燧を擧げ鐘を打ちて合圖をなし以て飮酒す。膳夫は馬を驅りて肴の兼重する者及び食ひ終れる者を視察す。皇恩あまねく施し大德衆に及ぶや、士卒皆悅樂して其疲勞を忘る。

（二五九）巾車駕を命じ旆を廻らして右に移り、（二六〇）五柞の館に（二六一）懷佯し、旋りて昆明の池に憩ひ、（二六二）豫

【二五〇】長楊。宮の名。
【二五一】行夫。士卒なり。
【二五二】嘗。鳥獸の肉。
【二五三】互。肉を挂くるもの。
【二五四】五軍六師。天子の軍。
【二五五】膳夫。料理人なり。
【二五六】炙炰。燒肉なり。
【二五七】洪德。大德なり。
【二五八】徒御。徒は輦者、御は御馬なり。
【二五九】巾車。王の車を掌る官。
【二六〇】五柞。館の名。
【二六一】懷佯。徜徉に同じ、さまよふこと。
【二六二】豫章。昆明池中にある館の名。

章に登りて鏳紅を簡び、(三六三)蒲且發ちて高鴻を弋、白鶴を挂け(三六四)飛龍を聯ね、(三六五)磻特り絓けず往けば必ず雙を加ふ。是に於て(三六六)舟牧に命じて水嬉をなし、(三六七)鷁首を浮べ(三六八)雲芝を翳し、(三六九)翟葆を垂れ羽旗を建て、(三七〇)栧女を齊へて櫂歌を縱ち、(三七一)引和を發して(三七二)鳴葭を校にし、(三七三)淮南を奏して(三七四)陽阿を度り、(三七五)河馮を感ぜしめ(三七六)湘娥を懷はしめ、蝄蜽を驚し蛟蛇を憚かす。

【大意】車駕乃ち還り五柞館に逍遙し昆明池に過り豫章館に憩ひ、鏳繳を整へて更に水禽を射る。一發すれば必ず雙飛翼を墜す。是に於てか池に舟を泛べて水嬉をなし、天子鷁首の舟に乘り羽旗を建て、女子をして楫取歌を歌はしめ、舞人に命じて起舞せしむれば、水神も爲に感動し、蛟蛇も駭き潛む。

然る後(三七七)魴鱧を釣り鰋鮋を纙にし、紫貝を撫ひ耆龜を搏り、水豹を搤り潛牛を羇す。(三七八)澤虞是れ

【三六三】蒲且。人名、列子に蒲且子ノ弋スルヤ、弱弓纖繳風ニ乘ツテ之ヲ振フ云云とあり。
【三六四】飛龍。鳥の名。
【三六五】磻。石箭鏃なり。
【三六六】舟牧。舟を掌る官。
【三六七】鷁首。天子の乘る船。鷁は水鳥、其形を船首に畫く。故に名づく。
【三六八】雲芝。芝草及び雲氣を畫きし船のおほひ。
【三六九】翟葆。はたさきの雉の羽飾。
【三七〇】栧女。楫取の女子。
【三七一】引和。一人唱ふれば餘人の之に和すること。
【三七二】鳴葭。葭は管なり、急に之を吹けば乃ち和鳴す。
【三七三】淮南。舞人なり。
【三七四】陽阿。舞なり。
【三七五】河馮。河の神。
【三七六】湘娥。湘水の女神。
【三七七】魴鱧鰋鮋。皆魚の名。鮋は音キウ。叶韻。
【三七八】澤虞。水澤を掌る官。

（三七九）濫す。（三八〇）春秋に何か有らん。漻瀣を遡り川瀆を搜り、（三八一）九罭を布き（三八二）罜麗を設け、（三八三）鯤鮞を摷し水族を殄し、蘧藕抜かれて蜃蛤剝かる。欲を逞うして畋り斂り、獲を麑麌までに效し、（三八四）摎蓼浶浪して池を乾し藪を滌ひ、上には逸飛ぶものなく、下には遺走るものなく、胎を擭り卵を拾ひ、蚳蝝まで盡く取り、樂を今日に取り、（三八五）我が後を恤ふるに遑あらんや。既に定まりて且つ寧し、焉ぞ傾陁つることを知らんや。

【大意】然る後或は釣り或は網し、大龜を取り水豹を獲、時期を限らずして漁獵すること、豈獨り春秋魯の宣公のみならんや。かくて水には水族を漁し盡し、山には麑まで狩り盡し、池藪を一洗し盡して後やむ。樂を今日に快くし後日の長久を顧るに遑あらず、天下已に定まり寧し。何ぞよく後日の傾覆を知らんや。

大駕（三八六）平樂の館に幸し、（三八七）甲乙を張りて（三八八）翠被を襲ね、珍寶の玩好を攢め、紛として瑰麗にして以て奓靡し。（三八九）逈望の廣場に臨み、角觝の妙戲を程す。（三九〇）烏獲鼎を扛げ（三九一）都盧橦に尋り、

【三七九】濫。時節を限らすして網を打つこと。國語に魯ノ宣公泗流ニ濫スとあり。

【三八〇】春秋。支那の時代の名、魯の宣公は春秋時代の人なり。

【三八一】九罭。魚網なり。

【三八二】罜麗。小網なり。

【三八三】鯤鮞。鯤は魚の子、鮞は細魚。

【三八四】摎蓼浶浪。徧く捜索するをいふ。

【三八五】我が後云云。詩經に我ガ躬スラ閲レラレズ、我ガ後ヲ恤フルニ遑アランヤとあり。

【三八六】平樂。音樂を演奏する館の名。

【三八七】甲乙。帳の名。

【三八八】翠被。翡翠の羽にて飾りし著物。

【三八九】逈望。廣きこと。

【三九〇】烏獲。ちからもち。

【三九一】都盧。もと國の名、取りて演戲の名とす。體輕く善く橦に緣る。

（三九二）狹を衝きて（三九三）鷰濯し、胷を銛鋒に突き、丸劍の（三九四）揮霍を跳らし、索上を走りて相逢ふ。（三九五）華嶽峨峨として岡巒參差たり。神木靈草、朱實（三九六）離離たり。仙倡を總會し（三九七）豹を戯れしめ羆を舞はし、白虎瑟を鼓し蒼龍篪を吹き、（三九八）女娥坐して長歌し、聲淸暢にして（三九九）蜲蛇たり。（四〇〇）洪涯立ちて指麾し、毛羽の（四〇一）襳襹なるを被る。（四〇二）度曲未だ終らざるに雲のごとく起り雪のごとく飛ぶ。初には飄飄たるが若く、後には遂に霏霏たり。（四〇三）複陸重閣石を轉じ雷を成し、（四〇四）礔礰激して響を增し、（四〇五）磅礚天威に象る。

【大意】更に平樂館に行幸し、甲帳を張りて美衣を襲ね、廣場に臨んで角觝戯を演ぜしむ。烏獲は鼎を扛げ、都盧は橦に登り、或は燕濯技あり、或は揮霍技あり。神木靈草を作り設けたる中に於て虎豹に擬して舞ふあり。仙女坐して長歌するあり。飄飄霏霏として雲の如く雨の如し。複堂の上より巨石を轉じ、其聲百雷の轟くが如く、天の威怒も斯くやと思はるるばかりなり。

【三九二】狹。草を以て環となし、刀を挿み、四方より伎人躍りて其中に入る。
【三九三】鷰濯。盤水を以て前に置き、其後に坐し、身を踊らし手を張りて前に跳り、水を踰えて復た却き坐す、燕の浴するが如き技なり。
【三九四】揮霍。鈴劍の上下する貌
【三九五】華嶽。山の名、華山なり。
【三九六】離離。實の垂る貌。
【三九七】豹羆白虎。皆假作なり。
【三九八】女娥。娥皇女英なり。神女なり。
【三九九】蜲蛇。餘聲の詰曲するを。
【四〇〇】洪涯。三皇の時の伎人。
【四〇一】襳襹。毛衣の貌。
【四〇二】度曲。曲の節度をいふ。
【四〇三】複陸。複道閣なり、上に於て石を轉じ以て雷聲に象る。
【四〇四】礔礰。霹靂に同じ。
【四〇五】磅礚は雷霆の音なり。天威は天の威怒なり。

巨獸の百尋なるあり。是を蔓延となす。神山崔巍として欻ち背より見ゆ。熊虎升りて拏攫し猨狖招いて高援し、怪獸陸梁し、大雀（四〇六）踆踆たり。白象行〻孕み、垂鼻（四〇七）轔輵たり。海鱗變じて龍と成る。狀（四〇八）蜿蜿として以て蝹蝹たり。（四〇九）含利颬颬し化して（四一〇）仙車となり、四鹿に驪駕して（四一一）芝蓋の（四一二）九葩あり。蟾蜍と龜とあり、水人蛇を弄す。奇幻儵忽、貌を易へ形を分ち、刀を呑み火を吐き、雲霧杳冥、地を畫して川と成し、（四一三）渭を流し涇を通ず。（四一四）東海黃公、赤刀もて粤に祝し、白虎を（四一五）厭せんとを冀へども卒に救ふ能はず、邪を挾み蠱を作すも是に於て售れず。爾して乃ち（四一六）戲車を建て修旃を樹て、侲僮材を逞し上下翩翻たり。突として倒に投げて跟絓り、殞絕して復た聯るに譬ふ。百馬轡を同うし、騁足並び馳す。橦末の伎、態彌すべからず。弓を彎いて（四一七）西羌を射、又顧みて（四一八）鮮卑に發つ。

【四〇六】踆踆。行き走る貌。
【四〇七】轔輵。下垂する貌。
【四〇八】蜿蜿、蝹蝹。龍の行く貌。
【四〇九】含利。獸の名。颬颬は口を開く貌。
【四一〇】仙車。仙人の車。
【四一一】芝蓋。芝草を以て車蓋となす。
【四一二】九葩。葩は花なり。
【四一三】渭、涇。川の名。
【四一四】東海黃公。西京雜記に東海ノ人黃公少時ヨク幻ヲナシ蛇ヲ制シ虎ヲ御ス、常ニ赤金刀ヲ佩ブ、衰老ニ及ビ酒ヲ飲ムコト度ニ過グ、白虎アリ東海ニ見ユ、黃公赤刀ヲ以テ往キテ之ヲ厭スレドモ、術行ハレズ、遂ニ虎ノ爲ニ食ハルとあり。
【四一五】厭。まじなひて制服すること。
【四一六】戲車。戲を演ずる車。
【四一七】西羌。東胡種族なり。
【四一八】鮮卑。北胡なり。

【大意】大獸の百尋なるを作り、名づけて蔓延の戲となす。神山を背上に負はしめ熊虎猿猴の類を

して、皆山上に相搏たしむ。又大白象を作り、行く〳〵子を産み、鼻正に轔䡣たり。又大魚を作り、忽ち變じて龍と成る。又含利獸を作り、後化して仙人の車となる。乃ち四鹿を之に駕し、芝草を以て車蓋となす。又千歳の蟾蜍、千歳の龜を弄する戯あり。奇幻百出、或は一身を變じて數人となし、或は刀を呑み或は火を吐き、或は雲霧を起し、或は地を畫して川河となす。或は東海黄公の赤刀を以て白虎を厭せんとして卒に能はざるの態を演ずる者あり。或は戯車を造り長旗を飜し、幼童倒に身を投じ將に墜ちんとするが如くにして足跟却つて橦の上にかかり、已に絶えたるが如くにして復た連るあり。或は橦上に於て百馬を作り一轡を以て之を馳す。その伎態窮盡すべからず。或は假に人形を作り弓を彎いて以て西羌北胡を射るあり。

是に於て衆變盡きて心酲醉し、盤樂極りて悵懷萃る。陰に(四一九)期門を戒めて微行(四二〇)要屈し、尊を降し卑に就き(四二一)璽を懷き(四二二)紱を藏し、閭閻に(四二三)便旋し周く(四二四)郊遂を觀る。神龍の變化するが若くにして(四二五)后皇の貴しとなすを彰す。然る後に(四二六)掖庭を歷て歡館に適き、衰色を捐てて(四二七)嬿婉に從ふ。中堂の隱坐を促け、羽觴行りて筭

【四一九】期門。西都賦二二三を見よ。
【四二〇】要屈。微行に同じ、出で行くに法駕せざるを要といひ、上より下に雑るを屈といふ。
【四二一】璽。天子の印なり。
【四二二】紱。天子の服なり。
【四二三】便旋。徘徊といふが如し。
【四二四】郊遂。近郊をいふ。
【四二五】后皇。皇帝をいふ。
【四二六】掖庭。後宮なり。
【四二七】嬿婉。美好の貌。

なく秘舞更ゝ奏し、妙材伎を騁す。(四二八)妖蠱かの(四二九)夏姬よりも豔しく、美聲(四三〇)虞氏よりも暢ぶ。始め徐に進んで羸形羅綺に任へざるに似、(四三一)淸商を嚼ひて却轉し、嬋娟を增して(四三二)此豸し、紛として體を縱にして迅く赴くこと、驚鶴と羣鳧との若し。(四三三)朱屣を盤樽に振ひ、長袖の(四三四)颯纚たるを奮ひ、(四三五)要紹態を修め麗服菁を颺げ、(四三六)眳藐流眄すれば一顧して城を傾く。(四三七)展季桑門も誰か能く營けざらん。(四三八)爵を列すること十四、媚を競ひ榮を取り、盛衰常なく、唯愛の丁る所なり。(四三九)衞后は鬒髮より興り、(四四〇)飛燕は體の輕きに寵せらる。

【大意】是に於て遊戲終り心悅樂に飽き、悵然として微行を思ふ。乃ち期門郞を戒め璽紱を懷に藏め、自ら降して賤微に混じ、閭巷に遊び近郊に觀び、或は賤人に同うし或は尊位に復し、變化すること神龍の如く、此を以て天子の貴きを明にす。然る後後宮歡館に過り特に美豔を擇ん

【四二八】妖蠱　艷美なること。蠱は音ヤ。
【四二九】夏姬。鄭の穆公の女、陳の大夫御叔の妻なり。
【四三〇】虞氏。虞公なり、歌を善くし、一聲を發すれば梁上の塵を動かすといふ。
【四三一】淸商。音調なり。
【四三二】此豸。姿態の妖艷なる貌。
【四三三】朱屣。赤絲の履。
【四三四】颯纚。長き貌。
【四三五】要紹。嬋娟にして姿容をなすをいふ。
【四三六】眳藐。目つきのよき貌。
【四三七】展季。柳下惠なり。柳下惠婦人の寒になやむを見て、身を以て之を溫めたるも、世人その亂行を疑ふ者なかりきといふ、事孔子家語に見ゆ。桑門は西國の佛僧なり。
【四三八】爵云云。西都賦一三七を見よ。
【四三九】衞后。漢の武帝の皇后、字は子夫。
【四四〇】飛燕。漢の成帝の皇后、趙氏。

で中堂に相對坐し、酒杯を擧ぐること算なく、閑歌妙舞すれば、姿態は夏姫よりも艶に聲音は虞公よりも美なり。珠履を盤樽の間に振ひ、一顧すれば人の家國をも傾くべし。この美姫を一見せば、柳下恵桑門の如き貞潔の士も孰か心を動かさざらんや。後宮の官皇后より以下十四等、各榮寵を競ひ、盛衰常なし。惟天子の意に當る者最も寵幸を得るのみ。衞皇后は黒髪を以て寵せられ、趙飛燕は體の輕くして舞を善くするを以て寵せらる。

爾して乃ち志を逞うし欲を究め、身を窮め娯を極め、(四一)唐詩の他人是れ婾まんといふを鑒戒とす。君より(四二)故を作せば何の禮か之れ拘らん。(四三)昭儀を婕妤に增し、(四四)賢既に公にして又侯なり。(四五)趙氏に許すに上なきを以てし、(四六)董を有虞に致さんことを思ふ。王閎坐側に爭ひ、漢載ち安くして渝らず。高祖業を創め、體を繼ぎ基を

【四一】唐詩。詩經の唐風山有樞篇をいふ、其詩に子ニ衣裳アルモ、曳カズ婁セズ、子ニ車馬アルモ、馳セズ驅ラズ、宛トシテ其レ死セバ、他人是レ愉マンとあり。

【四二】故。故事先例なり。

【四三】昭儀、婕妤。ともに宮女の官名。漢書に孝成帝ノ趙皇后（飛燕）女弟アリ、婕妤トナル、ハナハダ幸セラレテ昭儀トナルとあり。

【四四】賢。董賢なり。漢書に董賢ヲ封ジテ高安侯トナス、後丁明ニ代リテ大司馬トナル、卽チ三公ノ職ナリとあり。

【四五】趙氏に許す云云。漢書に成帝趙昭儀ニ謂ツテ曰ク、許氏ヲ立テズ、天下ヲシテ趙氏ノ上ニ出ヅル者ナカラシメン云云とあり。

【四六】董を有虞に云云。董は董賢、有虞は舜の姓。漢書に、上麒麟殿ニ置酒ス、董賢ヲ見テ笑ツテ曰ク、吾堯ノ舜ニ禪レルニ法ラント欲ス何如ト。王閎曰ク、天下ハ乃チ高帝ノ天下ナリ、陛下ノ有ニアラザルナリ、業ヲ統ブルハ至ツテ重シ、天子ニ戲言ナシとあり。

承け、暫く勞して永く逸し、無爲にして治まり、耽樂に是れ從ふ。何をか慮り何をか思はん。多く年所を歴ること（四七）二百餘朞なり。徒以るに地沃え野豐にして百物殷阜なり。巖險周固、襟帶して守り易し。之を得る者は彊く、之に據る者は久し。流長ければ則ち竭き難く、柢深ければ則ち朽ち難し。故に奢泰情を肆にして、馨烈彌〻茂なり。

【大意】斯の如くにして意を肆にして娯樂を窮め、唐風に衣服車馬あるも之を服用馳驅せず、一旦流然として死せば、他人却つて之を用ひんとあるを鑒戒とす。それ君主率先して奢侈の先例を開く。誰か禮法に拘り節制を守る者あらんや。寵姬を昭儀として無上の榮光を加へ、寵臣を公侯とし、更に皇位を讓らんとするに至る。幸にして王閎之を諫止し漢室始めて安泰なるを得たり。高祖帝業を創め、暫く勞すと雖も子孫をして其餘業を繼承し永く安逸なるを得しめたれば、ただ耽樂を是れ恣にし、何の顧慮する所なく、年を歴ること二百餘年に及べり。これ偏に土地肥沃、五穀豐饒、地形險固なるに因り、奢侈を肆にすと雖も功業益〻茂盛なるを得たるなり。

（四八）鄙生三百の外に生れ、未だ聞かざる者を傳聞し、曾て髣髴として其れ夢の若し。未だ一隅をだに

【四七】二百餘朞。朞は一周年なり。高祖より王莽に至るまで二百三十年なり。

【四八】鄙生。憑虛公子の自稱、謙辭なり。三百は高祖より三百年の後をいふ。

覩る能はず。此何ぞ殷人の屢〻遷り、(四四九)前には八たび後には五たび、相に居り耿に圮れ、厥土を常にせず、(四五〇)盤庚誥を作り人を帥て以て苦めるに與かんや。方今聖上天號を(四五一)帝皇に同うし、四海を掩ひて家となす。富有の業我より大なるはなし。徒恨むらくは靡麗を以て國華となす能はざるを。獨り儉嗇にして以て齷齪し、(四五二)蟋蟀の謂を忘れたるは何ぞや。豈之を欲すれども能はざるか、將之を能くすれども欲せざるか。(四五三)蒙竊に惑ふ。願くは之を辯ずる所以の說を聞かんと。

【大意】我れ漢室創業より三百年の後に生れ、未だ聞かざる事を傳へ聞き、髣髴として夢中の如く、未だ其一端をも見る能はず。其の盛想見すべし。然るに今東都を棄て西都に遷らざるは、殷人の屢〻都を遷して其土を常にせず、盤庚の誥命を作り民を率ゐて殷に遷都せるの勞苦をなせしに及ばざること遠し。方今聖德天に同じく、四海を掩ひて一家となす。富有の業我が漢室より盛大なるはなし。ただ恨むらくは華美を以て國家の光華とする能はず、獨り儉約にして齷齪し、蟋蟀篇の刺を忘れ遊樂を事とする能はざるは何ぞや。豈に靡麗遊樂を欲すれども能はざるにや、抑〻或は之を能くすれども欲せざるにや。願くは其

【四四九】前には云云。殷は契より湯に至る迄八度都を遷し、盤庚五度都を遷し、河亶甲は相に居り、祖乙は耿に圮る、圮るとは河水に破られしをいふ。
【四五〇】盤庚。殷王の名。誥は人民に告ぐるコトバ。書經の盤誥篇是れなり。
【四五一】帝皇。天帝なり。
【四五二】蟋蟀。詩經唐風の篇の名儉をそしりし詩なり。
【四五三】蒙。愚昧なり。憑虛公子の自稱謙辭。

說を聞かんと。

卷の第二

賦乙

京都中

(一)東京の賦

張平子

(二)安處先生是に於て言ふ能はざる者の似く、(三)憮然たること間あり。乃ち(四)莞爾として笑つて曰く、客の若きは所謂(五)末學膚受、耳を貴んで目を賤む者なり。苟に胷ありて心なし、之を節するに禮を以てする能はず。宜なり其の(六)今を陋として(七)古を榮とするや。由余は西戎の孤臣を以て穆公を宮室に悝る。之を如何ぞ其れ故を溫ね新きを知り、是非を研覈するを以て此惑に近きや。

【一】東京。洛陽をいふ、賦意は班固の東都の賦と同じ。
【二】安處先生。西京賦の五を見よ。
【三】憮然。自失する貌。
【四】莞爾。ほほゑむ貌。
【五】末學は根據なき學問。膚受は淺薄なる見解。
【六】今。東京を指す。
【七】古。西京を指す。

【大意】安處先生、憑虛公子が盛に西京奢麗の事を稱するを聞き、其の貴ぶ所禮に違ひ道を失せるに驚き、茫然自失すること頃なりしが、笑つて曰く、足下の如きは所謂末學膚受の徒にして徒に聞

く所（暗に西京を指す）を貴んで見る所（暗に東京を指す）を賤む者なり。外に胸ありと雖も内に心なし。故に禮儀の節制を知る能はず。彼の西京の奢侈を以て榮となし、我が東京の儉約を以て陋となすも亦宜なり。昔由余は西戎の孤臣のみ、秦の穆公の宮室の美を誇示するや、其の誇るに足らざるを嘲れり。足下は溫故知新の德あり。當に事理の是非を審にすべし。然るに却つて此理に惑へるは何ぞや。

（八）周姬の末、厥政を能くせず。政用て僻多く、（九）宮隣に始りて、（一〇）金虎に卒る。（一一）嬴氏翼を搏ちて肉を西邑に擇ぶ。この時（一二）七雄竝に爭競し、相高ぶるに奢麗を以てし、楚には（一三）章華を前に築き、趙は（一四）叢臺を後に建つ。（一五）秦政利觜長距ありて終に場を擅にするを得、其侈を專にせんことを思へり。己に若くものなきを以てなり。乃ち（一六）阿房を構へ（一七）甘泉を起て、（一八）雲閣を結びて（一九）南山に冠す。（二〇）征稅盡き人力殫く。然る後收むるに太半の（二一）賦を以てし、威すに

【八】周姬。周をいふ、姬は周の姓なり。

【九】宮隣。宮は君なり、小人位に在り、比周して相進み、君と隣をなすをいふ。

【一〇】金虎。堅きこと金の如く、惡きこと虎の如きをいふ。

【一一】嬴氏。秦の姓なり。

【一二】七雄。戰國の七强國、趙魏韓燕齊楚秦をいふ。

【一三】章華。臺の名、左傳に楚子章華ノ臺ヲ乾谿ニ築クとあり。

【一四】叢臺。臺の名、史記に趙ノ武靈王叢臺ヲ起スとあり。

【一五】秦政。秦の始皇帝、名は政。

【一六】阿房。宮殿の名。

【一七】甘泉。宮の名。

【一八】雲閣。閣の名。

【一九】南山。終南山なり、長安の南にあり。

【二〇】征稅。租稅なり。

【二一】賦。亦稅なり。

〔二二〕參夷の刑を以てす。其の民を遇するや、〔二三〕薙氏の草を芟り、既に蘊崇めて又火を行るが若し。〔二四〕慄慄たる黔首豈徒に高天に跼まり、厚地に蹐するのみならんや。乃ち死を其頸に救ふ。敺りて以て役に就く。唯力を是れ視る。百姓忍ぶ能はず。是を用て肩を大漢に息へて、高祖を欣戴せり。

【大意】周の末年、政に邪辟多く、小人位に在りて君と鄰近し、讒臣金虎の如し。是を以て國終に滅ぶ。秦乃ち西方の險に據りて猛威を振ひ、諸侯を擇んで之を攻む。此時に方り七雄國互に華美を競ひ、前（春秋時代）には楚王の章華臺を築くあり、後（戰國時代）には趙王の叢臺を築くあり。特に秦の始皇は甲兵猛鋭にして、竟に六國を滅し天下を專有し、奢侈を極めんことを思へり。乃ち阿房以下の諸宮を構へ、爲に金力と人力とを消費し盡し、更に徵税の法を設け、能はざる者は其三族を誅殺し、民を遇すること苛酷を極めたり。秦民大れ恐れ天地に跼蹐せるも敢て意となさず。驅りて民を使役し、其全力を盡さしむ。秦民その苦に堪へず。重きを擔ひて息ふ能はざるが如し。秦滅び漢興るに及び、民始めて歡び、皆高祖を戴かんことを願へり。

高祖〔二五〕籙に膺り〔二六〕圖を受け、天に順ひて誅を

【二二】參夷。夷は殺なり、租稅を納むる能はざれば、三族を誅殺するなり。

【二三】薙氏。山澤を芟除することを掌る官。

【二四】慄慄。懼るる貌。黔首は人民をいふ。

【二五】籙に膺る。五行相勝の運に合ふこと、秦は水、漢は火なり、火は水に勝つ、故に漢秦に勝つなり、これ五行相勝の理なり。

【二六】圖を受く。河圖を受くるも、天命を受くる徵なり。西

行ひ、朱旗を杖つきて（二七）大號を建つ。推す所は必ず亡び、存する所は必ず固し。（二八）項軍を垓下に掃ひ（二九）子嬰を軹途に紲ぎ、秦の宮室に因り其府庫に據る。（三〇）洛を作るの制、我れ則ち未だ暇あらず。是を以て（三一）西匠宮を營む。阿房の（三二）規摹踰溢なるを（三三）目翫し、（三四）度ならず臧からざるをば、之を損して又損す。然も尚ほ（三五）周堂に過ぎたり。觀る者狹しとして之を陋なりと謂ふ。帝已に其泰を譏りて康しとせず。且つ（三六）高既に命を受け家を建て、我が（三七）區夏を造り、（三八）文又躬自ら（三九）菲薄にして、治、（四〇）升平の德を致し、（四一）武、大に土宇を啓き、肅然に（四二）禪するの功を紀せるあり、（四三）宣威を重ねて以て戎狄を撫和し（四四）呼韓來享し、咸く用て宗を紀し（四五）主を存し、饗祀輟まず。勳を（四六）彝器に銘し、世を歷て彌ゝ光けり。今（四七）純懿を捨てて（四八）爽德を論じ、

都賦の二五を見よ。

【二七】大號。天子の稱號。

【二八】項軍。項羽の軍勢。垓下は地名。

【二九】子嬰。秦王の名。軹は縣の名、長安城の東十三里にあり、塗は途に同じ。

【三〇】洛。洛陽。卽ち漢の東都。

【三一】西匠。秦の大工。

【三二】規摹。規模なり。踰溢は禮法に過ぎたること。

【三三】目翫。視慣ること。

【三四】度ならず云云。制度禮法に叶はぬこと。

【三五】周堂。周代の殿堂。

【三六】高。高祖なり。

【三七】區夏。區は區域、夏は華なり。

【三八】文。文帝なり。

【三九】菲薄。儉約なり。

【四〇】升平。泰平なり。

【四一】武。武帝。

【四二】禪。山を祭ること。

【四三】宣。宣帝。

【四四】呼韓。呼韓邪單于とて匈奴の王なり。來享は來りて珍寶を獻ずること。

【四五】主。木主なり。佛家の位牌の如きもの、之を廟に置く。

【四六】彝器。宗廟の器をいふ。

【四七】純懿。純美に同じ。

【四八】爽德。爽は差なり、德に違へること。

(四九)春秋の諱む所を以て美談となす。宜なり往初に嫌なく、故に善を蔽ひて惡を揚ぐるや。祗に吾子の言を知らざるなり。必ず奢を肆にするを以て賢となさば、則ち是れ黃帝の(五〇)合宮、(五一)有虞の總期、固に(五二)夏癸の瑤臺、(五三)殷辛の瓊室に如かざるなり。(五四)湯武誰か革めて師を用ひんや。盍ぞ亦東京の事を覽て以て自ら寤らざる。

【大意】高祖天命を受けて天子となり、無道なる者は之を亡し、道に合ふ者は之を安固す。項羽を垓下に破り、秦王子嬰を軹道縣に降し、乃ち秦の宮室に入り、其府庫に據る。蓋し草卒の際未だ洛陽を營むに暇あらざりしなり。乃ち秦匠をして宮室を造營せしむ。秦人嘗て阿房の華美なるを見慣れしかば、高祖屢其規模を減損せしめたるも、尙ほ周代宮室の制に踰えたり。然も觀る者或は之を狹陋となす。高祖獨り之を奢泰なりとして自ら安んぜず。且つ高祖天命を受けて國家を建立し、文帝之に繼ぎ、又自ら儉約を守り、武帝四方を征して國土を啓き、泰山に登り肅然に禪して其功を紀し、宣帝よく外夷を撫和し、呼韓邪單于をして來朝せしむ。是を以て高文武宣祖

【四九】春秋。孔子の著せる史書の名。春秋は自國の惡事を暴露することを忌み嫌へり。
【五〇】合宮。黃帝の政事堂の名。此宮草を以て之を葺く。
【五一】有虞。舜なり、舜姓は虞。總期は舜の政事堂の名。葺くに草を以てせり。
【五二】夏癸。夏の桀王なり、傾宮瑤臺を作りて、民財を盡せり。
【五三】殷辛。殷の紂王、瓊室を作り五門を立つ。
【五四】湯武。夏の桀王を滅したる殷の湯王、殷の紂王を滅したる周の武王。

宗の廟を建て、永く其木主を存し、祭祀絶ゆることなく、功を廟器に刻し、年を歷るも益々光明なり。今足下は四帝純美の大德を捨て、專ら元帝成帝の惡德を賞美し、春秋の忌む所のものを以て美談となし、故に善を蔽ひて惡を揚ぐ。是れ實に言を知らざる者と謂ふべし。若し奢侈を以て賢となさば、則ち黄帝虞舜の節儉は、却つて桀紂の豪奢に如かざるなり。果して然らば湯武如何ぞ此弊を改革せんとし、武力を用ひて之を滅さんや。足下は宜しく東京の儉約を見、以て西京奢侈の非なるを覺るべきなり。

且夫れ天子道あれば、(五五)守り海外に在り。位を守るに仁を以てすれば、(五六)險害を恃まず。苟も民志諒あらずんば、巖險と襟帶とを何云せん。秦は阻を(五七)二關に負みしも、卒に(五八)項に開かれ(五九)沛を受けたり。(六〇)彼偏據して小を規れり。豈中に宅て大を圖るに如かんや。昔(六一)先王の邑を經るや、(六二)九隩を掩觀て、地として營らざるはなし。(六三)土

【五五】守海外。淮南子に若シ天下道ナケレバ守四夷ニアリ、天下道アレバ守海外ニアリとあり。
【五六】險害。要害險固なり。
【五七】二關。武關と函谷關となり。
【五八】項。項羽なり、項羽函谷關より秦に入る。
【五九】沛。沛公即ち漢の高祖なり、高祖は武關より秦に入る。
【六〇】彼。秦を指して言ふ。
【六一】先王。周の成王を指す。邑は洛邑なり。
【六二】九隩。九州の內なり。
【六三】土圭。土地をはかる器械、圭は長さ一尺五寸、夏至の日、八尺の表を立て、日中に之を測るに、圭の影正等なれば中央に位せるなり、若し影圭より長ければ則ち北に近きなり、圭影より長ければ則ち南に近きなり、北に近ければ寒多く、南に近ければ暑多く、東に近ければ風多く、西に近ければ雨多し。

圭景を測り、縮まらず盈たず。風雨の交る所を總べ、然る後以て王城を建つ。(六四)面勢を審曲にし(六五)洛に泝り河に背き、(六六)伊を左にし(六七)瀍を右にし、西のかた(六八)九阿を阻て、東のかた(六九)旋に門し、(七〇)盟津其後に達し(七一)太谷其前に通じ、(七二)廻行は伊闕に道し、(七三)邪徑は轘轅に捷く、(七四)太室を鎭となし、掲ぐるに(七五)熊耳を以てし、(七六)底柱流を輟め、鐔するに(七七)大岯を以てし、溫液湯泉(七八)黑丹石緇あり。(七九)王鮪岫に居り、(八〇)能鼈三趾あり。(八一)虙妃の館りし攸、神用て(八二)紀を挺し、(八三)龍圖羲に授け(八四)龜書姒に畀ふ。(八五)召

【六四】面勢。方面形勢なり。

【六五】洛。洛水、川の名。

【六六】伊。伊水、川の名。

【六七】瀍。川の名。

【六八】九阿。地名。

【六九】旋。旋門坂とて坂の名。

【七〇】盟津。地名。洛の北にあり。都道の會する所を津といふ。

【七一】太谷。地名、洛陽の西にあり。

【七二】廻行はめぐり行くこと。伊闕は山の名。

【七三】邪徑はまがれる徑路。轘轅は坂の名。

【七四】太室。嵩山の別名。

【七五】熊耳。山の名。

【七六】底柱。山の名。

【七七】大岯。山の名。

【七八】黑丹、石緇。丹黑の土石相雜れるもの。

【七九】王鮪。魚の名。山穴の中に居る。

【八〇】能鼈。三足のスッポン。

【八一】虙妃。神女なり。楚辭に虙妃ヲ伊洛ニ迎フとあり。

【八二】紀を挺す。神の年紀を告げ示せること、成王鼎を洛邑に遷し、年をトすること七百、世をトすること三十、後皆其言の如し。

【八三】龍圖は河圖なり、羲は伏犧なり、西都賦の二五を見よ。

【八四】龜書。洛書なり、昔禹の時、神龜文を負ひて洛水に出でたりといふもの是なり。姒は禹の姓なり。

【八五】召伯。召公奭なり、成王の洛邑を造るとき、召公之を見定めたり。

伯宅を相て、卜惟れ（八六）洛に食み、（八七）周公初めて基し、其縄則ち直し。（八八）萇弘魏舒是れ廓き是れ極め、（八九）經途九軌にして城隅（九〇）九雉なり。堂を度るに（九一）筵を以てし、室を度るに（九二）几を以てし、京邑（九三）翼翼として、四方の視る所なり。

【大意】且つ天子道あれば至德遠きに及ぶ。故に四海の外に巡狩すべし。位を守るに仁道を以てすれば、國の要害を恃むを要せず。今足下は西京の巖險にして、守り易きを稱すれども、誠に民心をして諒あらざらしめば、要害ありと雖も何の補あらんや。現に秦は二關の要害を恃みしも、卒に項羽沛公二人の爲に破られしにあらずや。且つ彼の秦は關西に偏據し、その規る所狹小なり。豈に天下の中央（洛陽は天下の中なり）に據りて廣大を期するに如かんや。昔成王の洛邑を營むや、九州の内一として測量せざるはなく、土圭の法を以て地勢を測り、縮まらず盈たず、正に天地の中、風雨の交會する處を得て、ここに王城を建立せり。其制翼翼として四方の仰ぎ望む所なり。

漢初め之に宅らず。故に宗緒中ごろ圮れ、（九四）巨猾釁を間ひ、（九五）神器を竊弄

【八六】洛に食む。卜するには先づ墨を以て龜甲に畫き、然る後之を燒く、その割れ目墨に及べば吉なり。之を墨を食むといふ。
【八七】周公。名は旦、成王の叔父なり。
【八八】萇弘は周の大夫なり。魏舒は晉の大夫獻子なり。
【八九】經途。南北を經といふ、南北に通ずる大道。
【九〇】九雉。高さ一丈、長さ三丈を一雉といふ。
【九一】筵。席なり、長さ九尺。
【九二】几。俎なり、長さ七尺。
【九三】翼翼。禮儀ある貌。
【九四】巨猾。王莽を指す。
【九五】神器。帝位をいふ。

し、載を歷ること三六、(九六)天位を偸み安んぜり。時に蒸民敢て貳あるなし。其の威を取ること重ければなり。我が(九七)世祖之を忿り、乃ち(九八)白水に龍飛し、(九九)參墟に鳳翔し、鉞を(一〇〇)四七に授け(一〇一)共工を是れ除く。(一〇二)欃槍旬始羣凶餘なく、區宇乂り寧く、和を思ひ中を求む。睿哲玄覽して、茲の洛宮に都し、曰に止り曰に時り、昭明にして(一〇三)融たるあり。既に(一〇四)光にして厥れ武、仁洽く道豐なり。(一〇五)岱に登り封を勒し、(一〇六)黃と崇を比ぶ。(一〇七)顯宗に至るに逮び、六合殷昌なり。乃ち(一〇八)崇德を新にし、遂に(一〇九)德陽を作り、(一一〇)南端の特闈を啓き、(一一一)應門の將將たるを立て、仁惠を(一一二)崇賢に昭にし、義聲を(一一三)金商に抗げ、(一一四)雲龍を春路に飛ばし、(一一五)神虎を秋方に屯し、(一一六)象魏の(一一七)兩觀を建て、(一一八)六典の舊章を旌す。

【九六】天位。帝位なり。
【九七】光武。後漢の光武皇帝。
【九八】白水。南陽の白水縣。
【九九】參墟。星の名、河北の分野なり。初め光武、王郎を河北に討つ。
【一〇〇】四七。二十八將なり。
【一〇一】共工。堯の時、天下に覇たりし者、王莽に喩ふ。
【一〇二】欃槍は星の名。旬始は妖氣なり。王莽に喩ふ。
【一〇三】融。永きこと。
【一〇四】光。謚法に功天下ニ格ルヲ光トイヒ、禍亂ヲ剋定スルヲ武トイフとあり。
【一〇五】岱。泰山なり。
【一〇六】黃。黃帝なり。
【一〇七】顯宗。明帝をいふ。

【一〇八】崇德 殿の名。
【一〇九】德陽。殿の名。
【一一〇】南端。南方の正門。闈は門なり。
【一一一】應門。中門なり。將將は嚴正の貌。
【一一二】崇賢。東門の名。
【一一三】金商。西門の名。
【一一四】雲龍。門の名、德陽殿の東門なり。
【一一五】神虎。門の名。德陽殿の西門なり。
【一一六】象魏。門闕なり。
【一一七】兩觀。觀は闕なり。
【一一八】六典。治典、教典、禮典、政典、刑典、事典なり。國家を治むる常法なり。

【大意】漢初め我が東京に居らず。故に宗統中ごろ絶え、王莽隙を伺ひて帝位を簒ひ、年を歴ること十八年なり。時に衆民敢て莽に貳心を抱かず、莽の威力の深重を懼れたり。此れ皆西都の禍に由るなり。我が光武帝大に之を怒り、卽ち南陽の白水より身を起し、河北を平定し、斧鉞を二十八將に授けて王莽を征伐せしむ。是に於て海內安寧にして、陰陽の和、天地の中を得て、此に都せんことを思ふ。光武の睿哲なる、乃ち能く洛宮の美を覽て此に都を奠む。乃ち必ず昭明長久の福あり。仁義の德天下に洽し、因つて泰山に登りて功を石に刻し、黃帝と其尊を比す。明帝に至り天下益〻殷富なり。乃ち宮室を營み、崇賢門を東に立てて天子仁惠の德を昭にし、金商門を西に立てて德義の聲を擧げ、雲龍神虎の門闕を立て、以て六典の舊章を表示せんと欲す。

其內には則ち(二九)含德、章臺、天祿、宣明、溫飭、迎春、壽安、永寧あり。飛閣神のごとく行き、我能く(三〇)形するなし。(三一)濯龍、芳林、九谷、八溪あり。芙蓉水を覆ひ、秋蘭涯に被り、渚には躍魚戲れ淵には龜蠵游ぶ。(三二)永安の離宮には(三三)脩竹冬靑く、陰地幽流玄泉洌淸なり。鵯鶋秋棲み鶻鵰春鳴き、雎鳩麗黃あり。(三四)關關嚶嚶たり。南には則ち(三五)前殿、靈臺、龢驩、

【二九】含德。以下皆殿の名。
【三〇】形。形容すること。
【三一】濯龍は池の名。芳林は苑の名。九谷八溪は、養魚池なり。
【三二】永安。宮の名。
【三三】脩竹。長き竹。
【三四】關關嚶嚶。やはらぎ鳴く聲。
【三五】前殿。以下皆殿の名。

安福あり。(二六)謻門曲榭あり、邪に城洫に阻み、奇樹珍果(二七)鉤盾の職る所なり。西のかた(二八)少華に登れば(二九)亭候修勅ひ、(三〇)九龍の内寔を(三一)嘉德といふ。其戸を西南にし、離れるにもあらず刻めるにもあらず。(三二)我后約を好む。乃ち宴んじ斯に息ふ。

【大意】應門の内には含德以下の八殿あり。閣道高く通じ其行くこと神の如く、形容するに詞なし。池には芙蓉秋蘭の郁郁たるあり。魚鼈の游ぶあり。永安の離宮には脩竹あり幽泉あり。百鳥和鳴す。南には前殿以下三殿あり宮室城池に枕み、西のかた少華山を登れば亭あり候あり。よく修まり整へり。九龍門内なるを嘉德殿といふ。其戸或は西し或は南し、離れるにもあらず刻めるにもあらず。我が君明帝は儉約を好むを以て、乃ち此に安息す。

東には則ち(三三)洪池清籞あり、淥水澹澹たり。内には川禽皐く、外には葭菼豐なり。鼈蜃と龜魚とを獻じ、蝸蠃と菱芡とを供す。其西には則ち(三四)平樂都場の遠きに示す觀あり。(三五)龍雀蟠蜿し、(三六)天馬半漢たり。瑰異譎詭燦爛炳煥たり。奢るも未

【二六】謻門。門の名。
【二七】鉤盾。小苑を掌る官。
【二八】少華。山の名。
【二九】亭候。候は物見やぐら。
【三〇】九龍。門の名。
【三一】嘉德。殿の名。
【三二】我后は明帝を指す。約は儉約なり。
【三三】洪池は池の名、洛陽の東三十里にあり。籞は池水の上にありて室を作り、以て鳥を棲ましめ、鳥入れば之を捕ふ。
【三四】平樂、都場。觀の名。
【三五】龍雀。飛廉なり、風神の名。
【三六】天馬は銅馬なり。半漢は勇む貌。

だ侈に及ばず、儉なるも陋ならず。規王度に遵ひ、動れば（三七）得趣に中る。是に於て禮を觀れば、禮擧り義具る。（三八）經始亟にすることなけれども、之を成すこと日あらず。猶ほ謂へらく之を爲る者勞し、之に居る者逸すと。（三九）唐虞の（四〇）茅茨を慕ひ（四一）夏后の卑室を思ふ。

【大意】東に洪池あり淸籞を設く。綠水之に湛ふ、中に川禽多く、外には水草あり。春秋各其產する所の物を獻ず。西には平樂都場の觀を設け、長安より飛廉竝に銅馬を取りて其上に置く。奢るも侈なるに至らず、儉なるも陋しきに至らず。よく先王の法度に合へり。都城建造の際には急速ならんことを務めざりしも、百姓義を慕ひて來り助け、日ならずして之を成せり。明帝謂へらく百姓之が爲に勞苦し、己之に居りて逸樂すと。乃ち堯舜の茅茨剪らず、大禹の宮室を卑くせしことを思ひ、之に則らんと欲す。

乃ち（四二）三宮を營み、政を布き常を頒つ。複廟重屋、（四三）八達九房あり。（四四）天に規り地に矩り、時を

【三七】得趣。程よきを得ること。

【三八】經始。始めて建築すること。

【三九】唐虞。堯舜なり。

【四〇】茅茨。屋根を葺く草。堯舜の宮は葺くに茅茨を以てし、其端を剪り揃へざりきといふ。

【四一】夏后。夏の禹王なり。

【四二】三宮。明堂・辟雍、靈臺なり。東都賦一〇九以下を見よ。

【四三】八達九房。大戴禮に明堂ハ九室ニシテ八牖ナリとあり、九房は九室なり、八達は八牖なり。

【四四】天に規り。大戴禮に明堂ハ上圓ク下方ナリとあり、天は圓く地は方なり、即ち天地に象るなり。

授け（一四五）郷に順ふ。淸地に（一四六）造舟して惟れ水（一四七）泱泱たり。左には辟雍を制し右には靈臺を立て、進むに因りて衰ふるを距ぎ、賢を表し能を簡ぶ。（一四八）馮相祲を觀、禨を祈り災を禳ふ。是に於て（一四九）孟春元日、（一五〇）羣后旁く戾り、（一五一）百僚斯に（一五二）師師して胥洎し、藩國聘を奉じ（一五三）要荒質を來す。具に惟れ帝臣なり。琛を獻じ贄を執る。當に殿下に覲すべき者、蓋し數萬にして以て二とす。

【大意】乃ち明堂辟雍靈臺の三宮を建て、敎化を行ひ典禮を布く所以の宮となす。明堂の制は複廟重檐にして、九室八牖あり。上は天に象り下は地に象り、四時に順つて令を布く。東には辟雍を作り、西には靈臺を立て、射禮を此に行ひ、才德ある者は進めて之を用ひ、衰退せる者は拒んで之を絀ち、其賢を表異し才能を簡別くる所とし、又日月星辰の災祲を觀て、福を祈り災を禳ふ所とす。是に於て正月元日には諸公卿悉く來り、百官悉く集りて此に拜賀し、外藩は聘物を捧げ或は子を留めて質とす。此時入りて闕下に拜謁すべき者數萬人、之を列して二行とす。

爾して乃ち、（一五四）九賓重りて（一五五）臚人列り、

【一四五】郷。方なり。
【一四六】造舟。舟橋なり。
【一四七】泱泱。水の流ろる貌。
【一四八】馮相。星辰災祥を掌る官。祲は陰陽の氣相浸漸して災を成すこと。
【一四九】孟春。正月なり。
【一五〇】羣后。公卿なり。
【一五一】百僚。百官なり。
【一五二】師師。師とし倣ふこと。
【一五三】要荒。要服及び荒服、帝畿を遠く離れたる地方をいふ。
【一五四】九賓。周儀の九儀なり、公侯伯子男孤卿大夫士をいふ。
【一五五】臚人。鴻臚なり、賓客を

（一五六）崇牙張りて（一五七）鏞鼓設け、（一五八）郎將階を司り（一五九）虎戟鍛を交へ、（一六〇）龍輅庭に充ちて雲旗霓を拂ひ、（一六一）夏正三朝、庭燎晳晳たり。洪鐘を撞いて（一六二）靈鼓を伐ち、旁く（一六三）八鄙に震ひて軒礚隱訇たり。疾霆轉雷の迅風に激するが若し。この時（一六四）警蹕を稱し、已に彫輦を東廂に下す。（一六五）通天を冠し（一六六）玉璽を佩び、（一六七）皇組を紆ひ（一六八）干將を要にし、（一六九）斧扆を負ひ、（一七〇）次席紛純、玉几を左右にし（一七一）穆穆として南面し以て聽く。然る後（一七二）百辟乃ち入れば、（一七三）司儀等を辨じ、尊卑以て班ち、（一七四）璧羔皮帛の贄既に奠す。天子乃ち三揖の禮を以て之を禮し、（一七五）穆穆焉たり、皇皇焉たり、濟濟焉たり、將將焉たり。信に天下の壯觀なり。

【大意】是に於て九賓聚り至り、鴻臚の官その尊卑を分ちて至尊に朝せしむ。伶官は樂を奏し、儀

主るの官。

【一五六】崇牙。樂器を挂くる具。

【一五七】鏞鼓。鏞は大鐘。

【一五八】郎將。近衞兵の士官。

【一五九】虎戟。虎賁（近衞兵）の戟を執るをいふ。

【一六〇】龍輅。天子の車。

【一六一】夏正。夏の時代の暦、漢は夏の暦を用ひたり。三朝は正月の元日をいふ、正月元日は歳の始、月の始、日の始なればなり。

【一六二】靈鼓。六面の鼓なり。

【一六三】八鄙。八方といふが如し。軒礚隱訇。鐘鼓の聲。

【一六四】警蹕。天子の行幸の時、路上の人を避けしむること。

【一六五】通天。冠の名。

【一六六】玉璽。天子の印なり。

【一六七】皇組。大綬なり。

【一六八】干將。劍の名。

【一六九】斧扆。斧を畫きし屛風。

【一七〇】次席は莞の席なり。紛純は組を以て緣となすなり。

【一七一】穆穆。容止の美盛なる貌。

【一七二】百辟。諸侯なり。

【一七三】司儀。儀式を掌る官。

【一七四】璧羔云云。幣物なり、周禮に子ハ穀璧ヲ執リ、孤ハ皮帛ヲ執リ、卿ハ羔ヲ執リ、大夫ハ雁ヲ執ルとあり。

【一七五】穆穆焉、皇皇焉、濟濟焉、將將焉。皆盛美なる貌。

衞は旗矛を陳ね、庭には燎を焚き、鐘鼓の聲迅雷の震ふが如し。この時警蹕の聲忽ち起り鳳輦東廂に下る。天子通天冠を戴き玉璽を佩び、大綬を紆ひ寶劍を腰にして出御し、南面して拜賀を受け、諸侯乃ち幣物を獻ず。その容儀の盛なること實に天下の壯觀なり。

乃ち公侯卿士を羨いて、（一七六）東除より登り、（一七七）萬機を訪ひ朝政を詢り、勤めて民の隱を恤へ其害を除く。人其所を得ざるあるときは、己之を隍に納るるが若し。天下の（一七八）重任を荷ふ。（一七九）怠皇して以て寧靜なるにあらず。（一八〇）京倉を發き（一八一）禁財を散じ、（一八二）皇僚に賚ひ（一八三）輿臺に逮び、膳夫に命じて以て大饗し、（一八四）饔餼家陪に浹し。春醴は惟れ醇、燔炙（一八五）芬芬たり。君臣歡び康んじ具に醉ひて（一八六）薰薰たり。（一八七）千品萬官事を已りて踧く。勤めて屢〻省み懋めて（一八八）乾乾たり。淸風（一八九）玄德に協ひ、淳化自然に通じ、（一九〇）先靈に憲りて以て軌を齊うし、必ず三たび思ひて以て愆を顧み、有道を（一九一）仄陋より招げ、敢諫の直言

【一七六】東除。東の階段。
【一七七】萬機。庶政。
【一七八】重任。重大なる任務、天子の位をいふ。
【一七九】怠皇。皇は遑なり。怠り暇あること。
【一八〇】京倉。京は大なり、天子の倉。
【一八一】禁財。禁庫の財。
【一八二】皇僚。大官なり。
【一八三】輿臺。賤人をいふ。
【一八四】饔餼は食物なり。家陪は公卿大夫の家なり。
【一八五】芬芬。香氣なり。
【一八六】薰薰。酒氣なり。
【一八七】千品萬官。品は位なり。百官といふに同じ。
【一八八】乾乾。勉勵する貌。
【一八九】玄德。天德なり。
【一九〇】先靈。先聖即ち堯舜の神靈なり。
【一九一】仄陋。微賤をいふ。

を開き（一九二）丘園の（一九三）耿絜を聘し、（一九四）束帛の戔戔たるを旅ぬ。上下情を通じ式て宴じ且つ盤む。

【大意】天子乃ち公卿を率ゐて東階より登り、萬機の政務を問ひ、民の疾苦を憂へて其害を除かんことを謀り、一民も其所を得ざる者あれば、自ら悲むこと己之を溝中に投ぜるが如く、一刻も怠り樂むことなし。大倉を開きて百官庶民に給與し、膳夫に命じて饗宴を賜ひ、其家屬に及び、君臣和樂して酣醉し、百官禮事を畢りて退き、民情を省察して政に勉む。天子清惠の風、天德に同じく、淳厚の化、神明に通じ、其道堯舜と功を同うし、三思して其の過あらんことを懼れ、有道の士を微賤より擧げ、直言の士を登庸す。乃ち君情下に通じ、臣情上に達し、國家安泰にして君臣歡樂す。將に（一九五）天を郊に祀り地功を報じ、福を（一九六）上玄に祈らんとするに及びて、虔をなす所以を思ふ。肅肅の儀盡き穆穆の禮殫く。然る後以て精誠を獻じ（一九七）禋祀を奉ず。曰に允なるかな天子。乃ち（一九八）法服を整へ（一九九）冕帶を正うし、（二〇〇）珩紞紘綖、玉笄綦會、（二〇一）火龍黼黻、藻綷鞶厲あり。飛雲の（二〇二）袷

【一九二】丘園。畎畝といふが如し、民間なり。

【一九三】耿絜。清白潔白の人。

【一九四】束帛。士を聘する時賜ふ所の贈物。戔戔は積みかさなれる貌。

【一九五】天を郊に。郊は帝都の郊外なり、天を祭るには郊外に於てす。

【一九六】上玄。上天、即ち天帝。

【一九七】禋祀。潔齋して行ふ祭。

【一九八】法服。法度ある衣服、天子の服をいふ。

【一九九】冕帶。冠帶に同じ。

【二〇〇】珩紞云云。珩は冠を維持する者、紞は冠の兩傍に垂るる條、紘は冠の紐を結びて餘れるを組み上げて冠の兩端にかくる者、綖は冠の上の覆、綦會は玉を以て飾りし冠の紐。

【二〇一】火龍黼黻。火と龍とを畫

輅を結び、翠羽の高蓋を樹て、(二〇三)辰旒の太常を建て(二〇四)紛焱悠として以て(二〇五)容裔す。(二〇六)玄蚪の奕奕たるを(二〇七)六にし、齊しく騰驤りて(二〇八)沛艾し、(二〇九)龍輈華轙、金鋄鏤鍚、(二一〇)方釳左纛鉤膺玉瓌あり。(二一一)鑾聲噦噦、(二一二)和鈴鉠鉠たり。(二一三)重輪貳轄疏轂飛軨、(二一四)羽蓋葳蕤として(二一五)葩瑵曲莖あり。(二一六)時服を順へて(二一七)副を設け、咸(二一八)龍旂にして(二一九)繁纓なり。戈を立て戛を迤かして(二二〇)農輿輅木あり。(二二一)屬車九九にして(二二二)乘軒轂を

きし天子の服。藻繂はナメシガハにて作り玉を藉くもの、鞶厲は紳帯の垂れたるもの。

【二〇二】給輅。次車なり、次車は翡翠鳥の羽を以て蓋となす、之を翠蓋車といふ。

【二〇三】辰旒。辰は日月星なり、日月星を畫き十二旒を垂れたる旗を太常といふ。

【二〇四】紛焱悠。紛は盛なる貌、焱悠は火花の飛ぶが如き貌。

【二〇五】容裔。たなびくこと。

【二〇六】玄蚪。黒馬なり。奕奕。光りかがやく貌。

【二〇七】六。六匹の馬。

【二〇八】沛艾。馬の行く貌。

【二〇九】龍輈。龍頭を刻みつけし轅。轙は輈上の環にて轡の貫く所のもの。金鋄は馬冠なり。鏤鍚は馬の飾。

【二一〇】方釳、左纛。ともに馬の飾。鉤膺、むねあて。玉瓌、はらおび。

【二一一】鑾聲。すずの音。噦噦。相和して鳴る聲。

【二一二】和鈴。すずの音。鉠鉠。小聲なり。

【二一三】重輪。重轂なり、蔡邕の獨斷に乘輿重轂ノ外、復タ一轂副轄アリ、其外乃チ復タ轄ヲ設ツとあり。疏轂は鏤刻を加へたる轂。飛軨は車の飾。

【二一四】羽蓋。翡翠鳥の羽にて作りし車蓋。葳蕤は羽の貌。

【二一五】葩瑵曲莖。瑵は爪に同じ、葩爪とはハナビラなり、蔡邕の獨斷に凡ソ乘輿ノ車、皆羽蓋金華とあり。

【二一六】時服。服は服馬とて馬車を挽く馬なり、時は四時なり、各四時の色にあたる服馬を用ふること、東都賦八七を見よ。

【二一七】副。そひ馬なり。

【二一八】龍旂。交龍を畫きし旗。

【二一九】繁纓。繁は鞶に通ず、馬の大帯なり、纓は馬のムナガヒ。

【二二〇】農輿。藉田の時に乘る車、輅木は飾なき車。

【二二一】屬車。後車なり、おともの車。大駕には屬車八十一乘あり。

【二二二】乘軒。車輿なり。

竝べ、(二二三)𨎥弩重旃朱旄青屋あり。(二二四)奉引既に畢り (二二五)先輅乃ち發す。

【大意】天を郊外に祭り地功を報ぜんとするに及んでは、天子法服を著け車儀を整へ、屬車を從へて乃ち發す。その車馬の服飾美盛を極む。

(二二六)鸞旗皮軒、通帛綪旆、(二二七)雲罕九斿闟戟轇輵たり。(二二八)髶髦繡を被り (二二九)虎夫鶡を戴き、(二三〇)承華の蒲梢を駙へ (二三一)流蘇の騷殺たるを飛ばし、(二三二)輕武を後陳に總べ (二三三)嚴鼓の嘈囐なるを奏し、(二三四)戎士介して揮を揚げ (二三五)金鉦を戴いて黃鉞を建て、道を淸ひ列を案じ、天のごとく行き星のごとく陳り、(二三六)肅肅習習、隱隱轔轔として、殿未だ城闕を出でざるに、旆已に (二三七)郊畛に迴り、(二三八)夏后の美を致せるより盛に、爰に明神に恭敬す。

【大意】武夫前後を護り金鼓を鳴らし、弋戟

【二二三】𨎥弩。車にのせたるイシユミ。重旃はフキナガシ。朱旄は旄牛の尾の赤きもの。靑屋は車蓋の裏の靑きもの。

【二二四】奉引。先に立ちて案內すること。

【二二五】先輅。先發の車。

【二二六】鸞旗は鸞鳥に象りし旗。皮軒は虎の皮の旗。通帛は旗。綪旆は赤色の旗。

【二二七】雲罕。旌旗の別名。九斿は旗の名。闟戟はホコなり。轇輵は雜亂の貌。

【二二八】髶髦は髦頭の苹騎なり。繡は繡衣なり。

【二二九】虎夫。虎賁の士。鶡は鳥の名、鶡冠を戴くなり。

【二三〇】承華は厩の名。蒲梢は馬の名。

【二三一】流蘇。馬の飾として垂るるフサ。騷殺は垂るる貌。

【二三二】輕武は輕捷勇武の士。後陳とは後方の列なり。

【二三三】嚴鼓は嚴毅なる鼓の音。嘈囐は震ふ聲。

【二三四】戎士は軍士なり。介は甲冑を被ること。

【二三五】金鉦。どら。黃鉞。黃金のまさかり。

【二三六】肅肅は恭敬の貌。習習は續き行く貌。隱隱は衆多の貌。轔轔は車聲。

【二三七】郊畛。郊界なり。

【二三八】夏后。禹なり、論語に禹を贊して衣服ヲ惡クシテ美ヲ黻冕ニ致シ、飲食ヲ菲クシテ

を立て、道を淸ひて行く。その行くこと星宿の羅列して次序あるが如く、肅肅整齊たり。殿後の士未だ宮城を出でざるに、先驅は已に郊外に達す。天子乃ち天神を祭る。

爾して乃ち（二三九）孤竹の管、（二四〇）雲和の瑟、雷鼓（二四一）鼘鼘として（二四二）六變既に畢れば、華を冠し（二四三）翟を秉りて、（二四四）八佾を列舞し、（二四五）元祀惟れ稱げ（二四六）羣望咸秩づ。（二四七）槱燎の炎煬を颺げ、高煙を（二四八）太一に致す。神馨きを歆けて德を顧み、（二四九）靈主に祚ゆるに（二五〇）元吉を以てす。

【大意】乃ち大に舞樂を奏し、天神竝に四岳を祭る。神馨香を受け人主の明德を覩、之に報ゆるに嘉福を以てす。

然る後（二五一）上帝を明堂に宗び、光武を推して以て（二五二）配となし、方位を辨じて則を正せば、（二五三）五精帥ゐて來り摧る。（二五四）赤氏の朱光を尊び、（二五五）四靈懋んで允に懷し。是に於て春秋節を改め、四時迭に代

孝ヲ鬼神ニ致スとあり。

【二三九】孤竹。國の名、竹を產す。

【二四〇】雲和。山の名、美木を出す、以て瑟となせば其聲淸亮なり。

【二四一】鼘鼘。鼓の聲。

【二四二】六變。音樂は六變を以て一成とす。

【二四三】翟。雉の羽、之を持ちて舞ふなり。

【二四四】八佾。八八六十四人の列舞なり。

【二四五】元祀。大祭なり。

【二四六】羣望。衆岳を望み祭ること。

【二四七】槱燎。かがり火。

【二四八】太一。天の尊神なり。

【二四九】靈主。明主、天子なり。

【二五〇】元吉。大福なり。

【二五一】上帝。太微の中の五帝なり。

【二五二】配。倂せ祭ること。

【二五三】五精。五方の星なり。

【二五四】赤氏。火德の神、卽ち赤帝。漢は火德の王なり。

【二五五】四靈。赤帝を除きし他の四帝をいふ。

り、(二五六)蒸蒸の心物に感じ思を增し、躬ら廟祧に追養して(二五七)蒸嘗と禴祠とを奉ず。(二五八)物牲辯省して其(二五九)楅衡を設け。(二六〇)毛炰の豚胉亦和羹あり。滌濯ぎて靜嘉し、禮儀孔だ明なり。(二六一)萬舞は奕奕、鐘鼓は喤喤、(二六二)靈祖皇考來り顧み來り饗け、神具に醉ひて、福を降すこと(二六三)穰穰たり。

【大意】更に五帝を明堂に祭り、光武皇帝を配饗し、五方の位を辨じ其法則を正せば、五方の星靈相率ゐて來り至り、皆漢帝の美徳を尊び、美悅して之に安んず。また四時の代謝するにより、萬物の推移を見て、孝心頓に起り、親しく祖廟を祭りて、孝養の道を盡さんとし、犧牲をそなへ舞樂を奏すれば、先帝の神靈子孫を眷顧し、來りて其祭を受け、福を降すこと限なし。

(二六四)農祥晨に正しく(二六五)土膏脈起るに至るに及んでは、鑾輅に乘りて(二六六)蒼龍に駕し、(二六七)介馭の間

【二五六】蒸蒸。孝なり。
【二五七】蒸嘗禴祠。皆祭の名。公羊傳に春ヲ祠トイヒ夏ヲ禴トイヒ秋ヲ嘗トイヒ冬ヲ蒸トイフとあり。
【二五八】物牲は祭に供する犧牲なり。辯省は吟味すること。
【二五九】楅衡。牛の人に觸るるを防ぐ爲に兩角端に横たへ束ぬる木。
【二六〇】毛炰、つつみ燒。豚胉。豚の脇の肉。和羹。あつもの。
【二六一】萬舞。舞の總稱。奕奕は舞ふ貌。
【二六二】靈祖皇考。先帝の神靈。
【二六三】穰穰。衆多なり
【二六四】農祥　星の名、房星なり、この星正月中晨に南方に見ゆれば農の祥候なり。
【二六五】土膏。土壤なり。
【二六六】蒼龍。靑毛の馬、馬八尺なるを龍といふ。
【二六七】介馭。車中には天子左に居り、御は中央に居り、介は右に居る、介は車右、馭は御者なり。

(二六八)剡耜を以てし、躬ら三たび(二六九)天田を推し、帝籍の千畝を修め、(二七〇)禘郊の粢盛に供し、必ず思を己を勤むるに致し、(二七一)兆民彊場に勸み、咸懋力て以て耘耔す。

【大意】房星晨に南方に見はれ、土脉潤起し農事方に始まらんとするや、方に籍田(天子親ら田を耕し、以て祭祀に供する黍稷を作る儀式)の禮を行はんとす。乃ち青馬を駕したる鑾輿に乗り、車右と御者との間に耜を載せ、行きて親ら三たび籍田の地を鋤きかへし、籍田千畝耕作の事を始め、以て祭祀の供物に供す。事は專ら己の怠惰を戒むるに在り。百姓亦其德化に沐し、相勸勉して耕耘につとむ。

春日載ち陽なるや、辟雍に合射す。(二七二)業を設け虡を設けて、(二七三)宮懸せる金鏞あり。(二七四)鼖鼓路鼗(二七五)樹羽幢幢たり。是に於て(二七六)備物物ごとに其容あり。(二七七)伯夷起ちて儀を相け、(二七八)后夔坐して工となり、(二七九)大侯を張り五正を制り、(二八〇)三乏を設け(二八一)司

【二六八】剡耜。鋭きすき。
【二六九】天田。天子の籍田なり。
【二七〇】禘郊。禘は王者の大祭、郊は天の祭。粢盛とは供物なり。
【二七一】兆民は百姓なり。彊場は田畔なり。
【二七二】業、虡。西京賦の八八、八九を見よ。
【二七三】宮懸。宮中に懸くるもの。金鏞。大鐘。
【二七四】鼖鼓。おほつづみ。路鼗。大鼓なり。
【二七五】樹羽。鼓を飾る羽。幢幢は羽の貌。
【二七六】備物。禮物の備。
【二七七】伯夷。堯舜時代禮儀に明かなりし人。
【二七八】后夔。舜の臣にして音樂を掌る官たり。
【二七九】大侯。大なる的。五正。五個の的。
【二八〇】三乏。乏は革を以て作り、矢を禦ぐ具。
【二八一】司旌。旗を持ち射て的に中りし時之を擧げて合圖する人。

旌を厞し、(二八二)幷夾既に設けて廣庭に儲つ。是に於て皇輿夙に駕して東階に羣き、以て(二八三)啓明を消し朝霞を掃ひ、天光を(二八四)扶桑に登ぐるを須つ。天子乃ち(二八五)玉輅に撫り時に(二八六)六龍に乘る。(二八七)鯨魚を發し華鐘を鏗き、(二八八)大丙節を弭め(二八九)風后陪乘し、(二九〇)攝提衡を運るとき徐に射宮に至る。禮事展び樂物具はり、(二九一)王夏闋りて(二九二)騶虞奏すれば、(二九三)決拾既に次ぎ彫弓斯に彀り、餘萠を暮春に達し、誠心を昭にして以て遠く喩し、明德を進めて業を崇し、(二九四)饕餮の貪欲を滌ぐ。仁風行きて外に流れ、(二九五)誼方激して遐く鶩す。

【大意】陽春三月、諸侯と辟雍に大射し、以て禮敎を行ふ。先づ鐘鼓を陳ね禮物を備へて皆儀容あり。伯夷后夔にも比すべき賢人、或は立ちて儀式を助け、或は坐して樂工となり、種種の禮具を備へて、天子の臨幸を射堂の廣庭に待つ。宮城に於ては先づ鑾輿を東階に寄せ、啓明光消え朝霞色褪せ、日扶桑に上るを待つ。忽ち出

【二八二】幷夾。矢をはさみ取るもの。
【二八三】啓明。星の名。夜明の明星。即ち金星。
【二八四】扶桑。東方日出の處にある木の名。
【二八五】玉輅。玉の車。
【二八六】六龍。六頭の馬。
【二八七】鯨魚。東都賦八五、八六を見よ。
【二八八】大丙は太一神の御者なり。節を弭むとは徐行するなり。
【二八九】風后。黄帝の三公たりし人。
【二九〇】攝提は星の名。衡は玉衡とて星の名なり。
【二九一】王夏。樂の名。
【二九二】騶虞。樂の名。
【二九三】決拾。決は右手の親指にはめて弦をひくもの。拾は左の臂につくるもの。
【二九四】饕餮。貪慾なる人。欲は音ユ。叶韻。
【二九五】誼方。義方に同じ、義にかなへる道。

御を告ぐる鐘の響き渡るや、攝提の建す所、玉衡の運る所に隨ひ、ここに射宮に行幸す。是れ即ち天と德を合するなり。既に天子の臨御あるや、王夏騶虞の樂を奏し、終れば射手相次いで至る。草木の未だ生せざる者をして、皆生育せしめ、誠心を明にして遠く天下に諭し（白虎通に天子の親ら射る所以は何ぞや、陽氣を助けて萬物を達するなり。然らば則ち射は帝の誠心遠く下に諭すなりとあり）明德の人を進めて皇業を興し、貪慾の人を退けて起らしめず。ここに於て仁義の風遠く四方に及ぶ。

日月（二九六）龍豵に會するとき、民事の勞疚めるを恤へ、因つて力を休めて以て勤を息はしめ、歡忻を春酒に致し、（二九七）鑾刀を執り以て袒いて割き、（二九八）觴豆を（二九九）國叟に奉じ、至尊を降して以て恭を訓へ、送迎して（三〇〇）三壽を拜し、威儀を敬愼して、民に偸もせざらんことを示す。我に（三〇一）嘉賓あり其樂愉愉たり。聲敎布濩し、天區に盈溢る。

【大意】十月農事終るに至れば、天子乃ち民の勞苦を思ひ、之をして休息せしめ、春酒を酌んで歡樂せしむ。又親ら刀を執り肉袒して牲を割き、酒肴を國老に授け、天子の尊を屈して三老を送迎し、以て天下に恭敬を致ふ。かくて聲敎四方に及び、德澤天下に洽し。

【二九六】龍豵。星の名、龍尾なり、日月龍尾に會するは十月なり。
【二九七】鑾刀。鈴のある刀。
【二九八】觴豆。杯及び食物を盛る具。
【二九九】國叟。國の長老、三老五更なり。
【三〇〇】三壽。三老なり。
【三〇一】嘉賓。よき客、三老を指す。

文德既に昭にして、武節是れ宣ぶ。(三〇二)三農の隙、威を中原に曜す。歳惟れ仲冬、大に(三〇三)西園に閱す。(三〇四)虞人焉を掌り期に先だちて事を戒め、悉く百禽を率ゐ諸を靈囿に鳩む。獸の同まる所是を(三〇五)告備と謂ふ。乃ち(三〇六)小戎に御り輕軒に撫る。畋に中る(三〇七)四牡、既に佶にして且つ閑へり。戈矛林の若く、(三〇八)牙旗繽紛として上林に迄り、徒を結びて營を爲す。(三〇九)和を次べ表を樹て、鐸を司り鉦を授け、坐作進退節するに軍聲を以てし、三たび令し五たび申べ、戮を示すこと牲を斬るがごとし。師を陳ね旅に鞠げ、教達し禁成る。

(三一〇)火烈具に擧り武士星のごとく敷き、(三一一)鵞鸛魚麗箕のごとく張り翼のごとく舒び、軌塵迹を掩ひ疾からず徐からず。馭は(三一二)詭遇せず射は毛を剪らず。(三一三)六禽を升獻し時に(三一四)四膏を膳す。馬足未だ極れず(三一五)輿徒勞せざるに、禮を(三一六)三敺に成し罘を解き麟を放ち、樂を窮めずして以て儉を訓へ、物を殫さずして以て仁を昭にし、(三一七)天乙の弛

【三〇二】三農。春夏秋の農業季をいふ。
【三〇三】西園。上林苑なり。
【三〇四】虞人。山澤を掌る官。
【三〇五】告備。すべて用意の整ふこと。
【三〇六】小戎。小車なり。輕軒。輕き車。
【三〇七】四牡。四頭の馬。
【三〇八】牙旗。大旗なり。
【三〇九】和。軍門なり。
【三一〇】火烈。たいまつ。
【三一一】鵞鸛魚麗。ともに陣形の名。
【三一二】詭遇。東都賦一〇五を見よ。
【三一三】六禽。雁鶉鷃雉鳩鴿なり、之を宗廟に獻ず。
【三一四】四膏。禮記に牛膏香、犬膏臊、雞膏腥、羊膏羶とあり。
【三一五】輿徒。衆徒なり。
【三一六】三敺。三驅なり。
【三一七】天乙。殷の湯王の名なり。弛罟とは湯出でて網を四面に張りて獵する者を見、其三面を除き、德を禽獸に施したる故事。

罟を慕ひ、因つて教祀りて以て民を懷け、(二八)姫伯の渭陽に儀り熊羆を失つて人を獲、澤昆蟲を浸し威(二九)八寓に振ひ、樂を好むも荒むなく、允に文允に武。薄か(三〇)敖に狩せしも、既に(三一)瑣瑣焉たり。(三二)岐陽の蒐、又何ぞ數ふるに足らん。

【大意】文德既に明なるや、更に武事を講ず。農閑の時を擇び、仲冬大に上林苑に閲兵し、鉦鐸を鳴らして坐作進退の節を教へ、號令を申明して約束を嚴にし、或は鵞鸛の陣を成し、或は魚麗の陣を布き、進退疾からず遲からず。馬力未だ極らず衆兵未だ勞せざれども、樂を窮めずして中止し、儉を教へ仁を明にし、殷湯の罟を弛め、周文の人を得たるに則り、恩澤禽獸に及び威武八方に輝く。かの成宣二王の狩獵の如きは共に比するに足らざるなり。

爾して乃ち(三三)卒歲大に儺し、(三四)羣癘を毆り除く。(三五)方相鉞を秉り、(三六)巫覡茢を操り、(三七)侲子萬童丹首玄製し、桃弧棘矢あり、發つ所臬なし。飛礫雨のごとく散り、(三八)剛癉も必ず斃る。煌火馳せて

【二八】姫伯。周の文王をいふ。渭陽は渭水の北なり。文王渭水の北に獵し、太公望呂尙を得、其力によりて國を盛にしたり。

【二九】八寓。八方といふが如し。

【三〇】敖。鄭の地名、周の宣王の狩せし地なり。

【三一】瑣瑣焉。鄙陋なり。

【三二】岐陽。周の成王の狩せし處。

【三三】卒歲。年の終。儺、おにやらひ。

【三四】羣癘。疫鬼なり。

【三五】方相。神の姿をなし疫鬼を逐ふ者をいふ。周禮に見ゆ。

【三六】巫覡。ミコなり、男を覡といひ、女を巫といふ。茢は鬼を攘ふに用ふる箒。

【三七】侲子。童男童女。丹首は赤冠を戴くこと。玄製は黒衣を纏ふこと。

【三八】剛癉。つよき鬼。

星のごとく流れ、(三二九)赤疫を四裔に逐ふ。然る後(三三〇)天池を凌りて(三三一)飛梁を絶り、螭魅を捎ち(三三二)獝狂を斮り、(三三三)蜲蛇を斬り方良を脳し、(三三四)耕父を清泠に囚へ、(三三五)女魃を(三三六)神潢に溺らし、(三三七)夔魖と罔象とを殘ひ、(三三八)野仲を殪して游光を殲す。(三三九)八靈之が爲に震ひ慴る。況んや(三四〇)魑蜮と畢方とをや。(三四一)度朔の梗をなすや、守るに鬱壘を以てし、神荼焉に副ひ、對ふに索葦を操り、(三四二)區陬を目察し、遺鬼を司執ふ。京室密清にして、蹝からざるあるなし。

【大意】　年末には追儺の式を行ひ、惡鬼を逐ふ。方相は鉞を持ち巫覡は茢を持ち、童男童女百數十人を擇びて侲子となし、赤色の帽を戴き黑衣をまとはしめ、以て宮中の惡鬼を逐はしむ。かくて石を投ずること雨の如く、剛堅の鬼も皆死す。更に炬火を持ちて之を追跡し四裔に攘ひ、大室清潔にして復た疫癘の潜むなし。

【三二九】赤疫。赤鬼なり。四裔。四方のはて。
【三三〇】天池。海なり。
【三三一】飛梁。橋なり。
【三三二】獝狂。荒ぶる鬼。
【三三三】蜲蛇。鬼の名。方良。澤の鬼。
【三三四】耕父。鬼の名。清泠。川の名。
【三三五】女魃。旱魃の鬼。
【三三六】神潢。川の名。
【三三七】夔魖。夔は木石の怪。魖は耗鬼なり。罔象も木石の怪なり。

【三三八】野仲、游光。惡鬼の名。
【三三九】八靈。八方の神。
【三四〇】魑蜮は小鬼なり。畢方は老鬼なり。
【三四一】度朔。山の名。風俗通に、上古ノ時神荼鬱壘二人アリ、性ヨク鬼ヲ執フ、度朔山ノ上ニ桃樹アリ、二人樹下ニ於テ常ニ百鬼ヲ簡閲ス、鬼ノ道理ナキ者ハ神荼ト鬱壘ト葦索ヲ以テ執ヘ以テ虎ニ飼スとあり。
【三四二】區陬。隅隙の地なり。

是に於て陰陽交和し、庶物時に育す。(三四三)征をトし祥を考へ、終然にして允に淑ければ、乘輿(三四四)岱嶽に巡り、稼穡を原陸に勸め、(三四五)衡律を同うして(三四六)軌量を一にし、急舒を(三四七)寒燠に齊うし、(三四八)幽明を省て以て黜陟し、乃ち旆を反して廻復り、先帝の(三四九)舊墟を望み、慨して長く思ひて古を懷ひ、(三五〇)閶風を俟つて西に遐き、恭祀を高祖に致す。既に(三五一)春游して以て發生し、(三五二)諸蟄を潛戶に啓き、(三五三)秋豫を(三五四)度にして以て收成し、豐年の稌多きを觀、(三五五)田畯の懈らざるを嘉し、賚を(三五六)九扈に致すを勸め、左には(三五七)暘谷を瞰、右には(三五八)玄圃を睨、天末を眇にして以て遠く期し、萬世を規りて大に摹り、且く歸り來りて以て勞を釋き。多福を膺けて以て(三五九)安念し、(三六〇)瑞命を總集めて備に嘉祥を致し、(三六一)林氏の騶虞を囿ひ、(三六二)澤馬と騰黃とを擾け、(三六三)女

【三四三】征は巡狩なり。祥は嘉瑞なり。
【三四四】岱嶽。東嶽泰山なり。
【三四五】衡律。衡は秤、律は音律。
【三四六】軌量。軌は車跡、量は升斛なり。
【三四七】寒燠。寒暖なり。
【三四八】幽明。功なき者及び功ある者。
【三四九】舊墟。西京を指して言ふ。
【三五〇】閶風。秋風なり。
【三五一】春游。仲春に泰山に巡行すること。
【三五二】諸蟄。諸の地蟲。禮記に仲春ノ月、蟄蟲咸ク動キ、戶ヲ啓イテ始メテ出ヅとあり。
【三五三】秋豫。秋の遊。
【三五四】度にす。法度の如くにすること。
【三五五】田畯。田を掌る官。
【三五六】九扈。九農正なり。
【三五七】暘谷。日の出る處。
【三五八】玄圃。崑崙山上にあり。
【三五九】安念。安寧なり。
【三六〇】瑞命。嘉祥に同じ、天の美命なり。
【三六一】林氏は山の名。騶虞は義獸の名。
【三六二】澤馬、騰黃。神馬の名。
【三六三】女牀。山の名。

狀の鸞鳥を鳴かしめ、(三六四)丹穴の鳳皇を舞はしめ、(三六五)華平を春圃に植ゑ、(三六六)朱草を中唐に豐かにし、惠風廣く被り、澤(三六七)幽荒に洎び、北のかた(三六八)丁令を燮げ、南のかた(三六九)越裳を諧げ、西のかた(三七〇)大秦を包ね、東のかた(三七一)樂浪を過ぎ、(三七二)重舌の人九譯し、僉な(三七三)稽首して來王す。

【大意】疫癘既に除かれ陰陽よく和合して萬物生育す。因つて巡狩の禮を行ひ、泰山を祭り農耕を勸め、東方の諸侯を會して律度量衡を同うし、寒暑を齊うし、功の有無を計りて之を黜陟し、禮を畢りて歸り、長安の舊都を訪ひて古を偲び、高祖の神靈を祭る。春は蟄蟲潛伏して未だ蠢き出でざる者あれば、爲に巡遊して之を發出し、秋は收穫の狀を觀て豐年を祝し、田官の勤勉を嘉し農正に賜與す。かくて東は日出の處を視、西は崑崙の上を眺め、遠く天末を望んで目標となし、以て萬世の大法と爲さんと欲す。是に於て祥瑞ならび至り、四夷來朝す。

是の故に、其の邑を遷し京を易ふることを論ずれば、則ち規を(三七四)殷盤に同じうし、奢を改め儉に卽くは、則ち美を(三七五)斯干に合せ、(三七六)登封

【三六四】丹穴。山の名。
【三六五】華平。瑞木なり。
【三六六】朱草は瑞草の名。中唐は中庭なり。
【三六七】幽荒。幽遠の地。四夷をいふ。
【三六八】丁令。國の名。
【三六九】越裳。南方の蠻國。
【三七〇】大秦。國の名、羅馬帝國。
【三七一】樂浪。今の朝鮮の地。
【三七二】重舌の人は譯官也。九譯とは屢國語を繙譯すると。
【三七三】稽首。首を垂れて暫く止むること、禮の厚きなり。
【三七四】殷盤。殷王盤庚、遷都を斷行して民を救ひし君なり。
【三七五】斯干。詩經の篇名。周の宣王の宮室を儉にせるをほめたる詩なり。
【三七六】登封、降禪。泰山に登り

降禪は則ち德を（三七七）黃軒に齊うし、（三七八）無爲を爲とし無事を事とし、永く民を有ちて以て孔だ安く、節儉に遵ひ素樸を尙び、（三七九）仲尼の己に克つを思ひ、（三八〇）老氏の常に足るを履み、心をして其の在る所に亂れざらしめ、目をして其の欲すべきを見ざらしめんとし、（三八一）犀象を賤んで珠玉を簡にし、金を山に藏し璧を谷に抵げ、翡翠裂かず瑇瑁蔟らず。貴ぶ所は惟れ賢、寶とする所は惟れ穀なり。民（三八二）末を去りて本に反り、咸忠を懷いて愨を抱く。この時に于て海內悅を同うして曰く、吁漢帝の德馨し、侯れ其れ禕しと。蓋し（三八三）蓂莢は蒔る難しとなす。故に（三八四）曠世にして覿ず。惟我后よく之を殖うるに至和平を以てし、方將に諸を朝階に數へんとす。然らば則ち道胡ぞ懷けざらん、化胡ぞ柔げざらん。聲風と與に翔り澤雲に從つて遊く。萬物我に賴る、亦又何をか求めん。（三八五）德寓天覆し輝烈光燭し、（三八六）三王の趢起たるを狹しとし、（三八七）五帝に軼ぎて長驅す、（三八八）二皇

て封じ、降りて梁父に禪すること、封も禪も祭の名なり。

【三七七】黃軒。黃帝軒轅氏。太古の天子の名。

【三七八】無爲云云。老子の語なり。

【三七九】仲尼。孔子なり、論語に己ニ克チ禮ニ復ルとあり。

【三八〇】老子。老子なり、老子に足ルヲ知レバ常ニ足ルとあり。

【三八一】犀象。犀角や象牙。

【三八二】末。浮華を指す、本は忠實を指す。

【三八三】蓂莢。瑞應の草なり、堯の時、庭に此草を生じ、之に因りて月の大小を知れりといふ。

【三八四】曠世。久しき年代。

【三八五】德寓云云。德の天下を蓋ふこと、天の萬物を覆ふが如きをいふ。

【三八六】三王。夏の禹、殷の湯、周の武王をいふ。趢起は局小の貌。

【三八七】五帝。少昊、顓頊、帝嚳、堯、舜をいふ。

【三八八】二皇。伏犧神農をいふ。

遐武。過去の遺跡。

の遐武を踵ぐ。誰か駕遲くして屬ぶ能はずと謂はん。東京の(三八九)懿未だ罄きず。余(三九〇)犬馬の疾あるに値ひ、其精詳を究むる能はず。故に粗賓の爲に其梗槩を言ふこと此の如し。

【大意】光武皇帝の西京を棄てて東京に都し、奢侈を改めて節儉を旨とせるは、殷の盤庚、周の宣王に比すべく、封禪の禮を行へるは黃帝と德を同うし、無爲の政をなし質樸を尙べるは、孔老の道に合ひ、珠玉を寶とせずして、賢人と穀物とを寶とせり。民亦之に化して浮華を去りて忠實に就き、皆其德を頌して曰く、漢帝の德馨にして美なりと。蓋し蓂莢の草たる、天子賢聖、天下太平にあらざれば生ずることなし。我が君よく之を朝階に植ゑ、其數を數へて月の大小を辨ず。故に仁聲德澤天下に洽く、三皇五帝にまさること遠し。誰か車駕遲くして之に及ばずと謂はんや。東京の美事一一擧げ盡し難きも、余(安處先生)偶〻病を獲て其詳を究むる能はず。故に今其大略を述ぶるのみ。

若し乃ち流遁して反るを忘れ、心を放にして覺らず、樂んで節なければ、後その戚に離る。(三九一)一言にして國を喪ぼすに幾き、我未だ之を學ばざるなり。且夫れ(三九二)挈缾の智を守りて器を假さず。況ん

【三八九】懿。美なり。
【三九〇】犬馬の疾。己の病の謙稱。
【三九一】一言云云。論語子路篇に定公問フ、一言ニシテ以テ邦ヲ喪スベキモノアリヤト、孔子對ヘテ曰ク、予君タルヲ樂ムナシ云云とあり。
【三九二】挈缾。缾はカメなり、左傳に出づ、僅に水を汲むの小智と雖、尙ほ謹んで其缾を守りて容易に人に貸さざるを言ふ。

や帝業に纂いで天位を輕んずるをや。(三九三)二祖を瞻仰するに(三九四)厥庸孔だ肆め、常に(三九五)翹翹として以て危懼し、(三九六)奔に乗りて轡なきが若し。(三九七)白龍の魚服せるは豫且に困められ、(三九八)萬乘の懼なきと雖も、猶ほ一夫に怵惕せり。(三九九)終日輜重を離れず、獨り微行して其れ焉にか如かん。夫れ人に君たる者は(四〇〇)黈纊耳を塞ぎ、車中には内顧せず、珮は以て容を制し、鑾は以て塗を節し、行くに玉を變せず、駕するに歩を亂さず、(四〇一)走馬を却くるに糞車を以てす。何ぞ(四〇二)騕褭と飛兎とを惜まん。其の財を用ひ物を取るに方りては、常に生類の殄んことを畏れ、政を賦き役に任ずるには、常に人力の盡きんことを畏れ、之を取るに道を以てし、之を用ふるに時を以てし、山には(四〇三)槎枿なく畋には(四〇四)麑胎せず。

【三九三】二祖。高祖と光武とをいふ。

【三九四】厥庸。厥は其なり、庸は功なり。

【三九五】翹翹。危き貌。

【三九六】奔。奔馬なり。

【三九七】白龍云云。説苑に呉王民ニ従ツテ飲マント欲ス、伍子胥曰ク、昔白龍化シテ魚トナリ、豫且射テ目ニ中ツ、白龍化セズンバ豫且射ジ、君今萬乘ノ位ヲ棄テテ民ニ従ハバ、恐クハ豫且ノ患アランとあり。

魚服。魚のよそほひすること。

【三九八】萬乘云云。萬乘は天子なり、秦の始皇及び漢の高祖を指す、昔始皇東遊し、張良の爲に狙撃せられ、高祖柏人亭に於て殆ど貫高の中つる所とならんとす。

【三九九】終日云云。老子に聖人ハ終日行イテ輜重ヲ離レズとあり。輜重は衣物を載する車。

【四〇〇】黈纊。黄綿の大さ丸の如くなるを以て冠の兩端に懸け、耳に當て、妄に不急の言を聞くを欲せざるなり。

【四〇一】走馬云云。老子に天下道アレバ走馬ヲ却ケテ以テ糞ルとあり、河上公註に曰く、糞トハ田ニツチカフナリ、兵甲用ヒズ、走馬ヲ却ケテ以テ農田ヲ務ムルナリと。

【四〇二】騕褭、飛兎。駿馬の名。

【四〇三】槎枿。枿はヒコバエなり、槎は斬ること。

【四〇四】麑胎。子や卵を取らぬこと。

草木(四〇五)繁廡し鳥獸皐に滋し、民其勞を忘れ其財を輸すを樂ひ、百姓(四〇六)饒衍を同うし、上下(四〇七)其雍熙を共にし、洪恩素より蓄へ民心固く結び、義を執り主を顧み夫貞節を懷き、(四〇八)姦慝の命を干すを忿り、皇統の替てらるるを怨む。(四〇九)玄謀設けて陰に行ひ、(四一〇)二九を合して譎を成しも、(四一一)聖皇を(四一二)天階に登げ、漢祚の秩あるを章にせり。此の若し。故に王業樂むべきなり。

【大意】流連して歸るを忘れ、自ら放にして寤らず。樂んで節度なければ、後必ず憂患に遇ふ。秦皇王莽即ち是れなり。足下（憑虛公子）の樂を今日に取り、我が後を恤ふるに遑あらんやといふが如きは、孔子の所謂一言にして邦を喪すべき意見にして、余（安處先生）の學ぶ所にあらざるなり。夫れ挈餅の小智と雖も、自ら守りて他人に貸さずといふにあらずや。足下の如きは妄に奢淫の事を說き、帝位を輕んずる者なり。何ぞ尙ぶに足らんや。彼の高祖光武の二祖を觀るに、常に翹翹として危懼勤勞し、遂に大功を成せるなり。且つ足下は西京の天子が屢微行せる事を是とする者の如きも、昔白龍は魚化したればこそ豫且の爲に射られ、秦皇漢祖も一夫たる張良貫高の爲に狙擊せられたるにあらずや。老子に聖

【四〇五】繁廡。繁り盛なること。
【四〇六】饒衍。富饒なり。
【四〇七】雍熙。雍は和、熙は盛なり。
【四〇八】姦慝。惡人、王莽を指す。
【四〇九】玄謀。王莽の陰謀を指す。
【四一〇】二九。王莽の十八年間變計を成ししをいふ。
【四一一】聖皇。光武帝を指す。
【四一二】天階。天子の位。

人は終日行くに輜重を離れずといへり。天子の微行するが如きは最も非とする所なり。今や天子視聽を妄にせず鑾珮の聲を聽いて節制をなし、禮儀を布き甲兵を起さず。走馬を却けて農事を務め、儉約にして民を愛し、蘖を斬らず胎を獲ず。されば民其勞を忘れて力役をなし、財賦を致すを樂み、富饒を同うし、和樂を共にす。乃ち民心固く結び、忠貞を忘れず。王莽亂階を養ふこと十八年、漢祚を危うせしも、民皆光武を推して天子となし、漢祚の改むべからざるを示せり。王業此に於てか樂むべきなり。

今公子苟も民を勦して以て婾樂するを好み、民怨の仇となるを忘れ、物を殫して以て寵を窮めんことを好み、下叛きて憂を生ぜんことを忽にす。夫れ水は舟を載する所以なるも、亦舟を覆す所以なり。堅冰は霜を履むより作り【四一三】尋木は蘖栽より起る。【四一四】昧旦に丕顯なるも後世猶ほ怠る。況んや初め【四一五】甚だ泰なるに制らるるをや。服する者焉ぞ能く改め裁せん。故に【四一六】相如は上林の觀を壯にし、【四一七】揚雄は羽獵の辭を騁せ、系るに牆を頽し塹を塡むるを以てし、亂むるに罝を收め罘を解くを以てすと雖も、卒に風規に補なし。祇に以て其愆尤を昭にせるのみ。臣奓を濟して以て君を陵ぎ、經

【四一三】尋木。一ひろの木。
【四一四】昧旦。早朝なり。丕顯は大に著はるること。始めに大に道を行ふに喩ふ。
【四一五】甚だ泰。衣を製するに喩ふ。初め衣を製すること寬裕なれば、後之を改めて小にすることなしとの意。
【四一六】相如。司馬相如上林賦を作る、文選卷八に出づ。
【四一七】揚雄。羽獵賦を作る。卷八に出づ。

國の長基を忘る。故に(四一八)函谷柝を東に撃ち、西のかた(四一九)朝廷顚覆して持するなし。凡そ人の心は學ぶ所を是とし體は習ふ所に安んず。(四二〇)鮑肆其臭を知らざるは其の先づ入る所以に狃へばなり。(四二一)咸池は度を(四二二)擢咬に齊うせざれども、衆の聽く者惑ひ疑ふ。能く惑はざる者は其れ唯(四二三)子野か。

【大意】今足下は民財を盡して驕奢を極め、人の己に叛いて憂患を招かんことを忘る。夫れ君は舟なり、民は水なり。水よく舟を載すと雖も亦よく舟を覆す。君たる者は能く此理を體せざるべからず。凡そ事皆微より著に至るものなれば、之を初に愼まざるべからず。初めに愼みてすら、後世猶ほ怠るなり。若し奢泰を初めに行はば、後よく之を改めて儉約するを得んや。故に司馬相如は上林賦を作り、揚雄は羽獵賦を作り、末に牆を頽し塹を塡むといひ、罝を收め罘を解くといひて、奢肆を諫めたりと雖も、卒に少補なく、却つて其過を示せるのみ。かくて臣益奢侈を極め以て其君を陵ぎ、國家長久の計をなさず。王莽の兵、柝を撃ちて函谷關を守りしも、賊軍已に長安に入り、西京の朝廷顚覆して、復た扶持すべからず。是れ皆奢侈の致す所の結果なり。豈恐るべからずや。凡そ人は己の

【四一八】函谷。長安の東にある關所の名。柝は夜を守る時に撃つヒヤウシギ。王莽の兵柝を撃ちて函谷關を守りしをいふ。

【四一九】朝廷。長安の朝廷、卽ち前漢なり。一本廷字無し。

【四二〇】鮑肆。腐魚の店なり。

【四二一】咸池。堯の音樂。

【四二二】擢咬。淫靡なる音樂。

【四二三】子野。師曠とて音樂の名人なり。

學ぶ所を以て是となし、己の習ふ所を以て安しとなす。猶ほ久しく腐魚の店に居れば其臭を感せざるが如し。是れ亦久しく其處に慣るればなり。それ咸池と鞨咬とは其類を異にせるも、聽く者其美惡を辨せずして之を疑ふ。ただ師曠よく之を辨じて疑惑することなし。足下亦奢儉の得失に昧く、西京を褒めて東京を貶するも、ただ余獨り東京儉約の褒むべきを知るのみ。

(四二四)客既に大道に醉ひ文義に飽き、德に勸み戒を畏れ、喜懼交爭ひ、罔然として酲ふが若く、朝に疲れ夕に倦み、氣を奪はれ魂を褫はれしものの爲す者のごとく。其の談ずるをなす所以を忘れ、其の夸をなす所以を失ひ、良久うして乃ち言つて曰く、鄙いかな予や、予非に習ひて遂に迷へるなり。幸に(四二五)吾子に指南せらる。僕の聞ける所の若きは、華にして實ならず。先生の言は信にして徵あり。鄙夫は識寡し。今にして後乃ち大漢の德馨咸此に在るを知れり。昔常に恨みぬ(四二六)三墳五典既に泯び、仰いで(四二七)炎帝帝魁の美を覩ざるを。先生の餘論を聞くを得たり。則ち(四二八)大庭氏も何を以てか茲に尙らん。(四二九)走不敏と雖も、庶はくは斯れ達せん。

【四二四】客。憑虛公子を指す。
【四二五】吾子。安處先生を指す。
【四二六】三墳五典。三皇五帝の書なり。
【四二七】炎帝は神農なり。帝魁は神農の名。
【四二八】大庭氏。古の王の名。結繩の政をなせり。
【四二九】走。自己の謙辭、僕といふが如し、走使する人といふ意。

【大意】憑虛公子、東京文義の道禮法の政を聞き、或は喜び或は懼れ、憫然として醉ひ、魂魄を失へるが如く、やや久うして乃ち曰く、ああ吾れ鄙にして學ぶ所正しからず、遂に此の迷を致せり。今先生の說を聞き、始めて其非を覺れり。先生の言信にして實あり。大漢の馨德乃ち其中に在るを知れり。昔は三墳五典既に滅びて、炎帝の美事を知る能はざるを恨みしが、今先生の論を聞くを得たれば、大庭氏の政と雖も之に過ぐるなし。復た何ぞ炎帝の美を之れ求めんや。吾れ不敏なりと雖も、進んで先生の說に達せんことを期すと。

(一)南都の賦　張平子

ああ顯なるかな(二)樂都、既に麗にして且つ康く、(三)京の南に陪し、(四)漢の陽に居り、周楚の豐壤を割き、(五)荊豫に跨りて疆をなし、體(六)爽塏にして以て(七)閑敞、(八)紛郁郁として其れ詳にし難し。爾して其地勢は則ち(九)武闕其西を關し(一〇)桐栢其東に揭ち、(一一)滄浪を流して隍となし、(一二)方城を廓に

【一】南都。南陽なり、光武皇帝の鄕里なるを以て都を置きしが、桓帝の時之を廢せんとの議あり、故に張衡この賦を作り、盛に此都を稱し都を建つるの由あるを示し以て諷諫す。前半は地を寫し、後半は人を寫し、極めて作法あり。

【二】樂都。安樂なる都、南都を指して言ふ。

【三】京。洛陽を指す。

【四】漢。漢水なり。陽は川の時は北をいふ。

【五】荊豫。荊州豫州。

【六】爽塏。高爽なること。

【七】閑敞。廣濶なること。

【八】紛郁郁。衆美の貌。

【九】武闕。山の名。

【一〇】桐栢。山の名。

【一一】滄浪。川の名。

【一二】方城。山の名。

して塘となし、(一三)湯谷其後に涌き、(一四)淯水其胷を盪し、(一五)淮を推し(一六)湍を引き(一七)三方是れ通ず。其寶利珍怪には、則ち金彩玉璞、(一八)隨珠夜光、銅錫鉛鍇、赭堊流黃、綠碧紫英、青雘丹粟、(一九)太一餘糧、(二〇)中黃瑴玉あり。(二一)松子の神陂には赤靈角を解き、(二二)耕父光を淸泠の淵に揚げ、(二三)游女珠を漢皐の曲に弄す。其山は則ち(二四)崆峣嶱嵑嶚嵯寥刺岩崒嵬巍巉巇屹嶁、幽谷嶜岑として夏にも霜雪を含み、或は(二五)嶜嶙として纚聯り、或は豁爾として中絶え、(二六)鞠巍巍として其天を隱し、俯して雲霓を觀る。若夫れ(二七)天封大狐列仙の陬は、上平衍にして(二八)曠蕩、下(二九)蒙籠として崎嶇たり。坂坻(三〇)巀嶭として巇を成し、谿壑(三一)錯繆して盤紆し、(三二)芝房菌蠢として其隈に生じ、(三三)玉膏滵溢として其隅に流れ、崑崙も

【一三】湯谷。溫湯の涌き出づる谷の名。
【一四】淯水。川の名。
【一五】淮。川の名、淮水此より流れ去る、故に推すといふ。
【一六】湍。川の名、彼より流れ來る、故に引くといふ。
【一七】三方。南に淯水あり、西に滄浪あり、北に湯谷あるをいふ。
【一八】隨珠夜光。寶玉の名。
【一九】太一餘糧。石藥の名。
【二〇】中黃。瑴玉、玉の名。
【二一】松子。蔡陽縣の界に松子亭あり、下に神陂あり。赤靈は赤龍なり、角を解くとは角を脫するなり。
【二二】耕父。神の名、山海經に見ゆ。

【二三】游女。神女なり、事韓詩外傳に見ゆ。
【二四】崆峣嶱嵑。山石高峻の貌。嶚嵯は山石廣大の貌 寥刺は高き貌。以下皆山の形容。
【二五】嶜嶙。相連る貌。
【二六】鞠巍巍。高き貌。霓は音ゲツ。叶韻。
【二七】天封大狐。山の名。
【二八】曠蕩。廣き貌。
【二九】蒙籠。草木の茂る貌。
【三〇】巀嶭。高峻の貌。
【三一】錯繆。いりまじる貌。
【三二】芝房。芝草の房を成せるもの。菌蠢は芝房の形容なり。
【三三】玉膏。玉の脂膏なり。滵溢は流るる貌。

以て參なるなく、(三四)閬風も踰る能はず。

【大意】南都の地たるや、山水秀麗の樂土にして、洛陽の南、漢水の北に位し、荆豫二州の沃野に跨り地勢高爽にして開豁、其美一一擧げ盡し難し。今其略を述ぶれば、西には武闕山あり、東には桐栢山あり、滄浪を池となし、方城山を城となし、水利三方に通じ、種種なる金石珠玉此間より產し、神仙其間に來り遊ぶ。山嶽の形勢崑崙閬風と雖も過ぐる能はざるなり。

其木は則ち檉松楔㯶槾柏杻橿楓柙櫨櫪、帝女の桑、楈枒栟櫚柍柘檍檀あり。根を結び本を竦て、垂條(三五)嬋媛たり。綠葉の萋萋たるを布き、華蘂の(三六)蓑蓑たるを敷き、(三七)玄雲合して陰を重ね、谷風起りて哀を增す。攢り立ち叢り駢びて青冥(三八)肝瞑たり。谷底に(三九)杳藹蓊鬱し、(四〇)森蓴蓴として天を刺し、虎豹黃熊其下に游び、(四一)轂玃猱狿其巓に戲れ、鸞鷟鵷鶵其上に翔り、騰猨飛猵其間に棲む。其竹は則ち籦籠䉋篾篠簳箛箠、坻坂に緣延し、(四二)澶漫陸離たり。(四三)阿那蓊茸として風靡雲披す。爾して其川瀆は則ち(四四)滍澧藻濜、源を巖穴に發

【三四】閬風。崑崙山の北角の峰。
【三五】嬋媛。枝相連る貌。
【三六】蓑蓑。下垂する貌。
【三七】玄雲。黑雲なり、樹木の茂れるを雲に喩ふるなり。
【三八】肝瞑。遙に視て小暗き貌。
【三九】杳藹云云。茂盛の貌。
【四〇】森蓴蓴。茂盛の貌。
【四一】轂玃。以下皆獸名。
【四二】澶漫は布散する貌。陸離は參差なり。
【四三】阿那蓊茸。亂密の貌。
【四四】滍澧。皆川の名。

し、潛廅洞出し、(四五)沒滑瀎潏し、(四六)布濩漫汗し、漭沆洋溢し、總括して(四七)歙に趣き、箭のごとく馳せ風のごとく疾し。流湍(四八)瀧に投じ(四九)砏汃輣軋として、長く輸り遠く逝き、(五〇)漻淚淢汨たり。其水蟲は則ち蠳龜鳴蛇潛龍伏螭、鱣鯉鱮鱅黿鼉鮫蠵あり。(五一)巨蚌珠を函み(五二)駮瑕委蛇たり。

【大意】木は其類極めて多く、根を結び枝を垂れ、綠葉は萋萋として華蘂は蓑蓑、晻然として雲の如く、森然として風を生じ、低く谷底を埋め高く靑天を衝き、虎豹の獸、鸞鳳の鳥、其間に飛翔し、竹類また極めて多く、風に靡き雲を披き、水流其間を奔馳し水蟲魚鼈其間に浮游す。

其陂澤は則ち(五三)鉗盧玉池赭陽東陂あり。貯水(五四)渟滢、亙望涯なし。其草は則ち藨苧蘋莞蔣蒲蒹葭、藻茆菱芡芙蓉あり、華を含み、風に從つて榮を發き、(五五)菲披して芬葩す。其鳥は則ち(五六)鴛鴦鵠鷖鴻鴇鴐鵞鶡鶂鸊鷉鷫鷞鵾鸕あり、嚶嚶として和鳴し、(五七)澹淡として波に隨ふ。其水は則ち竇を開き流を灑ぎ、彼の稻田を浸し、溝澮脈連し堤塍相輔り、朝雲興らずして(五八)潢潦獨り臻る。(五九)決渫す

【四五】沒滑。疾流の貌。
【四六】布濩。以下皆廣大なる貌
【四七】歙。諸水の合する處。
【四八】瀧。水の出で行く處。
【四九】砏汃云云。波相激する聲。
【五〇】漻淚云云。疾流の貌。
【五一】巨蚌。大蛤なり。
【五二】駮瑕は大蝦。委蛇は長き貌。

【五三】鉗盧。以下皆陂澤の名。
【五四】渟滢は水の溜れる池。亙望は見渡すかぎり。
【五五】菲披は風に靡く貌。芬葩は香氣ある貌。
【五六】鴛鴦。以下皆水鳥の名。
【五七】澹淡。自ら恣なる貌。
【五八】潢潦。たまり水。
【五九】決渫。水を除き去ること。

れば則ち暵き、(六〇)漑となり陸となり、冬は稌夏は穱、時に隨つて代る〴〵熟す。其原野は則ち桑漆麻苧菽麥稷黍あり。百穀(六一)蕃廡し、(六二)翼翼與與たり。若其れ園圃には則ち蓼蕺蘘荷藷蔗薑𧃒菥蓂芋瓜あり。乃ち櫻梅山柹侯桃梨栗樗棗若榴(六三)穰橙鄧橘あり。其香草は則ち薜荔蕙若薇蕪蓀萇あり。晻曖蓊蔚として芬を含み芳を吐く。若其れ廚膳には則ち華薌重秬滍皐香秔あり。歸雁鳴鵽黄稻鱻魚、以て(六四)芍藥となす。酸甜の滋味、百種千名、春卵夏筍、(六五)秋韭冬菁、(六六)蘇蔱紫薑あり、(六七)羶腥を拂徹す。酒は則ち(六八)九醞の甘醴、十旬の兼淸あり。(六九)醪敷いて寸に徑り(七〇)浮蟻萍の若し。其れ甘くして爽はず、醉へども醒せず。

【大意】陂澤には鉗盧玉池等ありて水草繁茂し、水禽內に滿ち、溝渠縱橫に通じ、灌漑の利多く、原野園圃、また產する所の蔬菜極めて豐富に、美酒また此地より產す。

其の宗を糺し族を綏んじ、(七一)禴祠蒸嘗するに及んでは、以て遠朋嘉賓を速きて是に將め、揖讓して

【六〇】漑となり云云。水灌げば水田となり、水を除き去れば陸田となる。
【六一】蕃廡。茂ること。
【六二】翼翼與與。茂盛の貌。
【六三】穰鄧。地名なり。
【六四】芍藥。調味劑なり。
【六五】秋韭。韭はにら。冬菁。菁はあをな。
【六六】蘇蔱。香菜なり。
【六七】羶腥。なまぐさきこと。拂徹は羶腥の氣を拂ひ除くをいふ。
【六八】九醞、十旬。ともに酒の名。
【六九】醪。酒膏なり。
【七〇】浮蟻。酒滓の上に浮ぶもの。
【七一】禴祠蒸嘗。四時の祭祀の名。

升り、(七二)蘭堂に宴す。(七三)珍羞琅玕、(七四)圓方に充溢し、(七五)琢琱狎獵たる金銀(七六)琳琅あり。侍者は(七七)蠱媚して(七八)巾幘鮮明なり。被服雜錯して、華英を履躡む。(七九)儇才齊敏にして爵を受け觴を傳へ、獻酬既に交り、禮に率ひて違ふなし。琴を彈じ籥を擫へ、流風徘徊し、(八〇)淸角徵を發し、聽く者哀を增す。客、(八一)醉うて言に歸らんと賦すれば、主は(八二)露未だ晞かずと稱し、歡宴を日夜に接へ、愷樂の(八三)令儀を終ふ。是に於て莫春の禊、(八四)元巳の辰、軌を方べ軫を齊うして(八五)陽瀕に祓ふ。朱帷網を連ね、野に曜き雲に映じ、男女(八六)姣服して駱驛繽紛たり。飾を致し蠱を程して(八七)偠紹便娟たり。微に眺め流に睇て(八八)蛾眉連卷たり。是に於て(八九)齊童唱へて趙女列り、坐して南歌し起つて鄭舞し、(九〇)白鶴飛んで繭緒

【七二】蘭堂。芬香の滿ちたる堂。
【七三】珍羞。珍味佳肴なり。琅玕は玉の名、珍羞を玉に比して言ふ。
【七四】圓方。或は圓き或は四角なる器。
【七五】琢琱。彫琢を加ふること。狎獵は衆飾の貌。獵は音タフ。
【七六】琳琅。玉の名。
【七七】蠱媚。容儀美なること。蠱は音ヤ。
【七八】巾幘。女子の服なり。
【七九】儇才。さかしき人。
【八〇】淸角。音樂の調子の名。徵も亦調子の名なり。
【八一】醉うて。詩經に鼓咽咽タリ、醉ウテ言ニ歸ルとあり。
【八二】露未だ。詩經に湛湛タル露、陽ニアラザレバ晞カズ、厭厭タル夜飲、醉ハズンバ歸ルナカレとあり。
【八三】令儀。善儀なり。
【八四】元巳。卽ち上巳なり、三月三日をいふ。
【八五】陽瀕。李善本に瀕を濱に作る、續漢書に三月上巳、宮人皆東流ノ水上ニ禊ヒ、宿垢疾ヲ祓除スとあり。
【八六】姣服。美服なり。
【八七】偠紹便娟。容姿の美しき貌。
【八八】蛾眉。美人の曲れる眉、連卷は曲る貌。
【八九】齊童、趙女。齊趙は國の名。鄭舞の鄭も亦同じ。
【九〇】白鶴云云。舞人の連なる容なり。

を曳き、(九一)脩袖繚繞して庭に滿ち、(九二)羅襪躡蹀して(九三)容與し、(九四)翩緜緜として其れ絕ゆるが若く、眩して將に墜ちんとして復た擧り、(九五)翹遙遷延蹩躠蹁躚たり。(九六)九秋の增傷を結び、(九七)西荊の折盤を怨み、箏を彈じ笙を吹いて、更ゝ新聲をなし、(九八)寡婦悲吟し(九九)鵾雞哀鳴し、坐する者悽欷して魂を蕩し情を傷る。

【大意】されば宗族を會し、祭祀を營むが如き時は、珍味佳肴盤上に溢れ、杯盤の間を周旋するには、美女美服をまとひて媚を呈し、琴を彈じ笛を吹きて酒興を添ふ。若夫れ暮春三月上巳の修禊には、車を竝べて東方の水濱に赴き、或は歌ひ或は舞ひ、人をして情魂を銷せしむ。

【九一】脩袖。長き袖。繚繞。長袖のまつはる貌。
【九二】羅襪。薄絹のたび。躡蹀は小步の貌。
【九三】容與。ゆつたりとしたる貌。
【九四】翩はひら／＼する貌、緜緜は長くして絕えざる貌。
【九五】翹遙。以下皆舞の容。
【九六】九秋。古樂府の名。
【九七】西荊は楚の舞、折盤は舞ふ貌。
【九八】寡婦。蓋し曲名ならん。
【九九】鵾雞。曲名。
【一〇〇】騄驥。駿馬の名。
【一〇一】黃間。弩なり。機はバネなり。
【一〇二】魴鱮。大魚の名。
【一〇三】雙鶬。鶬は鳥の名。
【一〇四】瀺灂。波の貌。
【一〇五】容裔。船の行く貌。

是に於て羣士放逐して沙場に馳せ、(一〇〇)騄驥鑣を齊うし、(一〇一)黃間機張り、足は驚飇よりも逸く、鏃は毫芒を析き、俯しては(一〇二)魴鱮を貫き、仰いでは(一〇三)雙鶬を落し、魚は竄るるに及ばず、鳥は翔るに暇あらず。爾して乃ち輕舟に撫りて淸池に浮び、北渚を亂りて南涯に揭ひ、汰(一〇四)瀺灂して船(一〇五)容

蔚し、(一〇六)陽侯澆りて鳧鷖を掩ひ、水豹を追うて(一〇七)蝌螭を鞭ち、(一〇八)夔龍を憚かし蛟鰐を怖す。是に於て日將に昏に逮ばんとす。樂む者未だ荒まず。歡を收め駕を命じ、分れ背いて塘を廻る。車雷のごとく震ひて風のごとく厲く、馬は鹿のごとく超えて龍のごとく驤り、夕暮にして言に歸る。其樂忘れ難し。斯れ乃ち游觀の好、耳目の娯なり。未だ其美なる者を視ず、焉んぞ稱擧するに足らん。

【大意】是に於て羣士馬を驅りて山川に漁獵す。馬足は風よりも疾く矢鏃は毫芒を析き、鳥魚避け匿るるに暇あらず。更に輕舟を泛べて鳥魚神怪を驚かし、歡を盡すこと終日、日暮に及んで乃ち歸る。これ南都游觀耳目の樂なり。然も未だ其美を極むるものにあらず、擧げ稱するに足らざるなり。

夫れ南陽は眞に所謂漢の舊都なり。遠世には則ち(一〇九)劉后厥龍醢を甘しとし、魯縣を覩て來り遷る。(一一〇)先帝に奉じて追孝あり。(一一一)唐祀を堯山に立て、(一一二)靈根を夏葉に固め、三代を終へて始めて蕃な

【一〇六】陽侯。大波なり。
【一〇七】蝌螭。水の怪物。
【一〇八】夔龍、蛟鰐。皆水獸なり。
【一〇九】劉后。劉累なり。左傳に劉累龍ヲナラスコトヲ學ビ以テ孔甲ニ事フ、龍一雌死ス、潜ニ醢ニシテ以テ夏后ニ食ハシム、孔甲之ヲ饗ケ、既ニシテ又之ヲ求メシム、懼レテ魯縣ニ遷ルとあり。劉累は漢の遠祖なり。
【一一〇】先帝。堯をいふ。
【一一一】唐祀。堯を祀る祠。堯山は山の名、水經に南陽縣 西ニ堯山アリトあり。
【一一二】靈根云云。葉は世なり、夏殷周三代を經て始めて盛なるをいふ。

り。純德の宏圖にあらずば、孰か能く揆りて旃に處らん。近くは則ち（二三）考侯故を思ひ、居らず寧んぜず、長沙の樂なきを穢とし、江湘を歷て北に征き、（二四）朱光を白水に曜かし、（二五）九世に會して榮を飛ばし、茲邦の神偉なるを察し、（二六）天心を啓いて靈を寤す。是に於て宮室は則ち園廬舊宅あり、（二七）隆崇崔嵬たり。（二八）御房穆として以て華麗なり。連閣煥として其れ相徵し。（二九）聖皇の逍遙せる所、（三〇）靈祇の保綏する所なり。（三一）章陵鬱として以て靑葱、（三二）淸廟肅として以て（三三）微微たり。（三四）皇祖歆けて福を降し、（三五）萬祀に彌りて衰ふるなし。（三六）帝王其の美を擅にするを臧しとし、南音を詠じて以て顧み懷ふ。且つ其君子は弘懿明叡、允恭溫良、容止則るべく、言を出して章あり。進退（三七）屈申時と抑揚す。（三八）方

【二三】考侯。東觀漢記に曰く、春陵節侯買ハ長沙定王發ノ子ナリ、節侯戴侯ヲ生ミ、戴侯考侯ヲ生ム、考侯仁、春陵ノ地勢下濕ニシテ、久シク居リ難キヲ以テ、上書シテ南陽ニ徙リ墳墓ヲ守ランコトヲ願フ、元帝之ヲ許ス、是ニ於テ北ニ徙ル。

【二四】朱光。火德なり。漢は火德の王なり。東觀漢記に考侯仁、南陽ノ白水鄕ニ徙封セラルとあり。

【二五】九世。光武皇帝は高祖九代の孫なり。榮を飛ばすとは帝位に卽けるをいふ。

【二六】天心云云。上天の心を啓き又先靈の意を寤し、之をして王たらしめしを言ふ。

【二七】隆崇云云。高壯なる貌。

【二八】御房。光武帝の舊房なり。

【二九】聖皇。光武帝を指す。

【三〇】靈祇は天地の神。保綏は安んずること。

【三一】章陵。建武中春陵を改めて章陵となす。

【三二】淸廟は章陵に在る廟。靑葱は茂盛の貌。

【三三】微微。幽靜の貌。

【三四】皇祖。高祖なり。

【三五】萬祀。萬世なり。

【三六】帝王。光武帝を指す。

【三七】屈申。屈伸に同じ。

【三八】方今。方は嚮なり、高祖の時をいふ。今は光武帝の時をいふ。

今天地の（二二九）睢剌なりしとき、（二三〇）帝其政を亂め、（二三一）豺虎虐を肆にせしとき、（二三二）眞人革命の秋なり。

【大意】抑々南陽は漢の舊都なり。漢の遠祖劉累嘗て龍を擾すを以て夏君孔甲に事へしが、其一雌死したるにより、潛に之を醢となして以て進めたり。孔甲之を甘しとし、更に之を求む。劉累因つて恐れて南陽郡の魯陽縣に遷り、唐堯を追祀し祠を南陽の堯山に建て、夏殷周三代を經て子孫繁衍せり。近祖考侯長沙に居りしが、其地卑濕なるを以て此に安居せず。祖先の地たる南陽を思ひ、元帝に請ひて允を得、長沙を去りて北のかた南陽に徙りぬ。かくて高祖九世の孫光武帝に至り、遂に天子の榮位に即きぬ。南陽の地たる既に宮室壯麗にして祖廟の幽靜なるあり、因つて光武此地を眷顧し、皇祖を奉祀すること永世衰へず。且つ高祖と光武と共に大善至聖の君子なれば、能く時に隨つて屈伸し、暴秦王莽の亂世に際し、二帝起つて天下を治め革命の大業を全うせり。

爾して其れ則ち謀臣武將あり。皆能く戾れるを攫ち猛きを執へ、堅きを破り剛きを摧き、（二三三）揵を排き扃を陷れ。咸陽を蹙蹈す。高祖其塗に嚮り。光武其英を攬る。是を以て關門（二三四）反距し、漢德久長な

【二二九】睢剌。禍亂に喩ふ。
【二三〇】帝。高祖を指す。
【二三一】豺虎。王莽に比す。
【二三二】眞人。光武帝を指す。
【二三三】揵。門を拒ぐこと。扃は門限なり。
【二三四】反距。反覆して關を拒ぐこと。高祖は西に都して東を拒ぎ、光武は東に居りて西を拒ぎしをいふ。

り。其の危きを去り安きに乘じ、人を覗て用て遷るに及びては、(二三五)周召の儔(二三六)鼎足に據り、以て王職を庀め、(二三七)縉紳の倫、訓典を經綸し、敷納するに言を以てす。是を以て朝に闕政なく(二三八)風烈昭に宣ぶ。是に於てか(二三九)鯢齒眉壽鮐背の叟、皤皤然として黃髮を被る者、喟然として相與に歌つて曰く、(二四〇)翠華の葳蕤たるを望み、(二四一)大常の裶裶たるを建て、(二四二)飛龍の騤騤たるを驅し、(二四三)和鑾を京師に振ひ、萬乘を總べて徘徊し、平路を按じて來り歸れと。豈天子(二四四)南巡の辭を思はざる者あらんや。遂に頌を作りて曰く、

【大意】是を以て謀臣武將亦よく高祖光武を助けて、堅剛を破り猛戾を執へ咸陽を陷れぬ。高祖光武亦よく英雄の心を攬り、高祖は西に都して東を拒ぎ、光武は東に居りて西を拒ぐ。是の故に漢德長久なり。既に天下を太平ならしめ、民の安んずる所を觀て、敎を設くるに方りては、周公召公の如き賢人、三公の位に居りて王職を輔け、智能の臣訓法を經理し、獻納するに美言を以てす。朝に失政なく功業天下に明かなり。是に於てか父老相與に歌つて曰く。ああ天子翠華大常の旗を飜し、駿馬に駕

【二三五】周召。周公旦、召公奭なり、周公は周の武王の弟にして共に三公の位に居り、武王成王を輔けたり。
【二三六】鼎足。三公となること。
【二三七】縉紳。大官なり。
【二三八】風烈。烈は業なり、威風及び功業。
【二三九】鯢齒。以下皆老人をいふ。
【二四〇】翠華。天子の旗。葳蕤は旗の靡く貌。
【二四一】大常。旗の名。裶裶は靡く貌。
【二四二】飛龍。馬なり。騤騤。壯健の貌。
【二四三】和鑾。鈴なり。
【二四四】南巡。南陽地方に巡狩すること。

し京師を發し、萬乘の卒を率ゐて我が南都に巡幸せられよと。一人として天子南巡の辭を思はざる者なし。予因つて頌辭を作ること左の如し。

(一四五)皇祖止りて、光武起る。彼の(一四六)河洛に據りて、四海を統ぶ。(一四七)本枝百世、位天子たり。永世克く孝にして、(一四八)桑梓を懷ひ、(一四九)眞人南巡して、舊里を覩る。

【大意】南都の地たる、考侯此を略取し光武此に起り、遂に洛陽に都し天下を一統せる發祥地なり。其後子孫相繼ぎ永く天子たり。列聖よく孝にして父祖の舊里を忘れず。ああ今上（桓帝）また宜しく南巡して、此の舊里を訪ふべきなり。

【一四五】皇祖。前に見ゆる考侯をいふ。止るとは南陽を略せるをいふ。
【一四六】河洛。東都洛陽をいふ。
【一四七】本枝。子孫相繼ぐこと。
【一四八】桑梓。故郷をいふ、南陽を指す。
【一四九】眞人。桓帝を指す。

(一)三都の賦の序　(二)左太冲

蓋し詩に(三)六義あり、其二を賦といふ。(四)揚雄曰く、詩人の賦は麗にして以て則

【一】三都。劉備益州に都して蜀と號し、孫權建業に都して呉と號し、曹操鄴に都して魏と號す。
【二】左太冲。左思、字は太冲、齊の人なり。三都の賦を作らんと欲し、思を構ふること十年、門庭藩溷皆紙筆を著け、一句を得るに遇へば卽ち之を疏す。賦成る。張華見て咨嗟し、都邑の豪貴競つて相傳寫す。洛陽の紙價之が爲に貴きに至る。
【三】六義。子夏の毛詩序に云く詩ニ六義アリ、一ニ曰ク風、

ありと。班固曰く、(五)賦は古詩の流なりと。(六)先王採りて以て土風を觀たり。(七)綠竹猗猗たりを見ては、則ち衞地淇澳の産なるを知り、其(八)版屋に在りを見ては則ち秦野(九)西戎の宅たるを知る。故に能く(一〇)居然として八方を辨ず。然れども(一一)相如は上林を賦し(一二)盧橘夏熟するを引き、揚雄は(一三)甘泉を賦し、(一四)玉樹の青葱たるを陳べ、班固は西都を賦し、歎ずるに比目を出すを以てし、張衡は西京を賦し、述ぶるに(一五)海若游ぶを以てし、珍怪を假稱して以て(一六)潤色をなす。かくの若きの類啻に茲のみにあらず。之を果木に考ふるに、則ち生其壤にあらず。之を神物に校ふるに、則ち出づる其所にあらず。辭に於ては則ち藻飾をなし易きも、義に於ては則ち虛にして徵なし。且夫れ玉卮も當なければ、寶と雖も用にあらず。侈言も驗なければ、麗なりと

二ニ曰ク賦、三ニ曰ク比、四ニ曰ク興、五ニ曰ク雅、六ニ曰ク頌と。

【四】詩人。詩經に載せたる詩の作者をいふ。

【五】賦は云云。卷一兩都賦の序に見ゆ。

【六】先王云云。周の天子各國の詩を採集して其地の民風を觀たるをいふ。

【七】綠竹。詩經衞風淇澳篇に彼ノ淇澳ヲ瞻レバ、綠竹猗猗タリとあり。淇澳は淇水の畔をいふ。

【八】版屋。詩經秦風小戎篇に其版屋ニ在リ、我ガ心曲ヲ亂ルとあり。

【九】西戎。西方のエビス、秦は西戎の地に在り。

【一〇】居然。其處を離れざる貌。

【一一】相如。漢の司馬相如、上林賦は卷四に出づ。

【一二】盧橘。橘の類の果實なり。

【一三】甘泉。賦の名、卷二に出づ。

【一四】玉樹。木の名。青葱は青青として茂ると。

【一五】海若。海神なり。

【一六】潤色。文章の飾とすること。

雖も經にあらず。而して論者其研精を（一七）詆訐せざるはなきも、作者大氐舉げて（一八）憲章となす。積習常を生ずること自て來るあり。余既に（一九）二京を摹して三都を賦せんことを思ひ、其山川城邑は、則ち之を地圖に稽へ、鳥獸草木は、則ち之を（二〇）方志に驗へ、風謠歌舞は、各々其俗に附き、（二一）魁梧長者は其舊にあらざるなし。何となれば則ち言に發し詩を爲る者は、其の志す所を詠じ、高きに升りて能く賦する者は、其の見る所を頌し、物を美する者は其本に依るを貴び、事を讚する者は宜しく其實に本づくべければなり。本にあらず實にあらずんば、覽る者奚ぞ信ぜん。且夫れ土に任じ貢をなすは、（二二）虞書の著す所なり。（二三）物を辨じ方に居くは、周易の愼む所なり。聊か其一隅を擧げ、其體統を攝べ、諸を（二四）詁訓に歸す。

蜀都の賦

（二五）西蜀公子といふ者あり。（二六）東吳王孫に言つて曰く、蓋し聞く天は日月を以て綱となし、地は四海を以て紀となす。（二七）九土の星分には萬國

【一七】詆訐。擧げそしること。
【一八】憲章。法則手本なり。
【一九】二京。西京、東京の二賦なり、卷一、二に出づ。
【二〇】方志。地誌なり。
【二一】魁梧長者。大德の人をいふ。
【二二】虞書。書經の禹貢を指す。禹天下を九州に分ち、土に任じて貢をなし、九州貢賦の法を定む、禹貢是れなり。
【二三】物を辨じ。周易に云く君子ハ愼ンデ物ヲ辨ジ方ニ居クと。
【二四】詁訓。古言なり。
【二五】西蜀公子　蜀は西に在り、公子とは推尊の辭なり。
【二六】東吳王孫。吳は東に在り、王孫は公子といふが如し、亦推尊の辭なり。左太沖、西蜀公子東吳王孫の二人を立て、相誇るに二都の奢麗を以てせ

錯時ち、(二八)崤函には帝皇の宅あり。(二九)河洛は王者の里たりと。吾子豈亦嘗て蜀都の事を聞けるか。請ふ(三〇)左右の爲に(三一)揚搉して之を陳べん。

【大意】西蜀公子、東吳王孫に謂つて曰く、天地は日月四海を以て綱紀となす。九州の分野には萬國相錯はり、長安洛陽は古來王者の都せる所なりと聞けり。此他に尙ほ吾が蜀都あり。王孫嘗て其盛を聞知せりや。余今足下の爲に之を說かん。

夫れ蜀都は、蓋し基を上世に兆し、國を中古に開けり。(三二)靈關を廓にして門となし、(三三)玉壘を包ねて宇となし、(三四)二江の雙流を帶び、(三五)峨眉の重阻に抗ふ。水陸の湊る所、(三六)六合を兼ねて交會す。(三七)豐蔚の盛なる所、(三八)八區より茂にして(三九)蓊藹たり。前には則ち(四〇)犍牂を跨踊み、(四一)交趾に枕

しめ、後に魏先生をして法度を以て之を折かしむるなり。

【二七】九土。九州なり。星分は星の分野なり。

【二八】崤函。崤關と函谷關。西京長安の附近に在り。

【二九】河洛。黄河及び洛水、東京洛陽の附近に在り。

【三〇】左右。侍臣なり、公子直に王孫を斥さずして、侍臣の爲にといふは王孫を敬するなり。

【三一】揚搉。揚は擧なり、搉は引なり。

【三二】靈關。山の名。成都の西南漢壽の界に在り。前に在るが故に門といふ。

【三三】玉壘。山の名。宇は區處なり。

【三四】二江。江水は蜀の岷山より出で分れて二江となり、成都の南を經て東流す。

【三五】峨眉。山の名。成都の南犍爲の界に在り。

【三六】六合。上下四方をいふ。

【三七】豐蔚。山林果實の饒なるをいふ。

【三八】八區。四方四隅なり。

【三九】蓊藹。茂盛の貌。

【四〇】犍牂。蜀に犍爲、牂牁の二郡あり、竝に益州に屬す。

【四一】交趾。郡名、交州に屬す。

觭り、經途の亙る所五千餘里、山阜相屬り、谿を含み谷を懷きて、岡巒糺紛し、石に觸れ雲を吐き、(四二)鬱坌蒕として以て(四三)翠微たり。(四四)崛巍巍として以て峨峨たり。靑霄を干して秀出し、丹氣を舒べて以て霞となし、(四五)龍池㵿瀑として其隈に濆き、(四六)漏江伏流して其阿に潰れ、(四七)汩として湯谷の濤を揚ぐるが若く、(四八)沛として濛汜の波を涌すが若し。

【大意】蜀都は遠く基を上代に發し、國を中古秦時に建て、靈關山を前にし玉壘山を後にし、江水之を繞りて分流し、峨眉の險に面す。水陸より產する所の物資、皆ここに聚り、その豐饒なること天下に冠たり。其地積は犍爲牂牁の二郡より交趾に跨り、廣袤五千餘里、其間山溪起伏し、雲氣鬱鬱として丹霞をなし、龍池瀑江の流あり。滔滔として洪波を涌かしむ。

是に於てか(四九)邛竹嶺に緣り、(五〇)菌桂崖に臨み、旁に(五一)龍目を挺んで、側に(五二)荔枝を生じ、綠葉の蓺

【四二】鬱坌蒕。雲氣の蒸しあがる貌。
【四三】翠微。山氣の輕くして淺靑色を成せるをいふ。
【四四】崛巍巍。高く特起する貌。
【四五】龍池。池の名。㵿瀑は水の沸く聲なり。
【四六】漏江。江の名。伏流は地下を流るるなり。
【四七】汩。水の盛なる貌。湯谷は日の出づる處、淮南子に日陽谷ヨリ出デ咸池ニ浴スとあり。
【四八】沛。水の盛なる貌。濛汜は日の入る處なり。楚辭に日陽谷ヨリ出デ濛汜ニ入ルとあり。
【四九】邛竹。竹の名。
【五〇】菌桂。木藥の名。
【五一】龍目。果樹の名、その實を龍眼肉といふ。
【五二】荔枝。果樹の名、その實食ふべし。

萋たるを布き、朱實の（五三）離離たるを結び、（五四）隆冬を迎ふるも凋まず、常に（五五）曄曄として猗猗たり。（五六）孔翠羣り翔り犀象競ひ馳せ、白雉朝に雊き猩猩夜啼き、（五七）金馬光を騁せて景を絕ち、（五八）碧雞儵忽として儀を曜かし。（五九）火井熒を幽泉に沈め、（六〇）高爛煽を天垂に飛ばす。其間には則ち（六一）虎珀丹青江珠瑕英金沙銀礫あり。（六二）符采彪炳、（六三）暉麗灼爍たり。

【大意】その土產を擧ぐれば、邛竹あり菌桂あり、龍眼あり荔枝あり、嶺崖の間に生じ、綠葉萋萋として果實果果たり。盛冬にも凋まず、光輝、曄曄たり。鳥獸には孔雀あり翡翠あり象あり犀あり、白雉あり猩猩あり、金馬碧雞等の神怪の物あり。又火井自然に焰を發し、高く天空を燒く。鑛物には虎珀江珠沙金沙銀あり。光彩爛然たり。

後には則ち（六四）華容を却背し、北のかた（六五）崑崙を指し、緣らすに（六六）劍閣を以てし、阻つるに（六七）石門

【五三】離離。茂盛の貌。
【五四】隆冬。盛冬なり。
【五五】曄曄、猗猗。色の美しき貌。
【五六】孔翠。孔雀及び翡翠鳥。
【五七】金馬。神物なり。
【五八】碧雞。神物なり。
【五九】火井。火を吐く井なり。天然瓦斯の燃ゆるならん。
【六〇】高爛。高くあがる焰。煽。火氣なり。天垂は天の四方に垂るる處。
【六一】虎珀。鑛物の名。丹青は赤色青色の玉なり。以下皆金玉なり。
【六二】符采。玉の文彩なり、彪炳は光りかがやく貌。
【六三】暉麗。うるはしき光、灼爍は光彩ある貌。
【六四】華容。川の名。
【六五】崑崙。山の名。
【六六】劍閣。谷の名。
【六七】石門。山の名。

を以てす。流漢湯湯として、驚浪雷のごとく奔り、之を望めば天のごとく廻り、之に卽けば雲のごとく昏し。水物品を殊にし鱗介族を異にし、或は蛟螭を藏し或は碧玉を隱し、（六八）嘉魚丙穴より出で良木（六九）褒谷に攢る。其樹は則ち木蘭梫桂杞櫹椅桐椶枒楔樅あり。楩柟谷底に（七〇）幽藹として、松柏山峯に蓊鬱たり。脩幹を擢んで長條を竦げ、飛雲を扇ぎ輕霄を拂ひ、（七一）羲和道を峻岐に假り、（七二）陽烏翼を高標に廻らし、（七三）巢居栖翔し、聿に（七四）鄧林を兼ね、穴には奇獸を宅らしめ、窠には異禽を宿ましめ、熊羆其陽に呴え、鵰鶚其陰に鳴び、猨狖騰ること希にして競ふこと捷く、虎豹長嘯して永吟す。

【大意】　華容水を背にし、北に崑崙山を眺め、劍閣の谷を環らし、石門山を阻とし、漢水滔滔として流れ、其音雷の轟くが如く、之を望めば天の旋廻するが如く、之に近づけば水氣雲霧の如し。種種の樹木谷底に茂り、松柏山峯に繁り、幹枝長大にして高く雲霄を拂ひ、日輪其上を過ぐ。鳥獸ここに棲み、或は翔り或は嘯く。其種類亦少からず。

東には則ち左のかた（七五）巴中を繚りて、（七六）百濮の充つる所なり。外には（七七）銅梁を（七八）宕渠に負ひ。內

【六八】嘉魚。魚の名。丙穴は魚の住む穴の名。
【六九】褒谷。谷の名。
【七〇】幽藹。茂盛の貌。
【七一】羲和。日の御者。峻岐。高き枝。
【七二】陽烏。日なり。日中に三足の鳥ありとの傳說に據りて言ふ。高標。高き梢なり。
【七三】巢居。鳥をいふ、栖は棲むこと。翔は飛ぶこと。
【七四】鄧林。林の名。
【七五】巴中。地名。
【七六】百濮。夷の名。
【七七】銅梁。山の名。
【七八】宕渠。縣名、巴西に在り。

には要害を(七九)膏腴に函み、其中には則ち(八〇)巴菽・巴戟・靈壽・桃枝あり。(八一)樊するに(八二)菹圃を以てし、濱するに(八三)鹽池を以てし、(八四)蟞蛦山に棲み、黿龜水に處り、潛龍(八五)沮澤に蟠り、鳴鼓に應じて雨を興す。(八六)丹沙赩熾として其坂より出で、(八七)蜜房郁毓として其阜に被り、(八八)山圖采りて道を得、(八九)赤斧服して朽ちず。若し乃ち剛悍は其方に生り、風謠は其武を尙ぶ。之を奮へば則ち(九〇)賨旅し、之を翫べば則ち(九一)渝舞し、銳氣(九二)中葉に剽し、(九三)蹻容樂府に世にす。

【大意】東方巴中の地は百濮（夷の名）の充つる所なり。土地豐饒にして巴菽巴戟等の植物を産し、蟞蛦其山に棲み、黿龜其水に潛み、坂には丹沙を出し、阜には蜜房あり。山圖赤

【七九】膏腴。豐饒なる土地。
【八〇】巴菽。巴豆なり、荳科植物の名、其種子藥用に供すべし。巴戟は巴戟天ともいふ、ヒヒラギの異名なり。靈壽は木の名。桃枝は竹の類なり。
【八一】樊。藩なり籬なり。
【八二】菹圃。菹は草の名、其根食ふべし、故に之を圃に植ゑ以て藩籬となす。
【八三】鹽池。山鹽を採る井なり。
【八四】蟞蛦。鳥の名。
【八五】沮澤。下濕の地をいふ。
【八六】丹沙。礦物の名。道家にて之を煉り不老長生の藥を製す。赩熾は赤色の貌。
【八七】蜜房。蜜蜂の巢。郁毓は豐盛の貌。
【八八】山圖。人名、隴西の人、名山に藥を採り、遂に道術を得たり。列仙傳に見ゆ。

【八九】赤斧。人名、巴人なり、能く丹沙と消石とを錬りて之を服し、身體毛髮盡く赤し。列仙傳に見ゆ。
【九〇】賨旅。風俗通に巴ニ賨人アリ剽勇ナリ、高祖ノ漢王タリシ時、閬中ノ人范目、高祖ニ說キ賨人ヲ募リ得テ三秦ヲ定ム云云とあり。賨人とは巴の夷なり。旅は軍旅なり。
【九一】渝舞。閬中に渝水あり、渝水地方の舞を舞ふこと。風俗通に賨人銳氣ニシテ舞ヲ喜ム、高祖其猛銳ヲ樂ミ、數〻其舞ヲ觀ル、後樂府ヲシテ之ヲ習ハシムとあり。
【九二】中葉。中古なり、漢の高祖の頃をいふ。
【九三】蹻容。舞ふ姿。樂府は漢の武帝の時に設けし歌舞を掌る役所。

斧等の仙人之を服用し、遂に道教不死の術を得たり。又賓夷あり悍勇にして風流なり。奮起しては軍旅に就き、安居しては舞技を演ず。嘗て高祖に從つて鋭氣を振ひ、後樂府に於て舞技を傳授す。

西には則ち右のかたに（九四）岷山を挾んで、瀆を湧かし川を發し、陪すに（九五）白狼を以てし、夷歌章を成す。（九六）坰野草昧、林麓（九七）黝儵、（九八）交讓の植うる所、（九九）蹲鴟の伏する所、百藥（一〇〇）灌叢し、寒卉冬馥し。異類衆夥く、何に于てか育せざらん。其中には則ち（一〇一）靑珠黃環（一〇二）碧砮芒消あり。或は（一〇三）綠荑を豐にし、或は（一〇四）丹椒を蕃くし、（一〇五）蘪蕪中阿に布濩し、（一〇六）風連蘭皐に莚蔓たり。紅葩紫飾あり、柯葉（一〇七）漸苞し、敷蘂（一〇八）葳蕤として、落英飄颻たり。（一〇九）神農是れ嘗め、（一一〇）盧跗是れ料り、芳は氣邪を追ひ、味は（一一一）癘痟を蠲く。

【大意】 西方岷山地方は、白狼（夷の名）の住する所にして草木茂生し、交讓、蹲鴟を始めとし、

【九四】岷山。山の名。
【九五】白狼。夷の名。後漢の明帝の時、詩三章を作り以て漢德を頌せり。
【九六】坰野。野外なり。草昧は小暗き貌。
【九七】黝儵。茂盛の貌。
【九八】交讓。木の名。
【九九】蹲鴟。大芋なり。
【一〇〇】灌叢。羣生すること。
【一〇一】靑珠、黃環。寶玉なり。
【一〇二】碧砮。碧玉なり、以て鏃となすべし。芒消は石藥なり。
【一〇三】綠荑。香草なり。
【一〇四】丹椒。山椒の名。
【一〇五】蘪蕪。香草なり。中阿は山隈なり。布濩は繁密の貌。
【一〇六】風連。藥草の名。蘭皐は澤中の蘭を生ずる處。莚蔓は相連續する貌。
【一〇七】漸苞。長伸叢生すること。
【一〇八】葳蕤。花の鮮好なる貌。
【一〇九】神農。古の聖帝。百草を嘗めて始めて醫藥を敎ふ。
【一一〇】盧跗。扁鵲と兪跗、皆古の名醫。扁鵲は盧の人。
【一一一】癘痟。疫病及び頭痛。

物として産せざるはなく、玉石香草亦多し。是れ昔神農盧跗の嘗めて以て藥物となしし所の物にして、芳香は以て邪氣を除くべく、風味は以て疫癘を癒すに足る。

其封域の內には則ち（二二）原隰墳衍あり。通望彌ゝ博く、（二三）演するに（二四）潛沫を以てし、浸すに（二五）緜洛を以てし、溝洫脈のごとく散じ、（二六）疆里綺のごとく錯り、黍稷（二七）油油として秔稻（二八）莫莫たり。（二九）渠口を指して以て雲門となし、（三〇）滮池を灑ぎて陸澤となす。（三一）星畢の滂沲たると雖も、尙ほ未だ其膏液を齊しうせず。爾して乃ち邑居（三二）隱賑にして、江を夾み山に傍ひ、棟宇相望んで、桑梓接連り、家に（三三）鹽泉の井あり、戶に橘柚の園あり。

【大意】蜀中の域內には、高原丘陵あり。四方の望極めて廣く、潛沫緜洛の四水交流し、溝渠脈の如く、境界綺の如く、黍稷稻秔莫莫として繁茂す。溝渠を決して灌漑に供すれば、月の畢星に附き雨降りて滂沲たると雖も、その潤澤を齊うする能はず。隨つて都邑富盛にして、江を夾み山に傍

【二二】原隰。高くして平なるを原といひ、低くして平なるを隰といふ。墳衍は丘陵及び平澤なり。
【二三】演。水の潛行するを演といふ。
【二四】潛沫。二川の名。
【二五】緜洛。二川の名。
【二六】疆里。田地の境界。
【二七】油油。茂盛の貌。
【二八】莫莫。茂盛の貌。
【二九】渠口云云。水の渠より出でて田に灌ぐをいふ。
【三〇】滮池。蓄水池なり。此池より田に灑ぎ、陸地の潤澤となす。
【三一】星畢。星の名、凡そ月畢星に附けば雨ふるなり。滂沲は雨の降り注ぐ貌。沲は音ヤ、叶韻。
【三二】隱賑。富盛なること。
【三三】鹽泉。鹽を取る井。

ひ、屋瓦櫛比し、家家植うる所の桑梓相連り、戸戸に鹽泉あり橘柚あり。其園には則ち林檎枇杷橙柹梬楟あり。㯓桃函み列り、梅李羅生じ、百果(二四)甲宅し、色を異にし榮を同うし、朱櫻春熟し、素柰夏成る。若し乃ち(二五)大火流れて涼風厲しく、白露凝りて微霜結べば、紫梨津潤ひ榛栗罅發れ、蒲桃亂れ潰え石榴競ひ裂け、甘至りて自ら零ち、芬芳酷烈たり。其圃には則ち蒟蒻茱萸瓜疇芋區あり。甘蔗辛薑、陽に蓲り陰に敷き、日往きて(二六)菲薇たり、月來りて扶疎たり。土の麗く所に任せ、衆獻じて儲く。

【大意】園には林檎枇杷等の果實あり、梨あり葡萄あり石榴あり。春より秋に至り、漸次に成熟す。圃には蒟蒻茱萸甘蔗辛薑等あり。或は陽地に生じ或は陰地に生じ、寒暑に亙りて繁茂す。土地の適する所に從ひ、其所産を以て貢賦となす。

其(二七)沃瀛には則ち攢蔣叢蒲、綠菱紅蓮あり。雜ふるに(二八)蘊藻を以てし、糅ふるに(二九)蘋蘩を以てす。揔莖(三〇)柅柅として、裛葉(三一)蓁蓁たり。蕡實時に味あり、王公に羞む。其中には則ち(三二)鴻儔鵠侶鷐鷺鵜鶘あり。晨鳬旦に至り(三三)候雁蘆を銜

【二四】甲宅。宅は拆なり、花の開くこと。
【二五】大火。星の名。七月には此星西に流下するなり。
【二六】菲薇。扶疎。茂密の貌。
【二七】沃瀛。水澤なり。
【二八】蘊藻。水草の名。
【二九】蘋蘩。水草の名。蘩は音ヘン、叶韻。
【三〇】柅柅。茂盛の貌。
【三一】蓁蓁、茂盛の貌。
【三二】鴻儔。以下皆水鳥の名。
【三三】候雁。雁は氣候の寒暑を候ひて南北に移り住む、故に候雁といふ。雁飛ぶ時は蘆を銜みて矰繳の害を防ぐといふ。

み、(二三四)木落ちて南に翔り、氷泮けて北に徂き、雲に飛び水に宿し、淸渠に(二三五)哢吭す。其深きには則ち白黿命鼈あり。玄獺(二三六)上祭す。鱣鮪鱒魴鮷鱧鯊鱨あり。(二三七)差鱗次色、(二三八)錦質報章あり。濤に躍り瀨に戯れ、中流に相忘る。

【大意】水澤には菰蒲菱蓮の類相錯り、莖葉蓁蓁として其實食ふべく、亦以て王公に進むべし。水中には鴻雁の類あり、春秋に往來して雲に飛び水に宿し、首を擧げて鳴き、魚鼈亦少からず。獺亦此に魚を陳ねて祭る。魚鱗參差として其色相次ぎ、容質錦の如くにして文章あり。波間に戯游して各其性を得、江湖の間に相忘れて樂めり。

【二三四】木落。秋になりて木の葉の落つること。氷泮は春になること。
【二三五】哢吭。鳥の鳴くこと。
【二三六】上祭。禮記月令に孟春獺魚ヲ祭ルとあり。將に之を食はんとして先づ以て祭をなす
【二三七】差鱗。參差としてならぶ鱗。次色は樣樣なる色。
【二三八】錦質。錦の如き容質。報章は身の文章。
【二三九】二九。漢の武帝の元鼎三年、成都の十八門を立つ。
【二四〇】方軌。車軌を竝ぶること。
【二四一】爽塏。高燥の地。
【二四二】承明。廬の名。石渠門外に在り。
【二四三】陽城。閣の名。延は長也。
【二四四】觀榭。物見櫓の如き者。
【二四五】高軒。高き欄干。
【二四六】綺窓。彫畫して綺の如き窓。

是に於てか金城石郭、市の中區を兼ね、既に麗にして且つ崇し。實に成都と號す。(二三九)二九の通門を闢き、(二四〇)方軌の廣塗を畫し、新宮を(二四一)爽塏に營み、(二四二)承明に擬へて廬を起し、(二四三)陽城の延閣を結び、(二四四)觀榭を雲中に飛ばし、(二四五)高軒を開いて以て山に臨み、(二四六)綺窓を列ねて江を瞰る。內には則ち

(一四七)議殿爵堂、(一四八)武義虎威、(一四九)宣化の闥、(一五〇)崇禮の闈あり。華闕雙邈にして、重門洞開し、(一五一)金鋪交映して、(一五二)玉題相暉き、外には則ち(一五三)軌躅八達し、(一五四)里閈對出し、比屋甍を連ね、(一五五)千廡萬室あり。亦(一五六)甲第あり、衢に當り術に向ひ、(一五七)壇宇顯敞にして、高門(一五八)駟を納れ、庭には鐘磬を扣き、堂には琴瑟を撫づ。(一五九)葛にあらず(一六〇)姜にあらずんば、疇か能く是に(一六一)恤らん。

【大意】堅固なる城郭、城市の中央に聳え、美麗高大なり。之を成都城となす。ここに十八の通門を開き、大道を設け、高燥の地を擇んで新宮を營み、承明廬に擬へて大廬を作り、門閣臺榭を建て、山に臨んで大江を俯瞰すべし。城内には華闕重門光輝燦爛たり、城外には道路八達し里門相望み、瓦屋櫛比し、高邸大宅道を夾んで立ち、庭下には鐘磬を撃ち堂上には琴瑟を彈ず。其の諸葛亮姜維の如き大官の邸宅なるを知る。

【一四七】議殿爵堂。殿堂の名。
【一四八】武義虎威。門の名。
【一四九】宣化。闥の名。闥は宮中の小門。
【一五〇】崇禮。闈の名。闈は宮中の小門。
【一五一】金鋪。門上の飾、金を以て之を作る。
【一五二】玉題。椽上の飾、玉を以て之を作る。
【一五三】軌躅。車の迹なり。
【一五四】里閈。里門なり。
【一五五】千廡。廡はヒサシなり。
【一五六】甲第。大宅なり。
【一五七】壇宇。壇は堂なり。
【一五八】駟。四匹の馬。一車に四馬を駕す、之を駟といふ。
【一五九】葛。蜀の丞相、諸葛亮をいふ。
【一六〇】姜。蜀の大將軍、姜維をいふ。
【一六一】恤。居なり。

亞ぐに（一六二）少城を以てし其西に接き、市鄽の會する所、萬商の淵なり。（一六三）隧を列ぬること百重、肆を羅ぬること巨千、（一六四）賄貨山のごとく積り（一六五）纖麗星のごとく繁し。都人士女、（一六六）袨服靚粧し、（一六七）賈貿墆鬻（一六八）舛錯縱横し、異物詭譎八方より奇なり。布には（一六九）橦華あり、麪には（一七〇）桄榔あり、（一七一）邛杖節を大夏の邑に傳へ、（一七二）蒟醬味を番禺の郷に流す。輿輦雜沓し、冠帶混弁し、轂を累ね跡を疊み。（一七三）叛衍して相傾け、（一七四）諠譁鼎の沸くがごとく、則ち宇宙に（一七五）嘐聒たり。囂塵天に張り、則ち（一七六）曜靈を埃壒す。

【大意】都城に接して西に市場あり。商賈の淵叢にして、市道縱横に通じ、商家軒を竝べ、貨物山の如く、綺麗星の如し。士女服飾を凝らし、賣買する者織るが如く、橦華桄榔邛杖蒟醬等の名産あり。人馬往來甚だ繁く、其聲鼎の沸

【一六二】少城。小城なり、大城の西に在り。

【一六三】隧。市中の道。

【一六四】賄貨。貨財なり。

【一六五】纖麗。細好の品物。

【一六六】袨服靚粧。盛装して粉白を施すこと。

【一六七】賈貿。賈は賣なり、貿は易なり。墆は貯なり、鬻は販なり。

【一六八】舛錯。交錯なり。

【一六九】橦華。樹の名、其花柔毳、績みて布となすべし。

【一七〇】桄榔。樹の名、木中に屑あり、麪の如く食ふべし。

【一七一】邛杖。邛竹の杖、漢書張騫傳に臣大夏ニ在リシ時、邛竹杖蜀布ヲ見タリとあり。大夏は西域の國名。

【一七二】蒟醬。漢書南越傳に、唐蒙ヲシテ南越ニ諷曉セシム、蒙ニ食ハシムルニ蒟醬ヲ以テス、蒙從來スル所ヲ問フ、答ヘテ曰ク、西北牂牁江廣サ數里、番禺城下ニ出ヅトとあり。

【一七三】叛衍。漫衍なり。

【一七四】諠譁。かまびすしきこと。

【一七五】嘐聒。かまびすしきこと。

【一七六】曜靈。日なり。埃壒は塵を以て掩ふこと。

くが如く、塵埃天日を掩ふばかりなり。

（一七七）闤闠の裏。伎巧の家、百室（一七八）離房あり。機杼相和し。（一七九）貝錦斐成りて、色を江波に濯ぎ、（一八〇）黃潤筒を比べて（一八一）籝金にも過ぐる所なり。侈侈隆富にして（一八二）卓鄭名を埒くし、公に山川を擅にし、私庭に貨殖し、（一八三）鏹を藏むること巨萬にして、（一八四）鈲摫兼呈亦財を以て雄たり。（一八五）邊城に翕習す。（一八六）三蜀の豪、時に來り時に往き、交を都邑に養ひ、儔を結び黨に附き、（一八七）劇談戲論し、腕を扼し掌を抵ち、出れば則ち騎を連ね、歸るときは（一八八）百兩を從ふ。若し其舊俗は、終冬始めて春なれば、吉日良辰、高堂に置酒し、以て嘉賓に御む。（一八九）金罍中坐にして肴核四に陳り、觴するに（一九〇）清醥を以てし、鮮とするに紫鱗を以てし、（一九一）羽爵執り競ひ、絲竹乃ち

【一七七】闤闠。市門なり。
【一七八】離房。離れたる部屋。
【一七九】貝錦。蜀に產する錦の名、之を江水にて洒す時は更に色澤を增すといふ。
【一八〇】黃潤。筒中の細布なり。
【一八一】籝金。金入れの中の錢。
【一八二】卓鄭。漢書貨殖傳に蜀ノ卓氏臨邛ニ之キ、公ニ山川銅鐵ヲ擅ニシ、上ハ王者ノ利ヲ爭ヒ、下ハ齊人ノ業ヲ錮シ、富、僮八百人ニ至ル、程鄭モ亦冶鑄シ、富卓氏ニ埒シとあり。
【一八三】鏹。錢を貫くサシ。
【一八四】鈲摫。木を裁して器を作るを鈲といひ、帛を裂きて衣となすを摫といふ。
【一八五】邊城。臨邛は蜀の邊縣なる故かくいふ。翕習は威盛の貌。
【一八六】三蜀。蜀郡廣漢犍爲をいふ。
【一八七】劇談。烈しく論談すること。
【一八八】百兩。車百輛なり。
【一八九】金罍。金を以て飾りし酒樽。
【一九〇】清醥。清酒なり。
【一九一】羽爵。雀の形を成せる杯。

發し、(一九二)巴姬絃を彈じ、漢女節を擊ち。(一九三)西音を促柱に起し(一九四)江上の飄厲たるを歌ひ、長袖を紆ひて屢〻舞ひ、(一九五)翩躚躚として以て裔裔たり。樽を合せ席を促づけ、滿を引いて相罰し、今夕を樂飮し、一醉月を累ぬ。

【大意】市門の内には戶戶機織に勉め、蜀錦を織り成して之を江流に晒せば、色澤一入加はり其價萬金に抵る。されば民皆富裕にして特に卓王孫、程鄭の二氏は山川の利を獨占して巨萬の富を有し、家に木工縫手を置き、各其物を作らしめ、威勢を邊城に振ふ。又三蜀の豪雄時時來往し交道を結び黨與を成し、腕を扼し掌を抵ちて談論し、騎を連ね車を從へて來往す。冬去り春來るや、その舊俗により、吉日良辰を擇んで、宴を高堂に張り、賓客を會し、醇酒を酌み、佳肴に飽き、歌舞數月に亙るを常とす。

若し夫れ(一九六)王孫の屬、(一九七)郤公の倫、禽を外に從ひ、巷に居人なし。竝に(一九八)驥子に乘り、倶に(一九九)魚文を服し、(二〇〇)玄黃校を異にし、(二〇一)結駟繽紛たり。西のかた(二〇二)金隄を踰え、東のかた(二〇三)玉津を越え、

【一九二】巴姬。蜀の美女なり。
【一九三】西音。歌曲の名。促柱は急絃といふが如し。柱はコトヂなり。
【一九四】江上。歌曲の名。飄厲は歌聲なり。
【一九五】翩躚躚。ひらひらと舞ふ貌。裔裔も亦同じ。
【一九六】王孫。卓王孫なり。
【一九七】郤公。蜀の豪俠なり。
【一九八】驥子。良馬なり。
【一九九】魚文。矢を盛る器、箙也。
【二〇〇】玄黃。黑色及び黃色の馬。校は隊なり。
【二〇一】結駟。駟馬をならぶること。繽紛は衆多なり。
【二〇二】金隄。岷山都安縣の西に在り。成都の西に當る。
【二〇三】玉津。犍爲の東北に在り、成都の東に當る。

(二〇四)朔別晦期、日ならず旬ならず。(二〇五)蒙籠を躐り蹈み(二〇六)寥廓を渉躐し、鷹犬(二〇七)倏眒し、(二〇八)罻羅絡幕す。毛羣(二〇九)陸離として羽族(二一〇)紛泊し(二一一)翕響揮霍すれば網に林薄に中る。(二一二)麇麋を屠り(二一三)旌麾を剪り、(二一四)文蛇を帶にし(二一五)彫虎に跨る。志未だ騁せざるに、時晩れんと欲す。輕翼を追ひて絕遠に赴き、(二一六)彭門の闕に出で、九折の坂に馳せ、三峽の(二一七)崢嶸たるを經、(二一八)五屼の蹇滻たるを躡み、(二一九)鐵を食むの獸を戟にし、(二二〇)毒を噬むの鹿を射、(二二一)貙㺜を蔞草に梟ち、(二二二)言鳥を森木に彈じ、象齒を拔き犀角を戾らし、鳥は翮を鎩ぎ獸は足を廢て、殆りて(二二三)揭來し相與に第く(二二四)滇池に如き江洲に集り、(二二五)水客を試み輕舟を艤ひ、(二二六)江斐を娉して

【二〇四】朔別晦期。月の一日よりして月の三十日に至りて始めて歸る、一日一旬にあらざるをいふ。
【二〇五】蒙籠。草樹の茂れる處。
【二〇六】寥廓。山谷幽遠の處。
【二〇七】倏眒。疾速なり。
【二〇八】罻羅。鳥獸を捕ふる網。絡幕は張り設くること。
【二〇九】陸離。分散すること。
【二一〇】紛泊。飛び散ること。
【二一一】翕響揮霍。大聲を揚げて杖などを振り舞はすこと。
【二一二】麇麋。鹿の類なり。
【二一三】旌麾。獸の名。
【二一四】文蛇。蛇の一種。
【二一五】彫虎。猛虎なり、身に斑紋あり、故に彫といふ。
【二一六】彭門。岷山郡安縣に兩山あり、相對立すること闕の如し、號して彭門といふ。
【二一七】崢嶸。高峻の貌。
【二一八】五屼。山の名。蹇滻は詰曲なり。
【二一九】鐵を食む。貊は毛黑く膽白く熊に似て小、舌を以て鐵を舐むると須臾にして數十斤なり、建寧郡より出づ。
【二二〇】毒を噬む。神鹿あり兩頭にして毒草を食ふ、雲南郡より出づ。
【二二一】貙㺜。貙人なり。博物志に江漢ニ貙人アリ、能ク化シテ虎トナルとあり。蔞草は叢なり。
【二二二】言鳥。鸚鵡の類。
【二二三】揭來。去ること。
【二二四】滇池。池の名、建寧の界に在り。
【二二五】水客。舟子、船頭なり。
【二二六】江斐。蜀の神女なり、列仙傳に見ゆ。

神と遊び、翡翠を罨にし鱣鮋を釣り、高鵠を下し潛虯を出し、(三七)洞簫を吹き櫂謳を發し。(三八)鱏魚を感ぜしめ(三九)陽侯を動かし、騰波沸涌し珠貝汜浮し、雲漢の星を含んで洪流に光耀するが若し。將に(三〇)獠者を饗せんとし(三一)帟幕を張りて平原に會し、醪酤を酌み(三二)芳鮮を割き、(三三)飲御酣にして賓旅旋る。車馬雷のごとく駭き、(三四)轟轟闐闐として、風のごとく流れ雨のごとく散り、數百里の間に漫るが若し。

【大意】卓王孫、郤公の如き豪俠の輩、時に野外に狩すれば、人爭ひ出でて之を觀、巷に居人なきに至る。駿馬に乘り箙を負ひ、遙に金隄玉津を越え、月朔より晦に至りて始めて歸る。草澤山野を馳驅し、鷹犬疾く走り網羅縱横に張り、鳥獸を獲ること山の如し。狩獵已に倦めば、去つて或は滇池に至り、或は江洲に往き、舟子に命じて舟を艤せしめ、江神と水上に遊び、或は水魚を釣り或は鴻雁を射、洞簫を吹き櫂歌を歌へば、水魚出でて聽き、陽侯爲に感動し、水波起伏し珠貝浮沈し、星の天河の中に輝くが如し。狩獵既に終るや、衆を饗せんが爲に幔幕を張りて平原に會し、酒を酌み肉を割き、歡を盡して乃ち歸る。車馬の音百雷の轟くが如く、風の流れ雨の散ずるが如し。其衆想見すべきなり。

【三七】洞簫。尺八の如き笛。
【三八】鱏魚。魚の名、淮南子に瓠巴琴ヲ鼓スレバ鱏魚出デテ聽クとあり。
【三九】陽侯。波の神。
【三〇】獠者。獵卒なり。
【三一】帟幕。幕なり。
【三二】芳鮮。生肉なり。
【三三】飲御。飲食なり。賓旅は衆賓なり。
【三四】轟轟闐闐。車馬の聲なり。

斯れ蓋し宅土の安樂する所、觀聽の踊躍する所なり。焉んぞ獨り(二三五)三川のみ世の朝市たらん。若し乃ち(二三六)卓犖奇譎、倜儻已むことなく、一には神怪を經し、一には人理を緯し、遠くは則ち岷山の精、上りて(二三七)井絡となり、天帝期を運して昌なるを會し、(二三八)景福肹蠁して興作し、(二三九)碧は萇弘の血より出で、鳥は(二四〇)杜宇の魄より生り、妄に變化して常に非ず、嗟嚌昔に偉とせらる。近くは則ち(二四一)江漢炳靈にして、世其英を載せ、(二四二)蔚たること相如の若く(二四三)皭たること君平の若し。(二四四)王褒は暐曄として秀發し、(二四五)揚雄は章を含んで挺生し、幽思道德を絢にし、藻を摛べて(二四六)天庭に掞し、四海を考へて(二四七)雋となし、中葉に當りて名を擅にす。是の故に游談する者は以て譽となし、(二四八)造作する者は以て程となす。谷に臨んで塞となし、山に因つて障となすに至りては、峻岨長城を塍埒にし、豁險にして

【二三五】三川。河洛伊三川の地をいふ、東都洛陽を指す。張儀曰く名ヲ爭フ者ハ朝ニ於テシ、利ヲ爭フ者ハ市ニ於テス、今三川ハ周室天下ノ朝市ナリと。
【二三六】卓犖。高絶の貌。奇譎は奇異なり。倜儻は超越の貌。
【二三七】井絡。星の名。
【二三八】景福。大なる幸福。肹蠁は盛に興ること。
【二三九】碧云云。莊子に萇弘蜀ニ死シ其血ヲ藏スルコト三年、化シテ碧トナルとあり。
【二四〇】杜宇。人名、死して子規となるといふ。子規はホトトギス也。昔は音サク、叶韻。
【二四一】江漢。蜀にある川。
【二四二】蔚。茂盛の貌。相如は司馬相如なり、蜀の人にして漢代の大詩人たり。
【二四三】皭。清淨の貌。君平は嚴遵なり。成都の賣卜者なり。
【二四四】王褒。字は子淵、漢代の詩人なり。
【二四五】揚雄。字は子雲、漢代の文章家なり。
【二四六】天庭。天子の朝廷。
【二四七】雋。俊に同じ。
【二四八】造作。文章を作ること。

(二四九)巨防の若きを呑む。一人險を守れば萬夫も向ふなし。(二五〇)公孫は馬を躍らして帝と稱し、(二五一)劉宗は輦より下りて自ら王たり。此に由りて之を言へば、天下孰れか倚らん。故に(二五二)諸夏の富有を兼ぬと雖も、猶ほ未だ茲都の量りなきに若かざるなり。

【大意】蜀地の安樂にして觀聽の美に富めること上述の如し。豈に三川のみ獨り天下の市朝たらんや。更に奇偉卓犖の事を求めんか、神怪傑人輩出經緯するものの少しとなさず。遠くは岷山の靈上りて井絡となり、天帝此に於て慶を會し福を建てたるあり。萇弘死し其血化して碧となれるあり。杜宇の魄、化して子規となれるあり。是れ皆非常の變化にして昔時に歎美せられし所なり。(以上神怪)近くは江漢の秀靈なる、世傑人を生み、司馬相如の鬱茂、嚴君平の清淨、王褒の光華、揚雄の秀拔なるあり。或は幽遠の思よく道德を明にし、或は文藻を摛べて朝廷に輝かし、天下推して俊傑となし、漢代に於て美名を擅にす。是を以て議論家は以て譽となし、文士は以て規矩となす。(以上人理)且つ天然の要害を占め、一人險隘を守れば萬夫も之を破る能はず。されば公孫述劉備は此に據りて帝と稱せり。此に由りて之を觀れば、中夏の富有を以てすと雖も、猶ほ未だ此都の無量なるに如かざ

【二四九】巨防。大なる堤防。

【二五〇】公孫。公孫述なり、王莽の時蜀に據り自立して帝と稱す。

【二五一】劉宗。劉備を指す、蜀に據りて皇帝の位に卽く。備は漢の子孫なる故、宗といふ。

【二五二】諸夏。中國といふが如し。

るなりと。

卷の第三

賦　丙

京都　下

(一)吳都の賦

左太沖

(二)東吳王孫(三)囅然として咍ひて曰く、夫れ上(四)景宿を圖るは天文を辨ずる者なり。下物土を料るは地理を析つ者なり。古先帝の世、(五)八紘の洪緒を(六)曾覽し、六合を一にして(七)光宅し、(八)遐宇に翔集せり。(九)烏策篆素玉牒石記にも、烏んぞ(一〇)梁岷に陟方の館、行宮の基ありしを聞かんや。而るに吾子は蜀都の富、(一一)禹同の有を言ひ、其區域を偉とし其林藪を美とし、(一二)巴漢

【一】吳都。後漢の末、孫權建業に都して吳と號す。
【二】東吳王孫。卷二蜀都賦の二六を見よ。
【三】囅然。大笑する貌。
【四】景宿。列星なり。
【五】八紘。九州の外にある遠方の地。洪緒は大業といふが如し。
【六】曾覽。經覽といふが如し。
【七】光宅。光は大、宅は居なり、天下を一統すること。
【八】遐宇。遠方の地。
【九】烏策。烏迹の書。篆素は帛に篆書にて書きし記錄。共に古代の記錄をいふ。玉牒石記も亦同じ。
【一〇】梁岷。蜀の二山の名。陟方とは天子の巡狩をいふ。
【一一】禹同。蜀の二山の名。
【一二】巴漢。蜀の地名。

の阻を矜りては、則ち以て(二三)襲險の右なりとなし、(二四)蹲鴟の沃たるを徇りては、則ち以て世〻陽九を濟へりとなし、(二五)齷齪として算ふるは固に亦(二六)曲士の歎ずる所なり。(二七)旁魄して都邑を論ずれば、抑〻大人の壯觀とする所にあらざるなり。

【大意】東呉王孫、西蜀公子が盛に蜀都山川の險阻と、物産の富裕とを誇稱する（蜀都賦參照）を聞き、心に其說を非とし、大笑して曰く、夫れ天は文章を上に成し、地は條理を下に成す者なり。昔堯舜の世、嘗て此の八紘の大業を經覽し、六合を一統して、帝業を肇むるや、我が南方蒼梧會稽の遠地に巡狩せり。今古代の典籍を觀るに、絕えて蜀地に巡幸の事ありしを見ざるにあらずや。且つ足下は蜀都の富饒を美とし、其險阻を誇り、蹲鴟よく人の饑厄を救へるを稱し、區區として誇稱するも、是れ蜀地小人の歎美する所ならんも、天下を通じて大觀すれば、決して偉とするに足らざるなり。

何となれば土壤は以て(二八)攝生するに足らず、山川は以て(二九)周衞するに足らず。(三〇)公孫は之に國して破れ、(三一)諸葛は之に家して滅びぬ。茲れ乃ち喪亂の丘墟、顚覆の軌轍なり。安んぞ以て王公に儷ぎて

【二三】襲險。重險なり。
【二四】蹲鴟。大芋なり。
【二五】齷齪。區區といふが如し、小事に拘泥すること。
【二六】曲士。局量の狹き人。
【二七】旁魄。混同なり。
【二八】攝生。生命を養ふこと。
【二九】周衞。防衞といふが如し。
【三〇】公孫。公孫述なり、後漢の末、蜀に據りて帝と稱せり。
【三一】諸葛。蜀の丞相、諸葛亮なり。

(二二)風烈を著すべけんや。其積礫に狃ひて玉淵を窺はざる者は、未だ(二三)驪龍の蟠る所を知らざるなり。其儆邑に習ひて(二四)上邦を覩ざる者は、未だ英雄の躔る所を知らざるなり。

【大意】 何を以て此言を爲すか、夫れ蜀都の地たる、卑濕にして以て生を養ふに足らず、現にかの其山川は以て防衞とするに足らず、公孫述は此に國を建てて亡び、諸葛亮は此に相として敗れしにあらずや。されば蜀都は喪亂の丘墟にして滅亡の遺跡のみ。王公に次ぎて功業を著すに足らざるなり。抑〻淺近に習ひ深淵を窺はざる者は、驪龍を知るに足らず、小邑に習ひ大國の事を觀ざる者は、英雄の行歷を知るに足らず。足下の如きは卽ち此類のみ。子獨り未だ大吳の巨麗を聞かずや。且つ(二五)有吳の國を開くや、(二六)太伯より造まり、(二七)延陵に宣ぶ。蓋し(二八)端委の彰る所、(二九)高節の興る所、(三〇)至德を建てて以て洪業を創め、世得て顯稱するなし。

(二二) 風烈。功業といふが如し。
(二三) 驪龍。龍の名。莊子に千金ノ珠ハ九重ノ淵驪龍ノ頷下ニアリとあり。
(二四) 上邦。上國といふが如し。
(二五) 有吳。有の字は句調の爲に添へたるのみ、意義あるにあらず。
(二六) 太伯。周の太王の子、位を弟季歷に讓り荊蠻に往き吳王となる。
(二七) 延陵。延陵季子をいふ、吳の公子なり、其賢なるを以て將に之を立てんとす、季子讓りて受けず、後延陵に封ぜらる。
(二八) 端委。禮服の垂るる貌。
(二九) 高節。高き節義。この高節と下文の克讓とは延陵季子に就いて言ふなり。
(三〇) 至德。大德といふ如し。論語に太伯ハ至德ト謂フベシとあり。この至德と上文の端委とは太伯に就いて言ふなり。

(三一)克讓に由りて以て風を立て、(三二)脫躧を千乘に輕んず。(三三)率土に若つて都を論ずれば、則ち列國の(三四)觖望する所にあらざるなり。故に其(三五)經略、上(三六)星紀に當り、土を拓き疆を畫り、(三七)卓犖として兼幷せ、(三八)于越を包括し、(三九)蠻荊を跨躡み、(四〇)婺女其曜を寄せ(四一)翼軫其精を寓せ、(四二)衡嶽を指して以て野を鎭め、(四三)龍川を目て坰を帶ぶ。

【大意】足下未だ我が吳の華麗を聞かざるか。請ふ足下の爲に之を陳べん。我が吳の國を開くや、太伯端委して以て國を治め、至德を以て大業を建つ。亦稱美に辭なき所なり。施いて延陵季子に及び、侯位を棄つること弊履の如く、禮讓を存して高節を全うし、以て一國の美風を成す。天下何れの國か復た之を遺憾とするものあらんや。されば其領域遠く南越荊蠻に跨り、婺女(越)翼軫(楚)並に我が吳の兼併する所となり、衡嶽(楚に在り)を以て鎭となし、龍川(南海に在り)を以て郊野となす。

【三一】克讓。よく位を讓ること。
【三二】脫躧。履をぬぐ如く、惜しげもなく棄つること。千乘は諸侯の位をいふ。
【三三】率土。天下をいふ。
【三四】觖望。望む所に滿たず、うらみに思ふこと。
【三五】經略。土地を經營分界すること。
【三六】星紀。斗牛、星の名。吳の分野にあり。
【三七】卓犖。高絕なること。
【三八】于越。于は發語の聲、越國をいふ。
【三九】蠻荊。南方の蠻國の名。
【四〇】婺女。星の名。越の分野にあり。
【四一】翼軫。星の名。楚の分野にあり。
【四二】衡嶽。江南に在る山の名。周禮に正南ヲ荊州トイフ、其鎭ハ衡山とあり。
【四三】龍川。川の名。郊外を坰といふ。

爾して其(四四)山澤は則ち(四五)嵬嶷嶢屼(四六)㠑溟鬱岪、(四七)潰渱泮汗(四八)滇㴐淼漫、或は川を涌かして(四九)瀆を開き、或は江を呑んで(五〇)漢を納れ、(五一)磈磈礧礧、(五二)滮滮涆涆、數州の間に(五三)嶔崟として、天下の半に灌注し、百川派別し、海に歸して會し、淸を控き濁を引き、濤を混じ瀬を幷せ、(五四)濆薄沸騰し、(五五)寂寥として長く邁き、(五六)濞焉として洶洶、(五七)隱焉として礚礚たり。

(五八)大荒の中より出で、東極の外に行き、(五九)扶桑の中林を經、(六〇)暘谷の滂沛たるを包ね、潮波汨として起り、萬里を廻復し、(六一)歊霧湰渤し、雲蒸昏昧なり。(六二)泓澄奫潫(六三)頹溶沆瀁として、其深さを測るなく、其廣さを究むるなし。

(六四)潭湉漠として涯なく、(六五)有流を總べて長たり。瓌異の叢育する所、(六六)鱗甲の集往する所なり。

【四四】山澤。山の大なる者は衡嶽・澤の大なる者は彭蠡。

【四五】嵬嶷。以下皆山の高險なる貌。

【四六】㠑溟鬱岪。山氣暗昧の狀。

【四七】潰渱泮汗。直望涯なき貌。

【四八】滇㴐淼漫。山水濶遠の貌。

【四九】瀆。大川なり。

【五〇】漢。漢水、川の名。

【五一】磈磈礧礧。石の山中に在る貌。

【五二】滮滮涆涆。水の流るる貌。

【五三】嶔崟。山の深險連延の貌。

【五四】濆薄。水相激盪すること。

【五五】寂寥。聲なきこと。廣大の處に流れ入りて聲なきなり。

【五六】濞焉。水の暴に至る聲。洶洶は水の聲なり。

【五七】隱焉礚礚。遠く聞ゆる聲。

【五八】大荒。極遠の地なり。

【五九】扶桑。日出の處。

【六〇】暘谷。日出の處。滂沛は水多き貌。

【六一】歊霧。吐出す霧。湰渤は霧の湧出す貌。

【六二】泓澄。深きこと。奫潫は廻る貌。

【六三】頹溶沆瀁。水の廣く深き貌。

【六四】潭湉漠。安流の貌。

【六五】有流。百川といふが如し。

【六六】鱗甲。魚介なり。

り。

【大意】而して其地勢たるや、山岳重疊して天を掩ひ、百川滔滔として奔流して海に注ぎ、其深さを測るなく、其廣さを知るなし。隨つて奇異の物多く此に育し、魚介の產また少しとなさず。

是に於てか長鯨航を吞み、(六七)脩鯢浪を吐き、躍龍騰蛇蛟鯔(六八)琵琶王鮪鯸鮐鮣龜鱕鯌烏賊(六九)擁劒黿鼉鯖鰐あり、其中に(七〇)涵泳し、葺鱗鏤甲(七一)詭類舛錯し、泝洄して流に順ひ、(七二)噞喁して沈浮し、鳥は則ち鵾雞鸀鳿鸘鵠鷺鴻あり、(七三)鶢鶋風を避け(七四)候鴈江に造り、溪鷘鷛鸈鶄鶴鶖鶬、鸛鷗鷁鸕あり、其上に(七五)泛濫し、(七六)湛淡たる羽儀、波に隨つて(七七)參差たり。翮を理め翰を整へ、(七八)容與として自ら玩び、蔓藻を彫啄し、漪瀾に(七九)刷盪し、魚鳥(八〇)聱耴し萬物蠢生し、(八一)芒芒黖黖(八二)慌罔奄欻、神化翕忽として(八三)幽を函

【六七】脩鯢。脩は長なり。
【六八】琵琶。魚の名。
【六九】擁劒。蟹の類なり。
【七〇】涵泳。潜行すること。
【七一】詭類。奇異の物なり、舛錯は入り交ること。
【七二】噞喁。魚などの口を水上に出すこと。
【七三】鶢鶋。海鳥の名。左傳に爰居魯ノ東門ノ外ニ止ルコト三日、臧文仲國人ナシテ之ヲ祭ラシムとあり。蓋し風を魯門に避けしなり。
【七四】候鴈。鴈は氣候の寒暖によりて南北に移り棲む故、候鴈といふ。
【七五】泛濫。水上に浮游すること。
【七六】湛淡。迅疾の貌。
【七七】參差。一樣ならざる貌。
【七八】容與。從容自得の貌。
【七九】刷盪。羽翅を整ふること。
【八〇】聱耴。衆聲の貌。
【八一】芒芒黖黖。氣明ならざる貌。
【八二】慌罔。暗き貌。奄欻は變化疾速の貌。翕忽も亦同じ。
【八三】幽を云云。水中に魚を含み、珠玉を養ふこと。

し明を育ひ、(八四)性を窮め形を極め、盈虚自然なり。蚌蛤の(八五)珠胎、月と虧全し、巨鼇(八六)贔屓して、首に(八七)靈山を冠し、(八八)大鵬繽翻して、翼(八九)垂天の若く、汪流に振盪し、雷のごとく重淵に抃ち、般に宇宙を動かす。胡ぞ勝げて原ぬべけんや。

【大意】長鯨の舟を呑むあり、巨鯢の浪を吐くあり、躍龍あり騰蛇あり、鯔鯸鱕烏賊黿鼉鰐等ありて水中に游泳し、其鱗は葺飾せるが如く、其甲は彫鏤せるが如く、詭怪異類互に相往來し、或は流に泝り或は流に順ふ。鳥には鶤雞鸐鳿鷺鴻等あり、又鶢鶋來りて風を避け、候鴈江流に至り、其他の水禽亦水上に浮游し、或は翼を整へ或は水藻を啄み、各從容自得す。魚鳥相呼び、萬物育生し、變化百出して、魚を含み珠を出し、各其性を遂げて其大を極め、蚌中の珠胎は月と共に虧盈し、巨鼇は頭に蓬萊山を戴き、大鵬の翼は垂天の雲の如く、深淵に振盪すれば、其音雷の如く、宇宙を震動す。一一擧げ盡すべからず。

島嶼は(九〇)緜邈として洲渚は(九一)憑隆たり。曠瞻れば(九二)迢遞として、迥眺

【八四】性を云云。其物の本性を遂げしめ、其形をして極めて大ならしむること。
【八五】珠胎。珠の蛤中に在るもの。恰も懷姙の如し、故に胎といふ。珠胎は月滿つれば珠全く、月虧くれば珠缺くといふ。
【八六】贔屓。力を用ふる貌。
【八七】靈山。海中の蓬萊山なり。
【八八】大鵬。大鳥の名、莊子に出づ。繽翻は飛ぶ貌。
【八九】垂天。垂天の雲。莊子に鵬怒ツテ飛ブトキハ翼垂天ノ雲ノ如シとあり。
【九〇】緜邈。遠きこと。
【九一】憑隆。高大の貌。
【九二】迢遞。遙かなる貌。

むれば（九三）冥蒙たり。珍怪麗きて（九四）奇隙充ち、徑路絶えて風雲通じ、（九五）洪桃屈盤り（九六）丹桂灌叢り、（九七）瓊枝は莖を抗げて蘂を敷き、珊瑚は幽茂して玲瓏たり。增岡重阻し（九八）列眞の宇あり。玉堂（九九）霤を對し石室相距り、（一〇〇）藹藹たる翠幄（一〇一）嫋嫋たる素女あり。（一〇二）江婓是に於て往來し、（一〇三）海童是に於て宴語す。斯れ寔に（一〇四）神妙の響象なり。羌得て（一〇五）覼縷し難し。

【大意】島嶼は遙遠にして洲渚は高大なり。珍怪奇物又其上に生じ、人跡絶えて風雲交通す。大桃樹蟠屈し丹桂樹叢生し、玉樹あり珊瑚あり、玲瓏透徹す。高岡の上には神仙の宮あり。玉堂石室相對して聳え、翠帳の中に嫋嫋たる神女あり。江神ここに往來し海神ここに歡晤す。斯れ實に神仙微妙の表象にして一一其次第を陳べ盡し難し。

爾して乃ち地勢（一〇六）坱圠、卉木（一〇七）䖃蔓、藪に遭ひて圃となし、林に値ひて苑となし、異荂（一〇八）蓲蘛

【九三】冥蒙。暗き貌。
【九四】奇隙。奇異なる物。
【九五】洪桃。水經に東海ノ中ニ山アリ、名ケテ度索トイフ、上ニ大桃アリ、屈盤三千里とあり。
【九六】丹桂。木の名。
【九七】瓊枝。玉樹といふが如し。
【九八】列眞。列仙といふが如し、多くの仙人。
【九九】霤。あまだれを受くるもの。
【一〇〇】藹藹。繁き貌。
【一〇一】嫋嫋。柔美の貌。素女は神女なり。
【一〇二】江婓。神女なり。
【一〇三】海童。海神の童。
【一〇四】神妙。仙道微妙の事。
【一〇五】覼縷。一一數へ立つること。
【一〇六】坱圠。高低ありて平ならざる貌。
【一〇七】䖃蔓。盛長すること。
【一〇八】蓲蘛。繁ること。

し、夏は曄き冬は蒨なり。(二〇九)方志の辯ずる所、(二一〇)中州の羨む所なり。草は則ち(二一一)藿蒳豆蔻薑彙一にあらず。(二一二)江離の屬、海苔の類、(二一三)綸組紫絳、食葛香茅、石帆水松、東風扶留あり。皐澤に(二一四)布濩し、陵丘に(二一五)蟬聯し、山嶽の岊に(二一六)夤緣し、江海の流に(二一七)冪歷し、白蔕を扤し朱蕤を銜み、鬱として(二一八)蓊茂し、曄として(二一九)菲菲たり。光色(二二〇)炫晃として芬馥(二二一)肹蠁し、(二二二)職貢其包匭を納れ、(二二三)離騷其宿莽を詠ず。木は則ち(二二四)楓柙豫章、栟櫚枸榔、緜杬杶櫨、文欀楨橿、平仲、君遷松梓、古度楠榴の木、相思の樹あり。宗高岡に生じ族幽阜に茂り、本を擢んづること千尋にして、蔭を垂ること萬畝なり。攢柯挐莖、重葩殗葉(二二五)輪菌として虯蟠し、(二二六)埔壜として鱗接し、榮色雜糅し(二二七)綢繆縟繡し、宵露(二二八)霮䨴し、旭日(二二九)晻暟

【二〇九】方志。四方の土產を記錄せる書。
【二一〇】中州。中國といふが如し。
【二一一】藿蒳。ともに香草の名。以下皆野菜の名。
【二一二】江離。香草の名。海苔は海草の名。
【二一三】綸組。以下皆水草の名。
【二一四】布濩。草衆密の貌。
【二一五】蟬聯。續きて絕えざるをいふ。
【二一六】夤緣。緣り沿ひて生ずること。
【二一七】冪歷。掩ふこと。
【二一八】蓊茂。茂ること。
【二一九】菲菲。花の美しき貌。
【二二〇】炫晃。ひかりかがやく貌。
【二二一】肹蠁。香氣の分散するを
【二二二】職貢。地方より納むる貢物。包は裹、匭は結なり、貢物の包なり。
【二二三】離騷。楚の屈原の作りし詩篇の名。宿莽とは草の冬生じて枯れざるをいふ。離騷に夕ニ洲ノ宿莽ヲ攬ルとあり。
【二二四】楓柙。以下皆木の名。
【二二五】輪菌。屈曲の貌。
【二二六】埔壜。相重なる貌。
【二二七】綢繆。繁密の貌。縟繡は美しく繡の如く入り交ること。
【二二八】霮䨴。露の重き貌。
【二二九】晻暟。昏暗の貌。

し、風と(一三〇)飇颺し、(一三一)颮瀏颼飀として(一三二)鳴條律暢び、飛音響亮し。蓋し(一三三)琴筑幷せ奏し(一三四)笙竽倶に唱ふるに象たり。

【大意】其地勢或は高く或は低く、草木其間に蔓延す。故に藪草に逢へば圃となし、林木に値へば苑となし、皆天地の自然を利用して、復た人工を假らず。而して異花奇草夏榮えて冬凋まず。是れ皆地誌の明記する所にして、中國の共に羨む所なり。草には藿蒳薑彙あり、其類一にあらず。江離海苔等の水草亦ここに產し、水澤丘陵の間に繁茂し、白蔕を搖かし朱花を垂れ、光彩爛然として、香氣馥郁たり。之を包裹して天子に貢し、屈原之を美して離騷に詠ず。木には楓枰豫章栟櫚等あり。其種類また少からず。或は高岡に生じ或は幽阜に生じ、高く聳ゆること千尋、蔭を垂るること萬畝、花葉重疊して以て相掩ひ、枝幹屈曲して龍の蟠るが如く、其重ること魚鱗の如く、花彩繁密にして繡の如く、夜は重露を含み、朝は旭日に映じ、風に搖動して其聲音樂の如し。

其上には則ち猿父哀吟し(一三五)貚子長嘯するあり、(一三六)狖鼯猓然あり。(一三七)騰趠飛超し、爭縣接垂し、遠

【一三〇】飇颺。風に搖ぐこと。
【一三一】颮瀏颼飀。風の聲なり。
【一三二】鳴條。風に鳴る枝。律は音律なり。
【一三三】琴筑。ともに樂器の名。
【一三四】笙竽。ともに樂器の名。
【一三五】貚子。獸の名。
【一三六】狖鼯猓然。皆猿の類なり。
【一三七】騰趠。身輕に飛ぶこと。

枝に競游し。（一三八）驚透沸亂し（一三九）牢落翬散す。其下には則ち梟羊麞狼、猰貐貙象、（一四〇）於菟の族、犀兕の黨あり、鉤爪鋸牙自ら（一四一）鋒穎を成し、精は曜星の若く聲は雷霆の若し。名は（一四二）山經に載せられ形は（一四三）夏鼎に鏤らる。其竹は則ち（一四四）篔簹林箊、桂箭射筒あり。（一四五）柚梧篁あり、篻簩叢あり。（一四六）苞筍節を抽んで（一四七）往往に縈り結び、綠葉翠莖、霜を冒し雪を停め、（一四八）橚矗森萃、（一四九）蓊茸蕭瑟、（一五〇）檀欒嬋娟として、玉のごとく潤ひ碧のごとく鮮なり。（一五一）梢雲も以て踰ゆるなく（一五二）嶰谷も連る能はず。（一五三）鸑鷟其實を食ひ、鵷雛其間に擾る。其果は則ち丹橘餘甘、荔枝の林あり、檳榔柯なく椰葉陰なし。龍眼橄欖あり。棎榴霜を禦ぎ、根を（一五四）比景の陰に結び（一五五）衡山の陽に列り挺んで、素花斐しく丹秀芳しく、青壁に臨んで紫房を係け。（一五六）鷓鴣南に翥びて中に留り、孔雀綷羽ありて翺翔し。山雞歸り飛んで來

【一三八】驚透。人に驚くこと。沸亂は逃げ去ること。
【一三九】牢落。稀疎なり。翬散は雉の飛散するが如きなり。
【一四〇】於菟。虎なり。
【一四一】鋒穎。ほこさき。
【一四二】山經。山海經なり、山海の奇物を記載せる書。
【一四三】夏鼎。夏王の鑄たる鼎。左傳に昔夏ノ方ニ徳アリシトキ、遠方物ヲ圖シ、金ヲ九牧ニ貢セシメ、鼎ヲ鑄テ物ヲ象ルとあり。
【一四四】篔簹。以下皆竹の名。
【一四五】柚梧、篻簩。竹の名。
【一四六】苞筍。冬筍なり。
【一四七】往往。處處なり。
【一四八】橚矗。深長の貌。森萃は聚り生ずること。
【一四九】蓊茸。茂盛の貌。蕭瑟は風の聲なり。
【一五〇】檀欒嬋娟。美なる貌。
【一五一】梢雲。高き雲。
【一五二】嶰谷。崑崙山の北谷なり、黃帝の時伶倫其竹を取りて音律を定む。
【一五三】鸑鷟、鵷雛。皆鳳凰の類の鳥なり。竹の實にあらざれば食はずといふ。
【一五四】比景。國の名。
【一五五】衡山。山の名。
【一五六】鷓鴣。鳥の名。

り棲み、翡翠巣を列ねて以て重行る。

【大意】林木の上には、猿猴哀吟し、爭つて木に接り枝に懸りて羣り遊ぶ。忽ち人に遇へば則ち驚亂して沸くが如く、雉の驚き散じて羣を失ふが如し。其下には象犀虎兕等の猛獸あり。其爪は鉤戟の如く、其牙は刀鋸の如く、其目は星の如く其聲は雷の如し。其名は山經に記載せられ、其形は夏鼎に鏤刻せらる。竹の種類亦一ならず、處處に叢林を成し、綠葉翠莖霜を冒し雪を拂ひ、亭亭として美好なり。其色碧玉の鮮潤なるが如く、梢雲の高さも踰ゆる能はず、嶰谷も以て比するに足らず。鳳鵷ここに棲みて其實を食ひ、身を終るまで去らず。果實には丹橘餘甘、荔枝檳榔、龍眼肉等あり。霜を禦ぎて冬熟し、比景の北、衡山の南に竝び立てり。

其琛賂は則ち（一五七）琨瑤の阜、（一五八）銅鍇の垠、（一五九）火齊の寶、（一六〇）駭雞の珍あり。（一六一）赬丹明璣、金華銀樸、紫貝流黃、縹碧素玉あり。（一六二）隱賑崴裹として（一六三）幽屛に雜插し、精曜潛穎ありて山谷に（一六四）硩陊し、碕岸之が爲に枯れず。林木之が爲に（一六五）潤黷し、（一六六）隋侯是に於て其夜光を鄙み、宋王是に於て（一六七）其結綠を陋と

【一五七】琨瑤。美石なり。
【一五八】銅鍇。金屬の名。
【一五九】火齊。雲母の如き礦物。
【一六〇】駭雞。犀角なり。
【一六一】赬丹。以下皆寶玉の類なり。
【一六二】隱賑。多きをいふ。崴裹は排積の貌。
【一六三】幽屛。隱僻の地をいふ。
【一六四】硩陊。擿ち落つること。
【一六五】潤黷。うろほふこと。
【一六六】隋侯。隋國の侯、夜光の珠の所有者。
【一六七】結綠。宋王の有せし玉の名。

す。其荒阪の譎詭には、則ち(一六八)龍穴ありて內に蒸し、雲雨の儲ふる所なり。(一六九)陵鯉獸の若く、浮石桴の若く、雙べるは則ち比目、片なるは則ち(一七〇)王餘、(一七一)窮陸に木を飮み、極り沈んで水に居り、(一七二)泉室に潛み織りて綃を卷き、(一七三)淵客慷慨して珠に泣き、(一七四)北戶を開いて以て日に向ひ、(一七五)南冥を(一七六)幽都に齊うす。

【大意】寶石類には琨瑤を產する阜あり。銅錯を產する處あり。火齊、犀角等の珍寶あり。其他頳丹明璣等の金玉、隱僻の地に雜生し、光彩山谷を照し、岸草之が爲に枯れず、林木之が爲に潤ふ。(荀子曰く、玉、山に在れば木潤ひ、淵、珠を生ずれば崖枯れずと。)隋侯の夜光、宋王の結綠も鄙陋にして貴ぶに足らざるなり、荒遠僻阪の地、亦怪異少からず。新平縣に龍穴あり、雲氣其內に蒸して、遂に雨を降らし、

【一六八】龍穴。湘東の新平縣に龍穴あり、穴中に黑土あり、天旱すれば人人水を以て此土を沾せば、則ち暴雨之に應ず。

【一六九】陵鯉。四足あり形獺の如く、鱗甲は鯉に似たり。土穴の中に居る。性好んで蟻を食ふ。

【一七〇】王餘。魚の名、其身半なり、俗に云く、越王魚を鱠にし未だ盡さず。因つて其半を以て之を棄つ、魚となり遂に其一面なし、故に王餘と名づくと。

【一七一】窮陸。高岡なり。

【一七二】泉室。水底の家室。

【一七三】淵客。鮫人なり、水底に居る。俗傳に鮫人水中より出で嘗て人家に寄寓す、日を積んで綃を賣る、去るに臨み器を索め、泣いて珠を出し盤に滿つ、以て主人に與ふといふ。

【一七四】北戶。南荒の國の名、爾雅の疏に北戶トハ卽チ日南郡是レナリとあり。日南の人は北戶を開いて以て明に就く、則ち南を以て幽都となす、亦北人の北を見るが如し。

【一七五】南冥。南方の海。

【一七六】幽都。北方といふが如し。書經の堯典に朔方ニ宅ヲシメ、幽都トイフとあり。

陵鯉あり、其形獸の如く、浮石は桴の如く、比目は雙行し、王餘は半面なり。高陸に住み、木を斬りて其汁を飲む者あり。水中に居り、泉室に綃を織り、慷慨して珠涙を流す鮫人あり。また南方に日南郡あり。其土人は南を以て北となす。

是れ皆奇異の甚しきものと謂ふべし。

其四野には則ち（一七七）畛畷無數にして（一七八）膏腴兼倍し、原隰品を殊にし（一七九）窊隆等を異にし、（一八〇）象耕し鳥耘ること、此より與り、穡秀で（一八一）菰穗ある、是に於てか在り。海を煮て鹽となし山に採りて（一八二）錢を鑄、國は（一八三）再熟の稻を稅し、鄕は（一八四）八蠶の緜を貢す。徒に其（一八五）郊隧の內奧、都邑の綱紀を觀れば、（一八六）霸王の根柢する所、開國の基址する所、（一八七）郛郭周匝し、重城隅を結び、通門二八にして水道陸衢あり。（一八八）經始の用て千祀を累ぬる所以なり。（一八九）紫宮に憲りて以て室を營み、廣庭の漫漫たるを廓にし、寒暑遂宇

【一七七】畛畷。田間の小道。

【一七八】膏腴。肥えたる土地。兼倍とは他の地方に比べて二倍の收穫あること。

【一七九】窊隆。低き土地と高き土地。

【一八〇】象耕し。越絕書に舜蒼梧ニ死ス、象之ガ爲ニ耕ス、禹會稽ニ葬ル、鳥之ガ爲ニ耘ルとあり。

【一八一】菰。草の名、其實食ふべし。

【一八二】錢を鑄。史記に吳ニ豫章郡ノ銅山アリ。吳王濞天下ノ亡命者ヲ招致シ、盜ミ錢ヲ鑄、海ヲ煮テ鹽トナシ、國用富饒ナリとあり。

【一八三】再熟。一年に二回成熟すること。

【一八四】八蠶。一年に八回蠶の成育すること。

【一八五】郊隧。郭外を郊といひ、郊外を隧といふ。

【一八六】霸王。吳王夫差諸侯に霸たるをいふ。

【一八七】郛郭。外郭なり。

【一八八】經始。經營し始むること。

【一八九】紫宮。天の紫微宮なり。

に隔閡し、虹蜺（一九〇）雲館に廻帶し、（一九一）跨跱して萬里に（一九二）煥炳する所以なり。（一九三）姑蘇の高臺を造り、四遠に臨んで特に建て、朝夕の（一九四）瀦池を帶び、長洲の茂苑を佩び、（一九五）東山の府を窺へば、則ち瓌寶日に溢れ、（一九六）海陵の倉を觀れば、則ち（一九七）紅粟流衍す。

【大意】四方の原野を見れば、阡陌多くして數ふべからず。肥沃の地、其收穫他國に倍し、土地の高低に隨つて産する所各品類を異にす。かの舜死して象耕し、禹葬りて鳥耘りしは、皆此地にありし事にして、麥秀で菰に穗の出でしも、亦此地に在り。海水を煮て鹽となし、山の銅を取りて錢を鑄、稻は再び稔り蠶は八たび育す。飜つて郊内都邑の制を觀れば、霸王の根本、開國の基礎にして、外郭四周して重城相對し、十六の城門を設け、水路あり陸路あり以て此門に通ず。これ都邑を經營して後遂に千年に傳りし所以なり。宮室の制は天の紫微宮に象り廣庭之を繞り、冬は則ち寒氣隔りて入らず、夏は則ち熱氣閉ぢて來らず。雲館至高にして、虹霓の氣傍を繞り、宮室の光四方に赫赫たり。姑蘇臺高く聳えて四方を望むべく、側に朝夕池あり、長洲の茂苑あり。東山の府には寶玉日に溢れ、海陵の倉には米粟紅腐して滿溢る。

【一九〇】雲館。館の名。
【一九一】跨跱。特立すること。
【一九二】煥炳。光りかがやくこと。
【一九三】姑蘇。呉の臺の名。
【一九四】瀦池。呉に朝夕池あり、潮水朝に盈ち夕に虚し、因つて名づく。
【一九五】東山。呉の東山に寶玉多く府庫の如し。
【一九六】海陵。倉の名。
【一九七】紅粟。紅腐せる米穀。流衍は滿ち溢ること。

(一九八)寝廟を(一九九)武昌に起し、離宮を建業に作り、(二〇〇)闔閭の營む所を闢き、夫差の遺法を采り、(二〇一)神龍の華殿を抗げ、(二〇二)榮楯の捷獵たるを施し、(二〇三)臨海の崔嵬たるを崇うし、(二〇四)赤烏の韡曄たるを飾り、東西(二〇五)膠葛として、南北(二〇六)峥嶸たり。(二〇七)房櫳櫕を對し連閣相經り、(二〇八)閽闥譎詭にして異に奇名を出し、左をば彎崎と稱し右をば臨硎と號す。(二〇九)雕欒鏤楶あり、(二一〇)青瑣丹楹あり、圖くに雲氣を以てし、畫くに(二一一)仙靈を以てす。茲宅の夸麗と雖も、曾て未だ以て少しく寧んずるに足らず。屋を(二一二)傾宮に比べんことを思ひ、畢く瑤を結びて瓊を構ふ。(二一三)高闈閌あり、洞門軌を方べ、朱闕雙び立ち(二一四)馳道砥の如く、樹うるに青槐を以てし、亙すに(二一五)淥水を以てし。玄蔭(二一六)耽耽として清流(二一七)亹亹たり。(二一八)列寺七里にして、棟を陽路に俠み、(二一九)屯營櫛のごと

【一九八】寝廟。宗廟なり。
【一九九】武昌。地名。呉前には武昌に都し後には建業に都す。
【二〇〇】闔閭、夫差。呉王の名。
【二〇一】神龍。建業の正殿の名。
【二〇二】榮楯。飾りたる欄干。捷獵は列次の貌。
【二〇三】臨海。宮殿の名。崔嵬は高大の貌。
【二〇四】赤烏。宮殿の名。韡曄は光盛の貌。
【二〇五】膠葛。長遠の貌。
【二〇六】峥嶸。峻險の貌。
【二〇七】房櫳。部屋の大窓。
【二〇八】閽闥。小門なり。譎詭は奇異なること。
【二〇九】雕欒鏤楶。彫刻せるますがた。
【二一〇】青瑣。戸に刻みて連瑣の模樣を作り青漆にて塗るをいふ。丹楹は朱塗の圓柱。
【二一一】仙靈。神仙靈奇の物。
【二一二】傾宮。桀王の作りし宮の名。
【二一三】高闈。闈は宮中の門なり。閌は限なり。
【二一四】馳道。天子の御成道をいふ。
【二一五】淥水。綠水なり。
【二一六】耽耽。蔭深き貌。
【二一七】亹亹。水の徐に流るる貌。
【二一八】列寺。ならび立つ役所。
【二一九】屯營。衛兵の營舍。

く比び、(二二〇)廨署棊のごとく布き、(二二一)横塘査下、邑屋(二二二)隆夸にして、(二二三)長干延屬し、飛甍舛互す。

【大意】宗廟を武昌に建て、離宮を建業に營み、闔閭夫差の遺法に則り、神龍殿を建てて榮栖を施し、臨海赤烏等の殿を建つ。皆高大壯麗を極め、東西長くつづき南北高きを爭ひ、房櫳横を對し、閣道相通じ、門戶奇異にして其名亦奇異なり。左なるを彎崎と稱し、右なるを臨硎と稱す。栱斗は皆彫飾を加へ、窓戶は靑瑣にして柱楹は朱塗なり。或は雲氣を圖し或は神仙を畫く。實に華麗を極むと雖も尙ほ此を以て足れりとせず、桀王の傾宮に倣はんことを思ひ、瑤を以て臺となし瓊を以て室となせり。宮門は車を竝べて行くべく、馳道は平なること砥の如く、此に植うるに靑槐を以てし、淥水其道を横流し、樹蔭は綠深く清流は淙淙たり。官司羅列して七里に亙り、南位に竝び立ち、兵營は櫛の如く比び、官署は棊の如く散じ、横塘査下の民居亦奢麗にして、大小長干相連續し、棟甍相交互せり。

其居には則ち(二二四)高門鼎貴、(二二五)魁岸豪桀、(二二六)虞魏の昆、(二二七)顧陸の裔あり。(二二八)岐嶷體を繼ぎ(二二九)老

【二二〇】廨署。役所なり。
【二二一】横塘査下。閭巷の名、皆百姓の住む處なり。
【二二二】隆夸。盛に奢ること。
【二二三】長干。山岡の間を干といふ。建業の南に山あり其間の平地には吏民住居す。中に大長干小長干あり、皆連屬す。
【二二四】高門。豪貴の家をいふ。鼎貴は鼎に食ふ人。亦貴族なり。
【二二五】魁岸豪桀、豪俠の士。
【二二六】虞魏。吳の貴族なり。昆は子孫なり。
【二二七】顧陸。吳の貴姓なり。
【二二八】岐嶷。少にして賢なる者。
【二二九】老成。少にして長老の德ある者。

成世を奕ね、躍馬跡を疊ね、朱輪轍を累ね、兵を陳ねて歸る。(二三〇)蘭錡内に設け、(二三一)冠蓋雲陰し (二三二)閭閻闐噎す。其隣には則ち任俠の (二三三)靡 (二三四)輕訬の客あり。交を締ぶこと (二三五)翩翩として (二三六)儐從奕奕たり。出づるに珠履を躡み、動もすれば千百を以てす。里に譙し巷に飮み、觴を飛ばし白を擧げ、關を翹げ鼎を扛げ、(二三七)抃射壺博す。(二三八)鄱陽の暴謔も (二三九)中酒にして作る。是に於て樂み衎みて (二四〇)歡飫匱きことなく、(二四一)都輦殷にして (二四二)四奥來り暨り、水に浮び陸に行き、舟を方べ駟を結び、棹を唱へ轂を轉じ、昧旦より永日までにす。

【大意】此に住む者は高官貴族虞魏顧陸の後裔にして、岐嶷老成の士、祖先の功德を繼ぎ、世を奕ねて相襲ぎ、駿馬に跨り朱輪に駕し、兵を陳ねて往來し、内には蘭錡を設け冠蓋雲の如く、閭巷の間に充溢す。其隣には任俠輕捷の人あり、交を結んで往來し、珠履を躡んで豪奢を競ひ、千百黨を成して里巷に飮宴し、杯を飛ばし大白を擧げ、門關を擧げ、大鼎を扛げて力量を競ひ、投

【二三〇】蘭錡。兵戈を置く棚。
【二三一】冠蓋。冠と車蓋。
【二三二】閭閻。閭巷なり。闐噎は充滿すること。
【二三三】靡。美なり。
【二三四】輕訬。行の輕々しきこと。
【二三五】翩翩。往來の貌。
【二三六】儐從。前後につきまとふこと。奕奕は盛なる貌。
【二三七】抃射云云。抃は手を打つて舞ふこと。壺は投壺とて遊戯の名。博はスゴロクの如き遊戯。
【二三八】鄱陽。地名、此地の人性暴急なり、酒酣なるとき往往暴惡の戯をなす。
【二三九】中酒。酒宴半なるとき。
【二四〇】歡飫。飮食に飽くを飫といふ。
【二四一】都輦。天子の居る所の都をいふ。
【二四二】四奥。四方遠地の人。

壺博奕して勝負を闘はし、往往暴惡の事を爲すに至る。斯の如くにして歡樂を極め、都邑殷盛にして、四遠の人來り集り、或は陸に遊び或は水に遊び、舟を方べ駟馬を聯ね、棹歌を奏し車輪を轉じ、早朝より日暮に至る。

市朝を開いて普く納れ、(二四三)闤闠に横りて流れ溢れ、品物を混じて廛を同うし、都鄙を幷せて一となし、(二四四)士女佇眙して工賈駢び坒り、(二四五)紵衣絺服し、雜沓して(二四六)縱萃し、輕輿轡を按じて以て(二四七)隧を經、樓船颿を擧げて肆を過ぎ、果布輻湊すること常に然り。(二四八)流離と珂珹とを致遠す。(二四九)纖賄紛紜として器用萬端なり。(二五〇)金溢磊珂として(二五一)珠琲闌干たり。(二五二)桃笙象簟、筒中に韜れ、(二五三)蕉葛升越、羅紈よりも弱し。(二五四)澀譶聚膠として交貿相競ひ、(二五五)諠譁喤呷芬葩蔭映し、揮袖風に飄りて紅塵晝昏く、流汗(二五六)霡霂として(二五七)中逵泥濘なり。

【二四三】闤闠。市門なり。
【二四四】佇眙。佇立して望むと。
【二四五】紵衣絺服。葛衣なり。
【二四六】縱萃。走り集る。
【二四七】隧。市中の道。
【二四八】流離、珂珹。寶の名。致遠は遠方より持ち來ること。
【二四九】纖賄。蠻夷の貨物の名。紛紜は多き貌。
【二五〇】金溢。金二十四兩を溢といふ。磊珂は衆多の貌。
【二五一】珠琲。琲は貫なり、珠子貫を一琲といふ。闌干は多き貌。
【二五二】桃笙。桃枝の簟なり、吳人は簟を稱して笙といふ。象簟は象牙の簟。此を竹筒に藏めて貢とするなり。
【二五三】蕉葛、升越。布の類なり。
【二五四】澀譶。言語止まざる貌。聚膠は錯亂の貌。
【二五五】諠譁喤呷。騷がしき貌。芬葩蔭映は人衆多にして相映ずるなり。
【二五六】霡霂。小雨の降る貌。
【二五七】中逵。道路なり。

【大意】早朝に市場を開いて普く雜貨を納れ、川の流るるが如く市廛に充溢し、都鄙の人皆貨物を

通じて竝に此一所に在り。士女工賈紵服して雜沓し、輿に乘る者あり舟に乘る者あり。果布常に輻湊し、遠く流離と珂珬とを致し、百貨器用、黃金珠玉雜然紛然たり。簟席は竹筒に包まれ葛布は羅紈よりも細し。諠諠として交易し、紛紛とし相映じ、袖は風に飜りて紅塵晝暗く、汗は地に滴りて道路泥濘なり。

(二五八)富中の甿、貨殖の選、時に乘じて利を射、財の豐なること巨萬なり。其(二五九)區宇を競ひては則ち疆を幷せ巷を兼ね、其宴居に矜りては則ち(二六〇)珠服玉饌す。(二六一)趫材悍壯此に廬を比べ、捷きこと(二六二)慶忌の若く、勇なること(二六三)專諸の若く、(二六四)危冠して出で(二六五)竦劍して趨り、(二六六)鮫函を扈帶び、屬鏤を扶揄く。鍦を人に藏し、瞂を去ること閭よりし、家ごとに(二六七)鶴膝あり、戶ごとに(二六八)犀渠あり。(二六九)軍容蓄へ用ひ、器械兼ね儲へ、(二七〇)吳鉤越棘あり、(二七一)純鉤湛盧あり。戎車(二七二)石城に盈ち(二七三)戈船江湖を掩ふ。

【二五八】富中の甿。肥沃の田中に居る所の民なり。
【二五九】區宇。地所なり。
【二六〇】珠服玉饌。美衣美食すること。
【二六一】趫材悍壯。勇壯の人。
【二六二】慶忌。吳王僚の子なり。
【二六三】專諸。吳の勇士の名。
【二六四】危冠。高き冠。
【二六五】竦劍。劍をそばたつること。

【二六六】鮫函。鮫の皮にて作りし鎧。屬鏤は名劍の名。
【二六七】鶴膝。矛なり。
【二六八】犀渠。楯なり。
【二六九】軍容。矛戟の類をいふ。
【二七〇】吳鉤、越棘。皆武器なり。
【二七一】純鉤、湛盧。二劍の名。
【二七二】石城。石頭城なり、其中に府庫軍備を置けり。
【二七三】戈船。船下に戈あるもの。

【大意】肥沃の田中に居る民、貨殖に敏き徒輩は、物價の安きに乘じて之を買入れ、貴きに及んで

之を賣り、爲に富を致すこと鉅萬なり。因つて他人の田地を兼并し、以て己が有となし、其の豪富に矜りて金衣玉食するに至る。壯勇の徒亦ここに屋を比べて住居し、輕捷なること慶忌の如く、勇烈なること專諸の如く、或は高冠を戴きて出で、或は刀劍を按じて趨り、鮫函を著け、屬鏤の劍を佩ぶ。其等の武器たる、之を兵庫より取るを要せず、閭里の民皆之を私有し、戶戶に鶴膝の矛を藏し、人人犀渠の楯を有し、兵車は石頭城の府庫に盈ち、戈船の多きこと實に江湖を掩ふ。

露往き霜來り日月其れ除ぬれば、草木(二七四)節解し鳥獸腯膚す。鷹隼を觀(二七五)征夫を誡め、(二七六)組甲を坐ゑ祀姑を建て、(二七七)官師に命じて鐸を擁せしめ、將に(二七八)具區に(二七九)校獵せんとす。(二八〇)烏滸、狼𥇦、夫南、西屠、儋耳、黑齒の酋、(二八一)金鄰象郡の渠あり。(二八二)驫駯駃騠(二八三)靸霅驚捷して前途に先驅し、(二八四)俞騎路に騁せ(二八五)指南方を司り、出車(二八六)轞轞、(二八七)被練鏘鏘たり。吳王乃ち玉輅を巾り(二八八)驌驦を軺し、魚須を旗にして(二八九)重光を常に

【二七四】節解。凋落すること。
【二七五】征夫。兵卒なり。
【二七六】組甲。甲冑なり。祀姑は旗なり。
【二七七】官師。將帥なり。
【二七八】具區。澤の名なり。
【二七九】校獵。埒を作り禽獸の逃路をさへぎりて獵すること。
【二八〇】烏滸。以下皆南夷の名。黑齒は齒を黑く染むること。
【二八一】金鄰、象郡。南夷の國名。

【二八二】驫駯駃騠。衆馬の走る貌。
【二八三】靸霅。走ること疾き貌。
【二八四】俞騎。先導の騎なり。
【二八五】指南。指南車なり。方角を示す車なり。
【二八六】轞轞。車の聲。
【二八七】被練。甲を被れる兵士。鏘鏘は行列の貌。
【二八八】驌驦。良馬なり。軺は車に馬をつくること。
【二八九】重光。日月なり。

し、(二九〇)烏號を攝り(二九一)干將を佩き、羽毛旄を揚げ(二九二)雄戟鋩を耀し、(二九三)貝冑象弭ありて(二九四)織文鳥章あり。(二九五)六軍袀服して(二九六)四騏龍驤す。

【大意】秋去り冬來り草木凋落して鳥獸肥腯すれば、乃ち鷹を檢し兵士を戒め、甲冑を連ね軍旗を建て、將帥をして鐸を鳴らして號令を傳へしめ、將に具區澤に狩獵せんとす。南夷異俗の首長亦馬を驅りて呉王の爲に前驅し、俞騎路に騁せ指南車方角を司り、車聲轔轔として從騎雲の如し。呉王乃ち玉輅に乘り駿馬を駕し、日月を畫ける旗を建て魚須を以て旗竿となし、烏號の弓を執り干將の劒を佩び、兵士は羽旗を揚げ矛戟を耀かし、貝冑を被り象弭を執り、鳥文の旗幟を飜し、武裝して之に從ふ。駟馬驕りて龍の驤るが如し。

(二九七)峭格周く施し、(二九八)罿罻普く張り、(二九九)罼罕瑣のごとく結び(三〇〇)罠蹏綱を連ね、阹るに(三〇一)九疑を以てし、禦ぐに(三〇二)沅湘を以てし、(三〇三)輶軒蓼擾して(三〇四)彀騎熠煌たり。(三〇五)袒裼して徒搏

【二九〇】烏號。弓の名。
【二九一】干將。劒の名。
【二九二】雄戟。勁戟といふが如し。
【二九三】貝冑。貝を以て飾りし冑。象弭は象牙を以て飾りしユハズ。
【二九四】織文鳥章。織は幟の誤、旗幟の上に鳥の形を畫きしもの。
【二九五】六軍。大軍なり、天子の軍をいふ。袀服は軍服なり。
【二九六】四騏。駟馬なり。
【二九七】峭格。網を張る木なり。
【二九八】罿罻。鳥を捕ふる網。
【二九九】罼罕。麋を捕ふる網なり。
【三〇〇】罠蹏。兎を捕ふる網。
【三〇一】九疑。山の名。
【三〇二】沅湘。川の名。
【三〇三】輶軒。輕車なり。蓼擾は亂るる貌。
【三〇四】彀騎。弓を張る騎兵。熠煌は疾き貌。
【三〇五】袒裼。肌ぬぎすること。

し、(三〇六)拔距して石を投ぐるの部、(三〇七)猨臂駢脅(三〇八)狂趭獷猤し、鷹のごとく瞵鶚のごとく視、(三〇九)參譚犺𤝞して離るるが若く合ふが若き者、相與に(三一〇)莽罠の野に騰躍す。干鹵殳鋋、(三一一)暘夷勃盧の旅、長殺(三一二)短兵、(三一三)直髮馳騁し、(三一四)儇佻坌竝し(三一五)枚を銜んで聲なく、(三一六)悠悠たる旆旌の者相與に(三一七)昧莫の坰に(三一八)聊浪し、鉦鼓山に疊ひ、火烈林に爍え、飛爛浮煙、載ち霞み載ち陰り、(三一九)菈擸として雷硠し、巒を崩し岑を弛し、鳥は木を擇ばず、獸は音を擇ばず。

【大意】既に網を張るの格を立てて、普く網を張り、山川を以て逃路を遮り、輕車亂れ走り弓を張る者疾く馳せ、袒裼して獸を暴にし、拔距りて石を投ぐる者、猨臂駢脅の壯士縱横に奔走し、目を張ること鷹鶚の如く。或は離れ或は合ひ廣野に騰躍し、干戈を執り甲冑を被れる者、頭髮を立てて馳驅し、各〻枚を銜み旌旗を建て、獸を逐ひて廣原に奔馳し、鐘鼓山に震ひ火焰林を燒き、天の霞め

徒搏は徒手にて獸をうつこと。

【三〇六】拔距。兩人手を以て相案じ、能く之を拔引くなり。

【三〇七】猨臂。身體の割合に臂の長きこと猨の如きなり、故に弓を引くに便なり。駢脅とは一枚肋とて肋骨の一枚板になり居る人なり。

【三〇八】狂趭。走ること。獷猤は勇なり。

【三〇九】參譚犺𤝞。相隨ふこと衆多の貌。

【三一〇】莽罠。廣大の貌。

【三一一】暘夷。鎧の名。勃盧は矛の名。

【三一二】短兵。刀劍なり。

【三一三】直髮。髮を逆立つること。

【三一四】儇佻坌竝。疾走の貌。

【三一五】枚。大きさ箸の如し、横に之を銜みて發聲を防ぐ具。

【三一六】悠悠。流るる貌、旆旌は旗なり。

【三一七】昧莫。廣大なり。

【三一八】聊浪。かけまはること。

【三一九】菈擸雷硠。崩れ摧くる聲。

るが如く、陰るが如く、士卒怒號して山巒爲に崩れ、鳥は木を擇ばず、獸は音を擇ばず、忽ちにして捕獲せらる。(三二〇)虥虪を暴にし(三二一)麋麖を頳し、(三二二)六駮に驀り、(三二三)飛生を追ひ、(三二四)鸞鶄を彈し、(三二五)猱蜓を射、白雉落ちて(三二六)黒鴆零ち、(三二七)嶕嶢を陵絶りて聿に巉嶮を越え、竹栢を蹠踰して(三二八)杞柟を獮猱し、(三二九)封狶薙き(三三〇)神螭掩はれ、剛鏃潤ひ(三三一)霜刃染まる。是に於て(三三二)節を弭め轡を頓め、鑣を齊へ(三三三)蹕を駐めて、徘徊倘佯し、目を(三三四)幽藹に寓せ將帥の(三三五)拳勇と士卒の抑揚とを覽る。羽族は觜距を以て刀鈹となし、毛羣は齒角を以て矛鋏となし、皆體に著いて卒なるに應ずるも、挂挖られて(三三六)創痏をなし、衝跡られて筋骨を斷つ所以にして、鋭を衄き鋩を挫き、(三三七)拉捭摧藏せざるはなし。石林の(三三八)岩㟧たるありと雖も、請ふ臂を攘げて之を靡かし、(三三九)雄虺の九首

【三二〇】虥虪。虥は白虎、虪は黒虎。
【三二一】麋麖。麖は大麋なり、鹿の類の獸。
【三二二】六駮。駮は獸名、白身黒尾、一角にして虎爪なり。
【三二三】飛生。鼯なり、和名ムササビ。
【三二四】鸞鶄。鳥の名。彈はハジキ弓にて射ること。
【三二五】猱蜓。獸の名。
【三二六】黒鴆。鳥の名、體に毒あり。
【三二七】嶕嶢。高き貌。
【三二八】杞柟。木の名。獮猱は奔走すること。
【三二九】封狶。大なるゐのしし。
【三三〇】神螭。猛獸なり。
【三三一】霜刃。するどき刃。
【三三二】節。一種の旗の如きもの。天子の鹵簿の一なり。
【三三三】蹕。天子の行列なり。
【三三四】幽藹。繁りたる林なり。
【三三五】拳勇。拳は健に通ず、たくましくつよきこと。
【三三六】創痏。キズなり。
【三三七】拉捭摧藏。擲ち折くこと。
【三三八】岩㟧。深險なり。
【三三九】雄虺。毒蛇なり、首九あり。

ありと雖も、將に足を抗げて以て之を蹴まんとす。

【大意】猛獸を暴にし飛鳥を追ひ、巉巖を越えて竹栢の間を渉り、杞柟の下に奔走すれば、利鏃は流血に潤ひ、白刃は赤血に染まる。是に於て天子駕を駐め徘徊倘佯して將帥士卒の拳勇抑揚を覽れば、則ち鳥獸の觜距刀戟の如く、體に著きて、急卒に應ずるありと雖も、皆磨摧せられて瘡痍をなし、抵觸せられて筋骨を斷たざるはなく、鋒鋩之が爲に挫折せざるはなし。石林深險の處と雖も、臂を擧ぐれば則ち之を倒し、毒蛇の九頭なるも將に足を擧げて之を踏まんとす。

巣に居るを顚覆し、窟に宅るを剖破し、仰いで(三四〇)鵕鸃を攀ぢ、俯して(三四一)豺貘を蹴み、熊羆の室を封剝し、虎豹の落を剽掠め、猩猩啼いて擒に就き、(三四二)狒狒笑ひて格され、(三四三)巴蛇を屠りて(三四四)象骼を出し、鵬翼を斬りて廣澤を掩ふ。輕禽狡獸(三四五)周章夷猶し、紘中に(三四六)狼跋し、其の(三四七)睒睗する所以を忘れ、其の去就する所以を失ひ、魂褫はれ氣懾れて自ら踢跌する者、弦に應じて羽を飲み形僨れ景僵るる者累積して增益し、雜襲錯繆りて藪薄を傾け岬岫を倒し、巖穴には(三四八)猏縱なく、翳

【三四〇】鵕鸃。鳥の名。
【三四一】豺貘。獸の名。
【三四二】狒狒。人を食ふ獸、人を見れば手を執りて笑ひ、乃ち之を食ふ。
【三四三】巴蛇。大蛇なり。
【三四四】象骼。象の骨なり。巴蛇よく象を食ふ、故に之を殺して其骨を出すなり。
【三四五】周章。狼狽すること。夷猶は猶豫すること。
【三四六】狼跋。狼狽なり。
【三四七】睒睗。疾く視ること。
【三四八】猏縱。獸の子。

蒼には(二四九)麔麚なし。道を(二五〇)豐隆に假らんことを思ひ、重霄を披いて高く狩り、烏兎を日月に籠め、飛走の棲宿を窮む。

【大意】鳥巣を顚覆し獸窟を剖破すれば、猩猩は啼いて擒に就き、狒狒は笑ひて殺され、巴蛇を屠りては其腹中の象骨を出し、大鵬垂天の翼を斬りては廣澤を掩ふ。輕禽狡獸皆網中に狼狽して、其の視看を忘れ、其の去就を失ひ、恐懼すること特に甚しく、顚蹶する者は弓弦に應じて羽を沒し、僵仆する者は累積して益多く、藪澤岬岫禽獸索然として盡き、雛小の者と雖も、復た地上に存するなし。乃ち道を雷神に借り、此の重雲を排して天に上り、以て雲上に狩獵し、日中の烏月中の兎を網にし、鳥獸の棲を窮め盡さんことを思ふ。

(二五一)嶰澗閴として(二五二)岡岵童たり。(二五三)罾罘滿ちて效獲衆し。靮を廻らして行き漁を三江に睨觀す。(二五四)舟航を彭蠡に汎べ、萬艘を渾べて既に同うす。弘舸舳を連ね巨檻艫を接へ、(二五五)飛雲海を蓋ひ制常模にあらず。華樓を疊ねて島のごとく峙ち、時に(二五六)方壺に髣髴たり。(二五七)鷁首に比ぶるに裕なるあり。(二五八)艅艎に往初に邁

【二四九】麔麚。麔は鹿の子、麚は雉の子。

【二五〇】豐隆。雷の神。

【二五一】嶰澗。山間の谷。閴は寂として人なきこと。

【二五二】岡岵。山に草木多きを岵といふ。童とは草木なきをいふ。

【二五三】罾罘。網なり。

【二五四】舟航。舟なり。彭蠡は湖の名。

【二五五】飛雲。船の名。

【二五六】方壺。海中の仙山の名、方丈ともいふ。

【二五七】鷁首。天子の船なり、船首に鷁と稱する鳥の形を畫く。

【二五八】艅艎。船の名、左傳に楚呉師ヲ敗リ其乘舟餘皇ヲ獲タリとあり。

ぎたり。(三五九)組帷を張り　(三六〇)流蘇を構へ、(三六一)軒幌を開き水區に鏡み、(三六二)艗工楫師閩禺より選ばれ、長風に　(三六三)習御し　(三六四)靈胥を狎れ翫び、千里を　(三六五)寸陰に責め、聊か期に先だちて須臾なり。

【大意】山澗の禽獸已に空しく、岡岵の草木既に盡き、網羅の中禽獸皆滿ち捕獲衆多なり。乃ち轡を廻らして漁を三江の中に觀んとし、舟を彭蠡湖上に浮べ、萬艘混雜して波を同うし、大船巨舶艫相銜み、飛雲海を掩ひて其制常に異り、華樓重疊して島の峙つが如く、方壺の宮闕に髣髴たり。綺麗なると鷁首に勝り、往昔の餘艎に過ぎ、帷帳を張り流蘇を垂れ、舟子は閩禺の選にして、長風を便用し靈胥を輕侮し、千里を往くこと寸陰の間に在り。期に先だちて須臾にして至る。

櫂謳唱へて　(三六六)簫籟鳴り、洪流響いて諸禽驚き、(三六七)弋磻放ちて　(三六八)鶬鶊を稽め、(三六九)虞機發して　(三七〇)鵁鶄を留む。鉤餌縱横にして　(三七一)網罟緒を接へ、術は　(三七二)詹公を兼ね、巧は　(三七三)任父を傾け、(三七四)鮔鰽を筌にし、鱨鯊を纚り、兩魪を罩にし、鰝鰕を罺にし、乘鱟黿鼉を同うし羅を共にし、

【三五九】組帷。綵色あるトバリ。
【三六〇】流蘇。帷に垂るゝ飾・フサなり。
【三六一】軒幌。軒のトバリ。水區は河中なり。
【三六二】艗工楫師。船頭なり。閩禺は地名、其地の人水に慣る。
【三六三】習御。便用すること。
【三六四】靈胥。伍子胥の神、水を濟らんとする者は皆之を祠り水路の無事を禱る。
【三六五】寸陰。僅かなる時間。

【三六六】簫籟。笛の類なり。
【三六七】弋磻。箭の名。
【三六八】鶬鶊。鳥の名。
【三六九】虞機。虞は狩場を掌る官、機は弩牙なり。
【三七〇】鵁鶄。鳥の名。
【三七一】網罟。アミなり。
【三七二】詹公。詹何なり、釣に巧なる人。
【三七三】任父。任公子なり、釣に巧なる人。
【三七四】鮔鰽。魚の名。

(三七五)沈虎潛鹿罿䍡僒束せられ、(三七六)徽鯨の背(三七七)羣犗に中る。(三七八)攙搶暴に出でて相屬き、復た河に臨んで鯉を釣ると雖も、鮒を井谷に射るに異るなし。輕舟を結んで競ひ逐ひ、潮水を迎へて緡を振ひ、(三七九)蓱實の復た形れんことを想ひ、(三八〇)靈蘷を鮫人に訪ふ。(三八一)精衞石を銜んで繳に遇ひ、(三八二)文鰩夜飛んで綸に觸れ、北山その翔翼を亡ひ、西海その游鱗を失ふ。

【大意】 棹歌起り簫管鳴り、洪流響きて禽鳥驚き、弓箭を放ちて鷦鷯を射、弩を發して鵁鶄を獲、香餌を鉤上に置き、縱橫に之を流し、繩を結んで網となし、之を四方に張る、其巧妙なること遙に詹公任父に勝り、或は筌にて取り或は網にて取り、魚類一一擧げ盡し難し。鯨魚の背羣犗の如く、其の死するや妖星天に現れ、河に臨んで大鯉を釣るを覩ること、小鮒を井中に釣るが如し。競渡既に畢れば復た網を擧げて魚を取り、蓱實の復た現れんことを想ひ、靈蘷を獲て之を鮫人

【三七五】沈虎潛鹿。皆魚なり。罿䍡僒束は網の中に陷ること。
【三七六】徽鯨。大魚の名。
【三七七】羣犗。衆牛なり。
【三七八】攙搶。妖星なり、淮南子に鯨魚死シテ彗星出ヅとあり。
【三七九】蓱實。孔子家語に楚ノ昭王江ヲ渡ル、江中ニ物アリ、大キサ斗ノ如シ、圓クシテ赤シ、舟人之ヲ取ル、王使ヲシテ孔子ニ問ハシム、子曰ク此レ所謂蓱實トイフ者ナリ、剖イテ食フベシ、唯霸者ノミ能ク獲トナスとあり。
【三八〇】靈蘷。山海經に東海中ニ獸アリ、牛ノ如クニシテ蒼身、角ナク一足アリ、水ニ入レバ則チ風吹ク、其聲雷ノ如シ、其皮ヲ以テ鼓ヲ冒ヘバ五百里ニ聞ユ、名ケテ蘷トイフとあり。鮫人は人魚なり。
【三八一】精衞。北山に居る小鳥の名なり、昔炎帝の女東海に溺れ、化して精衞となる、常に西山の木石を銜んで東海を塡めんとせしも其效なし。
【三八二】文鰩。魚の名。常に西海に行き東海に游ぶ、夜飛んで行く。

に問ひ、精衛文鰩共に之を獲、西海北山また其鱗翼を留めざるに至る。

【三八三】雕題の士、鏤身の卒、飾を虬龍に比べ蛟螭と與に對す。其華質を簡べば則ち【三八四】錦績よりも覬費たり。【三八五】其虓勇を料れば則ち鵰のごとく悍く狼のごとく戾る。相與に潛險を味し【三八六】瓌奇を搜り、【三八七】蝳蝐を摸り【三八八】觜蠵を捫り、巨蚌を回淵に剖き、【三八九】明月を漣漪に濯ぎ、天下の至異に畢るまで、詑に索めて臻らざるなく、谿壑之が爲に【三九〇】一罄し、【三九一】川瀆之が爲に【三九二】中貧し。【三九三】澹臺の謀られしを哂ひ、聊か海に褻りて珍を徇め、【三九四】漢女を後舟に載せ、【三九五】晉賈を追ひて塵を同うし、【三九六】汩として流に乘りて以て【三九七】砰宕たり、【三九八】飀風の飀飀たるに翼し、直に濤を銜いて瀨に上り、常に【三九九】沛沛として以て

【三八三】雕題。題は額なり、額にイレズミせる人。鏤身は身にイレズミすること、南夷の風俗なり。卒は音スヰ、叶韻。
【三八四】錦績。錦繡といふ如し。覬費は美しき貌。
【三八五】虓勇。猛勇なり。
【三八六】瓌奇。寶玉なり。
【三八七】蝳蝐。龜の類なり。
【三八八】觜蠵。大龜なり。
【三八九】明月。珠なり。
【三九〇】一罄。盡き果つること。
【三九一】川瀆。川流なり。
【三九二】中貧。半にして窮ること。
【三九三】澹臺。博物志に澹臺子羽、千金ノ璧ヲ賚ス、河伯之ヲ得ント欲シ、波浪急ニ起リ兩蛟舟ヲ夾ム、子羽怒ツテ曰ク、河神吾ガ璧ヲ取ラント欲スレバ、義ヲ以テスベシ、威ヲ以テスベカラズト、乃チ劍ヲ以テ蛟ヲ斬リテ之ヲ殺ス、波浪乃チ止ム、子羽璧ヲ河中ニ投ジ、三タビ投ジテ三タビ之ニ歸ル、子羽璧ヲ毀チテ去ルとあり。
【三九四】漢女。漢水の神女。
【三九五】晉賈。賈の大夫なり、容貌醜惡なり、妻を取りて三年なるも其妻言はず笑はず、御して以て皐に往き雉を射て之を獲、其妻始めて笑つて言ふ。
【三九六】汩。疾き貌。
【三九七】砰宕。舟水を撃つ貌。
【三九八】飀風。疾風なり。飀飀は風の聲。
【三九九】沛沛。流るる貌。悠悠は遠き貌。

悠悠たり。汔に休ふべくして凱み歸らんとし、(四〇〇)天吳と陽侯とに揖す。

【大意】雕題文身の卒、文彩を龍螭と等しくし、其美は錦繡の如く、其勇は鵰鶚豺狼の暴戾なる如く、相與に潛險を犯して寶玉を搜索し、大龜を捕へ巨蚌を剖き、明月の珠を漣漪の間に搜り、天下の奇物索めて得ざるはなく、谿谷之が爲に物なく川瀆之が爲に空盡し、澹臺の璧の爲に河神の謀る所となりしを晒ひ、乃ち復た水に入りて其珍寶を求め、漢女を載せ水に入りて寶を求むるは、晉賈が妻と皐に往きて雉を射たるが如し。舟流水に隨つて漂蕩し、疾風に駕して進むこと、鳥の翼ありて風に乘るが如し。舟遊の興既に極まり將に歸りて休息せんとす。乃ち水神と波神とに揖禮して別れ去る。

(四〇一)包山を指して期となし、洞庭に集りて淹留り、(四〇二)軍實を桂林の苑に數へ、(四〇三)戎旅を落星の樓に饗し、酒を置くこと(四〇四)淮泗の若く、肴を積むこと山丘の若く、輕軒を飛ばして(四〇五)綠醽を酌み、雙轡を方べて(四〇六)珍羞を賦つ。飮むときは烽起り酬すときは鼓震ひ、士は倦むを遺れ衆は忻を懷き、館娃の宮に幸し、女樂を張りて羣臣を娛ましめ、金石と絲竹とを羅ね、(四〇七)鈞天

【四〇〇】天吳。水の神。陽侯は波の神。
【四〇一】包山。洞庭湖中にある山の名。
【四〇二】軍實。士卒殺獲の實數なり。
【四〇三】戎旅。士卒なり。
【四〇四】淮泗。ともに川の名。
【四〇五】綠醽。酒の名。
【四〇六】珍羞。旨き食物。
【四〇七】鈞天。天上の神樂なり。下陳、天より下りて陳列せること。

の下陳せるが若し、(四〇八)東歌を登げ(四〇九)南音を操り、(四一〇)陽阿を觚ぎ(四一一)韎任を詠じ、(四一二)荊豔楚舞呉愉越吟あり。(四一三)翕習容裔靡靡愔愔たり。

【大意】包山を指して期となし、洞庭に集りて滯留し、獲物を桂林苑に數へ、士卒を落星樓に饗し、酒は流水の如く、肴は山丘の如く、輕舟を以て酒を運び、駟馬を馳せて肴を分ち、飲む時は烽を擧げ、飲み終れば鼓を鳴らし、士卒疲勞を忘れて欣悅す。天子乃ち館娃宮に幸して女樂を設け羣臣を娛ましむ。實に天上の神樂下りて下土に陳せるかと疑はれ、呉愉越吟閒雅幽麗なり。

此の若き者と夫の唱和の隆響と、(四一四)鐘磬の鏗

【四〇八】東歌。晏子春秋に「梁東歌ヲ作ル」とあり。
【四〇九】南音。南國の音なり。
【四一〇】陽阿。舞なり。
【四一一】韎任。東夷の樂を韎といひ、南夷の樂を任といふ。
【四一二】荊豔。楚歌なり。呉愉は呉歌なり。越吟は越人の吟なり。
【四一三】翕習。盛なる貌。容裔靡靡愔愔は閑雅幽麗なり。

【四一四】鐘磬。ともに樂器の名。鏗耾は樂聲なり。
【四一五】殷坻。高き山。
【四一六】曲度。曲調といふが如し。
【四一七】律呂。調子なり。
【四一八】延露、駕辯。古の曲名。
【四一九】淥水、採菱。古の曲名。
【四二〇】酣湑。酒酣にして樂むなり。

耾たるを動かし、(四一五)殷坻前に頽れ(四一六)曲度勝へ難きあり。皆謠俗と汁ひ協ひ、(四一七)律呂相應ず。其の樂を奏するや、則ち木石潤色あり、其の哀を吐くや、則ち淒風暴に興り、或は(四一八)延露と駕辯とに超え、(四一九)或は淥水と採菱とに踰え、軍馬髦を弭かして仰ぎ秣かひ、淵魚鱗を竦げて上り升る。(四二〇)酣

觴半して(四二一)八音并せ、歡情留りて(四二二)良辰征き、(四二三)魯陽戈を揮ひて高く麾き、(四二四)曜靈を太淸に廻らし、將に西日を轉じて再び中せしめ、旣往の精誠に齊からんとす。

【大意】上に奏する所の歌舞と叶唱する所の高響とあり。之に加ふるに鐘磬の鏗鍠たるを以てす。山岳も前に頽るべく、曲調變轉して勝げて記すべからず。皆俗の歌謠と和合し律呂相應ず。和樂の音を奏すれば木石も潤色あり、哀怨の音を奏すれば、淒風俄に起る。遙に延露駕辯等の古曲の上に在り。されば馬の草を嚙む者之を聞いて首を仰ぎ、魚の水に潛む者之を聞いて鱗を竦げて出づ。酣樂纔に半にして八音兼ね奏し、歡情を留めんと欲すれば、良辰忽ち去る。是に於てか魯陽廻日の故智に倣ひて、天上の白日を廻らし、西天の日を再び中天に歸し、古人の精誠に倣ひて、日輪をして其景を駐めしめんとす。

昔者(四二五)夏后氏羣臣を茲土に朝せしめ、玉帛を執る者以て萬國なり。蓋し亦先王の(四二六)高會せる所にして、四方の軌則とする所なり。(四二七)春秋の際、要盟の主、闔閭其威を申べ、夫

【四二一】八音。金石絲竹匏土革木の八種の樂聲なり。
【四二二】良辰。辰は時なり、愉快なる時。
【四二三】魯陽。淮南子に魯陽公韓ト遘ヒ、戰酣ニシテ日暮ル、戈ヲ援イテ之ヲ麾ク、日之ガ爲ニ反ルコト三舍とあり。
【四二四】曜靈。天日なり。太淸は天なり。
【四二五】夏后氏。左傳に禹諸侯ヲ塗山ニ會ス、玉帛ヲ執ル者萬國アリとあり。玉帛は諸侯の天子に朝する時の贈物なり。塗山は吳にあり、故に茲土といふ。
【四二六】高會。大會なり。
【四二七】春秋。支那の時代の名。要盟は諸侯の間の誓約なり。

差其武を窮め、內には(四二八)五員の謀を果し、外には(四二九)孫子の奇を騁せ、彊楚に(四三〇)栢擧に勝ち、勁越を(四三一)會稽に棲ましめ、溝を(四三二)商魯に闕り、長を(四三三)黃池に爭ふ。徒に以んみるに江湖嶮陂にして物產殷に充ち、(四三四)繞霤も未だ其固を言ふに足らず、(四三五)鄭白も未だ其豐を語るに足らず。士は堅を陷るの銳あり、俗は(四三六)節概の風あり。(四三七)睚眦すれば則ち劍を挺き、(四三八)暗嗚すれば則ち弓を彎く。之を擁する者は龍のごとく騰り、之に據る者は虎のごとく視、城を麾くと槁たるを振ふが若く、旗を搴ると顧み指すが若し。甲を帶ぶること一朝なりと雖も、元功遠く致し、(四三九)葉を累ぬると百疊なりと雖も、富彊相繼ぎ、樂湑其方域を衍み、列仙其土地に集り、(四四〇)桂父形を練りて色を易へ、(四四一)赤須蟬蛻して附き麗ぐ。

【四二八】五員。伍子胥なり、吳の賢臣なり。
【四二九】孫子。孫武なり、兵法を以て名あり。
【四三〇】栢擧。地名なり。
【四三一】會稽。山の名。越王此山を保ちて和を請へり。
【四三二】商魯。地名なり。
【四三三】黃池。地名なり。
【四三四】繞霤。地名なり。
【四三五】鄭白。地名なり。
【四三六】節概。氣概節操あること。
【四三七】睚眦。目を怒らして睨むこと。
【四三八】暗嗚。怒を含むこと。
【四三九】葉。世なり。百疊は百世なり。
【四四〇】桂父。仙人の名、顏色時に黑く時に白く時に赤し、南海の人之に尊事す。
【四四一】赤須。仙人の名。もと吳人にあらず、故に附麗すといふ。

【大意】昔夏の禹王諸侯を此地に會せしむるや、玉帛を執りて來り會せる者萬國なりきといふ。されば此地は先王高會の地にして、四方の軌則とする所なり。宜なるかな春秋の時、諸侯の盟主たる

闔閭夫差の二王、此地に出で、其盛を極め、其武を窮め、內には伍員の謀を用ひ、外には孫子の奇計を用ひ、强楚を破り强越を破り、溝を深くし長を爭ひしや。更に江山險絕、物產豐富にして、繞霤の險、鄭白の饒も、以て比するに足らず。士の勇壯なる者あり、堅敵と雖も必ず破る。又節概の士あり、目を怒らしては劍を拔き、怒を含んでは弓を彎く。此の驍勇の衆を擁し、此の險絕の士に據る者は、必ず龍騰虎視し、以て强霸の鴻業を建て、城を攻むること枯木を摧くが如く、旗を搴ぐること指して之を取るが如し。甲冑を被ること一朝にして大功を立て、世を歷ること百世と雖も富彊絕ゆることなし。樂美の事皆此の方域の中に出で、仙人此地に集り、桂父赤須の如き輩あり。

中夏を焉に比ぶるに、世を畢へて見ること罕なり。(四四二)丹青其象を圖し、(四四三)珍瑋其寶利を貴ぶ。舜禹焉に游び、齒を沒るまで歸るを忘れ、精靈其の山阿に留り、其の奇麗を翫ぶ。(四四四)庶士を剖判し(四四五)萬俗を商攉すれば、國(四四六)鬱軮にして顯敞なるあり。邦(四四七)湫阨にして踡跼なるあり。伊れ茲都の(四四八)函弘なる、(四四九)神州を傾けて韞櫝し、(四五〇)南斗を

【四四二】丹青。繪畫なり。
【四四三】珍瑋。珍寶なり。
【四四四】庶士。衆事なり。剖判は分別すること。
【四四五】萬俗。萬國の風俗。商攉は是非善惡をはかり定むること。
【四四六】鬱軮。盛なる貌。顯敞は高廣の貌。
【四四七】湫阨。低くして狹きこと。踡跼はかがまり舒びざること。
【四四八】函弘。廣大なり。
【四四九】神州。中國をいふ。韞櫝は櫝に藏むること。
【四五〇】南斗。星の名。斗はもと酒を酌む具なり。

仰いで以て斟酌し、（四五一）二儀の優渥を兼ぬ。此に由りて之を揆れば、西蜀の東吳に於けるは、小大の相絕たると、亦猶（四五二）棘林螢燿と夫の（四五三）尋木龍燭とのごとく、（四五四）否泰の相背けると、亦猶（四五五）帝の懸解と夫の（四五六）疏屬に桎梏せられたるとのごとし。甯ぞ世を共にして（四五七）巨細を論じ、年を同うして（四五八）豐确を議すべけんや。（四五九）其幽遐獨邃寥廓閒奧なるに暨んでは、耳目の該ばざる所、（四六〇）足趾の蹈まざる所なり。（四六一）倜儻の極異、（四六二）崫詭の殊事、理を（四六三）終古に藏めて、未だ（四六四）前覺に寤られざるなり。吾子の傳ふる所の若きは、（四六五）孟浪の遺言なり、略其（四六六）梗槪を擧げて、未だ其要妙を得ざるなりと。

【大意】中夏の國を以て、之を我が吳都の珍異に比するに、神仙の如きは中夏に於ては世を畢へて見ざる所にして、僅に丹青の其の形象を圖畫するを見るのみ。珍寶に於ても亦然り。ただ

【四五一】二儀。天地なり。
【四五二】棘林。イバラの林。螢燿は螢の光なり。
【四五三】尋木。大木なり。山海經に尋木長サ千里とあり。龍燭は鍾山の神の名、此神視れば晝となり。瞑すれば夜となる。
【四五四】否泰。安泰なると不安なると。
【四五五】懸解、解放といふが如し。自由を許さるること。帝は天帝なり。
【四五六】疏屬。山の名。山海經に貳負猰貐ヲ殺ス、帝乃チ之ヲ疏屬ノ山ニ梏シ、其右足ヲ桎シ、兩手ヲ反縛スとあり。桎梏は手かせ足かせを加ふること。
【四五七】巨細。大小といふが如し。
【四五八】豐确。厚薄といふが如し。
【四五九】幽遐云云。寬深の處をいふ。
【四六〇】足趾。足なり。
【四六一】倜儻。殊絕なり。
【四六二】崫詭。奇異なり。
【四六三】終古。永遠なり。
【四六四】前覺。先覺に同じ。昔の識者なり。
【四六五】孟浪。あてもなきそらごと。
【四六六】梗槪。大略なり。

其の貴ぶべく利とすべきを知るのみにして、未だ之を目撃せることなきなり。宜なるかな舜禹此地に遊んで歸るを忘れ、遂に此地に歿し、其靈魂永く此地に留まりて、其奇麗を玩賞するや。衆事を分別し萬國の俗を考量するに、或は鬱茂にして高顯なるあり、或は狹隘にして蹐跼なるあり。ただ我が吳都は獨り寬博廣大にして中國を包含し、南斗を仰ぎ取りて以て酒を酌み、實に天地の優游を極む。此に由りて之を觀れば、西蜀の東吳に於けるは、其大小の異ること、恰も棘林螢光と尋木龍燭との大小を異にするが如く、又其泰否の相反せるは、恰も天帝の解放を得たる自由鄉と、疏屬山に桎梏せられたる拘束鄉との相反するが如し。其大小厚薄は、到底年を同うして論ずべからざるなり。殊に其の非常詭異の處に至りては、耳目の及ばざる所、足未だ其地を蹈まざる所にして、又先覺者の未だ知らざる所なり。足下の說く所の蜀都の美麗の如きは、孟浪の妄言のみ。余今吳都の大略を述べたるのみ。其の奧妙に至りては、未だ說き及ぶに遑あらざるなりと。

(一)魏都の賦

左太沖

(二)魏國先生(三)睟たる其容あり。乃ち(四)盱

【一】魏都。曹操鄴に都し、國を魏と號す。

【二】魏國先生。假に設けたる人物なり。

【三】睟。溫潤なり。

【四】盱衡。目を張り眉を擧ぐ

衡して語げて曰く、异なるかな(五)交益の士。蓋し(六)音に楚夏あるは土風の乖けばなり。情に(七)險易あるは習俗の殊なればなり。則ち(八)常を生すと雖も、固より(九)自得の謂にあらざるなり。昔(一〇)市南の宜僚、丸を弄して(一一)兩家の難解けぬ。聊か吾子の爲に復た(一二)德音を翫び、以て(一三)二客の(一四)辯囿に競ふことを釋かん。

【大意】魏國先生もと溫平たる風貌あり。今東吳王孫と西蜀公子と、(吳都賦、蜀都賦參照)各〻其都の華麗を競ひて爭論するを見、乃ち目を張り眉を擧げて之に告げて曰く、異なるかな二子の相爭ふや。蓋し言語に楚夏の差異あるは、土壤風俗の同じからざればなり。情に險易の別あるは、習俗の異るに因るのみ。積習の結果、人の常性となることありと雖も、固より天性の自然にあらず。昔宜僚丸を弄して兩家の爭論を解けりといふ。余今亦吳蜀二客の爲に、德音を以て其爭論を止めんと。

ること。

【五】交益。交は交趾なり、吳の地なり。益は益州、蜀の地なり。

【六】楚夏。楚は南夷の國、夏は中國なり。音は人の語音なり。荀子に人楚ニ居レバ楚、夏ニ居レバ夏、天性ニアラザルナリ、積靡然ラシムルナリとあり。

【七】險易。好惡なると穩當なること。

【八】常を生す。積習常性となるなり。

【九】自得。自然の天性といふが如し。

【一〇】市南。地名なり。宜僚は人名。丸を弄するを巧なり。

【一一】兩家。白公楚の子西と戰はんとす、白公宜僚を召して之を用ひんとす、宜僚從はず丸を弄すること自若たり、白公之に感じて遂に兵を止む、是れ兩家の爭難解けたるなり。

【一二】德音。德義の言なり。

【一三】二客。西蜀公子と東吳王孫とを指す。蜀都賦の二五、二六を見よ。

【一四】辯囿。議論なり。

夫れ(一五)泰極剖判して(一六)造化權輿し、體晝夜を兼ね、理淸濁を包ね、流れて江海となり、結んで山嶽となり、列宿(一七)其野を分ち、(一八)荒裔其隅を帶り、巖岡潭淵は蠻を限り夷を隔つる峻危の竅なり。(一九)蠻陬夷落、(二〇)譯導して通ずる者は鳥獸の氓なり。(二一)位を正し體に居る者は(二二)中夏を以て(二三)喉舌となし、(二四)邊陲を以て(二五)襟帶となさず。世に長とし甿を字ふ者は、道德を以て藩となし、(二六)襲險を以て屛となさず。而して(二七)子は大夫の賢なるも、尙曾て(二八)等威を襲けんことを庶ひ、(二九)皇極に附麗し、(三〇)正朔を稟けんことを思ひ、(三一)貢職に率ふを樂まずして、徒に(三二)匪民に詭隨し、絕域に宴安し、其(三三)文身を榮とし、其(三四)險棘に驕らんことを務め、默語の常倫を謬り、(三五)膠言に牽かれて踰え侈り、(三六)華離を飾りて以

【一五】泰極。太極なり、天地萬物の大本をいふ。剖判は分るること。
【一六】造化。萬物を生成する自然力なり。權輿は始めて起ること。
【一七】其野。野とは星の分野なり。
【一八】荒裔。遠方の邊地。
【一九】蠻陬夷落。蠻夷の住する處。
【二〇】譯導。飜譯して意思を通ずること。
【二一】位を正し。位は天子の位なり。體は天子の體なり。
【二二】中夏。中國なり。
【二三】喉舌。樞要の處に喩ふ。
【二四】邊陲。蠻夷邊鄙の地。
【二五】襟帶。樞要の地に喩ふ。
【二六】襲險。重險なり。
【二七】子。吳蜀二客を指す。
【二八】等威。等差威儀なり。
【二九】皇極。大中至正の道。附麗は附著といふが如し。
【三〇】正朔。曆をいふ。臣として事ふるを正朔を受くといふ。
【三一】貢職。貢を納め職責を奉ずること。
【三二】匪民。蠻夷なり。詭隨は善を去りて惡に隨ふこと。
【三三】文身。身にイレズミすること、蠻夷の風俗なり。
【三四】險棘。險阻なり。
【三五】膠言。義を度らざるの言なり。
【三六】華離。地形の犬牙交錯するをいふ。矜然は誇ること。

て矜然たり。(三七)倔彊を假りて臂を攘げ、醇粹の方に壯なるにあらず、(三八)蹐駮を王義に謀る。孰れか(三九)靡蓱を中逵に尋ね、(四〇)沐猴を棘刺に造るに愈らんや。(四一)劍閣礙しと雖も之を憑む者は蹶る。根を深くし蔕を固くする所以にあらず。(四二)洞庭濬しと雖も之を負む者は北る。人を愛し國を治むる所以にあらず。彼の(四三)桑楡の末光は(四四)長庚の初暉に踰ゆ。況んや(四五)河冀の爽塏と(四六)江介の湫湄とをや。故に將に子に語るに(四七)神州の略、(四八)赤縣の畿、魏都の(四九)卓犖、(五〇)六合の樞機を以てせんとす。

【大意】 夫れ太極分れて造化の功起り、一晝一夜既に昏明をなし、一淸一濁是を天地となす。流れて江海となり聚りて山岳となり、九州の分野各ゝ星紀あり。荒遠の國中國の隅に帶在し、巖岡江河を以て、蠻夷嶮危の地を限る。蠻夷の言語は中國と相通ぜず。乃ち繙譯を借りて其意を通ずれば、則ち禽獸と擇ぶ所なきなり。抑ゝ君の位

【三七】倔彊。心の暴戾なること。
【三八】蹐駮。乖亂なり。
【三九】靡蓱。流ろる水草。中逵は中路といふが如し。
【四〇】沐猴。猿猴なり。棘刺はイバラのトゲ。韓非子に衞人曰ク、臣ヨク棘刺ノ端ヲ以テ母猴ヲ爲ランとあり。
【四一】劍閣。蜀に在る山の名。
【四二】洞庭。吳の境に在る湖の名。
【四三】桑楡。日の入る處。
【四四】長庚。太白星卽ち宵の明星なり。
【四五】河冀。黃河冀州なり。魏都は河冀の間に在り。爽塏は土地の高燥なること。
【四六】江介。介は界に通ず、吳は楊子江の界に在り。湫湄は狹小なる濕地。
【四七】神州。中國なり。
【四八】赤縣。中國なり。
【四九】卓犖。高越なり。
【五〇】六合。上下四方をいふ。樞機は樞要なり。

を正し君の體に居る者は、中夏を要地となす。豈に蠻夷邊陲の處を以て要地となさんや。世に長となり、民を養ふ者は、道德を以て守となす。豈に險阻を以て守となさんや。足下の如きは大夫の賢者なりと雖も、尙ほ此意に昧く、等差威儀を翼け大中の道に附き、我が魏王の正朔を奉じて、之に臣事するを樂まず、徒に道を曲げて蠻夷に隨ひ、絕遠の地に安逸し、文身を以て榮となし(吳に就いて言ふ)險阻を以て驕となし(蜀に就いて言ふ)語默の道を誤り、不義の言に迷ひ、地形の不正を飾りて之を矜り(蜀に就いて言ふ)士卒の暴戾勇悍を誇り(吳に就いて言ふ)純美の道に乖き、王者の義を乖亂せんことを謀る。是れ實に水草を陸路に尋ね、棘刺を以て沐猴を造らんとするに異らず。たとひ劍閣險なりと雖も、之を憑んで德を修めざれば必ず敗る。固より根を深うし本を固うする所以にあらず。(蜀に就いて言ふ)洞底深しと雖も、之を負んで德を修めざれば必ず敗る。固より民を愛し國を治むる所以にあらず。夫れ日輪の餘光は、尙ほ太白金星の明にまさる。我が魏都の高燥なるは、固より江邊の小洲(吳を指す)にまさること遠し。故に余將に二子に語るに我が魏都の高絕を以てせんとす。

時に(三一)運陽九に距り、(三二)漢網維を絕ち、(三三)姦回內に攝り。兵(三四)紫微に纏り、(三五)翼翼たる京室

【三一】運陽九。運は世運、陽九は災厄なり。
【三二】漢網。漢室の法度なり。
【三三】姦回。姦邪の徒なり。宦官を指す。漢室の亂は宦官より起る、故に內に攝るといふ。
【三四】紫微。天帝の居なり、因つて天子の宮殿をいふ。
【三五】翼翼。美なる貌。京室は京師なり。

(五六)耽耽たる帝宇、巢のごとく焚け原のごとく燎え、(五七)變じて煨燼となる。故に荊棘庭に旅り、殷殷たる寰內(五八)繩繩たる八區、鋒鏑縱橫し、化して戰場となる。故に麋鹿城に寓り、(五九)伊洛は榛曠にして(六〇)崤函は荒蕪し、(六一)臨菑は牢落にして(六二)鄢郢は丘墟たり。而して是れ(六三)有魏國を開くの日、(六四)締構の初、萬邑焉を譬ふれば、亦猶ほ(六五)犨麋と(六六)子都と、(六七)培塿と方壺とのごとし。且つ魏士は(六八)畢昴の應ずる所、(六九)虞夏の餘人、(七〇)先王の桑梓、(七一)列聖の遺塵なり。之を(七二)四隈に考ふれば則ち(七三)八埏の中なり。之を寒暑に測れば則ち霜露の鈞うする所なり。(七四)卜偃前に識りて其隆を賞し、(七五)吳札歌を聽いて其風を美む。則ち(七六)衰代なりと雖も、盛德管

【五六】耽耽。深邃の貌。帝宇は帝居なり。
【五七】殷殷。盛衆の貌。寰內は天下なり。
【五八】繩繩。衆盛の貌。八區は八方なり。
【五九】伊洛。共に川の名、洛陽をいふ。榛曠は草木の繁茂すること。
【六〇】崤函。ともに關所の名、長安をいふ。
【六一】臨菑。齊の地名。牢落は寂寞なり。
【六二】鄢郢。楚の地名。
【六三】有魏。有は單に添ふる詞、魏をいふ。
【六四】締構。結構に同じ。
【六五】犨麋。昔の醜人の名。
【六六】子都。美人の名。
【六七】培塿。小阜也。方壺は方丈也、東海中に在る神山の名。
【六八】畢昴。星の名。魏は畢昴の分野なり。
【六九】虞夏。虞は舜、夏は禹、魏は舜禹の都せし地なり。餘人は後裔といふが如し。
【七〇】先王。虞夏を指す。桑梓は故鄉なり。
【七一】列聖。虞夏を指す。遺塵は遺跡なり。
【七二】四隈。四隅なり。
【七三】八埏。八方なり。
【七四】卜偃。晉の卜筮を司る官吏の名。晉の獻公畢萬を魏に封ず。卜偃曰く、畢萬の後必ず大ならんと。故に其隆を賞すといふ。
【七五】吳札。吳の季札なり。襄公十九年。吳の公子季札魯に來聘し、魏風を歌ふを聽き、美して曰く、美なるかな大にして婉なり、險にして行ひ易

絃に形れ、(七七)千祀を踰ぎたりと雖も、舊を懷ひて(七八)遐年に蘊む。

【大意】世運災厄に遇ひ、漢室其勢を失ふや、姦邪の臣内に怒り、亂兵宮殿を圍み、宮室盡く灰燼となり、庭中荊棘を生じ、天下一變して戰亂の巷となり、東西二京、臨菑鄢郢、皆荒蕪壞亂して丘墟となりぬ。是時に當りて我が魏、其國を開き、創業の初、既に萬邑相竝べり。之を譬ふれば吳蜀は猶ほ醜八小阜の如く、魏は美人神山の如し。且つ魏地は畢昴二星の分野に應じ、虞舜夏禹の遺都にして、方隅を考ふれば八方の中央に當り、寒暑を測れば霜露の均く被る所にして、卜偃前に之を識り其隆盛を賞し、吳の季札歌を聽いて其風を美めたり。其時方に衰微に當れりと雖も、盛德管絃に形れて、季札の知る所となり、歌風已に千歲に沒せりと雖も、我が魏復た此に都す。是れ古を懷ひて古昔に繼ぐ所以なり。

爾して其疆域は則ち齊秦を旁極し、(七九)冀道を結湊し、(八〇)胷を殷衛に開き、燕趙を跨り躡み、山林(八一)幽峽にして川澤廻繚し、(八二)恆碣靑霄に磧礍として(八三)河汾浩㶁として皓溔たり。南のかた(八四)淇澳を瞻れ

し。德を以て此に居らば、則ち明主たらんと。
【七六】衰代。春秋時代を指して言ふ。
【七七】千祀。千年なり。
【七八】遐年。遠き昔。
【七九】冀道。冀は州の名、道は國の名。
【八〇】胷。前といふが如し。殷は朝歌に都す、鄴の南に在り、衞も亦南に在り。故に胸を開くといふ。
【八一】幽峽。深邃なり。
【八二】恆碣。二山の名。磧礍は高き貌。
【八三】河汾。二川の名。浩㶁は水の流るる貌。皓溔亦同じ。
【八四】淇澳。二川の名。

ば、則ち綠竹（八五）純茂し、北のかた（八六）漳滏に臨めば、則ち冬夏沼を異にし、（八七）神鉦高巒に迢遞として、靈響時に（八八）四表を驚かし、温泉（八九）毖涌して自ら浪たち、（九〇）華淸邪を蕩して老い難し。（九一）墨井鹽池玄滋素液あり。（九二）厥田は惟れ中なり、厥壤は惟れ白し。（九三）原隰畇畇として（九四）墳衍斥斥たり。或は（九五）嵬藟として複陸たり、或は（九六）爣朗として拓落たり。（九七）乾坤交泰して烟熅し、（九八）嘉祥徵顯して豫め作る。是を以て（九九）振古に兆朕し（一〇〇）疇昔に萌柢し、氣を（一〇一）讖緯に藏め、象を（一〇二）竹帛に閟ぢ、時世を迥にして（一〇三）淵

【八五】純茂。美しく茂ること。

【八六】漳滏。二川の名。漳水は冷にして滏水は熱し。故に冬夏沼を異にすといふ。

【八七】神鉦。金の聲なり。鼓を節する所以のものなり。鄴の西北に鼓山あり、上に石鼓あり、時〻自ら鳴るといふ。今神鉦といふも實は鼓なり、字の誤なり。迢遞は遠く響くこと。

【八八】四表。四方の外なり。

【八九】毖涌。湧き出づること。

【九〇】華淸。華美にして淸潔なること。邪は疾病なり。

【九一】墨井。井中に石あり墨の如きなり。鹽池は鹽水の池なり。玄滋は黑き水なり、墨井の色をいふ。素液は白き水なり。鹽池の色をいふ。

【九二】厥田。書經の禹貢に田地を九等に分てり、冀州の田地は第五等にして中の中なり。

【九三】原隰。平原及び濕地。畇畇は平坦の貌。

【九四】墳衍。墳は堤なり、低くして平なるを衍といふ。斥斥は廣大の貌。

【九五】嵬藟。高低の貌。複陸は重疊すること。

【九六】爣朗。光明なり。拓落は寛廣の貌。

【九七】乾坤交泰。天氣と地氣と安らかに交ること。烟熅は氣の相交る貌。

【九八】嘉祥。瑞祥なり。徵顯は明に顯ること。

【九九】振古。往昔なり。兆朕はキザシをあらはすこと。

【一〇〇】疇昔。往昔なり。萌柢は本を生ずること。

【一〇一】讖緯。未來記といふが如し。

【一〇二】竹帛。書籍なり。

【一〇三】淵默。沈靜なり。

默たり。(一〇四)期運に應じて光赫たり。(一〇五)聖武の龍飛するに曁び、肇めて命を受けて(一〇六)光宅す。

【大意】我が魏の領域たる、東は齊に及び、西は秦に達し、北は冀道に跨り、南は殷衞燕趙に跨り、山林深邃にして川流之を繞り、恆山碣石、青雲の上に聳え、河汾滔滔として流れ、南方淇澳を見れば、綠竹茂生し、北方漳滏二水は、水の冷熱を異にし、神鼓山上に在りて、響四方を驚かし、溫泉湧出して病を醫し壽を延ばす。又鹽井鹽池あり、一は白水を湛へ一は黑水を湛ふ。其田地は中の中にして、土壤白色なり。高田低圃高低して連續し、天地の氣相交りて祥瑞夙にあらはれ、王者の氣象遠く昔時に現はれ、讖緯竹帛に密藏せらる。曠大沈靜の量あらば、乃ち期運に應じて大業を建つべし。我が武帝天命を受くるに及んで、乃ち此に都せり。爰に初め臻りしより、言に其良を占ふ。(一〇七)龜に謀り筮に謀るに、亦既に允に臧し。(一〇八)其郛郭を修め其城隍を繕め、(一〇九)經始の制百王を(一一〇)牢籠し、(一一一)雍豫の居を畫き、(一一二)八都の宇を寫し、(一一三)茅茨を陶唐に鑒み、(一一四)卑宮

【一〇四】期運。豫期なり。光赫は大に盛なること。
【一〇五】聖武。魏の武帝曹操なり。
【一〇六】光宅。都すること。
【一〇七】龜。龜の甲を燒きて卜すること。筮は筮竹なり、筮竹を以て占ふこと。
【一〇八】郛郭。外郭なり。
【一〇九】經始。始めて經營すること。
【一一〇】牢籠。包括すること。
【一一一】雍豫。雍は西京長安。豫は東京洛陽なり。
【一一二】八都。八方の都。
【一一三】茅茨。屋根を葺く草なり。陶唐は堯なり。墨子に堯舜ハ茅茨剪ラズとあり。
【一一四】卑宮。宮室を低くして節約せしこと。論語に禹ハ宮室ヲ卑クスとあり。

を夏禹に察し、(二二五)古公草創して(二二六)高門閌たるあり。宣王中興して室を築くこと(二二七)百堵なり。(二二八)聖哲の軌を兼ね(二二九)文質の狀を幷せ、(二三〇)豐約を商りて折中し、當年に準へて量をなし、(二三一)重爻を思ひ大壯に摹り、(二三二)荀卿を覽(二三三)蕭相に采り、(二三四)拱木を林衡に僝へ、全模を(二三五)梓匠に授く。(二三六)遐邇悅豫して子の如く來り、工徒(二三七)擬議して巧を騁せ、(二三八)鉤繩の筌緒を闡き、(二三九)二分の正要を承け、日晷を揆り星耀を考へ、(二三〇)社稷を建て(二三一)清廟を作り、(二三二)曾宮を築きて以て廻匝し、(二三三)岡隙に比べて陂くことなし。(二三四)文

【二二五】古公。文王の祖古公亶父なり。戎狄の爲に國を侵され岐山の下に遷り都邑を創建す。草創は始めて作ること。

【二二六】高門閌。閌は門限なり。門を作るに唯内外を限るのみなりしをいふ。

【二二七】百堵。一丈を板といひ、五板を堵といふ。周の宣王中興して復た宮室を修め儉約にして室を築くこと百堵なり。

【二二八】聖哲。堯禹古公宣王を指す。

【二二九】文質。文飾と質素。

【二三〇】豐約。奢侈と儉約。

【二三一】重爻。易なり、易に云く上古ハ穴居野處ス、聖人之ニ易フルニ宮室ヲ以テス、棟ヲ上ニシ宇ヲ下ニシ以テ雨風ヲ待ツ、蓋シ之ヲ大壯ニ取ルと。大壯は易の卦名。

【二三二】荀卿。荀子に宮室臺榭ハ以テ燥濕ヲ避ク、奢侈ノ爲ニアラザルナリとあり。

【二三三】蕭相。漢の相蕭何なり、蕭何漢の未央宮を作れり。

【二三四】拱木。ひとかかへの大きさを拱といふ。林衡は山林を主るの官なり。

【二三五】梓匠。木工なり。

【二三六】遐邇。遠近なり。悅豫は悅び樂むこと。

【二三七】擬議。はかり議すること。

【二三八】鉤繩。鉤は曲尺。繩はスミナハ。筌緒は古の良工の遺法なり。

【二三九】二分。春分秋分なり。春分秋分の日。日景の正しき時以て東西の位を正すなり。

【二三〇】社稷。社は土地の神を祭る祠、稷は穀物の神を祭る祠。

【二三一】清廟。祖廟なり。

【二三二】曾宮。層宮なり。

【二三三】岡隙。小丘なり。

【二三四】文昌。正殿の名。

昌の廣殿を造り、棟宇の（二三五）弘規を極め、（二三六）對たること崇山の若く、崫起して以て（二三七）崔嵬たり。（二三八）髧たること玄雲の蜺を舒べ以て高く垂るるが若し。

【大意】武帝初め茲に都するに方り、先づ其吉凶を卜筮に問ふ。其卜既に吉なり。乃ち外郭を修め城池を繕め、百王の制度を參考し、東西二京竝に八方の都を參酌し、唐堯夏禹古公宣王の節儉に倣ひて取捨折衷し、當年の豐儉に準ひ人力を量りて之を使ひ、周易大壯の說と、荀卿蕭何の說とに則り、林衡の官をして拱木を備へしめ、木工に授くるに法度を以てす。是に於て遠近の民皆悅び來りて工事を助け、恰も子の來りて父の事を成すが如く、工匠の徒忖度して巧妙を馳せ、古名工の遺法を繼ぎ、日星を度りて方角を正し、社稷宗廟を建てて遂に層宮に及ぶ。岡丘を廻匝して傾くことなく、文昌殿を造りて規模の廣大を極む。其狀高山の崛起するが如く、其色黑雲の霓を舒べて垂るるが如し。

（二三九）瓌材世に亘にして（二四〇）𡑞𡒊參差たり。（二四一）枌橑複ね結び、欒櫨疊ね施し、丹梁虹申して以て竝び亙り、朱桷（二四二）森布して支離たり。（二四三）綺井列疏りて以て蔕を懸け、（二四四）華蓮葩を重ねて倒に披き、

【二三五】弘規。廣大なる規模。
【二三六】對。高き貌。
【二三七】崔嵬。山の高き貌。
【二三八】髧。垂るる貌。
【二三九】瓌材。美材なり。
【二四〇】𡑞𡒊。相接する貌。參差は等しからざる貌。
【二四一】枌橑。棟梁なり。欒櫨は斗栱なり。
【二四二】森布。多く竝ぶこと。支離は分散する貌。
【二四三】綺井。屋上の承塵板の井形をなせるもの。飾るに丹靑を以てし綺文の如きなり。
【二四四】華蓮。蓮花なり。井中に皆蓮花を畫く。

（一四五）龍首を齊うして霤を涌し、時に（一四六）滮池に㮰概たり。旅楹閒に列り、暉（一四七）抰振を鑒し、榱題（一四八）黮䵘たり。（一四九）階陌嶙峋たり。長庭砥のごとく平に、（一五〇）鐘虡夾み陳り、風ふけども纖埃なく、雨ふれども微津なし。（一五一）巖巖たる北闕は（一五二）南端の遵ふ攸、（一五三）竦峭して雙び碣ち、駕を方べ輪を比べ、西のかた（一五四）延秋を闢き、東のかた（一五五）長春を啓き、用て（一五六）羣后を覲し（一五七）享を觀賓を頤ふ。

【大意】美材の當世に大なる者を集め、枌橑を結聚し斗拱を累ね施し、梁桷は塗るに朱を以てし、綺井下に向つて行布すること花蔕の懸るが如く、井中の蓮花は、下より之を見れば葩の倒に披けるが如く、龍首を爲りて檐の四隅に置き、以て霤を承け、雨水涌いて滮池に髣髴たり。楹列りて光屋內を照らし、榱題は塗るに黑を以てし、階欄は等級をなし、長庭は平なること砥の如く、鐘虡夾み陳り、風吹けども埃を揚ぐるなく、雨ふれども潤ふことなし。北門巖巖として聳え南門之に法り、相對して竝び立ち、廣大にして車を竝べて行くべし。西には延秋門あり、東

【一四五】龍首。龍の首なり。霤を受くるものなり。
【一四六】滮池。灌漑用の貯水池なり。㮰概は髣髴に同じ、相似たること。
【一四七】抰振。屋內なり。
【一四八】黮䵘。黑き貌。
【一四九】階陌。階は階段。陌は闌干。嶙峋は階段を成せる貌。
【一五〇】鐘虡。虡は鐘を懸くる框。
【一五一】巖巖。高き貌。北闕は北門なり。
【一五二】南端。正南の門なり。
【一五三】竦峭。峻高といふが如し。
【一五四】延秋。門の名。
【一五五】長春。門の名。
【一五六】羣后。諸侯なり。覲は面會すること。
【一五七】享。饗に同じ。

には長春門あり。天子此殿（文昌殿）に於て諸侯を見、賓客を饗養す。左には則ち（一五八）中朝赩たるあり。（一五九）聽政寢を作り、（一六〇）樸にもあらず斲れるにもあらず、泰を去り甚しきを去り、木には（一六一）彫鏤なく土には（一六二）綈錦なく、（一六三）玄化の甄る所（一六四）國風の稟くる所なり。前には則ち（一六五）宣明顯陽順德崇禮あり。（一六六）重闈洞り出でて（一六七）鏘鏘濟濟たり。珍樹（一六八）猗猗たり。（一六九）奇卉萋萋たり。（一七〇）蕙風薰の如く甘露醴の如し。（一七一）禁臺省中、闥を連ね廊を對し、（一七二）直事の繇る所、（一七三）典刑の藏する所、（一七四）藹藹たる列侍金蜩光を齊うし、（一七五）詰朝幄に陪し、（一七六）納言章あり、亞ぐに（一七七）柱後を以てし、（一七八）執法內に侍し。（一七九）符節謁者、璽を典り吏を

【一五八】中朝。內朝なり。赩は赤き貌。
【一五九】聽政。殿の名。文昌殿の東に聽政殿あり。內朝ここに存す。寢は正殿なり。
【一六〇】樸。彫琢を加へざる木。
【一六一】彫鏤。彫鏤なり。
【一六二】綈錦。飾を施すなり。
【一六三】玄化。聖化。德化に同じ。
【一六四】國風。詩經の國風。
【一六五】宣明。以下皆門の名。
【一六六】重闈。重なれる宮門。
【一六七】鏘鏘濟濟。衣冠の盛なる貌。
【一六八】猗猗。美盛の貌。
【一六九】奇卉。珍しき草。萋萋は盛なる貌。
【一七〇】蕙風。蕙は香草なり。
【一七一】禁臺省中。天子の居る所を禁中といひ、諸公の居る所を省中といふ。闥は門なり。
【一七二】直事。當直といふが如し。
【一七三】典刑。典籍刑法なり。
【一七四】藹藹。衆盛の貌。列侍は多くの侍臣なり。金蜩は金蟬なり。侍中常侍の冠は皆金蟬を飾とす。
【一七五】詰朝。平旦なり。早朝なり。幄は天子の居る所の帳なり。
【一七六】納言。言を出納すること。
【一七七】柱後。御史の官なり。
【一七八】執法。天子に侍りて人の過を察する官。
【一七九】符節。符契印璽を掌る官。謁者は取次を掌る官。璽は天子の印なり。

儲け、(一八〇)膳夫宮あり、藥劑司あり。(一八一)肴醳時に順つて、腠理則ち治る。

【大意】其東には中朝あり。衣冠盛艷にして光あり。聽政殿を以て正殿となす。此殿樸にあらず斲れるにあらず。奢らず吝ならず。務めて中法を取り、木には彫飾を加へず、土には綈錦を施さず。實に聖化の成る所にして、國風の贊する所なり。聽政殿の前には宣明顯陽順德崇禮の諸門相通じ、衣冠の往來鏘鏘濟濟たり。草樹の香、風之を傳へて火の香を焚くが如く、甘露草樹の上に墜ち、其香芬酒醴の氣の如し。禁臺省中門を連ね廊を對し、當直者の由りて出入する所、典籍刑法の蓄藏せらるる所にして、列侍の臣金蟬の冠を戴き、早朝より天子の帷幄に侍し、言議を出納すること文章あり。之に次ぎて御史執法の官あり。或は印璽を司り、或は吏事を通ず。膳夫藥劑の官あり。或は酒肴を供し、或は肌膚を治む。後には則ち(一八二)椒鶴文石、(一八三)永巷壼術あり。楸梓木蘭(一八四)次舍甲乙あり。其戸を西南にし之を成すこと日あらず。(一八五)丹青炳煥として特に(一八六)溫室あり。宇宙を儀形し賢聖を(一八七)曆象し、圖するに百瑞を以てし(一八八)綷するに

【一八〇】膳夫。天子の食を掌る官。藥劑は藥品を掌る官。
【一八一】肴醳。醳は醇酒なり。腠理は肌脈なり。
【一八二】椒鶴。聽政殿の後に鳴鶴堂、楸梓坊、木蘭坊、文石室あり、後宮婦人の居る所なり。後宮は椒を壁に塗る。故に椒鶴といへるなり。
【一八三】永巷。庭なり。壼術は道なり。
【一八四】次舍甲乙。宮舍の次序、甲乙の順序あるなり。
【一八五】丹青。彩色なり。炳煥は光りかがやく貌。
【一八六】溫室。殿の名。
【一八七】曆象。曆は歷に同じ、一一像を畫くこと。
【一八八】綷。五彩を合せ施したる繒。藻詠は頌詠すること。

藻詠を以てす。（一八九）茫茫たる終古此に則ち鑒み、（一九〇）有虞績を作し茲に亦等しく競ふ。右には則ち（一九一）疏圃曲池下畹高堂あり。（一九二）蘭渚は莓莓として石瀨は（一九三）湯湯たり。弱蔆實を係け輕葉芳を振ひ、奔龜躍魚（一九四）呂梁を睎るがごときあり。（一九五）馳道果下に周屈し、（一九六）延閣宇に胤いで以て經營し、（一九七）飛陛輦を方べて西に徑り、（一九八）三臺列び峙ちて崢嶸たり。（一九九）亢陽陰基に臺し、（二〇〇）華山の創成に擬へ、上に棟を累ねて霤を重ね、下に冰室ありて沍え冥し。

【大意】聽政殿の後に後宮婦人の宮あり。宮門或は西に向ひ、或は南に向ひ、日ならずして之を成す。溫室殿は特に文彩爛然として、天地の形、聖賢の像、百瑞の物を畫き、藻するに贊頌の辭を以てし、人主をして之を見て以て安危の理を知り、古を以て鏡となさしめ、虞舜の繢畫彝器を作りて鑑戒となしたると、其意を等うす。西には菜園曲池平田小亭あり。渚蘭は莓莓と

【一八九】茫茫。遠き貌。終古は往古なり。

【一九〇】有虞。有はただ添ふる辭にて意義なし、虞舜をいふ。績は五彩にて畫ける繪。書經益稷篇に舜の言を擧げて予古人ノ象ヲ觀ント欲シ。日月星辰山龍華蟲繪ヲナスとあり。

【一九一】疏圃。疏は蔬に通ず、菜圃なり。曲池は池なり。畹は田なり。高堂は圃中の亭なり。

【一九二】蘭渚。蘭を植ゑたる曲池の渚。莓莓は盛なる貌。

【一九三】湯湯。急に流るる貌。

【一九四】呂梁。川の名、其水急に流る。莊子に見ゆ。

【一九五】馳道。天子の御成道。

【一九六】延閣。連延せる高閣。

【一九七】飛陛。飛棧といふが如し。

【一九八】三臺。中央に銅雀臺あり、南に金鳳臺あり。北に冰井臺あり。崢嶸は高き貌。

【一九九】亢陽。高き屋根なり。陰基は基なり。下にある故陰といふ。

【二〇〇】華山。山の名。

して茂り、奔湍は湯湯として走り、枝頭に果實を綴り輕葉芬芳を吐き、龜弄り魚躍りて呂梁の如く、馳道は果下に屈曲し、樓閣は連延し、棧道は輦を竝べて馳すべし。三臺崢嶸として聳え、華山の削り成せるが如く、上には屋簷を重ね、下には氷室あり。

【二〇一】周軒天に中し【二〇二】丹墀猋に臨み、【二〇三】增構峩峩として淸塵【二〇四】彯彯たり。【二〇五】雲雀甍を踶んで首を矯げ、【二〇六】壯翼鏤を靑霄に摛べ、雷雨【二〇七】窈冥にして未だ半ならず、皦日光を【二〇八】綺寮に籠め、【二〇九】歩頓を習ひて以て升降し、春服を【二一〇】御して逍遙し、【二一一】八極を寸眸に團むべく、萬物を一朝に齊うすべし。【二一二】長塗牟首豪徼互に經、【二一三】晷漏肅唱して【二一四】明宵程あり。附くるに【二一五】蘭錡を以てし、宿するに禁兵を以てし、司衞邪を閑ぎ【二一六】鉤陳驚くことなし。是に於て崇墉濬洫【二一七】堞を嬰り【二一八】涘を帶び、四門【二一九】轇轇と

【二〇一】周軒。長廊の窓あるものありて周廻せるをいふ。
【二〇二】丹墀。丹漆を以て地を塗る。宮殿の庭なり。猋は風なり。
【二〇三】增構。層構なり。高きかまへ。峩峩は高き貌。
【二〇四】彯彯。輕く擧る貌。
【二〇五】雲雀。鳳なり。
【二〇六】壯翼。健翼なり。鏤は彫刻なり。
【二〇七】窈冥。暗きこと。
【二〇八】綺寮。綺窓なり、ウスギヌにて飾れる窓。
【二〇九】歩頓。進退歩趨なり。
【二一〇】御。著ること。
【二一一】八極。八方のはてなり。
【二一二】長塗。長き途。牟首は閣道の室あるもの。豪徼は道なり。
【二一三】晷漏。時刻を報ずる屋なり。
【二一四】明宵。晝夜なり。
【二一五】蘭錡。兵器の架なり。
【二一六】鉤陳。星の名、帝宮を侍衞す。故に衞兵をいふ。
【二一七】堞。城の上のヒメガキ。
【二一八】涘。水涯なり。
【二一九】轇轇。高き貌。

して（二三〇）隆廈重り起り、（二三一）太淸に憑りて以て混成し、（二三二）埃壒を越えて資り始め、（二三三）邈邈として摽危し（二三四）亭亭として峻峙し、（二三五）焦原に臨むも悦へられず、誰か勁捷にして懼ることなけん。岡岑と與にして永に固く、（二三六）世祀を期することあるにあらず。（二三七）陽靈曜を其表に停め、（二三八）陰祇霧を其裏に濛くす。

【大意】周廊高く中天に聳え、丹墀下飈風に臨み、屋宇深淨にして塵濁なく、屋上の大鳳鏤刻を靑霄に輝かし、雷雨陰暗僅に高臺の半に達し、日光高く綺窓を籠む。天子步趨を學んで此に升降し春服を著て徜徉す。八極の遠きも之を寸眸に收むべく、萬物の異も一時に之を齊一にすべし。長途大道互に相經過し、刻漏嚴肅にして晝夜之を輟ず。禁兵此に宿し蘭錡此に屬し、侍衞の人其の邪惡を防ぎて驚擾することなし。宮闕高城の堞を繞り、深溝の涯を帶び、四門高く聳え大廈重り立ち、天に憑りて混成するが如く、塵を超えて造作し、焦原に臨むと雖も、比況する能はず。勁捷の人と雖も、懼れざるはなし。堅固なること山の如く、千歲を經るも崩るることなし。白日光を停めて其上に在り。雲雨の神烟霧を其內に暗くす。

【二三〇】隆廈。大屋なり。
【二三一】太淸。天なり。
【二三二】埃壒。塵昏の氣なり。
【二三三】邈邈。遠き貌。摽危は高く立つこと。
【二三四】亭亭。高き貌。
【二三五】焦原。山の名、山東省莒縣の南に在り。尸子ニ莒ニ石焦原アリ、廣サ尋長サ五十步。百仞ノ溪ニ臨ムとあり。
【二三六】世祀。歲月なり。
【二三七】陽靈。日なり。
【二三八】陰祇。雲雨の神なり。

(三二九)菀するに玄武を以てし、陪するに幽林を以てし、垣を繚らし囿を開き、觀宇相臨み(三三〇)碩果灌叢し、園木(三三一)竦蕁なり。(三三二)篁篠風を懷き蒲桃陰を結び、回淵灌くして積水深く、(三三三)蒹葭贙として(三三四)藿蒻森たり。丹藕波を淩いで(三三五)的礫たり。綠芰濤に泛んで(三三六)浸潭たり。(三三七)羽翮頡頏し(三三八)鱗介浮沈し、棲む者は木を擇び、雊く者は音を擇び、(三三九)渤澥と姑餘とに咆くが若く、常に鳴鶴ありて陰に在り。(三四〇)淸籞を表し(三四一)虞箴を勒し、國卹を思ひて禽に從ふことを忘れ、(三四二)樵蘇往くも忌むことなく、鹿に卽くも縱にして禁ずるにあらず。(三四三)膴膴たる坰野(三四四)奕奕たる(三四五)菑畝あり。甘荼伊れ蠢たり、芒種斯れ阜なり。(三四六)西門其前に溉ぎ(三四七)史起其後に灌ぎ、(三四八)墱流十二にして、源を同うし口を異にし、蓄りて屯雲となり、泄れて行雨となる。水には秔稌を澍

【三二九】菀。苑なり。玄武は苑の名。
【三三〇】碩果。大なる果實。灌叢は叢生すること。
【三三一】竦蕁。大なること。
【三三二】篁篠。叢竹なり。
【三三三】蒹葭。ヲギ、アシ。贙は分別の貌。
【三三四】藿蒻。ともに草の名。
【三三五】的礫。水に映ずる貌。
【三三六】浸潭。浮ぶ貌。
【三三七】羽翮。鳥をいふ。頡頏は飛上り飛下ること。
【三三八】鱗介。魚貝なり。
【三三九】渤澥、姑餘。皆海なり。
【三四〇】淸籞。池水中に竹籬を編みて魚を養ふ處。イケス。

【三四一】虞箴。虞人の箴言なり。虞人とは狩場を主る官なり、其辭左傳に見ゆ。
【三四二】樵蘇。きこり、くさかり。
【三四三】膴膴。美なる貌。坰野は郊野なり。
【三四四】奕奕。盛なる貌。
【三四五】菑畝。荒草の生えたる田。
【三四六】西門。人名。西門豹なり。西門豹漳水を引いて鄴に溉ぎ以て魏の河内を富ませり。
【三四七】史起。人名。鄴の令となり、遂に漳水を引いて鄴に溉げり。
【三四八】墱流。川の支流なり。

ゑ、陸には稷黍を蒔ゑ、(二四九)黝黝たる桑柘、(二五〇)油油たる麻紵あり。(二五一)均田疇を畫りて(二五二)蕃廬錯り列り、薑芋充茂して桃李蔭翳し、家々其所に安んじ、美を服して自ら悅び、邑屋相望み、隔踰して世を奕ぬ。

【大意】鄴城の西に玄武苑あり。苑中に幽林あり。墻を繞らして苑囿を開き、觀宇處處に點在し、果實纍纍として園木長大なり。叢竹風を含み蒲萄陰を成し、深淵積水あり。蒹葭叢生し、紅蓮綠芰水波と相映じ、飛鳥上下し魚鼈浮沈し、木を擇んで棲み音を擇んで鳴き、各々其所を得て優游自得し、渤澥姑餘の大海に在ると一般にして、其天性を失はず。池籞を公開し虞箴を戒勸して、人の取るに任せ、國人の憂を思ひて狩獵の樂に耽るなく、樵蘇の出入を禁せず、苑中の鹿を狩るも忌むことなし。蓋し民と其樂を偕にするなり。又沃野美田あり。甘荼此に生じ稻麥共に豐なり。嘗て西門豹史起の二公、漳水を引きて此に漑ぎ、支流十二あり。集りては屯雲となり、別れては行雨となる。水田には秔稌を植ゑ、陸田には稷黍を植ゑ、桑柘麻紵盛に茂り、均田其分界を定め、廬舍錯雜し、家々其食を甘しとして其服を美とし、邑屋相望むも阻絕して世を終るまで相往來せず。實に太平の樂土なり。

内には則ち街衢輻湊して朱闕隅を結び、石杠飛梁あり(二五三)漳渠を出し控き、通溝を疏して以て路に濱

【二四九】黝黝。黒き貌。
【二五〇】油油。盛なる貌。
【二五一】均田。人民に分ち與ふる田地なり。
【二五二】蕃廬。蕃は屛なり。廬は屋舍なり。
【二五三】漳渠。川の名、漳水なり。

ひ、青槐を羅ねて以て塗を蔭ひ、（二五四）滄浪に比べて濯ぐべく、（二五五）歩櫚に方べて踰ゆるあり。（二五六）習習たる冠蓋、（二五七）莘莘たる蒸徒あり。（二五八）斑白提げず、行旅衢を讓り、官を設け職を分ち、營に處り署に居り、之を夾むに（二五九）府寺を以てし、之に班ぐに里閭を以てす。其府寺は則ち位（二六〇）三事に副ひ官（二六一）六卿に踰え、（二六二）太常の號、（二六三）大理の名あり。夏屋揆を一にし華屏（二六四）榮を齊うし、（二六五）肅肅たる階闥あり、重門再び扃し、（二六六）師尹爰に止り、世を毗け禎を作す。（二六七）其閭閻は則ち（二六八）長壽、吉陽、永平、思忠あり。亦（二六九）戚里ありて宮の東に寘く。閈には長者を出し巷には諸公を苞ね、（二七〇）都護の堂殿綺窓を居き、輿騎朝に猥り其中に（二七一）蹀紱す。客館を營みて以て坊を周らし、賓侶の集る所を飾り、豐樓の（二七二）閈閎を瑋しくし、（二七三）建安より起りて首めて立て、葺牆

【二五四】滄浪。川の名、楚辭に滄浪ノ水淸マバ以テ吾が纓ヲ濯フベシとあり。

【二五五】歩櫚。長廊なり。

【二五六】習習。盛なる貌。冠蓋は冠及び車蓋。高官の人をいふ。

【二五七】莘莘。衆き貌。蒸徒は衆民なり。

【二五八】斑白。白毛まじりの老人。

【二五九】府寺。役所なり。

【二六〇】三事。正德、利用、厚生なり。書經大禹謨に見ゆ。

【二六一】六卿。周禮の六官なり。

【二六二】太常。官名、宗廟を主る。

【二六三】大理。官名、刑獄を斷ずる事を主る。

【二六四】榮。屋翼なり。

【二六五】肅肅。嚴整の貌。兩階の間を闥といふ。

【二六六】師尹。國の政事を主る大官。

【二六七】閭閻。里門なり。

【二六八】長壽。以下皆里坊の名。

【二六九】戚里。天子の外戚の居る里なり。

【二七〇】都護。將軍曹淵なり。

【二七一】蹀紱。累積といふが如し。

【二七二】閈閎。閈は巷門。閎は門中の道なり。

【二七三】建安。年號なり。

幕室あり、房廡雜り襲ぎ、(二七四)剞劂揆むことなく、(二七五)匠斲積み習ひ、(二七六)廣成の傳も以て儔ぶなく、(二七七)槀街の邸も及ぶ能はず。

【大意】鄴城の內には街衢輻湊し、朱樓角を結び、石橋引いて漳水の上に在り。溝渠を路傍に流通し、列植するに靑槐を以てし、渠の淸きは以て滄浪の纓を濯ふに比ぶべく、槐樹の蔭は長廊の下に踰ぐるあり。貴賤の往來頻繁にして、斑白の老者は道路に負戴せず、行旅の人互に道を相譲る。官司を設け職務を分ち、居處を營置して府寺を夾み、閭里の間に分布し、各〻其所を得しむ。府寺の官は三事に副ひ六卿に踰え、太常大理等の名號あり。廈屋墻屛皆其制を同うし、階闥嚴整にして門闕を複ね、公卿此に在り天子を輔けて政をなす。民居には長壽、吉陽、永平、思忠等の坊あり。戚里亦帝宮の東に在り。門には長者を出し、巷には公侯の宅あり。都護の堂殿亦ここに在り、飾るに綺窓を以てし、車馬の客、朝朝其中に雜遝す。又諸處に客舍を設け、賓客集會の所となす。建安中の創建に係り、牆を葺き室を塗り、斧斤工人輟むことなく、積習して以て漸く理む。廣成の傳舍、槀街の夷邸も、及ぶ能はざる所なり。

(二七八)三市而廓にして(二七九)廛を開き、(二八〇)平逵の九

【二七四】剞劂。斧斤なり。
【二七五】匠斲。工人なり。
【二七六】廣成。秦の客館の名。傳は傳舍なり、客館をいふ。
【二七七】槀街。長安にある蠻夷の邸なり。
【二七八】三市。晝市、朝市、夕市の三なり。

逵に籍り、列肆を班きて以て兼羅し、（二八一）闤闠を設けて以て襟帶し、有無の（二八二）常偏を濟ひ、日中に距りて畢く會し、（二八三）旗亭の嶢嶭たるを抗げ、眺る所の博大なるに侈る。（二八四）百隧轂擊して軫を連ぬること萬貫、（二八五）軾に憑り馬に捶ち、（二八六）袖幕紛半たり。八方を一にして混同し、風采の異觀を極め、（二八七）質劑平うして交易し、（二八八）刀布貿へて算なし。（二八九）財は工を以て化し（二九〇）賄は商を以て通じ、得難きの貨は此に則ち容れず、器は用を周くして長く務め、物は盬きに背いて攻きに就き、邪を鬻いで豫め賈はず、（二九一）馴致の醇釀を著す。（二九二）白藏の藏富有隄なく、賑を（二九三）大内に同うし、世資を控引し、（二九四）賨幏積み墆へ（二九五）琛幣充ち牣ち、（二九六）鬮石の和鈞する所、財賦の底し愼む所なり。（二九七）燕弧庫に盈ちて勁を委み、（二九八）冀馬廐に塡ちて（二九九）駔駿なり。

【二七九】逵。市道なり。
【二八〇】平逵。平なる道なり。
【二八一】闤闠。市中の巷。
【二八二】常偏。貨物の一方に偏すること。
【二八三】旗亭。市樓なり。嶢嶭は高峻の貌。
【二八四】百隧。隧は市道なり。轂擊は車のコシキの打ち合ふこと。
【二八五】軾。車前の横木。人の憑る所のものなり。
【二八六】袖幕。史記に衽ヲ連ネテ帷ヲ成シ、袂ヲ擧ゲテ幕ヲ成スとあり。紛半は紛然たること。
【二八七】質劑。預り證文なり。
【二八八】刀布。貨幣なり。
【二八九】財。材料なり。
【二九〇】賄。貨物なり。
【二九一】馴致。古道に遵ふこと。醇釀は酒の厚きなり、政の敦厚なるに喩ふ。
【二九二】白藏。倉の名。
【二九三】大内。天子の寶庫なり。
【二九四】賨幏。賨は南夷の税の名。幏は布なり。
【二九五】琛幣。珠玉を琛といひ、布帛を幣といふ。
【二九六】鬮石。秤なり。和鈞は平なり。
【二九七】燕弧。角弓なり。幽燕の地より出づ。
【二九八】冀馬。冀北より産する駿馬。
【二九九】駔駿。駔は壯なり。

【大意】三市を平道九達の處に開き、肆店を列ねて貨物を羅列し、市中の巷路市を繞りて衣の襟帶の如く、以て有無相通ぜしむ。市樓は高大にして物資は極めて豐富なり。隧路の間肩摩轂擊し、相連貫して萬數に至る。軾に憑る者、馬に鞭つ者、衣袖繽紛たり。八方を混同して一所に歸せしめ、各種の風采を一所に觀るを得、質劑刀布公平にして賣買無數なり。各種の材料は工人之に加工し、製作せる貨物は商賈之を通じ、遠方の異類寶玉の如く、得難きの物は市に於て之を容れず。器物は專ら實用を尙び、濫を去りて堅に就き、邪惡の物を鬻ぎて射利を事とせず、古道に遵つて醇厚の風を存す。白藏の藏は大內と豐を同うし、富有限りなく天下の資財を控引し、珠玉布帛、南夷の產また此に充滿し、秤量公平にして、財物貢賦の致す所の者、常を失ふことなく、幽燕の弧庫に盈ち、冀北の馬廐に滿つ。

勍敵(三〇〇)糾紛し(三〇一)庶土寧きことなきに至り、(三〇二)聖武興つて言に將に威靈を曜かさんとし、(三〇三)介冑重襲し旌旗莖を躍らし、(三〇四)弓珧(三〇五)檠を解き(三〇六)矛鋋英を飄し、(三〇七)三屬の甲、(三〇八)縵胡の纓、弦を控いて簡び發ち、妙(三〇九)更

【三〇〇】糾紛。入亂るる貌。
【三〇一】庶土。天下なり。
【三〇二】聖武。魏の武帝曹操なり。
【三〇三】介冑。甲冑なり。重襲は重ねて著ること。
【三〇四】弓珧。弓なり、蛤骨にて飾れる弓なり。
【三〇五】檠。弓の曲りたるを矯むるもの。
【三〇六】矛鋋。矛なり、英は矛の飾。
【三〇七】三屬。屬は連なり。三札相重り連れる甲。
【三〇八】縵胡。武士の纓の名。纓は冠の紐なり。
【三〇九】更贏。古の善射者の名。戰國策に見ゆ。

嬴に擬へ、(三一〇)被練を齊へて戈を銛くし、(三一一)偏裻を襲て以て(三一二)讀列し、畢く出征して(三一三)律に中り、(三一四)奇正を執りて以て四に伐ら、(三一五)碩畫精通し、目るところ制に匪るなく、鋒を推し(三一六)紀を積み、(三一七)鋩氣彌〻銳く、(三一八)三たび接り(三一九)三たび捷ち、既に晝にして亦月なり。(三二〇)方命を剋剪し、(三二一)咆咻を吞滅し、雲のごとく(三二二)叛換を撤け、席のごとく(三二三)虔劉を卷き、威を(三二四)八紘に裬にし、(三二五)荒阻率ひ出り、(三二六)兵を海島に洗ひ馬を江洲に刷ひ、(三二七)振旅輷輷として反旆(三二八)悠悠たり。(三二九)凱歸して同じく飲み、爵を

【三一〇】被練。甲裘なり。

【三一一】偏裻。左右色を異にする衣。軍服の名。

【三一二】讀列。ならぶこと。

【三一三】律。軍隊の規律。

【三一四】奇正。奇計正計なり。奇計を用ひて敵の不意に出づるを奇といひ、正正堂堂の計を用ふるを正といふ。

【三一五】碩畫。大に奇計を畫策すること。

【三一六】紀。十二年を一紀といふ。武帝は初平元年より兵を起し、建安二十年に至り、軍克たざるなし。故に紀を積むといふ。

【三一七】鋩氣。銳氣といふが如し。

【三一八】三たび接り。一日に三度接戰すること。易に晝日三接とあり。

【三一九】三たび捷ち。一月に三度勝つこと。詩に一月三捷とあり。

【三二〇】方命。王命に逆ふ者。

【三二一】咆咻。咆哮に同じ。

【三二二】叛換。叛は反。換は易。常道に反易せる人。

【三二三】虔劉。殺すこと。

【三二四】八紘。八方といふが如し。

【三二五】荒阻。遠方の人をいふ。

【三二六】兵を云云。魏武兵接要に曰く、大將將ニ行カントスルトキ、雨衣冠ヲ濡ス、是ヲ洗兵トイフ。

【三二七】振旅。兵の戰地より還るをいふ。輷輷は衆聲なり。

【三二八】悠悠。旌旗の飛ぶ貌。

【三二九】凱歸。凱旋なり。凱旋の後、飲至とて將士を饗會する禮あり。

疏つこと普く疇しく、朝に（三二〇）刓印なく國に（三二一）費留なし。喪亂既に弭んで能く宴く、武人（三二二）獸を歸して戰を去り、（三二三）蕭斧柯を戢めて以て刃を押め、（三二四）虹旌麾を攝めて以て卷に就き、（三二五）洪範を掛み典憲を酌み、恆にする所を觀其變に通じ、上は（三二六）垂拱して契を司り、下は（三二七）緣督して自ら勸み、道來りて斯れ貴く、利往きて則ち賤しく、（三二八）囹圄寂寥にして、（三二九）京庾流衍す。

【大意】大賊亂れ起りて天下安からざる時、武帝奮起して、大に其威を耀かし、甲冑を被り旌旗を建て、弓箭を執り戈戟を振ひ、弓弦を滿引し處を擇んで發てば、物として中らざるはなく、其巧妙なること更嬴に過ぎたり。士卒は服練を整へ利戈を執り、偏裻の衣を著て以て行列をなし、行伍軍律に叶ひ、奇正の計を用ひて四方を征討す。畫策する所悉く妙理に通じ、爲す所制度に合はざるはなし。鋒を擧げて戰ふこと數十年、銳氣益〻加り、一日に三たび接戰し、一月に三度捷を得、晝夜休む時なく、王命に逆ひ咆哮して服從せざる者は、之を除剪呑滅

【三二〇】刓印。角のすりへりし印なり。項羽は功臣に爵邑を與ふるを惜み、手に印を持ちながら容易に與へざる故、印角皆すりへりたりといふ。
【三二一】費留。功あるも賞せざるをいふ。孫子に出づ。
【三二二】獸を歸す。周の武王殷を平げて歸り、馬を歸し牛を放ち其戰士を去る。
【三二三】蕭斧。剛利の斧なり。柯は斧の柄。
【三二四】虹旌。虹を畫きし旗。
【三二五】洪範。天下を治むる大法をいふ。
【三二六】垂拱。衣を垂れ手を拱ぬきて無爲なること。
【三二七】緣督。緣は順、督は中、中道に順ふこと。
【三二八】囹圄。牢獄なり。
【三二九】京庾。京は大、庾は倉なり。流衍は滿ち溢るること。

し、常道に反する者あれば雲の如く去り席の如く巻いて、盡く之を殺し、漸く威德を八方に布く。則ち荒遠の俗皆相率ゐて歸服せざるはなし。戰勝つて將に兵を休し師を還さんと欲し、乃ち兵馬を海島江洲に洗刷し、歸りて飲至の禮を行ひ、其爵邑を分つに疇しく度りて其功に當らしめ、刓印なく費留なし。天下既に平にして能く宴樂をなし、牛馬を放ち戰士を歸し、斧鉞を斂め其刃を藏め、旌旗を巻きて之を藏め、復た用ひざるを示し、治國の大法と常憲とを斟酌し、人の恆理を觀、其變に通じて民をして倦まざらしむ。是に於てか上は無爲にして天下を治め、下は中道に順つて自ら勵み、道を貴んで利を賤み、牢獄は空虚にして大倉は滿溢せり。

是に於て（三四〇）東鯷序に卽き（三四一）西傾軌に順ひ、（三四二）荊南懐はんことを懐ひ（三四三）朔北韙を思ひ、（三四四）緜緜たる逈塗、山に驟せ水に驟せ、（三四五）賮贄を襁負し、譯を重ねて（三四六）篚を貢し、（三四七）髽首の豪、鐻耳の傑、其（三四八）荒服を服し、袵を（三四九）魏闕に斂め、（三五〇）文昌に置酒し、（三五一）高張宿め設け、其夜未だ遽ならざるに、庭燎（三五二）晰晰たり、客あり

【三四〇】東鯷。國の名。序は次序なり。
【三四一】西傾。國の名。軌は車迹なり。
【三四二】荊南。國の名。
【三四三】朔北。北方の地方。韙は美なり。
【三四四】緜緜。遠き貌。
【三四五】賮贄。禮物なり。襁負は紐にて背負ふこと。
【三四六】篚。箱に入れたる貢物。
【三四七】鐻耳、髽首。夷人なり。豪傑は酋長をいふ。
【三四八】荒服。夷の服なり。
【三四九】魏闕。帝闕なり。
【三五〇】文昌。殿の名。置酒は酒宴を張ること。
【三五一】高張。高く幕を張りて作り設けたる宴席。
【三五二】晰晰。光明なり。

（三五三）祁祁たり、載ち（三五四）華載ち裔、（三五五）岌岌たる冠縰、（三五六）纍纍たる辮髮あり。（三五七）清酤濟の如く、（三五八）濁醪河の如く、凍醴澌を流し、溫酎波を躍らし、豐肴（三五九）衍衍たり（三六〇）行庖皤皤たり。（三六一）愔愔として醧讌し（三六二）酣湑して讙しきことをなし。（三六三）廣樂を延ね（三六四）九成を奏し、（三六五）韶夏を冠して（三六六）六英五莖を冒め、（三六七）僣響起りて震霆かと疑はれ、（三六八）天宇駭き地廬驚き、億なること（三六九）大帝の興作せる所、（三七〇）二嬴の曾て聆きし所の若し。金石絲竹の恆韻、（三七一）匏土革木の常調、（三七二）干戚羽旄の飾好、（三七三）清謳微吟の要妙、（三七四）世業の日

【三五三】祁祁。衆多なり。
【三五四】華、中國の人。音エツ、叶韻。裔は四裔遠方の人。
【三五五】岌岌。高き貌。
【三五六】纍纍。かさなる貌、辮髮は夷人の髮なり。
【三五七】清酤。清酒なり。濟は河の名、其水清し。
【三五八】濁醪。濁酒なり。河は黃河、其水濁れり。
【三五九】衍衍。多き貌。
【三六〇】行庖。食を行ることを主る者。皤皤は多き貌。
【三六一】愔愔。和悅の貌。醧讌は飲み樂むこと。
【三六二】酣湑。酣醉といふが如し。
【三六三】廣樂。天帝の音樂。
【三六四】九成。九たび奏すること。
【三六五】韶夏。韶は舜の音樂、夏は禹の音樂。
【三六六】六英。帝嚳の音樂。五莖は顓頊の音樂。
【三六七】僣響。かまびすしき音。
【三六八】天宇。天なり。地廬は地なり。
【三六九】大帝。天帝なり。
【三七〇】二嬴。嬴は秦の姓なり、秦の穆公と趙簡子とをいふ。秦と趙とは祖を同うす。穆公簡子皆曾て天帝其の廣樂を奏すと夢みたり。
【三七一】匏土革木。ヒサゴ、土、ナメシカハ、木にて作れる樂器。
【三七二】干戚。干は盾、戚は斧。羽は雉の羽、旄は旄牛の尾、皆舞人の手に持つ物。
【三七三】清謳。きよらかなる歌。
【三七四】世業。音樂は以て淫を防ぎ元氣を和す、故に王者世業と爲す、一日も廢すべからざるなり。

に用ふる所、耳目の（三七五）聞覺する所、（三七六）雜糅紛錯、（三七七）兼該汜博、（三七八）鞮鞻掌る所の音、（三七九）韎昧任禁の曲、以て四夷の君を娛ましめ、以て（三八〇）八荒の俗を睦ぐ。

【大意】是に於て東鞮西傾二國の人、次序に就き車迹を同うし、荊南朔北の夷、皆惠に懷き美を思ひ、遠く山水を越え、其土物を負うて來り貢し、夷人の酋長袖を斂めて帝闕の下に拜す。天子乃ち文昌殿に置酒し、以て宴を蠻夷に賜ふ。宿に供張し庭燎を焚き、中夏の諸侯四裔の人と相雜り、諸侯の冠は岌岌として、蕃夷の辮髮は纍纍たり。清酒は淸くして濟水の如く、濁醪は濁りて黃河の如く、衆皆和悅酣飮して諠譁することなし。因つて鈞天の廣樂を陳ね九成を奏し、首に韶夏を出し、六英五莖を籠め、響雷の轟くが如く、天地も爲に震動し、其宏大なること天帝の作りし所、二嬴の曾て聽きし所のものの如し。金石絲竹匏土革木の樂、干戚羽旄の飾、淸唱微吟の妙、悉く混同兼該し、四夷の樂亦備はり、以て四夷の君八方の人を和睦せしむ。

既に（三八一）苗し既に狩し、爰に遊び爰に豫み、（三八二）藉田禮を以て動き（三八三）大閱義を以て擧げ、（三八四）法駕を

【三七五】聞覺。耳目の聰明を開發すること。
【三七六】雜糅。混合すること。
【三七七】兼該。混同すること。汜博は廣大なり。
【三七八】鞮鞻。周の音樂を掌る官。
【三七九】韎昧。東夷の音樂。南夷の樂を任といひ。北夷の樂を禁といふ。
【三八〇】八荒。八方の遠地。
【三八一】苗。夏の獵を苗といふ。冬の獵を狩といふ。
【三八二】藉田。天子親ら田を耕し以て祭祀に供するの禮なり。
【三八三】大閱。今日の觀兵式の如し。武を講ずるの禮なり。
【三八四】法駕。天子の車。

備へ(三八五)秋御を理め、文武の壯觀を顯はし(三八六)梁騶の著しし所に邁ぐ。林には桛を槎らず、澤には天を伐らず、斧斨時を以てし、罾網道を以てし、德(三八七)木理を連ね、仁(三八八)芝草を挺き、(三八九)皓獸之が爲に藪に育し、(三九〇)丹魚之が爲に沼に生じ、(三九一)喬雲翔龍あり、澤馬阜に彳み、山には其石を圖し、川には其寶を形し、黑きとして烏にあらざるはなく、(三九二)三趾して來儀し、赤きとして狐にあらざるはなく、(三九三)九尾にして自ら擾れ、(三九四)嘉穎離合して以て(三九五)蓴蓴たり、醴泉涌き流れて(三九六)浩浩たり、(三九七)禎祥を顯して以て曲に成し、固に物に觸れて兼ね造る。蓋し(三九八)亦明靈の酬酢する所、休徵の偉兆する所なり、(三九九)旼旼たる率土、善に遷りて匱きことなく、(四〇〇)福應に沐浴し心を(四〇一)醇粹に宅き、餘糧畝に栖んで收めず、頌聲路に載ちて洋溢し、河洛奧を開き(四〇二)符命用て出で、(四〇三)翩翩たる黃鳥、書を銜んで來り訊げ、人

【三八五】秋御。馬を御する法なり。
【三八六】梁騶。天子の獵なり。
【三八七】木理。孝經援神契に德草木ニ至レバ則チ木ニ連理アリとあり。
【三八八】芝草。靈草なり。古瑞命記に王者慈仁ナレバ則チ芝草生ズとあり。
【三八九】皓獸。瑞獸なり。
【三九〇】丹魚。赤き魚。
【三九一】喬雲翔龍。皆瑞祥の物なり。
【三九二】三趾。三本足の烏。
【三九三】九尾。尾の九本ある狐。
【三九四】嘉穎。穗を合せたる稻なり。
【三九五】蓴蓴。茂盛の貌。
【三九六】浩浩。泉の流るゝ貌。
【三九七】禎祥。祥瑞なり。
【三九八】明靈。神明なり。
【三九九】旼旼。和樂の貌。率土は天下なり。
【四〇〇】福應。休徵なり。
【四〇一】醇粹。醇厚に同じ。
【四〇二】符命。天子となるべき天の命令。
【四〇三】翩翩。飛ぶ貌。

謀の尊ぶ所、鬼謀の秩づる所、(四〇四)劉宗馭を委て其(四〇五)神器を巽り、(四〇六)玉策を金縢に闚ひ、圖錄を(四〇七)石室に案じ、(四〇八)歷數の在る所を考へ、(四〇九)五德の莅む所を察にし、(四一〇)寸旬を量り吉日を涓び、(四一一)中壇に陟り帝位に卽き、(四一二)正朔を改め服色を易へ、絶世を繼ぎ廢職を脩め、(四一三)徽幟以て變じ器械以て革り、仁を顯して翌明にし、用を藏めて玄默なり。言を菲くし行を厚くし、化を陶し學に染み、(四一四)篆籀を讎校し、篇章畢く覿、優賢(四一五)揚歷に著れ、(四一六)匪孽親戚に形る。

【大意】狩獵遊豫、藉田大閲、皆禮儀に遵つて之を行ひ、駕御を正くし、文武の壯觀を顯すこと、梁騶の記述にまさり、林には蘖を斬らず、澤には天獸を伐らず、木を斬るには葉落つるの時を以てし、網を張るには其道を以てす。仁德の結果、種種の祥瑞を致し、連理の木あり、芝草の生ずるあり、白獸出で、丹魚現はれ、矞雲あり翔龍あり、澤馬あり、三足の烏、九尾の狐、嘉禾醴泉あり。是れ皆仁德神明を感せしめ、遂に其

【四〇四】劉宗。漢の皇室をいふ。馭を委つとは天下統治の權を棄つること。

【四〇五】神器。天子の位。

【四〇六】玉策。帝王の跡を記錄せる竹簡なり。金縢は金匱なり。

【四〇七】石室。秘書を藏する所。

【四〇八】歷數。天子となるべき順序。

【四〇九】五德。五行なり。天子の立つは五行の相生に由る。

【四一〇】寸旬。司馬法に明王ハ咫尺ノ玉ヲ寶トセズシテ寸陰ノ旬ヲ愛ムとあり。

【四一一】中壇。祭壇なり。

【四一二】正朔。曆なり。

【四一三】徽幟。旌旗なり。

【四一四】篆籀。古代の字體の名。

【四一五】揚歷。賢才を舉げて歷試すること。

【四一六】匪孽。匪は非。孽は私なり。公平なり。

の酬を得たればなり。醇厚の化、人心に入り、年穀豐饒にして田畝に滿ち、鳥の巢に栖むが如く、人之を收紀せず。頌德の謠路に滿ち、洋洋として耳に盈ち、河洛圖書を出し、秘奧を開いて大魏の符命以て出で、黃鳥其書を銜んで來り告ぐ。歌謠祥瑞の結果、漢主其尊位を棄てて魏に讓る。乃ち金匱石室の秘書を窺ひ、歷數の在る所を考へ、吉日を擇んで帝位に卽き、漢の正朔服色を變更し、嗣を絕つ者には命じて之を繼がしめ、職を失ふ者には更に之を復せしめ、旌旗兵器皆改革す。文帝之に嗣ぎ仁明の德あり、用を內に藏し、玄默を守りて言はず。德化益〻著れ、經史篆籒の書を校讎し、篇什文章盡く見ざるはなく、賢才を擧げて之を歷試し、私情を以て親戚に臨まず、極めて公平を保てり。

本枝榦を別ち、皇家に(四一七)蕃屛たり。勇は(四一八)任城の若く、才は(四一九)東阿の若く、旆を抗ぐれば則ち威秋霜より嚴く、翰を摛ぶれば則ち華春葩より縱なり。(四二〇)英喆雄豪命を帝室に佐け、相は(四二一)二八を兼ね將は(四二二)四七より猛く、(四二三)赫赫震震として(四二四)開務謐たるあり。故に斯民をして(四二五)泰階の平なるを覩、屋を比べて

【四一七】蕃屛。藩屛に同じ。
【四一八】任城。曹操の子彰、勇萬夫を蓋ひ力よく鼎を扛ぐ、任城王に封ぜらる。
【四一九】東阿。曹操の子植、詩文に巧なり。東阿王に封ぜらる。
【四二〇】英喆。喆は哲に同じ。
【四二一】二八。舜の臣八元八凱の十六人をいふ。
【四二二】四七。後漢光武帝の二十八將をいふ。
【四二三】赫赫震震。壯なる貌。
【四二四】開務。開物成務なり。謐は安らかなること。
【四二五】泰階。三つの星なり、この三階平なれば陰陽和し、風雨時あり、天下平なり。

一となるべからしむ。(四二六)算祀紀あり(四二七)天祿終あり。業を傳へ祚を禪り、高く萬邦を謝る。皇恩綽にして帝德冲し。其天下を讓り臣たること至公なり。操行の獨得を榮とし、百王の(四二八)庸庸に超え、追うて(四二九)卷領と結繩とに亙ぎ、睠みて(四三〇)重華を留めて蹤を比べ、(四三一)尊盧赫胥、羲農有熊、自ら以て道洪に化〔以爲〕隆に、世篤くして(四三二)玄同なりと爲すと雖も、奚ぞ遽に之と武を踵ぎ、其風を齊うする能はざらんや。是故に其建國を料り、其法度を析ち、(四三三)其考室を諮り、其(四三四)擧厝を議り、之を復して斁ふなく、之を申べて裕なるあり。

(四三五)疏糲の士の能く精うする所にあらず、鄙俚の言の能く具にする所にあらざるなり。

【大意】諸兄弟の侯王たる者、皆皇帝の同體にして、木の根を同うして枝幹を別にするが如く、悉く皇室の藩屛たり。武勇なること任城王曹彰の如きあり、威猛秋霜の如く、文藻あること東阿王曹植の如きあり。佐命の臣亦豪傑の士多く、相は舜の八元八凱に比すべく、將は光武の二十八將に勝り、皆よく物を開き務を成し、天下をして淸謐ならしめ、よく天下をして一家たらしむ。

【四二六】算祀。年を歷ること。紀は數なり。
【四二七】天祿。天より與へられたる幸福。
【四二八】庸庸。凡庸にして奇異なきなり。
【四二九】卷領、結繩。上古有道の君なり。
【四三〇】重華。舜なり。
【四三一】尊盧。以下皆大古の王者。
【四三二】玄同。大同といふが如し。
【四三三】考室。宮室を作ること。
【四三四】擧厝。厝は措に同じ、賢人を擧げて不才なる人の上に置くこと。
【四三五】疏糲。粗率なり。

然れども魏氏年を算すること數あり。天祿已に其身を去る。乃ち帝業を晉に傳へ、位を退き、以て萬國を棄つ。其情寬綽にして其德沖深、臣たること實に至公なり。其獨得の美行讓德、百王廟常の道に超え、卷領結繩の主にまさり、心を舜の位を禹に讓りし事に留む。かの尊盧赫胥諸王、自ら其道大に化高く、世醇厚にして宇内大同なりとなすも、魏氏豈其蹤を繼ぎ其風を齊うする能はざらんや。其都邑を建て、法度を定め、宮室を營み、擧措をなすこと、皆よく法則に合ひ、反覆して厭倦なく、之を用ふること寬裕なり。是れ皆粗率の士の知る能はざる所、鄙俚の言の能く盡す能はざる所なり。

山川の(四三六)倬詭、物産の(四三七)魁殊なるに至りては、或は名奇にして稱せられ、或は實異にして書すべく、(四三八)生生の常に厚うする所、(四三九)洵美の渝らざる所なり。其中には則ち(四四〇)鴛鴦、交谷、虎澗、龍山、掘鯉の淀、(四四一)蓋節の淵あり、(四四二)狐狐たる精衞、木を銜み怨を償ひ、(四四三)常山、平干、鉅鹿、河間、(四四四)列眞一にあらず、往往にして出で、(四四五)昌

【四三六】倬詭。絶異なり。
【四三七】魁殊。偉大にして奇異なること。
【四三八】生生。天地の萬物を作り成す力。
【四三九】洵美。まことに美なること。
【四四〇】鴛鴦。以下皆川の名。
【四四一】蓋節。淵の名。
【四四二】狐狐。飛ぶ貌。精衞は鳥の名。吳都賦三七四を見よ。
【四四三】常山。以下皆地名。
【四四四】列眞。多くの仙人。
【四四五】昌容。仙人の名。列仙傳に常山ノ道人ナリ、自ラ殷王ノ女ト稱ス。二百餘年ニシテ顏色年二十ノ人ノ如シとあり。故に色を練るといふ。

容色を練り、(四四六)犢眉連に配し、(四四七)玄俗影なく(四四八)木羽仙に偶ひ、(四四九)琴高水に沈んで濡はず、時に赤鯉に乘りて周旋し、(四五〇)師門火を使ひて以て術を驗す、故に將に去らんとして林燔く。(四五一)易陽の壯容、衞の(四五二)稚質、(四五三)邯鄲の躧步、趙の(四五四)鳴瑟、(四五五)眞定の梨、(四五六)故安の栗、(四五七)醇酎は中山、(四五八)流湎すること千日、(四五九)淇洹の筍、(四六〇)信都の棗、雍丘の(四六一)粱、(四六二)清流の稻、錦繡の(四六三)襄邑、羅綺の(四六四)朝歌、緜纊の(四六五)房子、縑總の(四六六)清河あり。此の若きの屬、繁富(四六七)夥夥にして、單く究むべきにあらず。是

【四四六】犢。犢子なり、仙人の名、陽都女といふ者あり。生れて連眉、耳細くして長し、たま〱犢子來りて都女に過る、都女之を悅び遂に留めて奉侍す。門を出で共に犢の耳を牽いて走る。能く之を追ふ者なし。

【四四七】玄俗。仙人の名。河間の人なり。其形を見るに影なし。

【四四八】木羽。鉅鹿の人なり。仙人の來り迎ふるに遇ひて共に去る。

【四四九】琴高。趙人なり。赤鯉に乘りて浮遊す。

【四五〇】師門。仙人の名、よく火を使ふ。

【四五一】易陽。易水の北なり、中に美女多し。壯容は少年妙齡をいふ。

【四五二】稚質。童顏なり。

【四五三】邯鄲。趙の地名、亦美女多く、善く行步す。躧步は步行なり。

【四五四】鳴瑟。趙の中山はよく琴瑟を鼓す。

【四五五】眞定。趙の中山郡に屬する地名、其地梨を出す。

【四五六】故安。范陽に屬する地名、栗を出す。

【四五七】醇酎。美酒なり、中山郡より美酒を出す。

【四五八】流湎。長く醉ふこと。玄石といふ者中山の酒を飲み、醉ふこと、千日なりきといふ。

【四五九】淇洹。川の名、衞に屬す、其地竹を出す。

【四六〇】信都。安平に屬する地名。

【四六一】粱。米のよきもの。

【四六二】清流。地名なり。

【四六三】襄邑。地名なり。

【四六四】朝歌。地名なり。

を以て抑へて未だ罄さざるなり。

【大意】山川の卓絶、物産の異常なる、或は名の奇なるを以て稱せられ、或は實の奇なるを以て稱せらる。是れ皆天地生生の徳の結果にして、洵美永く變らざる所なり。隨つて多くの仙人此に輩出し、各種の物産一一擧げ盡し難し。蓋し物を比べて以て辭を錯へ、(四六八)清都の閑麗を述べ、言を選んで以て章を簡ぶと雖も、徒に(四六九)九復して旨を遺す。(四七〇)大易と春秋とを覽るに、(四七一)殊隱を判ちて一致なり。(四七二)上林の牆を隤てるを末とし、(四七三)前脩に本づいて以て系を作す。其(四七四)軍容犯さず其果穀を信べ、華を糾し(四七五)戎を綏じて以て公室を戴き、元勳(四七六)管敬の績に配し、(四七七)歌鐘邦君の肆を析つは、則ち(四七八)魏絳の賢(四七九)令聞あるなり。(四八〇)隘巷に間居し室は邇く心は遐く、仁に富み義を寵し(四八一)職競に

【四六五】房子。地名なり。
【四六六】清河。地名なり。
【四六七】夥夥。多きこと。
【四六八】清都。魏都を指す。
【四六九】九復。幾度も繰り返すこと。
【四七〇】大易。易經なり。易は隱に本づいて以て顯を示し、春秋は現實を推して隱微を説く。
【四七一】殊隱云云。隱顯異れども徳を合すること一の如しとの意。
【四七二】上林。司馬相如の上林賦を指す。
【四七三】前脩。昔の賢人。
【四七四】軍容。軍隊の容儀。司馬法に軍容國ニ入ラズとあり。
【四七五】戎。夷狄なり。
【四七六】管敬。管仲なり。齊の桓公を佐けて諸侯を九合せり。
【四七七】歌鐘。晉の悼公魏絳に女樂二八、歌鐘一肆を賜ふ。邦君は悼公を指す。
【四七八】魏絳。晉の悼公を輔けて七たび諸侯を合せたり。
【四七九】令聞。美譽なり。
【四八〇】隘巷。陋巷といふが如し。
【四八一】職競云云。寂然として俗と競はざること。

羅らず、(四八二)千乘之が爲に廬に軾し、(四八三)諸侯之が爲に戈を止むるは、則ち(四八四)干木の德、自ら紛を解くなり。貴きは吾が尊きにあらず、士を重んずること山に踰え、親ら(四八五)監門に御し、謙謙として軒を同うし、秦を搦へ趙を起し、威(四八六)八蕃に振ふは、則ち信陵の名蘭芬の若きなり。(四八七)英辯枯を榮し、能く其厄を濟ひ、位將相を加へ、隙を窒ぐの策、四海鋒を齊うするも(四八八)一口の敵する所なるは、則ち(四八九)張儀張祿も亦云ふに足れり。

【大意】以上述べし所の如く、土地物產を歴擧し、文辭をつらねて我が魏都の閑麗を述べ、章句を選擇せりと雖も、徒に反復陳述せるのみにして、終に其美旨を遺れぬ。かの易と春秋とを覽るに、隱顯異りと雖も、然も德を合すること一の如し。上林賦に牆を頽し壍を塡むといへるは、漢代苑囿の大なるが爲に、(是れ顯なり)之を頽し山澤の人をして至ることを得しめんと欲すればなり。而かも我が魏には苑囿の大なるなく、山川

【四八二】千乘云云。千乘は諸侯なり、魏の文侯段干木を敬し、其門外を過ぐる時は必ず軾に憑りて敬禮したりといふ。

【四八三】諸侯云云。秦君魏を攻めんと欲す、司馬康諫めて曰く、段干木は賢者にして魏之を禮す、乃ち兵を加ふべからずと、秦君乃ち兵を止む。

【四八四】干木。段干木とて魏の賢者なり。

【四八五】監門。門の番人なり。魏に隱士あり、侯嬴といふ。家貧にして大梁夷門の監者となる、魏の公子信陵君親ら御して之を其邸に迎へ、之を禮遇す。後其力を借りて秦軍を拒ぎ趙を救ふことを得たり。

【四八六】八蕃。八方の蠻夷なり。

【四八七】英辯。雄辯なり。

【四八八】一口。一言といふ如し。

【四八九】張儀張祿。戰國の時の辯士にして共に魏の人なり。張祿は卽ち范雎。

萬物皆自然に符す、(是れ隱なり)是れ牆を頹すを以て末事となし、古聖賢の道を守りて、之を系襲せんことを本となせばなり。而して是れ質に我が魏都の美旨なり。以下我が魏都の先賢を列擧せんか。軍容民を犯さず果毅を發揮し、中夏を糾合し戎狄を安撫し、以て公室を戴き、その大功管仲に比すべく、國君の歌鐘を賜はりしは、魏絳の賢にして、今尚は令聞あり。陋巷に閑居し居室近しと雖も、其心は遠大、仁義に富み、俗と競はず、諸侯も或は之を禮し、或は兵を止めしは、段干木の德にして、能く國家の紛亂を解けり。自ら尊大にせずして、士を重んずること山の如く、親ら臨門の爲に馬を御して同乘し、秦を抑へ趙を起し、其威八方に振ひしは、則ち信陵君にして、其名蘭の如く芳し。雄辯を振ひて死を活かし枯を榮し、時艱を濟ひ、位將相に至り、天下鋒を聯ねて秦を攻めたりと雖も、よく一言を以て此に對敵せしは、張儀張祿二公にして、亦ここに擧ぐるに足る。(以上專ら魏都の勝を說けり)

搉に惟るに(四九〇)庸蜀は鴝鵲と巢を同うし、(四九一)句吳は鼃黽と穴を同うす。一は自ら禽鳥なりと以爲ひ、一は自ら魚鼈なりと以爲へり。山阜(四九二)猥積して崎嶇し、泉流迸集して(四九三)咉咽し、(四九四)隰壤瀸

【四九〇】庸蜀。地名。庸は江漢の南に在り、蜀を主としていふ。鴝鵲は鳥の名。
【四九一】句吳。吳をいふ。鼃黽は蛙なり。
【四九二】猥積。集り重ること。崎嶇はけはしきこと。
【四九三】咉咽。流れ通ぜざる貌。
【四九四】隰壤。濕地なり。瀸漏は水漏れ出づるなり。沮洳は水泥相和する貌。

漏して沮洳たり、林藪(四九五)石留して蕪穢なり、窮岫雲を泄らし日月恆に翳れ、(四九六)宅土熇暑して封疆(四九七)障癘あり、(四九八)蔡莽螫刺あり、(四九九)昆蟲毒噬し、漢の罪(五〇〇)流禦せられ秦の餘(五〇一)徙帑せらる。貌を宵くること(五〇二)蕞陋、質を稟くること(五〇三)遳脆、巷に(五〇四)杼首なく、里に(五〇五)耆耋罕なり。或は(五〇六)魋髻して(五〇七)左言し、或は膚を鏤めて髮を鑽り、或は明發まで(五〇八)嬥歌し、或は浮泳して歲を卒へ、風俗は(五〇九)韰惈を以て嫿しとなし、人物は(五一〇)殘害を以て藝しとなし、威儀の攝せざる所、憲章の綴ねざる所なり。

【大意】(以下呉蜀を折くなり)思ふに蜀は山林多く地狹し、是れ鴝鵒と居を共にするものなり。呉は江湖卑濕の地なり、是れ蛙鼈と居を共にするものなり。それ居は其志を移すといふ。されば蜀人は禽鳥の心を以て心となし、呉人は魚鼈の心を以て心となす。一は山阜崎嶇として連り(蜀)、一は泉流映咽し(呉)、一は卑濕にして常に沮洳たり(呉)、一は林藪礫多くして蕪穢なり(蜀)、一は山岫常に陰雲を出し、日月を見ず(蜀)、一

【四九五】石留。土地に石多きなり。
【四九六】宅土。土地といふが如し。熇暑は熱甚しきなり。
【四九七】障癘。毒氣なり。
【四九八】蔡莽。毒草なり。螫刺は人を刺すトゲ。
【四九九】昆蟲。蝮蛇の類なり。
【五〇〇】流禦。流遷すること。
【五〇一】徙帑。流罪にすること。
【五〇二】蕞陋。醜惡なり。
【五〇三】遳脆。輕躁なり。
【五〇四】杼首。長首なり。
【五〇五】耆耋。老人なり。
【五〇六】魋髻。髮を以て兩耳に結びて垂るるもの。
【五〇七】左言。文字を知らざること。
【五〇八】嬥歌。巴の土人の歌なり。
【五〇九】韰惈。狹勇なり。
【五一〇】殘害。人を殺害すること。

は炎熱にして毒氣あり(吳)、また毒草蝮蛇の人を害するあり。秦漢の時、罪人を此に遷流せり。されば此地の人容貌醜惡、身體虚弱にして、夭死者多くして長壽者稀なり。或は魋髻して左言し(蜀)、或は文身して髮を斷ち(吳)、或は明發に至るまで燿歌し(蜀)、或は江湖に游泳して歳を終る(吳)。その風俗は狹勇を以て美となし、人を殺害するを以て能となす。固より威儀に叶はず憲章の載せざる所なり。

重山の(五一一)束阨に由り、長川の裾勢に因り、遠關を距いで以て(五一二)闚闞し、時に(五一三)高櫟して(五一四)陛制す。薄戍(五一五)緜冪、蛛蝥の網に異るなく、弱卒(五一六)瑣甲、蟷螂の衛に異るなし。(五一七)先代と與にして常に然り、信に險なりと雖も勦絶せり。既往の前跡を揆り、將來の後轍に卽き、(五一八)成都迄に已に傾覆せり、(五一九)建業則ち亦(五二〇)顚沛せん。願ふに(五二一)疊棊に累卵するに非るも、焉んぞ形を觀て怛を懷くに至らん。權くも日を假りて以て餘榮あり。朝華に比して(五二二)菴藹たり。(五二三)麥秀と黍離とを覽、謠を(五二四)吳會に作るべし。

【五一一】束阨。束縛といふが如し。
【五一二】闚闞。中國を窺ふこと。
【五一三】高櫟。澤中に設けたる番小屋。
【五一四】陛制。制約といふが如し。
【五一五】緜冪。微細なり。
【五一六】瑣甲。碎けたる鎧。
【五一七】先代。吳の先代は吳王夫差を指し、蜀の先代は公孫述を指す。
【五一八】成都。蜀都なり。
【五一九】建業。吳都なり。
【五二〇】顚沛。顚覆すること。
【五二一】疊棊。碁石をかさぬること。累卵は卵をかさぬること。
【五二二】菴藹。小暗き貌。
【五二三】麥秀、黍離。ともに亡國の跡を悲む詩なり。
【五二四】吳會。吳をいふ。

【大意】 蜀は重山に由りて其民を束ね、遠關を拒守して我が中國を窺ひ、吳は長川の要害に因り、高櫓を設けて其民を拘制す。然も二國の戍兵微弱にして、蜘蛛の網に異らず。弱卒碎甲は螳螂の斧を振つて車轍に當るに同じ。何ぞ以て衞となすに足らんや。且つ先代よりして國常に存する者あらず。險を恃むも皆滅亡せざるはなし。故に前後軌轍を同うし、蜀は已に滅亡せり。吳も亦將に顚覆せん。顧ふに疊棊の上に卵を累ぬるの實例を待たず。其形勢を見て然る後始めて懼を抱くにあらず。(形勢を見ざるも滅亡の懼を抱くに足るとの意)、苟も天日の餘光を借り、木槿の朝榮を恃むも、忽ちにして幕烟藹然として至り、華亦忽ちに落ちん。かの麥秀黍離亡國の謠、復た吳の爲に作るべきなり。(蜀は先に滅び、吳は後に亡びたり、故にかく言ふなり)。

先生の言未だ卒らざるに、吳蜀の二客(五二五)矍然として相顧み、(五二六)瞭焉として所を失ひ、(五二七)靦瞢の容あり。神蘂り形茹れ、氣を弛め坐を離れ、(五二八)慙墨して謝して曰く、僕黨(五二九)淸狂にして(五三〇)閩濮に怵迫し、(五三一)蓼蟲の辛きを忘るるに習ひ、進退の惟れ谷まるに翫ふ。常に寐ねて覺るなきにあらず。(五三二)皇輿の軌躅を覩ざればなり。過りて(五三三)汎剽の單

【五二五】矍然。懼るる貌。
【五二六】瞭焉。意を失ふ貌。
【五二七】靦瞢。慚づること。
【五二八】慙墨。慚ぢて氣色の下ること。
【五二九】淸狂。疾なくして迷ふをいふ。
【五三〇】閩濮。閩は吳をいひ、濮は蜀をいふ。
【五三一】蓼蟲。蓼を食ふ蟲。
【五三二】皇輿。魏都を指す。
【五三三】汎剽。輕薄なり。單惠は小才なり。

悳を以て、（五三四）執古の醇聽に歷ひ、兼ねて性を重ねて以て繆を貤ね、（五三五）辰光に偭いて定まるなし。先生玄識にして、（五三六）深頌測るなし。上德の至盛、憂を（五三七）有聖に同うするにあらざるを聞くを得たり。

【大意】魏國先生の言未だ終らざるに、吳蜀の二客驚いて相顧み、心死し形解け、慚ぢて謝して曰く、吾等淸狂にして吳蜀の地に逼迫し、吳蜀の誇るべきを知りて魏都の誇るべきを知らず。蓼蟲の辛味を忘るるが如く、深谷の中に往きて進退據所を失へるが如し。是れ常に寐ねて覺めざるにあらず。蓋し習慣の然らしむる所にして、魏都の軌跡を見ざればなり。今輕薄小才の身を以て、醇厚の古道を聽く。顧ふに從來謬を重ねたるは、日光に背いて定視することなきが如くなりしのみ。先生は實に深識の人にして、深容測るべからず。今先生喩すに上皇の盛德、聖人と憂を同うせざる（周易繫辭傳の語）ことを以てせらる。

抑々春霆響を發して（五三八）驚蟄飛び競ひ、潛龍景を浮べて幽泉高く鏡すが若し。（五三九）星に風雨の好あり、人に異同の性ありと雖も、庶に（五四〇）蔀家と（五四一）剝廬との、世を蘇りて政きに居るにあらざるを覩る。且夫れ寒谷の黍に豐なるは、（五四二）律を吹いて以て之を暖むればなり。

【五三四】執古。古人の道を執る。
【五三五】辰光。日光なり。
【五三六】深頌。頌は容なり、貌なり。音ヨウ。
【五三七】有聖。聖人なり。聖人は天下を以て憂となす。
【五三八】驚蟄。冬季地中に潛みし蟲。春雷を聞けば振ひ出づ。
【五三九】星に云云。書經洪範に庶民ハ惟レ星、星ニ風ヲ好ムアリ、星ニ雨ヲ好ムアリとあり。
【五四〇】蔀家。幽暗の處をいふ。
【五四一】剝廬。困窮の地をいふ。
【五四二】律。音律に叶へる風。

昏情の（五四三）爽曙は箴規の以て之を顯せばなり。明珠寸を兼ね尺璧盈つるあり、車を曜すこと（五四四）二六にして（五四五）三たび五城を傾くと雖も、未だ典章を申錫ふの遠しとなすに若かざるなり。亮に曰く、日は雙び麗らず、世に兩帝なしと。天經地緯、理大歸あり。安んぞ（五四六）齊給して其小辯を守るを得んやと。

【大意】抑ゝ先生の言、我が心を啓發すること、春雷始めて震ひて蟄蟲の飛動するが如く、又潛龍の天に升り高く幽泉を照すが如し。人心の同じからざるは、星の好む所を異にするが如しと雖も、幸に蔀家剝廬の凶にして、世を悟りて正道に居るといふべきにあらざることを見たり。且つ寒谷黍に豐かなるは暖風之を吹けばなり。昏愚の心明に曉るを得たるは、先生の敎誡の致す所なり。されば珠璧貴ぶべしと雖も、未だ先生が敎誡を賜ふの遠大なるに如かざるなり。語に曰く、天に二日なく地に二王なしと。天地の經緯萬物を覆育す。王者之に法りて行ふ。帝位の立つ所、天人の心に歸す。吾等復た焉んぞ小辯を弄するをなさんやと。

【五四三】爽曙。明かになること。
【五四四】二六。車十二乘なり、魏の惠王の明珠、車の前後十二乘を照したりといふ。
【五四五】三たび云云。趙の惠文王、楚の和氏の璧を得たり、秦の昭王十五城を以て之に易へんと請ふ。
【五四六】齊給。辯說なり。

巻の第四

賦　丁

(一)郊祀

(二)甘泉の賦並序

(三)揚子雲

孝成帝の時、客に、雄が文、(四)相如に似たりと薦むる者あり、(五)上方に甘泉の(六)泰畤、(七)汾陰の后土を郊祀し、以て繼嗣を求めんとす。雄を召して(八)承明の庭に待詔せしむ。(九)正月從つて甘泉に上り、還りて甘泉の賦を奏して以て(一〇)風す。其辭に曰く、

惟れ漢の(一一)十世、將に(一二)上玄を郊し泰畤を定め、(一三)神休に

【一】郊祀。天を祭るを郊といひ、地を祭るを祀といふ。

【二】甘泉。宮殿の名。

【三】揚雄。字は子雲。蜀郡の人なり、少うして學を好む、年四十餘、蜀より來りて京師に遊ぶ、大司馬王音召して門下の史となし、待詔に薦む、歳餘にして、郎中給事黃門となる。成帝嘗て趙飛燕の子なきが爲に往いて甘泉宮に祠る、雄制度壯麗なるを見、因つて此賦を作り以て之を諷す。

【四】相如。漢の司馬相如なり、賦を以て名あり。

【五】上。孝成帝を指す。

【六】泰畤。壇の名。神靈の止まる所を畤といふ。

【七】汾陰。汾水の南。后土は地祇なり。

【八】承明。殿の名。石渠門外に在り、雄材術を以て知られ承明殿に直し、詔を待ちて即ち天子に見ゆ。故に待詔といふ。

【九】正月。漢書に永始四年正

擁けられて(一四)明號を尊くし、(一五)符を三皇に同うし、功を五帝に錄し、胤を郵へ羨なるを錫へ、迹を拓き統を開かんとす。是に於て廼ち(一六)羣僚に命じて吉日を歷び(一七)靈辰に協はしむ。星のごとく陳りて天のごとく行り、(一八)招搖と(一九)太陰とに詔し、(二〇)鉤陳に伏して兵を當らしめ、(二一)堪輿に屬するに壁壘を以てし、(二二)夔魖を搉ちて猶狂を抶ち、(二三)八神奔りて(二四)警蹕し、振く(二五)殷轔として軍裝し、(二六)蚩尤の倫(二七)干將を帶びて(二八)玉戚を秉り、飛ぶものは(二九)蒙茸し走るものは(三〇)陸梁し、齊しく(三一)總總として以て撙撙たり。其相(三二)膠轕して(三三)猋のごとく駭き雲のごとく迅く、奮ひて以て(三四)方攘し、(三五)

月廿泉ニ行幸スとあり。
【一〇】風。諷に同じ。諷刺すること。
【一一】十世。孝成帝なり。
【一二】上玄。天なり。
【一三】神休。休は美なり、神明の祥瑞なり。
【一四】明號。天子の大號。
【一五】符を云云。功德を三皇五帝と同じうすること。
【一六】羣僚。百官なり。
【一七】靈辰。善き時なり。
【一八】招搖。星の名、北斗の杓端に在り。
【一九】太陰。星の名、太歲の前の二辰なり。
【二〇】鉤陳。星の名、紫微宮の外營に在り。王者亦之に倣ひて鉤陳營を設く。
【二一】堪輿。天地なり。屬は託なり。
【二二】夔魖、猶狂。並に惡神なり。
【二三】八神。八方の神。
【二四】警蹕。天子出入の時行路を警むること。
【二五】殷轔。衆盛の貌。
【二六】蚩尤。古の善く武器を用ひし人の名、史記に黃帝蚩尤ト涿鹿ノ野ニ戰フとあり。
【二七】干將。名劍の名。
【二八】玉戚。戚は斧なり、玉を以て其柄を作る。故に玉戚といふ。
【二九】蒙茸。亂れ走る貌。
【三〇】陸梁。亂れ走る貌。
【三一】總總撙撙。束聚の貌。
【三二】膠轕。雜亂の貌。
【三三】猋。回風なり。
【三四】方攘。分散の貌。
【三五】駢羅列布。前後にならびつらなること。

駢羅列布して鱗のごとく以て雜沓し、(三六)傑傂參差として魚のごとく頡り鳥のごとく翔り、(三七)翕赫曶霍として霧のごとく集り蒙のごとく合ひ、(三八)半散照爛し粲として以て章を成す。

【大意】漢の成帝祭天の儀を擧げ、神明の加護に據りて己の明號を尊くし、功德を三皇五帝に比し、繼嗣と豐饒とを賜はり、事績を廣め統緒を開かんと欲し、乃ち羣臣に命じて吉日良辰を選び以て祭事を營ましむ。是に於て羣臣の陳列すること星の如く、天子行を啓いて天の運るが如く、招搖太陰に詔し鉤陳營に伏して兵を主らしめ、天地の神に託して軍の壘壁を知り惡神を擊ち去らしめ、八方の神奔走して天子の爲に警蹕し、皆軍裝して之に從ひ、蚩尤の輩干將の劍を佩び玉斧を執りて左右に亂走し、聚散すること風雲の如く、其行くこと魚の躍り鳥の翔るが如く、衆盛なること雲霧の合するが如く、燦爛として文章を成す。

是に於て(三九)乘輿廼ち夫の(四〇)鳳皇に登りて(四一)華芝を翳し、(四二)蒼螭を駟にし(四三)素虬を六にし、(四四)蠖略蕤綏、(四五)灕虖襂纚たり。(四六)帥爾として陰閉し(四七)霅然として陽開し、(四八)清

【三六】傑傂參差。齊整ならざる貌。

【三七】翕赫。盛なる貌。曶霍は疾き貌。

【三八】半散。分散の貌。照爛はてりかがやくこと。

【三九】乘輿。天子をいふ。

【四〇】鳳皇。天子の車をいふ。鳳凰を以て車の飾となせばなり。

【四一】華芝。車蓋なり。

【四二】蒼螭。蒼龍なり。龍とは馬を美するなり。駟は馬四頭を一車に駕するなり。

【四三】素虬。白龍なり。六は馬六頭を一車に駕するなり。

【四四】蠖略蕤綏。龍の行く貌。

【四五】灕虖襂纚。龍の羽の垂る

霄に騰りて（四九）浮景を軼ぐ。夫れ何ぞ（五〇）旟旐郅偈の（五一）旖旎たる。（五二）星旄を流して以て電のごとく爓き、咸く（五三）翠蓋にして（五四）鸞旗なり。萬騎を（五五）中營に屯ねて（五六）玉車の千乘を方べ、聲（五七）駢隱として以て（五八）陸離たり。輕きこと疾雷に先だちて（五九）遺風よりも駿く、（六〇）高衍の峪嵷たるに臨み、（六一）紆譎の清澄なるを超え、（六二）椽欒に登りて天門に狃り、（六三）閶闔に馳せて（六四）凌兢に入る。この時未だ夫の甘泉に臻らず、迺ち（六五）通天の（六六）繹繹たるを望めば、下は（六七）陰潛して以て慘懔たり、上は（六八）洪紛して相錯り、直に（六九）嶢嶢とし

る貌。
【四六】帥爾。聚る貌。陰閉は聚るをいふ。
【四七】霄然。散ずる貌。陽開は散ずるをいふ。
【四八】清霄。清天なり。
【四九】浮景。倒景なり。天上至高の處をいふ。日月の上に在り、反つて下より照す、故に其景倒なればなり。
【五〇】旟旐。旗上に鳥を畫けるを旟といひ龜を畫けるを旐といふ。郅偈は旗竿なり。
【五一】旖旎。旌旗の風にたなびきひらめく貌。
【五二】星旄。旄は旄牛の尾を以て作りし旗にて、飾るに星文を以てするもの。
【五三】翠蓋。翡翠鳥の羽を以て飾りし蓋、高唐賦に蜺ヲ旌トナシ翠ヲ蓋トナスとあり。
【五四】鸞旗。鸞を畫ける旗、蔡邕獨斷に天子出ヅル時ハ前驅ニ鸞旗ナル者アリとあり。
【五五】中營。天子の營なり。
【五六】玉車。玉を以て飾りし車。
【五七】駢隱。車騎の聲なり。
【五八】陸離。參差なり。奔馳する貌。
【五九】遺風。疾風なり。王褒の聖主得賢臣頌に奔雷ヲ追ヒ遺風ヲ逐フとあり。
【六〇】高衍。高くして平なるなり。峪嵷は山の峰の貌。又上り下りの多き貌。
【六一】紆譎。曲折なり。
【六二】椽欒。山の名、甘泉宮の南に在り。
【六三】閶闔。天門の名。
【六四】凌兢。寒凉の處なり。
【六五】通天。臺の名、武帝の元封二年に作る。漢書舊儀に高さ三十丈、長安城ヲ望見スとあり。
【六六】繹繹。高き貌。音ヤク。
【六七】陰潛。くもること。慘懔は明かならざる貌。
【六八】洪紛。紛亂なり。
【六九】嶢嶢。高き貌。

て以て天に造り、その高きこと寔に(七〇)彌度るべからず。平原の唐其れ(七一)壇漫として(七二)新荑を(七三)林薄に列ね、(七四)幷閭と茇葀とを攢め、紛として(七五)被麗して其れ鄂なし。丘陵の(七六)駊騀たるを崇くし、深溝(七七)嶔巖として谷をなし、(七八)迋迋離宮あり般りて以て相燭き、(七九)封巒石闕あり(八〇)迤靡として連屬す。

【大意】天子乃ち鳳凰の輿に乘り華芝の蓋を翳し、駟馬を駕し六馬を聯ぬ。儀仗の聚散離合すること陰陽の開閉するが如く、淸天を淩いで高く、騰れば旌旗風に飜りて電光の如く、其衆千乘萬騎あり。神速なること疾雷に過ぎ、馳すること疾風よりも速なり。或は高遠の地を經、或は淸澄の流を涉り、椽欒山に登りて天門に至り、閶闔を過ぎて寒涼の處に入る。時に未だ甘泉宮に達せず、遠く通天臺を望めば繹繹然として高く聳え、其下陰暗にして分明ならず、其上高く天空に錯り、嶢然として天を衝き其高きこと量るべからず。平原廣大の道を行けば、香草偏く林薄の間に列り、瑞草紛披して際涯なし。山阜の高きを登り溝渠の深を經て進めば、處處に離宮別館あり、分布して相輝き、封巒石闕の二觀、亦相連屬す。

【七〇】彌度。彌は終なり。量り盡すこと。
【七一】壇漫。廣大の貌。
【七二】新荑。香草なり。
【七三】林薄。草の叢生する處を薄といふ。
【七四】幷閭、茇葀。皆瑞草の名。
【七五】被麗。分散する貌。
【七六】駊騀。高き貌。
【七七】嶔巖。深き貌。
【七八】迋迋。往往なり、處處なり。
【七九】封巒石闕。三輔黄圖に甘泉ニ石闕觀・封巒觀アリとあり。觀は樓臺をいふ。
【八〇】迤靡。相連る貌。

是に於て大廈雲のごとく譎しく波のごとく詭しく(八一)摧嗺として(八二)觀を成す。仰いで首を矯げて以て高く視れば、目(八三)冥眴して見るとなく、正に(八四)瀏濫にして以て(八五)弘惝なり。東西の(八六)漫漫たるを指し、徒に(八七)徊徊して以て徨徨し、魂魄(八八)眇眇として昬亂す。(八九)軨軒に據りて(九〇)周流すれば、忽ち(九一)坱圠として垠なし。玉樹の(九二)青葱を翠にし馬犀の(九三)璘瑞を壁にし、(九四)金人仡仡として其れ(九五)鐘虡を承け、(九六)嵌巖巖として其れ龍鱗のごとく、光曜の(九七)燎燭たるを揚げ、(九八)景炎の炘炘たるを垂れ、(九九)帝居の(一〇〇)縣圃に配し、(一〇一)泰壹の威神に象り、(一〇二)洪臺崛として其獨り出で、(一〇三)北極の嶟嶟たるに極り、(一〇四)列宿廼ち(一〇五)上榮に施き、日月纔

【八一】摧嗺。材木の積み重なりたる貌。
【八二】觀。闕なり。タカドノなり。
【八三】冥眴。昬亂すること。
【八四】瀏濫。淸淨なり。
【八五】弘惝。高大なり。
【八六】漫漫。廣くして際涯なき貌。
【八七】徊徊、徨徨。心驚くをいふ。
【八八】眇眇。迷亂の貌。
【八九】軨軒。欄干なり。
【九〇】周流。あるきまはること。
【九一】坱圠。廣大の貌。
【九二】青葱。あをくせること、玉樹の色なり、漢の武帝玉樹を此宮に植ゑ、碧玉を以て葉となし、又璧馬犀牛等を作りて飾となせり。
【九三】璘瑞。文彩なり。
【九四】金人。金製の像なり。仡仡は勇壯なる貌。
【九五】鐘虡。虡とは鐘を懸くる架なり。
【九六】嵌巖巖。鱗の開張せる貌。
【九七】燎燭。てりかがやくこと。
【九八】景炎。日なり　炘炘は熱氣の貌。
【九九】帝居。天帝の居る處。
【一〇〇】縣圃。層城縣圃閬風は崑崙山の三重にして天帝の居る處なり。配は匹敵すること。
【一〇一】泰壹。太一に同じ、天神なり、紫微宮に居る。
【一〇二】洪臺。大なる樓臺。崛は高く聳ゆる貌。
【一〇三】北極。北極星なり。嶟嶟は峻秀の貌。
【一〇四】列宿。列星なり。
【一〇五】上榮。榮は屋翼（ヤネヅ

に(一〇六)柍振を經り、雷(一〇七)巖窔に鬱律として、電(一〇八)牆藩に倏忽たり。鬼魅も自ら逮ぶ能はず、長途に半して下り顚ち、倒景を歴て(一〇九)飛梁を絕り、(一一〇)蠛蠓を浮ぎて天を撇ひ、(一一一)欃槍を左にして(一一二)玄冥を右にし、(一一三)熛闕を前にして(一一四)應門を後にし、西海と(一一五)幽都とを蔭し、(一一六)涌醴汨として以て川を生し、蛟龍東厓に(一一七)連蜷して、白虎(一一八)崑崙に敦圉し、(一一九)樛流を高光に覽、(一二〇)方皇を西靑に溶にし、(一二一)前殿崔巍として(一二二)和氏玲瓏たり。(一二三)浮柱の飛榱を抗げ、(一二四)神莫莫として傾くを扶け、(一二五)閌閬閬として其れ(一二六)寥廓たり、(一二七)紫宮の崢嶸たるに似たり。(一二八)駢交錯して(一二九)曼衍し、(一三〇)峻嵲隗として其れ相嬰り、(一三一)雲閣に乘りて上下し、(一三二)紛蒙籠とし

マ)なり。
【一〇六】柍振。柍は屋宇の中央、振は屋宇の端なり。
【一〇七】巖窔。幽深の處なり。鬱律は小聲なり。
【一〇八】牆藩。垣なり。倏忽は疾き貌。
【一〇九】飛梁。閣道なり。
【一一〇】蠛蠓。遊氣なり。
【一一一】欃槍。星の名。
【一一二】玄冥。北方水神の名。
【一一三】熛闕。赤色の闕なり。
【一一四】應門。正門なり。
【一一五】幽都。山海經に北海ノ内ニ山アリ、名ケテ幽都トイフとあり。
【一一六】涌醴。醴泉湧き出づるなり。汨は盛なる貌。
【一一七】連蜷。長くして曲れる貌。
【一一八】崑崙。天帝の居る山の名。敦圉は盛に怒る貌。
【一一九】樛流。長遠の貌。高光は宮の名。
【一二〇】方皇。觀の名。西靑は西廂淸淨の處なり。
【一二一】前殿。正殿なり。諸宮に皆是あり。漢書に未央宮ニ前殿ヲ立ツとあり。崔巍は高き貌。
【一二二】和氏。璧なり、以て殿を飾る。玲瓏は光明の貌。
【一二三】浮柱。梁上の柱なり。飛榱は椽なり。
【一二四】莫莫。衆多の貌。
【一二五】閌閬閬。高き貌。
【一二六】寥廓。虛靜の貌。
【一二七】紫宮。紫微宮なり。崢嶸は高深の貌。
【一二八】駢交錯。櫓棟の相交るをいふ。
【一二九】曼衍。分布すること。
【一三〇】峻嵲隗。山の高く長き貌。
【一三一】雲閣。樓閣の高く雲に逮るをいふ。
【一三二】紛蒙籠。暗き貌。

て以て混成し、紅采の（一三三）流離たるを曳き、翠氣の（一三四）宛延たるを颺げ、（一三五）琁室と傾宮とに襲ぎ、高きに登り遠き〔亡國〕を眇み、肅乎として淵に臨むが若し。（一三六）廻猋肆くして其れ（一三七）碭駭し、（一三八）桂椒を披いて（一三九）栘楊を鬱にし、香（一四〇）芬茀として以て（一四一）穹隆し、（一四二）薄櫨を撃つて榮に將び、（一四三）薌咲肸として以て（一四四）棍批し、聲駍隱として鐘を歷ち、（一四五）玉戶を排いて（一四六）金鋪を颺げ、（一四七）蘭蕙と芎藭とを發し、帷（一四八）弸環として其れ（一四九）拂汨し、稍く晻晻として（一五〇）靚深なり。陰陽清濁して、（一五一）穆羽相和し、（一五二）夔牙の琴を調するが若く、（一五三）般倕其の（一五四）剞劂を棄て、（一五五）王爾其の（一五六）鉤繩を投げ、（一五七）征僑と偓佺とを方にすと雖も、猶ほ（一五八）彷彿として其れ夢の若し。

【一三三】流離。分散の貌。
【一三四】宛延。長く曲れる貌。
【一三五】琁室、傾宮。玉を以て飾りし宮室。桀王琁室を作り紂王傾宮を作る。
【一三六】廻猋。回風なり。
【一三七】碭駭。忽ち起ること。
【一三八】桂椒。香木なり。
【一三九】栘楊。木の名。
【一四〇】芬茀。香氣の盛なる貌。
【一四一】穹隆。盛なる貌。
【一四二】薄櫨。欂櫨に同じ、梁上の短柱なり。
【一四三】薌。香に同じ。咲肸は疾く散ずる貌。
【一四四】棍批。むらがり打つこと。
【一四五】玉戶。玉を以て飾りし戶。
【一四六】金鋪。門の飾なり、環を銜む所にて龜蛇の形をなし、銅にて作る。
【一四七】蘭蕙、芎藭。香草の名。
【一四八】弸環。風の帷帳を吹く聲。
【一四九】拂汨。動く貌。
【一五〇】靚深。靜淸なり。
【一五一】穆羽。聲細くして羽聲の如く、穆然として相和するなり。
【一五二】夔牙。夔は舜の樂官、牙は伯牙、皆古の音樂に巧なる人。
【一五三】般倕。般は魯般、倕は舜の共工たり。皆古の巧人。
【一五四】剞劂。刀鑿なり。
【一五五】王爾。古の巧匠の名。
【一五六】鉤繩。鉤は曲尺、繩はスミナハ。
【一五七】征僑、偓佺。皆古の仙人の名。
【一五八】彷彿。視ること諦ならざる貌。

【大意】既に甘泉宮に達するや、廈屋變巧にして雲氣水波の相譎詭するが如く、高く木材を積んで觀闕を成し、首を擧げて高く望めば、目昏迷して見る所なし。觀闕淸淨高大にして、東西を指すに際涯なく、魂魄其の壯麗に驚き、眇然として迷惑す。欄干に據りて周行すれば、廣大にして際限なし。武帝嘗て玉樹を此宮に植ゑ、碧玉を以て葉となし、馬犀の文彩を以て飾となし、勇壯なる金人をして鐘虡を負はしめ、その肌膚龍鱗の如し。宮觀曜曜として上下に照映し、日光の下照するが如く、實に天神の宮居にも比すべし。大臺高く聳えて上北極星に至り、列星日月その屋角を繞り、雷聲微に幽深の處に聞え、電光忽ち牆垣の上に見ゆ。されば鬼神も其上に及ぶ能はず、當に半途にして墜落すべし。高く倒景を超え遊氣を過ぎ、閣道を絶りて靑天を拂ふべく、欃槍を左にし玄冥を右にし、前に赤闕を造り正門其後に在り。門闕は高く西海と幽都とを蔭ひ、醴泉湧出して川を成し、蛟龍東岸に偃蹇し、白虎崑崙（甘泉宮中に在り）に怒吼し、高光方皇の二觀、また西廂淸閑の處に在り。前殿は飾るに和氏の璧を以てし、其光玲瓏たり。檐宇高峻にして衆神其の傾側を扶持するが如く、高潔虛靜なること紫微宮の崢嶸たるが如く、檐棟相連續し、上下蒙蒙として混成し、紅采翠氣其側に流離宛延し、其華麗なること實に夏桀の琁室と、殷紂の傾宮とに繼ぐ。されば恰も高きに登り彼の夏殷二亡國の跡を望みて、肅然として懼るること、深淵に臨むが如きものあらん。

回風疾起して鬱起し、香木を披拂して移楊を鬱茂し、香氣盛に起り欂櫨を擊つて屋翼に及び、風と同じく鐘を擊ち、駍隱として聲を發し、風玉戶を開いて金鋪を飄颺し、蘭蕙芎藭の氣を發し、帷帳を卷いて微動し、闇然として深靜なり。風淸濁の音を擧げ、其細きこと羽聲の如く、穆然として相和し、恰も夔牙の琴瑟を鼓するが如し。建築の美妙なるを見ては、般倕王爾も猶ほ刀鑿を投じて嘆息すべく、仙人ここに遊ぶも、亦其形狀を識らず、髣髴として夢中の如くなるべし。是に於て事變じ物化し、目駭き耳回る。蓋し天子、珍臺閒館、(一五九)琁題玉英、(一六〇)蟫蜎蠖濩たる中に(一六一)穆然たり。惟ふに夫れ心を澄まし魂を淸くし、精を儲へ(一六二)恩を垂れ、天地を感動し、釐を(一六三)三神に逆ふる所以の者なり。廼ち逑を搜び偶を索め、(一六四)皐伊の徒(一六五)倫に冠たり能に魁たり。(一六六)甘棠の惠を函にし、(一六七)東征の意を挾み、相與に(一六八)陽靈の宮に齋し、(一六九)薜荔を靡かして席となし、瓊枝を折りて以て芳となし、淸雲の流霞を噏ひ、(一七〇)若木の(一七一)露英を飲み、(一七二)禮神の囿に集り、

【一五九】琁題。題は頭なり、玉を以て椽の頭を飾るなり。玉英は玉に英華の色あるなり。
【一六〇】蟫蜎蠖濩。刻鏤の形なり。
【一六一】穆然。靜默の貌。
【一六二】恩。李善本思に作る。
【一六三】三神。天地人の神。
【一六四】皐伊。皐は皐陶、堯の臣なり、伊は伊尹、湯の臣なり。
【一六五】倫に冠。羣類に傑出す。
【一六六】甘棠。詩篇の名、召公を美するなり。
【一六七】東征。周公東のかた管蔡を征し、周の功業を成す。
【一六八】陽靈。宮の名。
【一六九】薜荔。草の名、まさきのかづら。
【一七〇】若木。神木なり。
【一七一】露英。露を含める花。
【一七二】禮神。神を祭ること。

(一七三)頌祇の堂に登る。光耀の長旃を建て、(一七四)華覆の(一七五)威威たるを昭にし、(一七六)琁璣を攀ぢて下視し、行く目を(一七七)三危に遊ばしめ、衆車を(一七八)東阬に陳ね、(一七九)玉軑を肆にして下り馳せ、(一八〇)龍淵に漂んで(一八一)九垠を還り、地底を窺ひて上り廻る。(一八二)風從從として轄を扶け、鸞鳳紛として其(一八三)蕤を銜み、(一八四)弱水の(一八五)濎濙たるを梁り、(一八六)不周の(一八七)逶迤たるを蹈み、(一八八)西王母を想ひ、欣然として壽を上り、(一八九)玉女を屏けて(一九〇)宓妃を却け、玉女も其(一九一)清矑を眺る所なく、宓妃も曾て其(一九二)蛾眉を施すを得ず。方に道德の精剛を攬り、神明に侔うして之と(一九三)資をなす。

【大意】宮觀の上、膨鏤變化し、皆人の耳目を驚かす。天子乃ち珍臺閑館の中に坐し、默然として祭祀の事を思ふ。蓋し心を澄まし魂を淸くし、精誠を儲蓄し、心思を鎭め、天地を感動せしめ、以て福を三神に求むる所以なり。因つて伊尹皐陶にも比すべき、羣傑に冠たる賢人を求め、

【一七三】頌祇。神を祭ること。
【一七四】華覆。華蓋なり。
【一七五】威威。葳蕤なり、盛に垂るる貌。
【一七六】琁璣。北斗星なり。
【一七七】三危。山の名。
【一七八】東阬。東海なり。
【一七九】玉軑。玉にて飾れる車轄。
【一八〇】龍淵。淵の名、張掖に在り。
【一八一】九垠。九重の淵なり。
【一八二】從從。疾き貌。
【一八三】蕤。綏なり、車中の把トリテなり。
【一八四】弱水。川の名、崑崙山の東に在り。
【一八五】濎濙。よどみて流れざる貌。
【一八六】不周。山の名、西海の外に在り。
【一八七】逶迤。長く曲れる貌。
【一八八】西王母。仙女なり。
【一八九】玉女。美女なり。
【一九〇】宓妃。洛水の神女なり。
【一九一】清矑。美しき瞳子。
【一九二】蛾眉。美しき眉。
【一九三】資。用なり。

周公召公の心を以て心となし、共に陽靈宮に齋戒す。香草を以て席となし、瓊枝を折りて佩となし、雲表の霞、若木の露を吸ひて、以て精神を淸め、此に始めて齋宮を去りて祭所に往く。ここに乃ち長旗を建て華蓋を垂れ、北斗星を攀ぢ、三危山を望み、衆車を東海に陳ね、車騎を肆にして下り馳せ、龍淵の九重なるに漂び、地底を窺ひて上り還る。疾風をして車轄を扶けしめ、鸞鳳をして綏纓を銜ましめ、弱水の小流を渡り、不周山を超え、既に西極に至るや、王母を想ひて壽を上り（是れ好色の敗德を娯むもの、作者諷刺の在る所なり）玉女と宓妃とを屛く。故に玉女宓妃も其眉目を呈する所なし。乃ち道德精微の理を取り、神明に侔うして資用となす。

是に於て、欽み（一九四）柴し宗び祈り、（一九五）皇天に（一九六）燎薰すれば、（一九七）皐搖泰壹（一九八）洪頤を擧げ靈旗を樹て、（一九九）樵蒸焜り上り（二〇〇）配藜して四に施き、東のかた滄海を燭し、西のかた（二〇一）流沙を耀し、北のかた幽都を爌し、南のかた（二〇二）丹厓を煬す。（二〇三）玄瓚觩髎として、（二〇四）秬鬯泔淡たり。（二〇五）肸蠁豐融して（二〇六）懿懿芬芬たり。炎黃

【一九四】柴。柴を燒き天を祭る。
【一九五】皇天。皇は大なり。天神。
【一九六】燎薰。牲玉を燒き天に薰して祭るなり。
【一九七】皐搖、泰壹。五臣本皐を招に作る。皆星神の名。
【一九八】洪頤。旗の名。
【一九九】樵蒸。炬火なり。
【二〇〇】配藜。披離なり。
【二〇一】流沙。西北方の沙漠をいふ、弱水の餘波流沙に入る。沙は音シ、叶韻。
【二〇二】丹厓。丹水の涯なり。厓は音ギ、叶韻。
【二〇三】玄瓚。黑玉を以て飾りし酒器、之を以て鬯を灌ぐなり。觩髎は玄瓚の貌なり。
【二〇四】秬鬯。黑黍にて釀しし香酒、之を灌ぎて神を降すなり。泔淡は滿つるなり。

龍を感せしめ、摽（二〇七）碩鱗を訛す。（二〇八）巫咸を選んで（二〇九）帝閽に叫ばしめ、天庭を開いて羣神を延く。（二一〇）儐暗藹として清壇に降り、瑞穰穰として委ること山の如し。是に於て事畢り功弘まり、車を廻らして歸り、（二一一）三巒を度りて（二一二）棠梨に偈ふ。（二一三）天閫決けて地垠開け、（二一四）八荒協ひて萬國諧ぐ。（二一五）長平に登りて雷鼓磕り、天聲起りて勇士厲み、雲飛揚して雨（二一六）滂沛たり、于に胥徳ありて萬世に麗し。

【大意】是に於て恭敬して柴を燔き、尊崇祈求して以て祭れば、招搖泰壹旌旗を擧げて導き、燎燔樵蒸の光披離して四方に施き、其光遙に四方極遠の處を照す。乃ち秬鬯を灌ぎて神を招くや、玄瓚は觩觩として秬鬯は湛湛たり。其香氣四方に分散し、神物を感動せしむ。乃ち神巫を選んで天門に呼び、以て百神を招かしむれば、百神相率ゐて清壇に降り、祥瑞穰穰として積んで山を成す。祭事ここに終り、功績既に成るや、天子乃ち車を回らして歸り、三巒觀を度り棠梨館に憩ふ。天地の門始めて開通して德澤を出し、八荒萬國皆諧和せざるはなし。天子長平坂に登り鼓を擊てば、其

【二〇五】肸蠁。分布すること。豐融は饒衍なり。
【二〇六】懿懿芬芬。香氣の盛なる貌。
【二〇七】碩鱗。大なる麒麟。
【二〇八】巫咸。古の神巫の名。
【二〇九】帝閽。天門なり。
【二一〇】儐。神賓なり。暗藹は衆盛なり。

【二一一】三巒。蓋し封巒なり。觀の名。漢書に甘泉ニ封巒棠梨アリとあり。
【二一二】棠梨。館の名。
【二一三】天閫。閫は門限なり。
【二一四】八荒。八方なり。
【二一五】長平。坂の名、池陽の南に在り。
【二一六】滂沛。雨の降る貌。

聲大にして雷の如く、扈從の勇士皆嚴整なり。かくて恩澤の多きこと雲行き雨施すが如く、君臣皆聖德あり、故に華麗永く萬世に至る。

(三一七)亂に曰く、(三一八)崇崇たる(三一九)圜丘隆く天に隱り、登降(三二〇)峛崺して單いにして(三二一)埢垣たり。(三二二)增宮參差として駢んで(三二三)嵯峨たり。(三二四)岭嶒嶙峋洞かにして厓なく、上天の縡杳にして(三二五)旭卉たり。(三二六)聖皇穆穆として信に厥れ對ひ、(三二七)郊禋に徠り祇んで神の依る所なり。徘徊(三二八)招搖して(三二九)靈棲遲し、輝光眩燿して厥福を降し、子子孫孫長に極なし。

【大意】亂に曰く、圜丘高く天に憑り、升降上下すれば、廣大にして圓し、宮宇騈列して高く聳え、高深にして其涯を知らず。上天の事は高遠にして知るべからざるも、天子穆穆として其德よく天に配す。乃ち來りて郊禋を行へば、天神の依附する所となり、神靈徘徊して此に遊息し、福を降して子子孫孫長に絕ゆることなからしむ。

【三一七】亂。理なり、篇末に於て一賦の旨意を發理する詞也。
【三一八】崇崇。高き貌。
【三一九】圜丘。天を祭る壇。
【三二〇】峛崺。斜に行くこと。
【三二一】埢垣。圓き貌。
【三二二】增宮。層宮なり。
【三二三】嵯峨。高き貌。
【三二四】岭嶒嶙峋。深くして涯なき貌。
【三二五】旭卉。幽昧の貌、知り難きなり。
【三二六】聖皇。天子なり。
【三二七】郊禋。天の祭なり。
【三二八】招搖。逍遙に同じ、徘徊に同じ。
【三二九】靈。神靈なり。棲遲は遊息すること。

耕藉

(一)藉田の賦

(二)潘安仁

伊れ晉の四年正月(三)丁未、(四)皇帝親ら(五)羣后を率ゐて(六)千畝の甸に藉す。禮なり。是に於て乃ち(七)甸帥をして畿を淸め、(八)野廬をして路を掃はしめ、(九)封人をして宮を壝き(一〇)掌舍をして柦を設けしむ。靑壇蔚として其れ嶽のごとく立ち、翠幕(一一)黕として以て雲のごとく布き、崇基の(一二)靈址を結び(一三)四塗の(一四)廣阼を啓き、沃野(一五)墳腴にして(一六)膏壤(一七)平砥し、淸洛濁渠流を引

【一】藉田。天子親ら田を耕し、以て祭祀に供する儀式。晉書に云く泰始四年正月丁亥、世祖初メテ千畝に藉ス、司空掾潘岳藉田頌ヲ作ルと。

【二】潘安仁。潘岳、字は安仁、滎陽中牟の人。

【三】丁未。晉書に丁亥ニ藉田シ戊子ニ大赦スとあり。丁未となすは誤なり。

【四】皇帝。晉の武帝なり。

【五】羣后。羣卿といふが如し。

【六】千畝。天子藉田の定數なり。甸は郊野の稱。

【七】甸帥。周禮に甸帥ハ其屬ヲ帥ヰテ王藉ヲ耕耨スルコトヲ掌ルとあり。師は長なり。今師を改めて帥となせるは晉の景帝の諱を避けしなり。畿は王畿なり。

【八】野廬。周禮に野廬氏ハ國ノ道路ヲ達スルコトヲ掌ルとあり。

【九】封人。周禮に王の社壝ヲ設ケ、畿封ヲナシテ之ヲ樹ツルコトヲ掌ルとあり。

【一〇】掌舍。王の會同の舍を掌る官。柦。かき。やらい。

【一一】黕。黑き貌。

【一二】靈址。壇の基なり。

【一三】四塗。四方の途。

【一四】廣阼。廣き階段。

【一五】墳腴。土地肥えたる也。

【一六】膏壤。肥沃なる土地。

【一七】平砥。平にして砥の如きなり。

き水を激ぎ、(一八)遐阡繩のごとく直く、邇陌矢の如し。(一九)總犗縹軛に服し(二〇)紺轅黛耜を綴け、(二一)儲駕を廛左に儼にして、(二二)萬乘の躬ら履むを俟つ。(二三)百僚先づ置き、位職を以て分ち、上より下に下るまで、具に惟れ(二四)命臣なり。春服の(二五)萋萋たるを襲け、(二六)游車の轔轔たるに接ぎ、微風(二七)輕幰に生じ纖埃朱輪に起り、(二八)森として璋を奉げて以て(二九)階列し、(三〇)皇軒を望んで肅み震れ、(三一)湛露の朝陽に晞き、衆星の(三二)北辰に拱ふが若し。

【一八】遐阡。遐は遠なり、南北の道を阡といひ、東西を陌といふ。
【一九】總犗。靑き牛。縹軛は靑色のクビキ。
【二〇】紺轅。深靑色の轅。黛耜は靑色のスキ。
【二一】儲駕。豫め用意せる駕牛。廛はアキチ。
【二二】萬乘。天子をいふ。
【二三】百僚。百官なり。
【二四】命臣。天子より爵命を加へられし臣。
【二五】萋萋。盛なる貌。
【二六】游車。天子の從車。轔轔は車の聲。
【二七】輕幰。幰は車の幌。
【二八】森。衆盛の貌。
【二九】階列。爵位の順に列ぶ。
【三〇】皇軒。天子の車。
【三一】湛露。しげき露。
【三二】北辰。北極星なり。論語に政ヲナスニ德ヲ以テスルハ、譬ヘバ北辰ノ其所ニ居テ衆星ノ之ニ共フガ如シとあり。

【大意】晉の武帝泰始四年正月丁亥、天子躬ら羣公を率ゐて藉田の禮を行ふ。蓋し古禮に倣ふ也。先づ甸帥をして王畿を淸め、野廬をして路を掃ひ、封人掌舍をして宮舍を築かしめ、靑壇高く聳え翠幕廣く張り、基礎を高くし階段を廣くす。沃野平かにして砥の如く、河洛の水を引いて田に灌ぎ、畔道直くして繩と矢との如し。靑牛靑色の軛を著け、紺色の轅に靑耜を附け、駕牛を廛左に儲けて、天子の親ら履み耕す

を俟つ。先づ百官を置き各〻職掌を分ち、上下悉く命臣なり。皆春服を著け車駕に隨從す。その聲轔轔たり。徽風輕幌を卷き、輕塵朱輪に起り、羣臣皆珪璧を捧げて立ち、天子の車を望んで肅然たり。其狀恰も湛露の朝陽に晞き、衆星の北極星に向ふが如し。

是に於て前驅魚のごとく麗り、(三三)屬車鱗のごとく萃り、(三四)閶闔洞に啓きて(三五)參塗に驪を方べ、(三六)常伯陪乘し(三七)太僕轡を秉り、后妃種稑の種を獻じ、(三八)司農播殖の器を撰へ、(三九)挈壺升降の節を掌り、(四〇)宮正門閭の(四一)蹕を設く。天子乃ち玉輦に御し(四二)華蓋に蔭はれ、(四三)衡牙鏘鎗として綃紈(四四)綷縩たり。(四五)金根照耀して以て炯晃し、(四六)龍驥騰驤して沛艾し、(四七)朱玄を(四八)离坎に表し、(四九)靑縞を(五〇)震兌に飛ばし、(五一)中黃曄として以て暉を發し、(五二)方綵紛として其れ繁く會ひ、(五三)

【三三】屬車。隨從の車。
【三四】閶闔。洛陽宮の門。
【三五】參塗。三筋の道。
【三六】常伯。官名。
【三七】太僕。官名。
【三八】司農。官名。
【三九】挈壺。官名。刻漏を掌る。
【四〇】宮正。官名。
【四一】蹕。行者を止め道を淸むること。
【四二】華蓋。車上の蓋なり。
【四三】衡牙。佩玉なり。鏘鎗は玉の聲。
【四四】綷縩。衣の聲なり。
【四五】金根。瑞車なり。
【四六】龍驥。馬の大なるもの。騰驤、沛艾は馬の行く貌。
【四七】朱玄。赤黑なり。
【四八】离坎。李善本离を離に作る、離は南方の卦、坎は北方の卦なり。五行說によれば南は赤にして北は黑なり。
【四九】靑縞。靑と白。
【五〇】震兌。震は東方の卦、兌は西方の卦、東は靑にして西は白なり。
【五一】中黃。中は中央、五行說によれば中央は黃なり。
【五二】方綵。四方の色。
【五三】五輅。五種の車。周禮に王ノ五輅とあり。玉輅、金輅、象輅、革輅、木輅、是れなり。

五輅鑾を鳴らし、(五四)九旗旆を揚げ、(五五)瓊鈒入り纂り(五六)雲罕晻藹たり。簫管(五七)嘲嘈として以て(五八)啾嘈たり。鼓鞞(五九)硡隱として以て、(六〇)砰礚たり。(六一)筍虡嶷として以て(六二)軒翥し、洪鐘區外に越え、(六三)震震塡塡として、塵のごとく鶩りて天に連り、以て藉田に幸す。(六四)蟬冕熲として以て(六五)灼灼たり、(六六)碧色肅として其れ(六七)芊芊たり。(六八)夜光の荊璞を剖けるに似、茂松の山巓に依れるが若し。

【大意】是に於て法駕始めて臨幸せんとす。前驅の行列魚鱗の聚るが如く、宮門洞に開けて、三條の大道に驅馬を駢べ、常伯陪乘し、太僕轡を執り、后妃穜稑の種を獻じ、司農耒耜を具へ、挈壺升降の儀節を掌り、宮正行路の警蹕を掌る。天子乃ち鳳輦に乘り華蓋に蔭はれ、佩玉鏘鏘として鳴り、素衣粹縩として聲あり。玉車耀きて駿馬躍り、車服旌旗皆四方の色を備へて前引し、瓊鈒入り亂れ、旙旆衆盛なり。簫鼓の聲殷殷として雷の如く、大鐘の聲踰越

【五四】九旗。日月を畫けるを常といひ、蛟龍を畫けるを旂といひ、通帛を旃といひ、雜帛を物といひ、熊虎を旗といひ、鳥隼を旟といひ、龜蛇を旐といひ、全羽を旞といひ、析羽を旌といふ。

【五五】瓊鈒。玉を以て飾りしホコ。

【五六】雲罕。旙なり。晻藹は盛なる貌。

【五七】嘲嘈。笛の聲なり。

【五八】啾嘈。かまびすしきこと。

【五九】硡隱。鼓の聲。

【六〇】砰礚。鼓の聲。

【六一】筍虡。鐘を懸くる架の猛獸を以て飾とせるもの。

【六二】軒翥。猛獸の高く飛びあがること。

【六三】震震。車馬の聲。塡塡は羣行の聲。

【六四】蟬冕。侍中の冠なり。熲は輝くこと。

【六五】灼灼。かがやく貌。

【六六】碧色。蟬の形の碧玉の色。

【六七】芊芊。かがやくこと。

して區外に在り。ここに藉田の所に幸す。從臣の衣冠芊芊として輝き、夜光の璧の楚璞より出で、茂松の山巓に依るが如く、光彩陸離たり。是に於て、我が皇乃ち靈壇に降りて(六九)御耦を撫る。(七〇)坻場履を染め(七一)洪縻手に在り。(七二)三たび推して舍め、庶人畝を終へ、貴賤班を以て、或は五たびし或は九たびす。斯時に于て、居、都鄙となく、民、(七三)華裔なく、長幼(七四)雜遝して以て交集し、士女(七五)頒斌して咸く戻り、(七六)褐を被り裾を振ひ、髫を垂れ髻を總ね、踵を躡み肩を側て、裳を搴き袂を連ね、黃塵之が爲に四に合ひ、陽光之が爲に潛翳し、容を動かし音を發して觀る者、康衢に(七七)抃舞し、聖世を(七八)謳吟せざるはなく、情(七九)昏作を欣樂して、力を(八〇)樹蓺に盡さんことを慮り、(八一)推督することなけれども常に勤め、之を課することなけれども自ら勵む。躬ら勞に先だちて悅を以て使ふ、豈刑を嚴にして制を猛にせんや。

【大意】天子乃ち靈壇に降りて耦を執り、土壤を履み牛轡を手にして三たび推し、公卿其位次に隨つて、或は五推し或は九推し、庶人其後を承

【六八】夜光。玉の名。荊璞は楚の璞なり。
【六九】御耦。天子の用ふるスキ。
【七〇】坻場。土壤なり。
【七一】洪縻。牛の轡。
【七二】三たび云云。藉田の禮を行ふ時、天子耜を執りて三推し、公は五推し卿諸侯は九推し、庶人は盡く耕すなり。
【七三】華裔。裔は邊陬の地。華夷といふが如し。
【七四】雜遝。衆多の貌。
【七五】頒斌。相雜る貌。
【七六】褐。粗衣なり。
【七七】抃舞。手を打ちて喜び舞ふこと。
【七八】謳吟。聖德を頌歌すること。
【七九】昏作。勤めて働くこと。
【八〇】樹蓺。耕作といふが如し。
【八一】推督。督責なり。

けて、盡く千畝を耕す。斯時に於て都鄙華夷を論せず、老幼士女悉、其所に至りて盛儀を觀、黄塵四に起りて天日を蔽ふに至る。觀る者皆容儀を動かし音聲を發し、衢路に抃舞して聖徳を謳歌せざるはなく、心に勤勉を樂み、力を農耕に盡さんことを欲せざるはなく、人の責罰なきも自ら勤勞し、程課をなすことなきも自ら勉勵す。是れ天子親ら勞に先んじて悅樂を以て人を使へばなり。豈嚴刑酷罰を以て、民を制威するが爲ならんや。

邑老田父あり、或は進んで稱して曰く、蓋し（八二）損益は時に隨ふ。理常に然るあり。高きは下きを以て基となし、民は食を以て天となす。（八三）其末を正うせんとする者は（八四）其本を端うし、其後を善くせんとする者は其先を愼む。夫れ（八五）九土の宜任せず、（八六）四人の務一ならず、野に（八七）菜蔬の色あり、朝に（八八）代耕の秩なく、（八九）儲稸の以て災を虞るなく、徒に歳を望んで以て自ら畢ふ。（九〇）三季の衰皆（九一）此物なり。今聖上（九二）昧旦に丕顯にして、夕まで（九三）惕若として慄れ、匱しきを豐なるに圖り、儉を逸に防ぎ、欽む

【八二】損益云云。耕せば則ち益あり、耕さざれば則ち損あり、故に時に隨ふといふ。
【八三】其末。末とは商賈をいふ。
【八四】其本。本とは農耕をいふ。
【八五】九土。九州の土地。宜とは其土地に適する物なり。
【八六】四人。四民なり、士農工商をいふ。一は專一なり。
【八七】菜蔬の色。野菜の如き青白き顏色。
【八八】代耕。禮記に夫レ祿ハ以テ其耕ニ代フルニ足ルとあり。秩は祿なり。
【八九】儲稸。穀物の貯。
【九〇】三季。三代の末、即ち夏桀、殷紂、周の幽王なり。
【九一】此物。前述の事。
【九二】昧旦。早朝なり。丕顯は大に德を明にすること。
【九三】惕若。懼るゝ貌。

かな欽むかな、惟れ穀を之れ恤へ、(九四)三時の弘務を展べ、倉廩を盈溢に致す。固に堯湯の用心にして、存救の要術なり。

【大意】 邑老進んで頌して曰く、蓋し損益は各其時に隨ふ。耕せば益あり耕さざれば損あり。是れ理の常にして怪むに足らず。夫れ貴は賤を以て基となし、民は食を以て先となす。故に其末を正うせんとする者は、先づ其本を端うせざるべからず。其後を善くせんとする者は、其先を愼まざるべからず。九州の土宜も之を貢せず、四民の務專一ならず、民に菜色あり、吏に俸祿なく、倉廩の以て凶災に備ふるなく、徒に歳を望んで空しく終へしは、三季の衰へし所以にして、農耕を修めざりし過なり。今天子旦に其德を明にし、以て夕まで愼み懼れ、乏しきを圖るに豐時に於てし、儉約を安逸に防ぎ、常に農穀を以て憂となし、農務を勤めて以て倉廩を盈さんことを謀る。是れ實に帝堯成湯の心術にして、救民の要道なり。

若し乃ち(九五)廟祧に事あり、(九六)祝宗日を諏れば、(九七)簠簋普に渟ぐも、則ち此れより實ち、(九八)鬯を(九九)蕭茅に縮らすも、又是に於てか出で、黍稷馨香にして、(一〇〇)旨酒嘉栗なり。宜なり其の民和ぎ年登りて、

【九四】三時。春夏秋なり。これ農耕の季節なり。
【九五】廟祧。宗廟なり。事とは祭なり。
【九六】祝宗。祝は神官。宗は宗人。
【九七】簠簋。黍稷を盛る祭器。
【九八】鬯。神を祭る時地に灌ぐ酒。
【九九】蕭茅。香草の名、之を用ひて酒をこすなり。
【一〇〇】旨酒。美酒なり。嘉栗は能く愼むこと。

神之に吉を降すや。古人言へるあり曰く、聖人の德は以て孝に加ふるなきか。夫れ孝は天地の性、人の由りて靈なる所なりと。昔は明王孝を以て天下を理む。其の之に繼ぐ或る者、鮮いかな希なるかな。我が皇晉に逮んで、實に斯道を光にし、(一〇一)儀刑萬國に孚あり、愛敬(一〇二)祖考に盡く。故に(一〇三)稼を躬して以て(一〇四)粢盛に供するは、孝を致す所以なり。(一〇五)穡を勸め以て百姓を足らしむるは、本を固くする所以なり。本を能くして孝あり。盛德大業至れるかな。此れ(一〇六)一役にして、(一〇七)二美具る。亦遠からずや、亦重からずやと。敢て頌を作りて曰く、

【大意】邑老尙ほ語を續けて曰く、宗廟の祭に、祝宗吉日を選び、簠簋豐溢して、德能く大に和するも、亦藉田に因りて充實し、蕭茅を用ひて酒を縮らすも、亦藉田の中より出づ。黍稷馨しくして美酒を灌ぐこと謹敬なり。其の民和ぎ年豐にして、神之に吉祥を降すも亦宜なり。曾子孔子に問ひて曰く、聖人の德以て孝に勝るものなきかと。孔子答へて曰く、天地の性、人を貴しとなす。人の行は孝より大なるはなし。夫れ聖人の德、又何を以て孝に加へんやと。昔は聖明の君、孝を以て天下を理めたるも、其後よく之に繼ぐ者少し。今我が晉皇に及び、實に此の孝道を光にし、

【一〇一】儀刑。儀表法則なり。
【一〇二】祖考。祖先なり。
【一〇三】稼。穀を種うること。
【一〇四】粢盛。黍稷を粢といふ、盛は器に入るるなり、神に供ふる物。
【一〇五】穡。穀を收斂すること。
【一〇六】一役。一事といふが如し、藉田を指す。
【一〇七】二美。本を固くすると、孝を致すと。

儀範を垂れて萬國に信孚せられ、愛敬の道、祖先に事ふるに極まる。故に躬ら耕して粢盛に供するは、孝を祖先に致す所以にして、稼穡を勸めて百姓を富ますは、本を固くする所以なり。本を固くして孝を致すは、實に盛德大業の至なり。藉田の一事よく此の二美を備ふ。亦遠重の至ならずやと。予因つて頌德の辭を作ること次の如し。

思樂しいかな甸畿や、薄か其茅を採る。(一〇八)大君戾りて、言に其農に藉す。其農三推し、萬方以て祗む。我が公田を耨り、實に我が私に及ぶ。我が簠斯れ盛、我が簋斯れ(一〇九)齊、我が倉陵の如く、我が庾坻の如し。茲を念ふこと茲に在り。永く言に孝あり。民力普く存し(一一〇)祝史辭を正す。神祗の歆る攸、(一一一)逸豫期なし。一人(一一二)慶あれば(一一三)兆民之に賴る。

【大意】我近畿の民たるを樂しみ、ここに其茅を採る。ここに天子來りて藉田の禮を行ふ。天子先づ耦を執りて三推すれば、萬方の民皆謹んで之に從ふ。先づ我が千畝の公田を耨り、遂に其私田に及ぶ。之によりて祭祀の簠簋に盛るべき粢盛を得、我が倉廩丘陵の如し。此の藉田を念ふは、實に此の孝敬に在り。永く此に孝道あり。民力普く存し、祝史辭を正して神に告ぐれば、神之を享け逸豫の福を降すこと限なし。天子善德あれば、天下の民皆其德澤を蒙るなり。

【一〇八】大君、天子なり。
【一〇九】齊。粢なり、音シ。
【一一〇】祝史。神官なり。
【一一一】逸豫。安樂なり。
【一一二】慶。善なり。
【一一三】兆民。天下中の人民。

(一)畋獵　上

子虛の賦

(二)司馬長卿

楚、(三)子虛をして齊に使せしむ。(四)王悉く車騎を發し(五)使者と出でて畋せしむ。畋罷んで子虛過りて(六)烏有先生に矜る。(七)亡是公存せり。坐定まる。烏有先生問うて曰く、今日の畋樂しきかと。子虛曰く樂しと。獲多きかと。曰く少しと。然らば則ち何ぞ樂しきと。對へて曰く、僕、齊王の僕に夸るに車騎の衆を以てせんと欲し、而して僕對ふるに雲夢の事を以てせしを樂むなりと。曰く得て聞くべきかと。子虛曰く、可なり。(八)王車千乘を駕し徒萬騎を選び、海濱に畋す。列卒澤に滿ち(九)罘網山に彌り、兎を掩ひ鹿を(一〇)轔り、麋を射麟を脚り、(一一)鹽浦に騖せ、鮮を割きて輪を染め、射中りて獲多く、矜りて自ら功とす。顧みて僕に謂つて曰く、楚も亦平原廣澤遊獵の地の、

【一】畋獵。狩獵なり、獸を取りて祭祀庖厨の用に供するなり。
【二】司馬長卿。司馬相如、字は長卿、蜀郡の人なり、漢の景帝の時、梁に遊んで子虛の賦を著す。
【三】子虛。假に設けたる人の名。
【四】王。齊王なり。
【五】使者。子虛を指す。
【六】烏有先生。假に設けたる人の名。烏有とは、いづくんぞ有らんやとの意なり。
【七】亡是公。假に設けたる人の名、亡是公とは有ることなき公の意なり。
【八】王。齊王なり。
【九】罘網。罘は、獸を捕ふる網。
【一〇】轔。轢なり。
【一一】鹽浦。海濱の鹽を出す處。

饒にして樂しきこと此の若きものあるか。楚王の獵（二）寡人に孰與ぞやと。僕車を下り對へて曰く、臣は楚國の鄙人なり、幸にして宿衞を得ること十有餘年、時に從つて出遊し、後園に遊び有無を覽たり。然も猶ほ未だ徧く觀る能はざるなり。又焉んぞ以て其（三）外澤を言ふに足らんやと。齊王曰く、然りと雖も略子の聞見せる所を以て之を言へと。僕對へて曰く、（四）唯唯、臣聞く楚に七澤ありと。嘗て其一を見たるも、未だ其餘を覩ざるなり。臣の見たる所は蓋し特其小小なるもののみ。名づけて（五）雲夢といふ。

【大意】楚王子虛をして齊國に使せしめたる時、齊王は悉く車騎を出して子虛と畋せしむ。蓋し其盛を誇示せんが爲なり。畋終りて後、子虛、烏有先生を訪ひて頻に大言す。時に亡是公亦坐に在り。坐定まりし時、烏有先生子虛に問ふ。今日齊王の畋樂しかりしやと。子虛答ふらく、樂しかりきと。先生因つて問ふ、獲多かりしやと。子虛答ふらく、少しと。先生曰く、獲少くば樂しといふべからず、然るに今樂しといふは何故ぞと。子虛答へて曰く、吾が樂しむ所は獲の多きに在らず。齊王余に誇示するに、車騎の多きを以てせんと欲す。余却つて我が楚の雲夢の盛大を說き、以て齊王の膽を破りしを以て樂しとなすなりと。先生曰く請ふ吾が爲に雲夢の事を語れと。子虛曰、

【二】寡人。王侯の謙稱。齊王自ら謂ふなり。
【三】外澤。遠方にある狩場。
【四】唯唯。はいはいと諾ふ詞。
【五】雲夢。楚の大澤の名。

可なりと。因つて先づ齊王の畋を說きて曰く、齊王今日車千乘、卒萬騎を選びて海濱に畋す。士卒山澤に滿ち網罘山野を覆ひ、網を以て兎を捕へ、車にて鹿を轢き、麋を射、脚を持ちて麟を捕へ、進んで鹽浦に馳せ鮮肉を割きて車輪を染め、鹽にて之を食ふ。かくて獸を獲ること多く自ら其功に矜り、顧みて余に謂つて曰く、楚にもかかる大澤ありや、楚王の畋と吾が齊國の畋と、孰か勝れると。余乃ち答へて曰く、臣はもと楚の鄙人なるも、幸に宿衞の士となるを得ること十餘年の久しきに及び、時時楚王に從つて後園に遊び、其有無を見たり。然も猶ほ未だ見盡す能はず。焉んぞ山澤の多きを知るに足らんやと。齊王曰く、然らば唯汝の聞見せる所を述べよと。余答へて曰く、楚に七澤あり、嘗て其一を見たり。然も臣の見たる所は其最小なる者のみ。其名を雲夢澤といふ。

雲夢は方九百里、其中に山あり。其山は則ち(二六)盤紆岪鬱、隆崇嵂崒、(二七)岑崟參差として、日月も蔽れ虧け、(二八)交錯糾紛して上青雲を干し、(二九)罷池陂陁として下江河に屬く。其土は則ち(三〇)丹青赭堊、(三一)雌黃白坿、(三二)錫碧金銀あり。衆色炫耀し、照爛すること龍鱗のごとし。

【二六】盤紆。わだかまり曲ること。岪鬱は山の高き貌。隆崇は聳え立つこと。嵂崒は山の高き貌。

【二七】岑崟。けはしき峰。參差は高低の一樣ならざる貌。

【二八】交錯糾紛。入り亂ること。

【二九】罷池。傍頽る貌。陂陁は寛廣の貌。

【三〇】丹青。赤土と青土。赭は赤土。堊は白土。

【三一】雌黃、白坿。石英なり。

【三二】錫碧。錫は白鑞、碧は青玉。

其石は則ち赤玉、(二三)玫瑰、(二四)琳瑉昆吾、(二五)瑊玏玄厲、(二六)碝石碔砆あり。其東には則ち(二七)蕙圃衡蘭、芷若射干、穹窮菖蒲、茳蘺蘪蕪、諸柘巴苴あり。其南には則ち平原廣澤ありて、登降(二八)陁靡、(二九)案衍壇曼して、緣らすに大江を以てし、限るに(三〇)巫山を以てす。其高燥には則ち(三一)葴蔪苞荔、薛莎青薠を生じ、其(三二)埤濕には則ち(三三)藏莨蒹葭、東薔彫胡、蓮藕菰蘆、菴䕡軒于を生じ、衆物之に居り、勝げて圖くべからず。其西には則ち涌泉清池あり、激水推し移る。外には芙蓉菱華を發し、内には鉅石白沙を隱す。其中には則ち(三四)神龜蛟鼉、瑇瑁鼈黿あり。其北には則ち陰林巨樹、(三五)楩柟豫樟、桂椒木蘭、檗離朱楊、樝梨梬栗、橘柚の芬芳なるあり。其上には則ち(三六)鵷雛孔鸞、(三七)騰遠射干あり。其下には則ち白虎玄豹、(三八)蟃蜒貙犴あり。

【大意】雲夢澤の廣さは方九百里にして、其中に山あり。詰屈高峻にして日月を擁蔽し、山勢交錯

【二三】玫瑰。火齊珠なり。
【二四】琳瑉。美石なり。昆吾は山の名。美金を出す。
【二五】瑊玏。石の玉に次ぐもの。玄厲は黒石の礪とすべきもの。
【二六】碝石、碔砆、皆石の玉に次ぐもの。
【二七】蕙圃。香草の圃なり。以下皆香草の名。
【二八】陁靡。斜に長き貌。
【二九】案衍。くぼき貌。壇曼は平にして寛き貌。
【三〇】巫山。山の名。
【三一】葴蔪。以下皆草の名。
【三二】埤濕。低くして濕へる地。
【三三】藏莨。以下皆草の名。
【三四】神龜。以下皆龜の類。
【三五】楩柟。以下皆木の名。
【三六】鵷雛、孔鸞。皆鳥の名。
【三七】騰遠、射干。皆猿の類なり。
【三八】蟃蜒。大獸の名。貙犴は皆獸の名。

して青雲を犯し、崩れて坂をなし、其足遠く曳きて江河に連り、其土は赤きあり青きあり、白きあり黑きあり。衆色相照し爛然として龍鱗の如し。美石亦少からず。其東には蕙衡等の香草芬芳を吐き、其南には平原廣澤ありて上下寛廣にして、繞らすに大江を以てし、巫山を以て限となす。高原には葴菥等の草を生じ、卑濕には藏莨蒹葭等の水草を生じ、一一其象を圖畫すべからず。西には泉あり池あり。水波激揚し、外には芙蓉、菱花あり。內には大石白沙あり、互に相映發し、其中には黿鼉の類あり。其北には種種の樹木常に香氣を放ち、林木の上には鵷雛等の鳥、騰遠等の獸あり。其下には白虎黑豹等の大獸あり。

是に於てか乃ち（三九）專諸の倫をして此獸を（四〇）手格せしむ。楚王乃ち（四一）馴駮の駟に駕し、彫玉の輿に乘り、（四二）魚鬚の橈旃を靡かし（四三）明月の珠旗を曳き、（四四）干將の雄戟を建て（四五）烏號の彫弓を左にし、（四六）夏服の勁箭を右にし、（四七）陽子驂乘し、（四八）孅阿御となり、（四九）節を案じて未だ舒びざるに、即ち狡獸を陵ぎ、（五〇）蛩蛩を蹴、

（三九）專諸。吳の勇士の名。
（四〇）手格。から手にて擊つこと。
（四一）馴駮。なれたる駮、駮は獸の名。此を以て馬に代ふるなり。
（四二）魚鬚。魚の鬚にて作れる旗竿。
（四三）明月云云。明月の珠を綴りて飾れる旗。
（四四）干將。韓の刀工の名。
（四五）烏號。黃帝の弓の名。
（四六）夏服。夏后氏の箙。
（四七）陽子。伯樂の字なり、伯樂は古の馬を相するに善き人。驂乘はソヒノリすること。
（四八）孅阿。古の善く馬を御する人の名。
（四九）節を案ず。馬足を節すること。徐行すること。

(五一)距虚を轔り、(五二)野馬を軼ぎ、(五三)騊駼を轊り、(五四)遺風に乗り、(五五)游騏を射、(五六)倏眒倩浰として雷のごとく動き猋のごとく至り、星のごとく流れ霆のごとく撃ち、弓は虚しく發せず、中れば必ず眦を決し、胷を洞き掖を達し、(五七)心繫を絶ち、獲獸を雨すが若く、草を揜ひ地を蔽ふ。是に於て楚王乃ち(五八)節を弭めて徘徊し、(五九)翺翔容與し、陰林を覽、壯士の暴怒すると猛獸の恐懼するとを觀て、勌むを徼り詘るを受け、殫く衆物の變態を視る。

【大意】楚王乃ち勇士をして此等の獸を格殺せしめんとし、騶馬に駕し玉輿に乗り旗を靡かし、戟を執り弓を張り、出でて此に狩す。陽子陪乗し孅阿馬を御して行く。徐行して馬足未だ馳せざるに、早くも狡捷の獸を淩轢し、奔逐の神速なること風雷の流撃するが如く、胸を貫き腋を透し、心系を絶つ。かくて獸を殺すこと算なく、天の獸を降らして地を蔽へるが如し。是に於て楚王志を安んじ從容自得し、幽深の林を見、壯士の奮怒と猛獸の恐懼とを見、倦める者を迎へ遮り、力屈せる者を受け收め、衆獸驚變の姿を見て乃ち止む。

是に於て(六〇)鄭女曼姬(六一)阿緆を被り、(六二)紵縞

【五〇】蛩蛩。青獸の名。
【五一】距虚。獸の名。
【五二】野馬。獸の名。
【五三】騊駼。獸の名。
【五四】遺風。千里の馬の名。
【五五】游騏。天上の獸。
【五六】倏眒倩浰。奔り逐ふ貌。
【五七】心繫。心臓のつな。
【五八】節を弭め。志を安んずること。
【五九】翺翔容與。ゆつたりとして徘徊すること。
【六〇】鄭女。夏姬なり、古の美女の名。曼姬は楚の武王の夫人鄧曼なり。
【六一】阿緆。細布なり。

を揄き、(六三)纖羅を雜へ (六四)霧縠を垂れ、(六五)襞積褰縐、(六六)紆徐委曲、(六七)鬱橈たること谿谷のごとし。(六八)衯衯裶裶として袘を揚ぐること (六九)戌削たり。(七〇)襳を蜚ばし (七一)髾を垂れ、輿を扶けて (七二)猗靡たり。(七三)翕呷萃蔡として下は蘭蕙を靡で、上は (七四)羽蓋を拂ふ。(七五)翡翠の葳蕤たるを錯へ、(七六)繆繞たる (七七)玉綏あり。(七八)眇眇忽忽として神仙の髣髴たるが若し。是に於て乃ち相與に蕙圃に獠す。(七九)媻姍勃窣として (八〇)金隄に上り、翡翠を揜へ (八一)鵔鸃を射、(八二)微矰出で (八三)孅繳施し、白鵠を (八四)弋し (八五)駕鵝を連ね、(八六)雙鶬下り玄鶴 (八七)加へらる。怠みて後、發して清池に游び、(八八)文鷁を浮べ (八九)旌栧を揚げ、(九〇)翠帷を張り羽蓋を建て、瑇瑁を網し紫貝を鉤し、金

【六二】紵縞。細繒なり。ウスギヌ。
【六三】纖羅。薄絹なり。
【六四】霧縠。縠の細くして霧の垂るるが如きなり、以て裳となす。
【六五】襞積褰縐。縫ひ縮れる貌。
【六六】紆徐委曲。裾の下垂する貌。
【六七】鬱橈。文理の菲鬱たること。
【六八】衯衯裶裶。衣の長き貌。
【六九】戌削。裁制の貌。
【七〇】襳。上衣の飾。
【七一】髾。燕尾なり、婦人の上衣の飾。
【七二】猗靡。相隨ふ貌。
【七三】翕呷。衣の張ること。萃蔡は衣の聲なり。
【七四】羽蓋。車の蓋なり。
【七五】翡翠。鳥の名。かはせみ。羽毛極めて美し。葳蕤は羽毛の貌。
【七六】繆繞。綏の長き貌。
【七七】玉綏。綏とは車に登る時持つ所のトリテなり。
【七八】眇眇忽忽。かすかなる貌。
【七九】媻姍勃窣。美人の隄に上る貌。
【八〇】金隄。堤の名。
【八一】鵔鸃。鳥の名。
【八二】微矰。細き矢。
【八三】孅繳。細きイグルミ。
【八四】弋。イグルミにて捕ふること。
【八五】駕鵝。鳥の名。
【八六】雙鶬。鳥の名。
【八七】加。制すること。
【八八】文鷁。鷁首の船。
【八九】旌栧。旌はハタ。栧は楫。
【九〇】翠帷。翡翠の羽を以て飾りしトバリ。

鼓を縦ち（九一）鳴籟を吹き、（九二）榜人歌ひて聲（九三）流喝し、（九四）水蟲駭き（九五）波鴻沸き、涌泉起り（九六）奔揚會し、（九七）礧石相撃ち、（九八）硠硠礚礚として、雷霆の聲、數百里の外に聞ゆるが若し。將に（九九）獠者を息はしめんとし、（一〇〇）靈鼓を撃ち烽燧を起せば、車は行を案じ騎は隊に就き、（一〇一）纚乎として淫淫たり。（一〇二）般乎として裔裔たり。是に於て楚王乃ち（一〇三）雲陽の臺に登り、（一〇四）怕乎として爲すことなく、（一〇五）憺乎として自ら持し、（一〇六）勺藥の和具りて後之を（一〇七）御す。（一〇八）大王の終日馳騁して曾て輿を下らず、（一〇九）脟割輪焠して自ら以て娯となすが若くならず。臣竊に之を觀るに、齊は殆んど如かずと。是に於て齊王以て僕に應ふるなし。

【大意】是に於て美女綺縠の衣裳を被り、袖を振ひ袂を揚げて楚王の車輿を扶持し、翠羽を以て首飾となし、玉を以て綏を飾り、窈窕として神仙の如し。相與に蕙圃に獵し蹣跚として金隄に上り、矢を發し繳を施し以て水禽を獲、倦みて後淸池に遊び、船を浮べ旌を靡かして瑇瑁紫貝を取り、金鼓を撃ち簫笛を吹き、榜人之に和して歌ひ、其聲遠く響き、魚

【九一】鳴籟。簫笛なり。
【九二】榜人。船手なり。
【九三】流喝。響き渡ること。
【九四】水蟲。魚鼈の類をいふ。
【九五】波鴻。水鳥なり。
【九六】奔揚。急波をいふ。
【九七】礧石。大石なり。
【九八】硠硠礚礚。石の相撃つ聲。
【九九】獠者。獵卒なり。
【一〇〇】靈鼓。六面の鼓なり。
【一〇一】纚乎。行く貌。淫淫は分列の貌。
【一〇二】般乎。めぐる貌。裔裔は分列の貌。音アイ、叶韻。
【一〇三】雲陽。臺の名。
【一〇四】怕乎。無爲の貌。
【一〇五】憺乎。無爲の貌。
【一〇六】勺藥。調和なり。
【一〇七】御。食ふこと。
【一〇八】大王。齊王を指す。
【一〇九】脟割輪焠。肉を割きて車

鼈驚き水鳥亂れ、湧泉起りて波と相打ち、大石相擊ちて聲遠雷の如し。將に獵者を休息せしめんとし、鼓を擊ち烽火を擧ぐれば、車騎各〻次を以て隊に就き、部伍整齊なり。楚王乃ち雲陽臺に登り、無爲の道を以て自ら持し、五味を和して然る後食ふ。大王の終日馳せ獵して、曾て輿を下らず。肉を割き車を染め、野食して娛樂となすが如くならざるなり。是に因つて之を觀れば、齊の畋は殆んど楚王の畋に如かざるなりと。余の齊王に語りし所此の如し。齊王余が言を聞きて答ふる能はざりきと。

烏有先生曰く、是れ何ぞ言の過てるや。足下千里を遠しとせず、來りて齊國に貺す。王悉く境內の士を發し、車騎の衆を備へ、(二〇)使者と出でて畋せしむ。乃ち力を戮せ獲を致し、以て(二一)左右を娛ましめんと欲す。何ぞ名づけて夸るとなさんや。楚地の有無を問へるは、大國の(二二)風烈、(二三)先生の餘論を聞かんことを願へばなり。今足下楚王の德の厚きを稱せずして、盛に雲夢を推して以て高奢となし、淫樂を言ひて侈靡を顯す。竊に足下の爲に取らざるなり。必ず言ふ所の若くんば、固に楚國の美にあらず。有りて之を言はば、是れ君の惡を彰すなり。無くして之を言はば、是れ足下の信を害するなり。君の惡を彰して私の義を傷る。二者一も可なるなし。而るに先生之を行ふ。必ず且に齊に輕

輪を染むること。焠は染なり。

【二〇】使者。子虛を指す。

【二一】左右。使者の侍者をいふ、使者を尊んで之を斥言せず、其侍者を斥して言ふなり。

【二二】風烈。風俗事業といふが如し。

【二三】先生。子虛を指す。

んぜられて、楚に累あらんとす。

【大意】烏有先生曰く、足下の言大に過てり。足下遠く我が齊國に惠貺す。齊王車騎を發して、足下と出でて畋せしむ。是れ多く禽獸を獲て、足下を樂ましめんが爲なり。其盛を誇示せんが爲にあらざるなり。且つ楚地の有無を問へるは、楚國の功業と足下の高論とを聞かんが爲なり。然るに楚王の德を稱せずして、雲夢の事を稱し、淫樂を言ひ奢侈を顯すは大に非なり。足下の言ふ所の如きは、楚國の美事にあらず。此事ありて之を言ひたりとすれば、君主の惡を暴露するなり。此事なくして之を言ひたりとすれば、足下の信を傷るなり。君主の惡を暴露するも己の信義を傷るも共に非なり。今足下之を行ふ。必ず齊國に輕蔑せられ、累を楚國に及ぼさん。

且つ齊は東鉅海に渚し、南に(二四)琅邪あり。(二五)成山に觀し(二六)之罘に射、渤澥に浮び(二七)孟諸に游び、邪に(二八)肅愼と鄰をなし、右は(二九)暘谷を以て界となす。秋(三〇)青丘に田し海外に彷徨す。雲夢の若き者八九を呑むも、其胷中に於て曾て(三一)蔕芥せず。若し乃ち(三二)俶儻瑰瑋、(三三)異方殊類、珍怪鳥獸、萬端にして鱗のごと

【二四】琅邪。臺の名。
【二五】成山。山の名。觀は宮闕なり。
【二六】之罘。山の名。
【二七】孟諸。大澤の名。
【二八】肅愼。國の名。
【二九】暘谷。日の出づる處。東に在り、左を東となす、今右とあるは左の誤なり。
【三〇】青丘。國の名、海東三百里に在り。
【三一】蔕芥。さはりて邪魔になること。
【三二】俶儻。非常なり。瑰瑋は珍怪なり。
【三三】異方殊類。珍奇なる物。

く粹り、其中に(二四)充牣し、勝げて記すべからず。(二五)禹も名づくる能はず、(二六)卨も計ふる能はず。然れども諸侯の位に在れば、敢て遊戲の樂、苑囿の大を言はず。先生又客とせらる。是を以て王辭して復へざるなり。何ぞ以て應ふるなしとなさんやと。

【大意】且つ我が齊國は、東、海に濱し、南に琅邪臺あり。成山に宮闕あり。以て遊覽すべく、之罘の山は以て狩獵すべく、渤澥に浮び孟諸に遊び、遠く肅愼暘谷に通じ、秋には遠く海外の靑丘に出獵するを得。その境土の大なること、雲夢七八を呑むも猶ほ餘裕あり。其中には非常珍怪の物充滿し、禹も名づくる能はず、卨も算ふる能はざるなり。然れども諸侯の位に在るを以て、敢て遊戲苑囿の盛を言はず。又足下を待つに賓客の禮を以てす。故に我が王辭避して敢て答へざりしのみ。何ぞ答ふる能はずとなすを得んやと。

【二四】充牣。充滿なり。

【二五】禹。堯の司空となり。よく草木を分別す。

【二六】卨。堯の司徒となり。五敎を敷き。數計を善くす。

(一)上林の賦

司馬長卿

(二)亡是公(三)听然として笑つて曰く、楚は則ち失せり。而も齊も亦未だ得たりとなさず。夫れ諸

【一】上林。苑の名、天子の苑なり。

【二】亡是公。子虛の賦七を見よ。

侯をして納貢せしむるは、財幣の爲にあらず。(四)職を述ぶる所以なり。疆を封じ界を畫るは、守禦の爲にあらず。淫を禁ずる所以なり。今齊は列して東藩となす。而も外(五)肅愼に私し、國を捐て限を踰え、海を越えて田す。其の義に於ける固に未だ可ならざるなり。且夫れ(六)二君の論は、君臣の義を明にし諸侯の禮を正うせんことを務めず。徒に游戲の樂、苑囿の大を爭ふを事とし、奢侈を以て相勝ち、荒淫をもて相越えんと欲す。此れ以て名を揚げ譽を發すべからずして、適に以て君を貶し自ら損するに足る。且夫れ齊楚の事、又焉んぞ道ふに足らんや。(七)君未だ夫の巨麗を覩ず。獨り天子の上林を聞かずや。

【大意】亡是公は烏有先生と子虛との問答(子虛の賦參照)を默聽せしが、ややありて笑つて曰く、楚使(子虛)の言大に理を失へり。然も齊(烏有先生)の言も、亦未だ理に叶へりとなすに足らず。夫れ諸侯の貢を天子に納むるは、財幣の爲にあらず。守る所の職を述べんが爲なり。國境を立つるは、外敵を守禦せんが爲にあらず。淫荒を杜絕せんが爲なり。今齊は漢の東藩たり。然も恣に肅愼國と交通し、國境を越えて海外に畋するは、君臣の義を傷る者なり。且つ二君の論は君臣の大義

【三】听然。笑ふ貌。
【四】職を述ぶ。諸侯天子に朝するを述職といふ。尙書大傳に古ハ諸侯ノ天子ニ於ケル、五年ニ一タビ朝見シ其職ヲ述ブとあり。
【五】肅愼。國の名。
【六】二君。子虛と烏有先生とを指す。
【七】君。子虛を指す。

を明にし、諸侯の禮を正うせんことを務めずして、徒に苑囿に遊樂するを夸り、奢侈荒淫を以て相競ふなり。是れ名を揚げ譽を發する所以にあらず。君德を汙損し己の德を害するのみ。且つ齊楚苑囿の盛未だ人に誇るに足らず。思ふに二君は未だ天子上林の巨麗を睹かざるなり。吾今二君の爲に之を語らん。

(八)蒼梧を左にし (九)西極を右にし、(一〇)丹水其南を更、(一一)紫淵其北を徑り、(一二)灞滻を始終し、(一三)涇渭を出入し、(一四)酆鎬潦潏、(一五)紆餘委蛇として、其内に (一六)經營し、(一七)蕩蕩乎として (一八)八川分流し、相背いて態を異にし、東西南北に (一九)馳騖往來し、(二〇)椒丘の闕を出で、(二一)洲淤の浦に行き、(二二)桂林の中を經り (二三)泱漭の壄を過ぎ、(二四)汨乎として混流し (二五)阿に順つて下り、隘陜の口に赴き、(二六)穹石に觸れ (二七)堆埼に激し、(二八)沸乎として暴怒

【八】蒼梧。郡名、長安の東南に在り。故に左といふ。
【九】西極。豳國をいふ、爾雅に豳國ニ至リテ西極トナスとあり。長安の西に在り、故に右といふ。
【一〇】丹水。川の名。
【一一】紫淵。紫澤なり、澤の名。
【一二】灞滻。二水の名。此の二水始終苑中に盡きて復た出でず、故に始終すといふ。
【一三】涇渭。二水の名。此の二水苑外より來り又苑を出でて去る、故に出入すといふ。
【一四】酆鎬潦潏。四水の名。
【一五】紆餘委蛇。屈曲の貌。
【一六】經營。周旋といふが如し。
【一七】蕩蕩乎。流るる貌。
【一八】八川。灞滻以下の八川をいふ。
【一九】馳騖。交錯といふが如し。
【二〇】椒丘。丘の名。兩山倶に起り、形、雙闕に似たり。
【二一】洲淤。淤も洲の類なり。
【二二】桂林。林の名、苑中にあり。
【二三】泱漭。廣大なる野。
【二四】汨乎。疾く流るる貌。
【二五】阿。山曲なり。
【二六】穹石。大石なり。
【二七】堆埼。岸曲なり。
【二八】沸乎。水の聲なり。

し、(二九)洶涌して　(三〇)彭湃し、(三一)滭弗宓汩、(三二)偪側泌瀄して、横に流れ逆に折れ、(三三)轉騰潎洌、(三四)滂濞沆溉、(三五)穹隆雲橈。(三六)宛潬膠盭し、(三七)踰波浥に趨き　(三八)莅莅として瀨を下り、巖を批ち(三九)擁を衝き、(四〇)奔揚滯沛し、坻に臨み壑に注ぎ、(四一)瀺灂として　(四二)霣墜し、(四三)沈沈隱隱、(四四)砰磅訇礚、(四五)潏潏淈淈、(四六)湁潗して鼎のごとく沸き、馳波跳沫　(四七)汩濦として漂疾し、(四八)悠遠長懷し、(四九)寂漻にして聲なく、(五〇)肆乎として永く歸り、然る後　(五一)灝溔潢漾として、安に翔り徐に回り、(五二)翯乎として　(五三)滈滈たり。東のかた(五四)太湖に註いで　(五五)陂池に衍溢す。是に於てか蛟龍　(五六)赤螭　(五七)䱜鰽漸離、鰅鰫鰬魠、禺禺魼鰨あり、鰭を揵げ尾を掉ひ、鱗を振ひ翼を奮

【二九】洶涌。跳起するなり。
【三〇】彭湃。水の聲なり。
【三一】滭弗。盛なる貌。宓汩は去ること疾きなり。
【三二】偪側。相迫るなり。泌瀄は相撃つなり。
【三三】轉騰。相過ぐるなり。潎洌は相撃つなり。
【三四】滂濞。水の聲なり。沆溉は徐に流るること。
【三五】穹隆雲橈。石の隴の如く隆起し雲の屈橈するが如きをいふ。
【三六】宛潬膠盭。縈曲する貌。
【三七】踰波。後波前波を淩ぐなり。
【三八】莅莅。水の聲。
【三九】擁。隈曲なり。
【四〇】奔揚滯沛。湧き流るる貌。
【四一】瀺灂。水の聲。
【四二】霣墜。落つること。

【四三】沈沈。深き貌。隱隱は盛なる貌。
【四四】砰磅訇礚。水の聲。
【四五】潏潏淈淈。水の涌き出づること。
【四六】湁潗。水の沸くこと。
【四七】汩濦。水の聲。
【四八】悠遠長懷。懷は歸なり、水奔放して長く淵海に歸るなり。
【四九】寂漻。清深なり。
【五〇】肆乎。奔放する貌。
【五一】灝溔潢漾。水の際限なき貌。
【五二】翯乎。水の光る貌。
【五三】滈滈。水の白く光る貌。
【五四】太湖。震澤なり。
【五五】陂池。江の傍の小水なり。衍溢は溢れ出づること。
【五六】赤螭。龍の子を螭といふ。
【五七】䱜鰽。以下皆魚の名。

ひて、深巖に潛み處り、魚鼈讙しく聲き、萬物衆夥にして、(五八)明月の珠子、江靡に(五九)的皪たり。(六〇)蜀石黃碝、(六一)水玉磊砢、(六二)磷磷爛爛、采色(六三)澔汗して、其中に叢り積り、(六四)鴻鷫鵠鴇、鴐鵞屬玉、交精旋目、煩鶩庸渠、箴疵鵁盧ありて、其上に羣り浮び、(六五)沈淫泛濫して、風に隨つて(六六)澹淡たり。波と搖蕩して水渚を(六七)掩薄し、(六八)菁藻を唼喋して(六九)菱藕を咀嚼す。

【大意】上林の苑たる、東に蒼梧郡あり、西に豳國あり、南に丹水あり、北に紫淵あり。灞滻二水其中に始終し、涇渭二水其中を出入し、酆鎬潦潏の四水曲折して其中を周流し、八水分流して各姿態を異にし、椒丘を經て洲浦に行き、桂林を經て大野を過ぎ、山隈を下りて峽口に赴き、奔流擊騰して谿谷に墜ち、東のかた太湖に注ぎ、更に溢れて小池に出づ。魚龍深巖に潛み、明珠岸渚に輝き、水石光を其中に放ち、水禽其上に浮遊す。

是に於てか、崇山(七〇)矗矗、(七一)巃嵸崔巍として、深林巨木あり、(七二)嶄巖參

【五八】明月。珠の名。江靡は江のほとり。
【五九】的皪。光明の貌。
【六〇】蜀石黃碝。石の玉に次ぐもの。
【六一】水玉。水精なり。磊砢は積み累れる貌。
【六二】磷磷爛爛。玉石の輝く貌。
【六三】澔汗。照り輝くこと。
【六四】鴻鷫。以下皆水鳥の名。
【六五】沈淫泛濫。水鳥の浮遊すること。
【六六】澹淡。縱に漂ふ貌。
【六七】掩薄。掩ひ集ること。
【六八】菁藻。水草の名。
【六九】菱藕。水草の名、ひし、はちす。
【七〇】矗矗。高く聳ゆる貌。
【七一】巃嵸崔巍。高峻の貌。
【七二】嶄巖參差。峯嶺の貌。

崣たり。(七三)九嵕巀嶭、(七四)南山峩峩、(七五)巖陁甗錡摧崣崛崎して、溪を振め谷に通じ、(七七)蹇産たる(七八)溝瀆あり。(七九)谽呀豁閜にして阜陵隝に別れ、(八〇)崴磈嵔廆、(八一)丘虛堀礨、(八二)隱轔鬱壘、登降(八三)施靡し、(八四)陂池貏豸、(八五)沇溶淫鬻し、(八六)夷陸に(八七)散渙し、(八八)亭皐千里にして、(八九)築を被らざるはなし。掩ふに(九〇)綠蕙を以てし、被らすに(九一)江蘺を以てし、糅ふるに(九二)蘪蕪を以てし、雜ふるに(九三)留夷を以てし、(九四)結縷を布き(九五)戾莎を攢め、(九六)揭車衡蘭、槀本射干、茈薑蘘荷、葴橙若蓀、鮮支黃礫、蔣苧青薠あり。閎澤に(九七)布濩し、太原に延蔓し、(九八)離靡廣衍して、風に應じて披靡し、芳を吐き烈を揚げ、(九九)郁郁菲菲として、衆香發越し、(一〇〇)肸蠁布寫し

【七三】九嵕。山の名。巀嶭は高峻の貌。
【七四】南山。山の名。終南山なり。峩峩は高峻の貌。
【七五】巖陁甗錡。傾く貌。
【七六】摧崣崛崎。嶮しき貌。
【七七】蹇産。屈曲すること。
【七八】溝瀆。溝渠なり。
【七九】谽呀。大なる貌。豁閜は空虛なり。
【八〇】崴磈嵔廆。山勢高峻の貌。
【八一】丘虛堀礨。山勢高峻の貌。
【八二】隱轔鬱壘。堆隴不平の貌。
【八三】施靡。斜につづくこと。
【八四】陂池貏豸。傍頽れて相連ろ貌。
【八五】沇溶淫鬻。水谿谷の間を流るるなり。
【八六】夷陸。平地なり。
【八七】散渙。寛廣の貌。
【八八】亭皐。皐は澤なり、隄上十里に一亭を置く、之を亭皐といふ。
【八九】築。築いて平ならしむるをいふ。
【九〇】綠蕙。香草の名。
【九一】江蘺。香草の名。
【九二】蘪蕪。草の名。
【九三】留夷。香草の名。
【九四】結縷。草の名。
【九五】戾莎。細草の名。
【九六】揭車。以下皆香草の名。
【九七】布濩。布き施すこと。
【九八】離靡廣衍。ひろがりつづくこと。
【九九】郁郁菲菲。香美の貌。
【一〇〇】肸蠁布寫。分散すること。

(一〇一)晻薆咇茀たり。是に於てか周く覽泛く觀れば、(一〇二)繽紛軋芴として(一〇三)芒芒怳忽たり。之を視れども端なく、之を察れども崖なく、日(一〇四)東沼より出でて(一〇五)西陂に入る。其南は則ち隆冬にも生長し、(一〇六)涌水躍波あり。其獸は則ち(一〇七)㺎旄貘犛、沈牛麈麋、赤首圜題、窮奇象犀あり。其北は則ち盛夏にも凍を含んで地を裂き、氷を渉りて河を揭る。其獸は則ち(一〇八)麒麟角端、騊駼橐駝、蛩蛩驒騱、駃騠驢驘あり。

【大意】山には九嵏、終南あり。高峻にして傾欹し、溪谷相通じ溝渠屈曲し、皆濶大空虛にして陵島に隔り別れ、山勢平衍にして溪水其間を流れ遂に廣平の地に達す。十里每に一亭を置き、遠く千里に及ぶまで、築いて平にせざるはなし。衆草地を覆ひて雜生し、其中に分布し、芳香を吐き烈華を揚げ、郁郁として發越す。林苑廣遠にして、望視するも目亂れて辨ずる能はず。日は朝に苑中の東池より出で、暮に苑中の西陂に入る。苑南、陽に向ふの地は盛冬にも草木生長し、絕えて氷を見ず、煖國の獸ここに滿ち。苑北、潛陰の地は、盛夏にも氷を結び、氷上を渉りて河を渡る。寒國の獸亦ここに滿つ。

【一〇一】晻薆咇茀。香氣の盛なるをいふ。
【一〇二】繽紛。衆盛なり。軋芴は緻密なり。
【一〇三】芒芒怳忽。目亂るる貌。
【一〇四】東沼。苑の東方の池。
【一〇五】西陂。苑の西方の池塘。
【一〇六】涌水躍波。水の凍らざるをいふ。
【一〇七】㺎旄。以下皆南方の獸の名。
【一〇八】麒麟。以下皆北方の獸の名。

是に於てか、離宮別館、山に彌り谷に跨り、(一〇九)高廊四に注ぎ (一一〇)重坐曲閣あり。(一一一)華榱璧璫にして、(一一二)輦道纚屬し、(一一三)歩櫩周流して、長途に中宿す。嵕を夷げ堂を築き、(一一四)累臺增成して(一一五)巖窔に洞房あり。俯せば杳眇にして見ることなく、仰げば橑を攀ぢて天を捫し、(一一六)奔星閨闥を更、(一一七)宛虹楯軒に拖き、(一一八)靑龍東廂に(一一九)蚴蟉し、(一二〇)象輿西淸に (一二一)婉蟬し、(一二二)靈圄間館に燕し、(一二三)偓佺の倫(一二四)南榮に暴し、(一二五)醴泉淸室に涌き、通川中庭を過ぎ、磐石崖を振へ (一二六)嵚巖として倚り傾き、(一二七)嵯峨嶕嶫として刻削(一二八)崢嶸たり。(一二九)玫瑰碧琳、珊瑚叢生し、(一三〇)瑉玉旁唐して (一三一)玢豳たる文鱗あり。(一三二)赤瑕駁犖として其間に雜はり揷み、(一三三)晁采琬琰として (一三四)

【一〇九】高廊。行廊なり。
【一一〇】重坐曲閣。閣に兩重あり、上級下級皆坐すべし、故に重坐といふ。
【一一一】華榱。彩飾せる椽。璧璫は璧を以て椽首を飾るなり。
【一一二】輦道。閣道なり。纚屬は連屬なり。
【一一三】歩櫩。歩廊なり。周流は周徧なり。
【一一四】累臺。重れる臺。增成は層成なり。
【一一五】巖窔。巖底なり。洞房は潛室なり。
【一一六】奔星。流星なり。
【一一七】宛虹。曲れる虹。
【一一八】青龍。車なり。東廂は東方の前堂なり。
【一一九】蚴蟉。龍の行く貌。
【一二〇】象輿。車なり。西淸は廂中淸淨の處なり。
【一二一】婉蟬。動く貌。
【一二二】靈圄。仙人の名。間館は閑居の館。
【一二三】偓佺。仙人の名。
【一二四】南榮。南の檐。
【一二五】醴泉。瑞水なり。
【一二六】嵚巖。欹つ貌。
【一二七】嵯峨嶕嶫。高き貌。
【一二八】崢嶸。直峻の貌。
【一二九】玫瑰。火齊珠なり。珊瑚は珠なり。碧琳は玉なり。
【一三〇】瑉玉。玉の名。旁唐は磐礴といふが如し。
【一三一】玢豳。文理ある貌。
【一三二】赤瑕。赤玉なり。駁犖は文彩なり。
【一三三】晁采。玉の名。琬琰は玉の光澤ある貌。
【一三四】和氏。璧なり。

和氏出づ。是に於てか盧橘夏熟し、(二三五)黃甘橙楱、枇杷橪柹、楟柰厚朴、樗棗楊梅、櫻桃蒲陶、隱夫薁棣、荅遝離支あり。後宮に羅り北園に列り、丘陵に貤り平原に下り、翠葉を揚げ紫莖を杌し、紅華を發し、(二三六)朱榮を垂れ、(二三七)煌煌扈扈として鉅野に照曜し、(二三八)沙棠櫟櫧、華楓枰櫨、留落胥邪、仁頻并閭、欃檀木蘭、豫章女貞あり。長さ千仞大いさ連抱にして、夸條直に暢び、實葉(二三九)葰楙なり。攢り立ち叢り倚り、(二四〇)連卷欐佹、(二四一)崔錯癹骫、(二四二)坑衡閜砢たり。垂條(二四三)扶疏として、落英(二四四)幡纚たり、(二四五)紛溶萷蔘、(二四六)猗狔として風に從ひ、(二四七)瀏莅芔歙たり。蓋し金石の聲(二四八)管籥の音に象り、(二四九)偨池茈虒として後宮に旋り還り、雜襲(二五〇)絫輯して山に被り谷に緣り、坂に循ひ隰に下り、之を視れども端なく、之を究むれども窮なし。

【二三五】黃甘。以下皆果木の名。
【二三六】朱榮。赤き花。
【二三七】煌煌扈扈。鮮明の貌。野は音シヨ、叶韻。
【二三八】沙棠。以下皆木の名。
【二三九】葰楙。大に盛なること。
【二四〇】連卷。曲ること。欐佹は支へ重ること。
【二四一】崔錯癹骫。木の相交ること。
【二四二】坑衡閜砢。倚り傾く也。
【二四三】扶疏。分布の貌。
【二四四】幡纚。飛揚する貌。
【二四五】紛溶。繁り大なる貌。萷蔘は高く長き貌。
【二四六】猗狔。猶ほ阿那といふが如し。風に隨ふ貌。
【二四七】瀏莅芔歙。風衆木を吹く聲なり。
【二四八】管籥。笛の類。
【二四九】偨池茈虒。參差といふが如し。
【二五〇】絫輯。絫は古の累の字。輯は集と同じ。

【大意】宮館山谷に據り、行廊四邊を匝り、閣道は上下共に人を坐せしむべく、榱頭は皆飾るに璧

を以てし、中途に一宿して始めて其上に達すべし。山を夷げて堂を築き、高樓層を成し、巖底に潛室あり、以て樓上に通ず。樓上より俯觀すれば、深遠にして其地を見ず。仰いで椽を攀づれば、手を以て天を摸るべく、流星虹霓門窓欄干の上を經過す。仙輿東西に往來し、靈圄（仙人の名）閑館に燕臥し、偓佺（仙人の名）南軒に暴背し、醴泉清室に湧き、流れて中庭に至り、磐石を以て渠岸を整へ、倚り欹きて崢嶸たり。種種の果樹、宮園に羅列し、丘陵に連亙し、更に平原に及び、花葉盛に茂りて、大野を輝かし、沙棠櫟櫧等の樹木、長さ千仞にして大いさ連抱なるあり。枝を垂れ葉を搖かして重疊累積し、風衆木を拂つて、管籥を吹くが如し。樹木の多きこと此の如く後宮を繞りて累集し、山谷陵隰に徧くして、其の際涯を見ず。

是に於てか（一五一）玄猨素雌、蜼玃飛鸓、蛭蜩蠼猱、獑胡豰蛫ありて、其間に棲息し、長嘯哀鳴し、（一五二）翩幡として互に經、（一五三）枝格に（一五四）夭蟜し、杪顚に（一五五）偃蹇し、（一五六）絕梁を踰え（一五七）殊榛に騰り、垂條を捷り（一五八）希間に掉き、（一五九）牢落陸離、（一六〇）爛熳として遠く遷る。此の若き者數百千處、娛游往來して、宮に宿り館に舍り。庖廚徙さず、後宮移さず、百官備

【一五一】玄猨。以下皆獸の名。
【一五二】翩幡。翩翩といふが如し。
【一五三】枝格。格は枝長きなり。
【一五四】夭蟜。飛び騰る貌。
【一五五】偃蹇。舞ふ貌。
【一五六】絕梁。絕えたるヤナ。
【一五七】殊榛。離れたる切株。
【一五八】希間。枝のすきたる處。
【一五九】牢落陸離。羣りて奔走する貌。
【一六〇】爛熳。羣り走る貌。

具す。是に於てか秋に背き冬を渉りて、天子(二六一)校獵し、(二六二)鏤象に乘り(二六三)玉虬を六にし、(二六四)蜺旌を拖き(二六五)雲旗を靡かし、(二六六)皮軒を前にし(二六七)道游を後にし、(二六八)孫叔轡を奉じ(二六九)衞公參乘し、扈從橫行して(二七〇)四校の中より出づ。(二七一)嚴鐘を鼓ちて獠者を縱ち、江河を阹となし泰山を櫓となし、車騎雷のごとく起りて、天に殷ひ地を動かし、先後(二七二)陸離、離散して別れ追ひ、(二七三)淫淫裔裔として陵に緣り澤に流れ、雲のごとく布き雨のごとく施し、貔豹を生にし豺狼を搏ち、熊羆を手にし(二七四)壄羊を足にし、(二七五)鶡蘇を蒙り白虎を袴し、(二七六)斑文を被り壄馬に跨り、(二七七)三嵏の危きを淩ぎ、(二七八)磧歷の坻を下り、峻を徑り險に赴き、壑を越え水を厲り、(二七九)飛廉を椎ち(二八〇)獬豸を弄び、(二八一)瑕蛤を格ち(二八二)猛氏を鋌き(二八三)騕褭を羂し(二八四)封豕を射、箭は苟くも害せず。脰を解き腦

【二六一】校獵。校隊を出して獵すること。
【二六二】鏤象。象路なり、象牙を鏤めたる車。
【二六三】玉虬。玉龍なり。六は一車に六頭を駕すること。
【二六四】蜺旌。虹を畫きし旗。
【二六五】雲旗。雲氣を畫きし旗。
【二六六】皮軒。虎皮を以て飾りし車。
【二六七】道游。車の名。
【二六八】孫叔。太僕公孫賀、字は子叔といふ。
【二六九】衞公。大將軍衞靑をいふ。參乘は陪乘なり。
【二七〇】四校。四隊なり。
【二七一】嚴鐘。嚴鼓と大鐘。獠者獵卒なり。
【二七二】陸離。參差なり。分布する貌。
【二七三】淫淫裔裔。往來する貌。
【二七四】壄羊。獸の名。
【二七五】鶡蘇。鶡は鳥の名、雉に似たり、鬪ふ時は死すとも退かず。蘇は析羽なり。
【二七六】斑文。虎豹の皮なり。
【二七七】三嵏。山の名。
【二七八】磧歷。平ならざること。
【二七九】飛廉。獸の名。
【二八〇】獬豸。獸の名。
【二八一】瑕蛤。獸の名。
【二八二】猛氏。獸の名。
【二八三】騕褭。馬の類の獸。
【二八四】封豕。大豬なり。

を陷れ、弓は虛しく發せず、聲に應じて倒る。

【大意】又獸類頗る多く、長嘯哀鳴して樹梢の間に翩翻たり。絕梁を踰え殊榛に騰り、參差として羣走す。此の如き者苑中に數百千處あり。天子此に往來娛遊して、宮館に止宿す。庖廚後宮百官の屬、皆此に備はりて、改め移すを要せず。乃ち秋より冬に至るまで此に校獵す。象車に乘り六龍を駕し、雲霓の旗を靡かし、皮軒と道游とを前後にし、孫太僕馬を御し、衞將軍驂乘し。扈從の士皆禁軍より出で、嚴鼓を擊ちて獵卒を縱ち、江河を以て走路を遮り、泰山を以て望樓となし、車騎の聲天地を震動し、禽獸を散逐し、山澤に流徧して雲雨の布き施すが如く、或は手を以て熊羆を捉り、或は足を以て野羊を踏む。獵卒皆鶡羽を蒙り白虎を絡ひ、斑文を被り野馬に跨り、山に上り坂を下り、峻嶮を徑り壑水を涉り、猛獸を格殺す。矢は苟くも害せず、頭頸に中る。弓は虛しく發せず、射れば必ず聲に應じて倒れ死す。

是に於てか乘輿(一八五)節を弭めて徘徊し、(一八六)翺翔往來し、(一八七)部曲の進退を睨、將帥の變態を覽、然る後(一八八)侵淫して節を促にし、(一八九)儵敻として遠く去り、(一九〇)輕禽を流離し、狡獸を(一九一)蹵履し、白鹿を轊り

【一八五】節を弭め。徐行すること。
【一八六】翺翔。徘徊といふに同じ。
【一八七】部曲。部隊なり。
【一八八】侵淫。漸進する貌。
【一八九】儵敻。倏忽なり。
【一九〇】輕禽。飛鳥なり。流離は放散なり。
【一九一】蹵履。急に蹋むこと。

狡兎を捷り、赤電を軼ぎ光耀を遺し、(一九二)怪物を追ひて宇宙より出で、(一九三)蕃弱を彎きて白羽を滿て、游梟を射(一九四)飛遽を櫟ち、肉を擇びて後に發し、中るに先だちて處を命じ、弦矢分れて藝殪れ仆す。然る後、節を揚げて上り浮び、驚風を凌ぎ(一九五)駭猋を歷、虛無に乘りて神と俱にし、玄鶴を蹈み(一九六)昆雞を亂し(一九七)孔鸞を遒り(一九八)鵕鸃を促り、(一九九)鷖鳥を拂ひ鳳皇を捎ち、(二〇〇)鵷雛を捷り(二〇一)焦朋を掩り、道盡き塗殫きて車を廻らして還り、(二〇二)招搖乎として(二〇三)儴佯し(二〇四)北紘に降集し、(二〇五)率乎として直に指し、(二〇六)晻乎として反り鄕ひ、(二〇七)石關を蹷み(二〇八)封巒を歷、(二〇九)䳄鵲に過りて(二一〇)露寒を望み、(二一一)棠棃に下りて(二一二)宜春に息ひ、西のかた(二一三)宣曲に馳せ、鷁を(二一四)牛首に濯ひ、(二一五)龍臺に登り、(二一六)細柳に掩り、士大夫の(二一七)勤略を觀、獵者の得獲する所を均うし、徒車の轥み轢む所、步騎の踩み若る所、人臣の蹈み藉く所と、

【一九二】怪物。奇禽なり。
【一九三】蕃弱。夏后氏の良弓の名。
【一九四】飛遽。天上の神獸。
【一九五】駭猋。猋は回風なり。
【一九六】昆雞。鳥の名。
【一九七】孔鸞。鳥の名。
【一九八】鵕鸃。鳥の名。
【一九九】鷖鳥。鳥の名。
【二〇〇】鵷雛。鳥の名。
【二〇一】焦朋。鳥の名。朋は音ハウ、叶韻。
【二〇二】招搖。逍遙なり。
【二〇三】儴佯。徜徉に同じ。
【二〇四】北紘。八紘の一。北方。
【二〇五】率乎。忽然なり。
【二〇六】晻乎。速なる貌。
【二〇七】石關。宮觀の名。
【二〇八】封巒。宮觀の名。
【二〇九】䳄鵲。宮觀の名。
【二一〇】露寒。宮觀の名。
【二一一】棠棃。宮觀の名。
【二一二】宜春。宮觀の名。
【二一三】宣曲。宮の名、昆明池の西に在り。
【二一四】牛首。池の名、上林苑の西頭に在り。
【二一五】龍臺。觀の名、豐水の西北にあり、渭水に近し。
【二一六】細柳。觀の名、昆明池の南に在り。
【二一七】勤略。略は巡行なり。

其の（二八）窮極倦谻、（二九）驚憚讋伏し、創刃を被らずして、怖れて死する者と、（三〇）他他藉藉として阬に塡ち谷に滿ち、平を掩ひ澤に彌る。

【大意】是に於て天子節を案じて徐行し、徘徊往來して將士進退の態を視、然る後漸く行伍を促にして遠く去り、輕捷なる禽獸を追ひ踏み、其疾速なること遙に赤電光耀に過ぐ。奇禽を追ひて宇宙を離れ、良弓を彎きて白羽を吞み、射るべき所を選んで後發し、矢の著く所皆先づ其處を言ふ。故に準的に應じて、能く禽獸を斃す。乃ち更に騰游して風飈を淩ぎ、虛無に乘り、神靈と共にして飛鳥を捕へ、遊獵の途既に盡き、車を囘らして行遊し、北紘に降り集り、速に帝鄕に還らんとす。石闕、封巒、鳷鵲、露寒、棠梨、宜春の諸觀に息ひ、西のかた宣曲宮に馳せて、鷁首の船を濯ひ、龍臺觀に登り細柳觀に止まり、士卒の勤勞を觀、獵者の殺獲を均分す。車騎の踐踏する所のものと、疲憊怖懼し傷かずして死するものと、山澤に徧滿す。

是に於てか游戲懈怠し、酒を（三一）顥天の臺に置き、樂を（三二）膠葛の寓に張り、（三三）千石の鐘を撞き、萬石

【二八】窮極倦谻。疲憊すること。
【二九】驚憚讋伏。怖れて動かざる貌。
【三〇】他他藉藉。多く横はる貌。
【三一】顥天。臺の名。
【三二】膠葛。廣大なる貌。寓は屋なり。
【三三】千石。石は重量の名。千石は十二萬斤なり。

の(二二四)虡を立て、(二二五)翠華の旗を建て、(二二六)靈鼉の鼓を樹て、(二二七)陶唐氏の舞を奏し、(二二八)葛天氏の歌を聽き、千人倡へて萬人和し、山陵之が爲に震動し、川谷之が爲に波を蕩し、(二二九)巴渝宋蔡、淮南于遮、文成顚歌、族り居て遞に奏し金鼓迭に起り(二三〇)鏗鎗闛鞈として、心を洞し耳を駭かし(二三一)荊吳鄭衞の聲、(二三二)韶濩武象の樂、(二三三)陰淫案衍の音、(二三四)鄢郢繽紛として、(二三五)激楚結風し、(二三六)俳優侏儒、狄鞮の倡、耳目を娛しめ、心意を樂ましむる所以のもの、前に(二三七)麗靡爛漫として、後に(二三八)靡曼美色あり。若し夫れ(二三九)青琴宓妃の徒、(二四〇)絕殊にして俗を離れ、(二四一)妖冶嫺都、(二四二)靚糚刻飾、(二四三)便嬛綽約、(二四四)柔橈

【二二四】虡。鐘を懸くる架なり。
【二二五】翠華。翠羽を以て飾りし旗。
【二二六】靈鼉の鼓。鼉皮を張りて作りし鼓。
【二二七】陶唐氏。堯なり。堯の舞を咸池といふ。
【二二八】葛天氏。三皇の時の君の號なり。其の樂、三人牛尾を操り、足を投じて歌ふなり。
【二二九】巴渝。以下各地の歌曲の名。
【二三〇】鏗鎗。鐘の聲なり。闛鞈は鼓の音なり。
【二三一】荊吳鄭衞。其音皆淫哇なり。
【二三二】韶濩。韶は舜の樂。濩は湯の樂。武は武王の樂。象は周公の樂なり。
【二三三】陰淫案衍。流沔の聲なり。
【二三四】鄢郢。楚の地名。繽紛は舞ふなり。
【二三五】激楚。歌曲なり。結風は廻風を縈結するなり。
【二三六】俳優、侏儒。皆樂人なり。狄鞮は西戎の樂名。
【二三七】麗靡爛漫。美音聲なり。
【二三八】靡曼美色。姿態多きことなり。
【二三九】青琴。古の神女なり。宓妃は洛水の神女なり。
【二四〇】絕殊。容色の極めて美しきこと。
【二四一】妖冶。美しきこと。嫺都はみやびやかなること。
【二四二】靚糚刻飾。化粧を加ふること。
【二四三】便嬛綽約。たをやかなること。
【二四四】柔橈嫚嫚。しなやかなること。

嫚嫚、(二四五)嫵媚孅弱にして、(二四六)獨繭の(二四七)褕袣なるを曳き、(二四八)眇閻易として以て(二四九)卹削せるがごとく(二五〇)便姍嫳屑として俗と服を殊にし、芬芳、(二五一)漚鬱、(二五二)酷烈淑郁、(二五三)皓齒粲爛、(二五四)宜笑的皪、長眉(二五五)連娟(二五六)微睇緜藐として(二五七)色授け魂與へ、心側に愉ぶ。

【大意】遊獵既に疲倦し、乃ち置酒して樂を張り、鐘を懸けて之を撞き、翠華を建てて靁鼓を撃ち、千人歌ひて萬人和し、山陵之が爲に震動し、川谷之が爲に波を揚げ、鏗鏘として心を洞し耳を驚かし、楚舞迅急にして回風を縈結し、俳優侏儒の伎、耳目を娯ましめ心意を樂ましむるもの前後に滿ち、美女の容色絶倫なる者、衣服を飾り長袖を曳きて舞ひ、其容刻畫して作れるが如く、香氣漚鬱として皓齒鮮白、長眉連娟たり。色を以て其君に授くれば、君其の神魂を溺らして恩寵を與へ。其側に愉悦す。

【二四五】嫵媚。なまめき媚ぶること。孅弱は容體の纖細柔弱なること。
【二四六】獨繭。一つの繭にて衣を作るなり。
【二四七】褕袣。輕く長き貌。
【二四八】眇閻易。回轉する貌。
【二四九】卹削。刻畫して作ること。
【二五〇】便姍嫳屑。衣服婆娑たる貌。
【二五一】漚鬱。香氣の盛なる貌。
【二五二】酷烈淑郁。香氣の盛なること。
【二五三】皓齒粲爛。白き齒の輝くこと。
【二五四】宜笑的皪。笑へば白き齒の鮮白に見ゆるなり。
【二五五】連娟。曲りて細き貌。
【二五六】微睇。遠く視ること。緜藐は遠く視る貌。
【二五七】色授け。彼の色來りて授くれば、我が魂往きて之に接するなり。

是に於て酒中にして樂酣なるや、天子(二五八)芒然として思ひ、亡ふあるが若きに似たり。曰く嗟乎此れ太だ奢侈なり。朕(二五九)覽聽の餘間、事なくして日を棄つるを以て、(二六〇)天道に順つて以て殺伐し、時に此に休息す。恐らくは(二六一)後葉靡麗し、遂に往いて返らざらんことを。繼嗣の爲に業を創め統を垂る所以にあらざるなりと。是に於てか乃ち酒を解け獵を罷め、有司に命じて曰く、地の墾闢すべきもの悉く(二六二)農郊となし、以て(二六三)萌隸を贍らしめ、墻を頽し塹を塡め、山澤の人をして至るを得しめ、陂池を實てて禁ずるなく、宮館を虛うして仞つるなく、倉廩を發いて以て貧窮を救ひ足らざるを補ひ、(二六四)鰥寡を恤み(二六五)孤獨を存し、(二六六)德號を出し刑罰を省き、制度を改め服色を易へ、(二六七)正朔を革めて天下と(二六八)更始せよと。是に於て吉日を歷んで以て齋戒し、朝服を襲て(二六九)法駕に乘り、華旗を建て玉鑾を鳴らし、(二七〇)六藝の囿に游び、仁義の塗に馳騖し、(二七一)春秋の林を覽觀し(二七二)貍首を射て(二七三)騶虞を兼ね、(二七四)玄鶴

【二五八】芒然。自失する貌。
【二五九】覽聽。政を聽くこと。
【二六〇】天道。秋氣に因るをいふ。
【二六一】後葉。後世なり。靡麗は奢侈なり。
【二六二】農郊。耕作地なり。
【二六三】萌隸。百姓なり。
【二六四】鰥寡。老いて妻なきを鰥といひ、老いて夫なきを寡といふ。
【二六五】孤獨。幼にして父なきを孤といひ、老いて子なきを獨といふ。存は卹むこと。
【二六六】德號。號令なり。
【二六七】正朔。暦法なり。
【二六八】更始。革新なり。
【二六九】法駕。天子の乘物。
【二七〇】六藝。禮樂射御書數なり。
【二七一】春秋。孔子の著せる書名、其書義理繁茂す、故に林といふ。
【二七二】貍首。樂章の名。
【二七三】騶虞。樂章の名。
【二七四】玄鶴。瑞鳥なり。

を弋て（二七五）干戚を舞はしめ、（二七六）雲罕を載せて（二七七）羣雅を揜へ、（二七八）伐檀を悲み（二七九）樂胥を樂ひ、容を禮園に脩め、書圃に翺翔し、（二八〇）易道を述べ怪獸を放ち、（二八一）明堂に登り（二八二）清廟に坐し、羣臣を次で得失を奏せしむ。四海の内（二八三）獲を受けざるはなし。

【大意】酒半にして樂酣なるや、天子芒然として自失して曰く、あゝ此れ甚だ奢れり。朕政を聽いて餘暇あり、無事にして時日を徒費するを以て、陰氣に順つて殺伐し、苑囿の中に狩獵せるも、恐くは後世我に倣ひ、奢侈を以て常となし、純樸に返るを忘れん。業を創め統を垂る所以にあらざるなりと。乃ち酒を退け獵を罷め、有司に命じて曰く、苑囿の開墾すべきものを耕地となし、以て悉く百姓に給すべし。苑牆を崩し去り、以て山澤の利を通ずべし。陂池に魚鼈を養ひ人の取るを禁ずる勿れ。宮館は復た人を以て滿すなかれ。倉廩を開いて窮民を救ひ、速に號令を發し刑罰を省き、宮室壯大の制を改め、衣服美麗の色を易へ、正朔を革めて天下を革新せよと。乃ち吉日を選びて齋戒し、朝服を著て法駕に乘り、華旗を建て玉鸞を鳴らして、辟雍に幸し、六藝仁義の道を修め、春秋の義理を觀、詩義に則り、玄鶴を射て干戚の

【二七五】干戚。干は盾・戚は斧なり。之を執りて舞ふなり。
【二七六】雲罕。畢なり。アミなり。
【二七七】羣雅。多くの賢人。
【二七八】伐檀。詩篇の名。賢者の明王に遇はざるを刺る詩なり。
【二七九】樂胥。王者の賢材を得るを美する詩なり。
【二八〇】易道。潔靜精微の術。
【二八一】明堂。諸侯を朝せしむる堂なり。
【二八二】清廟。太廟なり。
【二八三】獲。恩澤なり。

舞を奏せしめ、雲罕の罼を載せて羣雅の士を捕へ、賢人の不遇を悲み、賢材を得て天の祜を受けんことを樂ひ、禮儀を修め讀書を勉め、潔靜精微の術を修め、怪獸を放ちて復た獵せず。明堂に登り太廟に坐し、羣臣をして政事の得失を奏言せしむ。是に於てか天下の民其恩澤に浴せざるはなし。斯の時に於て天下大に説び、風に向つて聽き、流に隨つて化し（二八四）卉然として道に興り義に遷り、刑錯いて用ひず。徳（二八五）三王よりも隆く、功五帝よりも羨なり。此の若くなるが故に、獵は乃ち喜ぶべきなり。若夫れ終日馳騁し、神を勞し形を苦め、車馬の用を罷し、士卒の精を抗ひ、府庫の財を費して徳厚の恩なく、務獨樂にありて衆庶を顧みず。國家の政を忘れ、雉兎の獲を貪るは、則ち仁者は繇らざるなり。此に從りて之を觀れば、齊楚の事豈哀しからずや。地方千里に過ぎずして（二八六）囿九百に居る。是れ草木墾闢するを得ず、民食ふ所なきなり。夫れ諸侯の細を以て、（二八七）萬乘の侈を樂む。僕恐らくは百姓の其尤を被らんことをと。是に於て二子（二八八）愀然として容を改め、（二八九）超若として自失し、逡巡して席を避けて曰く、鄙人固陋にして忌諱を知らず。乃ち今日敎へらる。謹んで命を受けんと。

【大意】此時天下皆王化を悦び、國風に向ふこと流に隨ふが如く、勃然として道義に興り、復た刑

【二八四】卉然。勃然なり。
【二八五】三王。三皇なり。
【二八六】囿。狩場なり。九百は九百里。
【二八七】萬乘。天子をいふ。
【二八八】愀然。色を變ずる貌。
【二八九】超若。忽然なり。

罰の用なきに至り、功徳三皇五帝に勝る。夫れ我が天子の狩獵此の如し。故に喜ぶべきなり。若し之に反し、終日馳驅し、精神を勞し身體を苦め、府庫の物を費して、厚徳百姓に及ばず、專ら己の樂を求めて庶民を顧慮せず、國家の政を忘れて禽獸を獲んことを貪るは、仁者決して之を是認せざるなり。されば齊楚の畋獵の盛を誇るが如きは、亦以て哀むべきなり。齊楚の地もと千里に過ぎざるに、苑囿九百里あり。是を以て民耕食するなし。諸侯の微を以て、天子の侈を樂むは、百姓の怨を被らんことを恐るるのみと。二子（子虛と烏有先生）之を聽き愀然として容を變じ、忽然として自失し、席を避けて曰く、我等固陋にして忌諱すべきを知らず。叨に狩獵の盛を誇る。今幸に足下（亡是公）の高教を受く。謹んで敎命に從はんと。

(一)羽獵の賦并序

揚子雲

孝成帝の時、(二)羽獵す。(三)雄從つて以爲へらく、昔在(三)二帝三王は、宮館臺榭、沼池苑囿、林麓藪澤、財に以て(四)郊廟に奉じ、賓客に御め庖廚に充つるに足るのみ。百姓の(五)膏腴、穀土、(六)桑

【一】羽獵。羽は箭なり。士卒をして箭を負ひて獵せしむるなり。
【二】雄。揚子雲の名。
【三】二帝。堯舜なり。三王は夏禹、殷湯、周文なり。
【四】郊廟。郊は天の祭。廟は祖先の祭。
【五】膏腴。肥沃なる田地。
【六】桑柘。柘は山桑。蠶を養

柘の地を奪はず。女に餘布あり男に餘粟あり。國家殷富にして上下交足る。故に甘露其庭に零り、(七)醴泉其唐に流れ、鳳皇其樹に巢くひ、黃龍其沼に游び、麒麟其囿に臻り、(八)神爵其林に棲む。昔者禹(九)益を虞に任じて、(一〇)上下和し草木茂り、(一一)成湯田を好めども、天下の用足り、文王の囿は百里なるも、民以て尚ほ小なりとなし、齊の宣王の囿は四十里なるも、民以て泰だ大なりとなす。(一二)民を裕にすると民を奪ふとなり。武帝廣く(一三)上林を開き、東南は(一四)宜春、鼎湖、御宿、昆吾に至り、南山に旁ひ、西のかた(一五)長楊、五柞に至り、北のかた(一六)黃山を繞り、(一七)渭に濱ひて東す。周袤數百里なり。昆明池を穿ちて(一八)滇河に象り、(一九)建章、鳳闕、神明、馺娑、漸臺を營み、太液は海水の(二〇)方丈、瀛洲、蓬萊を周流するに象り、游觀(二一)侈靡にして妙を窮め麗を極め、頗る其(二二)三垂を割いて、以て(二三)齊民を贍すと雖も、然も羽獵に至りては甲車(二四)戎馬器械(二五)儲

ふに用ふ。
【七】醴泉。瑞水なり。
【八】神爵。神雀なり、瑞鳥なり。
【九】益を虞。益は人名、虞は山澤を掌る官、益をして虞官たらしむ。
【一〇】上下。上は山、下は澤なり。
【一一】成湯。殷の湯王。
【一二】民を云云。文王は民を饒にし宣王は民を奪ふ。故に民文王の囿を小なりとし宣王の囿を大なりとなすなり。
【一三】上林。苑囿の名。
【一四】宜春。以下皆宮苑の名。
【一五】長楊、五柞。宮の名。
【一六】黃山。宮の名。
【一七】渭。川の名。
【一八】滇河。南夷の河の名。
【一九】建章。以下皆宮殿の名。
【二〇】方丈。以下東海中に在る仙山の名。
【二一】侈靡。奢侈なり。
【二二】三垂。西方南方東方なり。割とは侵し取りしこと。
【二三】齊民。庶民なり。
【二四】戎馬。軍馬なり。
【二五】儲偫。蓄積なり。禁禦は往來を禁止すること。

侍禁藥の營む所、尙は泰だ奢麗（二六）誇詡にして、堯舜成湯文王（二七）三驅の意にあらざるなり。又恐らくは後世復た（二八）前好を脩め、折中するに（二九）泉臺を以てせざらんことを。故に聊か（三〇）校獵に因り、賦して以て之を（三一）風す。其辭に曰く、

或るひと（三二）羲農を稱す。豈或は帝王の彌〻文なるかと。論者云く、否、各亦時に竝ひて宜しきを得たり。奚ぞ必ずしも條を同うして貫を共にせんや。則ち（三三）泰山の封焉んぞ七十にして二儀あるを得ん。是を以て業を創め統を垂るる者、俱に其の爽へるを見ず。（三四）遐邇五三孰か其の是非を知らんと。遂に頌を作りて曰く、

【大意】或る人、伏犧、神農の質樸にして、禮に中れるを稱して曰く、後世の帝王いよいよ文飾を加へて禮に合はざるにあらずやと。論者（揚雄自ら謂ふ）答へて曰く、否然らず。帝王の文質各時に隨つて宜しきを得たり。奚ぞ必ずしも古人と條貫を同うし、然る後禮に合へりとなさんや。泰山に封禪する帝王七十二家（管子に古の太山

【二六】誇詡。誇大なり。
【二七】三驅。一面の網を張りて三面の網を解き、禽獸を去らしむること。
【二八】前好。前人の好み、武帝奢侈の事をいふ。
【二九】泉臺。春秋魯の莊公の築きし臺なり、其の禮にあらざるを以て文公に至りて之を毀てり、成帝の武帝の奢侈に倣はず、文公の泉臺を毀ちし如く、武帝の奢侈を廢せんことを希ふなり。
【三〇】校獵。校隊を出して獵すること。
【三一】風。諷に同じ。
【三二】羲農。伏犧、神農なり、太古の帝王の名。
【三三】泰山。山の名。封は封禪とて泰山の祭なり。
【三四】遐邇。遠近なり。五三は五帝三皇なり。

に封じ梁父に禪する者七十二家云云とあり）然も其禮未だ嘗て道德の差異あらざるなり。故に創業垂統の天子は、各時に隨ひて制を立て、其の差へるを見ず。五帝三皇誰か能く其の是非を知らん。蓋し各其時の宜しきに隨ふのみと。因つて頌を作ること次の如し。

麗しいかな（三五）神聖、玄宮に處り、富既に地と訾を侔うし、貴正に天と崇を比べ、齊桓も曾て穀を扶けしむるに足らず。（三六）楚嚴も未だ以て（三七）驂乘となすに足らず。三王の（三八）阨僻なるを狹しとし、（三九）蹻として高く擧りて大に興り、五帝の（四〇）寥廓なるを歷、三皇の（四一）登閎なるを涉り、道德を建てて以て師となし、仁義を友として之と朋をなす。是に於て（四二）玄冬の季月、天地（四三）隆烈として、萬物內に（四四）權輿し、外に（四五）殂落す。（四六）帝將に靈の囿に田せんことを惟ひ、（四七）北垠を開きて（四八）不周の制を受け、以て（四九）顓頊玄冥の統を終始せんとし、乃ち（五〇）虞人に詔して澤を典らしめ、東のかた（五一）昆鄰に延び西のかた（五二）閶闔に馳せ、

【三五】神聖。成帝を指す。玄宮は北方の宮なり。
【三六】楚嚴。楚の莊王をいふ。
【三七】驂乘。陪乘なり。
【三八】阨僻。陋小なり。
【三九】蹻。高く擧る貌。
【四〇】寥廓。高遠なり。
【四一】登閎。高大なり。
【四二】玄冬。冬なり。
【四三】隆烈。陰氣の盛なる也。
【四四】權輿。始まること。大戴禮に孟春ニ百草權輿スとあり。
【四五】殂落。凋落なり。
【四六】帝。成帝なり。
【四七】北垠。垠は涯なり。冬は北を尙ぶ、故に北垠を開くといふ。
【四八】不周。西北方の風なり、其風、物を殺す、故に王者之に取りて制法となす。
【四九】顓頊、玄冥。皆北方の神也、殺戮を主る。統は理なり。
【五〇】虞人。山澤を掌る官。
【五一】昆鄰。地名。
【五二】閶闔。西方の門の名。

儲積(五三)共偫し(五四)戍卒道を夾み、叢棘を斬り野草を夷げ、(五五)汧渭より禦ぎて(五六)鄷鎬に(五七)經營し、(五八)章皇周流して日月を出入し、天、地と沓ふ。爾して廼ち(五九)三嵕を(六〇)虎路して以て(六一)司馬となし、百里を圍經して(六二)殿門となし、外は則ち正南海を極め、邪に(六三)虞淵に界し、(六四)鴻濛沆茫として(六五)碣するに崇山を以てし、營合ひ圍會ふ。然る後先づ(六六)白楊の南、(六七)昆明靈沼の東に置き、(六八)賁育の倫盾を蒙り羽を負ひ、(六九)鏌鋣を杖ついて羅る者萬を以て計ふ。其餘は(七〇)垂天の畢を荷ひ、(七一)竟壄の罘を張り、日月の朱竿を靡かし、簭星の飛旗を曳き、青雲を(七二)紛となし、(七三)虹蜺を(七四)繯となし、(七五)崑崙の墟に屬り、(七六)渙たること天星の羅れるが若く、(七七)浩たること濤水の波の如く、(七八)淫淫與與として前後に要へ遮り、(七九)欃槍を(八〇)闉となし、明月を(八一)候

【五三】共偫。具ふること。
【五四】戍卒。衞兵なり。
【五五】汧渭。二川の名。
【五六】鄷鎬。二川の名。
【五七】經營。規度するなり。
【五八】章皇。寬饒なり。周流は周匝なり。
【五九】三嵕。山の名。
【六〇】虎路。路一に落に作る。竹を以て落となすなり。
【六一】司馬。外門を司馬門といふ。
【六二】殿門。内門をいふ。
【六三】虞淵。日の入る處なり。
【六四】鴻濛沆茫。水草廣大の貌。
【六五】碣。表なり。
【六六】白楊。宮觀の名。
【六七】昆明。池の名、其中に靈沼あり。
【六八】賁育。孟賁と夏育、皆秦の武王の壯士なり。
【六九】鏌鋣。古の名劍の名。
【七〇】垂天。網の大なること天の四邊に垂るるが如きなり。
【七一】竟壄。壄は野の古字、野一面に滿ちわたること。
【七二】紛。旗の旒なり。
【七三】虹蜺。虹なり。
【七四】繯。旗上の飾なり。
【七五】崑崙。山の名。
【七六】渙。文章ある貌。
【七七】浩。廣大なる貌。
【七八】淫淫與與。行く貌。
【七九】欃槍。星の名。
【八〇】闉。門外の女垣なり。
【八一】候。望樓なり。

となし、(八二)熒惑命を司り(八三)天弧射を發し、(八四)鮮扁陸離、(八五)駢衍して路に佖ち、(八六)徼車輕武、(八七)鴻絅緁獵し、(八八)殷殷軫軫として、陵に被り阪を緣り、夐なるを窮め遠きを極むる者、相與に高原の上に列り、(八九)羽騎營營として(九〇)昈分して事を殊にし、(九一)繽紛として往來し、(九二)轠轤として絕えず。光るが若く滅ゆるが若き者、青林の下に布く。

【大意】壯なる哉、成帝富地に法り尊天に比す。齊桓楚莊の二主は五霸の強盛なれども、之を成帝に比すれば、驂乘して車轂を扶くるに足らず。三王をも視て以て陋小となし、嶠然として高く興り、遙に五帝三皇の上に陟り、道德仁義の事を立て、以て師法朋友となす。季冬十二月、陰氣天地に滿つるや、萬物始めて地內に萌し、草木外に凋落す。帝將に靈囿に畋せんことを思ひ、北垠を開きて不周萬物を殺すの制に倣ひ、以て顓頊玄冥殺戮の理を行はんとし、乃ち虞人に命じて、山澤を主らしめ、東は昆鄰に及び、西は閶闔門に馳せ、供具衞士道を夾み叢棘を斬り、野草を除き汧渭酆鎬の四川を以て限界となし、營域の廣き、日月其中に出入す。遠く之を望めば、天と地と相連合せるが如し。乃ち三嵕山に藩籬して司馬門となし、百里を經圍して內門となし、東南は南海を極め斜に虞淵と界を

【八二】熒惑。星の名。
【八三】天弧。星の名。
【八四】鮮扁陸離。陳列の貌。
【八五】駢衍。相連る貌。
【八六】徼車。疾き車。
【八七】鴻絅緁獵。相連る貌。
【八八】殷殷軫軫。盛なる貌。
【八九】羽騎。箭を負ふ騎兵。營營は往來する貌。
【九〇】昈分。分明に別るること。
【九一】繽紛。多き貌。
【九二】轠轤。連接する貌。

なし、表するに高山を以てし、先づ供具を白楊宮の南、昆明池の東に置き、勇士盾を蒙り箭を負ひ戟を杖ついて列ぶ者、萬を以て數ふ。其餘の士卒は大網を張り、日月箒星を畫ける旗を靡かし、青雲虹霓を旗飾となし、遠く崑崙の野に連り、以て禽獸を要へ遮り、欃槍を障屏となし、明月を望樓となし、熒惑をして天子の命を司らしめ、天弧をして發射せしめ、疾車輕武の徒相連りて遠く高原の上に及び、羽箭を負ふの騎卒各〻其事を分擔し、往來出沒し、青林の下に映ず。

是に於て天子乃ち(九三)陽晁を以て始めて玄宮を出で、(九四)鴻鐘を撞き九旒を建て、(九五)白虎を六にし(九六)靈輿に載り、(九七)蚩尤轂に竝ひ、(九八)蒙公先驅し、(九九)歷天の旗を立て、(一〇〇)捎星の旃を曳き、(一〇一)霹靂烈缺火を吐き鞭を施げ、(一〇二)萃從沇溶、(一〇三)淋離廓落として、(一〇四)八鎭を戲きて關を開き、(一〇五)飛廉雲師(一〇六)吸嗅潚率し、鱗のごとく羅りて(一〇七)布烈し、攢

【九三】陽晁。晁は朝の古字、陽明なる朝。
【九四】鴻鐘。大鐘なり、尙書大傳に、天子將ニ出デントスレバ則チ黃鐘ノ鐘ヲ撞クとあり。
【九五】白虎。馬の名。六は一車に六頭を駕すること。
【九六】靈輿。天子の輿なり。
【九七】蚩尤。黃帝の時の諸侯。
【九八】蒙公。髦頭なり。鹵簿中之れあり。
【九九】歷天。天を犯すなり。
【一〇〇】捎星。星を拂ふこと。
【一〇一】霹靂。雷なり。烈缺は電光なり。
【一〇二】萃從。集り走ること。沇溶は盛多の貌。
【一〇三】淋離。長大の貌。廓落は廣大の貌。
【一〇四】八鎭。四方四隅をいふ。
【一〇五】飛廉。風の神。雲師は雲の神。
【一〇六】吸嗅。呼吸なり、潚率は吸嗅の貌。
【一〇七】布烈。布列に同じ、しきつらなること。

り以て龍の翰のごとく、(二〇八)啾啾蹌蹌として西園に入り、(二〇九)神光に切き(二一〇)平樂を望み、竹林を徑り、(二一一)蕙圃を蹂み、(二一二)蘭唐を踐み、烽を擧げ、火を烈し、轡者技を施し、千駟を方べ馳せ、(二一三)狡騎萬帥なり。(二一四)虓虎の陳、從横(二一五)膠轕し、猋のごとく拉り雷のごとく厲しく、(二一六)矉䮒駖礚、(二一七)洶洶旭旭として、天動き地岋き、(二一八)羨漫半散して、數千里外に(二一九)蕭條たり。若夫れ壯士忼慨して、鄕を殊にし趣を別ち、東西南北嗜を騁せ欲を奔せ、(二二〇)蒼狶を拕へ(二二一)犀犛を跋み、(二二二)浮麋を蹶し(二二三)巨狿を斮り(二二四)玄猨を搏ち、空虛に騰り(二二五)連卷に距り、(二二六)天蟜を踔え(二二七)間間に嬉れ、(二二八)莫莫紛紛として、山谷之が爲に風猋し、林叢之が爲に塵を生ず。(二二九)獲夷の徒に至るに及んでは、松栢を蹶み(二三〇)蒺藜を掌ち、(二三一)蒙籠に獵り(二三二)輕飛を轥り、(二三三)般首を屨にし修蛇を帶び、赤豹を鉤け象犀を牽き、(二三四)巒阬を跐り(二三五)唐陂を

【二〇八】啾啾。衆の聲なり、蹌蹌は行く貌。
【二〇九】神光。宮の名。
【二一〇】平樂。館の名。
【二一一】蕙圃。蕙草の圃なり。
【二一二】蘭唐。蘭の生ずる塘。
【二一三】狡騎。狡は健なり。萬帥一に萬師に作る、多きをいふ。
【二一四】虓虎。勇健の貌。
【二一五】膠轕。入り亂るる貌。
【二一六】矉䮒駖礚。衆の聲なり。
【二一七】洶洶旭旭。鼓の聲なり。
【二一八】羨漫。連續すること。半散は分散すること。
【二一九】蕭條。さびしき貌。
【二二〇】蒼狶。獸の名。
【二二一】犀犛。獸の名。
【二二二】浮麋。獸の名。
【二二三】巨狿。獸の名。
【二二四】玄猨。獸の名。
【二二五】連卷。樹木屈曲の貌。
【二二六】夭蟜。樹木屈曲の貌。
【二二七】間間。一本に澗間に作る。
【二二八】莫莫紛紛。風塵の貌。
【二二九】獲夷。古の壯士の名。
【二三〇】蒺藜。イバラなり。
【二三一】蒙籠。草樹繁密の處。
【二三二】輕飛。輕獸飛禽なり。轥は轢なり。
【二三三】般首。猛獸の名。
【二三四】巒阬。山坂なり。
【二三五】唐陂。陂塘なり。

超え、車騎雲のごとく會ひ、登降（二三六）闇藹たり。（二三七）泰華を旒となし（二三八）熊耳を綴となし、木仆れ山還りて、天外に（二三九）漫若し、大浦に（二四〇）儲與して、宇內に（二四一）聊浪す。

【大意】是に於て天子早朝に玄宮を出で、大鐘を撃ち九旒の旗を建て、六馬の輿に乘り、蚩尤髦頭轂を夾みて先驅す。威德の盛なる、能く百神を使役し、雷電之が護衞をなし、火を吐き鞭を揚げ、集り走りて八方を麾き、風雲の神、呼吸羅列して魚鱗龍翼の如し。玉鑾を鳴らして西園に入り、神光宮に近づき、平樂館を望んで竹林を經、蕙圃蘭塘を過ぎて烽火を擧げ、轡を執る者をして技能を施し千騶を齊列せしむ。勇健の夫、陣を結び、交錯して風雷の威の如く、鼓聲天地に震動し、士卒連接分散して、數千里外に蕭條たり。特に勇猛の士に至りては、行列に依らずして、別に趣向を立て、各其嗜欲に隨ひ、縱橫に奔馳して、猛獸を殺獲し、空虛に騰り樹上に攀ぢ、澗間に娛戲し、風塵林谷の間に昏昧す。更に壯烈なること獲夷の徒に比すべき者あり。松栢を蹶み茨棘を打ち、蒙籠に獵りて、輕獸飛禽を櫟殺し、屨を以て猛獸を踏み、長蛇を帶にす。車騎山澤を超えて登降し、其盛なること雲の闇藹たるが如く、林木盡く倒れ、山之が爲に廻旋し、天外に漫然として、宇內に奔蕩す。

【二三六】闇藹。雲の罩むる貌。
【二三七】泰華。山の名、泰山と華山。
【二三八】熊耳。山の名。綴は旒なり、旗の飾。
【二三九】漫若。はびこること。
【二四〇】儲與。逍遙すること。
【二四一】聊浪。ほしいままなる貌。

是に於て天淸み日晏れて、(一四二)逢蒙皆を列き、(一四三)羿氏弦を控き、(一四四)皇車幽輵として光天地を純り、(一四五)望舒轡を彌し、(一四六)翼乎として徐に(一四七)上蘭に至り、圍を移し陣を徙し、(一四八)浸淫して部を蹙し、曲隊堅く重りて各〻行伍を案じ、壁壘天のごとく旋り、神のごとく抶ち電のごとく撃ち、之に逢へば則ち碎け、之に近づけば則ち破れ、鳥も飛ぶに及ばず、獸も過ぐるを得ず。軍驚き師駭き、野を刮き地を掃ふ。(一四九)罕車飛揚し武騎(一五〇)聿皇たるに至るに及んでは、飛豹を蹈み(一五一)嘄陽を羂し、(一五二)天寶を追ひ一方より出で、(一五三)駢聲に應じ流光を撃ち、野盡き山窮まり、其(一五四)雌雄を(一五五)囊括し、(一五六)沇沇溶溶として遙に紘中に噱ぎ、三軍(一五七)芒然として(一五八)窮冘闕與し、亶夫の剽禽の(一五九)紲踰し、犀兕の抵觸し、熊羆の(一六〇)挐攫し、虎豹の(一六一)凌遽し、徒に角をもて槍き題をもて注き、(一六二)蹴踈讋怖し、魂亡せて魄失せ、輻に觸れ脰を關くを觀る。妄に發するも中るを期し、進退履み獲、

【一四二】逢蒙。古の善射者の名。
【一四三】羿氏。古の善射者の名。
【一四四】皇車。天子の車なり。幽輵は車の聲。
【一四五】望舒。月の御者なり。
【一四六】翼乎。羣盛の貌。
【一四七】上蘭。宮觀の名。
【一四八】浸淫。漸く進むこと。
【一四九】罕車。獵車なり。
【一五〇】聿皇。輕疾の貌。
【一五一】嘄陽。獸の名。
【一五二】天寶。陳寶神なり。
【一五三】駢聲。神の來る聲。
【一五四】雌雄。神の雌雄なり。
【一五五】囊括。囊に入れて口をくくること。
【一五六】沇沇溶溶。禽獸奔走の貌。
【一五七】芒然。疲るる貌。
【一五八】窮冘。倦怠の貌。闕與は舒緩の貌。
【一五九】紲踰。わたりこゆること。
【一六〇】挐攫。搏つこと。
【一六一】凌遽。たどりくるしむこと。
【一六二】蹴踈讋怖。懼れてちぢまること。

(二六三)創淫れて輪と夷かに、丘のごとく累り陵のごとく聚る。

【大意】天氣晴明なるに及び、逢蒙羿氏眥を決し弦を控き、皇車轔轔として轉じ、望舒轡を按じて進み、上蘭觀に至りて獵圍を移し、部伍を促し部曲を整へしむ。士卒皆神電の撃つが如く、禽獸の逢ひ近づく者、皆破砕せられ、避け隱るるに遑あらず。軍師齊く起りて殺獲し、原野を掃ひ窮む。獵車飛騰し武騎疾走し、猛獸を踏み捕へ、陳寶神を追ひて一方より出づれば、神來りて其聲騈然たり、其光流星の如く、山野を窮め盡して、其雌雄を捕獲す。かくて禽獸皆奔走疲倦して網中に喘ぎ、士卒また茫然として懈怠し、ただ羣獸の超越窘蹙し、徒に角額を以て衝突し、慴怖のあまり、自ら車輪に觸れて頸を折るを見るのみ。箭は妄發すと雖も必ず中るを期し、進むも退くも、共に能く禽獸を殺獲し、禽獸創を負ひ、血流れて車輪と平に、斃れ臥す者丘陵の如し。

是に於て、禽殫きて中ごろ衰へ、相與に(二六四)靖冥の館に集り、以て(二六五)珍池に臨む。灌ぐに(二六六)岐梁を以てし、溢るるに江河を以てし、東を瞰れば目盡き、西を暢めば涯なし。(二六七)隨珠和氏其波に(二六八)焯爍たり。玉石(二六九)嶜崟、(二七〇)眩燿青熒、(二七一)漢女水に潛み、怪物(二七二)暗冥にして、殫く形すべからず。

【二六三】創。創血なり。
【二六四】靖冥。深閑なり。
【二六五】珍池。珍山の下にある池。
【二六六】岐梁。岐山梁山の地方。
【二六七】隨珠、和氏。ともに珠玉の名。
【二六八】焯爍。照りかがやくこと。
【二六九】嶜崟。高大の貌。
【二七〇】眩燿青熒。光明の貌。
【二七一】漢女。漢水の女神。
【二七二】暗冥。潛み隱るる貌。

(一七三)玄鸞孔雀翡翠榮を垂れ、(一七四)王雎關關、鴻雁(一七五)嚶嚶として其中に羣り嬉れ、(一七六)噍噍として昆く明き、(一七七)鳧鷖振鷺上下して(一七八)砰磕たり。聲雷霆の若し。乃ち(一七九)文身の(一八〇)伎水をして鱗蟲を格たしめ、堅冰を淩ぎ嚴淵を犯し、巖を探り碕を排ひ、(一八一)蛟螭を薄め索り、蠙獺を蹈み、(一八二)黿鼉を據き(一八三)靈蠵を祛へ、(一八四)洞穴に入り(一八五)蒼梧に出で、鉅鱗に乘り鯨魚に騎り、(一八六)彭蠡に浮んで(一八七)有虞を目、方に(一八八)夜光の流離たるを椎ち、(一八九)明月の胎珠を剖き、(一九〇)洛水の宓妃を鞭ち、(一九一)屈原と(一九二)彭胥とに餉す。

【大意】 禽獸既に盡きて暫く憩ひ、相與に深閑の館に集り珍池に臨む、池水遠く岐梁の地に灌ぎ、溢れて江河に入り、東望西視すれども際涯なく、珠玉波中に照燿し、玉石熒熒と

【一七三】玄鸞。以下皆鳥の名。羽毛極めて美し。

【一七四】王雎。鳥の名、雎鳩ともいふ、和名みさご。關關は和鳴の聲。

【一七五】嚶嚶。鳥の鳴く聲。

【一七六】噍噍。鳥の鳴く聲。昆は同なり。明は一本に鳴に作る。今之に從ふ。

【一七七】鳧鷖。かもめ。振鷺は羣り飛ぶ鷺。

【一七八】砰磕。翅を鼓する聲。

【一七九】文身。身にいれずみすること。越人なり。

【一八〇】伎水。水中に入りて魚蟲を捕ふること。

【一八一】蛟螭。龍の類なり。

【一八二】黿鼉。大龜なり。

【一八三】靈蠵。うみがめ。

【一八四】洞穴。禹穴なり、會稽郡に在り。

【一八五】蒼梧。郡名。

【一八六】彭蠡。湖の名。

【一八七】有虞。舜なり。南に巡狩して蒼梧の野に崩ず。

【一八八】夜光。玉の名。流離は光の陸離たる貌。

【一八九】明月。珠の名。蚌中より出づ。故に胎珠といふ。

【一九〇】洛水。川の名。宓妃は洛水の神女なり。邪神なる故に鞭つなり。

【一九一】屈原。楚の賢臣なり、君を諫めて容れられず、水に投じて自殺す。

【一九二】彭胥。彭咸と伍子胥。彭咸は殷の賢大夫にして自ら水に投じて死す。伍子胥は吳王夫差の怒に觸れ江に投ぜられて死す。

して神女怪物中に潛み、其形狀を盡すべからず。また水禽羽毛を輝して其中に和鳴し、翼を鼓すること雷霆の如く、乃ち越人文身の者をして水中に沒して魚鼈を捉へしむ。堅氷を凌ぎ深淵に入り、蛟螭を捕へ黿鼉を捉へ、禹穴に入りて蒼梧に出で、彭蠡に浮んで虞舜に面し、夜光明月の珠を取り、宓妃を鞭ちて屈原と彭胥とに餉す。

茲に於てか、(一九三)鴻生鉅儒(一九四)軒冕を俄け衣裳を雜へ、(一九五)唐典を脩め(一九六)雅頌を匡して、前に(一九七)揖讓し、昭光振耀、(一九八)響忽として神の如く、仁聲北狄を惠み(一九九)武誼南鄰を動かす。是を以て(二〇〇)旃裘の王、(二〇一)胡貉の長、珍を移して來り(二〇二)享し、手を抗げて臣と稱し、前は(二〇三)闔口に入り後は(二〇四)盧山に陳る。羣公(二〇五)常伯、(二〇六)楊朱墨翟の徒、喟然として並び稱して曰く、崇いかな德、(二〇七)唐虞大夏成周の隆なるありと雖も、何を以てか茲に侈らん。夫れ古の(二〇八)東嶽を覲し(二〇九)梁基に禪

【一九三】鴻生鉅儒。大儒先生なり。
【一九四】軒冕。軒は車、冕は冠なり。
【一九五】唐典。書經堯典なり。堯の政事を記せるもの。
【一九六】雅頌。詩經の詩體なり。政事を美せるもの。
【一九七】揖讓。拱手の禮をなしてへりくだること。
【一九八】響忽。響曶に同じ。疾速なり。
【一九九】武誼。武事なり。
【二〇〇】旃裘。毛にて織りたる衣戎狄の服なり。

【二〇一】胡貉。北方の夷人なり。
【二〇二】享。獻なり。
【二〇三】闔口。獵營の門なり。
【二〇四】盧山。單于南庭の山なり。
【二〇五】常伯。侍中なり。
【二〇六】楊朱、墨翟。戰國の賢人の名。
【二〇七】唐虞。堯舜なり。大夏は夏の禹王なり。成は周の成王周は周公。
【二〇八】東嶽。泰山なり。覲とは封禪の祭を行ふこと。
【二〇九】梁基。梁父なり、山の名。禪は封禪なり。

するも、此世を舍きて其れ誰と與にせんやと。(二〇)上猶ほ謙讓して未だ俞りとせず。方に將に上(二一)三靈の流を獵り、下(二二)醴泉の滋を決し、黃龍の穴を發き鳳凰の巢を窺ひ、麒麟の囿に臨み神雀の林に幸し、(二三)雲夢を奢とし(二四)孟諸を侈とし、(二五)章華を非とし(二六)靈臺を是とせんとし、離宮に徂くこと罕にして觀遊を輟め、土事飾らず木功彫らず。人を農桑に丞め、之に勸むるに怠らざらんことを以てし、男女を儕うして違ふなからしめ、貧窮の者徧く洋溢の饒なるを被らざらんことを恐れ、禁苑を開き公儲を散じ、道徳の囿を創め、仁惠の虞を弘め、神明の囿に(二七)馳弋し、羣臣の有亡を覽觀し、雉兎を放ち(二八)罝罘を收め、麋鹿(二九)芻蕘、百姓と之を共にす。蓋し茲に臻れる所以なり。是に於て(三〇)洪鬯の德を醇くし、(三一)茂世の規を豐にし、三皇よりも加勞し五帝よりも(三二)勗勤す、亦至らずや。乃ち(三三)祗莊雍穆の徒、君臣の節を立て、賢聖の業を崇び、未だ苑囿の麗しく、遊獵の靡しきに遑あらざるなり。因つて軫を廻らし衡を還らし、(三四)阿房に背いて(三五)未央に反る。

【二〇】上。天子なり。成帝を指す。
【二一】三靈。日月星の祥瑞也。
【二二】醴泉。瑞水なり。滋は湧なり。
【二三】雲夢。楚の大澤の名。
【二四】孟諸。宋の大澤の名。
【二五】章華。楚王の臺の名。
【二六】靈臺。周の文王の臺の名。
【二七】馳弋。馳せ獵ること。
【二八】罝罘。網なり。
【二九】芻蕘。薪草なり。
【三〇】洪鬯。洪大通暢なり。
【三一】茂世。盛世なり。
【三二】勗勤。勉勵なり。
【三三】祗莊。恭敬なり。雍穆は和美なり。
【三四】阿房。山の名。
【三五】未央。宮殿の名。

【大意】是に於て有德の儒生、軒冕を列ね、衣裳を垂れて、堯典と雅頌とを修め、御前に揖讓して光明振燿す。此に因つて皇化遠く北狄南鄰に及び、蠻夷の君長、仁惠の風を聞き、皆珍物を獻じ、之に臣事せんことを請ひ、其徒を率ゐて來り、前は既に營門に入るも後は猶ほ盧山に列れり。羣公賢士乃ち君德を頌して曰く、我が君の德高いかな。堯舜の隆も何ぞ此に勝るを得んや。古の泰山梁父に封禪せる君主（管子に古の太山を封じ梁父に禪する者七十二家云云とあり）と雖も、我が君を棄てて誰と與にせんやと。成帝之を聞きて謙讓し、未だ以て然りとなさず。益其德を修め、祥瑞を來さんことを求め、雲夢孟諸の狩獵を以て奢侈となし、楚王章臺の臺を非とし周文の靈臺を是とし、離宮に幸すること稀にして遊觀の事を止め、土木を事とせず。民に農耕を勸め、天下の男女をして期に違はずして婚姻せしめ、貧者の饒衍の樂を被らざるを恐れ、禁苑を開き倉廩を發き、道德を制して苑囿となし、仁惠を廣めて虞人となし、祥福の囿に馳せ、羣臣の有無を觀、雉兎を獵らず網罟を用ひず。麋鹿薪草は百姓と共にして禁禦せず。此れ今日の隆を致せる所以なり。是に於て大通の德を厚くし、隆世の法を廣め、勤勞すること三皇五帝に過ぐ。是に於て和美恭敬の臣、君臣の禮、賢聖の業を尙び、未だ苑囿の麗、遊獵の奢をなすに遑あらず。乃ち車を廻らして未央宮に歸る。

巻の第五

賦

戊

畋獵 下

(一)長楊の賦並序

揚子雲

(二)明年、(三)上將に大に胡人に誇るに禽獸の多きを以てせんとす。(四)秋、右扶風に命じて、民を發して(五)南山に入り、西のかた(六)褒斜より東のかた(七)弘農に至り、南のかた(八)漢中に(九)毆り、(一〇)羅網罝罘を張り、熊羆豪豬、虎豹狖玃、狐兎麋鹿を捕へ、載するに(一一)檻車を以てし、長楊の射熊館に輸し、網を以て(一二)周阹となし、禽獸を其中に縱ち、胡人をして手づから之を搏ちて、

【一】長楊。宮の名。
【二】明年。羽獵賦を作りし明年なり。漢書成帝紀に元延二年冬長楊宮ニ幸シ胡客ヲ縱テ大ニ校獵スとあり。
【三】上。天子の稱。成帝を指す。
【四】秋。冬將に校獵せんとす、故に秋先づ之を命ずるなり。右扶風は郡名。
【五】南山。山の名、終南山なり、長安の南にあり。
【六】褒斜。谷の名。
【七】弘農。郡の名。
【八】漢中。郡の名。
【九】毆。一本に驅に作る。
【一〇】羅網罝罘。禽獸を捕ふる網。
【一一】檻車。獸を載する車、上に欄檻を施せるもの。
【一二】周阹。禽獸を遮る圍陣なり。

自ら其獲を取らしめ、上親しく臨み觀る。この時農民(一三)收斂するを得ず。雄從つて射熊館に至り、還りて長楊の賦を上る。聊か筆墨の文章を成すに因る。故に(一四)翰林を藉りて以て主人となし、(一五)子墨を客卿となし以て諷す。其辭に曰く、

子墨客卿、翰林主人に問ひて曰く、蓋し聞く、聖主の民を養ふや、仁霑ひて恩洽く、動くに身の爲にせずと。今年長楊に獵し、先づ右扶風に命じ(一六)太華を左にして褒斜を右にし、(一七)巀嶭に椓ちて弋となし、南山を紆して以て罝となし、(一八)千乘を林莽に羅ね、萬騎を山隅に列ね、軍を帥ゐて(一九)陸に踤り、(二〇)戎に錫ひて胡に獲しめ、熊羆を搤り豪豬を拖き、(二一)木擁槍纍以て(二二)儲胥となす。此れ天下の窮覽極觀なり。然りと雖も亦頗る農人を擾はすと三旬有餘、(二三)其廑至れり、而かも功圖らず。恐らくは識らざる者之を外にしては、則ち以て娛樂の游となし、之を内にしては則ち以て(二四)乾豆の事となさざらんことを。豈民の

【一三】收斂。民皆禽獸を驅りて收穫をなす能はざるなり。
【一四】翰林。翰は筆なり、其多きこと林の如し、故に翰林といふ。猶は博士といふが如し。
【一五】子墨。子は男子の通稱。假に設けて人名となす。
【一六】太華。山の名、長安の東に在り、故に左といふ。
【一七】巀嶭。山の名。
【一八】千乘。獵車千乘なり。
【一九】陸。圍陣なり。
【二〇】戎、胡。ともに夷人をいふ。
【二一】木擁。外に柵を作ること。槍纍は竹槍を作り纍れて柵とすること。
【二二】儲胥。藩籬なり。
【二三】其廑。廑は勤の古字。
【二四】乾豆。祭の時供物を盛る器。禮記に天子無事ナレバ則チ歳ニ三タビ田ス、一ハ乾豆ノ爲ニシ、二ハ賓客ノ爲ニシ、三ハ君ノ庖廚ニ充ツルガ爲ニスとあり。

爲ならんや。且つ人君は(二五)玄默を以て神となし、(二六)澹泊を德となす。今遠出を樂んで以て威靈を露し、數搖動して以て車甲を疲らす。本より人主の急務にあらず。(二七)蒙竊に惑へりと。翰林主人曰く、吁客何ぞ茲を謂ふや。客の若きは所謂其一を知りて、未だ其二を覩ず、其外を見て其内を識らざるなり。僕嘗て談に倦む。其詳を一二する能はず。請ふ略其凡を擧げん。客自ら其の切なるを覽よと。客曰く(二八)唯唯と。

【大意】子墨客卿、翰林主人に問うて曰く、吾聞く聖天子の民を養ふや、恩德を民に洽くして、我が身の爲にせずと。成帝今年長楊に獵し、先づ右扶風に命じて、東は華山より西は褒斜に至るまでを獵場とし、弋を截嶭山に椓ちて網を繫くる橛となし、終南山の周屈を取りて網となし、車騎を山林の間に列ねて禽獸を驅らしめ、胡人に賜ひて自ら獲しむ。此れ實に天下の壯觀なり。然れども農民を擾亂せること三十餘日にして、民の勞苦至れり而して其功なし。要するに無益の事なり。恐らくは事理を解せざる者、視て以て娛樂の爲にして乾豆の爲にあらず。民の爲に謀る所以にあらずとなさんことを。且つ天子は無爲淸淨を以て德となす。今成帝遠遊を樂んで威靈を暴露し、數士卒を動して之を勞す。此れ決して天子の急務にあらず。余大に惑へりと。翰林主人之に答へて曰く、

【二五】玄默。無爲なり。
【二六】澹泊。淸淨なり。
【二七】蒙。愚昧なり、謙稱なり。
【二八】唯唯。應諾の辭。

吁足下過てり。足下は所謂其一を知りて未だ其二を知らざる者なり。吾れ此事の利害を談じて今已に倦めり。其詳を說く能はず。ただ其大略を言はん。足下自ら解悟せよと。客卿答へて曰く唯唯と。

主人曰く、昔彊秦あり其土を【二九】封豕し、其民を【三〇】窫窳し、【三一】鑿齒の徒、相與に牙を磨きて之を爭ひ、豪俊麋沸雲擾して、【三二】羣黎之が爲に康からず。是に於て【三三】上帝【三四】高祖を眷顧し、高祖【三五】命を奉じ【三六】斗極に順ひ【三七】天關を運し、巨海を横り崑崙に漂ひ、劍を提げて之を叱し、過ぐる所城を麾き邑を撕ち、將を下し旗を降す。一日の戰殫く記すべからず。この勤に當り頭蓬のごとくなるも梳るに暇あらず、飢うるも餐ふに及ばず。【三八】鞮鍪蟣蝨を生じ介冑霑汗を被り、以て【三九】萬姓の爲に命を【四〇】皇天に請ひ、廼ち民の屈せる所を展べ、民の乏き所を振ひ、億載を規り帝業を恢にし、七年の閒にして天下【四一】密如たり。【四二】聖文に至るに逮んで、風に隨ひ流に乘じ、方に意を至寧に垂れ、躬ら節儉を服し、【四三】綈衣は弊れざるばかり革鞜は穿たざるばかりにし、大厦には

【二九】封豕。大豬なり、人を害するに喩ふ。
【三〇】窫窳。惡獸の名、貙に類し虎の爪あり、人を食ふ。
【三一】鑿齒。惡獸の名。
【三二】羣黎。百姓なり。
【三三】上帝。天帝なり。
【三四】高祖。漢の高祖。
【三五】命。天の命なり。
【三六】斗極。北斗星なり。
【三七】天關。北斗星また天關ともいふ。
【三八】鞮鍪。兜なり。
【三九】萬姓。百姓なり。
【四〇】皇天。天なり、天帝なり、命を請ふとは、いのちごひをすること。
【四一】密如。靜肅なること。
【四二】聖文。文帝なり、高祖の子。
【四三】綈衣。黑衣なり。

居らず木器は文なし。是に於て（四四）後宮（四五）瑇瑁を賤みて（四六）珠璣を疏んじ、（四七）翡翠の飾を卻けて雕琢の巧を除き、麗靡を惡んで近づけず、芬芳を斥けて御せず。絲竹（四八）宴衎の樂を抑止し、（四九）鄭衞幼眇の聲を聞くを憎む。是を以て（五〇）玉衡正くして（五一）太階平かなり。

【大意】翰林主人曰く、昔强秦の其人民を殘害するや、暴惡の徒之に倣ひ相與に爪牙を磨き爭つて人を害す。此に因りて豪傑並び起りて人民塗炭に苦む。此時高祖天命を受けて帝位に卽き、北斗の運轉するが如く、以て亂暴を討ち、東は海に至り西は崑崙に至るまで、過る所城邑を破り將帥を降し、頭髮修むるに遑なく飢うるに食ふに及ばず。兜は蝨を生じ甲冑汗に霑ひ、以て天下人民の爲に命を天に請ひ、人をして各其情を遂ぐるを得しめ、以て長久の道を謀り帝業を大にし、七年にして天下安寧なり。文帝また高祖の遺風に隨ひ心を安寧の術に留め、自ら節儉を行ひ、衣履弊れざれば改め造らず、大屋には住まず、器具を飾らず。後宮婦人また之に倣ひ、珠玉を貴ばず彫飾を排斥し、邪淫の樂を聞かず。是を以て天下太平なり。

【四四】後宮。宮中の婦人をいふ。
【四五】瑇瑁。鼈甲の類。
【四六】珠璣。珠玉なり。
【四七】翡翠。鳥の名、毛羽極めて美し、以て服飾となす。
【四八】宴衎。邪淫なり。
【四九】鄭衞。淫靡なる音樂。幼眇は精微なり。
【五〇】玉衡。北斗星なり。
【五一】太階。三階の星なり、此の三星正平なる時は天下平かなり。

其後、(五二)熏鬻虐を作し、東夷横に叛き、(五三)羌戎睚眥し(五四)閩越相亂れ、(五五)遐氓之が爲に安からず。中國その難を蒙被る。是に於て(五六)聖武勃怒し、爰に(五七)其旅を整へ、乃ち(五八)驃衞に命じ(五九)汾沄沸渭として雲合電發し、猋騰波流し、機駭蠭軼し、疾きこと奔星の如く撃つこと震霆の如く、(六〇)轒輼を碎き(六一)穹廬を破り、(六二)沙幕に腦し(六三)余吾に髓し、遂に(六四)王庭を蹦んで(六五)橐駝を驅り、(六六)熐蠡を燒き、(六七)單于を分勢し(六八)屬國を磔裂し、(六九)阬谷を夷げ(七〇)鹵莽を拔き、山石を刊り、屍を踩み(七一)廝を輿にし、老弱を(七二)係累し、(七三)唲鋋に瘢耆し金鏃に(七四)淫夷する者數十萬人、皆(七五)稽顙して頷を樹て、(七六)扶服して蛾のごとく伏し、二十餘年尚敢て(七七)慴息

【五二】熏鬻。匈奴也、北狄の名。
【五三】羌戎。ともに夷狄の名。睚眥は目を怒らす貌。
【五四】閩越。ともに南夷の名。
【五五】遐氓。遠方の人民。
【五六】聖武。武帝なり。
【五七】其旅。旅は軍勢なり。
【五八】驃衞。驃は霍去病。衞は衞青。漢書に霍去病驃騎將軍トナリ、凡ソ六タビ出デテ匈奴ヲ撃ツ、また衞青大將軍トナリ凡ソ七タビ出デテ匈奴ヲ撃ツとあり。
【五九】汾沄沸渭。衆盛の貌。
【六〇】轒輼。匈奴の車。
【六一】穹廬。旃帳也、匈奴の家。
【六二】沙幕。沙漠なり、匈奴の地にあり。
【六三】余吾。川の名、匈奴の地にあり。
【六四】王庭。匈奴の王庭なり。
【六五】橐駝。駱駝なり。
【六六】熐蠡。匈奴の聚落の名。
【六七】單于。匈奴の王なり。
【六八】屬國。匈奴の屬國なり。
【六九】阬谷。山谷なり。
【七〇】鹵莽。鹵は西方の鹹地、莽は草野なり。
【七一】廝。役卒なり。
【七二】係累。しばること。
【七三】唲鋋。ホコなり。瘢耆は傷を負ふこと。
【七四】淫夷。淫は過なり、負傷すること。
【七五】稽顙。叩頭して手額に至るなり。
【七六】扶服。匍匐に同じ。
【七七】慴息。慴は疾なり、息は喘なり、漢の威を懼れて敢て慴息せざるなり。

せず。夫れ(七八)天兵四に臨み、(七九)幽都先づ加へられ、戈を廻らして邪に指せば、南越相夷げ、(八〇)節を靡して西征すれば(八一)羌僰東に馳す。是を以て(八二)遐方疏俗、(八三)殊鄰絶黨の域、(八四)上仁の化せざる所、茂德の綏んぜざる所より、足を蹻げ首を抗げて、厥珍を獻ぜんことを請はざるはなく、海內をして(八五)澹然として、永く邊城の災、(八六)金革の患なからしむ。

【大意】匈奴我が邊民を虐害し、東夷また叛亂し、羌と戎と相和せず、閩と越と相攻伐し、邊民安からず中國亦其難を蒙る。武帝乃ち震怒し、霍去病衞青等の諸將に命じて征伐せしむ。王師盛衆にして其威雷霆の如く、頭腦を沙漠に碎き骨髓を余吾の水に投じ、遂に匈奴の王庭に至り、聚落を燒き其王を殺し、其屬臣を磔し、其屍を蹂躪し役卒を轢殺し、賊の負傷する者亦數十萬人、皆稽顙匍匐して降り、二十餘年を歷るも、尚ほ我が漢の威を懼れて屛息す。夫れ漢兵の四方を征討するや、先づ北方匈奴を伐ち、戈を回らして南に向へば南越相攻伐して以て漢に降り、旌旗を靡かして西征すれば羌僰相率ゐて入朝す。是を以て上古有德の君主と雖も安んずる能はざりし者、來朝して珍物を獻ぜんことを請はざるはなく、海內安寧にして永く戰亂の患なきに至れり。

【七八】天兵。天子の兵。
【七九】幽都。北方匈奴の地。
【八〇】節。旗なり。
【八一】羌僰。西戎の名。
【八二】遐方疏俗。遠方の異國。
【八三】殊鄰絶黨。外國をいふ。
【八四】上仁、茂德。古の有德の君をいふ。
【八五】澹然。安然なり。
【八六】金革。戰亂なり。

今朝廷純仁にして道に遵ひ義を顯し、書林を并せ包ねて聖風雲のごとく靡き、英華沈浮して（八七）八區に洋溢し、普天の覆ふ所（八八）沾濡せざるはなく、士王道を談ぜざる者あれば、則ち樵夫も之を笑ふ。意者に以爲へらく、事隆にして殺せざるはなく、物盛にして虧けざるはなしと。故に平かなれども險を肆てず、安けれども危きを忘れず。廼ち時に（八九）年あるを以て、兵を出し輿を整へ（九〇）戎を竦め、（九一）師を五柞に振へ、馬を（九二）長楊に習し、力を狡獸に簡び、武を（九三）票禽に校へ、廼ち（九四）萃然として（九五）南山に登り（九六）烏弋を瞰、西のかた（九七）月出を厭ぎ、東のかた（九八）日域を震はす。又恐らくは後代一時の事に迷ひ、常に此を以て國家の大務となし、（九九）田獵に淫荒し（一〇〇）陵夷して禦まざらんことを。是を以て車は（一〇一）軔を安んぜず、日は未だ旂を靡かせざるに、從者彷彿として（一〇二）骫屬して還る。亦（一〇三）太尊の烈を奉

【八七】八區。八方なり。
【八八】沾濡。德化にうるほふこと。
【八九】年あり。豐年なるをいふ。
【九〇】戎。軍旅なり。
【九一】師。軍勢なり。五柞は宮の名。
【九二】長楊。宮の名。
【九三】票禽。輕疾の禽なり。
【九四】萃然。集る貌。
【九五】南山。終南山なり。
【九六】烏弋。國の名、西域傳に長安ヲ去ルコト萬二千二百里とあり。
【九七】月出。一に月窟に作る。月の出る所の穴なり。西に在り。
【九八】日域。日の出づる處、東にあり。
【九九】田獵。狩獵なり。淫荒は耽ること。
【一〇〇】陵夷。馴致といふが如し。
【一〇一】軔。輪を支ふる木、はどめ。
【一〇二】骫屬。骫は委の古字、事を委棄すること、屬は引き續くこと。
【一〇三】太尊。高祖をいふ。烈は業なり。

じ(一〇四)文武の度に遵ひ、(一〇五)三王の田に復り五帝の(一〇六)虞に反る所以なり。

【大意】今帝德純厚にして道義にかなひ、書學の林を兼包し、聖風雲の如く靡靡として進み、德化八方に溢れて、人皆之に沾はざるはなし。故に士にして王道を談ぜざる者あれば、樵夫も之を笑ふに至れり。然も帝意に以爲へらく、凡そ事隆盛にして虧損せざるはなしと。故に平安に居て險危を忘れず。今幸に豐年に會せるを以て、車輿を整へ軍旅を勸め、以て武を練らんと欲し、南山の上に集りて西のかた烏弋國を瞰る。是に於て西は月窟を壓し東は日域に及ぶまで、聖德遠く及ぶ。然れども帝又後世今の狩獵を見て國家の大務を誤解し、狩獵に耽る者あらんことを恐る。故に永く車輿を留めず日未だ旌旗の影を移すに及ばずして歸る。是れ高祖文帝武帝の事業に遵ひ、古聖王の狩獵に傚ふ所以なり。

農をして耰を輟めず、(一〇七)工をして機を下らざらしめ、婚姻時を以てし、男女違ふなからしめ、(一〇八)愷悌を出し簡易を行ひ、(一〇九)劬勞を矜み力役を休し、(一一〇)百年を見て(一一一)孤弱を存ひ、帥ゐて之と苦樂を同うし、然る後鐘鼓の樂を陳ね(一一二)鞀磬の和を

【一〇四】文武。文帝及び武帝。
【一〇五】三王。羽獵賦、二七を見よ。
【一〇六】虞。山澤を掌る官、ここは狩獵の意に解して可なり。
【一〇七】工。女工なり。
【一〇八】愷悌。やはらぎ樂むこと。詩經に愷悌ノ君子ハ民ノ父母ナリとあり。
【一〇九】劬勞。苦勞に同じ。
【一一〇】百年。百歲の老人なり、禮記に百年ノ者ニハ就テ之ヲ見ルとあり。
【一一一】孤弱。孤はミナシゴ、弱は幼なり。
【一一二】鞀磬。鞀はフリツヅミ、磬は石にて作れる樂器。

鳴らし、碣磍の（二三）虡を建て（二四）鳴球を戛擊し、（二五）八列の舞を掉かし、（二六）允鑠を酌み（二七）樂胥を肴にし、廟中の（二八）雍雍を聽き、神人の福祜を受け、歌は頌に投じ吹は雅に合ふ。其勤此の若し。故に眞神の（二九）勞する所なり。方將に（三〇）元符を俟ちて以て（三一）梁父の基に禪し、泰山の高きに增し、光を將來に延き、榮を（三二）往號に比べんとす。豈徒に淫覽浮觀し、秔稻の地に馳騁し、棃栗の林に（三三）周流し、（三四）芻蕘を蹂踐し、（三五）衆庶に誇詡し、（三六）狖玃の收を盛にし、麋鹿の獲を多くせんと欲するのみならんや。且つ盲者は（三七）咫尺を見ざれども、（三八）離婁は千里の隅を燭す。客は徒に胡人の我が禽獸を獲るを愛み、曾て我も亦已に其王侯を獲たるを知らずと。言未だ卒らざるに、墨客席を降り再拜（三九）稽首して曰く、大なるかな（三〇）體や、允に（三一）小人の能く及ぶ所に

【二三】虡。鐘を懸くる架なり、碣磍は獸の怒る貌。
【二四】鳴球。玉磬なり、樂器の名。戛擊は打ち鳴らすこと。
【二五】八列。八佾なり、八行に舞人の竝ぶこと。
【二六】允鑠。信美なり。
【二七】樂胥。たのしみよろこぶこと。
【二八】雍雍。敬謹の貌。
【二九】勞。慰勞といふが如し。勤勞に報ゆること。
【三〇】元符。大瑞なり。
【三一】梁父。山の名。

【三二】往號。三王なり。
【三三】周流。周遊なり。
【三四】芻蕘。草薪なり。
【三五】衆庶。人民なり。誇詡は誇示すること。
【三六】狖玃。獸の名。
【三七】咫尺。咫は八寸、尺は一寸。眼前の近き處をいふ。
【三八】離婁。古の明目者の名。
【三九】稽首。首を垂れて地に至ること。
【三〇】體。法といふが如し。
【三一】小人。子墨客卿自ら謙して言ふ。

あらず。廼ち今日（二二）曚を發き（二三）廓然として已に昭かなりと。

【大意】乃ち農夫は耕を輟めず、工女は織るを廢せざらしめ、嫁娶は時を以てして違ふことなからしめ、愷悌の道を天下に示し簡易を以て下を治め、民の苦勞を憂へ老幼を憐み、相帥ゐて民と苦樂を同うし、然る後歌舞を行ひ、信美を酌んで酒に當て、喜樂を以て肴に當て、謹んで祖廟を祭り神人の祐を受け、歌聲は頌と相投じ、吹聲は雅樂と相合ふ。其の勤勞此の如し。神祇の報を受くるも亦宜なり。今や大瑞を待ちて泰山梁父に封禪の禮を行ひ、光輝を將來に傳へ、榮華を古聖王に比せんとす。豈徒秔稻梨栗の地に馳せて狩獵を恣にし、捕獲の多きを誇らんや。それ盲者は咫尺を見るを得ざるも、離婁は千里の遠きを視る。足下は胡人の我が禽獸を獲るを吝むも、我亦已に胡王をして來朝せしめぬ。是れ卽ち胡王を獲たるなり。何ぞ禽獸を吝むを須ひんや。足下此理を悟らず。豈に盲者にあらずやと。翰林主人の言未だ終らざるに、子墨客卿其席を降り、再拜して曰く、偉大なるかな我が國體や。誠に下愚の能く知る所にあらざるなり。今主人我が蒙を啓き給ひ、廓然として昭明ならしめたりと。

【二二】曚。蒙に同じ、愚蒙を開發すること。
【二三】廓然。除き去る貌。

(一)射雉の賦　潘安仁

青林を渉りて以て游覽し、(二)羽族の羣りて飛ぶを樂む。(三)采毛の英麗なるを聿ぶるに、五色の(四)名翬あり。(五)耿介の專心を厲し、雄豔の姱姿を奓り、丘陵を巡りて以て(六)經略し、(七)墳衍を畫りて(八)畿を分つ。是に於て(九)靑陽謝を告げ、(一〇)朱明肇めて授け、木として滋らざるはなく、草として茂らざるはなし。初莖(一一)蔚として其れ新を曜かし、陳柯(一二)摵として以て舊を改め、天(一三)泱泱として以て雲を垂れ、泉(一四)涓涓として(一五)溜を吐き、麥(一六)漸漸として以て芒を擢で、雉(一七)鷕鷕として朝に雊く。(一八)箱籠を眄みて以て(一九)揭驕たり、(二〇)驍媒の變態を睨る。勁骹を奮つて以て角に搓ち、悍目を瞵りて以て旁く睞る。

【一】射雉。雉を射るなり、序に余家ヲ琅邪ニ徙ス、其俗實ニ善ク射ル、聊カ講肆ノ餘暇ヲ以テ媒翳ノ事ヲ習フ遂ニ樂ンデ之ヲ賦スとあり。媒とはヲトリなり、翳は隱れて射るなり。
【二】羽族。鳥類なり。
【三】采毛。美しき羽毛なり。
【四】名翬。名高き雉。
【五】耿介。堅く節操をとり守ること。雉は性耿介なり。
【六】經略。はかりをさむること。
【七】墳衍。丘陵と平澤。
【八】畿。境界なり。
【九】靑陽。春をいふ。謝は去ること。
【一〇】朱明。夏をいふ。
【一一】蔚。盛なる貌。
【一二】摵。木の葉の落つる聲。
【一三】泱泱。白雲の貌。
【一四】涓涓。泉の流るる聲。
【一五】溜。小流なり。
【一六】漸漸。麥の秀づる貌。
【一七】鷕鷕。雉の鳴く聲。
【一八】箱籠。カゴなり、媒を入れ置くなり。
【一九】揭驕。驍健なる貌。
【二〇】驍媒。勇健なるヲトリ。

（二一）鶯たる綺翼ありて赬撾あり、（二二）灼たる繡頸ありて（二三）袞背あり。（二四）鬱として（二五）軒翥して以て餘怒あり、長鳴して以て能を效さんことを思ふ。爾して乃ち場を攘ひ翳を拄て、（二六）停僮葱翠、（二七）綠栢參差として（二八）文翮鱗次し、（二九）蕭森繁茂して（三〇）婉轉輕利なり。衷は（三一）料戾して以て徹鑒し、表は（三二）厭躡して以て密緻なり。吾が游の晏く起たんことを恐れ、（三三）原禽の至る罕なるを慮り、心を企て想ふに疲らすを甘んじ、目を倦ましめて以て視を寓するを分とす。

【大意】青林を經て遊覽し、鳥類の羣飛するを樂む。就中羽毛の美麗なる者を述ぶれば、五彩の燦爛たること雉に如くはなし。雉は氣象雄嚴、其色豔美にして、丘陵を周行し、墳衍に因りて疆界を立て、分ちて之を護り相侵越せず。（以上雉の形性を言ふ）春去り夏來るや、草木倶に榮え、初生の莖は其新暉を曜かし、摵摵たる枯枝も其舊色を變じ、白雲天に垂れ幽泉涓涓として流れ、麥秀で雉雊く。（以上節物氣候の射雉に適するを言ふ）因つて箱籠を顧視し、蹺媒を詳察す

【二一】鶯。文章ある貌。
【二二】灼。光明の貌。
【二三】袞背。袞服の如き紋章ある背なり。
【二四】鬱。暴怒の貌。
【二五】軒翥。飛びあがること。
【二六】停僮。翳の貌。葱翠は翳の色。
【二七】綠栢。翳の上に加ふる栢葉なり。
【二八】文翮。美しき羽なり。鱗次は鱗の如くならぶこと。
【二九】蕭森繁茂。茂る貌。
【三〇】婉轉。綢繆する貌。
【三一】料戾。小窓の隙なり。徹鑒はとほりて見ゆること。
【三二】厭躡。重りて密なること。
【三三】原禽。雉なり、雉は下濕の地に居らず、故に原禽といふ。

るに、揭驕にして態を變じ、勁足を奮ひ利距を以て邪に斫り、悍戾の目を怒らし以て旁く顧視し、翼は綺文の如く、髀は赤色を帶び、頸は繡彩の如く、背は袞服の如く、高く飛んで餘怒を奮ひ、長く鳴いて技能を效さんことを思ふ。(以上媒の形勢を言ふ) 乃ち地を除きて場を作り、翳を草上に扛て、翳上に栢葉の參差たるを加ふ。其狀鳥翮の鱗次するが如く、之を望めば草樹の森茂するが如く、之を執れば綢繆して輕利なり。其裏に小隙あり以て外を徹鑒るべく、其表は則ち重布緻密にして、其內を見るべからず。(以上翳の形飾を言ふ) 媒の起つこと早からず、野雉の至ること稀なるを恐れ、心を疲らし踵を擧げて望み、目を疲らして注視するを甘んず。(以上翳を設けて後野雉を獲るを待つ狀を述ぶ)。

何ぞ(三四)調翰の(三五)喬桀なる、(三六)疇類に邈にして才を殊にし、(三七)扇の擧がるを候ちて淸く叫き、(三八)野聲を聞いて媒に應ず。微罟を褰げて以て長く眺れば、已に(三九)踉蹡として徐に來る。朱冠の(四〇)絶赫たるを摛べ、藻翰の(四一)陪鰓たるを敷き、首に(四二)綠素を葯ひ身に(四三)黼繪を拕き、(四四)青鞦莎のごとく靡き、丹臆蘭のごとく粹る。

【三四】調翰。調練せられたる羽、媒をいふなり。
【三五】喬桀。俊逸なり。
【三六】疇類。ナカマなり。
【三七】扇。布巾なり、媒をして鳴かしめんとする時は扇を振ひて合圖するなり。
【三八】野。野雉なり。
【三九】踉蹡。雉の行く貌。
【四〇】絶赫。赤色の貌。
【四一】陪鰓。奮怒の貌。
【四二】綠素。綠と白。
【四三】黼繪。黼は繡なり、繪は畫文なり。
【四四】青鞦。尾間の青毛なり。

或は蹶り或は啄み、時に行き時に止まり、斑尾【四五】翹を揚げ、雙角特に起つ。【四六】良遊呃喔して之を【四七】規裏に引く。叱に應じて愕き立ち、身を擢んで【四八】竦峙す。【四九】黄間を捧げて以て密に彀り、【五〇】剛挂を厲けて以て潛に擬すれば、倒禽紛として以て迸り落ち、【五一】機聲振ひて未だ已まず。【五二】山鷩悍害にして【五三】猋迅なること已甚しく、壑を越え岑を凌ぎ、飛鳴して【五四】廩に薄る。【五五】牙を鯨げ鏃を低れ、心平かにして望審なり。毛體摧け落ち【五六】霍として碎錦の若し。逸羣の【五七】儁、場を擅にして【五八】兩を挾み、雌を櫟ち異を妬み、倏ち來り忽ち往く。上風の【五九】鬢切たるを忌み、映日の【六〇】儻朗たるを畏れ、【六一】發布を屏けて【六二】累息し、徒に心煩ひて【六三】伎懩す。伊れ【六四】義鳥の敵に應じ、啾いて地を擭ち以て響を厲うす。彼れ音を聆いて逕に進み、忽ち距を交へて以て壤を接す。【六五】彤窻に盈ちて以て美く發すれ

【四五】翹。尾の長毛なり。
【四六】良遊。よきをとり。呃喔。鳴くこと。
【四七】規裏。射るべき範圍の中。
【四八】竦峙。立ちどまること。
【四九】黄間。弩の名。
【五〇】剛挂。矢の名。
【五一】機聲。弩機の聲。
【五二】山鷩。野雉なり。
【五三】猋迅。飈風の如く疾きこと。
【五四】廩。翳なり。
【五五】牙。弩牙なり。
【五六】霍。披散する貌。
【五七】儁。俊に同じ、すぐれた雉。
【五八】兩。兩雌なり。
【五九】鬢切。微動の聲。
【六〇】儻朗。不明の貌。
【六一】發布。巾布なり。
【六二】累息。息をころしてゐること。
【六三】伎懩。技を逞うせんと欲して能はず、もどかしく感ずること。
【六四】義鳥。媒雉なり。
【六五】彤。赤色なり。窻は翳窻なり。

ば紛として首頽つて臆仰ぐ。

【大意】 媒雉何ぞ俊逸なる。喬桀たること遥に疇類を出づ。我が巾を振つて合圖するを待ちて、乃ち清聲を發して鳴く。野雉其聲を聞き、之に應じて來る。我乃ち翳戸を開いて長視し、已に野雉の徐行して來るを見る。朱冠高く立ち藻翰怒り張り、首に緑白毛をまとひ、身に文繍を曳き、尾間の青毛は莎草の如く、膺色赤くして秋蘭の如く、或は走り或は啄み、或は行き或は止まり、尾毛を揚げ首角を立つ（以上野雉の壯なる貌を言ふ）媒雉鳴いて誘ひ、之を射るべきの規内に入らしむれば、野雉媒雉を望んで來ること速にして止らず。我れ規度を失はんことを恐れて之を叱す。野雉乃ち愕然として立つ。因つて弓弩を彀り、矢を弦に注ぎ、潛に以て之を射れば、弩聲尙ほ未だ已まざるに箭を被りて反り落つ。然も其性剽悍にして、媒雉を追ひて來ること飈風の如く、澗を越え峯を超え、來りて翳前に迫る。乃ち弩牙矢鏃を擎げて以て之に就き、心を用ふること和平にして、望むこと審定なり。之を飛中に射れば、毛體披散して、錦の分散するが如し。この超羣の野雉ただ場を擅にするのみならず。又兩雌を伴へり。今他雄（媒雉）の鳴くを聞き、則ち之を妬んで其雌を撃ち、忽ち往來して媒雉と闘ふ。我風の微動し、日光の映照し、野雉の人あるを覺りて逸し去らんことを畏れ、巾布を屏けて敢て發せず。息を殺して煩悶し、伎癢の感に堪へず。媒雉敵（野雉）

の來擊に應じ、地を攫ちて鳴き、益其音聲を厲すや、野雉其聲を聽きて、忽ち進み來り、距を交へて相鬪ひ、其光彩翳窓に當る。此に乘じて矢を發すれば、正に其頸に中り、首傾いて後に回り、臆仰いで乃ち斃る。

或は乃ち崇墳夷れ靡びて、農、壠を易めず、稊菽（六六）叢糅して（六七）翳薈蓁茸たり。鳴雄羽を振ひて其（六八）冢に依り、（六九）攢として丘を降りて以て（七〇）敵に馳せ、形隱れたりと雖も草動く。（七一）挺穟の傾き掉くを瞻て、（七二）意淰躍して以て振ひ踊り、（七三）噉として苗を出でて以て場に入れば、愈情駭いて神悚る。望黯く合ひて翳皛なれば雉肩を撓めて踵を旋らす。余が志の精鋭なるを悅び、靑顱を擬して項に點つ。亦（七四）目ありて體に步せず、邪に眺て旁く剔き、聞くなくして驚き、見るなくして自ら驚き、周環廻復し（七五）繚繞盤辟すれば、翳を戾らし（七六）把を旋らし、縈りて歷る所に隨ふ。（七七）彳亍して中ごろ輟り、（七八）馥焉として鏑に中り、前には重膺を剠き、傍には疊翮を截る。若

【六六】叢糅。雜生すること。
【六七】翳薈蓁茸。雜草繁茂する貌。
【六八】冢。山頂なり。
【六九】攢。疾き貌。
【七〇】敵。媒雉なり。
【七一】挺穟。草莖なり。
【七二】淰躍。躍り立つこと。
【七三】噉。漸く出づる貌。
【七四】目あり。國語に單襄公曰ク、晉侯ハ目體ニアラズ、足目ニ步セズとあり、視ること體と運ふなり。
【七五】繚繞盤辟。めぐりめぐること。
【七六】把。翳の方向を轉ずるトリテなり。
【七七】彳亍。行く貌。
【七八】馥焉。鏃にあたる聲。

夫れ疑多く決少く、膽劣く心狷く、內には固守なく、出でては交戰せず、來ること處子の若く、去ること激電の如く、繭葉を闚ひ閅。(七九)幎歴として乍ち見ゆ。是に於て(八〇)分銖を算へ(八一)遠邇を商り、(八二)懸刀を揆り絶伎を騁すれば、輊るが如く軒るが如く、高からず埤からず、咮に當り胷に値り、膆を裂き嘴を破る。

【大意】或は田塘荒廢し、雜草繁茂する處、雉其中に隱れ、羽翼を振ひて其頂に止まり、撊然として高丘を降りて媒雉に奔馳するや、其形體草間に隱ると雖も、草の動くを覺ゆ。因つて草莖の傾動するを見て、雉の將に來らんとするを知り、我意躍動して定まらず。雉、草間を出でて射場に入れば、我が情いよいよ驚き、之を射るも或は中らざらんことを恐る。雉既に射場に入り諸處を望み、草木黶然として四合し、ただ翳のみ皛然として獨り顯なるを見て、其心に之を疑ひ、乃ち身を斂めて草間に歸らんとす。我乃ち志の專精なるを欣び、後より其頭を射れば、正に其項に中る。亦視と體と相違ひ、目は斜に望み足は旁く驚き、驚疑多くして周廻止まざるの雉あり。我乃ち翳の柄を轉じて、雉の赴く所に隨ひ、以て雉をして己を見ざらしめ、雉の行きて小憩するや、此に乘じて之を射、馥然として中て、前には重

【七九】幎歴。隱見する貌。

【八〇】分銖。弩牙の後に刻して矢の至る所の遠近を示すメモリなり。照準なり。

【八一】遠邇。遠近なり。

【八二】懸刀。弩牙の後の刀なり、一に機と名づく。

臆を割き、傍には疊翮を截る。亦性怯にして疑多く、膽劣にして心急に、心に堅守なく外に闘意なく、來ること處女の人を畏るるが如く、去ること激電の飛ぶが如く、麥葉の下に在りて隱見する者あり。我將に葉下に就いて之を射んとす。故に其分銖を算へ遠近を量り、機を揆りて妙技を演ずれば、高からず低からず、正に其面を射て嘴を破り胸に中る。

(八三)夷險地を殊にし、(八四)馴麤變を異にし、晷くるまで食ふに暇あらず、夕べまで勌むを告げず。昔(八五)賈氏の皐に如ける、始めて顏を一箭に解き、醜夫之が爲に貌を改め、憾妻之が爲に怨を釋けり。かの(八六)遊田の獲を致す、咸危きに乘じて以て馳騖す。何ぞ(八七)斯藝の安逸なる。嗟禽從つて其れ已に豫し。道を淸ひて行き、地を擇んで住り、尾は鑣を飾りて(八八)服に在り。肉は爼に登せて永く(八九)御せらる。豈唯(九〇)皁隷のみならんや。此れ焉に君も擧ぐ。若し乃ち(九一)耽盤流遁し、心を放にして移らず、其身の恤を忘れ、其雄雌を司り、樂んで節なく、(九二)端操虧くることあるは、此れ則ち老氏の誡むる所にして、君子のなさざる所なり。

【八三】夷險。夷は土地の平なること、險はけはしきこと。
【八四】馴麤。馴はなれたる雉、麤は粗卒なる雉。
【八五】賈氏。左傳に昔賈大夫醜ナリ、妻ヲ娶ル、三年言ハズ笑ハズ、御シテ以テ皐ニ往キ雉ヲ射テ之ヲ獲、其妻始メテ笑ヒ始メテ言フとあり。
【八六】遊田。遊獵なり。
【八七】斯藝。射雉の技をいふ。
【八八】服。衣服なり。
【八九】御。食なり。
【九〇】皁隷。奴僕をいふ。
【九一】耽盤。耽り樂むこと。
【九二】端操。端直の操守。

【大意】地に平險の殊なるあり、雉に馴麤の異なるあり。變に隨つて應じ、其樂一樣ならず。之が爲に飢倦を忘るるに至る。昔賈氏皐に獵して雉を射、其妻始めて破顔一笑す。是れ醜夫此技の爲に貌を變じ、夫の醜を憾みし妻も遂に其怨を釋けるものといふべし。且つ遊獵の禽を獲るは、皆危險に乘じ車騎を馳するも、獨り射雉の技たるや、既に安且つ逸にして、雉自ら我に隨つて來る。ただ清閑の道を選び、止まるべきの地を擇んで場を設くるのみ。而して其尾は鑣を飾り服飾となすべく、其肉は俎に載せて食に供すべし。賤人之を爲すべきのみならず、君主と雖も尙ほ之を行ふべし。ただ耽樂して自ら放にし、其身の憂を忘れ、心を禽獸の雌雄に主として、之を獲んことを求め、節度を缺くことあらば、是れ則ち老子の誡むる所（老子に馳騁畋獵は人心をして發狂せしむとあり）にして、君子の爲さざる所なり。

紀　行

(一)北征の賦　(二)班　叔　皮

余、世の(三)顚覆するに遭ひ、(四)塡塞の阨

【一】北征。征は行なり。更始の時、班彪難を涼州に避け、長安を發して安定に至り、此賦を作る。

【二】班叔皮。班彪。字は叔皮、扶風安陵の人。

災に罹り、舊室滅びて以て丘墟となり、曾て少くも留るを得ず。遂に袂を奮つて以て北に征き、超として迹を絶ちて遠く遊ぶ。朝に（五）軔を（六）長都に發し、夕に（七）瓠谷の（八）玄宮に宿し、（九）雲門を歷て反顧し、（一〇）通天の（一一）崇崇たるを望み、陵岡に乘りて以て登降し、（一二）郇邠の邑鄕に息ひ、（一三）公劉の遺德を慕ひ（一四）行葦の傷らざるに及ぶ。彼れ何ぞ生の優渥にして、我獨り此の百殃に離へる。故に時會の變化にして、天命の常なきにあらず。（一五）赤須の長坂に登り、（一六）義渠の舊城に入り、（一七）戎王の淫狡なるを忿り、宣后の貞を失へるを穢しとし、秦昭の賊を討てるを嘉し、赫として斯に怒りて以て北に征く。

【大意】余王莽の亂により、天下顚覆し王道塞がりて通ぜざるの阨に遭ひ、舊室爲に毀滅して丘墟となり、少くも留まるを得ず。遂に袂を奮ひて北行せんと欲し、朝に長安を發し夕に瓠谷の甘泉宮

【三】顚覆。王莽の亂によりて天下の顚覆せるをいふ。
【四】塡塞。王道の通ぜざること。
【五】軔。車の回轉を止むる木。發軔とは出發すること。
【六】長都。長安なり。
【七】瓠谷。谷の名。
【八】玄宮。甘泉宮をいふ。
【九】雲門。雲陽縣の門なり。
【一〇】通天。臺の名、甘泉宮の中に在り。
【一一】崇崇。高き貌。
【一二】郇邠。皆古國の名。
【一三】公劉。周の遠祖にして邠に居たり。其德草木に及べりといふ。
【一四】行葦。路傍に生ずる葦。詩經大雅に行葦篇あり、敦タル彼ノ行葦、牛羊踐履スルコト勿レの句あり。
【一五】赤須。坂の名、北地郡に在り。
【一六】義渠。城の名、北地郡に在り。戎王の居りし所なり。
【一七】戎王。秦の昭王の母宣太后戎王と通ず、昭王之を殺し兵を起して其國を伐ち滅せり。

に宿し、雲門を歷て反顧し、通天臺の高く聳ゆるを望み、山丘を上下して郇邠の間に息ひ、公劉の遺德、詩人をして行葦を傷る勿れとまで歎美せしめしを慕ひぬ。ああ彼の公劉の時、民生皆優樂を得たるに、我今日何ぞ此の殃に遭へる。此れ固に時運の變にして、天命の常なきが爲にあらず。乃ち赤須坂に登り、義渠城に入り、戎王の淫亂を忿り、宣后の不貞を惡み、昭王の討伐を嘉し、怒を含んで北行す。

(一八)紛として吾この(一九)舊都を去り、騑遲遲として以て茲を歷。遂に(二〇)節を舒べて以て遠く逝き、(二一)安定を指し以て期となし、長路の(二二)緜緜たるを涉り、遠く紆廻して以て(二三)繆流す。(二四)泥陽を過ぎて太息し、祖廟の修まらざるを悲み、余が馬を(二五)彭陽に釋き、且く(二六)節を弭めて自ら思ふ。日(二七)晻晻として其れ將に暮れんとし、牛羊の下り來るを覩、(二八)怨曠の情を傷しむるを寤り、(二九)詩人の時を歎くを哀み、安定を越えて以て(三〇)容與し、長城の(三一)漫漫たるに遵ひ、(三二)蒙公の民を疲ら

【一八】紛。心緒の亂るる貌。
【一九】舊都。長安を指す。
【二〇】節を舒ぶ。其志節を縱にするなり。
【二一】安定。郡の名、涇渭の間に在り、長安を距ること三百五十里。
【二二】緜緜。長くして絕えざる貌。
【二三】繆流。曲折すること。
【二四】泥陽。縣の名。北地郡に屬す。泥陽には班氏の祖廟あり。
【二五】彭陽。地名、安定郡に屬す。
【二六】節を弭む。駕を駐むといふが如し。
【二七】晻晻。ほの暗き貌。
【二八】怨曠。不平の心を抱くこと、毛詩の序に大夫久シク役シ男女怨曠スとあり。
【二九】詩人。詩經に載する詩の作者をいふ。
【三〇】容與。行く貌。
【三一】漫漫。廣遠の貌。
【三二】蒙公。蒙恬、秦の將となり長城を築く。

し、強秦の爲に怨を築き、(三三)高亥の切憂を捨て、蠻狄の(三四)遼患を事とし、徳を耀かして以て遠きを綏んぜず、顧つて厚固にして(三五)藩を繕め、首身分れて寤らず、猶ほ功を數へて愆を辭するを劇しとす。何ぞ(三六)夫子の妄說する、孰か地脈の(三七)殘を生すと云はんや。

【大意】我既に長安の舊都を去り、騑馬遲遲として進まず。茲に戎王の邑を歷、遂に志を縱にし、安定を期して北行すれば、路長遠にして曲折す。泥陽を過ぎて祖廟の荒廢せるを悲み、馬を彭陽に釋き、駕を駐めて自ら沈思すれば、日將に暮れんとし牛羊の山を下り來るを見、昔時戰亂の爲に大夫遠征し、男女怨曠の情を抱きし事を思ひ、詩人の時を歎き慨世の詩を作りし事を哀み、既に安定を過ぎ、長城の長遠なるに沿ひて進む。因つて蒙恬が民力を疲らし、民怨を買ひて長城を築き、趙高の讒逆、胡亥の簒立等の近憂を忘れ、却つて外夷の遠患を事として之が備をなし、徳を耀かして遠方を安んずる能はず、却つて城壁を厚固にして得たりと

【三三】高亥。高は趙高。亥は胡亥、秦の二世皇帝の名。切憂は近き憂なり。

【三四】遼患。遠き患なり。

【三五】藩。垣なり、萬里長城を指す。

【三六】夫子。蒙恬を指す。史記に趙高、公子胡亥ニ事フ、始皇崩ジ、胡亥立ツテ太子トナラント欲ス、太子已ニ立ツ、使ヲ遣シテ罪ヲ以テ蒙恬ニ死ヲ賜フ、蒙恬喟然トシテ太息シテ曰ク、我天ニ何ノ罪カアル、過ナクシテ死センカト、ヤヤ久シクシテ徐ニ曰ク、恬ガ罪固ヨリ死ニ當ス、臨洮ヨリ起リテ之ヲ遼東ニ屬ス城塹萬餘里、此レ其中地脈ヲ絕ツナキ能ハズ、乃チ恬ガ罪ナリト、藥ヲ呑ンデ自殺スとあり。

【三七】殘。害なり。

なし、身死するまで己の罪を悟らず、尙ほ己の功を數へて其罪を甘受せざるの愚を憐む。ああ彼の蒙恬、長城を築き地脈を絕ちしが爲、其祟を蒙りて死を招けりと妄說するも、人誰か地脈の殘害をなすこと此の如きを信ずる者あらんや。要は民力を疲らし、民怨を買ひ、終に死亡の禍を招けるのみ。

(三八)障隧に登りて遙に望み、聊か須臾して以て(三九)婆娑し、(四〇)獯鬻の(四一)夏を猾るを閔み、尉卬を(四二)朝那に弔ひ、(四三)聖文の克く讓り、師を勞せずして幣加はり、父兄を(四四)南越に惠み、帝號を尉佗に黜け、(四五)几杖を藩國に降し、吳濞の逆邪を折きしに從ふ。惟れ(四六)太宗の(四七)蕩蕩たる、豈(四八)曩秦の圖る所ならんや。(四九)高平に隮りて周く覽、山谷の(五〇)嵯峨たるを望めば、野(五一)蕭條として以て(五二)莽蕩たり。千里に迥にして家なし。風猋發りて以て(五三)飄颻たり、谷水灌いで以て波を揚

【三八】障隧。城塞なり。
【三九】婆娑。徜徉する貌。
【四〇】獯鬻。匈奴なり、史記文帝紀に匈奴邊ニ入リ寇ヲナシ、朝那ノ塞ヲ攻メ、北地ノ都尉卬ヲ殺スとあり。
【四一】夏。中國なり。
【四二】朝那。縣名、安定郡に屬す。
【四三】聖文。漢の文帝。
【四四】南越。史記文帝紀に南越王尉佗自立シテ武帝トナル、上佗ガ兄弟ヲ召シ德ヲ以テ之ニ報ユ、佗遂ニ帝ヲステテ臣ト稱スとあり。
【四五】几杖。几は坐する時臂を凭らする物、杖はツヱなり。史記に文帝ノ時、吳王濞ヤヤ藩臣ノ禮ヲ失ヒ、病ト稱シテ朝セズ、文帝吳王ニ几杖ヲ賜フとあり。
【四六】太宗。文帝なり。
【四七】蕩蕩。德の廣大なる貌。
【四八】曩秦。さきの秦。
【四九】高平。縣名、安定郡に屬す。
【五〇】嵯峨。高峻の貌。
【五一】蕭條。さびしき貌。
【五二】莽蕩。曠遠の貌。
【五三】飄颻。風の馳する貌。

げ、雲霧の(五四)杳杳たるを飛ばし、積雪の(五五)皚皚たるを渉る。雁(五六)邕邕として以て羣翔し、(五七)鶤雞鳴いて以て(五八)嚌嚌たり。(五九)遊子その故郷を悲み、心(六〇)愴悢として以て傷み懷ひ、長劍を撫して慨息し、泣(六一)漣落して衣を霑す。余が涕を攬りて以て(六二)於邑し、生民の故多きを哀む。夫れ何ぞ(六三)陰曀の陽ならざる。嗟久しく其(六四)平度を失へり。諒に時運の爲す所、永く(六五)伊鬱して其れ誰にか愬へん。

【大意】城塞に登りて遠望し、匈奴の中國を亂せるを悲み、都尉印を朝那に弔ひ、文帝の讓德あり、軍旅を用ひずして、幣帛を天下に加へ、南越王尉佗を惠みて、其帝號を棄てしめ、几杖を吳王濞に賜ひて、其逆心を折きしを嘉す。夫れ文帝の德かくの如く廣大なり。豈長城を築きて遠夷を禦ぎし暴秦の能く及ぶ所ならんや。乃ち高平に登り山谷を望めば、山野蕭條として千里の間、復た人家を見ず。ただ風の飄颻として川水の波たつを聞くのみ。更に雲霧を冒し積雪を渉りて行けば、飛雁邕邕として鶤雞嚌嚌たり。余懷鄕の情に堪へず、長劍を把りて太息すれば、涙落ちて袂を沾す。因つて生民の多難を悲むこと愈甚し。ああ天下昏亂して明君出でず、天下久しく和平の度を失ふ。是れ誠に

【五四】杳杳。深冥の貌。
【五五】皚皚。白き貌。
【五六】邕邕。雁の聲なり。
【五七】鶤雞。鳥の名。
【五八】嚌嚌。衆聲なり。
【五九】遊子。班彪自ら謂ふ。
【六〇】愴悢。悲むこと。
【六一】漣落。涙の落つる貌。
【六二】於邑。心の悲むこと。
【六三】陰曀。曇りて風の吹くこと、昏亂に喩ふ。
【六四】平度。和平の法度なり。
【六五】伊鬱。憂怨なり。

時運の然らしむる所、徒に憂怨して告訴する所なき所以なり。

(六六)亂に曰く、(六七)夫子固に窮して、藝文に遊び、樂んで以て憂を忘る、惟れ聖賢なり。達人事に從ふ、儀則あり、行止(六八)屈申、時と(六九)息す。君子信を履めば、居らざるなし。(七〇)蠻貊に之くと雖も、何ぞ憂懼せん。

【大意】昔孔子窮して文藝に遊び、樂んで以て身の憂を忘れぬ。是れ實に聖賢の道なり。達人の事に從ふや皆法度あり、行止屈伸ただ時と浮沈すべきのみ。若し能く信義を履行せば、天下に居るべからざるの地なし。蠻夷の地に往くと雖も、憂懼するに足らざるなり。

【六六】亂。詩賦の末に在りて一篇の大旨を概括する詞。
【六七】夫子。孔子を指す。
【六八】屈申。屈伸に同じ。
【六九】息。消息なり。浮沈。動靜といふが如し。
【七〇】蠻貊。蠻夷なり。

東征の賦　(一)曹大家

惟れ(二)永初の有七、余、子に隨つて東に征けり。時れ(三)孟春の吉日、(四)良辰を撰

【一】曹大家。班彪の女、班固の妹、名は昭、字は惠姬、扶風の曹世叔に嫁す、世叔亡す、和帝召して宮に入れ皇后貴人をして皆之に師事せしむ、號して大家といふ。子穀陳留の長となる、大家隨つて官に至り、東征賦を作り、洛陽を發して陳留に至るまで經歷せる所を述ぶ。
【二】永初。後漢の和帝の年號。有七は七年なり。
【三】孟春。初春なり。
【四】良辰。よき時。

んで將に行かんとす。乃ち趾を擧げて輿に升り、夕に予(五)偃師に宿し、遂に故を去りて新に就き、志(六)愴悢として悲を懷き、(七)明發曙るまで寐ねられず、心遲遲として違ふあり。樽酒を酌んで以て念を弛め、(八)喟として情を抑へて自ら非とす。諒に(九)巢に登りて蠡を琢たず、力を陳べて相追はざるを得んや。且つ衆に從つて列に就き、天命の歸する所に聽す。通衢の大道に遵ひ、(一〇)捷徑を求めて誰にか從はんと欲する。

【大意】 永初七年、吾子穀に隨つて東のかた陳留に往かんとし、初春の吉日良辰を選びて洛陽を發し、夕に偃師縣に宿し、遂に故居を去りて新居に就かんとす。心悲傷して天明に至るまで寐ねられず、心中違別の感に堪へず。因つて酒を酌んで憂を除き、其情を抑へて悲愴を以て自ら非となす。上古の人は巢を構へて住み、蠡蚌の肉を啄ちて食ひしも、今や既に此の如くなる能はず。焉んぞ子をして己の力を伸べ、仕に從つて追隨せしめざるを得んや。且つ既に衆に從つて官列に就き、天命に任す。ただ當に正直の大道を行ふべきのみ。邪路を求めて之を履むべからざるなり。

【五】偃師。縣名、河南郡に屬し、洛陽の東三十里に在り。
【六】愴悢。悲むこと。
【七】明發。天の將に明けんとして光明の開發する時をいふ。
【八】喟。なげく貌。
【九】巢に登り。上古の人未だ家屋あらず、巢に登りて居り、蠡蚌の肉を椓ちて之を食ふ。蠡は蠃と通ず、蚌の類、ニナ。
【一〇】捷徑。邪路なり。

乃ち遂に往いて徂き逝き、聊か目を遊ばしめて魂を遨ばしめ、(一一)七邑を歷て觀覽し、鞏縣の艱多きに遭ひ、(一二)河洛の交流を望み、(一三)成皐の(一四)旋門を看、既に峻嶮を免脱れ、(一五)滎陽を歷て(一六)武卷を過ぎ、(一七)原武に食ひて足を息め、(一八)陽武の(一九)桑閒に宿し、(二〇)封丘を涉りて路を踐み、京師を慕ひて竊に歎く。小人の性土を懷ふは、書傳よりして有り。遂に道に進んで少く前み、(二一)平丘の北邊を得、(二二)匡郭に入りて遠きを追ひ、(二三)夫子の厄勤せると、彼の衰亂の無道なる、乃ち聖人を困畏せしめしとを念ひ、悵として(二四)容與して久しく駐り、日の夕にして將に昏れんとするを忘る。(二五)長垣の境界に到り、農野の居民を察し、(二六)蒲城の丘墟を睹るに、荊棘の(二七)榛榛たるを生ず。惕として覺寤して顧み問ひ、(二八)子

【一一】七邑。鞏縣、成皐、滎陽、武卷、陽武、原武、封丘をいふ。
【一二】河洛。河は黃河、洛は洛水。洛水は東のかた河南鞏縣に至りて河に入る。
【一三】成皐。縣名、河南郡に屬す。
【一四】旋門。坂の名。
【一五】滎陽。縣名、河南郡に屬す。
【一六】武卷。縣名、河南郡に屬す。
【一七】原武。縣名、河南郡に屬す。
【一八】陽武。縣名、河南郡に屬す。
【一九】桑閒。桑林の閒をいふ。
【二〇】封丘。縣名、陳留郡に屬す。
【二一】平丘。縣名、陳留郡に屬す。
【二二】匡郭。匡は邑の名、史記に孔子マサニ陳ニ適カントシテ匡ヲ過グ、匡人之ヲ聞イテ以テ魯ノ陽虎トナス、虎嘗テ匡人ニ暴ス、匡人遂ニ孔子ヲ止ムとあり。
【二三】夫子。孔子を指す。
【二四】容與。徜徉すること。
【二五】長垣。縣名、陳留郡に屬す。
【二六】蒲城。子路の治めし邑の名。
【二七】榛榛。蘩茂せる貌。
【二八】子路。仲由、字は子路。孔子の弟子なり。威神は威靈といふが如し。

路の威神を想ふ。(二九)衞人其勇義を嘉し、今に訖るまで稱すと云ふ。

【大意】乃ち遂に進んで七縣を歷、鞏縣の難路を過ぎ、河洛の交流するを望み、成皐の旋門坂を超え、滎陽、武卷を過ぎて原武に食し、暫く此に休息し、陽武桑林の閒に宿し、始めて封丘の路を渉り、陳留の界に至る。因つて洛陽を思慕して竊に自ら歎息す。小人の故土を慕ふは、古書の傳ふる所なれば（論語に小人は土を懷ふとあり）固より當然なり。更に進んで平丘縣を過ぎ、匡邑に入りて古を憶ひ、彼の衰亂の世、聖人をして困厄勤苦せしめたるを念ひ、悵然として徘徊し、日の將に暮れんとするを忘れ、長垣縣に到りて農民の狀態を視、蒲城の丘墟を見て、荊棘の繁茂せるに驚き、今更に子路の神靈を追想し、衞人今に至るまで、尙ほ子路の義勇を歎稱するを聞けり。

(三〇)蘧氏は城の東南に在り、民亦その丘墳を尙ぶ。唯(三一)令德不朽をなし、身既に歿するも名存す。惟れ經典の美する所、道德と仁賢とを貴ぶ。(三二)吳札君子多しと稱す。其言信にして徵あり。後に衰微して患に遭ひ、遂に(三三)陵遲して興らず。(三四)性命

【二九】衞人。衞は國の名。衞の太子蒯聵亂をなす、子路之を攻め、勝たずして死す。

【三〇】蘧氏。蘧瑗、字は伯玉、衞の賢大夫なり。

【三一】令德。美德なり。

【三二】吳札。吳の公子季札なり。左傳に吳ノ公子札、衞ニ適キ蘧瑗、史狗、史鰌、公子荊、公叔發、公子朝ニ說キテ曰ク、衞ニ君子多シ、未ダ患アラザルナリとあり。

【三三】陵遲。漸次に衰微すること。

【三四】性命。運命といふが如し。

の天に在るを知り、力行に由りて仁に近づき、勉めて高きを仰ぎて〔三五〕景を踏み、忠恕を盡して人に與し、正直を好んで回ならずんば、精誠明神に通ず。庶はくは〔三六〕靈祇の鑒照し、貞良に祐して信を輔け給はんことを。

【大意】　蘧伯玉の墓は城邑の東南に在り。民今尙ほ其德を尙慕す。ただ美德あれば人をして不朽ならしむ。故に身既に死するも、其名いよいよ芳し。これ經典の贊美する所にして、道德と仁賢とを貴ぶ所以なり。昔季札衞に君子多しと稱せるは、眞に溢美の言にあらざるなり。然も其後漸く衰微し、遂に興隆せざりしは誠に遺憾なり。抑人の貴賤貧富は天に在り、力行して仁道に近づき、前賢の高德大業を仰ぎて之に倣ひ、忠恕の道を盡して、常に善人に與し、正直を好んで邪ならずんば、精誠必ず天地神明に感通すべきなり。庶はくは明神照覽し給ひ、貞良信義の人を輔け給はんことを。

〔三七〕亂に曰く、君子の思は必ず文を成す。盍ぞ各志を言ひて古人を慕はざる。〔三八〕先君行止して則ち〔三九〕作あり。其の不敏と雖も敢て法らざらんや。貴賤貧富は求むべからず、身を正しうし道を履み、以て時を俟つ。〔四〇〕脩短の運は愚智同じ、靖恭にして命に委ね、唯吉凶のままにす。敬愼して怠るなく、

【三五】景。大行なり。
【三六】靈祇。神祇なり。
【三七】亂。北征賦六六を見よ。
【三八】先君。曹大家の父班彪を指す。行止の止は助辭なり、行くこと。
【三九】作。班彪北行して北征賦を作れるをいふ。
【四〇】脩短。長短なり。

（四一）嗛約を思ひ、精靜にして欲少く、（四二）公綽を師とせよ。

【大意】君子の思ふや必ず文を成す。我今此賦を作り以て志を言ふは、古人を慕へばなり。先君既に北征賦の作あり。我不敏と雖も之に則らざらんや。貴賤貧富は人に向つて求むべきにあらず。ただ其身を正うして時を待つべきのみ。人命の長短は智愚の別あるなし。ただ恭敬にして運命の吉凶に任すべきのみ。當に敬んで謙約を行ひて怠らず、孟公綽の清淨寡慾を師とすべきなり。

【四一】嗛約。嗛は謙に同じ。
【四二】公綽。孟公綽なり、魯の大夫なり、孔子其の不欲を稱せり。

（一）西征の賦　　潘安仁

（二）歲、玄枵に次り、月（三）蕤賓に旅り、丙丁日を統べ、乙未辰を御る。（四）潘子（五）軾に憑りて西に征き、（六）京より（七）秦に徂く。廼ち喟然として歎じて曰く、古往今來邈たるかな悠なるかな。（八）寥廓忽恍た

【一】西征。晉の惠帝の元康二年、潘岳長安令となりて西行し、經る所の人物山川を論じ西征賦を作る。
【二】歲。歲星なり、星の名。十二年を以て天を一周す、故に此星の指す方角によりて年を紀するなり。玄枵は子の方角なり。歲次玄枵とは子の年といふ意なり。元康二年は壬子に當る。
【三】蕤賓。律の名、禮記に仲夏ノ月、律蕤賓ニ中ルとあり、潘岳の長安に行きしは元康二年五月なり。
【四】潘子。潘岳自ら謂ふ。
【五】軾。車上の横木。
【六】京。東京洛陽なり。
【七】秦。長安なり。
【八】寥廓忽恍。天地未だ分れざる貌。

り。(九)一氣を化して(一〇)三才を甄す。此の三才とは天地人の道なり。ただ生と位と之を大寶といふ。生に(一一)脩短の命あり、位に(一二)通塞の遇あり。鬼神も之を要するなく、聖智も豫めする能はず。(一三)休明の盛世に當り、(一四)菲薄の陋質を託し、(一五)旌弓を(一六)鉉台に納れ、(一七)庶績を帝室に讚し、鄙夫の常累を嗟き、固に既に得て失はんことを患へ、(一八)柳季の直道なく、(一九)士師に佐となりて一たび黜けらる。(二〇)武皇忽として其れ(二一)升遐し、(二二)八音四海に遏え、天子(二三)諒闇に寢ね、百官(二四)冢宰に聽く。彼の負荷の殊重なる、(二五)伊周と雖も其れ猶ほ殆し。(二六)七貴を(二七)漢庭に窺ふに、誰か一姓の在るあらんや。(二八)危明の以て位を安んずるなく、祇に逼に居て以て專を

【九】一氣。一元氣なり。
【一〇】三才。天地人をいふ。
【一一】脩短。長短なり。
【一二】通塞。窮達に同じ。遇は運命なり。
【一三】休明。美明なり。盛世とは晉を指すなり。
【一四】菲薄。菲も薄なり、菲薄陋質とは潘岳自ら謙するなり。
【一五】旌弓。孟子に大夫ヲ招クニ旌ヲ以テス、詩に我ヲ招クニ弓ヲ以テスとあり、太尉府の掾となりしことを言ふ。
【一六】鉉台。三公をいふ、時に賈充太尉となり、三公の一たり、岳を召して府掾となす。
【一七】庶績。衆官の功績。
【一八】柳季。柳下惠をいふ、柳下惠士師となり三たび黜けらる、曰く道を直くして人に事へば、いづくに往くとして三たび黜けられざらんやと。
【一九】士師。獄官なり、潘岳廷尉となる。
【二〇】武皇。晉の武帝。
【二一】升遐。崩御すること。
【二二】八音。金石絲竹匏土革木八種の音聲。天子の喪中には音樂を停止す。
【二三】諒闇。天子の喪に居ること。
【二四】冢宰。宰相なり、諒闇中は百官皆冢宰に聽いて事を行ふなり。
【二五】伊周。伊尹周公なり。
【二六】七貴。呂、霍、上官、丁、趙、傅、王の七姓、並に皇后の族なり。
【二七】漢庭。漢の宮廷。
【二八】危明。高明なり。

示し、亂逆に陷りて以て戮を受く。禍を降すの天よりするにあらず。

【大意】元康二年壬子五月十八日乙未、余車を驅つて洛陽より長安に往く。乃ち喟然として歎じて曰く、悠久なるかな古今、それ太古の世天地未だ分れず。寥廓忽怳たる一氣のみ。其後此氣分れて三才となる。三才とは天地人是れなり。而して人は生と位とを以て大寶となす。然れども生には長短あり、位には窮達ありて、各人一樣ならず。鬼神聖智と雖も之を豫期強要すべからざるなり。余この昭代に遭ひ、菲薄の身を託し、太尉府の掾となり、衆官の功を王室に讚するを掌りしが、小人の情として、常に心に累あり。既に此位を得て又之を失はんことを患へ、柳下惠の直道なきも一たび廷尉となり、忽ち之を免ぜられぬ。時に武帝忽焉として崩じ給ひ、天下音樂を停止し、天子喪に服し、百官ただ命を冢宰楊駿に聽く。かの楊駿人臣の身を以て、帝王の重任を荷ふ。伊尹周公の賢ありと雖も固より難しとする所なり。漢室の七貴を見るに一人として今に存する者なし。駿の終を完うせざること亦明かなり。況んや駿既に高明の道、以て重位を安んずるなく、ただ勢を以て上に逼り、其專權を示すをや。終に亂逆に陷りて誅戮を受けたるは、固より怪むに足らず。皆自ら招ける禍なり。

(二九)孔は時に隨つて以て行藏し、(三〇)蘧は國と與

【二九】孔。孔子なり、論語に子顏回ニ謂ツテ曰ク、之ヲ用フレバ則チ行ヒ、之ヲ舍ツレバ則チ藏ル、唯我ト汝ト是アル

に舒卷す。苟に微に蔽はれて章に繆る。(三一)過辟、の未だ遠からざるを患ふ、山濳の(三二)逸士、卓として長く往きて反らざるを悟り、吾人の(三三)拘攣、飄として萍のごとく浮んで蓬のごとく轉ずるを陋む。寮位(三四)僶として其れ(三五)隆替し、名節(三六)漼として以て(三七)隳落し、素卵の殼を累ぬるよりも危く、玄鷰の幕に巢くふよりも甚し。心(三八)戰懼して以て(三九)兢悚し、深きに臨んで薄きを履むが如し。夕に都外に歸るを獲、宵未だ中ならざるに難作る。木を擇んで以て棲集するにあらざれば、林焚けて鳥存すること尠し。千載の嘉會に遭ひ(四〇)皇德を(四一)乾坤に合せ、秋霜の嚴威を弛め、春澤の渥恩を流し、大義を甄にして以て責を明にし。(四二)初服に私門に反す。(四三)皇鑒余の忠誠を探り、俄に余に命ずるに(四四)末班を以てし、疲人を(四五)西夏に牧せしむ。老幼を携へて闕に入る。(四六)丘は魯を去りて顧み歎き、(四七)季は沛に過りて涕零つ。伊れ故鄉の懷ふべき、(四八)聖達の幽情を疚しむ。矧や匹夫の

カナとあり。

【三〇】蘧。衞の賢大夫蘧伯玉なり、論語に君子ナルカナ蘧伯玉、邦道アレバ則チ仕ヘ、邦道ナケレバ則チ卷イテ之ヲ懷ニスベシとあり。

【三一】過辟。罪過なり。

【三二】逸士。隱士なり。

【三三】拘攣。拘牽といふが如し。

【三四】僶。壞敗の貌。

【三五】隆替。ここは退敗の意。

【三六】漼。壞ろる貌。

【三七】隳落。やぶれ落つること。

【三八】戰懼。をののきおそるること。

【三九】兢悚。戰懼に同じ。

【四〇】皇。晉の惠帝を指す。

【四一】乾坤。天地なり。

【四二】初服。もとの身分。

【四三】皇鑒。惠帝の鑒識。

【四四】末班。低き官位なり、長安令を指す。

【四五】西夏。長安なり。

【四六】丘。孔丘なり、孔子魯を去りて衞に之く。歎じて曰く歸らんか歸らんかと。

【四七】季。漢の高祖劉邦なり。沛は其故鄉なり。

【四八】聖達。孔子と高祖を指す。

土に安んずる、邈として身を（四九）鎬京に投ずるをや。猶ほ犬馬の主を戀ふるがごとく、竊に墓を（五〇）闕庭に託し、（五一）鞏洛を眷みて涕を掩ひ、思墳塋に纏緜たり。

【大意】孔子蘧伯玉は隱微を知り、明顯に通ずるの明あり。故に時に隨つて行藏し、治亂と共に浮沈せり。余不幸にして其明なし。遂に罪過の身に及ばんことを患へ、山中隱遁の士の卓然として長往するを美とし、吾人の名位に拘牽し、浮萍轉蓬の歸託する所なきが如くなるを陋とし、官位の替れて名節の敗れんことを懼れ、深淵に臨み薄氷を履むが如し。（潘岳は楊駿の主簿たり。故に此患あるなり）一夕都外の私宅に歸る。その夜難起り楊駿終に誅せられぬ。ああ余が駿の主簿たるは、猶ほ鳥の木を擇ばずして棲むが如し。其林燒かれて鳥獨り無事なる能はず。今駿誅せらる。余の無事なる能はざるは固より當然なり。幸にして我が皇徳天地に合す。是れ實に千載一遇の好機なり。遂に我が皇の厚恩に浴し、官を免じ家に歸り、大義を明にして自ら責むるを得たり。其後皇帝余の忠誠を知り、我に命ずるに長安令を以てし、疲弊の民を長安に牧養せしむ。余因つて老幼を携へて關中（長安は關中に在り）に入る。昔孔子は魯を去りて歎じ、高祖は沛を過りて涙を落しぬ。況んや余の如き故土を懷ふの匹夫にして、遠く長安に往くをや。乃ち故郷の墳塋を顧望し情緒纏緜

【四九】鎬京。長安なり。
【五〇】闕庭。天子の宮廷。
【五一】鞏洛。二縣の名、岳の家の墳墓ここに在り。

たるものあり。

爾して乃ち(五二)平樂を越え(五三)街郵を過ぎ、馬を(五四)皐門に秣ひ、駕を(五五)西周に稅す。遠いかな(五六)姬德、(五七)高辛より興り、思文なる(五八)后稷、厥初め民を生し、西水の滸に率ひ、化(五九)岐豳に流れ、祚(六〇)昌發に隆にして、舊邦惟れ新なり。(六一)牧野より旋りて茲を歷、いよいよ柔を守りて以て競を執り、夜は(六二)申旦まで寢ねず、(六三)天保の未だ定まらざるを憂ふ。惟れ泰山も其れ猶ほ危しとし、(六四)祀八百にして餘慶あり。(六五)亡王の驕淫を鑒み、(六六)南巢に竄して以て(六七)命を投ず。積薪に坐して以て然るを待ち、方に日を指して盛を比ぶ。(六八)人度量の(六九)乖舛せる、何ぞ相越ゆるの遼迥なる。(七〇)土中を斯邑に考へ、(七一)成都を建てて營築し、既に鼎を(七二)郟鄏に定め、

【五二】平樂。館の名。
【五三】街郵。郵亭の名。
【五四】皐門。周の故門の名。
【五五】西周。周の赧王の時、都を西周に徙す、是れより周東西に分る。稅とは馬を車より取り離すこと。
【五六】姬德。周の德なり、姬は周の姓なり。
【五七】高辛。帝嚳高辛氏、上古の帝王なり。
【五八】后稷。堯舜の時農官たりし人、周の先祖なり。
【五九】岐豳。ともに地名なり。
【六〇】昌發。昌は文王の名、發は武王の名。
【六一】牧野。武王殷の紂王を破りし地。
【六二】申旦。曉に達するまで。
【六三】天保。天子の位。
【六四】祀。年なり。
【六五】亡王。亡國の王、夏の桀王を指す。
【六六】南巢。地名、書經に成湯桀ヲ南巢ニ放ツとあり。竄は放逐すること。
【六七】命を投ず。いのちを捐つること。
【六八】人。武王と桀とを謂ふ。
【六九】乖舛。齊しからざること。
【七〇】土中。地の中央なり。
【七一】成。周の成王。武王の子なり。
【七二】郟鄏。地名なり。

遂に龜を鑽りて（七三）繇を啓く。（七四）平道を失つて來り遷る。緊（七五）二國而も是れ祐く。豈時王の僻なるなからんや。先哲に賴りて以て長く懋なり。（七六）圉北の兩門を望み、虢鄭の惠を納れ、子頽の禍を樂めるを討ちしに感じ、闕西の戾に效へるを尤む。（七七）重（七八）帶を戮して以て襄を定め、大順を弘めて以て世に霸たり。（七九）靈川を壅ぎて以て鬪を止めんとし、（八〇）晉義を演べて以て說を獻ず。咨（八一）景悼より以て（八二）丐に迄るまで、政（八三）凌遲して彌季なり。（八四）庶朝をして逆を構へ、（八五）兩王を歷て位を干めしむ。（八六）十葉を踰えて以て（八七）赧に逮り、邦分崩して（八八）二となり、竟に横に（八九）虎口に噬まれて、文武の神器を輸せり。

【七三】繇。うらなひの辭。
【七四】平。周の平王。犬戎の難に遇ひ都を遷せり。
【七五】二國。晉と鄭となり。
【七六】圉北。門の名。左傳に初メ姚姬、周ノ莊王ニ嬖セラレ子頽ヲ生ム、子頽寵アリ、惠王ノ位ニ卽クニ及ビ、衞燕ノ軍周ヲ伐チ子頽ヲ立ツ、子頽五大夫ヲ享シ樂徧舞ニ及ブ、鄭伯之ヲ聞キ虢叔ニ見エテ曰ク、今王子頽歌舞シテ倦マズ禍ヲ樂ムナリ、盍ゾ王ヲ納レザルト、虢公曰ク、寡人ノ願ナリト、同ジク王城ヲ伐ツ、鄭伯ハ王ト圉門ヨリ入リ、虢叔ハ北門ヨリ入リテ子頽ヲ殺ス、鄭伯王ヲ闕ノ西辟ニ享シ樂備ハル、原伯曰ク、鄭伯尤ニ效フ、其レ亦咎アランとあり。
【七七】重。晉の文公。名は重耳。
【七八】帶。周の襄王の庶弟、王子帶なり、寵に因りて位を簒ふ。晉の文公之を討ち襄王を王城に納る。
【七九】靈。周の靈王。國語に靈王ノ三十二年、穀洛ノ二水鬪フとあり。註に鬪とは二水會して鬪ふが如きなりとあり。
【八〇】晉。靈王の太子晉なり。
【八一】景悼。周の景王悼王。
【八二】丐。周の敬王の名。
【八三】凌遲。陵遲に同じ。漸次に衰ふること。
【八四】庶朝。景王の庶子王子朝なり。
【八五】兩王。悼王敬王なり。
【八六】十葉。十代なり。
【八七】赧。周の赧王。
【八八】二。東周西周の二に分裂せること。
【八九】虎口。秦に喩ふ。

【大意】平樂館、街郵を過ぎて臯門に秣ひ、西周に馬を息はしむ。ああ周德久遠にして遙に高辛より起り、后稷初めて民を生し、西水の滸より德化延いて岐豳に及び、文王昌、武王發に至り、始めて天命を受けて王位に卽く。武王紂を伐ち、牧野より還りて此地に居り、柔道を守りて强威を保ち、天位の未だ定まらざるを憂へて、徹宵寢ねず。既に殷紂に克ち安きこと泰山の如きも、猶ほ以て危しとなし、戒愼して已むことなし。故に子孫相繼ぎ天下を有つこと八百餘年なり。殷湯桀王の無道なるを見、之を伐ちて南巢に放ち、以て其命を絕つ。桀王の危きこと薪中に坐して燃ゆるを待つが如し。然も自ら悟らず。天日を指して其身の隆盛を比較す。ああ武王は戒愼して安きを得、桀王は驕淫にして亡を取る。何ぞ度量の同じからざること此の如きや。成王、武王の後を承け、地の中央を定めて都を奠め、世を歷ること三十、年を歷ること七百の吉卜を得たり。平王に至り東遷の厄ありしも、晉鄭二國よく之を助けぬ。當時の王者邪僻の行なきにあらざるも、祖先の餘澤に賴りて、長く其盛を保つを得たり。余今圍北の二門を望み、虢鄭二國の惠王を納れ、王子頹の禍を樂めるを討てるに感じ、又鄭伯闕西に於て子頹の罪戾に倣ひしを尤めぬ。重耳（晉の文公）の王子帶を戮して、襄王の位を定め、順道を履みて霸業を成し、靈王の川を壅がんとするや、太子晉の之を諫止せるに感ず。其後景王悼王より敬王に至るまで、政いよいよ衰へ、庶子朝大逆を構へ、悼王敬王と

王位を爭ふに至り、十世を歷て赧王に至り、邦分れて東西二周となり、竟に暴秦の滅す所となり、文武以來の神器を秦に授くるに至れるを悲む。

(九〇)孝水に澡ぎて(九一)纓を濯ひ、(九二)善名を嘉して茲に在り。(九三)赤子を(九四)新安に夭し、路側に(九五)坎して之を瘞む。(九六)亭に千秋の號あるも、子に(九七)七旬の期なし。(九八)延吳より勉勵すと雖も實に余が慈を憯慟せしむ。山川を眄みて以て古を懷ひ、悵として轡を(九九)中塗に攬る。虐なるかな(一〇〇)項氏の暴を肆にし、降卒の辜なきを坑にする。秦人を激して以て德に歸せしめ、(一〇一)劉后の(一〇二)來蘇を成す。事(一〇三)洄泬して還らんことを好む。卒に(一〇四)宗滅びて身屠らる。(一〇五)澠

【九〇】孝水。川の名、河南郡に在り。
【九一】纓。冠のひも。
【九二】善名。一本に美名に作る。
【九三】赤子。嬰兒なり。潘岳の子生れて六十日にして夭死す。
【九四】新安。縣名。
【九五】坎。穴を掘ること。
【九六】亭。邑といふが如し。
【九七】七旬　七十日なり。
【九八】延吳　延は延陵の季子、吳は東門吳なり。延陵の季子齊に往く、子死す、嬴博の間に葬り、深さ泉に及ばず。魏に東門吳といふ者あり。子死すれども憂へず、人怪んで之に問へば曰く、吾れ子なき時憂へず、今子死す、乃ち子なき時と同じ、吾何ぞ憂へんやと。
【九九】中塗。中途に同じ。
【一〇〇】項氏。楚の項羽なり。史記に秦將章邯項王ニ降ル、秦ノ吏卒多ク竊ニ言ツテ曰ク、今能ク關ニ入リ秦ヲ破ラバ大ニ善シ、モシ能ハズバ秦必ズ盡ク吾ガ父母妻子ヲ誅セント、諸將其計ヲ聞キ以テ項羽ニ告グ、是ニ於テ楚軍夜擊ツテ秦卒二十餘萬ヲ新安城南ニ坑ニスとあり。
【一〇一】劉后。后は君なり、漢の高祖劉邦をいふ。
【一〇二】來蘇。來りて人民を蘇生せしむること。
【一〇三】洄泬。邪僻なること。
【一〇四】宗。宗族、項羽の宗族を指す。
【一〇五】澠池。縣の名、弘農郡に屬す。秦王趙王と會せし地なり。

池を經て長く想ひ、余が車を停めて進まず。秦は虎狼の强國なり。趙は侵弱の餘燼なり。超として險に入りて（一〇六）高會し、（一〇七）命世の（一〇八）英藺に杖けられ、（一〇九）東瑟の（一一〇）偏鼓を恥ぢ、（一一一）西缶を提げて刃を接し、（一一二）十城の虛壽を辱ぢ、（一一三）咸陽を奄ひて以て（一一四）儁を取る。出でて威を（一一五）河外に申ぶ。何ぞ猛氣の（一一六）咆勃たる。入りて節を（一一七）廉公に屈し、四體の骨なきが若し。智勇の（一一八）淵偉に處し、鄙吝の（一一九）忿悁に方ぶるに、日を改めて歲を易ふと雖と、等級の以て言を寄するなし。（一二〇）光武の（一二一）蒙塵に當り、（一二二）王誅を（一二三）赤

【一〇六】高會。趙王が秦王と會合せしこと。
【一〇七】命世。一世に名あること。
【一〇八】英藺。英傑藺相如。
【一〇九】東瑟。瑟は樂器の名。趙は東に在り故に東瑟といふ。史記に趙王秦王ト澠池ニ會ス。秦王曰ク、寡人趙王音ヲ好ムト聞ク、請フ瑟ヲ奏セヨト、趙王瑟ヲ鼓ス、藺相如ススンデ曰ク、趙王竊ニ聞ク秦王善ク秦聲ヲナスト、請フ缶ヲ奏セヨト、秦王怒ツテ許サズ、相如曰ク請フ頸血ヲ以テ大王ニ濺グヲ得ント、左右相如ヲ刃セント欲ス、相如之ヲ叱ス、皆靡ク、秦王懌バズ、爲ニ一タビ缶ヲ擊ツとあり。
【一一〇】偏鼓。趙王のみ獨り瑟を鼓すること。
【一一一】西缶。缶は瓦器なり。秦は西に在り故に西缶といふ。
【一一二】十城。史記に秦ノ羣臣趙ノ十五城ヲ以テ秦王ノ壽ヲナサンコトヲ請フ、藺相如亦曰ク、請フ秦ノ咸陽ヲ以テ趙王ノ壽ヲナセト、秦王終ニ勝ヲ趙ニ加フル能ハズとあり。壽とは贈物として獻上すること。
【一一三】咸陽。秦の都なり。
【一一四】儁。勝利なり。
【一一五】河外。澠池を指す。
【一一六】咆勃。怒る貌。
【一一七】廉公。趙將廉頗なり、史記に廉頗曰ク、我趙將トナリ攻城野戰ノ功アリ、而ルニ藺相如ハ徒ニ口舌ヲ以テ勞トナシ、而シテ位我ガ上ニ居ル、我相如ヲ見バ必ズ之ヲ辱メント、相如出デテ廉頗ヲ見レバ車ヲ引イテ避ケ匿ルとあり。
【一一八】淵偉。深大なり。
【一一九】忿悁。躁怒なり。
【一二〇】光武。後漢の光武帝。
【一二一】蒙塵。天子の賊を避けて都を逃ろること。
【一二二】王誅。天誅に同じ。
【一二三】赤眉。賊軍の名。

眉に致し、(二二四)異辭を奉じて以て罪を伐ち、初め翅を(二二五)廻谿に垂れしも、眚を尤めて以て德を掩はず、終に翼を奮つて高く揮び、(二二六)佐命の(二二七)元勳を建て、皇綱を振ひて更に維ぐ。

【大意】孝水に至りて口を澡ぎ、冠纓を濯ひ、其美名を嘉して徘徊し、新安に至りて赤子を喪ひ、之を路傍に埋む。此地千秋亭と名づくと雖も、吾が子七十日の齡を保たずして死せるを悲む。悲哀を忍ぶこと延吳より勉むと雖も、余が慈愛の情を慟ましむること甚し。因つて新安の山川を顧望して古事を追懷し、項羽の暴虐を逞うし、無辜の秦卒を坑殺し、遂に秦人を激して高祖の德に歸せしめ、暴虐反りて我身に報い、宗族滅びて身は烏江の露となりしを思ひ、澠池を經て强秦と弱趙と此地に會合し、藺相如の輔により趙王ひとり瑟を鼓するの恥を免れ、秦王をして缶を擊つて之に報いしめ、咸陽を以て趙王の壽をなせと傲語して勝を取り、出でては澠池に猛氣を振ひ、入りては廉頗に屈して國家の急を憂へし事を思ふ。ああ相如の深大なる智勇を以て、之を廉頗の鄙吝なる躁怒に比すれば、共に日を同うして

【二二四】異。光武帝の將馮異なり。

【二二五】廻谿。阪の名。東漢觀記に、馮異征西將軍ニ拜セラレ赤眉ト相距グ、光武諸將士ニ命ジ澠池ニ屯セシム、赤眉ノ乘ズル所トナリ反リ走リテ廻谿阪ニ上ル、異復タ兵ヲ合セ追擊シテ大ニ之ヲ殺底ニ破ル璽書シテ異ヲ勞シテ曰ク、翅ヲ廻谿ニ垂レシモ翼ヲ澠池ニ奮ヘリトとあり。

【二二六】佐命。天命を受けたる天子を輔けて大業を成さしむること。

【二二七】元勳。大功なり。

語るべからず。光武帝の蒙塵せし時、馮異命を承けて赤眉の賊を誅伐し、初め廻谿に敗れしも、光武よく一旦の敗を以て異の徳を棄てざりしかば、異終に澠池に大捷を得、遂に帝を輔けて王業を維持したるを思ふ。

（一二八）崤坂の（一二九）威夷たるに登り、崇嶺の（一三〇）嵯峩たるを仰ぐ。（一三一）皐墳を南陵に託し、（一三二）文風を（一三三）北阿に違く。（一三四）蹇（一三五）孟を哭して以て敗を審にし、（一三六）襄墨縗して戈を援け、嘗て（一三七）隻輪も反らず。（一三八）三帥を絲へて以て河を濟る。（一三九）庸主の（一四〇）矜愎に値はば、殆ど（一四一）叔を朝市に肆さんとす。（一四二）任好綽として其れ餘裕あり、獨り過を引いて以て己に歸す。（一四三）明三たび敗れて黜けられず、卒に晉を陵ぎて以て恥を雪ぐ。豈虚名の立つべけんや。良に霸を致すこと其れ以あり。（一四四）曲嶠を降りて（一四五）虢を憐む。與國を

【一二八】崤坂。崤は山の名。
【一二九】威夷。險なり。
【一三〇】嵯峩。高き貌。
【一三一】皐。夏后皐なり。左傳に秦ノ穆公、孟明、西乞、白乙ヲ召シ師ヲ出シテ鄭ヲ襲ハシム、蹇叔ノ子師ニ與レリ、哭シテ之ヲ送リテ曰ク、晉人師ヲ禦グ必ズ殽ニ於テセン、殽ニ二陵アリ、其南陵ハ夏后皐ノ墓ナリ、其北陵ハ文王ノ風雨ヲ避ケシ所ナリ、必ズ此間ニ死セン、余爾ガ骨ヲ收メント、秦ノ師還ル、晉ノ文公ノ子墨縗經シテ秦ノ師ヲ殽ニ敗リ百里孟明視、西乞術、白乙丙ヲ獲テ歸ル、文嬴（晉の文公の夫人）三師ヲ請フ、公之ヲ許スとあり。
【一三二】文。周の文王。
【一三三】北阿。北陵に同じ。
【一三四】蹇。秦の蹇叔なり。
【一三五】孟。秦の將孟明視なり。
【一三六】襄。晉の襄公、文公の子なり。墨縗は喪服なり。
【一三七】隻輪。車の輪一つ。
【一三八】三帥。秦の三將、孟明視西乞術、白乙丙なり。
【一三九】庸主、凡庸なる君主。
【一四〇】矜愎。傲慢なること。
【一四一】叔。蹇叔なり。
【一四二】任好。秦の穆公の名。
【一四三】明。孟明視なり。
【一四四】曲嶠。地名なり。
【一四五】虢。國の名。

(一四六)亡虞に託し、(一四七)誘賂を貪りて以て(一四八)鄰を賣り、(一四九)臘に及ばずして拘に就き、(一五〇)垂棘故府に反り、(一五一)屈產晉輿に服す。德建たずして民援なく、(一五二)仲雍の祀(一五三)忽諸たり。我安陽に徂き、言に(一五四)陜郛に陟り、(一五五)漫瀆の口に行き、(一五六)曹陽の墟に憩ふ。美なるかな邈たるかな、茲土の舊きや。固に乃ち(一五七)周邵の分ちし所、(一五八)二南の交る所、(一五九)麟趾は關雎より信に、(一六〇)騶虞は鵲巢に應ず。漢氏の剝亂を愍む。朝に流亡して以て離析し、(一六一)卓天に滔りて以て(一六二)大滌し、宮廟を劫して迹を遷し、萬乘の盛尊をして遙思を征役に降さしむ。顧つて旋を儷汎に請ひ、既に許を獲て中ごろ惕む。皇駕を追ひて驟戰ひ、(一六三)王輅を望んで鏑を縱つ。(一六四)百

【一四六】亡虞。亡びたる虞國。
【一四七】誘賂。誘惑賄賂なり。左傳に晉ノ荀息、屈產ノ乘ト垂棘ノ璧トヲ以テ道ヲ虞ニ假リ以テ虢ヲ伐タントヲ請フ。虞公之ヲ許ス、宮之奇曰ク、虞臘セジ（年末の臘祭を行ふに及ばずして滅亡すべしとの意）ト、晉虢ヲ伐ツ、虢公醜京師ニ奔ル、晉師還リテ虞ニ館シ、遂ニ虞ヲ襲ヒテ之ヲ滅スとあり。
【一四八】鄰。鄰國、虢國を指す。
【一四九】臘。年末に行ふ祭の名。
【一五〇】垂棘。璧の名。故府はもとの庫なり。
【一五一】屈產。屈地に產する馬。
【一五二】仲雍。虞の祖先。
【一五三】忽諸。忽にして亡ぶること。
【一五四】陜郛。陜は縣名、弘農郡に屬す。郛は郭なり。
【一五五】漫瀆。澗水の名。
【一五六】曹陽。亭の名。
【一五七】周邵。邵は召なり、周公旦、召公奭なり、公羊傳に陜ヨリ以東ハ周公之ヲ主リ陜ヨリ以西ハ召公之ヲ主ルとあり。
【一五八】二南。詩經の周南、召南なり、周南は周公の領内より得たる詩、召南は召公の領内より得たる詩なり。
【一五九】麟趾、關雎。周南の詩篇の名。
【一六〇】騶虞、鵲巢。召南の詩篇の名。
【一六一】卓。董卓。後漢の靈帝の時の將軍なり。
【一六二】大滌。滌は除なり。
【一六三】王輅。天子の車。
【一六四】百寮。百官なり。

寮の勤王を痛む。咸く力を畢して以て死を致し、身首を鋒刃に分ち、胷腋を洞くに流矢を以てし、裳を褰げて以て岸に投ずるあり、或は袂を攘げて以て水に赴くあり。（一六五）桴檝の（一六六）褊小なるを傷み、舟中に撮つて指を掬す。

【大意】崤坂に登りて崇嶺を仰ぎ、夏后皐の墳の在る所、文王の風雨を避けし所を望み、昔蹇叔の秦將孟明視の敗戰を豫知し、晉の襄公喪服を著て秦將を伐ち、秦軍敗績して隻輪も歸る者なく、晉軍秦の三將を執へ、河を濟りて國に歸りし事を思ふ。かの蹇叔の敗戰を豫言せし時、若し矜愎なる庸主ならば、必ず蹇叔を殺して之を市朝に肆ししならん。然も秦の穆公は綽然として寛裕の德あり。故に敗戰の過を己の不明に歸し、三たび戰つて敗れたる孟明視を黜けず。卒に晉を破りて恥を雪ぎぬ。穆公の終に霸業を成せる固より宜なり。進んで曲崤を降り、虢國虞國と黨與たりしも、虞は晉の賄賂（垂棘の璧と屈産の馬）を貪りて虢國の交誼に背き、一年ならずして自國も亦晉に亡され、垂棘の璧は晉の府庫に歸り、屈産の馬は晉車に駕するに至り、仲雍以來の國家忽ちにして滅亡せしを憐む。更に進んで安陽に往き陝縣を經、曹陽の城墟に憩ふ。ああ陝の地たる周召以來の舊土にして、永く詩上に其名を留む。降つて漢の騷亂に及び、董卓宦官を除かんとして大兵を擧げ、洛陽の宮室を燒きて都

【一六五】桴檝。桴は舟、檝は棹なり。

【一六六】褊小。狹小なり。

を長安に遷し、天子を奉じて亂賊を撃滅せんことを謀る。呂布卓を誅す。卓の將李傕郭汜朝政を擅にし、天子を營内に質とす。天子歸還を請ひて洛陽に還る。傕汜後之を悔い、相與に追ひて天子に及び、曹陽に於て大に戰ふ。其後百官士卒大に王事に勤め、力屈して敗れ岸に投じ水に赴いて死し、獻帝纔に船に登る。諸の渡るを得ざる者爭つて船に攀づ。船上の人刃を以て其指を斬る。船中の指掬ひて取るべし。今其事を想ひて憐愍の情に堪へず。

(一六七)曲沃に升りて惆悵し、(一六八)亂を兆して兄の替れしを惜む。枝末大にして本披く。(一六九)都國に偶ひして禍結ぶ。(一七〇)臧札その高厲を飄し、(一七一)曹吳を委てて節を成す。何ぞ(一七二)莊武の恥なき。徒に利開いて義閉づ。(一七三)函谷の(一七四)重阻を躡み、天險の(一七五)衿帶を看、諸侯の勇怯を跡ね、(一七六)嬴氏の利害を算ふ。或は關を開いて以て敵を延く。競つて遁逃して以て奔竄するあり。門を禁ぢて啓く

【一六七】曲沃。地名、今の山西聞喜縣、晉の昭侯其叔父成師を此地に封ず、後遂に代りて晉國を有つに至りぬ。

【一六八】亂を兆す。左傳に晉ノ穆侯ノ夫人姜氏、條ノ役ヲ以テ太子ヲ生ム、之ヲ命ジテ仇トイフ、其弟千畝ノ戰ヲ以テ生ル、之ヲ命ジテ成師トイフ、師服曰ク、今君太子ヲ命ジテ仇トイヒ、弟ヲ成師トイフ、始メテ亂ヲ兆セリ、兄ソレ替レンカトあり。

【一六九】都。封邑をいふ。

【一七〇】臧札。臧は曹君の子子臧なり。國を讓らることを辭せり。札は吳の公子季札なり太子となるを辭せり。

【一七一】曹吳。二國の名。

【一七二】莊武。莊公武公、曲沃の君にして成師の後なり、其の宗國たる晉を伐ちて之を滅せり。

【一七三】函谷。關所の名。

【一七四】重阻。險阻の地。

【一七五】衿帶。衿はエリ、帶はオビ。

【一七六】嬴氏。秦なり。

なく、兵を山外に窺はざるあり。連雞互にして栖まず、小國合ひて大を成す。豈地勢の安危ならんや。信に人事の(一七七)否泰なり。漢(一七八)六葉にして畿を拓き、(一七九)弘農を縣として關を遠くし、(一八〇)紫極の(一八一)閑敞を厭ひ、微行し以て(一八二)遊盤するを甘んず。長く賓に(一八三)柏谷に傲る。妻貌を覩て餐を獻ず。匹婦に嚋ゆると其れ已に泰なり。胡ぞ厥夫の官を謬れる。昔明王の巡幸するや、固に道を淸ひて後に往く。(一八四)銜橛の或は變ぜんことを懼れ、(一八五)徒御を峻にするに誅賞を以てす。彼の白龍の(一八六)魚服せる、(一八七)豫且の密網に挂れり。帝の重きを天下に輕くす。爰ぞ斯漸の長ずべき。(一八八)戾園を(一八九)湖邑に弔

【一七七】否泰。安危といふが如し。
【一七八】六葉。六世なり、高祖より六代目、武帝の時。
【一七九】弘農。漢書に武帝ノ元鼎三年、函谷關ヲ新安ニ徙シ故關ヲ以テ弘農縣トナスとあり。
【一八〇】紫極。天子の宮殿をいふ。
【一八一】閑敞。宏大なること。
【一八二】遊盤。遊びあるくこと
【一八三】柏谷。地名、武帝故事に帝微行ヲナシ、嘗テ柏谷ニ至ル、逆旅ニ宿ス、逆旅翁惡少年十餘人皆弓矢刀劔ヲ持チ、主嫗ヲシテ出デテ客ニ過ハシム、婦其翁ニ謂ツテ曰ク、吾コノ丈夫ヲ觀ルニ常人ニアラズ、圖ルベカラザルナリト、天寒シ、嫗酒ヲ酌ミ多ク其夫ニ與フ、夫醉フ、嫗自ラ其夫ヲ縛ス、諸少年皆走ル、嫗出デテ客ニ謝シ、雞ヲ殺シテ食ヲ作ル、平旦ニ帝去ツテ宮ニ還リ、乃チ逆旅ノ夫妻ヲ召シテ之ヲ見、嫗ニ金千斤ヲ賜ヒ其夫ヲ擢デテ羽林郎トナスとあり。
【一八四】銜橛。馬のクツワ。
【一八五】徒御。隨從の士卒。
【一八六】魚服。魚のよそほひをすること。
【一八七】豫且。人名なり。說苑ニ吳王民ニ從ツテ飲マント欲ス、伍子胥曰ク、昔白龍化シテ魚トナル、豫且射テ目ニ中ツ、白龍化セズンバ豫且射ズ、今萬乘ノ位ヲ棄テ臣ニ從ハバ、豫且ノ患アランコトヲ恐ルトあり。
【一八八】戾園。武帝の太子の陵。
【一八九】湖邑。邑の名、戾太子の墓のある所。

ふ。諒に世の（一九〇）巫蠱に遭ひ、隱伏を明にし難きに探り、讒賊の（一九一）趙虜に委ね、顯戮を（一九二）儲貳に加へ、肌膚を絕つて顧みず。（一九三）歸來の悲臺を作り、徒に望思するも其れ何の補あらん。（一九四）紛として吾既に此の（一九五）全節を遄き、又之に繼いで以て（一九六）盤桓し、休牛の故林を問ひ、感じて名を（一九七）桃園に徵す。

【大意】曲沃に升りて、晉の穆公其子に名づくるに成師を以てし、其後を封じて遂に亂兆を開き、宗國の衰替を招きし事を悲む。かの子臧、季札は高義を守りて曹吳を棄てたるに、莊武の二公何ぞ兄弟の國を滅すの無恥をなせる。此れ所謂利門開いて義路閉づるものなり。進んで函谷關を越え、山河衿帶の天險を見、六國諸侯の强弱と秦國攻守の利害とを思ふ。秦或は關を開いて諸侯を待ち、諸侯奔竄して敢て進まざりし事あり。此れ秦の利にして諸侯の怯なるなり。或は關を閉ぢて開かず、敢て山東諸侯を窺はざりし事あり。此れ秦の害にして諸侯、勇なるなり。夫れ諸侯の心力齊しからざること連雞の如し。

【一九〇】巫蠱。女巫術を以てマジナヒをなし以て人を詛ふなり。漢の武帝病む、時に江充戾太子と隙あり、太子巫蠱を以て帝を詛ふなりと讒す。太子湖邑に至り、自ら縊れて死す。

【一九一】趙虜。江充をいふ。

【一九二】儲貳。太子なり。

【一九三】歸來。武帝太子の罪なきを知り、乃ち思子宮を作り、歸來望思の臺を湖に作る。

【一九四】紛。心緒の亂るゝ貌。

【一九五】全節。地名、戾太子死せし處。

【一九六】盤桓。徘徊すること。

【一九七】桃園。地名、古の桃林なり、周の武王殷を伐ちて歸り馬を華山の南に歸し、牛を桃林の野に放ち、復た用ひざるを示す。

俱に止棲する能はず。心力或は齊しければ、小弱の國と雖も亦よく相合して强大を成すに足る。要するに國家の興廢は地勢の如何に由るにあらず、皆人事の然らしむる所なり。漢の武帝の時、王畿を開拓し函谷關を徙して弘農縣となす。武帝屢微行をなし、嘗て柏谷に至る。逆旅の主人之に傲りしも、其妻武帝の容貌を見、常人にあらざるを知り、厚く之を饗す。武帝因つて千金を其妻に賜ひ、其夫に羽林郎の官を授けたりといふ。何ぞ其の謬れるの甚しきや。昔明王の巡幸するや、先づ道を淸はしめて、然る後行き、急變の馬首の間に起らんことを恐れ、法を峻にし惠を厚うして、以て徒御の人を賞罰せり。白龍も魚化すればこそ豫且の網に挂るなれ、天子の重きを以て屢微行するが如きは、下民上を凌ぐの漸にして、天子たる者は決して此風を長せしむべきにあらず。更に湖邑に戾太子を弔ふ。武帝巫蠱の事を信じ、讒賊江充の言に惑ひ、誅戮を其子に加へて顧慮する所なし。後過を悔い歸來望思の臺を作り、太子の死を悲みしも、復た及ばざるなり。既に太子全節の地を過ぎて徘徊顧望し、武王の牛を放ちたりと傳ふる桃林を尋ね、桃園の名によりて其地を徵するを得たり。

(一九八)閿鄉を發して(一九九)警策し、(二〇〇)黃巷に嚮ひて以て(二〇一)潼を濟り、(二〇二)華岳の陰崖を眺め、(二〇三)高掌の

【一九八】閿鄉。地名なり。
【一九九】警策。馬に鞭ちて勵すこと。
【二〇〇】黃巷。坂の名。
【二〇一】潼。川の名。
【二〇二】華岳。山の名。
【二〇三】高掌。華岳の北面に巨靈神の掌の跡あり。

遺蹤を覿、江使の璧を反し、(二〇四)亡期を (二〇五)祖龍に告げしを憶ふ。怪を語りて以て異を徴せずとは、我之を (二〇六)孔公に聞けり。(二〇七)韓馬の (二〇八)大憝、(二〇九)關谷を阻み以て亂を稱げしを慍り、(二一〇)魏武赫として霆のごとく震ひ、義辭を奉じて以て叛を伐つ。彼桀なりと雖も其れ焉んぞ用ひん。故に勝を (二一一)廟算に制す。(二一二)砰として桴を揚げ以て塵を振し、(二一三)繣として瓦のごとく解け氷のごとく泮く。超遂に遁れて狄に奔り、甲卒化して (二一四)京觀となる。狹路の迫隘にして軌崎嶇として以て低仰するに倦みしも、秦郊を蹈んで始めて闢け、(二一五)爽塏を豁にして以て宏壯なり。黄壤千里にして沃野望に彌ち、華實紛敷して桑麻 (二一六)條暢す。邪に (二一七)褒斜に界し、右のかた (二一八)汧隴に濱ひ、(二一九)寶雞前に鳴き (二二〇)甘泉後に涌き、(二二一)終

【二〇四】亡期。死期なり。

【二〇五】祖龍。秦の始皇帝をいふ。史記に秦ノ始皇帝ノ三十六年、鄭ノ使者華陰ノ野ニ至ル、人アリ使者ニ璧ヲ與ヘテ曰ク、我ガ爲ニ鎬池君ニ遺レト、因ッテ言ッテ曰ク、明年祖龍死セント、璧ヲ置イテ去リ。忽チ見エズ、始皇璧ヲ視シムレバ、乃チ二十八年ニ江ヲ渡リシ時沈メシ所ノ璧ナリ、とあり。

【二〇六】孔公。孔子をいふ。

【二〇七】韓馬。魏志に建安十六年關中ノ諸將馬超韓遂等反ス、超等潼關ニ屯スとあり。

【二〇八】大憝。大惡人をいふ。

【二〇九】關谷。潼關と函谷關とをいふ。

【二一〇】魏武。魏の武帝曹操なり。

【二一一】廟算。戰に先だちて宗廟に方略を考ふること。

【二一二】砰。鼓の聲。

【二一三】繣。破るる聲。

【二一四】京觀。尸を積み土を其上に築く。戰爭の記念塚なり。

【二一五】爽塏。高燥なること。

【二一六】條暢。長く伸ぶること。

【二一七】褒斜。谷の名。

【二一八】汧隴。ともに山の名。

【二一九】寶雞。陳倉に寶雞祠あり。

【二二〇】甘泉。山の名。

【二二一】終南。山の名。

南に面して(三二二)雲陽に背き、平原に跨りて(三二三)嶠冢に連り、(三二四)九嵕巀嶭として(三二五)太一龍蓯たり。清風の(三二六)飂戾たるを吐き、歸雲の(三二七)鬱蓊たるを納れ、南に(三二八)玄灞、素滻、(三二九)湯井、溫谷あり。北に(三三〇)清渭、濁涇、(三三一)蘭池、周曲あり。浸は(三三二)鄭白の渠を決し、漕は淮海の粟を引き、林は(三三三)有鄠の竹を茂らし、山は(三三四)藍田の玉を挺んで、(三三五)班は陸海の珍藏を述べ、(三三六)張は(三三七)神皐隩區を敍ぶ。此れ(三三八)西賓の(三三九)東主に言へる所以、(三四〇)安處の(三四一)憑虛に聽ける所以なり。然りと謂はざるべけんや。

【大意】閿鄉を發して警策を加へ、黃巷坂に向つて潼水を渡り、華山の陰を望みて神掌の跡を見、江水の使者秦皇に璧を反し、其死期を告げし事を憶ひぬ。然れども怪神を語らず

【三二二】雲陽。縣の名。
【三二三】冢。山の名。
【三二四】九嵕。山の名。巀嶭は高き貌。
【三二五】太一。山の名。龍蓯は高き貌。
【三二六】飂戾。風の聲。
【三二七】鬱蓊。雲の貌。
【三二八】玄灞。灞は川の名、玄は水色黒きなり。滻も川の名、水色白し、故に素といふ。
【三二九】湯井。溫湯なり。溫谷は溫泉なり。
【三三〇】清渭。渭は川の名、其水清し。涇も川の名、其水濁れり。
【三三一】蘭池。宮觀の名。周曲は陂の名。
【三三二】鄭白。鄭國渠、白渠の二渠なり。
【三三三】有鄠。鄠縣をいふ。
【三三四】藍田。玉の名產地。
【三三五】班。西都賦の作者班固を指す。
【三三六】張。西京賦の作者張衡を指す。
【三三七】神皐隩區。皐は澤なり、神靈の地をいふ。
【三三八】西賓。西都より來れる賓なり、西都賦に見ゆ。
【三三九】東主。東都主人なり、西都賦に見ゆ。
【三四〇】安處。安處先生なり。西京賦に見ゆ。
【三四一】憑虛。憑虛公子なり、西京賦に見ゆ。

とは、孔子の教なれば、此事固より信を置くに足らず。潼關を越えて韓遂、馬超の叛旗を飜し、魏武曹操君命を奉じ鼓を鳴して之を攻むるや、叛軍遂に瓦解して涼州に遁れ、其身化して終に京觀となりし事を憶ふ。此間狹路崎嶇として車の高低に難みしも、秦郊に至りて、始めて開豁なるを覺え、沃野千里、桑麻の繁生するを見たり。因つて四方を眺望するに、西に褒斜汧隴の險あり。寶雞甘泉終南太一の諸山前後に聳え、風を吐き雲を呑み、南に灞滻、北に渭涇の川あり。巨浸には鄭白の二渠あり。江淮地方の粟を運ぶべし。鄠縣の竹、藍田の玉、亦世に名あり。嘗て班固は西都賦を作り、張衡は西京賦を作りて、詳に此を記述せり。皆其の言ふ所の如し。

勁松は歳の寒きに彰はれ、貞臣は國の危きに見はる。(二四二)鄭都に入りて掌を抵ち、(二四三)桓友の忠規を義とす。(二四四)股肱を(二四五)昏主に竭し、(二四六)塗炭に赴いて移らず。世ゝ職を(二四七)司徒に善くし、(二四八)緇衣弊れて改

【二四二】鄭都。漢の鄭縣なり、

【二四三】桓友。鄭の桓公、名は友、犬戎周の幽王を驪山の下に殺すや、桓公また周の司徒として其難に死せり。忠規とは忠義の行をいふ。

【二四四】股肱。臣たるの職責。

【二四五】昏主。愚なる君主、周の幽王を指す。

【二四六】塗炭。水火の難儀。

【二四七】司徒。官名。鄭の桓公、其子武公並に周の司徒となり其職を善くす。

【二四八】緇衣。詩經鄭風緇衣篇に緇衣ノ宜シキ、弊レバ予又改メ爲ラントあり。緇衣とは黑衣にして司徒の服なり、詩意は父死せば其子代りて司徒となれかしとの意。

め爲る。(二四九)犬戎の侵地を履み、(二五〇)幽后の詭惑を疾む。(二五一)僞烽を擧げて以て衆を沮み、(二五二)嬖褒に淫して以て(二五三)慝を縱にし、軍(二五四)戲水の上に敗れ、身(二五五)驪山の北に死し、赫赫たる宗周滅びて亡國となる。又此に繼ぐ者あり。異なるかな秦の始皇の君たるや。天下を傾けて以て厚く葬り、開闢よりして未だ聞かず、(二五六)匠人勞すれども圖らず、生きながら埋めて以て勤に報いしむ。外は(二五七)西楚の禍に離り、内は(二五八)牧豎の焚を受く。語に曰く無禮を行へば必ず自ら此に及ぶと。其效にあらずや。乾坤は親あるを以て久しかるべく、君子は厚德を以て物を載す。夫の(二五九)漢高の興るを觀るに、徒に聰明神武豁達大度なるのみにあらず。乃ち實に終を愼み舊を追ひ、篤誠(二六〇)款愛して、澤漸はざるなく、恩逮ばざるなし。(二六一)率土すら且つ猶ほ遺れず。而るを況んや隣

【二四九】犬戎。夷の名。
【二五〇】幽后。幽王なり。后は君なり。
【二五一】僞烽。いつはりの烽火。幽王褒姒を寵愛す、褒姒笑ふを好まず、或時烽火を擧げたるに褒姒乃ち大に笑ふ、幽王之を悅び爲に屢烽火を擧ぐ、犬戎幽王を攻む、幽王烽火を擧げて兵を徵す、諸侯の兵僞ならんと思ひて至らず、幽王因つて犬戎の殺す所となる。
【二五二】嬖褒。寵愛する褒姒。
【二五三】慝。邪惡なり。
【二五四】戲水。川の名。
【二五五】驪山。山の名。
【二五六】匠人。工人なり、漢書に秦ノ始皇驪山ノ阿ニ葬ル、石槨ヲ游館トナシ、生キナガラ工匠ヲ埋ム、後項籍其宮室ヲ燔キ、其後牧兒羊ヲ亡ヒテ其鑿中ニ入ル、牧兒火ヲ持チ照シテ羊ヲ求ム、火ヲ失シテ其藏槨ヲ燒ク云云とあり。
【二五七】西楚。項羽をいふ、項羽西楚霸王と稱したればなり。
【二五八】牧豎。牧童なり。
【二五九】漢高。漢の高祖。
【二六〇】款愛。款は誠なり。
【二六一】率土。天下といふが如し。

里に於てをや。而るを況んや卿士に於てをや。斯時に于て乃ち(二六二)舊豐を摹寫し、新邑を制造し、(二六三)故社を易へ置き、(二六四)枌楡を遷し立て、街衢一の如く、庭宇相襲ひ、雞犬を渾めて以て亂し放ち、各家を知りて競ひ入る。(二六五)籍怒を(二六六)鴻門に含み、(二六七)沛跼蹐して來王す。(二六八)范害を謀れども許さず。陰に劍を授けて以て(二六九)莊に約す。白刃を撚いて以て(二七〇)萬舞す。冬葉の霜を待つよりも危し。虎尾を履んで噬まれず。寔に(二七一)伯を(二七二)子房に要す。(二七三)樊噲を抗ぐるに(二七四)卮酒を以てし、(二七五)彘肩を咀ひ以て(二七六)激揚す。忽ち虵變じて龍のごとく攄び、霸上に雄として高く驤る。(二七七)曾怒を遷して横に撞き、(二七八)玉斗を碎けども其れ何ぞ傷らん。(二七九)嬰組を(二八〇)軹塗に胥け、(二八一)素車に投じて(二八二)肉

【二六二】舊豐。豐は邑の名、漢の高祖は沛の豐邑の人なり、高祖故郷を慕ひ豐邑の人を徙して別に新豐邑を立てたり。
【二六三】故社。豐邑に在りし社。
【二六四】枌楡。高祖の里社なり。
【二六五】籍。項羽の名。
【二六六】鴻門。地名。
【二六七】沛。沛公、卽ち高祖なり。跼蹐は心に畏怖して天地閒に身の置き處なきが如きをいふ。
【二六八】范。范增なり。項羽の臣なり。
【二六九】莊。項莊なり。
【二七〇】萬舞。大舞なり。
【二七一】伯。項伯なり、項羽の季父。
【二七二】子房。張良、字は子房。高祖の臣なり。
【二七三】樊。樊噲なり、高祖の臣。
【二七四】卮酒。酒器に盛りし酒。
【二七五】彘肩。豚の肩肉。
【二七六】激揚。意氣軒昂すること。
【二七七】曾。增なり、范增をいふ。
【二七八】玉斗。玉にて作りし杓。
【二七九】嬰。秦王子嬰なり。
【二八〇】軹塗。軹は亭の名、長安城の東十三里にあり、塗は途に同じ。
【二八一】素車。白色の馬車。
【二八二】肉袒。はだぬぎになること、人の臣僕たるを示すなり。

祖す。(二八三)疏(二八四)東都に飮餞し。極位の盛滿を畏る。(二八五)金墉鬱として其れ(二八六)萬雉なり、(二八七)峻嶒峭として以て繩のごとく直し。(二八八)飮馬の陽橋に戻り、(二八九)宣平の淸闕を踐む。

【大意】夫れ歲寒くして松柏の凋に後るるを知り、國危くして忠臣乃ち現る。余今鄭都に入りて、桓公友の臣節を幽王に竭し、父子相繼いで其職を守り、一身を捧げて君の難に殉したるを嘉す。進んで犬戎の侵略せる地域に至り、幽王暗愚にして屢僞烽を擧げて、諸侯の信を失ひ、褒姒を寵して邪惡を縱にし、犬戎の攻擊に遇ひて、驪山の下に死し、宗周ここに滅びしを疾む。かの秦の始皇帝の如き、亦幽王の惡虐に倣へる者なり。其の驪山に葬るや、開闢以來未だ聞かざる所の厚葬にして、工匠の勤勞に報ゆるに褒賞を以てせず、却つて之に報ゆるに生埋の苦を以てす。然も外は項羽の破る所となり、內は牧豎の燒く所となれり。古語に無禮を行へば、必ず自ら此に及ぶといふ。始皇の此禍に遇へるも、亦當然の應報のみ。抑天地の心は有德に親み其をして長久ならしめ、君子は純厚の德を以て萬物を載育す。かの漢の高祖の興れるは、ただ聰明大

【二八三】疏。漢書に疏廣太子太傅トナリ、兄ノ子受少傅トナル、廣受ニ謂ツテ曰ク、吾聞ク足ルヲ知レバ辱メラレズト、今官成リ名立チテ去ラズンバ懼ラクハ後悔アラント、遂ニ上疏シテ骸骨ヲ乞フ、上皆之ヲ許ス、故人邑子爲ニ祖道ヲ設ケ東都門外ニ供帳スとあり。

【二八四】東都。都一本に門に作る。長安の東門なり。

【二八五】金墉。長安城なり。

【二八六】萬雉。一丈四方を堵といひ、三堵を雉といふ。

【二八七】峻嶒峭。高峻の貌。

【二八八】飮馬。橋の名。陽橋は橋陽に同じ。橋の南なり。

【二八九】宣平。長安城門の名。淸闕は淸らかなるシキヰ。

度なりしのみにあらず。よく終を愼み舊を追ひ、誠篤款愛して洽く恩澤を及ぼしたればなり。夫れ恩澤を天下に及ぼせり。況んや其隣里鄕士に於てをや。故に鄕里を慕ひて別に新豐邑を立て、枌楡社を遷し、庭宇街衢皆鄕里の制を襲ひ、雞犬を通途に放ち、屢其民家に出入せり。項羽の關中に入らんとするや、沛公（後の高祖）已に關中を平定せりと聞き、大に怒り、將に之を破らんとす。沛公因つて蹻蹐して鴻門に來り、罪を項羽に謝す。范增羽に勸めて沛公を殺さんとす。羽許さず。增因つて劍を項莊に授け、劍舞に託して沛公を剌さしめんとす。沛公の危きこと冬葉の霜を待つが如く、猛虎の尾を履むが如し。ただ項伯と張良とに依りて、事なきを得たり。時に樊噲沛公の急を聞いて憤を發し、巵酒を手にし彘肩を食ひて、氣を項羽の前に吐く。此に因つて沛公忽ち蛇の變じて龍となりしが如く、霸上に歸りて威氣頓に驤りぬ。范增終に沛公を逸せるを惜み、怒りて沛公の贈りし玉斗を撞き破りしも、今更及ぶなきなり。沛公の關に入るや、秦王子嬰素車白馬にして組を頸に加へ軹道の傍に降る。余今其遺跡を過ぎ、進んで長安の東門に至る。昔疎廣疎受の二人、太子の傅たりしが、官位の盛滿を畏れ、官を辭して鄕に歸らんとす。時に友人送別の宴を都門外に張れりと傳ふるは、卽ち此處なり。近く長安城の高峻なるを望み、飲馬橋を渡り宣平門を過ぎ、ここに始めて長安に達しぬ。

都中(二九〇)雜遝、戶千にして人億、華夷の士女、(二九一)駢田逼側す。(二九二)名京の(二九三)初儀を展べ、新館に即いて職に莅み、(二九四)疲鈍を勵して以て朝に臨み、勗めて自ら彊めて息まず。是に於て(二九五)孟秋爰に謝る。聽覽の餘日、農功を巡省し、廬室を周行す。街里蕭條として邑居散逸し、營宇(二九六)寺署、肆廛管庫、城隅に(二九七)蕞芮たる者、百一に處らず。所謂(二九八)尙冠、脩成、黃棘、宣明、建陽、昌陰、北煥、南平、皆(二九九)夷漫滌蕩し、其の處を亡ひて其名のみあり。爾して乃ち(三〇〇)長樂に陪り、未央に登り、太液に汎び、建章に淩り、駁娑を縈りて駘盪に款り、枍詣を轥ぎて承光を轢ぎ、桂宮に徘徊して柏梁に惆悵す。(三〇一)鷩雉(三〇二)臺陂に雊き、狐兎殿傍に窟す。何ぞ黍苗の(三〇三)離離として、余が思の(三〇四)芒芒たる。(三〇五)洪鐘廟に頓ち、(三〇六)乘風廢れて縣からず、(三〇七)禁省鞠まりて茂草となり、(三〇八)金

【二九〇】雜遝。雜沓に同じ。
【二九一】駢田。ならびて耕すこと。逼側は混雜すること。
【二九二】名京。長安は舊都なり。故に名京といふ。
【二九三】初儀。初對面の禮儀。
【二九四】疲鈍。潘岳自ら謙して言ふ。
【二九五】孟秋。初秋なり。
【二九六】寺署。役所なり。肆廛は商店。
【二九七】蕞芮。陋小の貌。
【二九八】尙冠。以下皆里の名。
【二九九】夷漫滌蕩。平滅の貌。
【三〇〇】長樂。未央、建章、桂宮は宮の名。太液は池の名。駁娑、駘盪、枍詣、承光、柏梁は臺の名。
【三〇一】鷩雉。鳥の名。
【三〇二】臺陂。臺殿陂池なり。
【三〇三】離離。穗の垂下せる貌。
【三〇四】芒芒。茫茫に同じ。
【三〇五】洪鐘。大鐘なり。
【三〇六】乘風。鐘を懸くる架なり。
【三〇七】禁省。禁裡なり。
【三〇八】金狄。銅人なり。秦銅人十二を鑄、以て長狄に象る、董卓壞りて以て錢となす。餘の二箇、魏の明帝洛陽に徙さんと欲す、霸城に到り重くして致すべからず、乃ち之を留む故に霸川に遷るといふ。

狄霸川に遷る。かの(三〇九)蕭曹魏邴の相、(三一〇)辛李衞霍の將を懷ふ。使を銜むは則ち(三一一)蘇屬國、遠きを震ふは則ち(三一二)張博望。敎敷きて(三一三)彝倫敍で、兵擧りて皇威暢び、危に臨んで智勇奮ひ、命を投じて高節亮なり。(三一四)秺侯の忠孝淳深なる、(三一五)陸賈の優遊宴喜する、(三一六)長卿淵雲の文、(三一七)子長政駿の史、(三一八)趙張三王の京に尹たる、(三一九)定國釋之の理を聽ける、(三二〇)汲長孺の正直なる、(三二一)鄭當時の士を推せる、(三二二)終童は山東の英妙、(三二三)賈生は洛陽

【三〇九】蕭曹魏邴。蕭何、曹參、魏相、邴吉、いづれも漢の宰相なり。

【三一〇】辛李衞霍。辛慶忌、李廣、衞靑、霍去病、いづれも漢の將軍なり。

【三一一】蘇屬國。蘇武匈奴に使し留ること十九年にして歸り、典屬國に任ぜらる。

【三一二】張博望。張騫西域を討ちて功あり。博望侯に封ぜらる。

【三一三】彝倫。人の常道なり。

【三一四】秺侯。漢の金日磾、忠孝を以て秺侯に封ぜらる。

【三一五】陸賈。高祖に仕へて太中大夫となる、常に安車駟馬に乘り瑟を鼓する侍者十人を從へて優遊す。後陳平奴婢百人車馬五十乘、錢五百萬を以て賈に遺り食飮の費となす。

【三一六】長卿。司馬相如、字は長卿。王褒、字は子淵。揚雄、字は子雲。皆文に巧なり。

【三一七】子長。司馬遷、字は子長、史記の著者なり。劉向、字は子政、列女傳新序說苑等を著す。劉歆、字は子駿、七略を著す。

【三一八】趙張。趙廣漢京兆太尹となり姦を發き伏を擿すること神の如し。張敞、京兆尹となり、市に偸盜なし。三王は王尊、王章、王駿なり、皆京兆尹となり治績あり。

【三一九】定國。于定國廷尉として名聲あり。釋之は張釋之なり、亦廷尉となる。

【三二〇】汲長孺。汲黯、字は長孺。武帝に仕へて屢直諫す。

【三二一】鄭當時。大司農となり、朝するごとに賢士を推薦せざるはなし。

【三二二】終童。終軍、字は子雲、山東濟南の人、年十八選ばれて博士の弟子となり上書して事を言ふ、武帝其文を奇とす、死せる時年二十餘、故に世之を終童といふ。

【三二三】賈生。賈誼なり、洛陽の人、年十八能く詩を誦し書を屬す、文帝召して博士となす、時に年二十餘。

の才子なるに曁ぶまで、(三四)翠緌を飛ばし(三五)鳴玉を拖らし、以て禁門に出入する者衆し。

【大意】既に長安に入れば、民家は千を以て數ふべく、人口は億を以て數ふべし。華夷の士女相雜りて駢び耕せり。余禮儀を備へて公館に就き、其職に膺り、微力を盡くし勉勵す。初秋既に終れば、政務を執るの餘暇、農功を巡檢して民閭の間を周行す。今や舊城毀廢し、官署市廛蕭條として纔に城隅に殘存するのみにして、之を昔時に比すれば、復た百分の一にも及ばず。尙冠、脩成等の邑里は、今皆亡滅して只其名を存するのみ。余乃ち長樂、未央等の宮殿に登り徘徊惆悵すれば、鷩雉は臺殿陂池荒敗の中に鳴き、狐兎は廢殿毀室の間に窟宅し、禾黍離離として茂る。余悲思して思茫然たり。大鐘は毀廟に懸りて將に墜ちんとし、鐘架は傾いて鐘を懸くべくもあらず。禁裏の蹤は茂草と化し、銅人は霸川に遷りて其跡を留めず。飜つて漢の盛時を懷ふに、宰相には蕭曹魏邴あり。將軍には辛李衞霍あり。使臣には蘇武あり。遠征家には張騫あり。相は政敎を敷きて人倫大に張り、將は兵を四夷に擧げて皇威宣暢し、危きに臨んで智勇を奮ひ、身命を擲ちて高節を顯す。忠孝を以て著れし萇侯、優遊を以て名ありし陸賈、司馬相如等の文人、司馬遷等の史家、趙張の如き市尹、于定國の如き判官、汲長孺の如き直臣、終軍、賈誼の如き才子、いづれも禁門に出入する者極めて多かり。

【三四】翠緌。冠纓の飾なり。
【三五】鳴玉。腰に佩ぶる玉。

或は髪を被り衽を左にして、(三二六)泥滓より奮迅し、或は(三二七)從容傅會して、表を望み裏を知り、或は勳績を著して時戮に嬰り、或は大才ありて貴仕なし。皆淸風を上列に揚げ、令聞を垂れて已まず。珮聲の遺響を想ふに、(三二八)鏗鏘として耳に在るが若し。(三二九)音鳳恭顯の勢に任せるに當り、乃ち四方を(三三〇)熏灼し、都鄙を震耀す。而して死するの日、曾て夫の(三三一)十餘公の徒隷と齒するを得ず。名才の難き其れ然らずや。(三三二)漸臺を望んで扼腕し、(三三三)巨猾を梟して餘怒あり。(三三四)不疑に北闕に揖し、(三三五)樗里に武庫に(三三六)軾し、酒池

【三二六】泥滓。卑賤なるをいふ。金日磾はもと夷狄の人、今盛貴に至る。

【三二七】從容傅會。漢書の贊に陸賈陳平周勃ノ閒ニ從容シ、將相ニ附會スとあり、陸賈呂太后の一族を平げて功あり、故に表を望み裏を知るといふ。

【三二八】鏗鏘。珮玉の音。

【三二九】音鳳云云。王鳳大司馬大將軍となる、鳳薨じ從弟王音鳳に代りて司馬車騎將軍となる。弘恭、中尙書となり、法令故事を明習す。石顯、黃門中尙書となり、元帝疾を被りて政事を親らせず、事大小となく顯に因りて決す。

【三三〇】熏灼。威勢を震ふこと。

【三三一】十餘公。蕭何、曹參等を指す。

【三三二】漸臺。臺の名、王莽の誅せられし處。

【三三三】巨猾。大惡人、王莽を指す。

【三三四】不疑。漢書に雋不疑、字ハ曼倩、京兆尹トナル、一男子アリ黃犢車ニ乘リテ北闕ニ詣リ自ラ謂フ衞太子ナリト、不疑之ヲ收縛シテ曰ク、昔蒯聵命ニ違ヒテ出奔ス、輒拒ンデ納レズ、春秋ニ之ヲ是トス、衞太子罪ヲ先帝ニ得、亡ゲテ死ニ卽カズ、今自ラ來ル、是レ罪人ナリト、遂ニ詔獄ニ送ルとあり。

【三三五】樗里。史記に名ハ疾、秦ノ惠王ノ弟ナリ、卒シテ渭南章臺ノ東ニ葬ル、曰ク後百歲、當ニ天子ノ宮我ガ墓ヲ夾ムアルベシト、漢ノ興ルニ至リ、長樂宮其東ニ在リ、未央宮其西ニ在リ、武庫正ニ其墓ニ値ルとあり。

【三三六】軾。車上の橫木に倚りて禮すること。

を（三三七）商辛に鑒み、覆車を追ひて寤らず。（三三八）曲陽白虎に僭し、化奢淫にして度なし。命始あれば必ず終あり。孰か長生して久視せん。（三三九）武の雄略なるも其れ焉にか在る。近く（三四〇）文成に惑ひて（三四一）五利に溺れ、造化に侔うして以て制作し、山海の奥祕を窮め、（三四二）靈若神島に翔り、奔鯨浪つて水を失ひ、鱗骼を（三四三）漫沙に曝し、（三四四）明月を隕して以て雙び墜ち、（三四五）仙掌を擢んでて以て露を承け、（三四六）雲漢を干して上り至り、（三四七）邛蒟を致すこと其れ奚ぞ難からん。惟余欲を是れ恣にし、逸遊を角觝に縱にし、（三四八）甲乙を絡ふに珠翠を以てし、生民の減半を忍び、（三四九）東岳に勒するに虛美を以てす。超として長く懷ひて以て遐に念へば、循環の賜るなきが若し。（三五〇）面

【三三七】商辛。殷の紂王なり。酒池肉林の傲奢を極め終に國を亡せり。

【三三八】曲陽。王根曲陽侯となり第室を修め白虎殿に象る。

【三三九】武。漢の武帝。雄略は雄才大略なり。

【三四〇】文成。齊人李少翁、方術を以て武帝に見ゆ、武帝拜して文成將軍となす。言ふ神と通ぜんと欲せば宮室被服神に象るにあらざれば不可なりと。武帝乃ち甘泉宮中に臺を作り天地泰一諸鬼神を畫き祭具を置いて天神を致す。

【三四一】五利。欒大、武帝に見えて曰く、不死の藥得べく、仙人致すべしと。武帝乃ち大を拜し五利將軍となす。

【三四二】靈若。海若、卽ち海神なり。

【三四三】漫沙。ひろき沙原。

【三四四】明月。鯨魚の目化して明月の珠となるといふ。

【三四五】仙掌。武帝仙人を作り露盤を捧げて雲表の露を挹る。玉屑に和して之を服すれば不老不死なるを得ると誤信せるに因る。

【三四六】雲漢。天河なり。

【三四七】邛蒟。邛は邛竹杖、蒟は蒟醬なり、武帝かかる珍奇の物を遠方より取寄せたり。

【三四八】甲乙。武帝甲乙の帳を造り、絡ふに隨珠和璧を以てす。

【三四九】勒。石に刻すること。

【三五〇】面朝。表面の朝廷なり、周禮に朝ヲ面ニシ市ヲ後ニスとあり。煥炳は明なる貌、

朝の煥炳たるを較にし、後庭の(三二一)猗靡たるを次にし、(三二二)熊に當るの忠勇を壯とし、(三二三)輦を辭するの明智を深しとす。(三二四)衞は鬒髮以て光鑒し、(三二五)趙は輕體にして纖麗なり。咸善く立ちて聲流れ、亦寵極りて禍侈なり。

【大意】 或は被髮左衽の夷狄より起りて高位に陞れるあり。或は將相の閒に從容附會し表裏を察知して、漢室を扶持せしあり。或は勳績を著して誅戮せられ、或は大才ありて高官に列するを得ざりし者あり。皆淸風を上代に揚げ、令聞後世に傳はり、今尙ほ其珮聲を聞くが如し。又王音、王鳳、弘恭、石顯の徒あり。邪佞にして勢を天下四方に震耀せるも、其の死するや夫の蕭曹等十餘公の僕隷にすら相伍するを得ず。名器の難きこと其れ此の如し。昔王莽大逆をなし漸臺に誅せられ、其首を梟さる。余今之を望み扼腕して怒を發し、北闕を望んで雋不疑を憶ひ、武庫を見て樗里子を懷ふ。昔殷の紂王酒池を作りて以て國を亡せる。漢の武帝復た之をなし、

【三二一】猗靡。美なる貌。

【三二二】熊に當る、元帝虎圈に幸し獸と鬪はしむ、熊、圈より逸し檻を攀ぢ殿に上らんと欲す、左右皆驚き走る、馮婕妤直ちにすすんで熊に當りて立つ、元帝問ふ何の故に熊に當ると、婕妤曰く、猛獸は人を得れば止る、妾御坐に至らんことを恐る、故に身之に當れるなりと、帝嗟嘆し益之を敬重す。

【三二三】輦を辭す。成帝後庭に遊ぶや、常に班婕妤と輦を同うして乘らんことを欲す、婕妤辭して曰く、古の圖畫を觀るに、賢聖の君は皆名臣の側に在るあり、三代の末王乃ち嬖女あり、今輦を同うせんと欲するは之に近似するなきを得んやと。

【三二四】衞。武帝の皇后衞氏。

【三二五】趙。漢の成帝の宮人趙飛燕。

其の覆轍を履んで改め寤らず。曲陽侯王根邸宅を作り白虎殿に象り、奢淫にして法度なし。夫れ生ある者は必ず死あり。孰か長生久視する者あらんや。かの武帝今何にか在る。文成將軍李少翁、五利將軍欒大の言に迷ひ、神仙の宮居に擬して、種種の造營をなし、海神は神島に翔り、長鯨は背を沙磧に曝し、仙人掌を建てて雲外に聳えしめ、遠方の奇物を致し、ただ自己の慾望を恣にし、角觝技を行ひ帳を飾るに珠玉を以てし、海内疲弊して、戸口半減するも肯て顧みず。泰山を封じて虛美を刻せり。然も今や死して跡を留めず。余今此等の事を追懷すれば、循環の盡くる時なきが如し。乃ち先づ面朝を觀て、然る後に後庭に及び、馮婕妤の熊に當りし忠勇を思ひ、班婕妤の同乘を辭せし明智を憶ひ、衞皇后の鬒髮雲の如く、以て人を鑑すべく、趙飛燕の輕體にして纖麗なりしを想ふ。馮班二婕妤は、盛德を立てて美名今に傳はり、衞趙二后は寵極まりて禍を受くること亦大なり。

〔三五六〕便門を津りて以て右に轉じ、吾が境の暨ぶ所を究め。〔三五七〕細柳に掩りて劍を撫し、〔三五八〕孝文の帥に

【三五六】便門。橋の名。

【三五七】細柳。地名。漢の文帝の時、匈奴大に邊に寇す、劉禮をして霸上に軍せしめ、徐厲をして棘門に軍せしめ、周亞夫をして細柳に軍せしめ、以て之を禦ぐ。帝軍を勞して霸上棘門に至る、次に細柳に至る、衞士門を開かず、帝入るを得ず、乃ち將軍周亞夫に詔して門を開かしむ、壁門の士車騎に謂つて曰く將軍約すらく軍中には馳驅するを得ずと、文帝卽ち轡を按じて徐行す、文帝曰く、此れ眞の將軍なり、嚮の霸上棘門の軍は兒戲のみと。

【三五八】孝文。漢の文帝。帥は將軍周亞夫を指す。

命ぜるを快とす。(三五九)周命を受けて身を忘れ、(三六〇)戎政の果毅を明にし、(三六一)華蓋を(三六二)壘和に距ぎ、乘輿の尊轡を案ぜしめ、天威の臨顏を肅み、軍禮に率ひて以て(三六三)長撎す。(三六四)棘霸の兒戯を輕んじ、(三六五)條侯の倨貴を重んず。(三六六)杜郵を索むるに其れ焉にか在る。云に孝里の前號なり。(三六七)惘として駕を輟めて(三六八)容與し、(三六九)武安を哀み以て悼を興す。趙を伐ちて以て國を徇ふるを爭ひ、廟算の勝負を定む。(三七〇)矢言を扞いで納れず、反つて怨を推して以て咎を歸し、未だ遷路に十里ならざるに、尋で劍を賜ひて首を刎ぬ。嗟主闇くして臣嫉む。禍何に於てか有らざらん。秦墟を(三七一)渭城に窺へば、(三七二)冀闕緬にして其れ堙盡し、陛殿の餘基を覓むれば、裁に(三七三)岥㟴として以て隱嶙たり。(三七四)趙使の璧を抱き、(三七五)瀏として楹を睨んで以て憤を抗げしを想ふ。燕圖窮り

【三五九】周。周亞夫なり。
【三六〇】戎政。軍政なり。
【三六一】華蓋。天子の馬車の蓋。
【三六二】壘和。壘は軍營なり、和は軍營の正門なり。
【三六三】長撎。撎は揖なり。
【三六四】棘霸。棘門と霸上。
【三六五】條侯。周亞夫なり。
【三六六】杜郵。亭の名。咸陽の西に在り、今之を孝里といふ。
【三六七】惘。志を失ふ貌。
【三六八】容與。徘徊なり。
【三六九】武安。白起なり、秦の昭王に事へ武安君となる。
【三七〇】矢言。直言なり。秦王白起をして趙を攻めしめんとす、白起曰く趙は未だ攻め易からざるなりと、終に往かず、秦趙を圍みしも拔く能はず、白起曰く、王臣が言を聽かず今如何と、秦王之を聞いて怒り白起をして咸陽に留まるを得ざらしむ、白起咸陽の西門を出で十里にして杜郵に至る、秦王使を遣し劍を賜ひて白起に自殺せしむ。
【三七一】渭城。古の咸陽なり。
【三七二】冀闕。秦の闕の名。緬は盡くる貌。
【三七三】岥㟴、隱嶙。頹ろ貌。
【三七四】趙使。藺相如をいふ。
【三七五】瀏。目を怒らす貌。

て(三七六)荊發し、紛として袖を絶ちて自ら引く。(三七七)筑聲厲くして高く奮ひ、狙つて鉛を潛して以て臏を脫てり。天位に據ること其れ茲の若きも、亦狼狽せること愍むべし。

【大意】乃ち便門橋を渡りて右に轉じ、長安の境を出でて細柳に至り、昔文帝周亞夫に命じて細柳に將たらしめし時、亞夫君命を受けて其身を忘れ、軍政を明肅にし、天子をして軍門に入らしめず、一たび軍門に入れしも、轡を按じて徐行せしめ、既に天顏に咫尺せるも、僅に長揖の禮を行ひしのみ。文帝その嚴肅なるに感じ、亞夫の倨傲を稱美せるを快とす。進んで杜郵に至り、惘然として徘徊し、白起の最期を悲む。昔秦の昭王、白起をして趙を攻めしめんとせしも、白起勝算なきを以て肯んぜず。秦趙を伐ちて果して勝たず。昭王卻つて怨を推して咎を白起に歸し、遂に之を咸陽城外に遷逐す。白起咸陽を出でて未だ十里ならず、杜郵に至りて死を賜ひて自殺す。ああ昭王は暗愚にして、其臣范雎白起を嫉む。白起の此禍を被るも亦宜なり。去つて渭城に秦墟を索むるに、纔に頹然たる痕跡を留むるのみ。因つて藺相如の璧を奉じて秦に來り、秦王の欺いて璧を取らんとする

【三七六】荊。荊軻なり、史記に荊軻、燕ノ督亢ノ地圖ヲ獻ズ、圖窮リテ匕首見ユ、因ッテ左手ニ秦王ノ袖ヲ把リ右手ニ匕首ヲ持チテ秦王ヲ揕ス、秦王驚イテ自ラ引キテ起ッ、袖絶ユ、其匕首ヲ以テ秦王ニ擲ツ、中ラズとあり。

【三七七】筑聲。筑は樂器の名。荊軻の客高漸離よく筑を撃つ、秦の始皇之を召し、其目を矐して筑を撃たしめ、漸く之を親近す、高漸離乃ち鉛を以て筑中に置き、始皇に扑ち、其臏を絶つ。臏は膝蓋骨なり。」

や、楹を睨んで憤を發せし事を想ひ、燕の太子丹の客荊軻、燕の地圖を秦王の前に呈し、圖中に隱し置きたる匕首を把りて、秦王を刺さんとするや、秦王自ら引いて其袖を絶ちし事と、高漸離筑中に鉛を隱し置き、之を始皇に擲ちて其膝を絶ちし事とを想ふ。時に始皇は身皇帝の尊位に在りしも、周章狼狽せしは誠に憐むべきなり。

良人を簡んで以て自ら輔けんとし、（三七八）斯忠にして（三七九）鞅賢なりと謂ひ、苛制を灰を捐るに寄せ、（三八〇）扶蘇を朔邊に矯き、（三八一）儒林坑穽に塡まり、詩書煬かれて煙となり、（三八二）國滅亡して以て後を斷ち、（三八三）身刑轘せられて以て（三八四）先を啓く。商が法焉んぞ以て宿するを得ん、黄犬何ぞ復た牽くべけん。（三八五）野蒲變じて脯となり、苑鹿化して以て馬となる。（三八六）讒逆に假すに天權を以てし、衆口を鉗して寄坐せしむ。兵頭に在りて顧み問ふ、何ぞ早く我に告げざると。（三八七）黔黎たらんことを願へども其れ誰か聽さん、惟死を請うて可さるるを獲たり。（三八八）子嬰の果決に逮び、敢て賊を討ちて以て禍を紓う

【三七八】斯。李斯なり。秦の丞相となり、始皇の長子扶蘇を矯殺せり。

【三七九】鞅。商鞅なり。其法極めて嚴酷にして、灰を道に棄つれば刑せらる。

【三八〇】扶蘇。秦の始皇帝の長子。朔邊は北邊なり。

【三八一】儒林。多くの學者。坑穽はオトシアナなり。

【三八二】國。李斯商鞅ともに食邑あり、故に國といふ。

【三八三】刑轘。車裂せらるるを轘といふ。

【三八四】先を啓く。刑轘せらるるは李斯商鞅その始なり、故に先を啓くといふ。

【三八五】野蒲。草の名ガマなり。脯は乾肉なり。

【三八六】讒逆。趙高を指す。

【三八七】黔黎。平民なり。

【三八八】子嬰。秦王の名。始皇の孫なり。

せるも、勢土崩して振ふなく、路左に降王となれり。(三八九)蕭圖を收めて以て(三九〇)劉に相たり、險易と衆寡とを料る。(三九一)羽天の與ふるに取らず、(三九二)沐猴に冠して火を縱つ。(三九三)三光を貫いて九泉に洞る。曾て未だ以て其高下を喩ふるに足らず。市閭の(三九四)葭井に感じ、(三九五)尸韓の舊處に歎ず。(三九六)蒸屬號いて闕を守り、人々身を百にして以て贖を納る。豈生命の投じ易からんや、誠に惠愛の洽著なればなり。望之を訐いて以て直を求めしは、亦余が心の惡む所なり。(三九七)夫人の政術を思ふに、(三九八)幹時の良具なり。苟も法を明にして以て憾を釋き、才を愛して以て務を成さず。大體を弘めて以て高貴ならんは、(三九九)蕭傅に望む所にあらず。(四〇〇)長山に造りて慷慨し、(四〇一)龍顏の英主を偉とす。胷中豁にして其れ洞開し、

【三八九】蕭。蕭何、漢の高祖の臣。圖は秦の圖書なり。
【三九〇】劉。漢の高祖劉邦なり。
【三九一】羽。項籍、字は羽。
【三九二】沐猴。獼猴なり。
【三九三】三光。日月星をいふ。三光を貫くとは高祖の勢威赫赫たるをいふ。九泉に洞るとは項羽の恨を呑んで死するをいふ。
【三九四】葭井。渭城の東なる麻蒸を賣る市なり。
【三九五】尸韓。韓延壽の死屍なり。韓延壽東郡太守たり。蕭望之に代りて左馮翊となり、望之御史大夫に遷る、延壽東郡に在りし時、官錢千餘萬を放つ、望之因つて御史をして之を案問せしむ、延壽亦望之馮翊に在りし時、官錢百餘萬を放散すと劾奏す、帝之を案問せしむるも事實なし、延壽竟に誅せらる。
【三九六】蒸屬。蒸は李善本に烝に作る、今之に從ふ。
【三九七】夫人。韓延壽を指す。
【三九八】幹時。時務を辨ずること。良具は良材といふが如し。
【三九九】蕭傅。蕭望之、後太子太傅に左遷せらる。
【四〇〇】長山。漢の高祖の陵なり。
【四〇一】龍顏。龍の如き顏なり、高祖は鼻高くして龍顏なりきといふ。

羣善湊りて必ず擧ぐ。(四〇二)存威天區に格れるも、(四〇三)亡墳掘かれて禦ぐなし。(四〇四)掩坎に臨んで累に抃し、毀垣に歩して以て(四〇五)延佇す。(四〇六)安陵を越えて譏ることなし。諒に惠聲の寂寞たり。(四〇七)爰絲の正義、(四〇八)梁劍に東郭に伏せしを弔ふ。(四〇九)景皇を陽丘に訊ふ。奚ぞ讒を信じて矜誷なる。(四一〇)吳嗣を局下に隕す。蓋し怒を(四一一)一博に發し、七國の亂を稱ぐるを成す。翻つて逆を助けて以て(四一二)錯を誅す。恨むらくは聽を過りて討つなかりしことを。茲れ善を沮んで惡を勸むるなり。

【大意】始皇賢良の士を選んで自ら輔けんとし、李斯商鞅を認めて忠賢となす。然も此の二人は道に灰を棄つる者を刑し、扶蘇を北邊に矯殺し、或は儒生を坑殺し、詩書を燒き、暴虐至らざるなし。されば其國忽ち滅び商鞅は車裂せられ、李斯は腰斬せられぬ。商鞅法を立て人の驗なき者を宿すれば、刑戮を加ふる事となせり。鞅嘗て逃れて關下に至りしに、之を宿泊せしむ

【四〇二】存威。高祖の生時の威力。
【四〇三】亡墳。高祖死後の墳墓。王莽の亂に漢の諸陵皆發掘せらる。
【四〇四】掩坎。掩はれし墓穴。
【四〇五】延佇。低回といふが如し。
【四〇六】安陵。漢の景帝の墓。
【四〇七】爰絲。袁盎、字は絲、楚の相となり、病んで免じ家居す、梁の孝王嗣たらんことを求めんと欲す、盎説を進む、王此を以て盎を怨み、人をして盎を安陵郭門の外に刺殺せしむ。
【四〇八】梁劍。梁の孝王の劍。
【四〇九】景皇。漢の景帝。陽丘は其陵なり。
【四一〇】吳嗣。吳王の太子なり。局は博局、將棊盤の如きもの。
【四一一】一博。博は雙陸の如き遊戲の名。
【四一二】錯。晁錯なり。

る者なかりしは、是れ所謂自縄自縛といふべし。李斯の戮に就くや、其子を顧みて言つて曰く、汝と復た黄犬を牽いて上蔡の東門を出で、狡兎を逐はんと欲するも能はざるなりと。その言や亦憐むべし。秦の趙高亂をなさんと欲するも、羣臣の聽かざらんことを恐る。乃ち驗を設け蒲を以て脯と稱し、鹿を以て馬と稱し、以て二世皇帝に獻じ、羣臣の蒲といひ鹿といふ者をば、陰に之を誅し、以て己に盲從せしむ。二世皇帝亦之に假すに天權を以てす。乃ち羣臣口を噤んで坐するのみ。趙高の女婿閻樂をして二世を害せしめんとするや、左右惶擾して鬪はず。傍に宦官一人あり。帝に侍して敢て去らず。二世之に謂つて曰く、汝何ぞ早く我に此事あるを告げざると。宦官曰く、臣敢て言はず、故に全きを得たり、臣をして早く言はしめば、安んぞ今に至るを得んやと。二世閻樂に請ひて曰く、願くは一郡を得て王とならんと。閻樂許さず。又曰く願くは萬戸侯とならんと。亦許さず。又曰く、願くは庶民とならんと。亦許さず。二世乃ち自殺す。子嬰立ちて果決を振ひ趙高を殺して國禍を緩うせしも、秦の積惡久しくして人心離散し、復た國威を振ふに由なく、遂に沛公に軹道の傍に降るに至れり。沛公の咸陽に入るや、蕭何秦の圖書を收めて之を藏し、高祖（沛公）因つて戸口の多少と地形の險易とを知るを得たり。項羽は勢力を一時に震ひしも、天與を取らずして卻つて其咎を受け、咸陽を屠りて、秦の宮室を燒く。是れ所謂沐猴にして冠する者のみ。ああ高祖は威

勢赫赫として三光を貫き、項羽は恨を呑んで九泉に入る。其高下の差譬ふるに物なしといふべし。去つて市閭の菆井に感じ、韓延壽の舊處に嘆ず。延壽の誅せらるるや、吏民數千送りて渭城に至り、闕下に號泣し身を百にして其罪を贖はんことを願へり。夫れ人命は至重なり。然も之を棄てて其罪を贖はんとせるは、延壽の惠愛洽く民に及びたればなり。ただ蕭望之の罪を訐いて直を求めしは、余が心に非とする所なり。延壽の政術を思ふに、實に時務を辨ずるの良材なり。望之法を明かにして私怨を霽さんことを務め、人材を愛して國家の務を成さず。大體を弘めて高貴に陞るが如きは、望之に望むべきにあらざるなり。長陵に至りて高祖の爲人を偉とす。其心豁達にして大度あり。賢士の至る者あれば、必ず之を擧用す。故に生きては其威天に震ひしも、王莽の亂に遇ひて其陵其の發く所となれり。余今其墓穴に臨み、膺を撫でて低回す。去つて安陵に至る。惠帝の名聲寂寞として人の褒貶するなし。安陵の郭門外に往き、袁盎の正義なるも、竟に梁の孝王に刺殺されしを弔ひ、陽丘に至りて景帝を弔ふ。帝は吳の太子と博して爭ひ、遂に博局を投じて太子を殺し、爲に吳楚七國の亂因を釀しぬ。然も聽を過りて晁錯を誅したるは、是れ却つて逆臣を助くるものにして、善を沮止して惡を勸むるものといふべし。

(四一三)孝元を(四一四)渭塋に呰る、(四一五)奄尹を執りて以

【四一三】孝元。漢の元帝。
【四一四】渭塋。塋は墓なり、元帝渭陵に葬る。
【四一五】奄尹。宦官弘恭、石顯を

て貶を明にす。(四一六)夫の君に善行を褒す、(四一七)園邑を廢して以て儉を崇ぶ。(四一八)延門を過ぎて(四一九)成を責む。忠何の辜ありて戮となる。社稷の(四二〇)王章を陷れ、幽死して(四二一)鞫むるなからしむ。(四二二)淫嬖の凶忍を恣にし、皇統の孕育を勦し、(四二三)舅氏の(四二四)奸漸を張り、漢宗に貽すに傾覆を以てす。(四二五)哀主を(四二六)義域に刺る。天爵を(四二七)高安に僭す。堯に法らんと欲して(四二八)羞を承め、永に(四二九)終古して刊られず。(四三〇)康園の孤墳を瞰、(四三一)平后の專絜を悲む。その父の簒逆を殃とし、漢の恥を蒙りて雪がず、義誠を激して引決し、(四三二)丹爛に赴いて以て節を明にし、宮火に投じて(四三三)焦糜し、(四三四)灰熛に從つて俱に滅ぶ。(四三五)横橋に鶩せて軫を旋らし、(四三六)敝邑の(四三七)南

指す。
【四一六】夫君。元帝を指す。
【四一七】園邑。陵墓に附屬する縣邑。
【四一八】延門。成帝の陵、延陵也。
【四一九】成。漢の成帝。
【四二〇】王章。成帝の時封事を奏していふ、王鳳をば任用すべからずと、帝章に謂つて曰く汝の直言なくんば吾社稷の計を聞かずと、後帝鳳を退くるに忍びず、章遂に王鳳に陷れられ獄中に死す。
【四二一】鞫。罪情を窮問すること。
【四二二】淫嬖。趙飛燕を指す。
【四二三】舅氏。皇室の外戚たる王氏なり。
【四二四】奸漸。惡事のキザシ。
【四二五】哀主。漢の哀帝。
【四二六】義域。哀帝の義陵なり。
【四二七】高安。董賢美色あり哀帝之を封じて高安侯となす。賢後丁明に代りて大司馬となる。卽ち三公の職なり。
【四二八】羞。六臣本に禪に作る、今李善本に從ふ。
【四二九】終古。永久に續くこと。
【四三〇】康園。漢の平帝康陵に葬る。
【四三一】平后。平帝の皇后、王莽の女なり。漢兵王莽を誅せんとし未央宮を燒くに及び、后曰く何の面目ありて漢家に見えんやと、自ら火中に投じて死す。
【四三二】丹爛。赤き焰。
【四三三】焦糜。こげただろること。
【四三四】灰熛。熛はヒノコなり。
【四三五】横橋。橋の名。
【四三六】敝邑。岳の治むる所の邑、卽ち長安をいふ。
【四三七】南垂。南界なり。

垂を歴。磁石を門にして木蘭を梁にし、(四三八)阿房の屈奇たるを構へ、(四三九)南山を疏りて以て闕を表し、(四四〇)樊川を倬にして以て池を激す。(四四一)鬼傭を役するも其れ猶ほ否らず。矧んや人力の爲す所ならんや。工徒斲りて未だ息まざるに、(四四二)義兵紛として以て交り馳せ、(四四三)宗祧汙れて沼となる。豈斯宇の獨り隳れしのみならんや。(四四四)僞新の(四四五)九廟に由り、虞を宗とし黄を祖とするを誇る。(四四六)吁嗟を驅りて(四四七)妖臨し、佞哀を捜りて以て郎に拜す。六藝を誦して以て姦を飾り、詩書を焚いて(四四八)牆に面す。心德義に則らざれば、術を異にすと雖も亡を同うす。(四四九)孝宣を(四五〇)樂遊に宗とす。衰緒を紹いで以て中興す。敬養を事とするを獲ず、盡く隆を園陵に加ふ。(四五一)兆は惟れ奉明、邑を千人と號す。諸を故老に訊ふに、

【四三八】阿房。宮の名。
【四三九】南山。終南山なり。
【四四〇】樊川。川の名、秦川ともいふ。
【四四一】鬼傭。鬼工なり。
【四四二】義兵。沛公の兵なり。
【四四三】宗祧。宗廟なり。
【四四四】僞新。王莽漢の皇位を簒ひて國を建て、國號を新といふ。
【四四五】九廟。王莽九廟を建つ。一に黄帝、二に虞帝、三に陳王、四に齊敬王、五に濟北愍王、六に濟南伯王、七に元城孺王、八に陽平頃王、九に新都顯王。
【四四六】吁嗟。嘆き悲むこと。

【四四七】妖臨。臨とは廟に哭泣すること。漢書に鄧曄、于匡兵ヲ南鄕ニ起ス、莽愈憂ヘテ出ヅル所ヲ知ラズ、崔發曰ク、周禮ニ國ニ大災アレバ則チ廟ニ哭シテ以テ之ヲ厭スト、莽乃チ羣臣ヲ率ヰテ南郊ニ至リ胸ヲ搏ツテ大ニ哭ス、諸生甚ダ悲哀ス、能ク策文ヲ誦スルニ及ンデ除シテ以テ郎トナスとあり。
【四四八】牆に面す。書經に學バザレバ面ニ牆スとあり。
【四四九】孝宣。漢の宣帝。
【四五〇】樂遊。宣帝の陵なり。
【四五一】兆。墓なり。

(四五二)帝詢より造まる。(四五三)王母の悲命を隱み、聲樂を縦にして以て神を娛ましむ。舊典に率ふなしと雖も、亦(四五四)過を觀て仁を知る。(四五五)高望の陽隈に憑りて、川陸の(四五六)汙隆を體し、襟を(四五七)淸暑の館に開き、目を(四五八)五柞の宮に遊ばしむれば、(四五九)交渠引漕して、激湍風を生ず。

【大意】渭陵に元帝を弔ひ、帝の弘恭、石顯等の宦官を重用したるを貶し、又祖宗の廟の禮典に合はざるを以て園邑を廢して儉を尙びたるを褒す。延陵に成帝を弔ひ、社稷の臣王章を罪に陷れ、竊間を用ひずして幽死せしめたる罪を責め、又趙飛燕をして殘忍凶惡を恣にし、宮人の子を生む者あれば輒ち之を殺さしめ、王氏簒弑の端を開き、終に漢室を傾覆するに至れるを責む。義陵に哀帝を弔ふ。帝の天爵を僭して董賢を高安侯に封じ、堯舜の禪讓に倣ひて、位を董賢に讓らんとし、王閎の切諫によりて止みしは、千古不滅の大失態なり。余今乃ち之を刺る。康陵に平帝を弔ひ、皇后王氏の貞潔なる、其父王莽の簒逆を謀るや、義誠を引いて節を明にし、火中に投じて自殺せるを悲む。橫橋に至りて車を還し、

【四五二】帝詢。宣帝名は詢。
【四五三】王母。宣帝の母なり。漢の武帝の戾太子巫蠱の事によりて自殺す、太子の子史皇孫其妻王夫人皆害に遇ふ、史皇孫の遺子詢位に卽く、是を宣帝となす。史皇孫の墓を奉明園と稱し、母を悼夫人といひ、其墓に優倡千人を以て樂す、千人邑の名此より起る。
【四五四】過を觀。論語に人ノ過ツヤ各其黨ニ於テス、過ヲ觀テ斯ニ仁ヲ知ルとあり。
【四五五】高望。堆の名。陽隈は堆の南をいふ。
【四五六】汙隆。高低といふが如し。
【四五七】淸暑。宮觀の名。
【四五八】五柞。宮觀の名。
【四五九】交渠。溝渠の名。

長安の南界を經て、阿房宮址に至る。此宮たる木蘭を以て梁となし、磁石を以て門となし、終南山を以て門闕となし、樊川を以て池となし、壯麗宏僘を極む。鬼神を使役して之を營むも猶ほ及ばず。況んや人力の能く爲す所ならんや。然も彫斲未だ終らざるに、沛公の義兵其中に交馳し、この宮獨り破壞せられしのみならず、宗廟亦汙れて池沼となりしは憐むべし。轉じて僞新王莽の故墟を經。王莽九廟を作り虞舜黃帝を祖宗とするを誇りしも、鄧曄于匡の攻擊に遇ひ、吁嗟して廟に哭泣したる、亦憐むに足る。莽は六藝の文を誦して己の奸を飾り、秦は詩書を燒きて墻に面す。惡をなすこと同じからざるも、同じく滅亡に歸せるは固より當然なり。進んで樂遊原に宣帝を弔ひ、衰運を承けて中興の大業を成ししを偉とす。帝は生前父母を孝養する能はざりしを以て、其陵墓を壯麗にし、奉明園千人邑の名今に存す。故老に問ふに實に宣帝に創まるといふ。帝の此事必ずしも禮典に合はざれども、父母非命の死を悼み、厚く死後に報いんとせるは、人情の然らしむる所にして、亦以て其仁を知るに足る。進んで高望堆の南崖に登りて水陸高低の狀を見、淸署館、五柞宮に憩ひて眺望すれば、交渠交流して激湍に風を生ずるを見る。

乃ち其中に（四六〇）昆明池あり。其池は則ち（四六一）湯湯汗汗、（四六二）滉瀁として彌漫し、浩として河漢の如

【四六〇】昆明池。池の名。
【四六一】湯湯汗汗。湯湯は流るる貌。汗汗は水の廣き貌。
【四六二】滉瀁。水の廣き貌。

く、日月天に麗きて東西に出入し、旦には(四六三)暘谷に似、夕には(四六四)虞淵に類たり。昔(四六五)豫章の名宇、玄流を抜いて特に起り、(四六六)景星に天漢に儀り、(四六七)牛女を列ねて以て雙び峙て、萬載にして傾かざらんことを圖りしも、(四六八)奄として(四六九)十紀に摧落せり。百尋の層觀を擢んでしも、今數仞の餘址あるのみ。振鷺于に飛び、鳧躍り鴻漸み、雲に乘りて(四七〇)頡頏し、波に隨つて(四七一)澹淡たり。驚波に(四七二)瀺灂し、(四七三)菱芡を唼喋し、華蓮綠沼に爛として、(四七四)靑蕃翠瀲に蔚たり。伊れ茲池の肇めて穿てる、水戰を荒服に肄はせ、志遠きを勤めて以て武を極めんとなり。良に(四七五)後福を要むるなし。而かも菜蔬(四七六)芼實、水物惟れ錯り、乃ち原陸より贍なるあり。(四七七)皇代に在りて(四七八)物土なり。故に之を毀ちて又復す。凡そ厥の(四七九)寮司既に富まして敎ふ。咸く貧惰を帥ゐて同じく(四八〇)檝櫂を整へ、罟を收めて獲を課し、繳を引いて(四八一)效を擧げ、(四八二)鰥夫室あり、愁民以て樂む。

【四六三】暘谷。日の出づる處。
【四六四】虞淵。日の沒する處。
【四六五】豫章。宮觀の名。
【四六六】景星。瑞星なり。
【四六七】牛女。牽牛星と織女星。
【四六八】奄。忽なり。
【四六九】十紀。十二年を一紀といふ。武帝の元狩三年昆明池を穿ち、王莽の敗に至るまで凡て百十三年なり。
【四七〇】頡頏。飛んで上るを頡といひ、飛んで下るを頏といふ。
【四七一】澹淡。浮ぶ貌。
【四七二】瀺灂。出沒する貌。
【四七三】菱芡。水草の名、唼喋は啄み食ふこと。
【四七四】靑蕃。蕃は草の名。翠瀲は水際なり。蔚は茂ること。
【四七五】後福。水物の利をいふ。
【四七六】芼實。芼は草なり。
【四七七】皇代。晉をいふ。
【四七八】物土。特產物なり。
【四七九】寮司。百官なり。
【四八〇】檝櫂。舟をこぐ棹。
【四八一】效。果なり、獲なり。
【四八二】鰥夫。妻なき男、室は妻なり。

徒に其の枻を鼓ち輪を廻らし、釣を灑し罔を投じ、餌を垂れて出入し(四八三)叉を挺きて來往するを觀るに、(四八四)纖經白を連ね、(四八五)榱を鳴らし響を厲し、鰓を貫き尾を罥け、掣くこと三にして牽くこと兩なり。是に於て(四八六)青鯤を網鉅に弛め、(四八七)頳鯉を黏徽に解けば、(四八八)華魴鱗を躍らし、(四八九)素鱮髻を揚ぐ。(四九〇)雍人縷のごとく切り、(四九一)鑾刀飛ぶが若く、刃に應じて俎に落ち、(四九二)靃靃霏霏たり。(四九三)紅鮮紛として其れ初めて載り、(四九四)賓旅竦ちて(四九五)御せんことを遲つ。既に(四九六)餐服して以て(四九七)屬厭し、(四九八)泊恬靜にして以て無欲なり。小人の腹を廻らして、君子の慮となす。

【大意】中に昆明池あり。廣大にして日月其中に出入するかと疑はる。池中に豫章觀を起し、二石人を立て牽牛織女の二星に象る。昔漢の武帝の此觀を建つるや、萬歳を經るも猶ほ破れざらしめんと謀りしも、纔に百餘年にして傾壞し、今只數仞の遺址を存するのみ。池中に振鷺鳧鴻あり、雲に乘りて高く飛び、流に隨つて輕く浮び、蓮蕃波際に輝く。武帝の始めて此池を穿つや其志

【四八三】叉。末の二つ以上に分れたるもの、魚を刺す具なり。
【四八四】纖經。網の細き絲なり。
【四八五】榱。長木なり。
【四八六】青鯤。鯤は魚の名。網鉅は網に著けある鉤なり。
【四八七】頳鯉。赤き鯉。黏徽は網。
【四八八】華魴。魴は魚の名。
【四八九】素鱮。鱮は魚の名、素は白なり。
【四九〇】雍人。饔人に同じ、料理人なり。
【四九一】鑾刀。鑾はスズなり、鑾のつける刀。
【四九二】靃靃霏霏。細く淨き貌。
【四九三】紅鮮。鱠の色なり。
【四九四】賓旅。多くの客。
【四九五】御。食ふこと。
【四九六】餐服。食ふこと。
【四九七】屬厭。滿足すること。
【四九八】泊恬靜。無欲の貌。欲は音ユ、叶韻。

水戰を習ひ遠略を勤めて、以て武功を極めんとするに在り。水物の利を求めんとするにあらず。然も菜蔬草實の産、原陸よりも饒なり。故に先に之を埋めたるも、後復た之を開きしなり。且つ百官よく民をして富ましめ、又よく之を敎ふれば、民皆相帥ゐて同じく舟楫を整へ此池に漁し、效獲あれば之を利とし、婚姻時を以てし、愁人も以て樂む。今釣を垂れ網を投じて漁獵する狀を觀るに、網を前に曳き、長椋を後に鳴らし、魚を驚かして網に入らしめ、牽掣すること再三なり。乃ち青鯤を釣鉤より取り、頳鯉を網罟より解けば、鱗を躍らし鬐を揚ぐ。食を造るの人、之を切ること線縷の如く、刀を振ふこと飛ぶが如く、俎中に滿ちて鮮細なり。鱠初めて成るや、賓客立つて之を食はんことを待ち、既に食ふや、食慾全く滿ち、泊然として復た求むる所なし。所謂小人の腹を以て君子の心とならしむ。爾して乃ち策を端し茵を拂ひ、冠を彈き衣を振ひ。(四九九)鄷鎬に徘徊し、(五〇〇)渴するが如く飢うるが如く、心(五〇一)翹懃して以て(五〇二)仰止し、敬を加へずして自ら祗む。豈(五〇三)三聖を之れ敢て夢みんや。竊に(五〇四)十亂を之れ希ふあり。(五〇五)靈臺を經始し、之

【四九九】鄷鎬。周の都せし地。
【五〇〇】渴云云、渴するが如く飢うるが如しとは賢人を思ふなり。
【五〇一】翹懃。慕ひ求むること。
【五〇二】仰止。仰ぎ尊ぶこと、止は助辭にして意義なし。
【五〇三】三聖。琴操に崇侯文王ヲ紂ニ譖シテ曰ク、西伯昌ハ聖人ナリ、長子發、中子旦、皆聖なり、三聖謀ヲ合セバ將ニ君ニ不利ナランとあり。
【五〇四】十亂。亂は治なり。十人の治臣。書經に予亂臣十人アリとあり。
【五〇五】靈臺。周の文王の作りし臺也。經始とは建造すること。

を成すこと日あらず。惟れ（五〇六）酆及び鎬、仍つて其室を京にす。庶人子のごとく來り、神之に吉を降し、德を積み祚を延べ、貳なくして其れ一なり。永く此邦を惟ふに、云に誰か之れ識らん。越に略聞すべくして、其極に臻り難し。子は鋤を贏して以て父に借し、秦法に訓つて色に著はす。耕すには畔を讓りて以て（五〇七）閒田あり、（五〇八）姬化に沾ひて棘を生ず。（五〇九）蘇張喜んで詐騁せ、（五一〇）虞芮愧ぢて訟息む。此に由りて之を觀れば、士には常俗なくして敎には定式あり。上の下を遷すは猶ほ（五一一）鈞の（五一二）埴を埏すがごとし。五方雜會し風流溷淆し、農を惰り利を好み、作勞を昏めず、（五一三）獫狁に密邇して（五一四）戎馬郊に生ずと雖も、而も制する者は必ず割く、實に（五一五）操刀に存す。人の升降は政に隨つて隆替す。信に杖れば則ち情を用ひざるなく、欲するなければ則ち之を賞するも竊まず。智理むる能はず、明察する能はずと雖も、此心を信にせば、庶くは夫の戻を免れん。其禮

【五〇六】酆、鎬。周の都なり。

【五〇七】閒田。相互に讓りて取らざる田地。

【五〇八】姬化。姬は周の姓。周の德化なり。

【五〇九】蘇張。蘇秦、張儀なり。

【五一〇】虞芮。二國の名、此二國の人、田を爭ひて決せず、文王の裁判を請はんとして周に至り、周の耕す者互に畔を讓るを見て己の爭を恥ぢ、遂に途より歸り、互に爭ひし所の田を讓りて取らず、之を閒田となす。

【五一一】鈞。陶器を製する轆轤の圓輪。

【五一二】埴。粘土なり。埏は水を和して柔にすること。

【五一三】獫狁。匈奴なり。密邇は接近せること。

【五一四】戎馬。軍馬なり、老子に天下道ナケレバ戎馬郊ニ生ズとあり。

【五一五】操刀。刀を持つこと。漢書に刀ヲ操レバ必ズ割クとあり。替は音テツ、叶韻。

樂の如きは、以て〔五一六〕來哲を俟たん。

【大意】乃ち衣冠を整へて將に還らんとし、酆鎬の間に徘徊す。賢人を思ひて心飢渇の如く、誠意を以て之を崇仰すれば、賢人自ら祗み懼る。余の長安を治むるや、固より周の三聖の如くならんとを夢想せずと雖も、竊に彼の亂臣十人の事績を擧げんことを期す。文王の靈臺を營むや、民之を作らんことを願ひ、日ならずして成り、酆鎬の都亦其宮室を大にせり。庶民子の如く來りて工役を助け、神亦吉祥を降せり。因つて德を積み祚胤を延べ、民敢て二心を懷く者なく、ただ心を一にして周を戴けり。今此郡の古風を惟ふに、唯略聞するを得るのみにて、其詳を知るを得ざるも、昔は虞芮の二國、田を爭ひて決せず、文王の裁判を請はんとして周に至り、周民の風を觀て、其訟を息め、其の爭ひし田を以て間田となせりといふ。周亡びて秦之に代るや、子に贏餘の鋤ありて之を父に貸せば、子、其父に對して之を恩とするの色を著し、蘇秦張儀の輩亦詐術を弄するに至りぬといふ。其地改らずと雖も、周秦治化の差異により、人情の差異を來せること此の如し。此に由りて之を觀れば風俗の善惡は教化の如何に在り。上の下を化するは猶ほ鈞の粘土を和ぐるが如し。此地今五方の人雜居し、風俗溷亂し、農桑を惰りて商利を好み、勞作を勉めず、匈奴に接近し、戎馬往來すと雖も、よく志を立てて之を治めんと欲せば、

【五一六】來哲、將來の賢者。

敢て治め難からざるなり。世の盛衰は全く政の良否に由る。上信を好めば民敢て情を用ひざるはなく、上の人無欲ならば、賞して竊ましめんとするも民敢て竊まざるなり。余が知は以て民を治むる能はず、明は以て人を察する能はずと雖も、ただ此心を信にせば、庶くは罪戾を免るるを得ん。若し夫れ禮樂を以て民を化するが如きは、余が力の及ぶ所にあらず、將來の賢者を俟たんのみ。

卷の第六

賦己

遊覽

登樓の賦　(一)王仲宣

茲樓に登りて以て四望し、聊か暇日に以て憂を銷す。(二)斯宇の處る所を覽るに、實に顯敞にして仇すくなし。(三)清漳の通浦を挾み、(四)曲沮の長洲に倚り、(五)墳衍の廣陸に背き、(六)皐隰の沃流に臨み、北は(七)陶牧に彌り西は(八)昭丘に接し、華實野を蔽ひ黍稷疇に盈つ。信に美なりと雖も、吾が土にあらず。曾ち何ぞ以て少留するに足らん。

【一】王仲宣。名は粲、山陽高平の人なり、魏に仕へて侍中となる。漢の獻帝の時、董卓亂をなす、粲、難を荊州に避け劉表に依る。遂に江陵の城樓に登り、因つて歸を懷ひて此賦を作り、其進退危懼の情を述ぶ。

【二】斯宇。此樓なり。

【三】清漳。漳は川の名。

【四】曲沮。沮は川の名。

【五】墳衍。丘陵と平澤の地と。

【六】皐隰。皐隰の地。

【七】陶牧。陶は鄕の名、郊外を牧といふ。荊州記に江陵縣ノ西ニ陶朱公ノ冢アリ、其碑ニ云ク是レ越ノ范蠡ニシテ陶ニ終ルとあり。

【八】昭丘。楚の昭王の墓。

【大意】江陵城樓に登りて四方を望み、以て喪亂の憂を霽さんとす。この樓たる漳沮の二水其傍に在り。山丘を後にし、水流を前にし、北は陶牧に連り、西は昭丘に接し、華實繁茂し穀物豐熟し眞に美地なりと雖も、吾が郷土にあらず。何ぞ淹留するに足らんや。紛濁に遭ひて遷り逝き、漫として(九)紀を踰えて以て今に迄る。情(一〇)眷眷として歸らんことを懷ふ。孰か憂思に任ふべき。(一一)軒檻に憑りて以て遙に望み、(一二)北風に向つて襟を開く。平原遠くして目を極むれば、荊山の(一三)高岑に蔽はる。路(一四)逶迤として(一五)脩迥なり。川既に(一六)漾として濟深し。舊郷の壅隔せるを悲み、涕橫に墜ちて禁せず。昔(一七)尼父の陳に在る、(一八)歸歟の歎音あり。(一九)鍾儀幽にして(二〇)楚奏し、(二一)莊舃顯にして(二二)越吟す。人情同じきは土を懷ふに於てす。豈(二三)窮達して心を異にせんや。

【九】紀。十二年を一紀といふ。
【一〇】眷眷。慕ふ貌。
【一一】軒檻。欄干なり。
【一二】北風。帝郷は荊州の北に在り、故に北風といふ。
【一三】高岑。山の小にして高きを岑といふ。
【一四】逶迤。長き貌。
【一五】脩迥。長遠なり。
【一六】漾。長きなり。
【一七】尼父。孔子をいふ。
【一八】歸歟。故郷に歸りたしとの意。孔子陳國に在りて糧を絶ち、歎じて曰く歸らん歟、歸らん歟と。
【一九】鍾儀。楚の人にして晉に拘囚せらる、故に幽といふ。
【二〇】楚奏。楚國の歌を歌ふこと。
【二一】莊舃。越の人にして楚に仕へ富貴の身となる。
【二二】越吟。越の歌を歌ふこと。
【二三】窮達。窮は困窮するを、鍾儀を指す。達は立身出世すること、莊舃を指す。

【大意】世の離亂に遇ひ、各地に遷轉してより已に十二年、常に眷眷として故郷に歸らんことを思ひ、憂思に堪へず。今此樓に登り欄干に憑りて故國を望めば、荊山に蔽はれて復た見るべからず。歸路長遠にして川流深大なり。之に對すれば悲涕流下して自ら禁へず。昔孔子陳に在りて歸歟の嘆を發し、鍾儀は囚はれて楚歌をうたひ、莊舃は顯榮にして猶ほ越歌をうたひぬ。蓋し故國を慕ふは人情の同じき所にして、窮達異りと雖も其情は未だ嘗て同じからずんばあらず。日月の逾え邁かんことを惟ひ、河の清まんことを俟てども其れ未だ極らず。冀はくは王道の(二四)一平し(二五)高衢を假りて力を騁せんことを。(二六)匏瓜の徒に懸らんことを懼れ、(二七)井渫の食はれざらんことを畏る。歩して(二八)棲遲して以て(二九)徙倚すれば、白日忽として其れ將に匿れんとし、風(三〇)蕭瑟として竝び興り、天(三一)慘慘として色なく、獸狂顧して以て羣を求め、鳥相鳴いて翼を擧げ、原野(三二)闃として其れ人なく、(三三)征夫行いて未だ息まず。心悽愴として以て感發し、意(三四)忉怛として

【二四】一平。一たび清平になること。
【二五】高衢。大道なり。
【二六】匏瓜。ヒサゴなり。論語に子曰ク吾豈匏瓜ナランヤ、焉ゾ能ク繋リテ食ハザランヤとあり。
【二七】井渫。井をさらへて清らかにすること。易經に井渫ツテ食ハレズとあり、井水を浚ひ清めたるも人の飲む者なきをいふ。
【二八】棲遲。優游すること。
【二九】徙倚。徘徊といふが如し。
【三〇】蕭瑟。風の音の淋しき貌。
【三一】慘慘。暗き貌。
【三二】闃。寂に同じ。
【三三】征夫。行旅の人。王粲自ら謂ふ。
【三四】忉怛。憂勞なり。

（三五）憯惻す。（三六）階除に循つて下り降れば、氣（三七）胷臆に交憤し、夜（三八）參半にして寐ねられず。悵として（三九）盤桓して以て（四〇）反側す。

【大意】歳月逝きて反亂の鎮定せんことを望むも、未だ其期に及ばず。宇内一たび清平に歸し、帝王の高道を借りて、己の才力を騁せ、以て其の輔弼とならんことを冀ひ、また身匏瓜の如く、徒に繫りて食はず（俸祿の給なきに喩ふ）井水渫せるも飲む者なき（身を修め潔を全うするも、時君の用ひざるに喩ふ）が如くならんことを懼る。乃ち樓上に優游徘徊すれば、白日將に沒せんとし、風聲竝び興り、慘慘として瞑色あり。鳥獸の類、羣を求め翼を擧げて、將に巢塒に歸らんとし、農人家に歸りて原野に人なし。余獨り行路に在りて、未だ息まず、心之が爲に悲傷す。因つて階を下れば、いよいよ憤氣を増して胸中に滿ち、夜半に至るまで寐ねられず。或は起つて徘徊し或は臥して反側するのみ。

【三五】憯惻。悲傷すること。
【三六】階除。樓の階段。
【三七】胷臆。胸なり。
【三八】參半。參は及なり、夜半に及ぶこと。
【三九】盤桓。進み難き貌。
【四〇】反側。ねがへりすること。寐ねて安んぜざるなり。

（一）天台山に遊ぶ賦竝序

（二）孫興公

天台山は、蓋し山嶽の神秀なる者なり。海を渉

【一】天台山。山の名、會稽郡一の東南に在り。

れば則ち（三）方丈蓬萊あり。陸に登れば則ち（四）四明天台あり。皆（五）玄聖の遊化する所、靈仙の窟宅する所なり。夫れ其峻極の狀、嘉祥の美は、山海の瓌富を窮め、人神の壯麗を盡せり。（六）五嶽に列せず（七）常典に載するを闕く所以の者は、豈に立つ所冥奧にして、其路（八）幽逈なるを以てにあらずや。或は（九）景を重溟に倒にし、或は峰を千嶺に匿し。始めは（一〇）魑魅の塗を經、卒は無人の境を踐む。世を擧げて能く（一一）登陟すると罕に、王者も（一二）禋祀するに由なし。故に事（一三）常篇に絕え、名（一四）奇紀に標せり。然れども圖像の興る、豈虛しからんや。かの（一五）世を遺て道を翫び（一六）粒を絕ち（一七）芝を茹ふ者にあらずんば、烏んぞ能く輕擧して之に宅らんや。かの（一八）遠く寄せ冥に搜り、信に篤く神に通ずる者にあらずんば、何ぞ背て遙に想ひて之を存せんや。余が神を馳せ思を運

【二】孫興公、名は綽、字は興公、太原の人なり、晉に仕へて永嘉太守たり、意將に印を解きて幽寂に向はんとす、此山の神秀なるを聞き、其狀を圖せしめ遂に其賦を作る。賦成りて友人范榮期に示す、榮期曰く此賦地に擲てば必ず金聲をなさんと。

【三】方丈、蓬萊。海中の仙山。

【四】四明。山の名。

【五】玄聖、仙人なり。

【六】五嶽。泰山を東嶽、華山を西嶽、衡山を南嶽、恆山を北嶽、嵩山を中嶽となす、山の尊貴なる者なり。

【七】常典。經典なり。

【八】幽逈。深遠なり。

【九】重溟。海なり。景は影なり。

【一〇】魑魅。山神怪物なり。

【一一】登陟。山に登ること。

【一二】禋祀。山を祭ること。

【一三】常篇。卽ち經典なり。

【一四】奇紀。奇書なり。標は表に同じ。

【一五】世を遺て云云。俗世を棄てて神仙の道を學ぶこと。

【一六】粒を絕つ。穀物を食はざること。

【一七】芝。仙人の食ふ靈草の名。

【一八】遠く寄せ。情を遐遠に寄すること。

らし、晝は詠じ宵は興し、俛仰の間、已に再び升れるが若き所以の者なり。方に(一九)纓絡を解き永く茲嶺に託せん。吟想の至に任へず。聊か(二〇)藻を奮ひて以て懷を散ず。

(二一)太虛遼廓にして閡なく、自然の(二二)妙有を運らし、融けては(二三)川瀆となり、結んでは山阜となる。嗟(二四)台嶽の奇挺する所、寔に神明の扶持する所なり。(二五)牛宿に蔭れて以て峰を曜し、(二六)靈越に託して以て基を正し、根を結ぶこと(二七)華岱よりも彌く、直に指すこと(二八)九疑よりも高く、(二九)配天に(三〇)唐典に應じ、(三一)峻極を周詩に齊うす。(三二)邈たる彼の絕域、(三三)幽邃窈窕なり。(三四)近智の者は見るを守るを以て之かず。之く者は路の絕えたるを以て曉るなし。夏蟲の冰を疑ふを哂ひ、(三五)輕翮を整へて矯らんとを思ふ。理は隱るるとして彰れざるはなし。(三六)二奇を啓い

【一九】纓絡。世網なり、煩累也。
【二〇】藻。文章なり。
【二一】太虛。天なり。遼廓は廣遠なり。
【二二】妙有、妙は妙理、有は有形なり。
【二三】川瀆。瀆も川なり。
【二四】台嶽。天台山なり。奇挺は怪しく聳え立つこと。
【二五】牛宿。星の名。越の分野なり。
【二六】靈越。越をいふ、靈異の出づる所なり、故に靈といふ。
【二七】華岱。華山と泰山。岱は泰に同じ。
【二八】九疑。山の名。
【二九】配天。配は對なり、堯五嶽を祭りて天に配せり。
【三〇】唐典。書經堯典なり。唐は堯の姓、堯典に五嶽を祭りしこと見ゆ。
【三一】峻極。詩經に嵩高ナルハ惟レ嶽、峻クシテ天ニ極レりとあり。
【三二】邈。遠き貌。
【三三】幽邃。奥深きこと。窈窕は深極の貌。
【三四】近智。小智なり。
【三五】輕翮。神仙は皆鳥に乘りて行く、故に輕翮といふなり。
【三六】二奇。赤城と瀑布となり。赤城は山名、色赤く狀雲霞に似たり。

て以て(三七)兆を示す。赤城霞のごとく起りて以て標を建て、瀑布飛び流れて以て道を界す。靈驗を覩て遂に徂き、忽乎として吾將に行かんとし、(三八)羽人に丹丘に仍り、不死の(三九)福庭を尋ぬ。苟も(四〇)台嶺の攀づべくんば、亦何ぞ(四一)層城を羨まん。(四二)域中の常戀を釋て、超然の高情を暢べん。(四三)毛褐の森森たるを被り、(四四)金策の鈴鈴たるを振ひ、(四五)荒榛の蒙蘢を披き、(四六)峭崿の崢嶸に陟り、(四七)楢溪を濟りて直ちに進み、(四八)五界を落て迅く征く。(四九)穹隆の懸磴に跨り、萬丈の(五〇)絶冥に臨み、(五一)莓苔の滑石を踐み、壁立の(五二)翠屏を搏り、(五三)樛木の長蘿を攬り、(五四)葛藟の飛莖を援き、一たび(五五)垂堂を冒すと雖も、乃ち永く長生を存す。必ず誠を(五六)幽昧に契れば、重險を履むも逾ゝ平なり。既に克く(五七)九折を隮れば、路(五八)威夷として脩く通り、心目の

【三七】兆。形なり。
【三八】羽人。仙人なり。丹丘は仙人の住む處、晝夜常に明也。
【三九】福庭。幸福多き場所。
【四〇】台嶺。天台山なり。
【四一】層城。崑崙山の上に在り天帝の居なり。
【四二】域中。俗世間なり。
【四三】毛褐。羽衣なり。森森は衣の形容。
【四四】金策。錫杖なり。鈴鈴は策の聲。
【四五】荒榛。深林なり。蒙蘢は林の密なる貌。
【四六】峭崿。高峰なり。崢嶸は山の高き貌。
【四七】楢溪。溪の名。
【四八】五界。五縣の界なり、會稽記に此山モト五縣ノ餘地ト名ヅク、五縣トハ餘姚、鄞、句章、剡、始寧ナリとあり。
【四九】穹隆。長曲の貌。懸磴は石橋なり。
【五〇】絶冥。深淵なり。
【五一】莓苔。コケなり。
【五二】翠屏。綠色の屏風。
【五三】樛木。曲れる木。長蘿は長きつるくさ。
【五四】葛藟。ツタカツラなり。
【五五】垂堂。危險を冒すこと。漢書に千金ノ子ハ坐スルニ堂に垂セズとあり。
【五六】幽昧。神明の道をいふ。
【五七】九折。曲折多き險路をいふ。
【五八】威夷。長き貌。

(五九)寥朗を恣にし、緩歩の從容に任せ、(六〇)萋萋たる纖草を藉き、(六一)落落たる長松に蔭し、(六二)翔鸞の裔裔たるを覿、鳴鳳の(六三)嚶嚶たるを聽き、(六四)靈溪を過ぎて一たび濯ひ、煩想を心胷に疏き、(六五)遺塵を(六六)旋流に蕩し、(六七)五蓋の遊蒙を發し、(六八)羲農の絶軌を追ひ、(六九)二老の(七〇)玄蹤を躡む。

【大意】天道は廣遠にして限界なく、自然の妙理を運らし成形を萬物に賦す。融けては川流となり、結んでは山岳となる。ああ天台山の峻秀なる、實に神明の扶持する所にして、牛宿陰覆して其峰を曜し、其根を越國に託す。其廣さは華岱にまさり、其高さは九疑に過ぎ。堯典に堯五嶽を祭りて天に配すとあるも、此山の神秀亦之に應じ、周詩に嵩高なるは惟れ岳、峻く天に極るとあるも、此山亦之と高さを齊うす。而も遠く人跡を離れ幽邃にして窈窕なるを以て、小智の者は見る所を守りて往かず。たとひ行く者あるも、其路斷絶せるを以て之を能く曉るなし。夫れ夏蟲の寒氷あるを知らざるは、猶ほ小智の高道を知らざるが如し。余窃に之を笑ふ。乃ち飛鳥に乘りて此山に登らんと欲す。志の專至する所、隱

【五九】寥朗。心虛にして明朗なるをいふ。
【六〇】萋萋。草の美なる貌。
【六一】落落。松の高き貌。
【六二】翔鸞。飛ぶ鸞。裔裔は飛ぶ貌。
【六三】嚶嚶。和鳴する聲。
【六四】靈溪。溪の名。
【六五】遺塵。塵は六塵なり、色聲、香、味、觸、法をいふ。この六塵六根と接して種種の慾生ず。故に忘れたるも尚ほ殘ある故遺塵といふ。
【六六】旋流。深淵なり。
【六七】五蓋。貪慾、瞋恚、睡眠、調戲、疑悔なり。
【六八】羲農。伏犧と神農なり。
【六九】二老。老子と老萊子。
【七〇】玄蹤。玄は大なり。蹤は迹なり。

れたりと雖も彰れざるはなく、山上に赤城、瀑布の二奇ありて、先づ其形を示せり。赤城は霞の如く起りて標を立て、瀑布は懸流千仞、白布の流れ下るが如し。既に此山の靈驗を見、忽ち仙人に丹丘に過ひ、進んで不死の福地を尋ねんとす。此山既に攀づるを得ば、何ぞ層城を羨まんや。將に世俗の常情を釋て、吾が超脱せる高情を暢べんと欲す。因つて羽衣を被り錫杖を拄き、深林を披き高峰に登り、楢溪を渡り五縣の界を過ぎて進み、石橋を渡り深淵に臨み、苔蒸せる滑石を踐み、屏風を立てたるが如き巖壁を把り、葛藟を援きて登る。一たび垂堂の險を冒すと雖も、乃ち永く神仙長生の道を存すべく、誠信を結んで幽昧神明の道を欺かずんば、足此險を履むと雖も而も平道の易きよりも易し。既に九折の坂路を躋れば、路長遠にし心目を恣にし、緩歩に任すべく、自ら寬曠閑樂なるを覺ゆ。細草を敷きて長松の下に憩ひ、鸞鳳の飛鳴するを見聞し、靈溪を過ぎて煩俗の想を洗ひ、六塵五蓋を一掃して、伏犧神農の遺迹を追ひ、老聃老萊子の高道を求む。

(七一)陟降信宿して(七二)仙都に迄れば、雙闕雲に竦ちて以て路を夾み、(七三)瓊臺天に中して懸居し、朱闕林間に玲瓏として、玉堂(七四)高隅に陰映し、(七五)彤雲斐亹として以て(七六)櫺に翼し、(七七)皦日綺

【七一】陟降。上下すること。信宿は二泊すること。
【七二】仙都。仙人の集り居る處。
【七三】瓊臺。玉樓なり。
【七四】高隅。山隈なり。
【七五】彤雲。彩雲なり。斐亹は色の美しき貌。
【七六】櫺。窓の格子、レンジなり。
【七七】皦日。白日なり。綺疏は

疏に炯晃たり。(七八)八桂森挺して以て霜を凌ぎ、(七九)五芝秀を含んで晨に敷き、(八〇)惠風芳を(八一)陽林に佇み、(八二)醴泉溜を(八三)陰渠に涌かし、(八四)建木景を(八五)千尋に滅し、(八六)琪樹璀璨として珠を垂れ、(八七)王喬鶴を控いて以て天に冲し、(八八)應眞錫を飛ばして以て虚を躡み、神變の(八九)揮霍を騁せ、忽ち有を出でて無に入る。是に於て遊覽既に周く、體靜に心閑なり。(九〇)害馬已に去り、世事都て捐つ。刃を投ずるに皆虚し。牛を目るに全きなし。思を幽巖に凝らし、長川に朗詠す。

爾して乃ち(九一)義和午に亭り、(九二)遊氣高く褰げ、(九三)法鼓琅として以て響を振ひ、衆香馥として以て煙を揚ぐ。肆に(九四)天宗を觀、爰に(九五)通仙を集め、挹むに玄玉の膏を以てし、漱ぐに(九六)華池の泉を以てし、散ずるに(九七)象外の說を以てし、

窓なり。疏は刻穿するなり、刻穿して綺文をなす、之を綺疏といふ。

【七八】八桂。桂樹八本叢生するなり。森挺は高く聳ゆること。

【七九】五芝。青黄赤白黑の靈草。

【八〇】惠風。和風なり。

【八一】陽林。南方の林。

【八二】醴泉。美泉なり。

【八三】陰渠。山北の渠なり。

【八四】建木。木の名。天帝の從りて上下する所なり。

【八五】千尋。八尺を尋といふ。

【八六】琪樹。玉樹なり。璀璨は珠の垂るる貌。

【八七】王喬。仙人の名、周の靈王の太子晉なり。

【八八】應眞。眞道を得たる人。錫は錫杖。

【八九】揮霍。變易する貌。

【九〇】害馬。莊子に黃帝牧馬童子ニ遇ヒ、天下ヲ治メンコトヲ問フ、童曰ク、天下ヲ治ムルハ何ゾ馬ヲ牧スルニ異ランヤ、亦タダ其馬ニ害アル者ヲ去ランノミと。ここは物慾の意に用ふ。

【九一】義和。日の御者なり。

【九二】遊氣。海氣なり。

【九三】法鼓。鐘なり。琅は聲なり。

【九四】天宗。老君なり。

【九五】通仙。衆仙なり。

【九六】華池。崑崙山上にある池なり。

【九七】象外の說。道教なり。

暢ぶるに（九八）無生の篇を以てす。有を遣るの盡きざるを悟り、無を渉るの間あるを覺り、色空を泯して以て跡を合せ、忽ち有に卽いて玄を得、（九九）二名の同出を釋て、一無を（一〇〇）三幡に消し、語樂を恣にして以て日を終へ、寂默を不言に等うし、萬象を渾して以て冥觀し（一〇一）兀として體を自然に同うす。

【大意】上下すること再宿にして仙都に至れば、雙樓雲中に竦ちて路を夾み、高臺天半に在りて空に懸れるが如く、朱閣玉堂林間に照映し、彩雲窓間に棚引き、白日綺窓を照し、桂樹高く霜に儆りて枯れず、芝草秀でて榮を吐き、和風芳を積み醴泉北渠に湧き、建木高きこと千尋にして影なく、玉樹橈みて珠を垂れ、神仙錫杖を執り鶴を伴ひて虛空を行き、能く其神變の術を馳せ、有爲を出でて無爲の中に入る。余周く遊覽して體靜かに心閑にして、嗜慾已に去り世事悉く忘れ、道の至妙を得て庖丁牛を解くに目に全牛を見ず、刃を投ずるに皆虛しきが如し（莊子養生主篇に見ゆ）乃ち思を幽巖に凝らし、高詠して長川に臨む。時に日既に天に中し海氣また收まり、法鼓を撃ち名香を燒き、老君に謁し衆仙を會し、玄玉の膏を酌み、華池の泉に漱ぎ、道釋の說を聞きて惑を釋き、有を脫するの未だ盡きざるを悟り、無に入るの尙ほ間隙あるを知る。因つて色空を滅盡して一となし、忽ち有を遣りて玄道を得、有無の二者を棄てて一無に歸

【九八】無生の篇。佛道をいふ。
【九九】二名。有と無となり。此の二者同じく心より出づ、故に同出といふ。
【一〇〇】三幡。色、色空、觀なり。
【一〇一】兀。無知の貌。

し、既に其道を得て語默自ら齊しく、心に營なくして、自然の道に合體す。

蕪城の賦

(一)鮑明遠

(二)瀰迆たる(三)平原、南のかた(四)蒼梧、(五)漲海に馳せ、北のかた(六)紫塞、(七)鴈門に走き、柂くに漕渠を以てし、(八)軸するに(九)崑岡を以てし、重江複關の(一〇)隩、四會五達の(一一)莊あり。昔(一二)全盛の時に當り、車は(一三)轊を挂け、人は肩に駕り、(一四)廛閈地を撲し、歌吹天に沸き、貨を(一五)鹽田に孳くし、利を(一六)銅山に鏟り、才力雄富にして士馬精妍なり。故に能く秦法より侈り周令に佚ぎ、(一七)崇墉を劃き(一八)濬洫を刳り、世を修うして以て(一九)休命ならんことを圖る。是

【一】鮑明遠。鮑昭、字は明遠、東海の人なり、宋の孝武帝の時、臨海王子瑱荊州を鎭す、鮑昭之に仕へて參軍たり、隨つて廣陵に至る。子瑱叛す。昭、廣陵の故城荒蕪せるを見る。廣陵は漢の吳王濞の都せし所にして、濞も亦叛逆して漢の爲に滅さる。今子瑱の事濞に同じきを以て、遂に感じて此賦を作り以て諷す。

【二】瀰迆。相連りて漸く平なろ貌。

【三】平原。卽ち廣陵なり。

【四】蒼梧。地名。

【五】漲海。海の名。

【六】紫塞。地名。

【七】鴈門。地名。

【八】軸。車なり。

【九】崑岡。原岡といふが如し。

【一〇】隩。要なり。

【一一】莊。大道なり。

【一二】全盛。漢の時代をいふ。

【一三】轊。車軸なり。

【一四】廛。民居なり。閈は里門なり。

【一五】鹽田。吳に鹽田あり、其水を煮て鹽を製す。

【一六】銅山。史記に吳ニ豫章郡ノ銅山アリ、吳王濞盜ンデ錢ヲ鑄、海水ヲ煮テ鹽トナスとあり。

【一七】崇墉。高き城。

【一八】濬洫。深き池。

【一九】休命。美命。命は天命な

を以て（二〇）板築雉堞の殷、（二一）井幹烽櫓の勤、（二二）格五嶽よりも高く、（二三）袤三墳よりも廣く、（二四）崒として斷岸の若く、（二五）矗として長雲に似たり。磁石を製して以て衝を禦ぎ、（二六）赬壤を糊して以て文を飛ばし、（二七）碁扃の固護を觀るに、將に（二八）萬祀にして一君ならんとす。（二九）三代に出入すること五百餘載、竟に瓜のごとく剖けて豆のごとく分る。

【大意】廣陵の平原たる、南は蒼梧、漲海に及び、北は紫塞、鴈門に達し、舟は漕渠に浮び、車は原岡を行き、南に二江ありて關要をなし、道路遠近に通じて四通五達なり。昔呉王全盛の時、車軸相撃ち、人肩相摩し、民居地に遍く歌吹天に轟き、海を煮て鹽となし、銅を削りて錢を鑄、以て貨財を殖し、人皆勇才壯力にして、士馬盛强なりき。故に奢侈周秦の法令に過ぎ、乃ち高城を築き、深池を鑿ち、以て國家長久の計を立つ。因つて築城構樓を事とし、其制五嶽よりも高く、三墳よりも廣く、磁石を以て門となし以て衝撃を禦ぎ、赤土を粘して文飾となし、門闕の堅牢なること眞に

り。

【二〇】板築。牆を築くこと。雉堞は城牆なり。殷は盛なること。

【二一】井幹。高樓なり。烽櫓は烽火を擧ぐるヤグラ。

【二二】格。量度なり。五嶽は泰山、華山、衡山、恆山、嵩山の五山をいふ。

【二三】袤。廣さなり。三墳は詩經に見ゆる汝墳・淮墳、河墳なり。

【二四】崒。高峻なり。

【二五】矗。直なり。

【二六】赬壤。赤土なり。

【二七】碁扃。城闕といふが如し。固護は堅牢といふが如し。

【二八】萬祀。萬年なり。

【二九】三代。漢より晉末に至るまで三代、五百餘年なり。

萬歳一君にして動搖なきが如し。然も三代五百餘年の今日に於ては、竟に亡滅して其土地瓜剖豆分せられぬ。

(三〇)澤葵井に依り、荒葛塗に罥り、(三一)壇には(三二)虺蜮を羅ね、階には(三三)麏鼯を闘はし、(三四)木魅山鬼、野鼠城狐、風に嘷え雨に嘯き、昏に見え晨に趨り、飢鷹吻を厲ぎ、(三五)寒鴟雛を嚇し、(三六)伏虣藏虎、血を乳にし膚を餐ふ。(三七)崩榛路を塞ぎ(三八)崢嶸たる(三九)古馗あり。白楊早く落ち、塞草前に衰へ、(四〇)稜稜たる霜氣、(四一)蔌蔌たる風威、孤蓬自ら振ひ、驚砂坐に飛び、(四二)灌莽杳として際なく、(四三)叢薄紛として其れ相依る。(四四)通池既已に夷ぎ、(四五)峻隅又以て頽る。直に千里の外を視れば、唯黄埃を起すを見る。思を凝らして寂に聽けば、心傷んで已に摧く。若夫れ(四六)藻扃黼帳、歌堂舞閣の基、(四七)琁淵碧樹、(四八)弋林釣渚の館、(四九)吳蔡齊秦の聲、(五〇)魚龍爵馬の玩、皆薰歇き燼滅

【三〇】澤葵。苺苔なり。
【三一】壇。堂なり。
【三二】虺蜮。虺はマムシ。蜮は水中に棲み人を害する蟲の名短狐ともいふ。
【三三】麏鼯。麏は鹿の類の獸。鼯はムササビ。
【三四】木魅。山の怪物。
【三五】寒鴟。こごえたるトビ。
【三六】伏虣。虣は暴に同じ、隱れたる猛獸、藏虎は隱れたる虎。
【三七】崩榛。崩れたる叢木。
【三八】崢嶸。深暗の貌。
【三九】古馗。古き道。
【四〇】稜稜。霜氣嚴冬の貌。
【四一】蔌蔌。風聲勁疾の貌。
【四二】灌莽。草木雜生する處。杳は遙なり。
【四三】叢薄。草木の雜生する處。
【四四】通池。城濠なり。
【四五】峻隅。高城なり。
【四六】藻扃。扃に雕畫を施したるもの。黼帳は彫畫せるトバリ。
【四七】旋淵。玉池なり。碧樹は玉樹なり。
【四八】弋林。鳥を射る林。
【四九】吳蔡。以下皆國の名。聲は歌なり。
【五〇】魚龍爵馬。皆飾となして賞玩する物。

え、光沈み響絶え、東都の妙姫、南國の(五一)麗人、(五二)蕙心紈質、玉貌(五三)絳脣、魂を幽石に埋め、骨を窮塵に委せざるはなし。豈(五四)同輦の愉樂、離宮の苦辛を憶はんや。天道如何ぞ恨を呑む者多き。琴を抽んで(五五)操を命じ、蕪城の歌を爲る。

【大意】昔日堂構階庭の盛、今並に荒草の蕪する所となり、蟲獸鬼魅出沒往來し、風雨に嘷嘯して昏曉を論ぜず。飢鷹寒鴟は觜を厲きて雛を貪り、虎狼は潜匿して人の血肉を覓め、榛莽崩れて路を塞ぎ、古道深暗にして草枯れ、池は埋もれ城は頽れ、千里の間ただ黄塵の起るを見るのみ。誠に傷心の極なり。歌堂舞閣、玉池珠樹、射鳥の處、釣漁の館、歌舞の妓、珍玩奇什の類に至りては、皆芳香已に歇き化して灰燼となり、華光沈んで音響絶え、妙姫佳人、嬌美の心、輕細の質、白貌朱脣、皆已に死し、同車の遊以て樂となし、深宮に閉居し以て苦辛となせる生時を知らざるなり。ああ天道如何ぞ恨を呑んで死する者多からしむる。余乃ち琴を抱いて一曲を奏し、蕪城の歌を作る。

歌に曰く、邊風急にして城上寒し。(五六)井徑滅びて丘隴(五七)殘す。千齡萬代、共に盡きて何をか言は

【五一】麗人。美女なり。
【五二】蕙心。蕙は香草の名、心の美なること。紈質の紈は白絹なり、色白くして肌理の細かなること。
【五三】絳脣。赤き唇。
【五四】同輦。同輿に同じ。輦車に同乘すること。
【五五】操。曲といふが如し。
【五六】井徑。屋三を井となす。徑は道なり。
【五七】殘。そこなはろること。

ん。

【大意】余今來りて廣陵城邊を徘徊すれば、邊風急にして轉た寒く、行道荒蕪して、丘隴も亦摧殘す。歳既に久しくして、萬物皆舊觀を改めぬ。ああ復た何をか言はん。

宮殿

魯の靈光殿の賦竝序　（一）王文考

魯の靈光殿は、蓋し（二）景帝の程姬の子、（三）恭王餘の立つる所なり。初め恭王始めて（四）下國に都し、好んで宮室を治め、遂に（五）魯僖の基兆に因りて營む。漢の中ごろ微にして、（六）盜賊の奔突するに遭ひ、（七）西京の（八）未央、建章の殿より、皆（九）隳壞せらる。而も靈光のみ（一〇）巋然として獨り存せり。意ふに豈神明の依憑支持して、以て漢室を保てる者にあらずや。然れども其規矩

【一】王文考。王延壽、字は文考、後漢の人王逸の子なり、時に蔡邕また此作あり、十年成らず、延壽の此作を見て遂に隱して出さず、延壽時に年二十、延壽年二十四の時、漢江を過ぎ溺れて死す。

【二】景帝。前漢の天子。

【三】恭王餘。魯の恭王、名は餘。

【四】下國。天子の都を上國といひ諸侯の都を下國といふ。

【五】魯僖。魯の僖公。基兆は始跡なり。

【六】盜賊。王莽の簒奪をいふ。

【七】西京。長安なり。

【八】未央、建章。宮殿の名。

【九】隳壞。破壞せらるること。

【一〇】巋然。高大堅固の貌。

制度の上（二一）星宿に應ぜるも、亦永く安かりし所以なり。予（二二）南鄙より客として、（二三）藝を魯に觀、斯を視て眙いて曰く、嗟乎詩人の興、物に感じて作る。故に（二四）奚斯の僖を頌する、其（二五）路寢を歌ひ、而して功績辭に存し、德音聲に昭かなり。物は賦を以て顯はれ、事は頌を以て宣ぶ。賦にあらず頌にあらずんば、將た何をか述べん。遂に賦を作りて曰く、

粤若古を稽ふるに、（二六）帝漢の祖宗、（二七）濬哲欽明にして、（二八）五代の（二九）純熙を殷にし、（三〇）伊唐の（三一）炎精に紹ぎ、（三二）天衢を荷ひて以て元に亨り、宇宙を廓にして京を作り、（三三）皇極を敷きて業を創め、神道に協ひて大に寧し。是に於て百姓昭明にして、（三四）九族敦く序づ。乃ち（三五）孝孫に命じ、魯に侯たらしめ、（三六）介珪を錫ひて以て（三七）瑞と作し、（三八）附庸を宅きて（三九）宇を開く。乃ち靈

【二一】星宿。星なり。
【二二】南鄙。荊州なり。
【二三】藝。禮樂なり。魯には周公、孔子の遺風あればなり。
【二四】奚斯。人名、魯の公子なり。僖は僖公なり。
【二五】路寢。正殿なり。僖公路寢を立つるや、奚斯、清廟奕奕タリの頌を作る。
【二六】帝漢。漢の天子。
【二七】濬哲。深智なり。欽明は愼明なり。
【二八】五代。周、殷、夏、舜、堯なり。
【二九】純熙。純は大なり。熙は廣なり。
【三〇】伊唐。伊はコノと訓ず。唐は堯の姓。
【三一】炎精。火德なり。漢の高祖は堯の後にして火德を以て王たり。
【三二】天衢。天道といふが如し。
【三三】皇極。大中至正の道也。
【三四】九族。高祖より玄孫までの親族。
【三五】孝孫。恭王を指す。
【三六】介珪。大圭なり、諸侯の天子より賜はる玉なり。
【三七】瑞。瑞玉、諸侯たるシルシなり。
【三八】附庸。大國に附屬せる小國をいふ。
【三九】宇。國といふが如し。

光の(三〇)秘殿を立て、(三一)紫微に配して(三二)輔となし、(三三)明堂を(三四)少陽に承け、昭列して(三五)奎の分野に顯る。彼の靈光の狀たるを瞻るに、則ち(三六)嵯峨嶵嵬、巋巍𡾊㟪たり。吁畏るべきかな其の人を駭すや。(三七)迢嶢倜儻、豐麗博敞なり。(三八)洞轇轕として其れ垠なく、邈として世に希にして特り出で、差(三九)瓌譎にして(四〇)鴻紛たり。屹として山のごとく峙ちて以て(四一)紆鬱たり。隆として青雲に(四二)崛岉たり。(四三)鬱坱圠として以て(四四)嶒崍、(四五)崱繒綾として龍鱗のごとく、(四六)汨磑磑として以て(四七)璀璨たり。(四八)赫燡燡として(四九)坤を燭し、狀(五〇)積石の(五一)鏘鏘たるが若く、又(五二)帝室の威神に似たり。崇墉岡のごとく連りて以て嶺のごとく屬き、朱闕巖巖として雙び立ち、高門(五三)閶闔に擬し、(五四)二軌を方べて並び入る。

【三〇】秘殿。秘は深なり。
【三一】紫微。天子の宮殿。
【三二】輔。輔翼なり。
【三三】明堂。天子の政事堂なり。
【三四】少陽。東方なり。
【三五】奎。星の名、魯の分野なり。
【三六】嵯峨。以下皆高峻の貌。
【三七】迢嶢。高き貌。倜儻は卓異なり。博敞は廣きこと。
【三八】洞轇轕。廣大の貌。
【三九】瓌譎。奇異なり。
【四〇】鴻紛。鴻は大。紛は多なり。
【四一】紆鬱。曲深の貌。
【四二】崛岉。高き貌。
【四三】鬱坱圠。際限なき貌。
【四四】嶒崍。深空の貌。
【四五】崱繒綾。參差として齊しからざる貌。
【四六】汨磑磑。高峻の貌。
【四七】璀璨。雜彩の色なり。
【四八】赫燡燡。光明の貌。
【四九】坤。地なり。
【五〇】積石。山の名。
【五一】鏘鏘。華盛の貌。
【五二】帝室。天帝の宮殿。
【五三】閶闔。天の門なり。
【五四】二軌。二車なり。

【大意】今漢初の昔を考ふるに、漢帝の祖宗皆深智愼明にして、五代大廣の德を盛にし、帝堯火德

の運を繼ぎ、天道の大通に賴りて宇宙を開き、京室を作り、大中の道を敷いて大統を創め、神道に合して大に安し。乃ち恭王に命じて魯に君たらしめ、大圭を賜ひて瑞信となし、附庸を置きて國を開かしむ。恭王乃ち靈光殿を建てて、天子の宮殿に配し、以て皇室の輔翼となし、漢の明堂に擬して東方奎宿の分野に昭列す。熟〻此殿の形狀を觀るに、高大にして眞に人を驚かすに足る。高峻卓異、直上して高く靑雲の中に入り、雜綵の色爗爗として地を照らし、帝居の華盛なるが如く、また紫微宮の神靈にして人を驚かすが如く、高墻遠く連りて岡嶺の如く、朱門殿前に竝び立ち、二車相竝んで入るを得。

是に於てか乃ち夫の(五五)太階を歷て以て其堂に造り、俯仰顧眄して東西に(五六)周章す。(五七)形彩の飾徒に何をか爲さん。(五八)灦灦涆涆、(五九)流離爛漫として、皓壁(六〇)皜曜して以て月のごとく照り、丹柱(六一)歙赩して電のごとく爗き、霞のごとく駮に雲のごとく蔚に、陰れるが若く陽るが若く、(六二)瀖濩燐亂して煒煒煌煌たり。(六三)陰夏に隱れて以て中に處れば、(六四)霐寥窲窱として以て崢嶸たり。(六五)鴻爌炾として

【五五】太階。高き階段。
【五六】周章。狼狽なり、驚き視るなり。
【五七】形彩。赤き光。
【五八】灦灦涆涆。光明の貌。
【五九】流離爛漫。分散の貌。
【六〇】皜曜。白く光ること。
【六一】歙赩。赤く光ること。
【六二】瀖濩燐亂。以下光色亂れ動きて目眩惑するをいふ。
【六三】陰夏。北に向ふの屋をいふ。
【六四】霐寥窲窱、崢嶸。皆幽深の貌。
【六五】鴻爌炾、爣閬。寬明の貌。

以て爥閬たり。(六六)飂蕭條として凊泠たり。滴瀝を動かして以て響を成し、殷雷應じて其れ驚くが若く、耳(六七)嘈嘈として以て聴を失ひ、目(六八)矎矎として精を喪ひ、(六九)密石と(七〇)琅玕とを駢べ、(七一)玉瓙と璧英とを齊うす。遂に金扉を排いて北に入れば、(七二)宵藹藹として(七三)晻曖たり。(七四)旋室㛹娟として以て(七五)窈窕たり。(七六)洞房叫窱として幽邃なり。(七七)西廂踟蹰して以て(七八)閑宴、(七九)東序重深にして奥祕なり。(八〇)屹鏗瞑として以て(八一)勿罔なり。(八二)屑黶翳として以て(八三)懿濞なり。魂悚悚として其れ驚き、心(八四)猥猥として悸を發す。

【大意】 高階を過ぎて殿堂に至り、俯仰顧眄して驚き視れば、光彩爛然として言ふばかりなし。壁の白きは月の輝くが如く、柱の赤きは電の走るが如く、光明は霞の斑なるが如く、深邃は雲の蔚なるが如く、光色動亂して人目を眩せしむ。陰夏の中に入れば、或は深邃、或は寛明にして、清涼の氣秋の如く、簷に滴瀝を垂れ、纔に小響を成せば、室内之に應じ、其聲雷の驚くが如く、

【六六】飂蕭條、凊泠。清涼の貌。
【六七】嘈嘈。かまびすしきこと。
【六八】矎矎。炫燿して目正しからざるなり。
【六九】密石。密理の石。
【七〇】琅玕。玉なり。
【七一】玉瓙、璧英。皆玉なり。
【七二】宵藹藹。小暗き貌。
【七三】晻曖。暗き貌。
【七四】旋室。曲室なり。㛹娟は廻曲の貌。
【七五】窈窕。幽深なる貌。
【七六】洞房。通房なり。叫窱は遠き貌。
【七七】西廂。西のヒサシ。踟蹰は相連る貌。
【七八】閑宴。閑靜なること。
【七九】東序。東のヒサシ。
【八〇】屹鏗瞑。視て明かならざること。
【八一】勿罔。審ならざる貌。
【八二】屑黶翳。暗蔽の貌。
【八三】懿濞。深邃の貌。
【八四】猥猥。懼る貌。

耳聾し目眩す。金扉を排して北に入れば、藹藹として晝晴く、更に曲室あり、美麗にして幽深。又通房あり、長遠にして陰暗。東西の二廂また重深にして隱密なり。之を視れども明かならず、之を望めども審かならず、神魂之が爲に驚くばかりなり。

是に於て詳に其棟宇を察し、其結構を觀れば、規矩天に應じ、上（八五）觜陬に憲り、（八六）偃佹として雲に起り、（八七）嶔崟離樓たり。（八八）三間四表（八九）八維九隅あり。（九〇）萬楹叢り倚り、（九一）磊砢として相扶け、（九二）浮柱岧嵽として以て星のごとく懸り、（九三）漂嶢峴として（九四）枝柱し、飛梁（九五）偃蹇として以て虹のごとく指し、（九六）揭蘧蘧として騰り湊り、（九七）層櫨磥佹として以て（九八）岌峩し、（九九）曲枅（一〇〇）要紹として環句し、（一〇一）芝栭攢羅して以て（一〇二）戢孴し、（一〇三）枝牚杈枒として斜に據り、傍に（一〇四）夭蟜し

【八五】觜陬。營室星なり。
【八六】偃佹。重累の貌。
【八七】嶔崟。峻しき貌。離樓は衆木相交る貌。
【八八】三間四表。室三間ごとに則ち表あり。
【八九】八維。四方四角なり。中央と八維とを合せ九隅といふ。
【九〇】萬楹。楹は柱なり。
【九一】磊砢。壯大の貌。
【九二】浮柱。梁上の短柱なり。岧嵽は遠きこと。
【九三】漂。輕き貌。嶢峴は危き貌。
【九四】枝柱。支ふること。
【九五】偃蹇。曲れる貌。
【九六】揭。擧るなり。蘧蘧はおほく攢る貌。
【九七】層櫨。かさなれるマスがた。磥佹は危き貌。
【九八】岌峩。危き貌。
【九九】曲枅。まがれるマスがた。
【一〇〇】要紹、環句。曲りて相連る貌。
【一〇一】芝栭。梁上の短柱、晝くに芝草の文を以てす。攢羅は聚り列ること。
【一〇二】戢孴。聚る貌。
【一〇三】枝牚。梁上の交木。杈枒は參差の貌。
【一〇四】夭蟜。特出する貌。

て以て横出し、互に（一〇五）黝糾して（一〇六）搏負し、下は（一〇七）岪蔚として以て（一〇八）璀錯し、上は（一〇九）崎巇として（一一〇）重注し、（一一一）捷獵として鱗のごとく集り、（一一二）支離して分れ赴き、縦横（一一三）駱驛し、各趣く所あり。爾して乃ち（一一四）懸棟結阿、（一一五）天窻綺疎あり。（一一六）圓淵方井には反に荷蕖を植ゑ、秀を發し榮を吐き、（一一七）菡萏披敷し、（一一八）綠房紫的あり。（一一九）窋窡として珠を垂る。（一二〇）雲楶藻梲、龍桷彫鏤し、飛禽走獸、木に因りて姿を生し、奔虎（一二一）攫拏して以て（一二二）梁倚し、（一二三）仡として（一二四）奮亹して鬐を軒げ、虬龍（一二五）騰驤して以て（一二六）蜿蟺たり。（一二七）頷として動くが若くにして（一二八）躨跜たり。朱鳥翼を舒べて以て（一二九）衡に峙ち、（一三〇）騰蛇蟉虯して榱を遶り、白鹿（一三一）欂

【一〇五】黝糾。特出する貌。
【一〇六】搏負。負ふこと。
【一〇七】岪蔚。特起する貌。
【一〇八】璀錯。衆盛の貌。
【一〇九】崎巇。危險の貌。
【一一〇】重注。かさなりつくこと。
【一一一】捷獵。相接する貌。
【一一二】支離。分散なり。
【一一三】駱驛。續きて絕えざる貌。
【一一四】懸棟結阿。屋下更に重梁をなし、相結び屈曲して屋をなすなり。阿は屋の四垂也。
【一一五】天窻綺疎。天窻は高窓なり。疎は刻穿するなり、刻穿して綺文をなす、故に綺疎といふ。
【一一六】圓淵方井。天井に圓き淵を畫くなり。
【一一七】菡萏。蓮花なり。披敷は花を開くこと。
【一一八】綠房紫的。蓮の實なり。的は菂に同じ。
【一一九】窋窡。物の穴中に在る貌。
【一二〇】雲楶。梁上の柱の畫くに雲の模様を以てせるもの。梲も楶に同じ、畫くに水草の文を以てす、故に藻梲といふ。龍桷は龍を畫きし椽。
【一二一】攫拏。相搏つこと。
【一二二】梁倚。相著くなり。
【一二三】仡。頭を擧ぐること。
【一二四】奮亹。振ひたつこと。
【一二五】騰驤。躍りあがること。
【一二六】蜿蟺。わだかまること。
【一二七】頷。動くこと。
【一二八】躨跜。動く貌。
【一二九】衡。門上の木。
【一三〇】騰蛇。躍りあがる蛇。蟉虯は曲る貌。
【一三一】欂櫨。柱頭のマスガタ。

櫨に(一三二)孑蜺し、(一三三)蟠螭宛轉として楣を承け、狡兎(一三四)柎側に跧伏し、(一三五)猨狖椽を攀ぢて相追ひ、玄熊(一三六)蚺蜒として以て(一三七)齗齗たり。却いて(一三八)負載して(一三九)蹲蜷し、首目を齊うして以て(一四〇)瞪眄し、徒に(一四一)眽眽として(一四二)狋狋たり。

【大意】詳に其結構を觀れば、能く天文星宿に應じ、高く雲外に聳え、衆木錯綜し、萬柱叢り倚り、參差として相扶持し、浮柱高遠にして危く相支持し、飛梁屈曲して虹の如く、短柱攢叢して斜に據り、縱橫駱驛して各趣向を凝らせり。又懸棟、結阿、天窓、綺疎あり。天井には畫くに圓淵及び蓮花を以てし、花葉下に向つて垂れ、其實紫綠相交り、珠の下垂するが如し。柱梁には禽獸蟲魚を畫き、虎あり龍あり朱鳥あり白鹿あり狡兎あり玄熊あり。皆首目を駢べて怒り視る。

(一四三)胡人遙に上楹に集り、(一四四)儼雅として跽いて相對し、(一四五)仡欺猥として以て(一四六)鵰眖し、(一四七)顤顟顟

【一三二】孑蜺。首を延ばす貌。
【一三三】蟠螭。わだかまれる龍。宛轉は盤屈する貌。
【一三四】柎側。柎は斗栱の上の橫木。跧伏は足を縮めて伏すること。
【一三五】猨狖。猿の類なり。
【一三六】蚺蜒。舌を吐く貌。
【一三七】齗齗。齒の根を現すこと。
【一三八】負載。棟梁を負ふなり。
【一三九】蹲蜷。うづくまること。
【一四〇】瞪眄。視ること。
【一四一】眽眽。橫目に視る貌。
【一四二】狋狋。犬の怒る貌。
【一四三】胡人。外夷なり。
【一四四】儼雅。跪く貌。
【一四五】仡欺猥。大首なり。
【一四六】鵰眖。隼の如く睨むこと。
【一四七】顤顟顟。大首にして深目の貌。

として(二四八)睽睢し、狀危處に悲愁するが若く、(二四九)憯として(二五〇)嚬蹙して悴を含めり。神仙棟間に(二五一)岳岳として、玉女窓を闚ひて下視し、(二五二)忽瞟眇として以て(二五三)響像たり。鬼神の髣髴たるが若し。天地を圖畫し羣生を品類し、雜物奇怪、山神海靈、其狀を寫し載せ、之を(二五四)丹青に託し、千變萬化し、事各〻形を繆へ、色に隨ひ類に象り、曲に其情を得たり。上は(二五五)開闢遂古の初を紀し、(二五六)五龍翼を比べ、(二五七)人皇九頭あり。(二五八)伏羲は鱗身にして(二五九)女媧は蛇軀なり。(二六〇)鴻荒樸略にして厥狀(二六一)睢盱たり。(二六二)煥炳として觀るべきは黃帝唐虞なり。(二六三)軒冕庸を以てし衣裳殊るあり。下は(二六四)三后、(二六五)淫妃、亂主、忠臣、孝子、烈士、貞女に及ぶまで、賢愚成敗載敍せざるはなし。惡は以て世を誡め、善は以て後に示す。

【二四八】睽睢。目を張る貌。
【二四九】憯。懼ること。
【二五〇】嚬蹙。憂ふる貌。
【二五一】岳岳。立つ貌。
【二五二】忽瞟眇。視て明かならざる貌。
【二五三】響像。依稀といふが如し、ほのぐらきこと。
【二五四】丹青。繪畫なり。
【二五五】開闢。天地の開けし初、遂古は上古なり。
【二五六】五龍。上古五龍あり、兄弟五人、黃伯、黃仲、黃叔、黃季、黃少といふ、九州を分ち治む。
【二五七】人皇。上古の天子。九頭あり。
【二五八】伏羲。上古の天子、鱗身にして人首なりといふ。
【二五九】女媧。上古の天子、蛇身にして人首なりといふ。
【二六〇】鴻荒。太古なり、樸略は質朴なること。
【二六一】睢盱。質朴の貌。
【二六二】煥炳。光明なり。
【二六三】軒冕。軒は車、冕は冠。庸は功なり。功ある者には軒冕を賜ふなり。
【二六四】三后。后は君なり、夏の桀王、殷の紂王、周の幽王なり、共に亂暴の君なり。
【二六五】淫妃。夏の妹喜、殷の妲己、周の褒姒、共に國を衰亡せしめし妃なり。

【大意】木を以て胡人の形を刻みて之を上楹に置く。大首深目にして其覗ること鶻の如く、危處に居るを悲愁して嚬蹙する者の如し。又神仙の形を棟間に刻み、玉女の形を窓上に刻み、其形像髣髴として、有るが如く無きが如し。此他天地間の雜物奇怪を圖畫し、其狀各〻異り。然も皆よく其眞狀を盡せり。上は太古の帝王、五龍の翼を比ぶる、人皇の九頭ある、伏犧の鱗身なる、女媧の蛇身なるあり。太古質朴なるを以て、其形を畫くこと亦隨つて質朴なり。其の炳煥として觀るべきものに至りては、黃帝堯舜あり。功に因つて車服を賜ひしを以て衣裳各〻異れり。下は三后、淫妃より忠孝貞烈の士女に至るまで、悉く之を畫き、その賢愚成敗悉く之を載せざるはなし。惡は以て世を誡め、善は以て後世に示さんが爲なり。

是に於てか連閣宮を承け、(一六六)馳道周環し、(一六七)陽榭より外を望めば、高樓(一六八)飛觀あり。(一六九)長塗升降して(一七〇)軒檻曼延し、(一七一)漸臺池に臨んで(一七二)層曲九成あり。屹然として特り立ち、(一七三)的爾として形を殊にし、高く(一七四)華蓋に徑り、仰いで天庭を看る。(一七五)飛陛揭孽として雲に緣りて、上り征き、中坐に景を垂れ、頫して流星

【一六六】馳道。人君の行く所の道なり。
【一六七】陽榭。高臺なり、日に近き故に陽といふ。
【一六八】飛觀。高樓といふに同じ。
【一六九】長塗。閣道なり。
【一七〇】軒檻。欄干なり。曼延は長くして絕えざること。
【一七一】漸臺。星の名、因つて臺の名とす。
【一七二】層曲九成。高く九重より成るなり。
【一七三】的爾。分明なる貌。
【一七四】華蓋。星の名。
【一七五】飛陛。高き階段。揭孽は極めて高き貌。

を視る。千門相似て萬戸一の如く、巖突洞出し、（一七六）逶迤として（一七七）詰屈し、周行すること數里、仰いで日を見ず。何ぞ宏麗の（一七八）靡靡たる。咨力を用ふること妙勤なり。夫の通神の俊才にあらずんば、誰か能く此勳を（一七九）剋成せん。（一八〇）坤靈の寶勢に據り、（一八一）蒼昊の（一八二）純殷を承け、陰陽の變化を包ね、元氣の（一八三）烟熅を含み、（一八四）玄醴陰溝に騰涌し、甘露宇に被りて下り臻り、（一八五）朱桂南北に（一八六）黝儵として、（一八七）蘭芝東西に（一八八）阿那たり。祥風（一八九）翕習として以て（一九〇）颯灑たり。芳香を激して常に芬し。神靈その棟宇を扶け、千載を歴て彌〻堅く、永く安寧にして以て祉福あり、長く大漢と與にして久しく存せり。實に至尊の（一九一）御する所、延壽を保ちて子孫に宜し。苟に貴ぶべきこと其れ斯の若し。孰か亦云ひて珍とせざる者あらんや。

【大意】連閣ありて此殿に接し、馳道また之を環れり。高臺に登りて外を望めば、復た高樓飛觀を見る。閣道上下して、欄干遠く續き、漸臺あり池に臨んで九層より成り、飛階極めて高くして、雲に縁りて上り行き、中坐よりして日景を垂れ、俯して流星を見るべし。千門萬戸相似たること一の如く、長遠にして屈

【一七六】逶迤。長き貌。
【一七七】詰屈。曲る貌。
【一七八】靡靡。細好なり。
【一七九】剋成。作成なり。
【一八〇】坤靈。地なり。
【一八一】蒼昊。天なり。
【一八二】純殷。大中の道なり。
【一八三】烟熅。天地の蒸氣なり。
【一八四】玄醴。醴泉なり。陰溝は殿北の溝。
【一八五】朱桂。香木の名。
【一八六】黝儵。茂盛の貌。
【一八七】蘭芝。香草の名。西は音シン、叶韻。
【一八八】阿那。茂盛の貌。
【一八九】翕習。盛なる貌。
【一九〇】颯灑。風の物を吹く聲。
【一九一】御。居ること。

曲し、周行すること數里なるも、天日を見ず。何ぞ其の宏麗にして細好なる。人力を用ふること勤めたりと謂ふべし。鬼神の俊才にあらずんば、誰か能く此工を成さんや。既に地靈の奇勢を受け、上天の大中を承け、陰陽元氣を包含して此殿を成せり。故に醴泉北溝に湧き、甘露宇に降り、朱桂南北に茂り、蘭芝東西に茂り、祥風之を吹いて常に芳香を吐く。神靈の扶助により千年を經るも愈、堅く、漢祚と共に永く存せり。これ實に天子の居るべき處にして、子孫萬世に傳ふべし。其の貴ぶべきこと此の如し。誰か之を美ならずと謂はんや。

(一九二)亂に曰く、(一九三)彤彤たる靈宮、(一九四)巋嵬穹崇、紛として(一九五)龐鴻たり。(一九六)崱屴嶬嶒。(一九七)岑崟嵾嵯、騈として(一九八)巃嵸たり。(一九九)連拳偃蹇、(二〇〇)崙菌踡嶙、傍ら欹傾す、(二〇一)歇欻幽藹、(二〇二)雲覆霮䨴(二〇三)洞として(二〇四)杳冥なり。(二〇五)葱翠紫蔚、(二〇六)磥碨瓌瑋として(二〇七)光䁥を含む。奇を窮め妙を極め、棟宇より已來、未だ之れあらず。神の之を營む、我が漢室に瑞して、永く朽ちず。

【一九二】亂。賦の末にありて一篇の大意を總括する詞。
【一九三】彤彤。赤き貌。
【一九四】巋嵬。穹崇、高大なる貌。
【一九五】龐鴻。大なる貌。
【一九六】崱屴。嶬嶒。高き貌。
【一九七】岑崟。高き貌。嵾嵯は參差たる貌。
【一九八】巃嵸。高き貌。
【一九九】連拳。長く連る貌。偃蹇は高き貌。
【二〇〇】崙菌。崚嶮の貌。踡嶙は曲る貌。
【二〇一】歇欻幽藹。幽邃なる貌。
【二〇二】雲覆。雲の掩ふが如きこと。霮䨴は繁雲の貌。
【二〇三】洞。深きこと。
【二〇四】杳冥。暗きこと。
【二〇五】葱翠紫蔚。雜綵色なり。
【二〇六】磥碨。大石なり、瓌瑋は珍奇なり。
【二〇七】光䁥。日光なり。

【大意】此殿高大、參差として珍奇金玉日光を含み、妙を盡し奇を極め、始めて宮室ありしより以來、未だ嘗て有らざる所なり。神實に之を營み、我が漢を美し、千歲に傳へて不朽ならしむ。

景福殿の賦

(一)何平叔

大なる哉惟れ魏、世、哲聖あり。(二)武は元基を創め、(三)文は大命を集し、皆天に體して制を作し、時に順つて政を立つ。(四)帝皇に至りて、遂に(五)重熙にして累盛なり。遠きは則ち陰陽の自然に襲り、近きは則ち人物の至情に本づき、上は則ち(六)稽古の(七)弘道を崇び、下は則ち長世の(八)善經を聞き、庶事既に康く、(九)天秩孔だ明かなり。故に(一〇)載祀二三にして、國富み刑清めり。歲の三月東に(一一)巡狩し、(一二)許昌に至り、山川を(一三)望祠し、時を考へ方を度り、

【一】何平叔。何晏、字は平叔、南陽の人なり、魏の明帝、許昌に殿を作り名づけて景福といふ。既に成り人に命じて之を賦せしむ。何晏遂に此作あり。

【二】武。魏の武帝曹操なり。元基は大なる基礎。

【三】文。魏の文帝、漢の禪を受け天子となり、父曹操を追尊して武皇帝といふ。大命は天命なり、天命を受けて天子となりしこと。

【四】帝皇。魏の明帝を指す、文帝崩じて皇帝の位に卽く。

【五】重熙累盛。熙は明なり、ますます昭明なること。

【六】稽古。古を考ふること。

【七】弘道。大道なり。

【八】善經。善道といふが如し。

【九】天秩。天祿なり、天位といふが如し。

【一〇】載祀。年なり。二三は六年をいふ。

【一一】巡狩。天子の巡行するをいふ。

【一二】許昌。地名。

【一三】望祠。祭ること。

(一四)高年を存問し、民を率ゐて耕桑す。越に六月(一五)既望、(一六)林鍾律を紀し、(一七)大火昏に正しく、桑梓繁蕪し、大雨時に行く。(一八)三事九司(一九)宏儒碩生(二〇)溽暑の伊鬱たるに感じ、而して(二一)性命の平うする所を慮り、惟れ(二二)岷越の靜かならざる、征行の未だ寧からざるを寤るも、乃ち(二三)昌言して曰く、昔在(二四)蕭公より(二五)孫卿に曁ぶまで、皆先識博覽にして、明允篤誠なり。壯ならず麗ならざれば、以て民を一にして威靈を重くするに足らず。飾らず美しからずんば、以て後を訓へて(二六)厥成を示すに足らずと、以爲はざるはなし。故に當時其功利を享け、後世其(二七)英聲に賴る。且つ許昌は乃ち(二八)大運の戻る攸、(二九)圖讖の旌せる所なり。苟に德義其れ斯の如し。夫れ何ぞ宮室を之れ營むなからんと。帝曰く俞る哉と。

【一四】高年。老人なり。存問とは慰問すること。
【一五】既望。十六日をいふ。
【一六】林鍾。六月は律林鍾に應ず。
【一七】大火。星の名、六月には暮に正南方にあらはる。
【一八】三事。三公なり。九司は九卿なり。
【一九】宏儒碩生。大學者なり。
【二〇】溽暑。溽は濕なり、むしあつきこと。伊鬱は煩熱の貌。
【二一】性命。生命に同じ。
【二二】岷越。蜀及び吳なり。
【二三】昌言。よきことば。
【二四】蕭公。漢の功臣蕭何なり、蕭何未央宮を作る、高祖其の壯麗を見て甚だ怒る、何曰く天子は四海を以て家となす、壯麗にあらざれば威を重くするなしと。
【二五】孫卿。荀況なり、荀子に曰く宮室臺榭ハ以テ燥濕ヲ避ケ德ヲ養ヒ輕重ヲ分ツと。
【二六】厥成。其の成功なり。
【二七】英聲。英名なり。
【二八】大運。天運なり。
【二九】圖讖。未來記、豫言なり、漢の時許昌に氣あり、當塗にあらはる。塗に當りて高きは魏なり、因つて魏の漢に代るべきを知る。

【大意】魏は世〻聖君あり。武帝基を開き文帝に至りて始めて天命を受け、皆天意人心に順つて政

法を布く。今上皇帝に至りて、其徳ますます大なり。陰陽の自然に則り、人物の至情に本づき、古聖賢の大道を崇び、長世の善道を開き、衆事既に安く天位益〻固し。故に君たること六年にして民富み刑省く。三月東に巡狩して許昌に至り、山川を祭り時方を度り、老人を慰勞し民を率ゐて農桑に勤めしむ。六月十六日、大雨時に至る。三公九卿大儒皆相與に煩熱に感じ、身命の害をなさんことを憂ふ。故に呉蜀の未だ平がざるを知れども、猶ほ奏言して曰く、かの蕭何、荀卿ともに古の明賢なり。然も宮室を壯麗にせざれば、天下を一統し威靈を天下後世に示すに足らざる事を主張せり。當時の君皆其言に聽き宮室を壯麗にせざるはなし。故に能く其功利を受け、子孫また其英名に賴れり。且つ許昌は天運の止る所、圖識の表せる所なり。宜しく宮室を此地に營むべきなりと。天子乃ち之を可とす。

(三〇)玄輅既に駕し、輕裘斯れ(三一)御し、乃ち有司に命じ、禮儀を是れ具へ、審に日力を量り、詳に費務を度り、(三二)經始の黎民を鳩め、農功の(三三)暇豫を輯め、(三四)東師の獻捷に因り、(三五)海孽の賄賂に就き、景福の祕殿を立て、皇居の制度に備ふ。爾して乃ち(三六)層覆の耽耽たる

【三〇】玄輅。天子の車。禮記に孟冬ノ月天子玄輅ニ乘ルとあり。
【三一】御。著ること。禮記に孟冬ノ月、天子始メテ裘スとあり。
【三二】經始。宮室を造營すること。黎民は衆民なり。
【三三】暇豫。間暇なり。
【三四】東師。東征の軍。獻捷とは戰利品を獻ずること。
【三五】海孽。呉をいふ。賄賂は資財なり。
【三六】層覆。高屋なり。耽耽は深邃の貌。

を豐にし、高基の(三七)堂堂たるを建て、(三八)疏柱の汩越たるを維ね、(三九)抵鄂の鏘鏘たるを肅む。(四〇)飛櫩翼のごとく以て(四一)軒翥し、(四二)反宇巘として以て高く騫り、羽毛の(四三)葳蕤たるを流し、(四四)環玭の琳琅たるを垂れ、(四五)參旗九旒、風に從つて飄揚し、(四六)皓皓旰旰、(四七)丹彩煌煌たり。故に其(四八)華表は則ち(四九)鎬鎬鑠鑠、赫奕章灼として、日月の天に麗けるが若く、其(五〇)奧祕は則ち(五一)翳薆曖昧、髣髴退概として、(五二)幽星の纚連するが若し。既に櫛比して欑集し、又(五三)宏璉して以て(五四)豐敞なり。(五五)兼苞博落して、(五六)一象を常にせず。遠くして之を望めば、朱霞を摛べて天文を耀すが若く、迫くして之を察れば、崇山を仰いで垂雲を載するが若し。嗟(五七)瓌瑋にして以て壯麗なり。(五八)紛彧彧として其れ分ち難し。此れ其大較なり。若し乃ち高甍(五九)崔嵬として、飛宇霓

【三七】堂堂。高敞の貌。
【三八】疏柱。畫柱なり。汩越は光明の貌。
【三九】抵鄂。殿基なり。鏘鏘は高き貌。
【四〇】飛櫩。高きノキ。
【四一】軒翥。高く飛ぶこと。
【四二】反宇。そり返れるノキ。巘は高き貌。
【四三】葳蕤。毛羽の美なる貌。
【四四】環玭。玉の名。琳琅は玉の美なる貌。
【四五】參旗。日月星を畫ける旗。九旒は九旗なり。
【四六】皓皓旰旰。旗の光明なり。
【四七】丹彩煌煌。旗の光明なり。
【四八】華表。屋外を華飾せるをいふ。
【四九】鎬鎬。以下皆光顯昭明の貌。
【五〇】奧祕。殿內深邃の處。
【五一】翳薆。以下皆幽深にして明ならざる貌。
【五二】幽星。夜の星。纚連は相連ること。
【五三】宏璉。大に連ること。
【五四】豐敞。廣きこと。
【五五】兼苞博落。繞る所廣きなり。
【五六】一象。一の形式。
【五七】瓌瑋。奇にして美なること。
【五八】紛彧彧。文章多き貌。
【五九】崔嵬。高き貌。

を承け、(六〇)緜蠻黮霴として、雲に隨つて融泄し、鳥のごとく企り山のごとく峙ち、翔るが若く滯るが若く、(六一)峨峨嶫嶫として、屆る所を識るなし。(六二)離朱の至精と雖も、猶ほ眩曜して(六三)昭晣する能はざるなり。

【大意】其冬、明帝乃ち主司に命じて禮儀を具へ、日程費目を量り、庶民を使用するに農暇を以てし、吳國を破りて其財を取り、以て景福殿を作り、天子の制度に備へしむ。是に於て高屋を構へ高甍を建て、畫柱を立て、飛櫚鳥翼の如く高く張り、反宇上に向つて高く驤り、羽毛珠玉を垂れて其中を飾る。旌旗屋外に飄りて煌煌たり。故に屋外は昭明にして、日月の天に懸るが如く、屋内は幽深にして星斗の夜輝くが如し。殿宇の相連ること櫛齒の如く、廣敞にして琦麗なり。然も各〻其形態を異にす。遠く之を望めば朱霞を舒べ天文を耀かすが如く、近く之を觀れば高山の垂雲を戴くが如し。奇美壯麗一一述べ盡し難し。是れ其大略なり。要するに屋宇高峻にして高く雲霓に接し、爛然として雲に隨つて動き、鳥の飛ばんと欲するが如く、山の峙ちて止まるが如く、人其の至る所を知るなし。離朱の目睛ありと雖も、猶ほ眩惑して明にする能はざるなり。

【六〇】緜蠻。文章ある貌。黮霴は黑き貌。
【六一】峨峨嶫嶫。高き貌。
【六二】離朱。いにしへの明目者の名。
【六三】昭晣。明にすること。

爾して乃ち(六四)南端の豁達たるを開き、(六五)筍虡の輪豳たるを張り、(六六)華鐘杌として其れ高く懸り、(六七)悍獸仡として以て儷び陳り、洪剛の猛毅を體し、聲(六八)訇磤として其れ震ふが若し。爰に(六九)遐狄あり。(七〇)鐐質輪菌たり。高門の側堂に坐し、聖主の威神を彰す。(七一)芸若庭に充ち、槐楓宸に被り、綴るに(七二)萬年を以てし、綷ふるに(七三)紫榛を以てし、或は(七四)嘉名を以て寵を取り、或は美材を以て珍とせらる。實を(七五)商秋に結び、華を青春に敷き、(七六)藹藹萋萋、(七七)馥馥芬芬たり。爾して其結構は則ち(七八)脩梁彩制あり。下は(七九)褰上は奇、(八〇)桁梧複疊して、勢合ひ形離れ、(八一)赩たること(八二)宛虹の如く、赫たること奔螭の如く、南は(八三)陽榮に亘り、北は(八四)幽崖に極る。任重くして道遠く、厥庸孔だ多し。是に於て(八五)髹彤の(八六)繡桷を列ね、(八七)琬琰の

【六四】南端。南の正門。
【六五】筍虡。鐘を懸くる架。輪豳は其形なり。
【六六】華鐘。華飾を加へたる鐘。杌は高き貌。
【六七】悍獸。猛獸なり、其形を鐘架の足に刻むなり。仡は勇壯なる貌。
【六八】訇磤。雷聲なり。
【六九】遐狄。長狄なり、古の長人なり、銀を以て之を鑄る。
【七〇】鐐質。銀の上等を鐐といふ。輪菌は屈曲の貌。
【七一】芸若。香草の名。
【七二】萬年。木の名。名の善きに取る。
【七三】紫榛。木の名。材の善きに取る。
【七四】嘉名。名のよきこと。
【七五】商秋。秋なり。
【七六】藹藹萋萋。盛なる貌。
【七七】馥馥芬芬。香氣の貌。
【七八】脩梁。長きウツバリ。彩制は彩色法なり。
【七九】褰。あがること。
【八〇】桁梧。桁は梁上に施す材、梧は柱なり。
【八一】赩。赤きこと。
【八二】宛虹。宛は屈なり、曲れる虹。
【八三】陽榮。陽は南、榮は重簷。
【八四】幽崖。北邊なり。崖は音ギ、叶韻。
【八五】髹彤。朱塗なり。
【八六】繡桷。美しきタルキ。
【八七】琬琰。玉なり。

(八八)文璫を垂れ、(八九)蝹たること神龍の登降するが若く、灼たること明月の光を流すが若し。爰に(九〇)禁楄あり(九一)勒分翼張し、承くるに(九二)陽馬を以てし、接するに圓方を以てし、(九三)斑間白を賦き、疎密章あり。(九四)飛柳鳥のごとく踊り、(九五)雙轅を是れ荷ひ、險に赴き虛を凌ぎ、(九六)獵捷として相和し、(九七)皎皎たる(九八)白間、(九九)離離たる(一〇〇)列錢あり。晃光內を照し、流景外に燿り、烈たること(一〇一)鉤星の漢に在るが若く、煥たること(一〇二)雲粱の天を承くるが若し。(一〇三)騙徙增錯し、(一〇四)轉縣郛を成し、(一〇五)茄蔤倒に植ゑ、(一〇六)芙蕖を吐被し、繚らすに(一〇七)藻井を以てし、編むに(一〇八)綷疏を以てし、紅葩(一〇九)鞾韡として(一一〇)丹綺離婁たり。(一一一)菡萏艴翕として(一一二)纖縟紛敷し、繁

【八八】文璫。美しき椽頭。
【八九】蝹。龍の貌。
【九〇】禁楄。短椽なり。
【九一】勒分翼張。分布すること。
【九二】陽馬。屋の四角に出で短柱をうくるもの。
【九三】斑間。まだらなる間。
【九四】飛柳。陽馬なり。
【九五】雙轅。柱を受くる木。
【九六】獵捷。相接する貌。
【九七】皎皎。白き貌。
【九八】白間。窓なり。白を以て之を塗る。
【九九】離離。連る貌。
【一〇〇】列錢。金釭、カナグなり。
【一〇一】鉤星。星の名、漢は河漢、アマノガハなり。
【一〇二】雲粱。雲を以て作れる粱。
【一〇三】騙徙增錯。騙は蝸なり、衆木の集合すること蝸牛の徙りて相錯雜するが如きをいふ。
【一〇四】轉縣。木の廻旋して相連ること。郛の城をめぐるが如きをいふ。郛は郭なり。
【一〇五】茄蔤。蓮莖を茄といひ其本を蔤といふ。
【一〇六】芙蕖。蓮なり。
【一〇七】藻井。水藻を畫きたる天井。
【一〇八】綷疏。五彩を刻鏤の中に繪くをいふ。
【一〇九】鞾韡。花の相次ぐ貌。
【一一〇】丹綺。赤く美しきこと。離婁は色の分布する貌。
【一一一】菡萏。蓮花なり。艴翕は色の美しきこと。
【一一二】纖縟紛敷。彩色の亂れ布く貌。

飾累巧、勝げて書すべからず。

【大意】乃ち南門の廣濶なるを開き、猛獸の形を刻みたる鐘架を設け、ここに大鐘を懸く。其聲殿殿として雷の如し。門側の堂中には銀を以て鑄たる長人を置き、以て帝王の威神に象る。又種種の草木を庭中に植ゑ、或は名の美なるを以て重んぜられ、或は材の美なるを以て珍とせらる。皆春には花を開き秋には實を結び、郁郁萋萋として繁茂す。殿宇の結構を觀れば、長梁に彩色を施し、縱横に重疊し、或は合ひ或は離れ、虹の如く龍の如く、南簷より北簷に達す。所謂任重くして道遠きものにして、其功用甚だ大なりと謂ふべし。桷は塗るに朱を以てし、璫は飾るに玉を以てし、神龍の登降するが如く、明月の輝くが如し。短椽分布し陽馬之を承け、連接するもの或は圓、或は方、斑白相間り、疎密各文章あり。窓間は塗るに白を以てし、列錢之を點綴し、日光室中を照して、綵色外に流出し、烈然として光明なること鉤星の銀漢の中に在るが如く、雲梁の天を承くるが如し。衆木を合せて上に天井を作り、その文章參差として或は蝸の徙りて錯雜するが如く、外郭の繞るが如し。中に蓮花を刻み、彩色亂れ布き、其の巧妙なること盡く記載すべからず。

是に於て(二三)蘭栭積重し、(二四)窶數矩設し、(二五)櫼櫨各落として以て相承け、(二六)欒栱天蟜として

【二三】蘭栭。木蘭のマスガタ。

【二四】窶數。衆木の集れる貌。矩設は規矩に順つて設くること。

交結し、(二一七)金楹齊しく列りて(二一八)玉舄跋を承け、(二一九)靑瑣銀鋪、是を(二二〇)閨闥となす。(二二一)雙枚既に脩く、(二二二)重桴乃ち飾り、(二二三)櫋梠邊を緣り、四極を周流し、侯衞の(二二四)班、藩服の職あり。(二二五)溫房その東序を承け、(二二六)涼室その西偏に處り、(二二七)建陽を開けば則ち(二二八)朱炎豔しく、(二二九)金光を啓けば則ち淸風臻る。故に冬も淒寒ならず、夏も炎燀なし。(二三〇)鈞調中適にして以て年を永うすべし。(二三一)墉垣碭基其光昭昭たり。周の制は白盛なるも、今や維れ(二三二)縹なり。(二三三)落帶金釭、此れ焉に二等あり。(二三四)明珠翠羽往往にあり。先王の(二三五)允塞を欽み、(二三六)重華の無爲を悦び、(二三七)共工に命じて(二三八)繢を作らしめ、(二三九)五采の彰施を明にし、古昔を圖象して以て箴規に當て、

【二一五】欂櫨。曲短梁なり。各落は危岨の貌。
【二一六】欒栱。柱上の曲木、兩頭に櫨を受くるもの。夭蟜は高き貌。
【二一七】金楹。金を以て飾りし柱。
【二一八】玉舄。玉の礎。跋は柱根なり。
【二一九】靑瑣。窓なり、靑を以て畫きて瑣文をなす。銀鋪は銀の金具なり。
【二二〇】閨闥。小門なり。
【二二一】雙枚。屋内の重檐なり。
【二二二】重桴。重棟なり。
【二二三】櫋梠。簷に連る木の瓦を受くるもの。
【二二四】班。位次なり。
【二二五】溫房。殿の名。東序は東のヒサシ。
【二二六】涼室。殿の名。西偏は西のヒサシ。
【二二七】建陽。東門なり。
【二二八】朱炎。日なり。
【二二九】金光。西門なり。
【二三〇】鈞調。氣候の中和なこと。
【二三一】墉垣。墻なり。碭は文石なり。
【二三二】縹。淺碧色なり。
【二三三】落帶。壁帶なり。金釭はカナグなり。
【二三四】明珠。明月の珠。翠羽は翡翠の羽。
【二三五】允塞。信實なり。書經に重華濬哲文明、溫恭允塞とあり。
【二三六】重華。舜なり。論語に無爲ニシテ治マル者ハ其レ舜カとあり。
【二三七】共工。工人なり。
【二三八】繢。繪畫なり。
【二三九】五采。五色なり。彰施は明に五彩を施すなり。

(一四〇)椒房の列、是れ准へ是れ儀る。(一四一)虞姬の容止を觀て、治國の臣を佞つを知り、(一四二)姜后の珮を解くを見て、前世の遵ふ所を寤り、(一四三)鍾離の(一四四)讜言を賢とし、(一四五)楚樊の身を退けるを懿とし、(一四六)班妾の輦を辭せるを嘉し、(一四七)孟母の隣を擇べるを偉とす。故に將に智を廣めんとすれば、必ず先づ多く聞く。多く聞けば多く雜る。多く雜れば眞を眩す。眩はざるは焉にか在る。人を擇ぶに在り。故に將に德を立てんとすれば、必ず先づ仁に近づく。此禮の僣らざらんことを欲す。是を以て行道の先民を盡す。朝に觀夕に覽る。何ぞ(一四八)紳に書せんや。

【大意】蘭楯相重りて皆規矩に中り、短梁危く之を承け、金柱列りて玉礎之を支へ、靑瑣銀鋪を以て閨闥の飾とす。重檐既に長く外に達し、重棟以て彩飾を施し、榌梠四極を周繞して之

【一四〇】椒房。皇后の室。

【一四一】虞姬。齊の威王の妃なり、威王位に卽いて九年にして國治まらず、姬乃ち王に勸め讒臣を誅し賢臣を用ひしむ、國大に治まる。佞、一本に佞に作る、今之に從ふ。

【一四二】姜后。周の宣王の后なり、宣王嘗ておそく起く、姜后乃ち簪珥を脱し罪を永巷に待ち、王に言はしめて曰く、妾不才にして妾の淫心見はれ、君王をして禮を失ひておそく朝せしむと。宣王是より早起す。

【一四三】鍾離。鍾離春は齊の無鹽邑の女なり、容貌極めて醜なり、宣王に見えて直諫す、宣王因つて之を夫人となす。

【一四四】讜言。直言なり。

【一四五】楚樊。樊姬は楚の莊王の夫人なり、楚の相虞丘子の無能を指摘し虞丘子をして位を退かしむ。

【一四六】班妾。班婕妤なり、漢の成帝班婕妤と輦を同うせんと欲す、婕妤辭して曰く三代の末主、乃ち嬖女あり、今輦を同うせんと欲するは之に近似するなきを得んやと。

【一四七】孟母。孟子の母。

【一四八】紳。大帶なり、紳に書すとは大帶に記し置きて忘れぬやうにすること。

を徧くし、諸侯の班秩、五服の以て王職を守るが如し。溫房殿は其東に在り。涼室殿は其西に在り。東門を開けば日光豔はしく、西門を開けば淸風至る。故に冬も溫房に居れば淒寒ならず。夏も涼室に居れば炎氣なし。氣候均適にして以て長年を保つべし。墻は文石を以て基となし、其光昭昭然たり。周は白墻を以て盛となせるも、今や淺碧を以て美となす。壁帶の上には金釭を施し、二等に分れ、一は飾るに明珠を以てし、一は飾るに翠羽を以てす。帝舜允塞無爲の治を慕ひ、工人に命じて其像を畫かしめ、其他古昔の明君賢哲の像を畫かしめ、以て君王の規箴となし、皇后の室も亦之に準ず。乃ち虞姬の容姿を觀ては、國を治むるに賢臣を要するを知り、姜后の珮を解けるを見ては、前代の遵法する所を寤り、鍾離の直言して君を諫めたる、楚樊の不忠の臣を退けたる、班婕妤の輦を同うするを辭せる、孟母の其隣を擇べるを觀ては、之を嘉し之に倣はんとす。夫れ其智を廣めんとすれば、多く古今の事を聞知せざるべからず。多く聞けば混雜して其眞を惑はし易し。惑なからしめんには賢人を擇ぶを要す。故に德を立てんとする者は仁賢の士に近づく。上下の禮違はざらんことを欲せば、上先づ其道を行ひ、民に先だつに在り。今朝夕其圖畫を觀覽して、以て鑑となすに足る。何ぞ紳に書するを要せんや。

若し乃ち(一四九)階除連延として、(一五〇)蕭曼雲征し、

【一四九】階除。階段なり。連延は〜長き貌。

(一五一)櫺檻邳に張りて、(一五二)鉤錯矩成し、(一五三)楯は騰蛇に類し、(一五四)槢は瓊英に似、螭の蟠れるが如く、虬の停れるが如し。(一五五)玄軒交り登り、光藻昭明なり。(一五六)騶虞獻を承け、(一五七)素質仁形なり。天瑞の(一五八)休顯を彰し、遠戎の來庭を照にす。(一五九)陰堂北に承け、(一六〇)方軒九戶あり。(一六一)右个淸宴、其宇を西東にし、連ぬるに(一六二)永寧、安昌、臨圃を以てし、遂に(一六三)百子に及ぶ。(一六四)後宮の處る攸なり。之に處るは斯れ何ぞ。(一六五)窈窕たる淑女、思に(一六六)徽音を(一六七)齊み、聿に多祜を求む。其祜伊れ何ぞ。爾の子孫に宜しく、克く明に克く哲に、克く聰に克く敏なり。永く老い難きを錫ひ、(一六八)兆民賴る。南には則ち(一六九)承光の前殿、賦政の宮あり。賢を納れ能を用ひ、道を詢ひ中を求め、宇宙を(一七〇)疆理し、國風を(一七一)甄陶し、雲

【一五〇】蕭曼。高遠なり。
【一五一】櫺檻。欄干なり。
【一五二】鉤錯矩成。鉤は曲れるを正す具、矩は方を正す具。錯は治なり、鉤を以て治め矩を以て成すこと。
【一五三】栭。欄橫なり。
【一五四】槢。楔なり。瓊英は玉英なり。
【一五五】玄軒。軒は楯下の板なり、黑漆を以て塗る、故に玄といふ。
【一五六】騶虞。仁獸の名、白虎にして黑文なり。獻は軒なり。
【一五七】素質。地の白きこと。
【一五八】休顯。休は美なり。
【一五九】陰堂。北にあり故に陰といふ。

【一六〇】方軒。ならべる窓。
【一六一】右个。西廂なり。淸宴は殿の名。
【一六二】永寧。以下皆殿の名。
【一六三】百子。殿の名。
【一六四】後宮。宮女をいふ。
【一六五】窈窕。美しき貌。
【一六六】徽音。徽は美なり、善なり、美譽をいふ。詩經に大姒徽音を嗣ぐとあり。
【一六七】齊。つつしむこと。
【一六八】兆民。衆民なり。
【一六九】承光。以下宮殿の名。
【一七〇】疆理。境界を定むること。
【一七一】甄陶。土を以て陶器を作る如く、作り成すこと。

行き雨施し、品物咸く融る。其西には則ち(一七二)左城右平、講肄の場あり。(一七三)二六對ひ陳り、殿翼相當り、僻脱して便を承く。蓋し(一七四)戎兵に象り、察解して言に歸る。諸を政刑に譬へ、將に以て令を行はんとす。豈惟情を娯ましむるのみならんや。鎮ずるに崇臺を以てす。是を永始といふ。複閣(一七五)重闈あり。(一七六)猖狂を是れ俟つ。(一七七)京庾の儲、物として有らざるはなく、不虞の戒是に於て取る。

【大意】殿階長く續き、高峻にして雲中に行くが如く、欄干あり大に之を張設し、其結構皆規矩に合ひ、其形は騰蛇の如く、其光は玉英の如く、龍螭の蟠屈するが如し。騶虞楯板を受け、白質仁形にして、天瑞の徵をあらはし、遠夷の來朝を示せり。陰堂には九戸あり。右个清宴其東西に列し、永寧、安昌、臨圃等の宮之に連り、遂に百子宮に及ぶ。此の宮は宮人の居る處にして、窈窕たる淑女あり。美譽を齊みて以て多福を求む。其子孫聰明敏哲にして、天之に長壽を賜ひ、天下を統御せしむ。衆民其惠を受く。南には承光の前殿、賦政の宮あり。賢能を納用し、大中至正の道を求め、天下を疆理し德化を成し、恩惠の下に及ぶこと雲雨の萬物を沾すが如し。其西には蹵鞠演武の堂あり。二六對陣

【一七二】左城右平。蹵鞠の屋の名。城は階齒なり。殿階九級あり左右に中分し、左には齒あり人之を行き、右は則ち之を平にす。講肄は武を習ふこと。

【一七三】二六。十二人づつ列ぶなり。殿はシンガリ。翼は左右に張れる隊。

【一七四】戎兵。軍兵なり。

【一七五】重闈。闈は門なり。

【一七六】猖狂。賊なり。

【一七七】京庾。大倉なり。

して殿と翼と相當り、相避脫して敵人の便を承け、以て其勝を求め、其事もつぱら軍兵の事に象り、勝否を考察して相解きて歸る。此れ實に政刑に譬ふ。ただに戲樂の爲にあらざるなり。高臺あり其名を永始といふ。重門を設けて盜賊の侵入に備ふ。大倉其中に在り。其の貯蓄する所は、物としてあらざるはなく、不測の事あれば、皆供給を此に仰ぐ。

爾して乃ち(一七八)凌雲の層盤を建て、(一七九)虞淵の靈沼を浚くし、淸露(一八〇)瀼瀼として、(一八一)淥水浩浩たり。樹うるに嘉木を以てし、植うるに芳草を以てし、(一八二)悠悠たる玄魚、(一八三)皠皠たる白鳥、沈浮翺翔し、我が(一八四)皇道を樂む。若し乃ち虬龍灌注し、(一八五)溝洫交流し、陸には殿館を設け、水には輕舟を方べ、篁には(一八六)鶤鷺を棲ましめ、瀨には(一八七)鰋鮋を戲れしめ、豐なること淮海に侔しく、富めること山丘より賑み、叢集委積、焉んぞ殫く籌るべけんや。(一八八)咸池の壯觀と雖も、夫れ何ぞ以て比儔するに足らんや。是に於て(一八九)碣するに(一九〇)高昌の崇觀を以てし、表するに(一九一)建城の峻廬

【一七八】凌雲。層盤の名。層盤とは高臺を作り其上に盤を置き以て天上の甘露を受くる也。
【一七九】虞淵。靈沼の名。
【一八〇】瀼瀼。露の濃き貌。
【一八一】淥水。淸き水。浩浩は大水の貌。
【一八二】悠悠。魚の浮ぶ貌。
【一八三】皠皠。白き貌。
【一八四】皇道。大道なり、自然の道。
【一八五】溝洫。溝渠なり。
【一八六】鶤鷺。鳥の名。
【一八七】鰋鮋。魚の名。
【一八八】咸池。星の名、五穀を主る。
【一八九】碣。一本揭に作る、今之に從ふ、揭は特り高き貌。
【一九〇】崇觀。高き宮。高昌は其名。
【一九一】峻廬。高き宮。建城は其名。

を以てし、(一九二)岧嶢として岑のごとく立ち、(一九三)崔嵬として巒のごとく居り、飛閣雲を干し、浮階虛に乘る。遙に(一九四)九野を目、遠く長圖を覽、俯して(一九五)三市を看るに、孰かあり誰かなからん。農人の(一九六)耘耔を覩、稼穡の艱難を亮にし、惟れ年を饗くるの(一九七)豐寡なる、無逸の歎く所を思ふ。物の衆に感じて思深く、因つて高きに居て危きを慮り、(一九八)天德の易からざるを惟ひ、世俗の知り難きを懼る。器械の(一九九)良窳を觀、俗化の誠僞を察し、(二〇〇)貴賤の在る所を瞻て、政刑の(二〇一)夷陂を悟る。亦風を省み敎を助くる所以なり。豈惟(二〇二)盤樂して侈靡を崇ぶのみならんや。

【大意】又凌雲臺を建て、層盤を以て甘露の瀼瀼たるを取り、また虞淵沼を穿ち、滌水常に湛へて浩浩たり。其側には嘉木芳草を植う。魚鳥浮沈翺翔して各天性を自得し、我が大道を樂む。又虬龍の形を刻み、水を吐き注いで以て溝を成し、宮中を交流せしむ。陸には殿館あり、水には輕舟を竝べ、魚鳥萬物の豐富なること淮海に齊しく、盡く數ふべからず。咸池の豐と雖も、何ぞ此に匹敵するを得んや。又高昌、建城の二

【一九二】岧嶢。危高の貌。
【一九三】崔嵬。危高の貌。
【一九四】九野。八方及び中央の野原。
【一九五】三市。朝晝夕の市。
【一九六】耘耔。耘はクサギル、耔はツチカフ。
【一九七】豐寡。多少なり。書經無逸篇に昔殷王中宗、國ヲ享クル事七十有五年、高宗ノ國ヲ享クル事五十有九年、コレヨリ厥後立テル王ハ生レテ則チ逸シ、稼穡ノ艱難ヲ知ラズ、或ハ五六年、或ハ四三年ノミとあり。
【一九八】天德。君位をいふ。
【一九九】良窳。良否なり。
【二〇〇】貴賤。物の價の高下也。
【二〇一】夷陂。夷は平、陂は險。
【二〇二】盤樂。盤も樂なり。

觀あり。高峻にして山の如く、雲を犯し空に聳ゆ。此觀に登りて、九野を望み三市を眺むれば、貨物の豐富なること、物として之れなきはなし。農夫の勞作するを望みては、稼穡の艱苦を知り、年を享くるの多少は、無逸の歎ずる所の如くなるを寤り、市中の物資多きを見ては、惻然として自ら戒め、安きに居て危きを忘れず。君たるの易からざるを知り、人を知るの難きを懼る。器用の良否を觀、風俗の信僞を察し、時物の貴賤を見、政刑の善惡を見ては、之を正す。かくの如く其の見る所皆以て風教の助となすを得。豈徒游樂して奢侈を尚ぶのみならんや。

(二〇三)屯方署を列すること三十有二、(二〇四)星居宿陳し、(二〇五)綺錯鱗比す。(二〇六)辛壬癸甲之が(二〇七)名秩をなし、(二〇八)房室齊均にして堂庭一の如く、此を出でて彼に入り、反らんと欲して術を忘る。惟れ工匠の(二〇九)多端なる、固に萬變にして窮らず、物難きとして知らざるはなく、乃ち造化と隆を比べ、天地に讐うして以て基を開き、(二一〇)列宿に竝んで制を作し、制細なるとして(二一一)規景に協はざるはなく、作微なるとして(二一二)水臬に違はざるはなし。故に其

【二〇三】屯方。屯營なり。署は役所。
【二〇四】星居宿陳。星の如くならぶ。
【二〇五】綺錯。アヤギヌの如く入り交ること。鱗比は鱗の如くならぶこと。
【二〇六】辛壬癸甲。甲乙丙丁といふが如し。
【二〇七】名秩。名位なり。
【二〇八】房室。屋室なり。
【二〇九】多端。技巧の多きこと。
【二一〇】列宿。列星なり。
【二一一】規景。日景をはかりて方位を定むること。
【二一二】水臬。水準なり、地面の平をはかるもの。違ハザルは一本に違フアルに作る。從ふべし。

の增構すること積めるが如く、木を植うること林の如く、區連り域絶え、葉のごとく比び枝のごとく分れ、離れ背き別れ趣き、(二三)駢田として胥附き、縱橫踰延して、各注く攸あり。(二四)公輸も其の規矩を荒て、(二五)匠石も其の斲る所を知らず。既に巧を規摹に窮む、何ぞ彩章の未だ殫さざらん。爾して乃ち文るに朱綠を以てし、飾るに碧丹を以てし、點ずるに(二六)銀黃を以てし、爍るに(二七)琅玕を以てし、光明(二八)熠爚として、文彩(二九)璘班たり。淸風萃りて響を成し、朝日曜いて鮮を增し、(三〇)崑崙の靈宮と雖も、將た何を以てか旃より侈らん。

【大意】屯營三十二所あり。星の陳るが如く、鱗の比ぶに似たり。甲乙を以て名次となし、房室門墻皆一の如し。故に此を出て彼に入り、舊所に歸らんとするも、迷ひて其道を忘る。匠人の奇巧、萬變して窮らず。物難きとして之を成さざるはなく、實に造化と其巧を比す。天地星宿に則りて構造し、其の構造一一規景水臬に合はざるはなし。院墻或は連り或は絶え、向背各異れるも、駢田として相附著し、縱橫に踰延するも、各合ふ所あり。公輸匠石の如き良工も、規矩を投じて其妙に驚くばかりなり。既に規摹の妙を窮む、亦何ぞ彩飾を盡さざらんや。或は飾るに朱綠を以てし、或は飾るに丹碧を以てし、金銀を點じ、美玉を鏤め、光彩爛然

【二三】駢田。多きこと。
【二四】公輸。昔の名工の名。
【二五】匠石。昔の名工の名。
【二六】銀黃。黃は黃金なり。
【二七】琅玕。美玉なり。
【二八】熠爚。火光なり。
【二九】璘班。文彩の貌。
【三〇】崑崙。山の名、此山に仙人の宮あり。

として目を奪ひ、風來れば聲を成し、日照せば光を增す。崑崙山上の仙宮と雖も、何を以て之に過ぎんや。

規矩既に天地に應じ、擧措又四時に順ふ。是を以て六合元に亨り、(二二一)九有雍熙にして、家は(二二二)克讓の風を懷き、人は(二二三)康哉の詩を詠じ、(二二四)優遊して以て自得せざるはなし。故に(二二五)淡泊にして思ふ所なし。(二二六)列辟を歷て功を論ずるに、今日の至治なし。彼の吳蜀の湮滅せんこと、固に足を翹げて之を待つべし。然れども聖上猶ほ孜孜として忒ふことなく、天下の自ら悟る所以を求め、忠正の士を招き、公直の路を開き、周公の(二二七)昔戒を想ひ、(二二八)咎繇の典謨を慕ひ、無用の官を除き、(二二九)生事の故を省き、(二三〇)流遁の繁禮を絕ち、人情を(二三一)太素に反す。故に能く(二三二)岐陽の鳴鳳を翔らしめ、(二三三)虞氏の白環を納れ、蒼龍陂塘に覿え、(二三四)龜書河源に出で、(二三五)醴泉池圃

【二二一】九有。九州なり。雍熙は和平なり。
【二二二】克讓。よく謙讓なること。
【二二三】康哉。書經咎繇の歌に曰く、元首明ナルカナ、股肱良キカナ、庶事康キカナと。
【二二四】優遊。自ら安止すること。
【二二五】淡泊。無爲なること。
【二二六】列辟。辟は君なり。歷代の天子。
【二二七】昔戒。書經の無逸篇を指す。
【二二八】咎繇。皐陶に同じ、堯の賢臣なり。典謨は謀圖なり。書經に皐陶謨の篇あり。
【二二九】生事。事端を惹起すること。故は謀なり。
【二三〇】流遁。因循といふが如し。
【二三一】太素。素樸なり。
【二三二】岐陽。岐山の南。國語に周ノ興ルヤ、鸑鷟岐山ニ鳴クとあり。
【二三三】虞氏。舜なり。世本に舜ノ時、西王母白環及ビ珮ヲ獻ズとあり。
【二三四】龜書。即ち河圖なり。
【二三五】醴泉。瑞泉なり。

に涌き、(三三六)靈芝丘園に生ず。神靈の(三三七)貺祐を搃べ、(三三八)華夏の至歡を集め、方に三皇を四にして、五帝を六にす。曾ち何ぞ周夏の言ふに足らん。

【大意】法度既に天地に應じ、施政よく時宜に合ふ。是を以て天下大に治まり、九州和平にして、家家克讓の風あり、人人康哉の詩を誦し、優遊自得し、淡泊にして憂なし。されば古聖王を擧げ、來りて功德を論ずるも、今日の至治ある者なし。我が魏の德既に斯の如し。吳蜀の滅亡せんこと期して待つべし。然も我が明帝、孜孜として勤苦し、差失あるなく、忠正公直の人を求め、以て自ら心に開悟せんとし、周公の戒を想ひ、咎繇の謨を慕ひ、無用の官を廢し、事端を開くべき謀圖を除き、積習の繁禮を絕ち、人情を素樸ならしむ。故に鳳凰岐山に鳴き、西王母白環を獻じ、蒼龍池塘に現はれ、河圖河源に出で、醴泉涌き靈芝生ずるの瑞あり。神靈の惠福を總べ集め、中夏に在りて以て至歡をなし、德を三皇五帝に齊くす。かの周の文王、夏の禹王の如きは固より比すべくもあらざるなり。

【三三六】靈芝。瑞草なり。
【三三七】貺祐。貺は賜なり、祐は福なり。
【三三八】華夏。中華といふに同じ。歡は音ケン、叶韻。

江海

海の賦

(一)木玄虛

【一】木玄虛。木華、字は玄虛、晉の廣川の人なり。

昔在(二)帝嬀、唐に(三)臣たるの代、(四)天綱浡潏として(五)凋をなし瘵をなし、洪濤(六)瀾汗として萬里際なく、長波(七)涾沲として(八)八裔に(九)迆延す。是に於てか禹や乃ち臨崖の阜陸を鑿り、(一〇)陂潢を決して相浚ぎ、(一一)龍門の(一二)岝嶺たるを啓き、陵巒を墮りて(一三)嶄鑿し、羣山既に略し、百川(一四)潛渫し、(一五)泱漭澹泞、騰傾して勢に赴く。江河既に導き、萬穴倶に流る。五嶽を(一六)掎拔し、九州を竭涸し、(一七)瀝滴滲淫、(一八)薈蔚たる雲霧あり。(一九)涓流泱瀼として、來注せざるはなし。於廓なる靈海、長く(二〇)委輸をなす。其の廣となる、其の怪となる、宜なり其の大となるや。

【大意】昔舜の堯に臣たりし時、洪水横流して八方に溢れ、天下の大害をなせり。禹乃ち水崖の地を鑿り、積水を海に流通せしめ、百川皆安理して通流し、騰湧傾注して下勢に赴き、五嶽抜き出せるが如く、九州皆浸水を免れ、滴瀝たる小水と雖も、皆來りて海に注がざるはなく、大

【二】帝嬀。舜をいふ。唐は堯の姓。
【三】臣。李善本巨に作る。
【四】天綱。水の廣大、天の綱紀を爲すをいふ、洪水をいふ。浡潏は急流の貌。
【五】凋、瘵。傷害をなすこと。
【六】瀾汗。大なる貌。
【七】涾沲。相重なる貌。
【八】八裔。八方といふが如し。
【九】迆延。相連るをいふ。
【一〇】陂潢。陂は蓄水なり。潢は雨潦なり。

【一一】龍門。山の名。
【一二】岝嶺。高き貌。
【一三】嶄鑿。掘ること。嶄は鑿に同じ。
【一四】潛渫。浚ひて深くすること。
【一五】泱漭。廣大なり。澹泞は澄深なり。
【一六】掎拔。拔き出すこと。
【一七】瀝滴滲淫。小水の貌。
【一八】薈蔚雲霧。津潤の氣也。
【一九】涓流。小流なり。泱瀼は流るる貌。
【二〇】委輸。流れ入ること。

海是に於て衆水來注の中心となる。其の廣大にして靈怪なる亦宜なり。爾して其の狀たるや、則乃ち（二一）浟湙瀲灩として、天を浮べて岸なく、（二二）浺瀜沆瀁、（二三）渺瀰湠漫として、波連山の如く、乍ち合ひ乍ち散じ、百川を（二四）噓噏し、（二五）淮漢を洗滌し、（二六）廣舃に襄陵し、（二七）漻葛浩汗たり。若し乃ち（二八）大明轡を（二九）金樞の穴に攄り、（三〇）翔陽扶桑の津に（三一）逸駭すれば、（三二）彯沙礐石、島濱に（三三）蕩颺す。是に於て鼓怒し、溢浪揚浮し、更ゝ相觸搏し、沫を飛ばし濤を起し、狀天輪の（三四）膠戾して激轉するが如く、又地軸の挺拔して爭廻するに似たり。（三五）岑嶺飛騰して反覆し、五岳鼓舞して相磓ち、（三六）渭濆淪として（三七）滀漯し、（三八）鬱沏迭として（三九）隆頽し、（四〇）盤盓激して窟を成し（四一）消潬傑と

【二一】浟湙瀲灩。流行して相連る貌。
【二二】浺瀜沆瀁。深廣の貌。
【二三】渺瀰湠漫。廣遠の貌。
【二四】噓噏。吐納といふが如し。潮起れば百川逆流し之を吐くが如く、潮落つれば之を吸ひ納るゝが如し。
【二五】淮漢。川の名。淮水と漢水。
【二六】廣舃。舃は海岸の地をいふ。襄陵は越えのぼること。
【二七】漻葛浩汗。廣大の貌。
【二八】大明。月なり。月に御者あり、故に轡を攄るといふ。
【二九】金樞。西方の月の沒する穴なり。
【三〇】翔陽。日なり。扶桑は日の出づる處。
【三一】逸駭。出づること疾きなり。
【三二】彯沙。飛ぶ砂なり。礐は石の聲なり。
【三三】蕩颺。飛びあがること。
【三四】膠戾。環旋の貌。
【三五】岑嶺。山なり。
【三六】渭濆淪。相糾亂する貌。
【三七】滀漯。聚ること。
【三八】鬱沏迭。盛に疾き貌。
【三九】隆頽。高くなり低くなること。
【四〇】盤盓激。渦卷くこと。
【四一】消潬傑。高き波の立つこと。

して魁をなし、(四二)潤泊栢として(四三)迆颺し、(四四)磊匒匌として相豗ち、驚浪雷のごとく奔り、駭水迸り集り、開合解會して(四五)瀼瀼濕濕たり。(四六)葩華踧沑、(四七)澒濘潗㵎たり。若し乃ち(四八)霾曀潛れ銷え、振ふなく竦くなく、輕塵飛ばず、纖蘿動かざるも、猶ほ尙ほ(四九)呀呷として、餘波獨り湧き、(五〇)澎濞灪磈、(五一)碨磊として(五二)山壟のごとし。爾して其(五三)枝岐潭淪、渤蕩して(五四)汜を成し、蠻に乖き夷を隔て、萬里に廻互す。

【大意】其狀たるや流行瀲灧し、天と相接して際涯を見ず。洪波大濤連山の如く、忽ち合ひ忽ち散じ、百川を呑吐し、淮漢を吐納し、潮水陸に襄りて渺漫たり。若夫れ月の將に沒せんとする時日の初めて出でんとする時に於ては、風最も急疾にして、潮水を激動し、水波疾く涌き、蕩沙飛石島濱に相衝擊し、溢浪飛揚して空中に浮湧し、波濤相連りて輪環の旋りて絕えざるが如く、地軸の地を脫出して廻轉するが如く、五嶽の鼓舞して相觸激するが如く、起伏し特立し重疊し、開くが如くにして復た合し、散ずるが如

【四二】潤泊栢。小波の起ること。
【四三】迆颺。斜に起ること。
【四四】磊匒匌。大波の重疊すること。
【四五】瀼瀼濕濕。開合する貌。
【四六】葩華。分散の貌。踧沑は蹙聚なり。
【四七】澒濘。沸く貌。潗㵎は沸く聲なり。
【四八】霾曀。風吹きて土をふらすを霾といひ、陰りて風吹くを曀といふ。
【四九】呀呷。波の相呑吐する貌。
【五〇】澎濞。水の聲なり。灪磈は高峻の貌。
【五一】碨磊。平かならざる貌。
【五二】山壟。小丘なり。
【五三】枝岐。小浦なり。潭淪は溢れ流ること。渤蕩は湧き立つこと。
【五四】汜。水の分流すること。

くにして復た會す。昏氣消盡して疾風怒を息め、塵蘿動かざるに至るも、尚ほ餘波を揚げて動搖し、其高きこと山丘の如し。而して小浦水溢れて氾を成し、遠く萬里の蠻夷に及ぶ。

若し乃ち（五五）偏荒速に告げ、王命急に宣すれば、（五六）駿を飛ばし檝を鼓し、海に汎び山を凌ぐ。是に於て勁風を候ち（五七）百尺を掲げ、（五八）長綃を維け（五九）帆席を挂け、濤を望んで遠く決れ、（六〇）冏然として鳥のごとく逝き、（六一）鷸たること驚鳧の侶を失へるが如く、（六二）倏たること六龍の掣く所の如し。一越（六三）三千、終朝ならずして屆る所に濟る。若し其れ（六四）穢を負ひ深に臨み、誓を虚うし祈を愆てば、則ち（六五）海童路を邀り、（六六）馬銜蹊に當るあり。（六七）天吳乍ち見えて（六八）髣髴たり。（六九）蝄像暫ち曉れて（七〇）閃屍たり。羣妖（七一）遘迕し、（七二）眇䁽冶夷たり。帆を決り橦を摧き、（七三）戕風惡を起せば、（七四）廓如として靈變し、（七五）惚怳として幽暮なり。（七六）氣天霄に似て、（七七）靉靅として雲のご

【五五】偏荒。遠き邊地。
【五六】駿。駿馬なり。
【五七】百尺。帆檣をいふ。
【五八】長綃。長き帆綱。
【五九】帆席。帆なり、或は席を用ふ、故に帆席といふ。
【六〇】冏然。鳥の飛ぶ貌。
【六一】鷸。疾き貌。
【六二】倏。疾き貌。
【六三】三千。三千里なり。
【六四】穢。罪なり。
【六五】海童。海中の怪物。
【六六】馬銜。海中の怪物。其狀馬首一角にして龍形なりと。
【六七】天吳。海神なり。
【六八】髣髴。分明ならざる貌。
【六九】蝄像。海神なり。
【七〇】閃屍。疾く見ゆる貌。
【七一】遘迕。遇ひ犯すこと。
【七二】眇䁽。視る貌。冶夷は妖媚の貌。
【七三】戕風。暴風なり。
【七四】廓如。急に開く貌。
【七五】惚怳。忽ちの間。
【七六】氣。海神の吐く所の氣。
【七七】靉靅。雲氣の暗き貌。

とく布き、(七八)靇昱たる絶電、百色(七九)妖露し、(八〇)呵嗽掩鬱(八一)矆睒度なく、飛澇相磢り激勢相沏り、崩雲のごとく屑雨のごとく、(八二)浤浤汩汩たり。(八三)踔踔湛濼、(八四)沸潰渝溢し、(八五)濯汫濩渭として雲を蕩し日を沃ふ。是に於て舟人漁子南に徂き東に極り、或は(八六)黿鼉の穴に(八七)屑沒し、或は(八八)岑嶅の峯に(八九)挂罥し、或は(九〇)裸人の國に(九一)掣掣洩洩し、或は(九二)黑齒の邦に(九三)汎汎悠悠し、或は乃ち萍のごとく流れて浮轉し、或は(九四)歸風に因りて以て自ら反る。徒に怪を觀るの駭多きを識り、乃ち歷る所の近遠を悟らず。

【大意】遠方の國、急ありて來り告げ、將に君命を宣せんとすれば、輕𣗥を鼓動し舟を海上に泛べ、駿馬を驅りて山を踰えざるべからず。此時に於て乃ち長風を伺ひ、百尺の檣を擧げ、綃を結び帆を張り、波濤を破りて去ること、飛鳥の友を失つて相求むるが如く、六龍の日車を牽いて走るが如く、三千里を一飛し、終朝ならずして期する處に達すべし。若し身に罪戾を負ひ祈誓を破るが如き者あらば、神怪道を要して、將に

【七八】靇昱。疾き貌。
【七九】妖露。妖をなして現はること。
【八〇】呵嗽掩鬱。光色を呑吐すること疾き貌。
【八一】矆睒。視ること。
【八二】浤浤汩汩。波浪の聲。
【八三】踔踔湛濼。波の進退して騰躍する貌。
【八四】沸潰渝溢。亂れ溢るること。

【八五】濯汫濩渭。衆波の聲。
【八六】黿鼉。大龜と大鼈。
【八七】屑沒。屑は碎なり。
【八八】岑嶅。山なり、山に小石多きを嶅といふ。
【八九】掛罥。掛ること。
【九〇】裸人。海外の國名。
【九一】掣掣洩洩。風に任する貌。
【九二】黑齒。海外の國名。
【九三】汎汎悠悠。流に隨ふ貌。
【九四】歸風。回風なり。

之を害せんとす。暴風一たび怒を發すれば、天地忽ち變じて幽暗なり。海神吐く所の氣天雲の如く、或は電光絶えて百色忽ち見ゆるが如く、人目を眩惑して節度なく、波浪飛灑して雲の崩るるが如く、雨の散ずるが如く、潰溢して雲を蕩し日を洗ふ。舟人乃ち東西に漂蕩し、或は黿鼈の穴に沒し、或は山上に吹き揚げられ、或は裸人黒齒の異國に漂泊せらる。幸にして死を免るる者は或は水萍の流に隨ふが如く、廻風に因つて自ら歸る。然も徒に神怪の多きに驚愕し、魂氣散失して、歷る所の遠近を知らず。

爾して其大量なるや、則ち南のかた(九五)朱崖を浸し、北のかた(九六)天墟に灑ぎ、東のかた(九七)析木に演び、西のかた(九八)青徐に薄り、經途(九九)瀴溟萬萬有餘なり。雲霓を吐き龍魚を含み、(一〇〇)鯤鱗を隱し(一〇一)靈居を潛す。豈徒(一〇二)太顚の寶貝と隨侯の明珠とを積むのみならんや。將た世の收むる所の者常に聞き、未だ名あらざる者無きが若し。且つ(一〇三)希世の聞く所、惡んぞ其名を審にせん。故に其色を(一〇四)仿像し、其形を(一〇五)靉霼すべし。

【大意】而して其の大なるや、南は炎州に及び、北は北陸に及び、東は析木に及び、西は青徐に及

【九五】朱崖。炎州なり。
【九六】天墟。北陸なり。
【九七】析木。天津海をいふ。
【九八】青徐。二州の名。
【九九】瀴溟。濶き貌。
【一〇〇】鯤鱗。大魚の名。
【一〇一】靈居。衆仙の居る處。蓬萊、方丈、瀛洲の如きをいふ。
【一〇二】太顚。人名。琴操に、紂文王ヲ羑里ニ徙シ、日ヲ擇ンデ之ヲ殺サント欲ス、是ニ於テ太顚、散宜生、南宮适ノ屬、水中ノ大貝ヲ得テ以テ紂ニ獻ズとあり。
【一〇三】希世。世に稀なること。
【一〇四】仿像。審にせざること。
【一〇五】靉霼。審にせざること。

び、其潤きこと億萬里なり。其間雲霓を吐き、龍魚を呑み、仙山を藏す。ただに太顚の寶貝と隨侯の珠とを藏するのみならず。世の收用する所の者は、常に其名を聞き、其の或は未だ名あらざる者は本より無きが如し。希世の聞く所の寶、何ぞ能く其名を詳にせんや。

爾して其水府の內、極深の庭には、則ち崇島巨鼇あり。(一〇六)峌峴孤亭にして、洪波を擘き(一〇七)太淸を指し、磐石を竭き、(一〇八)百靈を栖ましめ、(一〇九)凱風を颺げて南に逝き、(一一〇)廣莫至りて北に征く。其垠には則ち(一一一)天琛水怪、鮫人の室あり。(一一二)瑕石詭暉あり、鱗甲(一一三)異質あり。若し乃ち雲錦文を(一一四)沙汭の際に散じ、(一一五)綾羅光を(一一六)螺蚌の節に被り、繁采華を揚げ、萬色鮮を隱し、陽冰冶えず、陰火潛み然え、(一一七)熺炭重ねて燔え、(一一八)九泉を吹炯し、朱燉綠煙(一一九)腰眇蟬蜎たり。魚には則ち(一二〇)横海の鯨、(一二一)突杌として孤り遊び、巖嶅を戞り高濤に偃し、鱗甲を茹ひ(一二二)龍舟を呑み、波を噏へば則ち洪漣(一二三)踧蹜たり、澇を

【一〇六】峌峴孤亭。高き貌。
【一〇七】太淸。天なり。
【一〇八】百靈。衆仙なり。
【一〇九】凱風。南風なり。
【一一〇】廣莫。北風なり。
【一一一】天琛。自然の寶なり。水怪は奇石なり。鮫人は人魚なり。
【一一二】瑕石。怪石なり。詭暉は奇妙なる光。
【一一三】異質。異體なり。
【一一四】沙汭。水濱の地。
【一一五】綾羅。アヤギヌなり。
【一一六】螺蚌。蛤なり。
【一一七】熺炭。熾なる炭。
【一一八】九泉。地に九重あり、故に地下を九泉といふ。
【一一九】腰眇蟬蜎。煙の飛騰する貌。
【一二〇】横海。海を塞ぐこと。
【一二一】突杌。高き貌。
【一二二】龍舟。大舟なり。
【一二三】踧蹜。聚る貌。

吹けば則ち百川倒に流る。或は乃ち（二四）窮波に（二五）蹭蹬し、陸に（二六）鹽田に死すれば、巨鱗雲を挿み、（二七）鬐鬣天を刺し、顱骨嶽を成し、流膏淵をなす。若し乃ち（二八）巖坻の隈、沙石の嶔には、（二九）毛翼鷇を産み、卵を剖いて禽を成し、鳧雛（三〇）離褷として、鶴子淋滲たり。羣がり飛び侶がり浴し、廣きに戯れ深きに浮び、（三一）翔霧連軒として、（三二）洩洩淫淫たり。翻動して雷を成し（三三）擾翰して林をなし、更〻相叫嘯し、（三四）詭色殊音あり。

【大意】其の極深の處には、蓬萊、方丈、瀛洲の如き巨島あり。大鼇之を負ひて浮び、大浪を裂いて出で、高く天を衝き、上に磐石を戴き神仙を住ましむ。大鼇力極めて勇壯、常に此山を負ひ、風に逆ひて行く。故に南風起れば南に行き、北風至れば北に向ふ。其岸涯には奇石珍寶鮫人の類あり。或は奇光を放ち、或は奇狀を呈し、文彩を散ずること雲錦の如く、螺蚌曲節の文、綾羅の如し、其光氷の如く火の如し。然も陽處に在れども消えず、陰處に在るも能く燃ゆ。魚には鯨あり、海中に在り。突兀として高く聳え、或は巖石を刮り、或は波間に潛み、魚龍を食ひ大舟を呑み、波を吸へば則ち

【二四】窮波。淺波なり。
【二五】蹭蹬。勢を失ふ貌。
【二六】鹽田。海邊なり。
【二七】鬐鬣。ヒレなり。
【二八】巖坻。坻は岸なり。
【二九】毛翼。鳥類なり。
【三〇】離褷・淋滲。毛羽の初めて生ずる貌。
【三一】翔霧。霧一本に鶩に作る、今之に從ふ。鶩は飛ぶこと。迣軒は飛ぶ貌。
【三二】洩洩淫淫。飛翔の貌。
【三三】擾翰。亂れ飛ぶこと。
【三四】詭色。奇異なる色。殊音は奇異なる聲。

洪波進まず。浪を吹けば則ち百川逆流す。其の一たび岸上に死するや、大鱗天に挿み、鬐鬣天を刺し、頭骨山を成し、流るる脂淵を成す。沙岸の下には鳥類雛を産み、卵を剖きて禽を成し、鳧雛鶴子或は廣處に戯れ、或は深處に浮び、飛翔の聲雷の如く、羽翼亂れて林を成し、各奇色異聲あり。

若し乃ち(一三五)三光既に淸く、天地(一三六)融朗なれば、(一三七)陽侯に汎ばず。(一三八)蹻に乘りて絕り往き、(一三九)安期を蓬萊に覿、(一四〇)喬山の帝像を見る。羣仙(一四一)縹眇として玉を淸涯に餐ひ、(一四二)阜鄕の(一四三)留舃を履み、羽翮の(一四四)襂纚たるを被り、天沼に翔り、窮溟に戯れ、有形を無欲に甄し、永く悠悠として以て長生す。且つ其の器たるや、乾の奧を包ね、坤の區を括る。惟れ神是に宅り、亦祇是に廬る。何の奇か有らざらん、何の怪か儲へざらん。茫茫たる積流、形を含んで內虛し。曠なるかな(一四五)坎德。卑うして以て自ら居り、往を弘め來を納れ、以て宗し以て都し、品物類生し、何か有り何か無からん。

【一三五】三光。日月星なり。
【一三六】融朗。通明なり。
【一三七】陽侯。波神なり。
【一三八】蹻。龍氣なり。
【一三九】安期。仙人の名。
【一四〇】喬山。黃帝の陵なり。
【一四一】縹眇。遠く視る貌。
【一四二】阜鄕。安期生は阜鄕の人なり。列仙傳に安期生秦ノ始皇ト與ニ語ル、始皇金數千萬ヲ賜フ、阜鄕ニ於テ皆置キ去ル、書ヲ留メ赤舃一量ヲ以テ報トナスとあり。
【一四三】留舃。後に殘ししクツ。
【一四四】襂纚。羽の垂るる貌。
【一四五】坎德。坎は水なり。

【大意】　日月光を增し、天地通明なれば、風波に汎ばず、龍氣に乘りて絕り行き、仙人を蓬萊山に見、復た喬山に往きて黃帝の像を見る。羣仙玉漿を淸水の畔に食ひ、安期の遺履を穿ち、羽衣を

被り、大海の中に戯れ飛び、形體ありて情慾なく、悠悠として長生し、その器宇廣大にして、能く天地の深要を包括す。神祇また此に居り、一物として儲へざるはなし。ああ此の大海小流を積んで大を成し、百物を含み納れて內虛しく、常に謙虛にして低きに居り、潮起れば則ち出で、潮退けば又能く細流を迎へ、百川の朝宗を受けて、百物の都聚を成し、物として之れなきはなし。

(一)江の賦

(二)郭景純

咨(三)五才の竝び用ふる、寔に水德の靈長なり。惟れ(四)岷山の江を導く、初め源を(五)濫觴に發し、聿に(六)洛沫に經始し、萬川を(七)巴梁に攡ね、(八)巫峽を衝いて以て迅く激ぎ、江津を躋りて派を起し、(九)泓量を極めて海のごとく運り、狀天に滔りて以て(一〇)淼茫たり。(一一)漢泗を揔括し(一二)淮湘を兼包し、(一三)沅澧を幷呑し(一四)沮漳を汲引し、源(一五)崌崍に二分し、流(一六)潯陽に九派し、

【一】江。長江、其下流を楊子江といふ。
【二】郭景純。郭璞、字は景純、晉の河東の人。
【三】五才。才は材なり、金木水火土なり。
【四】岷山。山の名、蜀にあり。
【五】濫觴。杯を浮ぶること。
【六】洛沫。川の名、雒水と沫水。經始は始め經過すること。
【七】巴梁。巴は郡名、梁は州名。
【八】巫峽。山の名。
【九】泓量。泓は深なり。
【一〇】淼茫。濶き貌。
【一一】漢泗。二川の名。
【一二】淮湘。二川の名。
【一三】沅澧。二川の名。
【一四】沮漳。二川の名。
【一五】崌崍。二山の名。
【一六】潯陽。縣名。九派は分れて九となること。

洪濤を(一七)赤岸に鼓し、餘波を(一八)柴桑に淪め、羣流を網絡し、(一九)涓澮を(二〇)商摧し、(二一)神委を(二二)江都に表し、流宗を混じて東に會し、(二三)五湖に注いで以て(二四)漫滯たり、(二五)三江に灌いで(二六)滮沛たり。(二七)六州の域に(二八)滈汗し、(二九)炎景の外に(三〇)經營し、限を(三一)華裔に作して、天地の(三二)嶮介を壯にする所以なり。萬里を呼吸し、靈潮を吐納し、自然に往復し、或は夕にし或は朝にし、逸勢を激して以て前驅し、乃ち鼓怒して濤を作し、(三三)峨嵋は(三四)泉陽の揭たり、(三五)玉壘は(三六)東別の標たり。(三七)衡霍磊落として以て鎭を連ね、(三八)巫廬嵬崫として嶠を比べ、靈を協へ氣を通じ、(三九)濆薄して相陶し、流風蒸雷、虹を騰げ霄を揚げ、(四〇)信陽より出でて長く邁き、(四一)大壑と(四二)沃焦とに湊る。

【一七】赤岸。山の名。
【一八】柴桑。縣名。
【一九】涓澮。小流なり。
【二〇】商摧。すべ納ること。
【二一】神委。委は流の聚る所なり。
【二二】江都。縣名。
【二三】五湖。太湖なり、其水分れて五となる、故に五湖といふ。
【二四】漫滯。寛き貌。
【二五】三江。浙江、呉松浦、陽江なり。
【二六】滮沛。流るる聲。
【二七】六州。益、梁、荊、江、揚、徐なり。
【二八】滈汗。長く流るる貌。
【二九】炎景。南方の地をいふ。
【三〇】經營。經歷といふが如し。
【三一】華裔。華は中國、裔は蠻夷なり。
【三二】嶮介。介は界なり。
【三三】峨嵋。蜀にある山の名。
【三四】泉陽。江の別名なり。揭は標なり。
【三五】玉壘。蜀にある山の名。
【三六】東別。江の別名。
【三七】衡霍。二山の名。磊落は高大なる貌。
【三八】巫廬。二山の名。嵬崫は高大の貌。
【三九】濆薄。氣亂るる貌。
【四〇】信陽。縣名。
【四一】大壑。渤海の東にある無底の谷なり、江水ここに集る。
【四二】沃焦。山名、東海の南三萬里に在り。

【大意】ああ金木水火土の五材、その用廣しと雖も、水の徳、物を利すること最も廣大なり。抑々長江は源を岷山に發し、其始は僅に杯を浮ぶるに過ぎざる小流なり。然も遂に洛沫を經、巴梁を過ぎ、萬川を總括し、巫峽に至りて疾激し、江津に至りて波浪を起し、廣大なること海の如く、渺渺として天に滔る。更に漢水泗水を并せ、淮水湘水を納れ、沅水澧水を呑み、沮水漳水を受けて益大なり。崌崍山下に於て源二分し、潯陽に至りて九分し、赤岸に洪濤を揚げ、餘波柴桑縣に至りて盡き、更に桼流を并せ、江都に至りて其神委を示し、東流して五湖に注ぎ、三江に入り、其流中國と蠻夷とを限り、天地の險界を成し、潮汐をなし羣流を納れ、須臾にして萬里を往復し、朝夕に進退し、鼓撃して波濤を作す。峨嵋、玉壘の二山、その源流を表し、衡霍二山相連りて鎮をなし、巫盧二山その末に峙ち、神靈の變化を合せ、山川の氣を通じ、以て萬物を陶冶し、鬱蒸の氣雷聲の如く、虹霓を起し薄雲を作し、信陽縣を出でて長く往き、終に大壑と沃焦とに集る。

若し乃ち(四三)巴東の峽、(四四)夏后疏鑿し、絶岸萬丈、壁立して赮のごとく駮なり。(四五)虎牙嵥く竪ちて以て(四六)屹崒たり。(四七)荊門闕のごとく竦ちて(四八)磐礴たり。(四九)圓淵九廻して以て(五〇)懸騰し、(五一)湓流雷呴し

【四三】巴東。巴は州の名、其東に三峽あり。
【四四】夏后。禹をいふ。
【四五】虎牙。山の名。
【四六】屹崒。高峻の貌。
【四七】荊門。山の名。
【四八】磐礴。廣大の貌。
【四九】圓淵。圓く渦く淵。
【五〇】懸騰。湧き立つこと。
【五一】湓流。湓は水聲なり。雷呴は雷の如く吼ゆること。

て電激し、駭浪暴に灑ぎ、驚波飛び薄り、(五二)迅澓澆を増し、湧湍疊り躍り、巖に砯りて鼓作し、(五三)瀖濩嚳瀺、(五四)淜瀁瀵淢潰濩㳚潡、(五五)潏湟淴泱、瀄閃瀾瀹、(五六)漩澴滎瀯、渨濡濆瀑、(五七)溭減濜溳として、龍鱗の結絡するがごとく、碧沙(五八)瀢瀄として往來し、巨石(五九)硉矹として以て(六〇)前却し、(六一)潛演の(六二)汩㴔する所、奔溜の(六三)礫錯する所、(六四)厓隙之が爲に(六五)嶮を泐き、(六六)碕嶺之が爲に(六七)嵒崿し。幽澗積岨、(六八)礐硞犖确たり。若し乃ち(六九)曾潭の府、靈湖の淵、(七〇)澄澹汪洸、瀇滉囦泫、(七一)泓汯洞澋、涒鄰圈潾、(七二)混瀚灝溔、映を流し焆を揚げ、(七三)溟滓渺汚、汗汗沺沺たり。之を察るに象なく、之を尋ぬるに邊なし。氣(七四)滃渤として以て霧のごとく杳く、時に(七五)鬱律として其れ煙の如く、(七六)肧渾の未

【五二】迅澓。廻流なり。澆は洄波なり。
【五三】瀖濩嚳瀺。大波相激する聲。
【五四】淜瀁。以下皆水の相擊つ聲。
【五五】潏湟。以下皆水流漂疾の貌。
【五六】漩澴。以下皆波浪回旋の貌。
【五七】溭減。以下皆參差として相次ぐ貌。
【五八】瀢瀄。水に漂ひて沙の動く貌。
【五九】硉矹。石の轉動する貌。
【六〇】前却。進退に同じ。
【六一】潛演。水脈の地中を行くもの。
【六二】汩㴔。沸き出づる貌。
【六三】礫錯。磨錯なり。
【六四】厓隙。岸なり。
【六五】嶮。峻險なり。泐は石の解散すること。
【六六】碕嶺。石山なり。
【六七】嵒崿。石涯連續すること。
【六八】礐硞。水石相擊つ聲。
【六九】曾潭。曾は層に同じ、重なり。深淵をいふ。
【七〇】澄澹。以下廣深の貌。
【七一】泓汯。以下水勢回旋の貌。
【七二】混瀚。以下水淸深澄澈の貌。
【七三】溟滓。以下廣大にして際なき貌。
【七四】滃渤。霧の出づる貌。
【七五】鬱律。煙の上る貌。
【七六】肧渾。混沌なり。

だ凝らざるに類し(七七)太極の天を構ふるに象たり。長波(七八)浹渫として、峻湍(七九)崔嵬たり。盤渦谷のごとく轉じ、淩濤山のごとく頽れ、(八〇)陽侯(八一)硪礒として以て岸のごとく起り、洪瀾(八二)涴演として雲のごとく廻り、(八三)沄淪溛瀤として乍ち浥り乍ち堆く、豁なること地の裂くるが如く、豁なること天の開くが若く、曲厓に觸れて以て縈繞し、崩浪を駭して相礧ち、(八四)硌窟を鼓して以て(八五)漰渤たり、乃ち(八六)湓湧して隈を駕ぐ。

【大意】昔禹、巴東の三峽を鑿ちて江流を通じ、絕岸高きこと萬丈、其色雲霞の斑なるが如く、虎牙、荆門の二山、岸を夾んで相對し、江水其間を流れ岸石に激して圓を成し、其聲雷の如く其勢電の如く、急波重り起り、波浪回旋し、碧沙之に隨つて往來し、大石之が爲に轉動し、奔流迅急にして岸石を磨錯し、石崖之が爲に銷磨するに至る。或は水流清深にして澄澈、日に映じて光を放ち、之を視れども象を見ず。時に或は雲霧を釀し陰暗にして黑煙の如く、混渾の未だ凝結せざるが如く、太極の天地を構成せんとするに似たり。時に或は盤旋して長波を作し、谷の轉るが如く、山の頽るるが如く、乍ち高く乍ち低く、浪起つて中に深穴を生じ、廣濶なること天地の開裂せるが如く、澎沛として相擊ち、穴窟を鼓して

【七七】太極。天地生成の元氣。
【七八】浹渫。波の連る貌。
【七九】崔嵬。高き貌。
【八〇】陽侯。波をいふ。
【八一】硪礒。搖動する貌。
【八二】涴演。廻曲の貌。
【八三】沄淪云云。回旋の貌。
【八四】硌窟。窟なり。
【八五】漰渤。水の聲。
【八六】湓湧。分湧なり。

聲を成し、汾湧して山隈に登る。魚は則ち(八七)江豚海狶・叔鮪王鱣、鮗鰊鰧鮋、鯪鰩鯩鰱あり。或は(八八)鹿觡象鼻、或は虎狀龍顏、鱗甲(八九)璀錯し、(九〇)煥爛たる錦斑あり。鬐を揚げ尾を掉し、浪を噴き涎を飛ばし、流を排して(九一)呼哈し、波に隨つて遊延し、或は采を爆して以て淵を晃らし、或は鰓を巖間に嚇く。(九二)介鯨濤に乘りて以て出入し、(九三)鯼鮆時に順つて往還す。爾して其水物の(九四)怪錯は、則ち(九五)潛鵠、魚牛、虎蛟、鉤蛇、蜦、蟫、鱟、蝞、鱝、鼃、鼊鼄、玉珧、海月、土肉、石華、三蝬、蜉江、鸚螺、蜁蝸あり。(九六)璅蛣蟹を腹にし、(九七)水母蝦を目にす。(九八)紫蚢渠の如く、(九九)洪蚶車を專にす。(一〇〇)瓊蚌晞曜して以て珠を瑩き、(一〇一)石蜐節に應じて葩を揚げ、(一〇二)踞蟜森衰として以て翹を垂れ、(一〇三)玄

【八七】江豚。以下皆魚の名。

【八八】鹿觡。鹿の角。

【八九】璀錯。まじはる貌。

【九〇】煥爛。照り輝く貌。

【九一】呼哈。魚の口を動かすこと。

【九二】介鯨。介は大なり。

【九三】鯼鮆。魚の名。鯼は南海に出づ、頭中に石あり、一名は石首。鮆は狹薄にして長し、一名は刀魚、常に三月八月を以て出づ、故に時に順ふといふ。

【九四】怪錯。奇怪雜錯なり。

【九五】潛鵠。以下皆水物の名。

【九六】璅蛣。長さ寸餘、大なるは長さ二三寸、腹中に蟹あり。

【九七】水母。東海に之を蛇といふ、此物耳目なし、故に人を避くるを知らず、常に蝦あれば之に隨ふ、蝦人を見れば則ち驚く、此物亦隨つて沒す。

【九八】紫蚢は紫色の大貝。渠は車渠、亦貝の名。

【九九】洪蚶は蛤に似て大なるもの。專は滿なり。

【一〇〇】瓊蚌。中より玉を出す貝。

【一〇一】石蜐。春花を生じ、冬死す。

【一〇二】踞蟜は蟲の名。森衰は垂るる貌。

【一〇三】玄蠣は黑カキ。磈磥磈硊は平ならざる貌。

蠣磈磥として碨砢し、或は潮波に(一〇四)泛瀲たり、或は泥沙に(一〇五)混淪たり。

【大意】魚類また種種あり。其形或は鹿角の如く、或は象鼻の如く、或は虎形をなし、或は龍顔をなし、鱗甲雜錯して文彩錦繡の如く、鬐を揚げ尾を掉し、波に隨つて浮遊し、或は背を淵中に曝し、或は鰓を巖間に開く。水物の奇怪なるもの亦少からず。紫貝の大さ車渠の如きあり。洪蚶の大さ車に滿つるあり。瓊蚌は光を水中に曜かし、石蛄は時節に應じて華を著け、蜛蠩は翹を垂れ、蠣は磊砢たり。或は波に漂ひ或は泥に沒す。

若し乃ち龍鯉の一角なるあり、奇鶬の九頭なるあり、鼈の三足なるあり、龜の六眸なるあり。(一〇六)䱻鼈胏のごとく躍りて璣を吐き、(一〇七)文魮磬のごとく鳴きて以て璆を孕み、(一〇八)鯈鱅翼を拂つて耀を掣き、(一〇九)神蜧蝹蜦として以て沈み遊び、(一一〇)騂馬波に騰りて以て(一一一)嘘蹀し、水兕雷のごとく(一一二)陽侯に咆ゆ。淵客室を巖底に築き、(一一三)鮫人館を懸流に構へ、雹のごとく布ける(一一四)餘糧あり、星のごとく離れ

【一〇四】泛瀲。浮ぶこと。
【一〇五】混淪。輪轉する貌。
【一〇六】䱻鼈。魚の名。
【一〇七】文魮。魚の名。
【一〇八】鯈鱅。蛇の類にして翼あり。
【一〇九】神蜧は蛇の類なり。蝹蜦は行く貌。
【一一〇】騂馬。水獸の名。
【一一一】嘘は水を噴くこと。蹀は行くこと。
【一一二】陽侯は波なり。淵客は水獸なり。
【一一三】鮫人。魚の類なり、ニンギヨ。
【一一四】餘糧。草の名、本草經に禹餘糧ハ東海ノ池澤ニ生ズとあり。
【一一五】沙鏡。雲母に似たる鑛物。

る(二二五)沙鏡あり、(二二六)靑綸競ひ糾れ、(二二七)縟組爭ひ映じ、(二二八)紫菜熒曄として以て叢被し、綠苔(二二九)研上に(二三〇)鬖髿たり。(二三一)石帆蒙蘢として以て嶼を蓋ひ、(二三二)蘋實時に出でて漂泳す。其下には則ち金礦、(二三三)丹礫、(二三四)雲精爥銀、(二三五)瑊玏璿瑰、(二三六)水碧潛瑉あり。(二三七)鳴石陽渚に列り、(二三八)浮磬陰濱に肆り、或は彩を輕漣に頳し、或は曜を涯鄰に焆し、(二三九)林潤はざるはなく、岸津はざるはなし。其羽族は則ち(二四〇)晨鵠、天雞、鵜、鷟、鷗、䴀あり。(二四一)陽鳥爰に翔り、于くに(二四二)玄月を以てす。千類萬聲自ら相喧聒し、翮を濯ひて風に疏め、翅を鼓して(二四三)翻翮し、揮弄して珠を灑ぎ、拊拂して沫を瀑し、集れば霞の布くが若く、散ずれば雲の豁なるが如く、(二四四)積羽に

【二二六】靑綸。草の名。
【二二七】縟組。草の名。
【二二八】紫菜は菜の名。熒曄は光明の貌。
【二二九】研上。滑石の上。
【二三〇】鬖髿。髮の亂るゝこと。
【二三一】石帆は草の名。蒙蘢は茂密の貌。
【二三二】蘋實。水草なり。孔子家語に楚ノ昭王江ヲ渡ル中流ニ物アリ大キサ斗ノ如ク圓クシテ赤シ、直ニ王ノ舟ニ觸ル、王大ニ怪ミ使ヲ魯ニ遣シテ孔子ニ問ハシム、孔子曰ク此レ萍實ナリ、剖イテ食フベシ、吉祥ナリとあり。
【二三三】丹礫。丹砂なり。
【二三四】雲精は雲母なり。爥銀ば銀の精光ありて燭の如きもの。

【二三五】瑊玏は石の光あるもの。璿瑰は玉の名。
【二三六】水碧、潛瑉。共に水玉の名。
【二三七】鳴石。石の玉に似て之を撞けば聲七八里に聞ゆるもの。
【二三八】浮磬。石の磬となすべきもの。
【二三九】林云云。荀子に玉山ニ在レバ木潤ヒ、淵珠ヲ生ズレバ崖枯レズとあり。
【二四〇】晨鵠は鳥の名。天雞は一名莎雞。以下皆鳥の名。
【二四一】陽鳥。雁の類の鳥。
【二四二】玄月。九月をいふ。
【二四三】翻翮。飛走の貌。
【二四四】積羽。地名。
【二四五】產氄。產は子を生むこと。氄は羽毛を落すこと。

（一三五）産毻し、（一三六）勃碣に往來す。

【大意】或は龍鯉の一角なるもの、或は奇鶬の九頭なるもの、或は鼈にして三足なるもの、龜にして六眼なるもの、皆ここに産し、其他蟲魚の奇異なるもの、亦極めて多し、又餘糧、沙鏡、青綸、縟組等の草あり。滑石の上に亂生して光を放ち、石帆、蓱實等の草、亦時に出でて漂流す。其下には金石珠玉の珍奇なるものあり。光を輕漣に流し、岸畔に曜く。隨つて林岸皆潤はざるはなし。鳥には晨鵠、天雞等あり。九月鴻雁亦飛翔し、其他千種萬類各其聲を異にして鳴き、毛羽を濯ひて風に修理し、水を揮つて珠を成し、波を拂つて沫を成し、集る時は霞光の布けるが如く、散ずる時は雲氣の開けるが如く、積羽、勃碣の間に往來す。

（一三七）橉杞潯涘に（一三八）稹薄し、（一三九）栵槤嶺に森として峰に羅り、（一四〇）桃枝篔簹實に繁りて叢あり。（一四一）葭蒲雲のごとく蔓り、（一四二）欆するに（一四三）蘭紅を以てし、（一四四）皜毦を揚げ（一四五）紫茸を擢んで、（一四六）潭隩を蔭ひ長江を被ふ。繁蔚たる（一四七）芳蘺、（一四八）隱藹たる水松あ

【一三六】勃碣。地名。
【一三七】橉杞は二木の名。潯涘は水涯なり。
【一三八】稹薄。叢生すること。
【一三九】栵槤。二木の名。
【一四〇】桃枝、篔簹。皆竹の類。
【一四一】葭蒲。共に水邊に生ずる草の名。
【一四二】欆。綵色を雜ふること。
【一四三】蘭紅。蘭は澤蘭、紅は蘢舌なり。
【一四四】皜毦。白き花。
【一四五】紫茸。紫の花。
【一四六】潭隩。淵隈なり。
【一四七】芳蘺。香草の名。
【一四八】隱藹は茂る貌。水松は藥草の名。

り。(一四九)涯灌芊蘖として(一五〇)潛薈葱蘢たり。(一五一)鯪鱧垠隙に(一五二)踦躚し、獱獺(一五三)厥空に睒瞲し、(一五四)迅蜼虛に臨んで以て巧を騁せ、(一五五)孤玃危に登りて(一五六)雍容し、(一五七)夔牯夕陽に(一五八)翹踛し、(一五九)鴛雛翮を(一六〇)山東に弄す。(一六一)岐に因つて渚を成し、瀾に觸れて渠を開き、壑に漱いで浦を生し、區別れて湖を作し、之に蹬すに(一六二)瀠瀯を以てし、之を濼すに(一六三)尾閭を以てし、之を標するに(一六四)翠翳を以てし、之に泛ぶるに(一六五)遊菰を以てし、(一六六)匪蓺の(一六七)芒種を播きて、自然の(一六八)嘉蔬を挺し、(一六九)鱗被せる菱荷、(一七〇)欑布せる水蓏あり、莖を翹げ蘂を灑し、穎を濯ひ裹を散じ、風に隨つて(一七一)猗萎たり、波と(一七二)潭淹たり、光を流し映を潛め、景霞火よりも炎なり。其旁には則ち(一七三)雲夢、雷池、彭蠡、青草、具區、洮滆、

【一四九】涯灌は厓側の叢なり。芊蘖は青盛の貌。
【一五〇】潛薈は水中の茂盛なり。葱蘢は茂る貌。
【一五一】鯪鱧はともに魚の名、足あり。垠隙は岸なり。
【一五二】踦躚。行く貌。
【一五三】厥空は岸側の穴。睒瞲は驚き視る貌。
【一五四】迅蜼。迅は疾なり、蜼は猿の一種。
【一五五】孤玃。孤は單なり、玃も猿の一種。
【一五六】雍容。從容に同じ。
【一五七】夔牯。牛の類。
【一五八】翹踛。跳りあがること。
【一五九】鴛雛。鳳の類。
【一六〇】山東。朝陽なり。
【一六一】岐。山岸の曲處なり。
【一六二】瀠瀯。水の暴溢すること。
【一六三】尾閭。海水の漏る處。
【一六四】翠翳。草叢なり。
【一六五】遊菰。遊は浮ぶこと、菰は草の名。
【一六六】匪蓺。人の植ゑたるにあらざるをいふ。
【一六七】芒種。稻麥なり。
【一六八】嘉蔬。稻なり。
【一六九】鱗被は鱗の如く多きなり。菱はヒシ。荷は蓮なり。
【一七〇】欑布は聚り敷くこと。蓏は草の實をいふ。
【一七一】猗萎。風に隨ふ貌。
【一七二】潭淹。波を逐うて動く貌。
【一七三】雲夢。以下皆湖澤の名。

珠、瓚、丹、瓅あり。極望數百、(一七四)沆瀁皛溔たり。爰に包山の洞庭、巴陵の地道あり、(一七五)潛逵傍通して(一七六)幽岫窈窕たり。(一七七)金精玉英其裏に瑱り、瑤珠怪石其表に琗り、驪虯其址に摎り、(一七八)梢雲其巓に冠す。(一七九)海童の巡遊する所、(一八〇)琴高の靈矯する所、(一八一)冰夷浪に倚りて以て傲睨し、(一八二)江妃嚬を含んで(一八三)矊眇し、凌波を撫して(一八四)鳧躍し、翠霞を吸ひて(一八五)夭矯たり。

【大意】 橉杞栛槤等の樹、叢生して岸に羅列し、美竹葭蒲蘭紅と相映じ、衆草の花葉、深水の曲、長江の岸を被ひ、鯪鯥等の奇魚岸上を行き、獱獺穴中に驚視し、蜼は空に臨んで跳躍し、玃は危險に登りて從容たり。夔㸲は夕陽の間に躍り、鴛雛は朝陽を受けて飛ぶ。曲に因りて渚を成し、澗に觸れて溝を成し、壑に注いで浦を成し、分流して湖を成し、之に增すに暴溢を以てし、之を漏すに尾閭を以てす。草菰其上に茂生し、美稻自然に秀で、莖を揚げ蘂を浸し、穗を濯ひ實を散じ、風に隨ひ波に映じて、霞の色よりも炎盛なり。雲夢、雷池等の大湖、この江と相旁通し、其大さ數百里なり。巴陵の地道また包山の洞庭湖底より潛通し、幽岫深邃にして奇狀を呈し、金精

【一七四】沆瀁皛溔。深廣の貌。
【一七五】潛逵。地下の道。
【一七六】幽岫。岫は山の穴あるもの。窈窕は深邃なり。
【一七七】金精は黃金の膏。玉英は玉の英華の色あるもの。
【一七八】梢雲。瑞雲なり。
【一七九】海童。仙人なり。
【一八〇】琴高は仙人の名。靈矯は靈を以て飛ぶなり。
【一八一】冰夷。水神なり。
【一八二】江妃。水神なり。
【一八三】矊眇。遠く視る貌。
【一八四】鳧躍。カモメの如く躍る。
【一八五】夭矯。自得の貌。

玉英其内に生じ、瑤珠怪石其外に生じ、驪龍其麓に蟠り。瑞雲其巓に出で、神仙其間に去來す。

若し乃ち宇宙澄寂にして、（一八六）八風翔かざれば、舟子是に於て棹を搦り、渉人是に於て榜を檥し、（一八七）飛雲を漂し（一八八）艅艎を運し、（一八九）舳艫相屬りて萬里橋を連ね。（一九〇）泝洄して流に沿ひ、或は漁し或は商し。（一九一）交益に赴き（一九二）幽浪に投じ、南極を竭し（一九三）東荒を窮む。爾して乃ち（一九四）雰祲を清旭に霽、（一九五）五兩の動靜を覘ふ。長風（一九六）颶として以て増扇ぎ、（一九七）廣莫颸として氣整ひ、徐なれども颸からず、疾なれども猛しからず。帆を鼓して迅く越え、漲を趨え洞を截り、波を凌ぎ柂を縱ち、電のごとく往いて杳溟なり。（一九八）霹たると晨霞の孤り往くが如く、眇にして雲翼の嶺を絶るが若く、數百に倏忽として、（一九九）俄頃に千里なり。（二〇〇）飛廉も以て其蹤を躡るなく、（二〇一）渠黃も其景

【一八六】八風。淮南子に天ニ八風アリ、條風、明庶風、淸明風、景風、涼風、閶闔風、不周風廣莫風ナリとあり。
【一八七】飛雲。吳の樓船の名。
【一八八】艅艎。吳の舟の名。
【一八九】舳艫。舟尾を舳といひ、舟頭を艫といふ。
【一九〇】泝洄。流を溯ること。
【一九一】交益。二州の名。
【一九二】幽浪。幽は幽州、浪は樂浪郡。
【一九三】東荒。東邊といふが如し。
【一九四】雰祲。天候氣象なり。禮記の鄭註に祲ハ陰陽ノ氣相浸漸シテ以テ災ヲ成スナリとあり。
【一九五】五兩。風を候ふ具、カザミ。
【一九六】颶。大風の貌。
【一九七】廣莫は風の名。颸は急風の貌。八風の一なり。
【一九八】霹。急に行く貌。
【一九九】俄頃。暫時なり。
【二〇〇】飛廉。風の神。
【二〇一】渠黃。駿馬の名。

を企つる能はず。是に於て（二〇二）蘆人漁子、江山に（二〇三）擯落し、衣は則ち（二〇四）羽褐、食は惟れ（二〇五）蔬鱻。澱に（二〇六）洊して涔となし、（二〇七）潨を夾んで（二〇八）筌を羅ね、（二〇九）筩灑鋒を連ね、（二一〇）罾罶船を比べ、或は輪を（二一一）懸碕に揮げ、或は瀨に中りて横に旋り、忽ち夕を忘れて宵歸り、（二一二）採菱を詠じて以て舷を叩き、自足を（二一三）一嘔に傲り、風波を尋ねて以て年を窮む。爾して乃ち之を域るに盤巖を以てし、之を豁にするに洞壑を以てし、之を疏つに（二一四）沲汜を以てし、之を鼓するに朝夕を以てし、川流の（二一五）歸湊する所、雲霧の（二一六）蒸液する所、珍怪の（二一七）化産する所、（二一八）傀奇の窟宅する所、（二一九）隱淪の列眞を納れ、異人を（二二〇）精魄に挺んで、（二二一）靈潤を千里に播き、（二二二）岱宗の

【二〇二】蘆人。蘆を採る人。
【二〇三】擯落。一本に擯を濱に作る、今之に從ふ。落は庵室の類なり、江濱に庵室を作ること。
【二〇四】羽褐。毛羽を以て作りし衣。
【二〇五】蔬鱻。野菜及び魚。
【二〇六】洊は柴を以て水を壅ぐこと。涔は柴を積みて魚を養ふ處。フシヅケ。
【二〇七】潨。小水の大水に入る處、合流の處なり。
【二〇八】筌。魚を捕ふる器。竹を以て之を作る。
【二〇九】筩灑は釣の名。鋒は鉤なり。
【二一〇】罾罶。網の名。
【二一一】懸碕。碕は曲岸なり。
【二一二】採菱。菱を採る歌。
【二一三】一嘔。一謳に同じ。
【二一四】沲汜。江水の分流する處。
【二一五】歸湊。湊は聚ること。
【二一六】蒸液。蒸潤なり。
【二一七】化産。變化生産なり。
【二一八】傀奇。奇異の物。
【二一九】隱淪。桓子新論に天下ノ神人五、一ニ曰ク神仙、二ニ曰ク隱淪、三ニ曰ク使鬼物、四ニ曰ク先知、五ニ曰ク鑄凝とあり。列眞。列仙なり。
【二二〇】精魄。江山の靈氣なり。
【二二一】靈潤。うるほひ。
【二二二】岱宗。泰山なり。公羊傳に石ニ觸レテ出デ、膚寸ニシテ合シ、朝ヲ崇ヘズシテ徧ク天下ニ雨フラス者ハ唯泰山ノ雲ノミとあり。

石に觸るるに越ゆ。その（二三）譎變儵悅に及んでは、（二四）符祥一にあらず、動應方なく、事に感じて出で、天地を經紀し、人術を錯綜し、妙なること之を言に盡すべからず、事之を筆に窮むべからず。

【大意】天氣晴朗にして風波起らざれば、舟子棹を執りて舟船を泛べ、舳艫相連りて萬里に達し、江流を上下して、或は魚を漁し或は物を商ひ、遠く交錯幽浪の地に至り、更に南極東邊を窮む。其の舟を發するや先づ朝に天候を伺ひ、五兩の動靜を察し、風向の宜しきを得るを見、然る後波を凌ぎ楫を縱にして遠く征き、朝霞の飛ぶが如く雲氣の嶺を絕るが如く、頃刻にして數百千里を走る。その速なること疾風も及ぶ能はず、駿馬も競ひ難し。蘆人漁夫また江山の側に屋を構へ、羽毛の短褐を著、野菜鮮魚を食とし、柴を聚めて涔となし、會流に筌を列ね、或は釣鉤を投じ、或は網を撒ち、舟を比べて住し、或は懸岸の上に坐し、或は水波の中を行き、利を貪りて歸るを忘れ、夜に及んで始めて還り、嘯傲して自ら樂み、以て年を窮む。而して此江たる、大山を以て限界となし、洞壑を經て海に入り、潮汐朝暮に去來して其浪を鼓し、川流皆之に歸聚し、潤液蒸して雲霧を成し、珠玉珍怪の物ここに化生し、神仙ここに遊び、秀靈の氣異人を生み、潤を千里に播くこと泰山の雲石に觸れて雨を降らすに過ぐ。その神速變化するに及んでは、災祥を下すこと一樣ならず。一一述べ盡し難し。

【二三】譎變は變化すること。儵悅は神速なること。
【二四】符祥。災祥なり。

若し乃ち(二五)岷精躍を(二六)東井に埀れ、(二七)陽侯形を大波に(二八)遯れ、(二九)奇相道を得て神を宅き、乃ち(三〇)靈爽を(三一)湘娥に協せ、黄龍の舟を負へるに駭き、(三二)伯禹の仰ぎ嗟けるを誠り、(三三)荆飛の蛟を擒にし、終に氣を(三四)太阿に成せるを壯とし、(三五)要離の(三六)慶を圖り、中流に在りて戈を推せるを悍とし、(三七)靈均の石を任き漁父の(三八)櫂歌を歎ぜしを悲み、(三九)周穆の師を濟し(四〇)八駿を黿鼉に驅りしを想ひ、交甫の珮を喪へるに感じ、神使の羅に嬰れるを愍み、(四一)大塊の形を流ける。萬を混じて一科に盡し、虧けざるを保ちて永く固く、元氣を靈和に稟くるを煥す。(四二)川瀆を考へて妙觀するに、實に江河より著なるはなし。

【大意】今其奇異の事を略記せんか。岷山の精上りて東井星となり、陽侯波間に死して波神となり、

【二五】岷精。岷山の精。
【二六】東井。星の名。河圖括地象に岷山ノ精上リテ井絡トナルとあり。
【二七】陽侯。淮南子の註に陽國侯水ニ溺死シ、其神ヨク大波ヲナスとあり。
【二八】遯形。死すること。
【二九】奇相。人名なり。
【三〇】靈爽。精神なり。
【三一】湘娥。堯の二女湘水に溺死し神となる。
【三二】伯禹。夏の禹王なり。呂氏春秋に禹江ヲ濟ルトキ黄龍舟ヲ負フ、禹仰イデ天ヲ視テ嘆ジテ曰ク、吾命ヲ天ニ受ケ力ヲ竭シテ以テ民ヲ養フ、余何ゾ龍ヲ憂ヘンヤト、龍耳ヲ俛レ尾ヲ曳イテ逃ルとあり。
【三三】荆飛。荆は楚なり、國名、飛は佽飛なり、人名。
【三四】太阿。寶劍の名。
【三五】要離。人名。
【三六】慶。慶忌なり、人名。
【三七】靈均。屈原なり。石を懐いて自ら汨羅に投じて死す。
【三八】櫂歌。ふなうた。楚辭に漁父槐ヲ鼓シテ歌ツテ曰ク、滄浪ノ水、清マバ以テ吾が纓ヲ濯フベシ云云とあり。
【三九】周穆。周の穆王。
【四〇】八駿。八駿は八匹の駿馬。黿鼉は大龜なり。
【四一】大塊。天地の元氣。
【四二】川瀆。川流なり。

奇相道を得、其精爽を合せて湘娥と倶に神となりし等の事あり。禹王の江を濟りし時、黄龍其舟を負ひ、羣臣皆駭く。禹獨り天を仰いで嘆せし事あり。楚の佽飛太阿の劍を得、楚王に從つて江を渡りし時、江神之を奪はんとし、風波大に起り、兩蛟舟を挾む。佽飛劍を以て蛟を斬り風乃ち止む。其事壯なりと謂ふべし。要離慶忌と倶に江を渉りし時、劍を拔いて以て慶忌を刺し、捽して之を江に投ず。其事亦勇となすに足る。屈原誠忠にして、君の放逐に遇ひ、石を抱いて自ら江に投じ、漁夫の櫂歌を嘆ず、其事誠に悲むべし。周の穆王軍を起し、東の方九江に至り、黿鼉を叱して梁となし、以て八駿を驅りし事あり。鄭の交甫、漢皐臺下に遵ひ二女に遇ひ、其珮を請ふ。二女之を與ふ。交甫受けて之を懷にし、超然として去ること十步、循つて之を探れば即ち亡し。回顧すれば二女も亦即ち亡し。其事實に傷むべし。神使網に罹る。亦悲むに足る。かの大塊の萬物を作るや、萬物を混じて盡く一科に歸せしめ、(春秋元命苞に水は五行の始、元氣の津液なりと見ゆ)道を保ち、淡然として永く虧けず、元氣をして和合せしむ。其事亦美するに足る。天下川流の妙を觀ずるに江河より著る者なし。ああ靈なるかな。

卷の第七

賦庚

物色

風の賦

（一）宋玉

楚の襄王（二）蘭臺の宮に遊ぶ。宋玉、（三）景差侍す。風颯然として至るあり。王乃ち襟を披いて之に當りて曰く、快なるかな此風、（四）寡人の（五）庶人と共にする所のものかと。宋玉對へて曰く、此れ獨り大王の風のみ。庶人安んぞ得て之を共にせんと。王曰く、夫れ風は天地の氣溥く暢びて至り、貴賤高下を擇ばずして加ふ。今子は獨り以て寡人の風となす。豈說あるかと。宋玉對へて曰く、臣師に聞く（六）枳句は巢を來し、空穴は風を來すと。其の託する所の者然り。則ち風と氣と殊なりと。王曰く、夫れ風は始め安より生ずるかと。宋玉對へて曰く、夫れ風は地より生じ、（七）靑蘋の末より起り、

【一】宋玉。楚の大夫なり。屈原の弟子なり。
【二】蘭臺。宮の名。
【三】景差。楚の大夫たり。
【四】寡人。德の少なき人の意、王侯の謙稱。
【五】庶人。庶は衆なり。平民をいふ。
【六】枳句。枳は木の名、句は曲なり。

谿谷に(八)侵淫し、(九)土囊の口に盛怒し、太山の阿を緣り、松柏の下に舞ひ、(一〇)飄忽淜滂として激颺(一一)熛怒し、(一二)耾耾として雷のごとく聲り、(一三)廻穴錯迕し、石を蹷し木を伐ち、林莽を梢殺す。其の將に衰へんとするに至りては、(一四)被麗披離して、孔を衝き、(一五)楗を動かし、(一六)眴渙粲爛として離散轉移す。故に其清涼なる雄風は、則ち飄擧升降して、高城を(一七)乘凌し、深宮に入り、華葉に邸れて氣を振ひ、(一八)桂椒の間に徘徊し、激水の上に翺翔し、將に芙蓉の(一九)精を擊たんとし、(二〇)蕙草を獵て(二一)秦蘅に離き、(二二)新夷を槩ひ(二三)荑楊に被り、廻穴として陵を衝し、蕭條たる衆芳あり。然る後中庭に(二四)倘佯し、北のかた玉堂に上り、羅帷を躋り(二五)洞房を經、廼ち大王の風たるを得るなり。故に其風人に中るときは、狀直に(二六)憯悽惏慄として淸涼歎を增す。淸淸泠泠として病を愈し酲を析き、耳目を發明し體を寧くし人に便するは、此れ所謂大王の(二七)雄風なりと。

【七】青蘋。萍の大なるもの。うきくさ。
【八】侵淫。漸く進むなり。
【九】土囊。谷口なり。
【一〇】飄忽は神速なり。淜滂は風の物をうつ聲。
【一一】熛怒。熛は火の飛ぶなり、怒るを熛の聲の如きなり。
【一二】耾耾。風の聲。
【一三】廻穴は風の定まらざる貌。錯迕は交錯なり。
【一四】被麗披離。輕く擧る貌。
【一五】楗。門のカンヌキ。
【一六】眴煥粲爛。鮮明の貌。
【一七】乘凌。登ること。
【一八】桂椒。香木の名。
【一九】精、菁に同じ、華なり。
【二〇】蕙草。香草の名。
【二一】秦蘅。ともに香草の名。
【二二】新夷。留夷に同じ、香草の名。
【二三】荑楊。カハヤナギの花。
【二四】倘佯。徘徊といふが如し。
【二五】洞房。深屋なり。
【二六】憯悽惏慄。寒き貌。
【二七】雄風。雄駿の風なり。

【大意】楚の襄王、宋玉景差を從へて蘭臺宮に遊ぶ。時に風颯然として至る。王襟を披きて風に當りて曰く、涼風極めて快なり。庶人と雖も寡人と共に此快を享くるを得るかと。宋玉對へて曰く、否否此れ獨り大王の雄風のみ。庶人は共に此快を享くる能はざるなりと。王怪みて問うて曰く、風は天地普暢の氣にして、貴賤上下の差別あるなし。今庶人の寡人と共にするを得ざるは何故ぞと。宋玉對へて曰く、臣聞く曲枳には巢鳥多く、門戶の穴には風多しと。各其附託する所然るなり。されば氣は貴賤を別たずと雖も、風は貴賤の別なき能はざるなりと。王因つて問ふ、風は始め何處より生ずるかと。宋玉對へて曰く、風は先づ地より生じ、蘋末に起り、溪壑に漸進して谷口に盛怒し、太山松柏の下に舞ひ、物に激して雷の如く吼え、交錯して木石を擊ち林木を枯す。其の將に微ならんとするや、輕擧して穴を衝き門を動かし、塵埃を揚げずして四方に轉移す。乃ち高城深宮に入り、香木芳草の間に徘徊し、上衝して陵を超え、蕭蕭然として衆芳の氣を散じ、中庭に入りて羅帷を濟り、房室に入りて大王の雄風となる。故に其風庶人に中れば（素問に若し汗出でて虛に逢へば風人に中るとあり）忽ちにして惡寒を感じ歎を增さしむ。ただ清涼にして病を愈し醉を解き、耳目を爽快にし身體を便寧ならしむるは、獨り大王の雄風のみと。王曰く、善いかな事を論ずるや。夫れ庶人の風、豈聞くべきかと。宋玉對へて曰く、夫れ庶人の風は

（二八）塕然として窮巷の間より起り、堁を堀き塵を揚げ、（二九）勃鬱煩寃して、孔を衝き門を襲ひ、（三〇）沙堁を動かし（三一）死灰を吹き、（三二）溷濁を駭かし、（三三）腐餘を揚げ、邪に薄に（三四）甕牖に入り、室廬に至る。故に其風人に中れば、狀直に（三五）憞溷鬱邑して、溫を毆り濕を致し、中心（三六）慘怛し、病を生じ熱を造し、脣に中れば胗となり、目に得れば蔑となり、（三七）啗齰嗽獲して、死生を卒へず。此れ所謂庶人の（三八）雌風なりと。

【大意】襄王曰く、汝の事を論ずること誠に善し。然らば問はん。庶人の風は如何ん。宋玉對へて曰く、庶人の風は忽然として窮巷より起り、昏濁にして塵を揚げ、亂起して穴を衝き、門に入り、沙を巻き灰を吹き、腐臭を揚げて甕牖茅屋に入る。故に人其風に中れば、人をして惡亂して憂へしめ、熱病を起さしめ、脣に中れば胗となり、目に中れば蔑となり、死せるにもあらず生けるにもあらず、その害言ふに勝ふべからず。此れ所謂庶人の雌風なりと。

【二八】塕然。風の起る貌。
【二九】勃鬱煩寃。風の廻旋する貌。
【三〇】沙堁。沙塵なり。
【三一】死灰。火の消えし灰。
【三二】溷濁。不潔なり。
【三三】腐餘。腐臭の餘なり。
【三四】甕牖。破瓶を塗り込めて作りしマド。
【三五】憞溷は惡亂なり。鬱邑は憂ふること。
【三六】慘怛。憂勞なり。
【三七】啗齰嗽獲。風に中りて口の動く貌。
【三八】雌風。卑惡の風なり。

(一)秋興の賦並序

潘安仁

晉の(二)十有四年、余春秋三十有二、始めて二毛を見る。(三)太尉の掾を以て(四)虎賁中郞將を兼ね、散騎の省に寓直す。高閣雲に連りて、(五)陽景曜すこと罕なり。(六)蟬冕を珥みて(七)紈綺を襲るの士、此に遊處す。僕は野人なり。(八)偃息すること茅屋茂林の下に過ぎず。談話すること農夫田父の客に過ぎず。官を攝し(九)乏きを承け、猥に朝列に厠り、夙に興き晏く寢ね、(一〇)底寧に遑あらず。譬へば猶ほ池魚籠鳥の江湖山藪の思あるがごとし。是に於て翰を染め紙を操り、慨然として賦す。時に秋なり。故に秋興を以て篇に命く。

其辭に曰く、

(一一)四運忽として其れ(一二)代序し、萬物紛として以て(一三)迴薄す。(一四)花蒔の時育を覽て、盛衰の託する

【一】秋興。秋にあたりて感興を起せること。
【二】十有四年。晉の武帝の咸寧四年なり。春秋。年齢なり。二毛。白髮なり。
【三】太尉。官名、時に賈充太尉たり。掾は屬官なり。
【四】虎賁中郞將。官名なり。
【五】陽景。日なり。
【六】蟬冕。冕は冠なり、金を以て作れる蟬を飾とす。故に蟬冕といふ。
【七】紈綺。貴人の服なり。
【八】偃息。休息といふが如し。
【九】乏き云云。人物の缺乏を補ふこと。仕官する謙辭。
【一〇】底寧。底は致す、寧は安なり。安樂にしてゐること。
【一一】四運。四時なり。
【一二】代序。節序を代ふること。
【一三】迴薄。薄は迫なり。
【一四】花蒔。花なり。

所を察す。冬は索きて春は敷くに感じ、夏は茂りて秋は落つるを嘆く。(一五)末士の(一六)榮悴と雖も、伊れ人情の美惡なり。善いかな(一七)宋玉の言に曰く、悲しいかな秋の氣たるや、(一八)蕭瑟として草木搖落して變衰し、(一九)憀慄として(二〇)遠行に在り、山に登り水に臨み、將に歸らんとするを送るが若しと。夫れ歸るを送れば(二一)慕徒の戀を懷き、遠行すれば(二二)羇旅の憤あり。川に臨みては流を感じて以て逝くを歎き、山に登りては遠きを懷ひて近きを悼む。彼の(二三)四慼の心を疚しむる、(二四)一塗に遭ひて忍び難し。嗟秋日の哀むべき、諒に愁へて盡きざるなし。野に歸燕あり、隰に翔隼あり。(二五)游氛朝に興り、槁葉夕に殞つ。是に於て乃ち(二六)輕箑を屛け(二七)纖絺を釋ぎ、(二八)莞蒻を藉き袷衣を(二九)御す。庭樹(三〇)槭として以て(三一)灑落し、勁風(三二)戾として帷を吹き、蟬(三三)嘒嘒として以て寒く吟じ、雁飄飄として南に飛び、天(三四)晃朗として以て彌高く、日(三五)悠揚として浸く微なり。何ぞ微陽の(三六)短晷なる、涼夜の方に永きを覺

【一五】末士。士は一本に事に作る。小事なり。
【一六】榮悴。盛衰榮枯なり。
【一七】宋玉。楚の大夫。その作れる所の九辯、楚辭に見ゆ。
【一八】蕭瑟。秋の聲なり。さびしきこと。
【一九】憀慄。傷み念ふ貌。
【二〇】遠行。遠方の行路。
【二一】慕徒。徒は侶なり。友を慕ふこと。
【二二】羇旅。行旅なり。
【二三】四慼。四つの憂、遠行、登山、臨水、送歸をいふ。
【二四】一塗。一途に同じ。
【二五】游氛。秋氣なり。
【二六】輕箑。輕き扇。
【二七】纖絺。細き葛布の衣。
【二八】莞蒻。蒲にて編みし席。
【二九】御。著ること。
【三〇】槭。葉の落つる貌。
【三一】灑落。さらさら落ること。
【三二】戾。勁疾の貌。
【三三】嘒嘒。蟬の聲なり。
【三四】晃朗。明なる貌。
【三五】悠揚。日の入る貌。

ゆ。月(三七)朦朧として以て光を含み、露凄清として以て冷を凝らし、熠燿(三八)階闥に粲り、蟋蟀(三九)軒屏に鳴き、(四〇)離鴻の晨吟を聴き、(四一)流火の餘景を望み、宵(四二)耿介として寐ねられず獨り(四三)華省に展轉し、時歳の遒り盡くるを悟り、慨として首を俛れて自ら省る。(四四)斑鬢彪れて以て弁を承け、素髮颯として以て領に垂る。(四五)羣儁の(四六)逸軌を仰ぎ、(四七)雲漢を攀ぢて以て遊騁し、(四八)春臺の(四九)熙熙たるに登り、(五〇)金貂の(五一)炯炯たるを珥む。苟に(五二)趣舍の途を殊にせる、庸詎ぞ其の(五三)躁靜を識らん。

【大意】四時更代して萬物遞に相遷迫す。花草の開落を見て盛衰の理を察すべし。冬は枯れて春は芽ぐみ、夏は茂りて秋は落つ。草木の榮枯は誠に小事なりと雖も、人情亦此に隨つて憂樂の別なき能はず。宋玉嘗て九辯を作りて曰く、秋の氣たる誠に悲し。蕭蕭として草木凋衰し、人情亦隨つ

【三六】短晷。日の短きこと。
【三七】朦朧。月初めて出づる貌。
【三八】階闥。階段及び小門。
【三九】軒屏。軒及び墻。
【四〇】離鴻は北に歸る雁。晨吟は朝鳴くこと。
【四一】流火。流は下なり、火は星の名。秋は火星西に下る。故に餘景といふ。
【四二】耿介。心の安からざる貌。
【四三】華省は官廳なり。展轉は眠られずして、幾度もねがへりすること。
【四四】斑鬢。鬢の毛の白黒相雜れるをいふ。
【四五】羣儁。多くのすぐれたる人。序の蟬冕綺紈の人を指す。
【四六】逸軌。高迹なり。高き位をいふ。
【四七】雲漢。高位に喩ふ。
【四八】春臺。はれやかなる臺、高位に喩ふ。
【四九】熙熙。心ののびのびすること。
【五〇】金貂。金蟬貂尾の冠。高官の人の冠なり。
【五一】炯炯。光る貌。
【五二】趣舍。過不過といふが如し。
【五三】躁靜。動靜といふが如し。

て悲傷し、恰も他郷に在りて山に登り水に臨み、將に歸らんとする人を送別するが如き感ありと。夫れ歸らんとする人を送る時は戀慕の心なき能はず、他郷に在れば懷鄕の情なき能はず、水に臨めば歲月流水の如しの嘆なき能はず、山に登れば遠きを懷ひ近きを悼むの感なき能はず。此の四愁の心を痛ましむる、その一に遭ふも尙ほ心に忍び難し。況んや此の四に遭ふをや。ああ秋は實に愁嘆の極なりと謂ふべきなり。野を望まんか、歸燕の相携へて去るあり。澤に臨まんか、翔隼の相鑿つあり。冷氣朝に起りて枯葉夕に落つ。乃ち扇を棄て絺を脫ぎ、蒲席を敷きて袷衣を著る。庭樹凋落し勁風幔を吹き、蟬鳴き雁歸り、天高く陽氣衰へ、日短くして夜長く、月は光を含んで暗く、露は寒を凝らして淸く、螢火飛び蟋蟀鳴き、晨には歸雁の嗁くを聽き、夕には火星の餘光を望み、徹宵寐ねられずして宮署に展轉す。歲月の移り易きを悟り、慨然として俯して思へば、鬢髮白に化して領に垂る。翻つて高貴の人を見れば、恰も雲漢を攀ぢ春臺に登るが如く、揚揚自得して金貂の冠を戴けり。然れども人に遇不遇の變あり。復た何ぞ其動靜を論ぜんや。

（五四）至人の（五五）休風を聞き、（五六）天地を一指に齊うす。（五七）彼れ安きを知りて危きを忘れ、固に生を出でて死に入り、行いて趾を跡を容るるに投じ、踐まざるに殆くして底るを獲。足を側つるを闕りて以て泉に及ばば、猴猨と雖

【五四】至人。至德の人。
【五五】休風。美風といふが如し。
【五六】天地云云。莊子齊物論に天地モ一指ナリ。萬物モ一馬ナリとあり。

も履まじ。龜骨を(五八)宗祧に祀られ、身を綠水に反さんことを思ふ。且く衽を斂めて以て歸り來り、忽ち(五九)紱を投じて以て高く厲り、(六〇)東皐の沃壤に耕し、(六一)黍稷の餘稅を輸し、泉は湍を石間に涌かし、菊は芳を(六二)崖澨に揚ぐ。秋水の(六三)涓涓たるに澡ぎ、(六四)游鯈の(六五)潎潎たるを玩び、山川の阿に(六六)逍遙して、人間の世に(六七)放曠し、優なるかな游なるかな、聊か以て歲を卒へん。

【大意】余嘗て至人の美風を聞き、天地を視ること一指に齊し。彼の得意の人の如きは、榮利を以て安しとなし、其危きを忘る。所謂生地を棄てて死地に入り、足を一跡の地に投じ、進み踐まずして纔に安全の地を保てるが如し。若し足を側つるの地を留め、足外の地を掘りて泉に及ばば、猿の捷と雖も豈よく履まんや。危いかな。(顏氏家訓に、人足の履む所數寸に過ぎず。然れども咫尺の途必ず崖岸に顚蹷し、拱抱の梁每に川谷に沈溺するは何ぞや。其傍に餘地なきが爲なりとあり)。龜其骨を宗廟に祀らる。貴は則ち貴なり。然も再び綠水に歸らんと欲するも復た得べからざるなり。(莊子秋水篇參照、貴者患に遇ひ、再び貧賤に歸らんとするも能はざるに喩ふ)余因つて衣綬を斂め、榮利を棄てて自ら厲

【五七】彼れ。得意の人を指す。
【五八】宗祧。宗廟なり。
【五九】紱。印綬なり。
【六〇】東皐。水田を皐といふ。東は春なり。
【六一】黍稷。キビなり。
【六二】崖澨。水崖なり。
【六三】涓涓。水の流るる貌。
【六四】游鯈。小魚なり。
【六五】潎潎。游行する貌。
【六六】逍遙。散逸の貌。
【六七】放曠。拘束なき貌。

み沃壤の地に耕し、餘を存して租稅に供し、石間の清泉を掬び、崖畔の芳菊を摘み、秋水に躁ぎ游魚を玩び、山川の間に逍遙して、世間の煩累を受けず、優游自適して以て其天年を終へんと欲す。

雪の賦　(一)謝惠連

歳將に暮れんとし、時既に昏なり。寒風積り、愁雲繁し。(二)梁王悅ばずして(三)兎園に游び、乃ち旨酒を置き、賓友に命じ、(四)鄒生を召し、(五)枚叟を延く。(六)相如末に至り、客の右に居る。俄にして微霰零ち密雪下る。王乃ち(七)北風を衛詩に歌ひ、(八)南山を周雅に詠じ、(九)簡を(一〇)司馬大夫に授けて曰く、子の秘思を抽き、子の妍辭を騁せ、色を侔うし稱を揣り、(一一)寡人の爲に之を賦せよと。相如是に於て席を避けて起ち、(一二)逡巡して揖して曰く、臣聞く(一三)雪宮は東國に建ち、(一四)雪

【一】謝惠連。宋の陳郡陽夏の人、年十歳にして能く文を屬す、族兄靈運深く之を賞す、年二十七にして卒す。

【二】梁王。梁の孝王は漢の文帝の子なり。但し今假に設けて言ふなり。

【三】兎園。梁の孝王の園の名。

【四】鄒生。鄒陽なり。

【五】枚叟。枚乘なり。

【六】相如。司馬相如なり。

【七】北風。詩經の衛風に北風其レ涼ク、雨雪其レ雱タリとあり。

【八】南山。詩經小雅南山に上天雲ヲ同ウシ、雨雪雰雰タリとあり。

【九】簡。竹札なり。

【一〇】司馬大夫。司馬相如なり。

【一一】寡人。德の少き人の意、王侯の謙稱。

【一二】逡巡。退却なり。

【一三】雪宮。齊に在る宮の名、齊は山東省なり、故に東國といふ。

【一四】雪山。西域に在る山の名。

山は西域に峙ち、(二五)岐昌は詠を(二六)來思に發し、(二七)姬滿は歌を(二八)黃竹に串ね、(二九)曹風は麻衣を以て色を比べ、(三〇)楚謠は幽蘭を以て曲を儷べ、尺に盈つれば則ち瑞を豐年に呈し、丈に袤れば則ち沴を陰德に表す。雪の時義遠きかな。請ふ其始を言はん。

【大意】歳暮の夕、寒風吹いて陰雲深し。梁王懌ばずして兎園に遊び、酒肴を備へ、賓友を會し、鄒陽、枚乘等の文士を召集す。司馬相如後れて至り、亦賓客の右に坐す。少焉にして密雪降る。王因つて衞風北風の章、小雅南山の章を歌ひ、紙牘を司馬相如に與へて曰く、乞ふ汝か深秘の思を發し、姸麗の辭を聯ね、雪と其色を侔うし、其の稱ふ所を畫りて、此雪を賦せよと。相如乃ち起つて揖して曰く、臣聞く雪宮は東國に在り、雪山は西域に在り。文王は今我來思、雨雪霏霏と歌ひ、穆王は黃竹歌三章を作り、曹風は白雪を以て麻衣に比し、楚謠は白雪を以て幽蘭に配し、尺に盈つれば豐年の瑞となり、丈に過ぐれば、陽傷陰盛の災を成すと。雪の意義亦深遠なり。今更に其始を言はん。

【二五】岐昌。岐は周の居りし地名、昌は周の文王の名。

【二六】來思。思は助辭にして意義なし。詩經に昔我往矣、楊柳依依、今我來思、雨雪霏霏とあり。

【二七】姬滿。姬は周の姓、滿は周の穆王の名。

【二八】黃竹。穆王黃臺の丘に遊ぶ、大に寒くして北風雪をふらす、王詩三章を作りて以て人を哀む。

【二九】曹風。詩經の曹風に蜉蝣ノ掘閱、麻衣雪ノ如シとあり。

【三〇】楚謠。楚の宋玉の諷賦に臣嘗テ行イテ主人ニ至ル、獨リ一女アリ、臣ヲ蘭房ノ中ニ置ク、臣琴ヲ授ケテ之ヲ鼓セシム、幽蘭白雪ノ曲ヲナスとあり。

若し乃ち（二一）玄律窮りて（二二）嚴氣升り、（二三）焦溪涸れて（二四）湯谷凝り、（二五）火井滅えて溫泉冰り、（二六）沸潭涌くことなく炎風興らず、（二七）北戶扉を墐り（二八）裸壤繒を垂る。是に於て河海雲を生じ、（二九）朔漠沙を飛ばし、氛を連ね（三〇）霿を累ね、日を掩ひ霞を韜み、霰（三一）淅瀝として先づ集り、雪（三二）紛糅して遂に多し。其の狀たるや、散漫交錯して（三三）氛氳蕭索、藹藹浮浮、瀌瀌奕奕たり。（三四）聯翩として（三五）飛灑し、徘徊して（三六）委積し、始は甍に緣りて棟を冒し、終は簾を開いて隙に入り、初は（三七）墀廡に（三八）便娟として、末には（三九）帷席に縈盈し、既に方に因りて（四〇）珪をなし、亦圓に遇ひて（四一）璧をなす。隰を眄れば則ち（四二）萬頃縞を同うし、山を瞻れば則ち千巖俱に白し。是に於て臺は璧を重ねたるが如く、逵は璐を連ねたるに似たり。庭には（四三）瑤階を列ね、林には（四四）瓊樹を挺んで、皓鶴も鮮を奪はれ、（四五）白鷴も素きを失ひ、（四六）紈袖も

【二一】玄律窮る。十二月をいふ。
【二二】嚴氣。寒氣なり。
【二三】焦溪。溪の名。
【二四】湯谷。冬も夏も溫かなる川。
【二五】火井。蜀に在り、井中常に火を出す。
【二六】沸潭。沸騰せる潭。
【二七】北戶。北に向へる戶。
【二八】裸壤。裸人國なり。
【二九】朔漠。北方沙漠の地。
【三〇】霿。霧なり。
【三一】淅瀝。細に下る貌。
【三二】紛糅。相雜ること。
【三三】氛氳。皆盛に飛ぶ貌。

【三四】聯翩。雪の飛散する貌。
【三五】飛灑。ふり注ぐこと。
【三六】委積。つもること。
【三七】墀廡。堂下の周屋なり、ヒサシ。
【三八】便娟。雪の輕く廻る貌。
【三九】帷席。帷はトバリなり。
【四〇】珪。四角なる玉。
【四一】璧。圓き玉。
【四二】萬頃。一頃は田百畝の面積なり。縞は白きこと。
【四三】瑤階。玉の階段。
【四四】瓊樹。玉樹なり。
【四五】白鷴。鳥の名。
【四六】紈袖。白絹の袖。

冶しきに慙ぢ、(四七)玉顏も姱きを掩ふ。若し乃ち(四八)積素未だ虧けず、白日朝に鮮かなれば、爛たることと(四九)燭龍の燿を銜み、(五〇)崑山を照すが若し。爾して其の滴を流し氷を垂れ、霤に緣り隅に承くれば、粲たること(五一)馮夷の蚌を剖き、明珠を列ぬるが若し。夫の(五二)繽紛繁騖の貌、(五三)皓汗皦潔の儀、廻散縈積の勢、飛聚凝曜の奇に至りては、固に(五四)展轉して窮りなし、嗟得て備に知り難し。

【大意】 若夫れ嚴冬寒氣上升し、焦溪涸れ湯谷氷り、火井消え溫泉氷り、沸潭涌かず炎風起らず、北戸に泥を塗りて寒風を防ぎ、裸人國人も衣を纏ふの時に至れば、河海雲を起し沙漠沙を飛ばし、氛靄を連積して霞日を掩ひ、微霰先づ至り飛雪紛紛として降る。その狀たる甍棟に堆積し、壁穴を經過し、廡廂に舞ひ帷幔を廻り、方形に遇ひては方珪となり、圓物に遇ひては圓璧となり、或は高臺を掩ひ大路を覆ひて、天地一白、階樹盡く瓊玉の如く、白鶴、白鷴、紈素、玉顏も一たび此に對すれば皆顏色を失ふ。積雪未だ消えず、白日鮮明なる時は、其の光爛然として燭龍の崑山を照すが如く、融解して氷柱を垂るるや、粲然として水神の蚌を剖きて明珠を列ぬるが如し。その飛揚潔白堆積聚散の狀に至りては、變化萬狀にして一一知り盡し難し。

【四七】玉顏。美人の顏。
【四八】積素。積れる白雪。
【四九】燭龍。崑山の神なり。
【五〇】崑山。仙山の名。
【五一】馮夷。水神なり。
【五二】繽紛繁騖。雪の烈しくふる貌。
【五三】皓汗皦潔。潔白なる貌。
【五四】展轉。變轉なり。

若し乃ち娛玩の已むなきを申ぶれば、夜幽靜にして懷多く、風檻を觸つて響を轉じ、月幌に承けて暉を通ず。(五五)湘吳の醇酎を酌み、(五六)狐貉の(五七)緜衣を御し、(五八)庭鵾の雙び舞ふに對し、雲雁の孤り飛ぶを瞻、(五九)〔園中の萱草を折り、階上の芳薇を摘み〕、霜雪の交り積れるを踐み、(六〇)枝葉の相違へるを憐み、遙思を千里に馳せ、手を接へて同じく歸らんことを願ふと。鄒陽之を聞き(六一)懣然として心服し、妍唱を懷ふあり。敬んで末曲に接がんとす。是に於て乃ち作つて積雪の歌を賦す。歌に曰く、佳人を携へて重幄を披き、綺衾を援いて芳縟に坐し、(六二)薫鑪を燎いて明燭を炳し、(六三)桂酒を酌んで(六四)淸曲を揚ぐと。又續いで白雪の歌を爲る。歌に曰く、曲既に揚り酒既に陳り、(六五)朱顏酡として自ら親まんことを思ふ。帷を低れて以て枕を昵づけんことを願ひ、珮を解いて紳を褫かんことを念ふ。年歲の暮れ易きを怨み、後會の因なきを傷む。君寧く階上の白雪を見るか、豈耀を陽春に鮮にせんやと。歌卒る。王乃ち(六六)尋繹吟翫

【五五】湘吳。吳の湘川の水を以て醸せる酒。
【五六】狐貉。皮裘なり。
【五七】緜衣。重ねて著ること。御は著ること。
【五八】庭鵾。鵾は雞の大なるもの。
【五九】園中云云。李善本にこの二句なし、萱草芳薇は雪中の物にあらず、刪るべきに似たり。
【六〇】枝葉。兄弟に喩ふるなり、時に惠連彭城王に仕へ其家親に離る。
【六一】懣然。煩悶の貌。
【六二】薫鑪。香爐なり。
【六三】桂酒。桂を以て酒中に投じ香を取るなり。
【六四】淸曲。妙音なり。
【六五】朱顏。醉ひて赤き顏。酡は赤色の面に著はるること。
【六六】尋繹。つづくること。

し、撫覽扼腕し、顧みて（六七）枚叔に謂ふ、起つて（六八）亂を爲れと。亂に曰く、白羽白しと雖も質以て輕し。白玉白しと雖も空しく貞を守る。未だ若かず茲雪の時に因つて興滅するに。玄陰凝りて其潔を昧うせず。太陽曜いて其節を固うせず。節豈我が名ならんや。潔豈我が貞ならんや。雲に憑りて升降し、風に從つて飄零し、物に値ひて像を賦し、地に任せて形を班つ。（六九）素は遇ふに因りて立ち、汙は染むるに隨つて成る。心を（七〇）皓然に縱にし、何をか慮り何をか營まんや。

【大意】雪夜の娛樂を述べんか、夜靜にして感懷多く、風は楹を擊つて響を轉じ、月は窓簾を照して光を通ずる時、美酒を酌み重裘を襲ね、鶤雞の雙び飛ぶを見、鴻雁の獨り飛ぶを見、霜雪積りて枝葉を壓するを見ては覺えず故鄉の兄弟を慕ひ、思を千里に馳せ、手を携へて倶に歸らんことを思ふと。鄒陽之を聞き大に心服し、之に唱和せんことを思ひ、乃ち起つて積雪の歌を作る。其歌に曰く、美人を携へて帷幔を披き、入りて衾褥に坐し、香を焚き燭を明にし、美酒を酌み美歌を奏せんと。又續いで白雪の歌を作る。其歌に曰く、美歌既に起り、酒既に陳り、醉顏頳くして美人と相親み、帷を垂れ枕を近づけ、帶を解いて臥せんことを思ふ。因つて歲月の過ぎ易く、再會の期し難きを怨む。君見よ階上の白雪、よく其光を陽春に保たんやと。歌終る。王口吟再四にして

【六七】枚叔。枚乘なり。
【六八】亂。賦の終に置きて一篇の大意を總ぶる辭。
【六九】素。白きこと。
【七〇】皓然。一本浩然に作る。是なるに似たり。

更に枚乘に命じて亂を作らしむ。亂に曰く、白羽は白しと雖も其質輕く、白玉は白しと雖も固く其節を守る。共に此の白雪の時に隨つて或は消え或は生ずるに如かざるなり。あゝ此の白雪たる、玄陰凝るも其潔を昧ます能はず、太陽曜けば其節を固執せずして逝き去る。節と潔とを固執せずして、風雲に隨つて去來し、物に遇ひ地に任じて、各其形を賦し、其色白きも之を汚せば又染まる。心を自然に任せて、思慮經營することなしと。

月の賦

(一)謝希逸

(二)陳王初め(三)應劉を喪ひ、端憂して暇多し。綠苔閣に生じ芳塵榭に凝り、(四)悄焉として懷を疚め、中夜に怡びず。乃ち(五)蘭路を淸め桂苑を肅め、吹を寒山に騰げ(六)蓋を秋坂に弭め、濬壑に臨んで遙なるを怨み、崇岫に登りて遠きを傷む。時に(七)斜漢左に界ひ、(八)北陸南に躔り、白露空に曖く、(九)素月天に流る。(一〇)齊章に沈吟し、

【一】謝希逸。謝莊、字は希逸、宋の陳郡陽夏の人、仕へて光祿大夫に至り、泰初二年卒す、時に年三十六。

【二】陳王。魏の曹植なり。假に陳王を設けて端を起すなり。

【三】應劉。應瑒、劉楨なり、魏の文士なり。

【四】悄焉。憂ふる貌。

【五】蘭路。蘭の生ずる道。

【六】蓋。車の幌。

【七】斜漢。斜なるアマノガハ。

【八】北陸。虚宿の別名。星の名なり。

【九】素月。白き月。

【一〇】齊章。詩經齊風に東方ノ月、彼ノ姝タル子、我ガ闥ニ在りとあり。

（二一）陳篇に（二二）殷勤なり。毫を抽き牘を進めて、以て（二三）仲宣に命ず。仲宣跪いて稱して曰く、臣は東鄙の（二四）幽介にして、（二五）丘樊より長り、道に昧く學に懵く、孤り明恩を奉ず。臣聞く（二六）沈潛既に義あり（二七）高明既に經あり。日は陽を以て德あり月は陰を以て靈あり。（二八）扶光を（二九）東沼に擅にし、（三〇）若英を（三一）西冥に嗣ぎ、（三二）玄兎を帝臺に引き、（三三）素娥を（三四）后庭に集め、（三五）朒朓闕を警め、（三六）朏魄沖を示し、（三七）辰に順ひて（三八）通燭し、星に從つて（三九）澤風あり。華を（四〇）台室に增し、彩を軒宮に揚ぐ。照を委れて（四一）吳業昌え、精を淪めて（四二）漢道融る。

【大意】應瑒、劉楨の二子死す。陳王曹植其才を惜み、端然として憂へ、復た娛遊せず。

【二一】陳篇。詩經陳風に月出デテ皎タリ佼人僚タリとあり。
【二二】殷勤。深く思ふこと。
【二三】仲宣。王粲、字は仲宣、魏の文士なり。
【二四】幽介。幽賤孤介の人。
【二五】丘樊。樊は籬なり。
【二六】沈潛。地をいふ。
【二七】高明。天をいふ。
【二八】扶光。扶桑の光、扶桑は東方日出の處に在る木。
【二九】東沼。日の出づる處、暘谷なり。
【三〇】若英。若木の花、若木は日の入る處にあり。
【三一】西冥。日の入る處、昧谷なり。
【三二】玄兎。月なり。月中に兎あり。帝臺は帝王の臺。
【三三】素娥。月なり。娥は嫦娥とて羿の妻なり、不死の藥を竊んで月中に奔る。
【三四】后庭。后妃の庭なり。
【三五】朒朓。朔にして月東方に見ゆるを朒といひ、晦にして西方に見ゆるを朓といふ。闕は德を失ふこと。
【三六】朏魄。ミカヅキ、月の光を生ずること。沖は謙なり。
【三七】辰。十二辰なり、月の宿る處。
【三八】通燭。照すこと。
【三九】澤風。雨風なり。書經に月ノ星ニ從フ時ハ以テ風フキ以テ雨フルとあり。
【四〇】台室。王公の位なり。
【四一】吳業。吳の孫堅の夫人、月の懷るを夢みて策を生み、吳業盛なり。
【四二】漢道。漢の李夫人、月懷に入ると夢みて元帝を生み、漢室を中興す。

階庭の間綠苔生じ芳塵凝り、憂愁して中夜に至る。因つて憂を霽さんと欲し、苑中の山坂を淸め、車に駕して出遊し、深壑に臨み高山に登る。時方に秋なり。天漢西に斜にして北陸星南に躔り、白露空に滿ちて月光天に流る。陳王乃ち齊風陳風の詩篇を吟じ、筆紙を授け王粲に命じて月を賦せしむ。王粲跪いて奏して曰く、臣は東邊の鄙人にして、道に暗く學に昧く、虛しく明王の高恩を受く。聊か賦を奏して高恩に報いん。臣聞く天地各其道あり。日は陽を以て德となし、月は陰を以て德となす。月東方に出でては日の明に代り、西方に出でては日の曜を嗣ぎ、帝王の臺、后妃の庭を照し、朔晦には人君の闕德あるを警め、朏魄は人君謙沖の德あるを示し、辰に順つて天下を照し、星に從つて風雨を起し、華彩を宮庭に揚げ、其光を垂れては吳漢の王業を盛ならしむ。

若し夫れ氣地表に霽れ、雲天末に斂まり、(三三)洞庭始めて波たち木葉微く脫ち、菊は芳を(三四)山椒に散じ、雁は哀を江瀨に流せば、淸質の悠悠たるを升げ、澄暉の藹藹たるを降し、(三五)列宿縟を掩ひ(三六)長河映を韜み、(三七)柔祇雪のごとく凝り(三八)圓靈水鏡のごとく、(三九)連觀霜のごとく縞く、(四〇)周除冰のごと

【三三】洞庭。湖の名、楚辭に洞庭波タチテ木葉下ルとあり。
【三四】山椒。山頂なり。
【三五】列宿。列星なり。縟は采飾なり。
【三六】長河。アマノガハなり。
【三七】柔祇。地なり。
【三八】圓靈。天なり。
【三九】連觀。觀は樓臺なり。
【四〇】周除。まはりの庭。

く淨し。君王乃ち晨歡を厭ひて宵宴を樂み、妙舞を收めて（四一）淸縣を弛き、（四二）燭房を去りて月殿に卽き、芳酒登りて鳴琴薦む。若し乃ち涼夜自ら淒く（四三）風篁韻を成し、（四四）親懿從ふなく（四五）羇孤遞に進み（四六）皐禽の夕に聞ゆるを聆き、（四七）朔管の（四八）秋引を聽く。是に於て（四九）絃桐響を練び、音容和を選び、（五〇）房露に徘徊し（五一）陽阿に惆悵し、聲林（五二）籟を虛うし、（五三）淪池波を滅し、情（五四）紆軫して其れ何にか託かん。（五五）皓月に愬つて長く歌ふ。歌に曰く、（五六）美人邁いて（五七）音塵闕え、千里を隔てて明月を共にす。風に臨んで歎くと將た烏んか歇まん、川路長くして越ゆべからずと。歌響未だ終らざるに、餘景畢に就き、滿堂容を變へ、廻遑して失へるが如し。又歌を稱して曰く、月既に沒し露晞かんと欲す。歲方に晏れて與に歸るなし。（五八）佳期以て還るべし。（五九）微霜人衣を霑すと。陳王曰く善しと。乃ち執事に命じ、（六〇）壽を獻じ璧を羞む。敬んで玉音を佩び、之を復

【四一】淸縣。縣は懸なり。樂器を懸くること。
【四二】燭房。燈火のある室。
【四三】風篁。風叢竹を拂ふこと。
【四四】親懿。親戚兄弟なり。
【四五】羇孤。旅客孤子なり。
【四六】皐禽。鶴なり。
【四七】朔管。羌笛なり、北胡の笛。
【四八】秋引。悲き聲。
【四九】絃桐。琴なり。
【五〇】房露。古曲の名ならんといふ。
【五一】陽阿。歌曲の名。
【五二】籟。響なり。
【五三】淪池。淪は綸なり、文章なり。
【五四】紆軫。紆は曲、軫は痛なり。
【五五】皓月。明月なり。
【五六】美人。君子に喩ふ。
【五七】音塵。音信といふが如し。
【五八】佳期。君子に喩ふ。
【五九】微霜。讒人に喩ふ。
【六〇】壽。金品を人に贈るを壽といふ。

して斁ふなし。

【大意】若し夫れ氣收まり天晴れ、菊散り雁嗁くの時に至れば、月色益冱えてその光悠悠藹藹たり。列星天河も皆其光を潛め、地は凝雪の如く天は水鏡の如く、觀宇庭除亦淨潔なり。君王乃ち晝日の賞を厭ひ、夜宴を樂み、妙舞を棄て鐘鼓を廢し、燭火の室を去りて月華の殿に往き、琴酒を進めて淸景を賞す。時しも夜涼水の如く、風叢竹を拂ひて韻を成し、親戚兄弟の相從ふなく、羇客孤人更進見し、皐鶴胡笛の哀聲を聽く。乃ち琴音を擇び、和音を選ぶも、此曲知音と同じく聞かざるを恨む。風止んで林籟靜まり、池水の波紋また消ゆるに至れば、情痛んで依託する所なく、ただ明月に向つて長歌するのみ。其歌に曰く、君子行き去りて音信絕え、千里を隔絕して同じく此月を觀る。風に臨んで嘆息して止まず。一たび君子を見んことを思へども、行路長遠にして越ゆべからずと。歌未だ畢らざるに、月影已に沒し、人皆容を變じ、惘然として自失す。又歌を奏して曰く、月既に沒し露晞かんと欲す。歲晚れて未だ歸する所を知らず。君子宜しく退いて歸るべし。恐らくは讒人の害に遇はんことをと。陳王曰く善しと。乃ち執事に命じて、璧を王粲に賜はしむ。粲反復之を佩びて厭ふことなし。

鳥獸

鵩鳥の賦竝序

(一)賈誼

誼長沙王の傅たること三年、鵩鳥あり飛んで誼の舍に入り、坐隅に止まる。鵩は鴞に似、不祥の鳥なり。誼既に謫を以て(二)長沙に居る。長沙は(三)卑濕なり。誼自ら傷悼して以爲らく、壽長きを得じと。乃ち賦を爲りて以て自ら廣うす。其辭に曰く、

(四)單閼の歲、四月(五)孟夏、庚子日斜なり。鵩余が舍に集り、坐隅に止まる。貌甚だ(六)閑暇なり。(七)異物來り萃る。私に其故を怪み、書を發いて之を占ふ。(八)讖に其度を言ふ。曰く野鳥室に入れば、主人將に去らんとすと。鵩に請ひ問ふ。余去つて何にか之かん。吉か我に告げよ、凶ならば其災を言へ。(九)淹速の度、余に其期を語れと。鵩迺ち歎息し、首を擧げ翼を奮ふ。口言ふ能はず。請ふ對ふるに(一〇)臆を以てせん。曰く萬物變化

【一】賈誼。漢の洛陽の人、漢の文帝召して博士となす、絳灌等の讒に遇ひ、長沙王の傅に貶せらる、時に鵩鳥室に入り其承塵に集ふ。俗に云く此鳥人家に入れば主人當に死すべしと。誼因つて此賦を作り死生を齊うして自ら寛うす。

【二】長沙。地名、今の湖南省の地。

【三】卑濕。地低くして濕ふ。

【四】單閼。卯の歲をいふ。漢の文帝の六年なり。

【五】孟夏。夏の初。庚子はカノエネの日。

【六】閑暇。驚恐せざる貌。

【七】異物。鵩を指す。

【八】讖。未來記なり。

【九】淹速。遲速なり。

【一〇】臆。心中の考。

して固に休息するなし。(一一)斡流して遷り或は推して還る。形氣轉續して變化(一二)蟺の而し。(一三)沕穆として窮りなし。胡ぞ勝て言ふべけんや。禍は福の倚る所、福は禍の伏する所なり。憂喜門に聚り吉凶域を同うす。彼の呉の彊大なるも、(一四)夫差以て敗れ、越の(一五)會稽に棲めるも、(一六)句踐世に霸たり。(一七)斯の遊遂に成り、卒に五刑を被り、(一八)傅說胥靡にして、乃ち武丁に相たり。夫れ禍と福とは、何ぞ糾へる纆に異らん。(一九)命は說くべからず。孰か其極を知らん。水激すれば則ち悍に、矢激すれば則ち遠し。萬物(二〇)回薄し、振盪して相轉る。雲蒸し雨降り、糾錯して相紛る。(二一)大鈞物を播き、(二二)坱圠として垠なし。天は預め慮るべからず。道は預め謀るべからず。遲速(二三)命あり。焉んぞ其時を識らん。

【大意】丁卯四月庚子の日、日將に暮れんとする頃、鵩鳥余が家に來り、座側に止まりて去らず。少しも驚恐の色なし。余心に其故を怪み、未來記を發いて之を占へるに、曰く鵩鳥室に入るは主人遠去の兆なりと。余因つて鵩に問ふ。余去つて何處に往くや。吉事あらば余に語れ。凶事あらば其災を

【一一】斡流。轉流なり。
【一二】蟺。蟬のぬけがら。
【一三】沕穆。分別すべからざる貌。
【一四】夫差。呉王の名、越と戰つて敗れぬ。
【一五】會稽。山の名。
【一六】句踐。越王の名。

【一七】斯。李斯なり。
【一八】傅說は殷王武丁の賢臣。胥靡は刑人なり。
【一九】命。生命なり。
【二〇】回薄。めぐり迫ること。
【二一】大鈞。造化なり。
【二二】坱圠。際限なき貌。
【二三】命。運命なり。

告げよ。遲速の期亦以て余に語るべしと。鵩乃ち歎息し首を擧げ翼を奮ふ。其狀我れ口言ふ能はず、請ふ答ふるに臆中の事を以てせんと言ふものの如し。因つて曰く、萬物變化し遷轉反覆して定まるなし。形氣の相推讓すること蟬の殼を蛻するが如し。紛雜窮りなし。何ぞ勝げて言ふべけんや。禍は福に因りて生じ、福は禍に因つて生じ、憂凶あれば喜吉あり。皆相倚り相隨ふなり。故に吳王夫差の强大なるも終に敗北し、越王句踐敗れて會稽の恥を蒙りしも、終に一世に霸たり。李斯は秦に客遊して身相位に登りしも、終に趙高の讒に遇ひて五刑を蒙りて死し、傅說は刑人となりて傅巖に築きしも、終に武丁に仕へて相位に登れり。要するに禍と福とは糾へる索の如く、表裏を相成すものなり。人命の如きは始あれば終あり、終あれば又始あり。誰か其の窮極する所を知らんや。水の流れ矢の飛ぶ各常度あり。然も物の激する所となれば、或は悍く或は遠し。人も亦然り。禍に激せられて福に至り、福に激せられて禍に至る。相遷轉して常なきなり。恰も地氣上りて雲となり、天氣降りて雨となるが如く、造化の萬物を生ずる、紛雜して垠なきが如し。天道は深遠にして豫め慮測すべからず。遲速命あり。何ぞ能く其時を知らんや。

且夫れ天地は〔二四〕鑪たり、造化は工たり、陰陽は炭たり、萬物は銅たり。合散消息すること、安んぞ常則あらん。千變萬化して、未だ始より極あら

【二四】●鑪。火牀、金を鑄治する處。

ず。忽然として人となるも、何ぞ（二五）控摶するに足らん。化して異物となるも、又何ぞ患ふるに足らん。小智は自ら私し、彼を賤み我を貴ぶ。（二六）達人は大觀す、物として可ならざるはなし。貪夫は財に徇ひ、烈士は名に徇ひ、（二七）夸者は權に死し（二八）品庶は生を毎る。（二九）怵迫の徒、或は西東に趨る。大人は曲らず、意變齊同す。愚士は俗に繫がれ、窘むこと（三〇）囚拘の若し。（三一）至人は物を遺れ、獨り道と倶にす。衆人は惑惑として、好惡（三二）億に積る。眞人は（三三）恬漠として、獨り道と息ふ。智を釋て形を遺れ、超然として自ら喪ひ、（三四）寥廓忽荒として、道と翺翔す。流に乘りては則ち逝き、（三五）坻を得ては則ち止まり、軀を縱にし命に委し、私に己に與せず。其の生くるや浮べるが若く、其の死するや休ふが若し。（三六）澹乎として深淵の靜なるが若く、（三七）泛乎として繫がざるの舟の若し。生の故を以て自ら寶とせず、空を養つて浮ぶ。德人は累なく、命を知りて憂へず。（三八）細故蔕芥、何ぞ以て疑ふに足らんやと。

【大意】且つ天地は火鑪たり、造化は冶工たり、陰陽は炭たり、萬物は

【二五】控摶。控は引なり、摶は持なり。
【二六】達人。事理に通達せる人。
【二七】夸者。權勢を貪り世に矜らんとする人。
【二八】品庶。凡人なり。
【二九】怵迫。貧賤に迫られて恐るる者。
【三〇】囚拘。囚人なり。
【三一】至人。至德の人。
【三二】億。臆なり、心中なり。
【三三】恬漠。安靜なる貌。
【三四】寥廓忽荒。空しくして著くことなき貌。
【三五】坻。水中の小洲。
【三六】澹乎。無慾なる貌。
【三七】泛乎。漂ふ貌。
【三八】細故は小事なり。蔕芥は刺鯁なり。

銅たり。聚散離合すること、定則あるなし。千變萬化して、窮極する所なし。忽然として人となるも、引持して自ら惜むに足らず。化して異物となるも、亦敢て患ふるに足らず。小智の人は己を愛して萬物を賤めども、達人は大觀す、故に萬物を視ること己に異らず。貪夫は財を求めて身を滅し、烈士は名を求めて命を棄て、夸者は權勢の爲に死し、衆人は生命を貪り、貧賤に驅られて東西奔走すれども、大人は曲げて其身に私せず、意と變化と齊同す。至人は自然と共に往來し、形體を忘れ天命に任せ、生を以て悅ばず、死を以て悲まず。些細の事故に遇ひて疑惑することなしと。

鸚鵡の賦竝序

(一)禰正平

時に黃祖の太子射、賓客大會す。鸚鵡を獻ずる者あり。酒を衡の前に擧げて曰く、(二)禰處士、今日用て賓を娛ましむるなし。竊に以るに此鳥遠きよりして至り、明恵聰善にして、(三)羽族の貴ぶべきものなり。願くは先生之が賦を爲り、(四)四座をして咸共に榮觀せしめば、亦可ならず

【一】禰正平。名は衡、字は正平、後漢の平原の人なり、少より才辯ありて氣傲を尙ぶ。曹操召して鼓吏となす、其狂傲を怒れども才名あるを以て之を殺すを欲せず、劉表に與ふ、表又侮慢を以て容るる能はず、江夏太守黃祖に與ふ、祖の長子射、章陵太守たり、尤も衡に善し、射大に賓客を會す、人鸚鵡を獻ずる者あり、射衡に請ひて之を賦せしむ、衡後黃祖の殺す所となる、時に年二十六。

【二】禰處士。禰衡を指す。仕へざる士を處士といふ。

【三】羽族。鳥類なり。

【四】四座。座中の客。

やと。衡因つて賦を爲る。筆は停綴せず、文は點を加へず。其辭に曰く、

惟れ西域の靈鳥、自然の奇姿を挺んで、(五)金精の妙質を體し、(六)火德の明輝を含み、性辯惠にして能く言ひ、才聰明にして以て(七)機を識る。故に其れ高峻に嬉遊し、幽深に(八)栖跱し、飛んでは妄に集らず、翔りては必ず林を擇ぶ。紺趾丹觜、綠衣翠衿、(九)采采たる麗容、(一〇)咬咬たる好音あり。族を羽毛に同うすと雖も、固に智を殊にして心を異にし、(一一)鸞皇に配して美を等うす、焉んぞ德を衆禽に比べん。是に於て芳聲の遠く暢ぶるを羨み、(一二)靈表の嘉すべきを偉とし、(一三)虞人に(一四)隴坻に命じ、(一五)伯益に(一六)流沙に詔し、(一七)崑崙を跨えて(一八)弋を播し、雲霓に冠して羅を張る。(一九)綱維備に設くと雖も、終に(二〇)一日の加ふる所なり。且つ其れ(二一)容止閑暇にして、植を守り安に停り、之に逼れども懼れず、之を撫づれども

【五】金精。西方を金となす、この鳥西域に産す。故に金精の妙質といふ。

【六】火德。南方を火となす、觜赤き者あり、故に火德といふ。

【七】機。事の機微なり。

【八】栖跱。跱は立なり。

【九】采采。美しき貌。

【一〇】咬咬。鳥の聲なり。

【一一】鸞皇。鸞鳥と鳳凰、神鳥なり。

【一二】靈表。儀容なり。

【一三】虞人。山澤を掌る官。

【一四】隴坻。天水郡にある大坂の名。

【一五】伯益。人名、舜に仕へて虞となる。

【一六】流沙。地名、西域に在り。

【一七】崑崙。山の名、西域にあり。

【一八】弋。いぐるみ、絲を矢に結びて飛鳥を射るなり。

【一九】綱維。網なり。

【二〇】一日。文子に鳥アリ將ニ來ラントス、羅ヲ張ツテ之ヲ待ツモ、鳥ヲ得ル者ハ羅ノ一目ナリとあり。

【二一】容止は擧動なり。閑暇は驚恐せざる貌。

驚かず、寧く順從して以て害に遠ざかり、(二二)違忤して以て生を喪はず。故に全きを獻ずる者は賞を受け、肌を傷る者は刑せらる。爾して乃ち窮に歸し命に委し、羣を離れ侶を喪ふ。閉づるに(二三)彫籠を以てし、其翅羽を翦る。萬里に流飄し、(二四)重阻に(二五)崎嶇し、(二六)岷を踰え(二七)障を越え、載ち寒暑に罹ふ。女は家を辭して人に適き、臣は身を出して主に事ふ。彼の賢哲の患に逢ふも、猶ほ(二八)棲遲して以て(二九)羇旅す。矧んや禽鳥の微物なる、能く(三〇)馴擾して以て安處す。西路を眷みて長く懷ひ、故郷を望んで(三一)延佇す。陋體の(三二)腥臊を忖る。亦何ぞ(三三)鼎俎に勞せんや。

【大意】鸚鵡は西域の靈鳥にして、自然の妙姿を有し、金精を體し、火德を含み、性辯慧にして能く言ひ、才聰明にして機微を識る。故に高峻の處に遊び、幽深の地に棲み、其の飛ぶや必ず木を擇ぶ。其足は紺色、其嘴は赤色、其羽毛は綠色にして、胸前は翠色なり。而して其聲頗る好し。固より衆禽と其撰を異にす。王侯因つて其音聲を美し、其儀容を嘉し、山澤の官に命じて之を隴坻、流沙に求めしむ。乃ち崑崙雲霓の高きを越えて羅を張る。その

【二二】違忤。人に逆ふこと。
【二三】彫籠。彫飾を加へたる籠。
【二四】重阻。險阻の地。
【二五】崎嶇。山坂を上下すること。
【二六】岷。山の名。
【二七】障。山の名。
【二八】棲遲。ゆつたりと遊ぶこと。
【二九】羇旅。行旅なり。
【三〇】馴擾。人になるること。
【三一】延佇。久しくたゝずむこと。
【三二】腥臊。なまぐさきこと。
【三三】鼎俎。犧牲として神前に供ふること。

羅廣しと雖も、鳥の中る所は其一日に過ぎず。此鳥や擧止靜肅にして節を守りて安停し、人に逆つて其生を喪ふが如き事なし。故に全きを得て之を獻ずる者は賞せられ、鳥の肌肉を傷くる者は刑せらる。此鳥亦性命を人に委し、彫籠の中に入れられ、其翅翼を切られ、崎嶇として岷障諸山を越え、寒暑を犯して將來さる。女は人に嫁し臣は君に事へ、禍患に逢へば倘ほ棲遲して羈旅す。況んや鳥の微なる、能く人に馴れて安居す。時に故鄕を慕ひて顧望することあれども、自ら身の陋にして腥く、鼎俎の器に堪へざるを以て、生命の安全なるべきを知る。

嗟（三四）祿命の衰薄なる、奚ぞ時の（三五）險巇に遭へる。豈（三六）言語の以て亂を階せるか、將不密にして以て危きを致せるか。母子の永く隔るを痛み、（三七）伉儷の生きながら離るるを哀む。餘年の惜むに足るにあらず、衆雛の知なきを愍む。蠻夷の下國に背き、君子の光儀に侍し、名實の副はざらんことを懼れ、才能の奇なきを恥づ。（三八）西都の沃壤を羨み、苦樂の宜きを異にするを識り、（三九）代越の悠思を懷く、故に言ふ毎に（四〇）斯を稱す。若し乃ち（四一）少昊辰を司り、（四二）蓐收

【三四】祿命。天命なり。
【三五】險巇。險難なり。
【三六】言語。周易に孔子曰ク亂ノ生ズル所ハ則チ言語以テ階ヲナスナリ、君密ナラザレバ臣ヲ失フ、臣密ナラザレバ身ヲ失フとあり。
【三七】伉儷。夫婦なり。
【三八】西都。長安なり。
【三九】代越。代は北方の地、越は南方の地なり、古詩に代馬ハ北風ニ依リ、越鳥ハ南枝ニ巣クフとあり、鳥や馬の故鄕を慕ふを言ふ。
【四〇】斯。長安の樂みなり。
【四一】少昊。西方の帝。
【四二】蓐收。秋を司る神。

轡を整へ、嚴霜初めて降りて、涼風(四三)蕭瑟たれば、長吟遠慕し、哀鳴して類に感じ、音聲悽として以て激揚し、容貌慘として以て(四四)顦顇す。之を聞く者は悲傷し、之を見る者は涙を隕し、放臣は之が爲に屢歎き、棄妻は之が爲に(四五)歔欷す。平生の遊處を感ずるに、(四六)壎篪の相須つが若し。何ぞ今日の兩ながら絕え、(四七)胡越の區を異にするが若くなる。(四八)櫳檻に順つて以て俯仰し、(四九)戶牖を闚つて以て(五〇)踟躕し、(五一)崑山の高嶽を想ひ、(五二)鄧林の(五三)扶疏を思ひ、(五四)六翮の(五五)殘毀を顧るに、奮迅すと雖も其れ焉にか如かん。心に歸らんことを懷へども果さず、徒に毒を(五六)一隅に怨み、苟も心を事ふる所に竭す、敢て惠に背いて初を忘れんや。輕鄙の微命を託し、陋賤の薄軀を委ね、死を守りて以て德に報いんことを期し、辭を盡して以て愚を效さんことを甘んじ、降恩を既往に恃み、彌久うして渝らざらんことを庶ふ。

【大意】ああ運拙くして斯の艱苦に遭ふ。豈言語の此禍を階せるか。抑事を爲すの密ならずして、

【四三】蕭瑟。秋の聲の淋しき貌。瑟は音シ、叶韻
【四四】顦顇。瘠せ衰ふる貌。
【四五】歔欷。泣くこと。
【四六】壎篪。樂器の名。壎は土にて作り、篪は竹にて作る。壎唱へて篪和するが如く相親しきをいふ。
【四七】胡越。胡は北方の地、越は南方の地、隔絕せるをいふ。
【四八】櫳檻。鳥籠なり。
【四九】戶牖。鳥籠の窓。
【五〇】踟躕。將に飛ばんとする貌。
【五一】崑山。崑崙山なり。
【五二】鄧林。山海經に夸父日ト競走ス。渴死シテ其杖ヲ棄ツ化シテ鄧林トナルとあり。
【五三】扶疏。木の茂ること。
【五四】六翮。羽翼なり。
【五五】殘毀。傷つけるをいふ。
【五六】一隅。一方なり。

此に至れるか。母子の永訣を痛み、夫婦の生別を悲む。己の餘命は惜むに足らざれども、衆雛の無知なるを悲む。蠻夷の國を去りて、今君子の側に侍するも、才能の奇なく名の實に副はざらんことを懼れ、常に西都の樂を思ひ、故鄕を慕ひて已まず。言ふ毎に長安の樂を言ふ。若し夫れ秋風一たび動くや、益長呼哀鳴して、昔日羣遊の樂を憶ひ、其聲激切して容貌憔悴し、放臣棄妻一たび之を見聞すれば、皆同情の涙を濺ぐ。昔日雌雄の遊居を思ふに、恰も塤篪の相和するが如し。何ぞ今日相隔絶すること、胡越の域を異にするが如くなる。乃ち籠隙を窺ひて飛び去り、崑山鄧林に至りて遊ばんと欲するも、羽翼損傷して徒に一隅に怨痛するのみ。ただ命に託し身を委ね、死を守りて恩に報い、言辭を發して愚忠を盡し、從來の厚恩を恃んで、其の久しく渝らざらんことを庶ふのみ。

(一)鷦鷯の賦竝序

(二)張　茂　先

鷦鷯は小鳥なり。蒿萊の間に生れ、藩籬の下に長じ、(三)尋常の内に翔集して、(四)生生の理足る。色淺く體陋しくして、人の用をなさず。形微に處ること卑しければ、物之を害するなし。族類を繁滋し、(五)乘居匹遊し、翩翩然として以て自得する

【一】鷦鷯。鳥の名、みそさざい。
【二】張茂先。張華、字は茂先、晉の范陽の人。
【三】尋常。八尺を尋といひ、一丈六尺を常といふ。
【四】生生。生を養ふこと。
【五】乘居は竝び居ること。匹

あり。彼の鷲鶚鵾鴻、孔雀翡翠、或は(六)赤霄の際を陵ぎ、或は(七)絶垠の外に託し、(八)翰擧以て天に沖するに足り、(九)觜距以て自ら衞るに足る。然れども皆鏑を負ひ繳に纓り、羽毛は(一〇)貢に入る。何となれば人に用あればなり。夫れ言は淺くして以て深きを託すべきあり。類は微にして以て大に喩ふべきあり。故に之を賦すと云爾。』

遊は並び遊ぶこと。
【六】赤霄。高き空。
【七】絶垠。遠き處。
【八】翰擧。飛びあがること。
【九】觜、距。くちばし、けづめ。
【一〇】貢。みつぎもの。書經の禹貢にソノ貢ハ齒革羽毛とあり。
【一一】翩翾。小飛の貌。
【一二】玄黄。玄は黑なり。
【一三】俎味。俎は肉を盛る器。
【一四】鷹鸇。たか、はやぶさ。
【一五】罿尉。網なり。
【一六】翳薈蒙蘢。草木の密なる貌。
【一七】飄颻。高く飛ぶこと。
【一八】翕習。急疾なる貌。
【一九】荆棘。いばら。
【二〇】茝蘭。香草の名。

何ぞ造化の多端なる、羣形を萬類に播く。惟れ鷦鷯の微禽なるも、亦生を攝して氣を受け、(一一)翩翾の陋體を育ひ、(一二)玄黄の以て自ら貴くするなし。毛は器用に施さず、肉は(一三)俎味に登らず。(一四)鷹鸇過ぎて猶ほ翼を俛く、尙ほ何ぞ(一五)罿尉を懼れん。(一六)翳薈蒙蘢たれば、是れ焉に遊集し、飛んで(一七)飄颻せず、翔りて(一八)翕習せず。其居容れ易く、其求給し易し。林に巣ふも一枝に過ぎず、食ふ毎に數粒に過ぎず。栖むも滯る所なく、遊ぶも盤む所なし。(一九)荆棘を陋とするにあらず、(二〇)茝蘭を榮とするにあらず。翼を動かして逸し、足を投じて安く、命に委ね理に順ひ、物に與せ患ふるなし。伊れ茲禽の無知にして、何ぞ身を處するの智に似たる。寶を懷いて以て害を買はず、表を飾りて以て累を招か

ず。靜にして約を守りて矜らず、動いて因循して以て簡易なり。自然に任せて以て資となし、世僞を（二一）誘慕するなし。（二二）鶻鵃その觜距を介にし、鵠鷺雲際に軼し、鶤雞幽險に竄れ、（二三）孔翠遐裔に生ず。彼の（二四）晨鳧と歸雁と、又翼を矯げて增く逝く。咸美羽にして豐肌なり、故に罪なくして皆斃る。徒に蘆を銜んで以て繳を避くるも、終に此世に戮せらる、蒼鷹は（二五）鷙にして紲を受け、鸚鵡は（二六）惠にして籠に入り、猛志を屈して以て養に服き、塊り（二七）九重に（二八）幽縶せられ、音聲を變じて以て旨に順ひ、翮を摧いて（二九）庸をなさんことを思ふ。（三〇）鍾岱の林野を戀ひ、（三一）隴坻の高松を慕ふ。幸を今日に蒙ると雖も、未だ（三二）疇昔の從容たるに若かず。海鳥（三三）鶢鶋、風を避けて至り、（三四）條枝の巨雀、嶺を踰えて自ら致す。萬里に（三五）提挈し、（三六）飄颻として逼畏す。夫れ唯體大なれば物を妨げ、形（三七）瓌なれば瑋とするに足るのみ。陰陽陶蒸して、萬品一區、巨細（三八）舛錯し

【二一】誘慕。嗜欲といふが如し。
【二二】鶻鵃。くまだか、やまどり。
【二三】孔翠は孔雀及び翡翠。遐裔は遠き邊地なり。
【二四】晨鳧。鳥の名。
【二五】鷙。猛なり。
【二六】惠。慧なり。
【二七】九重。宮禁なり。
【二八】幽縶。縛らるること。
【二九】庸。用なり。
【三〇】鍾岱。二山の名、鷹の產する處。
【三一】隴坻。地名、鸚鵡の產地。
【三二】疇昔。前日なり。
【三三】鶢鶋。海鳥の名。國語に爰居魯ノ東門ノ外ニ止ル、展禽曰ク、海ソレ災アランカ、夫レ廣川ノ鳥獸ハ常ニ知リテ其災ヲ避クト、是歲海ニ大風多シとあり。
【三四】條枝。外國の名。
【三五】提挈。助け合ふこと。
【三六】飄颻。風の高く吹く貌。
【三七】瓌瑋。美しきこと。
【三八】舛錯。齊しからざること。

て、種繁く類殊なり。(三九)鷦螟は蚊睫に巣ひ、(四〇)大鵬は天隅に彌る。將以て上に方ぶれば足らず、下に比ぶれば餘あり。天壤を普くして以て遐に觀るに、吾又安んぞ其の小大の如ふ所を知らん。

【大意】造化、萬物を作りて、各其形を賦與せり。鷦鷯は小鳥なれども、亦陰陽の氣を受けて生る。然れども體陋にして、高飛すること能はず、毛羽の美もまた自ら貴ぶに足るなし。毛は器物を飾るに足らず、肉は俎上に盛るに足らず。鷹鸇も其小なるを以て翼を傾けて過ぐ。何ぞ網羅を懼るるの要あらんや。飛ぶことは高からず疾からず。林に巣ふも一枝にて足り、食ふ所は數粒に過ぎず。荊棘をも陋とせず、香草をも榮とせず、命に任せ道に順ふ。故に物の爲に害せられず。寶を懷いて身の禍を買はず、毛彩を以て自ら飾らず。故に其累を招くことなし。鵰鶡は觜距の大なるを以て人に取られ、鵠鷺鵾雞、孔翠晨鳧の諸鳥は、皆人の害を患へて、幽險遠裔の處に匿る。皆、羽毛美にして肌肉豐なるを以てなり。歸雁は蘆を銜んで繳を避くれども、終に人の獲る所となり、蒼鷹は猛なるが爲に身を縛せられ（鷹狩の用として）鸚鵡は慧なるが爲に籠に入れられ、或は猛志を屈して、宮禁に養はれ、或は音聲を好くして人意に適せんとす。今日、寵幸を受くと雖も、前日林野に從容せるの快なりしに如かず。鶢鶋は風を避けて至り、飄颻として畏れ、條支國の巨雀は、嶺を越えて至り、萬里に提挈す。體大な

【三九】鷦螟。微蟲の名。
【四〇】大鵬。大鳥の名。

れば物を妨げ、形美なれば唯珍とするに足るのみ。陰陽の、萬物を陶冶するや、大小齊からず、種類も亦繁し。鷦螟は蚊の睫に巣ひ、大鵬は其翼天の一隅に亙る。鷦鷯の小なる、之を大鵬に比すれば足らざれども、之を鷦螟に比すれば餘あり。天地を徧くして遠觀するに、大小好惡竟に其の從ふ所を知らざるなり。

(一)赭白馬の賦竝序

(二)顏延年

(三)驥は力を稱せず、馬は(四)龍を以て名づく。豈以て國は威容を上び、軍は(五)趫迅を(六)駥するのみならず。實に(七)光を騰げ圖を吐き、德に疇い聖に瑞するの符あればなり。是を以て語其靈を崇び、世其至れるを榮とす。我が(八)高祖の宋を造むるや、(九)五方職に率ひ、(一〇)四隩入貢し、秘寶(一一)玉府に盈ち、(一二)文駟華廐に列る。乃

【一】赭白馬。つきげの馬。葦毛の少しく赤ばみたるもの、宋の文帝中郎將たりし時、父武帝之に赭白馬を賜ふ。文帝位に即きて後、其馬死す。帝羣臣に命じて之を賦せしむ。

【二】顏延年。顏延之、字は延年。宋の瑯琊の人。

【三】驥。駿馬なり。論語に驥ハ其力ヲ稱セズシテ其德ヲ稱スとあり。

【四】龍。周禮に凡ソ馬八尺已上ヲ龍トナスとあり。

【五】趫迅。壯疾なり。

【六】駥。馬の名。

【七】光を騰げ。尙書中候に曰く、帝堯政ニ即イテ七十載、壇ヲ河洛ニ修ム、仲月辛日禮備ハル、日カタムクニ至リ榮光河ヨリ出デ、龍馬甲ヲ銜ミ赤文綠色、壇ニ臨ンデ甲圖ヲ吐クと。

【八】高祖。宋の武帝劉裕なり。

【九】五方。中國及び四方の夷。

【一〇】四隩。四方といふが如し。

【一一】玉府。玉を掌る役所。

ち(一三)乘輿の赭白あり、特に逸異の姿を稟け、妙に帝心に簡れ、用て(一四)聖皁を錫ふ。(一五)服御志に順ひ、馳驟度に合ふ。(一六)齒歷衰へたりと雖も、藝の美忒はず。養を襲けて年を兼ね、(一七)恩隱周渥なりしも、歲老い氣殫きて、(一八)内棧に斃る。少くして其力を盡し、上仁を惻ましむるあり。乃ち(一九)陪侍に詔し、(二〇)中旨を奉述せしむ。(二一)末臣庸蔽なるも、敢て同じく賦を獻ず。

其辭に曰く、

維れ宋の(二二)二十有二載、(二三)盛烈重葉に光り、武義粤に其れ(二四)肅陳し、文敎迄く已に優洽なり。(二五)泰階の平升るべく、(二六)興王の軌接すべし。國美を舊史に訪ひ、(二七)方載を(二八)往牒に考ふるに、昔(二九)帝

【一二】文駟は美しき馬。華厩は美しきウマヤ。
【一三】乘輿。天子なり。
【一四】聖皁。皁は櫪なり、馬の食をいるゝ桶。
【一五】服御。乘駕なり。
【一六】齒歷。年齡なり。
【一七】恩隱。隱は私なり。恩寵なり。
【一八】内棧。棧は厩の床なり。
【一九】陪侍。侍臣なり。
【二〇】中旨。天子の意。
【二一】末臣。顏延年自ら謙して謂ふ。
【二二】二十有二載。載は年なり宋晉の讓を受けて天子となりてより二十二年、卽ち宋の文帝の十七年なり。
【二三】盛烈は盛なる王業。重葉は代代なり。武帝立ちて文帝之を嗣ぐ、故に重葉といふ。
【二四】肅陳。肅然として陳列す。
【二五】泰階。三台星なり、三台平なれば風雨時あり天下平なり。
【二六】興王。國運を興隆すべき王。
【二七】方載。方は常、載は則、常法といふが如し。
【二八】往牒。昔の記錄。
【二九】帝軒。黃帝なり、上古の天子。淮南子に黃帝天下ヲ治ム、是ニ於テ飛黃皁ニ服スとあり。

軒位に陟り、(三〇)飛黄皁に服し、(三一)后唐籙に膺り、(三二)赤文日を候ひ、漢道亭りて(三三)天驥才を呈し、魏徳懋にして(三四)澤馬質を效す。伊れ(三五)逸倫の妙足、前代よりして間出で、榮光を(三六)瑞典に竝べ、(三七)郊歌を(三八)司律に登ぐ。威神を崇衞し、(三九)警蹕を扶護する所以なり。是を用て(四〇)精曜叶ひ從ひ、靈物咸く秩づ。(四一)明命の初基に曁び、(四二)九區を罄して(四三)率順し、險を肆てて以て(四四)朔を稟くるあり、或は遠きを踰えて賮を納るるあり。(四五)王會の阜昌なるを聞き、(四六)函夏の充牣せるを知る。(四七)六服を總べて以て(四八)賢を收め、(四九)七

【三〇】飛黄。名馬の名、背に角あり、千年の壽を保つといふ。

【三一】后唐。后は皇なり、堯をいふ。籙に膺るとは未來記に應じて天子となること。

【三二】赤文。赤き紋ある馬。日を候ふとは序の脚註にある日傾くに至れるをいふ。

【三三】天驥。天馬なり。漢の武帝の時天馬出づ。因つて天馬歌を作る。

【三四】澤馬。魏の文帝の黄初中上黨に於て澤馬を得たり。

【三五】逸倫は絶倫に同じ。妙足は駿馬なり。

【三六】瑞典。堯の時龍馬の圖を吐きしこと。

【三七】郊歌。郊廟の祭の時にうたふ歌。

【三八】司律。樂律を掌る役所。

【三九】警蹕。天子の出入する時道を清め人ばらひすること。

【四〇】精曜。天星なり。

【四一】明命。天命を受けて天子となること。

【四二】九區。九州、支那全土をいふ。

【四三】率順。相率ゐて服從すること。

【四四】朔。正朔なり。宋の政令をいふ。

【四五】王會。王者の諸侯を會すること。

【四六】函夏。諸夏なり。中國といふに同じ。

【四七】六服。王畿の外の地、侯、甸、男、采、衞、蠻の六服をいふ。

【四八】賢。善馬なり。

【四九】七戎。外夷なり。

戎を掩ひて駿を得たり。蓋し風に乘るの（五〇）淑類、實に景に先だつの（五一）洪胤なり。故に能く（五二）象輿に代驂し、（五三）鉤陳に（五四）歷配し、齒算延長して、聲價隆振す。信に（五五）聖祖の（五六）蕃錫なり。（五七）皇情を留めて騄進す。

【大意】我が宋始めて帝位に即きてより二十二年、武帝文帝の二代を歷て、功業益輝き、文教武儀悉く張り、太平の軌途を繼ぐに足る。今國家の遺美遺法を舊籍に尋ぬるに、黄帝位に即きて飛黄出で、堯帝位に即きて赤文現はれ、漢室の德天下に通じて天驥出で、魏帝の德盛にして澤馬現はる。斯の如く絕倫の駿馬往往にして出で、光榮を堯の時、龍馬の圖を吐きしに比べ、歌詞を作りて之を郊廟の祭に供せり。是れ皆天子の威光を崇くし、警蹕の衞となすべきなり。是を以て天星の祥瑞從つて現はれ、神靈の異物亦盡く出づ。我が高祖初めて天命を受くるに及び、天下盡く之に服し、險を越え遠きを涉りて、其政令を奉じ、貢物を納る。以て王業の盛大なるを知るべし。乃ち駿馬を蠻夷に求め、其類美大にして神速なり。或は乘輿に駕し、或は儀衞に當り、年齒長くして聲價益揚る。高祖嘗て之を文帝に賜ふ。文帝因つて特に情を留めて之を馳す。

【五〇】淑類。よき種類。
【五一】洪胤。よき胤。
【五二】象輿。天子の車。
【五三】鉤陳。天子の衞なり。
【五四】歷配。武帝文帝二代に及ぶ、故に歷配といふ。
【五五】聖祖。宋の高祖、即ち武帝。
【五六】蕃錫。たまもの。
【五七】皇情。皇は文帝を指す。

徒に其の筋を附け骨を樹て、梢を垂れ髮を植て、(五八)雙瞳・鏡を夾み、(五九)兩權月に協へるを觀るに、異體峰生し、殊相逸發し、(六〇)超攄夫の塵轍を絶ち、(六一)驅騖滅沒より迅く、偉を(六二)塞門に簡び、狀を(六三)絳闕に獻じ、旦には(六四)幽燕に刷ひ、晝には(六五)荆越に秣ふ。敬を(六六)不易の典に敎へ、人を(六七)必書の擧に訓へ、惟れ(六八)帝惟れ祖、爰に(六九)游し爰に豫し、(七〇)輶軒を飛ばして以て道を戒め、(七一)轂騎を環らして路を淸め、(七二)五營を勒して部を按ぜしめ、(七三)八鑾を聲して以て步を節し、(七四)金組を具へ服け、(七五)丹雘を兼ね飾り、(七六)寶鉸星のごとく纏ひて、(七七)鏤章霞のごとく布き、進んでは(七八)遮迾に迫り、却いては(七九)輦輅に屬き、欻ち聳擢して以て鴻のごとく驚き、時に(八〇)濩略として龍のごとく翥り、雄姿を弭して以て奉引し、柔心を婉にして御を待つ。露滋く

【五八】雙瞳。兩目なり。兩目中央の旋毛を鏡といふ。
【五九】兩權。兩方の頰骨。
【六〇】超攄。疾く走ること。
【六一】驅騖。疾く走ること。
【六二】塞門。北方の馬を產する處。
【六三】絳闕。天子の門なり。
【六四】幽燕。北方の州の名。
【六五】荆越。南方の地の名。
【六六】不易。國語に魏文公曰ク王ソレ農ノ易カラザルヲ監ミヨとあり。
【六七】必書。左傳に君ノ擧必ズ書スとあり。國君の行ふ事をいふ。
【六八】帝は文帝を指す。祖は高祖を指す。
【六九】游、豫。天子の巡幸をいふ。
【七〇】輶軒。輕き車。
【七一】轂騎。弓騎なり。
【七二】五營。天子の鹵簿なり。
【七三】八鑾。馬の鈴。
【七四】金組。金甲及び組甲。
【七五】丹雘。丹靑といふが如し。
【七六】寶鉸。裝飾なり。
【七七】鏤章。刻鏤の文采。
【七八】遮迾。護衞兵なり。
【七九】輦輅。天子の車。
【八〇】濩略。奔騖の貌。

月肅に、霜戻りて秋登るに至りては、王子に(八一)興言し、(八二)威稜を(八三)闡肆し、(八四)廣望に臨み、(八五)百層に坐し、武藝を料り、(八六)驍騰を品す。(八七)流藻周く施し、(八八)和鈴重ねて設く。影を睨んで高く嘶き、將に超えんとして中ごろ折まり、分れて(八九)迥場に馳せ、角ひて(九〇)永埒に壯にし、輩に別れ羣を越え、(九一)絢練として夐絶し、(九二)趫夫の敏手を捷くし、(九三)華鼓の繁節を促にす。(九四)玄蹄を經て雹のごとく散じ、(九五)素支を歷て冰のごとく裂け、(九六)膺門沫赭く、(九七)汗溝血を走らし、(九八)踠迹唐を廻り、(九九)畜怒未だ洩きず。(一〇〇)乾心降りて微く怡び、都人仰いで朋り悅ぶ。

【大意】其骨骼鬣髮を觀れば、兩目鏡を夾み、兩顴月の如く、筋骨逞しくして、奔る時は飛塵も及ぶ能はず、影の沒するが如し。初め之を塞門(馬の產地)に擇び、遂に天子に獻ぜんとせし時、旦に幽燕の地に刷ひて、晝には荊越の遠き

【八一】興言。言は助辭。
【八二】威稜。天子の威光なり。
【八三】闡肆。肆一に肆に作る、今之に從ふ。開きほしいままにすること。
【八四】廣望。臺の名。
【八五】百層。臺の名。
【八六】驍騰。良馬なり。
【八七】流藻。周流する畫文也。
【八八】和鈴。スズなり。
【八九】迥場。遠き馬場。
【九〇】永埒。長き埒。
【九一】絢練。絢練は疾き貌。夐絶は絶遠なり。
【九二】趫夫。敏捷なる人。
【九三】華鼓。華鼓は美しき鼓。繁節は急調なり。
【九四】玄蹄。射帖の名、人をして地に伏し帖を持せしめ、馬を奔らして之を射る、其帖を射帖といふ。
【九五】素支。射帖の名。
【九六】膺門。馬の胸。
【九七】汗溝。馬足の內面、胸腹と相連る處。大宛國の馬は血を汗す。
【九八】踠迹。馬の走りあがく跡。
【九九】畜怒。積れる元氣。
【一〇〇】乾心。天子の心。

に達せり。其の疾きこと推して知るべし。民に農事の易んずべからざるを敎へ、天子の擧動に馴れしめんが爲に、高祖及び文帝常に此馬に乘りて巡遊し、道を戒め路を清め、部伍を按ずれば、則ち八鈴を鳴らして以て行歩を節す。金組丹青を以て飾り、其裝具星霞の文の如く、進んでは前驅に迫り、退いては輦車に就き、奔騰すること鴻の驚き龍の飛ぶが如く、雄姿を長路に奉引し、其心を婉順にして、以て天子の駕御を待つ。若夫れ秋風肅殺の時に至るや、天子武技を練りて威稜を縱にせんとし、廣望百層の臺に登り、武藝の士を簡び、驍騰の馬を品評す。畫文の幔幕を周匝し、鈴を其上に設け、馬を牽いて場に登すや、或は影を視て高く嘶き、或は將に奔らんとして中ごろ止まり、忽ち羣輩を超えて疾走し、爲に蹻捷の夫をして速に華鼓を擊たしめざるべからず。(騎射には鼓を擊つて馬歩を節するを常とす。)射帖に中りて之を破ること氷雹の裂くるが如く、汗出で沫流れて胸間爲に赤く、周道を疾走するも、威力未だ衰へず。天子之を觀て悅び、都人また相悅ぶ。

妍變の態既に畢り、(一〇一)凌遽の氣方に屬く。(一〇二)

鑣轡の牽制に跼し、(一〇三)通都の圈束を隘しとし、

(一〇四)西極を眷みて首を驤げ、(一〇五)朔雲を望んで

足を蹀み、將に(一〇六)紫鷰をして(一〇七)衡を駢べ、

【一〇一】凌遽。勇急なり。
【一〇二】鑣轡。くつわ・たづな。
【一〇三】通都は國都なり。圈束は拘束といふが如し。
【一〇四】西極。天馬の出づる處。
【一〇五】朔雲。朔方雲中の二郡、亦馬の産地なり。
【一〇六】紫鷰、綠虵、纖驪、秀騏皆駿馬の名。
【一〇七】衡。車の横木。

綠虵をして轂を衞り、纖驪をして趾を接へ、秀騏をして齊しく亍き、(二〇八)王母を崑崙墟に覲、(二〇九)帝臺を宣嶽に要し、中州の轍迹を跨え、神行の(二一〇)軌躅を窮めしめんとす。然れども(二一一)遊畋を盤んで、前王に鏡るを作し、人上に肆にして、悔を(二一二)義方に取る。天子乃ち駕を輟め慮を廻らし、徒を息め裝を解き、(二一三)武穆に鑒み(二一四)文光に憲り、民隱を振ひ國章を脩め、(二一五)出家の御を敗るを戒め、(二一六)飛鳥の衡に跱つを愓る。故に常に忽にする所を(二一七)祗愼し、未だ防がざる所を敬備す。輿は(二一八)重輪の安きあり、馬は(二一九)泛駕の佚なし。處くに(二二〇)濯龍の奥を以てし、委ふるに(二二一)紅粟の秩を以てす。養に服きて仁を知り、老に從ひて卒るを得。(二二二)弊帷を加へ(二二三)仆質を收む。(二二四)天情周く皇恩畢る。

【二〇八】王母。西王母なり、崑崙山に居る仙女。
【二〇九】帝臺。帝臺は神人の名、宣嶽は山の名。
【二一〇】軌躅。轍迹に同じ。
【二一一】遊畋。遊獵なり。
【二一二】義方。道義なり。
【二一三】武穆。漢の武帝、周の穆王。武帝は大宛の馬を好み使者道に相望み、穆王は八駿を驅りて天下を遊幸せり。
【二一四】文光。漢の文帝、後漢の光武帝。文帝の時千里の馬を獻ぜし者あり。文帝之を還せり。民隱。民の疾苦。
【二一五】出家。韓非子に王子期趙簡子ノ御トナリ、始メ發スルヤ彘溝中ニ伏ス王子期轡策ヲ齊ウシテ進ムヤ彘溝中ヨリ突出シ、馬驚キ駕ヲ敗ルとあり。
【二一六】飛鳥。穆王狩せし時、黑鳥あり飛んで衡に立つ、御者之を鷙し以て馬を鞭つ、佚して止むること能はず、乘を躓かしめ帝の左股を傷つく。
【二一七】祗愼。つつしむこと。
【二一八】重輪。重轂なり。
【二一九】泛駕。駕を覆すこと。
【二二〇】濯龍は内廐の名。奥は内なり。
【二二一】紅粟。漢の文帝の時國大に富み、太倉の粟紅腐して食ふべからず。
【二二二】弊帷。破れたるトバリ。禮記に孔子曰ク弊帷棄テザルハ馬ヲ埋ムルガ爲ナリとあり。
【二二三】仆質。馬の死屍なり。
【二二四】天情。天子の愛情。

【大意】變態既に畢り、勇急の氣益以て連續し、銜轡の牽製に蹷踢し、國都の狹隘を嫌ひ、西極朔雲を望んで恣に奔馳せんことを冀ふ。天子乃ち此馬をして紫燕、綠虵、纖驪、秀騏等の駿馬と竝び馳せしめ、西王母を崑崙山に訪ひ、帝臺神を宣山に訪ひ、車轍を中國に徧くし、更に進んで神人の軌跡を窮めんと欲す。然れども敢て其希望を肆にせず。遊獵に耽りて國を喪したる前王に鑑み、人の上たるの威を肆にして、悔を道義に取るをなさず。乃ち遊を止め慮を廻らし、周穆漢武を以て鑒戒となし、文帝光武を憲法となし、民の隱痛を救ひ、國の禮儀を修め、豕突鳥立して、馬を驚かしたるを懼れ、出入を愼み警戒を嚴にし、重轂の安輿に駕し、駕を覆すの佚なからしむ。此馬を內廐に置き、太倉の粟を食はしめ、老いて終に死するや、弊帷を以て屍を包み以て之を埋む。皇恩是に於てか畢る。

（二五）亂に曰く、惟れ德天を動し神物儀る。時に於て（二六）駔駿階街に充つ。靈を（二七）月駟に禀け、雲螭を祖とす。雄志（二八）倜儻にして精（二九）權奇なり。既に剛且つ淑にして（三〇）鞿羈に服し、足を（三一）中黄に効して、驅馳に徇ふ。願くは惠養を終へて（三二）本枝に蔭せんことを。竟に朝露に先だちて長く委離す。

【二五】亂。賦の末にありて一篇の大意を總ぶる詞。
【二六】駔駿。駿馬。街は音キ。
【二七】月駟。春秋考異記に地月精ヲ出シテ馬トナスとあり。
【二八】倜儻。卓異なり。
【二九】權奇。善く行く貌。
【三〇】鞿羈。くつわ、おもつら。
【三一】中黄。中營なり。
【三二】本枝。子孫といふが如し。

【大意】亂に曰く、聖德天を動かす。故に神物その容儀を呈し、駿馬階街に充てり。此馬や月精を稟け、雲螭の胤を受く。隨つて雄志卓絶にして善く走り、氣質勇壯にして善く韁控に服し、天子の營に至りて、驅馳に供し、惠養を終へて子孫に及ばんと願へり。然も竟に朝露に先だちて死す。誠に悲むべきなり。

舞鶴の賦

鮑明遠

(一)幽經を散いて以て物を驗へ、(二)胎化の仙禽を偉とす。浮曠の(三)藻質を鍾め、(四)清迥の明心を抱き、(五)蓬壺を指して翰を翮し、(六)崑閬を望んで音を揚げ、日域を帀りて以て迴り騖せ、天步を窮めて高く尋ね、神區を踐むこと其れ既に遠く、(七)靈祀を積むこと方に多く、(八)精は丹を含んで星のごとく曜き、頂は紫を凝らして烟のごとく華し。(九)員吭の纖婉たるを引き、脩趾の(一〇)洪姱なるを頓し、霜毛を疊んで影を弄び、玉羽を振つて霞に臨み、朝には(一一)芝田に戲れ、夕には(一二)瑤池に飮

【一】幽經。神仙の書、ここは相鶴經を指す。
【二】胎化仙禽。鶴をいふ。
【三】藻質。文藻ある形體。
【四】清迥。清遠なり。
【五】蓬壺。仙山の名。
【六】崑閬。仙山の名。
【七】靈祀。祀は年なり、年壽をいふ。
【八】精。目なり。
【九】員吭は圓き頸。纖婉は細く曲ること。
【一〇】洪姱。大きくして美なること。
【一一】芝田。芝は靈草の名。十洲記に鍾山ハ北海ノ中ニアリ地仙ノ家數千萬、田ヲ耕シ芝草ヲ植ウとあり。

み、江海を厭ひて澤に遊び、(一三)雲羅に掩はれて羈され、(一四)帝郷の岑寂なるを去り、(一五)人寰の喧卑なるに歸し、歲(一六)崢嶸として暮るるを愁へ、心惆悵して離るるを哀む。

【大意】我れ仙經を繙きて、此の仙禽白鶴を偉とす。此鳥や輕浮放曠なる文質を有し、清遠明白なる心を抱き、常に仙山に在つて飛翔鳴吟し、其飛揚すること高遠にして天日に迫り、神明の區域を踐歷すること遠く、年壽を積むこと既に多く、目は赤くして星の如く、頂は紫を凝らして華の如く、細曲の頸を引き、美大の足を頓し、霜白の毛を疊み玉色の羽を振ひ、朝には芝田に戲れ、夕には瑤池に飲む。一旦江海を厭ひて山澤に遊ぶや、網に罹りて人の羈束する所となり、遂に仙境を離れて俗界に歸し、年歲の暮るるを悲み、身の離羣を哀む。

是に於て窮陰殺節、(一七)急景凋年、涼沙野に振ひ、(一八)箕風天を動し、(一九)嚴嚴たる苦霧、皎皎たる悲泉、氷は長河を塞ぎ、雪は羣山に滿つ。既にして(二〇)氛昏夜歇み、景物澄廓なり。星翻り漢廻り、曉月將に落ちんとするとき、寒雞の(二一)早晨に感じ、霜雁の漠を違るを憐み、驚風の(二二)蕭條たるに臨み、

【一二】瑤池。神女西王母の居る處の池。
【一三】雲羅。羅は網なり、網高くして雲に及ぶなり。
【一四】帝郷。天帝の郷、神仙の居る處。岑寂は高靜なり。
【一五】人寰。俗界なり。
【一六】崢嶸。零悴の貌。

【一七】急景。日の短きこと。
【一八】箕風。箕は星の名、風をつかさどる。
【一九】嚴嚴。慘烈の貌。
【二〇】氛昏。陰氣なり。
【二一】早晨。朝早く時をつくること。
【二二】蕭條。風の聲の淋しき貌。

（二三）流光の照灼に對し、清響を（二四）丹墀に喫かしめ、飛容を（二五）金閣に舞はす。始めには（二六）連軒として以て鳳のごとく蹈ひ、終には（二七）宛轉として龍のごとく躍り、（二八）躑躅徘徊し振迅（二九）騰摧し、身を驚して蓬のごとく集り、翅を矯げて雪のごとく飛び、（三〇）綱を離れて別れ赴き、緒に合ひて相依り、將に興たんとして中ごろ止まり、往くが若くにして歸り、（三一）颯沓しては矜顧し、（三二）遷延しては遲暮し、（三三）逸翮塵を後にし、（三四）翱翥路に先だち、（三五）會を指して規のごとく翔り、（三六）岐に臨んで矩のごとく歩み、態（三七）遺妍あり、貌停趣なく、（三八）機に奔り節に逗り、（三九）睞を角ひ形を分ち、長く揚り緩く騖せ、翼を竝べ聲を連ね、輕迹凌亂し、浮影交横し、衆變繁姿、參差として（四〇）洊密なり。烟のごとく交り霧のごとく凝り、毛質なきが若く、風のごとく去り雨のごとく還り、談り悉すべからず。既に魂を散じて目を盪し、迷ひて其の之く所を知らず。忽ち星のごとく離れて雲のごとく罷め、神容を整へて自ら持し、（四一）天居の崇絶を仰

【二三】流光。月光なり。
【二四】丹墀。天子の階庭なり。丹を以て地に漆す、故に云ふ。
【二五】金閣。金を以て飾れる樓閣。
【二六】連軒。舞ふ貌。
【二七】宛轉。舞ふ貌。
【二八】躑躅。はれまはること。
【二九】騰摧。飛騰摧折なり。
【三〇】綱、緒。舞の行列をいふ。
【三一】颯沓は羣飛の貌。矜顧は自ら憐んで顧ること。
【三二】遷延は徐に退くこと。遲暮は身の老ゆることを悲むこと。
【三三】逸翮。疾き翼。
【三四】翱翥。飛ぶこと。
【三五】會。舞の節なり。
【三六】岐。舞の節なり。
【三七】遺妍。餘る美しさ。
【三八】機、節。舞の機節なり。
【三九】睞。斜視なり。
【四〇】洊密。洊は重ること。
【四一】天居は鶴の舊居。崇絶は高遠なり。
【四二】燕姬。歌舞を善くする女。

ぎ、更に惆悵して以て思を驚す。是時に當りて(四二)燕姫色沮み、(四三)巴童心恥ぢ、(四四)巾拂兩ながら停り、(四五)丸劍雙び止む。(四六)邯鄲と雖も其れ敢て倫せんや。豈(四七)陽阿の能く擬するならんや。衞國に入りて(四八)軒に乘り、(四九)吳都を出でて市を傾け、馴養を千齡に守り、長悲を萬里に結ぶ。

【大意】陰氣肅殺。歲晩の時に及ぶや、寒威沙を揚げ寒風天を動し、寒霧萬物を枯らし、氷雪山河に滿つ。陰氣夜歇きて、淸景澄徹、星翻り漢廻りて、月將に落ちんとするや、寒雞の早に鳴くを聽き、鴻雁の沙漠を去りて溫地に就かんとするを憐み、此鳥乃ち悲風に臨み月光に對して、淸聲を階庭の中に擧げ、金閣の間に舞ふ。其狀鳳龍の翩躚として跳るが如く、蓬の飄るが如く雪の飛ぶが如く、或は行列を離れて別れ進み、或は行列に合ひて相依り、將に進まんとして中止し、往くが如くにして歸り、進んでは影を顧みて自ら悲み、退いては身の衰老を痛み、路塵に先だちて急進し、翔步皆規矩に中り、姿態變轉して姸美餘あり。進退ともに機節

【四三】巴童。歌舞を善くする童。
【四四】巾拂。巾及び拂子、舞人の持つ所の物。
【四五】丸劍。彈丸及び劍、手に持ちて弄する物。
【四六】邯鄲。地名。此地に歌を善くする者あり。
【四七】陽阿。歌曲の名。
【四八】軒。大夫の車なり。左傳に衞ノ懿公鶴ヲ好ミ、鶴ニシテ軒ニ乘ル者アリとあり。
【四九】吳都。吳越春秋に吳王闔閭少女アリ。王共ニ蒸魚ヲ食フ、王、半ヲ嘗ム、女怨ンデ曰ク、王魚ヲ食ヒ我ヲ辱ム、久シク生クルニ忍ビズト乃チ自殺ス、闔閭之ヲ痛ミ閶門ノ外ニ葬リ池ヲ鑿チ土ヲ積ミ山石ヲ以テ槨トナシ、金鼎玉盃銀樽珠襦ノ寶以テ女ヲ送ル、乃チ白鶴ヲ吳市ニ舞ハシメ、萬人隨テ觀ルとあり。

に合ひ、競ひて斜視し、分れて一邊に退き、雲霧と其色を同うし、風雨の去來するが如し。觀る者魂奪はれ目迷ひて、從ふ所を知らず。忽ち分散して舞を輟め、容儀を整へ、天居の高遠なるを仰ぎ、更に情思を痛ましむ。此時に當りては、燕姫巴童と雖も顔色を失ひ、心に恥ぢ、其巾拂丸劍を投じて、亦當に感嘆すべし。邯鄲陽阿の歌曲と雖も、共に比するに足らざるなり。而して此鳥衛國に入りては軒車に乗り、吳都を出でては滿城の人をして聚り觀しむ。かくて千年の馴養を受け、常に萬里の異境に滯留するを悲む。

志上

幽通の賦

班孟堅

(一)高項の(二)玄冑を系ぎ、(三)中葉の(四)炳靈を氏とし、(五)飄風に飆りて(六)蟬蛻し、(七)朔野に雄として以

【一】高項。高は高陽氏、項は顓頊、古代の帝なり。

【二】玄冑。冑は家系なり、玄は黒にして水の色なり、高陽氏は水徳の王なり、故に玄冑といふ。

【三】中葉。中世なり、班氏は楚の令尹子文の後なり、子文の初めて生れし時、澤中に棄つ、虎之を乳す、楚人因つて虎班といふ。中葉とは令尹子文を指すなり。

【四】炳靈。炳は明なり。虎に乳せられしことを謂ふ。

【五】飄風。南風なり。

【六】蟬蛻。蟬の如く殼を脫すること。

【七】朔野。北方の野。

て聲を颺ぐ。（八）皇十紀にして（九）鴻漸し、上京に（一〇）羽儀あり。（一一）亘天に滔りて夏を泯し、考愍に遘ひて以て（一二）行謠ひ、終に己を保ちて則を貽し、上仁の廬する所に里り、（一三）前烈の純淑を懿し、窮と達と其れ必ず濟す。咨（一四）孤蒙の眇眇たる、將に（一五）圮絕して階なからんとす。豈余が身の殉むに足らんや。世業の懷ふべきを違む。靖に潛處して以て永く思ひ、日月を經て彌遠し。（一六）黨人と敢て拾するにあらず、庶はくは斯言の玷けざらんことを。魂（一七）煢煢として神と交り、精誠宵寐に發す。夢に山に登りて迥に眺め、（一八）幽人の髣髴たるを覩る。（一九）葛藟を攬りて余に授け、峻谷を眷みて曰く、墜つることなかれと。（二〇）昒昕寤めて仰思すれば、心（二一）矇矇として猶ほ未だ察ならず。（二二）黃神邈として質すなく、（二三）遺讖に儀りて以て（二四）臆對す。曰く高きに乘りて神に遌ふ。道遐に通じて迷はず。葛（二五）樛木に緜緜たり。

【八】皇は漢皇なり。十紀は十世なり。
【九】鴻漸。鴻の陸に進むが如く進むこと。
【一〇】羽儀。儀表といふが如し。
【一一】亘。王莽，字は巨君。
【一二】行謠。憂思するをいふ。
【一三】前烈は先祖なり。純淑は純善なり。
【一四】孤蒙は孤兒童蒙なり。眇眇は鄙陋なる貌。
【一五】圮絕。毀絕なり。
【一六】黨人。鄕人なり、賤人をいふ。
【一七】煢煢。孤獨の貌。
【一八】幽人は神人なり。髣髴は分明ならざる貌。
【一九】葛藟。蔓草なり。
【二〇】昒昕。明旦なり。
【二一】矇矇。暗き貌。
【二二】黃神。黃帝なり。占夢書を作る。邈は遠なり。
【二三】遺讖。遺書、卽ち占夢書を謂ふ。
【二四】臆對。己の考を以て答ふること。
【二五】樛木は高木なり。緜緜は葛の木にからみつく貌。

(二六)南風を詠じて以て綏きをなす。蓋し(二七)惴惴として深きに臨む、乃ち(二八)二雅の祇む所なり。既に爾に訊ぐるに吉象を以てし、又之に申ぬるに(二九)炯戒を以てす。盍ぞ(三〇)孟晉して以て羣に迨ばざる。辰(三一)儵忽として其れ再せずと。靈訓を承けて其れ(三二)虚徐し、佇ちて(三三)盤桓して且く俟つ。

【大意】余は顓頊高陽氏の裔にして、楚の令尹(官名)子文の後なり。余が祖懿、南風に隨つて北土に徙り、蟬蛻して雄傑となり、大に聲名を博す。漢の十世成帝の時に至り、班況始めて進仕し、京師に羽翼を張る。(班況の女婕妤となり、父子竝に長安に居る)王莽滔天の虐をなし、中夏を泯滅するに及び、我が祖亦此難に遇ひ、憂思して亂を救ふの志を立て、能く自ら己を保ち、又我に法則を遺し、我が爲に仁者の里を擇んで廬舍を定めぬ。ああ我れ我が祖先の純淑文德あり、身窮厄に處るも、亦時を濟ふの志あり。身榮達に在れば、必ず經國の義あるを嘉す。余の暗昧なる將に祖先の跡を毀絕し、階路の以て自ら成すなからんとするを嗟く。我が身は祖先の業を營むに足らずと雖も、世業の毀絕を恨まざるを得ず。此れ誠に憂思すべ

【二六】南風。詩經の周南なり。詩に南に樛木アリ、葛藟之ニ纍フ、樂只ノ君子、福履之ヲ綏ンズとあり。
【二七】惴惴。懼るる貌。
【二八】二雅。詩經の大雅小雅。大雅に人亦言ヘルアリ、進退維レ谷マルとあり、小雅に惴惴タル小心、谷ニ臨ムが如シとあり。
【二九】炯戒。明戒なり。
【三〇】孟晉。孟は勉なり。晉は進なり。
【三一】儵忽。忽ちに過ぎ去ること。
【三二】虚徐。狐疑なり。
【三三】盤桓。徘徊なり。

きなり。因つて潛居長思し、祖先の業を繼がんと欲すること久し。敢て鄕人と更進み自ら己の善に矜らずと雖も、先祖の道を汙さざらんとを冀ふ。魂魄忽ち飛んで祖先の神靈と交り、我が精誠を夜夢の中に喚發せり。余夢に山に登りて遠望するや、神人(祖先の神靈)の髣髴として來るを見る。神我に蔓草を授け、深谷を顧みて我に謂つて曰く、よく此を執りて墜落すること勿れと。明朝夢寤め、仰いで夢中の事を思ふに、矇矇として其吉凶を知らず。黃帝は邈遠にして、質問するに由なし。因つて其遺文(古夢經)を閱し、我が臆を以て解答す。曰く汝高きに登りて神に遇ふは、道術將に通じて迷惑せざらんとするの象なり。蔓草の樛木に纏ふは、周南に詠ずる所にして、安逸の象なり。深谷に臨んで敬愼すべきは、二雅の戒むる所なり。神既に汝に告ぐるに吉象を以てし、又之に申ぬるに明戒を以てす。宜しく勉め進んで、羣と共に仕進すべきなり。好機再び到らず、倏忽として過ぎ去らんとすと。余乃ち神靈の訓戒を受けて狐疑し、佇立徘徊して敢て進まず。惟れ天地の窮なき、生民の晦く在るを鮮しとす。紛たり(三四)屯邅と蹇連と。何ぞ艱多くして知寡き。上聖は迕れて後に拔く。豈(三五)羣黎の御むる所ならんや。昔(三六)衞叔の昆を御ふる、昆寇を爲して予を

【三四】屯邅、蹇連、皆艱難の貌。

【三五】羣黎。衆民也、凡人也。

【三六】衞叔。衞の成公楚に會盟す、成公の弟衞叔國を守る。人叔を公に譖する者あり曰く將に自立せんとすと。成公國に歸る。衞叔方に沐す、髮を握りて之を迎ふ。成公之を疑ひ前驅をして射て之を殺さしむ。

喪す。(三七)管弧を彎いて讎を斃さんと欲し、讎后と作りて己を成す。變化故にして相詭ふ。孰か其終始を預すと云んや。(三八)雍は怨を造して先づ賞せられ、(三九)丁は恵に緣つて戮せらる。(四〇)栗は弔を吉なる逌より取り、(四一)王は慶を蹙ふる所より膺く。(四二)叛として(四三)廻穴すること其れ茲の若し、(四四)北叟のみ頗る其の(四五)倚伏を識る。(四六)單は裏を治めて外凋れ、(四七)張は

【三七】管。管仲なり。管仲嘗て齊の桓公を讎とし之を射て鉤に中つ。桓公後立ちて君となり管仲を以て相となす。

【三八】雍。雍齒なり。雍齒嘗て高祖と怨あり。高祖天下を定むるに至り先づ之を封ず。

【三九】丁。丁公なり、嘗て項羽の爲に高祖を逐ふ。高祖謂うて曰く兩賢豈相阨せんやと。丁公兵を引いて還る。天下既に定り丁公高祖に謁見す。高祖丁公を以て不忠となし遂に之を斬る。

【四〇】栗。漢の景帝の栗皇后をいふ。皇后始め寵愛せられ、遂に驕淫無禮なり。後怨恚して死す。

【四一】王。漢の宣帝の王皇后をいふ。皇后始め嫉妒たり。たまたま許皇后薨ず。宣帝太子の早く母を失ひしを以て乃ち後宮の子なき者を選んで之を養はしむ。因つて立ちて皇后となる。皇后初め子なきを憂ふ、是に於て子なきが爲に幸慶を得たり。

【四二】叛。紛亂すること。

【四三】廻穴。廻は邪、穴は僻なり、禍福の相反すること。

【四四】北叟。塞上の翁なり。翁の馬亡げて胡に入る。人之を弔す。翁曰く焉ぞ福に非ざるを知らんやと。後其馬駿馬を伴ひて歸る。人之を賀す。翁曰く焉ぞ禍に非ざるを知らんやと。後其子馬に乘りて墮ち髀を折る。人之を弔す。翁曰く焉ぞ福に非ざるを知らんやと。後胡兵大に出づ、丁壯の者戰死す。唯子跛を以ての故に父子相保んずるを得たり。

【四五】倚伏。鵾冠子に禍ハ福ノ倚ル所、福ハ禍ノ伏スル所とあり。

【四六】單。莊子に魯ニ單豹ナル者アリ、巖居シテ水飲ス、行年七十ニシテ猶嬰兒ノ色アリ不幸ニシテ餓虎ニ遇ヒ殺シテ食ハルとあり。

【四七】張。莊子に張毅ナル者アリ。高門懸簿趣詣セザルハナシ、行年四十ニシテ内熱ノ病アリ以テ死スとあり。

襮を脩めて內逼る。聿れ(四八)中龢にして庶幾ふことをなすも、(四九)顏と冉と又得ず。(五〇)溺は路を招いて以て己に從はしめ、孔氏をだも猶ほ未だ可ならずと謂へり。(五一)慆慆たるに安んじて葸らず、卒に身を世禍に隕す。聖門に遊べども救ふなし、(五二)醢を覆すと雖も其れ何の補あらん。固に(五三)行行たれば其れ必ず凶なり、(五四)盜亂を免るるは道に賴るが爲なり。形氣は根柢より發し、(五五)柯葉彙して(五六)零茂す。恐らくは(五七)魍魎の景を責むる、羌未だ其の云を得ざるのみ。(五八)黎高辛に淳耀あり、(五九)芈南汜に彊大なり。(六〇)嬴威を(六一)百儀

【四八】中龢。中和なり。
【四九】顏、冉。顏は顏回、冉は冉伯牛。共に孔子の弟子なり。
【五〇】溺、路。溺は桀溺なり。路は子路、孔子の弟子なり。論語に長沮桀溺耦シテ耕ス、孔子之ヲ過ギ、子路ヲシテ津ヲ問ハシム、桀溺曰ク孔丘ノ徒カト、對ヘテ曰ク然リト、曰ク滔滔タル者天下皆是レナリ誰カ以テ之ヲ易ヘン、且其ノ人ヲ避クルノ士ニ從ハンヨリハ豈ニ世ヲ避クルノ士ニ從フニ若カシヤとあり。

【五一】慆慆。亂るる貌。
【五二】醢を覆す。孔子、子路の衞人の爲に醢にせられし事を聞き、皆醢を覆し棄てしむ。蓋し食ふに忍びざるなり、事禮記に見ゆ。
【五三】行行。剛彊の貌。論語に子路行行如タリとあり。
【五四】盜亂。論語に君子勇アリテ義ナケレバ亂ヲナシ、小人勇アリテ義ナケレバ盜ヲナスとあり。
【五五】柯葉。枝葉なり。
【五六】零茂。零落し茂盛すること。

【五七】魍魎。莊子に罔兩景ニ問ヒテ曰ク、曩ニ子行ク今子止マル、曩ニ子坐シ今子起ツ、何ゾ其ノ特操ナキヤト、景曰ク吾待ツアリテ然ル者ナリトとあり。
【五八】黎は重黎なり。高辛は太古の帝の名。
【五九】芈は楚の姓なり。南汜は南涯といふが如し。楚は南方の國なり。故にかく云ふ。
【六〇】嬴、秦の姓なり。
【六一】百儀。秦の先祖なる伯益堯舜の時虞官となりて鳥獸を主り、盡く其儀を得たり。

に取り、(六二)姜三趾に(六三)本支あり。既に仁にして其の信然を得、(六四)天路を仰ぐも軌を同うす。(六五)東鄰虐にして(六六)仁を殲し、(六七)王位を三五に合す。(六八)戎女烈にして(六九)孝を喪ひ、(七〇)伯龍虎に徂歸る。(七一)發師を還して以て(七二)命を成し、(七三)重醉ひ行きて自ら(七四)耦ふ。(七五)震鱗夏庭に褻し、(七六)三正を匝りて(七七)姫を滅す。(七八)巽羽宣宮に化し、(七九)五辟を彌へて災

【六二】姜。齊の姓なり。三趾は三禮なり、天地人の禮をいふ。齊の祖先伯夷虞舜に仕へて三禮を司る。

【六三】本支。子孫といふが如し。

【六四】天路。天道といふが如し。

【六五】東鄰。殷の紂王をいふ。

【六六】仁。仁賢の臣。

【六七】王。周の武王を指す。三五とは天心地義人事及び五行の正運なり。

【六八】戎女。驪姫なり、晉の獻公の夫人となる。太子申生を讒して自殺せしむ。

【六九】孝。孝子、太子申生を指す。

【七〇】伯。晉の文公を指す。龍虎とは辰星を龍となし、參星を虎となす。晉の文公驪姫の難に遇ひて出奔し十九年を經て歸國す、往く時辰星に應じ歸る時參星に應ず。故に祥瑞を得て諸侯に霸たり。

【七一】發。周の武王、名は發。武王兵を觀して盟津に至る。諸侯皆曰く紂伐つべしと。武王曰く汝未だ天命を知らず未だ可ならざるなりと。乃ち師を還す。

【七二】命。天命なり。天命を受けて天子となること。

【七三】重。晉の文公、名は重耳。重耳出奔して齊に至る。齊の桓公之に妻す。重耳之に安んず。齊姜子犯と重耳を醉はしめて齊を去らしむ。

【七四】耦ふ。天時に會ひて霸業を成したること。

【七五】震鱗。龍なり。漦は沫なり。夏の衰へし時、二龍あり庭に止まる、龍去つて漦あり、因つて之を藏す。周の厲王之を發く。漦庭に流れ化して黿となる、以て童女に觸る。既に笄して一女を生む。之を棄つ。人あり之を收めて褒に奔る。褒人罪あり、收めし所の子を入る。之を褒姒といふ。周の幽王之を愛して申后を廢す。后の父怒りて幽王を攻め殺す。

【七六】三正。夏殷周をいふ。

【七七】姫。周の姓なり。

【七八】巽羽。易の巽卦を雞となす。漢の宣帝の時雌雞化して雄となる。

【七九】五辟。五代の君。

を成す。道（八〇）脩長にして世短し。（八一）夐冥默にして周らず。（八二）物に胥仍りて（八三）鬼諏し、乃ち宙を窮めて幽に達す。（八四）嬀姜を孺筮に巢らしめ、（八五）旦祀を契龜に算ふ。（八六）宣曹下夢に興敗し、魯衛（八七）銘謠に名謚あり。（八八）妣胍くを聆いて石を効し、（八九）許理を相て條に鞠ぐ。道は混成して自然なり、術は原を同うして流を分つ。神は心に先だちて命を定め、命は行に隨つて以て消息す。（九〇）幹流して遷りて其れ濟らず、故に（九一）遭罹して贏縮す。（九二）三欒一體に同じ、移易すと雖も忒はず。（九三）洞參差として其れ紛錯す。斯れ（九四）衆兆

【八〇】脩長。長遠なること。

【八一】夐は遠き貌。冥默は玄深なり。

【八二】物。事なり、卜筮をいふ。

【八三】鬼諏。鬼神に問ひはかること。

【八四】嬀。陳の姓、姜は齊の姓なり、孺は小なり。陳の公子完少なりし時人をして筮せしめしに其子孫の世に至り姜姓の國の君となるべしといふ。

【八五】旦。周公旦なり。祀は年なり。左傳に王孫滿曰ク、周ハ世ヲトスルコト三十、年ヲトスルコト七百、天ノ命ズル所ナリトとあり。

【八六】宣曹。宣は周の宣王、夢によりて國家の中興を前知す。曹は國名、曹人夢によりて國家の滅亡を前知す。

【八七】銘謠。莊子に衞ノ靈公沙丘ニ葬ランコトヲトス、吉ナリ、之ヲ堀ルコト數仞ニシテ石槨ヲ得タリ、銘アリ曰ク不馮其子、靈公奪而理之トとあり。左傳に童謠アリ稠父喪勞宋父以驕ト、稠父は魯の昭公宋父は定公なり。

【八八】妣。叔向の妣なり。石は叔向の子伯石なり。効は罪を舉ぐること。

【八九】許。許負なり、人名。條は條侯周亞夫なり。鞠は告ぐること。

【九〇】幹流。輾遷なり。

【九一】遭罹。或は禍に遭ひ或は禍に遇ふこと。贏縮は盛衰といふが如し。

【九二】三欒。晉の大夫欒書、書の子黶、黶の子盈、書は賢にして黶を覆ひ、黶は虐にして盈を害せり。

【九三】洞參差。洞は幽なり、參差は齊しからざる貌。

【九四】衆兆。衆人なり。

の惑ふ所なり。（九五）周賈盪として（九六）貢憤し、死生と禍福とを齊うし、（九七）爽言を抗げて以て情を矯め、信に犧を畏れて鵩を忌む。

【大意】夫れ天地は悠久にして窮極なきも、人生は極めて短く、世に在ること幾何もなし。然も世路艱多くして人智少きを以て、禍に遇ふこと頻頻たり。ただ上聖の人は一旦艱難に遇ふも、能く之を脱却し得るのみ。是れ凡人の預め防止し得る所にあらず。昔衞叔は其兄成公の歸國を迎へしに、成公讒を信じて衞叔を殺し、管仲は齊の桓公を讎とし、射て之を斃さんと欲せしに、桓公立ちて君となるに及び、怨を置いて管仲を相とせり。禍福の相反すること斯の如し。誰か能く預め其終始吉凶を知らんや。雍歯は舊高祖と怨ありしに、高祖の天下を定むるに及び、雍歯を封じて什方侯となす。丁公は項羽の爲に高祖を逐ひしが、其窮を憐んで兵を引いて還る。高祖の帝位に卽くや、其主に不忠なりとて丁公を斬りぬ。栗皇后初め君寵（是れ吉なり）あり、後漸く驕淫無禮にして憂死す。王皇后初め子なきを憂ふ、後子なきが爲に皇后（是れ慶なり）となる。禍福の紛亂反覆すること此の如し。其倚伏を知れるは唯塞上の翁のみ。單豹は體內を養ひて病を防ぎしに、體外の虎來りて之を食ひ、張毅は專ら其外を防ぎしに、病體內に起りて爲に死し、

【九五】周賈。周は莊周・莊子の著者。賈は賈誼。盪は放盪なり。
【九六】貢憤。貢は潰、憤は亂なり。
【九七】爽言。理にたがへる言。

顏回、冉伯牛の二子は中和を履みて聖賢たらんことを庶幾ひしも、回は早く死し伯牛は惡疾に罹り、共に其死を得ず。桀溺は子路を招き、己に從つて隱れしめんとし、孔子に隨從することなかれと言ふ。然も子路は衞に仕へて其亂を避くる能はず、終に殺されて醢にせらる。孔子の門に學べるも、聖道を以て禍を救ふ能はず。子路は行行として剛强なり。故に此の凶禍に遇へり。ただ盜亂を爲すを免れたるは、幸に孔子の道を聞きしを以てなり。顧ふに草木の生氣は根本より發し、枝葉の零落し茂盛するも、亦根本の如何に由る。（人の吉凶禍福も亦運命に由るに喩ふ。）人或は顏冉子路の災に逢ひ、害を蹈めるを見て、或は其身を疑ひ、或は其師を非とすれども、是れ亦魍魎が景の特操なきを責め、景の行止は待つ所ありて然るを知らざるに同じ。甚だ謂なし。重黎（楚の祖先）高辛氏に仕へて淳和耀明の德あり。故に楚南方の强國となるを得。秦の祖伯益堯舜に仕へて虞官となり、鳥獸を典りて盡く其義を得。秦是に由りて興る。齊の祖伯夷堯舜に仕へて天地人の三禮を典り、齊亦是に由りて興る。人道既に然り。仰いで天道を視るも又法軌を同うす。紂は暴虐にして仁賢の臣を殺し、武王は天心地義人事五行の正運に合ふ。驪姬は酷烈にして孝子申生を殺し、文公は出入ともに星宿の祥に應ず。武王は兵を觀して盟津に至り、還りて乃ち天命を受けて天子となり、文公は醉に

まぎれて齊を去り、後よく天時に會ひて君侯となる。夏の衰へし時二龍ありて漦を庭に流す。夏殷周を經て厲王の時に至り、化して褒姒となる。幽王褒姒を寵して申后を廢す。申后の父怒りて幽王を攻殺す。漢の宣帝の時、雌雞化して雄となる。皇后王氏時に始めて太子の妃たり。五君を經て平帝の時に至り、終に王莽の簒奪あり。あゝ天道は長遠にして、人生は短速なり。當時冥暗にして徵應の至る所を知らず。ただ聖人は卜筮に因りて鬼神に謀り、古今を極めて幽微に通ずるを得べし。陳の公子完卜筮に因りて姜(齊國)を保つべきを知り、周公旦龜卜に因つて周の年數を知り、宣王と曹人とは夢に因りて國家の興敗を知り、魯の定公、衞の靈公は銘謠に因りて其名と謚とを知り、叔向の子石伯を生むや、其母石伯の啼聲を聞き、之を劾して我が家を滅す者は必ず此子ならんと豫言し、許負は條侯周亞夫の相を視て、縱理の口に入るは餓死の相なりと豫言せしに、亞夫は後果して獄に下り、食はずして死せり。夫れ人の骨肉四肢聲音五臟は混成して一體をなす。術學其得失を論じ、其貧賤を考へ、其富貴を觀るに至りては、各一概を取る。故に或は其音聲を聽き、或は其骨體を見、或は其色理を占ひ、或は其威儀を視、水の源を同うして流を分つが如し。之を要するに神先づ運命を定めて徵兆前に在り。然れども運命も亦人事に隨つて消長し、轉遷變化して齊からず。故に福に遭ひ禍に遇ひて、或は榮え或は衰ふ。晉の大夫欒書、欒黶、欒盈父子一體たり。賢愚異りと

雖も滅亡の道は竟に違はず。天道の幽微にして紛亂錯綜すること此の如し。斯れ衆人の惑ふ所なり。かの莊周、賈誼の如きは善惡を潰亂し、遂に放蕩の辭をなし、死生と禍福とを同一視せり。(莊子曰く、生は徭役たり、死は休息たりと。賈誼曰く、忽然として人となるも、何ぞ控摶するに足らんや。化して異物となるも、又何ぞ患ふるに足らんやと。)故に事理に差へるの言をなして其情を矯枉し、犧牲となるを畏れ鵩鳥の來るを忌めり。(莊子に曰く、楚の威王莊子を聘す。莊子其使に應へて曰く、子は犧牛を見しか、衣するに文繡を以てし食はしむるに芻菽を以てす。其の牽かれて太廟に入るに及び、孤犢たらんと欲すと雖も得べけんやと。賈誼は鵩鳥賦を作りて鵩を忌む。鵩鳥賦は卷の七に見ゆ。)

貴ぶ所は聖人の(九八)至論なり。天性に順つて(九九)誼を斷ず。物欲するあれども居らず。亦惡むあれども避けず。(一〇〇)孔約を守りて貳せず、乃ち德を輶んじて累なし。(一〇一)三仁は一致に殊なり、(一〇二)夷惠は舛ひて聲を齊うす。(一〇三)木は偃息して以て魏に蕃たり、(一〇四)申は重繭して以て(一〇五)荆を

【九八】至論。正論といふが如し六經を指す。
【九九】誼。義に同じ。
【一〇〇】孔約。孔は甚、約は簡なり。
【一〇一】三仁。殷の微子、箕子、比干をいふ。
【一〇二】夷惠。伯夷と柳下惠。
【一〇三】木。段干木、魏の賢人なり。偃息は心ゆたかに休息すること。
【一〇四】申。申包胥。重繭して七日七夜にして秦に至り、援兵を借りて吳を伐ち、以て楚國を存せり。重繭とは足にマメの出來ること。

存す。（一〇六）紀は躬を焚いて以て上を衞り、（一〇七）皓は志を頤びて傾かず。侯れ草木の區に別るるも、苟も能く實れば其れ必ず榮ゆ。世を歿へて朽ちざらんことを要するは、乃ち（一〇八）先民の程とする所なり。天網の（一〇九）紘覆するを觀るに、實に諶を棐けて相訓ふ。先聖の大猷を謨るに、亦德に隣づいて信を助く。（一一〇）虞韶美にして鳳を（一一一）儀し、（一一二）孔 味を千載に忘る。（一一三）素文信ありて麟を底し、漢（一一四）祚を異代に賓す。精、靈に通じて物を感ぜしめ、神、氣を動して微に入る。（一一五）養は流睇して猿號き、（一一六）李は虎發して石開く。精誠にあらずんば其れ焉んぞ通ぜん、苟も實なくんば其れ孰れか信ぜん。（一一七）末技を操るも猶ほ必ず然り。矧んや躬を道眞に耽ましむるをや。（一一八）孔昊に登りて上下し、（一一九）羣龍の經とする所を緯とす。朝に（一二〇）貞觀して夕に化するも、猶ほ

【一〇五】荆。楚をいふ。

【一〇六】紀。紀信なり。項羽高祖を滎陽に圍む。紀信高祖の車に乘り、詐つて高祖と稱し出でて羽に降る。羽怒つて之を焚く。高祖此に因りて遁るるを得たり。

【一〇七】皓。商山の四皓なり。秦の亂を避けて商山に隱れ、復た出でず。

【一〇八】先民。古聖人なり。

【一〇九】紘覆。大に掩ふこと。

【一一〇】虞韶。舜の音樂の名。孔子之を稱して善盡し美盡せりとなす。

【一一一】儀。來儀なり。書經に簫韶九成シテ鳳凰來儀スとあり。

【一一二】孔は孔子なり。千載は千年の後なり。

【一一三】素文。孔子の著せる春秋をいふ。孔子の素王として禮を論斷せる書なればなり。

【一一四】祚。孔子の子孫をいふ。

【一一五】養。養由基とて射を善くせし人の名。流睇は斜睨すること。

【一一六】李。漢の李廣なり。

【一一七】末技。小技といふが如し。射術を指す。

【一一八】孔昊。孔は孔子、昊は大昊伏犧氏、上古の帝なり。

【一一九】羣龍。羣聖人をいふ。

【一二〇】貞觀は正觀なり。化は死なり。

己を諱れて形を遺る。若し(二一)彭に胤ぎて(二二)老と偕にせんとせば、(二三)來哲に訴へて情を通ぜよ。

【大意】ただ當に聖人の至論を貴び、天性に順ひ義を以て之を斷ずべし。苟くも生きんことを貪りて、名を失ふべからず。孔子は富と貴とは是れ人の欲する所なり、其道を以てせずして之を得れば居らざるなり、貧と賤とは是れ人の惡む所なり、其道を以てせずして之を得れば避らざるなりといへり、聖人の守る所は甚だ簡約にして二端なし。故に德を行ふこと易くして、然も累害なし。三仁の行ふ所各趣を異にすれども、其の仁に至れるは一なり。伯夷と柳下惠とは性向各異れども其賢たるは相同じ。段干木は安逸して魏を安んじ、申包胥は刻苦して楚を存し、紀信は身を焚いて高祖を衞り、四皓は志を養つて出仕せず。道各異りと雖も、苟も仁義の道あれば必ず榮名あり。君子は世を歿へて名の稱せられざるを疾むとは乃ち先聖孔子の法式なり。天網の人を覆ふを觀るに、必ず誠實なる者を助け、先聖の大道を觀るに亦德あり信ある者を助く。舜の韶樂は鳳凰をして來儀せしめ、千載の後孔子之を聞いて肉味を忘れ、孔子春秋を作りて麒麟を致し、漢其子孫を尊封す。人よく其精誠を致せば、則ち神靈に通じ物を感じ、氣を動して微に入る。養由基弓を調して斜睨すれば、猿樹を抱いて號き、李廣草中の石を見、以て虎となして之を射しに、石に中り

【二一】彭。彭祖、七百年の壽を保てる人。
【二二】老。老萊子。長壽者の名。
【二三】來哲。後來の賢者なり。

て矢を沒せり。是れ皆精誠の然らしむる所なり。射術の小技と雖も、猶ほ此の如し。況んや道を樂む者に於てをや。伏犧より下孔子に至るまで、天道を經緯すること備れり。朝に道を觀ずれば、夕に死すとも猶ほ己を忘れ形骸を忘るべし。若し彭祖、老萊子の如き長壽を保たんと欲せば、當に後賢に訴へて之と情を通ずべし。然れども己の慕ふ所にあらざるなり。

(二四)亂に曰く、天造草昧、性命を立つ。心を復し道を弘むるは、惟れ聖賢なり。(二五)渾元物を運らし、流れて處らず。身を保ち名を遺すは、民の(二六)表なり。生を舍て(二七)誼を取るは、亦道の用なり。憂傷して物に夭するは、忝これより痛ましきはなし。(二八)皓爾たる(二九)太素、曷ぞ色を渝へん。尙はくは其幾に越て、神域に淪らん。

【大意】亂に曰く、天の始めて萬物を造るや、皆其性命を立つ。心を復し道を弘むるは、唯聖賢之を能くするのみ。元氣周行して終始已むことなく、水の流れて停らざるが如し。よく其身を保ち令名を後に遺す者は、亦人の師表たるに足る。生を舍てて義を取るも、亦道の運用なり。徒に憂傷して物の爲に夭死するは、恥辱是より大なるはなし。天の白き何ぞ其色を變ずることあらんや。人よく太素に同じく變易せざれば、蓋し神明の域

【二四】亂。賦の末にありて一篇の大意を總ぶる詞。
【二五】渾元。天地の大元氣なり。
【二六】表。師表なり。
【二七】誼。義に同じ。
【二八】皓爾。白き貌。
【二九】太素。素は質なり、天質なり。

に遊ぶに庶幾し。

卷の第八

賦　辛

志　下

(一)思玄の賦　張平子

先哲の(二)玄訓を仰ぎ、彌高しと雖も違はず。(三)仁里にあらずんば其れ焉んぞ宅らん、義跡にあらずんば其れ焉んぞ追はん。潛に(四)服膺して以て永く靖ひ、日月を縣ねて衰へず。伊れ中情の(五)信脩なる、古人の貞節を慕ふ。余が身を竦てて(六)止に順ひ、(七)繩墨に遵つて跌はず。志(八)摶摶として以て(九)懸に應じ、誠に心固くして其れ結べるが如し。性行を旌して以て佩を製し、

【一】思玄。玄遠の德を思ふなり。張衡、字は平子、後漢の和帝の時侍中たり、諸常侍皆直を惡み正を醜みて衡を危うす、故に是賦を作りて以て時俗を非る。
【二】玄訓。玄遠なる敎訓。
【三】仁里。仁者の居る處、論語に里ハ仁ヲ美トナスとあり。
【四】服膺。心に留めて忘れぬこと。
【五】信脩。脩は善なり。
【六】止。禮なり。
【七】繩墨。仁義の法則をいふ。
【八】摶摶。垂るる貌。
【九】懸。戰國策に楚王曰ク、寡人ノ心搖搖然トシテ懸旌ノ如シとあり。

(一〇)夜光と瓊枝とを佩び、(一一)幽蘭の秋華を繝け、又之を綴るに(一二)江離を以てす。(一三)襞積を美くして以て(一四)酷烈なり。允に(一五)塵邈にして虧き難し。既に姱麗にして雙鮮きも、是時の珍とする攸にあらず。余が榮を奮へども見るものなく、余が香を播けども聞ぐものなし。幽獨にして此の(一六)側陋を守る、敢て怠遑して勤を舍てんや。(一七)二八の虞に遻へるを幸とし、(一八)傅說の殷に生れしを嘉し、(一九)前良の遺風を尙び、辰に後れて及ぶなきを悼む。何ぞ孤行の(二〇)煢煢たる、(二一)孑として羣せずして(二二)介立す。(二三)鸑鷟の特り棲むに感じ、(二四)淑人の合ふこと希なるを悲む。彼の合ふことなきも、其れ何ぞ傷まんや。衆僞の眞を冒ふを患ふ。(二五)旦は讒を羣弟に獲、金縢を啓いて後に信ぜらる。(二六)蒸民の僻多きを覽て、辟を立て以て身を危くせんことを畏る、曾ち(二七)煩毒

【一〇】夜光、瓊枝。皆珠なり。
【一一】幽蘭。香草なり。
【一二】江離。香草なり。
【一三】襞積。衣縫なり。
【一四】酷烈。香氣の高きこと。
【一五】塵邈。久遠なり。
【一六】側陋。卑賤の地位。
【一七】二八。八元八凱十六人の賢人をいふ。虞は舜なり。
【一八】傅說。殷の高宗の賢相なり。
【一九】前良。昔の賢人。
【二〇】煢煢。獨行の貌。
【二一】孑。獨なり。
【二二】介立。孤立なり。
【二三】鸑鷟。鳥の名、君子に喩ふ。
【二四】淑人。善人君子なり。
【二五】旦。周公旦なり、武王の弟にして成王の叔父なり、成王を輔けて政を聽く。武王殷を滅すの二年、病に罹りて危篤なり、周公身を以て王命に代らんとし、願文を作りて金縢の匱中に納め置きたり。周公の弟管叔蔡叔の二人、周公の勢盛なるを妬み成王に讒す。成王周公を疑ふ。後金縢の願文を見、始めて周公の異志なきを信ず。
【二六】蒸民。衆民なり。
【二七】煩毒。憂愁なり。

して以て迷惑す、嗟孰か以て爲に言ふべき。私に(二八)湛憂して深く懷ひ、思(二九)繽紛として理まらず。願はくは力を竭して以て義を守り、貧窮すと雖も改めず、(三〇)彫虎を執へて象を試み、(三一)焦原に跕んで跟止まらんことを。庶はくは斯に信を奉じて以て周旋せんことを。既に死して後已まんことを要す。

【大意】余先哲の遺訓を慕ひ、その道高遠なりと雖も敢て違ふなく、仁里義跡にあらずんば、追ひて之に居るなし。常に遺訓を服膺し歳月を累ねて倦まず。禮義の法則に遵ひて敢て差跌せず。古人を慕ふの志摶摶然として懸旋の如く、此心の堅固なること結縛せるが如し。乃ち我が性行を明にせんが爲に、珠寶の佩を作り香草を繫け、衣縫美にして芳香高く、誠に久遠にして盡き難く、美麗にして匹稀れなり。然れども是れ時俗の珍重する所にあらず。余が華香を奮敷すれども、人の見聞するなし。因つて獨

【二八】湛憂。深く憂ふること。
【二九】繽紛。亂るゝ貌。
【三〇】彫虎。獸の名、尸子に中黃伯曰ク、余左ニ太行ノ獿ヲ執ヘテ右ニ彫虎ヲ搏ス。タダ象ハ未ダ吾ガ心ト試ミズ、有力者ハ則チ又牛トナリ象ト闘ヒ以テ自ラ試ミント欲スルヲ願フ。今二三子以テ義トナス將タ惡ンゾ之ヲ試ミントスル夫レ貧窮ハ太行ノ獿ナリ。疏賤ハ義ノ彫虎ナリ。而シテ吾曰ク之ニ遇ハバ亦以テ試ムルニ足ルトとあり。李善曰ク彫虎ハ以テ貧ニ喩ヘ象ヲ試ムルハ以テ力ヲ竭スニ喩フと。
【三一】焦原。尸子に莒國ニ石焦原アリ、廣サ五十步、百仞ノ谿ニ臨ム、勇ヲ以テ莒子ニ見ユル者アリ、獨リ却行シテ踵ヲ齊ウス、世ニ稱セラルル所以ナリ。ソレ義ノ焦原タルヤ亦高シ、賢者ノ義ニ於ケル必ズ且ツ踵ヲ齊ウス。此レ一時ヲ服スル所以ナリとあり。李善曰ク焦原ハ以テ義ニ喩フと。

り退いて幽居す。敢て事を怠り勤を舍るにあらず。八元八凱の虞舜に遇ひしを慶び、傅說の高宗の世に生れて相となりしを喜び、我れ獨り時に後れて及ぶなきを痛むのみ。乃ち鸞鷖の獨棲を悲み、君子の遇合し難きを痛む。不遇は傷むに足らずとするも、羣小人の誣罔に至りては誠に患ふべきなり。昔周公旦は羣弟の讒に遇ひしも、成王金縢の書を啓き、始めて周公の異志なきを信ぜり。余衆人の邪行多きを見、獨り異を立てて其身を危くせんことを畏る。則ち深憂迷惑し心繽紛として理まらず。願くは力を竭して義を守り、貧窮すと雖も改めず、信義を守りて周旋し、死して後已まんと欲す。

俗遷渝して事化し、規矩の圓方を泯し、(三二)蕭艾を重笥に寶とし、(三三)蕙芷を香しからずと謂ひ、(三四)西施を斥けて(三五)御せず、(三六)騕褭を縶して以て箱に服け、(三七)頗僻を行ひて志を獲、法度に循つて殃に離ふ。惟れ天地の窮りなき、何ぞ遭遇の常なき。操を抑へて苟も容れられず、河に臨んで航なきに譬ふ。巧笑して以て媚を干めんと欲すれども、余が心の嘗ふ所にあらず。溫恭の(三八)黻衣を襲ね、禮義の繡裳を被り、貞亮を辯んで以て鞶となし、伎藝を雜へて以て珩となし、(三九)綵藻を昭すに(四〇)琱琭

【三二】蕭艾。臭草なり、邪佞に喩ふ。重笥は箱なり。
【三三】蕙芷。香草なり、忠賢に喩ふ。
【三四】西施。越の美女の名。
【三五】御。寵幸すること。
【三六】騕褭。古の駿馬なり。
【三七】頗僻。邪佞なり。
【三八】黻衣。斧の形のぬひを施したる禮衣。
【三九】綵藻。文章なり。
【四〇】琱琭。玉に似たる石。

を以てし、(四一)璜聲遠くして彌長し。淹しく(四二)棲遲して以て欲を恣にせんとすれば、(四三)曜靈忽として其れ西に藏る。(四四)己知を恃んで予を華せんとすれば(四五)鶗鴂鳴いて芳しからず。一年の(四六)三秀を冀へども、白露の霜となるに遒る。時(四七)亹亹として代序す。疇か與に(四八)比伉すべき。(四九)姤嫭の竝び難きを咨き、(五〇)韓に依りて以て流亡せんことを想ふ。恐らくは(五一)漸冉として成ることなからんことを。留らば則ち蔽はれて彰れじ。

【大意】然も時俗變遷し規矩を廢して用ひず。臭草を珍重して香草を香しからずといひ、(邪佞を尊んで忠賢を棄つるに喩ふ。)美女を斥けて寵せず、駿馬を駕して空しく勞せしむ、(賢才の人用ひられず、或は下位に在るに喩ふ。)されば邪僻の行ある者志を得、法度に遵ふ者却つて殃に遇ふ。それ天地の無窮なる、何ぞ此の常道なきの世に遭遇せる。自ら操行を抑へて苟も世に容れられんことを求めず。恰も河に臨んで舟の渡るべきなきが如し。巧笑して媚を世に干むるは、余が心の欲する所にあらず。溫恭禮義貞亮伎藝の美を以て其德を摠集し、以て冠帶を飾り、冠帶の上綵

【四一】璜聲。珮玉の聲。
【四二】棲遲。ゆつたりと遊ぶこと。
【四三】曜靈。日なり。
【四四】己知。漢書注に己知ハ猶ホ知己ノ如シとあり。
【四五】鶗鴂。鳥の名、モズ。此鳥秋分を以て鳴く。故に此鳥鳴けば草木凋傷す。
【四六】三秀。芝草なり。一年に三回花を開く。
【四七】亹亹。進む貌。
【四八】比伉。匹偶なり。
【四九】姤嫭。姤は惡なり。嫭は好なり。
【五〇】韓。韓衆なり、道を得て登仙したる人。
【五一】漸冉。時の進む貌。

藻玉石を施して既に明に、珮玉の聲甚だ長遠なり。余既に此の美服を著、游息して自ら恣にせんとすれば、歳月徒に冉冉として進み、知己を恃んで共に榮えんとすれば、忽ち讒邪に遇ひて進むを得ず。恰も靈芝の一年に三たび秀茂するも、却つて霜露に迫りて茂盛するを得ざるが如し。歳漸く進んで四序代謝し正道行はれず。誰か我と偶をなすべき。好惡の勢竝び居るを得ず。韓衆（仙人の名）に依りて共に流亡遠遊せんと欲するも、仙道恐らくは成し難かるべし。然も安閑として此に留まらば、讒邪の蔽ふ所となりて、所期を明かにする能はざらん。實に進退維れ谷まれり。

心猶豫して狐疑し、(五二)岐趾に卽いて情を臚ぶ。(五三)文君我が爲に(五四)蓍を端し、(五五)飛遯して以て名を保つに利し。(五六)衆山を歷て以て周流し、(五七)迅風に翼して以て聲を揚げ、(五八)二女を崇嶽に感じ、或は(五九)氷折して營まず。(六〇)天蓋し高けれども澤となる。誰か路の不平を云はん。(六一)勔として自ら彊めて息ま

【五二】岐趾。岐山の下、卽ち周の文王の居りし處。

【五三】文君。周の文王なり。

【五四】蓍。占易に用ふる具、其數五十本あり、古は蓍草の莖にて作る、後世の筮竹なり。

【五五】飛遯。飛遯は世をのがるること。遯は艮下乾上の卦。

【五六】衆山。艮を山となす。

【五七】迅風。遯の卦の二爻より四爻までを巽となす。巽は風なり。

【五八】二女。巽は長女、兌は少女、故に二女といふ。崇は高なり。嶽は五嶽なり。遯の上九變して咸となる。咸は感なり。

【五九】氷折。遯の三爻より五爻までを乾となす、乾を氷となす、故に氷折といふ。

【六〇】天蓋云云。乾を天となし、兌を澤となす。

【六一】勔。勉なり。

ず。(六二)玉階の嶢崢たるを蹈む。筮氏の長短を懼れ、東龜を鑽りて以て(六三)禎に覩ふ。(六四)九皐の介鳥に遇ひ、素意の(六五)不呈を怨む。塵外に遊んで天を瞥、(六六)冥翳に據りて哀鳴す。(六七)鶗鴂貪婪を競へども、我れ脩潔して以て榮を益す。子(六八)玄鳥に故あり、(六九)母氏に歸して後に寧し。占既に吉にして悔なく、元辰を簡んで装を俶ひ、旦に余淸源に沐し、余が髪を(七〇)朝陽に晞かし、飛泉の(七一)瀝液に漱ぎ、(七二)石菌の流英を咀ひ、翾鳥のごとく擧りて魚のごとく躍り、將に往いて(七三)八荒に走かんとす。(七四)少皡の窮野を過ぎ、(七五)三丘に(七六)句芒を問ふ。何ぞ道眞の淳粹なる。穢累を去りて影輕なり。蓬萊に登りて(七七)容與す。(七八)鼇抃つと雖も傾かず。瀛洲に留りて芝を採り、聊且以て長生し、歸雲に憑りて遐く逝き、夕に余扶桑に宿り、(七九)青岑の玉醴を飲み、(八〇)沆瀣を餐ひて以て

【六二】玉階は天子の階なり。嶢崢は高き貌。
【六三】禎。祥なり。
【六四】九皐。詩經に鶴九皐ニ鳴クとあり。介鳥は大鳥なり、鶴をいふ。
【六五】不呈。不明といふが如し。
【六六】冥翳。天空なり。
【六七】鶗鴂。くまだか、小人に喩ふ。
【六八】玄鳥。鶴をいふ。老子に玄ノ又玄、衆妙ノ門とあり。
【六九】母氏。道をいふ。老子に天下始アリ、以テ天下ノ母トナル、既ニ其母ヲ得レバ又其子ヲ知ルとあり。元辰。良時なり。
【七〇】朝陽。山東をいふ。
【七一】瀝液。津潤なり。
【七二】石菌は石芝なり。流英は流華なり。
【七三】八荒。四海の外なり。
【七四】少皡。太古の帝、金天氏。窮野は其都なり。
【七五】三丘。蓬萊、方丈、瀛洲三神山なり。
【七六】句芒。東方の神。
【七七】容與。休息なり。
【七八】鼇。蓬萊山を負ふ大龜。
【七九】青岑は山の名。玉醴は玉泉なり。
【八〇】沆瀣。露氣なり。

粮となし、昔夢を（八一）木禾に發し、（八二）崑崙の高岡に轂す。

【大意】心疑ひて決せず。故に文王に就いて情を陳べ、其說を聽いて疑を決せんと欲す。文王乃ち我が爲に蓍を端して筮し、世を棄てて遯逃し、以て其名を保つに利しとなす。因つて衆山を歷て周遊し、迅風に乘じて聲を揚ぐ。或は二女を高嶽に感じ、或は氷折れて經營すべからず。天高けれども尙ほ澤となる。世路險なりと雖も誰か復た其道通せずと言はんや。勉めて自ら去らんと欲す。然も尙ほ玉階を戀ひて去る能はず。尙ほ忠賢を進めんことを思ふ。乃ち猶ほ筮に長短定まらざる所あらんことを懼れ、更に龜甲を鑚りて之を卜し、以て其祥を觀るに、九皐大鳥（鶴なり）の卦に遇ひ、素意の申呈するを得ざるを怨む。鶴塵外に遊び冥翳の中に哀鳴すれば、鵾鶋（小人に喩ふ）競ひ進んで以て貪婪す。己實に此鳥に類するあり。惟道に歸して後安きを得ん。占旣に吉なり。乃ち元辰を選んで旅裝を整へ、先づ髮を淸源に沐ひて之を山東に乾かし、飛泉の靈液に漱ぎ、石芝の流華を食ひ、八荒に周遊せんとし、少皞の舊都を過ぎ三神山に句芒神を問ふ。道淳粹にして穢累なし。蓬萊に登りて逍遙す。巨鼇此山を負うて抃擊すれども傾倒せず。瀛洲に留りて芝草を採り、之を服して以て長生を取り、歸雲に乘りて遠く逝き、夕に扶桑に宿り、靑岑山の玉泉を飲み、露氣を

【八一】木禾。淮南子に崑崙ノ上ニ木禾アリ、其穗長サ五尋とあり。
【八二】崑崙。仙山の名。轂は生ずること。

吸ひて粮となす。嘗て木禾の崑崙山上に生ずるを夢みしが、今親しく往いて之を見たり。朝に吾（八三）暘谷に行き、（八四）伯禹に（八五）稽山に從ひ、（八六）羣臣の玉を執るを嘉し、（八七）防風の言を食むを疾む。（八八）長沙を指して以て邪に徑し、（八九）重華を南鄰に存し、（九〇）二妃の未だ從はず、（九一）翩繽として彼の（九二）湘濱に處るを哀む。流目して夫の（九三）衡阿を眺め、（九四）有黎の（九五）圮墳を覩、火正の懷るなく、山坡に託するに孤魂を以てするを痛む。愁鬱鬱として以て遠きを慕ひ、（九六）卬州を越えて遊遨し、躋日（九七）昆吾に中するとき、炎火の陶する所に憩ふ。（九八）芒熛を揚げて天を絳くし、水（九九）泫沄として濤を涌かし、溫風（一〇〇）翕として其れ熱を增し、（一〇一）惄として鬱悒して其れ聊

【八三】暘谷。日の出づる處。
【八四】伯禹。夏の禹王なり。
【八五】稽山。會稽山なり。
【八六】羣臣云云。左傳に禹諸侯ヲ塗山ニ合ス、玉帛ヲ執ルモノ萬國とあり。
【八七】防風。汪芒氏の君の名。國語に吳越ヲ伐チ會稽ヲ隳リ骨節ヲ獲、車ヲ專ニス、吳ノ使來リテ之ヲ仲尼ニ問フ、曰ク丘之ヲ聞ク、昔禹羣臣ヲ會稽山ニ致ス、防風後レテ至ル禹乃チ殺シテ之ヲ戮ス、其骨節車ヲ專ニス、此ヲ大トナスとあり。
【八八】長沙。地名。山海經に南方ニ蒼梧ノ川アリ、其中九疑山ハ舜ノ葬ル所、長沙ノ界中ニ在リとあり。
【八九】重華は舜なり。南鄰は南方なり。存は問なり。

【九〇】二妃。堯の女にして舜の妻たりし娥皇女英をいふ。
【九一】翩繽。美なる貌。
【九二】湘濱。湘水のほとり。
【九三】衡阿。衡山の隈。
【九四】有黎。高辛氏の火正たりし祝融をいふ。楚の靈王の世に衡山崩れて祝融の墓壞る。
【九五】圮墳。壞れたる墓。
【九六】卬州。正南の州の名。四海圖に交廣ノ南ニ卬州アリ、其處極メテ熱シとあり。
【九七】昆吾。淮南子に日暘谷ニ出デテ昆吾に至ル、是ヲ正中トイフとあり。
【九八】芒熛はほのほ。芒は光芒。熛は火飛ぶなり。
【九九】泫沄。沸く貌。
【一〇〇】翕。熱き貌。
【一〇一】惄は憂思なり。鬱悒は煩寃なり。

んじ難し。顧り羈旅して友なし。余安んぞ能く茲に留まらん。(一〇二)金天を顧みて歎息し、吾往いて西に嬉まんと欲す。祝融を前にして麾を擧げしめ、(一〇三)朱鳥を纏ねて以て旗を承けしむ。(一〇四)建木に廣都に躔り、(一〇五)若華を撫ひて躊躇し、(一〇六)軒轅に西海に超ぎ、(一〇七)汪氏の龍魚に跨る。此國の千歲なるを聞くも、曾て焉んぞ以て余を娛ましむるに足らん。(一〇八)九土の殊風を思ひ、(一〇九)蓐收に從つて遂に徂く。(一一〇)欻として神のごとく化して蟬のごとく蛻け、精粹を朋として徒と爲し、(一一一)白門を蹶んで東に馳せ、云に台中野に行き、(一一二)弱水の潺湲たるを亂り、(一一三)華陰の湍渚に逗り、(一一四)馮夷を號んで津を淸めしめ、龍舟に櫂さして以て予を濟さしむ。(一一五)帝軒の未だ歸らざるに會ひ、悵として徜徉して(一一六)延佇し、河林の(一一七)蓁蓁たるに悃ひ、(一一八)關雎の女を戒むるを偉とす。(一一九)黃靈詹りて命を訪ふ。天道を樛めて其れ焉にか如

【一〇二】金天。西方少昊の主る所。
【一〇三】朱鳥。南方の星なり。
【一〇四】建木は木の名。廣都は地名。
【一〇五】若華。樹の名。
【一〇六】軒轅。國の名。
【一〇七】汪氏。國の名。
【一〇八】九土。九州の土。
【一〇九】蓐收。西方の神の名。
【一一〇】欻。忽然なり。
【一一一】白門。淮南子に八極西南ノ方ヲ偏駒ノ山トイフ、白門トイフとあり。
【一一二】弱水。川の名、山海經に崑崙ノ丘、其下弱水ノ川アリテ之ヲ環ルとあり。潺湲は水の流るる貌。
【一一三】華陰。華山の北。
【一一四】馮夷。河の神。
【一一五】帝軒。黃帝なり。黃帝西海橋山に葬る、神未だ東歸せざるなり。
【一一六】延佇。久しく立ちとまること。
【一一七】蓁蓁。茂盛の貌。
【一一八】關雎。詩經の篇の名。
【一一九】黃靈。黃帝なり。

かんと。

【大意】朝に暘谷に行き、會稽山に禹王に從ひ、羣臣の玉帛を執るを嘉し、防風の僞言を疾み、更に長沙を指して斜に往き、南方に帝舜を問ひ、二妃の舜に從ふ能はずして江湘の間に死し、神となりて此地に在るを哀み、衡山の阿を眺めて、祝融の墓壞れ其魂獨り山坡に寄託するを痛み、遂に南方卬州を越えて遠遊す。日の昆吾に中する時、炎火の搖蕩する所に憩ふ。火氣光芒天を焦して赤く、水沸騰して濤を揚げ、炎風熾熱し、煩寃して安んずべからず。余獨遊して友なし。焉んぞ此地に留まるを得んや。乃ち西方を顧望し往いて嬉遊せんとし、祝融をして前驅せしめ、朱鳥を聯ねて旗を承けしめ、廣都に至りて建木の下に息ひ、若華の枝を拾ひて徘徊し、更に西行して軒轅國を過ぎ、汪氏國の龍魚に跨る。此國の人皆千歳の壽を保つと雖も、以て余を娛ましむるに足らず。九州の美風を思ひ、乃ち西方よりして中野に往かんとす。忽然として神の化するが如く、又蟬の皮殼を脫するが如く、精粹を以て朋友徒侶となし、白門山を蹶んで東に馳せ、弱水を亂り、華山の北に留まり、馮夷を呼んで津を淸めしめ、龍舟に棹して余を中野に濟さしむ。然も黃帝西海の橋山に死して、其神未だ東歸せず、因つて悵然として之を思ひ、河林の中に息ひ關雎の詩の女を戒むるを美す。適黃帝至る。乃ち就いて吉凶の命を問ふ。余天道を求めて何にか往くべきと。

曰く、近く信じて遠く疑ふは、(二〇)六籍も闕いて書せず。神逵は昧うして其れ覆かにし難し。疇か克く謨かにして諸に從はんや。(二一)牛哀病んで虎と成り、昆に逢ふと雖も其れ必ず噬み、(二二)鼈令殪れて尸亡し、蜀の禪を取りて世を引くす。死生錯りて其れ齊しからず、(二三)司命と雖も其れ晣かならず。(二四)竇號いて代路に行きしも、後祚を膺けて(二五)繁廡し、(二六)王侈を漢庭に肆にせしも、卒に恤を銜んで緒を絶ち、(二七)尉尨眉にして郞潛し、

【二〇】六籍。六經なり。

【二一】牛哀。淮南子に牛哀病ンデ七日ニシテ化シテ虎トナル其兄戸ヲ啓イテ入ル、哀搏シテ之ヲ殺シ、自ラ虎タルヲ知ラズとあり。

【二二】鼈令。荊人なり。鼈令死す。其尸を江に棄つ。流に逆ひて上り蜀都に至りて生く。蜀の望帝と相見る。望帝以て相となし、德の令に及ばざるを以て、乃ち國を委して令に授けて去る。

【二三】司命。神の名。鬼錄を總ぶる者なり。

【二四】竇。漢の文帝の皇后、景帝の母なり。呂太后宮人を出して以て諸王に賜ふ。竇姬亦與つて行中に在り。家淸河に在り。趙に往き家に近からんことを願ひ、其主遣宦者に請ふ。必ず趙籍の伍中に置けと。宦者之を忘れ、誤つて代籍の伍中に置く。行くに當りて竇姬涕泣して其宦者を怨み往くを欲せず。相强めて乃ち往く。代に至る。代王獨り竇姬を寵し、景帝を生む。後立ちて皇后となる。

【二五】繁廡。茂盛なり。

【二六】王。漢の平王の皇后王氏、王莽の女なり。莽の天子となるに及び、后常に疾と稱して朝せず。莽の誅せらるるに及び、自ら火中に投じて死す。

【二七】尉は官名なり。尨眉は靑き眉なり。漢武故事に顏駟文帝ノ時郞トナル、武帝輦シテ郞署ヲ過ギ、駟ノ尨眉白髮ナルヲ見、問ウテ曰ク叟何ノ時カ郞トナル、何ゾ其ノ老イタルヤト、答ヘテ曰ク臣ハ文帝ノ時郞トナル、文帝ハ文ヲ好ンデ臣ハ武ヲ好ム、景帝ニ至リ帝ハ美ヲ好ミ臣ガ貌醜シ、陛下少キヲ好ンデ臣已ニ老イタリ、是ヲ以テ三世不遇ナリ、故ニ郞署ニ老ユト、武帝其言ニ感ジ擢デテ會稽都尉ニ拜スとあり。

(二八)三葉に逮んで(二九)武に遭ひ、(三〇)董弱冠にして(三一)袞を司り、(三二)王隧を設くれども處らず。夫れ吉凶の相仍る、恆に反側して所なし。(三三)穆天に屆りて以て牛を悦びしも、豎叔を亂りて主を幽し、(三四)文祛を斷たれて(三五)伯を忌みしも、(三六)閹賊を謁げて后を寧んず。(三七)通人だも好惡に闇し。豈昏惑して能く剖たんや。(三八)嬴讖を摘りて(三九)胡を戒め、諸を外に備へ

【二八】三葉。文帝景帝武帝三世なり。

【二九】武。武帝なり。

【三〇】董。董賢年二十二にして三公となる。哀帝崩じ賢自殺す。家惶恐して夜之を葬る。王莽其の詐死なるを疑ふ。有司奏す、賢冢墓を造り王制に異らずと。賢既に發かれ、裸にして其尸を診す。因つて獄中に埋む。

【三一】袞。三公の服なり。

【三二】王隧。地を掘りて路を通ずるを隧といふ、王の葬禮なり。

【三三】穆云云。左傳に叔孫穆子、名ハ豹、魯ノ大夫ナリ、罪アリテ走リ齊ニ向フ、庚宗ニ及ンデ婦人ニ遇フ、之ニ通ジテ子アリ、齊ニ在リテ夢ム、天已ヲ壓シテ勝タズ、顧ミテ人ヲ見ルニ黑クシテ上僂、深目ニシテ豭喙ナリ、之ヲ號シテ牛トイフ、余ヲ助ケテ乃チ之ニ勝チヌト、後穆子還ル、庚宗ノ婦人雉ヲ獻ズ、穆子之ニ問ヒテ曰ク汝子アルカト、曰ク余ガ子已ニ能ク雉ヲ捧ゲテ我ニ從フト、之ヲ見レバ則チ夢ミシ所ナリ、未ダ其名ヲ問ハズ、之ヲ號シテ牛トイフ、豎トナラシム、牛其室ヲ亂シテ之ヲ有セント欲ス、叔孫疾ム、牛詐リテ外人ニ謂ツテ曰ク、夫子疾病ナリ、人ヲ見ルヲ欲セズト、饋ヲ介ニ寘イテ退カシム、牛進メズ、叔孫食ハズシテ死セリとあり。

【三四】文云云。國語に晉ノ獻公、寺人勃鞮ヲシテ文公ヲ蒲城ニ伐タシム、文公垣ヲ踰ユ勃鞮其袪ヲ斬ル、後文公ノ國ニ入ルニ及ビ勃鞮見エンコトヲ求メ、呂甥郤芮ノ陰謀ヲ告グとあり。

【三五】伯。勃鞮、字は伯楚なり。

【三六】閹。宦官即ち寺人なり。勃鞮を指す。

【三七】通人。叔孫穆子、晉の文公を指して言ふ。

【三八】嬴は秦の姓なり。讖は圖錄、即ち未來記なり。

【三九】胡。北方のエビス。

て内に發す。或は（一四〇）賄を輦して車を遂くれども、孕行く〳〵産して對をなす。（一四一）愼竈顯かに以て天を言ひ、水火を占して妄に誶ぐ。（一四二）梁叟夫の黎丘を患へ、厥子に丁りて刃を剸す。親しく睨る所にして識らず。矧や幽冥の信ずべけんや。（一四三）緜攣して以て己を滓き、百憂を思ひて以て自ら疹むなかれ。

【大意】黄帝曰く、天道は知るべからず。近くして之を信じ、遠くして之を疑ふ。六經も闕きて記述せず。もとより暗昧にして審かにし難し。誰か能く明にして之に從はんやと。因つて思ふに牛哀は疾んで虎に化し、其兄を殺し、鼈令は死して流亡し、蜀帝の禪を受けて世を長くす。死生

【一四〇】賄云云。賄は財なり。輦は運ぶなり。車は人名なり。昔周犫トイフ者アリ、家甚ダ貧シ、夫婦夜田ス、天帝見テ之ヲ矜ミ、司命ニ問ヒテ曰ク、此レ富マスベキカト、司命曰ク命貧ニ當レドモ、張車子ノ財アリ、以テ之ニ假スベシト、卽チ借シテ之ニ與フ、期シテ曰ク、車子生ルレバ急ニ之ヲ還セト、田者稍富ミ、貲ヲ致スコト且ニ萬ナラントス、司命ノ言ヲ忌ミ夫婦其賄ヲ輦シテ以テ逃レ、行旅者ト同宿ス、夫妻ノ車下ニ寄リテ宿スルニ逢フ、夜子ヲ生ム、名ヲ夫ニ問フ、夫曰ク車間ニ生レ車子ト名ヅクト、コレヨリ向フ所利ヲ失ヒ、遂ニ更ニ貧困ナリ、事搜神記に見ゆ。

【一四一】愼竈。愼は魯の大夫梓愼、竈は鄭の大夫裨竈。左傳昭公二十四年、二十八年に見ゆ。

【一四二】梁叟。呂氏春秋に梁國ノ北地ヲ黎丘ト名ヅク、奇鬼アリ、ヨク人ノ子姪昆弟ノ狀ニ效フ。邑ノ老人市ニユキ醉ヒテ歸ル者アリ、鬼其子ノ狀ニ效ヒ、扶ケテ道ニ之ヲ苦ム、老人歸リ酒醒メテ其子ニ謂ツテ曰ク、吾汝ガ父タリ、我醉フ汝道ニテ我ヲ苦ムルハ何ゾヤト、其子曰ク此事ナシト、老人曰クアア是レ必ズ彼ノ奇鬼ナラント、明日復タ市ニ飮ミ、遇ヒテ之ヲ刺サント欲ス、明日市ニ往キテ醉フ、其眞子其父ノ歸ル能ハザランコトヲ恐レ、遂ニ之ヲ迎フ、老人其眞子ヲ望ミ劍ヲ拔イテ之ヲ刺スとあり。

【一四三】緜攣。繫著なり。

の舛錯かくの如し。司命神と雖も之を明にする能はず。竇后は泣いて代に行きしも、後祚に遇ひて榮華を極め、王后は侈り漢廷に窮めしも、其父王莽と死を共にし、顏駟は蒼眉にして賤郎たりしも、三世を歷て武帝に遇ひ、遂に都尉に擢んでられ、董賢は弱冠にして三公となり、王者の葬禮に擬せしも、却つて獄中に葬らるるに至る。此の數者吉凶相因り、反側して定まる所なし。叔孫穆子夢に天に壓せられて牛を悅び、牛を以て豎となす。後豎牛叔孫の室を亂りて、其主を餓死せしむ。晉の文公袖を斷たれしを以て寺人勃鞮を疾む。後其忠言によりて陰謀を知る。それ通人と雖も好惡に惑ふ。況んや凡人をや。秦の始皇、盧生が圖籙（未來記）に秦を亡す者は胡ならんとあるを信じ、將軍蒙恬をして外に向つて胡を擊たしむ。始皇の崩ずるや、李斯趙高始皇の詔を受くと詐り、胡亥を立てて太子となし、其禍内より發す。周犨財を運んで車子を避けしも、孕婦子を生んで車子と答ふ。梓愼裨竈の二人、水火の災あるを豫言せしも、其事皆妄なり。梁叟黎丘の奇鬼を疾みて之を殺さんとし、却つて我が子を殺せり。此の數者皆幽冥の事なり。豈定信すべけんや。世事に繫著し憂思して自ら瘁むべきにあらざるなり。

彼の（一四）天監の孔だ明なる、用て忱を棐けて仁を祐く。（一五）湯禮を蠲くして以て禱祈し、彪褫を蒙

【一四】天監。天の監視。
【一五】湯云云。殷の湯王の時、大に旱すること七年なり。湯乃ち桑林に祈り自ら以て犧となす。大雨乃ち至る。彪褫。大なる幸。

りて以て民を拯ふ。（一四六）景三慮して以て國を營み、（一四七）熒惑他辰に次る。（一四八）魏顆亮に以て（一四九）治に從ひ、鬼（一五〇）回に亢して以て秦を斃す。（一五一）咎繇邁いて德を種き、德を樹てて（一五二）英六に懋なり。（一五三）桑末に夫の（一五四）根生を寄せ、卉既に凋んで已に育す。有言うて酬いざるはなし。又何に往くとして復らざらん。盍ぞ迹を遠ざけて以て聲を飛ばさざる。孰か時の蓄ふべしと謂ふ。仰いで首を矯げて以て遙に望めば、魂（一五五）懺惘として儔なし。區中の隘陋を逼しとし、將に北に度りて宣遊せんとす。積冰の（一五六）皚皚たるを行けば、

【一四六】景云云。呂氏春秋に宋ノ景公疾アリ、司馬子韋曰ク。熒惑（星名）心（星名）ヲ守ル、心ハ宋ノ分野ナリ、君之ニ當ル、若シ之ヲ祭ラバ相ニ移スベシト、公曰ク相ハ寡人ノ股肱ナリ、心腹ノ疾ヲ除キテ股肱ニ移シテ可ナランヤト、曰ク民ニ移スベシト、公曰ク民ハ國ヲナス所以ナリ、民ナケレバ何ヲ以テカ國ヲナサント、曰ク歲ニ移スベシト、公曰ク歲ハ民ヲ養フ所以ナリ、歲ミノラズンバ何ヲ以テカ民ヲ畜ハント、子韋曰ク君善言三アリ、熒惑必ズ三舍ヲ退カン、年ヲ延ブルコト二十一年ナラントとあり。

【一四七】熒惑は火星なり。辰は星の位なり。

【一四八】魏顆。左傳に初メ魏武子嬖妾アリ、武子疾アリ、顆ニ命ジテ曰ク、必ズ是妾ヲ嫁セヨト、疾甚シキ時則チ曰ク、必ズ殉セシメヨト、卒スルニ及ビ顆之ヲ嫁ス、輔氏ノ役ニ及ビ顆老人ノ草ヲ結ンデ以テ杜回ニ抗スルヲ見ル、回躓イテ顚ル。故ニ之ヲ獲タリ、夜夢ム、曰ク余ハ乃ガ嫁スル所ノ婦人ノ父ナリ、爾先人ノ治命ヲ用フ、余是ヲ以テ報ユルナリトとあり。

【一四九】治。治命、正しき命令。

【一五〇】回は秦の力士杜回。亢は抗なり。

【一五一】咎繇。皐陶に同じ。

【一五二】英六。地名。

【一五三】桑末。木の名。

【一五四】根生。寄生なり。

【一五五】懺惘。惘悵なり。

【一五六】皚皚。氷の厚き貌。

清泉沍りて流れず。寒風凄として其れ永く至り、(二五七)穹岫を拂つて (二五八)騷騷たり。(二五九)玄武殼中に縮り、(二六〇)騰蛇蜿りて自ら糾ひ、魚は鱗を矜てて淩に幷り、鳥は木に登りて條を失ふ。(二六一)太陰の屛室に坐し、慨として欲を含んで愁を增し、(二六二)高陽の寓を相るを怨み、顓頊の (二六三)幽に宅るを偭しとし、織路に (二六四)四裔に庸するも、斯と彼と其れ何ぞ寥らん。(二六五)寒門の絕垠を望み、余が緤を (二六六)不周に縱にす。

【大意】天の監視は甚だ明かなり。以て誠信仁德の人を祐く。湯王は身を潔くして天に禱りしかば、大福を蒙りて民を濟ひ、宋の景公は三慮して國を治めしかば、熒惑星も爲に其位を換へ、魏顆は誠信にして父の治命に從ひしかば、靈鬼來りて之を助け、遂に強秦を折くを得、皐陶務めて其德を布きしかば、禹其後を英六に封じ、桑末既に凋むも寄生の尙ほ茂るが如く、衆國已に滅ぶるも、英六獨り存せり。所謂積德の後必ず餘慶あるものにして、言うて酬いられざるはなく、往いて復らざるはなし。ああ吉凶定まらず、ただ道德に在るのみ。何ぞ遠遊して英聲を飛ばさざらん。時は逝き易くして蓄へ止むべからず。吾が意決せり。因つて首を擧げて遙に望めば、心惆悵して儔侶なきを悲む。乃ち

【二五七】穹岫。山峯なり。
【二五八】騷騷。風の聲。
【二五九】玄武。北方の神獸。
【二六〇】騰蛇。北方の獸なり。
【二六一】太陰は北方なり。屛室は蔽室なり。
【二六二】高陽は帝顓頊なり。寓は居なり。
【二六三】幽。北方の地。
【二六四】四裔は四方の遠地。庸は勞なり。
【二六五】寒門は北極の門なり。絕垠は絕遠の地。
【二六六】不周。山の名。

中國の陰陋を悲み、將に北に度りて徧く域中に遊ばんとす。北地寒冽、積氷堅く凍りて流れず。寒風山峰を拂つて騷騷たり。玄武騰蛇も甲殼の中に縮り、魚は鱗を立て鳥は木に集りて寒に苦む。余も亦此に坐して歔欷を增し、顓頊の此の小陋の地に居るを怨む。余四遠の地に往來すること織るが如く頗る勞す。然も皆留まるに足らず。此地と相愈るなし。是に於てか寒門を望んで轡を不周山に縱にす。

（二六七）迅猋潚として其れ我を騰り、鶩せて翩飄として禁せず。（二六八）谽谺の洞穴を越え、通川の（二六九）琳琳たるに漂ひ、（二七〇）重陰を經て寂寞たり、（二七一）墳羊の深潛を慜む。（二七二）荒忽を地底に追ひ、無形を軼ぎて上り浮び、（二七三）石密の闇野を出で、蹊の由る所を識らず。（二七四）燭龍を速きて炬を執らしめ、鍾山に過りて中ごろ休ひ、（二七五）瑤谿の赤岸を瞰、（二七六）祖江の劉されしを弔ひ、（二七七）王母を銀臺に聘し、（二七八）玉芝を羞めて以て飢を療す。（二七九）戴勝慭として其れ旣に

【二六七】迅猋。疾風なり。潚は疾き貌。

【二六八】谽谺。空大の貌。

【二六九】琳琳。深廣の貌。

【二七〇】重陰。地下なり。

【二七一】墳羊。土精の怪なり。國語に季桓子井ヲ穿チ、玉缶ノ如キモノヲ獲タリ、中ニ羊馬アリ、之ヲ仲尼ニ問ハシム、曰ク土ノ怪ヲ墳羊トイフ云云トとあり。

【二七二】荒忽。幽昧の貌。

【二七三】石密。山海經に密山是レ玄玉ヲ生ズ、黃帝密山ノ玉策ヲ取リテ之ヲ鍾山ノ陰ニ投ズとあり。此の石密疑ふらくは密山ならん。

【二七四】燭龍。鍾山の神なり。

【二七五】瑤谿。瑤岸ともいふ。

【二七六】祖江。人名、山海經ニ欽䲹祖江ヲ昆侖ノ陽ニ殺ス、帝乃チ鍾山ノ東ニ戮スとあり。

【二七七】王母。西王母なり、仙女の名。銀臺は西王母の居る所。

【二七八】玉芝。白芝ともいふ。靈草なり。

【二七九】戴勝。西王母を謂ふ。慭は笑ふ貌。

歡び、又余が行の遲きを誚る。(一八〇)太華の玉女を載せ、(一八一)洛浦の虙妃を召す。咸姣麗にして以て(一八二)蠱媚なるに、(一八三)嫮眼にして娥眉なるを增し、(一八四)訬婧の纎腰を舒べ、雜錯の(一八五)袿徽を揚げ、朱脣を離いて微笑し、顏(一八六)的礫として以て光を遺し、(一八七)環琨と(一八八)琛縭とを獻じ、厥好を申ぶるに(一八九)玄黃を以てす。色豔しくして賂美なりと雖も、志(一九〇)浩蕩として嘉せず。(一九一)雙材納れられざるを悲み、並に詩を詠じて淸歌す。歌に曰く、天地(一九二)烟熅、百卉葩を含み、鳴鶴頸を交へ、(一九三)鴡鳩相和す。(一九四)處子春を懷ひ、精魂囘り移る。如何ぞ(一九五)淑明にして、我を忘るること實に多きと。

【大意】風我を送りて其の行くこと輕疾なり。空大の穴を越え、廣深の淵に浮び、地下幽靜の界を經て土精を其の潛處に念ひ、荒忽無形を出でて上り行き、密山の野を過ぎて路の由るべきに迷ひ、山神を招いて炬を執らしめ、鍾山を過ぎて休息し、瑤岸を瞰て祖江の殺されしを弔ひ、崑崙山に至りて西王母を銀臺の中に聘し、白芝を進めて其饑を療すれば、西王母大に歡びて余が來るの遲きを誚る。因つて更に太華の神女と洛浦

【一八〇】太華は山の名。玉女は神女なり。
【一八一】洛浦は洛水の濱。虙妃は神女の名。
【一八二】蠱媚。美しき貌。
【一八三】嫮眼。好き目つき。
【一八四】訬婧。細腰の貌。
【一八五】袿徽。婦人の服なり。
【一八六】的礫。明なる貌。
【一八七】環琨。玉佩なり。
【一八八】琛縭。玉にて飾れる帶。
【一八九】玄黃。黑又は黃色の帛。
【一九〇】浩蕩。ほしいままなる貌。
【一九一】雙材。玉女及び虙妃をいふ。
【一九二】烟熅。氣の和ぐ貌。
【一九三】鴡鳩。鳥の名、みさご。
【一九四】處子。處女なり。
【一九五】淑明。淑は善なり。

の虙妃とを召取る。皆好麗にして艶美、細腰柳の如く雜錯の衣を纏ひ、朱唇を啓いて微笑し、玉顏光輝あり。余に贈るに玉珮と玉帶とを以てし、更に情好を表するに玄黄の帛を以てす。(前文の二女を崇岳に感ずとは是れなり。二女艶麗にして贈物美好なりと雖も、我が志浩蕩として敢て嘉しとせず。二女乃ち身の納れられざるを悲みて歌を詠ず。其歌に云く、天地烟熅として百草花を著け、鳴鶴は雌雄頸を交へ、鳴鳩は雌雄相和して鳴く。此陽春に際し吾豈思ふ所なきを得んや。精魂爲に轉動す。足下は善良淑明の人なり。何ぞ我を棄てて顧みざると。

將に答賦せんとして暇あらず、爰に駕を整へて亟に行き、(一九六)崑崙の巍巍たるを瞻、(一九七)滎河の洋洋たるに臨み、靈龜を伏せて以て坻を負はしめ、螭龍の(一九八)飛梁を亙し、(一九九)閬風の層城に登り、(二〇〇)不死を構へて牀となし、(二〇一)瑤蘂を屑いて以て糇となし、白水を斟んで以て漿となす。(二〇二)巫咸を抨して夢を占はしむ。乃ち貞吉の(二〇三)元符なり。(二〇四)令德を正中に滋くし、(二〇五)嘉秀を含んで以て敷をなす。既に(二〇六)穎を垂れて本を顧み、亦思を故居に要す。和靜に安んじて

【一九六】崑崙は山の名。巍巍は高き貌。史記禹本紀に河ハ崑崙ヨリ出ヅとあり。
【一九七】滎河。河の曲れるをいふ。洋洋は流るゝ貌。
【一九八】飛梁。浮橋なり。
【一九九】閬風。崑崙山の名。
【二〇〇】不死。崑崙山に不死樹あり。
【二〇一】瑤蘂。玉英なり。
【二〇二】巫咸。古の神巫なり。抨は使なり。
【二〇三】元符。よきしるし。
【二〇四】令德。美德なり。
【二〇五】嘉秀は善美なり。敷は布きひろまること。
【二〇六】穎。穗なり。

時に隨ふは、姑く（二〇七）純懿の廬る所なり。（二〇八）庶僚を戒むるに（二〇九）夙會を以てすれば、僉職に供して竝び迓ふ。（二一〇）豐隆は軯として其れ（二一一）震霆し、（二一二）列缺は曄として其れ夜を照し、（二一三）雲師は䨴として以て交集し、凍雨は（二一四）沛として其れ途に灑ぐ。（二一五）瑚輿を轙して（二一六）葩を樹て、（二一七）應龍を擾して以て輅に服く。百神（二一八）森として其れ備に從ひ、屯騎羅りて星のごとく布く。余が袂を振ひて車に就けば、脩劍（二一九）揭として以て（二二〇）低昂し、冠（二二一）嵒嵒として其れ蓋に映じ、佩（二二二）綝纚として以て（二二三）煇煌し、僕夫儼として其れ策を正し、（二二四）八乘騰りて（二二五）超驤し、（二二六）氛旄溶として以て（二二七）天旋し、（二二八）蜺旌飄として以て飛颺す。（二二九）軨軹を撫して還眄れば、心（二三〇）勺爍として其れ湯の若し。（二三一）上都の（二三二）赫戲たるを羨

【二〇七】純懿。純美なり。
【二〇八】庶僚。衆神なり、後の豐隆、列缺等をいふ。
【二〇九】夙會。早く集ること。
【二一〇】豐隆は雷神なり。軯は聲なり。
【二一一】震霆。霹靂なり。
【二一二】列缺。電光なり。曄は光る貌。
【二一三】雲師は雲の神。䨴は陰る貌。
【二一四】沛。雨の降り注ぐ貌。
【二一五】瑚輿は玉にて飾りし輿。轙は車を整ふること。
【二一六】葩。車蓋の金華なり。蔡邕獨斷に乘輿車ハ皆羽蓋金華爪ナリとあり。
【二一七】應龍。羽ある龍。
【二一八】森。衆き貌。

【二一九】揭。動く貌。
【二二〇】低昂。あがつたり、さがつたりすること。
【二二一】嵒嵒。高き貌。
【二二二】綝纚。盛飾の貌。
【二二三】煇煌。光る貌。
【二二四】八乘。八馬を以て車に駕するなり。
【二二五】超驤。躍りあがること。
【二二六】氛旄は氛氣を以て旗となすなり。溶は盛なる貌。
【二二七】天旋。天の回旋するが如きなり。
【二二八】蜺旌。虹の旗。
【二二九】軨軹。車牆の間の橫木。
【二三〇】勺爍。熱き貌。
【二三一】上都。天帝の居なり。
【二三二】赫戲。盛なる貌。

む。何ぞ故に迷ひて忘れざる（二三三）青琱を左にして以て（二三四）芝を韃て、（二三五）素威を右にして以て鉦を司らしめ、（二三六）長離を前にして羽を拂はしめ、後（二三七）水衡を玄冥に委ね、（二三八）箕伯に屬して以て風を函み、（二三九）澒溶を澄して淸をなさしめ、雲旗の（二四〇）離離たるを曳き（二四一）玉鸞の嚶嚶たるを鳴らし、淸霄を渉りて升遐り、（二四二）蠛蠓に浮んで上征く。（二四三）紛翼翼として以て徐に戻り、（二四四）焱回回として其れ靈を揚ぐ。

【大意】二女の歌に答へんとするに暇あらず、乃ち駕を整へて速に行き、崑崙山を仰ぎ河曲に臨み、靈龜をして洲を負はしめ、螭龍をして橋を作らしめ、閬風の巓に登り、不死樹を構へて牀となし、玉英を碎いて糧となし、白水を酌んで漿となし、巫咸をして木禾の夢を占はしむるに、貞吉の善符を得たり。曰く、木禾の夢、當に美德を發して正中の道をなし、善美を含んで世に敷くに宜し。禾は穗を垂れて根に向ふ。君子も亦故居を忘るべからず。宜しく和靜を以て自ら安んじ、時俗に順ふべし。是れ純美の居る所なりと。乃ち衆神を戒めて早く集らしむるに、皆よく其職

【二三三】青琱。青龍なり。
【二三四】芝。小蓋なり。
【二三五】素威。白虎なり。禮記に君行ケバ青龍ヲ左ニシ白虎ヲ右ニスとあり。
【二三六】長離。朱鳥なり。禮記に朱鳥ヲ前ニシテ玄武ヲ後ニスとあり。
【二三七】水衡は山澤を掌る官。玄冥は北方の神。
【二三八】箕伯。風の神。
【二三九】澒溶。混濁なり。
【二四〇】離離。飛ぶ貌。
【二四一】玉鸞はクツワの鈴。嚶嚶は聲なり。
【二四二】蠛蠓。遊氣なり。
【二四三】紛は盛なる貌。翼翼は行く貌。
【二四四】焱は火華なり。回回は光る貌。

に供して我を迎へ、雷神は聲を震ひ電光は夜を照し、雲神は雲を聚め、雨神は途に灑ぐ。因つて玉輿を裝ひて金華蓋を立て、龍を馴して車に駕すれば、衆神の扈從すること列星の如し。余是に於て袂を振ひ劍を動かし、高冠を戴き玉佩を帶びて車に乘れば、僕御鞭を正して八馬飛躍し、氛氣の麾、虹霓の旌、飛揚旋轉す。軾に憑りて舊鄕を回視すれば、余が心熱して湯の如し。（以下天路の通ずべく、玉階の攀づべきを言ふ。前文の天蓋し高くして澤となる四句の意に應ず。亦大鳥塵外に天を瞥るの象あり）已に上都の盛榮を慕ひて天上の遊を思ふ。何ぞ故舊に迷ひて忘れざる。乃ち左に青龍をして芝蓋を竪てしめ、右に白虎をして鉦鼓を主らしめ、朱鳥を前にして羽毛を拂はしめ、玄冥に命ずるに水衡の職を以てし、風師をして其風を懷き、混濁の氣を澄まして清冷ならしめ、雲旗を曳き玉鸞を鳴らして天上に上り行き、火華の盛なるが如く其神靈を揚ぐ。

（二四五）帝閽を叫んで扉を闢かしめ、（二四六）天皇に瓊宮に覲え、（二四七）廣樂の九奏を聆く、展に（二四八）洩洩として以て（二四九）肜肜たり。治亂を（二五〇）律均に考へ、意に始を建てて終を思ふ。惟れ（二五一）般逸の斁くなき、樂往

【二四五】帝閽。天帝の門番。
【二四六】天皇は天帝なり。瓊宮は天帝の宮なり。
【二四七】廣樂。樂の名。樂は九奏を以て一成となす。
【二四八】洩洩。和樂の貌。
【二四九】肜肜。和樂の貌。
【二五〇】律均。音律を調ふる器。琴道に琴ハ七絃、是ヲ以テ萬物ニ通ジテ治亂ヲ考フとあり。
【二五一】般逸。逸樂なり。

いて哀來らんことを懼る。(二五二)素女絃を撫して餘音あり。(二五三)太容吟じて曰く念へやと。既に(二五四)溢を防いで志を靖にし、我が暇に迨んで以て(二五五)翺翔す。(二五六)紫宮の肅肅たるを出で(二五七)太微の閬閬たるに集り、(二五八)王良に命じて(二五九)策駟を掌らしめ、(二六〇)高閣の將將たるを踰え、(二六一)罔車の幕幕たるを建て、(二六二)青林の芒芒たるに獵り、(二六三)威弧の拔剌たるを彎き、(二六四)嶓冢の封狼を射、(二六五)壁壘を北落に觀、(二六六)河鼓の磅硠たるを伐ち、(二六七)天潢の汎汎たるに乘り、(二六八)雲漢の湯湯たるに浮び、(二六九)招搖攝提に倚りて以て低回劉流し、(二七〇)二紀五緯の(二七一)綢繆遹皇たるを察る。(二七二)偃蹇夭矯、(二七三)婉として(二七四)連卷たり。(二七五)雜沓叢

【二五二】素女。神女なり。史記に黄帝素女ヲシテ五十絃ノ瑟ヲ鼓セシムとあり。
【二五三】太容。黄帝の時の樂師也。
【二五四】溢。逸樂に耽ること。
【二五五】翺翔。浮遊なり。
【二五六】紫宮。星の名、天帝此に居る。
【二五七】太微は星の名。閬閬は高き貌。
【二五八】王良。古の善御者なり、上りて星となり天馬を司る。
【二五九】策駟。駟は天駟星なり。
【二六〇】高閣は星の名。將將は高き貌。
【二六一】罔車は畢星なり。幕幕は盛なる貌。
【二六二】青林は天苑星なり。芒芒は廣大なる貌。
【二六三】威弧は星の名。拔剌は弓を彎く貌。
【二六四】嶓冢。山の名。此山の上を封狼星となす。
【二六五】壁壘。營壁星と中壘星。北落も星の名。
【二六六】河鼓は星の名。磅硠は鼓の聲なり。
【二六七】天潢は天津なり。汎汎は浮ぶ貌。
【二六八】雲漢、天河、あまのがは。湯湯は流るる貌。
【二六九】招搖、攝提。皆星の名。低回劉流は環繞すること。
【二七〇】二紀は日月なり。五緯は五星なり。
【二七一】綢繆は連續なり。遹皇は行く貌。
【二七二】偃蹇は驕傲の貌。夭矯は自ら恣なる貌。
【二七三】婉。跳るなり。音バン。
【二七四】連卷。長曲の貌。
【二七五】雜沓叢顇。衆多の貌。

頽、颯として以て（二七六）方驤たり。（二七七）緎汨飂淚、沛として以て（二七八）罔象たり。（二七九）爛漫麗靡、（二八〇）藐として以て（二八一）迭逷たり。驚雷の（二八二）硠礚たるを凌ぎ、狂電の（二八三）淫裔たるを弄び、（二八四）痝鴻を宕冥に踰え、（二八五）倒景を貫いて高く厲る。

【大意】既に天帝の宮に至り、守門者を呼んで門扉を開かしめ、乃ち天帝に見え、天樂の和樂なるを聽き、治亂の聲を考へ心に始終を思ふ。夫れ逸樂に耽りて厭くことなければ、樂盡きて哀至るを恐る。素女絃を鼓して餘聲未だ絶えざるに、太容歎じて我をして逸樂を戒愼せしむ。既に耽樂を防ぎて其志を安んじ、我が閑暇に及んで浮遊せんとし、紫微宮を出でて太微宮に入り、王良をして馬を御せしめ、高閣の高崇なるに登り、罔車を建てて青林に獵し、威弧を彎いて封狼を射、壁壘を北落に見、河鼓を伐ち、天津を渡りて天河に浮び、招搖攝提の二星に倚りて日月五星の運行するを觀るに、乍ち合し乍ち離れ、或は疾く或は遲く、分散過越す。我既に星辰を遊涉し更に雷を凌ぎ電を弄し、天氣を越えて高く擧る。

（二八六）廓盪盪として其れ涯なし。乃ち今天外を窺ふ。（二八七）開陽に據りて（二八八）頫眡し、舊鄕の（二八九）暗藹た

【二七六】方驤。忽ち離るる貌。
【二七七】緎汨飂淚。疾速の貌。
【二七八】罔象。ほのかなる貌。
【二七九】爛漫麗靡。分散の貌。
【二八〇】藐。遠き貌。
【二八一】迭逷。過突なり。
【二八二】硠礚。雷聲なり。
【二八三】淫裔。電光の貌。
【二八四】痝鴻は天の高氣なり。宕冥は窈冥なり。
【二八五】倒景。日下に在り、其光上を照すなり。
【二八六】廓盪盪。ほがらかなる貌。
【二八七】開陽。北斗の第六星の名。
【二八八】頫眡。俯視なり。
【二八九】暗藹。小暗き貌。

るに臨み、離居の心を勞するを悲み、情(二九〇)悁悁として歸らんとを思ひ、魂眷眷として屢顧み、馬轅に倚りて徘徊す。遊娯して以て婾樂すと雖も、豈愁慕して懷ふべけんや。(二九一)閶闔を出でて天途を降り、(二九二)猋忽に乘りて(二九三)虛無に馳す。雲(二九四)菲菲として余が輪を繞り、風(二九五)眇眇として余が旗を震ひ、繽として(二九六)連翩し紛として(二九七)晻曖たり、(二九八)儵眩眃として(二九九)常閭に反る。疇昔の(三〇〇)逸豫を收め、淫放の(三〇一)遐心を卷き、初服の(三〇二)娑娑たるを脩め、余が佩の(三〇三)參參たるを長うす。文章(三〇四)奐として以て(三〇五)粲爛たり、美(三〇六)紛紜として以て風に從ふ。(三〇七)六藝の珍駕に御し、道德の平林に遊び、典籍を結んで罟となし、儒墨を敺りて禽となし、陰陽の變化を玩び、雅頌の(三〇八)徽音を詠じ、(三〇九)曾氏の歸耕を嘉し、(三一〇)歷阪の嶔崟たるを慕ふ。夙夜に恭んで貳せず、終始の服する所を固くし、夕まで(三一一)惕若し

【二九〇】悁悁。憂ふる貌。
【二九一】閶闔。天門なり。
【二九二】猋忽。風なり。
【二九三】虛無。空なり。
【二九四】菲菲。雲の貌。
【二九五】眇眇。風の貌。
【二九六】連翩。飜る貌。
【二九七】晻曖。暗き貌。
【二九八】儵眩眃。疾き貌。
【二九九】常閭。舊居なり。
【三〇〇】逸豫。遊樂なり。
【三〇一】遐心。遠志なり。
【三〇二】娑娑。盛なる貌。
【三〇三】參參。盛なる貌。
【三〇四】奐。光りかがやくこと。
【三〇五】粲爛。光明の貌。
【三〇六】紛紜。相雜る貌。
【三〇七】六藝。禮樂射御書數なり。
【三〇八】徽音。よき音樂。
【三〇九】曾氏。琴操に、曾子孔子ニ事フルコト十有餘年、晨ニ覺メ眷然トシテ二親年衰ヘ養ノ備ハラザルヲ念ヒ、是ニ於テ琴ヲ援イテ之ヲ鼓シテ曰ク、歔欷シテ歸耕ス云云トあり。
【三一〇】歷阪。歷山なり、舜の耕し地。嶔崟は高き貌。
【三一一】惕若。懼る貌。易經に君子ハ夕マデ惕若スレバ厲ケレドモ咎ナシとあり。

阨みて以て愆を省み、余が身の未だ勑はざるを懼る。苟も中情にして端直ならば、吾を知るなしとも惡ぢず。默して無爲にして以て志を凝らし、仁義と與に逍遙せん。(三二)戸を出でずして天下を知る。何ぞ必しも遠きを歷て以て(三三)劬勞せん。

【大意】既に天外に至り、開陽星に據りて俯視すれば、舊鄕暗然として纔に見ゆ。乃ち己の離居して心を勞するを悲み、一たび舊鄕に歸らんことを思ひ、馬も亦徘徊顧望して進まず。ああ我れ遠遊娛樂すと雖も、今敢て之を懷はず、却つて舊鄕を愁慕するの情に堪へず。乃ち天門を去り空に從つて下れば、雲は我が車を繞り、風は我が旗を震ひ、忽ちにして舊鄕に歸著す。因つて從來の放心を收め、我が初時の服佩を脩め、專ら道德の修養を期す。經籍を結んで網となし、儒墨の道を驅りて禽獸となし、之を獲得せんことを冀ひ、陰陽變化の理を玩び、雅頌の美音を詠じ、曾參の泰山に耕し、虞舜の歷山に耕せるに倣ひ、夙夜二心なく始終の服行する所を固くし、夕まで戒愼して己の愆を省み、我が身の未だ整はざるを懼る。苟も我が中情にして端正ならば、人我を知るなしと雖も恥づるに足らず。如かず志を固くして仁義を行はんには。戸を出でざるも天下知るべし。何ぞ勞苦して遠遊するを須ひんや。(是れ上文の母氏に歸して後寧しの意なり)

【三二】戸云云。老子に戸ヲ出デズシテ天下ヲ知ルとあり。
【三三】劬勞。苦勞に同じ。

(二二四)系に曰く、天長く地遠くして歳留まらず。(二二五)河の清まんことを俟ちて祇に憂を懷く。願くは遠く渡りて以て自ら娛むを得んと、上下常なく(二二六)六區を窮め、超踰騰躍して世俗を絕ち、飄颻として神のごとく擧りて所欲を逞しうするも、天は階るべからず仙夫稀なり。(二二七)栢舟悄悄として(二二八)飛ばざるを吝む。(二二九)松喬高く峙ちて孰か能く離かん。精を結びて遠遊すれば心をして携れしむ。志を迴らし(二三〇)朅來して(二三一)玄謀に從ふ。我が求むる所を獲ば夫れ何をか思はん。

【大意】系に曰く、天地は長久にして人は老い易し。明時は容易に來らず。之を望むは黃河の清まんことを待つが如し。ただ我をして愁を懷かしむるのみ。因つて六合に周遊せんことを思ひ、世俗を棄てて仙道を修めんとせるも、天には升るべからず、登仙する者亦稀なり。我が身は恰も栢舟の悄悄たるが如く、翼を奮つて去る能はざるを恨むのみ。赤松子、王子喬の輩、高く物外に立てるも、往いて之に就くべからず。精神を結束し、之に從つて仙遊せんとすれば、我が心をして乖離せしむ。因つて我が志を迴らして歸り來

【二二四】系。繫なり、重ねて賦の意を繫くるなり。
【二二五】河。黃河なり。黃河は千年に一たび清む、以て明時に喩ふ。
【二二六】六區。上下四方なり。
【二二七】栢舟。詩經邶風の篇名。悄悄は憂ふる貌。序に仁ニシテ不遇ナルヲ言フとあり。
【二二八】飛ばず。飛ぶ能はざるなり。栢舟の詩に靜ニ言ニ之ヲ思ヒテ、奮飛スル能ハズとあり。
【二二九】松喬。赤松子、王子喬、共に仙人の名。
【二三〇】朅來。去つて來るなり。
【二三一】玄謀。聖人の道。

り、玄聖の道を行はんと期す。我が所期を全うするを得ば、我復た何ぞ思慮せんや。

(一)歸田の賦

張平子

都邑に遊んで以て永久なるも、(二)明略の以て時を佐くるなく、徒に(三)川に臨んで魚を羨み、(四)河の清まんことを俟てども未だ期あらず。(五)蔡子の慷慨に感じ、唐生に從つて以て疑を決す。諒に天道の微昧なる、漁父を追ひて以て嬉を同うし、(六)埃塵を超えて以て遐く逝き、世事と長く辭す。是に於て仲春(七)令月、時和し氣清み、(八)原隰鬱茂し、百草(九)滋榮し、(一〇)王雎翼を鼓し、(一一)倉庚

【一】歸田。張衡仕へて志を得ず、田里に歸らんと欲す。因つて此賦を作る。

【二】明略。よき謀なり。

【三】川に臨む。淮南子に河ニ臨ンデ魚ヲ羨ムハ家ニ歸リテ網ヲ織ルニ如カズとあり。

【四】河。黄河なり。黄河の清むを以て明時に喩ふ。

【五】蔡子。史記に蔡澤諸侯ニ遊學シテ不過ナリ、唐擧ニ從ツテ相セシム、擧熟視シテ曰ク、先生ハ偈鼻戴肩魋顔蹙頞ナリ、吾聞ク聖人ハ相セズト、殆ド先生カト、澤擧ノ戯ルルヲ知リ乃チ曰ク、富貴ハ吾ガ自ラ取ル所ナリ、吾ガ知ラザル所ノモノハ壽ナリ、願クハ之ヲ聞カント、擧曰ク先生ノ壽ハ今ヨリ以往四十三歳ナリト、澤笑ツテ之ニ謝ス、後范雎ニ代リテ秦ノ相トナルとあり。慷慨は志を得ずして憤ること。

【六】埃塵。塵世なり。

【七】令月。令は善なり。

【八】原隰。高くして平なるを原といひ、低くして平なるを隰といふ。

【九】滋榮。花の盛に開くこと。

【一〇】王雎。雎鳩なり、みさご。

【一一】倉庚。黄鸝なり、鳥の名なり。

哀み鳴き、頸を交へて（一二）頡頏し、（一三）關關嚶嚶たり。焉に於て逍遙して聊か以て、情を娛ましむ。爾して乃ち龍のごとく（一四）方澤に吟じ、虎のごとく山丘に嘯き、仰いで（一五）纖繳を飛ばし、俯して長流に釣る。矢に觸れて斃れ、餌を貪りて鉤を呑む。雲間の（一六）逸禽を落し、淵沈の（一七）魦鰡を懸く。時に（一八）曜靈景を俄け、繼ぐに（一九）望舒を以てす。（二〇）盤遊の至樂を極め、日夕なりと雖も劬るを忘る。（二一）老氏の遺誡に感じ、將に駕を（二二）蓬廬に廻らさんとす。（二三）五絃の妙指を彈じ、周孔の圖書を詠じ、翰墨を揮ひて以て（二四）藻を奮ひ、（二五）三皇の軌模を陳ぶ。苟も心を域外に縱にせば、安んぞ榮辱の如く所を知らんや。

【大意】余京都に來りて久しきを歷たるも、時を救ふの善謀なし。徒に榮祿を羨むは退いて其德を脩むるに如かず。明時の至るを待てども、固より未だ期あらず。乃ち蔡澤に倣ひ唐擧に就いて、身の吉凶を判斷せしむるも、天道は幽昧にして知るべからず。且く漁釣の徒と樂を川澤に同うし、塵世を棄てて復た顧みざらんとす。時正に仲春にして天氣清和なり。原野には草木繁茂し皆美花を著け、百鳥和鳴す。因つて逍遙自適し、

【一二】頡頏。飛んで上下すること。
【一三】關關嚶嚶。和鳴すること。
【一四】方澤。大澤なり。
【一五】纖繳。いぐるみ。
【一六】逸禽。飛鳥なり。
【一七】魦鰡。魚の名。
【一八】曜靈。日なり。
【一九】望舒。月なり。
【二〇】盤遊。遊樂なり。
【二一】老氏。老子に馳騁田獵ハ人心ヲシテ發狂セシムとあり。
【二二】蓬廬。茅屋なり。張衡已の家をいふ。
【二三】五絃。琴なり。
【二四】藻。文章なり。
【二五】三皇。伏犧、神農、黃帝をいふ。軌模は法則なり。

大澤山丘に吟嘯し、仰いで射、俯して釣る。鳥は矢に中りて斃れ、魚は餌を貪りて鉤を呑む。日西に傾いて月之に代るも、身の疲勞を忘れて遊樂を事とす。忽ち老子の訓戒を感じ、駕を回らして家に歸る。乃ち古人の道を慕ひ、五絃の琴を彈じ、周公孔子の書を讀み、筆を揮つて文を作り、三皇の道德を述ぶ。苟も心を世外に縱にし、榮辱の身に及ぶを忘る。

閑居の賦竝序

潘安仁

(一)岳嘗て(二)汲黯の傳を讀み、(三)司馬安四たび(四)九卿に至り、而して(五)良史之に題するに、(六)巧宦の目を以てせるに至り、未だ嘗て慨然として書を廢てて歎ぜずんばあらず。曰く嗟乎巧は誠に之れあり、拙も亦宜しく(七)然るべし。顧ふに常に以爲らく、士の生るるや、至聖(八)軌なく(九)微妙玄通の者にあらずんば、則ち必ず功を立て事を立て、(一〇)當年の用を効す。是を以て、忠を資り信を履み以て德に進み、辭を修め誠を立て以て業

【一】岳。潘岳、字は安仁。
【二】汲黯。人名。史記の汲黯傳なり。
【三】司馬安。汲黯の姉の子なり。
【四】九卿。官名。
【五】良史。史記の著者、司馬遷を指す。
【六】巧宦。仕宦して夤緣に善き者をいふ。
【七】然るべし。之れあるべきをいふ。
【八】軌。迹なり。老子に善行ハ轍迹ナシとあり。
【九】微妙。老子に古ノ善ク士タル者ハ微妙玄通シ、深クシテ識ルベカラズとあり。
【一〇】當年。當時に同じ。

に居ると。僕少くして（一一）郷曲の譽を竊み、（一二）司空太尉の命を忝くす。奉ふる所の主は、卽ち太宰魯の武公其人なり。（一三）秀才に擧げられて（一四）郎となる。（一五）世祖武皇帝に事ふるに逮び、（一六）河陽懷の令、尙書郞、廷尉平となる。今の天子（一七）諒闇の際、（一八）太傅の主簿を領す。（一九）府主誅せられ、名を除かれて民となる。俄にして官を復し、長安の令に（二〇）除せられ、博士に遷る。未だ召し拜せられざるに親疾む。輒ち官を去りて免ず。

（二一）弱冠より（二二）知命の年に涉るまで、八たび官を徙され、一たび階を進められ、再び免ぜられ、一たび名を除かれ、一たび職に拜せられず、遷さるること三たびのみ。（二三）通塞遇ありと雖も、抑も亦（二四）拙者の效なり。昔（二五）通人和長輿の余を論ずるや、固より（二六）多を用ふるに拙しと謂へり。多と稱するは則ち吾豈敢てせんや。拙しと言へるは信に徵あり。方今（二七）俊乂官に在り、（二八）百

【一一】鄉曲。郷黨なり。
【一二】司空、太尉。共に官名なり。賈充魯公に封ぜられ、司空となり太尉に轉じ、薨じて太宰を贈り武公と諡せらる。
【一三】秀才。科目の名。
【一四】郎。官名。
【一五】世祖。晉の武帝。
【一六】河陽、懷。共に縣の名。縣の長官を令といふ。以下皆官名。
【一七】諒闇。今の天子卽ち惠帝の武帝の喪に服せること。
【一八】太傅。官名。楊駿太傅となり、岳を擧げて主簿となす。
【一九】府主。太傅楊駿なり。
【二〇】除。任ぜられしこと。
【二一】弱冠。二十歲をいふ。
【二二】知命。五十歲をいふ。論語に五十ニシテ天命ヲ知ルとあり。
【二三】通塞。窮達といふが如し。遇は命といふが如し。
【二四】拙者。岳の意、司馬安を以て巧となし、自ら以て拙となすなり。
【二五】通人。道理に通達せる人。和嶠、字は長輿。
【二六】多。多才多藝なり。
【二七】俊乂。俊傑なり。
【二八】百工。百官なり。

工惟れ時あり。拙き者は以て意を寵榮の事に絶つべし。(二九)太夫人堂に在りて羸老の疾あり。尙ほ何ぞ能く膝下の(三〇)色養を違り、(三一)屑屑として(三二)斗筲の役に從はんや。是に於て(三三)止足の分を覽、(三四)浮雲の志を庶ひ、室を築き樹を種ゑ、逍遙自得す。池沼は以て漁釣するに足り、(三五)春稅は以て耕に代ふるに足る。園に灌ぎ蔬を粥ぎ、以て朝夕の膳に供し、羊を牧し酪を酤り、以て(三六)伏臘の費を俟つ。(三七)孝か惟れ孝、兄弟に友なり。此れ亦拙き者の政を爲すなり。乃ち閑居の賦を作り、以て事を歌ひ情を遂ぐ。其辭に曰く、

(三八)墳素の長圃に傲り、先哲の高衢に步す。吾が顏云に厚しと雖も、猶ほ內に(三九)甯蘧に愧づ。道あれども吾仕へず、道なきも吾愚ならず。何ぞ巧智の足らずして、拙艱の餘あるや。是に於て退い

【二九】太夫人。岳の母をいふ。堂に在りとは生存せるをいふ。

【三〇】色養。顏色を和げて親に事ふること。

【三一】屑屑。區區なり。

【三二】斗筲の役。小官をいふ。

【三三】止足。老子に足ルヲ知レバ辱メラレズ、止ルヲ知レバ殆カラズとあり。

【三四】浮雲。論語に不義ニシテ富ミ且ツ貴キハ、我ニ於テ浮雲ノ如シとあり。

【三五】春稅。粟を舂いて米となし、其利を稅し、以て耕に代ふるなり。

【三六】伏臘。夏冬なり。

【三七】孝云云。論語に或人孔子ニ謂ツテ曰ク、子奚ゾ政ヲ爲サザルト、子曰ク、書ニ云ク孝カ惟レ孝、兄弟ニ友ニ、有政ニ施スト、是亦政ヲ爲スナリとあり。

【三八】墳素。左傳に左史倚相ヨク三墳五典八索九丘ヲ讀ムとあり。賈逵曰く、三墳ハ三皇ノ書ナリ、八索ハ素王ノ法ナリと。

【三九】甯蘧。論語に甯武子、邦道アレバ則チ知、邦道ナケレバ則チ愚とあり。又蘧伯玉ハ邦道アレバ則チ仕ヘ、邦道ナケレバ則チ卷イテ之ヲ懷ニスベシとあり。

て（四〇）洛の涘に閑居し、身（四一）逸民に齊く、名下士に綴る。京に陪し（四二）伊に泝ひ、郊に面し市を後にす。（四三）浮梁黝として以て徑に度り、（四四）靈臺傑として其れ高く峙つ。天文の秘奥を窺ひ、人事の終始を究む。（四五）其西には則ち（四六）元戎禁營玄模綠徽あり。（四七）谿子巨黍絭を異にし（四八）機を同うし、（四九）礮石雷のごとく駭き、激矢蝱のごとく飛び、以て先行を啓き、我が皇威を耀かす。其東には則ち（五〇）明堂辟雍清穆敞閑なるあり。（五一）環林縈映し、圓海廻淵し、追孝を聿て以て父を嚴し、（五二）文考を宗んで以て天に配し、聖敬を祗んで以て順を明にし、（五三）更老を養つて以て年を崇ぶ。若し乃ち冬に背き春に涉り、陰謝り陽施せば、天子（五四）柴燎に事あり、以て祖を（五五）郊して義を展べ、鈞天の廣樂を張り、千乘の萬騎を備へ、服（五六）振振として以て玄を齊うし、管（五七）啾啾として竝び吹き、（五八）煌煌乎たり、（五九）隱隱乎たり、茲れ禮

【四〇】洛。洛水、川の名。
【四一】逸民。隱逸の人。
【四二】伊。伊水、川の名。
【四三】浮梁は浮橋なり。黝は長き貌。
【四四】靈臺。臺の名、天子候を占ふの所。傑は特立の貌。
【四五】其西。岳が家の西。
【四六】元戎禁營。近衞の兵營。玄模は黑き幕、綠徽は綠旗なり。
【四七】谿子、巨黍。弩弓の名。絭は箭を發する處なり。
【四八】機。弩牙なり。
【四九】礮石。拋石なり。
【五〇】明堂は天子政を布く宮。辟雍は國老を養ふの宮。清穆は深遠なり。敞閑は廣靜なり。
【五一】環林、圓海。明堂辟雍を圍繞せる池及び林。
【五二】文考。文德ある祖先。
【五三】更老。三老五更なり、長老なり。
【五四】柴燎。柴を燒いて祭ること。
【五五】郊。祭ること。
【五六】振振。威ある貌。
【五七】啾啾。笛の聲。
【五八】煌煌。光明なり。
【五九】隱隱。盛なる貌。

容の壯觀にして、王制の巨麗なり。兩學齊く列り、雙宇一の如く、右には(六〇)國胄を延き、左には良逸を納れ、(六一)祁祁たる生徒、濟濟たる儒術、或は之堂に升り、或は之室に入る。敎に常師なく、道在ればば則ち是なり。故に(六二)髦士紱を投じ、名王(六三)璽を懷にす。訓ふること風の行くが若く、應ずること草の靡くが如し。此れ(六四)里仁の美をなす所以にして、(六五)孟母の三たび徙れる所以なり。

【大意】余は三墳の書、素王の法を以て園圃となし、常に其中に嘯傲し、先哲の大道を倚むるを以て業となす。たとひ厚顏なりと雖も寗武子、蘧伯玉の事を懷ひて、內に自ら愧づるあり。天下に道あるも進仕する能はず、天下に道なきも佯りて自ら愚にする能はず。是れ巧智足らずして、拙艱餘あればなり。乃ち退いて洛水の涯に閑居す。此地京師に接し、伊水に向ひ、郊に面し市を後にし、浮橋靈臺皆其附近に在り。天子此臺に於て天文を觀測し以て人事の興亡を知る。宅西には近衛の兵營あり。玄幕を張り綠旗を揭げ、弩弓を列ね、先行して我が皇威を耀か

【六〇】國胄。國の冑子。
【六一】祁祁、濟濟。禮義の中を得たる貌。
【六二】髦士は俊秀の士。紱は綬なり。
【六三】璽。印なり。
【六四】里仁。論語に里ハ仁ヲ美トナス云云とあり。
【六五】孟母。孟子の母。列女傳に孟母ノ舍墓ニ近シ、孟子嬉戲スルニ墓間ノ事ヲナス、孟母曰ク、此レ子ヲ居ク所以ノ處ニアラズト、乃チ去リテ市ノ傍ニ舍ス、其子嬉戲スルニ賈衒ヲナス、孟母又曰ク、此レ子ヲ居ク所以ノ處ニアラズト、乃チ學宮ノ傍ニ舍ス、其子嬉戲スルニ俎豆ヲ設ケ、進退揖讓ス、孟母曰ク、此レ眞ニ以テ子ヲ居クベシト、遂ニ之ニ居ルとあり。

す。宅東には明堂辟雍あり、深遠にして廣靜なり、林木池水之を圍繞す。天子此堂に升り、父祖を祭りて天に配饗し、以て順敬を天下に明にし、養老の禮を擧げて年齒を崇ぶ。冬去り春來り、陰氣退きて陽氣升るや、天子祖宗を祭祀して禮義を展べ、天樂を張り萬騎を列ね、軍服振振として黒く、管絃啾啾として鳴る。これ王者禮容の壯觀なり。又國學大學の二學、相對して立ち、國學には冑子を教へ、大學には賢良を教ふ。教ふるに定師なく、道の存する者を以て師となす。故に俊傑の士、名譽ある王も印綬を投棄懷藏して來り學び、其教訓に應ずること風の草を靡かすが如し。此れ所謂仁里にして孟母の遷り住むべき地なり。

爰に我が居を定め、室を築き池を穿つ。長楊沼に映じ、芳枳籬に樹ち、遊鱗(六六)瀺灂として(六七)菡萏敷披し、竹木(六八)蓊藹として靈果參差たり。(六九)張公が大谷の梨、(七〇)梁侯が烏椑の柹、(七一)周文が弱枝の棗、(七二)房陵の朱仲が李、畢く殖ゑざるはなく、(七三)三桃は櫻胡の別を表し、(七四)二柰は丹白の色を曜し、石榴蒲桃の珍、(七五)磊落として其側に(七六)蔓衍し、(七七)梅杏郁棣の屬、

【六六】瀺灂。出沒する貌。
【六七】菡萏は蓮花なり。敷披は開くこと。
【六八】蓊藹。茂る貌。
【六九】張公。洛陽の北芒山に張公の夏梨あり。
【七〇】梁侯。梁國侯の家に烏椑柹あり。
【七一】周文。周の文王の時、弱枝の棗あり。
【七二】房陵。地名。房陵に朱仲といふ者あり。家に縹李あり。
【七三】三桃。侯桃、櫻桃、胡桃なり。
【七四】二柰。柰はカラナシ。赤白の二色あり。
【七五】磊落。衆き貌。
【七六】蔓衍。長きこと。
【七七】梅杏。以下皆果の名。

繁榮麗藻を之れ飾り、華實照爛し、言の極むる能はざる所なり。菜は則ち葱韮蒜芋靑筍紫薑、堇薺甘旨にして、蓼荾芬芳なり。(七八)蘘荷陰に依り(七九)時藿陽に向ひ、綠葵露を含み白薤霜を負ふ。是に於て凜秋に暑退き、熙春に寒往き、微雨新に晴れ、六合淸朗なり。太夫人乃ち板輿に御り輕軒に升り、遠く王畿を覽、近く家園を周る。體は行くを以て和ぎ、藥は勞を以て宣び、(八〇)嘗膳載ち加はり、舊痾痊ゆるあり。長筵を席きて(八一)孫子を列ね、柳陰を垂れ、車軌を結び、陸には(八二)紫房を摘み、水には(八三)赬鯉を挂け、或は林に宴し、或は(八四)汜に禊す。(八五)昆弟班白兒童稚齒、萬壽を稱して以て觴を獻じ、咸(八六)一は懼れて一は喜ぶ。壽觴擧り、慈顏和ぐ。(八七)浮杯樂飮し(八八)絲竹駢羅し、足を頓して起舞し、音を抗げて高歌す。人生安樂ならば、孰か(八九)其他を知らん。退いて(九〇)己に求めて自ら省るに、信に(九一)用薄くして才劣し。(九二)周任の格言を奉じ、敢て力を陳べて列に

【七八】蘘荷。菜の名。
【七九】時藿。豆葉なり。
【八〇】嘗膳。食膳なり。
【八一】孫子。子孫なり。
【八二】紫房。紫の果實。
【八三】赬鯉。赤き鯉。
【八四】汜。水岸なり。
【八五】昆弟は兄弟。班白は白毛まじりの老人。稚齒は幼小也。
【八六】一は懼。論語に子曰ク、父母ノ年ハ知ラザルベカラズ一ハ則チ以テ喜ビ、一ハ則チ以テ懼ルとあり。
【八七】浮杯。流杯なり。
【八八】絲竹は絃管なり。駢羅は並列なり。
【八九】其他。他事なり。榮貴なり。
【九〇】己に求。論語に孔子曰ク君子ハコレヲ己ニ求ムとあり。
【九一】用。功用なり。
【九二】周任。人名。論語に孔子曰ク、周任言ヘルアリ曰ク、力ヲ陳ベテ列ニ就キ、不能者ハ止ムとあり。

就かんや。幾んど陋身の保たざる、尚ほ奚ぞ明哲に擬せんや。〔九三〕衆妙を仰いで思を絕ち、終に〔九四〕優游して以て拙を養ふ。

【大意】此に我が家居を定め、室を築き池を掘る。楊柳は池水に映じ、芳枳は籬に立ち、游魚出沒し蓮花盛に開き、竹木繁茂し果實纍纍たり。其種類多樣にして其色亦一ならず。蔬菜亦極めて多く、或は陰地に生じ或は陽光に向ふ。春秋著退き寒去るの時、微雨新に晴れて、天氣淸朗なるや、母氏輕車に乘りて郊野に行き、家園に遊び、其體を和し以て其藥を宣べ、稍其食膳を加へて宿痾痊ゆるあり。或は席を敷きて子孫を列ね、或は車を柳陰に駐め、陸には果實を摘み水には鯉魚を釣り、林間に宴し水涯に祓す。長幼共に萬歲を祝して壽杯を獻じ、衰老を見ては懼れ、壽考を見ては喜ぶ。老顏乃ち和ぎ怡ぶ。是に於て擧家杯を飛ばして飮樂し管絃を奏し、頓足して舞ひ聲を抗げて歌ふ。已に此安樂を得たり。何ぞ榮貴を冀はんや。退いて自ら省るに、能薄くして才拙なり。周任の格言に遵ひ、敢て高位に就くをなさず。我が身殆ど保つ能はず。何ぞ古の明哲に比せんや。道を慕ひて俗念を絕ち、以て一身を養ふのみ。

【九三】衆妙。道をいふ。老子に玄ノ又玄、衆妙ノ門とあり。
【九四】優游。自得の貌。

哀傷

○長門の賦並序

司馬長卿

(一)孝武皇帝の(二)陳皇后、時に(三)幸を得て頗る妬む。別に長門宮に在りて愁悶悲思す。蜀郡成都の司馬相如が天下に工に文を爲ると聞き、黄金百斤を奉じて、相如(四)文君の爲に酒を取り、因つて悲愁を解くの辭を干む。而して相如、文を爲りて以て主上を悟す。皇后復た幸を得たり。其辭に曰く、

夫れ何ぞ(五)一佳人、歩して逍遙して以て自ら虞り、魂(六)踰佚して返らず、形枯槁して獨居す。言ふ(七)我れ朝に往いて暮に來らんと。飲食樂んで(八)人を忘れ、心(九)慊移して故を省ず、交意を得て相親む。伊れ予が志の慢愚なる。(一〇)貞愨の歡心を懷く。願くは問を賜りて自ら進み、君の玉音を尙るを得んと。虛言を奉じて誠を望み、城南の(一一)離宮に期す。(一二)薄具を脩めて自ら設くるも、君曾て幸臨するを肯せず(一三)廓として獨り潛れて精を專にすれば、天飄飄として

(一)孝武。漢の武帝。
(二)陳皇后。皇后陳氏。
(三)幸。君寵なり。
(四)文君。司馬相如の妻、卓文君なり。
(五)一佳人。陳皇后をいふ。
(六)踰佚。飛揚なり。
(七)我。武帝をいふ。
(八)人。陳皇后自ら謂ふ。
(九)慊移。慊は絶なり。
(一〇)貞愨。愨は謹なり。
(一一)離宮。長門宮なり。
(一二)薄具。具は肴饌なり。
(一三)廓。憂憚の心に在る貌。

疾風あり。(一四)蘭臺に登りて遙に望めば、神(一五)怳怳として外に淫ぶ。浮雲鬱として四に塞り、天(一六)窈窈として晝陰く、雷(一七)隱隱として響起り。聲君の車音に象たり。飄風廻りて閨に赴り、帷幄を擧げて(一八)襜襜たり。桂樹交りて相紛れ、(一九)芳酷烈にして(二〇)誾誾たり。孔雀集りて相存ひ、玄猿嘯いて長吟し、翡翠翼を脅めて來り萃り、鸞鳳飛んで北南す。

【大意】一佳人あり。庭中に逍遙して身事を思量し、精魂飛散せるが如く、形容亦枯瘠せり。帝の嘗て我を寵するや、朝に去り暮に來らんことを誓ひぬ。今や則ち然らず。飲食歡樂して我を忘れ、心絶移して故舊を顧みず、ただ新交得意の女と相親愛す。然も我が心の愚なる、尚ほ貞信を懷いて自ら歡び、帝の我を問ひ、因つて自ら進み、重ねて玉音を聞かんことを願ひ、帝の虛言を以て誠となし、長門宮に臨幸あらんことを期し、酒肴を具へて待てども臨幸するを肯ぜず。愁然として潛居し、其精神を專一にすれば、疾風起りて益人をして悲ましむ。乃ち蘭臺に登り茫然として君を望めば、浮雲天を蔽ひて晝暗く、雷殷殷として鳴り、君の車聲を聞くが如し。廻風忽ち至りて帷幄を擧げ、桂香の芬芬たるを聞き、鳥獸の相集りて飛翔吟嘯するを見るのみ。

【一四】蘭臺。臺の名。
【一五】怳怳。安んぜざる貌。
【一六】窈窈。暗き貌。
【一七】隱隱。聲なり。
【一八】襜襜。搖く貌。
【一九】芳は香氣、酷烈は香氣の高きこと。
【二〇】誾誾。香氣の盛なる貌。

（二一）心憑噫して舒びず、邪氣壯にして中を攻む。蘭臺を下りて周覽し、歩して深宮に從容す。正殿（二二）塊として天に造り、鬱として並び起りて（二三）穹崇たり。間く（二四）東廂に徙倚し、夫の（二五）靡靡として窮なきを觀る。玉戶を擠して以て（二六）金鋪を撼せば、聲（二七）噌吰として鐘音に似たり。（二八）木蘭を刻んで以て榱となし、（二九）文杏を飾りて以て梁となし、（三〇）丰茸の游樹を羅ね、（三一）離樓として梧へて相撐へ、（三二）瑰木の欂櫨を施し、（三三）委すること參差として以て（三四）槺梁あり。時に髣髴として以て物類あり、（三五）積石の將將たるに象たり。五色（三六）炫として以て相曜し、煥爛として燿きて光を成し、（三七）錯石の瓴甓を緻にし、瑇瑁の文章に象たり。羅綺の幔帷を張り、（三八）楚組の連綱を垂る。柱楣を撫して以て從容し、（三九）曲臺の央央たるを覽れば、白鶴噭いて以て哀み號き、孤雌枯楊に跱てり。日黃昏にして望絕え、悵として獨り空堂に託く。

【二一】憑噫。懷歎なり。
【二二】塊。大なる貌。
【二三】穹崇。高き貌。
【二四】東廂は東の廊なり。徙倚は立つなり。
【二五】靡靡。室宇の美好なる貌。
【二六】金鋪。錠前なり。
【二七】噌吰。聲なり。
【二八】木蘭。木の名。
【二九】文杏。木の名。
【三〇】丰茸は衆飾の貌。游樹は浮柱なり。
【三一】離樓。衆木を聚むる貌。
【三二】瑰木、奇木なり。欂櫨は斗栱、ますがた。
【三三】委。積むこと。
【三四】槺梁。虛梁なり。
【三五】積石は山石なり。將將は集る貌。
【三六】炫。光る貌。
【三七】錯石は衆石なり。瓴甓はシキガハラ。
【三八】楚組。楚地に產する綬。綬はヒモなり。
【三九】曲臺は未央宮の東に在る殿の名。央央は廣き貌。

【大意】心懷歎して伸びず、憂恨の氣、中情を攻む。乃ち蘭臺を下りて長門宮に逍遙し、正殿の東廊に徙倚して、窒宇の細美なるを觀、玉戸を推し金鋪を撼せば、其音鐘の如し。木蘭の榱、文杏の梁あり。衆木相集りて縱横に相支へ、奇木の欂櫨は委積して虛梁を承け、恰も山石の相重れるが如く、五色陸離として光彩を放つ。衆石を集めて甎となし、其狀瑇瑁の文に似たり。羅綺の幔帷は楚組を以て連繫す。余乃ち柱に倚りて從容し、曲臺殿の廣大なるを觀る。其狀白鶴の悲み鳴き、孤雌の枯楊に立てるに似たり。日既に黃昏にして君を望むの心絶え、悵然として空閨に歸る。

明月を懸けて以て自ら照し、淸夜に(四〇)洞房に徂き、雅琴を援いて以て調を變じ、愁思を奏して長うすべからず。(四一)流徵を案へて以て却轉すれば、聲(四二)幼妙として復た揚る。貫いて歷覽して其れ(四三)中操なり、意慷慨して自ら卬る。左右悲んで淚を垂れ、涕(四四)流離して從横す。(四五)息悒を舒べて歎を增し、(四六)蹝履して起ちて彷徨し、長袂を揄いて以て自ら翳し、昔日の(四七)僁殃を數へ、面目の顯すべきなく、遂に思を頽いて牀に就き、(四八)芬若を摶りて以て枕となし、(四九)荃蘭を席きて茝香あり。忽ち寢寐して夢想し、魂君の

【四〇】洞房。深閨なり。
【四一】流徵。音調の名。
【四二】幼妙。細聲なり。
【四三】中操。操は曲なり。
【四四】流離。涕の垂るる貌。
【四五】息悒。歎息し憂ふること。
【四六】蹝履。足の指に履を挂くること。
【四七】僁殃。過惡なり。
【四八】芬若。香草なり。
【四九】荃蘭。香草なり。

傍に在るが若し。愓いて寐覺むれば見ることなく、魂(五〇)迋迋として亡へるあるが若し。衆雞鳴いて予を愁へしめ、起つて月の精光を視、衆星の行列を觀れば、(五一)畢昴東方に出づ。中庭の(五二)藹藹たるを望めば、(五三)季秋の霜を降らせるが若し。夜(五四)曼曼として其れ歲の若く、懷鬱鬱として其れ再び更べからず。(五五)澹偃蹇として曙を待てば、(五六)荒亭亭として復た明く。(五七)妾人竊に自ら悲み、年歲を究めて敢て忘れず。

【大意】天上の明月を觀て獨り深閨の中に居り、琴を取りて常調を變じ、愁思の曲を奏すれば、愁思自ら堪へ難し。徵絃を案へて之を却轉すれば、其聲微にして復た揚る。次第に其聲を歷て中曲に至り、歎息して自ら激昂すれば、左右共に悲んで淚を垂る。因つて長歎大息して履を躡んで徘徊し、長袂を翳して己の罪過を數ふるに、面目の顯すべからざるを恥ぢ、遂に愁思を懷いて牀に就き、香草を以て枕席となす。忽ち君の吾が傍に在るを夢み、愓然として覺むれば君を見ず。心に失ふ所あるが如し。雞鳴いて夢破れ、起つて天上を望めば、畢昴東天に出づ。月色の藹藹たるを望めば、晚秋の降霜の如し。夜長くして歲の如く、心鬱鬱として明し難し。澹然佇立して曉を待てば、荒然として漸く明けんとす。ああ予自ら悲み年

【五〇】迋迋。恐懼の貌。
【五一】畢昴。星の名。
【五二】藹藹。月光微闇の貌。
【五三】季秋。晚秋なり。
【五四】曼曼。長き貌。
【五五】澹偃蹇。澹は靜なる貌。偃蹇は佇立なり。
【五六】荒亭亭。夜の明けんと欲する貌。
【五七】妾人。陳皇后自ら謂ふ。

歳を盡すと雖も、敢て君を忘れざるなり。

(一)思舊の賦竝序

(二)向子期

余(三)嵆康(四)呂安と(五)居止接近せり。其人竝に(六)不羈の才あり。然れども嵆は志遠くして疏なり。呂は心曠くして放なり。其後各事を以て(七)法せらる。嵆は博く技藝を綜べ、絲竹に於て特に妙なり。當に(八)命に就くに臨み、日影を顧視し、琴を索めて之を彈ず。余逝いて將に西に邁かんとし、其舊廬を經。時に日(九)虞淵に薄り、寒氷凄然たり。鄰人笛を吹く者あり。聲を發すること(一〇)寥亮たり。曩昔遊宴の好を追思し、音に感じて歎く。故に賦を作りて云く、

命を將けて遠京に適き、遂に旋反りて北に徂き、黄河を濟りて以て舟を汎べ、(一一)山陽の舊居を經、(一二)曠野の蕭條たるを瞻、余が駕を城隅に息はしめ、(一三)二子の遺跡を踐み、窮巷の空廬を歷、(一四)黍離の

【一】思舊。故舊を思ふなり。
【二】向子期。向秀字は子期、晉の河内、懷の人なり。竹林七賢の一。
【三】嵆康。竹林七賢の一。
【四】呂安。字は仲悌、晉の東平の人。
【五】居止。居家なり。
【六】不羈。拘束を受けざること。
【七】法。刑戮なり。
【八】命に就く。戮に就くこと。
【九】虞淵。日の入る處。
【一〇】寥亮。聲なり。
【一一】山陽。縣の名、河内郡に在り。
【一二】曠野は廣原なり。蕭條は物淋しきこと。
【一三】二子。嵆康、呂安なり。
【一四】黍離。詩經の篇の名。周の古都を悲める詩なり。

周を愍めるを歎き、(一五)麥秀を殷墟に悲み、古昔を惟ひて以て人を懷ひ、心(一六)徘徊して以て躊躇す。棟宇存して毀れず、形神逝いて其れ焉にか如ける。昔李斯の罪を受くる、(一七)黃犬を歎じて長吟す。嵇生の永く辭せるを悼む。日影を顧みて琴を彈じ、(一八)運遇を領會に託し、餘命を寸陰に寄す。鳴笛の慷慨を聽くに、妙聲絕えて復た尋ぐ。駕を停めて言其れ將に邁かんとし、遂に翰を援りて心を寫す。

【大意】余君命を受けて京に適き、遂に歸りて北行し、黃河を渡りて山陽の舊居を經、馬を城隅に休息せしめ、嵇康呂安二子の舊廬を訪ひ、黍離麥秀の歎を發し、懷舊の情に堪へずして躊躇す。其廬は今尚ほ存すれども二子の形神また接すべからず。ああ悲しいかな。昔李斯の刑に就くや、黃犬を牽いて狩獵の樂の再すべからざるを歎じぬ。嵇生の戮に就くや、亦日影を顧みて琴を彈じ、其身の薄命を悟り餘命を琴音に託せり。今鄰人の笛を吹くを聞くに、妙音斷續し、坐に人をして嵇生を思はしむ。余因つて馬を留め筆を援りて感慨を寫す。

【一五】麥秀。微子周に朝せんとし、殷の舊墟を過ぎ、悲んで麥秀の歌を作る。

【一六】徘徊。心安からざる所なり。

【一七】黃犬。史記に李斯獄ヲ出デ顧ミテ其子ニ謂ッテ曰ク、吾汝ト黃犬ヲ牽キ、倶ニ上蔡ノ東門ヲ出デ、狡兎ヲ逐ハント欲スルモ、復タ得ベケンヤとあり。

【一八】運遇。運遇は運命境遇なり。領會は理解といふが如し。

(一)歎逝の賦竝序

(二)陸士衡

昔毎に長老(三)平生同時の(四)親故を追計するを聞くに、或は(五)凋落して已に盡き、或は僅に存する者あり。余年方に四十にして、(六)懿親戚屬、亡する者多くして存する者寡し。(七)暱交密友、亦半だも在らず。或は嘗て共に(八)一塗に遊び、同じく一室に宴せし所のもの、十年の內、(九)索然として已に盡きぬ。是を以て哀を思へば、哀知るべし。乃ち賦して曰く、

伊れ天地の運流する、紛として升降して相襲り、日は空を望んで以て駿く驅せ、(一〇)節は虛に循つて警き立つ。嗟人生の短期なる、孰か長年を能く執らん。時は(一一)飄忽として其れ再せず、老は(一二)晼晚として其れ將に及ばんとす。(一三)瓊蘂の徵なきを懟み、朝霞の挹み難きを恨み、(一四)暘谷を望んで(一五)企予し、(一六)此景の屢戢るを惜む。悲い夫川は水を閱て以て川を成し、水は滔滔として日に度り、

【一】歎逝。日月流邁し人世の往き易きを歎ずるなり。
【二】陸士衡。名は機・字は士衡・晉の吳郡の人なり。
【三】平生。少き時なり。
【四】親故。親戚故舊。
【五】凋落。死亡すること。
【六】懿親。親戚なり。
【七】暱交。親友なり。
【八】一塗。一途なり。
【九】索然。盡くる貌。
【一〇】節は氣節なり。虛は空なり。
【一一】飄忽。疾き貌。
【一二】晼晚。日の暮るること。
【一三】瓊蘂、朝霞。仙人之を服用して長年を保つ。
【一四】暘谷。日の出づる處。
【一五】企予。詩經に企テテ予之ヲ望ムとあり。足をつまだてて望むこと。
【一六】此景。日景なり。

世は人を閲べて世を爲し、人は(一七)冉冉として行き暮す。人何の世として新ならざらん。世何の人として能く故ならん。野は春毎に其れ必ず華けども、草は朝として露を遺すなし。(一八)終古を經て常に然り、品物を率へて其れ素の如し。(一九)日及の條に在るに譬ふ。恆に盡すと雖も悟らず。

【大意】天氣は下降し地氣は上升し、運行流轉して四時茲に代謝し、日は虚空を行くこと駿馬の驅するが如く、氣節は自ら警策して暫も息むことなし。人の此間に處るや、誠に短期にして忽ちにして老年に至る。瓊蘂朝霞を服用するも、孰か長壽を保つを得んや。徒に日景を望んで此日の屢藏るるを惜むのみ。川は衆水を集めて成る。其水滔滔として流れ去り、後水來りて相繼ぐ。世は衆人を摠べて成る。其人老い去りて後人相繼ぐ。人は常に新にして世に舊人あることなし。野草は毎春花を開けども、草上の露は未だ嘗て晞き去らずんばあらず。終古に及ぶと雖も、常に此の如し、他の物品も亦然り。ああ人命は木槿の如く、朝に榮え夕に凋み、漸く盡くるに至りて、悟るなし。

寤らずと雖も其れ悲むべし。心(二〇)惆焉として自ら傷む。亮に造化の茲の若くなる、吾安んぞ夫の久長を取らん。(二一)靈根の夙く殞つるを痛み、(二二)具爾の多く喪ぶるを怨み、(二三)堂構の隤瘁を悼み、城闕

【一七】冉冉。進む貌。
【一八】終古。永久といふが如し。
【一九】日及。木槿。
【二〇】惆焉。痛む貌。
【二一】靈根。父祖なり。
【二二】具爾。兄弟なり。
【二三】堂構は父祖の構へし所の堂。隤瘁は毀廢すること。

の（二四）丘荒を愍む。親彌懿けれども其れ已に逝く。交何の戚きとして亡びざらん。吾余が命の方に殆き、何ぞ天の（二五）茫茫たるを視る。傷懷悽んで其れ念多く、（二六）感貌瘁へて歡尠く、幽情發して緒を成し、滯思叩いて端を興す。此世の樂なきを慘み、在昔を詠じて言を爲す。居れば堂に充ちて宇に衍ち、行けば駕を連ねて軒を比べしも、年時を彌ること其れ詎幾ぞ、夫れ何に往くとして殘はれざらん。或は冥邈にして既に盡き、或は寥廓として僅に半なり。信に松茂りて栢悅び、嗟（二七）芝焚けて蕙歎く。苟に（二八）性命の殊ならざる、豈波を同うして瀾を異にせんや。（二九）前軌の既に覆るを瞻て、（三〇）此路の良に難きを知る。（三一）四體を啓いて深く悼み、（三二）茲形の將に然らんとするを懼れ、情を娛ましむるの方寡きを毒み、目を感ぜしむるの顏多きを怨む。

【大意】悟らずと雖も、此れ實に悲むべきなり。造化の理既に此の如し。吾人焉んぞ長久なるを得んや。父祖兄弟の死亡するを見、父祖の構へし堂の毀廢に歸し、城闕の丘墟となりて荒蕪するを見ては、豈悲まざるを得んや。親戚の交如何に美なりと雖も、死亡せざるはなし。余が命も亦方に殆し。何ぞ天の茫茫たる。之を思へば幽情發して

【二四】丘荒。丘墟となりて荒蕪すること。
【二五】茫茫。不明なり。詩經に民今方ニ殆シ、天ノ夢夢タルヲ視ルとあり。
【二六】感貌。憂ふる容貌。
【二七】芝、蕙。香草なり。
【二八】性命。生命に同じ。
【二九】前軌。前車なり。
【三〇】此路。死路なり。
【三一】四體。四肢なり。論語に曾子疾アリ、門弟子ヲ召シテ曰ク、予ガ足ヲ啓ケ、予ガ手ヲ啓ケ云云とあり。
【三二】茲形。自己の身體。

心緒亂れ、人世の樂なきを惨み、昔時を顧念して浩歎せざるを得ず。昔時賓族衆盛なりと雖も、年を歴ること幾何もなくして皆死滅し、何に往くとも殘滅せざるはなし。甚しきは賓族皆死し、然らざれば滅じて半數となる。同類榮ゆれば則ち悦び、同類滅すれば則ち悲むは、是れ物の情なり。我と賓族と性命既に同じ。我の死に歸すること、亦當に賓族と同じかるべし。前車の覆れるを見ては、其路を渉ること固に難し。我が身の將に死せんとするを悲む。ああ人世何ぞ樂事の少くして悲哀の狀の人目を感動せしむること獨り多き。

諒に顏多くして目を感せしむる、神何に適くとして怡を獲ん。平生を響像に尋ね、前物を覽て之を懷ひ、寒林を歩して以て悽惻し、(三三)春翹を翫びて思ふあり。萬類に觸れて以て悲を生じ、節を同じくして時を異にするを歎く。年彌往いて念廣く、塗薄暮にして意迮る。親(三四)落落として日に稀に、友(三五)靡靡として愈索く。(三六)舊要を遺存に顧み、十一を千百に得。樂心を隕して其れ亡へるが如く、哀情に緣りて來り宅る。(三七)末契を後生に託し、余將に老いんとして客となる。然る後(三八)節を弭かし懷を安くし、妙に(三九)天造を思ふ。精浮び神淪み、忽ち(四〇)世表

【三三】春翹。翹は茂盛の貌。
【三四】落落。稀少の貌。
【三五】靡靡。盡くる貌。
【三六】舊要は舊妙といふが如し。遺存は殘存なり。
【三七】末契は下交なり。後生は後輩なり。
【三八】節を弭。弭は安んずること。志節を安んずるなり。
【三九】天造。造物者なり。
【四〇】世表。世外なり。

に在り。(四一)大暮の同じく寐ぬるを寤る。何ぞ晩きを矜りて以て早きを怨みん。彼の日の方に除ぬるを指すも、豈茲情を攬るに足らんや。秋華を衰木に感じ、零露を豐草に瘁み、殷憂に在りて違らざるは、夫れ何ぞ道を識ると云はんや。將に(四二)天地の大德を頤ひ、(四三)聖人の洪寶を遺れ、心累を末迹に解き、聊か(四四)優游して以て老を娛まんとす。

【大意】愁容の目を痛ましむるもの多く、吾が心何に適くも悦を得る能はず。音聲形像を尋ねては親故を思ひ、昔時の器物を見ては生時を懷ひ、寒林を步しては故人を偲び、春花を翫びては舊時を憶ひ、物として悲の種ならざるはなく、節物風光嘗て故人と共に賞せしに異らざるも、故人の音容復た接すべからざるを歎く。人の世路に在るは道途尙ほ遠くして日已に暮るるが如し。親友日日に死し去り、舊知を殘存者中に求むれば百中僅に其一を得るのみ。之を思へば樂去つて哀來る。我今生存して後輩と交るも、後輩我が老いたるを見、客禮を以て我を待ち、歡交するを肯んぜず。余乃ち心を安んじて造物の理を思ひ、幾多精神の動搖浮沈を經て、始めて大悟の域に達せり。曰く人の死するや、長夜に同じく寐ねたるが如し。晩死する者固より矜るに足らず。早夭する者亦何ぞ傷むに足らんや。彼の日の去るや、固より常事

【四一】大暮。長夜なり。
【四二】天地云云。易經に天地ノ大德ヲ生トイフとあり。
【四三】聖人云云。易經に聖人ノ大寶ヲ位トイフとあり。
【四四】優游。逍遙自適すること。

のみ。何ぞ我が情を攪亂して憂ふるを須ひん。夫れ達人は死生を一にす。かの衰木の秋華を感じ、豐草の墜露を痛み、以て深憂に陷る者の如きは、道を識るの士と謂ふべからざるなり。我將に我が生を養ひ、世榮を遺れ、心累を解き、逍遙として老を樂まんとす。

懷舊の賦竝序

潘安仁

余十二にして、父の友東武の（一）戴侯楊君に見ゆるを獲、始めて名を知られ、遂に之に申ぬるに（二）婚姻を以てす。而して（三）道元、公嗣、亦（四）世親の愛を隆にす。不幸短命にして父子（五）凋殞す。余既に（六）私艱あり、且つ役を外に尋ね、（七）嵩丘の山を歷ざること茲に九年なり。今にして焉を經、慨然として舊を懷ひ、而して之を賦して曰く、

（八）開陽を啓いて朝に邁き、（九）清洛を濟りて以て徑に渡る。晨風（一〇）淒として以て冷を激し、夕雪（一一）暠

【一】戴侯。楊肇、字は季初、晉の榮陽の人なり。東武伯に封ぜられ、薨じて諡して戴といふ。
【二】婚姻。潘岳の妻は楊肇の女なり。
【三】道元。楊肇の長子潭、字は道元、次子韶、字は公嗣。
【四】世親。父子代代親愛すること。
【五】凋殞。死亡すること。
【六】私艱。父の喪に遭ひしこと。
【七】嵩丘。嵩高山なり。洛陽の東南五十里にあり。楊肇此山に葬らる。
【八】開陽。洛陽の門の名。
【九】清洛。洛水なり。
【一〇】淒。寒き貌。
【一一】暠。白き貌。

として以て路を掩ひ、轍は冰を含んで以て軌を滅し、水は（一二）軔を漸して以て（一三）凝沍し、塗（一四）艱屯にして其れ進み難く、日（一五）畹晩にして將に暮れんとす。仰いで歸雲を睎、俯して泉流を鑑み、前に（一六）太室を瞻、傍に嵩丘を眺む。（一七）東武焉に託きて、塋を建て疇を啓き、（一八）巖巖たる雙表、（一九）列列たる行楸あり。彼の楸を望み、予が思を感ぜしむ。既に墓を戴侯に興し、亦元を悼んで嗣を哀む。墳（二〇）壘壘として以て隴に接し、栢（二一）森森として以て攢植う。何ぞ逝沒の相尋げる。曾て（二二）舊草の未だ異らず。余（二三）總角にして見ゆるを獲、戴侯の（二四）淸塵を承く。余を名づくるに國士を以てし、余を眷するに嘉姻を以てし、（二五）祖考よりして好を隆にし、二子に逮んで世親む。手を携へて以て老を偕にするを歡び、德に報ゆるの（二六）鄰あらんことを庶ふ。今（二七）九載にして來り歸れば、空館（二八）闃として其れ人なく、（二九）陳荄堂除に被り、舊圃化して薪となる。庭廡を歩して以て徘徊すれば、涕（三〇）泫流して巾を霑す。宵（三一）展轉して寐

【一二】軔。車輪なり。
【一三】凝沍。凍ること。
【一四】艱屯。險難なること。
【一五】畹晩。日の暮るること。
【一六】太室。山の名。
【一七】東武。楊肇なり。
【一八】巖巖。高き貌。雙表は華表なり。墓標なり。
【一九】列列。ならぶ貌。行楸は竝び植ゑたる楸。楸は木の名。
【二〇】壘壘。かさなる貌。
【二一】森森。茂盛の貌。
【二二】舊草。前に死したる人を葬りし時の草。
【二三】總角。童子なり。
【二四】淸塵。淸風といふが如し。
【二五】祖考。父祖なり。
【二六】鄰。論語に德孤ナラズ必ズ鄰アリとあり。
【二七】九載。九年なり。
【二八】闃。寂靜なり。
【二九】陳荄。古き草の根。堂除は堂階なり。
【三〇】泫流。涙の流るること。
【三一】展轉。ねがへりすること。

ねられず、驟長歎して以て晨に達す。獨り鬱結して其れ誰にか語らん。聊か思を斯文に綴る。

【大意】開陽門を開いて朝に洛陽を發し、進んで洛水を渡れば、風雪寒くして路を掩ひ、車轍氷合して軌跡を滅し、水車輪を漸して堅氷凝り、道路險難にして日將に暮れんとす。仰いで歸雲を觀、俯して泉流を觀、前に太室山を瞻、傍に嵩高山を眺む。ああ楊君死して此山に葬る。華表高く立ち、行楸列び立てり。彼の行楸を見、懷舊の情頓に興る。余既に楊君を思慕し、墳墓の壘壘として、栢樹の叢生するを見、亦其二子の死を哀む。何ぞ舊草未だ變異せざるに其子相次いで死亡すること此の如くなる。余幼童の時、楊君の清風を仰ぎ、國士を以て目せられ、尋で妻すに其女を以てせらる。其二子に至り、また親交を垂れらる。余深く其知遇に感じ、二子と倶に老い、其恩德に報いんことを期せり。今既に九載を經、來りて其宅を訪へば、寂として人なく、穢草堂階を埋め、園圃樵薪に化せり。庭廡の間を徘徊すれば涕流れて衣を沾し、寢に就けども展轉して眠る能はず。長嘆して曉に達せり。心鬱結して伸びざるも、語るに人なし。因つて感慨を文章に託す。

寡婦の賦並序

潘安仁

(一)樂安の(二)任子咸といふ者、(三)韜世の量あり。余と少くして歡し、兄弟

【一】樂安。郡の名。
【二】任子咸。任護、字は子咸。
【三】韜世。一世を包藏するを。

の愛と雖も、以て加ふるなきなり。不幸にして(一四)弱冠にして終る。良友既に沒す。何の痛か之に如かん。其妻は又吾が(一五)姨なり。少くして父母を喪ひ、人に適いて所天又殞り、孤女(一六)藐焉として始めて(一七)孩す。斯れ亦生民の至艱にして、(一八)荼毒の極哀なり。昔阮瑀既に沒して(一九)魏文之を悼み、竝に知舊に命じて寡婦の賦を作らしむ。余遂に之に擬し、以て其孤寡の心を叙す。其辭に曰く、

嗟(二〇)余が生の(二一)不造なる、天難の忱ならざるを哀む。少くして(二二)伶俜にして(二三)偏孤なり。痛(二四)切怛として以て心を摧き、(二五)寒泉の遺歎を覽・(二六)蓼莪の餘音を詠じ、情長に感へて以て永く慕ひ、思彌遠くして逾深し。伊れ女子の(二七)行ある、爰に嬪を(二八)高族に奉じ、(二九)慶雲の光覆を承け、(三〇)君子の惠渥を荷ひ、葛藟の蔓延を顧み、微莖を(三一)樛木に託し、身の輕くして(三二)施の重

【一四】弱冠。二十歳をいふ。
【一五】姨。妻の姉妹をいふ。
【一六】藐焉。孤獨の貌。
【一七】孩。嬰兒の始めて笑ふこと。
【一八】荼毒。苦痛なり。
【一九】魏文。魏の文帝。
【二〇】余。任子咸の妻の自稱。
【二一】不造。不幸といふが如し。
【二二】伶俜。單孑の貌。
【二三】偏孤。父を喪へるをいふ。
【二四】切怛。悲傷すること。
【二五】寒泉。詩經に爰ニ寒泉アリ、浚ノ下ニ在リ、子七人アリ、母氏勞苦スとあり。
【二六】蓼莪。詩經に蓼蓼タル莪、莪ニアラズ伊レ蒿、哀哀タル父母、我ヲ生ミテ劬勞スとあり。父母倶に死せるを悲めるなり。
【二七】行。人に嫁するの道。
【二八】高族。名家なり。子咸の家を指す。
【二九】慶雲。めでたき雲。子咸の父母に喩ふ。光覆は光りおほふこと。
【三〇】君子。子咸を指す。
【三一】樛木。木の下曲れるをいふ。
【三二】施。恩なり。

からんことを懼れ、氷を履んで谷に臨めるが若し。義方の明訓に遵ひ、(二三)女史の典戒に憲り、(二四)蒸嘗に奉じて以て順を效し、灑掃に供して以て載を彌る。彼の(二五)詩人の歎ずる攸、徒に願ひて言に心痗む。何ぞ命に遭ふの奇薄なる、天禍の未だ悔いざるに遭ひ、(二六)榮華爗として其れ始めて茂り、良人忽として以て(二七)捐背す。

【大意】余不幸にして早く父を喪ひ、天禍難を降すの誠ならざるを哀む。常に之を思ひて心を痛ましめ、寒泉蓼莪の詩を詠じ、年を經るに隨つて父を慕ふの情益切なり。夫れ女子は人に嫁するの道あり。余因つて子咸の家に嫁して婦道を奉行し、父母の愛護を受け夫の恩惠に浴し、蔦蘿の樛木に縁るが如く、身を夫家に託し、身の輕くして恩の重きを懼れ、戰戰兢兢として深淵に臨み薄氷を履むの思をなし、德義の道、女史の訓戒に遵ひ、家祭を助けて婉順の道を盡し、灑掃に任じて年を閲しに、何ぞ運命の奇薄なる。天禍未だ悔いず、容色未だ衰へざるに、我が夫また忽焉として沒しぬ。之を思へば我が心をして痛ましむ。誠に詩人の言ふ所の如し。

靜に門を闔ぢて以て窮居し、(二八)塊として煢獨にして依るなし。錦茵に易ふるに(二九)苦席を以てし、羅

【二三】女史。女の師匠なり。
【二四】蒸嘗。宗廟の祭。
【二五】詩人。詩經に願ヒテ言ニ伯ヲ思ヘバ、我ガ心ヲシテ痗マシムとあり。
【二六】榮華は己の容色に喩ふ。爗は光輝ある貌。
【二七】捐背。死亡すること。
【二八】塊は獨居の貌。煢獨は孤獨なり。
【二九】苦席。喪に居る者は苦に寢ぬ。

幬に代ふるに素帷を以てす。(三〇)阿保に命ぜられて(三一)列に就き、(三二)巾箑を覽て以て悲を舒べ、口(三三)嗚噎して以て聲を失ひ、涙橫迸して衣を霑す。愁煩寃して其れ誰にか告げん。(三四)孤孩を坐側に提ぐ。時(三五)曖曖として昏に向ひ、日(三六)杳杳として西に匿れ、雀羣れ飛んで楹に赴き、雞棲に登りて翼を斂む。空館に歸りて自ら憐み、衾幬を撫して以て歎息す。思纏綿して以て亂し、心摧傷して以て愴惻す。(三七)曜靈曄いて遄く邁き、(三八)四節運りて推し移り、天露を凝らして霜を降らし、木葉落ちて枝を殞す。(三九)神宇の寥寥たるを仰ぎ、靈衣の(四〇)披披たるを瞻、退いては堂隅に幽悲し、進んでは(四一)牀垂に獨拜し、耳(四二)疇昔を傾想し、目平素を髣髴す。冥冥にして覩ることなしと雖も、猶ほ(四三)依依として以て憑附す。存亡の制を殊にするを痛み、將に神を遷して安に措かんとす。(四四)龍輀儼として以て(四五)星駕し、(四六)飛旐翩として以て路を啓き、輪軌を按じて以て徐に進み、馬悲鳴して(四七)跼顧す。潛靈邈として其れ反らず。

【三〇】阿保。傅母なり。
【三一】列。哭位の行列。
【三二】巾箑。箑は扇なり。夫の生前に用ひし物。
【三三】嗚噎。泣きむせぶこと。
【三四】孤孩は孤兒となりし嬰兒。坐側は靈座の側なり。
【三五】曖曖。暗き貌。
【三六】杳杳。遠き貌。
【三七】曜靈。日なり。
【三八】四節。四季なり。
【三九】神宇。靈室なり。
【四〇】披披。動く貌。
【四一】牀垂。靈座のほとり。
【四二】疇昔。往日なり、夫の生前をいふ。
【四三】依依。思戀の貌。
【四四】龍輀。喪車なり。
【四五】星駕。朝早く駕すること。
【四六】飛旐。喪柩の旌。
【四七】跼顧。つまづき顧る。

(四八)殷憂結ぼれて訴ふるなし。形影を几筵に睎るも、(四九)精爽を丘墓に馳す。

【大意】乃ち門を閉ぢて獨居し、苫席を以て錦褥に易へ、素帷を以て羅幬に代へ、傅母に命ぜられて哭列に就き、平生の遺物を見て悲哀を發し、嗚咽して聲嗄れ、涙流れて衣を沾し、愁悶訴ふるに人なく、遺孤を抱いて靈座の側に就く。時正に薄暮にして雞雀羣飛して塒に登る。因つて空室に歸りて自ら悲み、衣帳を撫でて歎息すれば、情緒纏綿して心魂悲傷す。歲月忽ちに過ぎ、霜露降り木葉落つるの時に至るや、靈室寂寥にして靈衣の風に搖ぐを見、退いて堂隅に悲み、進んで靈座に拜し、耳を傾けては生前の聲を聞き、目を開けば生前の形を見るの思あり。冥冥にして見るべからずと雖も、依依として憑依くべきが如し。然も生者と禮制を異にするを思ひ、將に神靈を遷して安葬せんとす。喪車に載せ喪旗を樹て、徐徐として進めば、馬悲鳴して前まず。葬禮既に終れば神靈永に歸らず。吾が愁鬱結して訴ふるに所なし。身は几筵の前に在りと雖も、心は馳せて墓穴の中に在り。

仲秋よりして(五〇)疚きに在り、(五一)霜を履んで以て冰を踐むに踰ゆ。雪霏霏として驟落ち、(五二)風瀏瀏として夙に興り、霤(五三)泠泠として夜下り、冰(五四)溓溓として微く凝り、意(五五)惚怳として以て遷越し、

【四八】殷憂。深憂なり。
【四九】精爽。魂魄精神なり。
【五〇】疚。喪に居ること。
【五一】霜云云。霜を履むは秋なり。冰を踐むは冬なり。
【五二】瀏瀏。風の疾き貌。
【五三】泠泠。霤の聲。
【五四】溓溓。薄氷の貌。
【五五】惚怳。迷亂なり。

神一夕にして九升す。庶はくは浸く遠くして哀降らんことを。情惻惻として彌甚し。願くは夢を假りて以て(五六)靈に通ぜんことを。目烱烱として寢ねられず。夜(五七)漫漫として以て悠悠たり。寒(五八)凄凄として以て凛凛たり。氣(五九)憤薄して胷に乘り、涕交横して枕に流る。亡魂逝いて永遠なり。時歳忽として其れ遒盡く。容貌(六〇)儡として以て頓に悴へ、左右悽んで其れ相愍む。(六一)三良の秦に殉せるに感じ、生を捐てて以て自ら引くを甘んずるも、稚子を懷抱に鞠ひ、嗟低徊して忍びず。獨り(六二)景を指して心に誓ふ。形存すと雖も志(六三)殞す。

【大意】仲秋より喪に服し、既に秋冬を經。風雪屢至り寒威堪へ難し。心迷亂して神一夕に九轉す。久しきを經ば哀情漸く歇むべしと思へるも、日を經るに隨つて益甚し。夢を借りて神靈に交通せんと欲すれば、目冴えて眠る能はず。心鬱結して涕横流す。夫死して既に久しく歳月忽ち遷り去り、吾が容貌の衰廢せるを見て、左右の人皆相悲む。我れ三良の穆公に殉死せるに感じ、生を捐てて自殺し、以て夫に殉せんと欲すれども、孤兒の懷に在るを見ては、此を棄てて死するに忍びず。獨り天日を指して心に誓ふ。我が身は生存せるも、心は地下に夫に從へるなり。

【五六】靈。夫の神靈。
【五七】漫漫、悠悠。長き貌。
【五八】凄凄、凛凛。冷かなる貌。
【五九】憤薄。鬱結なり。
【六〇】儡。衰ふる貌。
【六一】三良。三人の賢人、秦の穆公卒し、子車氏の三子、奄息、仲行、鍼虎を以て殉となす。皆秦の賢良なり。
【六二】景。日なり。
【六三】殞。死すること。

(六四)重に曰く、皇穹を仰いで歎息し、私に自ら憐んで何ぞ極まらん。微身の孤弱なるを省み、稚子の未だ識らざるを顧るに、川を渉るに梁なきが如く、虚を淩ぐに翼を失へるが若し。上遺像を瞻、下泉壤に臨めば、窈冥に潛み翳れ、心に存して目に想ふ。靈坐の肅清なるに奉じ、(六五)空宇の曠朗なるを愬へ、(六六)廓として孤立して影を顧み、塊として獨言して響を聽く。影を顧みては傷み摧け、響を聽いては哀を増す。遙に逝いて逾遠く、(六七)緬邈として長く乖き、(六八)四節流れて忽ちに代序し、歳云に暮れて日西に頽れ、霜庭に被りて風室に入り、夜既に分にして(六九)星漢廻り、良人の來遊を夢む、(七〇)閶闔の洞開せるが若し。怛として驚き悟むれば聞くことなく、超として惝怳して慟み懐ふ。慟み懐ふこと柰何。言に(七一)山阿に陟る。墓門(七二)肅肅として、脩隴峨峨たり。孤鳥(七三)嚶嚶として悲鳴し、長松萋萋として柯を振ふ。哀鬱結して交集り、涙横流して滂沱たり。(七四)恭姜の明誓を蹈み、(七五)栢舟の清歌を詠じ、終りては骨を山足に歸し、存きては(七六)餘華に憑託し、吾が君を要して穴を同うし、死に之るまで矢つて他なからん。

【六四】重。亂に同じ、楚辭の遺篇に本づく。班婕妤の自悼賦、亦之を用ふ。皇穹。大空なり。
【六五】空宇。空堂なり。
【六六】廓。空なり。
【六七】緬邈。長遠の貌。
【六八】四節。四季なり。
【六九】星漢。あまのがは。
【七〇】閶闔。天門なり。ここには室門と見て可なり。
【七一】山阿。山曲なり。
【七二】肅肅。靜なる貌。
【七三】嚶嚶。鳥の聲。
【七四】恭姜。衞の太子恭伯の妻。
【七五】栢舟。詩經の篇の名。序に栢舟ハ恭姜自ラ誓フナリ、父母奪ツテ之ヲ嫁セント欲スルモ、誓ツテ許サズとあり。
【七六】餘華。餘年なり。

【大意】又曰く、天を仰いで長歎し、自ら悲んで歇まず。吾が身の孤弱にして稚子の無心を思へば、川を渉るに橋なく、空を飛ぶに翼なきが如し。夫の遺像を見、墳墓に臨めば、幽魂潛隱せるも形影心目に明滅し、空室に獨坐すれば其影を顧み、獨言すれば其答を聽くが如し。夫死して既に久しく、春秋序を代へて歳云に暮れんとし、霜風室に入り夜方に半ならんとするとき、庭戸を開いて夫の來遊せるを夢み、驚き寤むれば見聞する所なし。怳然として悲傷し、乃ち山阿に登りて墳墓を望めば、墓門靜かにして塚高く、孤鳥悲鳴し長松柯を振ふ。乃ち心鬱結して涙流る。ああ余恭姜の誓に倣ひ栢舟の詩を詠じ、死しては夫の墓側に歸し、夫と墓穴を共にせん。生きては餘年を送り、死に至るまで再嫁の心を起すことなからん。

恨の賦　(一)江文通

試に平原を望むに、蔓草骨に縈ひ(二)拱木魂を斂む。人生此に到る、天道寧ろ論ぜんや。是に於て僕本より恨人なり、心驚いて已まず、直に古者の恨に伏して死せるを念ふ。(三)秦帝劍を按じ、諸侯西に馳するが如きに至りては、天下を削平

【一】江文通。江淹、字は文通、梁の濟陽考城の人。官金紫光祿大夫に至る。

【二】拱。合抱の太さの木。

【三】秦帝。秦の始皇帝。

し文を同うし（四）規を共にし、（五）華山を城となし、（六）紫淵を池となす。雄圖既に溢れ、武力未だ畢らず、方に（七）黿鼉を架して以て梁となし、（八）海右を巡りて以て日を送る。一旦魂斷えて、（九）宮車晩出す。若し乃ち趙王既に虜にせられて（一〇）房陵に遷され、薄暮に心動き（一一）昧旦に神興り、豔姫と美女とに別れ、金輿と（一二）玉乘とを喪ひ、酒を置いて飮まんと欲するも、悲來りて膺に塡つ。千秋萬歲、怨を爲して勝へ難し。（一三）李君北に降り、名辱められ身寃せらるる如きに至りては、劍を拔いて柱を擊ち、影を弔ひて魂に慙ぢ、情（一四）上郡に往き、心鴈門に留まる。帛を裂きて書を繫け、漢恩を還さんことを誓ふも、朝露溘に至る、手を握りて何をか言はん。若夫れ（一五）明妃去る時、天を仰いで太息す。（一六）紫臺稍く遠く、關山極なく、（一七）搖風忽ち起り、白日西に匿れ、（一八）隴鴈飛ぶと少く、岱雲色寡し。君王を望むも何ぞ期あらん、終に

【四】規。法なり。
【五】華山。山の名。
【六】紫淵。川の名。
【七】黿鼉。大龜なり。紀年に周ノ武王紂ヲ伐チ、東九江ニ至リ、黿鼉ヲ叱シテ梁トナスとあり。
【八】海右。西海なり。列子に周ノ穆王八駿ノ乘ニ駕シ、乃チ西ノカタ日ノ入ル所ヲ觀ルとあり。
【九】宮車晩出。天子の崩御をいふ。
【一〇】房陵。地名。
【一一】昧旦。早朝なり。
【一二】玉乘。玉車なり。
【一三】李君。漢の李陵、匈奴と戰ひて敗れ遂に降る。
【一四】上郡、鴈門。皆漢の城塞の名。
【一五】明妃。王昭君なり。齊の王襄の女、名は嬙、字は昭君。漢の元帝の宮人たり。匈奴使を遣し漢の皇女を請ふ。帝昭君を遣して匈奴の王に賜ふ。
【一六】紫臺。天子の宮なり。
【一七】搖風。飄風なり。
【一八】隴鴈、岱雲。隴岱は皆山の名。

異域に蕪絶す。

【大意】余平原の陵墓を望むに、蔓延せる草、合抱の木、人の骸骨に縈ひ魂魄を其中に包藏するが如し。人生ここに至りては、誰か復た彼の天道を論ずるに遑あらんや。余もと多恨の人なり。今之を見て、心驚いて已まず。忽ち古人の恨を抱いて死せる者を念ふ。秦の始皇の劒を按じて怒るや、六國諸侯爭つて西に向つて强秦に朝す。秦遂に天下を一統し、同文同軌の大業を成し、華山に據りて城となし、大河を繞らして池となし、宏業已に建てども、雄心尚ほ未だ已まず、將に黿鼉を架して橋梁となし、西海を渡りて日の入るを追はんとす。然も一旦溘焉として崩ず。其恨如何ぞや。秦趙を滅し趙王虜にせられて房陵に遷さるるや、憂恚相積み朝暮に心動き神興る。美人と金輿とに別れしを悲み、酒を置いて飮まんと欲するも、悲胸に滿ちて飮む能はず。此を以て世を終ふ。其恨固に勝ふべからず。漢將李陵匈奴に降り、悲憤して柱を擊ち、影を弔ひ心に慙ぢ、心を上郡鴈門に馳せ、帛を裂きて鴈足に繫け、誓つて漢室の恩に報いんとす。然も人命朝露の如く、忽焉として歿す。其恨言ふに勝ふべからず。王昭君の匈奴に嫁するや、天を仰ぎて太息し、皇城を顧みて關山萬里に往く。飄風起りて白日暮れ、飛鴈盡きて山色黑し。漢皇を望めども會合の期なく、恨を呑んで異域の鬼となりぬ。

乃ち(一九)敬通抵せられて、田里に罷歸るに至りては、關を閉ぢて卻き掃ひ、門を塞いで仕へず。左には(二〇)孺人に對し、右には稚子を顧み、公卿を(二一)脫略し、文史を(二二)跌宕す。志を賚して地に沒し、長く懷ひて已むとなし。夫の(二三)中散獄に下り神氣激揚するに及んでは、(二四)濁醪夕に引き、素琴晨に張り、秋日蕭索として、浮雲光なく、(二五)靑霞の奇意を鬱し、(二六)脩夜の暘けざるに入る。或は孤臣涕を危し、(二七)孽子心を墜し、海上に遷客たり、隴陰に流戍たるあり。此人但悲風の(二八)汨起するを聞き、血下りて衿を霑し。亦復た酸を含み歎を茹ひ、(二九)銷落湮沈す。若廼ち騎跡を疊ね車軌を屯ね、黃塵地を匝り歌吹四に起るも、煙斷え火絕え、骨を泉裏に閉ぢざるはなし。已ぬる哉、春草暮れて秋風驚き、秋風罷んで春草生じ、綺羅畢りて池館盡き、琴瑟滅えて丘隴平なり。古より皆死あり、恨を飮み聲を呑まざるはなし。

【一九】敬通。馮衍、字は敬通、後漢の明帝、敬通が才、其實に過ぐるを以て、抑へて用ひず、故に田里に歸る。抵は拒むこと。
【二〇】孺人。大夫の妻の稱。
【二一】脫略。輕易なり。
【二二】跌宕。放逸なり。
【二三】中散。官名中散大夫なり。嵇康、中散大夫たり、呂安の事の爲に獄に下され、遂に誅戮せらる。康神氣自若たり。
【二四】濁醪。濁酒なり。
【二五】靑霞。靑霞奇意とは志高きをいふ。
【二六】脩夜。長夜なり。
【二七】孽子。庶子なり。
【二八】汨起。風の疾き貌。
【二九】銷落湮沈。死亡すること。

【大意】敬通、明帝に拒まれて田里に歸るや、門を閉ぢて出でず、左に妻を顧み右に嬰兒を顧み、

公卿を輕侮し文史を愚弄し、遂に恨を呑んで歿し、長恨盡くることとなし。中散大夫嵇康の獄に下さるるや、神氣發揚して濁醪を酌み素琴を彈ず。其誅に就くや、雲日之が爲に光なく康の志氣獨り高し。然も永遠の眠に入る。豈亦恨まざらんや。若夫れ孤臣涕を落し、庶子心を痛め、海上に遷客となり、隴陰の謫戍する者に至りては、悲風を聞いて血涙を垂れ、慘歎を抱いて死に就かざるはなし。又榮華の公子、車騎を列ね、鐘鼓を陳ねし身も、其の歡樂を棄てて死に就くこと、煙火の消滅するが如く、骨を泉壤に埋む。是れ實に陽春去りて悲秋來り、綺羅琴瑟既に斷絕して池館丘隴崩壞せるが如し。豈恨まざらんや。古より人誰か死せざらん。是亦悲恨すべきなり。

別の賦　江文通

黯然として銷魂する者は唯別のみ。況んや秦呉の(一)絕國にして、復た燕宋の千里なるをや。或は春苔始めて生じ、乍ち秋風蹔く起る。是を以て(二)行子腸斷え、百感悽惻す。風蕭蕭として響を異にし、雲漫漫として色を奇にし、舟水濱に凝滯し、車山側に(三)逶遲し、櫂(四)容與して詎ぞ前まん、馬(五)寒鳴して息まず。(六)金觴を掩ひて誰にか御めん。

【一】絕國。遠國なり。
【二】行子。行人なり。
【三】逶遲。小留の貌。
【四】容與。進まざる貌。
【五】寒鳴。悲鳴なり。
【六】金觴。黃金の杯。

(七)玉柱を横へて軾を霑す、居人愁へ臥し、(八)怳として亡ふあるが若し。日壁に下りて彩を沈め、月軒に上りて光を飛ばす。紅蘭の露を受くるを見、(九)青楸の霜に離ふを望み、層楹を巡りて空しく掩ひ、錦幌を撫して虚しく涼み、離夢の(一〇)躑躅するを知り、別魂の飛揚するを意ふ。

【大意】人をして銷魂せしむる者は別離に如くはなし。況んや秦呉燕宋の如き、遠隔の地に至りては、別恨特に深し。殊に春秋に於て最も切なりとなす。風雲愁を含み舟車進まず、斑馬悲み嘶くの時、行く者は金觴を掩ひ、玉瑟を捨て、車に登りて去れば涕涙軾を沾し、居る者は閨を掩ひて臥し、怳然として心を失ひ、高柱を巡りて涙を掩ひ、錦帳を撫でて悲嘆し、行客躊躇して進まず、別魂飛揚して安からざるを想ふ。

故に別は一緒なりと雖も、事には(一一)萬族あり。(一二)龍馬銀鞍、(一三)朱軒繡軸、(一四)東都に帳飲し、客を(一五)金

【七】玉柱。玉の琴柱。
【八】怳。心を失ふ貌。
【九】青楸。楸は木の名。
【一〇】躑躅。進まざる貌。
【一一】萬族。萬類なり。種類の多きこと。
【一二】龍馬。馬の八尺以上なるを龍といふ。
【一三】朱軒。朱塗の輿。
【一四】東都。長安の東門なり。漢の疏廣疏受、官を辭して其郷に歸る。時に公卿大夫以下祖道を設け、東都門外に供帳す。
【一五】金谷。地名。石崇の金谷詩序に余元康六年、青徐諸軍事征虜將軍トナル、別廬アリ河內縣金谷澗中ニ在リ、時ニ征西將軍王詡長安ニ還ラントス、余衆賢ト共ニ澗中ニ送ルとあり。

谷に送るが若きに至りては、(一六)琴羽張りて簫鼓陳り、(一七)燕趙歌つて美人傷み、珠と玉と暮秋に豔に、羅と綺と上春に嬌なり。駟馬の(一八)仰秣を驚かし、(一九)淵魚の赤鱗を聳ぐ。手を分ちて涕を銜むに造り、咸寂寞として神を傷ましむ。乃ち劍客恩に慙ぢ、少年士に報ゆるあり。(二〇)韓國趙厠、(二一)吳宮燕市、慈を割き愛を忍び、邦を離れ里を去り、泣を瀝いで共に訣れ、血を抆ひて相視、征馬を驅りて顧みず、行塵の時に起るを見る。方に感を一劍に銜む。價を(二二)泉裏に買ふにあらず。(二三)金石震ひて色變り、(二四)骨肉悲んで心死す。或は乃ち邊郡未だ和せず、(二五)羽を負ひ軍に從ふ。(二六)遼水極なく(二七)鴈山雲に參る。閨中風暖に、陌上草薰り、日天を出でて影を曜かし、露地に下りて文を騰げ、(二八)朱塵の照爛たるを鏡にし、(二九)青氣の烟熅たるに襲く。桃李を攀ぢて別るる

【一六】琴羽。琴の羽聲、羽は細き聲なり。

【一七】燕趙。國名。この二國には美女多し。故に美女の稱とす。

【一八】仰秣。韓詩外傳に瓠巴瑟ヲ鼓スレバ六馬仰イデ秣フとあり。

【一九】淵魚。韓詩外傳に伯牙琴ヲ鼓スレバ淵魚出デテ聽クとあり。

【二〇】韓國は聶政が韓の相俠累を刺殺したる事。趙厠は豫讓が厠中にて趙襄子を刺殺さんとせし事。

【二一】吳宮。專諸の吳王僚を宮中にて殺したる事。燕市は荊軻の燕の太子丹の爲に秦王を刺殺さんとしたる事。

【二二】泉裏。黃泉なり。

【二三】金石云云。荊軻、武陽と秦に入る。秦王燕の使を見る鼓鐘竝び發す。武陽大に恐れて面色死灰の如し。

【二四】骨肉。聶政が俠累を刺すや、自ら面を破り眼を抉り腹を屠りて死す。其誰なるを知る者なし。政の姊曰く、此れ妾が弟聶政なりと。其旁に自殺す。

【二五】羽。箭なり。

【二六】遼水。川の名。

【二七】鴈山。山の名。

【二八】朱塵。華筵なり。

【二九】青氣は香爐の烟。烟熅は香烟の升る貌。

に忍びず、愛子を送りて羅裙を霑す。

【大意】故に別離は一なりと雖も、その種類は千差萬別なり。今左に之を擧げん。貴公子の銀鞍に跨り朱軒に乘り、都門に別飲し、金谷に送別するが如きは、琴瑟鐘鼓を陳ね、燕趙の美人歌唱して別離を悲み、珠玉の粧暮秋に輝き、綺羅の衣上春に映じ、駟馬は仰ぎ、淵魚は出で、其樂聲の洋洋たるを聽くも、忽ち涕を銜んで東西に分るるに至りては、咸暗默して心を傷ましめざるはなし。又聶政の俠累を刺し、豫讓の趙襄子を刺し、專諸の王僚を刺し、荊軻の秦王を刺せるが如く、劍客俠子の恩に報い仇を復するあり。此れ皆父母妻子に辭し、遠く郷里を去り、血涙を飲んで別をなし、馬を驅りて疾く走り、敢て反顧せず。ただ飛塵の揚るを見るのみ。此れ皆國士の義に感ずるの致す所にして、敢て死後の名を求めんとするにあらず。鐘鼓を聞いて顏色を變じ、兄弟悲んで心を喪ふも亦宜なり。若夫れ邊境安からず。弓矢を負ひて遠征し、遼水の限なきを渡り、鴈山の雲を仰ぐ者の如きは、日閨中の華筵を照し、薰草爐中の香氣に代るの時、桃李の芳園を棄てて、胡地の風塵に入るに忍びず。其父母亦愛子を送りて衣を沾すべし。

一たび絶國に去るが如きに至りては、詎ぞ相見るの期あらん。喬木を故里に視、(三〇)北梁に訣れて永く

【三〇】北梁。別離の地をいふ。楚辭に北梁ニ決レテ永ク辭スとあり。

辭す。左右魂動き親賓涙滋し。荊を班きて恨を贈ぶべく、惟樽酒のみ悲を叙ぶ。秋鴈の飛ぶ日に値ひ、白露の下る時に當りては、怨んで復た怨む遠山の曲、去りて復た去る長河の湄。又君は（三一）淄右に居り妾は（三二）河陽に家するが若きは、（三三）瓊珮の晨照を同うし、金爐の夕香を共にせしも、君（三四）綬を千里に結び、（三五）瑤草の徒に芳しきを惜む。幽閨の琴瑟に慙ぢ、高臺の（三六）流黃を晦うす。春宮此の青苔の色に閟られ、秋帳茲の明月の光を含み、（三七）夏簟淸くして晝暮れず、（三八）冬釭凝りて夜何ぞ長き。（三九）織錦の曲ありて泣已に盡き、廻文の詩ありて影獨り傷む。

【大意】一たび絶遠の地に去る者の如きは、復た相見るの期あるべからず。因つて鄕里の喬木を顧戀し、北梁に訣れて永訣す。左右親賓亦之が爲に涙を垂れ、ただ草を路側に敷きて坐し、置酒して以て別離の恨を伸ぶ。鴈露の秋に至る毎に、遠山の隈、長河の湄に在りて、永く望懷の涙を濺ぐ。又夫妻の離居する者の如きは、嘗て春閨に在りて瓊珮金爐を共にせるも、夫は千里に仕官して、身を瑤草の芳しきに比し、妻は空閨を守りて琴瑟を張らず、帳帷

【三一】淄右。地名。
【三二】河陽。地名。
【三三】瓊珮。腰に佩ぶる玉。
【三四】綬。印綬なり、綬を結ぶとは仕官すること。
【三五】瑤草。香草なり。
【三六】流黃。絹の帳なり。
【三七】夏簟。簟はタカムシロ、夏の敷物なり。
【三八】冬釭。冬夜の燈。
【三九】織錦。織錦回文詩序に竇韜ハ秦州ノ人ナリ、妻蘇氏ヲ娶ル、苻堅ノ時沙漠ニ徙サル、去ルニ臨ミ更ニ娶ラザルヲ誓フ、沙漠ニ至リ更ニ婦ヲ娶ル、蘇氏錦ヲ織リ廻文ノ詩ヲ作リ以テ之ニ贈ルとあり。

を垂れて高臺に獨居し、春は青苔の門を封ずるに任せ、秋は帳を擧げて明月に悲み、夏は簟に坐して日の長きをかこち、冬は孤燈を挑げて深更に坐し、錦を織りて廻文の詩を作り、以て夫に贈るに至る。

儻くは(四〇)華陰の上士、服食して仙に還るあり。術既に妙なれども猶ほ學び、道已に寂なれども未だ傳はらず。(四一)丹竈を守りて顧みず、金鼎を錬りて方に堅し。鶴に駕りて漢に上り、鸞を驂にして天に騰り、蹔く萬里に游び、少く別れて千年なり。惟れ世間の別を重んずる、主人を謝すること(四二)依然たり。下に(四三)芍藥の詩、(四四)佳人の歌、(四五)桑中の衞女、上宮の陳娥あり。春草碧色にして、春水淥波あり。君を南浦に送り、傷めども之を如何せん。乃ち秋露珠の如く、秋月珪の如くなるに至りては、明月白露、光陰往來し、子と別れて、思心徘徊す。是を以て別方は定まらざれども、別理は千名あり。別あれば必ず怨み、怨あれば必ず盈つ。人をして意奪はれ神駭き、心折け骨

【四〇】華陰。列仙傳に修羊公ハ魏人ナリ、華陰山下ノ石室ノ中ニ隱レ、黃精ヲ取リテ之ヲ食フとあり。

【四一】丹竈。仙人の服用する所の仙藥を錬る竈。丹とは仙藥なり。

【四二】依然。變りなきこと。

【四三】芍藥。草花の名。詩經に維レ士ト女ト、伊レ其レ相謔ムレ、之ニ贈ルニ芍藥ヲ以テスとあり。

【四四】佳人。漢の李延年の歌に北方ニ佳人アリ、絕世ニシテ獨立云云とあり。

【四五】桑中。詩經の桑中篇に我ヲ桑中ニ期シ、我ヲ上宮ニ要シ、我ヲ淇上ニ送ルとあり。注に桑中、上宮ハ男女相期スルノ地とあり。衞陳は國の名。娥は美女なり。

驚かしむ。(四六)淵雲の墨妙、〔皆〕(四七)嚴樂の筆精、(四八)金閨の諸彥、(四九)蘭臺の羣英、賦に凌雲の稱あり、辯に(五〇)雕龍の聲ありと雖も、誰か能く暫離の狀を摹し、永訣の情を寫す者あらんや。

【大意】深山に隱れて仙道を脩むる者の如きは、術既に妙なるも猶ほ怠らず、道既に通ぜるも未だ傳授を受けず、金丹を錬りて志力益堅固なり。一旦鸞鶴に乘りて天に升り、遠く萬里に遊び、千年を經るも尙ほ還らず。ただ俗人は別離を重んずるが故に、主人の別を悲むこと依然たり。又佳人の才子に別るるあり。春草萋萋として春水綠なる時、情人を南浦に送るや、心を傷ましむるも亦如何ともすべからず。光陰往來して悲秋に至れば、愁心を抱いて徘徊す。以上述ぶる所の如く、別離の狀一ならず、其理また千種萬樣なり。夫れ別あれば怨み、怨あれば心に盈つ。是を以て人をして心魂を摧かしむ。文筆に長ずるの士と雖も、詳に別離の情狀を摹寫すること能はざるなり。

【四六】淵雲。王褒、字は子淵、揚雄、字は子雲。
【四七】嚴樂。嚴安、徐樂、共に文章家なり。
【四八】金閨。金馬門なり。著作の官署なり。
【四九】蘭臺。臺の名、亦文學の官署なり。
【五〇】雕龍。彫鏤して龍文を成すこと。

巻の第九

賦　壬

論文

文の賦並序　陸士衡

余毎に才士の作る所を觀、竊に以て其用心を得るあり。夫れ其の言を放にし辭を遣ること、良に變多きも、㈠妍蚩好惡、得て言ふべし。自ら文を屬する毎に尤も其情を見る。恆に意物に稱はず、文意に逮ばざるを患ふ。蓋し知るの難きにあらず、能くするの難きなり。故に文の賦を作りて、以て先士の㈡盛藻を述べ、因つて作文の㈢利害の由る所を論ず。他日殆んど其妙を曲盡すと謂ふべし。斧を操りて㈣柯を伐るに至りては、則を取ること遠からずと雖も、夫の手に隨ふの變の若きは、良に辭を以て逐ひ難し。㈤蓋し能く言ふ所の者、此に具すと云爾。

【一】妍蚩。美惡なり。
【二】盛藻。美文なり。
【三】利害。好惡といふが如し。
【四】柯。斧の柄なり。詩經に柯ヲ執リ柯ヲ伐ル。其則遠カラズとあり。
【五】蓋し云云。文章の變化は一一言辭を以て盡す能はざれども、言辭に盡し得る點は悉く此に述べたりとなり。

中區に佇ちて以て玄覽し、情志を（六）典墳に頤ひ、四時に遵つて以て逝くを歎き、萬物を瞻て思紛る。落葉を勁秋に悲み、（七）柔條を芳春に喜び、心（八）懍懍として以て霜を懷き、志（九）眇眇として雲に臨み、世德の（一〇）駿烈を詠じ、（一一）先人の淸芬を誦し、文章の（一二）林府に游び、麗藻の（一三）彬彬たるを嘉し、慨として篇を投じて筆を援り、聊か之を斯文に宣ぶ。

【大意】余志を立てて深く文章を覽、情を典籍に養ひ、四時の往來に遵つて萬物の變化を見、或は落葉を悲み或は柔條を喜び、霜を懷き雲に臨んで心を高潔にし、古今人の述作を詠誦し、心に得る所あり。因つて筆を援りて斯の賦を作る。

【六】典墳。書籍なり。
【七】柔條。柔かき枝。
【八】懍懍。寒き貌。
【九】眇眇。遠き貌。
【一〇】駿烈。俊美なり。
【一一】先人。先哲なり。
【一二】林府。府は庫なり。多く集れる處。
【一三】彬彬。文章の貌。
【一四】收視反聽。視聽せざること。
【一五】耽思傍訊。心を靜にして考ふること。
【一六】曈曨。明かなる貌。
【一七】昭晣。明かなる貌。
【一八】羣言は羣書なり。瀝液は涓滴なり。
【一九】怫悅。出で難き貌。
【二〇】聯翩。落ちんとする貌。
【二一】翰鳥。飛鳥なり。

其の始めや皆（一四）收視反聽、（一五）耽思傍訊して、精八極に騖せ、心萬仞に游ぶ。其の致るや情（一六）曈曨として彌〻鮮に、物（一七）昭晣にして互に進み、（一八）羣言の瀝液を傾け、六藝の芳潤を漱ひ、天淵に浮んで以て安流し、下泉に濯いで潛浸す。是に於て沈辭（一九）怫悅として、游魚の鉤を銜んで重淵の深きを出づるが若く、浮藻（二〇）聯翩として、（二一）翰鳥の繳

に纓りて（二二）曾雲の峻きより墜つるが若く、百世の闕文を収め、千載の遺韻を採り、朝華を已に披けるに謝り、（二三）夕秀を未だ振かざるに啓き、古今を須臾に觀、四海を一瞬に撫す。然る後義を選び部を按じ、辭を考へ（二四）班に就く。景を抱く者は咸く叩き、響を懷く者は畢く彈じ、或は枝に因りて以て葉を振ひ、或は波に沿つて源を討ね、或は隱に本づいて以て顯に之き、或は易きを求めて難きを得、或は（二五）虎變して（二六）獸擾し、或は（二七）龍見して（二八）鳥瀾し、或は（二九）妥帖して施し易く、或は（三〇）岨峿して安からず。澄心を罄して以て思を凝らし、衆慮を眇にして言を爲し、天地を（三一）形内に籠め、萬物を筆端に挫き、始には（三二）燥吻に躑躅し、終には（三三）濡翰に流離し、理は（三四）質を扶けて以て幹を立て、文は條を垂れて繁を結ぶ。信に情貌の差はざる、故に毎に變じて顏に在り。思樂に涉れば其れ必ず笑ひ、方に哀を言ひて已に歎き、或は（三五）觚を操りて以て（三六）率爾なり、或は毫を含んで（三七）邈然たり。

【二二】曾雲。層雲なり。
【二三】夕秀。秀は華なり。
【二四】班。次序なり。
【二五】虎變。虎の如く變ずること。易經に大人ハ虎變ス、其文炳カナリとあり。
【二六】獸擾。獸の驚亂するが如きこと。
【二七】龍見。龍の現はれて光あるが如きなり。
【二八】鳥瀾。水鳥の波瀾に浮ぶが如きこと。
【二九】妥帖。落着きのよきこと。
【三〇】岨峿。齟齬に同じ。
【三一】形内。文章の形式の内。
【三二】燥吻はかわける唇端。躑躅は進まざる貌。
【三三】濡翰はうるほへる筆。流離は潤ひ流るゝ貌。
【三四】質。本根なり。
【三五】觚。筆の如きもの。
【三六】率爾。文速に成るをいふ。
【三七】邈然。文の成ること遲きをいふ。

【大意】始め文を思ふや、視聽を止めて專思傍求し、心を高遠の境に馳す。其の至るに及んでは、情既に鮮に物も亦明にして其文乃ち成る。因つて羣書の精彩色澤を取りて之を潤飾す。更に心思を天淵地泉に浮沈して、務めて深遠ならんことを求むれば、沈辭の出づること游魚の鉤を銜んで重泉より出で來るが如く、文藻の湧くこと飛鳥の繳に罹りて天上より墜ち來るが如し。かくて古人の遺文を探り、其の既に用ひたるを捨て、其の未だ用ひざるを取り、乃ち義理を選擇し部次を按比して之を綴り、光景を抱く者は必ず之に觸れて文理を求め、音響を含む者は必ず之を擊ちて文意を發し、枝を詠じては其葉を發せんことを思ひ、情を波に流しては其源を討ねんことを求め、之を隱に本づけて遂に顯に行き、之を易に求めて更に難を得、文彩龍虎の章の如く、鳥獸の動亂するが如く、或は穩健にして事に當り、或は齟齬して乖異多し。因つて沈潛反覆し考慮を盡して言を成し、天地萬物を籠めて之を筆端に收む。始めは乾唇を出で難しと雖も、終には紙上に流露す。先づ理を立てて次に詞を擇ぶこと條を垂れて後葉を結ぶが如し。よく心情を寫し出せば、喜顏色に溢れ、樂めば笑ひ哀めば歎き、其の成ること或は速に或は遲し。

伊れ（三八）茲事の樂むべき、固に聖賢の欽ふ所なり。虛無に課して以て有を責め、寂寞を叩いて音を求

【三八】茲事。文章なり。

め。(三九)緜邈を尺素に函み、(四〇)滂沛を寸心に吐き、言之を恢にして彌ゝ廣く、思之を按じて愈ゝ深く、(四一)芳蕤の馥馥たるを播き(四二)青條の森森たるを發し、粲として風のごとく飛んで(四三)猋豎し、鬱として雲のごとく(四四)翰林に起る。體に萬殊あり、物に一量なく、(四五)紛紜として揮霍し、形狀をなし難し。辭は才を程して以て伎を效し、意は(四六)契を司りて匠をなし、有無に在りて(四七)僶俛し、淺深に當りて讓らず。方を離れて(四八)員を遯ると雖も、形を窮めて相を盡さんことを期す。故に夫の目に誇る者は奢を尙び、心に愜ふ者は當を貴び、窮を言ふ者は隘なく、達を論ずる者は唯曠なり。詩は情に緣りて(四九)綺靡なり。賦は物を體して(五〇)瀏亮たり。(五一)碑は文を披いて以て相質なり。(五二)誄は纏緜として悽愴なり。銘は(五三)博約にして溫潤なり。(五四)箴は頓挫して淸壯なり。(五五)頌は優游して以て(五六)彬蔚なり。論は精微にして朗暢なり。(五七)奏は平徹にして以て閑雅なり。說は(五八)煒

【三九】緜邈は遠大なり。尺素は小さき白絹。
【四〇】滂沛。廣大なり。
【四一】芳蕤。蕤は花の垂るる貌。馥馥は芳香の貌。
【四二】青條。青き枝。
【四三】猋豎。疾風の如く立つこと。
【四四】翰林。筆の林なり。
【四五】紛紜は亂るる貌。揮霍は疾き貌。
【四六】契。要點なり。
【四七】僶俛。俯仰なり。
【四八】員。圓なり。
【四九】綺靡。精妙なり。
【五〇】瀏亮。淸明なり。
【五一】相質。姿の質素なること。碑は以て德を叙す、故に文質相半す。
【五二】誄。死を哀む文なり。
【五三】博約。事博にして文約なり。
【五四】箴は訓戒の文なり。頓挫は抑折なり。
【五五】頌。功德をほむる文。
【五六】彬蔚。華盛の貌。
【五七】奏。上書の文。
【五八】煒爗。明曉なり。

燁にして譎誑なり。區分れて茲に在りと雖も、亦邪を禁じて放を制し、辭達して理擧らんことを要す、故に(五九)冗長を取ることなし。

【大意】夫れ文章は天下の樂事にして、聖賢の欽慕する所なり。有象を虛無の中に求め、聲音を無聲の中に發し、遠大の事をも尺素の上に含み、廣大の事をも寸心の間に現し、芳華の馥郁たるが如く、枝條の森森たるが如く、風の飛ぶが如く雲の起るが如し。而して其體種種ありて一樣ならず。一名狀し難きも、文辭は才を見して以て巧を致し、意は理要を得るを以て宗となし、有無の中に俯仰し、淺深其當を得るを尙ぶ。方圓の形なしと雖も、よく物の形象を盡すを期す。故に人目を眩せんとする者は、浮艷の詞を尙び、趣意を得んとする者は理に當るを貴び、窮賤を言ふ者は其說狹隘ならざるはなく、通達を論ずる者は其言放曠ならざるはなし。詩は人情を曲盡して綺麗に、賦は物象を體現して淸明に、碑は文質相半し、誄は繁密悲愴に、銘は事博くして文約に、箴は抑折して淸壯に、頌は縱逸にして華盛に、論は緻密にして明暢に、奏は通徹にして高雅に、說は明辯にして詭誑なり。其體相分ると雖も、浮艷を避け放慢を忌み、辭は其意を達し、理は事に稱ふを尙び、冗長を尙ばず。其の物たるや姿多く、其の體たるや屢〻遷る。其の意を會するや巧を尙び、其の言を遣るや姸を貴

【五九】冗長。煩多なり。

ぶ。音聲の迭に代るに暨んでは、五色の相宣ぶるが若し。(六〇)逝止の常なきと雖も、固に(六一)崎錡として便じ難し。苟に變に達して(六二)次を識らば、猶ほ流を開いて以て泉を納るるが如し。如し機を失つて後に會すれば、恆に末を操りて以て(六三)顚に續ぎ、(六四)玄黃の秩序を謬る。故に(六五)淟涊として鮮ならず。或は仰いで(六六)先條に偪り、或は俯して(六七)後章を侵し、或は辭害ありて理(六八)比し、或は言順にして義妨ぐ。之を離るれば則ち雙び美しく、之に合すれば則ち兩ながら傷る。(六九)殿最を(七〇)錙銖に考へ、去留を(七一)毫芒に定む。苟に(七二)銓衡の裁する所、固に繩に應じて其れ必ず當る。或は文繁く理富めども、意(七三)指適せず。極りて兩ながら致すなく、盡きて益すべからざるとき、片言を立てて要に居る、乃ち一篇の(七四)警策なり。衆辭の條ありと雖も、必ず茲を待つて績を效す。亮に功多くして累寡し、故に足るを取りて易へず。或は藻思(七五)綺合して、淸麗(七六)芊眠なり、

【六〇】逝止。去留といふが如し。
【六一】崎錡。安からざる貌。
【六二】次。次序なり。
【六三】顚。巓に同じ、首なり。
【六四】玄黃。黑色と黃色。
【六五】淟涊。鮮明ならざる貌。
【六六】先條。先成の科條。
【六七】後章。後出の章句。
【六八】比。輔なり。
【六九】殿最。下功を殿といひ、上功を最といふ。
【七〇】錙銖。微少なる重さの名。
【七一】毫芒。芒は稻の穗先なり微細なること。
【七二】銓衡。秤量すること。
【七三】指適。適は中なり。文意の指す所の事に適中せざるをいふ。
【七四】警策。警は戒、策は鞭なり。馬に鞭ちて足を疾からしむる如く、片言を用ひて文意の鮮明を加ふるをいふ。
【七五】綺合。綺綵の文章を合するが如きなり。
【七六】芊眠。光色の盛なる貌。

炳として（七七）縟繡の若く、悽として繁絃の若く、必ず擬する所に殊ならず、乃ち闇に（七八）曩篇に合ふ。予が懷に（七九）杼軸すと雖も、他人の我に先んぜんことを怵る。苟に廉を傷りて義を愆る、亦愛すと雖も必ず捐つ。

【大意】文には姿體多くして一樣ならず、故に妥帖ならざる時は屢ゞ其體を變改す。ただ意を現すは巧を尙び、辭を使ふは美を尙ぶ。音韻よく聲調に合へば五色の文章を成すが如し。隨つて去留取捨常ならず。按排宜しきを得ること極めて難し。苟も變に通じ次序を誤ることなければ、流を開いて泉を納るるが如し。若し旨意機を失つて後に會合すれば、常に尾を持して首に續ぎ、玄黃の順序を謬りて文彩を亂すが如く、文意の鮮明を害するに至る。變改の際、或は先成の科條を害し、或は後出の章句を侵し、或は辭に害あれども理は當り、或は辭は順美なるも理に妨あることあり。若し此弊を免るるを得ば、辭理ともに美なるも、此の兩弊を併せ受くる時は辭理ともに傷る。故に文を作る時は辭句の上下を考量し、其の去留取捨を決するは、極めて微細の點に於てす。若し銓衡裁制宜きを得ば、其文よく繩墨に叶ひ義理に當る。或は文長く理當れども、旨意適中せず、理既に極りて復た致すべきなく、言又盡きて增

【七七】縟繡。五色の備れるを縟といふ。

【七八】曩篇。古人の作れる文章。

【七九】杼軸。機を織るに喩ふ。杼は機の横絲を卷ける筆を入れて行るもの、ヒなり。軸は機の縱絲を受くるもの。

すべからざることあり。此時一辭を用ひて其要を得るあり。之を一篇の警策と謂ふ。衆辭既に條序ありと雖も必ず此の警策を待ちて功績を致すなり。眞に功多くして累句少し。故に足ることを一篇に取りて亦改易すべからず。或は文彩綺繡の如く、音韻繁絃の如きも、辭句古人の篇章に暗合することあり。此時に於ては縱令其の機杼己より出づと雖も、古人の我に先だちて用ひたるを如何せん。强ひて之を用ふれば廉恥を害し義心に悖る。故に必ず割愛して棄て去るべきなり。

或は(八〇)苕のごとく發し(八一)穎のごとく竪ち、衆を離れ致を絕ち、形逐ふべからず、響(八二)係を爲し難く、(八三)塊として孤立して特り峙ち、常音の緯する所にあらず。心(八四)牢落して偶なく、意徘徊して揥る能はず。石玉を韞んで山暉き、水珠を懷いて川媚び、彼の(八五)榛楛の翦ることなき、亦榮を集翠に蒙る。(八六)下里を白雪に綴るも、吾亦夫の(八七)偉とする所を濟す。或は言を(八八)短韻に託し、窮迹に對して孤り興り、俯しては寂寞として友なく、仰いでは寥廓として承くるなく、偏絃の獨り張れるに譬へ、淸唱を含んで應ずるなし。或は辭を(八九)瘁音に寄せ、言徒に靡にして華ならず、(九〇)妍蚩を混じて體を成し、良質を

【八〇】苕。草の名。
【八一】穎。禾穗なり。
【八二】係。繫ぎ止むること。
【八三】塊。獨立の貌。
【八四】牢落。心の次序を失ふ貌。
【八五】榛楛。皆木の名。
【八六】下里は鄙野なる音曲。白雪は高尙なる音曲。
【八七】偉。美なり。
【八八】短韻。小文なり。文小にして事寡し。故に窮迹といふ。
【八九】瘁音。纖微憔悴の音。
【九〇】妍蚩。美醜なり。

累ねて瑕をなし、(九一)下管の(九二)偏疾に象たり。故に應ずと雖も和せず。或は理を遺てて以て異を存し、徒に虚を尋ねて微を逐ひ、言は情寡くして愛鮮く、辭は浮漂して歸らず。猶ほ絃(九三)幺にして(九四)徽急なるが如し。故に和すと雖も悲まず。或は奔放して諧合し、務めて(九五)嘈囋として(九六)妖冶に、徒に目を悦ばして俗に偶すれば、固に聲高くして曲下る。(九七)防露と(九八)桑間とを寤る。又悲しと雖も雅ならず。或は清虚にして以て婉約なり、毎に煩を除いて濫を去り、(九九)大羹の遺味を闕き、(一〇〇)朱絃の清氾なるに同じ、一唱して三歎すと雖も、固に既に雅にして豔ならず。

【大意】或は一句超越して苕穎の發せるが如く、衆辭と離絕し趣致を障害し、形響の追係し難きが如く、塊然として獨り佳にして常音の能く經緯する所にあらず。序其宜きを失ひ、偶對を求むべからざるあり。然れども石美玉を藏すれば、山必ず光あり、水明珠を含めば川必ず媚あるが如く、榛楛も翦ることなければ亦榮色ありて、鬱然の青を成すが如し。故に拙句を以て佳句に對するは、下里の鄙曲を白雪の高曲に綴るが如きも、亦彼の美とする所を濟

【九一】下管。堂下にて吹く笛。禮記に升リテ清廟ニ歌ヒ、下リテ象ヲ管スとあり。
【九二】偏疾。一方のみ急速なること。
【九三】幺。小なり。
【九四】徽。調なり。
【九五】嘈囋。浮艶の聲なり。
【九六】妖冶。美麗なり。
【九七】防露。未だ詳ならず。蓋し淫曲ならん。
【九八】桑間。禮記に桑間濮上ノ音ハ亡國ノ音ナリとあり。
【九九】大羹は肉汁なり。遺味は餘味なり。
【一〇〇】朱絃。禮記に清廟ノ瑟ハ朱絃ニシテ疏越ナリとあり。清氾は淡雅なり。

すに足る。或は小文短章、事寡くして偶なく、俯して求むるも寂寞として友なく、仰いで求むるも寥廓として應なく、譬へば偏絃の獨り張れるが如く、清曲の應なきが如きあり。或は纖微の音を用ひ、徒に侈靡にして華麗ならず、美惡混淆して一體を成し、良質を累ねて瑕をなし、下管の獨り急速なるが如く、應ずと雖も和諧せざることあり。或は理要を遺てて小異を存し、務めて虚飾をなして纖細ならんことを求め、情愛少く浮辭漂蕩して、事の實に歸著せざることあり。是れ猶ほ絃の小にして調の急なるが如し。故に和諧すと雖も悲愴ならず。或は奔放して和諧を求め、務めて浮艶の辭を弄し、俗人の目を悅ばさんことを期すれば、其聲高しと雖も其曲鄙野なり。猶ほ防露桑間の如し。故に悲愴なりと雖も高雅ならず。或は文少くして質多く、務めて淸約ならんことを期して、繁縟を避けんとすれば、大羹の餘味なく朱絃の淡雅なるが如く、たとひ一唱三歎の妙あるも艷麗の趣なし。

若夫れ〔一〇一〕豐約の裁、〔一〇二〕俯仰の形、宜きに因り變に適へば、曲に〔一〇三〕微情あり。或は言拙にして喩巧に、或は理朴にして辭輕く、或は故に襲りて彌〻新に、或は濁に沿りて更に淸く、或は之を覽て必ず察し、或は之を姸いて而後精し。譬へば猶ほ舞者の節に赴いて以て袂を投じ、歌者の絃に應じて聲

【一〇一】豐約は文質なり。裁は制なり。
【一〇二】俯仰。上下なり。
【一〇三】微情。微は妙なり。

を遺るが如し。是れ蓋し(一〇四)輪扁も言ふを得ざる所、亦(一〇五)華說の能く精うする所にあらず。(一〇六)辭條と(一〇七)文律とを普くするは、良に予が膺の服する所なり。世情の(一〇八)常尤を練ばば、(一〇九)前脩の淑とする所を識らん。濬く巧心に發せりと雖も、或は欸を拙目に受く。彼の(一一〇)瓊敷と玉藻とは、中原に菽あるが若く、(一一一)橐籥の窮なきに同じ。天地と與にして竝び育す。此世に(一一二)紛藹すと雖も、嗟予が掬に盈たず。(一一三)挈瓶の屢ゝ空きを患へ、(一一四)昌言の屬ぎ難きを病ふ。故に(一一五)短韻に踸踔し、庸音を放にして以て曲を足し、恆に恨を遺して以て篇を終ふ、豈盈を懷いて自ら足れりとせんや。塵を蒙りて(一一六)缶を叩くを懼れ、顧つて笑を(一一七)鳴玉に取る。

【大意】字句の文質上下其宜きに叶ひ、便を逐ひて變改すれば、則ち委曲にして妙趣を得。或は言は拙なるも喩巧に、或は理は樸なるも辭は輕快に、或は故を化して新となし、或は濁を變じて淸と

【一〇四】輪扁。車輪を作る名人の名。莊子に出づ。輪扁曰く輪を斲ること徐なれば則ち甘くして固ならず、疾なれば則ち苦にして入らず、徐ならず疾ならざるは手に得て心に應ず、口言ふ能はざるなりと。
【一〇五】華說。凡そ言を發して功を成す能はざるをいふ。
【一〇六】辭條。文章の條流。
【一〇七】文律。文章の音律。
【一〇八】常尤。普通の過失。
【一〇九】前脩。前賢なり。
【一一〇】瓊敷、玉藻。文章の妙句をいふ。
【一一一】橐籥。ふいがう、鍛冶の道具なり。老子に天地之間、其レ猶ホ橐籥ノ如キカ、虛ニシテ屈セズ、動イテ愈出ヅ云云とあり。
【一一二】紛藹。繁多なるをいふ。
【一一三】挈瓶。小智なり。
【一一四】昌言。正言なり。
【一一五】踸踔。遲滯なり。
【一一六】缶。瓦器なり、之を擊てども鳴らず。
【一一七】鳴玉。玉磬を鳴らすこと。

なし、或は覽て明にし硏いて精うすること、恰も善舞者の節を趁ひて袖を擧げ、善歌者の絃に應じて聲を發するが如し。是の妙境に造るは口舌の能く說明し得る所にあらず。ただ普く古來文章の條流と、其聲調とを玩味すれば、己の服膺する所の法則を悟り得べく、時人の常過を練擇すれば、則ち古人の善しとする所を識るに足らん。文を作る者深く巧思を發すと雖も、或は拙者の笑を買ふことあり。抑〻文章の妙句は中原に菽あるが如く、槖籥の萬物を生ずるが如く、多く此世に存すれども、之を採りて我手に盈たす能はず。小智の人才思屢〻窮し、昌言を續くる能はず。故に小篇に遲滯し、常音に放情して足れりとなし、篇を終へて常に遺恨あり、自ら滿足するに至らず。恰も塵を蒙れる瓦器を擊ちて、玉磬を擊つ者の笑を招くが如きのみ。

若夫れ應感の會、通塞の(二八)紀は、來りて遏むべからず、去つて止むべからず、藏ること景の滅ゆるが若く、行くこと猶ほ響の起るがごとし。方に天機の駿利なる、夫れ何ぞ紛として理まらざる。思風胷臆に發し、言泉脣齒に流れ、(二九)紛葳蕤として以て(三〇)馺遝たり、唯(三一)毫素の擬する所のまゝなり。(三二)文徽徽として以て目に溢れ、音(三三)冷冷として耳に盈つ。其六情底滯して、志往き神留るに及んでは、(三四)兀たること枯木の若く、豁たること涸流の若し。(三五)營魂を覽りて

【二八】紀。綱紀なり。
【二九】紛葳蕤。盛美の貌。
【三〇】馺遝。壯なる貌。
【三一】毫素。筆紙なり。
【三二】徽徽。美なる貌。
【三三】冷冷。音の清き貌。
【三四】兀。動かざる貌。
【三五】營魂。魂魄なり。

以て(二二六)賾を探り、(二二七)精爽を頓して自ら求むるも、理(二二八)翳翳として愈〻伏し、思(二二九)軋軋として其れ(二三〇)抽づるが若し。是の故に或は情を竭して悔多く、或は意に率つて尤寡し。(二三一)茲物我に在りと雖も、余が力の勠する所にあらず。故に時に空懷を撫して自ら惋む。吾未だ夫の(二三二)開塞の由る所を識らざるなり。

【大意】 或は感應通塞去來して止まず。形影の滅沒するが如く、音響の發動するが如く、捉へんと欲して捉ふべからず、追はんと欲して追ふべからず、天機の駿利なるが如く、紛亂して理むべからざることあり。又或は思想の發すること風の如く、言辭の湧くこと泉の如く、胸臆に激し脣齒に動き、ただ筆紙の摸する所のままにして、華美清聲の文を成すことあり。情思停滯して志往くも神留まる時は、思の動かざること枯木の如く、空豁なること涸流の如く、魂魄を頓蓄して深理を探らんとするも、理愈〻埋伏して發せず、情思の出でざること心腸の露出せるが如くなることとあり。故に時としては情思を竭して猶ほ佳ならず、爲に悔多きことあり。時としては意に隨つて理通じ、爲に過尤の少きとあり。此事もと我に由ると雖も、我が力の如何ともし難き所なり。

【二二六】賾。おくふかき道理。
【二二七】精爽。左傳に心ノ精爽是チ魂魄トイフとあり。
【二二八】翳翳。暗き貌。
【二二九】軋軋。出で難き貌。
【二三〇】抽づ。成帝揚雄に詔して甘泉賦を作らしむ。思精苦困し倦んで小臥し、五臟外に出で、手を以て收めて之を納ると夢む。
【二三一】茲物。物は事なり。
【二三二】開塞。開は上文の天機駿利をいひ、塞は六情底滯をいふ。

故に懐を撫して自ら恨むに至る。かの開塞の由る所に至りては固より余の知る所にあらざるなり。伊れ茲文の用たる、固に衆理の因る所なり。萬里を恢にして閡なからしめ、(三三)億載に通じて津をなし、俯しては則を(三四)來葉に貽し、仰いでは象を古人に觀、(三五)文武を將に墜ちんとするに濟ひ、風聲を泯びざるに宣べ、塗遠きとして彌らざるはなく、理微なるとして綸めざるはなく、霑潤を雲雨に配し、變化を鬼神に象り、金石に被らしめて德廣く、管絃に流して日に新なり。

【大意】文章の效用たるや、固より衆妙の理を兼ね、萬里の遠きに通じ、億歲の長きに達し、或は法則を後世に傳へ、或は古人の遺法を觀るを得。故に文武の道を濟ひて地に墜ちざらしめ、風俗を宣暢して泯滅せざらしめ、遠きとして彌らざるはなく、微なるとして綸めざるはなく、その潤澤は以て雲雨に比すべく、其變化は以て鬼神に配すべし。故に或は之を金石に刻すれば功德益〻廣く、之を管絃に施せば聲譽日に新なり。

【三三】億載。億年なり。
【三四】來葉。後世なり。
【三五】文武。文王武王の道。

音樂

(一)洞簫の賦　(二)王子淵

夫の(三)簫幹の生ずる所を原ぬるに、江南の丘墟に于てす。(四)洞として條

【一】洞簫。樂器の名、漢書注に簫ノ底ナキ者ナリとあり。釋名に大ナル者ハ二十三管、長サ三尺四寸、小なる者ハ十六管、一ニ籟ト名ヅクと

暢にして節卒に、(五)標として敷紛にして以て(六)扶疎たり。徒に其の山側に旁へるを觀れば、則ち(七)嶇嶔巋崎、(八)倚巇迤巁たり。誠に悲むべきかな、其の安からざるや。(九)彌望儻莽、(一〇)聯延曠盪たり。又樂むに足るかな、其の敞閑なるや。身軀を(一一)后土に託し、萬載を經て遷らず、至精の(一二)滋熙を吸ひ、蒼色の潤堅を稟け、陰陽の變化に感じ、性命を(一三)皇天に附け、翔風蕭蕭として其末を遡り、迴江流川ありて其山に漑ぎ、(一四)素波を揚げて連珠を揮ひ、聲(一五)磑磑として淵に澍ぎ、朝露清冷にして其側に隕ち、玉液浸潤して其根に承け、孤雌寡鶴あり、其下に娛優し、春禽羣り嬉れ、其顚に翺翔し、秋蜩食はず、(一六)樸を抱いて長吟し、(一七)玄猨悲嘯し、其間に(一八)搜索し、幽隱に處りて(一九)奧屛たり、(二〇)密漠泊として以て(二一)㺚猭たり。惟れ詳に其(二二)素體を察するに、宜しく淸靜にして謐からざるべし。幸に諡して洞簫となるを得、

あり。

【一】王子淵。王褒、字は子淵。漢の蜀郡の人なり。宣帝に仕へて諫議大夫となる。

【三】簫幹。簫にする竹。

【四】洞は通なり。條暢は長く伸ぶること。

【五】標は直き貌。敷紛は茂盛の貌。

【六】扶疎。枝葉のひろがること。

【七】嶇嶔巋崎。山の峻險なる貌。

【八】倚巇迤巁。斜に平なる貌。

【九】彌望。見渡す限一面に。儻莽は廣き貌。

【一〇】聯延は相連ること。曠盪は廣き貌。

【一一】后土。土地なり。

【一二】滋熙。潤悅なり。

【一三】皇天。天なり。

【一四】素波。白波なり。

【一五】磑磑。水の石に激する聲。

【一六】樸。木の皮。

【一七】玄猨。黑き猿。

【一八】搜索。往來なり。

【一九】奧屛。屛は屏に同じ。奧まりたる處に屛居すること。

【二〇】密漠泊。密なる貌。

【二一】㺚猭。連延する貌。

聖王の渥恩を蒙る。（二三）惠して費さずと謂ふべし。天性の自然に因る。

【大意】簫を作る竹は江南の山に生じ、通長暢達にして節少く、莖直くして枝葉繁密なり。其の山側に立てるを觀るに、峻險の危地に生じて常に安からず。誠に悲むべきが如きも、其の相連延して生ずるを觀れば、其山高敞幽閑にして亦樂むべきに似たり。一たび根を大地に託するや、千載を經れども遷移せず。天地至精の氣を吸ひ、潤堅の翠色を呈し、四時の變化に因りて其性を變せず、風其梢を拂つて蕭蕭たり、流水其下に灌ぎて白波を揚げ、浪沫連珠の如く、其聲礚礚たり。天上の淸露に浴し、地下の津液に潤ひ、孤鶴其下に優游し、春禽其上に飛翔し、秋蟬樹皮に托して長吟し、黑猿其間に往來す。既に幽深隱僻の處に生じて茂密連延す。故に其本質たる、淸靜にして喧騷ならず。幸に洞簫となりて聖主の厚恩に浴すれば、自然の天性を發揮して劉亮たる淸韻を發し、人をして樂ましむ。是れ亦惠して費さざるものと謂ふべし。

是に於て（二四）般匠巧を施し、（二五）夔襄法に准ひ、帶るに象牙を以てし、其會合を提うし、（二六）鎪鏤離灑、（二七）絳

【二二】素體。本質なり。

【二三】惠して。論語に子曰ク・人ノ利スル所ニ因リテ之ヲ利ス、亦惠シテ費サザルニアラズヤ、とあり。

【二四】般匠。古の巧匠の名。

【二五】夔襄。夔は舜の時の樂官たり。襄は師襄、音律を善くす。

【二六】鎪鏤は彫刻すること。離灑は彫刻の貌。

【二七】絳脣。朱を以て簫口を飾るなり。

脣錯雜、(二八)鄰菌繚糾、羅鱗捷獵、(二九)膠緻理比、(三〇)挹抐擫㩶たり。是に於て乃ち夫の(三一)性昧の宕冥にして、生れながら天地の體勢を覩ず、白黑の貌形に闇く、憤(三二)伊鬱して酷だ𨡋へ、眸子の精を喪へるを愍へ、其思慮を舒ぶる所寡きものをして、專ら憤を音聲に發せしむ。故に吻吮ひて夫の(三三)宮商に値ひ、和(三四)紛離して其れ匹溢し、形(三五)旖旎として以て吹に順ひ、瞋(三六)啯咽として以て(三七)紆鬱たり。氣(三八)旁迕して以て飛射し、馳すること(三九)散渙として以て(四〇)遻律たり。趨ること從容として其れ(四一)勿述たり。騖すること(四二)合遝として以て(四三)詭譎なり。或は(四四)渾沌として(四五)潺湲たり。(四六)獵たること枚の折るるが若く、或は(四七)漫衍して駱驛し、(四八)沛焉として競ひ溢れ、(四九)啉慄密率、(五〇)掩として以て絕滅し、(五一)嗇霵瞱踕、(五二)跳然として復た出づ。

【二八】鄰菌。以下皆竹管の相連續する貌。
【二九】膠緻理比。竹の細密に相次ぐ貌。
【三〇】挹抐擫㩶。制に中る貌。
【三一】性昧宕冥。天性暗昧にして幽冥に過ぐる者、卽ち盲人なり。
【三二】伊鬱。憂の積りて通ぜざること。
【三三】宮商。音調の名。
【三四】紛離、匹溢。調和して音聲の四散すること。
【三五】旖旎。身を曲ぐる貌。
【三六】啯咽。頰をふくらす貌。其狀憤怒せるが如し。
【三七】紆鬱。憤る貌。
【三八】旁迕。聲の遍に出づる貌。
【三九】散渙。聲の分布する貌。
【四〇】遻律。和する貌。
【四一】勿述。逆迕する所なき貌。
【四二】合遝。盛多の貌。
【四三】詭譎。奇異なり。
【四四】渾沌。分れざる貌。
【四五】潺湲。水の流るる聲。
【四六】獵。聲なり。
【四七】漫衍は流溢する貌。駱驛は相連る貌。
【四八】沛焉。多き貌。
【四九】啉慄は聲の清爽なる貌。密率は安靜なる貌。
【五〇】掩。息を止むる貌。
【五一】嗇霵瞱踕。衆聲の疾き貌。
【五二】跳然。躍出する貌。

【大意】巧匠此竹を取り技巧を加へて簫を作り、樂師簫の法則を准度し、其會合の處を飾るに象牙を以てし、其口を飾るに朱を以てし、彫飾を施して文彩を錯雜せしめ、竹管の相連ること魚鱗の羅列するが如く、細密にして能く制度に叶ふ。乃ち天生の盲人にして天地白黑の體色を見ず、憤怒憂積して瞳子の精光なきを悲む者をして、心を專にして之を吹奏せしむ。（樂師は盲人なるを常とす）故に一たび之を吹奏するや、よく宮商の調に合ひ、淸韻相和して水の流るるが如く、乃ち其身を曲折して益〻吹奏に勉むれば、氣盛にして頰張り、恰も怒を含める者の如し。是に於て音聲四邊に散布し、一急一徐して或は渾沌として分れず、水聲の潺湲たるが如く、獵然として樹枝の折るるが如く、或は相連續して競ひ走るが如く、淸爽安靜なること須臾にして、忽ち將に絕滅せんとするや、衆聲躍然として復た起る。

若し乃ち、徐に其曲度を聽き、廉かに其賦歌を察すれば、(五三)啾咇喞として將に吟ぜんとし、行(五四)鍖銋として以て(五五)和囉し、風(五六)鴻洞として絕えず、(五七)優嬈嬈として以て(五八)婆娑たり、(五九)翩緜連として以て(六〇)牢落たり、(六一)漂として乍ち弃てて他をなし、(六二)要復して其(六三)蹊

【五三】啾は衆聲なり。咇喞は聲の出づる貌。
【五四】鍖銋。舒緩なり。
【五五】和囉。相雜る貌。
【五六】鴻洞。相連る貌。
【五七】優嬈嬈。柔弱なり。
【五八】婆娑。分散する貌。
【五九】翩緜連。聲の飛揚して相連ること。
【六〇】牢落。稀疎なること。
【六一】漂。浮き出づる貌。
【六二】要復。伺候といふが如し。
【六三】蹊徑。道路なり。歌の詞に喩ふ。

徑を遮り、(六四)謳謠と與にして相龢す。故に其巨音を聽けば、則ち周流氾濫し、幷包吐含すること、慈父の子を畜ふが若く、其(六五)妙聲は則ち淸靜(六六)厭瘱、順敍(六七)卑迖すると、孝子の父に事ふるが若し。(六八)科條譬類、誠に義理に應じ、(六九)澎濞慷慨、一に何ぞ壯士なる。優柔溫潤、又君子に似たり。故に其武聲は則ち雷霆の(七〇)轒輷として、(七一)佚豫して以て(七二)沸渭するが若く、其仁聲は則ち(七三)颽風の(七四)紛披容與して惠を施すが若し。或は(七五)雜遝して以て聚斂し、或は(七六)拔撒して以て奮棄し、悲んで(七七)愴怳として以て(七八)惻惐し、時に恬淡にして以て(七九)綏肆し、被いて(八〇)淋灑として其れ(八一)靡靡たり、時に橫潰して以て(八二)陽遂し、哀んで(八三)悁悁として懷ふべく、良に(八四)醰醰として味あり。

【大意】靜に其歌曲を聽察すれば、衆聲續出して將に吟ぜんとし、又舒緩にして相應和し、其聲相

【六四】謳謠。歌なり。
【六五】妙聲。微妙なる聲。
【六六】厭瘱。安靜深邃の貌。
【六七】卑迖。低くして滑かなること。
【六八】科條。名目なり。下文の仁聲、武聲等をいふ。譬類はタトヒなり、下文の壯士、君子等をいふ。
【六九】澎濞。波浪の相激する聲。
【七〇】轒輷。大聲なり。
【七一】佚豫。聲の疾き貌。
【七二】沸渭。聲の勇躍して定らざる貌。
【七三】颽風。南風なり。
【七四】紛披容與。和緩の貌。
【七五】雜遝。衆多なり。
【七六】拔撒。分散なり。
【七七】愴怳。悲む貌。
【七八】惻惐。傷悲すること。
【七九】綏肆。安くして緩かなること。
【八〇】淋灑。絕えざる貌。
【八一】靡靡。細好なり。
【八二】陽遂。淸通の貌。
【八三】悁悁。憂ふる貌。
【八四】醰醰。醇濃の貌。

連りて絶えず、優柔にして分散し、發揚して稀疎なり。忽ち舊調を棄てて奇聲をなし、歌者の聲を發するを伺ひて之と相和して音律を合す。故に其大聲を聽けば、周流氾濫して衆聲を併包し、和樂を吐含すること、慈父の愛情を以て其子を養ふが如く、其細聲を聽けば、清和安暢にして節度違ふことなく、恰も孝子の親に順なるが如し。其名目比類亦義理に應じ、その勇烈慷慨なるは壯士に類し、溫柔柔潤なるは君子に似、其武聲は雷霆の轟轟として勇躍するが如く、其仁聲は南風の溫和にして萬物を養ふが如し。或は衆聲忽ち聚るが如く、或は分散して奮迅するが如く、悲聲忽ちにして安縱となり、盛壯にして細密なるも一轉して縱橫潰亂し、再轉して清通し、哀韻悁悁として人を憂へしめ、醇濃にして味あり。

故に（八五）貪饕の者も之を聽けば、（八六）廉隅に、（八七）狼戾の者も之を聞けば懟みず。剛毅（八八）彊虣なるは仁恩に反り、（八九）嘽唌逸豫なるは其失を戒め、（九〇）鍾期牙曠も悵然として愕き立ち、（九一）杞梁の妻も其氣をなす能はず。（九二）師襄嚴春も敢て其巧を竄さず、（九三）浸淫なる叔子も其類に遠ざかり、

【八五】貪饕。貪慾なり。
【八六】廉隅。廉直なり。
【八七】狼戾。惡逆なり。
【八八】彊虣。强暴なり。
【八九】嘽唌逸豫。緩怠なること。
【九〇】鍾期。鍾子期なり、善く琴を聽く人。牙は伯牙、善く琴を鼓する人。曠は師曠、晉の音樂家なり。
【九一】杞梁。人名。琴操に杞梁妻歎ハ齊邑ノ杞梁殖ノ妻ノ作ル所ナリとあり。
【九二】師襄、嚴春。共に古の琴の名人なり。
【九三】浸淫。猶ほ漸冉の如し、相親附する意なり。毛萇詩傳に昔顏叔子獨リ室ニ處ル、隣ノ嫠婦又獨リ室ニ處ル、夜暴カニ風雨至リテ屋壞ル、婦人趨リテ叔子ニ至ル、之ヲ納レテ

(九四)囂頑なる朱均も愒れて復た慧に、(九五)桀跖鬻博も偏んで以て頓に額へ、(九六)參差を吹いて道德に入る。故に永く(九七)御して貴ぶべし。時に(九八)狡弄を奏すれば則ち彷徨翱翔し、或は留りて行かず、或は行いて留らず。(九九)憺怪爛漫として耦を亡ひ疇を失ひ、(一〇〇)薄索合沓し罔象相求む。故に音を知る者は樂んで之を悲み、音を知らざる者も怪んで之を偉とす。故に悲聲をなせば則ち愴然として累欷し、涕を撃ひ涙を抆はざるはなく、其の歡娛を奏すれば則ち(一〇一)憚漫衍凱、(一〇二)阿那腲腇せざる者なきのみ。是を以て(一〇三)蟋蟀蚸蠖も(一〇四)跂行喘息し、(一〇五)螻蟻蝘蜒も(一〇六)蠅蠅翊翊、(一〇七)遷延徙迤し、(一〇八)魚瞰雞睨し、喙を垂れて(一〇九)蜿轉し、(一一〇)瞪瞢して食を忘る。況んや陰陽の和に感じて、風俗の倫に化するをや。

燭ヲ執ラシメ、平旦ニ放ル、蒸盡キ屋ヲ掐イテ之ニ繼ギ、自ラ不辭ヲ避嫌セリト爲スとあり。

【九四】囂頑。左傳に心德義ノ經ニ則ラザルヲ頑トナシ、口忠信ノ言ヲイハザルヲ囂トナスとあり。朱は堯の子丹朱、均は舜の子商均、共に不肖の子なり。

【九五】桀跖は夏の桀王と盜跖なり。鬻は夏育なり、博は申博なり。共に勇者の名。

【九六】參差。洞簫なり。

【九七】御。服用なり。

【九八】狡弄。急曲なり。

【九九】憺怪は靜寂なり。爛漫は分散なり。

【一〇〇】薄索は迫求なり。合沓は聲の重累すること。罔象は餘聲なり。

【一〇一】憚漫衍凱。和樂の貌。

【一〇二】阿那腲腇。舒遲の貌。

【一〇三】蟋蟀、蚸蠖。皆蟲の名。

【一〇四】跂行は蟲の這ひ行くこと。喘息は息をつくことの急なるなり。

【一〇五】螻蟻、蝘蜒。蟲の名。

【一〇六】蠅蠅翊翊。遊行する貌。

【一〇七】遷延徙迤。退却する貌。

【一〇八】魚瞰雞睨。魚の如く視、雞の如く斜視するなり。

【一〇九】蜿轉。動く貌。

【一一〇】瞪瞢。視て辭ならざる貌。

【大意】故に之を聽けば、貪慾の人も清廉の士となり、暴惡の人も善に遷りて怨みず、强暴の人も慈恩に反り、怠惰の人も其過を戒め、鍾子期、伯牙、師曠も悵然として驚き、杞梁の妻も其氣調をなす能はず、師襄、嚴春も其巧を措く能はず、叔子の浸淫なるも其類に遠ざかり、不肖の子、惡虐の君、勇猛の士も、驚いて明慧となり、其惡性を敗壞するに至り、洞簫を吹奏して道德に入るを得。故に永く之を玩んで貴重すべきなり。時に急曲を吹奏すれば其聲逝止常なく、或は靜寂にして分散し、偶疇を失ひて漸く稀疎なり。因つて迫求して之を聽けば、時に餘聲ありて相集る。故に音を知る者は樂んで之を悲み、音を知らざる者も其清爽を怪んで之を偉とす。是を以て蟲類も之を聽けば忽ち感動して喙を垂れて徘徊し、視ること曠然として食を忘るるに至る。況んや陰陽の氣に感じ、風俗の理に遷るの人に於てをや。

亂に曰く、狀捷武の超騰(二一)踰曳、迅漂にして巧なるが若く、又流波の(二二)泡溲汎渫として　(二三)巇道に趨くに似たり。(二四)哮呷呟喚として　(二五)躋躓連絕し、(二六)淈として殄沌し、(二七)攪搜㶁捎、逍遙踊躍して、壞頹するが若く、(二八)優游流離、躊躇稽詣して、亦耽るに足る。(二九)頽唐とし

【二一】踰曳は躍りあがること。迅漂は急速なり。
【二二】泡溲汎渫。波の急なる聲。
【二三】巇道。けはしき道。
【二四】哮呷、呟喚。大聲なり。
【二五】躋躓は上下すること。
【二六】淈は亂るる貌。殄沌は分れざること。
【二七】攪搜㶁捎は水聲なり。逍遙は聲の遠きこと。踊躍は聲の高きこと。
【二八】優游流離は和緩にして分散する貌。躊躇稽詣は聲の留りて散ぜざる貌。
【二九】頽唐。聲の微なること。

て遂に往き、長く辭し遠く逝き、漂として還らず。」聖化を蒙るに賴り、從容として道に中り、樂んで淫せず。條暢洞達して、節操に中り、詩を終へ曲を卒へて、尚ほ餘音あり。吟氣遺響、(二〇)聯綿漂撇して、微風を生じ、(二一)連延駱驛し、變じて窮なし。

【大意】簫聲の狀たる、捷巧の人の空に超騰するが如く、又流波の嶮道を走るが如く、大聲斷續上下し淈然として混亂し、揚躍して物の崩壞墜落するが如く、和緩分散して亦耽玩するに足る。「其聲微にして遠く漂流して反らず」君王の聖化に賴りて幽山より採られ以て此器を成し、從容和樂して大道に中り、樂むと雖も荒淫せず。聲に條貫あり、通暢洞達して節操に中り、詩曲將に盡きんとするも尚ほ餘響あり。連綿として絕えざること縷の如し。

【二〇】聯綿は絕えざる貌。漂撇は餘響の少しく騰る貌。
【二一】連延駱驛。絕えざる貌。

舞の賦竝序

(一)傅武仲

楚の襄王既に(二)雲夢に游び、(三)宋玉をして(四)高唐の事を賦せしむ。將に置酒宴飲せんとし、宋玉に謂つて曰く、寡人羣臣に觴せんと欲す。

【一】傅武仲。名は毅、字は武仲、後漢の扶風茂陵の人。
【二】雲夢。楚の大澤の名。假に楚の襄王と宋玉との事を設けて、賦の端となせるなり。
【三】宋玉。楚の襄王の臣。
【四】高唐。樓觀の名。

何を以てか之を娛ましめんと。玉曰く、臣聞く歌は以て言を詠じ、舞は以て意を盡すと。是を以て其詩を論ずるは其聲を聽くに如かず。其聲を聽くは(五)其形を察するに如かず。(六)激楚、結風、陽阿の舞は、材人の(七)窮觀、天下の至妙なり。噫以て進むべきかと。王曰く、其れ(八)鄭を如何せんと。玉曰く、小大用を殊にし、(九)鄭雅宜きを異にす。弛張の度は聖哲の施す所なり。是を以て樂は(一〇)干戚の容を記し、雅は(一一)蹲蹲の舞を美し、禮は(一二)三爵の制を設け、頌は(一三)醉歸の歌あり。夫れ(一四)咸池、六英は、(一五)淸廟に陳し神人を協ふる所以なり。鄭衞の樂は、密坐を娛ましめ歡欣を接ふる所以なり。(一六)餘日の怡蕩は、以て民を風ふるにあらず。其れ何の害があらんやと。王曰く試に寡人の爲に之を賦せよと。玉曰く唯唯と。夫れ何ぞ(一七)皎皎たる閑夜、明月(一八)列として以て光を施し、(一九)朱火曄として其れ延起し、華屋を燿

【五】其形。舞容なり。
【六】激楚。以下皆楚の舞曲の名。
【七】窮觀。無上のみもの。
【八】鄭。鄭國の舞。論語に鄭聲ハ淫ナリとあり。
【九】鄭雅。淫聲と雅樂。
【一〇】干戚。干は楯、戚は斧なり。武舞の執る所なり。
【一一】蹲蹲。詩經小雅に坎坎トシテ我ニ鼓シ、蹲蹲トシテ我ヲ舞ハシムとあり。
【一二】三爵。三杯なり。禮記に君子ノ酒ヲ飮ムヤ禮三爵ニシテ油油トシテ以テ退クとあり。
【一三】醉歸。詩經魯頌に鼓ツコト咽咽タリ、醉ウテ言ニ歸リ、于ニ胥樂ムとあり。
【一四】咸池は黃帝の音樂。六英は帝嚳の音樂。
【一五】淸廟。天子の祖廟。
【一六】餘日は聽政の餘暇。怡蕩は怡悅放蕩なり。
【一七】皎皎。明なる貌。
【一八】列。光の盛なる貌。
【一九】朱火。燭なり。

して(二〇)洞房に熺なり。(二一)黼帳袪げて(二二)組を結び、(二三)鋪首炳として以て(二四)焜煌たり。茵席を陳ねて坐を設け、(二五)金罍を溢たして玉觴を列ね、(二六)觚爵を騰げて斟酌し、漫として既に醉ひて其れ(二七)樂康す。(二八)嚴顔和ぎて(二九)怡懌し、幽情形れて外に揚り、文人は其藻を懷くこと能はず、武毅は其剛を隱すこと能はず。(三〇)簡惰跳踃し般しんで(三一)紛拏し、(三二)淵塞沈蕩して恆常を改む。是に於て鄭女出で進み、(三三)二八徐に侍り、(三四)姣服麗を極め、(三五)姁婾態を致す。貌(三六)嫽妙にして以て(三七)妖蠱なり。紅顔曄として其れ華を揚げ、眉(三八)連娟として以て繞れるを增し、目(三九)流睇して波を橫へ、(四〇)珠翠的皪として焰燿し、(四一)華袿髾を飛ばして纖羅を雜へ、形影を顧みて自ら裝を整へ、微風に順つて(四二)若芳を揮ひ、朱脣を動かして(四三)清陽を紆し、音を亢げて高く歌ひ、樂の方を爲す。歌に曰く、予が意を攄べて以て觀を弘め、

【二〇】洞房。房室なり。
【二一】黼帳。錦のとばり。
【二二】組、帳帶なり。
【二三】鋪首。門扇の鎖す處。
【二四】焜煌。ひかりかがやくこと。
【二五】金罍。金を以て飾りし酒樽。
【二六】觚爵。皆杯なり。
【二七】樂康。たのしむこと。
【二八】嚴顔。王の嚴格なる顏。
【二九】怡懌。喜び樂むこと。
【三〇】簡惰は疎簡怠惰なり。跳踃は躍りあがること。
【三一】紛拏。相著きて牽引すること。
【三二】淵塞は深く滿つること。沈蕩は沈醉放蕩なり。
【三三】二八。十六人なり。
【三四】姣服。美服なり。
【三五】姁婾。和愉の貌。
【三六】嫽妙、美好なる貌。
【三七】妖蠱、淑豔なり。
【三八】連娟。細き貌。
【三九】流睇。斜に視ること。
【四〇】珠翠。珠玉及び翡翠の羽。的皪は玉の光なり。
【四一】華袿。美しき袖。髾は髻の飾なり。
【四二】若芳は杜若なり、香草の名。
【四三】清陽。眉目の間をいふ。

精靈の束ぬる所を繹め、緊急の絃張を弛め、(四四)末事の委曲を慢にし、(四五)恢炱の廣度を舒べ、細體の(四六)苛縟を闊にし、(四七)關雎の淫せざるを嘉し、(四八)蟋蟀の局促たるを哀み、(四九)泰眞の否隔を啓き、超として物を遺れて俗を度し、(五〇)激徵を揚げ清角を騁せ、舞操を贊け(五一)均曲を奏し、形態和ぎ神意協ひ、從容として得、志劫されずと。

【大意】明月の皎皎たる夜、燭火を列ねて堂室を照らし、錦繡の帳を擧げ鋪首を輝かし、茵席を陳ね、金樽と玉杯とを以て美酒を酌み、君臣相與に醉ひて和樂し、顏色和ぎ幽情發す。是に於てか文人は其辭藻を藏す能はず、武人は其剛勇を隱す能はず、皆醉ひて常度を失ふ。時に美女十六人隊を成して出で來る。容貌美豔にして光華發揚し、眉細くして益曲り、流睇すること秋波の横流するが如く、珠翠の光色人目を眩し、衣袖頭髮纖羅を雜ふ。影を顧みて衣紋をつくろひ、微風に因つて芳香を漂はし、朱唇を開き眉目を動かして高歌す。其歌に曰く、予が意窘束する所なり。今將に舞を觀て之を舒繹せんとす。乃ち緊急の絃を弛め、鄭聲を歌ふを廢め、度の廣大なる者は更に舒緩ならしめ、體の煩密なる者は之を疎闊ならしめ、關雎の淫せざるを嘉し、蟋蟀の

【四四】末事。鄭聲をいふ。
【四五】恢炱。廣大の貌。
【四六】苛縟。煩密なる貌。
【四七】關雎。詩經の篇の名。論語に關雎ハ樂ンデ淫セズとあり。
【四八】蟋蟀。詩經の篇の名。儉にして禮に中らざるを刺れる詩なり。局促は局量の小なる貌。
【四九】泰眞は太極の氣なり。否隔は通ぜざること。
【五〇】激徵、清角。雅曲の名。
【五一】均曲。雅曲なり。

小見を哀み、陰陽の氣閉塞隔絶する所は之を通せしめ、(呂氏春秋に陶唐氏の時、陰滯伏多く陽道壅塞す。乃ち舞を作りて之を宣導すとあり) 超然として世俗の外に出で、激徵、淸角の曲を以て舞の節操を贊揚し、雍容閒雅にして其大體を得、迫劫せずして安靜なりと。

是に於て節を蹈んで鼓陳り、意を舒べて自ら廣うし、心を(五二)無垠に游ばしめ、遠く思ひ長く想ふ。其の始めて興るや、俯すが若く仰ぐが若く、來るが若く往くが若く、(五三)雍容惆悵して、象をなすべからず。其の少しく進むや、翺るが若く行くが若く、竦るが若く傾くが若く、(五四)兀動して度に赴き、指顧して聲に應じ、羅衣風に從ひ、長袖交横し、駱驛として飛散し、(五五)颯沓として合幷し、(五六)翩䴈として燕のごとく居り、(五七)拉揩として鵠のごとく驚き、(五八)綽約閑靡、機のごとく迅くして體輕く、絶倫の妙態を姿にし、(五九)慤素の潔淸を懷き、(六〇)儀操を脩めて以て志を顯し、獨り思を杳冥に馳せ、山に在りては(六一)峨峨たり、水に在りては(六二)湯湯たり。志と遷化し、容虛しく生

【五二】無垠。無限なり。
【五三】雍容は和悅なり。惆悵は悲傷なり。皆舞の形狀なり。
【五四】兀動。杌然として動くこと。
【五五】颯沓。盤旋の貌。
【五六】翩䴈。輕き貌。
【五七】拉揩。飛ぶ貌。
【五八】綽約は美なる貌。閑靡は閑緩にして柔美なり。
【五九】慤素。貞質なり。
【六〇】儀操。容儀節操なり。
【六一】峨峨。山の高き貌。列子に伯牙琴ヲ鼓シ、志高山ニ登ルニ在リ、鍾子期曰ク、善イカナ峨峨乎トシテ太山ノ若シトあり。
【六二】湯湯。水の盛に流るる貌。列子に伯牙琴ヲ鼓シ、志流水ニ在リ、鍾子期曰ク、善イカナ湯湯然トシテ江河ノ若シトあり。

せず。詩を明にし指を表し、(六三)嘖息激昂し、氣は浮雲の若く、志は秋霜の如し。觀る者歎を增し、(六四)諸工當るなし。是に於て場を合せて遞に進み、次を案じて俟ち、材を揆べ妙を角べ、(六五)夸容乃ち理む。軼態横に出で、瑰姿譎く起り、(六六)般鼓を眄ては則ち淸眸を騰げ、(六七)哇咬を吐いては則ち皎齒を發し、行列を摛齊し(六八)經營切儗し、彷彿として神のごとく動き、廻翔して竦峙ち、擊つて策を致さず、蹈んで趾を頓かず。(六九)翼爾として悠に往き、闇ち復た輟み已む。

【大意】舞人鼓節に隨つて舞ひ、意を舒べて自ら廣うし、思を無限に馳す。其の始め起るや、俯仰來往し和悦悲傷して、變態一一述ぶべからず。其の少しく進むや、飛ぶが如く、行くが如く、擧るが如く傾くが如く、手指し目顧みて皆聲曲に應じ、羅衣長袖相連りて盤旋し、皆曲度と相合ひ、輕疾なること燕鵠の驚飛するが如く、機敏にして輕妙なり。かくて妙態を盡し貞質を含み、容儀節操を脩めて思を杳冥の間に馳せ、或は山の聳ゆるが如く、或は水の流るるが如く、よく歌者の心と遷化して自ら肆にすることなく、詩旨を表明して歎息激厲し、其志氣浮雲の高きが如く秋霜の凜たるに似たり。觀る者皆其妙技を歎賞し、敢て當る者なし。是に於て場中の舞人互に進んで己の順を待ち、出でて妙技を競ひ、鼓聲を

【六三】嘖息。嘖は喟に同じ、嘆息なり。
【六四】諸工。多くの樂師なり。
【六五】夸容。美容なり。
【六六】般鼓。鼓の名。
【六七】哇咬。諂豔の聲。
【六八】經營は往來の貌。切儗は肩を接して竝ぶこと。
【六九】翼爾。輕き貌。

聽いて淸眸を擧げ、艶聲を吐いて皓齒を現し、行列を指摘して齊整ならしめ、往來比肩して立ち、神仙の彷彿たるが如く、擊動すること驅策を待たず、足地を蹈んで頓足せず、悠然として進み、忽然として復た止まる。身を囘して還り入り、急節に迫るに及んでは、(七〇)浮騰累跪、(七一)跗蹋摩跌し、形を紆らし遠きに赴き、(七二)漼として摧折するに似たり。纖縠蛾のごとく飛び、(七三)紛猋として絕ゆるが若く、超趠して鳥のごとく集り、縱弛(七四)殟歿、(七五)蜲蛇蚺嫋、雲のごとく轉りて(七六)飄曶たり。體游龍の如く、袖素蜺の如く、(七七)瞭瞅して拜し、曲度究く畢り、遷延微笑し、退いて次列に復す。觀る者麗と稱し、怡悅せざるはなし。是に於て歡洽く宴夜にして、命じて諸客を遣る。(七八)擾攘して駕に就けば、僕夫策を正し、車騎竝び狎き、(七九)巃嵸として逼迫し、良駿逸足(八〇)搶捍して凌越し、龍のごとく驤りて橫に擧り、鑣を揚げ沫を飛ばす。馬材同じからず、各〻相傾奪し、或は埃を踰え轍に赴き、霆のごとく駭き電のごとく滅え、地を蹠み羣に遠ざかり、闇ち跳りて獨絕するあり。或は足を宛め怒を鬱にし、(八一)般桓して發せず、後に往きて先に至り、

【七〇】浮騰は跳躍なり。累跪は進み跪くこと。
【七一】跗蹋。足地を蹋むこと。摩跌は足を以て地を摩して跌を揚ぐること。
【七二】漼。迴る貌。
【七三】紛猋。飛揚する貌。
【七四】殟歿。舒緩の貌。
【七五】蜲蛇は斜に行くこと。姌嫋は長き貌。
【七六】飄曶。曶は忽に同じ。輕疾の貌。
【七七】瞭瞅。容を斂むること。
【七八】擾攘。爭ふ貌。
【七九】巃嵸。衆多の貌。
【八〇】搶捍。勇躍するなり。
【八一】般桓。逡巡なり。
【八二】逐末。先著者なり。馳逐する時は出發點を本とし、到著點を末とする故なり。

遂に(八二)逐末をなすあり。或は容に矜り儀を愛し、(八三)洋洋習習として、遲速意を承け、控御緩急、車音雷の若く、鶩騁して相及ぶあり。(八四)駱漠として歸り、雲のごとく城邑に散ず。天王(八五)燕胥し、樂んで泆せず、神を娯ましめ老を遺るるは、永年の術なり。(八六)優なるかな游なるかな、聊か以て日を永うす。

【大意】既に輟めて復た身を廻らし、舞場に入り急節に應じて舞ふ。或は跳躍して進み跪き、或は足を擧げ地を摩し、或は其身を飛揚して屈折するが如く、衣袖翩翩として蛾の飛ぶが如く、疾速なると鳥の如く、舒緩なること雲の如く、體は龍の躍るが如く、袖は白虹の浮ぶが如し。舞將に終らんとして徐に容態を收めて拜し、曲度是に於て悉く畢る。乃ち微笑して退き、其席に歸る。觀る者其美麗を稱し、歎賞せざるはなし。夜宴久しく樂窮るや、始めて諸客を去らしむ。諸客先を爭うて駕を求むれば、僕御策を正して主を待ち、車騎相聚りて雜沓す。駿馬奔馳して横に走り、鑣を擧げ沫を飛ばし、或は塵埃を越えて車轍に赴き、その聲雷霆の如く、疾速にして比なきあり。或は足を屈し怒を含んで躊躇し、後れ發して遂に先著するあり。或は容儀を整へ、莊敬和調して遲速意に任せ、行驟して相及ぶあり。駱驛

【八三】洋洋は莊敬の貌。習習は和調の貌。
【八四】駱漠。駱驛紛漠なり。
【八五】燕胥。樂むこと。
【八六】優游。ゆつたりとする貌。家語に孔子歌ツテ曰ク、優哉游哉、聊以卒歳とあり。

として城中に散ず。大王宴樂して淫せず、其の精神を娛ましめ、老の將に至らんとするを忘る。是れ實に長年の術なり。

長笛の賦　竝に序

(一)馬季長

融既に博く(二)典雅を覽、數術に精核す。又性、音律を好み、能く琴を鼓し笛を吹く。而して(三)督郵となりて(四)留事なし。獨り郿縣平陽の(五)鄔中に臥す。(六)雒客あり逆旅に舍り、笛を吹いて(七)氣出、精列の相和をなす。融(八)京師を去りて年を踰ゆ。暫く聞いて甚だ悲んで之を樂み、王子淵、枚乘、劉伯康、傅武仲等の簫琴笙の頌を追慕す。唯笛のみ獨りなし。故に聊か復た數に備へて長笛の頌を作る。其辭に曰く、

惟れ(九)鐘籠の奇生せる、(一〇)終南の陰崖に于てし、(一一)九成の孤岑に託し、萬仞の(一二)石磎に臨み、特

【一】馬季長。馬融、字は季長、後漢の扶風茂陵の人。鄭玄盧植、皆其弟子なり。
【二】典雅。典籍雅頌なり。
【三】督郵。官名。
【四】留事。事務の留滯すること。
【五】鄔中。邑里の中なり。
【六】雒客。洛陽より來りし旅客。
【七】氣出。歌錄に古ノ相和歌八曲アリ、氣出一、精列二云云とあり。
【八】京師。卽ち洛陽なり。
【九】鐘籠は竹の名。奇生とは生の奇質なるをいふ。
【一〇】終南。山の名。
【一一】九成。九層なり。
【一二】石磎。深溪なり。磎は音キ、叶韻。

り　(一三)箭稾ありて莖立し、獨り風を極危に聆く。(一四)秋潦其下趾を漱ぎ、冬雪(一五)揣として其枝を封じ、(一六)巓根跱ちて櫱刖たり、迴飈に感じて將に頽れんとす。夫れ其(一七)面旁には則ち(一八)重巘增石、(一九)簡積頵砡し、(二〇)兀嶁狋㠘として傾昃倚伏し、(二一)庨窌巧老として港洞せる坑谷あり。(二二)嶰壑澮峴、嵌窞たる巖覆あり。(二三)運裛穿洿して岡のごとく連り嶺のごとく屬き、(二四)林簫蔓荊、(二五)森槮たる柞樸あり。是に於て山水猥り至り、(二六)渟涔障潰れ、(二七)頤淡滂流し(二八)碓投して穴に瀺ぎ、(二九)爭湍苹縈して(三〇)汩活澎濞たり。波瀾(三一)鱗淪として(三二)窊隆詭戾し、(三三)瀉瀑して沫を噴き、犇り遯れて碣突し、其山を搖演し、其根を動杌すると歲ごとに五六たび至る。是を以て(三四)間介蹊なく、人迹到ると罕なり。猨蜼晝吟じ鼯鼠夜叫

【一三】箭稾。竹幹なり。
【一四】秋潦。秋の雨水。下趾は根なり。
【一五】揣。聚る貌。
【一六】巓根。根の山巓に生ずるもの。櫱刖は危き貌。
【一七】面旁。面は正面。旁は側傍。
【一八】重巘。重れる山。增石は層石なり。
【一九】簡積。大に積ること。頵砡は石の頭を齊うする貌。
【二〇】兀嶁狋㠘。嶮峻の貌。
【二一】庨窌巧老。深空の貌。港洞は相通ずること。
【二二】嶰壑澮峴。寬大にして相連る貌。嵌窞は深暗なり。巖覆は窟穴なり。
【二三】運裛。迴旋して相纏ふこと。穿洿は潤顯の貌。
【二四】林簫。林篠なり。蔓荊はイバラなり。
【二五】森槮。長き貌。柞樸は木の名。
【二六】渟涔。池なり。
【二七】頤淡滂流。水の搖蕩して廣大なる貌。
【二八】碓投。水車の如く奔擊すること。
【二九】爭湍。急浪なり。苹縈は水の迴旋する貌。
【三〇】汩活。疾き貌。澎濞は波の聲。
【三一】鱗淪。相次ぐ貌。
【三二】窊隆。高下の貌。詭戾は乖違の貌。
【三三】瀉瀑。沸湧の貌。
【三四】間介。溪間なり。

び、寒熊頷を振ひ（三五）特麏昏髟し、山雞晨に羣り野雉朝に雊き、偶を求め子に鳴き、悲號長嘯し、（三六）由衍として道を識り、（三七）嗺嗺として讙譟し、其左右を經涉し、其前後に（三八）嘵聒する者、晝夜にして息むことなし。夫れ固に危殆險巇の迫る所、衆哀集悲の積る所なり。

【大意】篔簹の竹は終南山陰に生じ、根を九層の孤峰に託し、下萬仞の深溪に臨み、直幹亭亭として立ち、清風來りて之を拂ひ、秋水其根を潤し、冬雪其枝を封ず。其の附近には重嶂高石ありて傾側起伏し、深空にして坑谷に通じ、其谷は深暗にして相連續し、篠荊柞樸等其間に雜生す。迸水山上より來り、奔流して隄岸を潰決し、擊投して穴を成し、急湍廻戾して山石の間に奔走し、風水搖引して竹根を動かすこと一歲に五六度なり。是に於て幽深にして蹊徑なく、人迹及ばず。鳥獸晝夜其間に吟嘯し、口を動かし鬣を振ふ。固に險阻悲哀の集積せる處なり。

故に其の淸風に應ずるや、（三九）纖末奮ひ籦きて（四〇）錚鐄謍嗃たり。（四一）紘瑟の柱を促にし、（四二）號鐘の高調するが若し。是に於て放臣逐子、（四三）弃妻離友、（四四）彭胥伯奇、（四五）哀姜孝己、下風に攢り

【三五】特麏。獸の名。昏は視なり。髟は鬣なり。
【三六】由衍。行く貌。
【三七】嗺嗺。鳴く聲。
【三八】嘵聒。亂れ鳴くこと。
【三九】纖末。竹の梢なり。
【四〇】錚　謍嗃。大聲なり。
【四一】紘瑟。紘は急絃なり。
【四二】號鐘。琴の名。楚辭に伯牙ノ號鐘ヲ破ルとあり。
【四三】弃妻。夫に棄てられし妻。
【四四】彭胥。彭は彭咸。殷の賢臣、紂を諫めて從はれず、遂に出奔せり。胥は伍子胥、吳の賢臣なり。吳王を諫めて聽かれず、劍を賜りて死す。伯奇は尹吉甫の子なり、吉甫後妻の言を信じ、孝子伯奇を疑

て精を收め耳を注け、(四六)靁歎頽息して、膺を搯ちて(四七)擗摽し、泣血泫流し交横して下り、通旦寐ぬるを忘れ、自ら禦むる能はず。是に於て乃ち(四八)魯般・宋翟をして雲梯を構へ浮柱を抗げしめ、纎根を蹉み(四九)篠纆を跋み、(五〇)峭阤に膺き陘阻に腹ひて、其上に逮び、匍匐して伐り取り、本末を挑截し、規摹して(五一)彠矩し、(五二)夔襄・律を比し、(五三)子野・呂を協へ、(五四)十二畢く具り、(五五)黄鐘を主となし、撟し揉めて斤械ひ、剸剡きて度擬らへ、(五六)鏓硐頽墜し表を程し裏を朱にし、名を定めて笛と曰ひ、以て賢士に觀す。東階に陳ぬれば八音倶に起る。食へば擧げ(五七)雍をもて徹し、君子に(五八)勸侑す。然る後退いて(五九)黄門の高廊に理む。(六〇)重丘の宋灌、(六一)名師の郭

ひて之を放逐す。

【四五】哀姜。魯の文公の夫人なり、文公死して其子立つを得ずして殺さる、夫人怨んで齊に歸り、市を過ぎて哭す、故に哀姜といふ。孝己は殷の高宗の子なり、高宗後妻の言を用ひて之を逐ふ。

【四六】靁歎。雷の如き大聲を發し歎くこと。

【四七】擗摽。胸を拊つ貌。

【四八】魯般、宋翟。皆古の巧智の人なり。

【四九】篠纆。竹の細き根。

【五〇】峭阤。峻崖なり。

【五一】彠矩。法度に合ふやうにすること。

【五二】夔襄。夔は舜の樂官たりし人。襄は師襄、琴を孔子に敎へし人。

【五三】子野。晉の樂師なり。呂は律なり。

【五四】十二。六律六呂、合せて十二律といふ。音樂の調子なり。

【五五】黄鐘。十二律の一なり。

【五六】鏓硐。刀を以て節を通ずること。頽墜は竹屑を落すこと。

【五七】雍。詩の名、天子食ふ時は樂を奏す。膳を撤する時は雍を歌ふ。

【五八】勸侑。食をすすむること。

【五九】黄門。役所の名、樂人の居る處なり。

【六〇】重丘。縣の名。宋灌は皆姓なり。

【六一】名師。名ある樂人。郭張は姓なり。

張あり。(六二)工人巧士、業を肄ひ聲を脩む。

【大意】清風來れば竹梢振ひて聲をなし、鳴琴の高調するが如し。是に於て放逐せられし臣子、離棄せられし妻友、竹風の下に集り、精思を收め其耳を傾注し、胸を拊ちて嘆息し泣血泫然として流る。乃ち巧智の人をして、凌雲の梯を作り、浮空の柱を立てしめ、以て此山に登り、竹根を踏み胸腹を峻崖に磨りて其頂に達し、竹莖を伐り取りて、法度に合せて切斷し、樂師をして律呂に協はしめ、曲れるを矯め、外は飾を加へず、內は塗るに朱漆を以てし以て笛となす。之を東階に列ぬれば八音倶に起り、天子の食ふや之を吹奏して食を進め、畢るや雍を歌ひて膳を撤し、然る後黃門に退きて樂を習ふ。

是に於て游閑の公子、(六三)暇豫の王孫、心に(六四)五聲の和を樂み、耳に(六五)八音の調を比し、乃ち相與に其庭に集る。夫の(六六)曲胤の繁會叢雜を詳觀するに、何ぞ其の富めるや。(六七)紛葩爛熳として誠に喜ぶべきなり。(六八)波散廣衍にして實に異とすべきなり。(六九)掌距劫遌して又怪むに足れり。(七〇)啾咋嘈啐として(七一)華羽に似たり。

【六二】工人。樂工なり。
【六三】暇豫。遊樂なり。王孫は公子といふが如し。
【六四】五聲。宮商角徵羽なり。
【六五】八音。金石絲竹匏土革木なり。
【六六】曲胤。曲調なり。
【六七】紛葩爛熳。聲の亂れて多き貌。
【六八】波散廣衍。聲の散じて遠き貌。
【六九】掌距劫遌。聲の逆ひて相撃つなり。
【七〇】啾咋嘈啐。大聲の貌。
【七一】華羽。鷄冠子に南方ノ萬物、羽ヲ華ニスとあり。故に樂に南方の音あれば聲烈きなり。

(七二)絞灼激として以て轉切し、(七三)震鬱怫として以て(七四)憑怒し、(七五)瓡として碭駭して以て奮肆なり。氣(七六)噴勃して以て布覆し、乍ち(七七)時蹠して以て(七八)狼戾し、靁(七九)叩鍛して(八〇)岌峇たり、正に(八一)瀏漂として以て風冽く、(八二)寒薄湊會して(八三)節を凌ぎ、馳せて斯に趣いて躓に赴く。

【大意】是に於て公子王孫の閑遊する者、之を聽いて五聲八音の和調を悅び、常に其庭に集る。其の曲調を詳觀するに、其聲の衆盛なるは喜ぶべく、散じて四方に布くは異とすべく、相觸擊するは怪とすべく、南音を交へて急切に、鬱積して散せず、忽ち突破して奮揚し、雷霆の殷殷たるが如く、槌聲の丁丁たるが如く、淸風の寒冽なるが如く、衆聲集りて會合し、曲節に乘じて溢れ出で、忽ち散じて低落す。

爾して乃ち聲を聽き形を類するに、狀流水に似、又飛鴻に象たり。(八四)氾濫溥漠して(八五)浩浩洋洋たり。(八六)長轡遠引し(八七)旋復廻皇し、(八八)充屈鬱律、瞋菌碨柍、(八九)酆琅磊落、駢田磅唐たり。(九〇)取予時に適ひ(九一)去就方あり。(九二)洪殺衰序、

【七二】絞灼激。聲の大なる貌。
【七三】震鬱怫。蘊積すること。
【七四】憑怒。大に怒ること。
【七五】瓡。聲の貌。碭は突なり。
【七六】噴勃。氣笛中に結んで聲散ぜざるなり。
【七七】時蹠。聲忽ち地に起るなり。
【七八】狼戾。壯勇なり。
【七九】叩鍛。槌にて打つこと。
【八〇】岌峇。聲なり。
【八一】瀏漂。淸涼の貌。

【八二】寒薄。寒風の迫ること。
【八三】節。曲節なり。
【八四】氾濫。水の溢るゝ貌。溥漠は水を拂つて飛ぶ聲。
【八五】浩浩洋洋。水の盛なる貌。
【八六】長轡遠引。轡は被なり、相被り引いて絕えざること。
【八七】旋復廻皇。去留定まらざること。
【八八】充屈。以下皆聲の鬱結して散ぜざる貌。
【八九】酆琅。以下皆聲の四散す

(九三)希數必ず當り、微風纖妙にして存するが若く亡するが若く、(九四)蓋滯抗絕すれば中ごろ息んで更に裝ひ、(九五)奄忽として滅沒し、(九六)曄然として復た揚る。或は乃ち(九七)聊慮固護、美を專にし工を擅にし、(九八)絲簧を漂凌し鼓鐘を(九九)覆冒す。或は乃ち(一〇〇)植持すること(一〇一)縰纚のごとく、(一〇二)佁儗寬容なり。簫管備に擧り(一〇三)金石竝び隆なるも、(一〇四)倫を相奪ふなく、以て(一〇五)八風を宣べ、律呂既に和し哀聲五たび降き、曲終り(一〇六)闋盡き、餘絃更に興り、繁手累に發し、(一〇七)密櫛疊重し、(一〇八)踾踧攢仄、蜂のごとく聚り蟻のごとく同り、衆音猥積して以て厥終を迭る。然る後少く息ひ暫く怠り、(一〇九)雜弄間奏し、聽を易へ耳を駭し、搖演する所あり。(一一〇)安翔駘蕩、從容闡緩、(一一一)惆悵怨懟、(一一二)窊圔窴赦たり。(一一三)聿皇として求索し

る貌。

【九〇】取予。取は聲を取ること。予は曲を沒すること。

【九一】去就。節度なり。

【九二】洪殺。増減なり。褎序は次序なり。

【九三】希數。希は稀なり。數は繁なり。

【九四】蓋滯。聲の沈滯すること。抗絕は極絕なり。

【九五】奄忽。忽然なり。

【九六】曄然。盛なる貌。

【九七】聊慮固護。精心專一の貌。

【九八】絲簧。絲は琴瑟なり。簧は笙なり。漂凌は凌駕すること。

【九九】覆冒。掩蔽なり。

【一〇〇】植持。聲立ちて持續すること。

【一〇一】縰纚。纚なり。

【一〇二】佁儗。寬容の貌。

【一〇三】金石。鐘と磬なり。

【一〇四】倫。等倫なり。

【一〇五】八風。八方の風。

【一〇六】闋。曲の終をいふ。

【一〇七】密櫛。櫛の齒の如き繁密の聲。

【一〇八】踾踧。迫蹙の貌。攢仄は聚る貌。

【一〇九】雜弄。種種の曲。

【一一〇】安翔。以下聲の閑緩なる貌。

【一一一】惆悵怨懟。悲み怨むこと。

【一一二】窊圔窴赦。聲の低く緩き貌。

【一一三】聿皇。疾き貌。求索は相合擊するなり。

乍ち近く乍ち遠く、危に臨んで自ら放なり、頽るるが若くにして復た反り、(二四)蚡緼蟠紆、絪宛蜿蟺、(二五)箮笏抑隱、行いて諸變に入り、(二六)絞槩汩湟、五音代ゝ轉じ、(二七)挼挐捘藏、遞に(二八)相乘邅し、(二九)商を反し徵を下し、每に各ゝ善を異にす。

【大意】今笛聲を聽きて之を形容すれば、流水の洋洋たるが如く、又鴻雁の水を拂つて飛ぶに似たり。其聲長く續きて絕えず、去留定まらず、高低常ならず、忽ち鬱結して散せず、忽ち宏大にして四散し、或は聲を取り或は曲を沒し、一一節度に協ひ、增減次序繁疏の法、皆其理に當り、纖細にして、在るが如く無きが如く、沈滯其極に達すれば、中途にして曲を息めて氣を調へ、緩く吹けば微にして滅沒するが如く、氣を厲して激すれば復た隆然として起る。心を專一にして妙技を盡せば、琴瑟を凌駕し鼓鐘を壓倒し、聲立ちて持續すること絲のごとく、又閑緩にして寬容なり。簫管鐘磬も其倫を奪ふなく、ここに以て八風を宣通し、律呂既に和し、哀聲五たび退き、此に一曲を終ふれば、絃聲更に細密繁多にして其終曲を送る。少憩の後更に雜曲を吹奏すれば、復た耳を驚かし心を陶然たらしめ、閑緩たる低聲忽ち轉じて急調と化し、糾

【二四】蚡緼。以下皆聲の糾亂する貌。
【二五】箮笏抑隱。手の孔に循ふ貌。
【二六】絞槩汩湟。音の相切磨する貌。
【二七】挼挐。挼は揺なり。挐は索持なり。捘は推なり。藏は抑なり。
【二八】相乘邅。回轉すること。
【二九】商、徵。調子の名。

紛錯綜、備に變調の妙を極む。故に（二二〇）曲引を聆く者は、法を節奏に觀、度を（二二一）句投に察し、以て禮制の踰越すべからざるを知り、（二二二）篴弄を聽く者は、思を古昔に遙にし、志を（二二三）怛惕に虞り、以て（二二四）長戚の間居する能はざるを知る。故に其義を論記し、其象を協比すれば、彷徨縱肆、（二二五）曠瀁敞罔なるは老莊の（二二六）槩なり。溫直優毅なるは孔孟の方なり。（二二七）激朗清厲なるは（二二八）隨光の介なり。（二二九）牢刺拂戾なるは（二三〇）諸賁の氣なり。節解句斷なるは（二三一）管商の制なり。條決繽紛たるは（二三二）申韓の察なり。繁縟絡繹たるは（二三三）范蔡の說なり。（二三四）犛櫟銚憒なるは（二三五）晳龍の惠なり。上は法を（二三六）韶箾南籥に擬し、中は度を（二三七）白雪淥水に取り、下は制を（二三八）延露巴人に釆る。是を以て尊卑都鄙、賢愚勇懼、魚鼈禽獸まで、之を聞く者は耳を張りて鹿のごとく駭き熊のごとく經し、鳥のごとく伸び鵄のごとく視、狼のごとく顧み、拊譟踊躍せざるはなく、各〻

【二二〇】曲引。引も亦曲なり。
【二二一】句投。章句なり。
【二二二】篴弄。小曲なり。
【二二三】怛惕。惻愴の聲なり。
【二二四】長戚。長憂なり。
【二二五】曠瀁敞罔。寛大閑幽の貌。
【二二六】槩。節といふが如し。
【二二七】激朗。激切にして明朗なること。清厲は淸くして烈しきこと。
【二二八】隨光。卞隨、務光なり。莊子に見ゆ。介は節操なり。
【二二九】牢刺。牢落乖戾なり。
【二三〇】諸賁。諸は專諸、賁は孟賁、皆古の勇士。
【二三一】管商。管仲、商鞅なり。
【二三二】申韓。申不害。韓非。
【二三三】范蔡。范雎。蔡澤。
【二三四】犛櫟銚憒。分別節制の貌。
【二三五】晳龍。鄧晳、公孫龍。皆古の辯士なり。惠は慧なり。
【二三六】韶箾。舜の樂。南籥は文王の樂なり。
【二三七】白雪淥水。古の雅曲の名。
【二三八】延露巴人。小曲の名。

（二三九）其齊を得、人々欲する所を盈し、皆中和に反り以て風俗を美にす。（二四〇）屈平も樂國に適き（二四一）介推も還りて祿を受け、（二四二）澹臺も尸を載せて歸り、（二四三）皐魚も其哭を節し、（二四四）長萬も逆謀を輟め（二四五）渠彌復た惡からず、（二四六）蒯聵能く敵を退け、（二四七）不占も節鄂を成し、王公は其位を保ち、（二四八）隱處は林薄に安んじ、宦夫は其業を樂み、士子は其宅を世にし、（二四九）鱏魚水裔に喁し、駟馬を仰がしめ玄鶴を舞はしむ。斯時に于いてや（二五〇）緜駒も聲を呑み伯牙も絃を毀り、（二五一）瓠巴も柱を弭り、（二五二）磬襄も懸を弛め、留り眎て（二五三）瞠眙し、累に稱へ屢ゝ讃め、容を失ひ席より墜ち、搏拊して雷のごとく抃ち、（二五四）焦眇睢維し、涕洟流漫す。是の故に、以て靈を通じ物を感ぜしめ、神を寫べ意を喩し、誠を致し志を效し、興事を率作し、

【二三九】其齊。その分限なり。
【二四〇】屈平。楚の屈原なり。讒に由りて退けられ、幽憤の極汨羅に投じて死す。
【二四一】介推。介之推なり、晉の文公の臣なり。隱れて仕へず。
【二四二】澹臺。澹臺滅明なり。其子溺死すれども、其尸を收めず。事博物志に見ゆ。
【二四三】皐魚。人名なり、韓詩外傳に見ゆ。
【二四四】長萬。宋の大夫南宮長萬なり。其君閔公を弑せり。
【二四五】渠彌。鄭の高渠彌なり。其君昭公を殺せり。
【二四六】蒯聵。衞の靈公の太子なり。靈公之を逐ひて其子輒を立つ。靈公の薨ずるや、蒯聵軍を率ゐて其子を伐ち其位を取らんとす。
【二四七】不占。齊人陳不占なり。節鄂は剛義ありて怯懦なり。節鄂は剛直なり。
【二四八】隱處。隱士なり。林薄は林野なり。
【二四九】鱏魚。魚の名。水裔は水外なり。喁は魚の口を水外に出すこと。
【二五〇】緜駒。善く歌ふ者の名。
【二五一】匏巴。琴を善くせし人の名。
【二五二】磬襄。樂師の名、論語に擊磬襄ハ海ニ入ルとあり。懸は鐘架なり。
【二五三】瞠眙。驚き視ること。
【二五四】焦眇睢維。目の開合する貌。

汙穢を漑盥し、垢滓を澡雪すべし。

【大意】故に笛曲を聽く者は、節奏章句によりて法度を觀察し、禮制の踰ゆべからざるを知り、小曲を聽く者は、遠く古人を思ひ、志を惻愴の聲に度り、則ち長憂して閑居獨處すべからず。故に笛曲の義理を論じ、其象を比擬すれば、その寬大幽閑なるは老莊の節槩あり。溫柔正直優游弘毅なるは孔孟の風あり。激切明朗なるは卞隨務光耿介の風あり。磊落乖戾なるは專諸、孟賁の氣象あり。句節の斷決せるは管仲、商鞅の制度の如く、科條よく分れ、亂れて能く理まれるは、申韓の明察の如く、繁多にして絕えざるは、范蔡の說辭の如く、分別節制あるは鄧晳、公孫龍の慧明なるが如く、悉く古代雅曲の法度を取る。故に此を聽く者は尊卑都鄙賢愚を論せず、皆感動して拍手踊躍せざるはなく、各その分限を得、情欲を盈たし、中和の道に叶ひ、以て天下の風俗を美にするを得、人をして中正に復歸せしむるを得。魚は口を水外に出して之を聽き、駟馬は仰ぎ玄鶴は舞ふ。斯時に於ては古の名樂師と雖も、驚視して席に安んせず、拍手喝采すること雷の如く、雙眼を開合し淚を流すに至る。故に能く誠意を感通し下民を率ゐて事を治め、汙濁を一洗するを得るなり。

昔(一五五)庖犧は琴を作り、神農は瑟を造り、(一五六)女媧は簧を制り、(一五七)暴辛は

【一五五】庖犧。伏犧なり、太古の帝。

【一五六】女媧。黃帝の臣なり。簧は笙なり。

【一五七】暴辛。周の平王の時の諸

塤をつくり、(二五八)倕の鍾を和し、叔の磬を離る、或は金を鑠し石を礱き、(二五九)華晥切錯し、(二六〇)丸挺彫琢し、刻鏤(二六一)鑚笮し、妙を窮め巧を極め、曠うするに日月を以てし、然る後器を成せるも、其音彼の如し。唯笛は其(二六二)天姿に因り其材を變ぜず、伐りて之を吹くに、其聲此の如し。蓋し亦(二六三)簡易の義にして賢人の業なり。若し然らば(二六四)六器は、猶ほ(二六五)二皇聖哲の(二六六)㪉益を以てす。況んや笛は大漢より生じ、而も學者其の以て盛美を裨助すべきを識らず、忽にして讃めず。悲しい夫。庶士(二六七)丘仲といふ者あり、其の由つて出づる所を言ふ、而も其弘妙を知らず。其辭に曰く、近世の雙笛は(二六八)羌より起る。羌人竹を伐り未だ已るに及ばず。龍水中に鳴いて(二六九)己を見さず。竹を截りて之を吹くに聲相似たり。其上孔を剡りて之を通洞し、裁りて以て篴に當て、便にして持ち易し。(二七〇)易京君明音律を識る。故に本四孔にして加ふるに一を以てす。君明の加ふる所の孔後

侯。塤は樂器の名、土を燒いて之を作る。

【二五八】倕。堯の共工なり。

【二五九】華晥切錯。彫鏤して飾ること。

【二六〇】丸挺。丸は取なり。挺は擊なり。

【二六一】鑚笮。鑚は穿なり。笮は鑿に同じ。

【二六二】天姿。天然の資なり。

【二六三】簡易。周經に乾ハ易ヲ以テ知リ、坤ハ簡ヲ以テ能クス(中略)久シウスベキハ則チ賢人ノ徳ナリ、大ニスベキハ則チ賢人ノ業ナリとあり。

【二六四】六器。上文の琴瑟簧塤鐘磬をいふ。

【二六五】二皇。伏犧神農なり。聖哲は女媧暴辛倕叔をいふ。

【二六六】㪉益。增益なり。

【二六七】丘仲。漢の武帝の時の笛人なり。

【二六八】羌。西戎なり。

【二六九】己。龍を指す。

【二七〇】易京君明。京房、字は君明、漢の武帝の時の人、易を脩む、故に易京といふ。

に出づ。是を商聲と謂ひ五音畢る。

【大意】昔伏羲、神農、女媧、暴辛、倕、叔の琴瑟笙塤鐘磬の六器を作るや、金石を用ひて彫琢脩飾を加へ、巧妙を極め、幾多の歳月を經て、然る後に成る。然も其音彼の如く、敢て珍とするに足らず、ただ笛は天然の資に由り彫飾を施さず、ただ伐りて之を吹くのみ。然も其音の美妙なること此の如し。是れ實に簡易の義に叶へる者にして賢人の業なり。且つ彼の六器は聖哲の製作に待つ。然も笛は漢朝より始まり、聖哲の手を煩さず。然るに學者其の天子の盛美を裨補すべきを知らず、之を輕んじて讃頌せざるは、誠に悲むべきなり。丘仲といふ者其の由來を言へども、亦其の弘妙なるを知らず。丘仲の言に曰く、近世の雙笛は西戎に始まれり。戎人竹を伐り未だ畢らざるに、龍の水中に鳴くあり。然も其姿を見ず。戎人乃ち竹を截りて之を吹くに、其聲龍聲と相似たり。更に上孔（吹く處なり）を穿ち、之を通洞にし、截りて鞭に當つ。故に執持に便なり。京房音律を知る。故に更に一孔を加へて五孔となし、之を商音といふ。是に至りて五音畢く備はれり。

琴の賦竝序　（一）嵆叔夜

余少きとき音聲を好み、長じて之を翫ふ。以爲らく物に盛衰あれども、此

【一】嵆叔夜。嵆康、字は叔夜、晉の譙國の人。

は變ずるなし。滋味は厭くことあれども、此は勸まず。以て神氣を(二)道養し情志を宣和し、窮獨に處て悶えざるべき者、音聲より近きはなしと。是の故に之を(三)復して足らざれば、則ち吟詠して以て志を肆べ、之を吟詠して足らざれば、則ち(四)言を寄せて以て意を廣む。然れども八音の器、歌舞の象、歷世の才士竝に之が賦頌を爲り、體制風流、相襲らざるはなし。其の(五)材幹を稱すれば、則ち(六)危苦を以て上となし、其聲音を賦すれば、則ち悲哀を以て主となし、其感化を美すれば、則ち垂涕を以て貴しとなす。麗は則ち麗なり。然れども未だ其理を盡さざるなり。其の由る所を推すに元より聲音を解せざるに似たり。其旨趣を覽るに亦未だ禮樂の情に達せざるなり。衆器の中、琴德最も優なり。故に懷ふ所を綴り叙べ、以て之が賦を爲る。其辭に曰く、

惟れ(七)椅梧の生ずる所、峻嶽の崇岡に託し、(八)重壤を披いて以て誕に載ひ、(九)辰極に參りて高く驤り、天地の醇和を含んで、日月の(一〇)休光を吸ひ、(一一)鬱紛紜として以て獨り茂り、(一二)英蕤を昊蒼に飛ばし、夕に景を(一三)虞淵に納れ、旦に幹を(一四)九陽に晞かし、千載を經て以て價を待ち、寂として

【二】道養。道は導なり引なり。
【三】復。反復して之を爲すこと。
【四】言を寄す。賦頌を作るをいふ。
【五】材幹。樂器の材料。
【六】危苦。生ずる所の高峻なるをいふ。
【七】椅梧。桐なり。以て琴を作るべし。
【八】重壤。地なり。
【九】辰極。北斗星。
【一〇】休光。休は美なり。
【一一】鬱紛紜。枝葉の繁茂する貌。
【一二】英蕤。花なり。昊蒼は天なり。
【一三】虞淵。日の入る處。
【一四】九陽。旭日なり。

神のごとく峙ちて永く康し。且つ其山川の形勢は則ち（一五）盤紆隱深、（一六）碨磈岑嵓、（一七）玄嶺巉巖、岝㟧嶇嶔たり。（一八）丹崖嶮巇として靑壁萬尋なり。若し乃ち重巘增り起り、（一九）偃蹇として雲のごとく覆ひ、（二〇）邈隆崇にして以て壯を極め、（二一）崛巍巍として特り秀で、（二二）靈液を蒸して以て雲を播き、（二三）神淵に據りて溜を吐く、爾して乃ち顚波奔突、狂赴して爭ひ流れ、巖に觸れ隈に觝れ、鬱怒して（二四）彪休たり。洶涌騰薄して沫を奮ひ濤を揚げ、（二五）瀄汨澎湃蜑蟺として相糾ひ、大川に（二六）放肆して中州に濟り、安く廻り徐に邁き、寂爾として長く浮び、（二七）澹平洋洋として、山丘を縈抱す。詳に其區土の（二八）產毓する所、奧宇の寶殖する所を觀るに、珍怪（二九）琅玕、瑤瑾翕赩として叢集累積し、（三〇）奐として其側に衍てり。若し乃ち春蘭其東に被り、（三一）沙棠其西に殖ひ、（三二）涓子其陽に宅り、（三三）玉醴其前に涌き、玄雲其上を蔭ひ、翔鸞其巔に集り、淸露其膚を潤し、（三四）惠風其間

【一五】盤紆。屈曲なり。
【一六】碨磈岑嵓。高峻の貌。
【一七】玄嶺。以下皆山石峻嶮の貌。
【一八】丹崖。赤き崖。嶮巇は傾側の貌。
【一九】偃蹇。聳ゆる貌。
【二〇】邈隆崇。遙に高き貌。
【二一】崛巍巍。直上の貌。
【二二】靈液。天地の潤氣。
【二三】神淵。地泉なり。
【二四】彪休。怒る貌。
【二五】瀄汨。疾き貌。澎湃は水聲なり。蜑蟺は盤旋する貌。
【二六】放肆。ほしいままに流ること。中州は中國なり。
【二七】澹平洋洋。漫流する貌。
【二八】產毓。毓は育なり。
【二九】琅玕、瑤瑾。皆玉の名。翕赩は光る貌。
【三〇】奐。散ずる貌。
【三一】沙棠。木の名、仙山に生ず
【三二】涓子。列仙傳に涓子ハ齊人ナリ、好ンデ木ヲ餌シ宕山ニ隱レ、ヨク風雨ヲ致ス、其琴心三篇、條理アリとあり。
【三三】玉醴。靈泉なり。
【三四】惠風。南風なり。

に流れ、(三五)竦肅肅として以て靜謐に、(三六)密微微として其れ淸閑なり。夫の其左右に(三七)經營する所以の者、固に以て自然神麗にして、思ひ願ひ愛し樂むに足れり。

【大意】琴材たる桐は、高山の上に立ち、大地を排して生じ、高く北斗星を摩し、陰陽の精氣を吸ひ、枝葉繁茂して花を蒼天に飛ばし、夕には其景を虞淵に浸し、旦には枝幹を旭日に照し、千載の齡を歷て神の如く立つ。其山川の形勢を觀るに、高峻嶮絶にして崖壁千尋、聳立して雲の覆へるが如く、上は潤氣を蒸して雲を布き、下は地泉に據りて流を吐き、水波巖壑に觸れて勢を增し、屈曲廻旋して大川に注ぎ中國に及び、安流して山丘を繞る。其土の產出する所の者を觀れば、美玉光を放ちて其側に累積し、(山に美玉あれば草木滋潤す。故に以て桐に益すべし。因つて之を述ぶ)香草仙木其東西に生じ、仙人其南に住み、靈泉其前に湧き、仙雲其上を蔭ひ鸞鳳其巓に集り、淸露惠風其間に流れ、幽邃にして閑靜なり。此に優游する所の者自然神靈にして愛樂すべきは、固より理の當然なり。

是に於て遯世の士、(三八)榮期綺季の疇、乃ち相與に(三九)飛梁に登り幽壑を越え、瓊枝を援き峻崿に陟り、以て其下に遊び、周旋して永く望み(四〇)邈として凌飛するが若く、邪に(四一)崑崙を睨、俯

【三五】竦肅肅。高く深きなり。
【三六】密微微。枝葉密にして幽邃なり。
【三七】經營。優游といふが如し。

【三八】榮期。榮啓期なり。綺季は商山四皓の一人なる綺里季なり。並に隱逸の人。
【三九】飛梁。橋なり。
【四〇】邈。遠きなり。

して（四二）海湄を闞、（四三）蒼梧の迢遞たるを指し、（四四）迴江の威夷たるに臨み、時俗の纍多きを寤り、（四五）箕山の餘輝を仰ぎ。斯嶽の（四六）弘敞を羨み、心慷慨して以て歸るを忘れ、情舒放して遠く覽。（四七）軒轅の遺音に接し、（四八）老童を騩隅に慕ひ、（四九）泰容の高吟を欽ひ、茲桐を顧みて慮を興し、物を假りて以て心を託せんことを思ひ、乃ち（五〇）孫枝を斵りて、任ふる所を準量し、（五一）至人思を攄べ、制して雅琴を爲り、乃ち（五二）離子をして墨を督し、（五三）匠石をして斤を奮ひ、（五四）夔襄をして法を薦め（五五）班倕をして神を騁せしめ、會を鏤り厠を裛み、（五六）朗密調均、華繪彫琢して、（五七）藻を布き文を垂れ。錯ふるに（五八）犀象を以てし、藉くに翠綠を以てし、絃するに（五九）園客の絲を以てし、徽するに（六〇）鍾山の玉を以てし。爰に（六一）龍

【四一】崑崙。山の名。
【四二】海湄。海畔なり。
【四三】蒼梧。郡名。舜の崩ぜし地。迢遞は遙なる貌。
【四四】迴江。遠江なり。威夷は長き貌。
【四五】箕山。許由の隱れし山の名。
【四六】弘敞。高大なり。
【四七】軒轅。黃帝なり。遺音とは琴をいふ。
【四八】老童。顓頊の子にして隗山の陽に隱居せり。其聲鐘磬の如し。
【四九】泰容。黃帝の樂師なり。
【五〇】孫枝。側生する枝。
【五一】至人。君子なり。
【五二】離子。離婁なり。古の明目者の名。
【五三】匠石。巧人の名。
【五四】夔襄。夔は舜の樂官。襄は師襄、孔子に琴を敎へし人。
【五五】班倕。魯般及び堯の共工たりし倕。皆古の巧人なり。
【五六】朗密調均。明緻にして能く整へること。
【五七】藻文。文彩なり。
【五八】犀象。犀角象牙。
【五九】園客。濟陰の人なり、蠶百頭を養ふ、繭皆大さ甕の如し。
【六〇】鍾山。山の名。
【六一】龍鳳。西京雜記に趙后寶琴アリ、鳳皇トイフ、皆金玉ヲ以テ隱起ス、龍螭鸞鳳古賢列女ノ象ヲナスとあり。

鳳の象、古人の形あり。(六二)伯牙手を揮ひ、(六三)鍾期聲を聽き、(六四)華容灼爍として、采を發し明を揚ぐ。何ぞ其の麗なるや。(六五)伶倫律を比し、(六六)田連操張し、君子に進御して、新聲(六七)憀亮たり。何ぞ其の偉なるや。

【大意】故に隱棲の高士、榮期綺季の輩、橋を渡り谿を越え、枝を攀ぢ山に陟り、來りて其下に遊び、山海を俯仰し、手大野を指し、目遠江に臨み、俗世の煩累を避け、此山の高大なるを愛し、情思寛弘にして黃帝の遺音に接せんことを思ひ、老童泰容の吟聲を聞かんことを思ふ。乃ち此桐を顧み、以て琴をなし、之を假りて思を託せんと欲し、乃ち孫枝を斫り其材を准度し、離婁をして墨繩を正さしめ、匠石をして之を斬らしめ、夔襄をして律度を定めしめ、班倕をして心を馳せて琴を造らしめ、合縫の處を鏤刻し比接の處を纏ひ、文飾を加ふること調均なり。乃ち犀角象牙を鏤め、敷くに翠綠の色を以てし、園客の絲を絃とし、鍾山の玉を徽とし、爰に始めて龍鳳古人の姿を具ふ。是に於て伯牙之を鼓し、鍾子期之を聽く。光彩綺麗にして新聲淸徹なり。

其の初め調ふるに及んでは、則ち(六八)角羽俱に起り、(六九)宮徵相證し、參り發して並び趣き、上下累應

【六二】伯牙。古の琴の名手。
【六三】鍾期。鍾子期なり。よく琴を聽きわけし人。
【六四】華容。美しき形。灼爍は光色の貌。
【六五】伶倫。黃帝の時、始めて樂律を定めし人。
【六六】田連。古の琴の名手。
【六七】憀亮。聲淸徹の貌。
【六八】角羽。聲調の名。
【六九】宮徵。聲調の名。

し、(七〇)蹝踔礫硌として美聲將に興らんとす。固に以て(七一)和昶にして、耽るに足れり。爾して乃ち(七二)正聲を理め、妙曲を奏し、(七三)白雪を揚げ、(七四)淸角を發し、(七五)紛淋浪として以て流離たり、(七六)奐淫衍として優渥なり。(七七)粲奕奕として高く逝き、馳せて(七八)岌岌として以て相屬き、(七九)沛騰遌として競ひ趣き、(八〇)翕曄爗として繁縟なり。狀崇山の若く、又流波に象たり。浩として(八一)湯湯たり、鬱として(八二)峩峩たり。(八三)怫愲煩寃し、(八四)紆餘婆娑し、(八五)陵縱播逸して(八六)霍濩紛葩たり。容を檢め節を授け、變に應じ度に合ひ、名を兢れ業を擅にし、軌を安んじて徐歩し、(八七)洋洋習習として、(八八)聲烈遐く布き、顯媚を含んで以て終を送り、餘響を(八九)泰素に飄す。若し乃ち(九〇)高軒飛觀、廣厦閑房、冬夜肅淸にして、朗月光を垂れ、新衣(九一)翠粲として(九二)纓徽・芳を流す。

【七〇】蹝踔。初聲布散の貌。礫硌は大聲の貌。
【七一】和昶。和通なり。
【七二】正聲。雅聲なり。
【七三】白雪。弄曲の名。
【七四】淸角。弄曲の名。
【七五】紛淋浪。聲高急にして相連る貌。
【七六】奐淫衍。聲の長き貌。
【七七】粲奕奕。聲の盛なる貌。
【七八】岌岌。高き貌。
【七九】沛騰遌。盛んに相觸るる貌。
【八〇】翕曄爗。飛騰して盛んなる貌。
【八一】湯湯。流の盛んなる貌。
【八二】峩峩。山の高き貌。
【八三】怫愲煩寃。聲の鬱積して散ぜざる貌。
【八四】紆餘婆娑。曲旋して散ずること。
【八五】陵縱播逸。聲高くして分布すること。
【八六】霍濩紛葩。聲の盛んなる貌。
【八七】洋洋習習。淸雅の貌。
【八八】聲烈。烈は美なり。美聲をいふ。
【八九】泰素。自然なり。
【九〇】高軒。高堂なり。飛觀は高樓なり。
【九一】翠粲。衣の聲なり。
【九二】纓徽。にほひぶくろ。

是に於て(九三)器冷に絃調ひ、心閑に手敏く。(九四)觸撝すること志の如く、惟意の擬する所のまゝなり。初には(九五)淥水を涉り、中には(九六)淸徵を奏し、(九七)唐堯を雅昶し、終に(九八)微子を詠ず。寬明弘潤にして、(九九)優游躇跱し、絃を拊ちて安に歌ひ、新聲代ゝ起る。歌に曰く、(一〇〇)扶搖を凌いで(一〇一)瀛洲に憩ひ、(一〇二)列子を要へて(一〇三)好仇となし、(一〇四)沆瀣を餐ひて朝霞を帶び、(一〇五)眇翩翩として天に薄りて游び、萬物を齊うして超として自得し、(一〇六)性命に委ねて去留に任すと。淸響を激して以て赴會す。何ぞ絃歌の(一〇七)綢繆たる。

【大意】初め其聲を調ふるや、角羽宮徵共に興り竝び發し、調絃既に畢りて將に美聲を奏せんとす。誠に性情を和通して樂むに足る。茲に雅聲を理め妙曲を奏し、その聲高急にして相連り、其狀山の巍巍たるが如く、流の湯湯たるが如く、或は鬱して散せず、或は曲旋して散布す。是に於て容姿を端檢し以て其聲調を定めんとし、變に應じ度に合し、名譽を汙さんことを恐れ、心を專にして技を演じ、人の緩步徐行するが如く、緩閑にして美聲遠く散じ、顯美の聲を含んで曲の終を送り、餘響飄然と

【九三】器。琴なり。
【九四】觸撝。撝は手にて擊つこと。
【九五】淥水。曲の名。
【九六】淸徵。曲の名。
【九七】唐堯。琴操の名。雅昶の昶は通なり。
【九八】微子。琴操の名。
【九九】優游躇跱。閑緩にして散ぜざるなり。
【一〇〇】扶搖。飆風なり。
【一〇一】瀛洲。海中の仙山。
【一〇二】列子。風に乘り天を翔りし人。
【一〇三】好仇。よき相手。
【一〇四】沆瀣。淸露なり。
【一〇五】眇翩翩。高く飛ぶ貌。
【一〇六】性命。天命なり。
【一〇七】綢繆。密合の貌。

して自然に歸す。若夫れ高堂大廈、冬夜寒冷にして明月光を垂れ、新衣翠粲として鳴り、薫香室に漂ふ處、閑坐して纖手を動かすに至りては、之を彈ずること意の如くならざるはなく、或は淥水清徵の曲を奏し、或は唐堯微子の操を詠じ、其聲弘明にして閑緩に、新聲代〻起る。歌に曰く、飄風を凌いで仙山に憩ひ、列子を迎へて友となし、淸露を飲み朝霞を佩び、翩翩として天上に遊び、萬物を齊觀して是非の心なく、超然として大道を自得し、去留を天命に任せんかなと。此歌に倚せて琴を奏し、淸響を激發すれば、絃と歌と混合して緊密なり。

是に於て（一〇八）曲引闌に向ひ、衆音將に歇きんとす。韻を改め調を更へ、（一〇九）奇弄乃ち發し、和顏を揚げ皓腕を攘げ、纖指を飛ばして以て馳鶩し、（一一〇）紛纚譶として以て流漫し、或は徘徊顧慕して（一一一）擁鬱抑按し、（一一二）盤桓毓養して從容祕翫し、（一一三）闥爾として奮逸し、風のごとく駭き雲のごとく亂れ、（一一四）牢落凌厲して（一一五）布濩半散たり、（一一六）豐融披離して（一一七）斐韡奐爛たり。（一一八）英聲發越して（一一九）采采粲粲たり。或は間聲（一二〇）錯糅して狀（一二一）詭赴するが若く、雙美竝び進み駢馳翼驅す。初めは將に乖かんとす

【一〇八】曲引。引も亦曲なり。
【一〇九】奇弄。弄は曲なり。
【一一〇】紛纚譶。疾き貌。
【一一一】擁鬱抑按。聲駐りて散ぜざること。
【一一二】盤桓。徘徊なり。毓養は育養なり。
【一一三】闥爾。疾き貌。
【一一四】牢落。まばらなる貌。
【一一五】布濩半散。散布する貌。
【一一六】豐融。盛なる貌。
【一一七】斐韡奐爛。明なる貌。
【一一八】英聲。美聲なり。
【一一九】采采粲粲。美聲の貌。
【一二〇】錯糅。錯雜なり。
【一二一】詭赴。疾く行くこと。

るが若く、後には卒に趣を同うし、或は曲りて屈せず、或は直くして倨らず、或は相凌いで亂れず、或は相離れて殊えず、時に(一二二)劫掎して以て慷慨し、或は(一二三)怨嫿して躊躇し、忽ち飄颻して以て輕く邁き、乍ち留聯して(一二四)扶疎たり。或は(一二五)參譚として繁促に、複疊して攢仄し、從横駱驛し、奔遁して相逼り、(一二六)拊嗟累讚して、間、息を容れず。瓌豔奇偉殫く識るべからず。若し乃ち閑舒都雅にして(一二七)洪纖宜きあり。淸和條昶にして(一二八)案衍陸離たり。(一二九)穆として溫柔にして以て怡懌し、婉として順叙にして(一三〇)委蛇たり。或は險に乗り會に投じ、隙を邀へ危きに趣き、嚶たること(一三一)離鵾の淸池に鳴くが若く、翼たること游鴻の(一三二)曾崖に翔るが若く、(一三三)紛文斐尾、(一三四)綝縿離纚たり。微風餘音(一三五)靡靡猗猗たり。或は(一三六)摟挽櫟捋として(一三七)繚繞潎洌たり。輕行浮彈して(一三八)明嫿瞭惠なり。疾けれども速ならず、留れども滯らず。翩緜飄邈として微音迅く逝き、遠くして之を聽けば、鸞鳳和鳴して雲中に戲るるが若く、

【一二二】劫掎。劫かし引くこと。
【一二三】怨嫿。怨嬌なり。
【一二四】扶疎。四方に散ずること。
【一二五】參譚。相隨ふ貌。
【一二六】拊嗟。手を打ちて嗟嘆すること。
【一二七】洪纖。大聲細聲なり。
【一二八】案衍。平長なり。陸離は相連ること。
【一二九】穆。和なり。
【一三〇】委蛇。長遠の貌。
【一三一】離鵾。鵾は鳥の名。琴に鵾雞、鴻雁の曲あり。
【一三二】曾崖。層岸なり。
【一三三】紛文斐尾。鵾鴻の文彩をいふ。
【一三四】綝縿離纚。羽毛の貌。
【一三五】靡靡。風に順ふ貌。猗猗は衆盛の貌。
【一三六】摟挽櫟捋。手にて絃を拂ふ貌。
【一三七】繚繞潎洌。聲相糾ふ貌。
【一三八】明嫿瞭惠。手指分明に相傳ふること。

迫くして之を察すれば、衆葩の榮を敷きて春風に曜くが若く、既に(一三九)豐贍にして以て姿多く、又始を善くして終を令くし、嗟(一四〇)姣妙にして以て弘麗なり。何ぞ變態の窮なき。

【大意】曲闌にして衆音の將に歇きんとするや、更に聲調を變換し、和顏を揚げ皓腕を揮ひ、纖指を絃上に徘徊せしむれば、聲駐りて散ぜず、忽にして奮起すること風雲の如く、美聲四方に發散し、或は間聲錯雜して並び馳せ、鳥獸の相驅逐するが如く、初めは相悖るが如きも、後には終に相和諧し、其聲直にして傲らず、淩いで亂れず、離れて絶えず。或は志を高うして慷慨し、或は怨んで其聲を散ぜず。忽にして輕く行き、忽にして四散し、忽にして繁促し、重疊縱橫して相連り、聽く者其美を讃歎して鼓曲の間氣息を容るる能はず。其美盡く識るべからず。閑徐高雅にして大小皆宜しきあり、淸和にして條理あり、平遠にして相連るあり。溫柔諧和にして長遠なるあり、空に乘りて相投會し、穴に入り危に向ふあり。離鵾の鳴くが如く、游鴻の翔るが如く、手指絃上を歷ること、疾けれども速ならず、留れども滯らず。遠くして之を聽けば鸞鳳の雲中に和鳴するが如く、近くして之を視れば、衆花の春風に輝くが如く。終始ともに美にして變態窮なし。

若夫れ(一四一)三春の初、麗服時を以てし、乃ち(一四二)友生を携へ、以て遨び以て嬉み、(一四三)蘭圃を涉り

【一三九】豐贍。聲の繁きをいふ。
【一四〇】姣妙。好妙なり。
【一四一】三春。春三個月なり。
【一四二】友生。朋友なり。
【一四三】蘭圃。香草の畑。

(二四四)重基に登り、長林に背き(二四五)華芝に翳れ、清流に臨んで新詩を賦し、魚龍の(二四六)逸豫を嘉し、(二四七)百卉の榮滋を樂み、(二四八)重華の遺操を理め、慨として遠く慕ひて長く思ふ。若乃ち華堂に曲宴すれば、密友近賓、(二四九)蘭肴兼ね御ひ、(二五〇)旨酒清醇あり、(二五一)南荊を進め西秦を發し、(二五二)陵陽に紹ぎ巴人を度し、(二五三)變用雜りて竝び起り、衆聽を竦して神を駭かす。(二五四)殊功を料りて操を比ぶるに、豈(二五五)笙籥の能く倫する所ならんや。若し其曲引の宜しき所を次すれば、則ち(二五六)廣陵、止息、東武、太山、飛龍、鹿鳴、鵾鷄、游絃あり。更ゝ唱へ迭に奏し、聲自然の若く、(二五七)流楚窈窕として、躁しきを懲め煩しきを雪ぎ、下は(二五八)謠俗蔡氏の五曲、王昭楚妃、千里別鶴に逮び、猶ほ一切間を承け乏きに簉るあり。亦觀るべきものあり。然れども夫の曠遠の者にあらざれば、之と嬉游する能はず。夫の(二五九)淵靜の者にあらざれば、之と(二六〇)間止する能はず。放達の者にあらざれば、之と吝むなき能はず。至精の者にあらざれば、之と理を析つ能はず。若し其體勢を論じ、其風聲を詳にすれ

【二四四】重基。高山なり。
【二四五】華芝。車蓋なり、長林の蔭、車蓋の如きなり。
【二四六】逸豫。樂遊なり。
【二四七】百卉。百草なり。榮滋は盛に花を開くこと。
【二四八】重華。舜なり。遺操は舜の作りし琴操なり。
【二四九】蘭肴。佳肴なり。
【二五〇】旨酒、清醇。美酒なり。
【二五一】南荊、西秦。歌曲の名。
【二五二】陵陽、巴人。歌曲の名。
【二五三】變用。變曲なり。
【二五四】殊功。最好の曲調なり。操は節操なり。
【二五五】笙籥。ともに樂器の名。
【二五六】廣陵。以下皆曲名。
【二五七】流楚。流行清楚なり。窈窕は意深き貌。
【二五八】謠俗。以下皆曲名。
【二五九】淵靜。深靜なり。
【二六〇】間止。閑居なり。

ば、器和げり故に響逸し、張ること急なり故に聲清み、(一六一)間遼し故に音庳く、絃長し故に(一六二)徽鳴り、性潔靜にして以て(一六三)端理に、至徳の和平を含み、誠に以て心志を感盪して幽情を發洩すべし。

【大意】春服をまとひ朋友を携へ、香蘭の徑を過ぎて高山に登り、以て長林の蔭に憩ひ、清流に臨んで詩を賦し、魚龍の優游を嘉し、百草の花を著くるを樂む時、虞舜の遺曲を奏すれば、慨然として其聖徳を思ふべく、親朋相集りて華堂に宴し、佳肴を食ひ美酒を酌む時、南荊、西秦、陵陽巴人の曲を奏すれば、變曲相雜りて起り、人をして心神を驚動せしむべく、

【一六一】間遼。絃間遼遠なり。
【一六二】徽。みつよりのいと。
【一六三】端理。正直なり。

其好調節操笙籥の與に比倫すべき所にあらず。其曲には廣陵、止息以下種種あり。諸曲迭に之を奏すれば、其聲自然の如く、流行清楚にして人心の躁しきを止め、人心の煩しきを洗ふべし。猶は謠俗蔡氏の五曲、王昭楚妃、千里別鶴等の諸曲あり。古雅の間を承け以て頓乏の際に繼ふれば、亦觀賞するに足るものあり。然れども志高遠の士にあらざれば、此琴と樂游すること能はず。志深靜の士にあらざれば、此琴と閑居すること能はず。志放達の士にあらざれば、此琴を翫んで已むなき能はず。志至精の士にあらざれば、此琴と條理を分析すること能はざるなり。若夫れ琴の形體聲韻を詳論せんか、其器和雅なり、故に其聲閑逸なり。絃を張ること急なり。故に其聲清む。絃間遼し、故に其聲短し。徽絃長し、故に其

聲高し。其性潔靜にして正直に、至德を含んで和平なり。誠に人の志氣を感動し、鬱憂を發散するに足る。

是故に戚を懷く者之を聞けば、(一六四)憯懍慘悽、愀愴して心を傷ましめざるはなく、哀を含んで(一六五)懊咿し、自ら禁ずる能はず。其(一六六)康樂の者之を聞けば、則ち(一六七)欨愉歡釋し(一六八)抃舞踊溢し、(一六九)留連瀾漫、(一七〇)嘔噱して日を終ふ。若し和平の者之を聽けば、則ち(一七一)怡養悅悆し、淑穆玄眞、恬虛にして古を樂み、事を弃て身を遺る。是を以て伯夷は之を以て廉に、顏回は之を以て仁に、比干は之を以て忠に、(一七二)尾生は之を以て信に、(一七三)惠施は之を以て辯給に、(一七四)萬石は之を以て訥愼なり。其餘は類に觸れて長ず。所致一にあらず。歸を同うして塗を殊にし、或は文に或は質なり。中和を總べて以て物を統べ、咸日ゝに用ひて失せず。其の人を感せしめ物を動かすと蓋し亦弘し。時に金石は聲を寢め、(一七五)匏竹は氣を屏け、(一七六)王

【一六四】憯懍。以下皆悲傷の意なり。
【一六五】懊咿。内に悲むこと。
【一六六】康樂。安樂なり。
【一六七】欨愉。喜悅の貌。
【一六八】抃舞。手を打つて舞ふこと。踊溢は跳躍なり。
【一六九】留連瀾漫。歡情多きこと。
【一七〇】嘔噱。笑ひてやまざること。
【一七一】怡養。悅樂なり。悅悆は喜ぶこと。

【一七二】尾生。女子と橋下に期し、女子來らず、水至れども去らず、柱を抱いて死す。莊子に出づ。
【一七三】惠施。古の辯士なり。莊子に出づ。
【一七四】萬石。石奮父子をいふ。史記・漢書に出づ。
【一七五】匏竹。匏はヒサゴなり。ヒサゴ及び竹にて作りし樂器。
【一七六】王豹。古の謳歌を善くせし人。

豹は謳を輟め（一七七）狄牙は味を喪ひ、（一七八）天吳は重淵に踊躍し、（一七九）王喬は雲を披いて下墜し、（一八〇）鸑鷟を庭階に舞はし、（一八一）游女飄焉として來り萃り、天地を感ぜしめて以て和を致す。況んや（一八二）蚑行の衆類をや。斯器の（一八三）懿茂なるを嘉し、茲文を詠じて以て自ら慰め、永く（一八四）服御して厭かず。信に古今の貴ぶ所なり。

【大意】故に憂心ある者之を聞けば悲傷して自ら堪へず、安樂なる者之を聞けば歡樂喜悅し、和平なる者之を聽けば美和大眞にして、古道を樂しみ俗事を忘るるに至る。是を以て伯夷之を聞けば益ゝ廉に、顏囘之を聞けば益ゝ仁に、比干之を聞けば益ゝ忠に、尾生之を聞けば益ゝ信に、惠施は之が爲に辯給を增し、萬石君は之が爲に訥愼を加ふ。其餘憂樂の類一一述ぶべからず。要するに琴を聽くの感其類を異にし、文質一ならずと雖も、其德を養ふの歸趣に至りては皆一なり。ああ此器たる、よく中和の大道に合ひて萬物を統理し、日日之を用ひて盡くることなし。其の人物を感動するの効弘大なりと謂ふべし。故に一たび琴聲の至妙なるを聽けば、金石匏竹も鳴を鎭め、王豹も謳を輟め狄牙も其味を忘れ、水神深淵に舞ひ仙人雲を排して來り、鳳鳥庭階に舞ひ仙女耳を傾く。其の天地を感ぜしめ、中和を致すこと此

【一七七】狄牙。古の味を知れる人。
【一七八】天吳。水神なり。
【一七九】王喬。仙人の名。
【一八〇】鸑鷟。神鳥の名。
【一八一】游女。仙女なり。
【一八二】蚑行。蚑も亦行なり。
【一八三】懿茂。美盛なり。
【一八四】服御。使用すること。

の如し。況んや蚑行の蟲獸をや。余因つて琴德の美盛なるを嘉し、此賦を作りて自ら慰め、永く此器を愛用して厭かず。此れ實に古今の貴ぶ所なればなり。

亂に曰く、(一八五)愔愔たる琴德測るべからず、體淸く心遠く(一八六)邈として極め難し。良質美手今世に遇ひ、(一八七)紛綸翕響衆藝に冠たり。音を識る者希なり、誰か能く珍とせん。能く雅琴を盡すは、唯(一八八)至人のみ。

【大意】琴德和悅にして測知すべからず。其形淸く其意遠くして其美を說き難し。琴の美質と人の妙手と一時に遇合すれば、音響繁美にして諸樂に勝る。然れども世に音を識る者稀なり。之を聽くも之を珍とする者少し。悲しいかな。よく雅琴の德を知る者あらば、卽ち君子のみ。

【一八五】愔愔。和悅の貌。
【一八六】邈。遠なり。
【一八七】紛綸翕響。聲繁美の貌。衆藝は衆樂なり。
【一八八】至人。君子といふが如し。

(一)笙の賦　潘安仁

(二)河汾の寶に(三)曲沃の懸匏あり。(四)鄒魯の珍に(五)汶陽の孤篠あり。若乃ち緜蔓紛敷の麗、浸潤靈液の滋、隅隈夷險の勢、禽鳥翔集の嬉、固

【一】笙。樂器の名。管を匏中に列ね、簧を管端に施せるもの。
【二】河汾。二川の名。
【三】曲沃。地名。懸匏はヒサゴなり。
【四】鄒魯。國の名。
【五】汶陽。地名、汶水の北の

より(六)衆作者の詳にする所なり。余得て之を略すべきなり。徒に其の器を制するを觀れば、則ち(七)洪纖を審にし短長を面にし、(八)生簳を剡め(九)熟簧を裁り、(一〇)宮を設け羽を分ち、徵を經て商を列ね、泄して反つて謐に、厭へて乃ち揚る。管(一一)欑羅して表に列り、音要妙にして淸を含み、各ゝ一を守りて以て應を司り、(一二)大魁を統べて以て笙となす。(一三)黃鍾に基して以て韻を擧げ、(一四)儀鳳を望んで以て形を擢んで、(一五)皇翼を寫して以て羽を揷み、(一六)鸞音を摹して以て聲を厲す。鳥の斯に企てて(一七)翾翾岐岐たるが如く、明珠咮に在り、銜むが若く垂るるが若く、(一八)脩檛内に辟けて(一九)餘簫外に逶に、(二〇)駢田獵擺として(二一)鰓鯀參差たり。

【大意】曲沃の地は河汾の間に在り。其中に懸匏の寶とすべきあり。鄒魯の間、汶水の陽に美竹を產す。是れ亦珍とするに足る。此の匏竹の雨露に霑ひて蔓延し、山曲の間に立ちて禽鳥の翔集する

地。

【六】衆作者。王褒洞簫賦を作り、馬融長笛賦を作り、嵆康琴賦を作れる如きをいふ。

【七】洪纖。大小なり。

【八】生簳。竹莖なり。

【九】熟簧。熟銅を以て作りし簧。

【一〇】宮羽徵商。皆聲調の名。

【一一】欑羅。竹管の外に叢比して行列する貌。

【一二】大魁。魁は首なり。匏中をいふ。

【一三】黃鍾。十二律の一なり。

【一四】儀鳳。說文に笙ハ十二簧、鳳ノ身ニ象ルとあり。

【一五】皇翼。皇は凰に同じ、鳳凰の翼。

【一六】鸞音。鸞は鳳の類なり。

【一七】翾翾岐岐。飛行の貌。

【一八】脩檛。長管なり。

【一九】餘簫。衆管なり。

【二〇】駢田獵擺。竹管の密なる貌。

【二一】鰓鯀參差。鱗次衆多の貌。

状は、衆作家の詳悉せる所の如し。故に今略して述べず。ただ笙の制作を述べんとす。先づ竹管の大小長短を審にし、竹莖を揉め銅簧を裁ち、宮商五聲を排列し、指を擧ぐれば聲、反つて靜に、其孔を攝ふれば聲乃ち發す。竹管外に叢比して行列し、聲音要妙にして清氣を含み、竹管各〻一聲を守りて相應を主り、匏中に統合して以て笙となす。黄鍾の律に本づいて其聲を擧げ、鳳身に象りて其形を定め、竹管を比べて鳳翼の參差たるに摸り、其聲を厲すこと鸞鳳の和鳴するが如し。其形たるや、鳥の立ちて飛行するが如く、飾るに明珠を以てし、口に之を銜むが如く、又之を垂るるが如く、竹管の長大なる者内に孔を開き衆管、邪に其外に列り、參差として周密なり。

是に於て乃ち始には泰に終には約かに、前には榮え後には悴へ、憤を今の賤きに激し、永く故の貴かりしを懷ふあり。衆・堂に滿ちて酒を飲めども、獨り隅に向ひて涙を掩ふ。鳴笙を援りて將に吹かんとし、(二二)嗢噦に先だちて以て氣を理む。初には(二三)雍容として以て(二四)安暇に、中ごろは(二五)佛鬱として以て(二六)怫愲に、終には(二七)嵬峨として以て蹇諤に、又(二八)颯遝として繁沸す。(二九)浪孟たるに罔んで以て惆悵し、絶えんと欲して復た肆なるが若く、(三〇)懰と

【二二】嗢噦。咽嘔なり。
【二三】雍容。やはらげる貌。
【二四】安暇。安靜なり。
【二五】佛鬱。安からざる貌。
【二六】怫愲。聲の繁き貌。
【二七】嵬峨、蹇諤。聲の高[illegible]なる貌。
【二八】颯遝。聲の勇起する貌。沸は音ヒ。叶韻。
【二九】浪孟。虚誕の聲なり。
【三〇】懰。烈なり。懰纚、奔遰は疾速なり。

して憿糴して以て奔邀し、將に放ならんとして中ごろ匱しきに似たり。(三一)愀愴惻減、(三二)颾藰煜熠、(三三)汎淫氾豔、(三四)霅爗岌岌たり。或は(三五)案衍夷靡たり、或は(三六)竦勇剽急なり。或は既に往いて返らず、或は已に出でて復た入り、(三七)徘徊布濩し(三八)渙衍葺襲し、舞既に蹈んで中ごろ輟め、節將に撫せんとして及ばず。樂聲發して盡室歡び、悲音奏して列坐泣く。(三九)纖翮を擶へて以て(四〇)幽簧を震ひ、(四一)上箭を越えて下管に通じ、(四二)吹噏に應じて以て往來し、抑揚に隨つて以て虛滿し、勃として慷慨して以て(四三)憀亮たり。顧みて躊躇して以て舒緩なり。(四四)張女の哀彈を輟め、(四五)廣陵の名散を流し、(四六)園桃の夭夭たるを詠じ、(四七)棗下の纂纂たるを歌ふ。歌に曰く、棗下纂纂として、朱實(四八)離離たり。(四九)宛として其れ死せば、化して枯枝となる。人生れて行樂すること能はず、死して何をか虛諡を以て爲さんと。

【三一】愀愴惻減。悲傷の貌。
【三二】颾藰煜熠。盛多の貌。
【三三】汎淫氾豔。放縱なる貌。
【三四】霅爗岌岌。急疾の貌。
【三五】案衍。下りて長きこと。夷靡は平にして漸く靡くこと。
【三六】竦勇。竦立勇起すること。剽急は猛にして急なること。
【三七】徘徊布濩。聲の廻旋して散ぜざること。
【三八】渙衍葺襲。聲の慢緩なること。
【三九】纖翮。細管なり。
【四〇】幽簧。簧は內に在り、故に幽といふ。
【四一】上箭。箭は斷竹なり。
【四二】吹噏。噏は吸なり。
【四三】憀亮。聲の清き貌。
【四四】張女彈。古曲の名。
【四五】廣陵散。古曲の名。
【四六】園桃。古曲の名。夭夭は桃のわかわかしき貌。
【四七】棗下。古曲の名。纂纂は棗花の貌。
【四八】離離。垂る貌。
【四九】宛。死する貌。

【大意】人初めには榮泰にして後には困窮するあり。乃ち今の貧賤を憤怨し、舊時の富貴を想ひ、衆人は堂に滿ちて樂むと雖も、獨り一隅に向つて涙を掩ふのみ。因つて笙を援りて之を吹かんとし、吹嘔するに方りて先づ其氣息を理む。初には安靜にして中ごろ聲繁くして安からず。終には峻直にして勇起し、其聲虛誕にして悲傷し、將に放逸せんとして中ごろ盡き、愴惻して氾濫し、或は平遠に或は猛急に、或は往いて返らず、或は出でて復た入り、廻旋して散ぜず。其聲慢緩なり。故に舞ふ者中ごろ止めて之を待ち、歌ふ者將に節を撫せんとして及ばざらんことを恐る。かくて愉樂の聲發すれば滿堂の人皆歡び、悲哀の音起れば擧座涙を垂る。笙管を捻へて其簧を吹けば、簧聲上筩の孔を越えて、下管の觜に通じ、吹奏に應じ氣息往來し、聲の抑揚に隨つて氣或は滿ち或は虛く、怒聲慷慨し、忽ち又舒緩なり。乃ち張女、廣陵、園桃、棗下等の曲を歌ふ。其歌に曰く、棗の實纍纍として枝に滿つるも、忽焉として落つれば則ち枯枝となる。人生れて行樂する能はずんば、死して美諡を得るも何をか爲さんと。

爾して乃ち(五〇)飛龍を引き(五一)鶤雞を鳴し、(五二)雙鴻翔りて(五三)白鶴飛び、(五四)子喬輕く擧り(五五)明君歸るを

【五〇】飛龍。古曲の名。
【五一】鶤雞。古曲の名。
【五二】雙鴻。古曲の名。
【五三】白鶴。古曲の名。
【五四】子喬。仙人王子喬なり、古曲の名。
【五五】明君。王昭君をいふ、遠く匈奴に嫁す。亦古曲の名。

懐ひ、(五六)荊王喟として其れ長吟し、(五七)楚妃歎じて悲を増す。夫れ其の(五八)悽唳辛酸にして、(五九)嚶嚶關關たること、離鴻の子に鳴くが若く、(六〇)含胡嘽諧にして(六一)雍雍喈喈たること、羣雛の母に從ふが若く、(六二)郁捋劫悟、(六三)泓宏融裔、(六四)哇咬嘲嚌として、壹に何ぞ(六五)察惠なる。(六六)訣厲悄切、又何ぞ(六七)磬折なる。

【大意】更に飛龍、鵾雞、雙鴻、白鶴等の曲を奏し、或は王子喬、王昭君、楚王吟、楚妃歎等の曲を奏す。其聲の辛酸なるは、離鴻の其子を呼ぶが如く、其聲の和樂なるは、雛の其母に隨ふが如く分明にして屈伸す。

若夫れ(六八)時陽初めて暖に、川に臨んで離を送るとき、酒酣に徒擾れ、樂闋りて日移り、疎客始めて(六九)闌し、主人微く疲れ、絃を弛め(七〇)籥を韜み、(七一)塤を撤て篪を屛く。爾して乃ち中筵を促づけ友生を携へ、嚴顏を解き幽情を擢んで、(七二)黄苞を披いて以て甘を授け、(七三)縹瓷を傾けて以て醽を酌み、(七四)光妓儼として其れ階

【五六】荊王。楚王なり、楚王吟は古曲の名。
【五七】楚妃歎。古曲の名。
【五八】悽唳辛酸。鳴く聲の悲しげなること。
【五九】嚶嚶關關。鳥の和鳴すること。
【六〇】含胡。糢糊として明ならざる貌。嘽諧は緩和する貌。
【六一】雍雍喈喈。和鳴の聲。
【六二】郁捋。聲の屈伸する貌。劫悟は聲の分明なる貌。
【六三】泓宏融裔。聲の寛長なる貌。
【六四】哇咬嘲嚌。聲繁細の貌。
【六五】察惠。明美なり。
【六六】訣厲悄切。聲の高き貌。
【六七】磬折。聲の曲折すること。
【六八】時陽。春時なり。
【六九】闌。稀なること。
【七〇】籥。笛の類なり。
【七一】塤、篪。共に樂器の名。
【七二】黄苞。柑橘などの皮。甘は柑橘なり。

列し、(七五)雙鳳嘈として以て和鳴す。(七六)晉野懐れて琴を投ず、況んや(七七)齊瑟と秦箏とをや。新聲曲を變へ奇韻横逸し、歌鼓を(七八)縈纏し鍾律を(七九)綢羅し、(八〇)爛熠爚として以て豔を放にし、(八一)鬱蓬勃として以て氣出で、(八二)秋風燕路に詠じ(八三)天光朝日に重る。大なれども宮を踰えず、細けれども羽に過ぎず。(八四)章夏を唱發し、(八五)韶武を導揚し、(八六)陳宋を協和し、齊楚を混一し、邇けれども逼らず、遠けれども攜るゝなく、聲文を成して節に叙あり。

【七三】縹瓷。綠色の酒瓶。
【七四】光妓。華飾を加へたる舞妓。
【七五】雙鳳。古曲の名。嘈は鳴く貌。
【七六】晉野。師曠、字は子野。晉人なり。琴の名手なり。
【七七】齊瑟秦箏。齊國には多く瑟の名手を出し、秦國には箏の名手多し。
【七八】縈纏。包括といふが如し。
【七九】綢羅。含容といふが如し。
【八〇】爛熠爚。光りかがやく貌。
【八一】鬱蓬勃。氣の出づる貌。
【八二】秋風云云。魏の文帝燕歌行を作り、其詞に云く秋風蕭瑟天氣涼と、故に秋風燕路ニ詠ズといふ。之を笙にて吹くなり。
【八三】天光、朝日。竝に詩篇の名。笙にて此二曲を吹く、故に重るといふ。
【八四】章夏。堯の樂を大章といひ、禹の樂を大夏といふ。
【八五】韶武。舜の樂を韶といひ、武王の樂を大武といふ。
【八六】陳宋齊楚。四國の名。その國各々歌曲あり。

【大意】陽春三月の頃、行人を送別する時、酒酣にして衆亂れ、樂終りて日將に暮れんとし、客既に稀少にして主人微しく疲る。乃ち管籥塤篪の類を去り、筵席を近づけ、膝を交へて坐し、各々嚴莊の顏貌を和げ、幽寂の情を起し、黄皮を披いて甘橘を分ち、壺を傾けて醽酒を酌み、舞人を階前に列し、笙を吹いて雙鳳の曲を奏すれば、子野も懼れて其琴を棄つ。況んや瑟と箏とをや。是に

於て笙聲盛に起り、新曲奇韻更ゝ奏し、歌鼓を包括し、鍾律を含容し、其聲光明にして豔なるあり。氣息蓬勃として出で、或は燕歌行秋風の詩を奏し、或は天光朝日の曲を吹く。其聲大なれども宮聲を越えず、小なれども羽聲に過ぎず。堯舜禹武の樂章より陳宋齊楚の歌章に至るまで、盡く吹奏せざるはなく、聲相近しと雖も、逼迫に至らず、聲相遠しと雖も、乖離に至らず。音聲文を成して、節度各ゝ次序あり。

彼の政に失得ありて(八七)化以て醇薄なり。樂は風を善に移す所以にして、亦俗を惡に易ふる所以なり。故に絲竹の器未だ改まらずして、(八八)桑濮の流已に作る。ただ簧や能く羣聲の清きを研ち、ただ笙や能く衆淸の林を總ぶ。(八九)衞も其邪を措く所なく、鄭も其淫を容るる所なし。天下の和樂、不易の德音にあらずんば、其れ孰か能く此に與らんや。

【八七】化。治化なり。醇は厚なり。
【八八】桑濮。禮記に桑間濮上ノ音ハ亡國ノ音ナリとあり。
【八九】衞鄭。禮記に鄭衞ノ音ハ亂世ノ音ナリとあり。

【大意】夫れ政事に得失あれば、風化に醇厚澆薄の別を生ず。樂は能く風俗を醇美ならしむべく、亦よく邪惡ならしむべし。故に絲竹の器異ならざれども、桑間濮上亡國の音忽ちにして起る。ただ此の簧笙たる、能く衆聲を擊ちて淸雅なり、又衆淸の林を合す。故に鄭衞邪淫の聲も其間に入ること能はず。ああ天下至和の樂、百王不易の德音にあらずんば、能く此の如く邪淫の聲を容れざるを

得んや。筆の德以て見るべし。

(一)嘯の賦　(二)成公子安

(三)逸羣公子は體奇にして好異なり。世に傲り榮を忘れ人事を絕棄し、高を睎み古を慕ひ、想を長うし思を遠くす。將に(四)箕山に登りて以て節を抗げ、滄海に浮んで以て志を游ばしめんとす。是に於て友生を延き同好を集め、性命の(五)至機を精くし、道德の玄奧を硏き、流俗の未だ悟らざるを愍み、獨り超焉として先づ覺たり。世路の阨僻を狹しとし、(六)天衢を仰いで高蹈し、(七)邈として俗を跨えて身を遺れ、乃ち慷慨して長嘯す。時に(八)曜靈景を俄け、光を(九)濛汜に流す。逍遙として手を携へ、(一〇)踟躕して趾を歩ませ、妙聲を丹脣に發し、哀音を皓齒に激す。響抑揚して潛轉し、氣衝鬱して(一一)熛起す。(一二)黃宮を淸角に協

【一】嘯。口を蹙めて聲を出すこと。
【二】成公子安。成公綏、字は子安、晉の東郡白馬の人なり。少くして俊才ありて口吃なり、張華一見して甚だ之を善す。仕へて中書郞となる。
【三】逸羣公子。假に設けたる人名。
【四】箕山。山の名。堯、許由を沛澤の中に朝せしめて曰く請ふ天下を夫子に讓らんと。許由遂に箕山の下に往きて耳を洗ふ。
【五】至機。幾微といふが如し。
【六】天衢。天路なり。
【七】邈。遙遠なり。
【八】曜靈。日なり。
【九】濛汜。日の入る處。
【一〇】踟躕。緩行すること。
【一一】熛起。火焰の如く發すること。
【一二】黃宮。黃鍾宮聲をいふ。淸角は五聲の名。

へ、(二三)商羽を流徴に雜へ、游雲を(二四)泰淸に飄し、長風を萬里に集む。曲既に終りて響絶え、餘玩を遺して未だ已まず。良に自然の至音にして、絲竹の擬する所にあらず。

【大意】逸羣公子といふ者あり。體貌奇偉にして好む所亦人に異り、世に傲り榮華を忘れ、人世の事を棄て去り、高古を慕ひ、將に箕山に登りて節操を研き、大海に浮んで壯志を養はんとす。因つて同好の友を集め、性命の幾微を審かにし、道德の奧義を究め、世俗の悟らざるを憐み、獨り超然として大悟す。乃ち世路の窮厄を狹しとし、天路を仰いで高蹈せんとし、時俗を越えて其身を忘れ、慷慨して長嘯す。時に日將に暮れんとす。手を負ひて徐行し、妙音哀韻を皓齒朱脣の間より發す。其響脣齒の間に潛轉し、其聲鬱然として焰の起るが如く、よく五音に協ひ、游雲を天上に飄し、長風を萬里に傳ふ。曲既に終りて餘韻猶ほ未だ已まず、實に自然の妙音にして絲竹の比擬する能はざる所なり。

是の故に聲器を假らず、用物を借らず、近く諸を身に取り、心を役し氣を御ひ、脣を動かせば曲あり、口を發すれば音を成し、類に觸れ物に感じ、歌に因り吟に隨ひ、大なれども滂らず、細けれども沈まず。激切を(二五)竽笙に淸しめ、闊和を琴瑟に優にし、玄妙は以て神を通じ靈を悟すに足り、精微は以て幽を窮め深を測るに足り、(二六)激楚の哀荒を收め、

【二三】商羽、流徴。五聲の名。
【二四】泰淸。天なり。

(二七)北里の奢淫を節し、(二八)洪災を炎旱に濟ひ、(二九)亢陽を重陰に反し、(三〇)唱引萬變し曲用方なく、和樂怡懌して悲傷摧藏す。時に(三一)幽散して將に絕えんとし、中ごろ(三二)矯厲して慨慷し、徐に(三三)婉約して優游し、紛として繁騖して激揚す。情既に思ひて能く反り、心哀むと雖も傷れず、(三四)八音の至和を總ぶ。故に樂を極むれども荒むことなし。

【大意】其音自然に發し、絲竹等の器物を借らず。我が身に取りて心氣を用ふるのみ。脣を動かせば音聲を成し、見る所の物を逐ひ歌吟に隨ひ嘯いて之を詠じ、大聲も諠しからず、細聲も沈瞎ならず。激切は竽笙に優り、闊和は琴瑟に勝り、よく人の神思を感ぜしめ、幽深の道を悟らしむるに足り、激楚哀荒の音を去り、北里淫靡の聲を節制し、大旱の災を濟ひ、雲雨を招き、變化百出して常調なく、或は人を樂ましめ或は人を悲ましめ、聲幽遠にして絕えんとする時、中ごろ激厲して之を擧げ、更に宛轉して優游し、忽ち疾走して激發し、情思を盡して初に復り、悲んで傷らず。八音の至和を總べて荒淫の患なし。

【二五】竽笙。共に樂器の名。
【二六】激楚。楚聲は哀んで荒むなり。
【二七】北里。紂の淫聲なり。
【二八】洪災。大災なり。嘯けば風を生ず、風生ずれば雲起る、雲起れば雨をふらす。故に大災を炎旱に濟ふといふ。
【二九】亢陽。大旱なり。重陰は雲雨なり。
【三〇】唱引。引は曲調なり。
【三一】幽散。幽遠なり。
【三二】矯厲。高く擧ること。
【三三】婉約。宛轉なり。聲の曲折すること。優游はゆつたりせる貌。
【三四】八音。金石絲竹匏土革木八種の音聲。

若し乃ち高臺に登りて以て遠きに臨み、(二五)文軒を披いて望を騁すれば、(二六)喟として仰抃して首を抗げ、(二七)嘈として長く引いて(二八)憀亮たり。或は(二九)舒肆して自ら反り、或は徘徊して復た放なり。或は(三〇)冉弱にして(三一)柔擾に、或は(三二)澎濞として奔壯なり。橫として鬱鳴して(三三)滔涸し、(三四)冽として(三五)繚眺にして淸昶なり。逸氣奮涌し繽紛として交錯し、(三六)冽列として飃揚し(三七)啾啾として(三八)響作し、(三九)胡馬の長嘶を奏し、寒風を(四〇)北朔に廻らし、又鴻鴈の雛を將ゐ、羣鳴して沙漠に號くに似たり。故に能く形に因りて聲を創め、事に隨つて曲を造し、物に應じて窮りなく、機のごとく發し響のごとく速に、(四一)怫鬱して衝流し、參譚して雲屬し、離るるが若く合ふが若く、將に絕えんとして復た續き、(四二)飛廉幽隧に鼓し、(四三)猛虎中谷に應じ、(四四)南箕穹蒼に動き、淸飃喬木に振ひ、滯積を散じて播揚し、埃靄の溷

【二五】文軒。文飾せる欄干。
【二六】喟。歎くこと。
【二七】嘈。聲なり。
【二八】憀亮。聲の淸徹なる貌。
【二九】舒肆。伸逸なり。
【三〇】冉弱。和聲の繞るなり。
【三一】柔擾。柔順なり。
【三二】澎濞。勇厲の貌。
【三三】滔涸。水の或は滔漫し或は竭涸すること。
【三四】冽。盛なる貌。
【三五】繚眺、淸昶。聲長くして淸きこと。
【三六】冽列。風の貌。
【三七】啾啾。響なり。
【三八】響作。響の起ること。
【三九】胡馬。北方胡地に產する馬。古詩に胡馬北風ヲ思フとあり。
【四〇】北朔。朔も北なり。北方胡地なり。
【四一】怫鬱衝流、參譚雲屬。皆聲多くして相連るをいふ。
【四二】飛廉。風の神。幽隧は風の出づる處。鼓は動なり。
【四三】猛虎。春秋元命苞に猛虎嘯ケバ谷風起ルとあり。
【四四】南箕。南方に箕星あり。風を好む。

濁を流し、陰陽の至和を變じ、淫風の穢俗を移す。若し乃ち(四五)崇岡に游び景山に陵り、巖側に臨み流川を望み、盤石に坐して清泉に漱ぎ、(四六)皐蘭の猗靡たるを藉き、脩竹の(四七)嬋娟たるに蔭すれば、乃ち吟詠して發散し、聲(四八)駱驛として響連り、(四九)蓄思の悱憤を舒べ、久結の纏緜を奮へば、心(五〇)滌蕩して累なく、志俗を離れて(五一)飄然たり。

【大意】高臺に登り欄に倚りて遠望し、喟然として歎を發し、仰ぎ抃ちて首を擧げ、嘈然として聲を引けば、其聲淸徹にして、或は伸逸して復た息み、或は散せずして復た放なり。或は和聲繞りて柔順に、或は忽ちにして勇厲し、或は長流の滔滔たるが如く、或は其の涸渇するが如く、其聲長くして淸暢なり。繽紛交錯して長風の響を擧ぐるが如し。或は胡馬の北風に嘶くが如く、或は鴻鴈の沙漠に鳴くが如し。物の形に因りて其聲を創制す。故に萬物に應じて窮りなく、聲繁くして相連り、離るるが如く合ふが如く、絕えんとして復た續き、風起りて猛虎之に應じ、星天上に動き、風喬木を拂ひ、滯積の氣を振揚し、塵氛の濁を飄流し、陰陽の和氣を變じ、淫穢の俗を易ふ。若夫れ高山崇岡に登り、巖に臨み流を望み、石に踞し泉に漱ぎ、香草を敷きて竹蔭に憩ふ時、長嘯して其志を發散すれば、聲駱驛として絕

【四五】崇岡。高岡なり。景山。景は大なり高なり。
【四六】皐蘭。香草なり。猗靡は風に隨ふ貌。
【四七】嬋娟。美なる貌。
【四八】駱驛。連なる貌。
【四九】蓄思。鬱積せる思。悱憤は鬱憤といふが如し。
【五〇】滌蕩。洗ひ去ること。
【五一】飄然。高遠の貌。

えず、鬱憤を一氣に發露し、煩果之が爲に一洗せらる。

若夫れ(五二)象を金革に假り、則を(五三)陶匏に擬し、衆聲繁奏すれば、(五四)笳の若く簫の若く、(五五)硼硠震隱、訇磕礔嘈たり。(五六)徵を發すれば則ち隆冬にも(五七)熙蒸し、羽を騁すれば則ち嚴霜夏凋ち、商を動かせば則ち秋霖春降り、角を奏すれば則ち谷風條を鳴す。(五八)音均恆ならず、曲に定制なく、行いて流れず、止りて滯らず、口吻に隨つて發揚し、芳氣を假りて遠く逝き、音要妙にして響を流し、聲(五九)激曜として清厲に、信に自然の極麗なり。羌(六〇)殊尤にして世に絕し、(六一)韶夏と咸池とに越ゆ。何ぞ徒に(六二)鄭衛に異るを取るのみならんや。時に(六三)緜駒舌を結んで精を喪ひ、(六四)王豹口を杜ぢて色を失ひ、(六五)虞公聲を輟めて歌を止め、(六六)甯子手を檢めて歎息し、(六七)鍾期琴を弃てて聽を改め、(六八)尼父味を忘れて食はず。百獸率ゐ舞うて足を抃ち、鳳皇來儀して翼を拊つ。乃ち知る長嘯の奇妙なる、蓋し亦音聲の至極なるを。

【五二】象。法なり。金革は金製革製の樂器。
【五三】陶匏。陶製匏製の樂器。
【五四】笳。樂器の名。
【五五】硼硠。以下皆聲なり。
【五六】徵。五聲の一。
【五七】熙蒸。炎蒸すること。
【五八】音均。均は古の韻の字。
【五九】激曜。聲の速なる貌。
【六〇】殊尤。絕異なり。
【六一】韶夏。韶は舜の樂、大夏は禹の樂なり。咸池は堯の樂なり。
【六二】鄭衛。禮記に鄭衛ノ音ハ亂世ノ音ナリとあり。
【六三】緜駒。古の善歌者の名。
【六四】王豹。古の善歌者の名。
【六五】虞公。古の善歌者の名。
【六六】甯子。甯戚なり、古の善歌者。
【六七】鍾期。鍾子期、琴を聽くに巧なる人。
【六八】尼父。孔子なり。論語に孔子齊ニ在リテ韶ヲ聞キ三月肉味ヲ知ラズとあり。

【大意】嘯の聲たるや、法則を金革陶匏の器に取り、衆聲を繁奏すること笳簫に異らず。其聲淸亮嘈嘈たり。故に徵聲を發すれば嚴冬にも炎蒸し、羽聲を發すれば寒霜夏至り、商聲を發すれば秋雨春降り、角聲を發すれば谷風枝を鳴し、音韻千變萬化して遲速度あり。口に隨つて發し、口氣を借りて遠く逝き、誠に自然の妙を極め、遠く堯舜の樂にまさる。獨り鄭衞亂世の音に異るのみにあらざるなり、されば一たび其聲を聞けば、緜駒、王豹、虞公、甯子も感歎して復た歌はず。鍾子期も琴を廢して耳を傾け、孔子も味を忘れて食はざるべく、百獸相率ゐて舞ひ、鳳凰亦來儀すべし。是に於てか嘯聲の至妙なるを知る。

國譯文選上卷終

文選卷一

梁　昭明太子蕭統撰

賦甲　京都上

兩都賦序　班孟堅

或曰。賦者。古詩之流也。昔成康沒而頌聲寢。王澤竭而詩不作。大漢初定。日不暇給。至於武宣之世。乃崇禮官。考文章。內設金馬石渠之署。外興樂府協律之事。以興廢繼絕。潤色鴻業。是以衆庶說豫。福應尤盛。白麟赤鴈。芝房寶鼎之歌。薦於郊廟。神雀五鳳甘露黃龍之瑞。以爲年紀。故言語侍從之臣。若司馬相如。虞丘壽王。東方朔。枚皐。王褒。劉向之屬。朝夕論思。日月獻納。而公卿大臣。御史大夫倪寬。太常孔臧。太中大夫董仲舒。宗正劉德。太子太傅蕭望之等。時時間作。或以抒下情而通諷諭。或以宣上德而盡忠孝。雍容揄揚。著於後嗣。抑亦雅頌之亞也。故孝成之世。論而錄之。蓋奏御者千有餘篇。而後大漢之文章。炳焉與三代同風。且夫。道有夷隆。學有麤密。因時而建德者。不以遠近易則。故皐陶歌虞。奚斯頌魯。同見采於孔氏。列於詩書。其義一也。稽之上古則如彼。考之漢室又如此。斯事雖細。然先臣之舊式。國家之遺美。不可闕也。臣竊見海內清平。朝廷無事。京師修宮室。浚

城隍。而起苑囿。以備制度。西土耆老。咸懷怨思。冀上之睠顧。而盛稱長安舊制。有陋洛邑之議。故臣作兩都賦。以極衆人之所眩曜。折以今之法度。賓辭曰。

西都賦

有西都賓。問於東都主人曰。蓋聞皇漢之初經營也。嘗有意乎都河洛矣。輟而弗康。寔用西遷。作我上都。主人聞其故。而覩其制乎。主人曰。未也。願賓攄懷舊之蓄念。發思古之幽情。博我以皇道。弘我以漢京。賓曰。唯唯。漢之西都。在於雍州。寔曰長安。左據函谷二崤之阻。表以太華・終南之山。右界褒斜・隴首之險。帶以洪河・涇・渭之川。衆流之隈。汧涌其西。華實之毛。則九州之上腴焉。防禦之阻。則天地之隩區焉。是故橫被六合。三成帝畿。周以龍興。秦以虎視。及至大漢受命而都之也。仰悟東井之精。俯協河圖之靈。奉春建策。留侯演成。天人合應。以發皇明。乃眷西顧。寔惟作京。於是睎秦嶺。睋北阜。挾灃灞。據龍首。圖皇基於億載。度宏規而大起。肇自高而終平。世增飾以崇麗。歷十二之延祚。故窮泰而極侈。建金城之萬雉。呀周池而成淵。披三條之廣路。立十二之通門。內則街衢洞達。閭閻且千。九市開場。貨別隧分。人不得顧。車不得旋。闐城溢郭。旁流百廛。紅塵四合。煙雲相連・於是既庶且富。娛樂無疆。都人士女。殊異乎五方。遊士擬於公侯。列肆侈於姬姜。鄉曲豪舉。遊俠之雄。節慕原嘗。名亞春陵。連交合衆。騁騖乎其中。若乃觀其四郊。浮遊近縣。則南望杜霸。北眺五陵。名都對郭。邑居相承。英俊之域。紱冕所興。冠蓋如雲。七相五公・與乎州郡之豪傑。五都之貨殖。三選七遷。充奉陵邑。蓋以彊幹弱枝。隆上都而觀萬國也。封畿之內。厥土

千里。卓犖諸夏。兼其所有。其陽則崇山隱天。幽林穹谷。陸海珍藏。藍田美玉。商洛緣其隈。鄠杜濱其足。源泉灌注。陂池交屬。竹林果園。芳草甘木。郊野之富。號為近蜀。其陰則冠以九嵕。陪以甘泉。乃有靈宮。起乎其中。秦漢之所極觀。淵雲之所頌歎。於是乎存焉。下有鄭白之沃。衣食之源。提封五萬。疆埸綺紛。溝塍刻鏤。原隰龍鱗。決渠降雨。荷插成雲。五穀垂穎。桑麻鋪棻。東郊則有通溝大漕。潰渭洞河。泛舟山東。控引淮湖。與海通波。西郊則有上囿禁苑。林麓藪澤。陂池連乎蜀漢。繚以周牆。四百餘里。離宮別館。三十六所。神池靈沼。往往而在。其中乃有九真之麟。大宛之馬。黃支之犀。條枝之鳥。踰崑崙。越巨海。殊方異類。至於三萬里。其宮室也。體象乎天地。經緯乎陰陽。據坤靈之正位。放太紫之圓方。樹中天之華闕。豐冠山之朱堂。因瓌材而究奇。抗應龍之虹梁。列棼橑以布翼。荷棟桴而高驤。雕玉瑱以居楹。裁金璧以飾璫。發五色之渥彩。光爓朗以景彰。於是左墄右平。重軒三階。閨房周通。門闥洞開。列鐘虡於中庭。立金人於端闈。仍增崖而衡閾。臨峻路而啓扉。徇以離宮別寢。承以崇臺閒館。煥若列宿。紫宮是環。清涼宣溫。神仙長年。金華玉堂。白虎麒麟。區宇若茲。不可殫論。增盤崔嵬。登降炤爛。殊形詭制。每各異觀。乘茵步輦。惟所息宴。後宮則有掖庭椒房。后妃之室。合歡增城。安處常寧。茝若椒風。披香發越。蘭林蕙草。鴛鸞飛翔之列。昭陽特盛。隆於孝成。屋不呈材。牆不露形。裛以藻繡。絡以綸連。隨侯明月。錯落其間。金釭銜璧。是為列錢。翡翠火齊。流耀含英。懸黎垂棘。夜光在焉。於是玄墀釦砌。玉階彤庭。碝磩綵緻。琳珉青熒。珊瑚碧樹。周阿而生。紅羅颯纚。綺組繽紛。精曜華燭。俯仰如神。後宮之號。十有四位。窈窕繁華。更盛迭貴。處乎斯列者。蓋以百數。左有庭中朝堂。百寮之位。蕭曹魏

郡。謀謨乎其上。佐命則垂統。輔翼則成化。流大漢之愷悌。蕩亡秦之毒螫。故令斯人揚樂和之聲。作畫一之歌。功德著乎祖宗。膏澤洽乎黎庶。右有天祿石渠典籍之府。命夫惇誨故老。名儒師傅。講論乎六藝。稽合乎同異。又有承明金馬。著作之庭。大雅宏達。於茲爲羣。元元本本。殫見洽聞。啓發篇章。校理祕文。周以鉤陳之位。衞以嚴更之署。總禮官之甲科。羣百郡之廉孝。虎賁贅衣。閹尹閽寺。陛戟百重。各有典司。周廬千列。徼道綺錯。輦路經營。脩除飛閣。自未央而連桂宮。北彌明光而亘長樂。陵磴道而超西墉。掍建章而連外屬。設璧門之鳳闕。上觚稜而棲金爵。內則別風嶕嶢。眇麗巧而聳擢。張千門而立萬戶。順陰陽以開闔。爾乃正殿崔嵬層構。厥高臨乎未央。經駘盪而出馺娑。洞枍詣以與天梁。上反宇以蓋戴。激日景而納光。神明鬱其特起。遂偃蹇而上躋。軼雲雨於太半。虹霓迴帶於棼楣。雖輕迅與僄狡。猶愕眙而不能階。攀井幹而未半。目眴轉而意迷。捨櫺檻而卻倚。若顚墜而復稽。魂怳怳以失度。巡迴塗而下低。既懲懼於登望。降周流以傍徨。步甬道以縈紆。又杳窱而不見陽。排飛闥而上出。若遊目於天表。似無依而洋洋。前唐中而後太液。覽滄海之湯湯。揚波濤於碣石。激神嶽之嶈嶈。濫瀛洲與方壺。蓬萊起乎中央。於是靈草冬榮。神木叢生。巖峻崷崒。金石崢嶸。抗仙掌以承露。擢雙立之金莖。軼埃壒之混濁。鮮顥氣之清英。騁文成之丕誕。馳五利之所刑。庶松喬之羣類。時遊從乎斯庭。實列仙之攸館。非吾人之所寧。爾乃盛娛遊之壯觀。奮泰武乎上囿。因茲以威戎夸狄。耀威靈而講武事。命荊州使起鳥。詔梁野而驅獸。毛羣內闐。飛羽上覆。接翼側足。集禁林而屯聚。水衡虞人。修其營表。種別羣分。部曲有署。罘網連紘。籠山絡野。列卒周匝。星羅雲布。於是乘鑾輿。備法駕。

帥羣臣。披飛廉。入苑門。遂繞酆鄗。歷上蘭。六師發逐。百獸駭殫。震震爚爚。雷奔電激。草木塗地。山淵反覆。蹂躪其十二三。乃拗怒而少息。爾乃期門佽飛。列刃攢鏃。要趹追蹤。鳥驚觸絲。獸駭値鋒。機不虛掎。弦不再控。矢不單殺。中必疊雙。颮颮紛紛。矰繳相纏。風毛雨血。灑野蔽天。平原赤。勇士厲。猨狖失木。豺狼懾竄。爾乃移師趨險。並蹈潛穢。窮虎奔突。狂兕觸蹷。許少施巧。秦成力折。掎僄狡。扼猛噬。脫角挫脰。徒搏獨殺。挾師豹。拖熊螭。曳犀犛。頓象羆。超洞壑。越峻崖。蹷嶄巖。巨石隤。松柏仆。叢林摧。草木無餘。禽獸殄夷。於是天子乃登屬玉之館。歷長楊之榭。覽山川之體勢。觀三軍之殺獲。原野蕭條。目極四裔。禽相鎮壓。獸相枕藉。然後收禽會衆。論功賜胙。陳輕騎以行炰。騰酒車以斟酌。割鮮野食。舉烽命爵。饗賜畢。勞逸齊。大輅鳴鑾。容與徘徊。集乎豫章之宇。臨乎昆明之池。左牽牛而右織女。似雲漢之無涯。茂樹蔭蔚。芳草被隄。蘭茝發色。曄曄猗猗。若摛錦與布繡。燭燿乎其陂。鳥則玄鶴白鷺。黃鵠鵁鶄。鶬鴰鴇鶂。鳧鷖鴻鴈。朝發河海。夕宿江漢。沈浮往來。雲集霧散。於是後宮乘輚輅。登龍舟。張鳳蓋。建華旗。袪黼帷。鏡清流。靡微風。澹淡浮。櫂女謳。鼓吹震。聲激越。謍厲天。鳥羣翔。魚窺淵。招白鷴。下雙鵠。揄文竿。出比目。撫鴻罿。御矰繳。方舟並鶩。俛仰極樂。遂乃風舉雲搖。浮遊溥覽。前乘秦嶺。後越九嵕。東薄河華。西涉岐雍。宮館所歷。百有餘區。行所朝夕。儲不改供。禮上下而接山川。究休佑之所用。采遊童之歡謠。第從臣之嘉頌。於斯之時。都都相望。邑邑相屬。國藉十世之基。家承百年之業。士食舊德之名氏。農服先疇之畎畝。商修族世之所鬻。工用高曾之規矩。粲乎隱隱。各得其所。若臣者。徒觀迹於舊墟。聞之乎故老。十分未得其一端。故不能徧舉也。

東都賦

東都主人。喟然而歎曰。痛乎風俗之移人也。子實秦人。矜夸館室。保界河山。信識昭襄而知始皇矣。烏覩大漢之云爲乎。夫大漢之開元也。奮布衣以登皇位。由數朞而創萬代。蓋六籍所不能談。前聖靡得而言焉。當此之時。功有橫而當天。討有逆而順民。故婁敬度勢而獻其說。蕭公權宜而拓其制。時豈泰而安之哉。計不得以已也。吾子曾不是睹。顧曜後嗣之末造。不亦暗乎。今將語子以建武之治。永平之事。監於太清。以變子之惑志。往昔王莽作逆。漢祚中缺。天人致誅。六合相滅。于時之亂。生民幾亡。鬼神泯絕。壑無完柩。郛罔遺室。原野厭人之肉。川谷流人之血。秦項之災。猶不克半。書契以來。未之或紀。故下人號而上訴。上帝懷而降監。乃致命乎聖皇。於是聖皇乃握乾符。闡坤珍。披皇圖。稽帝文。赫然發憤。應若興雲。霆擊昆陽。憑怒雷震。遂超大河。跨北嶽。立號高邑。建都河洛。紹百王之荒屯。因造化之盪滌。體元立制。繼天而作。系唐統。接漢緒。茂育羣生。恢復疆宇。勳兼乎在昔。事勤乎三五。豈特方軌竝跡。紛綸后辟。治近古之所務。蹈一聖之險易云爾。且夫建武之元。天地革命。四海之內。更造夫婦。肇有父子。君臣初建。人倫寔始。斯乃伏羲氏之所以基皇德也。分州土。立市朝。作舟輿。造器械。斯乃軒轅氏之所以開帝功也。龔行天罰。應天順人。斯乃湯武之所以昭王業也。遷都改邑。有殷宗中興之則焉。卽土之中。有周成隆平之制焉。不階尺土一人之柄。同符乎高祖。克己復禮。以奉終始。允恭乎孝文。憲章稽古。封岱勒成。儀炳乎世宗。按六經而校德。眇古昔而論功。仁聖之事既該。而帝王之道備矣。至於永平之

際。重熙而累洽。盛三雍之上儀。修袞龍之法服。鋪鴻藻。信景鑠。揚世廟。正雅樂。神人之和允洽。羣臣之序既肅。乃動大輅。遵皇衢。省方巡狩。窮覽萬國之有無。考聲敎之所被。散皇明以燭幽。然後增周舊。修洛邑。扇巍巍。顯翼翼。光漢京於諸夏。總八方而爲之極。是以皇城之內。宮室光明。闕庭神麗。奢不可踰。儉不能侈。外則因原野以作苑。塡流泉而爲沼。發蘋藻以潛魚。豐圃草以毓獸。制同乎梁騶。誼合乎靈囿。若乃順時節而蒐狩。簡車徒以講武。則必臨之以王制。考之以風雅。歷騶虞。覽駟驖。嘉車攻。采吉日。禮官整儀。乘輿乃出。於是發鯨魚。鏗華鐘。登玉輅。乘時龍。鳳蓋棽麗。和鑾玲瓏。天官景從。寢威盛容。山靈護野。屬御方神。雨師泛灑。風伯淸塵。千乘雷起。萬騎紛紜。元戎竟野。戈鋋彗雲。羽旄掃霓。旌旗拂天。焱焱炎炎。揚光飛文。吐爓生風。欱野歕山。日月爲之奪明。丘陵爲之搖震。遂集乎中囿。陳師案屯。駢部曲。列校隊。勒三軍。誓將帥。然後舉烽伐鼓。申令三驅。輕車霆激。驍騎電騖。由基發射。范氏施御。弦不睼禽。轡不詭遇。飛者不及翔。走者不及去。指顧倏忽。獲車已實。樂不極盤。殺不盡物。馬踠餘足。士怒未渫。先驅復路。屬車按節。於是薦三犧。效五牲。禮神祇。懷百靈。覲明堂。臨辟雍。揚緝熙。宣皇風。登靈臺。考休徵。俯仰乎乾坤。參象乎聖躬。目中夏而布德。瞰四裔而抗稜。西盪河源。東澹海漘。北動幽崖。南曜朱垠。殊方別區。界絕而不鄰。自孝武之所不征。孝宣之所未臣。莫不陸讋水慄。奔走而來賓。遂綏哀牢。開永昌。春王三朝。會同漢京。是日也天子受四海之圖籍。膺萬國之貢珍。內撫諸夏。外綏百蠻。爾乃盛禮興樂。供帳置乎雲龍之庭。陳百寮而贊羣后。究皇儀而展帝容。於是庭實千品。旨酒萬鍾。列金罍。班玉觴。嘉珍御。太牢饗。爾乃食舉雍徹。太師奏樂。陳金石。布絲竹。鐘鼓鏗鎗。管

絃曄煜。抗五聲。極六律。歌九功。舞八佾。韶武備。泰古畢。四夷間奏。德廣所及。僸佅兜離。罔不具集。萬樂備。百禮暨。皇歡浹。羣臣醉。降烟熅。調元氣。然後撞鐘告罷。百僚遂退。於是聖上覩萬方之歡娛。又沐浴於膏澤。懼其侈心之將萌。而怠於東作。乃申舊章。下明詔。命有司。班憲度。昭節儉。示太素。去後宮之麗飾。損乘輿之服御。抑工商之淫業。興農桑之盛務。遂令海內棄末而反本。背僞而歸眞。女修織紝。男務耕耘。器用陶匏。服尚素玄。恥纖美而不服。賤奇麗而不珍。捐金於山。沈珠於淵。於是百姓滌瑕盪穢。而鏡至清。形神寂寞。耳目不營。嗜欲之源滅。廉恥之心生。莫不優游而自得。玉潤而金聲。是以四海之內。學校如林。庠序盈門。獻酬交錯。俎豆莘莘。下舞上歌。蹈德詠仁。登降飫宴之禮既畢。因相與嗟歎玄德。讜言弘說。咸含和而吐氣。頌曰。盛哉乎斯世。今論者但知誦虞夏之書。詠殷周之詩。講羲文之易。論孔氏之春秋。罕能精古今之淸濁。究漢德之所由。唯子頗識舊典。又徒馳騁乎末流。溫故知新已難。而知德者鮮矣。且夫僻界西戎。險阻四塞。修其防禦。孰與處乎土中。平夷洞達。萬方輻湊。秦嶺九嵕。涇渭之川。曷若四瀆五嶽。帶河泝洛。圖書之淵。建章甘泉。館御列仙。孰與靈臺明堂。統和天人。太液昆明。鳥獸之囿。曷若辟雍海流。道德之富。游俠踰侈。犯義侵禮。孰與同履法度。翼翼濟濟。子徒習秦阿房之造天。而不知京洛之有制。識函谷之可關。而不知王者之無外。主人之辭未終。西都賓矍然失容。逡巡降階。惵然意下。捧手欲辭。主人曰。復位。今將授子五篇之詩。賓既卒業。乃稱曰。美哉乎斯詩。義正乎揚雄。事實乎相如。匪唯主人之好學。蓋乃遭遇乎斯時。小子狂簡。不知所裁。既聞正道。請終身而誦之。其辭曰。

明堂詩

於昭明堂。明堂孔陽。聖皇宗祀。穆穆煌煌。上帝宴饗。五位時序。誰其配之。世祖光武。普天率土。各以其職。猗歟緝熙。允懷多福。

辟雍詩

乃流辟雍。辟雍湯湯。聖皇莅止。造舟爲梁。皤皤國老。乃父乃兄。抑抑威儀。孝友光明。於赫太上。示我漢行。洪化唯神。永觀厥成。

靈臺詩

乃經靈臺。靈臺既崇。帝勤時登。爰考休徵。三光宣精。五行布序。習習祥風。祁祁甘雨。百穀蓁蓁。庶草蕃廡。屢惟豐年。於皇樂胥。

寶鼎詩

嶽修貢兮川效珍。吐金景兮歊浮雲。寶鼎見兮色紛紜。煥其炳兮被龍文。登祖廟兮享聖神。昭靈德兮彌億年。

白雉詩

啓靈篇兮披瑞圖。獲白雉兮效素烏。嘉祥阜兮集皇都。發皓羽兮奮翹英。容潔朗兮於淳精。彰皇德兮侔周成。永延長兮膺天慶。

西京賦　　張平子

有憑虛公子者。心奓體忲。雅好博古。學乎舊史氏。是以多識前代之載。言於安處先生曰。

夫人在陽時則舒。在陰時則慘。此牽乎天者也。處沃土則逸。處瘠土則勞。此繫乎地者也。慘則尠於歡。勞則褊於惠。能違之者寡矣。小必有之。大亦宜然。故帝者因天地以致化。兆民承上教以成俗。化俗之本。有與推移。何以覈諸。秦據雍而強。周即豫而弱。高祖都西而泰。光武處東而約。政之興衰。常由此作。先生獨不見西京之事歟。請爲吾子陳之。漢氏初都。在渭之涘。秦里其朔。寔爲咸陽。左有崤函重險。桃林之塞。綴以二華。巨靈贔屓。高掌遠蹠。以流河曲。厥跡猶存。右有隴坻之隘。隔閡華戎。岐梁汧雍。陳寶鳴雞在焉。於前則終南太一。隆崛崔崪。隱轔鬱律。連岡乎嶓冢。抱杜含鄠。欱灃吐鎬。爰有藍田珍玉。是之自出。於後則高陵平原。據渭踞涇。澶漫靡迤。作鎮於近。其遠則有九嵕甘泉。涸陰沍寒。日北至而含凍。此焉淸暑。爾乃廣衍沃野。厥田上上。寔爲地之奧區神皐。昔者大帝悅秦繆公而覲之。饗以鈞天廣樂。帝有醉焉。乃爲金策。錫用此土。而翦諸鶉首。是時也並爲強國者有六。然而四海同宅西秦。豈不詭哉。自我高祖之始入也。五緯相汁。以旅於東井。婁敬委輅。幹非其議。天啓其心。人惎之謀。及帝圖時。意亦有慮乎神祇。宜其可定以爲天邑。豈伊不虔思於天衢。豈伊不懷歸於枌榆。天命不滔。疇敢以渝。於是量徑輪。考廣袤。經城洫。營郭郛。取殊裁於八都。豈稽度於往舊。爾乃覽秦制。跨周法。狹百堵之側陋。增九筵之迫脅。正紫宮於未央。表嶢闕於閶闔。疏龍首以抗殿。狀巍峩以岌嶪。亘雄虹之長梁。結棼橑以相接。蔕倒茄於藻井。披紅葩之狎獵。飾華榱與璧璫。流景曜之韡曄。彫楹玉碣。繡栭雲楣。三階重軒。鏤檻文梍。右平左墄。青瑣丹墀。刊層平堂。設切厓隒。坻崿鱗眴。棧齴巉嶮。襄岸夷塗。脩路峻險。重門襲固。姦宄是防。仰福帝居。陽曜陰藏。洪鐘萬鈞。猛虡趪趪。負筍業而餘怒。

乃奮翅而騰驤朝堂承東。溫調延北。西有玉臺。聯以昆德。嵯峨崨嶫。罔識所則。若夫長年
神仙。宣室玉堂。麒麟朱鳥。龍興含章。譬衆星之環極。叛赫戲以煇煌。正殿路寢。用朝羣辟。
大廈耽耽。九戶開闢。嘉木樹庭。芳草如積。高門有閌。列坐金狄。內有常侍謁者。奉命當御。
外有蘭臺金馬。遞宿迭居。次有天祿石渠。挍文之處。重以虎威章溝。嚴更之署。徼道外周。千
廬內附。衛尉八屯。警夜巡晝。植鎩懸瞂。用戒不虞。後宮則昭陽飛翔。增成合驩。蘭林披香。
鳳凰鴛鸞。羣窈窕之華麗。嗟內顧之所觀。故其館室次舍。采飾纖縟。裛以藻繡。文以朱綠。
翡翠火齊。絡以美玉。流懸黎之夜光。綴隨珠以爲燭。金戺玉階。彤庭煇煇。珊瑚琳碧。瓀珉
璘彬。珍物羅生。煥若崑崙。雖厥裁之不廣。侈靡踰乎至尊。於是鉤陳之外。閣道穹隆。屬長樂
與明光。徑北通于桂宮。命般爾之巧匠。盡變態乎其中。於是後宮不移。樂不徙懸。門衛供
帳。官以物辦。恣意所幸。下輦成燕。窮年忘歸。猶弗能徧。瑰異日新。殫所未見。惟帝王之神
麗。懼尊卑之不殊。雖斯宇之既坦。心猶憑而未攄。思比象於紫微。恨阿房之不可廬。覛往
昔之遺館。獲林光於秦餘。處甘泉而爽塏。乃隆崇而弘敷。既新作於迎風。增露寒與儲胥。
託喬基於山岡。直墆霓以高居。通天訬以竦峙。徑百常而莖擢。上辯華以交紛。下刻陗其
若削。翔鶤仰而弗逮。況青鳥與黃雀。伏櫺檻而頫聽。聞雷霆之相激。柏梁既災。越巫陳方。
建章是經。用厭火祥。營宇之制。事兼未央。圜闕竦以造天。若雙碣之相望。鳳騫翥於甍標。
咸遡風而欲翔。閶闔之內。別風嶕嶢。何工巧之瑰瑋。交綺豁以疏寮。干雲霧而上達。狀亭亭
以苕苕。神明崛其特起。井幹疊而百增。跱遊極於浮柱。結重欒以相承。累層構而遂隮。望
北辰而高興。消雰埃於中宸。集重陽之清瀓。瞰宛虹之長鬐。察雲師之所憑。上飛闥而仰

眺。正覩瑤光與玉繩。將乍往而未半。怵悼慄而聳競。非都盧之輕趫。孰能超而究升。馺娑駘盪。燾奡桔桀。枍詣承光。睽罛庨豁。增桴重棼。鍔鍔列列。反宇業業。飛檐轥轥。流景內照。引曜日月。天梁之宮。寔開高闈。旗不脫扃。結駟方蘄。櫟輻輕騖。容於一扉。長廊廣廡。連閣雲蔓。閈庭詭異。門千戶萬。重閨幽闥。轉相踰延。望窱窱以徑廷。眇不知其所返。既乃珍臺蹇產以極壯。墱道邐倚以正東。似閬風之遐坂。橫西洫而絕金墉。城尉不弛柝。而內外潛通。前開唐中。彌望廣潒。顧臨太液。滄池漭沆。漸臺立於中央。赫昈昈以弘敞。清淵洋洋。神山峩峩。列瀛洲與方丈。夾蓬萊而駢羅。上林岑以壘嵬。下嶃巖以嵒齬。長風激於別隯。起洪濤而揚波。浸石菌於重涯。濯靈芝以朱柯。海若游於玄渚。鯨魚失流而蹉跎。於是采少君之端信。庶欒大之貞固。立修莖之仙掌。承雲表之清露。屑瓊蘂以朝餐。必性命之可度。美往昔之松喬。要羨門乎天路。想升龍於鼎湖。豈時俗之足慕。若歷世而長存。何遽營乎陵墓。徒觀其城郭之制。則旁開三門。參塗夷庭。方軌十二。街衢相經。廛里端直。甍宇齊平。北闕甲第。當道直啟。程巧致功。期不陁陊。木衣綈錦。土被朱紫。武庫禁兵。設在蘭錡。匪石匪董。疇能宅此。爾乃廓開九市。通闤帶闠。旗亭五重。俯察百隧。周制大胥。今也惟尉。瓌貨方至。鳥集鱗萃。鬻者兼贏。求者不匱。爾乃商賈百族。裨販夫婦。鬻良雜苦。蚩眩邊鄙。何必昏於作勞。邪贏優而足恃。彼肆人之男女。麗美奢乎許史。若夫翁伯濁質。張里之家。擊鍾鼎食。連騎相過。東京公侯。壯何能加。都邑遊俠。張趙之倫。齊志無忌。擬跡田文。輕死重氣。結黨連羣。寔蕃有徒。其從如雲。茂陵之原。陽陵之朱。趫悍虓豁。如虎如貙。睚眦蠆芥。屍僵路隅。丞相欲以贖子罪。陽石汙而公孫誅。若其五縣遊麗。辯論之士。街談巷議。彈射臧否。剖

析毫氂。擘肌分理。所好生毛羽。所惡成瘡痏。郊甸之內。鄉邑殷賑。五都貨殖。既遷既引。商旅聯槅。隱隱展展。冠帶交錯。方轅接軫。封畿千里。統以京尹。郡國宮館。百四十五。右極盩厔。并卷酆鄠。左暨河華。遂至號土。上林禁苑。跨谷彌阜。東至鼎湖。斜界細柳。掩長楊而聯五柞。繞黃山而款牛首。繚垣緜聯。四百餘里。植物斯生。動物斯止。衆鳥翩翻。羣獸駓騃。散似驚波。聚似京峙。伯益不能名。隸首不能紀。林麓之饒。于何不有。木則樅栝椶柟。梓棫楩楓。嘉卉灌叢。蔚若鄧林。鬱蓊薆薱。橚爽櫹槮。吐葩颺榮。布葉垂陰。草則葴莎菅蒯。薇蕨荔芃。王蒭莔臺。戎葵懷羊。苯䔿蓬茸。彌皐被岡。篠簜敷衍。編町成篁。山谷原隰。泱漭無疆。迺有昆明靈沼。黑水玄阯。周以金堤。樹以柳杞。豫章珍館。揭焉中峙。牽牛立其左。織女處其右。日月於是乎出入。象扶桑與濛汜。其中則有黿鼉巨鼈。鱣鯉鱮鮦。鮪鯢鱨魦。脩額短項。大口折鼻。詭類殊種。鳥則鷫鷞鴰鴇。駕鵝鴻鶤。上春候來。季秋就溫。南翔衡陽。北棲鴈門。奮隼歸鳧。沸卉軿訇。衆形殊聲。不可勝論。於是孟冬作陰。寒風肅殺。雨雪飄飄。氷霜慘烈。百卉具零。剛蟲搏摯。爾乃振天維。衍地絡。蕩川瀆。簸林薄。鳥畢駭。獸咸作。草伏木棲。寓居穴託。起彼集此。霍繹紛泊。在彼靈囿之中。前後無有垠鍔。虞人掌焉。爲之營域。焚萊平場。柞木翦棘。結罝百里。迒杜蹊塞。麀鹿麌麌。駢田偪仄。天子乃駕雕軫。六駿駮。戴翠帽。倚金較。璿弁玉纓。遺光儵爚。建玄弋。樹招搖。棲鳴鳶。曳雲梢。弧旌枉矢。虹旃蜺旄。華蓋承辰。天畢前驅。千乘雷動。萬騎龍趨。屬車之簉。載獫猲獢。匪惟翫好。迺有秘書。小說九百。本自虞初。從容之求。寔俟寔儲。於是蚩尤秉鉞。奮鬣被般。禁禦不若。以知神姦。魑魅魍魎。莫能逢旃。陳虎旅於飛廉。正壘壁乎上蘭。結部曲。整行伍。燎京薪。駴雷鼓。縱獵徒。赴長莽。迾卒清

候。武士赫怒。緹衣韎韐。睢盱拔扈。光炎燭天庭。囂聲震海浦。河渭爲之波盪。吳嶽爲之陁堵。百禽㥄遽。騤瞿奔觸。喪精亡魂。失歸忘趣。投輪關輻。不邀自遇。飛罕潚箾。流鏑搊㩧。矢不虛舍。鋋不苟躍。當足見蹍。値輪被轢。僵禽斃獸。爛若磧礫。但觀罝羅之所羂結。竿殳之所揘畢。叉蔟之所攙捔。徒搏之所撞㧌。白日未及移其晷。已獮其十七八。若夫遊鷮高翬。絕阬踰斥。毚兔聯猭。陵巒超壑。比諸東郭。莫之能獲。乃有迅羽輕足。尋景追括。鳥不暇舉。獸不得發。青骹摯於韝下。韓盧噬於緤末。及其猛毅髬髵。隅目高眶。威懾兕虎。莫之敢伉。乃使中黃之士。育獲之疇。朱鬢䰅髽。植髮如竿。袒裼戟手。奎踽盤桓。鼻赤象。圈巨狿。攎狒猥。批猱狡。揩枳落。突棘藩。梗林爲之靡拉。樸叢爲之摧殘。輕銳僄狡。趫捷之徒。赴洞穴。探封狐。陵重巘。獵昆駼。杪木末。擭獑猢。超殊榛。擿飛鼯。是時後宮嬖人。昭儀之倫。常亞於乘輿。慕賈氏之如皐。樂北風之同車。盤于遊畋。其樂只且。於是鳥獸殫。目觀窮。遷延邪睨。集乎長楊之宮。息行夫。展車馬。收禽舉胔。數課衆寡。置互擺牲、頒賜獲鹵。割鮮野饗。犒勤賞功。五軍六師。千列百重。酒車酌醴。方駕授饔。升觴舉燧。既釂鳴鐘。膳夫馳騎。察貳廉空。炙炰夥。清酤㲃。皇恩溥。洪德施。徒御悅。士忘罷。巾車命駕。迴旆右移。儴佯乎五柞之館。旋憩乎昆明之池。登豫章。簡矰紅。蒲且發。弋高鴻。挂白鶴。聯飛龍。磻不特絓。往必加雙。於是命舟牧。爲水嬉。浮鷁首。翳雲芝。垂翟葆。建羽旗。齊栧女。縱櫂歌。發引和。校鳴葭。奏淮南。度陽阿。感河馮。懷湘娥。驚蝄蜽。憚蛟蛇。然後釣魴鱧。纚鰋鮋。摭紫貝。搏耆龜。搤水豹。馽潛牛。澤虞是濫。何有春秋。擿漻澥。搜川瀆。布九罭。設罜䍡。摷鯤鮞。殄水族。蘧藕拔。蜃蛤剝。逞欲畋魰。效獲麑麌。摎蓼浶浪。乾池滌藪。上無逸飛。下無遺走。擭胎拾卵。蚳蝝盡取。取樂今日。遑恤我後。

既定且寧。焉知傾陁。大駕幸乎平樂之館。張甲乙而襲翠被。攢珍寶之玩好。紛瑰麗以奓
靡。臨迥望之廣場。程角觝之妙戲。烏獲扛鼎。都盧尋橦。衝狹鷰濯。胷突銛鋒。跳丸劒之揮
霍。走索上而相逢。華嶽峩峩。岡巒參差。神木靈草。朱實離離。總會仙倡。戲豹舞羆。白虎鼓
瑟。蒼龍吹篪。女娥坐而長歌。聲清暢而蝼蛇。洪涯立而指麾。被毛羽而襳襹。度曲未終。雲
起雪飛。初若飄飄。後遂霏霏。複陸重閣。轉石成雷。礔礰激而增響。磅礚象乎天威。巨獸百
尋。是爲蔓延。神山崔巍。欻從背見。熊虎升而拏攫。猨狖招而高援。恠獸陸梁。大雀踆踆。白
象行孕。垂鼻轔輑。海鱗變而成龍。狀蜿蜿以蝹蝹。含利颬颬。化爲仙車。驪駕四鹿。芝蓋九
葩。蟾蜍與龜。水人弄蛇。奇幻儵忽。易貌分形。呑刀吐火。雲霧杳冥。畫地成川。流渭通涇。東
海黃公。赤刀粤祝。冀厭白虎。卒不能救。挾邪作蠱。於是不售。爾乃建戲車。樹修旃。侲僮逞
材。上下翩翻。突倒投而跟絓。譬殞絕而復聯。百馬同轡。騁足竝馳。橦末之伎。態不可彌。彎
弓射乎西羌。又顧發乎鮮卑。於是衆變盡。心酲醉。盤樂極。悵懷萃。陰戒期門。微行要屈。降
尊就卑。懷璽藏紱。便旋閭閻。周觀郊遂。若神龍之變化。彰后皇之爲貴。然後歷掖庭。適歡
館。捐衰色。從嬿婉。促中堂之陿坐。羽觴行而無算。祕舞更奏。妙材騁伎。妖蠱豔夫夏姬。美
聲暢於虞氏。始徐進而羸形。似不任乎羅綺。嚼清商而却轉。增嬋娟以此豸。紛縱體而迅
赴。若驚鶴之羣罷。振朱屣於盤樽。奮長袖之颯纚。要紹修態。麗服颺菁。眳藐流眄。一顧傾
城。展季桑門。誰能不營。列爵十四。競媚取榮。盛衰無常。惟愛所丁。衛后興於鬒髮。飛燕寵
於體輕。爾乃逞志究欲。窮身極娛。鑒戒唐詩。他人是媮。自君作故。何禮之拘。增昭儀於婕
妤。賢既公而又侯。許趙氏以無上。思致董於有虞。王閎爭於坐側。漢載安而不渝。高祖創

業。繼體承基。暫勞永逸。無爲而治。耽樂是從。何慮何思。多歷年所。二百餘朞。徒以地沃野豐。百物殷阜。巖險周固。襟帶易守。得之者强。據之者久。流長則難竭。柢深則難朽。故奢泰肆情。而馨烈彌茂。鄙生生乎三百之外。傳聞於未聞之者。曾髣髴其若夢。未一隅之能覩。此何與於殷人屢遷。前八而後五。居相圯耿。不常厥土。盤庚作誥。帥人以苦。方今聖上。同天號于帝皇。掩四海而爲家。富有之業。莫我大也。徒恨不能以靡麗爲國華。獨儉嗇以齷齪。忘蟋蟀之謂何。豈欲之而不能。將能之而不欲歟。蒙竊惑焉。願聞所以辯之之說也。

文選卷一終

文選卷二

賦乙　京都中

東京賦

張平子

安處先生於是似不能言者。憮然有間。乃莞爾而笑曰。若客所謂末學膚受。貴耳而賤目者也。苟有胸而無心。不能節之以禮。宜其陋今而榮古矣。由余以西戎孤臣。而悝穆公於宮室。如之何其以溫故知新研覈是非。近於此惑。周姬之末。不能厥政。政用多僻。始於宮鄰。卒於金虎。嬴氏搏翼。擇肉西邑。是時也。七雄竝爭競。相高以奢麗。楚築章華於前。趙建叢臺於後。秦政利觜長距。終得擅場。思專其侈。以莫己若。乃構阿房。起甘泉。結雲閣。冠南山。征稅盡。人力殫。然後收以太半之賦。威以參夷之刑。其遇民也。若薙氏之芟草。既蘊崇之。又行火焉。惵惵黔首。豈徒跼高天蹐厚地而已哉。乃救死於其頸。敺以就役。唯力是視。百姓不能忍。是用息肩於大漢。而欣戴高祖。高祖膺籙受圖。順天行誅。杖朱旗而建大號。所推必亡。所存必固。掃項軍於垓下。紲子嬰於軹塗。因秦宮室。據其府庫。作洛之制。我則未暇。是以西匠營宮。目翫阿房。規摹踰溢。不度不臧。損之又損。然尚過於周堂。觀者狹而謂之陋。帝已譏其泰而弗康。且高既受命建家。造我區夏矣。文又躬自菲薄。治致升平之德。武有大啓土宇。紀禪肅然之功。宣重威以撫和戎狄。呼韓來享。咸用紀宗存主。饗祀不輟。

銘勳彝器。歷世彌光。今捨純懿而論爽德。以春秋所諱而爲美談。宜無嫌於往初。故蔽善而揚惡。祗吾子之不知言也。必以肆奢爲賢。則是黃帝合宮。有虞總期。固不如夏癸之瑤臺。殷辛之瓊室也。湯武誰革而用師哉。蓋亦覽東京之事以自寤乎。且夫天子有道。守在海外。守位以仁。不恃隘害。苟民志之不諒。何云巖險與襟帶。秦負阻於二關。卒開項而受沛。彼偏據而規小。豈如宅中而圖大。昔先王之經邑也。掩觀九隩。靡地不營。土圭測景。不縮不盈。總風雨之所交。然後以建王城。審曲面勢。泝洛背河。左伊右瀍。西阻九阿。東門于旋。盟津達其後。太谷通其前。廻行道乎伊闕。邪徑捷乎轘轅。太室作鎮。揭以熊耳。底柱輟流。鐔以大伾。溫液湯泉。黑丹石緇。王鮪岫居。能鼈三趾。虙妃攸館。神用挺紀。龍圖授羲。龜書畀姒。召伯相宅。卜惟洛食。周公初基。其繩則直。萇弘魏舒。是廓是極。經途九軌。城隅九雉。度堂以筵。度室以几。京邑翼翼。四方所視。漢初弗之宅也。故宗緒中圮。巨猾間舋。竊弄神器。歷載三六。偸安天位。于時蒸民。罔敢或貳。其取威也重矣。我世祖忿之。乃龍飛白水。鳳翔參墟。授鉞四七。共工是除。欃槍旬始。羣凶靡餘。區宇乂寧。思和求中。睿哲玄覽。都茲洛宮。曰止曰時。昭明有融。既光厥武。仁洽道豐。登岱勒封。與黃比崇。逮至顯宗。六合殷昌。乃新崇德。遂作德陽。啓南端之特闈。立應門之將將。昭仁惠於崇賢。抗義聲於金商。飛雲龍於春路。屯神虎於秋方。建象魏之兩觀。旌六典之舊章。其內則含德章臺。天祿宣明。溫飭迎春。壽安永寧。飛閣神行。莫我能形。濯龍芳林。九谷八溪。芙蓉覆水。秋蘭被涯。渚戲躍魚。淵游龜蠵。永安離宮。脩竹冬青。陰池幽流。玄泉洌清。鵯鶋秋棲。鶻鵃春鳴。雎鳩麗黃。關關嚶嚶。於南則前殿靈臺。龢驩安福。謻門曲榭。邪阻城洫。奇樹珍果。鉤盾所職。西登少華。

亭候修勅。九龍之內。寔曰嘉德。西南其戶。匪雕匪刻。我后好約。乃宴斯息。於東則洪池清籞。淥水澹澹。內阜川禽。外豐葭菼。獻鼈蜃與龜魚。供蝸蠯與菱芡。其西則有平樂。都場。示遠之觀。龍雀蟠蜿。天馬半漢。瑰異譎詭。燦爛炳煥。奢未及侈。儉而不陋。規遵王度。動中得趣。於是觀禮。禮舉義具。經始勿亟。成之不日。猶謂爲之者勞。居之者逸。慕唐虞之茅茨。思夏后之卑室。乃營三宮。布政頒常。複廟重屋。八達九房。規天矩地。授時順鄉。造舟清池。惟水泱泱。左制辟雍。右立靈臺。因進距衰。表賢簡能。馮相觀祲。祈禠禳災。於是孟春元日。羣后旁戾。百僚師師。于斯胥洎。藩國奉聘。要荒來質。具惟帝臣。獻琛執贄。當覲於殿下者。蓋數萬以二。爾乃九賓重。臚人列。崇牙張。鏞鼓設。郎將司階。虎戟交鎩。龍輅充庭。雲旗拂霓。夏正三朝。庭燎晢晢。撞洪鐘。伐靈鼓。旁震八鄙。軯礚隱訇。若疾霆轉雷。而激迅風也。是時稱警蹕。已下彫輦於東廂。冠通天。佩玉璽。紆皇組。要干將。負斧扆。次席紛純。左右玉几。穆穆而南面以聽矣。然後百辟乃入。司儀辨等。尊卑以班。璧羔皮帛之贄既奠。天子乃以三揖之禮禮之。穆穆焉。皇皇焉。濟濟焉。將將焉。信天下之壯觀也。乃羨公侯卿士。登自東除。訪萬機。詢朝政。勤恤民隱。而除其眚。人或不得其所。若己納之於隍。荷天下之重任。匪怠皇以寧靜。發京倉。散禁財。賚皇僚。逮輿臺。命膳夫以大饗。饔餼浹乎家陪。春醴惟醇。燔炙芬芬。君臣歡康。具醉薰薰。千品萬官。已事而踆。勤屢省。懋乾乾。清風協於玄德。淳化通於自然。憲先靈以齊軌。必三思以顧愆。招有道於仄陋。開敢諫之直言。聘丘園之耿絜。旅束帛之戔戔。上下通情。式宴且盤。及將祀天郊。報地功。祈福乎上玄。思所以爲虔。肅肅之儀盡。穆穆之禮殫。然後以獻精誠。奉禋祀。曰允矣天子者也。乃整法服。正冕帶。珩紞紘綖。玉笄

綦會。火龍黼黻。藻繂鞶厲。結飛雲之袷輅。樹翠羽之高蓋。建辰旒之太常。紛焱悠以容裔。六玄虬之弈弈。齊騰驤而沛艾。龍輈華轙。金鋄鏤鍚。方釳左纛。鉤膺玉瓖。鑾聲噦噦。和鈴鉠鉠。重輪貳轄。疏轂飛軨。羽蓋葳蕤。葩瑵曲莖。順時服而設副。咸龍旂而繁纓。立戈迤戛。農輿輅木。屬車九九。乘軒並轂。彏弩重旃。朱旄青屋。奉引既畢。先輅乃發。鸞旗皮軒。通帛綪旆。雲罕九斿。闟戟轇轕。髶髦被繡。虎夫戴鶡。駙承華之蒲梢。飛流蘇之騷殺。總輕武於後陳。奏嚴鼓之嘈囋。戎士介而揚揮。戴金鉦而建黃鉞。清道案列。天行星陳。肅肅習習。隱隱轔轔。殿未出乎城闕。旆已迴乎郊畛。盛夏后之致美。爰恭敬於明神。爾乃孤竹之管。雲和之瑟。雷鼓鼝鼝。六變既畢。冠華秉翟。列舞八佾。元祀惟稱。羣望咸秩。颺槱燎之炎煬。致高煙乎太一。神歆馨而顧德。祚靈主以元吉。然後宗上帝於明堂。推光武以作配。辨方位而正則。五精帥而來摧。尊赤氏之朱光。四靈懋而允懷。於是春秋改節。四時迭代。蒸蒸之心。感物增思。躬追養於廟祧。奉蒸嘗與禴祠。物牲辯省。設其楅衡。毛炰豚胉。亦有和羹。滌濯靜嘉。禮儀孔明。萬舞奕奕。鐘鼓喤喤。靈祖皇考。來顧來饗。神具醉止。降福穰穰。及至農祥晨正。土膏脉起。乘鑾輅而駕蒼龍。介馭間以剡耜。躬三推於天田。修帝籍之千畝。供禘郊之粢盛。必致思乎勤己。兆民勸於疆埸。感懋力以耘耔。春日載陽。合射辟雍。設業設虡。宮懸金鏞。鼖鼓路鼗。樹羽幢幢。於是備物。物有其容。伯夷起而相儀。后夔坐而爲工。張大侯。制五正。設三乏。厞司旌。并夾既設。儲乎廣庭。於是皇輿夙駕。䇹於東階。以須消啓明。掃朝霞。登天光於扶桑。天子乃撫玉輅。時乘六龍。發鯨魚。鏗華鐘。大丙弭節。風后陪乘。攝提運衡。徐至於射宮。禮事展。樂物具。王夏闋。騶虞奏。決拾既次。彫弓斯彀。達餘萌於暮春。昭

誠心以遠喩。進明德而崇業。滌饕餮之貪欲。仁風衍而外流。誼方激而遐騖。日月會於龍狵。恤民事之勞疢。因休力以息勤。致歡忻於春酒。執鑾刀以袒割。奉觴豆於國叟。降至尊以訓恭。送迎拜乎三壽。敬愼威儀。示民不偸。我有嘉賓。其樂愉愉。聲敎布濩。盈溢天區。文德既昭。武節是宣。三農之隙。曜威中原。歲惟仲冬。大閱西園。虞人掌焉。先期戒事。悉率百禽。鳩諸靈囿。獸之所同。是謂告備。乃御小戎。撫輕軒。中畋四牡。既佶且閑。戈矛若林。牙旗繽紛。迄于上林。結徒爲營。次和樹表。司鐸授鉦。坐作進退。節以軍聲。三令五申。示戮斬牲。陳師鞠旅。敎達禁成。火烈具擧。武士星敷。鵝鸛魚麗。箕張翼舒。軌塵掩迒。匪疾匪徐。馭不詭遇。射不剪毛。升獻六禽。時膳四膏。馬足未極。輿徒不勞。成禮三驅。解罘放麟。不窮樂以訓儉。不殫物以昭仁。慕天乙之弛罟。因敎祝以懷民。儀姬伯之渭陽。失熊羆而獲人。澤浸昆蟲。威振八寓。好樂無荒。允文允武。薄狩于敖。既瑣瑣焉。岐陽之蒐。又何足數。爾乃卒歲大儺。歐除羣癘。方相秉鉞。巫覡操茢。侲子萬童。丹首玄製。桃弧棘矢。所發無臬。飛礫雨散。剛癉必斃。煌火馳而星流。逐赤疫於四裔。然後凌天池。絶飛梁。捎魑魅。斮獝狂。斬蜲蛇。腦方良。囚耕父於清冷。溺女魃於神潢。殘夔魖與罔象。殪野仲而殲游光。八靈爲之震慴。況鬾蜮與畢方。度朔作梗。守以鬱壘。神荼副焉。對操索葦。目察區陬。司執遺鬼。京室密淸。罔有不韙。於是陰陽交和。庶物時育。卜征考祥。終然允淑。乘輿巡乎岱嶽。勸稼穡於原陸。同衡律而一軌量。齊急舒於寒燠。省幽明以黜陟。乃反旆而迴復。望先帝之舊墟。慨長思而懷古。俟閶風而西遐。致恭祀於高祖。既春游以發生。啓諸蟄於潛戶。度秋豫以收成。觀豐年之多稌。嘉田畯之匪懈。勸致賚于九扈。左歐暘谷。右睨玄圃。眇天末以遠期。規萬世而大摹。且歸

來以釋勞。膺多福以安念。總集瑞命。備致嘉祥。圍林氏之騶虞。擾澤馬與騰黃。鳴女牀之鸞鳥。舞丹穴之鳳皇。植華平於春圃。豐朱草於中唐。惠風廣被。澤泊幽荒。北燮丁令。南諧越裳。西包大秦。東過樂浪。重舌之人九譯。僉稽首而來王。是故論其遷邑易京。則同規乎殷盤。改奢卽儉。則合美乎斯干。登封降禪。則齊德乎黃軒。爲無爲事無事。永有民以孔安。遵節儉。尙素樸。思仲尼之克己。履老氏之常足。將使心不亂其所在。目不見其可欲。賤犀象。簡珠玉。藏金於山。抵璧於谷。翡翠不裂。瑇瑁不蔟。所貴惟賢。所寶惟穀。民去末而反本。咸懷忠而抱愨。于斯之時。海內同悅。曰吁。漢帝之德馨。侯其禕而。蓋蓂莢爲難蒔也。故曠世不覿。惟我后能殖之以至和平。方將數諸朝階。然則道胡不懷。化胡不柔。聲與風翔。澤從雲遊。萬物我賴。亦又何求。德寓天覆。輝烈光燭。狹三王之趢起。軼五帝之長驅。踵二皇之遐武。誰謂駕遲而不能屬。東京之懿未罄。値余有犬馬之疾。不能究其精詳。故粗爲賓言其梗概如此。若乃流遁忘反。放心不覺。樂而無節。後離其戚。一言幾於喪國。我未之學也。

且夫挈缾之智。守不假器。況纂帝業而輕天位。瞻仰二祖。厥庸孔肆。常翹翹以危懼。若乘奔而無轡。白龍魚服。見困豫且。雖萬乘之無懼。猶怵惕於一夫。終日不離於輜重。獨微行其焉如。夫君人者。黈纊塞耳。車中不內顧。珮以制容。鑾以節塗。行不變玉。駕不亂步。却走馬以糞車。何惜騕褭與飛兎。方其用財取物。常懼生類之殄也。賦政任役。常畏人力之盡也。取之以道。用之以時。山無槎枿。畋不麑胎。草木繁廡。鳥獸阜滋。民忘其勞。樂輸其財。百姓同於饒衍。上下共其雍熙。洪恩素蓄。民心固結。執義顧主。夫懷貞節。忿姦慝之干命。怨皇統之見替。玄謀設而陰行。合二九而成譎。登聖皇於天階。章漢祚之有秩。若此故王業

可樂焉。今公子苟好勦民以媮樂。忘民怨之爲仇也。好殫物以窮寵。忽下叛而生憂也。夫水所以載舟。亦所以覆舟。堅冰作於履霜。尋木起於蘖栽。昧旦丕顯。後世猶怠。況初制於甚泰。服者焉能改裁。故相如壯上林之觀。揚雄騁羽獵之辭。雖系以頽墻塡壍亂以收罝解罘。卒無補於風規。祇以昭其愆尤。臣濟參以陵君。忘經國之長基。故函谷擊柝於東。西朝廷顚覆而莫持。凡人心是所學。體安所習。鮑肆不知其臭。翫其所以先入。咸池不齊度於䫻咬。而衆聽者惑疑。能不惑者。其唯子野乎。客既醉於大道。飽於文義。勸德畏戒。喜懼交爭。罔然若酲。朝疲夕倦。奪氣褫魂之爲者也。忘其所以爲談。失其所以爲夸。良久乃言曰。鄙哉予乎。予習非而遂迷也。幸見指南於吾子。若僕所聞。華而不實。先生之言。信而有徵。鄙夫寡識。而今而後。乃知大漢之德馨。咸在於此。昔常恨三墳五典既泯。仰不覩炎帝帝魁之美。得聞先生之餘論。則大庭氏何以尚茲。走雖不敏。庶斯達矣。

南都賦

張平子

於顯樂都。既麗且康。陪京之南。居漢之陽。割周楚之豐壤。跨荆豫而爲疆。體爽塏以閑敞。紛郁郁其難詳。爾其地勢。則武闕關其西。桐栢揭其東。流滄浪而爲隍。廓方城而爲墉。湯谷涌其後。淯水盪其胸。推淮引湍。三方是通。其寶利珍怪。則金彩玉璞。隨珠夜光。銅錫鉛鍇。赭堊流黃。綠碧紫英。青雘丹粟。太一餘糧。中黃瑴玉。松子神陂。赤靈解角。耕父揚光於清泠之淵。游女弄珠於漢皐之曲。其山則崆㟯嶱嵑。嵣㠐嶚剌。岝峉㟪嵬。嶮巇屹𡿖。幽谷嶜岑。夏含霜雪。或嵒嶙而纚聯。或豁爾而中絕。鞠巍巍其隱天。俯而觀乎雲霓。若夫天封

大狐。列仙之陬。上平衍而曠蕩。下蒙籠而崎嶇。坂坻嶻嶭而成甗。谿壑錯繆而盤紆。芝房菌蠢生其隈。玉膏滵溢流其隅。崑崙無以奓。閬風不能踰。其木則檉松楔㯶。槾柏杻橿。楓柙櫨櫪。帝女之桑。楈枒栟櫚。柍柘檍檀。結根竦本。垂條嬋媛。布綠葉之萋萋。敷華蘂之蓑蓑。玄雲合而重陰。谷風起而增哀。攢立叢駢。青冥盰瞑。杳藹蓊鬱於谷底。森蓴蓴而刺天。虎豹黃熊游其下。㺜玃猱𤠑戲其巔。鸞鷟鵷鶵翔其上。騰猨飛蠝棲其間。其竹則籦籠䈽篾。篠簳箛箠。緣延坻坂。澶漫陸離。阿那蓊茸。風靡雲披。爾其川瀆。則滍澧藥濜。發源巖穴。潛㴔洞出。沒滑瀎潏。布濩漫汗。漭沆洋溢。總括趨欶。箭馳風疾。流湍投濈。砏汃輣軋。長輸遠逝。㵴淚淢汨。其水蟲則有蠳龜鳴蛇。潛龍伏螭。鱏鱣鰅鰫。黿鼉鮫蠵。巨蚌函珠。駮蝦委蛇。於其陂澤。則有鉗盧玉池。赭陽東陂。貯水渟洿。亙望無涯。其草則有藨苧薠莞。蔣蒲蒹葭。藻茆菱芡。芙蓉含華。從風發榮。斐披芬葩。其鳥則有鴛鴦鵠鷖。鴻鴇鴐鵞。鷙鶃鸕鷀。鷫鷞鵾鸕。嚶嚶和鳴。澹淡隨波。其水則開竇灑流。浸彼稻田。溝澮脈連。堤塍相輑。朝雲不興。而潢潦獨臻。決渫則暵。爲溉爲陸。冬稌夏穱。隨時代熟。其原野。則有桑漆麻苧。菽麥稷黍。百穀蕃廡。翼翼與與。若其園圃。則有蓼蕺蘘荷。藷蔗薑䕠。菥蓂芋瓜。乃有櫻梅山柿。侯桃梨栗。梬棗若榴。穰橙鄧橘。其香草。則有薜荔蕙若。薇蕪蓀萇。晻曖蓊蔚。含芬吐芳。若其廚膳。則有華薌重秬。滍皋香秔。歸鴈鳴鵽。黃稻鱻魚。以爲芍藥。酸甜滋味。百種千名。春卵夏筍。秋韭冬菁。蘇蔱紫薑。拂徹羶腥。酒則九醞甘醴。十旬兼清。醪敷徑寸。浮蟻若萍。其甘不爽。醉而不醒。及其糺宗綏族。禴祠蒸嘗。以速遠朋。嘉賓是將。揖讓而升。宴于蘭堂。珍羞琅玕。充溢圓方。琢琱狎獵。金銀琳琅。侍者蠱媚。巾𧝎鮮明。被服雜錯。履躡華英。儇才齊敏。受

爵傳觴。獻酬旣交。率禮無違。彈琴擫籥。流風徘徊。清角發徵。聽者增哀。客賦醉言歸。主稱露未晞。接歡宴於日夜。終愷樂之令儀。於是暮春之禊。元巳之辰。方軌齊軫。祓于陽瀕。朱帷連網。曜野映雲。男女姣服。駱驛繽紛。致飾程蠱。偠紹便娟。微眺流睇。蛾眉連卷。於是齊童唱兮列趙女。坐南歌兮起鄭舞。白鶴飛兮繭曳緒。脩袖繚繞而滿庭。羅襪躡蹀而容與。翩緜緜其若絕。眩將墜而復舉。翹遙遷延。蹩躠蹁躚。結九秋之增傷。怨西荊之折盤。彈箏吹笙。更爲新聲。寡婦悲吟。鵾雞哀鳴。坐者悽欷。蕩魂傷精。於是羣士放逐。馳乎沙場。騄驥齊鑣。黃閒機張。足逸驚飆。鏃析毫芒。俯貫魴鱮。仰落雙鶬。魚不及竄。鳥不暇翔。爾乃撫輕舟兮浮清池。亂北渚兮揭南涯。汰瀺灂兮船容裔。陽侯澆兮掩鳧鷖。追水豹兮鞭蝄蜽。憚夔龍兮怖蛟螭。於是日將逮昏。樂者未荒。收歡命駕。分背迴塘。車雷震而風厲。馬鹿超而龍驤。夕暮言歸。其樂難忘。斯乃游觀之好。耳目之娛。未覩其美者。焉足稱舉。夫南陽者。眞所謂漢之舊都也。遠世則劉后甘厥龍醢。視魯縣而來遷。奉先帝而追孝。立唐祀於堯山。固靈根於夏葉。終三代而始蕃。非純德之宏圖。孰能揆而處旃。近則考侯思故。匪居匪寧。穢長沙之無樂。歷江湘而北征。曜朱光於白水。會九世而飛榮。察茲邦之神偉。啓天心而寤靈。於是宮室則有園廬舊宅。隆崇崔嵬。御房穆以華麗。連閣煥其相徽。聖皇之所逍遙。靈祇之所保綏。章陵鬱以青蔥。清廟肅以微微。皇祖歆而降福。彌萬祀而無衰。帝王臧其擅美。詠南音以顧懷。且其君子。弘懿明叡。允恭溫良。容止可則。出言有章。進退屈申。與時抑揚。方今天地之睢剌。帝亂其政。豺虎肆虐。眞人革命之秋也。爾其則有謀臣武將。皆能攫戾執猛。破堅摧剛。排揵陷扃。鶩蹈咸陽。高祖階其塗。光武攬其英。是以關門反距。漢德

久長。及其去危乘安。視人用遷。周召之儔。據鼎足焉。以庀王職。縉紳之倫。經綸訓典。敷納以言。是以朝無闕政。風烈昭宣也。於是乎鯢齒眉壽。鮐背之叟。皤皤然被黃髮者。喟然相與歌曰。望翠華兮葳蕤。建太常兮裶裶。駟飛龍兮騤騤。振和鑾兮京師。總萬乘兮徘徊。按平路兮來歸。豈不思天子南巡之辭者哉。遂作頌曰。皇祖止焉。光武起焉。據彼河洛。統四海焉。本枝百世。位天子焉。永世克孝。懷桑梓焉。眞人南巡。覩舊里焉。

三都賦序　左太冲

蓋詩有六義焉。其二曰賦。揚雄曰。詩人之賦。麗以則。班固曰。賦者。古詩之流也。先王採焉。以觀土風。見綠竹猗猗。則知衞地淇澳之產。見在其版屋。則知秦野西戎之宅。故能居然而辨八方。然相如賦上林。而引盧橘夏熟。揚雄賦甘泉。而陳玉樹青葱。班固賦西都。而歎以出比目。張衡賦西京。而述以游海若。假稱珍怪。以爲潤色。若斯之類。匪啻於茲。考之果木。則生非其壤。校之神物。則出非其所。於辭則易爲藻飾。於義則虛而無徵。且夫玉巵無當。雖寶非用。侈言無驗。雖麗非經。而論者莫不詆訐其研精。作者大氐舉爲憲章。積習生常。有自來矣。余既思摹二京而賦三都。其山川城邑。則稽之地圖。鳥獸草木。則驗之方志。風謠歌舞。各附其俗。魁梧長者。莫非其舊。何則發言爲詩者。詠其所志也。升高能賦者。頌其所見也。美物者。貴依其本。讚事者宜本其實。匪本匪實。覽者奚信。且夫任土作貢。虞書所著。辨物居方。周易所愼。聊舉其一隅。攝其體統。歸諸詁訓焉。

蜀都賦

有西蜀公子者。言於東吳王孫曰。蓋聞天以日月爲綱。地以四海爲紀。九土星分。萬國錯時。崤函有帝皇之宅。河洛爲王者之里。吾子豈亦曾聞蜀都之事歟。請爲左右揚搉而陳之。夫蜀都者。蓋兆基於上世。開國於中古。廓靈關而爲門。包玉壘而爲宇。帶二江之雙流。抗峨眉之重阻。水陸所湊。兼六合而交會焉。豐蔚所盛。茂八區而菴藹焉。於前則跨躡犍牂。枕輢交趾。經途所亙。五千餘里。山阜相屬。含谿懷谷。岡巒糾紛。觸石吐雲。鬱盆蒀以翠微。崛巍巍以峨峨。干青霄而秀出。舒丹氣以爲霞。龍池瀥瀑濆其隈。漏江伏流潰其阿。汨若湯谷之揚濤。沛若濛汜之涌波。於是乎邛竹緣嶺。菌桂臨崖。旁挺龍目。側生荔枝。布綠葉之萋萋。結朱實之離離。迎隆冬而不凋。常曄曄而猗猗。孔翠羣翔。犀象競馳。白雉朝雊。猩猩夜啼。金馬騁光而絕景。碧雞倏忽而曜儀。火井沈熒於幽泉。高爓飛煽於天垂。其間則有虎珀丹青。江珠瑕英。金沙銀礫。符釆彪炳。暉麗灼爍。於後則却背華容。北指崑崙。緣以劒閣。阻以石門。流漢湯湯。驚浪雷奔。望之天廻。即之雲昏。水物殊品。鱗介異族。或藏蛟螭。或隱碧玉。嘉魚出於丙穴。良木攢於褒谷。其樹則有木蘭梫桂。杞櫹椅桐。椶枒楔樅。楩枏幽藹於谷底。松柏蓊鬱於山峯。擢脩幹。竦長條。扇飛雲。拂輕霄。羲和假道於峻歧。陽烏廻翼乎高標。巢居棲翔。聿兼鄧林。穴宅奇獸。窠宿異禽。熊羆咆其陽。鵰鶚鴆其陰。猨狖騰希而競捷。虎豹長嘯而永吟。於東則左緜巴中。百濮所充。外負銅梁於宕渠。內函要害於膏腴。其中則有巴菽巴戟。靈壽桃枝。樊以蒩圃。濱以鹽池。蜲蛦山棲。黿龜水處。潛龍蟠於

沮澤。應鳴鼓而興雨。丹沙赩熾出其坂。蜜房郁毓被其阜。山圖采而得道。赤斧服而不朽。若乃剛悍生其方。風謠尙其武。奮之則賨旅。翫之則渝舞。銳氣剽於中葉。蹻容世於樂府。於西則右挾岷山。涌瀆發川。陪以白狼。夷歌成章。坰野草昧。林麓黝儵。交讓所植。蹲鴟所伏。百藥灌叢。寒卉冬馥。異類衆夥。于何不育。其中則有青珠黃環。碧砮芒消。或豐綠荑。或蕃丹椒。蘼蕪布濩於中阿。風連莚蔓於蘭皐。紅葩紫飾。柯葉漸苞。敷蘂葳蕤。落英飄颻。神農是嘗。盧跗是料。芳追氣邪。味蠲癘痟。其封域之內。則有原隰墳衍。通望彌博。演以潛沫。浸以緜洛。溝洫脈散。疆里綺錯。黍稷油油。粳稻莫莫。指渠口以爲雲門。灑滮池而爲陸澤。雖星畢之滂沲。尙未齊其膏液。爾乃邑居隱賑。夾江傍山。棟宇相望。桑梓接連。家有鹽泉之井。戶有橘柚之園。其園則有林檎枇杷。橙柿梬楟。榹桃函列。梅李羅生。百果甲宅。異色同榮。朱櫻春熟。素柰夏成。若乃大火流。涼風厲。白露凝。微霜結。紫梨津潤。樼栗罅發。蒲桃亂潰。石榴競裂。甘至自零。芬芳酷烈。其圃則有蒟蒻茱萸。瓜疇芋區。甘蔗辛薑。陽蓲陰敷。日往菲薇。月來扶疎。任土所麗。衆獻而儲。其沃瀛則有攢蔣叢蒲。綠菱紅蓮。雜以蘊藻。糅以蘋蘩。總莖柅柅。裛葉蓁蓁。蕡實時味。王公羞焉。其中則有鴻儔鵠侶。鷩鶖鵜鶘。晨鳧旦至。候鴈銜蘆。木落南翔。冰泮北徂。雲飛水宿。哢吭淸渠。其深則有白黿命鼈。玄獺上祭。鱣鮪鱒魴。鮷鱧鯊鱨。差鱗次色。錦質報章。躍濤戲瀨。中流相忘。於是乎金城石郭。兼市中區。旣麗且崇。實號成都。闢二九之通門。畫方軌之廣塗。營新宮於爽塏。擬承明而起廬。結陽城之延閣。飛觀榭乎雲中。開高軒以臨山。列綺窻而瞰江。內則議殿爵堂。武義虎威。宣化之闥。崇禮之闈。華闕雙邈。重門洞開。金鋪交映。玉題相暉。外則軌躅八達。里閈對出。比屋連

甍。千廡萬室。亦有甲第。當衢向術。壇宇顯敞。高門納駟。庭扣鐘磬。堂撫琴瑟。匪葛匪姜。疇能是恤。亞以少城。接乎其西。市鄽所會。萬商之淵。列隧百重。羅肆巨千。賄貨山積。纖麗星繁。都人士女。袨服靚粧。賈貿墆鬻。舛錯縱橫。異物詭譎。奇於八方。布有橦華。麪有桄榔。邛杖傳節於大夏之邑。蒟醬流味於番禺之鄉。輿輦雜沓。冠帶混幷。累轂疊跡。叛衍相傾。諠譁鼎沸。則哤聒宇宙。囂塵張天。則埃壒曜靈。闤闠之裏。伎巧之家。百室離房。機杼相和。貝錦斐成。濯色江波。黃潤比筒。籯金所過。侈侈隆富。卓鄭埒名。公擅山川。貨殖私庭。藏鏹巨萬。鈲摫兼呈。亦以財雄。翕習邊城。三蜀之豪。時來時往。養交都邑。結儻附黨。劇談戲論。扼腕抵掌。出則連騎。歸從百兩。若其舊俗。終冬始春。吉日良辰。置酒高堂。以御嘉賓。金罍中坐。肴核四陳。觴以清醥。鮮以紫鱗。羽爵執競。絲竹乃發。巴姬彈絃。漢女擊節。起西音於促柱。歌江上之飉厲。紆長袖而屢舞。翩躚躚以裔裔。合樽促席。引滿相罰。樂飲今夕。一醉累月。若夫王孫之屬。郤公之倫。從禽於外。巷無居人。並乘驥子。俱服魚文。玄黃異校。結駟繽紛。西踰金隄。東越玉津。朔別期晦。匪日匪旬。蹵蹈蒙籠。涉躐寥廓。鷹犬倏眒。罻羅絡幕。毛羣陸離。羽族紛泊。翕響揮霍。中網林薄。屠麖麋。剪旄麈。帶文蛇。跨彫虎。志未騁。時欲晚。追輕翼。赴絕遠。出彭門之闕。馳九折之坂。經三峽之崢嶸。躡五屼之蹇滻。戟食鐵之獸。射噬毒之鹿。皛貙氓於葽草。彈言鳥於森木。拔象齒。戾犀角。鳥鎩翮。獸廢足。殆而朅來。相與第如滇池。集乎江洲。試水客。艤輕舟。娉江婓。與神游。罨翡翠。釣䱜鰋。下高鵠。出潛虯。吹洞簫。發櫂謳。感鱏魚。動陽侯。騰波沸涌。珠貝氾浮。若雲漢含星。而光耀洪流。將饗獠者。張帟幕。會平原。酌醪酤。割芳鮮。飲御酣。賓旅旋。車馬雷駭。轟轟闐闐。若風流雨散漫乎數百里之

問。斯蓋宅土之所安樂。觀聽之所踊躍也。焉獨三川爲世朝市。若乃卓犖奇譎。倜儻罔已。一經神怪。一緯人理。遠則岷山之精。上爲井絡。天帝運期而會昌。景福肸蠁而興作。碧出萇弘之血。鳥生杜宇之魄。妄變化而非常。嗟見偉於疇昔。近則江漢炳靈。世載其英。蔚若相如。皭若君平。王褒韡曄而秀發。揚雄含章而挺生。幽思絢道德。摛藻掞天庭。考四海而爲儁。當中葉而擅名。是故游談者以爲譽。造作者以爲程也。至乎臨谷爲塞。因山爲障。峻阻塍埒長城。豁險吞若巨防。一人守隘。萬夫莫向。公孫躍馬而稱帝。劉宗下輦而自王。由此言之。天下孰尚。故雖兼諸夏之富有。猶未若茲都之無量也。

文選卷二終

文選卷三

賦丙　京都下

吳都賦　左太沖

東吳王孫。囅然而咍曰。夫上圖景宿。辨於天文者也。下料物土。析於地理者也。古先帝世。曾覽八紘之洪緒。一六合而光宅。翔集遐宇。鳥策篆素。玉牒石記。烏聞梁岷有陟方之館。行宮之基歟。而吾子言蜀都之富。禺同之有。瑋其區域。美其林藪。矜巴漢之阻。則以爲襲險之右。徇蹲鴟之沃。則以爲世濟陽九。齷齪而算。固亦曲士之所歎也。旁魄而論都。抑非大人之所壯觀也。何則土壤不足以攝生。山川不足以周衞。公孫國之而破。諸葛家之而滅。茲乃喪亂之丘墟。顚覆之軌轍。安可以儷王公。而著風烈也。翫其磧礫。而不窺玉淵者。未知驪龍之所蟠也。習其敝邑。而不覩上邦者。未知英雄之所躔也。子獨未聞大吳之巨麗乎。且有吳之開國也。造自太伯。宣於延陵。蓋端委之所彰。高節之所興。建至德以創洪業。世無得而顯稱。由克讓以立風。輕脫躧於千乘。若率土而論都。則非列國之所觖望也。故其經略。上當星紀。拓土畫疆。卓犖兼并。包括于越。跨躡蠻荊。婺女寄其曜。翼軫寓其精。指衡嶽以鎭野。目龍川而帶坰。爾其山澤。則嵬嶷嶢屼。巊溟鬱岪。潰渱泮汗。滇瀰淼漫。或涌川而開瀆。或吞江而納漢。磈磈礧礧。滮滮涆涆。嶔硿乎數州之間。灌注乎天下之半。

百川派別。歸海而會。控清引濁。混濤并瀨。濆薄沸騰。寂寥長邁。㵿焉洶洶。隱焉磕磕。出乎大荒之中。行乎東極之外。經扶桑之中林。包暘谷之滂沛。潮波汩起。迴復萬里。歊霧漨浡。雲蒸昏昧。泓澄奫潫。澒溶沆瀁。莫測其深。莫究其廣。澶湉漠而無涯。總有流而為長。瓌異之所叢育。鱗甲之所集往。於是乎長鯨吞航。脩鯢吐浪。躍龍騰蛇。蛟鯔琵琶。王鮪鯸鮐。鮣龜鱕䱜。烏賊擁劍。鼊鼉鯖鰐。涵泳乎其中。葺鱗鏤甲。詭類舛錯。泝洄順流。噞喁沈浮。鳥則䳇鷄鶢鵟。鸘鴸鷺鴻。鶂鴈避風。候鴈造江。溪鷙鸕鸂。鶼鶴鶖鶬。鸛鷗鷁鸕。泛濫乎其上。湛淡羽儀。隨波參差。理翮整翰。容與自玩。雕琢蔓藻。刷盪漪瀾。魚鳥聲耴。萬物蠢生。芒芒黖黖。慌罔奄欻。神化翕忽。函幽育明。窮性極形。盈虛自然。蚌蛤珠胎。與月虧全。巨鼇贔屓。首冠靈山。大鵬繽翻。翼若垂天。振盪汪流。雷抃重淵。殷動宇宙。胡可勝原。𡶒嶼䌙邈。洲渚馮隆。曠瞻迢遞。迥眺冥蒙。珍恠麗。奇隙充。徑路絕。風雲通。洪桃屈盤。丹桂灌叢。瓊枝抗莖而敷蘂。珊瑚幽茂而玲瓏。增岡重阻。列眞之宇。玉堂對霤。石室相距。藹藹翠幄。嫋嫋素女。江婓於是往來。海童於是宴語。斯寔神妙之響象。羌難得而覼縷。爾乃地勢坱圠。卉木䟽蒀。遭藪為圃。值林為苑。異荂蓲蘛。夏曄冬蒨。方志所辨。中州所羨。草則藿蒳豆蔻。薑彙非一。江離之屬。海苔之類。綸組紫絳。食葛香茅。石帆水松。東風扶留。布濩皋澤。蟬聯陵丘。夤緣山嶽之岊。冪歷江海之流。扢白蔕。銜朱蕤。鬱兮𦻍茂。曄兮菲菲。光色炫晃。芬馥肸蠁。職貢納其包匭。離騷詠其宿莽。木則楓柙櫲章。栟櫚枸椰。綿杬杶櫨。文欀楨橿。平仲君遷。松梓古度。楠榴之木。相思之樹。宗生高岡。族茂幽阜。擢本千尋。垂陰萬畝。攢柯拏莖。重葩掩葉。輪囷虯蟠。塛㙔鱗接。榮色雜糅。綢繆縟繡。宵露霮䨴。旭日晻晗。與風颻颺。颸瀏颼䬟。鳴條

律暢。飛音響亮。蓋象琴筑幷奏。笙竽俱唱。其上則有猨父哀吟。貋子長嘯。狖鼯猓然。騰趠飛超。爭縣接垂。競遊遠枝。驚透沸亂。牢落翬散。其下則有梟羊䴠狼。猰貐貙象。於菟之族。犀兕之黨。鉤爪鋸牙。自成鋒穎。精若曜星。聲若雷霆。名載於山經。形鏤於夏鼎。其竹則篔簹林箊。桂箭射筒。柚梧有篁。篻簩有叢。苞筍抽節。往往縈結。綠葉翠莖。冒霜停雪。橚矗森萃。蓊茸蕭瑟。檀欒嬋娟。玉潤碧鮮。梢雲無以踰。嶰谷弗能連。鸑鷟食其實。鵷雛擾其間。其果則丹橘餘甘。荔枝之林。檳榔無柯。椰葉無蔭。龍眼橄欖。棎榴禦霜。結根比景之陰。列挺衡山之陽。素花斐。丹秀芳。臨靑壁。係紫房。鷓鴣南翥而中留。孔雀綷羽而翺翔。山雞歸飛而來棲。翡翠列巢以重行。其琛賂則琨瑤之阜。銅鍇之垠。火齊之寶。駭雞之珍。頳丹明璣。金華銀樸。紫貝流黃。縹碧素玉。隱賑崴䰐。雜插幽屏。精曜潛穎。硩陊山谷。碕岸爲之不沽。林木爲之潤黷。隋侯於是鄙其夜光。宋王於是陋其結綠。其荒陬譎詭。則有龍穴內蒸。雲雨所儲。陵鯉若獸。浮石若桴。雙則比目。片則王餘。窮陸飮木。極沈水居。泉室潛織而卷綃。淵客慷慨而泣珠。開北戶以向日。齊南冥於幽都。其四野則畛畷無數。膏腴兼倍。原隰殊品。窊隆異等。象耕鳥耘。此之自與。穱秀菰穗。於是乎在。煮海爲鹽。採山鑄錢。國稅再熟之稻。鄕貢八蠶之緜。徒觀其郊隧之內奧。都邑之綱紀。霸王之所根柢。開國之所基址。郛郭周匝。重城結隅。通門二八。水道陸衢。所以經始。用累千祀也。憲紫宮以營室。廓廣庭之漫漫。寒暑隔閡於邃宇。虹蜺迴帶於雲館。所以跨跱煥炳萬里也。造姑蘇之高臺。臨四遠而特建。帶朝夕之濬池。佩長洲之茂苑。窺東山之府。則瓌寶溢目。覵海陵之倉。則紅粟流衍。起寢廟於武昌。作離宮於建業。闡闔閭之所營。采夫差之遺法。抗神龍之華殿。施榮楯

而捷獵。崇臨海之崔巍。飾赤烏之韡曄。東西膠葛。南北崢嶸。房櫳對櫎。連閣相經。閽闥譎詭。異出奇名。左稱彎碕。右號臨硎。雕欒鏤楶。青瑣丹楹。圖以雲氣。畫以仙靈。雖茲宅之夸麗。曾未足以少寧。思比屋於傾宮。畢結瑤而構瓊。高闈有閌。洞門方軌。朱闕雙立。馳道如砥。樹以青槐。亙以淥水。玄蔭耽耽。清流亹亹。列寺七里。俠棟陽路。屯營櫛比。廨署棊布。橫塘查下。邑屋隆夸。長干延屬。飛甍舛互。其居則有高門鼎貴。魁岸豪傑。虞魏之昆。顧陸之裔。岐嶷繼體。老成奕世。躍馬疊跡。朱輪累轍。陳兵而歸。蘭錡內設。冠蓋雲蔭。閭閻闐噎。其鄰則有任俠之靡。輕訬之客。締交翩翩。儐從奕奕。出躡珠履。動以千百。里讌巷飲。飛觴舉白。翹關扛鼎。拚射壺博。鄱陽暴謔。中酒而作。於是樂只衎而歡飫無匱。都輦殷而四奧來暨。水浮陸行。方舟結駟。唱櫂轉轂。昧旦永日。開市朝而普納。橫闤闠而流溢。混品物而同塵。并都鄙而爲一。士女佇眙。工賈駢坒。紵衣絺服。雜沓傱萃。輕輿按轡以經隧。樓船舉颿而過肆。果布輻湊而常然。致遠流離與珂珬。䌰賄紛紜。器用萬端。金鎰磊砢。珠琲闌干。桃笙象簟。韜於筒中。蕉葛升越。弱於羅紈。𥰭䆆曒繆。交貿相競。諠譁喤呷。芬葩蔭映。揮袖風飄。而紅塵晝昏。流汗霢霂。而中逵泥濘。富中之甿。貨殖之選。乘時射利。財豐巨萬。競其區宇。則并疆兼巷。矜其宴居。則珠服玉饌。趫材悍壯。此焉比廬。捷若慶忌。勇若專諸。危冠而出。竦劍而趨。扈帶鮫函。扶揄屬鏤。藏鍦於人。去戭自閭。家有鶴膝。戶有犀渠。軍容蓄用。器械兼儲。吳鉤越棘。純鈞湛盧。戎車盈於石城。戈船掩於江湖。露往霜來。日月其除。草木節解。鳥獸腯膚。觀鷹隼。誡征夫。坐組甲。建祀姑。命官帥而擁鐸。將校獵乎具區。烏滸狼𦞣。夫南西屠。儋耳黑齒之酋。金鄰象郡之渠。驫駥𩧐矞。靸霅驚捷。先驅前途。俞騎騁路。指南司

方。出車轚轚。被練鏘鏘。吳王乃巾玉輅。軺驌驦。旗魚須。常重光。攝烏號。佩干將。羽毛揚蕤。雄戟耀鋩。貝冑象弭。織文鳥章。六軍袀服。四騏龍驤。峭格周施。罿罻普張。䍡罕瑣結。罠蹏連綱。陸以九疑。禦以沅湘。輶軒蓼擾。彀騎煒煌。袒裼徒搏。拔距投石之部。猨臂骿脅。狂趭獷猤。鷹瞵鶚視。參譚𤡢𤢖。若離若合者。相與騰躍乎莽罠之野。干鹵殳鋋。暘夷勃盧之旅。長殺短兵。直髮馳騁。儇佻坌並。銜枚無聲。悠悠旆旌者。相與聊浪乎昧莫之坰。鉦鼓疊山。火烈熛林。飛爓浮煙。載霞載陰。莅擸雷硠。崩巒弛岑。鳥不擇木。獸不擇音。暴䝞䖘。頳麇麖。驀六駮。追飛生。彈鸞鵕。射猱狿。白雉落。黑鴆零。陵絕嶛嶕。聿越巉嶮。跐踰竹柏。獮猭杞柟。封狶葹。神螭掩。剛鏃潤。霜刃染。於是弭節頓轡。齊鑣駐蹕。徘徊倘佯。寓目幽蔚。覽將帥之拳勇。與士卒之抑揚。羽族以觜距爲刀鈹。毛羣以齒角爲矛鋏。皆體著而應卒。所以挂扢而爲創痏。衝踤而斷筋骨。莫不衂銳挫鋩。拉捭摧藏。雖有石林之岝㟧。請攘臂而靡之。雖有雄虺之九首。將抗足以跐之。顚覆巢居。剖破窟宅。仰攀鵕鸃。俯蹴豺獏。刦剞熊羆之室。剽掠虎豹之落。猩猩啼而就禽。𪁺𪁺笑而被格。屠巴蛇。出象骼。斬鵬翼。掩廣澤。輕禽狡獸。周章夷猶。狼跋乎紭中。忘其所以睒暘。失其所以去就。魂褫氣懾。而自踢跌者。應弦而飲羽。形儹景僵者。累積而增益。雜襲錯繆。傾藪薄。倒岬岫。巖穴無豜豵。翳薈無麢鷚。思假道於豐隆。披重霄而高狩。籠烏兎於日月。窮飛走之棲宿。嶰澗閴。岡岵童。罾罘滿。效獲眾。迴靶乎行。睨觀漁乎三江。汎舟航於彭蠡。渾萬艘而旣同。弘舸連舳。巨檻接艫。飛雲蓋海。制非常模。疊華樓而島峙。時髣髴於方壺。比鷁首之有裕。邁餘艎於往初。張組帷。構流蘇。開軒幌。鏡水區。篙工楫師。選自閩禺。習御長風。狎翫靈胥。責千里於寸陰。聊先期而須臾。櫂

謳唱。簫籟鳴。洪流響。渚禽驚。弋磻放。稽鷦鷯。虞機發。留鵁鶄。鉤餌縱橫。網罟接緒。術兼詹公。巧傾任父。筌鮔鱔。鑢鱨鯊。罩兩魪。罺鰝鰕。乘鼊黿鼉。同眾共羅。沈虎潛鹿。馽𥚹僒束。徵鯨背中於群䲓。欃槍暴出而相屬。雖復臨河而釣鯉。無異射鮒於井谷。結輕舟而競逐。迎潮水而振緡。想萍實之復形。訪靈夔於鮫人。精衞銜石而遇繳。文鰩夜飛而觸綸。北山亡其翔翼。西海失其游鱗。雕題之士。鏤身之卒。比飾虬龍。蛟螭與對。簡其華質。則亄費錦繢。料其虓勇。則鵰悍狼戾。相與昧潛險。搜瓌奇。摸蝳蝐。捫觜蠵。剖巨蚌於回淵。濯明月於漣漪。畢天下之至異。訖無索而不臻。谿壑為之一罄。川瀆為之中貧。哂澹臺之見謀。聊襲海而徇珍。載漢女於後舟。追晉賈而同塵。汨乘流以砰宕。翼颸風之颲颲。直衝濤而上瀨。常沛沛以悠悠。汔可休而凱歸。揖天吳與陽侯。指包山而為期。集洞庭而淹留。數軍實乎桂林之苑。饗戎旅乎落星之樓。置酒若淮泗。積肴若山丘。飛輕軒而酌綠醽。方雙轡而賦珍羞。飲烽起。釂鼓震。士遺倦。眾懷忻。幸乎館娃之宮。張女樂而娛群臣。羅金石與絲竹。若鈞天之下陳。登東歌。操南音。胤陽阿。詠韎任。荊豔楚舞。吳愉越吟。翕習容裔。靡靡愔愔。若此者。與夫唱和之隆響。動鐘磬之鏗耾。有殷坻頹於前。曲度難勝。皆與謠俗汁協。律呂相應。其奏樂也。則木石潤色。其吐哀也。則淒風暴興。或超延露而駕辯。或踰淥水而採菱。軍馬弭髦而仰秣。淵魚竦鱗而上升。酣湑半。八音幷。歡情留。良辰征。魯陽揮戈而高麾。迴曜靈於太清。將轉西日而再中。齊既往之精誠。昔者夏后氏朝群臣於茲土。而執玉帛者以萬國。蓋亦先王之所高會。而四方之所軌則。春秋之際。要盟之主。闔閭申其威。夫差窮其武。內果伍員之謀。外騁孫子之奇。勝彊楚於柏舉。棲勁越於會稽。闕溝乎商魯。爭長於黃池。

徒以江湖嶮陂。物產殷充。繞霤未足言其固。鄭白未足語其豐。士有陷堅之銳。俗有節概之風。睚眦則挺劍。喑嗚則彎弓。擁之者龍騰。據之者虎視。麾城若振槁。搴旗若顧指。雖帶甲一朝。而元功遠致。雖累葉百疊。而富彊相繼。樂滑衍其方域。列仙集其土地。桂父練形而易色。赤須蟬蛻而附麗。中夏比焉。畢世罕見。丹青圖其象。珍瑋貴其寶利也。舜禹游焉。沒齒而忘歸。精靈留其山阿。翫其奇麗。剖判庶士。商搉萬俗。國有鬱鞅而顯敞。邦有湫阨而踡跼。伊兹都之函弘。傾神州而韞櫝。仰南斗以斟酌。兼二儀之優渥。由此而揆之。西蜀之於東吳。小大之相絕也。亦猶棘林螢燿。而與夫尋木龍燭也。否泰之相背也。亦猶帝之懸解。而與夫桎梏疏屬也。庸可共世而論巨細。同年而議豐确乎。暨其幽遐獨邃。寥廓閑奥。耳目之所不該。足趾之所不蹈。倜儻之極異。崛詭之殊事。藏理於終古。而未寤於前覺也。若吾子之所傳。孟浪之遺言。略擧其梗概。而未得其要妙也。

魏都賦

魏國先生。有睟其容。乃盱衡而誥曰。异乎交益之士。蓋音有楚夏者。土風之乖也。情有險易者。習俗之殊也。雖則生常。固非自得之謂也。昔市南宜僚弄丸。而兩家之難解。聊爲吾子。復翫德音。以釋二客競於辯囿也。夫泰極剖判。造化權輿。體兼晝夜。理包淸濁。流而爲江海。結而爲山嶽。列宿分其野。荒裔帶其隅。巖岡潭淵。限蠻隔夷。峻危之竅也。蠻陬夷落。譯導而通者。鳥獸之氓也。正位居體者。以中夏爲喉舌。不以邊陲爲襟帶也。長世字甿者。以道德爲藩。不以襲險爲屛也。而子大夫之賢。尙弗曾庶翼等威。附麗皇極。思禀正朔。樂

率貢職而徒務於詭隨匪民。宴安於絕域。榮其文身。驕其險棘。謬默語之常倫。牽膠言而踰侈。飾華離以矜然。假倔彊而攘臂。非醇粹之方壯。謀踳駁於王義。孰愈尋靡蓱於中逵。造沐猴於棘刺。劍閣雖嶛。憑之者蹶。非所以深根固蔕也。洞庭雖濬。負之者北。非所以愛人治國也。彼桑榆之末光。踰長庚之初暉。況河冀之爽塏。與江介之湫湄。故將語子以神州之略。赤縣之畿。魏都之卓犖。六合之樞機。于時運距陽九。漢網絕維。姦回內贔。兵纏紫微。翼翼京室。耽耽帝宇。巢焚原燎。變爲煨燼。故荊棘旅庭。殷殷寰內。繩繩八區。鋒鏑縱橫。化爲戰場。故麋鹿寓城也。伊洛榛曠。崤函荒蕪。臨菑牢落。鄢郢丘墟。而是有魏開國之日。締構之初。萬邑譬焉。亦猶犨麋之與子都。培塿之與方壺也。且魏土者。畢昴之所應。虞夏之餘人。先王之桑梓。列聖之遺塵。考之四隈。則八埏之中。測之寒暑。則霜露所均。卜偃前識而賞其隆。吳札聽歌而美其風。雖則衰代。而盛德形於管絃。雖踰千祀。而懷舊蘊於遐年。爾其疆域。則旁極齊秦。結湊冀道。開胷殷衛。跨躡燕趙。山林幽峽。川澤迴繚。恒碣碪碍於青霄。河汾浩涆而皓溔。南瞻淇澳。則綠竹純茂。北臨漳滏。則冬夏異沼。神鉦迢遞於高巒。靈響時驚於四表。溫泉毖涌而自浪。華清蕩邪而難老。墨井鹽池。玄滋素液。厥田惟中。厥壤惟白。原隰畇畇。墳衍斥斥。或嵬罍而複陸。或黋朗而拓落。乾坤交泰而絪縕。嘉祥徽顯而豫作。是以兆朕振古。萌柢疇昔。藏氣讖緯。閟象竹帛。迥時世而淵默。應期運而光赫。暨聖武之龍飛。肇受命而光宅。爰初自臻。言占其良。謀龜謀筮。亦既允臧。修其郛郭。繕其城隍。經始之制。牢籠百王。畫雍豫之居。寫八都之宇。鑒茅茨於陶唐。察卑宮於夏禹。古公草創。而高門有閌。宣王中興。而築室百堵。兼聖哲之軌。并文質之狀。商豐約而折中。准

當年而爲量。思重爻。摹大壯。覽荀卿。采蕭相。僝拱木於林衡。授全模於梓匠。遐邇悅豫而子來。工徒擬議而騁巧。闡鈎繩之筌緒。承二分之正要。揆日晷。考星耀。建社稷。作清廟。築曾宮以迴匝。比岡隒而無陂。造文昌之廣殿。極棟宇之弘規。對若崇山。崫起以崔嵬。髣若玄雲。舒蜺以高垂。瓌材巨世。㙈㙠參差。枌橑複結。欒櫨疊施。丹梁虹申以竝亙。朱桷森布而支離。綺井列疏以懸蔕。華蓮重葩而倒披。齊龍首而涌霤。時梗概於滮池。旅楹閒列。暉鑒抰振。榱題黮䨴。階陌嶙峋。長庭砥平。鍾虡夾陳。風無纖埃。雨無微津。巖巖北闕。南端攸遵。竦峭雙碣。方駕比輪。西闢延秋。東啓長春。用覲羣后。觀享頤賓。左則中朝有赩。聽政作寢。匪樸匪斵。去泰去甚。木無彫鎪。土無綈錦。玄化所甄。國風所稟。於前則宣明顯陽。順德崇禮。重闈洞出。鏘鏘濟濟。珍樹猗猗。奇卉萋萋。蕙風如薰。甘露如醴。禁臺省中。連闥對廊。直事所繇。典刑所藏。藹藹列侍。金蜩齊光。詰朝陪幄。納言有章。亞以柱後。執法內侍。符節謁者。典璽儲吏。膳夫有官。藥劑有司。肴醳順時。腠理則治。於後則椒鶴文石。永巷壼術。楸梓木蘭。次舍甲乙。西南其戶。成之匪日。丹青炳煥。特有溫室。儀形宇宙。歷象賢聖。圖以百瑞。綷以藻詠。茫茫終古。此焉則鏡。有虞作繢。茲亦等競。右則踈圃曲池。下畹高堂。蘭渚莓莓。石瀨湯湯。弱蔓係實。輕葉振芳。奔龜躍魚。有睽呂梁。馳道周屈於果下。延閣胤宇以經營。飛陛方輦而徑西。三臺列峙而崢嶸。亢陽臺於陰基。擬華山之削成。上累棟而重霤。下冰室而沍冥。周軒中天。丹墀臨猋。增構峩峩。清塵彯彯。雲雀踶甍而矯首。壯翼摛鏤於青霄。雷雨窈冥而未半。皦日籠光於綺寮。習步頓以升降。御春服而逍遙。八極可圍於寸眸。萬物可齊於一朝。長途牟首。豪徼互經。晷漏肅唱。明宵有程。附以蘭錡。宿以禁兵。司衞閑邪。

鈎陳罔驚、於是崇墉濬洫。嬰堞帶涘。四門轘轘。隆廈重起。憑太淸以混成。越埃壒而資始。邈邈摽危。亭亭峻峙。臨焦原而弗怳。誰勁捷而無獿。與岡岑而永固。非有期乎世祀。陽靈停曜於其表。陰祇濛霧於其裏。菀以玄武。陪以幽林。繚垣開囿。觀宇相臨。碩果灌叢。園木竦尋。篁篠懷風。蒲桃結陰。回淵漼。積水深。蒹葭贙。藿蒻森。丹藕凌波而的皪。綠芰泛濤而浸潭。羽翮頡頏。鱗介浮沈。栖者擇木。雊者擇音。若咆渤澥與姑餘。常鳴鶴而在陰。表淸籞。勒虞箴。思國卹。忘從禽。樵蘇往而無忌。即鹿縱而匪禁。腜腜坰野。奕奕菑畝。甘荼伊蠢。芒種斯阜。西門溉其前。史起灌其後。墱流十二。同源異口。蓄爲屯雲。泄爲行雨。水澍稉稌。陸蒔稷黍。黝黝桑柘。油油麻紵。均田畫疇。蕃廬錯列。薑芋充茂。桃李蔭翳。家安其所。而服美自悅。邑屋相望。而隔踰奕世。內則街衢輻湊。朱闕結隅。石杠飛梁。出控漳渠。疏通溝以濱路。羅青槐以陰塗。比滄浪而可濯。方步櫩而有踰。習習冠蓋。莘莘蒸徒。斑白不提。行旅讓衢。設官分職。營處署居。夾之以府寺。班之以里閭。其府寺則位副三事。官踰六卿。太常之號。大理之名。厦屋一揆。華屏齊榮。肅肅階闈。重門再扃。師尹爰止。毗世作楨。其閭閻則長壽吉陽。永平思忠。亦有戚里。寘宮之東。閈出長者。巷苞諸公。都護之堂。殿居綺窗。輿騎朝猥。蹀㵝其中。營客館以周坊。飾賓侶之所集。瑋豐樓之閈閎。起建安而首立。葺牆幕室。房廡雜襲。剞劂罔掇。匠斲積習。廣成之傳無以儔。槀街之邸不能及。廓三市而開廛。籍平逵而九達。班列肆以兼羅。設闤闠以襟帶。濟有無之常偏。距日中而畢會。抗旗亭之嶢嶭。侈所眺之博大。百隧轂擊。連軫萬貫。憑軾捶馬。袖幕紛半。一八方而混同。極風采之異觀。質劑平而交易。刀布貿而無算。財以工化。賄以商通。難得之貨。此則不容。器周用而長務。物

背殽而就攻。不蠲邪而豫貫。著馴致之醇醲。白藏之藏。富有無隄。同賑大內。控引世資。賨幏積墆。琛幣充牣。關石之所和鈞。財賦之所底愼。燕弧盈庫而委勁。冀馬塡廐而駔駿。至乎勍敵糺紛。庶土罔寧。聖武興言。將曜威靈。介冑重襲。旌旗躍莖。弓珧解檠。矛鋋飄英。三屬之甲。縵胡之纓。控弦簡發。妙擬更嬴。齊被練而銛戈。襲偏裻以讀列。畢出征而中律。執奇正以四伐。碩畫精通。目無匪制。推鋒積紀。鋩氣彌銳。三接三捷。既晝亦月。剋翦方命。吞滅咆咻。雲撤叛換。席卷虔劉。譖威八紘。荒阻率由。洗兵海島。刷馬江洲。振旅軥軥。反旆悠悠。凱歸同飲。疏爵普疇。朝無刓印。國無費留。喪亂既弭而能宴。武人歸獸而去戰。蕭斧戢柯以柙刃。虹旗攝麾以就卷。斟洪範。酌典憲。觀所恒。通其變。上垂拱而司契。下緣督而自勸。道無來斯貴。利往則賤。囹圄寂寥。京庾流衍。於是東鯷卽序。西傾順軌。荊南懷憓。朔北思韙。縣縣迴途。驂山驂水。繈負賮贄。重譯貢篚。髽首之豪。鐻耳之傑。服其荒服。斂衽魏闕。置酒文昌。高張宿設。其夜未遽。庭燎晣晣。有客祁祁。載華載裔。岌岌冠縰。纍纍辮髮。清酤如濟。濁醪如河。凍醴流澌。溫酎躍波。豐肴衍衍。行庖皤皤。愔愔醧讌。酣湑無譁。延廣樂。奏九成。冠韶夏。冒六英五莖。儃響起。疑震霆。天宇駭。地廬驚。億若大帝之所興作。二嬴之所曾聆。金石絲竹之恒韻。匏土革木之常調。干戚羽旄之飾好。清謳微吟之要妙。世業之所日用。耳目之所聞覺。雜糅紛錯。兼該氾博。鞮鞻所掌之音。韎昧任禁之曲。以娛四夷之君。以睦八荒之俗。既苗既狩。爰遊爰豫。藉田以禮動。大閱以義舉。備法駕。理秋御。顯文武之壯觀。邁梁騶之所著。林不槎枿。澤不伐夭。斧斤以時。罻網以道。德連木理。仁挺芝草。皓獸爲之育藪。丹魚爲之生沼。矞雲翔龍。澤馬于阜。山圖其石。川形其寶。莫黑匪烏。三趾而來儀。莫赤匪狐。

九尾而自擾。嘉穎離合以蕁蕁。醴泉涌流而浩浩。顯禎祥以曲成。固觸物而兼造。蓋亦明靈之所酬酢。休徵之所偉兆。旼旼率土。遷善罔匱。沐浴福應。宅心醰粹。餘糧棲畝而弗收。頌聲載路而洋溢。河洛開奧。符命用出。翩翩黃鳥。銜書來訊。人謀所尊。鬼謀所秩。劉宗委馭。巽其神器。闡玉策於金縢。案圖錄於石室。考歷數之所在。察五德之所莅。量寸旬。涓吉日。陟中壇。即帝位。改正朔。易服色。繼絕世。脩廢職。徽幟以變。器械以革。顯仁翌明。藏用玄默。菲言厚行。陶化染學。讎校篆籀。篇章畢覿。優賢著於揚歷。匪孽形於親戚。本枝別幹。蕃屏皇家。勇若任城。才若東阿。抗旍則威噞秋霜。摛翰則華縱春葩。英喆雄豪。佐命帝室。相兼二八。將猛四七。赫赫震震。開務有謐。故令斯民覩泰階之平。可比屋而爲一。算祀有紀。天祿有終。傳業禪祚。高謝萬邦。皇恩綽矣。帝德冲矣。讓其天下。臣至公矣。榮操行之獨得。超百王之庸庸。追亙卷領與結繩。睠留重華而比蹤。尊盧赫胥。羲農有熊。雖自以爲道洪。化以爲隆。世篤玄同。奚遽不能與之踵武而齊其風。是故料其建國。析其法度。諮其考室。議其舉厝。復之而無斁。申之而有裕。非疏糲之士所能精。非鄙俚之言所能具。至於山川之偉詭。物產之魁殊。或名奇而見稱。或實異而可書。生生之所常厚。洵美之所不渝。其中則有鴛鴦交谷。虎澗龍山。掘鯉之淀。蓋節之淵。祇祇精衞。銜木償怨。常山平干。鉅鹿河間。列眞非一。往往出焉。昌容練色。犢配眉連。玄俗無影。木羽偶仙。琴高沈水而不濡。時乘赤鯉而周旋。師門使火以驗術。故將去而林燔。易陽壯容。衞之稚質。邯鄲躧步。趙之鳴瑟。眞定之梨。故安之栗。醇酎中山。流湎千日。淇洹之筍。信都之棗。雍丘之粱。清流之稻。錦繡襄邑。羅綺朝歌。緜纊房子。縑總清河。若此之屬。繁富夥夠。非可單究。是以抑而未罄也。蓋比物

以錯辭。述清都之閑麗。雖選言以簡章。徒九復而遺旨。覽大易與春秋。判殊隱而一致。末上林之隤牆。本前脩以作系。其軍容弗犯。信其果毅。糾華綏戎。以戴公室。元勳配管敬之績。歌鐘析邦君之肆。則魏絳之賢。有令聞也。閑居隘巷。室邇心遐。富仁寵義。職競弗羅。千乘爲之軾廬。諸侯爲之止戈。則干木之德。自解紛也。貴非吾尊。重士踰山。親御監門。謙謙同軒。搦秦起趙。威振八蕃。則信陵之名。若蘭芬也。英辯榮枯。能濟其厄。位加將相。窒隙之策。四海齊鋒。一口所敵。則張儀張祿。亦足云也。權惟庸蜀與鴝鵲同窠。句吳與鼃黽同穴。一自以爲禽鳥。一自以爲魚鼈。山阜猥積而崎嶇。泉流迸集而咉咽。隰壤瀸漏而沮洳。林藪石留而蕪穢。窮岫泄雲。日月恒翳。宅土熇暑。封疆障癘。蔡莽螫刺。昆蟲毒噬。漢罪流禦。秦餘徙帑。宵貌蕞陋。稟質遳脆。巷無杼首。里罕耆耋。或魋髻而左言。或鏤膚而鑽髮。或明發而嬥歌。或浮泳而卒歲。風俗以韰惈爲嫿。人物以戕害爲藝。威儀所不攝。憲章所不綴。由重山之束阸。因長川之裾勢。距遠關以闚闓。時高樔而陛制。薄戍緜冪。無異蛛蝥之網。弱卒瑣甲。無異螳蜋之衛。與先代而常然。雖信險而勦絕。揆既往之前跡。卽將來之後轍。成都迄已傾覆。建業則亦顛沛。顧非累卵於疊棊。焉至觀形而懷怛。權假日以餘榮。比朝華而菴藹。覽麥秀與黍離。可作謠於吳會。先生之言未卒。吳蜀二客。矆然相顧。䁕焉失所。有靦瞢容。神藥形茹。弛氣離坐。㥾罿而謝曰。僕黨清狂。怵迫閩濮。習蓼蟲之忘辛。翫進退之惟谷。非常寐而無覺。不覩皇輿之軌躅。過以汎剽之單慧。歷執古之醇聽。兼重悂以䩭繆。偭辰光而罔定。先生玄識。深頌靡測。得聞上德之至盛。匪同憂於有聖。抑若春霆發響。而驚蟄飛競。潛龍浮景。而幽泉高鏡。雖星有風雨之好。人有異同之性。庶覿蔀家與剎廬。

非蘇世而居政。且夫寒谷豐黍。吹律以暖之也。昏情爽曙。箴規以顯之也。雖明珠兼寸。尺璧有盈。曜車二六。三傾五城。未若申錫典章之爲遠也。亮曰。日不雙麗。世無兩帝。天經地緯。理有大歸。安得齊給守其小辯也哉。

文選卷三終

文選卷四

賦丁　郊祀　耕藉　畋獵上

甘泉賦 並序

揚子雲

孝成帝時。客有薦雄文似相如者。上方郊祀甘泉泰畤。汾陰后土。以求繼嗣。召雄待詔承明之庭。正月從上甘泉。還奏甘泉賦以風。其辭曰。

惟漢十世。將郊上玄。定泰畤。擁神休。尊明號。同符三皇。錄功五帝。卹胤錫羨。拓迹開統。於是迺命羣僚。歷吉日。協靈辰。星陳而天行。詔招搖與太陰兮。伏鉤陳使當兵。屬堪輿以壁壘兮。梢夔魖而抶獝狂。八神奔而警蹕兮。振殷轔而軍裝。蚩尤之倫。帶干將而秉玉戚兮飛蒙茸而走陸梁。齊總總以撙撙。其相膠轕兮。猋駭雲迅。奮以方攘。駢羅列布。鱗以雜沓兮。傑傂參差。魚頡而鳥䀎。翕赫曶霍。霧集而蒙合兮。半散照爛。粲以成章。於是乘輿迺登夫鳳凰兮而翳華芝。駟蒼螭兮六素虯。蠖略蕤綏。灕虖襂纚。帥爾陰閉。霅然陽開。騰清霄而軼浮景兮。夫何旟旐郅偈之旖旎也。流星旄以電爥兮。咸翠蓋而鸞旗。屯萬騎於中營兮。方玉車之千乘。聲駍隱以陸離兮。輕先疾雷而馺遺風。臨高衍之嵱嵷兮。超紆譎之清澄。登椽欒而羾天門兮。馳閶闔而入凌兢。是時未臻夫甘泉也。迺望通天之繹繹。下陰潛以慘懍兮。上洪紛而相錯。直嶢嶢以造天兮。厥高慶而不可乎彌度。平原唐其壇漫兮。列

新荑於林薄。攢并閭與茇葀兮。紛被麗其亡鄂。崇丘陵之駊騀兮。深溝嶔巖而爲谷。迣迣離宮。般以相燭兮。封巒石關。迤靡乎連屬。於是大廈雲譎波詭。摧嶉而成觀。仰蹻首以高視兮。目冥眴而無見。正瀏濫以弘惝兮。指東西之漫漫。徒徊徊以徨徨兮。魂魄眇眇而昏亂。據軨軒而周流兮。忽坱圠而無垠。翠玉樹之青蔥兮。璧馬犀之瞵瑞。金人仡仡其承鐘虡兮。嵌巖巖其龍鱗。揚光曜之燎燭兮。垂景炎之炘炘。配帝居之縣圃兮。象泰壹之威神。洪臺崛其獨出兮。㯠北極之嶟嶟。列宿迺施於上榮兮。日月纔經於柍桭。雷鬱律於巖窔兮。電儵忽於牆藩。鬼魅不能自逮兮。半長途而下顛。歷倒景而絕飛梁兮。浮蔑蠓而撇天。左欃槍而右玄冥兮。前熛闕而後應門。陰西海與幽都兮。涌醴汩以生川。蛟龍連蜷於東厓兮。白虎敦圉乎崑崙。覽樛流於高光兮。溶方皇於西清。前殿崔巍兮。和氏玲瓏。抗浮柱之飛榱兮。神莫莫而扶傾。閌閬閬其寥廓兮。似紫宮之崢嶸。駢交錯而曼衍兮。㠑嵬隗乎其相嬰。乘雲閣而上下兮。紛蒙籠以混成。曳紅采之流離兮。颺翠氣之宛延。襲琁室與傾宮兮。若登高眇遠。亡國肅乎臨淵。迴猋肆其碭駭兮。翍桂椒而鬱栘楊。香芬茀以穹窿兮。擊薄櫨而將榮。薌呹肸以棍批兮。聲駍隱而歷鐘。排玉戶而颺金鋪兮。發蘭蕙與芎藭。帷弸彋其拂汨兮。稍暗暗而靚深。陰陽清濁。穆羽相和兮。若夔牙之調琴。般倕棄其剞劂兮。王爾投其鉤繩。雖方征僑與偓佺兮。猶彷彿其若夢。於是事變物化。目駭耳回。蓋天子穆然珍臺閒館。琁題玉英。蝺蜎蠖濩之中。惟夫所以澄心清魂。儲精垂恩。感動天地。逆釐三神者。迺搜逑索偶。皋伊之徒。冠倫魁能。函甘棠之惠。挾東征之意。相與齊乎陽靈之宮。靡薜荔而爲席兮。折瓊枝以爲芳。噏清雲之流霞兮。飲若木之露英。集乎禮神之囿。登乎頌

祇之堂。建光耀之長旓兮。昭華覆之威威。攀琁璣而下視兮。行遊目乎三危。陳衆車於東阬兮。肆玉軑而下馳。漂龍淵而還九垠兮。窺地底而上迴。風縱縱而扶轄兮。鸞鳳紛其銜蕤。梁弱水之濎濴兮。躡不周之逶迤。想西王母。欣然而上壽兮。屛玉女而却宓妃。玉女亡所眺其清矑兮。宓妃曾不得施其娥眉。方攬道德之精剛兮。侔神明與之爲資。於是欽柴宗祈。燎薰皇天。皐搖泰壹。擧洪頣。樹靈旗。樵蒸焜上。配藜四施。東燭滄海。西耀流沙。北爌幽都。南煬丹厓。玄瓚觩觶。秬鬯泔淡。肸蠁豐融。懿懿芬芬。炎感黄龍兮。熛訛碩麟。選巫咸兮叫帝閽。開天庭兮延羣神。儐暗藹兮降清壇。瑞穰穰兮委如山。於是事畢功弘。迴車而歸。度三巒兮偈棠梨。天閫決兮地垠開。八荒協兮萬國諧。登長平兮雷鼓磕。天聲起兮勇士厲。雲飛揚兮雨滂沛。于胥德兮麗萬世。亂曰。崇崇圜丘。隆隱天兮。登降峛崺。單埢垣兮。增宮參差。駢嵯峨兮。岭巆嶙峋。洞無厓兮。上天之縡。杳旭卉兮。聖皇穆穆。信厥對兮。徠祇郊禋。神所依兮。徘徊招搖。靈棲遲兮。輝光眩燿。降厥福兮。子子孫孫。長無極兮。

藉田賦

潘安仁

伊晉之四年正月丁未。皇帝親率羣后。藉於千畝之甸。禮也。於是乃使甸帥清畿。野廬掃路。封人壝宮。掌舍設枑。青壇蔚其嶽立兮。翠幕黕以雲布。結崇基之靈址兮。啓四塗之廣阼。沃野墳腴。膏壤平砥。清洛濁渠。引流激水。遐阡繩直。邇陌如矢。繱犗服于縹軛兮。紺轅綴於黛耜。儼儲駕於廛左兮。俟萬乘之躬履。百僚先置。位以職分。自上下下。具惟命臣。襲春服之萋萋兮。接游車之轔轔。微風生於輕幰兮。纖埃起於朱輪。森奉璋以階列兮。望皇

軒而肅震。若湛露之晞朝陽兮。衆星之拱北辰也。於是前驅魚麗。屬車鱗萃。閶闔洞啓。參
塗方駟。常伯陪乘。太僕秉轡。后妃獻穜稑之種。司農撰播殖之器。挈壺掌升降之節。宮正
設門閭之蹕。天子乃御玉輦。蔭華蓋。衡牙鏘鎗。綃紈綷縩。金根照耀以炯晃兮。龍驥騰驤
而沛艾。表朱玄於离坎。飛青縞於震兌。中黃曄以發暉兮。方綵紛其繁會。五輅鳴鑾。九旗
揚旆。瓊鈒入蘂。雲罕晻藹。簫管嘲噺以啾嘈兮。鼓鞞硡隱以砰磕。筍虡嶷以軒翥兮。洪鐘
越乎區外。震震塡塡。塵鶩連天。以幸乎藉田。蟬冕熲以灼灼兮。碧色肅其芊芊。似夜光之
剖荊璞兮。若茂松之依山巓也。於是我皇乃降靈壇。撫御耦。坻場染屨。洪縻在手。三推而
舍。庶人終畝。貴賤以班。或五或九。于斯時也。居靡都鄙。民無華裔。長幼雜遝以交集。士女
頒斌而咸戾。被褐振裾。垂髫總髮。躡踵側肩。掎裳連袂。黃塵爲之四合兮。陽光爲之潛翳。
動容發音而觀者。莫不抃舞乎康衢。謳吟乎聖世。情欣樂乎昬作兮。慮盡力乎樹蓺。靡推
督而常勤兮。莫之課而自勵。躬先勞以悅使兮。豈嚴刑而猛制哉。有邑老田父。或進而稱
曰。蓋損益隨時。理有常然。高以下爲基。民以食爲天。正其末者端其本。善其後者愼其先。
夫九土之宜弗任。四人之務不一。野有菜蔬之色。朝靡代耕之秩。無儲稸以虞災。徒望歲
以自畢。三季之衰。皆此物也。今聖上昧旦丕顯。夕惕若慄。圖匱於豐。防儉於逸。欽哉欽哉。
惟穀之恤。展三時之弘務。致倉廩於盈溢。固堯湯之用心。而存救之要術也。若乃廟祧有
事。祝宗諏日。簠簋普淖。則此之自實。縮鬯蕭茅。又於是乎出。黍稷馨香。旨酒嘉栗。宜其民
和年登。而神降之吉也。古人有言曰。聖人之德。無以加於孝乎。夫孝者。天地之性。人之所
由靈也。昔者明王以孝理天下。其或繼之者。鮮哉希矣。逮我皇晉。實光斯道。儀刑孚于萬

國。愛敬盡於祖考。故躬稼以供粢盛。所以致孝也。勸穡以足百姓。所以固本也。能本而孝。盛德大業至矣哉。此一役也。而二美具焉。不亦遠乎。不亦重乎。敢作頌曰。思樂甸畿。薄采其茅。大君戾止。言藉其農。其農三推。萬方以祗。耨我公田。實及我私。我簠斯盛。我簋斯齊。我倉如陵。我庾如坻。念茲在茲。永言孝思。民力普存。祝史正辭。神祇攸歆。逸豫無期。一人有慶。兆民賴之。

子虛賦

司馬長卿

楚使子虛使於齊。王悉發車騎。與使者出畋。畋罷子虛過。奼烏有先生。亡是公存焉。坐定。烏有先生問曰。今日畋樂乎。子虛曰樂。獲多乎。曰少。然則何樂。對曰。僕樂齊王之欲夸僕以車騎之衆。而僕對以雲夢之事也。曰可得聞乎。子虛曰可。王駕車千乘。選徒萬騎。畋於海濱。列卒滿澤。罘網彌山。掩兎轔鹿。射麋脚麟。騖於鹽浦。割鮮染輪。射中獲多。矜而自功。顧謂僕曰。楚亦有平原廣澤。遊獵之地。饒樂若此者乎。楚王之獵。孰與寡人乎。僕下車對曰。臣楚國之鄙人也。幸得宿衛十有餘年。時從出遊。遊於後園。覽於有無。然猶未能徧覩也。又焉足以言其外澤乎。齊王曰。雖然。略以子之所聞見而言之。僕對曰。唯唯。臣聞楚有七澤。嘗見其一。未覩其餘也。臣之所見。蓋特其小小者耳。名曰雲夢。雲夢者方九百里。其中有山焉。其山則盤紆崩鬱。隆崇崒崒。岑崟參差。日月蔽虧。交錯糾紛。上干青雲。罷池陂陁。下屬江河。其土則丹青赭堊。雌黃白坿。錫碧金銀。衆色炫耀。照爛龍鱗。其石則赤玉玫瑰。琳瑉昆吾。瑊玏玄厲。碝石碔砆。其東則有蕙圃衡蘭。芷若射干。芎藭菖蒲。茳蘺蘪蕪。諸柘

巴苴。其南則有平原廣澤。登降陁靡。案衍壇曼。緣以大江。限以巫山。其高燥則生葴薪苞荔。薛莎青薠。其埤濕則生藏莨蒹葭。東蘠彫胡。蓮藕菰蘆。菴閭軒于。衆物居之。不可勝圖。其西則有涌泉清池。激水推移。外發芙蓉菱華。內隱鉅石白沙。其中則有神龜蛟鼉。瑇瑁鼈黿。其北則有陰林巨樹。楩枏豫章。桂椒木蘭。檗離朱楊。樝梨梬栗。橘柚芬芳。其上則有鵷鶵孔鸞。騰遠射干。其下則有白虎玄豹。蟃蜒貙犴。於是乎。乃使專諸之倫。手格此獸。楚王乃駕馴駮之駟。乘彫玉之輿。靡魚鬚之橈旃。曳明月之珠旗。建干將之雄戟。左烏號之彫弓。右夏服之勁箭。陽子驂乘。纖阿爲御。案節未舒。卽陵狡獸。蹵蛩蛩。轔距虛。軼野馬。轊騊駼。乘遺風。射游騏。倏眒倩浰。雷動猋至。星流霆擊。弓不虛發。中必決眦。洞胷達掖。絕乎心繫。獲若雨獸。掩草蔽地。於是楚王乃弭節徘徊。翶翔容與。覽乎陰林。觀壯士之暴怒。與猛獸之恐懼。徼𠧗受詘。殫覩衆物之變態。於是鄭女曼姬。被阿緆。揄紵縞。雜纖羅。垂霧縠。襞積褰縐。紆徐委曲。鬱橈谿谷。衯衯裶裶。揚袘戌削。蜚襳垂髾。扶輿猗靡。翕呷萃蔡。下靡蘭蕙。上拂羽蓋。錯翡翠之葳蕤。繆繞玉綏。眇眇忽忽。若神仙之髣髴。於是乃相與獠於蕙圃。媻姍勃窣。而上乎金隄。揜翡翠。射鵔鸃。微矰出。纖繳施。弋白鵠。連駕鵝。雙鶬下。玄鶴加。怠而後發。游於清池。浮文鷁。揚旌枻。張翠帷。建羽蓋。網瑇瑁。鉤紫貝。摐金鼓。吹鳴籟。榜人歌。聲流喝。水蟲駭。波鴻沸。涌泉起。奔揚會。礧石相擊。硠硠礚礚。若雷霆之聲。聞乎數百里之外。將息獠者。擊靈鼓。起烽燧。車案行。騎就隊。纚乎淫淫。般乎裔裔。於是楚王乃登雲陽之臺。怕乎無爲。憺乎自持。勺藥之和具。而後御之。不若大王終日馳騁。曾不下輿。脟割輪焠。自以爲娛。臣竊觀之。齊殆不如。於是齊王無以應僕也。烏有先生曰。是何言之過也。足下

不遠千里。來貺齊國。王悉發境內之士。備車騎之衆。與使者出畋。乃欲戮力致獲。以娛左右。何名爲夸哉。問楚地之有無者。願聞大國之風烈。先生之餘論也。今足下不稱楚王之德厚。而盛推雲夢以爲高奢。言淫樂而顯侈靡。竊爲足下不取也。必若所言。固非楚國之美也。有而言之。是彰君之惡。無而言之。是害足下之信。彰君之惡。而傷私義。二者無一可。而先生行之。必且輕於齊。而累於楚矣。且齊東渚鉅海。南有琅邪。觀乎成山。射乎之罘。浮渤澥。游孟諸。邪與肅愼爲鄰。右以暘谷爲界。秋田乎青丘。彷徨乎海外。呑若雲夢者八九。於其胷中。曾不蔕芥。若乃俶儻瑰瑋。異方殊類。珍怪鳥獸。萬端鱗崪。充牣其中。不可勝記。禹不能名。卨不能計。然在諸侯之位。不敢言遊戲之樂。苑囿之大。先生又見客。是以王辭不復。何爲無以應哉。

上林賦

司馬長卿

亡是公听然而笑曰。楚則失矣。而齊亦未爲得也。夫使諸侯納貢者。非爲財幣。所以述職也。封疆畫界者。非爲守禦。所以禁淫也。今齊列爲東藩。而外私肅愼。捐國踰限。越海而田。其於義固未可也。且夫二君之論。不務明君臣之義。正諸侯之禮。徒事爭游戲之樂。苑囿之大。欲以奢侈相勝。荒淫相越。此不可以揚名發譽。而適足以貶君自損也。且夫齊楚之事。又焉足道乎。君未覩夫巨麗也。獨不聞天子之上林乎。左蒼梧。右西極。丹水更其南。紫淵徑其北。始終灞滻。出入涇渭。酆鎬潦潏。紆餘委蛇。經營乎其內。蕩蕩乎八川分流。相背而異態。東西南北。馳騖往來。出乎椒丘之闕。行乎洲淤之浦。經乎桂林之中。過乎泱漭之

壄。汩乎混流。順阿而下。赴隘陿之口。觸穹石。激堆埼。沸乎暴怒。洶涌彭湃。滭弗宓汩。偪側泌瀄。橫流逆折。轉騰潎洌。滂濞沆溉。穹隆雲橈。宛潬膠盭。踰波趨浥。莅莅下瀨。批巖衝擁。奔揚滯沛。臨坻注壑。瀺灂霣墜。沈沈隱隱。砰磅訇礚。潏潏淈淈。湁潗鼎沸。馳波跳沫。汩濦漂疾。悠遠長懷。寂漻無聲。肆乎永歸。然後灝溔潢漾。安翔徐回。翯乎滈滈。東注太湖。衍溢陂池。於是乎蛟龍赤螭。䱭鰽漸離。鰅鰫鰬魠。禺禺魼鰨。揵鰭掉尾。振鱗奮翼。潛處乎深巖。魚鼈讙聲。萬物衆夥。明月珠子。的皪江靡。蜀石黃碝。水玉磊砢。磷磷爛爛。采色澔汗。叢積乎其中。鴻鷫鵠鴇。駕鵝屬玉。交精旋目。煩鶩庸渠。箴疵鵁盧。羣浮乎其上。汎淫泛濫。隨風澹淡。與波搖蕩。奄薄水渚。唼喋菁藻。咀嚼菱藕。於是乎崇山矗矗。巃嵸崔巍。深林巨木。嶄巖參嵳。九嵕巀嶭。南山峩峩。巖陁甗錡。摧崣崛崎。振溪通谷。蹇產溝瀆。谽呀豁閜。阜陵別隝。崴磈嵔廆。丘虛堀礨。隱轔鬱壘。登降施靡。陂池貏豸。沇溶淫鬻。散渙夷陸。亭皐千里。靡不被築。掩以綠蕙。被以江蘺。糅以蘪蕪。雜以留夷。布結縷。攢戾莎。揭車蘅蘭。槀本射干。茈薑蘘荷。葴橙若蓀。鮮支黃礫。蔣苧青薠。布濩閎澤。延曼太原。離靡廣衍。應風披靡。吐芳揚烈。郁郁菲菲。衆香發越。肸蠁布寫。晻薆咇茀。於是乎周覽泛觀。縝紛軋芴。芒芒怳忽。視之無端。察之無崖。日出東沼。入乎西陂。其南則隆冬生長。涌水躍波。其獸則㺎旄貘犛。沈牛麈麋。赤首圜題。窮奇象犀。其北則盛夏含凍裂地。涉冰揭河。其獸則麒麟角端。騊駼槖駝。蛩蛩驒騱。駃騠驢鸁。於是乎離宮別館。彌山跨谷。高廊四注。重坐曲閣。華榱璧璫。輦道纚屬。步櫚周流。長途中宿。夷嵕築堂。累臺增成。巖窔洞房。俯杳眇而無見。仰攀橑而捫天。奔星更於閨闥。宛虹拕於楯軒。青龍蚴蟉於東廂。象輿婉蟬於西清。靈圄燕於閒館。偓佺

之倫。暴於南榮。醴泉涌於清室。通川過於中庭。磐石振崖。嶔巖倚傾。嵯峨嶕嶢。刻削崢嶸。玫瑰碧琳。珊瑚叢生。瑉玉旁唐。玢豳文鱗。赤瑕駁犖。雜臿其間。晁采琬琰。和氏出焉。於是乎盧橘夏熟。黃甘橙楱。枇杷橪柿。楟柰厚朴。梬棗楊梅。櫻桃蒲陶。隱夫薁棣。荅遝離支。羅乎後宮。列於北園。貤丘陵。下平原。揚翠葉。扤紫莖。發紅華。垂朱榮。煌煌扈扈。照曜鉅野。沙棠櫟櫧。華楓枰櫨。留落胥邪。仁頻并閭。欃檀木蘭。豫章女貞。長千仞。大連抱。夸條直暢。實葉葰楙。攢立叢倚。連卷欐佹。崔錯發骫。坑衡閜砢。垂條扶疏。落英幡纚。紛溶萷蔘。猗狔從風。瀏莅芔歙。蓋象金石之聲。管籥之音。柴池茈虒。旋還乎後宮。雜襲絫輯。被山緣谷。循坂下隰。視之無端。究之無窮。於是乎玄猨素雌。蜼玃飛蠝。蛭蜩蠗蝚。獑胡穀蛫。棲息乎其間。長嘯哀鳴。翩幡互經。夭蟜枝格。偃蹇杪顚。踰絕梁。騰殊榛。捷垂條。掉希間。牢落陸離。爛熳遠遷。若此者數百千處。娛游往來。宮宿館舍。庖廚不徙。後宮不移。百官備具。於是乎背秋涉冬。天子校獵。乘鏤象。六玉虯。拖蜺旌。靡雲旗。前皮軒。後道游。孫叔奉轡。衛公參乘。扈從橫行。出乎四校之中。鼓嚴簿。縱獵者。江河爲阹。泰山爲櫓。車騎靁起。殷天動地。先後陸離。離散別追。淫淫裔裔。緣陵流澤。雲布雨施。生貔豹。搏豺狼。手熊羆。足壄羊。蒙鶡蘇。絝白虎。被斑文。跨壄馬。淩三嵕之危。下磧歷之坻。徑峻赴險。越壑厲水。椎蜚廉。弄獬豸。格瑕蛤。鋋猛氏。羂騕褭。射封豕。箭不苟害。解脰陷腦。弓不虛發。應聲而倒。於是乎乘輿弭節徘徊。翶翔往來。睨部曲之進退。覽將帥之變態。然後侵淫促節。儵敻遠去。流離輕禽。蹵履狡獸。轊白鹿。捷狡兎。軼赤電。遺光耀。追怪物。出宇宙。彎蕃弱。滿白羽。射游梟。櫟蜚遽。擇肉而後發、先中而命處。弦矢分。藝殪仆。然後揚節而上浮。淩驚風。歷駭猋。乘虛無。與神俱。躪玄鶴。亂

昆鷄。遒孔鸞。促鵕鸃。拂翳鳥。捎鳳凰。捷鵷鶵。揜焦朋。道盡塗殫。廻車而還。招搖乎儴佯。降集乎北紘。率乎直指。晻乎反鄉。蹷石闕。歷封巒。過鳷鵲。望露寒。下棠梨。息宜春。西馳宣曲。濯鷁牛首。登龍臺。掩細柳。觀士大夫之勤略。均獵者之所得獲。徒車之所轔轢。步騎之所蹂若。人臣之所蹈藉。與其窮極倦𠫍。驚憚讋伏。不被創刃而死者。他他藉藉。塡阬滿谷。掩平彌澤。於是乎游戲懈怠。置酒乎顥天之臺。張樂乎膠葛之寓。撞千石之鐘。立萬石之虡。建翠華之旗。樹靈鼉之鼓。奏陶唐氏之舞。聽葛天氏之歌。千人倡。萬人和。山陵爲之震動。川谷爲之蕩波。巴渝宋蔡。淮南于遮。文成顚歌。族居遞奏。金鼓迭起。鏗鎗闛鞈。洞心駭耳。荊吳鄭衛之聲。韶濩武象之樂。陰淫案衍之音。鄢郢繽紛。激楚結風。俳優侏儒。狄鞮之倡。所以娛耳目。樂心意者。麗靡爛漫於前。靡曼美色於後。若夫青琴宓妃之徒。絕殊離俗。妖冶嫺都。靚糚刻飾。便嬛綽約。柔橈嫚嫚。嫵媚孅弱。曳獨繭之褕袘。眇閻易以卹削。便姍嫳屑。與俗殊服。芬芳漚鬱。酷烈淑郁。皓齒粲爛。宜笑的皪。長眉連娟。微睇緜藐。色授魂與。心愉於側。於是酒中樂酣。天子芒然而思。似若有亡。曰嗟乎此太奢侈。朕以覽聽餘閒。無事棄日。順天道以殺伐。時休息於此。恐後葉靡麗。遂往而不返。非所以爲繼嗣創業垂統也。於是乎乃解酒罷獵。而命有司曰。地可墾闢。悉爲農郊。以贍萌隸。隤牆塡塹。使山澤之人得至焉。實陂池而勿禁。虛宮館而勿仞。發倉廩以救貧窮。補不足。恤鰥寡。存孤獨。出德號。省刑罰。改制度。易服色。革正朔。與天下爲更始。於是歷吉日以齋戒。襲朝服。乘法駕。建華旗。鳴玉鸞。游乎六藝之囿。馳騖乎仁義之塗。覽觀春秋之林。射貍首。兼騶虞。弋玄鶴。舞干戚。載雲罕。揜羣雅。悲伐檀。樂樂胥。脩容乎禮園。翺翔乎書圃。述易道。放怪獸。登明堂。坐清廟。

次羣臣。奏得失。四海之內。靡不受獲。於斯之時。天下大說。向風而聽。隨流而化。卉然興道而遷義。刑錯而不用。德隆於三王。而功羨於五帝。若此故獵乃可喜也。若夫終日馳騁。勞神苦形。罷車馬之用。抏士卒之精。費府庫之財。而無德厚之恩。務在獨樂。不顧衆庶。忘國家之政。貪雉兎之獲。則仁者不繇也。從此觀之。齊楚之事。豈不哀哉。地方不過千里。而囿居九百。是草木不得墾闢。而民無所食也。夫以諸侯之細。而樂萬乘之侈。僕恐百姓被其尤也。於是二子愀然改容。超若自失。逡巡避席曰。鄙人固陋。不知忌諱。乃今日見敎。謹受命矣。

羽獵賦 並序

揚子雲

孝成帝時羽獵。雄從。以爲昔在二帝三王。宮館臺榭。沼池苑囿。林麓藪澤。財足以奉郊廟。御賓客。充庖廚而已。不奪百姓膏腴。穀土桑柘之地。女有餘布。男有餘粟。國家殷富。上下交足。故甘露零其庭。醴泉流其唐。鳳凰巢其樹。黃龍游其沼。麒麟臻其囿。神爵棲其林。昔者禹任益虞。而上下和。草木茂。成湯好田。而天下用足。文王囿百里。民以爲尙小。齊宣王囿四十里。民以爲泰大。裕民之與奪民也。武帝廣開上林。東南至宜春鼎湖御宿昆吾。旁南山。西至長楊五柞。北繞黃山。濱渭而東。周袤數百里。穿昆明池。象滇河。營建章鳳闕神明馺娑漸臺太液。象海水。周流方丈瀛洲蓬萊。遊觀侈靡。窮妙極麗。雖頗割其三垂。以贍齊民。然至羽獵。甲車戎馬器械儲偫禁禦所營。尙泰奢麗誇詡。非堯舜成湯文王三驅之意也。又恐後世復脩前好。不折中以泉臺。故聊因校獵。賦以風之。其辭曰。或稱羲農。豈或帝

王之彌文哉。論者云否。各亦並時而得宜。奚必同條而共貫。則泰山之封。焉得七十而有二
儀。是以創業垂統者俱不見其爽。遐邇五三。孰知其是非。遂作頌曰。麗哉神聖。處於玄宮。
富既與地乎侔訾。貴正與天乎比崇。齊桓曾不足使扶轂。楚嚴未足以爲驂乘。狹三王之
阨僻。嶠高舉而大興。歷五帝之寥廓。涉三皇之登閎。建道德以爲師。友仁義與之爲朋。於
是玄冬季月。天地隆烈。萬物權輿於內。徂落於外。帝將惟田于靈之囿。開北垠受不周之
制。以終始顓頊玄冥之統。乃詔虞人典澤。東延昆鄰。西馳閶闔。儲積共偫。戍卒夾道。斬叢
棘夷野草。禦自汧渭。經營酆鎬。章皇周流。出入日月。天與地沓。爾廼虎路三嵕。以爲司馬。
圍經百里而爲殿門。外則正南極海。邪界虞淵。鴻濛沆茫。碣以崇山。營合圍會。然後先置
乎白楊之南。昆明靈沼之東。賁育之倫。蒙盾負羽。杖鏌鎁而羅者以萬計。其餘荷垂天之
畢。張竟壄之罘。靡日月之朱竿。曳彗星之飛旗。青雲爲紛。虹蜺爲繯。屬乎崐崙之墟。渙若
天星之羅。浩如濤水之波。淫淫與與。前後要遮。欃槍爲闉。明月爲候。熒惑司命。天弧發射。
鮮扁陸離。駢衍佖路。徽車輕武。鴻絧緁獵。殷殷軫軫。被陵緣阪。窮夐極遠者。相與列乎高
原之上。羽騎營營。昈分殊事。繽紛往來。轠轤不絕。若光若滅者。布乎青林之下。於是天子
乃以陽晁。始出乎玄宮。撞鴻鐘。建九旒。六白虎。載靈輿。蚩尤並轂。蒙公先驅。立歷天之旗。
曳捎星之旃。霹靂烈缺。吐火施鞭。萃傱沇溶。淋離廓落。戲八鎮而開關。飛廉雲師。吸嚊潚
率。鱗羅布烈。攢以龍翰。啾啾蹌蹌。入西園。切神光。望平樂。徑竹林。蹂蕙圃。踐蘭唐。舉烽烈
火。轡者施技。方馳千駟。狡騎萬帥。虓虎之陳。從橫膠輵。猋拉雷厲。驞駍駖磕。洶洶旭旭。天
動地岋。羨漫半散。蕭條數千里之外。若夫壯士忼慨。殊鄉別趣。東西南北。騁嗜奔欲。拕蒼

猻。跋犀犛。蹶浮麋。斮巨狿。搏玄猨。騰空虛。距連卷。踔天蟜。嬉閒閒。莫莫紛紛。山谷爲之風猋。林叢爲之生塵。及至獲夷之徒。蹶松栢。掌蒺藜。獵蒙蘢。轔輕飛。屨般首。帶脩蛇。鉤赤豹。牽象犀。跇巒阬。超唐陂。車騎雲會。登降闇藹。泰華爲旒。熊耳爲綴。木仆山還。漫若天外。儲與乎大浦。聊浪乎宇內。於是天淸日晏。逢蒙列眥。羿氏控弦。皇車幽輵。光純天地。望舒彌轡。翼乎徐至於上蘭。移圍徙陣。浸淫蹵部。曲隊堅重。各案行伍。壁壘天旋。神扶電擊。逢之則碎。近之則破。鳥不及飛。獸不得過。軍驚師駭。刮野掃地。及至罕車飛揚。武騎聿皇。蹈飛豹。羂嘄陽。追天寶。出一方。應駍聲。擊流光。野盡山窮。囊括其雌雄。沇沇溶溶。遙噱乎紘中。三軍芒然。窮宂閼與。亶觀夫剽禽之紲踰。犀兕之抵觸。熊羆之挐玃。虎豹之凌遽。徒角槍題注。蹴竦讋怖。䰟亡魄失。觸輻關脰。妄發期中。進退履獲。創淫輪夷。丘累陵聚。於是禽殫中衰。相與集於靖冥之館。以臨珍池。灌以岐梁。溢以江河。東瞰目盡。西暢亡涯。隨珠和氏。焯爍其波。玉石嶜崟。眩燿靑熒。漢女水潛。怪物暗冥。不可殫形。玄鸞孔雀。翡翠垂榮。王雎關關。鴻鴈嚶嚶。羣嬉乎其中。噍噍昆明。鳧鷖振鷺。上下砰磕。聲若雷霆。乃使文身之伎水。格鱗蟲。凌堅冰。犯嚴淵。探巖排碕。薄索蛟螭。蹈獱獺。據黿鼉。抾靈蠵。入洞穴。出蒼梧。乘鉅鱗。騎鯨魚。浮彭蠡。目有虞。方椎夜光之流離。剖明月之胎珠。鞭洛水之宓妃。餉屈原與彭胥。於玆乎鴻生鉅儒。俄軒冕。雜衣裳。脩唐典。匡雅頌。揖讓於前。昭光振耀。蠁忽如神。仁聲惠於北狄。武誼動於南鄰。是以旃裘之王。胡貉之長。移珍來享。抗手稱臣。前入圍口。後陳盧山。羣公常伯。楊朱墨翟之徒。喟然竝稱曰。崇哉乎德。雖有唐虞大夏成周之隆。何以侈玆。夫古之覲東嶽。禪梁基。舍此世也。其誰與哉。上猶謙讓而未俞也。方將上獵三靈之流。下決醴泉

之滋。發黃龍之穴。窺鳳凰之巢。臨麒麟之囿。幸神雀之林。奢雲夢。侈孟諸。非章華。是靈臺。罕徂離宮。而輟觀遊。土事不飾。木功不彫。丞人乎農桑。勸之以弗怠。儕男女使莫違。恐貧窮者不徧被洋溢之饒。開禁苑。散公儲。創道德之囿。弘仁惠之虞。馳弋乎神明之囿。覽觀乎羣臣之有亡。放雉兎。收罝罘。麋鹿芻蕘。與百姓共之。蓋所以臻茲也。於是醇洪鬯之德。豐茂世之規。加勞三皇。勗勤五帝。不亦至乎。乃祇莊雍穆之徒。立君臣之節。崇賢聖之業。未遑苑囿之麗。遊獵之靡也。因迴軫還衡。背阿房。反未央。

文選卷四終

文選卷五

賦戊　畋獵下　紀行

長楊賦　竝序　揚子雲

明年上將大誇胡人以多禽獸。秋命右扶風。發民入南山。西自褒斜。東至弘農。南敺漢中。張羅網罝罘。捕熊羆豪豬。虎豹狖玃。狐兔麋鹿。載以檻車。輸長楊射熊館。以網爲周阹。縱禽獸其中。令胡人手搏之。自取其獲。上親臨觀焉。是時農民不得收斂。雄從至射熊館。還上長楊賦。聊因筆墨之成文章。故藉翰林以爲主人。子墨爲客卿。以諷。其辭曰。

子墨客卿問於翰林主人曰。蓋聞聖主之養民也。仁霑而恩洽。動不爲身。今年獵長楊。先命右扶風。左太華而右褒斜。椓嶻嶭而爲弋。紆南山以爲罝。羅千乘於林莽。列萬騎於山隅。帥軍踤阹。錫戎獲胡。搤熊羆。拖豪豬。木擁槍纍。以爲儲胥。此天下之窮覽極觀也。雖然亦頗擾于農人。三旬有餘。其廑至矣。而功不圖。恐不識者。外之則以爲娛樂之游。內之則不以爲乾豆之事。豈爲民乎哉。且人君以玄默爲神。澹泊爲德。今樂遠出。以露威靈。數搖動以疲車甲。本非人主之急務。蒙竊惑焉。翰林主人曰。吁客何謂茲邪。若客所謂知其一未覩其二。見其外。不識其內也。僕嘗倦談。不能一二其詳。請略擧其凡。而客自覽其切焉。客曰。唯唯。主人曰。昔有彊秦。封豕其士。窫窳其民。鑿齒之徒。相與磨牙而爭之。豪俊麋沸

雲擾。羣黎爲之不康。於是上帝眷顧高祖。高祖奉命。順斗極。運天關。橫巨海。漂崑崙。提劍而叱之。所過麾城擲邑。下將降旗。一日之戰。不可殫記。當此之勤。頭蓬不暇梳。飢不及餐。鞮鍪生蟣蝨。介冑被霑汗。以爲萬姓請命乎皇天。廼展民之所詘。振民之所乏。規億載。恢帝業。七年之間。而天下密如也。逮至聖文。隨風乘流。方垂意於至寧。躬服節儉。綈衣不敝。革鞜不穿。大廈不居。木器無文。於是後宮賤瑇瑁而疏珠璣。卻翡翠之飾。除雕瑑之巧。惡麗靡而不近。斥芬芳而不御。抑止絲竹宴衍之樂。憎聞鄭衞幼眇之聲。是以玉衡正。而太階平也。其後熏鬻作虐。東夷橫叛。羌戎睚眦。閩越相亂。遐氓爲之不安。中國蒙被其難。於是聖武勃怒。爰整其旅。乃命驃衞。汾沄沸渭。雲合電發。猋騰波流。機駭蠭軼。疾如奔星。擊如震霆。碎轒轀。破穹廬。腦沙幕。髓余吾。遂躐乎王庭。驅橐駝。燒熐蠡。分剓單于。磔裂屬國。夷阬谷。拔鹵莽。刊山石。蹂尸輿廝。係累老弱。吮鋋瘢耆。金鏃淫夷者。數十萬人。皆稽顙樹頷。扶服蛾伏。二十餘年矣。尚不敢惕息。夫天兵四臨。幽都先加。迴戈邪指。南越相夷。靡節西征。羌僰東馳。是以遐方疏俗。殊鄰絕黨之域。自上仁所不化。茂德所不綏。莫不蹻足抗首。請獻厥珍。使海內澹然。永亡邊城之災。金革之患。今朝廷純仁。遵道顯義。并包書林。聖風雲靡。英華沈浮。洋溢八區。普天所覆。莫不沾濡。士有不談王道者。則樵夫笑之。意者以爲事罔隆而不殺。物靡盛而不虧。故平不肆險。安不忘危。廼時以有年出兵。整輿竦戎。振師五柞。習馬長楊。簡力狡獸。校武票禽。廼萃然登南山。瞰烏弋。西厭月出。東震日域。又恐後代迷於一時之事。常以此爲國家之大務。淫荒田獵。陵夷而不禦也。是以車不安軔。日未靡旃。從者彷彿。骫屬而還。亦所以奉太尊之烈。遵文武之度。復三王之田。反五帝之虞。使

農不輟穫。工不下機。婚姻以時。男女莫違。出愷悌。行簡易。矜劬勞。休力役。見百年。存孤弱。帥與之同苦樂。然後陳鐘鼓之樂。鳴鞀磬之和。建碣磍之虡。戛擊鳴球。掉八列之舞。酌允鑠。肴樂胥。聽廟中之雍雍。受神人之福祜。歌投頌。吹合雅。其勤若此。故眞神之所勞也。方將俟元符。以禪梁父之基。增泰山之高。延光于將來。比榮乎往號。豈徒欲淫覽浮觀。馳騁秔稻之地。周流梨栗之林。蹂踐芻蕘。誇詡衆庶。盛狖玃之收。多麋鹿之獲哉。且盲者不見咫尺。而離婁燭千里之隅。客徒愛胡人之獲我禽獸。曾不知我亦已獲其王侯。言未卒。墨客降席。再拜稽首曰。大哉體乎。允非小人之所能及也。迺今日發矇。廓然已昭矣。

射雉賦

潘安仁

涉青林以游覽兮。樂羽族之羣飛。聿采毛之英麗兮。有五色之名翬。厲耿介之專心兮。奓雄豔之姱姿。巡丘陵以經略兮。畫墳衍而分畿。於是青陽告謝。朱明肇授。靡木不滋。無草不茂。初莖蔚其曜新。陳柯槭以改舊。天泱泱以垂雲。泉涓涓而吐溜。麥漸漸以擢芒。雉鷕鷕而朝雊。眄箱籠以揭驕。睨驍媒之變態。奮勁骸以角搓。瞵悍目以旁睞。鶯綺翼而赬撾。灼繡頸而袞背。鬱軒翥以餘怒。思長鳴以效能。爾乃攣場拄翳。停僮葱翠。綠柏參差。文翮鱗次。蕭森繁茂。婉轉輕利。衷料戾以徹鑒。表厭躡以密緻。恐吾游之晏起。慮原禽之罕至。甘疲心於企想。分倦目以寓視。何調翰之喬桀。邈疇類而殊才。候扇舉而清叫。野聞聲而應媒。褰微罟以長眺。已踉蹡而徐來。摛朱冠之赩赫。敷藻翰之陪鰓。首葯綠素。身拕黼繪。青鞦莎靡。丹臆蘭粹。或蹶或啄。時行時止。斑尾揚翹。雙角特起。良遊呃喔。引之規裏。應叱

愕立。擺身竦峙。捧黃間以密彀。屬剛挂以潛擬。倒禽紛以迸落。機聲振而未已。山鷩悍害。㹠迅已甚。越壑凌岑。飛鳴薄廪。鯨牙低鏃。心平望審。毛體摧落。霍若碎錦。逸羣之儁。擅場挾兩。櫟雌妬異。倏來忽往。忌上風之餮切。畏映日之儻朗。屏發布而累息。徒心煩而伎懩。伊義鳥之應敵。啾擭地以厲響。彼聆音而逕進。忽交距以接壤。彤盈窻以美發。紛首頽而臆仰。或乃崇墳夷靡。農不易壠。稊菽叢糅。翳薈菶茸。鳴雄振羽。依于其冢。撊降丘以馳敵。雖形隱而草動。瞻挺穟之傾掉。意淰躍以振踊。嘋出苗以入場。愈情駭而神悚。望黶合而翳曶。雉䏼肩而旋踵。欣余志之精銳。擬青顱而點項。亦有目不步體。邪眺旁剔。靡聞而驚。無見自鷩。周環迴復。繚繞盤辟。戾翳旋把。縈隨所歷。彳亍中輟。馥焉中鏑。前剛重膺。傍截疊翮。若夫多疑少決。膽劣心狷。內無固守。出不交戰。來若處子。去如激電。闚閃藹葉。幎歷乍見。於是算分銖。商遠邇。揆懸刀。騁絕伎。如轘如軒。不高不埤。當咮值胸。裂膆破𦞂。夷險殊地。馴麤異變。晷不暇食。夕不告勌。昔賈氏之如皐。始解顏於一箭。醜夫為之改貌。憾妻為之釋怨。彼遊田之致獲。咸乘危以馳騖。何斯藝之安逸。嗟禽從其已豫。淸道而行。擇地而住。尾飾鑣而在服。肉登俎而永御。豈唯皐隸。此焉君擧。若乃耽盤流遁。放心不移。忘其身恤。司其雄雌。樂而無節。端操或虧。此則老氏之所誡。而君子之所不為

北征賦　班叔皮

余遭世之顚覆兮。罹塡塞之阨災。舊室滅以丘墟兮。曾不得乎少留。遂奮袂以北征兮。超絕迹而遠遊。朝發軔於長都兮。夕宿瓠谷之玄宮。歷雲門而反顧。望通天之崇崇。乘陵岡以

登降。息郇邠之邑鄉。慕公劉之遺德。及行葦之不傷。彼何生之優渥。我獨離此百殃。故時會之變化兮。非天命之靡常。登赤須之長坂。入義渠之舊城。忿戎王之淫狡。穢宣后之失貞。嘉秦昭之討賊。赫斯怒以北征。紛吾去此舊都兮。騑遲遲以歷茲。遂舒節以遠逝。指安定以爲期。涉長路之緜緜兮。遠紆回以樛流。過泥陽而太息。悲祖廟之不修。釋余馬於彭陽兮。且弭節而自思。日晻晻其將暮兮。覩牛羊之下來。寤怨曠之傷情兮。哀詩人之歎時。越安定以容與兮。遵長城之漫漫。劇蒙公之疲民兮。爲彊秦乎築怨。捨高亥之切憂兮。事蠻狄之遼患。不耀德以綏遠兮。顧厚固而繕藩。首身分而不寤兮。猶數功而辭諐。何夫子之妄說兮。孰云地脈而生殘。登障隧而遙望兮。聊須臾以婆娑。閔獯鬻之猾夏兮。弔尉卬於朝那。從聖文之克讓兮。不勞師而幣加。惠父兄於南越兮。黜帝號於尉佗。降几杖於藩國兮。折吳濞之逆邪。惟太宗之蕩蕩兮。豈曩秦之所圖。隮高平而周覽兮。望山谷之嵯峨。野蕭條以莽蕩。迴千里而無家。風猋發以飄颻兮。谷水灌以揚波。飛雲霧之杳杳。涉積雪之皚皚。鴈邕邕以羣翔兮。鵾雞鳴以嚌嚌。遊子悲其故鄉兮。心愴悢以傷懷。撫長劒以慨息兮。泣漣落而霑衣。攬余涕以於邑兮。哀生民之多故。夫何陰曀之不陽兮。嗟久失其平度。諒時運之所爲兮。永伊鬱其誰愬。亂曰。夫子固窮。遊藝文兮。樂以忘憂。惟聖賢兮。達人從事。有儀則兮。行止屈申。與時息兮。君子履信。無不居兮。雖之蠻貊。何憂懼兮。

東征賦

曹大家

惟永初之有七兮。余隨子兮東征。時孟春之吉日兮。撰良辰而將行。乃擧趾而升輿兮。夕

予宿乎偃師。遂去故而就新兮。志愴悢而懷悲。明發曙而不寐兮。心遲遲而有違。酌樽酒以弛念兮。喟抑情而自非。諒不登巢而琢蠡兮。得不陳力而相追。且從衆而就列兮。聽天命之所歸。遵通衢之大道兮。求捷徑欲從誰。乃遂往而徂逝兮。聊遊目而遨魂。歷七邑而觀覽兮。遭鞏縣之多艱。望河洛之交流兮。看成皐之旋門。既免脫於峻嶮兮。歷榮陽而過武卷。食原武之息足。宿陽武之桑間。涉封丘而踐路。慕京師而竊歎。小人性之懷土兮。自書傳而有焉。遂進道而少前兮。得平丘之北邊。入匡郭而追遠兮。念夫子之厄勤。彼衰亂之無道兮。乃困畏乎聖人。悵容與而久駐兮。忘日夕而將昏。到長垣之境界。察農野之居民。睹蒲城之丘墟兮。生荊棘之榛榛。惕覺寤而顧問兮。想子路之威神。衞人嘉其勇義兮。訖於今而稱云。蘧氏在城之東南兮。民亦尚其丘墳。唯令德爲不朽兮。身既歿而名存。惟經典之所美兮。貴道德與仁賢。吳札稱多君子兮。其言信而有徵。後衰微而遭患兮。遂陵遲而不興。知性命之在天。由力行而近仁。勉仰高而蹈景兮。盡忠恕而與人。好正直而不回兮。精誠通於明神。庶靈祇之鑒照兮。祐貞良而輔信。亂曰。君子之思。必成文兮。盍各言志。慕古人兮。先君行止。則有作兮。雖其不敏。敢不法兮。貴賤貧富。不可求兮。正身履道。以俟時兮。脩短之運。愚智同兮。靖恭委命。唯吉凶兮。敬慎無怠。思嗛約兮。精靜少欲。師公綽兮。

西征賦　潘安仁

歲次玄枵。月旅蕤賓。丙丁統日。乙未御辰。潘子憑軾西征。自京徂秦。迺喟然歎曰。古往今來。邈矣悠哉。寥廓忽恍。化一氣而甄三才。此三才者。天地人道。唯生與位。謂之大寶。生有

脩短之命。位有通塞之遇。鬼神莫之要。聖智弗能豫。當休明之盛世兮。託菲薄之陋質。納旌弓於鉉台。讚庶績於帝室。嗟鄙夫之常累。固既得而患失。無柳季之直道。佐士師而一黜。武皇忽其升遐。八音遏於四海。天子寢於諒闇。百官聽於冢宰。彼負荷之殊重兮。雖伊周其猶殆。窺七貴於漢庭。譸一姓之或在。無危明以安位。祗居逼以示專。陷亂逆以受戮。匪降禍之自天。孔隨時以行藏。蘧與國而舒卷。苟蔽微以繆章。患過辟之未遠。悟山潛之逸士。卓長往而不反。陋吾人之拘攣。飄萍浮而蓬轉。寮位儡其隆替。名節漼以隳落。危素卵之累殼。甚玄燕之巢幕。心戰懼以兢悚。如臨深而履薄。夕獲歸於都外。宵未中而難作。匪擇木以棲集。尠林焚而鳥存。遭千載之嘉會。皇合德於乾坤。弛秋霜之嚴威。流春澤之渥恩。甄大義以明責。反初服於私門。皇鑒揆余之忠誠。俄命余以末班。牧疲人於西夏。攜老幼而入關。丘去魯而顧歎。季過沛而涕零。伊故鄉之可懷。疚聖達之幽情。矧匹夫之安土。邈投身於鎬京。猶犬馬之戀主。竊託慕於闕庭。眷鞏洛而掩涕。思纏緜於墳塋。爾乃越平樂。過街郵。秣馬皐門。稅駕西周。遠矣姬德。興自高辛。思文后稷。厥初生民。率西水滸。化流岐豳。祚隆昌發。舊邦維新。旋牧野而歷茲。愈守柔以執競。夜申旦而不寐。憂天保之未定。惟泰山其猶危。祀八百而餘慶。鑒亡王之驕淫。竄南巢以投命。坐積薪以待然。方指日而比盛。人度量之乖舛。何相越之遼迥。考土中于斯邑。成建都而營築。既定鼎于郟鄏。遂鑽龜而啓繇。平失道而來遷。緊二國而是祐。豈時王之無僻。賴先哲以長懋。望圉北之兩門。感虢鄭之納惠。討子頹之樂禍。尤闕西之效戾。重戮帶以定襄。弘大順以霸世。靈壅川以止鬬。晉演義以獻說。咨景悼以迄丐。政陵遲而彌季。俾庶朝之構逆。歷兩王而干位。踰

十葉以逮赧。邦分崩而為二。竟橫噬於虎口。輸文武之神器。澡孝水而濯纓。嘉善名而在茲。天赤子於新安。坎路側而瘞之。亭有千秋之號。子無七旬之期。雖勉勵於延吳。實潛慟乎余慈。眄山川以懷古。悵攬轡於中塗。虐項氏之肆暴。坑降卒之無辜。激秦人以歸德。成劉后之來蘇。事迴沇而好還。卒宗滅而身屠。經澠池而長想。停余車而不進。秦虎狼之彊國。趙侵弱之餘燼。超入險而高會。杖命世之英藺。恥東瑟之偏鼓。提西缶而接刃。辱十城之虛壽。奄咸陽以取儁。出申威於河外。何猛氣之咆勃。入屈節於廉公。若四體之無骨。處智勇之淵偉。方鄙吝之忿悁。雖改日而易歲。無等級以寄言。當光武之蒙塵。致王誅于赤眉。異奉辭以伐罪。初垂翅于迴谿。不尤眚以掩德。終奮翼而高揮。建佐命之元勳。振皇綱而更維。登崤坂之威夷。仰崇嶺之嵯峨。皐託墳於南陵。文違風於北阿。蹇哭孟以審敗。襄墨縗而授戈。曾隻輪之不反。纍三帥以濟河。值庸主之矜愎。殆肆叔於朝市。任好綽其餘裕。獨引過以歸己。明三敗而不黜。卒陵晉以雪恥。豈虛名之可立。良致霸其有以。降曲崤而憐虢。託與國於亡虞。貪誘賂以賣鄰。不及臘而就拘。垂棘反於故府。屈產服于晉輿。德不建而民無援。仲雍之祀忽諸。我徂安陽。言陟陝郛。行乎漫瀆之口。憩乎曹陽之墟。美哉邈乎。茲土之舊也。固乃周邵之所分。二南之所交。麟趾信於關雎。騶虞應乎鵲巢。愍漢氏之剝亂。朝流亡以離析。卓滔天以大滌。劫宮廟而遷迹。俾萬乘之盛尊。降遙思於征役。顧請旋於儷汎。既獲許而中愓。追皇駕而驟戰。望王輅而縱鏑。痛百寮之勤王。咸畢力以致死。分身首於鋒刃。洞胸腋以流矢。有褰裳以投岸。或攘袂以赴水。傷桴檝之褊小。撮舟中而掬指。升曲沃而惆悵。惜兆亂而兄替。枝末大而本披。都偶國而禍結。臧札飄其高厲。委曹吳

而成節。何莊武之無恥。徒利開而義閉。躡函谷之重阻。看天險之衿帶。跡諸侯之勇怯。算嬴氏之利害。或開關以延敵。競遁逃以奔竄。有噤門而莫啓。不窺兵於山外。連雞互而不棲。小國合而成大。豈地勢之安危。信人事之否泰。漢六葉而拓畿。縣弘農而遠關。厭紫極之閑敞。甘微行以遊盤。長傲賓於柏谷。妻覩貌而獻餐。疇匹婦其已泰。胡厥夫之謬官。昔明王之巡幸。固淸道而後往。懼銜橜之或變。峻徒御以誅賞。彼白龍之魚服。挂豫且之密網。輕帝重于天下。奚斯漸之可長。弔戾園於湖邑。諒遭世之巫蠱。探隱伏於難明。委讒賊之趙虜。加顯戮於儲貳。絕肌膚而不顧。作歸來之悲臺。徒望思其何補。紛吾旣邁此全節。又繼之以盤桓。問休牛之故林。感徵名於桃園。發閿鄉而警策。愬黃巷以濟潼。眺華岳之陰崖。覿高掌之遺蹤。憶江使之反璧。告亡期於祖龍。不語怪以徵異。我聞之於孔公。慍韓馬之大憝。阻關谷以稱亂。魏武赫以霆震。奉義辭以伐叛。彼雖衆其焉用。故制勝於廟算。砰揚桴以振塵。繣瓦解而冰泮。超遂遁而奔狄。甲卒化爲京觀。倦狹路之迫隘。軌崎嶇以低仰。蹈秦郊而始闢。豁爽塏以宏壯。黃壤千里。沃野彌望。華實紛敷。桑麻條暢。邪界褒斜。右濱汧隴。寶雞前鳴。甘泉後涌。面終南而背雲陽。跨平原而連嶓冢。九嵕巀嶭。太一巃嵸。吐淸風之飂戾。納歸雲之鬱蓊。南有玄灞素滻。湯井溫谷。北有淸渭濁涇。蘭池周曲。浸決鄭白之渠。漕引淮海之粟。林茂有鄠之竹。山挺藍田之玉。班述陸海珍藏。張叙神皐隩區。此西賓所以言於東主。安處所以聽於憑虛也。可不謂然乎。勁松彰於歲寒。貞臣見於國危。入鄭都而抵掌。義桓友之忠規。竭股肱於昏主。赴塗炭而不移。世善職於司徒。緇衣弊而改爲。履犬戎之侵地。疾幽后之詭惑。舉僞烽以沮衆。淫嬖褒以縱慝。軍敗戲水之上。身死

驪山之北。赫赫宗周。㓕爲亡國。又有繼於此者。異哉秦始皇之爲君也。傾天下以厚葬。自開闢而未聞。匠人勞而弗圖。俾生埋以報勤。外離西楚之禍。内受牧豎之焚。語曰。行無禮必自及此。非其効歟。乾坤以有親可久。君子以厚德載物。觀夫漢高之興也。非徒聰明神武。豁達大度而已也。乃實愼終追舊。篤誠欵愛。澤靡不漸。恩無不逮。率土且猶弗遺。而況於鄰里乎。而況於卿士乎。于斯時也。乃摹寫舊豐。制造新邑。故社易置。枌楡遷立。街衢如一。庭宇相襲。渾雞犬以亂放。各識家而競入。籍含怒於鴻門。沛跼蹐而來王。范謀害而不許。陰授劒以約莊。撫白刃以萬舞。危冬葉之待霜。履虎尾而不噬。寔要伯於子房。樊抗憤以巵酒。咀彘肩以激揚。忽蛇變而龍攄。雄霸上而高驤。曾遷怒而橫撞。碎玉斗其何傷。嬰胥組於軹塗。投素車而肉袒。疎飲餞於東都。提極位之盛滿。金墉鬱其萬雉。峻嶒峭以繩直。戾飲馬之陽橋。踐宣平之淸閾。都中雜遝。戶千人億。華夷士女。駢田逼側。展名京之初儀。卽新館而莅職。勵疲鈍以臨朝。勗自彊而不息。於是孟秋爰謝。聽覽餘日。巡省農功。周行廬室。街里蕭條。邑居散逸。營宇寺署。肆廛管庫。蕞芮於城隅者。百不處一。所謂尚冠脩成。黃棘宣明。建陽昌陰。北煥南平。皆夷漫滌蕩。亡其處而有其名。爾乃階長樂。登未央。汎太液。凌建章。縈駊娑而欵駘盪。轥枍詣而轢承光。徘徊桂宮。惆悵柏梁。鷩雉鴝於臺陂。狐兎窟於殿傍。何黍苗之離離。而余思之芒芒。洪鐘頓於毀廟。乘風廢而弗縣。禁省鞠爲茂草。金狄遷於霸川。懷夫蕭曹魏邴之相。辛李衞霍之將。銜使則蘇屬國。震遠則張博望。教敷而彝倫敘。兵擧而皇威暢。臨危而智勇奮。投命而高節亮。暨乎秺侯之忠孝淳深。陸賈之優游宴喜。長卿淵雲之文。子長政駿之史。趙張三王之尹京。定國釋之之聽理。汲長孺

之正直。鄭當時之推士。終童山東之英妙。賈生洛陽之才子。飛翠緌。拖鳴玉。以出入禁門者衆矣。或被髮左衽。奮迅泥滓。或從容傅會。望表知裏。或著勳績而嬰時戮。或有大才而無貴仕。皆揚清風於上列。垂令聞而不已。想珮聲之遺響。若鏗鏘之在耳。當音鳳恭顯之任勢也。乃熏灼四方。震燿都鄙。而死之日。曾不得與夫十餘公之徒隸齒。名才難不其然乎。望漸臺而扼腕。梟巨猾而餘怒。揖不疑於北闕。軾樗里於武庫。酒池鑒於商辛。追覆車而不寤。曲陽僭於白虎。化奢淫而無度。命有始而必終。孰長生而久視。武雄略其焉在。近惑文成而溺五利。侔造化以制作。窮山海之奧祕。靈若翔於神島。奔鯨浪而失水。曝鱗骼於漫沙。隕明月以雙墜。擢仙掌以承露。干雲漢而上至。致邛蒟其奚難。惟余欲而是恣。縱逸遊於角觝。絡甲乙以珠翠。忍生民之減半。勒東岳以虛美。超長懷以遐念。若循環之無賜。較面朝之煥炳。次後庭之猗靡。壯當熊之忠勇。深辭輦之明智。衛鬒髮以光鑒。趙輕體之纖麗。咸善立而聲流。亦寵極而禍侈。津便門以右轉。究吾境之所暨。掩細柳而撫劍。快孝文之命帥。周受命以忘身。明戎政之果毅。距華蓋於壘和。案乘輿之尊轡。肅天威之臨顏。率軍禮以長揖。輕棘霸之兒戲。重條侯之倨貴。索杜郵其焉在。云孝里之前號。惘輟駕而容與。哀武安以興悼。爭伐趙以徇國。定廟算之勝負。扞矢言而不納。反推怨以歸咎。未十里於還路。尋賜劍以刎首。嗟主闇而臣嫉。禍於何而不有。窺秦墟於渭城。冀闕緬其堙盡。覓陛殿之餘基。裁岥岮以隱嶙。想趙使之抱璧。瀏睨楹以抗憤。燕圖窮而荊發。紛絕袖而自引。筑聲厲而高奮。狙潛鉛以脫臏。據天位其若茲。亦狼狽而可愍。簡良人以自輔。謂斯忠而鞅賢。寄苛制於捐灰。矯扶蘇於朔邊。儒林填於坑穽。詩書煬而爲煙。國滅亡以斷後。

身刑轘以啓先。商法焉得以宿。黃犬何可復牽。野蒲變而成脯。苑鹿化以爲馬。假讒逆以天權。鉗衆口而寄坐。兵在頸而顧問。何不早而告我。願黔黎其誰聽。惟請死而獲可。逮子嬰之果決。敢討賊以紓禍。勢土崩而莫振。作降王於路左。蕭收圖以相劉。料險易與衆寡。羽天與而弗取。冠沐猴而縱火。貫三光而洞九泉。曾未足以喩其高下也。感市閭之菆井。歎尸韓之舊處。蒸屬號而守闕。人百身以納贖。豈生命之易投。誠惠愛之洽著。訐望之以求直。亦余心之所惡。思夫人之政術。實幹時之良具。苟明法以釋憾。不愛才以成務。弘大體以高貴。非所望於蕭傅。造長山而慷慨。偉龍顏之英主。胷中豁其洞開。羣善湊而必舉。存威格乎天區。亡墳掘而莫禦。臨掩坎而累抃。步毀垣以延佇。越安陵而無譏。諒惠聲之寂寞。弔爰絲之正義。伏梁劍於東郭。訊景皇於陽丘。奚信譖而矜謔。隕吳嗣於局下。蓋發怒於一博。成七國之稱亂。翻助逆以誅錯。恨過聽而無討。茲沮善而勸惡。呰孝元於渭塋。執奄尹以明貶。褒夫君之善行。廢園邑以崇儉。過延門而責成。忠何辜而爲戮。陷社稷之王章。俾幽死而莫鞠。忲淫嬖之凶忍。勦皇統之孕育。張舅氏之姧漸。貽漢宗以傾覆。刺哀主於義域。僭天爵於高安。欲法堯而承羞。永終古而不刊。瞰康園之孤墳。悲平后之專絜。殃厥父之篡逆。蒙漢恥而不雪。激義誠而引決。赴丹爓以明節。投宮火而焦糜。從灰燼而俱滅。鶩橫橋而旋軫。歷敝邑之南垂。門磁石而梁木蘭兮。構阿房之屈奇。疏南山以表闕。倬樊川以激池。役鬼傭其猶否。矧人力之所爲。工徒斵而未息。義兵紛以交馳。宗祧汙而爲沼。豈斯宇之獨隳。由僞新之九廟。誇宗虞而祖黃。驅吁嗟而妖臨。搜佞哀以拜郎。誦六藝以飾姧。焚詩書而面牆。心不則於德義。雖異術而同亡。宗孝宣於樂遊。紹衰緒以中興。不獲事

于敬養。盡加隆於園陵。兆惟奉明。邑號千人。訊諸故老。造自帝詢。隱王母之非命。縱聲樂以娛神。雖靡率於舊典。亦觀過而知仁。憑高望之陽隈。體川陸之汚隆。開襟乎清暑之館。遊目乎五柞之宮。交渠引漕。激湍生風。乃有昆明池乎其中。其池則湯湯汗汗。滉瀁瀰漫。浩如河漢。日月麗天。出入乎東西。旦似暘谷。夕類虞淵。昔豫章之名宇。披玄流而特起。儀景星於天漢。列牛女以雙峙。圖萬載而不傾。奄摧落於十紀。擢百尋之層觀。今數仞之餘址。振鷺于飛。鳧躍鴻漸。乘雲頡頏。隨流澹淡。瀺灂驚波。唼喋菱芡。華蓮爛於綠沼。青蕃蔚乎翠瀲。伊茲池之肇穿。肄水戰於荒服。志勤遠以極武。良無要於後福。而菜蔬芼實。水物惟錯。乃有贍乎原陸。在皇代而物土。故毀之而又復。凡厥寮司。既富而教。咸帥貧惰。同整楫櫂。收罟課獲。引繳舉效。鰥夫有室。愁民以樂。徒觀其鼓枻迴輪。灑釣投罔。垂餌出入。挺叉來往。纖經連白。鳴桹厲響。貫鰓㝈尾。掣三牽兩。於是弛青鯤於網鉅。解頳鯉於黏徽。華魴躍鱗。素鱮揚鬐。雍人縷切。鸞刀若飛。應刃落俎。靃靃霏霏。紅鮮紛其初載。賓旅竦而遲御。既餐服以屬厭。泊恬靜以無欲。迴小人之腹。爲君子之慮。爾乃端策拂茵。彈冠振衣。徘徊酆鎬。如渴如飢。心翹懃以仰止。不加敬而自祗。豈三聖之敢夢。竊十亂之或希。經始靈臺。成之不日。惟酆及鎬。仍京其室。庶人子來。神降之吉。積德延祚。莫貳其一。永惟此邦。云誰之識。越可略聞。而難臻其極。子贏鋤以借父。訓秦法而著色。耕讓畔以間田。沾姬化而生棘。蘇張喜而詐騁。虞芮愧而訟息。由此觀之。士無常俗。而教有定式。上之遷下。猶鈞之埏埴。雖五方雜會。風流溷淆。惰農好利。不昏作勞。密邇獫狁。戎馬生郊。而制者必割。實存操刀。八之升降。隨政隆替。杖信則莫不用情。無欲則賞之不竊。雖智不能理。明不能察。信

此心也。庶免夫戾。如其禮樂。以俟來哲。

文選卷五終

文選卷六

賦己　遊覽　宮殿　江海

登樓賦　王仲宣

登茲樓以四望兮。聊暇日以銷憂。覽斯宇之所處兮。實顯敞而寡仇。挾清漳之通浦兮。倚曲沮之長洲。背墳衍之廣陸兮。臨皐隰之沃流。北彌陶牧。西接昭丘。華實蔽野。黍稷盈疇。雖信美而非吾土兮。曾何足以少留。遭紛濁而遷逝兮。漫踰紀以迄今。情眷眷而懷歸兮。孰憂思之可任。憑軒檻以遙望兮。向北風而開襟。平原遠而極目兮。蔽荊山之高岑。路逶迤而脩迥兮。川既漾而濟深。悲舊鄉之壅隔兮。涕橫墜而弗禁。昔尼父之在陳兮。有歸歟之歎音。鍾儀幽而楚奏兮。莊舃顯而越吟。人情同於懷土兮。豈窮達而異心。惟日月之逾邁兮。俟河清其未極。冀王道之一平兮。假高衢而騁力。懼匏瓜之徒懸兮。畏井渫之莫食。步棲遲以徙倚兮。白日忽其將匿。風蕭瑟而並興兮。天慘慘而無色。獸狂顧以求羣兮。鳥相鳴而舉翼。原野闃其無人兮。征夫行而未息。心悽愴以感發兮。意忉怛而憯惻。循階除而下降兮。氣交憤於胷臆。夜參半而不寐兮。悵盤桓以反側。

遊天台山賦　並序　孫興公

天台山者。蓋山嶽之神秀也。涉海則有方丈蓬萊。登陸則有四明天台。皆玄聖之所遊化。靈仙之所窟宅。夫其峻極之狀。嘉祥之美。窮山海之瓌富。盡人神之壯麗矣。所以不列於五嶽。闕載於常典者。豈不以所立冥奧。其路幽迥。或倒景於重溟。或匿峰於千嶺。始經魑魅之塗。卒踐無人之境。舉世罕能登陟。王者莫由禋祀。故事絕於常篇。名標於奇紀。然圖像之興。豈虛也哉。非夫遺世翫道。絕粒茹芝者。烏能輕舉而宅之。非夫遠寄冥搜。篤信通神者。何肯遙想而存之。余所以馳神運思。晝詠宵興。俛仰之間。若已再升者也。方解纓絡。永託茲嶺。不任吟想之至。聊奮藻以散懷。

太虛遼廓而無閡。運自然之妙有。融而爲川瀆。結而爲山阜。嗟台嶽之所奇挺。寔神明之所扶持。蔭牛宿以曜峯。託靈越以正基。結根彌於華岱。直指高於九疑。應配天於唐典。齊峻極於周詩。邈彼絕域。幽邃窈窕。近智者以守見而不之。之者以路絕而莫曉。哂夏蟲之疑冰。整輕翮而思矯。理無隱而不彰。啓二奇以示兆。赤城霞起以建標。瀑布飛流以界道。覩靈驗而遂徂。忽乎吾之將行。仍羽人於丹丘。尋不死之福庭。苟台嶺之可攀。亦何羨於層城。釋域中之常戀。暢超然之高情。被毛褐之森森。振金策之鈴鈴。披荒榛之蒙蘢。陟峭崿之崢嶸。濟楢溪而直進。落五界而迅征。跨穹隆之懸磴。臨萬丈之絕冥。踐莓苔之滑石。搏壁立之翠屏。攬樛木之長蘿。援葛藟之飛莖。雖一冒於垂堂。乃永存乎長生。必契誠於幽昧。履重險而逾平。既克濟於九折。路威夷而脩通。恣心目之寥朗。任緩步之從容。藉萋萋之纖草。蔭落落之長松。覿翔鸞之裔裔。聽鳴鳳之嗈嗈。過靈溪而一濯。疏煩想於心胸。蕩遺塵於旋流。發五蓋之遊蒙。追羲農之絕軌。躡二老之玄蹤。陟降信宿。迄于仙都。雙闕

雲竦以夾路。瓊臺中天而懸居。朱闕玲瓏於林間。玉堂陰映於高隅。彤雲斐亹以翼櫺。皦日炯晃於綺疏。八桂森挺以凌霜。五芝含秀而晨敷。惠風佇芳於陽林。醴泉涌溜於陰渠。建木滅景於千尋。琪樹璀璨而垂珠。王喬控鶴以冲天。應眞飛錫以躡虛。騁神變之揮霍。忽出有而入無。於是遊覽既周。體靜心閑。害馬已去。世事都捐。投刃皆虛。目牛無全。凝思幽巖。朗詠長川。爾乃羲和亭午。遊氣高褰。法鼓琅以振響。衆香馥以揚烟。肆覲天宗。爰集通仙。挹以玄玉之膏。漱以華池之泉。散以象外之說。暢以無生之篇。悟遣有之不盡。覺涉無之有間。泯色空以合跡。忽即有而得玄。釋二名之同出。消一無於三幡。恣語樂以終日。等寂默於不言。渾萬象以冥觀。兀同體於自然。

蕪城賦

鮑明遠

瀰池平原。南馳蒼梧漲海。北走紫塞鴈門。柂以漕渠。軸以崑岡。重江複關之隩。四會五達之莊。當昔全盛之時。車挂轊。人駕肩。廛閈撲地。歌吹沸天。孳貨鹽田。鏟利銅山。才力雄富。士馬精妍。故能侈秦法。佚周令。劃崇墉。刳濬洫。圖脩世以休命。是以板築雉堞之殷。井幹烽櫓之勤。格高五嶽。袤廣三墳。崪若斷岸。矗似長雲。製磁石以禦衝。糊赬壤以飛文。觀基扃之固護。將萬祀而一君。出入三代。五百餘載。竟瓜剖而豆分。澤葵依井。荒葛罥塗。壇羅虺蜮。階鬬麏鼯。木魅山鬼。野鼠城狐。風嗥雨嘯。昏見晨趨。飢鷹厲吻。寒鴟嚇雛。伏虣藏虎。乳血飱膚。崩榛塞路。崢嶸古馗。白楊早落。塞草前衰。稜稜霜氣。蔌蔌風威。孤蓬自振。驚砂坐飛。灌莽杳而無際。叢薄紛其相依。通池既已夷。峻隅又以頹。直視千里外。唯見起黃埃。

凝思寂聽。心傷已摧。若夫藻扃黼帳。歌堂舞閣之基。璇淵碧樹。弋林釣渚之館。吳蔡齊秦之聲。魚龍爵馬之玩。皆熏歇燼滅。光沈響絕。東都妙姬。南國麗人。蕙心紈質。玉貌絳脣。莫不埋魂幽石。委骨窮塵。豈憶同輦之愉樂。離宮之苦辛哉。天道如何。吞恨者多。抽琴命操。爲蕪城之歌。歌曰。邊風急兮城上寒。井徑滅兮丘隴殘。千齡兮萬代。共盡兮何言。

魯靈光殿賦 竝序

王文考

魯靈光殿者。蓋景帝程姬之子。恭王餘之所立也。初恭王始都下國。好治宮室。遂因魯僖基兆而營焉。遭漢中微。盜賊奔突。自西京未央建章之殿。皆見隳壞。而靈光巋然獨存。意者豈非神明依憑支持。以保漢室者也。然其規矩制度。上應星宿。亦所以永安也。予客自南鄙。觀藝於魯。覩斯而眙曰。嗟乎詩人之興。感物而作。故奚斯頌僖。歌其路寢。而功績存乎辭。德音昭乎聲。物以賦顯。事以頌宣。匪賦匪頌。將何述焉。遂作賦曰。

粵若稽古。帝漢祖宗。濬哲欽明。殷五代之純熙。紹伊唐之炎精。荷天衢以元亨。廓宇宙而作京。敷皇極以創業。協神道而大寧。於是百姓昭明。九族敦序。乃命孝孫。俾侯于魯。錫介珪以作瑞。宅附庸而開宇。乃立靈光之秘殿。配紫微而爲輔。承明堂於少陽。昭列顯於奎之分野。瞻彼靈光之爲狀也。則嵯峨嶵嵬。峗巍𡾊嵲。吁可畏乎。其駭人也。迢嶢倜儻。豐麗博敞。洞轇轕兮。其無垠也。邈希世而特出。羌瓌譎而鴻紛。屹山峙以紆鬱。隆崛岉乎青雲。鬱坱圠以嶒峵。崱繒綾而龍鱗。汩磑磑以璀璨。赫燡燡而燭坤。狀若積石之鏘鏘。又似乎帝室之威神。崇墉岡連以嶺屬。朱闕巖巖而雙立。高門擬于閶闔。方二軌而竝入。於是乎

乃歷夫太階。以造其堂。俯仰顧眄。東西周章。彤彩之飾。徒何爲乎。澔澔涆涆。流離爛漫。皓壁暠曜以月照。丹柱歙赩而電烻。霞駮雲蔚。若陰若陽。瀖濩燐亂。煒煒煌煌。隱陰夏以中處。霐寥窲以崢嶸。鴻爌炾以爣閬。飋蕭條而清泠。動滴瀝以成響。殷雷應其若驚。耳嘈嘈以失聽。目矎矎而喪精。駢密石與琅玕。齊玉璫與璧英。遂排金扉而北入。宵藹藹而晻曖。旋室㛹娟以窈窕。洞房叫窱而幽邃。西廂踟蹰以閑宴。東序重深而奧祕。屹鏗瞑以勿罔。屑黶翳以懿濞。魂悚悚其驚斯。心猥猥而發悸。於是詳察其棟宇。觀其結構。規矩應天。上憲觜陬。倔佹雲起。嶔崟離樓。三間四表。八維九隅。萬楹叢倚。磊砢相扶。浮柱岧嵽以星懸。漂嶢峴而枝柱。飛梁偃蹇以虹指。揭蘧蘧而騰湊。層櫨磥佹以岌峩。曲枅要紹而環勾。芝栭攢羅以戢孴。枝掌杈枒而斜據。傍夭蟜以横出。互黝糾而搏負。下岪蔚以璀錯。上崎嶬而重注。捷獵鱗集。支離分赴。縱横駱驛。各有所趣。爾乃懸棟結阿。天窓綺踈。圓淵方井。反植荷蕖。發秀吐榮。菡萏披敷。綠房紫菂。窋咤垂珠。雲楶藻棁。龍桷彫鏤。飛禽走獸。因木生姿。奔虎攫挐以梁倚。仡奮舋而軒鬐。虬龍騰驤以蜿蟺。頷若動而躨跜。朱鳥舒翼以峙衡。騰虵蟉虯而遶榱。白鹿孑蜺於欂櫨。蟠螭宛轉而承楣。狡兎跧伏於柎側。猨狖攀椽而相追。玄熊蚺蜷以齗齗。却負載而蹲跠。齊首目以瞪眄。徒眽眽而狋狋。胡人遙集於上楹。儼雅跽而相對。仡欺猥以鵰䀯。顣顤顟而睽睢。狀若悲愁於危處。憯嚬蹙而含悴。神仙岳岳於棟間。玉女闚窓而下視。忽瞟眇以響像。若鬼神之髣髴。圖畫天地。品類羣生。雜物奇怪。山神海靈。寫載其狀。託之丹青。千變萬化。事各繆形。隨色象類。曲得其情。上紀開闢。遂古之初。五龍比翼。人皇九頭。伏羲鱗身。女媧蛇軀。鴻荒樸略。厥狀睢盱。煥炳可觀。黃帝唐虞。軒

晃以庸。衣裳有殊。下及三后。婬妃亂主。忠臣孝子。烈士貞女。賢愚成敗。靡不載敘。惡以誡世。善以示後。於是乎連閣承宮。馳道周環。陽榭外望。高樓飛觀。長途升降。軒檻曼延。漸臺臨池。層曲九成。屹然特立。的爾殊形。高徑華蓋。仰看天庭。飛陛揭孽。緣雲上征。中坐垂景。頫視流星。千門相似。萬戶如一。巖突洞出。逶迤詰屈。周行數里。仰不見日。何宏麗之靡靡。咨用力之妙勤。非夫通神之俊才。誰能剋成乎此勳。據坤靈之寶勢。承蒼昊之純殷。包陰陽之變化。含元氣之烟熅。玄醴騰涌於陰溝。甘露被宇而下臻。朱桂黝儵於南北。蘭芝阿那於東西。祥風翕習以颯灑。激芳香而常芬。神靈扶其棟宇。歷千載而彌堅。永安寧以祉福。長與大漢而久存。實至尊之所御。保延壽而宜子孫。苟可貴其若斯。孰亦有云而不珍。

亂曰。彤彤靈宮。巋嶵穹崇。紛厖鴻兮。崱屴嵫釐。岑崟崔嵬。駢巃嵸兮。連拳偃蹇。崙菌踡嵼。傍欹傾兮。歇欻幽靄。雲覆霮䨴。洞杳冥兮。葱翠紫蔚。礧碨瑰瑋。含光晷兮。窮奇極妙。棟宇已來。未之有兮。神之營之。瑞我漢室。永不朽兮。

景福殿賦　　何平叔

大哉惟魏。世有哲聖。武創元基。文集大命。皆體天作制。順時立政。至于帝皇。遂重熙而累盛。遠則襲陰陽之自然。近則本人物之至情。上則崇稽古之弘道。下則闡長世之善經。庶事既康。天秩孔明。故載祀二三。而國富刑淸。歲三月。東巡狩。至于許昌。望祠山川。考時度方。存問高年。率民耕桑。越六月既望。林鍾紀律。大火昏正。桑梓繁蕪。大雨時行。三事九司。宏儒碩生。感乎溽暑之伊鬱。而慮性命之所平。惟岷越之不靜。寤征行之未寧。乃昌言曰。

昔在蕭公。暨于孫卿。皆先識博覽。明允篤誠。莫不以爲不壯不麗。不足以一民而重威靈。不飾不美。不足以訓後而示厥成。故當時享其功利。後世賴其英聲。且許昌者。乃大運之攸戾。圖讖之所旌。苟德義其如斯。夫何宮室之勿營。帝曰。俞哉。玄輅既駕。輕裘斯御。乃命有司。禮儀是具。審量日力。詳度費務。鳩經始之黎民。輯農功之暇豫。因東師之獻捷。就海孽之賄賂。立景福之祕殿。備皇居之制度。爾乃豐層覆之耽耽。建高基之堂堂。羅疏柱之汩越。肅坻鄂之鏘鏘。飛櫚翼以軒翥。反宇巘以高驤。流羽毛之葳蕤。垂環玭之琳琅。參旗九旒。從風飄揚。皓皓旰旰。丹彩煌煌。故其華表。則鎬鎬鑠鑠。赫奕章灼。若日月之麗天也。其奧祕。則蘙蔽曖昧。髣髴退概。若幽星之纚連也。既櫛比而攢集。又宏璉以豐敞。兼苞博落。不常一象。遠而望之。若摛朱霞而耀天文。迫而察之。若仰崇山而戴垂雲。瑳瓌瑋以壯麗。紛彧彧其難分。此其大較也。若乃高甍崔嵬。飛宇承霓。緜蠻黮䨴。隨雲融泄。鳥企山峙。若翔若滯。峨峨嶫嶫。罔識所屆。雖離朱之至精。猶眩曜而不能昭晰也。爾乃開南端之豁達。張筍虡之輪豳。華鐘杌其高懸。悍獸仡以儷陳。體洪剛之猛毅。聲訇磤其若震。爰有遐狄。鐐質輪菌。坐高門之側堂。彰聖主之威神。芸若充庭。槐楓被宸。綴以萬年。綷以紫榛。或以嘉名取寵。或以美材見珍。結實商秋。敷華青春。藹藹萋萋。馥馥芬芬。爾其結構。則脩梁彩制。下褰上奇。桁梧複疊。勢合形離。赩如宛虹。赫如奔螭。南距陽榮。北極幽崖。任重道遠。厥庸孔多。於是列髹彤之繡桷。垂琬琰之文璫。蝹若神龍之登降。灼若明月之流光。爰有禁楄。勒分翼張。承以陽馬。接以圓方。斑間賦白。疏密有章。飛枊鳥踊。雙轅是荷。赴險凌虛、獵捷相和。皎皎白間。離離列錢。晃光內照。流景外烻。烈若鉤星在漢。渙若雲梁承天。騈徙

增錯。轉縣成郛。茄蔤倒植。吐被芙蕖。繚以藻井。編以綷疏。紅葩䩤韘。丹綺離婁。菌茖紼翁。
纖縟紛敷。繁飾累巧。不可勝書。於是蘭栭積重。窶數矩設。櫼櫨各落以相承。欒栱夭蟜而
交結。金楹齊列。玉舄承跋。青瑣銀鋪。是爲閨闥。雙枚既脩。重桴乃飾。櫋梠緣邊。周流四極。
侯衛之班。藩服之職。温房承其東序。涼室處其西偏。開建陽則朱炎豔。啓金光則清風臻。
故冬不淒寒。夏無炎燀。鈞調中適。可以永年。墉垣碭基。其光昭昭。周制白盛。今也維縹。落
帶金釭。此焉二等。明珠翠羽。往往而在。欽先王之允塞。悅重華之無爲。命共工使作績。明
五采之彰施。圖象古昔。以當箴規。椒房之列。是准是儀。觀虞姬之容止。知治國之佞臣。見
姜后之解珮。寤前世之所遵。賢鍾離之讜言。懿楚樊之退身。嘉班妾之辭輦。偉孟母之擇
鄰。故將廣智。必先多聞。多聞多雜。多雜眩眞。不眩焉在。在乎擇人。故將立德。必先近仁。欲
此禮之不諐。是以盡乎行道之先民。朝觀夕覽。何與書紳。若乃階除連延。蕭曼雲征。櫺檻
邳張。鉤錯矩成。楯類騰蛇。槢似瓊英。如螭之蟠。如虯之停。玄軒交登。光藻昭明。騶虞承獻。
素質仁形。彰天瑞之休顯。照遠戎之來庭。陰堂承北。方軒九戶。右个清宴。西東其宇。連以永
寧安昌臨圃。遂及百子。後宮攸處。處之斯何。窈窕淑女。思齊徽音。聿求多祜。其祜伊何。宜
爾子孫。克明克哲。克聰克敏。永錫難老。兆民賴止。於南則有承光前殿。賦政之宮。納賢用
能。詢道求中。疆理宇宙。甄陶國風。雲行雨施。品物咸融。其西則有左墄右平。講肆之場。二
六對陳。殿翼相當。僻脫承便。蓋象戎兵。察解言歸。譬諸政刑。將以行令。豈惟娛情。鎭以崇
臺。是曰永始。複閣重闈。猖狂是俟。京庾之儲。無物不有。不虞之戒。於是焉取。爾乃建凌雲
之層盤。浚虞淵之靈沼。清露瀼瀼。淥水浩浩。樹以嘉木。植以芳草。悠悠玄魚。皠皠白鳥。沈

浮翺翔。樂我皇道。若乃虬龍灌注。溝洫交流。陸設殿館。水方輕舟。篁棲鶤鷺。瀨戲鰋鮋。豐侔淮海。富賑山丘。叢集委積。焉可殫籌。雖咸池之壯觀。夫何足以比讎。於是碣以高昌崇觀。表以建城峻廬。岧嶤岑立。崔嵬巒居。飛閣干雲。浮階乘虛。遙目九野。遠覽長圖。俯看三市。孰有誰無。覩農人之耘耔。亮稼穡之艱難。惟饗年之豐寡。思無逸之所歎。感物衆而思深。因居高而慮危。惟天德之不易。懼世俗之難知。觀器械之良窳。察俗化之誠僞。瞻貴賤之所在。悟政刑之夷陂。亦所以省風助敎。豈惟盤樂而崇侈靡。屯方列署。三十有二。星居宿陳。綺錯鱗比。辛壬癸甲。爲之名秩。房室齊均。堂庭如一。出此入彼。欲反忘術。惟工匠之多端。固萬變之不窮。物無難而不知。乃與造化乎比隆。讐天地以開基。竝列宿而作制。制無細而不協於規景。作無微而不違於水臬。故其增構如積。植木如林。區連域絕。葉比枝分。離背別趣。駢田胥附。縱横踰延。各有攸注。公輸荒其規矩。匠石不知其所斲。既窮巧於規摹。何彩章之未殫。爾乃文以朱綠。飾以碧丹。點以銀黃。爍以琅玕。光明熠爚。文彩璘班。清風萃而成響。朝日曜而增鮮。雖崑崙之靈宮。將何以乎侈旃。規矩既應乎天地。舉措又順乎四時。是以六合元亨。九有雍熙。家懷克讓之風。人詠康哉之詩。莫不優游以自得。故淡泊而無所思。歷列辟而論功。無今日之至治。彼吳蜀之湮滅。固可翹足而待之。然而聖上猶孜孜靡忒。求天下之所以自悟。招忠正之士。開公直之路。想周公之昔戒。慕咎繇之典謨。除無用之官。省生事之故。絕流遁之繁禮。反人情於太素。故能翔岐陽之鳴鳳。納虞氏之白環。蒼龍覿於陂塘。龜書出於河源。醴泉涌於池圃。靈芝生於丘園。總神靈之貺祐。集華夏之至歡。方四三皇而六五帝。曾何周夏之足言。

海賦

木玄虛

昔在帝嬀。臣唐之代。天綱浡潏。爲凋爲瘵。洪濤瀾汗。萬里無際。長波涾㴾。迆延八裔。於是乎禹也。乃鏟臨崖之阜陸。決陂潢而相沷。啓龍門之岝嶺。墾陵巒而嶄鑿。羣山既略。百川潛渫。泱漭澹濘。騰傾赴勢。江河既導。萬穴俱流。掎拔五嶽。竭涸九州。瀝滴滲淫。薈蔚雲霧。涓流泱瀼。莫不來注。於廓靈海。長爲委輸。其爲廣也。其爲怪也。宜其爲大也。爾其爲狀也。則乃浟湙瀲灩。浮天無岸。浺瀜沆瀁。渺瀰湠漫。波如連山。乍合乍散。噓噏百川。洗滌淮漢。襄陵廣舄。𩗗㶁浩汗。若乃大明擿轡於金樞之穴。翔陽逸駭於扶桑之津。彯沙礐石。蕩䬞島濱。於是鼓怒。溢浪揚浮。更相觸搏。飛沫起濤。狀如天輪。膠戾而激轉。又似地軸。挺拔而爭迴。岑嶺飛騰而反覆。五岳鼓舞而相磓。㵸濆淪而滀漯。鬱沏迭而隆頹。盤盓激而成窟。㴔濼而爲魁。潤泊柏而迆颺。磊匌匌而相豗。驚浪雷奔。駭水迸集。開合解會。瀼瀼濕濕。葩華踧沑。頩濘潗㵫。若乃霾曀潛銷。莫振莫竦。輕塵不飛。纖蘿不動。猶尚呀呷。餘波獨湧。澎濞灪磙。碨磊山壟。爾其枝岐潭瀹。渤蕩成汜。乖蠻隔夷。迴互萬里。若乃偏荒速告。王命急宣。飛駿鼓楫。汎海淩山。於是候勁風。揭百尺。維長綃。挂帆席。望濤遠決。冏然鳥逝。鷸如驚鳧之失侶。倏如六龍之所掣。一越三千。不終朝而濟所屆。若其負穢臨深。虛誓愆祈。則有海童邀路。馬銜當蹊。天吳乍見而髣髴。蝄像暫曉而閃屍。羣妖遘迕。眇䁥冶夷。決帆摧橦。戕風起惡。廓如靈變。惚怳幽暮。氣似天霄。靉靆雲布。𩆓昱絕電。百色妖露。呵歘掩鬱。矆睒無度。飛澇相磢。激勢相沏。崩雲屑雨。浤浤汩汩。踔踔湁𤀹。沸潰渝溢。瀖泋濩渭。蕩雲沃日。

於是舟人漁子。徂南極東。或屑沒於黿鼉之穴。或挂罥於岑敖之峰。或掣掣洩洩於裸人之國。或汎汎悠悠於黑齒之邦。或乃萍流而浮轉。或因歸風以自反。徒識觀怪之多駭。乃不悟所歷之近遠。爾其大量也。則南澰朱崖。北灑天墟。東演析木。西薄青徐。經途瀴溟。萬萬有餘。吐雲霓。含龍魚。隱鯤鱗。潛靈居。豈徒積太顛之寶貝。與隨侯之明珠。將世之所收者常聞。所未名者若無。且希世之所聞。惡審其名。故可仿像其色。靉靆其形。爾其水府之內。極深之庭。則有崇島巨鼇。峌峴孤亭。擘洪波。指太清。竭磐石。栖百靈。颺凱風而南逝。廣莫至而北征。其垠則有天琛水怪。鮫人之室。瑕石詭暉。鱗甲異質。若乃雲錦散文於沙汭之際。綾羅被光於螺蚌之節。繁采揚華。萬色隱鮮。陽冰不冶。陰火潛然。熺炭重燔。吹烱九泉。朱燉綠煙。腰眇蟬蜎。魚則橫海之鯨。突杌孤遊。戛巖嶅。偃高濤。茹鱗甲。吞龍舟。噏波則洪連踧蹜。吹澇則百川倒流。或乃蹭蹬窮波。陸死鹽田。巨鱗插雲。鬐鬣刺天。顱骨成嶽。流膏為淵。若乃巖坻之隈。沙石之嶔。毛翼產鷇。剖卵成禽。鳧雛離褷。鶴子淋滲。羣飛侶浴。戲廣浮深。翔霧連軒。洩洩淫淫。翻動成雷。擾翰為林。更相叫嘯。詭色殊音。若乃三光既清。天地融朗。不汎陽侯。乘蹻絕往。覿安期於蓬萊。見喬山之帝像。羣仙縹眇。餐玉清涯。履阜鄉之留舄。被羽翮之襂纚。翔天沼。戲窮溟。甄有形於無欲。永悠悠以長生。且其為器也。包乾之奧。括坤之區。惟神是宅。亦祇是廬。何奇不有。何怪不儲。茫茫積流。含形內虛。曠哉坎德。卑以自居。弘往納來。以宗以都。品物類生。何有何無。

江賦

郭景純

咨五才之並用。寔水德之靈長。惟岷山之導江。初發源乎濫觴。聿經始於洛沫。攏萬川乎巴梁。衝巫峽以迅激。躋江津而起漲。極泓量而海運。狀滔天以淼茫。總括漢泗。兼包淮湘。并吞沅澧。汲引沮漳。源二分於崌崍。流九派乎潯陽。鼓洪濤於赤岸。淪餘波乎柴桑。綱絡羣流。商推涓澮。表神委於江都。混流宗而東會。注五湖以漫漭。灌三江而溯沛。滈汗六州之域。經營炎景之外。所以作限於華裔。壯天地之嶮介。呼吸萬里。吐納靈潮。自然往復。或夕或朝。激逸勢以前驅。乃鼓怒而作濤。峨嵋爲泉陽之揭。玉壘作東別之標。衡霍磊落以連鎮。巫廬嵬崫而比嶠。協靈通氣。濆薄相陶。流風蒸雷。騰虹揚霄。出信陽而長邁。淙大壑與沃焦。若乃巴東之峽。夏后疏鑿。絕岸萬丈。壁立赮駮。虎牙嵥豎以屹崒。荊門闕竦而磐礴。圓淵九迴以懸騰。湓流雷呴而電激。駭浪暴灑。驚波飛薄。迅澓增澆。涌湍疊躍。砯巖鼓作。漰湱㶁灂。㴸潗㶁漷。潰濩泧漷。潏湟㴔泱。瀖潤瀾淪。漩澴滎瀯。㵳漏濆瀑。溭減濜瀆。龍鱗結絡。碧沙瀢㶁而往來。巨石硉矹以前却。潛演之所汩淈。奔溜之所磢錯。厓隒爲之泐嵃。碕嶺爲之嵒崿。幽澗積岨。礐硞㠑確。若乃曾潭之府。靈湖之淵。澄澹汪洸。瀇滉囦泫。泓汯洞澋。涒鄰𤁣潾。混澣灦渙。流映揚焮。溟漭渺湎。汗汗沺沺。察之無象。尋之無邊。氣滃浡以霧杳。時鬱律其如煙。類胚渾之未凝。象太極之構天。長波浹渫。峻湍崔嵬。盤渦谷轉。凌濤山頹。陽侯砐硪以岸起。洪瀾涴演而雲迴。峾淪溛瀤。乍浥乍堆。豃如地裂。豁若天開。觸曲厓以縈繞。駭崩浪而相礧。鼓𡿺窟以漰渤。乃湓涌而駕隈。魚則江豚海狶。叔鮪王鱣。䱀鰊鰶鮋。鯪鰩鯩鰱。或鹿觡象鼻。或虎狀龍顏。鱗甲鏙錯。煥爛錦斑。揚鬐掉尾。噴浪飛唌。排流呼哈。隨波遊延。或爆采以晃淵。或嚇鰓乎巖間。介鯨乘濤以出入。鯼鮆順時而往還。爾其

水物怪錯。則有潛鵠魚牛。虎蛟鉤虵。蜦蟳鼈蝟。鱝鼅鼊鼉。玉珧海月。土肉石華。三蝬虾江。鸚螺蜁蝸。璅蛣腹蟹。水母目蝦。紫蚢如渠。洪蚶專車。瓊蚌晞曜以瑩珠。石蚨應節而揚葩。蜛蝫森衰以垂翹。玄蠣磈磥而碨碾。或泛瀲於潮波。或混淪乎泥沙。若乃龍鯉一角。奇鶬九頭。有鼈三足。有龜六眸。赬蟞胏躍而吐璣。文魮磬鳴以孕璆。偹蠕拂翼而掣耀。神蜧蝹蜦以沈遊。騬馬騰波以噓蹀。水兕雷咆乎陽侯。淵客築室於巖底。鮫人構館於懸流。雹布餘糧。星離沙鏡。青綸競糾。縟組爭映。紫菜熒曄以叢被。綠苔鬖髿乎研上。石帆蒙籠以蓋嶼。蘋實時出而漂泳。其下則金礦丹礫。雲精爥銀。瑊玏璿瑰。水碧潛琘。鳴石列於陽渚。浮磬肆乎陰濱。或頳彩輕漣。或焆曜涯鄰。林無不溽。岸無不津。其羽族也。則有晨鵠天雞。鴐鵞鶬䳲。陽鳥爰翔。于以玄月。千類萬聲。自相喧聒。濯翮疏風。鼓翅䎐翽。揮弄灑珠。拊拂瀑沫。集若霞布。散如雲豁。產毻積羽。往來勃碣。橉杞稹薄於潯涘。栛櫨森嶺而羅峰。桃枝篔簹。實繁有叢。葭蒲雲蔓。𦸈以蘭紅。揚皜毦。擢紫茸。蔭潭隩。被長江。繁蔚芳蘺。隱藹水松。涯灌芊萰。潛薈葱蘢。鯪鯥踦驅於垠隩。獱獺睒瞲乎厱空。迅蜼臨虛以騁巧。孤玃登危而雍容。夔牯翹踛於夕陽。鴛雛弄翮乎山東。因岐成渚。觸澗開渠。漱壑生浦。區別作湖。磴之以瀠瀷。渫之以尾閭。標之以翠翳。泛之以遊菰。播匪蓺之芒種。挺自然之嘉蔬。鱗被菱荷。欑布水蓏。翹莖瀵蘂。濯穎散裹。隨風猗萎。與波潭淹。流光潛映。景炎霞火。其旁則有雲夢雷池。彭蠡青草。具區洮滆。朱滻丹漅。極望數百。沆瀁皛溔。爰有包山洞庭。巴陵地道。潛逵旁通。幽岫窈窕。金精玉英瑱其裏。瑤珠怪石琗其表。驪虯摎其址。梢雲冠其嶕。海童之所巡遊。琴高之所靈矯。冰夷倚浪以傲睨。江妃含頻而矊眇。撫凌波而鳧躍。吸翠霞而夭矯。若

乃宇宙澄寂。八風不翔。舟子於是搦棹。涉人於是檥榜。漂飛雲。運艅艎。舳艫相屬。萬里連檣。泝洄沿流。或漁或商。赴交益。投幽浪。竭南極。窮東荒。爾乃䕺霧祲於清旭。覘五兩之動靜。長風颹以增扇。廣莫颺而氣整。徐而不㦆。疾而不猛。鼓帆迅越。趠漲截泂。凌波縱柂。電往杳溟。㸌如晨霞孤征。眇若雲翼絕嶺。倏忽數百。千里俄頃。飛廉無以睎其蹤。渠黃不能企其景。於是蘆人漁子。擯落江山。衣則羽褐。食惟蔬鱻。栫澱爲涔。夾潨羅筌。筩灑連鋒。罾䍡比船。或揮輪於懸碕。或中瀨而橫旋。忽忘夕而宵歸。詠采菱以叩舷。傲自足於一嘔。尋風波以窮年。爾乃域之以盤巖。豁之以洞壑。疏之以沲汜。鼓之以朝夕。川流之所歸湊。雲霧之所蒸液。珍怪之所化產。傀奇之所窟宅。納隱淪之列眞。挺異人乎精魄。播靈潤於千里。越岱宗之觸石。及其譎變倏怳。符祥非一。動應無方。感事而出。經紀天地。錯綜人術。妙不可盡之於言。事不可窮之於筆。若乃岷精垂曜於東井。陽侯遁形乎大波。奇相得道而宅神。乃協靈爽於湘娥。駭黃龍之負舟。識伯禹之仰嗟。壯荊飛之擒蛟。終成氣乎太阿。悍要離之圖慶。在中流而推戈。悲靈均之任石。歎漁父之櫂歌。想周穆之濟師。驅八駿於黿鼉。感交甫之喪珮。愍神使之嬰羅。煥大塊之流形。混萬盡於一科。保不虧而永固。稟元氣於靈和。考川瀆而妙觀。實莫著於江河。

文選卷六終

文選卷七

賦庚　物色　鳥獸　志上

風賦　宋玉

楚襄王遊於蘭臺之宮。宋玉景差侍。有風颯然而至。王乃披襟而當之曰。快哉此風。寡人所與庶人共者邪。宋玉對曰。此獨大王之風耳。庶人安得而共之。王曰。夫風者天地之氣。溥暢而至。不擇貴賤高下而加焉。今子獨以爲寡人之風。豈有說乎。宋玉對曰。臣聞於師。枳句來巢。空穴來風。其所託者然。則風氣殊焉。王曰。夫風始安生哉。宋玉對曰。夫風生於地。起於青蘋之末。侵淫谿谷。盛怒於土囊之口。緣太山之阿。舞於松柏之下。飄忽淜滂。激颺熛怒。耾耾雷聲。迴穴錯迕。蹷石伐木。梢殺林莽。至其將衰也。被麗披離。衝孔動楗。眴渙粲爛。離散轉移。故其清涼雄風。則飄舉升降。乘凌高城。入于深宮。邸華葉而振氣。徘徊於桂椒之間。翺翔於激水之上。將擊芙蓉之精。獵蕙草。離秦蘅。槩新夷。被荑楊。迴穴衝陵。蕭條衆芳。然後倘佯中庭。北上玉堂。躋于羅帷。經于洞房。迺得爲大王之風也。故其風中人。狀直憯悽惏慄。清涼增欷。清清泠泠。愈病析酲。發明耳目。寧體便人。此所謂大王之雄風也。王曰。善哉論事。夫庶人之風。豈可聞乎。宋玉對曰。夫庶人之風。塕然起於窮巷之間。堀堁揚塵。勃鬱煩冤。衝孔襲門。動沙堁。吹死灰。駭溷濁。揚腐餘。邪薄入甕牖。至於室廬。故其

風中人。狀直憞溷鬱邑。毆溫致溼。中心慘怛。生病造熱。中脣爲胗。得目爲𥈭。啗齰嗽獲。死生不卒。此所謂庶人之雌風也。

秋興賦 並序　潘安仁

晉十有四年。余春秋三十有二。始見二毛。以太尉掾。兼虎賁中郎將。寓直于散騎之省。高閣連雲。陽景罕曜。珥蟬冕而襲紈綺之士。此焉遊處。僕野人也。偃息不過茅屋茂林之下。談話不過農夫田父之客。攝官承乏。猥廁朝列。夙興晏寢。匪遑底寧。譬猶池魚籠鳥。有江湖山藪之思。於是染翰操紙。慨然而賦。于時秋也。故以秋興命篇。其辭曰。

四運忽其代序兮。萬物紛以迴薄。覽花蒔之時育兮。察盛衰之所託。感冬索而春敷兮。嗟夏茂而秋落。雖末士之榮悴兮。伊人情之美惡。善乎宋玉之言曰。悲哉秋之爲氣也。蕭瑟兮。草木搖落而變衰。憀慄兮。若在遠行。登山臨水送將歸。夫送歸懷慕徒之戀兮。遠行有羇旅之憤。臨川感流以歎逝兮。登山懷遠而悼近。彼四慼之疚心兮。遭一塗而難忍。嗟秋日之可哀兮。諒無愁而不盡。野有歸燕。隰有翔隼。游氛朝興。槁葉夕隕。於是乃屏輕箑。釋纖絺。藉莞蒻。御袷衣。庭樹槭以灑落兮。勁風戾而吹帷。蟬嘒嘒以寒吟兮。鴈飄飄而南飛。天晃朗以彌高兮。日悠陽而浸微。何微陽之短晷。覺涼夜之方永。月朣朧以含光兮。露淒清以凝冷。熠燿粲於階闥兮。蟋蟀鳴乎軒屏。聽離鴻之晨吟兮。望流火之餘景。宵耿介而不寐兮。獨展轉於華省。悟時歲之遒盡兮。慨俛首而自省。斑鬢彪以承弁兮。素髮颯以垂領。仰羣儁之逸軌兮。攀雲漢以遊騁。登春臺之熙熙兮。珥金貂之炯炯。苟趣舍之殊途兮。庸詎

識其躁靜。聞至人之休風兮。齊天地於一指。彼知安而忘危兮。固出生而入死。行投趾於容跡兮。殆不踐而獲底。闕側足以及泉兮。雖猴猨而不履。龜祀骨於宗祧兮。思反身於綠水。且斂衽以歸來兮。忽投紱以高厲。耕東皐之沃壤兮。輸黍稷之餘稅。泉涌湍於石間兮。菊揚芳乎崖澨。澡秋水之涓涓兮。玩游儵之潎潎。逍遙乎山川之阿。放曠乎人間之世。優哉游哉。聊以卒歲。

雪賦　謝惠連

歲將暮。時既昏。寒風積。愁雲繁。梁王不悅。遊於兎園。乃置旨酒。命賓友。召鄒生。延枚叟。相如末至。居客之右。俄而微霰零。密雪下。王乃歌北風於衞詩。詠南山於周雅。授簡於司馬大夫曰。抽子秘思。騁子妍辭。侔色揣稱。爲寡人賦之。相如於是避席而起。逡巡而揖曰。臣聞雪宮建於東國。雪山峙於西域。岐昌發詠於來思。姬滿申歌於黃竹。曹風以麻衣比色。楚謠以幽蘭儷曲。盈尺則呈瑞於豐年。袤丈則表沴於陰德。雪之時義遠矣哉。請言其始。若乃玄律窮。嚴氣升。焦溪涸。湯谷凝。火井滅。溫泉冰。沸潭無涌。炎風不興。北戶墐扉。裸壤垂繒。於是河海生雲。朔漠飛沙。連氛累靄。掩日韜霞。霰淅瀝而先集。雪紛糅而遂多。其爲狀也。散漫交錯。氛氳蕭索。藹藹浮浮。瀌瀌奕奕。聯翩飛灑。徘徊委積。始緣甍而冒棟。終開簾而入隙。初便娟於墀廡。末縈盈於帷席。既因方而爲珪。亦遇圓而成璧。眄隰則萬頃同縞。瞻山則千巖俱白。於是臺如重璧。逵似連璐。庭列瑤階。林挺瓊樹。皓鶴奪鮮。白鷴失素。紈袖慙冶。玉顏掩嫮。若乃積素未虧。白日朝鮮。爛兮若燭龍。銜燿照崑山。爾其流滴垂冰。

緣霤承隅。粲兮若馮夷剖蚌列明珠。至夫繽紛繁騖之貌。皓汗曒潔之儀。迴散縈積之勢。飛聚凝曜之奇。固展轉而無窮。嗟難得而備知。若乃申娛玩之無已。夜幽靜而多懷。風觸楹而轉響。月承幌而通暉。酌湘吳之醇酎。御狐貉之兼衣。對庭鵾之雙舞。瞻雲鴈之孤飛。折園中之萱草。摘階上之芳薇。踐霜雪之交積。憐枝葉之相違。馳遙思於千里。願接手而同歸。鄒陽聞之。懣然心服。有懷妍唱。敬接末曲。於是乃作而賦積雪之歌。歌曰。攜佳人兮披重幄。援綺衾兮坐芳縟。燎薰爐兮炳明燭。酌桂酒兮揚清曲。又續而爲白雪之歌。歌曰。曲既揚兮酒既陳。朱顏酡兮思自親。願低帷以昵枕。念解珮而褫紳。怨年歲之易暮。傷後會之無因。君寧見階上之白雪。豈鮮耀於陽春。歌卒。王乃尋繹吟翫。撫覽扼腕。顧謂枚叔。起而爲亂。亂曰。白羽雖白。質以輕兮。白玉雖白。空守貞兮。未若茲雪。因時興滅。玄陰凝不昧其潔。太陽曜不固其節。節豈我名。潔豈我貞。憑雲升降。從風飄零。值物賦象。任地班形。素因遇立。汙隨染成。縱心皓然。何慮何營。

月賦　謝希逸

陳王初喪應劉。端憂多暇。綠苔生閣。芳塵凝榭。悄焉疚懷。不怡中夜。乃清蘭路。肅桂苑。騰吹寒山。弭蓋秋坂。臨濬壑而怨遙。登崇岫而傷遠。于時斜漢左界。北陸南躔。白露曖空。素月流天。沈吟齊章。殷勤陳篇。抽毫進牘。以命仲宣。仲宣跪而稱曰。臣東鄙幽介。長自丘樊。昧道懵學。孤奉明恩。臣聞沈潛既義。高明既經。日以陽德。月以陰靈。擅扶光於東沼。嗣若英於西冥。引玄兎於帝臺。集素娥於后庭。朒朓警闕。朏魄示沖。順辰通燭。從星澤風。增華

台室。揚彩軒宮。委照而吳業昌。淪精而漢道融。若夫氣霽地表。雲斂天末。洞庭始波。木葉微脫。菊散芳於山椒。鴈流哀於江瀨。升淸質之悠悠。降澄暉之藹藹。列宿掩縟。長河韜映。柔祇雪凝。圓靈水鏡。連觀霜縞。周除冰淨。君王乃厭晨歡。樂宵宴。收妙舞。弛淸縣。去燭房。卽月殿。芳酒登。鳴琴薦。若乃涼夜自淒。風篁成韻。親懿莫從。羇孤遞進。聆皐禽之夕聞。聽朔管之秋引。於是絃桐練響。音容選和。徘徊房露。惆悵陽阿。聲林虛籟。淪池滅波。情紆軫其何託。愬皓月而長歌。歌曰。美人邁兮音塵闕。隔千里兮共明月。臨風歎兮將焉歇。川路長兮不可越。歌響未終。餘景就畢。滿堂變容。迴遑如失。又稱歌曰。月既沒兮露欲晞。歲方晏兮無與歸。佳期可以還。微霜霑人衣。陳王曰善。乃命執事。獻壽羞璧。敬佩玉音。復之無斁。

鵩鳥賦 並序

賈誼

誼爲長沙王傅。三年有鵩鳥。飛入誼舍。止於坐隅。鵩似鴞不祥鳥也。誼既以謫居長沙。長沙卑濕。誼自傷悼。以爲壽不得長。乃爲賦以自廣。其辭曰。

單閼之歲兮。四月孟夏庚子。日斜兮。鵩集余舍。止于坐隅兮。貌甚閑暇。異物來萃兮。私怪其故。發書占之兮。讖言其度。曰。野鳥入室。主人將去。請問于鵩。余去何之。吉乎告我。凶言其災。淹速之度兮。語余其期。鵩迺歎息。擧首奮翼。口不能言。請對以臆。曰。萬物變化兮。固無休息。斡流而遷兮。或推而還。形氣轉續兮。變化而嬗。沕穆無窮兮。胡可勝言。禍兮福所倚。福兮禍所伏。憂喜聚門兮。吉凶同域。彼吳彊大兮。夫差以敗。越棲會稽兮。句踐霸世。斯

遊遂成兮。卒被五刑。傅說胥靡兮。乃相武丁。夫禍之與福兮。何異糾纆。命不可說兮。孰知其極。水激則旱兮。矢激則遠。萬物回薄兮。振盪相轉。雲蒸雨降兮。糾錯相紛。大鈞播物兮。坱圠無垠。天不可預慮兮。道不可預謀。遲速有命兮。焉識其時。且夫天地爲鑪兮。造化爲工。陰陽爲炭兮。萬物爲銅。合散消息兮。安有常則。千變萬化兮。未始有極。忽然爲人兮。何足控摶。化爲異物兮。又何足患。小智自私兮。賤彼貴我。達人大觀兮。物無不可。貪夫徇財兮。烈士徇名。夸者死權兮。品庶每生。怵迫之徒兮。或趨西東。大人不曲兮。意變齊同。愚士繫俗兮。窘若囚拘。至人遺物兮。獨與道俱。衆人惑惑兮。好惡積億。眞人恬漠兮。獨與道息。釋智遺形兮。超然自喪。寥廓忽荒兮。與道翺翔。乘流則逝兮。得坻則止。縱軀委命兮。不私與己。其生兮若浮。其死兮若休。澹乎若深淵之靜。泛乎若不繫之舟。不以生故自寶兮。養空而浮。德人無累兮。知命不憂。細故蔕芥兮。何足以疑。

鸚鵡賦 並序　禰正平

時黃祖太子射。賓客大會。有獻鸚鵡者。舉酒於衡前曰。禰處士。今日無用娛賓。竊以此鳥自遠而至。明惠聰善。羽族之可貴。願先生爲之賦。使四坐咸共榮觀。不亦可乎。衡因爲賦。筆不停綴。文不加點。其辭曰。

惟西域之靈鳥。挺自然之奇姿。體金精之妙質。含火德之明輝。性辯惠而能言兮。才聰明以識機。故其嬉遊高峻。棲跱幽深。飛不妄集。翔必擇林。紺趾丹觜。綠衣翠衿。采采麗容。咬咬好音。雖同族於羽毛。固殊智而異心。配鸞皇而等美。焉比德於衆禽。於是羨芳聲之遠

暢。偉靈表之可嘉。命虞人於隴坻。詔伯益於流沙。跨崑崙而播弋。冠雲霓而張羅。雖綱維之備設。終一日之所加。且其容止閑暇。守植安停。逼之不懼。撫之不驚。寧順從以遠害。不違忤以喪生。故獻全者受賞。而傷肌者被刑。爾乃歸窮委命。離羣喪侶。閉以彫籠。翦其翅羽。流飄萬里。崎嶇重阻。踰岷越障。載罹寒暑。女辭家而適人。臣出身而事主。彼賢哲之逢患。猶棲遲以羈旅。矧禽鳥之微物。能馴擾以安處。眷西路而長懷。望故鄉而延佇。忖陋體之腥臊。亦何勞於鼎俎。嗟祿命之衰薄。奚遭時之險巇。豈言語以階亂。將不密以致危。痛母子之永隔。哀伉儷之生離。匪餘年之足惜。愍衆雛之無知。背蠻夷之下國。侍君子之光儀。懼名實之不副。恥才能之無奇。羨西都之沃壤。識苦樂之異宜。懷代越之悠思。故每言而稱斯。若乃少昊司辰。蓐收整轡。嚴霜初降。涼風蕭瑟。長吟遠慕。哀鳴感類。音聲悽以激揚。容貌慘以顦顇。聞之者悲傷。見之者隕淚。放臣爲之屢歎。棄妻爲之歔欷。感平生之遊處。若壎篪之相須。何今日之兩絕。若胡越之異區。順檻櫳以俯仰。闚戶牖以踟躕。想崑山之高嶽。思鄧林之扶疏。顧六翮之殘毀。雖奮迅其焉如。心懷歸而弗果。徒怨毒於一隅。苟竭心於所事。敢背惠而忘初。託輕鄙之微命。委陋賤之薄軀。期守死以報德。甘盡辭以效愚。恃隆恩於既往。庶彌久而不渝。

鷦鷯賦 並序　張茂先

鷦鷯小鳥也。生於蒿萊之間。長於藩籬之下。翔集尋常之內。而生生之理足矣。色淺體陋。不爲人用。形微處卑。物莫之害。繁滋族類。乘居匹遊。翩翩然有以自得。彼鷲鶚鶤鴻。孔雀

翡翠。或陵赤霄之際。或託絕垠之外。翰舉足以沖天。觜距足以自衛。然皆負矰嬰繳。羽毛入貢。何者有用於人也。夫言有淺而可以託深。類有微而可以喩大。故賦之云爾。

何造化之多端兮。播羣形於萬類。惟鷦鷯之微禽兮。亦攝生而受氣。育翩翾之陋體。無玄黃以自貴。毛弗施於器用。肉不登乎俎味。鷹鸇過猶俄翼。尙何懼於罿罻。翳薈蒙蘢。是焉遊集。飛不飄颺。翔不翕習。其居易容。其求易給。巢林不過一枝。每食不過數粒。棲無所滯。遊無所盤。匪陋荆棘。匪榮茝蘭。動翼而逸。投足而安。委命順理。與物無患。伊茲禽之無知兮。何處身之似智。不懷寶以賈害。不飾表以招累。靜守約而不矜。動因循以簡易。任自然以爲資。無誘慕於世僞。雕鶡介其觜距。鵠鷺軼於雲際。鵾雞竄於幽險。孔翠生乎遐裔。彼晨鳧與歸鴈。又矯翼而增逝。咸美羽而豐肌。故無罪而皆斃。徒銜蘆以避繳。終爲戮於此世。蒼鷹鷙而受緤。鸚鵡惠而入籠。屈猛志以服養。塊幽縶於九重。變音聲以順旨。思摧翮而爲庸。戀鍾岱之林野。慕隴坻之高松。雖蒙幸於今日。未若疇昔之從容。海鳥鶢鶋。避風而至。條枝巨雀。踰嶺自致。提挈萬里。飄颻逼畏。夫唯體大妨物。而形瓌足瑋也。陰陽陶蒸。萬品一區。巨細舛錯。種繁類殊。鷦螟巢於蚊睫。大鵬彌乎天隅。將以上方不足。而下比有餘。普天壤以遐觀。吾又安知其小大之所如。

赭白馬賦 幷序

顏延年

驥不稱力。馬以龍名。豈不以國尙威容。軍駿趫迅而已。實有騰光吐圖。疇德瑞聖之符焉。是以語崇其靈。世榮其至。我高祖之造宋也。五方率職。四隩入貢。祕寶盈於玉府。文駟列

乎華廄。乃有乘輿赭白。特稟逸異之姿。妙簡帝心。用錫聖皁。服御順志。馳驟合度。齒歷雖衰。而藝美不忒。襲養兼年。恩隱周渥。歲老氣殫。斃于內棧。少盡其力。有惻上仁。乃詔陪侍。奉述中旨。末臣庸蔽。敢同獻賦。其辭曰。

維宋二十有二載。盛烈光乎重葉。武義粵其肅陳。文教迄已優洽。泰階之平可升。興王之軌可接。訪國美於舊史。考方載於往牒。昔帝軒陟位。飛黃服皁。后唐膺籙。赤文候日。漢道亨而天驥呈才。魏德楙而澤馬效質。伊逸倫之妙足。自前代而間出。並榮光於瑞典。登郊歌乎司律。所以崇衛威神。扶護警蹕。是用精曜叶從。靈物咸秩。暨明命之初基。罄九區而率順。有肆險以稟朔。或踰遠而納贐。聞王會之阜昌。知函夏之充牣。總六服以收賢。掩七戎而得駿。蓋乘風之淑類。實先景之洪胤。故能代驂象輿。歷配鉤陳。齒算延長。聲價隆振。信聖祖之蕃錫。留皇情而驟進。徒觀其附筋樹骨。垂梢植髮。雙瞳夾鏡。兩權協月。異體峰生。殊相逸發。超攄絕夫塵轍。驅騖迅於滅沒。簡偉塞門。獻狀絳闕。旦刷幽燕。晝秣荊越。教敬不易之典。訓人必書之舉。惟帝惟祖。爰遊爰豫。飛輶軒以戒道。環彀騎而清路。勒五營使按部。聲八鑾以節步。具服金組。兼飾丹雘。寶鉸星纏。鏤章霞布。進迫遮迾。却屬輦輅。欻聳擢以鴻驚。時濩略而龍翥。弭雄姿以奉引。婉柔心而待御。至於露滋月肅。霜戾秋登。王于興言。闡肆威稜。臨廣望。坐百層。料武藝。品驍騰。流藻周施。和鈴重設。睨影高鳴。將超中折。分馳迴場。角壯永埒。別輩越群。絇練夐絕。捷趫夫之斂手。促華鼓之繁節。經玄蹄而雹散。歷素支而冰裂。膺門沫赭。汗溝走血。踠跡迴唐。畜怒未洩。乾心降而微怡。都人仰而朋悅。妍變之態既畢。凌遽之氣方屬。躡鑣轡之牽制。隘通都之圈束。眷西極而驤首。望朔雲而

蹀足。將使紫燕駢衡。綠蛇衛轂。纖驪接趾。秀騏齊亍。覲王母於崑崙墟。要帝臺於宣嶽。跨中州之轍迹。窮神行之軌躅。然而盤于遊畋。作鏡前王。肆於人上。取悔義方。天子乃輟駕廻慮。息徒解裝。鑒武穆。憲文光。振民隱。脩國章。戒出豕之敗。御。惕飛鳥之跱。衡。故祗慎乎所常忽。敬備乎所未防。輿有重輪之安。馬無泛駕之佚。處以濯龍之奧。委以紅粟之秩。服養知仁。從老得卒。加弊帷。收仆質。天情周。皇恩畢。亂曰。惟德動天。神物儀兮。於時駔駿。充階街兮。稟靈月駟。祖雲螭兮。雄志倜儻。精權奇兮。既剛且淑。服鞿羈兮。効足中黃。徇驅馳兮。願終惠養。蔭本枝兮。竟先朝露。長委離兮。

舞鶴賦　鮑明遠

散幽經以驗物。偉胎化之仙禽。鍾浮曠之藻質。抱清迥之明心。指蓬壺而翻翰。望崑閬而揚音。帀日域以廻騖。窮天步而高尋。踐神區其既遠。積靈祀而方多。精含丹而星曜。頂凝紫而煙華。引員吭之纖婉。頓脩趾之洪姱。疊霜毛而弄影。振玉羽而臨霞。朝戲於芝田。夕飲乎瑤池。厭江海而遊澤。掩雲羅而見羈。去帝鄉之岑寂。歸人寰之喧卑。歲崢嶸而愁暮。心惆悵而哀離。於是窮陰殺節。急景凋年。涼沙振野。箕風動天。嚴嚴苦霧。皎皎悲泉。氷塞長河。雪滿羣山。既而氛昏夜歇。景物澄廓。星翻漢廻。曉月將落。感寒鷄之早晨。憐霜鴈之違漠。臨驚風之蕭條。對流光之照灼。唳清響於丹墀。舞飛容於金閣。始連軒以鳳蹌。終宛轉而龍躍。躑躅徘徊。振迅騰摧。驚身蓬集。矯翅雪飛。離綱別赴。合緒相依。將興中止。若往而歸。颯沓矜顧。遷延遲暮。逸翮後塵。翺翥先路。指會規翔。臨岐矩步。態有遺妍。貌無停趣。

奔機逗節。角睞分形。長揚緩騖。並翼連聲。輕迹淩亂。浮影交横。衆變繁姿。參差洊密。烟交霧凝。若無毛質。風去雨還。不可談悉。既散魂而盪目。迷不知其所之。忽星離而雲罷。整神容而自持。仰天居之崇絕。更惆悵以驚思。當是時也。燕姬色沮。巴童心恥。巾拂兩停。丸劍雙止。雖邯鄲其敢倫。豈陽阿之能擬。入衞國而乘軒。出吳都而傾市。守馴養於千齡。結長悲於萬里。

幽通賦

班孟堅

系高頊之玄胄兮。氏中葉之炳靈。颻颻風而蟬蛻兮。雄朔野以颺聲。皇十紀而鴻漸兮。有羽儀於上京。巨滔天而泯夏兮。考遘愍以行謠。終保己而貽則兮。里上仁之所廬。懿前烈之純淑兮。窮與達其必濟。咨孤蒙之眇眇兮。將圮絕而罔階。豈余身之足殉兮。違世業之可懷。靖潛處以永思兮。經日月而彌遠。匪黨人之敢拾兮。庶斯言之不玷。魂煢煢與神交兮。精誠發於宵寐。夢登山而迥眺兮。覿幽人之髣髴。攬葛藟而授余兮。眷峻谷曰勿墜。昒昕寤而仰思兮。心曚曚猶未察。黃神邈而靡質兮。儀遺讖以臆對。曰乘高而遌神兮。道遐通而不迷。葛緜緜於樛木兮。詠南風以爲綏。蓋惴惴之臨深兮。乃二雅之所祇。既訊爾以吉象兮。又申之以烱戒。盍孟晉以迨羣兮。辰倏忽其不再。承靈訓其虛徐兮。佇盤桓而且俟。惟天地之無窮兮。鮮生民之晦在。紛屯邅與蹇連兮。何艱多而知寡。上聖迕而後拔兮。豈羣黎之所御。昔衞叔之御昆兮。昆爲寇而喪予。管彎弧欲斃讎兮。讎作后而成己。變化故而相詭兮。孰云預其終始。雍造怨而先賞兮。丁繇惠而被戮。栗取弔于逌吉兮。王膺慶於

所蹙。叛迴穴其若茲兮。北叟頗識其倚伏。單治裏而外凋兮。張脩襮而內逼。聿中龢為庶
幾兮。顏與冉又不得。溺招路以從己兮。謂孔氏猶未可。安慆慆不萉兮。卒隕身乎世禍。游
聖門而靡救兮。雖覆醢其何補。固行行其必凶兮。免盜亂為賴道。形氣發於根柢兮。柯葉
彙而零茂。恐魍魎之責景兮。羌未得其云已。黎淳耀於高辛兮。芈彊大於南汜。嬴取威於
百儀兮。姜本支乎三趾。既仁得其信然兮。仰天路而同軌。東鄰虐而殲仁兮。王合位乎三
五。戎女烈而喪孝兮。伯徂歸於龍虎。發還師以成命兮。重醉行而自耦。震鱗蹊於夏庭兮。
匝三正而滅姬。巽羽化乎宣宮兮。彌五辟而成災。道脩長而世短兮。敻冥默而不周。胥仍
物而鬼諏兮。乃窮宙而達幽。嬀巢姜於孺筮兮。旦算祀於契龜。宣曹興敗於下夢兮。魯衛
名諡於銘謠。妣聆呱而劾石兮。許相理而鞫條。道混成而自然兮。術同原而分流。神先心
以定命兮。命隨行以消息。斡流遷其不濟兮。故遭罹而贏縮。三變同於一體兮。雖移易而
不忒。洞參差其紛錯兮。斯眾兆之所惑。周賈盪而貢憤兮。齊死生與禍福。抗爽言以矯情
兮。信畏犧而忌鵩。所貴聖人至論兮。順天性而斷誼。物有欲而不居兮。亦有惡而不避。守
孔約而不貳兮。乃輶德而無累。三仁殊於一致兮。夷惠舛而齊聲。木偃息以蕃魏兮。申重
繭以存荊。紀焚躬以衛上兮。皓頤志而弗傾。侯草木之區別兮。苟能實其必榮。要沒世而
不朽兮。乃先民之所程。觀天網之紘覆兮。實棐諶而相訓。謨先聖之大猷兮。亦鄰德而助
信。虞韶美而儀鳳兮。孔忘味於千載。素文信而底麟兮。漢賓祚于異代。精通靈而感物兮。
神動氣而入微。養流睇而猿號兮。李虎發而石開。非精誠其焉通兮。苟無實其孰信。操末
技猶必然兮。矧耽躬於道真。登孔昊而上下兮。緯羣龍之所經。朝貞觀而夕化兮。猶誼己

而遺形。若胤彭而偕老兮。訴來哲而通情。亂曰。天造草昧。立性命兮。復心弘道。惟聖賢兮。渾元運物。流不處兮。保身遺名。民之表兮。舍生取誼。亦道用兮。憂傷夭物。忝莫痛兮。皓爾太素。曷渝色兮。尚越其幾。淪神域兮。

文選卷七終

文選卷八

賦辛　志下

思玄賦　張平子

仰先哲之玄訓兮。雖彌高而弗違。匪仁里其焉宅兮。匪義跡其焉追。潛服膺以永靖兮。緜日月而不衰。伊中情之信脩兮。慕古人之貞節。竦余身而順止兮。遵繩墨而不跌。志摶摶以應懸兮。誠心固其如結。旌性行以製佩兮。佩夜光與瓊枝。纗幽蘭之秋華兮。又綴之以江蘺。美襞積以酷烈兮。允塵邈而難虧。既姱麗而鮮雙兮。非是時之攸珍。奮余榮而莫見兮。播余香而莫聞。幽獨守此側陋兮。敢怠遑而舍勤。幸二八之遻虞兮。嘉傅說之生殷。尚前良之遺風兮。恫後辰而無及。何孤行之煢煢兮。孑不羣而介立。感鸞鷖之特棲兮。悲淑人之希合。彼無合其何傷兮。患衆僞之冒眞。旦獲讟于羣弟兮。啓金縢而後信。覽蒸民之多僻兮。畏立辟以危身。曾煩毒以迷惑兮。嗟孰可以爲言已。私湛憂而深懷兮。思繽紛而不理。願竭力以守義兮。雖貧窮而不改。執彫虎而試象兮。阽焦原而跟止。庶斯奉以周旋兮。要既死而後已。俗遷渝而事化兮。泯規矩之圓方。寶蕭艾於重笥兮。謂蕙芷之不香。斥西施而弗御兮。縶騕褭以服箱。行頗僻而獲志兮。循法度而離殃。惟天地之無窮兮。何遭遇之無常。不抑操而苟容兮。譬臨河而無航。欲巧笑以干媚兮。非余心之所嘗。襄溫恭之

織衣兮。被禮義之繡裳。辮貞亮以爲鞶兮。雜技藝以爲珩。昭綵藻以琱瑑兮。璜聲遠而彌長。淹棲遲以恣欲兮。曜靈忽其西藏。恃己知而華予兮。鶗鴂鳴而不芳。冀一年之三秀兮。遒白露之爲霜。時亹亹而代序兮。疇可與乎比伉。咨姤嫮之難竝兮。想依韓以流亡。恐漸冉而無成兮。留則蔽而不彰。心猶豫而狐疑兮。卽岐趾而臚情。文君爲我端著兮。利飛遯以保名。歷衆山以周流兮。翼迅風以揚聲。二女感於崇嶽兮。或冰折而不營。天蓋高而爲澤兮。誰云路之不平。勔自彊而不息兮。蹈玉階之嶢崢。懼筮氏之長短兮。鑽東龜以觀禎。遇九皐之介鳥兮。怨素意之不逞。遊塵外而瞥天兮。據冥翳而哀鳴。鵰鶚競於貪婪兮。我脩潔以益榮。子有故於玄鳥兮。歸母氏而後寧。占既吉而無悔兮。簡元辰而俶裝。旦余沐於清源兮。晞余髮於朝陽。漱飛泉之瀝液兮。咀石菌之流英。翾鳥擧而魚躍兮。將往走乎八荒。過少皥之窮野兮。問三丘于句芒。何道眞之淳粹兮。去穢累而飄輕。登蓬萊而容與兮。鼇雖抃而不傾。留瀛洲而採芝兮。聊且以乎長生。憑歸雲而遐逝兮。夕余宿乎扶桑。飮青岑之玉醴兮。餐沆瀣以爲粻。發昔夢於木禾兮。穀崑崙之高岡。朝吾行於暘谷兮。從伯禹乎稽山。嘉羣臣之執玉兮。疾防風之食言。指長沙以邪徑兮。存重華乎南鄰。哀二妃之未從兮。翩繽處彼湘濱。流目眺夫衡阿兮。覩有黎之圯墳。痛火正之無懷兮。託山坡以孤魂。愁蔚蔚以慕遠兮。越卭州而遊遨。躋日中于昆吾兮。憩炎火之所陶。揚芒熛而絳天兮。水泫沄而涌濤。溫風翕其增熱兮。惄鬱悒其難聊。顝覊旅而無友兮。余安能乎留茲。顧金天而歎息兮。吾欲往乎西嬉。前祝融而使擧麾兮。纚朱鳥以承旗。躔建木於廣都兮。摭若華而躊躇。超軒轅於西海兮。跨汪氏之龍魚。聞此國之千歲兮。曾焉足以娛余。思九土之

殊風兮。從蓐收而遂徂。欻神化而蟬蛻兮。朋精粹而為徒。蹶白門而東馳兮。云台行乎中野。亂弱水之潺湲兮。逗華陰之湍渚。號馮夷俾清津兮。權龍舟以濟予。會帝軒之未歸兮。悵徜徉而延佇。怬河林之蓁蓁兮。偉關雎之戒女。黃靈詹而訪命兮。樛天道其焉如。曰。近信而遠疑兮。六籍闕而不書。神逵昧其難覆兮。疇克謨而從諸。牛哀病而成虎兮。雖逢昆其必噬。鼈令殪而尸亡兮。取蜀禪而引世。死生錯其不齊兮。雖司命其不晰。竇號行於代路兮。後膺祚而繁廡。王肆侈於漢庭兮。卒銜恤而絕緒。尉尨眉而郎潛兮。逮三葉而遘武。董弱冠而司袞兮。設王隧而弗處。夫吉凶之相仍兮。恒反側而靡所。穆屆天以悅牛兮。豎亂叔而幽主。文斷袪而忌伯兮。閹謁賊而寧后。通人闇於好惡兮。豈昏惑而能剖。嬴摘讖而戒胡兮。備諸外而發內。或輦賄而違車兮。孕行產而為對。慎竈顯以言天兮。占水火而妄諱。梁叟患夫黎丘兮。丁厥子而剚刃。親所睼而弗識兮。矧幽冥之可信。無緜攣以涬己兮。思百憂以自疹。彼天監之孔明兮。用棐忱而祐仁。湯蠲體以禱祈兮。蒙厖褫以拯民。景三慮以營國兮。熒惑次於他辰。魏顆亮以從治兮。鬼亢回以斃秦。咎繇邁而種德兮。樹德懋于英六。桑末寄夫根生兮。卉既凋而已育。有無言而不酬兮。又何往而不復。盍遠迹以飛聲兮。孰謂時之可蓄。仰矯首以遙望兮。魂懺惘而無儔。逼區中之隘陋兮。將北度而宣游。行積冰之皚皚兮。清泉沍而不流。寒風淒其永至兮。拂穹岫之騷騷。玄武縮于殼中兮。騰蛇蜿而自糾。魚矜鱗而并凌兮。鳥登木而失條。坐太陰之屏室兮。慨含欷而增愁。怨高陽之相寓兮。伷顓頊而宅幽。庸織路於四裔兮。斯與彼其何瘳。望寒門之絕垠兮。縱余緤乎不周。迅猋潚其媵我兮。鶩翩飄而不禁。越谽嘲之洞穴兮。漂通川之磷磷。經重陰乎寂寞兮。

慜墳羊之深潛。追荒忽於地底兮。軼無形而上浮。出石密之闇野兮。不識蹊之所由。速燭龍令執炬兮。過鍾山而中休。瞰瑤谿之赤岸兮。弔祖江之見劉。聘王母於銀臺兮。羞玉芝以療飢。戴勝慭其旣歡兮。又誚余之行遲。載太華之玉女兮。召洛浦之虙妃。咸姣麗以蠱媚兮。增嫮眼而娥眉。舒訬婧之纖腰兮。揚雜錯之袿徽。離朱脣而微笑兮。顏的礫以遺光。獻環琨與琛縭兮。申厥好以玄黃。雖色豔而賂美兮。志浩蕩而不嘉。雙材悲於不納兮。竝詠詩而淸歌。歌曰。天地烟熅。百卉含葩。鳴鶴交頸。雎鳩相和。處子懷春。精魂回移。如何淑明。忘我實多。將答賦而不暇兮。爰蹶駕而亟行。瞻崑崙之巍巍兮。臨縈河之洋洋。伏靈龜以負坻兮。亙螭龍之飛梁。登閬風之層城兮。構不死而爲牀。屑瑤蘂以爲糇兮。斟白水以爲漿。抨巫咸以占夢兮。乃貞吉之元符。滋令德於正中兮。含嘉秀以爲敷。旣垂穎而顧本兮。亦要思乎故居。安和靜而隨時兮。姑純懿之所廬。戒庶僚以夙會兮。僉供職而竝迓。豐隆軯其震霆兮。列缺曄其照夜。雲師䨮以交集兮。凍雨沛其灑途。轙琱輿而樹葩兮。擾應龍以服輅。百神森其備從兮。屯騎羅而星布。振余袂而就車兮。脩劒揭以低昂。冠咢咢其映蓋兮。佩綝纚以煇煌。僕夫儼其正策兮。八乘騰而超驤。氛旄溶以天旋兮。蜺旌飄以飛颺。撫軨軹而還睨兮。心勺爍其若湯。羨上都之赫戲兮。何迷故而不忘。左靑琱以揵芝兮。右素威以司鉦。前長離使拂羽兮。後委水衡乎玄冥。屬箕伯以函風兮。澄淟涊而爲淸。曳雲旗之離離兮。鳴玉鸞之譻譻。涉淸霄而升遐兮。浮蠛蠓而上征。紛翼翼以徐戾兮。焱回回其揚靈。叫帝閽使闢扉兮。覿天皇于瓊宮。聆廣樂之九奏兮。展洩洩以肜肜。考治亂於律均兮。意建始而思終。惟般逸之無斁兮。懼樂往而哀來。素女撫絃而餘音兮。太容吟曰念

哉。既防溢而靖志兮。迨我暇以翱翔。出紫宮之肅肅兮。集太微之閬閬。命王良掌策駟兮。踰高閣之將將。建罔車之幕幕兮。獵青林之芒芒。彎威弧之拔剌兮。射嶓冢之封狼。觀壁壘於北落兮。伐河鼓之磅硠。乘天潢之汎汎兮。浮雲漢之湯湯。倚招搖攝提以低回劉流兮。察二紀五緯之綢繆遹皇。偃蹇夭矯。娩連卷兮。雜沓叢顇。颯以方驤。戫汨飂淚。沛以罔象兮。爛漫麗靡。藐以迭逷。凌驚雷之砊礚兮。弄狂電之淫裔。踰痝鴻於宕冥兮。貫倒景而高厲。廓盪盪其無涯兮。乃今窺乎天外。據開陽而頫眡兮。臨舊鄉之暗藹。悲離居之勞心兮。情悁悁而思歸。魂眷眷而屢顧兮。馬倚輈而徘徊。雖遊娛以媮樂兮。豈愁慕之可懷。出閶闔兮降天途。乘焱忽兮馳虛無。雲菲菲兮繞余輪。風眇眇兮震余旟。繽連翩兮紛暗曖。儵眩眃兮反常閭。收疇昔之逸豫兮。卷淫放之遐心。脩初服之娑娑兮。長余佩之參參。文章奐以粲爛兮。美紛紜以從風。御六藝之珍駕兮。遊道德之平林。結典籍而爲罟兮。敺儒墨而爲禽。玩陰陽之變化兮。詠雅頌之徽音。嘉曾氏之歸耕兮。慕歷阪之欽崟。恭夙夜而不貳兮。固終始之所服。夕惕若厲以省諐兮。懼余身之未勑。苟中情之端直兮。莫吾知而不慍。默無爲以凝志兮。與仁義乎逍遙。不出戶而知天下兮。何必歷遠以劬勞。系曰。天長地遠歲不留。俟河之清秖懷憂。願得遠渡以自娛。上下無常窮六區。超踰騰躍絕世俗。飄颻神舉逞所欲。天不可階仙夫稀。柏舟悄悄吝不飛。松喬高跱孰能離。結精遠遊使心攜。迴志朅來從玄諆。獲我所求夫何思。

歸田賦　張平子

遊都邑以永久。無明略以佐時。徒臨川以羨魚。俟河清乎未期。感蔡子之慷慨。從唐生以決疑。諒天道之微昧。追漁父以同嬉。超埃塵以遐逝。與世事乎長辭。於是仲春令月。時和氣清。原隰鬱茂。百草滋榮。王雎鼓翼。倉庚哀鳴。交頸頡頏。關關嚶嚶。於焉逍遙。聊以娛情。爾乃龍吟方澤。虎嘯山丘。仰飛纖繳。俯釣長流。觸矢而斃。貪餌吞鉤。落雲間之逸禽。懸淵沈之魦鰡。于時曜靈俄景。繼以望舒。極盤遊之至樂。雖日夕而忘劬。感老氏之遺誡。將廻駕乎蓬廬。彈五絃之妙指。詠周孔之圖書。揮翰墨以奮藻。陳三皇之軌模。苟縱心於域外。安知榮辱之所如。

閑居賦 並序　潘安仁

岳嘗讀汲黯傳。至司馬安四至九卿。而良史題之以巧宦之目。未嘗不慨然廢書而歎。曰嗟乎巧誠有之。拙亦宜然。顧常以爲士之生也。非至聖無軌。微妙玄通者。則必立功立事。效當年之用。是以資忠履信以進德。脩辭立誠以居業。僕少竊鄉曲之譽。忝司空太尉之命。所奉之主。即太宰魯武公其人也。舉秀才爲郎。逮事世祖武皇帝。爲河陽懷令。尚書郎廷尉平。今天子諒闇之際。領太傅主簿。府主誅。除名爲民。俄而復官。除長安令。遷博士。未召拜。親疾。輒去官免。自弱冠涉乎知命之年。八徙官。而一進階。再免一除名。一不拜職。遷者三而已矣。雖通塞有遇。抑亦拙者之效也。昔通人和長輿之論余也。固謂拙於用多。稱多則吾豈敢。言拙信而有徵。方今俊乂在官。百工惟時。拙者可以絕意乎寵榮之事矣。太夫人在堂。有羸老之疾。尚何能違膝下色養。而屑屑從斗筲之役乎。於是覽止足之分。庶

浮雲之志。築室種樹。逍遙自得。池沼足以漁釣。舂稅足以代耕。灌園鬻蔬。以供朝夕之膳。牧羊酤酪。以俟伏臘之費。孝乎惟孝。友于兄弟。此亦拙者之爲政也。乃作閑居之賦以歌事遂情焉。其辭曰。

傲墳素之長圃。步先哲之高衢。雖吾顏之云厚。猶內愧於甯蘧。有道吾不仕。無道吾不愚。何巧智之不足。而拙艱之有餘也。於是退而閑居于洛之涘。身齊逸民。名綴下士。陪京泝伊。面郊後市。浮梁黝以徑度。靈臺傑其高峙。窺天文之秘奧。究人事之終始。其西則有元戎禁營。玄幙綠徽。谿子巨黍。異絭同機。礮石雷駭。激矢虻飛。以先啓行。耀我皇威。其東則有明堂辟雍。清穆敞閑。環林縈映。圓海迴淵。聿追孝以嚴父。宗文考以配天。祇聖敬以明順。養更老以崇年。若乃背冬涉春。陰謝陽施。天子有事于柴燎。以郊祖而展義。張鈞天之廣樂。備千乘之萬騎。服振振以齊玄。管啾啾而竝吹。煌煌乎。隱隱乎。茲禮容之壯觀。而王制之巨麗也。兩學齊列。雙宇如一。右延國冑。左納良逸。祁祁生徒。濟濟儒術。或升之堂。或入之室。敎無常師。道在則是。故髦士投紱。名王懷璽。訓若風行。應如草靡。此里仁所以爲美。孟母所以三徙也。爰定我居。築室穿池。長楊映沼。芳枳樹籬。遊鱗瀺灂。菡萏敷披。竹木蓊藹。靈果參差。張公大谷之梨。梁侯烏椑之柹。周文弱枝之棗。房陵朱仲之李。靡不畢殖。三桃表櫻胡之別。二柰曜丹白之色。石榴蒲桃之珍。磊落蔓衍乎其側。梅杏郁棣之屬。繁榮麗藻之飾。華實照爛。言所不能極也。菜則葱韭蒜芋。青筍紫薑。堇薺甘旨。蓼荾芬芳。蘘荷依陰。時藿向陽。綠葵含露。白薤負霜。於是凛秋暑退。熙春寒往。微雨新晴。六合清朗。太夫人乃御板輿。升輕軒。遠覽王畿。近周家園。體以行和。藥以勞宣。常膳載加。舊痾有痊。席

長筵。列孫子。柳垂陰。車結軌。陸摘紫房。水挂頳鯉。或宴于林。或禊于氾。昆弟班白。兒童稚齒。稱萬壽以獻觴。咸一懼而一喜。壽觴舉。慈顏和。浮杯樂飲。絲竹駢羅。頓足起舞。抗音高歌。人生安樂。孰知其他。退求己而自省。信用薄而才劣。奉周任之格言。敢陳力而就列。幾陋身之不保。尚奚擬於明哲。仰衆妙而絕思。終優游以養拙。

長門賦 並序

司馬長卿

孝武皇帝陳皇后。時得幸頗妬。別在長門宮。愁悶悲思。聞蜀郡成都司馬相如天下工爲文。奉黃金百斤。爲相如文君取酒。因于解悲愁之辭。而相如爲文以悟主上。皇后復得幸。其辭曰。

夫何一佳人兮。步逍遙以自虞。魂踰佚而不返兮。形枯槁而獨居。言我朝往而暮來兮。飲食樂而忘人。心慊移而不省故兮。交得意而相親。伊予志之慢愚兮。懷貞慤之懽心。願賜問而自進兮。得尚君之玉音。奉虛言而望誠兮。期城南之離宮。脩薄具而自設兮。君曾不肯兮幸臨。廓獨潛而專精兮。天飄飄而疾風。登蘭臺而遙望兮。神怳怳而外淫。浮雲鬱而四塞兮。天窈窈而晝陰。雷隱隱而響起兮。聲象君之車音。飄風迴而起閨兮。舉帷幄之襜襜。桂樹交而相紛兮。芳酷烈之誾誾。孔雀集而相存兮。玄猿嘯而長吟。翡翠脅翼而來萃兮。鸞鳳飛而北南。心憑噫而不舒兮。邪氣壯而攻中。下蘭臺而周覽兮。步從容於深宮。正殿塊以造天兮。鬱並起而穹崇。間徙倚於東廂兮。觀夫靡靡而無窮。擠玉戶以撼金鋪兮。聲噌吰而似鐘音。刻木蘭以爲榱兮。飾文杏以爲梁。羅丰茸之游樹兮。離樓梧而相撐。施

瑰木之欂櫨兮。委參差以槺梁。時髣髴以物類兮。象積石之將將。五色炫以相曜兮。煥爛燿而成光。緻錯石之瓴甓兮。象瑇瑁之文章。張羅綺之幔帷兮。垂楚組之連綱。撫柱楣以從容兮。覽曲臺之央央。白鶴噭以哀號兮。孤雌跱於枯楊。日黃昏而望絕兮。悵獨託於空堂。懸明月以自照兮。徂清夜於洞房。援雅琴以變調兮。奏愁思之不可長。案流徵以却轉兮。聲幼妙而復揚。貫歷覽其中操兮。意慷慨而自卬。左右悲而垂淚兮。涕流離而從橫。舒息悒而增欷兮。蹝履起而彷徨。揄長袂以自翳兮。數昔日之𠍴殃。無面目之可顯兮。遂頹思而就牀。摶芬若以為枕兮。席荃蘭而茝香。忽寢寐而夢想兮。魄若君之在旁。惕寤覺而無見兮。魂迋迋若有亡。衆雞鳴而愁予兮。起視月之精光。觀衆星之行列兮。畢昴出於東方。望中庭之藹藹兮。若季秋之降霜。夜曼曼其若歲兮。懷鬱鬱其不可再更。澹偃蹇而待曙兮。荒亭亭而復明。妾人竊自悲兮。究年歲而不敢忘。

思舊賦 并序　向子期

余與嵆康呂安。居止接近。其人並有不羈之才。然嵆志遠而疏。呂心曠而放。其後各以事見法。嵆博綜技藝。於絲竹特妙。臨當就命。顧視日影。索琴而彈之。余逝將西邁。經其舊廬。于時日薄虞淵。寒冰淒然。鄰人有吹笛者。發聲寥亮。追思曩昔遊宴之好。感音而歎。故作賦云。

將命適於遠京兮。遂旋反而北徂。濟黃河以汎舟兮。經山陽之舊居。瞻曠野之蕭條兮。息余駕乎城隅。踐二子之遺跡兮。歷窮巷之空廬。歎黍離之愍周兮。悲麥秀於殷墟。惟古昔

以懷人兮。心徘徊以躊躇。棟宇存而弗毀兮。形神逝其焉如。昔李斯之受罪兮。歎黃犬而長吟。悼嵇生之永辭兮。顧日影而彈琴。託運遇於領會兮。寄餘命於寸陰。聽鳴笛之慷慨兮。妙聲絕而復尋。停駕言其將邁兮。遂援翰而寫心。

歎逝賦 并序　陸士衡

昔每聞長老追計平生同時親故。或凋落已盡。或僅有存者。余年方四十。而懿親戚屬。亡多存寡。暱交密友。亦不半在。或所曾共遊一塗。同宴一室。十年之內。索然已盡。以是思哀。哀可知矣。乃賦曰。

伊天地之運流。紛升降而相襲。日望空以駿驅。節循虛而警立。嗟人生之短期。孰長年之能執。時飄忽其不再。老晼晚其將及。懟瓊蘂之無徵。恨朝霞之難挹。望湯谷之企予。惜此景之屢戢。悲夫。川閱水以成川。水滔滔而日度。世閱人而爲世。人冉冉而行暮。人何世而弗新。世何人之能故。野每春其必華。草無朝而遺露。經終古而常然。率品物其如素。譬日及之在條。恒雖盡而不悟。雖不寤其可悲。心惆焉而自傷。亮造化之若茲。吾安取夫久長。痛靈根之夙隕。怨具爾之多喪。悼堂構之隤瘁。愍城闕之丘荒。親彌懿其已逝。交何戚而不亡。咨余命之方殆。何視天之芒芒。傷懷悽其多念。慼貌瘁而尠歡。幽情發而成緒。滯思叩而興端。慘此世之無樂。詠在昔而爲言。居充堂而衍宇。行連駕而比軒。彌年時其詎幾。夫何往而不殘。或冥邈而既盡。或寥廓而僅半。信松茂而柏悅。嗟芝焚而蕙歎。苟性命之不殊。豈同波而異瀾。瞻前軌之既覆。知此路之良難。啓四體而深悼。懼茲形之將然。毒娛

情之寡方。怨感目之多顏。諒多顏之感目。神何適而獲怡。尋平生於響像。覽前物而懷之。步寒林以悽惻。翫春翹而有思。觸萬類以生悲。歎同節而異時。年彌往而念廣。塗薄暮而意迮。親落落而日稀。友靡靡而愈索。顧舊要於遺存。得十一於千百。樂隕心其如亡。哀緣情而來宅。託末契於後生。余將老而爲客。然後弭節安懷。妙思天造。精浮神淪。忽在世表。寤大暮之同寐。何矜晩以怨早。指彼日之方除。豈茲情之足攬。感秋華於衰木。瘁零露於豐草。在殷憂而弗違。夫何云乎識道。將頤天地之大德。遺聖人之洪寶。解心累於末迹。聊優游以娛老。

懷舊賦 並序

潘安仁

余十二而獲見於父友東武戴侯楊君。始見知名。遂申之以婚姻。而道元公嗣。亦隆世親之愛。不幸短命。父子凋殞。余既有私艱。且尋役于外。不歷嵩丘之山者。九年于茲矣。今而經焉。慨然懷舊。而賦之曰。

啓開陽而朝邁。濟淸洛以徑渡。晨風淒以激冷。夕雪暠以掩路。轍含冰以滅軌。水漸軔以凝冱。塗艱屯其難進。日晼晩而將暮。仰睎歸雲。俯鏡泉流。前瞻太室。傍眺嵩丘。東武託焉。建塋啓疇。巖巖雙表。列列行楸。望彼楸矣。感于予思。旣興慕於戴侯。亦悼元而哀嗣。墳壘壘以接隴。柏森森以攢植。何逝沒之相尋。曾舊草之未異。余總角而獲見。承戴侯之淸塵。名余以國士。眷余以嘉姻。自祖考而隆好。逮二子而世親。歡攜手以偕老。庶報德之有鄰。今九載而來歸。空館闃其無人。陳荄被于堂除。舊圃化而爲薪。步庭廡以徘徊。涕泫流而霑

宵展轉而不寐。驟長歎以達晨。獨鬱結其誰語。聊綴思於斯文。

寡婦賦 並序

潘安仁

樂安任子咸者。有韜世之量。與余少而歡焉。雖兄弟之愛。無以加也。不幸弱冠而終。良友既沒。何痛如之。其妻又吾姨也。少喪父母。適人而所天又殞。孤女藐焉始孩。斯亦生民之至艱。而荼毒之極哀也。昔阮瑀既沒。魏文悼之。並命知舊。作寡婦之賦。余遂擬之。以敍其孤寡之心焉。其辭曰。

嗟余生之不造兮。哀天難之匪忱。少伶俜而偏孤兮。痛忉怛以摧心。覽寒泉之遺歎兮。詠蓼莪之餘音。情長感以永慕兮。思彌遠而逾深。伊女子之有行兮。爰奉嬪於高族。承慶雲之光覆兮。荷君子之惠渥。顧葛藟之蔓延兮。託微莖於樛木。懼身輕而施重兮。若履氷而臨谷。遵義方之明訓兮。憲女史之典戒。奉蒸嘗以效順兮。供灑掃以彌載。彼詩人之攸歎兮。徒願言而心痗。何遭命之奇薄兮。遘天禍之未悔。榮華曄其始茂兮。良人忽以捐背。靜闔門以窮居兮。塊煢獨而靡依。易錦茵以苫席兮。代羅幬以素帷。命阿保而就列兮。覽巾箑以舒悲。口嗚噎以失聲兮。淚橫迸而霑衣。愁煩冤其誰告兮。提孤孩於坐側。時曖曖而向昏兮。日杳杳而西匿。雀羣飛而赴楹兮。雞登棲而斂翼。歸空館而自憐兮。撫衾幬以歎息。思纏綿以瞀亂兮。心摧傷以愴惻。曜靈曄而遄邁兮。四節運而推移。天凝露而降霜兮。木葉落而殞枝。仰神宇之寥寥兮。瞻靈衣之披披。退幽悲於堂隅兮。進獨拜於牀垂。耳傾想於疇昔兮。目髣髴乎平素。雖冥冥而罔覿兮。猶依依以憑附。痛存亡之殊制兮。將遷神而

安措。龍轜儼以星駕兮。飛旐翩以啓路。輪按軌以徐進兮。馬悲鳴而踟顧。潛靈邈其不反兮。殷憂結而靡訴。睎形影於几筵兮。馳精爽於丘墓。自仲秋而在疚兮。踰履霜以踐冰。雪霏霏而驟落兮。風瀏瀏而夙興。雷泠泠而夜下兮。冰溓溓以微凝。意忽怳以遷越兮。神一夕而九升。庶浸遠而哀降兮。情惻惻而彌甚。願假夢以通靈兮。目烱烱而不寢。夜漫漫以悠悠兮。寒凄凄以凜凜。氣憤薄而乘胸兮。涕交橫而流枕。亡魂逝而永遠兮。時歲忽其遒盡。容貌儡以頓悴兮。左右悽其相慜。感三良之殉秦兮。甘捐生而自引。鞠稚子於懷抱兮。嗟低徊而不忍。獨指景而心誓兮。雖形存而志殞。重曰。仰皇穹兮歎息。私自憐兮何極。省微身兮孤弱。顧稚子兮未識。如涉川兮無梁。若凌虛兮失翼。上瞻兮遺像。下臨兮泉壤。窈冥兮潛翳。心存兮目想。奉靈坐兮肅清。愬空宇兮曠朗。廓孤立兮顧影。塊獨言兮聽響。顧影兮傷摧。聽響兮增哀。遙逝兮逾遠。緬邈兮長乖。四節流兮忽代序。歲云暮兮日西頹。霜被庭兮風入室。夜既分兮星漢迴。夢良人兮來遊。若閶闔兮洞開。怛驚悟兮無聞。超惝怳兮慟懷。慟懷兮奈何。言陟兮山阿。墓門兮肅肅。脩隴兮峨峨。孤鳥嚶嚶兮悲鳴。長松萋萋兮振柯。哀鬱結兮交集。淚橫流兮滂沱。蹈恭姜兮明誓。詠柏舟兮清歌。終歸骨兮山足。存憑託兮餘華。要吾君兮同穴。之死矢兮靡他。

恨賦　江文通

試望平原。蔓草縈骨。拱木斂魂。人生到此。天道寧論。於是僕本恨人。心驚不已。直念古者伏恨而死。至如秦帝按劍。諸侯西馳。削平天下。同文共規。華山爲城。紫淵爲池。雄圖既溢。

武力未畢。方架黿鼉以爲梁。巡海右以送日。一旦魂斷。宮車晚出。若乃趙王既虜。遷於房陵。薄暮心動。昧旦神興。別豔姬與美女。喪金輿及玉乘。置酒欲飲。悲來塡膺。千秋萬歲。爲怨難勝。至如李君降北。名辱身冤。拔劍擊柱。弔影慙魂。情往上郡。心留鴈門。裂帛繫書。誓還漢恩。朝露溘至。握手何言。若夫明妃去時。仰天太息。紫臺稍遠。關山無極。搖風忽起。白日西匿。隴鴈少飛。代雲寡色。望君王兮何期。終蕪絕兮異域。至乃敬通見抵。罷歸田里。閉關却掃。塞門不仕。左對孺人。右顧稚子。脫略公卿。跌宕文史。齎志沒地。長懷無已。及夫中散下獄。神氣激揚。濁醪夕引。素琴晨張。秋日蕭索。浮雲無光。鬱靑霞之奇意。入脩夜之不暘。或有孤臣危涕。孽子墜心。遷客海上。流戍隴陰。此人但聞悲風汨起。血下霑衿。亦復含酸茹歎。銷落湮沈。若迺騎疊跡。車屯軌。黃塵匝地。歌吹四起。無不煙斷火絕。閉骨泉裏。已矣哉。春草暮兮秋風驚。秋風罷兮春草生。綺羅畢兮池館盡。琴瑟滅兮丘隴平。自古皆有死。莫不飲恨而吞聲。

別賦　江文通

黯然銷魂者。唯別而已矣。況秦吳兮絕國。復燕宋兮千里。或春苔兮始生。乍秋風兮蹔起。是以行子腸斷。百感悽惻。風蕭蕭而異響。雲漫漫而奇色。舟凝滯於水濱。車逶遲於山側。櫂容與而詎前。馬寒鳴而不息。掩金觴而誰御。橫玉柱而霑軾。居人愁臥。怳若有亡。日下壁而沈彩。月上軒而飛光。見紅蘭之受露。望靑楸之離霜。巡層楹而空揜。撫錦幙而虛涼。知離夢之躑躅。意別魂之飛揚。故別雖一緒。事有萬族。至若龍馬銀鞍。朱軒繡軸。帳飲東

都。送客金谷。琴羽張兮簫鼓陳。燕趙歌兮傷美人。珠與玉兮豔暮秋。羅與綺兮嬌上春。驚駟馬之仰秣。聳淵魚之赤鱗。造分手而銜涕。感寂寞而傷神。乃有劍客慙恩。少年報士。韓國趙廁。吳宮燕市。割慈忍愛。離邦去里。瀝泣共訣。抆血相視。驅征馬而不顧。見行塵之時起。方銜感於一劍。非買價於泉裏。金石震而色變。骨肉悲而心死。或乃邊郡未和。負羽從軍。遼水無極。鴈山參雲。閨中風暖。陌上草薰。日出天而曜景。露下地而騰文。鏡朱塵之照爛。襲青氣之烟煴。攀桃李兮不忍別。送愛子兮霑羅裙。至如一去絕國。詎相見期。視喬木兮故里。決北梁兮永辭。左右兮魂動。親賓兮淚滋。可班荊兮贈恨。惟樽酒兮敘悲。值秋鴈兮飛日。當白露兮下時。怨復怨兮遠山曲。去復去兮長河湄。又若君居淄右。妾家河陽。同瓊珮之晨照。共金爐之夕香。君結綬兮千里。惜瑤草之徒芳。慙幽閨之琴瑟。晦高臺之流黃。春宮閟此青苔色。秋帳含茲明月光。夏簟清兮晝不暮。冬釭凝兮夜何長。織錦曲兮泣已盡。迴文詩兮影獨傷。儻有華陰上士。服食還仙。術既妙而猶學。道已寂而未傳。守丹竈而不顧。鍊金鼎而方堅。駕鶴上漢。驂鸞騰天。蹔游萬里。少別千年。惟世間兮重別。謝主人兮依然。下有芍藥之詩。佳人之歌。桑中衛女。上宮陳娥。春草碧色。春水淥波。送君南浦。傷如之何。至乃秋露如珠。秋月如珪。明月白露。光陰往來。與子之別。思心徘徊。是以別方不定。別理千名。有別必怨。有怨必盈。使人意奪神駭。心折骨驚。雖淵雲之墨妙。嚴樂之筆精。金閨之諸彥。蘭臺之羣英。賦有凌雲之稱。辯有雕龍之聲。詎能摹暫離之狀。寫永訣之情者乎。

文選卷九

賦壬　論文　音樂　情

文賦　竝序　陸士衡

余每觀才士之所作。竊有以得其用心。夫其放言遣辭。良多變矣。妍蚩好惡。可得而言。每自屬文。尤見其情。恒患意不稱物。文不逮意。蓋非知之難。能之難也。故作文賦。以述先士之盛藻。因論作文之利害所由。他日殆可謂曲盡其妙。至於操斧伐柯。雖取則不遠。若夫隨手之變。良難以辭逮。蓋所能言者。具於此云爾。

佇中區以玄覽。頤情志於典墳。遵四時以歎逝。瞻萬物而思紛。悲落葉於勁秋。喜柔條於芳春。心懍懍以懷霜。志眇眇而臨雲。詠世德之駿烈。誦先人之清芬。游文章之林府。嘉麗藻之彬彬。慨投篇而援筆。聊宣之乎斯文。其始也。皆收視反聽。耽思傍訊。精騖八極。心游萬仞。其致也。情曈曨而彌鮮。物昭晰而互進。傾羣言之瀝液。漱六藝之芳潤。浮天淵以安流。濯下泉而潛浸。於是沈辭怫悅。若游魚銜鉤。而出重淵之深。浮藻聯翩。若翰鳥纓繳。而墜曾雲之峻。收百世之闕文。採千載之遺韻。謝朝華於已披。啓夕秀於未振。觀古今於須臾。

撫四海於一瞬。然後選義按部。考辭就班。抱景者咸叩。懷響者畢彈。或因枝以振葉。或沿波而討源。或本隱以之顯。或求易而得難。或虎變而獸擾。或龍見而鳥瀾。或妥帖而易施。或岨峿而不安。罄澄心以凝思。眇衆慮而爲言。籠天地於形內。挫萬物於筆端。始躑躅於燥吻。終流離於濡翰。理扶質以立幹。文垂條而結繁。信情貌之不差。故每變而在顏。思涉樂其必笑。方言哀而已歎。或操觚以率爾。或含毫而邈然。伊茲事之可樂。固聖賢之所欽。課虛無以責有。叩寂寞而求音。函緜邈於尺素。吐滂沛乎寸心。言恢之而彌廣。思按之而愈深。播芳蕤之馥馥。發青條之森森。粲風飛而猋豎。鬱雲起乎翰林。體有萬殊。物無一量。紛紜揮霍。形難爲狀。辭程才以效伎。意司契而爲匠。在有無而僶俛。當淺深而不讓。雖離方而遯員。期窮形而盡相。故夫誇目者尚奢。愜心者貴當。言窮者無隘。論達者唯曠。詩緣情而綺靡。賦體物而瀏亮。碑披文以相質。誄纏緜而悽愴。銘博約而溫潤。箴頓挫而清壯。頌優游以彬蔚。論精微而朗暢。奏平徹以閑雅。說煒爗而譎誑。雖區分之在茲。亦禁邪而制放。要辭達而理舉。故無取乎冗長。其爲物也多姿。其爲體也屢遷。其會意也尚巧。其遣言也貴妍。曁音聲之迭代。若五色之相宣。雖逝止之無常。固崎錡而難便。苟達變而識次。猶開流以納泉。如失機而後會。恒操末以續顛。謬玄黃之秩序。故淟涊而不鮮。或仰偪於先條。或俯侵於後章。或辭害而理比。或言順而義妨。離之則雙美。合之則兩傷。考殿最於錙銖。定去留於毫芒。苟銓衡之所裁。固應繩其必當。或文繁理富。而意不指適。極無兩致。盡不可益。立片言而居要。乃一篇之警策。雖衆辭之有條。必待茲而效績。亮功多而累寡。故取足而不易。或藻思綺合。清麗芊眠。炳若縟繡。悽若繁絃。必所擬之不殊。乃闇合乎曩篇。雖杼軸於

予懷。怵他人之我先。苟傷廉而愆義。亦雖愛而必捐。或苕發穎豎。離衆絕致。形不可逐。響難為係。塊孤立而特峙。非常音之所緯。心牢落而無偶。意徘徊而不能揥。石韞玉而山暉。水懷珠而川媚。彼榛楛之勿翦。亦蒙榮於集翠。綴下里於白雪。吾亦濟夫所偉。或託言於短韻。對窮迹而孤興。俯寂寞而無友。仰寥廓而莫承。譬偏絃之獨張。含清唱而靡應。或寄辭於瘁音。言徒靡而弗華。混妍蚩而成體。累良質而為瑕。象下管之偏疾。故雖應而不和。或遺理以存異。徒尋虛而逐微。言寡情而鮮愛。辭浮漂而不歸。猶絃幺而徽急。故雖和而不悲。或奔放以諧合。務嘈囋而妖冶。徒悅目而偶俗。固聲高而曲下。寤防露與桑間。又雖悲而不雅。或清虛以婉約。每除煩而去濫。闕大羹之遺味。同朱絃之清氾。雖一唱而三歎。固既雅而不豔。若夫豐約之裁。俯仰之形。因宜適變。曲有微情。或言拙而喻巧。或理朴而辭輕。或襲故而彌新。或沿濁而更清。或覽之而必察。或研之而後精。譬猶舞者赴節以投袂。歌者應絃而遣聲。是蓋輪扁所不得言。亦非華說之所能精。普辭條與文律。良予膺之所服。練世情之常尤。識前脩之所淑。雖濬發於巧心。或受欰於拙目。彼瓊敷與玉藻。若中原之有菽。同橐籥之罔窮。與天地乎竝育。雖紛藹於此世。嗟不盈於予掬。患挈瓶之屢空。病昌言之難屬。故踸踔於短韻。放庸音以足曲。恒遺恨以終篇。豈懷盈而自足。懼蒙塵於叩缶。顧取笑乎鳴玉。若夫應感之會。通塞之紀。來不可遏。去不可止。藏若景滅。行猶響起。方天機之駿利。夫何紛而不理。思風發於胷臆。言泉流於脣齒。紛葳蕤以馺遝。唯毫素之所擬。文徽徽以溢目。音泠泠而盈耳。及其六情底滯。志往神留。兀若枯木。豁若涸流。覽營魂以探賾。頓精爽而自求。理翳翳而愈伏。思軋軋其若抽。是故或竭情而多悔。或率意而寡尤。

雖玆物之在我。非余力之所勠。故時撫空懷而自惋。吾未識夫開塞之所由也。伊玆文之爲用。固衆理之所因。恢萬里使無閡。通億載而爲津。俯貽則於來葉。仰觀象乎古人。濟文武於將墜。宣風聲於不泯。塗無遠而不彌。理無微而不綸。配霑潤於雲雨。象變化乎鬼神。被金石而德廣。流管絃而日新。

洞簫賦　王子淵

原夫簫幹之所生兮。于江南之丘墟。洞條暢而罕節兮。標敷紛以扶疏。徒觀其旁山側兮。則嶇嶔巋崎。倚巇迤嶬。誠可悲乎。其不安也。彌望儻莽。聯延曠盪。又足樂乎。其敞閑也。託身軀於后土兮。經萬載而不遷。吸至精之滋熙兮。稟蒼色之潤堅。感陰陽之變化兮。附性命乎皇天。翔風蕭蕭而逕其末兮。迴江流川而溉其山。揚素波而揮連珠兮。聲礚礚而澍淵。朝露淸冷而隕其側兮。玉液浸潤而承其根。孤雌寡鶴。娛優乎其下兮。春禽群嬉。翺翔乎其顚。秋蜩不食。抱樸而長吟兮。玄猨悲嘯。搜索乎其間。處幽隱而奥屏兮。密漠泊以獭猭。惟詳察其素體兮。宜淸靜而弗諠。幸得謚爲洞簫兮。蒙聖主之渥恩。可謂惠而不費兮。因天性之自然。於是般匠施巧。夔襄准法。帶以象牙。掍其會合。鎪鏤離灑。絳脣錯雜。鄰菌繚糾。羅鱗捷獵。膠緻理比。挹抐擫𢶀。於是乃使夫性昧之宕冥。生不覩天地之體勢。闇於白黑之貌形。憤伊鬱而酷䤈。愍眸子之喪精。寡所舒其思慮兮。專發憤乎音聲。故吻吮値夫宮商兮。和紛離其匹溢。形旖旎以順吹兮。瞋嗰嘲以紆鬱。氣旁迕以飛射兮。馳散渙以逫律。趣從容其勿述兮。騖合遝以詭譎。或渾沌而潺湲兮。獵若枚折。或漫衍而駱驛兮。沛焉

競溢。惏慄密率。掩以絕滅。𡁹霵曄踕。跳然復出。若乃徐聽其曲度兮。廉察其賦歌。啾咇㘉而將吟兮。行鍖銋以和囉。風鴻洞而不絕兮。優嬈嬈以婆娑。翩緜連以牢落兮。漂乍弃而爲他。要復遮其蹊徑兮。與謳謠乎相龢。故聽其巨音。則周流氾濫。幷包吐含。若慈父之畜子也。其妙聲則清靜厭瘱。順敍卑迖。若孝子之事父也。科條譬類。誠應義理。澎濞慷慨。一何壯士。優柔溫潤。又似君子。故其武聲。則若雷霆輘輷。佚豫以沸㴸。其仁聲。則若颽風紛披。容與而施惠。或雜遝以聚斂兮。或拔摋以奮棄。悲愴怳以惻惐兮。時恬淡以綏肆。被淋灑其靡靡兮。時橫潰以陽遂。哀悁悁之可懷兮。良醰醰而有味。故貪饕者聽之而廉隅兮。狼戾者聞之而不懟。剛毅彊虣反仁恩兮。嘽唌逸豫戒其失。鍾期牙曠悵然而愕立兮。杞梁之妻不能爲其氣。師襄嚴春不敢竄其巧兮。浸淫叔子遠其類。嚚頑朱均惕復慧兮。桀跖鬻博儡以頓顇。吹參差而入道德兮。故永御而可貴。時奏狡弄。則彷徨翱翔。或留而不行。或行而不留。愺恅瀾漫。亡耦失疇。薄索合沓。罔象相求。故知音者。樂而悲之。不知音者。怪而偉之。故爲悲聲。則莫不愴然累欷。撆涕抆淚。其奏歡娛。則莫不憚漫衍凱。阿那腲腇者已。是以蟋蟀蚸蠖。蚑行喘息。螻蟻蝘蜒。蠅蠅翊翊。遷延徙迤。魚瞰雞睨。垂喙蚊轉。瞪瞢忘食。況感陰陽之和。而化風俗之倫哉。亂曰。狀若捷武。超騰踰曳。迅漂巧兮。又似流波。泡溲汎㴻。趨巇道兮。哮呷呟喚。躋躓連絕。淈殄沌兮。攪搜㶌捎。逍遙踊躍。若壞頹兮。優游流離。躊躇稽詣。亦足耽兮。頹唐遂往。長辭遠逝。漂不還兮。賴蒙聖化。從容中道。樂不淫兮。條暢洞達。中節操兮。終詩卒曲。尚餘音兮。吟氣遺響。聯緜漂撇。生微風兮。連延駱驛。變無窮兮。

舞賦　竝序　傅武仲

楚襄王既遊雲夢。使宋玉賦高唐之事。將置酒宴飲。謂宋玉曰。寡人欲觴羣臣。何以娛之。玉曰。臣聞歌以詠言。舞以盡意。是以論其詩。不如聽其聲。聽其聲。不如察其形。激楚結風陽阿之舞。材人之窮觀。天下之至妙。噫可以進乎。王曰。其如鄭何。玉曰。小大殊用。鄭雅異宜。弛張之度。聖哲所施。是以樂記干戚之容。雅美蹲蹲之舞。禮設三爵之制。頌有醉歸之歌。夫咸池六英。所以陳清廟協神人也。鄭衛之樂。所以娛密坐接歡欣也。餘日怡蕩。非以風民也。其何害哉。王曰。試爲寡人賦之。玉曰。唯唯。

夫何皎皎之閑夜兮。明月列以施光。朱火曄其延起兮。燿華屋而熺洞房。黼帳袪而結組兮。鋪首炳以焜煌。陳茵席而設坐兮。溢金罍而列玉觴。騰觚爵之斟酌兮。漫既醉其樂康。嚴顏和而怡懌兮。幽情形而外揚。文人不能懷其藻兮。武毅不能隱其剛。簡惰跳踃般紛挐兮。淵塞沈蕩改恒常兮。於是鄭女出進。二八徐侍。姣服極麗。姁媮致態。貌嫽妙以妖蠱兮。紅顏曄其揚華。眉連娟以增繞兮。目流睇而橫波。珠翠的皪而炤燿兮。華袿飛髾而雜纖羅。顧形影。自整裝。順微風。揮若芳。動朱脣。紆清陽。亢音高歌。爲樂之方。歌曰。攄予意以弘觀兮。繹精靈之所束。弛緊急之絃張兮。慢末事之委曲。舒恢炱之廣度兮。闊細體之苛縟。嘉關雎之不淫兮。哀蟋蟀之局促。啓泰眞之否隔兮。超遺物而度俗。揚激徵。騁清角。贊舞操。奏均曲。形態和。神意協。從容得。志不劫。於是躡節鼓陳。舒意自廣。游心無垠。遠思長想。其始興也。若俯若仰。若來若往。雍容惆悵。不可爲象。其少進也。若翺若行。若竦若傾。兀

動赴度。指顧應聲。羅衣從風。長袖交橫。駱驛飛散。颯沓合并。鶣飄燕居。拉揩鵠驚。綽約閑靡。機迅體輕。姿絕倫之妙態。懷愨素之絜清。脩儀操以顯志兮。獨馳思乎杳冥。在山峨峨。在水湯湯。與志遷化。容不虛生。明詩表指。喟息激昂。氣若浮雲。志如秋霜。觀者增歎。諸工莫當。於是合場遞進。案次而俟。埒材角妙。夸容乃理。軼態橫出。瑰姿譎起。眄般鼓則騰清眸。吐哇咬則發皓齒。摘齊行列。經營切儗。彷彿神動。迴翔竦峙。擊不致策。蹈不頓趾。翼爾悠往。闇復輟已。及至回身還入。迫於急節。浮騰累跪。跗蹋摩跌。紆形赴遠。漼似摧折。纖縠蛾飛。紛猋若絕。超趡鳥集。縱弛殟歿。蜲蛇姌嫋。雲轉飄曶。體如游龍。袖如素蜺。瞭瞅而拜。曲度究畢。遷延微笑。退復次列。觀者稱麗。莫不怡悅。於是歡洽宴夜。命遣諸客。擾攘就駕。僕夫正策。車騎竝狎。巃嵸逼迫。良駿逸足。搶捍凌越。龍驤橫舉。揚鑣飛沫。馬材不同。各相傾奪。或有踰埃赴轍。霆駭電滅。蹠地遠羣。闇跳獨絕。或有宛足鬱怒。盤桓不發。後往先至。遂爲逐末。或有矜容愛儀。洋洋習習。遲速承意。控御緩急。車音若雷。騖驟相及。駱漠而歸。雲散城邑。天王燕胥。樂而不泆。娛神遺老。永年之術。優哉游哉。聊以永日。

長笛賦 竝序

馬季長

融既博覽典雅。精核數術。又性好音律。能鼓琴吹笛。而爲督郵。無留事。獨臥郿縣平陽鄔中。有雒客舍逆旅。吹笛爲氣出。精列相和。融去京師踰年。蹔聞甚悲而樂之。追慕王子淵枚乘劉伯康傅武仲等簫琴笙頌。唯笛獨無。故聊復備數。作長笛頌。其辭曰。

惟籦籠之奇生兮。于終南之陰崖。託九成之孤岑兮。臨萬仞之石磎。特箭稾而莖立兮。獨

𡸣風於極危。秋潦漱其下趾兮。冬雪揣封乎其枝。巔根跱之槷刖兮。感迴飆而將頹。夫其面旁。則重巘增石。簡積頵砡。兀嶁狋㺜。傾昃倚伏。庨窌巧老。港洞坑谷。嶰壑澮𡼏。𡼖窞巖𡻿。運裛穿洝。岡連嶺屬。林簫蔓荊。森槮柞樸。於是山水猥至。渟涔障潰。頤淡滂流。碓投瀺穴。爭湍苹縈。汩活澎濞。波瀾鱗淪。窊隆詭戾。瀥瀑噴沫。犇遯碭突。搖演其山。動杌其根者。歲五六而至焉。是以間介無蹊。人迹罕到。猨蜼晝吟。鼯鼠夜叫。寒熊振頷。特麚昏髟。山雞晨羣。野雉朝雊。求偶鳴子。悲號長嘯。由衍識道。噍噍讙譟。經涉其左右。哤聒其前後者。無晝夜而息焉。夫固危殆險巇之所迫也。衆哀集悲之所積也。故其應清風也。纖末奮籥。錚鐄警嗃。若絙瑟促柱。號鐘高調。於是放臣逐子。弃妻離友。彭胥伯奇。哀姜孝己。攢乎下風。收精注耳。靁歎頹息。掐膺擗摽。泣血泫流。交横而下。通旦忘寐。不能自禦。於是乃使魯般宋翟。構雲梯。抗浮柱。蹉纖根。跋篸縷。膺峭阤。腹陘阻。逮乎其上。匍匐伐取。挑截本末。規摹彠矩。夔襄比律。子野協呂。十二畢具。黃鐘爲主。撟揉斤械。剸掣度擬。鏓硐頹墜。程表朱裏。定名曰笛。以觀賢士。陳於東階。八音俱起。食舉雍徹。勸侑君子。然後退理乎黃門之高廊。重丘宋灌。名師郭張。工人巧士。肄業脩聲。於是遊閑公子。暇豫王孫。心樂五聲之和。耳比八音之調。乃相與集乎其庭。詳觀夫曲胤之繁會叢雜。何其富也。紛葩爛熳。誠可喜也。波散廣衍。實可異也。掌距劫遌。又足怪也。啾咋嘈啐。似華羽兮。絞灼激以轉切。震鬱怫以憑怒兮。耾碭駭以奮肆。氣噴勃以布覆兮。乍時䠋以狼戾。靁叩鍛之岌峇兮。正瀏凓以風冽。寒薄湊會而凌節兮。馳趣期而赴躓。爾乃聽聲類形。狀似流水。又象飛鴻。氾濫溥漠。浩浩洋洋。長矕遠引。旋復迴皇。充屈鬱律。瞋菌碨柍。酆琅磊落。駢田磅唐。取予時適。去就有方。洪殺

衰序。希數必當。微風纖妙。若存若亡。蓋滯抗絕。中息更裝。奄忽滅沒。曄然復揚。或乃聊慮固護。專美擅工。漂凌絲簧。覆冒鼓鐘。或乃植持縼纆。佁儗寬容。簫管備舉。金石並隆。無相奪倫。以宣八風。律呂既和。哀聲五降。曲終闋盡。餘絃更興。繁手累發。密櫛疊重。踾踧攢仄。蜂聚蟻同。衆音猥積。以送厥終。然後少息暫怠。雜弄間奏。易聽駭耳。有所搖演。安翔駘蕩。從容闡緩。惆悵怨懟。窳圔窴窒。聿皇求索。乍近乍遠。臨危自放。若頹復反。蚡緼蟠紆。緸冤蜿蟺。笢笏抑隱。行入諸變。絞槩汩湟。五音代轉。挼拏捘臧。遞相乘邅。反商下徵。每各異善。故聆曲引者。觀法於節奏。察度於句投。以知禮制之不可踰越焉。聽簉弄者。遙思於古昔。虞志於怛惕。以知長戚之不能閒居焉。故論記其義。協比其象。彷徨縱肆。曠瀁敞罔。老莊之槩也。溫直優毅。孔孟之方也。激朗清厲。隨光之介也。牢刺拂戾。諸賁之氣也。節解句斷。管商之制也。條決繽紛。申韓之察也。繁縟絡繹。范蔡之說也。犛櫟銚𢡟。晳龍之惠也。上擬法於韶箾南籥。中取度於白雪淥水。下采制於延露巴人。是以尊卑都鄙。賢愚勇懼。魚鼈禽獸。聞之者莫不張耳鹿駭。熊經鳥伸。鴟視狼顧。拊譟踊躍。各得其齊。人盈所欲。皆反中和。以美風俗。屈平適樂國。介推還受祿。澹臺載尸歸。皐魚節其哭。長萬輟逆謀。渠彌不復惡。蒯聵能退敵。不占成節鄂。王公保其位。隱處安林薄。宦夫樂其業。士子世其宅。鱏魚喁於水裔。仰駟馬而舞玄鶴。于斯時也。緜駒吞聲。伯牙毀絃。瓠巴聑柱。磬襄弛懸。留眎瞠眙。累稱屢讚。失容墜席。搏拊雷抃。僬眇睢維。涕洟流漫。是故可以通靈感物。寫神喻意。致誠效志。率作興事。溉盥汙濊。澡雪垢滓矣。昔庖羲作琴。神農造瑟。女媧制簧。暴辛爲塤。倕之和鍾。叔之離磬。或鑠金礱石。華睆切錯。丸梴彫琢。刻鏤鑽笮。窮妙極巧。曠以日月。然後成器。其音如

彼。唯笛因其天姿。不變其材。伐而吹之。其聲如此。蓋亦簡易之義。賢人之業也。若然六器者。猶以二皇聖哲黈益。況笛生乎大漢。而學者不識其可以裨助盛美。忽而不讚。悲夫。有庶士丘仲。言其所由出。而不知其弘妙。其辭曰。近世雙笛從羌起。羌人伐竹未及已。龍鳴水中不見已。截竹吹之聲相似。剡其上孔通洞之。裁以當簻便易持。易京君明識音律。故本四孔加以一。君明所加孔後出。是謂商聲五音畢。

琴賦 並序　嵇叔夜

余少好音聲。長而翫之。以爲物有盛衰。而此無變。滋味有厭。而此不勌。可以道養神氣。宣和情志。處窮獨而不悶者。莫近於音聲也。是故復之而不足。則吟詠以肆志。吟詠之不足。則寄言以廣意。然八音之器。歌舞之象。歷世才士。並爲之賦頌。體制風流。莫不相襲。稱其材幹。則以危苦爲上。賦其聲音。則以悲哀爲主。美其感化。則以垂涕爲貴。麗則麗矣。然未盡其理也。推其所由。似元不解聲音。覽其旨趣。亦未達禮樂之情也。衆器之中。琴德最優。故綴叙所懷。以爲之賦。其辭曰。

惟椅梧之所生兮。託峻嶽之崇岡。披重壤以誕載兮。參辰極而高驤。含天地之醇和兮。吸日月之休光。鬱紛紜以獨茂兮。飛英蕤於昊蒼。夕納景于虞淵兮。旦晞幹於九陽。經千載以待價兮。寂神跱而永康。且其山川形勢。則盤紆隱深。確嵬岑嵓。玄嶺巉巖。岝崿嶇崯。丹崖嶮巇。青壁萬尋。若乃重巘增起。偃蹇雲覆。邈隆崇以極壯。崛巍巍而特秀。蒸靈液以播雲。據神淵而吐溜。爾乃顛波奔突。狂赴爭流。觸巖觝隈。鬱怒彪休。洶涌騰薄。奮沫揚濤。瀄

汨澎湃。蜿蟺相糾。放肆大川。濟乎中州。安迴徐邁。寂爾長浮。澹乎洋洋。縈抱山丘。詳觀其區土之所產毓。奧宇之所寶殖。珍怪琅玕。瑤瑾翕赩。叢集累積。奐衍於其側。若乃春蘭被其東。沙棠殖其西。涓子宅其陽。玉醴涌其前。玄雲蔭其上。翔鸞集其巔。淸露潤其膚。惠風流其間。竦肅肅以靜謐。密微微其淸閑。夫所以經營其左右者。固以自然神麗。而足思願愛樂矣。於是遯世之士。榮期綺季之疇。乃相與登飛梁。越幽壑。援瓊枝。陟峻崿。以游乎其下。周旋永望。邈若凌飛。邪睨崑崙。俯闞海湄。指蒼梧之迢遞。臨迴江之威夷。寤時俗之多累。仰箕山之餘輝。羨斯嶽之弘敞。心慷慨以忘歸。情舒放而遠覽。接軒轅之遺音。慕老童於騩隅。欽泰容之高吟。顧茲桐而興慮。思假物以託心。乃斲孫枝。准量所任。至人攄思。制爲雅琴。乃使離子督墨。匠石奮斤。夔襄薦法。班倕騁神。鏤會裛厠。朗密調均。華繪彫琢。布藻垂文。錯以犀象。藉以翠綠。絃以園客之絲。徽以鍾山之玉。爰有龍鳳之象。古人之形。伯牙揮手。鍾期聽聲。華容灼爍。發采揚明。何其麗也。伶倫比律。田連操張。進御君子。新聲憀亮。何其偉也。及其初調。則角羽俱起。宮徵相證。參發並趣。上下累應。踸踔磥硌。美聲將興。固以和昶而足耽矣。爾乃理正聲。奏妙曲。揚白雪。發淸角。紛淋浪以流離。奐淫衍而優渥。粲奕奕而高逝。馳岌岌以相屬。沛騰遌而競趣。翕暐爗而繁縟。狀若崇山。又象流波。浩兮湯湯。鬱兮峨峨。怫懵煩寃。紆餘婆娑。陵縱播逸。霍濩紛葩。檢容授節。應變合度。競名擅業。安軌徐步。洋洋習習。聲烈遐布。含顯媚以送終。飄餘響乎泰素。若乃高軒飛觀。廣厦閑房。冬夜肅淸。朗月垂光。新衣翠粲。纓徽流芳。於是器泠絃調。心閑手敏。觸攙如志。惟意所擬。初涉淥水。中奏淸徵。雅昶唐堯。終詠微子。寬明弘潤。優游躇跱。拊絃安歌。新聲代起。歌曰。

凌扶搖兮憩瀛洲。要列子兮爲好仇。餐沆瀣兮帶朝霞。眇翩翩兮薄天游。齊萬物兮超自得。委性命兮任去留。激清響以赴會。何絃歌之綢繆。於是曲引向闌。衆音將歇。改韻更調。奇弄乃發。揚和顏。攘皓腕。飛纖指以馳騖。紛儮譶以流漫。或徘徊顧慕。擁鬱抑按。盤桓毓養。從容祕翫。闥爾奮逸。風駭雲亂。牢落凌厲。布濩半散。豐融披離。斐韡奐爛。英聲發越。采采粲粲。或間聲錯糅。狀若詭赴。雙美並進。駢馳翼驅。初若將乖。後卒同趣。或曲而不屈。或直而不倨。或相凌而不亂。或相離而不殊。時劫掎以慷慨。或怨嫭而躊躇。忽飄颻以輕邁。乍留聯而扶疏。或參譚繁促。複疊攢仄。從橫駱驛。奔遁相逼。拊嗟累讚。間不容息。瓌豔奇偉。殫不可識。若乃閑舒都雅。洪纖有宜。清和條昶。案衍陸離。穆溫柔以怡懌。婉順敘而委蛇。或乘險投會。邀隙趣危。嚶若離鵾鳴清池。翼若游鴻翔曾崖。紛文斐尾。綝縿離纚。微風餘音。靡靡猗猗。或摟攙櫟捋。縹繚潎冽。輕行浮彈。明嫿睞惠。疾而不速。留而不滯。翩緜飄邈。微音迅逝。遠而聽之。若鸞鳳和鳴戲雲中。迫而察之。若衆葩敷榮曜春風。既豐贍以多姿。又善始而令終。嗟姣妙以弘麗。何變態之無窮。若夫三春之初。麗服以時。乃攜友生。以遨以嬉。涉蘭圃。登重基。背長林。翳華芝。臨清流。賦新詩。嘉魚龍之逸豫。樂百卉之榮滋。理重華之遺操。慨遠慕而長思。若乃華堂曲宴。密友近賓。蘭肴兼御。旨酒清醇。進南荊。發西秦。紹陵陽。度巴人。變用雜而並起。竦衆聽而駭神。料殊功而比操。豈笙籥之能倫。若次其曲引所宜。則廣陵止息。東武太山。飛龍鹿鳴。鵾雞游絃。更唱迭奏。聲若自然。流楚窈窕。懲躁雪煩。下逮謠俗。蔡氏五曲。王昭楚妃。千里別鶴。猶有一切承間簉乏。亦有可觀者焉。然非夫曠遠者。不能與之嬉游。非夫淵靜者。不能與之間止。非夫放達者。不能與之無吝。非至精

者。不能與之析理也。若論其體勢。詳其風聲。器和故響逸。張急故聲清。間遼故音痺。絃長故徽鳴。性潔靜以端理。含至德之和平。誠可以感盪心志。而發洩幽情矣。是故懷戚者聞之。莫不憯懍慘悽。愀愴傷心。含哀懊咿。不能自禁。其康樂者聞之。則欨愉歡釋。抃舞踊溢。留連瀾漫。嗢噱終日。若和平者聽之。則怡養悅悆。淑穆玄真。恬虛樂古。弃事遺身。是以伯夷以之廉。顏回以之仁。比干以之忠。尾生以之信。惠施以之辯給。萬石以之訥慎。其餘觸類而長。所致非一。同歸殊塗。或文或質。總中和以統物。咸日用而不失。其感人動物。蓋亦弘矣。于時也。金石寢聲。匏竹屏氣。王豹輟謳。狄牙喪味。天吳踊躍於重淵。王喬披雲而下墜。舞鸑鷟於庭階。游女飄焉而來萃。感天地以致和。況蚑行之眾類。嘉斯器之懿茂。詠茲文以自慰。永服御而不厭。信古今之所貴。亂曰。愔愔琴德。不可測兮。體清心遠。邈難極兮。良質美手。遇今世兮。紛綸翕響。冠眾藝兮。識音者希。誰能珍兮。能盡雅琴。唯至人兮。

笙賦　潘安仁

河汾之寶。有曲沃之懸匏焉。鄒魯之珍。有汶陽之孤篠焉。若乃緜蔓紛敷之麗。浸潤靈液之滋。隅隈夷險之勢。禽鳥翔集之嬉。固眾作者之所詳。余可得而略之也。徒觀其制器也。則審洪纖。面短長。剸生簳。裁熟簧。設宮分羽。經徵列商。泄之反謐。厭焉乃揚。管欑羅而表列。音要妙而含清。各守一以司應。統大魁以為笙。基黃鍾以舉韻。望儀鳳以擢形。寫皇翼以插羽。摹鸞音以厲聲。如鳥斯企。翾翾岐岐。明珠在咮。若銜若垂。脩樋內辟。餘簫外透。駢田獵攦。鯈䌦參差。於是乃有始泰終約。前榮後悴。激憤於今賤。永懷乎故貴。眾滿堂而飲

酒。獨向隅而掩淚。援鳴笙而將吹。先嗢噦以理氣。初雍容以安暇。中佛鬱以怫愲。終嵬峨以蹇謌。又颯遝而繁沸。罔浪孟以惆悵。若欲絕而復肆。懰憿羅以奔邀。似將放而中匱。愀愴惻淢。虺韡煜熠。汎淫氾豔。霅爗岌岌。或案衍夷靡。或竦勇剽急。或既往不返。或已出復入。徘徊布濩。渙衍葺襲。舞既蹈而中輟。節將撫而不及。樂聲發而盡室歡。悲音奏而列坐泣。攡纖翮以震幽簧。越上筩而通下管。應吹噏以往來。隨抑揚以虛滿。勃慷慨以憀亮。顧躊躇以舒綏。輟張女之哀彈。流廣陵之名散。詠園桃之夭夭。歌棗下之纂纂。歌曰。棗下纂纂。朱實離離。宛其死矣。化爲枯枝。人生不能行樂。死何以虛謚爲。爾乃引飛龍。鳴鵾雞。雙鴻翔。白鶴飛。子喬輕舉。明君懷歸。荊王喟其長吟。楚妃歎而增悲。夫其悽唳辛酸。嚶嚶關關。若離鴻之鳴子也。含胡嘽諧。雍雍喈喈。若羣雛之從母也。郁捋劫悟。泓宏融裔。哇咬嘲哳。壹何察惠。訣厲悄切。又何磬折。若夫時陽初煖。臨川送離。酒酣徒擾。樂闋日移。疎客始闌。主人微疲。弛絃韜籥。撤埍屏篪。爾乃促中筵。携友生。解嚴顏。擢幽情。披黃苞以授甘。傾縹瓷以酌醽。光妓儼其偕列。雙鳳嘈以和鳴。晉野悚而投琴。況齊瑟與秦箏。新聲變曲。奇韻橫逸。縈纏歌鼓。網羅鍾律。爛熠爚以放豔。鬱蓬勃以氣出。秋風詠於燕路。天光重於朝日。大不踰宮。細不過羽。唱發章夏。導揚韶武。協和陳宋。混一齊楚。邇不逼。而遠無攜。聲成文。而節有敘。彼政有失得。而化以醇薄。樂所以移風於善。亦所以易俗於惡。故絲竹之器未改。而桑濮之流已作。惟簧也。能研羣聲之淸。惟笙也能總衆淸之林。衞無所措其邪。鄭無所容其淫。非天下之和樂。不易之德音。其孰能與於此乎。

嘯賦

成公子安

逸羣公子。體奇好異。傲世忘榮。絕棄人事。睎高慕古。長想遠思。將登箕山以抗節。浮滄海以游志。於是延友生。集同好。精性命之至機。研道德之玄奧。愍流俗之未悟。獨超焉而先覺。狹世路之阨僻。仰天衢而高蹈。邈跨俗而遺身。乃慷慨而長嘯。于時曜靈俄景。流光濛汜。逍遙攜手。踟躕步趾。發妙聲於丹脣。激哀音於皓齒。響抑揚而潛轉。氣衝鬱而熛起。協黃宮於清角。雜商羽於流徵。飄游雲於泰清。集長風乎萬里。曲既終而響絕。遺餘玩而未已。良自然之至音。非絲竹之所擬。是故聲不假器。用不借物。近取諸身。役心御氣。動脣有曲。發口成音。觸類感物。因歌隨吟。大而不洿。細而不沈。清激切於竽笙。優潤和於瑟琴。玄妙足以通神悟靈。精微足以窮幽測深。收激楚之哀荒。節北里之奢淫。濟洪災於炎旱。反亢陽於重陰。唱引萬變。曲用無方。和樂怡懌。悲傷摧藏。時幽散而將絕。中矯厲而慨慷。徐婉約而優游。紛繁騖而激揚。情既思而能反。心雖哀而不傷。總八音之至和。故極樂而無荒。若乃登高臺以臨遠。披文軒而騁望。喟仰抃而抗首。嘈長引而憀亮。或舒肆而自反。或徘徊而復放。或冉弱而柔擾。或澎濞而奔壯。橫鬱鳴而滔涸。冽繚眺而清昶。逸氣奮涌。繽紛交錯。列列飈揚。啾啾響作。奏胡馬之長嘶。迴寒風乎北朔。又似鴻鴈之將雛。羣鳴號乎沙漠。故能因形創聲。隨事造曲。應物無窮。機發響速。怫鬱衝流。參譚雲屬。若離若合。將絕復續。飛廉鼓於幽隧。猛虎應於中谷。南箕動於穹蒼。清飈振乎喬木。散滯積而播揚。流埃靄之溷濁。變陰陽之至和。移淫風之穢俗。若乃游崇岡。陵景山。臨巖側。望流川。坐盤石。漱

清泉。藉臯蘭之猗靡。蔭脩竹之嬋娟。乃吟詠而發散。聲駱驛而響連。舒蓄思之悱憤。奮久結之纒緜。心滌蕩而無累。志離俗而飄然。若夫假象金革。擬則陶匏。衆聲繁奏。若笳若簫。磞硠震隱。訇磕㘎嘈。發徵則隆冬熙蒸。騁羽則嚴霜夏凋。動商則秋霖春降。奏角則谷風鳴條。音均不恆。曲無定制。行而不流。止而不滯。隨口吻而發揚。假芳氣而遠逝。音要妙而流響。聲激嚁而清厲。信自然之極麗。羌殊尤而絕世。越韶夏與咸池。何徒取異乎鄭衞。于時緜駒結舌而喪精。王豹杜口而失色。虞公輟聲而止歌。甯子檢手而歎息。鍾期弃琴而改聽。尼父忘味而不食。百獸率舞而抃足。鳳皇來儀而拊翼。乃知長嘯之奇妙。蓋亦音聲之至極。

文選卷九終

大正十一年六月廿四日印刷
大正十一年六月廿八日發行
大正十一年十月三十日再版發行
大正十二年八月三日三版發行
大正十三年十月十日四版發行
昭和十年二月十五日五版發行

國譯漢文大成 文學部第二卷

【非賣品】

著作權所有

編輯兼發行者 國民文庫刊行會
東京市神田區小川町一丁目六番地

右代表者 鶴田久作
東京市本郷區西片町十番地

印刷者 君島潔
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 共同印刷株式會社
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所 國民文庫刊行會
電話神田 五三五番
　　　　 八三八番
振替東京一八五七二番



UNIVERSITY OF
ILLINOIS LIBRARY
AT URBANA - CHAMPAIGN
ASIAN